深呼吸は平和の証

Siebzehn17

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深呼吸は平和の証

【Ｎコード】
Ｎ９１３８Ｔ

【作者名】
Ｓｉｅｂｚｅｈｎ１７

【あらすじ】
母親と二人暮らしの普通の少年だった廣世光司。不思議なメッセージを受け取った彼は、母親と一緒に異世界に。
飛んだ先は魔法あり、ロボットあり、精霊ありの光司にとって夢の世界だった。
バルトス国動乱編終了。学園編から対決編へ突入しています。

飛んじゃった

それは、一枚のメッセージから始まった。
紙ではないそれに書かれている文字は

「もうすぐ会える」

そんな短いメッセージだった。

などと、そんな回想を悠長にしている暇はなく。

「これどうなってんの!?」
周りの風景がモノクロの世界になったかと思ったら、黒い渦が目の前に現れ
違う世界へ誘うように、僕達を吸い込んで行く。

「漫画みたいだねぇ、これ」
「なんで、そんなに冷静なの母さん?!」
こんな状況でも冷静な母さんに驚く。それとも僕が慌てすぎなの?

「大事なもの（光司）はちゃあんと持ってるもんね」
意味がわからない。分かるかもしれないけれど分からない!

「とりあえず母さんだけでも、逃げて!」
「えい」
と年に似合わず可愛らしい掛け声とともに、母さんが飛んでた。

「っ！？」

ちょっ、なんでこんな時に茶目っ気出しちゃってるの？！
僕をひっぱりながら、渦にとびこむとか正気？！
あっけに取られた僕は、胸にかすかな痛みを覚えながら意識を手放していた。

気がつくと木にくっついてた。
いや、ほんとはひっかかってたんだけど、なんとなくそんな風にぼんやりと考える。

「あー、どゆことこれ？」

直前の状況を思い出すに、何か得体の知れない事に巻き込まれたのは分かる。

「って、母さんは？！」

慌てて辺りを見回すが、人の気配はまったく無い。だけど、何かの気配を感じる。
まったく見覚えのない森の中。なのにどこか安心できる雰囲気をかもしだしている不思議な空間。

とりあえず、落ち着く為に木から飛び降り深呼吸してみた。
すーはー。
落ち着くんだけど、現状は何も変わっていない。自分がどうしてこ

こにいるのか？
母さんはどこにいるのか？　それにここがどこなのか？
さっぱりもって分からない。

「・・・夢、じゃないよなぁ」
夢にしては現実感がありすぎるし、どっきりにしては有り得ないと思うし。
それに・・・

「あの黒い渦が原因ってのはなんとなく分かる」
声に出しながら、現状を把握する事に努めるのは、やはり不安なんだろうなぁと思う。
ここがどこかは、とりあえず高いところから見渡せば分かりやすいんだろうけども。

「じゃあ飛ぼっか」

と、声がしたかと思うとふわっと自分の体が持ち上がっていた。
「って、なんで？！」
「いや、高いところから見渡そーって言ったじゃない？！」
「言ったかもしれないけれど、なんで飛んでるの僕？！　てか君だれ？」
と、自分の体を持ち上げてると思われる女の子に話しかける。

「ん、誰だろうねボク、あはは分かんないや！」
と、元気良く答える女の子。

綺麗な黒髪を肩の辺りで揃えていて、好奇心旺盛なぱっちりとした目、口は常ににっこりとしていて元気が溢れている活発そうな娘。
ふわふわとした造りの黄緑色のワンピースを着て僕と一緒に飛んで

いる。そしてボクっ娘。
でも、この娘ちょっと頭わるいよね？

「ちょっとちょっと。頭わるいとかひどいよね？　名前付けてくれてないんだから名乗れないのは当たり前じゃない！」
「しゃべってないのに、何故か会話が成立しているのは気のせい？」
気のせいじゃないよね、この娘なんか僕の心読んでるよねこれ。

「そだよー、心の声がきこえてるよー、ダダモレー」
えーとこれってどうすれば良い訳？
唐突に突きつけられた非現実に、思考停止しちゃう僕。

「まぁいいからさ、お名前つけてつけてマスター」
マスター・・・なった覚えはないけど話の流れ的に僕の事だろうなぁ。
「ヒロコ」
無意識のうちに、幼馴染の名前をつぶやいてしまう。

「ヒロコヒロコヒロコ、はい、わかった！今日からボクはヒロコです！
ありがとうマスター！」
心底うれしそうに微笑む知らない娘。もといヒロコ。

「あー、うん。喜んでくれて何より。でさ、ちょっと聞きたいんだけど良い？」
「なになに？なんでも聞いて！」
「ここって、どこなのかな？」
「答えられるけど、答えにくい質問だね」
と一呼吸をおくヒロコ。

「ここはマスターの住んでた世界とは異なる世界。精霊も魔法も当たり前の世界なの。
世界の名前とかは無いよ。まさか別の世界が本当にあるとか誰も思ってないから。世界って言えばここの世界って事だからね。あ、マスターの好きなロボット?もあるよっ！」
「ほんと!?ロボットあるの?!てか魔法とか精霊も当たり前って言ったよね?!ちょっとどうしよう？　どうしようこれっ?!」
今の状況を忘れて、つい舞い上がっちゃう僕。だって仕方ないよね!!!
変形とか合体とか、モデルチェンジとか巨大兵器特攻とか！

「ええっと、ちょっと落ち着いて？　ね、マスター」
若干ひきぎみに、ヒロコがなだめる。

うん、こんな時こそ深呼吸だ。すーはー。
「そういえば自己紹介がまだだったね、ヒロコ。僕の名前は廣世光司（ひろせこうじ）
16歳の男子高校生です、光司って呼んでくれると嬉しい」
男子高校生は不要だったかもしれないけど、ここは勢いだ。

「りょうーかいだよ、マスター！　で、マスターはどうしたいわけ？ロボットに乗りに行くの？」
了解してないよね。光司って呼んでないよね。

「一緒にこっちの世界に来たはずの母さんを探そうと思う」
ていうか、母さんがこの世界に突っ込んだんだけどね。

「でも、その前に教えてほしい。君は・・・ヒロコは何者なの？」
「ボクはヒロコ。マスターから生まれて、マスターの世界とこの世界を知る精霊の一柱だよ」

僕から生まれた？
何をどうやれば、男の僕から精霊が生まれるんだろうか？
これはあれだろうか、異世界に来た事によりそういう能力が芽生えたって事なんだろうか？
「詳しい事は分からないけど、マスターから生まれたってのは間違いないよー」
笑顔だね、ヒロコは。でもとりあえず僕の心を読むのはやめようね。

「うん、わかったー」

あら素直。もっとだだ捏ねるかと思った。微妙にあほっぽい娘に見えるし。

「て、あれ？」
「ん、なに～？」
あほっぽいって思ったのにつっこみが入らない。本当にやめたみたいだ。

「ヒロコって素直でいいなって思っただけ」
無難にそう答えておく。口は災いの元って言うしね。

「ん～？　ちょっと小悪魔っぽくなったほうが良い？」
ニコニコからニマニマって感じの笑顔になり、急に胸元を強調しながら上目遣いでたずねてくるヒロコ。

「いやいや。素直で元気なのが一番・・・だと思う」
ある一点に釘付けになりそうな目線をそらしながら、無難に答える。
鼻の下がすげー伸びてそうだ僕・・・

「そっか、にひひ」

若干顔を赤らめるヒロコ。そんなに恥ずかしいなら胸元を強調しなけりゃいいのにね？

「とりあえず、僕のしたい事は
一つ目に母さんを探すこと。
二つ目は元の世界に帰ること。
三つ目は、なんていうか活動するためのお金を貯める事だね。なにをするにもまずお金が無いと話しにならないからね」

「んー、わかったよ。とりあえずお金を貯める事から始めるっていう事でいいのかな？」

「だね。僕になにができるかまだ分からないけど、とりあえず町というか人のいる所へ行こうかなと思う。ヒロコ、町への行き方わかる？」

「もちろん。ここからだとタタ村かな？　一番近いのは」
目をくりくりしながら答えるヒロコ。ちょっと可愛いなぁ・・・

「うん、じゃあタタ村まで案内お願い」
「オッケー、マスター！」

返事するや否や、僕を抱きしめながら飛ぶヒロコ。あ、ちょっと柔らかい！あ、良い香りが・・・

「すぐ着くからね～」
「わ、わかった」
こうして、大人しくタタ村へ連行される僕なのであった。
きっとトマトぐらい赤くなってたとオモイマス。

不思議なちから

ほの暗い部屋。
魔方陣が床に描かれており、なんらかの魔法を行使した気配が漂う部屋で数名の男女が集まっていた。

「で、この少女は印を持っていないと言うんだな？」
くすみ一つない金髪を揺らしながら、眼光の鋭い壮年の男性が嘆息交じりに呟く。

「はい、残念ながらそのような印は見当たりません」
その言葉を受けて、目元をマスクで隠した女性らしき人物が応える。

「ユージン陛下にも勿論、印は無い。となると印はどこへ行ったんでしょうかね？」
ぐっと強い眼差しで、床に横たわる人物をにらみつける。

「はっ、前から言っているが俺はユージだ。いい加減に間違えるなよラディアス」
痛めつけられたのか弱々しく床に横たわっている人物は語気だけは荒々しく言い放つ。

「この国の貴族でも無い者の名前をいちいち覚える気は無いのでね。ユージン陛下」
「で、どうする気だ？　今ならまだ謝れば許してやるぞ？」
床に横たわっているにも拘らず強気のユージ。

「その少女ともども牢へ連れて行け、油断はするなよ」

ユージの発言を戯言だと鼻にもかけずに、部下に指示を出すラディアス。
ラディアスの言を受け、部下はユージと少女を連れ牢へと連行して行った。

「さて、印が無いなら無いで作れば問題はない。この国の実権さえ握ればどうとでもなる」
「御意に。しかし、あの少女は本当に無関係なのでしょうか？」
「いや無関係ではあるまい。肉親もしくは血縁関係にあるものだと思う。有効に人質として使わせて貰うだけさ」
「では、次の段階へ進まれますか？」
「あぁ、万事ぬかりなく進めたまえ、エリス」
「はい、仰せのままに」

返事とともに退室するエリス。

「さて、ここまではうまく行ったが次はどうなることやら・・・」

不安そうな台詞とは裏腹にラディアスの目は暗く笑っていた。

いま僕は異世界に来ている。
ヒロコと名づけた精霊と共に浮かびながら森の中を突き進む。

「ヒロコ、タタ村ってのはどんなとこなの？」

抱えて貰っているので、気恥ずかしい事この上ない。

だから、ついついしゃべって誤魔化そうとか思ってしまう僕。

「小さい村だよ。そんなに村人も居なかったと思うし。森の恵みで生活してるって言えばどんな所か想像できる？」

僕の気恥ずかしさをよそに、ヒロコは耳元でささやくように答えてくれる。

「わ、分かるような分からないような・・・　とりあえず危なくなければなんでも良いんだけどね」

恥ずかしいせいで、あやふやな答えになる。男の子だから仕方ないよね？

だけど、しっかりと聞いておかないと駄目なことがある。

「ところで、僕にも魔法って使えるのかな？」

「ほえ？」

その質問は想定外って顔をするヒロコ。そんなに変な事聞いたわけじゃないでしょ？

「マスターって、おもしろい事聞くよね。魔法のこと知ってるのに使えない事ないでしょ？」

「いや、そもそも魔法なんて使ったことないから聞いてるんだけど？」

「あれ？　ボクでも知らないような魔法の知識とかマスターの世界でもあったじゃない？　あれだけ知識あるならこっちの世界でも使えるって思ってた」

いやいや魔法なんて教わる事なんてまったく無いし。ゲームや漫画だとそういうのは山ほどあったけども・・・まさかそれのこと？！

「アクセル！」

好きな漫画に出てきた加速魔法を呟いてみる。
頭の後ろからきゅっと何かが溢れ出る感覚と共に、世界がコマ送り再生のように動きが遅くなった。うわ、なんかできてるっぽいぞ！？

「エンド！！！」

あわてて魔法を解除する。

「あ、ほらやっぱり使えるんじゃない。びっくりしたよもう」

僕がからかったと思ってヒロコはむくれる。

「ちょ、ちょっと待って」

今、間違いなく漫画の魔法が発動した。
魔法なんて習ったことなんかない（当たり前）のに、それっぽい事が起きた。
でも、何かの思い違いかもしれないから、もっとこうビジュアル的に分かるのも試してみよう。
ヒロコに地面に降ろしてもらいさっそく試してみる。

「ボール・ライト」

ちょっと魔力っぽいものを意識して違う魔法をつぶやくと、思ってたとおりの光の玉が目の前に浮かぶ。

「アローシュート！」

木を狙うように意識して、次の魔法を唱えると光の球から光の矢が

飛ぶ。

ヒュゴッ！

軽い音を立てて光の矢は狙いたがわず木を貫き、そのまま突き進んでいった。

「うわやばい。魔法とかなんで使えるの僕・・・」

「どうしたのマスター？　魔法を使えるのがそんなにおかしいの？」

茫然自失といった感じの僕をみてヒロコが心配そうに顔を覗き込んでくる。

「いや、魔法なんて見たことも無ければ使ったこともなかったし。これってそもそもゲームに出てた魔法だし・・・」

「ゲームの魔法だと何かおかしいの？」

「いや、ゲームって空想の産物っていうの？　本当は無いものだからさ・・・」

ヒロコの認識は微妙にずれてる。ゲームだろうと漫画だろうとそういう設定があるのなら使えて当然とか思っている節がある。

「でも、こっちの世界だとそういうのも使えるんだよ？　マスターは嬉しくない？」

理論がどうとか、本当にあるとかそういう観点ではなく、ごくごくシンプルな点をついてくるヒロコ。

「そりゃあ嬉しいに決まってるけど、なんていうかその・・・」

すごく反則な気がするのは気のせいかな？

「嬉しいならそれで良いと思うなボクは。マスターが嬉しいとボクも嬉しい！」

と本当に嬉しそうな表情をするヒロコ。

「そ、そうだね。難しく考える事もないかな。とりあえず魔法が使えるってことで良しとしよう」

使えないより使えるほうが良いしね、うん。

タタ村

そんなこんなしている内に、タタ村の入り口が見えてきた。
入り口っていうか、民家がちらほら見えてきただけなんだけどね。
なんとなくここらへんから村だよーって人が住んでる雰囲気が漂ってくる。

はてさて、どうしたもんかなぁと悩んでいると横から声をかけられた。

「あら、こんにちは。タタ村へようこそ。今日はこちらでお泊りですか？」

綺麗な栗色の髪を頭巾におさめた、くりくりと良く動く黒目の女の子がいた。

「えっと、泊まりたいといえば泊まりたいんですけど、お金が無いんで仕事が無いか立ち寄ったんです」

とにかく、この村でお金を稼ぐなり食べ物を調達しないことには、にっちもさっちもいかない。ちなみに「二進も三進も」と書く。どうでもいいか。

「え、そんな軽装でここまで来たのにお金がないんですか・・・？失礼ですけどタタ村へはどういったご用向きで来られたんですか？」

お金が無いと言った瞬間に、すっごく警戒されてしまった。でも、なにか出来ることを探して、お金を稼がないといけない。情けない

かもしれないけれど、この娘に頼んでみよう。

「訳はいえないんですけど、気づいたらここに着の身着のまま飛ばされてて、帰ろうにもお金が無いんです。なんでもしますんで、しばらくここに居させて貰えないですか？」

一応、魔法が使えるんで色々僕って便利なはず・・・だ。

「んー・・・とは言っても、うちの村もそんなに余裕があるわけじゃないし・・・」

言外に無理よーといった口ぶりの女の子。だが、諦めるわけにはいかない！

「僕、魔法も使えますし役に立てると思うんです！　ですから是非！」

「え、魔法が使えるんですか？　それでしたら、色々して貰えることはありますけども・・・
でも危険な仕事もあるんですよ？　大丈夫です？」

むむむ、ゲームや漫画の便利な魔法を知っているとはいえ、使いこなせるかはまた別問題だしなぁ。でも、ここで怖気ついて逃げたら何も始まらないし！

「大丈夫です、これでも攻撃魔法とかは得意なんですよ！」

知ってるのってそういうのがほとんどだし？　ウソツイテナイヨウン。

「へぇ・・・」

そう呟くと、何かを納得したようにうなづく少女。

「では、少しお待ちになって貰ってよろしいです？　ええっと」

「あ、僕は廣世光司と言います。こっちっぽく言い直すと、コウジ・ヒロセかな？　よろしくね」

と、笑顔で自己紹介する。笑う角には福来るってね。

「あ、わ、わたしはセリナです。タタ村のセリナです。ちょっと待ってて下さいね」

少し慌てた感じで、少し奥にある民家のほうに駆け出すセリナちゃん。

「で、ヒロコはどうして隠れてるの？」

セリナちゃんが居なくなったので、そう問いかける。

「ずっとここに居たよ、ボク」

としれっと答えるヒロコ。にこにこ笑顔だが、騙されないぞっ。

「僕以外に見えないように、実体化を解いたよね？　なんか理由があるのかと思って黙ってはいたけども」

確かに僕からは見えてるんだけども、わずかではあるけど存在が希薄な感じになっている。

「むぅ、そんな事まで分かるのねぇ。とりあえず、この世界だと精

霊ってあんまり姿を見せないものだから、ルールに沿ってみたわけだよ、うん」

そういや、ヒロコって精霊だったか。なんの精霊かは良くわかんないけれど。

「でもそれだと、これから一緒に居るのに不便じゃない？　ていうかヒロコが他の人に見えない時点で僕って怪しい人になっちゃうんだけども？」

一人でずーっとぶつぶつ言ってるのって、ちょっとあれだよね・・・

「はいはい、わがままだなぁマスターは。じゃ、これからは普通にしとくねー」

ちょこっと嬉しそうにそう言うヒロコ。実体化してるほうが良いなら、ルールとか気にしなくて良いと思うんだけどなぁ？

そうこうしている内にセリナちゃんが、男性を連れて戻って来た。

「お待たせしました、コージさん。あれ？　そちらの方は？」

「あ、ボクはマスターと一緒に旅してるヒロコって言います」

言われてすぐにぴょこっとお辞儀をするヒロコ。

「えっと、わたしはセリナって言います。よろしくお願いしますね。で、こちらはジャンさん。タタ村で狩りをする際にリーダーをされている方です」

と横にいるすごく落ち着いた感じの３０代ぐらい？の男性を紹介してくれる。

「どうも、こんにちは。僕はコウジ・ヒロセと言います」
「はじめまして、コージ君、ヒロコさん。ジャンと言います。コージ君は魔法が得意と聞いたけど、どういった系統が得意なんですか？」

丁寧にゆっくりとした口調で語りかけてくるジャンさん。声渋い、うらやましい。

「特にこれといって得意なのは無いですけど、どれも満遍なく使えます・・・よ？」

こっちの世界だと限られた系統の魔法しか使えないのかな？

「・・・っと、それはすごいですね。少し使ってみて貰って宜しいですか？」

ジャンさんが少し驚いた様子で、そうお願いしてきた。この反応を見るにやっぱり使える魔法は限られてるみたいだね。

「えっと、僕の魔法は少し特殊でして・・・見ても驚かないで下さいね？」

ちょっとはりきって行ってみよう。

「ボール・ライト、ボール・ファイア、ボール・アクア、ボール・ウインドウ」

適当に属性のあるボール魔法を打ち上げた。

打ち上げたはいいけど、何を狙おっかなぁ？　あ、あれなんか丁度よさそう。

「アローシュート！」

少し離れたところにある大きな岩を目掛けて魔法を解き放つ。

ヒュゴガッ！！！ゴォオオオオン！

なんか、岩がふっとんじゃった。良いとこ見せようとはりきったせいかな？

「な、な、なん・・・これは驚いたねぇ・・・」

かなり予想外だったようで、口をぽかんと開けたままのジャンさん。

「・・・・・・」

セリナちゃんに至っては、声もでず目も口もすっごく大きくなってる。

「こんな感じですけど、どでしょ？」

威力が強すぎてダメとか言われたらどうしよう・・・　ヒロコがすごく非難の眼差しを送ってくるのが心に痛い。僕だって加減がわかんないんだから仕方ないでしょ？

「いや、凄いね。見た事の無い魔法だけど申し分ない力だよ。ただ、獲物を狩る時は加減してもらわないと何も残らないからね。そこは気をつけようか」

落ち着きを取り戻したらしいジャンさんは、そう僕に教えてくれた。確かに、消し炭にしちゃったらダメだよねぇ。反省。

「とりあえず、今日は僕のところにでも泊まって貰う事にしようかな、コージ君、ヒロコさん」

「え、いいんですか？」

泊めてくれるのはありがたいけども、こんな簡単に僕らを信用しちゃって大丈夫？

「どうぞどうぞ。あまり快適とは言えませんけどね」

男の一人暮らしなんで、とジャンさん。とりあえず、ご厄介になることにしよう。

「ありがとうございます。お世話になります」

「お世話になりま～す」

よーし、頑張るぞ！

色々やってみよう

タタ村へ来て、２週間が経った。
色々と試すうちに、僕はかなり特殊だというのが分かった。まぁ、異世界に来ちゃった訳だし、普通じゃないとは思うけどね。

まず、魔法の力がでたらめだった。
ゲームやアニメ、漫画や小説の魔法や能力を僕は使うことができる。さらにこの世界の魔法であっても、見たものであれば簡単に真似できる。さらに魔法の改良や開発までできた。

で、調子に乗って魔法を試していたんだけど、僕が生き物を倒すと不思議な現象が起こる。
森の狼が村の家畜を襲ってきたので、魔法で反撃したんだけど急な事で手加減ができなくて、凄く威力のある魔法を撃っちゃったんだ。
狙いたがわず狼に命中したんだけど、ポンという音ともに何故かアイコンみたいな物が浮かびあがりこう書いてあった。

「魂を世界に還してアイテムを取得しますか？
ブラウンウルフ（Ｌｖ１５）を仲間にしますか？
召還カードにしますか？」

何か色々なゲームが混じってる・・・　とりあえず、アイテムを貰って見たんだけど綺麗なエフェクトと共に、アイテム（毛皮と牙と肉）がポトッと落ちてきた。

でも、こんな事ができるのは僕だけみたい。アイコンは他の人にはまったく見えないらしく、この世界はアイコンで色々できるんです

ねーとか言ったら怪訝な顔されたし。
狩ってきた動物を血抜きしてから、さばいたりしていたし。

これは不思議すぎるので、ジャンさんだけには教えたんだけど、やっぱりジャンさんもこんな現象は見たことがないらしい。ただ、王都のほうにはそういった事ができる人もいるかもしれないとは言っていた。

王都グレイトエース。
バルトス王国の首都であるグレイトエースには、タタ村からは馬車で向かって半月ほどかかる場所にあるらしい。結構時間がかかるし、そんなに距離があるとなると道案内できる人が居ないとたぶん辿り着けない気がする。

あとロボット。
意外な事にタタ村にもロボットがあった。
とは言っても、ゴーレムに毛が生えたみたいな簡単な奴だったけども。
なんかゴーレムに精霊さんを憑依させて、それに乗り込んで動かすらしい。土木作業や農作業に向いてる。戦闘とかには使えない事もないけど、やっぱり不向きみたいだ。

この世界にちゃんとしたロボット（ゴーレムもどきじゃない奴で、ガイアフレームって言うのがあるらしい）があるので、ガイアフレームを使えるようになりたい。勿論、自分好みに色々改造もしたいなので、ガイアフレームの開発で有名な都市ロバスを目指そうと思う。こちらはタタ村から馬車で1週間で行ける距離らしい。ガイアフレームを色々と見て回って手に入れた方が色々と都合が良いと思うし。

「あとは煮込んで完成なのでーす」
ジャンさんのお家にお世話になっているので、家事をさせて貰っている。
男の1人暮らしというだけあって、いやぁ凄い散らかりようでした。整理整頓がなっていなくて、ジャンさんにしか物の場所が分からない始末。なので、分類ごとに物をまとめて棚に分かりやすいように収納しました。あと、家具のレイアウトが家事をするのに動線が悪かったので、レイアウト変更。食器棚や収納棚などを邪魔にならない、かつ、視界をさえぎらないように配置して、見違えるように広く見えるようになり家事もしやすくなった。

そして、今カレーなぞを作っております。調味料とかはどうしたって？　ある物はこちらの世界のものを流用して、無い物は魔法で作っちゃった。お米はあんまり食べないみたいなんだよねぇこっちって。ナンもどきを作って食べてもおいしいんだけどね。

「カレーッ♪　カレーッ♪」

ヒロコが嬉しそうに、食卓で騒いでいる。ヒロコも料理はできる（意外）んだけども
カレーは僕が作るのが一番おいしいらしいので、僕が作ってる。
でも、この2週間で3回も作るとか多すぎると思うんだ・・・

「いい匂いだねぇ。コージ君の作るカレーは本当に楽しみだよ。あと、セリナももうすぐ来ると思うよ」

狩りで使う弓矢などの手入れを終えたジャンさんがそう言いながら、リビングに入ってきた。僕がジャンさんの家にお世話になってからこっちセリナさんも夕飯を一緒にとっている。

「こんばんはー」
どうやらセリナさんが来たみたいだ。

「それでは、コージさんは来週にはロバスに行かれるんですか？」
若干不機嫌そうに聞いてくるセリナさん。ひとつ年上と聞いていたけど少しむくれた顔を見ると年下にも見える。

「うーん、そろそろ動かないとやっぱりまずいと思うんだ」
勿論、母さんを探し出さないとね。無事なら向こうも動いてそうだし。

「まだ、ぜんぜん魔法教えて貰ってないのに・・・」
そうは言っても、僕の知ってる魔法のほとんどが他人には教えられないと思う。

「でもマスターの魔法って、普通じゃないから使うのは難しいんじゃないかなぁ？」
3杯目のおかわりを平然と食べてる精霊のはずのヒロコ。もっと遠慮しようよ。

「うー・・・」
セリナさんは魔法オタクみたいな所があるみたいで、事あるごとに魔法を教えろーと僕にせがんできていたので、かなりご不満のよう

だ。

「えっと、これ渡しておくから我慢してよ、ね？」
と言って携帯電話を差し出す。

「なんですか、これ？」
携帯電話って見た目からして綺麗だからマジックアイテムに見えないこともない。

「僕特製の会話できるマジックアイテムってところかな」
こっちに来る時に持ってた携帯電話を、コピーして中身をごっそり交換して通話できるようにした魔改造版の携帯電話なのだ。ちなみに電力じゃなく魔力で動く。

「これでコージさんと何時でもお話できるってことですか？」
若干嬉しそうなセリナさん。

「そうです、ちょっと試しましょうか」
ピピピと番号を押して、セリナさんの電話に掛ける。

ピリリリリリ！

「ひゃっ！？　何っ？！」
いきなり鳴り出した携帯電話を取り落としそうになるセリナさん。

「蓋を開いて、緑のボタンを押してもらえますか？」

「う、うん」

「もしもし」
と言っても近いから良くわかってないみたい。なので、小走りに家の外に出て見る。

「聞こえますか？　セリナさん」
「は、はい聞こえますよコージさん。凄いですねこれ」
すごく驚いてるのが電話越しでもわかる。

「これ魔力で動くマジックアイテムなんで、使いすぎると気絶しちゃいますから注意してくださいね？」
「はい、分かりました。これでいつでも教えて貰えますね～」

「まぁできるかぎりはそうしますけどね。でも電話に出れない時もあるんで怒らないでくださいねセリナさん」
電話のお試しができたので、家の中に戻る。

「なるべく出るようにして下さいね？」
にこっと笑顔でお願いしてくるセリナさん。可愛いは正義だね。うん。

「というわけで、ジャンさんにも携帯渡しておきますね」
とセリナさんとは色違いの携帯を手渡す。
村から僕が居なくなっても、こういった通信手段は重要だと思うからジャンさんの分も作っておいたのだ。

「あ、僕の分もあるのかい？　いやぁありがとうコージ君」
カレーを堪能していたジャンさんは、自分の分は無いだろうと思っていたみたいで若干驚いた顔をしてお礼を言ってきた。

「詳しい使い方は、この水晶に吹き込んで置いたので見ておいて下

さいね」

水晶に映像を記録してビデオ代わりに使っているのだ。これ超便利。

こういった感じで、便利グッズを色々作っている僕。

作り方は至って簡単。魔力を練って、具体的にどういう機能をさせるかをイメージすると、

必要な物が頭の中に浮かんでくる。あとはそれをイメージして組み立てるとそれっぽい物ができあがる。

とはいっても、あまり便利な物を作りすぎるとこの世界のバランスがおかしくなるかなーとか、目立って危ない人に目をつけられないかなーとか思うので、やりすぎないように注意はしている。あと、僕の魔法は凄く異質だから、分からないように魔法を改良しておかないとね。

それはともかくとして。

「行くぞロバス！ゲットだぜガイアフレーム！」

「ロボット好きだねぇーマスターは」

仕方ないでしょ、ロボット好きなんだから。

セリナの想いと旅立ちの準備

今日もジャンさんのお宅でご馳走になり、お家に帰りゆっくりしていましたが、ふと気になり、コージさんから頂いたケイタイをそっと取り出しました。

コージさん。

私より1つ年下という不思議な子。最初、村に来たときはどこの貴族かと思いましたが話をするうちに、怪しい子という印象になって、魔法を使うところを見せて貰ってからはとんでもなく凄い子というのが分かりました。

でも、数日一緒に過ごして見て分かったのですが、おっちょこちょいでそそっかしく、少し常識知らずな所があったりと手のかかる弟のような子でした。でも、物覚えはかなり良い方で、一度教えた事はすぐに覚え応用を効かせていました。

魔法にしても良く分からない系統の魔法を使い、一度見た魔法はすぐに覚えてしまう。
そのくせ、今まで魔法をちゃんと学んだことも無いという。

これには小さいころからコツコツと魔法を学んでいた私としては、かなり落ち込みました。
才能の差というのがここまで大きいとは。
これでも、村一番の魔法使いって評判だったのになぁ。

それに加えて、マジックアイテムを色々作ってくれます。

煙が出ないカマドや、薪のいらないストーブ。食材を長持ちさせる箱とか色々。おかげでジャンさんの家はすっごく便利になりましたし。

彼は不思議な子です。いつも笑顔であんな凄い魔法を使えるにもかかわらず、偉ぶる事も無く自然に振舞っています。それに凄く気を遣う方で、この間も水を汲んで川から戻ってきたところを見つかり

「力仕事は男の仕事だから、任せて」

と笑顔で強引に水の入った桶を持ち家まで運んでくださいました。細身で筋肉とは無縁のように見える方ですけど、意外と力持ちで頼もしかったです。

あとはコージさんの魔法をしっかりみっちり教えて頂かないと。それには傍にいるヒロコさんとの関係が非常に気にかかります。恋人では無いと思いますが、お弟子さん？　妹さん？　なんにせよヒロコさんよりも、コージさんの近くへ行かなければ、いけません。

魔法にかまけて17歳になってしまいましたが、コージさんを捕まえることができればそんな事は問題なしです。むしろこの為に私は今まで嫁がなかったんです！

でも、せめて料理ぐらいはコージさんぐらいできないと駄目でしょうね・・・
明日からがんばりましょう。（駄目フラグ）

とりあえず、こっちの世界の魔法がどういうものがあるのか分かった。

基本的に、火、水、土、風、光、闇といったオーソドックスな属性があり、それぞれの属性にあわせた魔法があるということだ。

火は攻撃に特化していて、水は癒しと攻撃の両方、土は支援魔法と攻撃、風は攻撃魔法と移動魔法。光と闇は特殊で扱える者が少ないらしくよく分かってない。

ゲームの魔法もだいたい似たような設定のものが多いし、微妙にこちらの設定と合わなくても光とか闇の属性です、とか言って誤魔化すのもできると思う。

とりあえず、今後の行動のことを考えて荷物の問題と移動の問題。あとは食事事情をどうにかする事が必要だったので、それに合わせて魔法や装備を考えていた。

とりあえず、簡単には死なないように防具からきっちり考えた。この世界は剣や魔法が普通にあるから、そういうのに耐性のある防具が必要だった。

基本になる素材は、カーボンナノチューブとケブラー素材。形はラ

イダースーツみたいなツナギにして、魔法に対する耐性を付与した。さらに、治癒効果も付与して、装備している限り疲れや怪我をかなり軽減できるようにした。

そして、魔法を吸収できるようにグローブに魔法を吸い取る属性を付与。吸い取った魔法は専用のカートリッジに収納する。そして収納された魔法は、純粋な魔力に変換されるようにし、これから作る銃の弾丸にする。

武器は6連シリンダーのついたリボルバー型の銃。銃身は長く角ばっていて、ごつごつとした造りにした。シリンダー部分はかなり長めに作ってあるのでちょっと不恰好だ。だが、それがいい！　グリップ部分は、僕の手に合わせて少し小さめ。6連シリンダーだけど弾丸が6発しかでないわけではない。シリンダーにカートリッジを詰めて、カートリッジの魔力が続く限り連射できる、汎用性のある優れものなのだ。

だけど1丁では心許ないので、もう一つタイプの違う銃も造る。

6連シリンダーは変わらずグリップ部分の角度と、フレーム部分に少し改良を施したものだ。見た目は銃なんだけど、用途としては魔法剣として使う。

撃つ、斬る、飛ばすと3種類の攻撃方法を選択できるので、かなり重宝すると思う。

魔法を撃ちだすのは当然だけど、実弾（実体剣）もちゃんと出るようにしている。勿論、魔力を変換して実弾を撃つので弾を込める必要はない。

そして、シリンダーのカートリッジを受ける先端部分には、魔術式

を刻印しておりカートリッジに収納した魔力を利用して色々な種類の魔法もしくは実弾を発生させる。トリガーを引くことによって、銃身に組み込んだ魔力増幅装置が作動し、発射される時にはかなりの威力になる。

銃にしたのは、なんとなくかっこいいからだ！
ちなみに、純粋な銃タイプの名前は「ノーミス」、剣タイプは「月光」とした。とりあえず他の人に使われると危ないから、グリップ部分に認証魔法を組み込んだ。

防具、武器ときて次は収納かな。

「うーん、鞄とかになんでも入るようにしてるといざって時に落としたりしたらまずいしなぁ・・・　いや使用者制限とか掛けると大丈夫なのかな？　だめだめ、やっぱり落としたら使えなくなるのは変わらないしなぁ・・・」

「指輪とかに荷物をしまっちゃうとかは駄目なの？」

「なるほど、それなら落とす心配も少ないねぇ。まぁ盗まれる心配は大きくなるけどもそれは目をつぶるしかないかぁ」

ありがたいアドバイスをくれたヒロコの頭を感謝を込めてなでなで。
ヒロコは頭を撫でられるのが気持ち良いらしいので、ありがとうと言うかわりに、最近は良く頭を撫でている。
僕も撫でるのが気持ちいいので、ついつい撫でてしまう。

そうやって、ヒロコの頭を撫でつつ二人でくつろいでいたら、セリナさんがやってきた。

「こんにちは、コージさん。今日はお願いがあってこちらに来ました・・・た」

笑顔で入って来たセリナさんだったけど、僕がヒロコの頭を撫でてるのを見て少しむっとした表情になった。え、なんかまずい事したかな僕？

「えーっと、こんにちはセリナさん。お願いってなんです？」

とりあえず、不機嫌そうな顔は気づかなかった事にしてそう尋ねる。

「・・・負けてられません」

「はえ？」

何か勝負してたっけ？

「あ、いえいえ。こちらの話ですよ。で、お願いというのはですね・・・」

と一旦言葉をくぎるセリナさん。凄く真剣な表情だけどそんなに難しいお願いなのかな？

「ロバスに行かれるなら私も連れて行ってください道もわかりますし魔法も使えますから非常に役に立ちますよ！　なんなら夜は添い寝してもらっても結構ですむしろしてください」

すごい早口で一気に言い切ったセリナさん。息継ぎなしで言うもんだから顔赤いよ？

ていうか、早口すぎてよく聞き取れなかったし。

「え、セリナちゃんも一緒に来るの？」

ヒロコが嬉しそうに言う。あ、一緒にロバスに行きたいって言った

のね。なるほど。

「セリナさんもロバスに行く用事があるんですか？　僕もヒロコも道がよく分かってないんで一緒に来て貰えると助かりますけども」

でも、一緒に来てもらって大丈夫なのかなぁ？

「大丈夫です、むしろずっと一緒について行きますよ」

僕の困惑が顔に出ていたのか、大丈夫と胸を張るセリナさん。

「あと、私のことは気軽にセリナって呼び捨てにしてくださいね？　私もコージって呼びますから」

これから旅をするから仲良くやって行きたいですしね、とセリナさん。もといセリナ。

年上のお姉さんを呼び捨てにするのは若干抵抗があるけどもね。

「うん、分かったよセリナ。よろしくね」

となると、セリナの分も装備を考えよう。

「ところで、コージは何をしていたんですか？　見慣れないアイテムがありますけども」

と、「ノーミス」と「月光」を見て不思議そうな顔をしている。

「うん、これからロバスに行くでしょ？　だから、色々造ってたの。ちなみにそれは銃っていって武器なんだ。そっちの服は防具。見た目は服だけど、そんじょそこらの鎧より強いんだよ。あとこの指輪が鞄がわりのアイテムなんだ」

指輪が鞄がわり・・・？　と頭にクエスチョンマークをつけて首をかしげるセリナ。

「これをね、こうやって触りながら魔力を注いで、収納したい物を触ると・・・」

指輪をはめて、実演してみる。

シュッ

と、指輪に吸い込まれるようにして、僕のツナギが指輪の中に納まる。

「え？　えぇえええ?!」

あ、びっくりしてる。ちょっと可愛い。

「で、出すときは出したい物を強く念じるか、頭の中に出てくる収納してる物の一覧の中から選べば・・・」

ポト

「と、出てくる寸法なのです。便利でしょう？」

ちょっと得意げな僕。ゲームだとアイテム９９個とか２５６個とか凄い量持てるから、僕も同じ事したいってだけで造ったんだけどね。

「なんというか、凄いです、はい。空間魔法だと思うんですけど、指輪に付与しちゃいますかーそうですかー」

なんだか、脱力しているセリナ。ちょっとやりすぎた・・・かな？

「マスターが常識知らずでごめんね」

ヒロコが裏切る。指輪に詰め込んだらって言ったのヒロコじゃないか～。

「いえいえ、ちょっと驚きすぎただけです。でもコージ、便利なアイテムだけど見せびらかせないでね？　あと、何か造ったら必ず私に見せてね？　凄すぎるアイテムは狙われちゃうから・・・」

何か思い出したのか、ちょっと暗い表情のセリナ。心配してくれてるのかな？　可愛いお姉さんに心配されるとか、ちょっと嬉しい。

「うん、分かったよセリナ。とりあえず、造った奴見てくれるかな？」

と、さっきから造っていたアイテムを見せる僕。

こうして、ロバスへのの準備は着々と進んでいった。

ある意味お約束

「それでは、まずヒューイックの町を目指しましょう」

綺麗に晴れた日の朝、ジャンさんに別れを告げて、ロバスを目指してタタ村を出発した。

まずは、タタ村とロバスの間にあるヒューイックを目指し、そこで狩りで得た素材を換金してある程度の資金を調達する予定だ。

「どれぐらいで着きそう？」

距離が全然分からないので、どれぐらいで辿り着けるか全く読めない。

「んー、そうですねぇ。このマジックアイテムのおかげで明日の夕方あたりには辿り着けるんじゃないでしょうか？」

と、スーイスイって感じで道を進む僕たち。腰には光る浮き輪みたいな物をしています。

みたいなっていうか、浮き輪です。これをはめてるとフワフワと浮くので少しの力で、どんどん進める。

一応辺りを警戒しながら進んでいるので、これといって魔物と出会うことも無く順調に街道を進む。ゲームだとこういう時、敵とエンカウントして中々進めなくてイライラするんだけどもね。

朝から黙々と街道を進み、とりあえず、日が真上に来た辺りで休憩する事になった。

休憩に丁度よさそうな木陰を見つけたので、そこで昼食を摂ること

になった。

「はい、どうぞ。昼間の分はお弁当を作ってきたんで食べてくださいね」

「あ、携帯食料とかじゃないんだ。セリナありがとう」

ちなみにヒロコは既にがっついてる。いただきますぐらい言おうよ・・・

セリナが作ってくれたのはサンドイッチ。甘辛く煮た鶏肉を野菜で包んで挟んだものや、乾燥フルーツと蜂蜜を挟んだもの。卵サンドや野菜サンドなど結構色々な種類を作ってきてくれていた。

パンくずを狙って小鳥が近くに寄ってくる。それを見て餌付けし始めるヒロコ。そんな姿を見ているとヒロコが精霊だってことをつい忘れてしまう。

セリナが作ったサンドイッチを綺麗に平らげて、少し横になる。

「母さん、どうしてるかなぁ・・・」

あのハチャメチャな母さんは大丈夫だと思うけど、ほぼ確実に色んな所に迷惑かけてると思うから心配だ。ナチュラルに笑顔で毒吐くときがあるからなぁ・・・

「お母さん見つかると良いですね」

「うん。でもきっと人に迷惑かけてるだろうから、後始末が大変なんだよねぇ」

セリナには、僕の旅の目的を話してある。他の世界から来てる事やヒロコの事は伏せてるけども。とりあえず、信じて貰えそうな事は

全部教えた。
僕の能力とかを聞いたセリナは、僕が“印持ち”かもしれないと教えてくれた。

この世界には、神様からの贈り物としか言えない様な能力を持つ人がいるらしいんだけどそういった人を総じて”印持ち“というそうだ。

昔は“印狩り”なんてものもあったらしく、今では印を持つ人がその能力のせいで迫害されないように協会があるらしい。便利な能力が色々あるらしいけれど、目立つ力はどこの世界でも白い目で見られやすいって事かな。

僕も気をつけなくっちゃ。

「とりあえず、そろそろ出発しよっか」
「はーい」
「はい」

その後は順調に進み、予定よりだいぶ進んだ所で野営し一夜を明かした。
ただ、一つの寝袋にみんな入ろうとしてひと悶着あった事だけ記しておく。

次の日も朝からヒューイックの町を目指して、街道を進む。街道といっても、日本のように道路が舗装とかされているわけではなく、人が通ることによって自然とできた道だ。町に近づくにつれ馬車の轍が結構しっかり残っているので、道に迷うことはないんだけど、やっぱり凄くでこぼこしてる。

そして、人が通る事が分かりやすいと言うことは。

「お嬢ちゃん達、金目のものを出して貰おうか」

町まであと少しって所で、ぞろぞろと現れた盗賊の方ご一行。台詞にひねりがないよね。

「コージ・・・」

「マスター？」

二人ともどうしましょう？　と問いかける様に僕を見る。

こんな時こそ、落ち着いて深呼吸。

すーはー。

「えっと、金目の物を出せば、通してくれます？」

と、僕が交渉の矢面に立つ。

「あん、嬢ちゃんかと思ったら兄ちゃんかい。金目の物ってのはお嬢ちゃん達の事もだ。

だから、通す訳にはいかねぇなぁ。ま、野郎は奴隷にでもなってもらうしかないな」

と、盗賊のおっちゃんはヒロコとセリナをいやらしそうな目で見て

笑ってる。
エロだエロ。このおっちゃんはエロ親父で決定。

「んー、もうちょっとましな選択肢があると思ったけど、交渉決裂だね」
と、言い放つなり「ノーミス」を構え連射する。

シリンダーは「雷」を選択している。何かの間違いで人を殺しちゃったりとかしないように、シリンダーには非殺傷な魔法を込めてある。

ババババババリィィイイ！

「ギャヒィイィ」

響き渡るおっちゃん達の悲鳴。雷の魔法で盗賊のおっちゃんたちを一掃したせいだ。ビビビと痺れる程度の威力に収めてるので気軽にぶっぱなしちゃう僕。エロ親父たちにはおしおきが必要だもんね。

すぐさま、シリンダーを「眠」にあわせ痺れてるおっちゃん達を続々と眠らせる。

「いっちょあがり～。ヒロコ、このおっちゃん達しばっといて！」
「はい、マスター！」
「わたしは？」

「セリナは僕と一緒に、おっちゃん達におしおきしよう」

この時の僕はすごい笑顔だった。

ヒューイックの町

ヒロコに縛り上げられた盗賊のおっちゃん達の顔に、落書きを一杯書き込んで街道に蓑虫のように吊るしてきた。お約束のような盗賊の遭遇の後は、何事も無くヒューイックの町に着いた。

盗賊のおっちゃん達の件は、町の門番の人に伝えておいた。門番の人によると、最近現れた盗賊団らしく結構な被害件数だったらしいのでお礼を言われた。小物っぽい人に見えたけど、そうでもなかったみたい。

「さて、それじゃあ素材を換金しに行こっか、セリナ」
「そうですね。じゃあこっちです」

セリナがいつも換金して貰っているお店に案内してくれた。

「こんにちは～、エリカさん居ますか？」
「ん、あいよぉ！　お、セリナちゃんお久しぶり！　今日はどんだけ持ってきてくれたんだい？」

日にやけて結構筋肉質なお姉さんが見た目どおり元気良く答える。顔馴染みのようで、店員さんはセリナに気軽に受け答えしている。なので僕は、素材をひょいひょいと指輪から取り出した。勿論、こそこそと見えないようにだ。

「あのこれなんですけど、どうです？」
「ひのふのみの・・・うん、今日は結構な量があるねぇ。しかもかなり綺麗に処理してある。全部で２０ゴールドって所かな？　それでどうだい？」

「あ、それで問題ないです。ありがとうございます」
「んで、セリナちゃん。そっちの子はいつもは見ない子だけどコレかい？」
と親指を立てる店員さん。あけっぴろげでおおらかな人だなぁ・・・

「はい、実はそうなんです。良いでしょう？」
と、にっこり笑顔でぐいと僕をひっぱり腕を絡ませるセリナ。

「え、あのその？」
腕に当たる柔らかい感触に、どきどきしてしまう僕・・・でかい！

「おいおい、しっかりしなよ坊主？　男ならしゃきっとしな」
しゃきっとと言われても、なにがなにやら？

「まぁまぁ。冗談ですし。それぐらいで」
と名残惜しそうに腕を離すセリナ。そんな顔を真っ赤にする程恥ずかしいならしなけりゃ良いのに。・・・嘘です、役得なんでどんどんどうぞ！！！

「まったく、言うようになったねぇセリナちゃんも。で、明日には帰るのかい？」
「いえ、実はわたしタタ村を出て来まして。こちらのコージさんと一緒に旅をする事にしたんです」
「お、そうなのかい？　だったらうちで装備も見ていっておくれ」
気がむいたらで良いけどね、とエリカさん。まぁ、装備なんか自分でつくっちゃったから、買うものってあんまり無いよなぁ・・・

とりあえず、受け取ったお金で今日の宿を探すので、手早くお店を出る僕たち。ヒロコは僕たちが換金してる間中、お店の中をじろじろ見ていて、他の店員さんに色々教えて貰ってた。

「ところで、さっき２０ゴールドで素材を売ったけど、ここらへんの宿は一泊いくらぐらいするの？」

貨幣価値がいまひとつ分かってないので、２０ゴールドが高いのか安いのか良く分かんないんだよねぇ。

「だいたい一泊４０シルバーぐらいですね、朝と晩のお食事つきで。ですので３人で１ゴールドと２０シルバーになりますね」

と言うことは、そこそこ高値で買ってもらったって事になるのかな。でも、これから旅を続けるには少し足りないと思う。稼げるときにどんどん稼いでおこう。

「大丈夫ですよ。２０ゴールドもあれば３人で１ヶ月ぐらいは平気ですから」

「ボクは野宿でも平気だよ、マスター」

どうも僕は不安そうな顔をしていたらしく、僕を安心させるようにそんなことを言う二人。

二人とも優しくて嬉しいなぁ。

「二人が居てくれて良かったよ。僕、頑張って稼ぐからきっとなんとかなるよ」

「でしたら、とりあえずギルドに登録に行きます？」

「あーギルドね。色々依頼があってそれをこなして行く為の組織・・・みたいな所って思っていいのかな？」

漫画とか小説だとよくある設定だよね？

「あ、はい。そんな感じです。私も一応ギルド員なんです」

ほら、と懐から一枚のプレートを取り出すセリナ。ヒロコ。おもちゃじゃないんだから回したり飛ばしたりして遊ばない。

「やっぱりギルドに入ってると便利なのかな？」

素材を売るなら、別にお店に直接売っても構わないよねぇ？ギルド経由だと取り分減るような気がするし。

「そうですねぇ。依頼が色々あるので自分に合った物を簡単に選べますし、お金を払ってくれないお客さんとかは、まず居ません。あとは情報も色々聞きやすいとかですかねぇ」

んー、と指をあごに当てて首をかしげながら答えてくれるセリナ。ぷっくりとした唇をとがらせて、目をくりくりと動かしている。やっぱりセリナは年下っぽく見えるなぁ。

「ふぅん。登録だけしといても損はしないって感じかな？　まぁ、そんなに慌てる事でもないか。ここには暫く居るつもりだしね」

「じゃあ、宿を探しましょうか」

「そだね、とりあえずベッドで寝たいしね、今日は」

「ボクはおいしいご飯があればなんでも良いよ、マスター」

ヒューイックの町（後書き）

はじめてのかんきん。
漢字の変換はお好きな様に。

お宿にほいさっさ

町の中心部まで来て、目立つ所に見つけた一軒の宿屋。こんな立地条件の良い所にある宿屋なんだから、それなりに期待できると思う。

「セリナ、この「ティルト亭」って宿屋は駄目かな？」
「はい、ここも良い宿屋ですよ。そこの角を曲がった先にも数軒あるんですが、そちらはこちらに比べて安いんですけど、値段どおりって感じなので」
と微苦笑を浮かべるセリナ。以前なにかあったのかな？

「じゃ、ここにしよっか。こんばんはー」

「はい、いらっしゃいませ」
長い赤毛をポニーテールにした、たれ目の優しい印象のお姉さんが出てきた。

「3人だけど、部屋空いてるかな？　2部屋欲しいんだけど」
「はい、大丈夫ですよ。お食事はどうされますか？」
「んー、とりあえず今日は晩御飯欲しいですけど、明日以降は今日食べてから決めるって事で良いですか？」
ここでとりあえず1週間ぐらいは泊まるつもりだから、ここの食事が口に合わなかったら外で食べようかなーとか考える僕。

「はい、大丈夫ですよ～。お客様は何日お泊りの予定ですか？」
柔らかい口調でそう尋ねてくるお姉さん。

「とりあえず、1週間お願いできますか？」
「それでしたら、今日の分として1ゴールドと55シルバー頂きます。明日以降も晩御飯を取ってくださるなら9ゴールドで、晩御飯無しの場合ですと7ゴールドと20シルバーの追加になります」
おおう。所持金が半分以上一気になくなるな。でも、必要経費だと思わなくっちゃね。

「じゃ、とりあえず今日の分を払いますね」
「はい、ありがとうございます。お部屋まで案内しますね。晩御飯はいつにされます？」

「えっと7時ぐらいで大丈夫かな？　それで良い？　二人とも」
「はい、大丈夫ですよ」
「うん、それでいいよー」

「かしこまりました、お時間になりましたら食堂までいらっしゃってください。お部屋はこちらになります。ごゆっくり」
2階の部屋まで案内してくれたお姉さんはそういって、階下へ降りていった。
さて、今回持ってきた素材はタタ村に居た間に狩った中の、2割ほどの量だったので1日もあれば同じ量を狩る事ができるはずだ。

それにこの町の周辺にはタタ村には居なかった高級素材を落とす獲物が居るはずなので、もっと効率が上がるはず。まずは何が高価な物かを調べてそれを重点的に狩る方向にしようとおもう。

セリナが持っていたモンスター図鑑を見ると、キラースネークや、ホーババード、レッドベアなどの害獣とされるモンスターが良さそうだ。
図鑑を見つつ、明日からの行動を考えているとあっという間に晩御

飯の時間になった。

なので、ヒロコとセリナを誘って食堂へと向かった。

食堂に入ると、すでに先客が何名かいて晩御飯をおいしそうに食べていた。その中に、僕らと同じぐらいに見える少年が1人だけで食べている姿がやけに目に付いた。だけど、食事がすぐに出てきたので、それ以上気に掛けることもなかった。

「それで明日からなんだけど、早速森に出て狩りをしようと思うんだけど、どう思う？」

と、ソースの掛かったこんがりと焼き上がった、よく分からないけどおいしいお肉を食べながら、そう切り出した。

「そうですね。装備は今のところ充分ですしね。お金を稼いでからロバスを目指しましょうか」

「ボクは町を見て回りたいなぁ～、マスターと」

いきなりまっぷたつか！　てかヒロコは僕の意見に賛成してくれるもんじゃないの普通？

「いやいやヒロコさん？　お金が無いと町を見て回っても何も買えないでございますよ？」

「よし、じゃあ狩りに行ってから遊ぼう！」

ナニコノワガママナコ。

「はぁ・・・まぁ、息抜きもいるけどね。セリナもそれでいい？」

「ええ、今晩わたしと添い寝してくださったら、それでよろしいですよ」

にこっと笑顔を振りまきながら、またそんな事を言う。それはもう

昨日の晩で懲りたよ！

「それは駄目！　マスターはボクと一緒なんだよ？」
さも決定事項のように、胸を張って威張らないでねヒロコ。

「あぁもう！　僕は1人で寝るの！　男と女は別々の部屋で寝る！
良いね！」

「はーい」「はい・・・」

添い寝するって言ったのに、良いって言ってくれたのに・・・とぶつぶつ言ってるセリナ。
そんな事僕言ってないよね？

「じゃ、明日は朝早くから出るから今日は早く寝よう」

とは言っても、明日の狩りのために色々と小細工を用意するんだけどね、僕は。
僕の小細工がどこまで通用するのか、どれぐらい実用的なのかを試すには丁度いいと思うんだよね。とにかく目立ちたくないんで、僕自身が強いって訳じゃなくて、僕が持ってるアイテムが凄いと人に思わせるように今からあれこれ作っておきたい。

あ、晩御飯はとてもおいしかったので、泊まってる間は食事を頼むことにしました。

俺の世界

ふと気付くと何も無い空間に、僕は1人で立っていた。

いや、立ってるのか浮いているのか良く分からない状態だ。ここには何も目印となるものが全くないので、どうなってるかさっぱり分からないのだ。

「あー、またなんか巻き込まれちゃったのかな僕は」

人は1回異常な経験をしていると、とりあえず冷静でいられるらしい。

こんな時は落ち着いて深呼吸。

すーはー。

「巻き込まれたってのは、あながち間違いじゃないな」

と、どこからか少年？らしい声が聞こえてきた。声が聞こえてきた方向へ顔を向けるとそこには、1人の小柄な少年が立っていた。

「よう。俺の世界へようこそ。坊ちゃん」

金髪の髪を短く揃えた、青い目をした少年が挑むように僕を見ていた。

「君は誰？　僕はコージ。ヒロセ＝コージ」

先に名前を名乗ってないと、先に名乗れ礼儀知らずが！　とか言われそうだから先に名乗る。

「へぇ、珍しい名前だな。で、お前はなんの印を持ってるんだ？」

え、ちょっとそこは名前を名乗ってくれるターンじゃないの？　ずるいよ君。だから聞かなかった事にする。

「君は誰？　僕はコージ。ヒロセ＝コージ」
名乗るまで負けないぜ！

「・・・おぃ」

「君は誰？　僕はコージ。ヒロセ＝コージ」

「いや、だからな。名前は分かったから・・・」
「君は誰？　僕はコージ。ヒロセ＝コージ」

「・・・はぁ、分かったよ。俺はエドワード＝リュクスだ」
「オーケー、エドワード。覚えたからな！　逃げるなよ！」
「いや、訳分かんないから」
調子狂うぜ、と呟いているエドワード。お約束を守らないからそうなる。

「まぁいいや。で、おまえはなんの印を持ってんだ？」
「いや、わかんないし」
「はぁ？　じゃあなんで、ここに入れたのおまえ？」
ん？　印が無いとここに来れないって事かな？

「知らないよ。とりあえず、印なんてものは無いから出してくれる？」
「まぁそう焦るなよ。せっかく来たんだしゆっくりしてけよ。明日は狩りに行くんだろ？」
「え、なんで知ってるの？」

「あんだけ食堂で大騒ぎしてりゃ、嫌でも聞こえるっての。俺もここら辺で狩りしてっから獲物によっちゃ穴場も教えてやれるぜ」
食堂で話を聞いてたのか・・・って、あの1人で居た子かな？

「ひょっとして、1人でご飯食べてたのってエドワードだったの？」
「うるせぇよ。1人で悪かったな」
「いやいや、むしろ1人でこんな所に来れるのが凄いよ！　僕1人だったら絶対無理」
ヒロコとセリナが居たから、ちょっと見栄張って頑張れたんだし。

「・・・ふーん、そっか。で、明日は何を狩るつもりなんだ？」
ちょっと照れた風に聞いてくるエドワード。なので、明日狩る予定の獲物を言ってみた。

「は？　えらく大物というかヤバメの奴を狙うじゃねぇか。大丈夫なのか？」
「んー、たぶん平気だよ。これでも僕って色々できるからね」
とちょっと得意気に答える僕。

「具体的には何ができんだ？」
「えーっと魔法？」
「なんでそこで疑問系なんだよ」
「いや、ちょっと特殊な魔法なんだよ、僕の魔法は」
似て非なる魔法も一応使えるけど、基本的に普通の魔法とは全く違うし。

「ほほぅ。特殊な魔法とか面白そうだな！　ちょっとやってみせろよ」
「やってみせろって・・・ここって魔法使えるの？」
「ああ、いけるぜ。ちょっと待て、的を作ってやるから」

とエドワードが言うや否や、ゴーレムが突然現れた。

「そいつを狙って撃ってみろよ」
「分かったよ。ボール・アイス、ボール・ファイア」
二つの玉が浮かんだのを確認して、狙い撃つ。

「ボールシュート」
浮かんだ玉ごと、ゴーレムへ向けて解き放つ。

ゴッバガッ！　ゴォオオオオオオオオオン！

木っ端微塵に吹き飛ぶゴーレム。まぁ玉ごと撃っちゃったからそうなるよねぇ。
ちょっと呆然とした感じのエドワード。

「ね？　特殊でしょ？」
「・・・おう、こりゃすげぇぜ！　ボール・アイス！　ボール・ファイア！」

え？　エドワードが僕の魔法を使ってる？！

「ボールシュート！！！」

ゴバーーーーーン！

威力はちょっと弱いかもしれないけど、間違いなく同じ魔法だ。

「なんで？」
「まぁ、これが俺様の印の力なのよ。世界に1つしかない「真似の印」」

「なんていうか、そのまんまのネーミングだね」
「ほっとけ！」

と、おちゃらけてはいるけども僕の魔法を真似されるとか凄いなぁ。でも、簡単に真似されるのもちょっと悔しいなぁ。

「まぁ安心しろ。真似出来ると言っても、本物には負けるし覚えられる数も限りはある。でも印の力を磨けば、かなり強いのは間違いないけどな」
「印って凄いなぁ。僕にも印って付けられるの？」
「いや、印は生まれつき持ってるだけで後から付けるとかは聞いた事ねぇなぁ」
「へぇ～・・・良いなぁ・・・」
「ま、まぁ気落ちすんなよ、お前の魔法も大概すげぇんだからさ！」

僕の羨ましいオーラを感じ取ったのか、そう言って僕の魔法を褒めるエドワード。

「コージだよ。せっかく名乗ったんだからちゃんと名前で呼んでよね」
「おま「コージ」・・・コージは変な奴だな」
「エドに言われたくないね」

と、睨み合う僕たち。だけど、それも長続きせず二人とも吹き出して笑ってしまった。

「でも、おっかしいなぁ。この世界なんだけど、印を持ってる人間しか入れない世界のはずなんだけどなぁ。おいコージ、ほんとに印無いのかおまえ？」
「別に体のどこにも、印はおろかアザすら無いよ。まっさらぴーん」

はぁ、とため息をつく。

「全くコージは不思議な奴だなぁ・・・ま、何はともあれコレも何かの縁だ。よろしくな」

「エドには不思議とか言われたくないけど、まぁよろしく」

とシェイクハンドシェイクハンド。

「じゃあ、またな」

とエドがそう言うと、僕の意識はうっすらと沈んでいった。あ、穴場教えて貰ってないや・・・

「穴場をすぐに教えなさい、エドワード」

朝、食堂で1人で食べてるエドワードを見つけ即、声を掛けた。

「んあ？　ようコージ。朝っぱらからご挨拶じゃねーか」

と笑いながら答えるエドワード。

「だって穴場教えてくれる前に、寝ちゃったじゃん？　だからこうして聞きに来たって訳ですよ、うん」

「コージ、そちらの方は？」

「？？？」

セリナもヒロコも不思議そうな顔をしてこっちを見てる。そりゃそうだよね。夢の中で知り合いました！　とか普通ないもん。

「俺にかまうな」

僕が紹介しようとした途端、エドワードの空気が変わる。どうしたんだろ？

「コージ、穴場は教えてやる。だから、ちょっとこっち来い」

と、僕には普通に話しかけて来て、ずるずると店の奥のほうへ連れてかれた。

「エド、どうしたの？　朝は機嫌悪い？」

「違ぇよ、馬鹿。ちょっと訳ありでな。おまえだけなら良いんだけ

ど、あんまり人と関わりたく無いんだわ俺」
「ふぅん。了解！　良かったら一緒に狩りに誘おうかと思ったけど駄目・・・だよね？」
「あー・・・すまん」
「いいって、いいって。なんか事情があるんでしょ？　でも気が変わったら一緒に来てくれよな？」
「おう、わかった」

と、ちょっとすまなさそうに穴場を教えてくれるエド。友達って良いよね！　きっとエドは女の子がちょっと苦手なクールガイ！なんだろうな。

ん、エドがポカーンとしてるな。どうしたんだろうねぇ？

「穴場サンキュー！　またね！」
「おう！」

と、エドと別れて自分のテーブルに戻った。

「彼のことは、また後でね」

聞きたくてうずうずしてるだろう二人に先にそう言っておく。

「とりあえず、ご飯食べたら行くよ。しっかり食べてがんばろうね」
「ええ、がんばります」
「うん、頑張って食べるよ、マスター」

・・・ヒロコ、頑張る所ちょっと違う。

朝食後、準備をして町を出て近くの森へと入って行った。
町を出てから、昨日の内に作っておいた小細工（アイテム）を二人に渡した。
セイフティフィールドといって、ワンタッチで防御結界を張れるアイテムだ。このアイテムも「ノーミス」と同じカートリッジを使用しており、自分の魔力が無くなっても使用できるようにしている。
「これ便利ですねぇ。魔法唱えてる間も邪魔されずにすみそうですね」
「だねだね。ボクは魔法できないけどね！」
「危ないと思ったらすぐに使ってね。カートリッジ一本で1日は保つけど念のため、予備のカートリッジを渡しておくね」
僕の造ったアイテムは、全てカートリッジ式にしておく事にした。
カートリッジにする事によって、魔力を使いまわせるかなと思ったからだ。
カートリッジも1日に10本は造れるので、今のところ足りないと言うことはない。
「で、そろそろエドに聞いた穴場に着く頃なんだけども・・・誰か戦ってる？」
なにか遠くで争うような声と悲鳴のようなものも聞こえる。
「あっちです！　急ぎましょう」

セリナは、森で暮らしていただけあってすぐに、方向を見極めて教えてくれた。

「分かった、先に行くね！　ヒロコはセリナと一緒に着いて来てね」

万が一はぐれても、ヒロコがセリナと居ればなんとかなる。

「了解マスター、気をつけてね」

その声を背に聞いて、僕は一気に駆けて行った。

ギルドの依頼は、グレイウルフの群れの討伐だった。最近、森の中を町の近くまで来ている奴らが居るので、討伐して欲しいとの事だった。

グレイウルフはだいたい４～１０匹前後の群れで行動しており、俺たち５人パーティで充分に対処できる相手なのだ。

だが、その計算も突然の乱入者によって崩される事となった。

レッドベア。

２本の足で立ち上がり、４本の腕で獲物を殴り殺すこの近辺では最強とも言える魔獣。

この魔獣の嫌な所は、背中側にも熱を感知できる器官があり死角が無い所だ。

加えて、体長２メートルを越す巨体から繰り出される攻撃は、ちょっとした岩などは粉々にしてしまう。人に当たればどうなるかは自明の理であろう。

「リリア、魔力はあとどれぐらい持ちそうだ？」

「もう３割ぐらいしかないです。ケイン」

徹底的に防御に入っても、このざまか。ラサも、アルもリリアを守る為に少なからず痛手を負っている。仲間を逃がすにしても、はたして俺が何分耐えられる事ができるか・・・

「リーダー、逃げるにしてもこいつを弱らせない事には無理だぜ」

最初にレッドベアを見つけてくれたヨハンが、苦々しげにそう言った。

グレイウルフなどはとっくの昔に逃げ去り、後に残された俺たちがレッドベアにとってのご馳走。がっつり食べる気満々な様子で、鼻息もかなり荒い。

と、様子を見ていたら突如突撃してきた！

「ぉおおおおおおっ！」

正面から当たらず、斜めからぶつかるようにして、レッドベアに進行方向をわずかに逸らす。だが、そのせいで盾がひしゃげ壊れてしまった。

これではもう、レッドベアの攻撃に耐える事ができない・・・

俺が食い止めるから逃げろ！　と言おうとしたその瞬間、その声は聞こえた。

「レッドベアみーっけ！　突撃どっかぁーーーーーん！」

ゴミュ！　ドカーーーーーン！

なんとも形容しがたい音が響き、もの凄い勢いで突っ込んできた何かがレッドベアを吹き飛ばした。

「お兄さん達大丈夫？　ってうわ！？　めっちゃ怪我だらけだ！満ちるマナよ、彼の人達を癒せ！　リフォーガ！」

黒い髪の毛に黒い瞳。幼い顔立ちをした少年がそう呪文を唱えたかと思うと、みるみる内に傷が塞がっていく。傷ついた仲間達も同様だ。

その様子に安心したのか、にっこりと笑う少年。

「後ろだ！　少年！」

レッドベアが息を吹き返し、少年を食うべく突撃してきた。

「おっと、ほいさ！」

慌てた風もなく何かを地面に投げる少年。すると、少年の直前まで来ていたレッドベアは急に反転し、少年から遠ざかって行った。

「よっし！　うまく行った！　あとはこれで仕上げだね！」

抜く手を見せずに、鉄の塊を取り出した少年はそれをレッドベアに向ける。

「モードは「氷」食らえアイスバレット！」

リリリリリリリリリィン！

と澄んだ音がしたと思うと、鉄の塊から出た氷魔法がどんどんレッドベアを撃ち抜く。

「よーし、一丁あがりっと」

そいじゃ、アイテムにしとこーっとと少年が呟くとレッドベアは跡形も無くなり、レッドベアが居た所には素材だけが残っていた。

しかし、こんな少年がたった1人でレッドベアを倒すとは・・・

「あっ！」

そこで、何かに気付いたらしい。恐る恐るこちらを振り返る少年。

「ごめんなさい、レッドベア倒しちゃった・・・」

それはそれは心底申し訳なさそうな表情だった。

目指せ高額素材！（後書き）

コージは突っ走る子。
感想を頂けたら幸いです。

テストテストただいま武器のテスト中

やばい、どうしよう。これって滅茶苦茶横取りだよね・・・？

ちょーっと高そうなモンスターだったから、張り切って倒した挙句、素材まで剥ぎ取っちゃう僕って、極悪人だよね・・・

えっとこんな時こそ深呼吸。

すーはー。

うわぁん駄目だ、お兄さん達が凄い真剣な目で僕を見てる。落ち着かない～！

「えっと、この一番高い背中のピロピロは渡しますから、許して貰えます？」

背中のピロピロは、レッドベアの中で一番高い素材なんだ。なんでも、煮込み料理にすると一緒に煮込んだ野菜やお肉が凄く深い味わいになるという高級食材なんだって。

せめて、他の素材はお金儲けの為にも譲って欲しい・・・

「あー、いやなんだ。少年、ちょっといいか？」

リーダーっぽいお兄さんが、凄い真剣な顔でそう切り出した。

「えっと、はい何でしょう？　やっぱり、ピロピロだけじゃ駄目？」

「いやそういう事ではなくてだな、君のおかげで俺達は助かった訳で非常に感謝してるんだ。あーっと、俺の名前はケイン＝リカルド。見ての通りの冒険者だ」

よろしくな。とケインお兄さん。さらさらの茶色の髪の毛を後ろで括り、額には大きな傷が走っている非常に筋肉質の頼もしそうなお兄さんだ。

「ご丁寧にどうも。僕はコージ＝ヒロセです。えっとお兄さん達ってレッドベアを狩ってたんですよね？」

「いや、俺達は残念ながら襲われて、やられそうになってったんだ」

あ、そうだったんだ。じゃあ人助けになったって事かな。ちょっと安心。

「コージ、大丈夫ですか？　怪我してませんか？」

「おーいマスター、だいじょーぶー？」

とそこへ、セリナとヒロコがやって来た。

「あ、セリナにヒロコ。丁度良かった。僕の旅の仲間です」

「はじめましてセリナといいます。お怪我は大丈夫ですか？」

「ボクはヒロコだよ。よろしくね」

と、僕達が自己紹介をするとケインさんが仲間を紹介してくれた。

「こっちの神官がリリアで、こいつがヨハン。そっちのエルフがラサリャーサで、向こうでぽけーっと座ってるのが、アルハーンだ」

あ、エルフの人がいる。気付かなかった。初めてエルフの人を見るけど綺麗だなぁ。

「むぅ」

と唸ったかと思うと、ぎゅっと僕の腕を抱え込むセリナ。・・・でかい！

「えーっと、このレッドベアの素材は山分けって事でいいですか？」

お兄さん達を見れば、怪我は治ってはいるけども装備が結構ひどい有様になっている。
なので、レッドベアの素材は山分けにして少しでも、装備のお金の足しにでもして貰おう。

どうせ、僕達はじゃんじゃん狩る予定だし。

でも、お兄さん達は僕が倒したんだから全部持ってけーとか言う。いやいやだめだめ、こちらこそいやいや等と訳の分からない取引をした結果、なんとか半分に分ける事ができた。

「で、ちょっと聞きたい事があるんだが良いかな？」

取引が成立した後、ケインさんがそう僕に切り出してきた。

「コージ君のギルドランクはいくつになるんだい？　俺達はここら辺で結構依頼をこなしてきたんだが、君達を見かけた事がまるで無いんだが、よその町から来たのかい？」
「いや、僕はギルドに登録してないんです。今まではタタ村って所で狩りをしてただけですし」

この町で狩りをするのは初めてなんです。と言うと驚いた顔をしている。

「そうかぁ、登録して無い上に今日が初めてって言うなら、会ってなくて当然だな」
なるほどなるほど、と納得顔のケインさん。

「さて、ひきとめて悪かったね。今日は早いけどこれで一旦町に帰るよ。縁があればいずれまた。君達なら大丈夫だとは思うけど、気をつけてな」
「はい、ケインさん気をつけて帰ってくださいね」

さようならーと、挨拶をしてケインさん達と別れた。

さて、気を取り直して狩りをするとしましょう！

とりあえず、運よくレッドベアを狩れたので、次はホーババードを狙って見たい。

ホーババードは足が滅茶苦茶速い飛べない鳥だ。

ジャンプ力も物凄くて、ある意味飛んでるとも言える飛距離を出すそうだ。でかいんで見つけ易いんだけど、やられそうになるとすぐに走ったりジャンプしたりして、逃げてしまうので大変貴重な素材として有名なのだ。

だけど、僕にはちょっとした秘策があった。これが成功したらちょっと楽しい。

手に握るのは「月光」モードは「眠」そして実体剣にしてある。
そう、眠りの刃と化した「月光」でひたすら攻撃すれば、ホーババードを眠らせたまま倒せるんじゃないか？　と思ったのである。

「ケェエエエエエエエエエエエエエエ！」

って、まだ遠くに居ると思って油断してたら一瞬で間合いを詰められた！

「ていっ！」

すかさず「月光」をホーババードに当てる！

「ぎゅぅうううううぅぅ・・・」

「月光」を当てた瞬間寝た！　寝たまま凄い勢いですっ転んでいった！

「シューーーール・・・」
「はわー・・・」
「あはははははははは」

3者3様の反応だった。
ホーババードの勢いが凄かっただけあって、寝た瞬間のずっこけっぷりがとんでもなく間抜けだった。とりあえず、手早く眠ったままのホーババードを倒し、素材に変えた。

で、この調子でどんどんホーババードを狩るつもりだったんだけど、たまに眠らない奴がいてあっという間に逃げられた。あの逃げっぷりは確かに誰も捕まえられないと思った。

なんだかんだで、あっという間に夕暮れが近づいてきた。

今日1日でだいぶ稼いでしまったと思う。この調子でやっちゃうと、町の近くに獲物が綺麗さっぱり居なくなってしまうかもしれない。

「コージ、今日は一杯狩れましたね。こんなに狩れたのはわたしも初めてです」

「意外となんとかなるもんだよね。でも、この調子で狩りしてて大丈夫かなぁ？」

「あー、そうですねぇ。獲物が居なくなるのもそうなんですが、お店が買い取りきれないかもしれませんねぇ。高級な素材や食材が綺麗に取れましたからねぇ・・・」

あ、そっかぁ。獲物だけの問題じゃなくて買い取ってくれるお店の問題もあったか。

うーん、どうしよう。

「とりあえず、明日は遊ぼうよ。ね、マスター」

君は今日も遊んでなかったかい？　すっごくウロウロしてたよね？

でも、今日1日でだいぶ稼げたから、明日は町を見て回っても大丈夫だと思う。

「まぁいっか。明日は町を見て回ろうか」

「やったぁー！」

嬉しそうにはしゃぐヒロコ。セリナも嬉しそうににっこりしていた。

「・・・明日こそは好感度アップです」
「ん？　何か言ったセリナ？」
「ううん、こっちの話ですコージ」

ふーん、なんだろうね？　っておおぅ腕組んだら気持ち良い！！！
ちょっと幸せな気分になりました。マル。ありがとうセリナ！

テストテストただいま武器のテスト中（後書き）

おっぱい大好き。

ハウマッチ

次の朝。

換金する予定の素材をぐるぐるっとまとめて鞄に入れる。しっかり入ったのを確認して鞄の中で指輪にまた収納する。

今日はとりあえず少し換金して軍資金を作って、町を見て回ろうと思う。ロバスの都が近いだけあって、この町にはガイアフレームの店もあったし、ちょっと楽しみだ。

「おはようございます、コージ。疲れは取れました？」
「マスターおはよっ！　はやく町を見にいこ？」

「おはよう、セリナにヒロコ。今日はまず色々換金してから見て回ろっか」

昨日狩った素材をお店へ直接売りに行って、少しでも高く買って貰うつもりだ。
一応、モンスター図鑑で素材の相場を調べてあるから、ぼったくられる事はない・・・はず。たぶん。

今日は時間が合わなかったのか、エドの姿は食堂に無かった。そんな日もあるかーと、特に気にせず朝食をとり、早速町へと向かった。

町に出た僕達は、セリナからお店の場所を聞き素材を売りに回った。最初は初めて見る僕を胡散臭げに見ていたが、冒険者ギルドに所属しているセリナや愛想よく笑顔を振りまくヒロコにほだされたのか、

どこの店でも最後には、また来てくれよなーと大歓迎される結果となった。

そのおかげで手持ちの素材の1割弱を売った結果、１２０ゴールドの大金となった。

昨日頑張ったかいがあったよ・・・うんうん。だって、今もってる素材を全部売ったとしたら、おおまかに計算しても１０００ゴールドに成るって事だし。そう考えると、資金面でだいぶ楽になった。

「じゃ、エリカさん所に行って見る？　ヒロコも昨日はずいぶん興味津々だったし」

せっかくお金があるんで、装備や役に立ちそうな小物も買っておこうと思う。
ていうか、ちょっとぐらい無駄遣いしても良いよね？

「わーい、やったぁ！　ありがとうマスター！」
「うふふふ、エリカさんも喜んでくれますね、きっと」

とりあえず、みんなに２０ゴールドずつ渡しておく。残りの６０ゴールドはロバスに向けての旅の資金として、宿に泊まる時や食事をする際に使うお金として残しておく。

売れる素材があるとはいえ、手持ちのお金でやりくりできるようにしておかないと、万が一素材が売れない場合があったら、たちまち困っちゃうからねぇ。

エリカさんのお店は革細工を主に扱っている。ほかにも、昨日は気付かなかったけど、牙や爪を加工した飾り細工や短剣などの武器。

髪留めやブローチなど女性が好きそうな物も豊富に揃えていた。

「お、いらっしゃい。今日は買い物かい？」

店へ着くとさっそくエリカさんが、元気にそう言って来た。

「はい、今日は色々見せて貰いますねぇ～」

「ねね、これ！　マスター、この髪留めはどうかなぁ？」

ヒロコは早速狙っていた物を、僕に見せてきた。それは不思議な髪留めで、中心に花をあしらった飾りがあり、それを取り囲むように蔓がくるくると伸びている。形は特に珍しいとは思わないんだけど、木彫りみたいに見えるのに花の部分は綺麗なピンクで蔓の部分は少しくすんだ緑色をしているのに、着色した様子が全く無い所には驚いた。どうなってるんだろ、これ？

「お、エルビルクの髪留めだね。それは加工が難しいから、結構値が張るんだけど、買って後悔しないよ。朝晩で色も変わるから、２度楽しめるしね。買うなら８２０シルバーだけど、７５０シルバーにまけてやるけど、どうだい？」

確かに髪留め１つの値段にしては凄く高い。１週間ぐらい宿に泊まれるし！？

「綺麗だね、これ。ヒロコちょっと付けて見せて。あ、うん良く似合ってるよそれ！」

花の部分がはっきりとしたピンクなので、黒髪のヒロコには凄く映える。うん、こんだけ似合ってるんなら、買ってもいいんじゃないかなぁ？

「・・・不覚を取りました。わたしも何か探さないと・・・」

僕がヒロコを褒めていると、セリナがぶつぶつと何かを探し始めました。ちょっとショックを受けてたみたいだけど、セリナも髪留め狙ってたのかな？

「じゃあ、これ頂戴！　おねーさん！」

僕の一言が決め手となったのか、即決で買うヒロコ。

「まいどあり！　どうする？　このまま付けて行くかい？」

「うん、付けてく！　はい、これお金」

「はいよ。じゃ、おつりの５０シルバーだよ。良かったなお嬢ちゃん」

ヒロコは意外と買い物上手だねぇ。うん。まったくもって精霊に見えないね。

その後も色々物色したけど、セリナは中々よさそうな物が見つからなかったらしく、小物入れを２つほど買っただけだった。僕はと言うと、ローブを買った。旅をするのに、雨や寒さを防いだり、夜はそのまま寝れるローブが欲しかったんだ。

嘘です。店員さんのトークに惹かれて、ローブが欲しくなって買っちゃいました！

正直、寝袋を指輪にしまってるんで要らないんだけどね。でも、かっこいいから良いんだ！

「で、僕は行きたい所があります」

「どうしたの、マスター？」

「どこに行きたいんです、コージ？」

「ガイアフレーム置いてる店に行きたいです！」

そう、ガイアフレーム。この世界のロボット。ロバス程では無いにしても、きっとそれなりに良いものがあるに違いない。

「なるほどぉ。じゃ行きましょコージ。こっちです」

と、納得顔で僕の腕を自然と組んで案内してくれるセリナ。何故か勝ち誇った顔をしているのが不思議だけど、でか・・・もとい気持ち良いからいいや。

ハウマッチ（後書き）

やっとロボットに辿り着いた。

語呂合わせ

ヒューイックのちょっと町外れに、そのお店はあった。

2足歩行のものや、多脚型。お店の目立つ所にはぴかぴかの西洋鎧風のガイアフレームが置いてあり、2脚型が人気があるのを伺わせた。

僕はといえば、ロボットがごく自然に動いていて試乗してる人なんかも居てるこの光景に凄く感動していた。この世界ではロボットが自動車みたいな感覚で使われているのが実感できたからだ。

「うわぁ・・・」

「そんなに目を輝かせて、コージはガイアフレームが好きなんですねぇ」

「うん、なんかずっとガイアフレームを見たい見たいって、騒いでたぐらいだし」

「お、若いのにフレームに乗るのかい？　兄ちゃん」

僕が凄く真剣にガイアフレームを見ていたせいか、お店の人がそう声をかけてきた。なんか、頑固でこだわりのある整備士って感じのおじさんだ。

「あ、ガイアフレームって初めて見るんで乗った事無いんです」

「ほぉ、そうかい。じゃあまったくの素人ってわけかい？」

「はい、ずぶの素人です！」

元気良くそう答えた。

「おーおー、そうかそうか、ずぶの素人か。あっはっは。自分で言う奴なんて初めて見たぜ」

その後、おじさんもとい、ハーベイさんは僕を気に入ってくれたらしく色々教えてくれた。

動力源となるのはパイロットの魔力と魔石獣から取れる7色の鉱石で、パイロットの魔力もそうだけど、鉱石の配置によっても出力が変わるので色々研究されているそうだ。

そして、今お店に出ているのは第二期のガイアフレームで、ロバスに行くとさらに進化した第三期のガイアフレームが出回っているらしい。いずれはガイアフレームを造りたいと思っているので、仕組みを教えて貰えるのは非常に楽しかった。

あと、ガイアフレームの操縦方法は2種類あり、その内のトレースモードだと自分の体を動かす感覚で操縦できるらしい。もう1つの方法は、自分で術式を考えて組み込み、動かす時に術式を選択して実行するらしい。術式を組み込むとかって聞くとなんだか難しそうだけど、要はゲームのコントローラーで操縦する感覚なのかな？と思った。

普通はトレースモードで操縦するらしいんだけど、僕は術式で操縦する方が楽しいかもしれないと思った。

だって、そっちのほうがロボットを操縦してるって感じがするし！

「コージにちょっと面白い物を見せてやろう」

とハーベイさんが、こっちこっちとお店の奥に案内してくれた。

「ガイアフレームには元になる機体があってな、それをルーツというってるんだ。古代遺跡からたまに見つかるらしいんだが、今はほとんど見つかる事が無いんだ」
「んー？　ルーツって機体を真似てガイアフレームができたって事？」
「そうだ。まぁ、ただ真似てるだけじゃなくて、改良に改良を加えルーツの性能に勝るものも、最近は作られるようになってきたけどな。それでも、ルーツは特殊で貴重って事には変わりないんだ」

「へぇ～。で、面白い物ってひょっとして・・・？」

「そう、ナンバー持ちのルーツがここにあるんだ」
「ナンバー持ち？」
「あぁ。特別なルーツには機体にシリアルナンバーがあるんだ。ナンバーが小さければ小さい程、強力な機体でな。２桁ナンバーなぞ、俺でも見たことがない」
「ふうん、そうなんだ」
「最近で有名なのは「７７７」スリーセブンだな。恐ろしく強いらしい」

パチンコを思い出したのは、仕方ないよね？

「で、見せたい物ってのはこれなんだが・・・」

と、案内して見せてくれたのは一機のガイアフレーム。もといルーツ。
白がベースで、所々緑色のラインが入っている。物凄く細身のラインで、全体的に華奢で表にあった鎧型のガイアフレームと比べると、可哀想になるくらいだ。

だけど、頭の部分。フェイスパーツだけは猛々しく、どんな敵でも倒さずにはいられないという風格が感じられた。ある意味禍々しいかも。

「こいつもシリアルナンバーがあるんだが・・・」
「シリアルナンバーあるんだ。凄いなぁ～・・・」

「桁がなんと5桁あるんだ」
「へ？」

桁が小さい程強いって事は、めちゃめちゃ弱い・・・？

「凄く強そうに見えるんですけども、このルーツ」
頭だけ、なんだけども。ひょっとしてこのルーツってパーツ足りてないんじゃないの？

「顔はな。あと、ハッチが開かなくてな。誰もこいつに乗れないんだ」

なんと。これは、ルーツを造った誰かが洒落で作った機体なんだろうか？　エクスカリバー的な、英雄しか扱えないとかそういう感じの。

「ふーん。で、この機体って何番なんですか？」

7が5つ並んでるとかだと、逆に凄く強そうなんだけどな。

「確か・・・そうそう、３７５６４番だ。中途半端な数字だろ？」

3万7千5百6十4・・・
えーっと・・・み、な、ご、ろ、し・・・？

え、ルーツ造ったのって日本人？　語呂合わせ的に「みなごろし」って思っちゃうんだけど・・・名前がデストロイヤーとかジェノサイダーとかだったら完璧。

「で、名前は「デストロイヤー」とか付いてるんだけど、顔以外は名前負けしてるよなこいつ」

おーーーーい。本当にデストロイヤーとかだよ。どうなってるんだろ？

「いや、ナンバーも「みなごろし」なんで、顔とナンバー以外ですね」

と、バンバンとルーツの足を叩いた。

ギィン！

キュゥウウウウウウウン・・・

う、動き出した？！

「おいおいおい、急にどうしやがった！？　今まで何をしても動かなかったこいつが」

あー、まさかシリアルナンバーの解読が起動の鍵になってるとか・・・？

だとすると、僕やばい？

ガシュゥウウウン。

そして、ハッチが開きルーツの手が僕に向かって伸びてきた。

語呂合わせ（後書き）

まだ乗れない。

念願の・・・？

乗ってしまいました。ガイアフレームの元になった機体ルーツ。

正直たまりません。外でハーベイさんが大丈夫かーとか、ハッチ開けろーとか騒いでいますが、動かして満足するまでは出たくない！

そして、もう1つ出たくない理由が・・・

「オイマスター、コノヤロウ。ナンデダマッテンダ？」

・・・ルーツって喋るんだ・・・

ミナゴロシなデストロイヤー君が動き出し、僕をひょいと掴んで、コックピットへと放り込んだ。正確かつすばやい動作でハーベイさんもどうする事もできなかった。

まぁ、僕も逃げようとか全く思ってなかったのも原因かもしれないけれど。

「えーっと、はじめまして？　で良いよね？　僕はコージ＝ヒロセ。君はなんて呼べば良い？　でっちゃん？　みーくん？」

「ドッチモヤダネ。ナンカイイナマエツケヤガレ」

「ホワイトファングとかは？」

「・・・ソレデイイ」

こいつってツンデレか・・・？　めんどくさそうな奴だなぁ・・・

「デ、マスターハドウスル？　サッソクミナゴロシカ？」
「しねえよ！　物騒な奴だなおい！」

こいつには常識というものが全くなさそうだ。いきなり皆殺しとか無茶を言う。

「ナンダヨ、チキンダナァ。トリアエズブソウダシテクレマスター」
「ぶそう？　武装ね。いや、そんなものどうやって出すのよ？」
「マスターガブキヲイメージスル。ドコニダスカイウ。ソレダケデドンドンデル」

えらく簡単に出せるんだなぁ、おい。でも、どんどん出すな。

「・・・ていうか武器なんか出して何する気なんだよ？」
「モチロン、ミナゴロ・・・」
「言わせねーよ！　もう物騒な奴だなぁ。とりあえずお前は落ち着くことを覚えろ」

「・・・？　オレトッテモオチツイテイル。ツネニクール。ギャグハブリザード」
「もう、誰だよこいつの教育をした奴は！？　何が狙いなの？　突っ込みしすぎでパイロット死んじゃうよ！」
「ノーノー、パイロットハサイゴニヤルネ」
「お前は一体どこまで本気なんだよ！？」

ちょっと母さんを思い出した。あの人といると常に突っ込み役になっちゃうんだよね。
こんな時こそ深呼吸。
すーはー。

「えーっと、つまりは僕が君のマスターになったって事で良いのかな？」
「アアソウダ。ソシテオレノマスターッテコトハ、ゼンセカイヲテキニマワストイウコトダ」
「お前は、本当に救いようのない馬鹿だな！」
いやほんと、深呼吸しても全く効果がない。
「と・に・か・く！　ホワイトファング！　おまえは大量虐殺や破壊の申し子みたいな真似は絶対駄目だ。あと誰であろうと殺すなんて事は絶対にしちゃ駄目だ。わかった？」
しっかりと駄目だしをする。誤解の無い様にしっかりと言い聞かせないと、わざと曲解したりする奴もいるからね。ＡＩがそんな事するかはわかんないけども。
「・・・ふむ」
表情なんてものは見えないので何を考えてるのか全くわからないが、納得してくれそうだ。
「破壊を司る我に不殺を命じるか、主よ」
「え、だれ？」
なんか、さっきとちがって綺麗な女性の声で流暢に話しかけてくるんだけども？
「主が名前を付けてくれたではないか。我はホワイトファングだ。まぁ、先ほどまでの我とはとんと違うでな。仕方ないか・・・ギャ

ップ萌えするか？」

「できないよ！」

何を言いやがるかっ！

「何はともあれ、よろしく頼む主よ」

「・・・よろしく」

こうして、ホワイトファングとの出会いは終わった。

ちなみにホワイトファングを買い取りたかったんだけども、腐ってもルーツなわけで５００プラチナ（５万ゴールド）もするらしい。量産型のガイアフレームが１０００ゴールドぐらいなので、ルーツってだけでかなり高額なのだ。５桁ナンバーなのでこれでも、だいぶ値引きしてあるそうだ。

いつか買いにきます！　とハーベイさんに言ってとりあえずお店から離れた。

ちなみに、ヒロコとセリナは試乗してるガイアフレームを見学しておりました。

念願の・・・？（後書き）

乗っただけで動かしてない。ガイアフレームに乗るのに免許いらんのかな？

油断

今日はヒロコもセリナも買い物して町を見て回って楽しみ、僕もガイアフレームを見ることができて非常に満足のいく1日でした。

なので、今後の換金をどうしようか？　と宿屋の食堂でみんなでお茶を飲みながら、テーブルに素材を広げていた。

この日、僕はガイアフレームを見ることが出来て浮かれていたんだと思う。この日のちょっとした油断で後々大変な事になるとは、この時は思ってもいなかった。

「んー、ホーババードってどれも高額で売れるけど、これってロバスとかの大きな町で売ったほうが、高くなるのかなぁ？」

人が多い所だと、金に糸目をつけない人とかいそうな気もするし。

「んー・・・そこらへんは、わたしにも分かりませんねぇ。ロバスなんて1年に1度行くか行かないかなんで、あまり詳しくは無いんです」

「当然、ボクはわかんないよー。あはは」

「じゃあ、キラースネークの肝とかを中心に売るほうが・・・」

「そこのがき共。何をしている？」

ほえ？　気付けばテーブルの傍になんか着飾ったお兄さんが居た。

だけど、なんか偉そうにしてていけ好かない感じだ。

「いえ、素材を売る相談をしているんです、貴族様」

何か見分けるコツがあるんだろうか？　セリナはそのいやーなお兄さんを貴族と呼んだ。

「ガキが一丁前に。ふん、丁度良い全部1ゴールドで買ってやる。おい」

と言うやいなや、取り巻きの人があっという間にテーブルの上にあった素材をかっさらい1ゴールドを投げてきた。

「って、そんな金で売るわけ無いだろ?!　かえ・・・」

「コージッ、駄目っ！」

正直、捨て値で売っても１００ゴールドは越す素材だ。だから、文句を言おうとしたのにセリナに強く止められてしまった。

「あ、何か文句あるのか？」

「いえ、何もありません貴族様」

あくまでも下手に出るセリナをじっと見る貴族。ふと、何かに気付いたようでセリナの顎を持ちまじまじと顔を見る。

「ふん・・・娘。中々の器量よしじゃないか。俺と・・・」

「素材は全部上げますから、お引取り願いますか、貴族様」

何かやばそうな事を言いそうな雰囲気だったので、言い切る前に言葉を重ねる。

なんか、すっごく嫌な奴だ。

「・・・っち、まぁいいか。よし、引き上げるぞお前達」

と取り巻き達にそう言い放ち、部屋に引き上げていく貴族。とりあえず引いてくれたようで良かった。

と、安心した瞬間。

「あ、そうそうお前達。明日も素材を持って来い。こづかいぐらいはくれてやる。いいな？」

・・・言わせておけばっ！

「・・・分かった」

悔しかったけど、セリナがふるふると首を振りながら僕を見るので、強くでれなかった。

貴族ってなんだ？　この世界の貴族はあんな奴ばかりなのか・・・？

高笑いしながら、ようやっと貴族が部屋に戻っていった後、セリナを見るとまだ脅えて震えていた。相当怖かったようだ。

「セリナ、大丈夫？」

「・・・はい、すみませんコージ・・・こんな事になってしまって」

「とりあえず、部屋に戻ろう。ここだと・・・まずい」

「はい、そうですね」

周りの同情するような視線をうけながら、僕たちは食堂を出て行った。

一旦、僕の部屋に集まって、落ち着く為にお茶を淹れてお茶菓子も出した。

「すみません、コージ。あの貴族に逆らうと本当に大変なんです。さっきの貴族はこの近くに土地を持っているエディン家の次男なんです。名前はヒューイといいます」

落ち着いたのか、セリナが淡々と説明してくれる。

「あの人はここら辺で有名で、何人も同じように脅されているんですが、貴族という事もあって町の自警団も手が出せず、逆らおうものなら兵が乗り込んできて報復するんで、みんな見て見ぬ振りをしているんです」

いわゆる鼻つまみ者って奴なのか。しかも暴力を背景にしているので、普通の人はされるがままに居るしかないみたいだ。一度、逆らった事があるみたいだけどガイアフレームまで持ち出し、逆らった人の家族をみせしめとして、奴隷にして売り払ったり、逆らう奴が居るのはこの町が悪いせいだといちゃもんをつけて、町から金をせしめたりした事もあったそうだ。いっそ清々しいほど悪い奴だなぁ・・・

「なんとかできないかなぁ・・・」

「コージ、気持ちは嬉しいんですけど、気にしないで下さい」

むむむ。なんとかするなら、根こそぎやっちゃわないと駄目だろうし、根こそぎやったらやったで、今度は国を相手にしないと駄目になるのか・・・

うーん。駄目ループをなんとかしたいなぁ。国王に直訴？　したらひょっとしたら大丈夫なのかなぁ？

そこら辺も考えて、今後の行動を決めないと駄目だね。

いつもは元気なヒロコも、貴族の負の気持ちをぶつけられたせいで、まったく元気が無い。

ヒロコって精霊っぽくないけど、こんな風に滅入っているのを見てしまうと、精霊ってつくづく精神にひきづられる生き物なんだなぁって思った。

今日はついていた。

いい加減、何か箔を付けろと親に言われてギルドのランクを上げるべく、魔物を手下に狩ってこさせていたのだがどうにも、ランクを上げる為の素材が集まらない。

そう、逃げ足が速くて有名なホーババードなんぞをランクアップ素材にしてやがるせいで、中々ランクを上げることができなかったのだ。

くそ、あのギルドめ捕まりにくいのを分かってて、規則を盾にそんな素材を指定してきやがった。いずれ、ぶっつぶしてやる・・・

最近は町の連中も、小賢しい知恵をつけたのか俺の前では目立つこ

とをせず、裏でこそこそと儲け話をしてやがるから、俺にうまい話が中々来ない。

それが、今日はよそ者のガキ共がたまたま持っていたホーババードの尾羽のおかげでランクアップの目処がたったので、ようやく家に帰れるので気分が良い。

明日も持って来いと言ってるので、きっと喜んで持ってくるだろう。そもそもガキが持ってて良いもんじゃないしな。俺が有効に活用してやらないとなぁ。

ガキといえば、あの娘は意外と良さそうだったな。また印持ちのガキにさらわせて来ようか・・・生意気なガキは痛い目に合わせれば言うことを聞くだろう。

あぁ、ガキが勝手に素材を店に売ったりしないように手を回しておくか。

くくく、あのガキ共がつぶれるまでは、この町で遊んでやるとするか。

ランクアップは確実だから家には、いつでも帰れるしな・・・

油断（後書き）

偉ぶってる人って嫌ですよね、うん。

コージ君はどうする気でしょうか。頭は回るみたいだけど、そのせいで
自縄自縛になってる気もします。

気にせずブットバセバイイノニ！

セリナの実力

ヒューイックの町に来て三日目の朝。
昨日は嫌なことがあったけど、気を取り直して今日は頑張るぞ！

食堂で朝食をとり、部屋に戻って狩りの準備をする。昨日無くなった分を取り戻す勢いで今日は、ちょっと遠くまで行く予定なのだ。
町の近くの獲物はまだ居なくなったままだろうし、あまり早く町に帰ってきても昨日の奴に鉢合わせしたりしたら、また嫌な目にあうにきまってるからだ。

「よっし、準備オッケ。セリナとヒロコを呼びに行こっと」

コンコン

「コージだけど、二人とも準備できた？」

「はーい、待ってねぇ～」

とセリナの返事と共に扉が開き、ヒロコが飛びついてきた。

「はーやく、いこ～！」
「オッケ！　今日はちょっと遠くに行くから、昼ごはんを買って行こう」
「うん！」

ふと、扉のほうを見るとセリナがなんだか飛びつきそうな顔をしていた。

「？　どしたのセリナ」
「な、なんでもないです。ちょっと遅れを取っただけです・・・」
残念そうな顔をして、こっちを見てるセリナ。ヒロコみたいに飛びつきたかったのかな？
いやいや、セリナは女の子だしそんな事はないか。
「ん？　まぁ、行こっ？」
「はいっ」
元気良く笑顔でこたえてくれるセリナは今日も可愛い。良かった、昨日の事は吹っ切れたみたいだ。やっぱりこうでなくっちゃね。
「おいガキ」
うくぁ、こんな時に・・・
「はい、なんですか？　貴族様」
笑顔笑顔。とりあえず、無茶を言われないように笑顔で乗り切ろう。
「今日もしっかり持ってこい。いいな」
と、僕の笑顔が効いたのか、そう言うだけ言って去っていった。せっかく良い気分で出発できそうだったのに、ついてない。とほほ。
「セリナ、行こ？」
貴族が怖いセリナは今のだけで、びくびくと脅えてしまっていたの

で、そっと手を繋いで引き寄せた。そして、背中をぽんぽんと叩いてあげる。

「大丈夫、セリナは僕が守るから。あんな奴の好きにはさせないからね？」

言い聞かせるように、目をしっかりと見てセリナを安心させるようにそうやって、しばらくしているとセリナも安心してくれたようで、そっと笑顔を見せてくれた。

とりあえず、出発だ！

こないだの狩場から、もっと森の奥。獣道がかろうじてあるような、そんな奥地へとやってきた。この場所は、エドの情報でもさすがにここらへんの穴場の情報はなかったので、自分達で獲物を探すことになった。

レッドベアにホーババードにキラースネーク。こいつらの素材を持っているので、昨日の内に作っておいたマジックアイテムにセットしてみる。

まずはレッドベアから探して見よう。

「んー・・・あっちのほうに反応があるねぇ。慎重に進もう」

「では、補助魔法をかけておきますね。“我が力に答え、その身を護りたまえ。ホーリーコート！”」

ふわんと、体の周りに魔力の膜が張られるのを感じた。防御魔法かぁ。

「セリナありがと、よし行こう！」
「はい」
「うん」

そろそろと慎重に、反応のある方向へ歩を進める。しばらく、そうやって進んでいくと前方にレッドベアの影が見えた。どうやら、パニモアと呼ばれる猪みたいな動物を食べている最中のようだった。

身振り手振りで、セリナとヒロコに伝える。すると、セリナが攻撃するというので僕は待機して見守ることにした。

杖を構え、とんとんと杖の頭を叩き、何か複雑な腕の動きをしたかと思うと、急に現れた火の玉がレッドベアめがけてすっ飛んでいく！

ボォッ！　グギャァアアアアア！

森の中で火の玉やめてぇえええええ！って一瞬心配したけど、火の玉はレッドベアを燃やしているだけで、ほかに燃え移る事がなかった。良く考えたらセリナって、森で長い間暮らしてたんだから、そこら辺は僕より分かってるよね。

「“其は戒め、我が敵を留めたらん！　ラシャラ！”」

何か紐状のものをレッドベアに投げつけながら呪文を唱えるセリナ。悶えてるレッドベアが目に見えて、動きが緩慢になった。

「“炎よ炎よ炎よ！　踊り来たりて舞しめせ！　バーンウォール！」

さらに連続で、今度は炎の壁を呼び出すセリナ。このままレッドベアに何もさせずに終わりそうな勢いだ。

だが、そこはレッドベア。驚異的な生命力で炎の壁をなんとか転がり出てきてセリナのほうに向かってきた。だが、その動きは非常に緩慢だ。

そしてセリナは、杖の頭をまたとんとんと叩き、今度はさっきとは違う身振りをした。

グガッ！？

レッドベアが急に小さくなった・・・？　と思ったけど良く見ると、レッドベアは落とし穴に下半身が埋まってしまったせいで小さくなったように見えただけだった。

「“炎よ炎よ炎よ！　我が前で踊りたまえ、バーンピラー！」

腰まで埋まってしまったレッドベアにまた炎が襲い掛かる。今度は先ほどの壁より小さめだけど、すごく濃い感じがする。・・・なんとなくだけども。

そしてそのままレッドベアは動かなくなった。

不意打ちとはいえ、セリナはレッドベアに何もさせずに勝ってしまった。魔術師ってやっぱり凄く強いんだなぁ。

「あ、すみません。これだと、毛皮が駄目になってしまいますね・・

・」
「あ」

そういえばそうだ。肝はなぜか、火に強いので大丈夫らしいけど毛皮は、駄目になっちゃったね、これは。けど、まぁいっか。

「いいよいいよ。でもセリナってやっぱり魔法の使い方が上手だねぇ」

「うふふ。そうですか？　そう言って頂けると今まで色々研究してきた甲斐がありますねぇ」

よくよく考えて見ると、ケイン兄さん達のパーティで苦戦していたはずのレッドベア。
それをたった一人で魔法で仕留めちゃうセリナってひょっとして物凄く強い・・・？

とりあえず、道具がちゃんと獲物を探す事ができるって分かったのでこの広い森でも、そんなに苦労しないで獲物を探す事ができるね。
まぁ、素材を持っていない獲物は探す事ができないんだけどもね。

「よーし、この調子でがんばろ～！」
「はい」
「おー！」

返事だけは元気なヒロコだった。君、空気だよ空気。

セリナの実力（後書き）

魔法でストレス発散・・・したっぽい。

はまると魔法って強いですよね。・・・はまると。

貴族の暗躍

狩りがひと段落ついて、今日は早めに帰途についた僕たち。
今回の狩りは前回の狩りと違い、新しい種類を探すことを優先した。
なにせ、一度でも高級素材を手に入れる事ができれば、次からは同じモンスターを探す事が格段に楽に成るからだ。おかげで、ホーングロウという一本角の鹿や、レインボウバードという見た目は地味なんだけどお肉がとても綺麗な鳥などの新しい高級食材を、手に入れることができた。

狩りは順調だったけど、心は晴れない。まぁ、あんな貴族に目を付けられたら誰でも憂鬱になるよね？

帰ってから、あの貴族に対してどう動くかを考えていた。

なんだかんだと強引に素材を持っていくので、素材のほとんどを指輪にしまっておき、指輪にも少し安全装置を仕込む事にした。まぁ、単純に本人しか出し入れできないのと、指輪をはずすのも本人か、本人が認めた人しか外す事ができないようにしただけである。

「うーん、あの貴族に取られる分を考えないとねぇ。ていうか、素材を横取りされるのも嫌だし、いっその事ロバス目指しちゃうってのも手だよね」
「そうですねぇ。このままヒューイックの町にいても、狙われそうですしそれも良いかもしれません」
「ボクは早く違う所に行きたいな。あの人ヤダ」

とりあえず、今回の素材をある程度換金したらロバスを目指すことにした。ロバスまで行くお金は充分にあるから、なんとかなるしロバスについてからまたお金儲けすればいい。
今はとにかく、貴族から離れてしまいたい。

そんなこんなで、町に戻ってきた僕たちはエリカさんの店に顔を出した。

「こんにちはエリカさん。また買い取って欲しいんだけど・・・？」

なんだか様子がおかしい。いつも愛想の良いエリカさんが僕たちが来た途端、暗い雰囲気になった。

「悪い。買い取りはできないんだ」

と、言葉少なに語るエリカさん。そしてセリナを見ながら何か紙を渡した。

「・・・はい、分かりました。お邪魔しましたエリカさん」

紙を渡されたセリナは一瞬はっとしたが、すぐに何もなかったようにそう言って、店の外に出て行った。

ちょいちょいと、セリナにひっぱられて店の外から裏の路地へ向かった。

「この分だと、今日はどこも買い取りはしてくれなさそうですコージ」
「ひょっとして・・・？」

と僕が言うと、こっくりとうなづくセリナ。

「はい、その想像で間違いないかと。わたしちょっと町を見てきますね」

「どうしたの？　何か気になることがあるの？」

「はい、少しひっかかる事があるんです。先に宿に戻って貰えますか？」

「うん、わかった。何かあったらすぐに連絡して？　すぐに行くから」

「はいっ、わかりましたコージ。では、さよなら」

すごい笑顔で答えてくれたセリナ。バイバイと手を振って町の中へと消えていった。

とりあえず、あの貴族に渡す分を鞄にいれて宿にもどるとしよう。

「ずいぶんと遅かったな、ガキ」

宿に帰るなりこれだよ。僕を待ってるなんて相当に暇なんだなこの貴族は。

「今日は獲物が中々少なくて、ぎりぎりまで粘ってたんですよ貴族様」

敬語とか良くわかんないけど、最後に貴族様といえば問題ない。指摘されたら田舎者だから言葉使いが分からないと言って誤魔化そう。

「まぁいい。はやく出せ」

本当に嫌な奴だなぁ。とりあえず、鞄から素材を取り出した・・・

んだけど、取り巻きに鞄を奪われ、がさがさと中身をテーブルの上にぶちまけられた。鞄をくまなく漁ってる所をみると、僕がちょろまかすと思ってるようだ。

まぁそれは間違いないんだけどもね。

「これで全部か。しけてやがるなぁ、おまえふざけてんのか？」

いやこれでも全部売ったら１００ゴールド近いんだけど何言ってんだ、こいつ？

「ぎりぎり頑張ってこれだけなんですよ。勘弁して貰えませんか？」

「ちっ、仕方ない奴め。まぁいい。だが、ちょろまかせると思うなよ？」

貴族は嫌な目で僕を見る。なんだろう、常に人を見下し蔑み自分以外の人間はどう扱っても良いと思ってるのが、ありありと分かる目だ。

「でも、このままだと僕も宿代が払えなくなってしまいます・・・」

とりあえず、少しは金を渡せよこんちくしょう。

「俺が知るか。宿代が無いなら外で寝てろ。おい、行くぞ」

と、ぞろぞろと取り巻きを連れて出て行った。うわ、鞄が踏まれてぼろぼろだ・・・

わがままな上にケチだなぁ、あの貴族。だけど、何かひっかかる。

はぁ・・・

ため息をつくと幸せが逃げるって分かってるけども、ため息をつかずにはおれなかった。

そして、その日。セリナが帰ってくる事がなかった。

貴族の暗躍（後書き）

わかりやすい。そして、話の斬り方はお約束？

次週につづく。

うそです。もうちょっと早いです。

本気出せ

“コージへ。
突然すみません、一緒に旅を続けられなくなってしまいました。わたし達が村を出た後、タタ村に魔石獣が出てきたらしく、村が大変な事になってるとエリカさんから教えて貰いました。お世話になっている皆を助けたいと思うので、一度村へ帰ります。短い間でしたけど、コージと旅ができて、とても楽しかったです。あなたの旅に幸あらん事を。

タタ村のあなたのセリナより“

夜遅くなっても、セリナが中々帰ってこないので携帯電話に連絡しようとした時、宿の人が僕に手紙を持ってきた。セリナが村へ帰るという内容が書かれていた。

なんだろう。

タタ村が大変な事になってると言うのを聞くと、僕も何かしたいと思う。だけど、セリナは僕に何も言わずに戻っていってしまった。セリナにはタタ村で2週間足らずとはいえ暮らしてきた僕を、村の仲間と認めて貰えなかったのだろうか？　タタ村が大変だったら僕も、心配するとは思わなかったんだろうか？

「はぁ・・・仲良くなれたと思ってたんだけどなぁ・・・」

ヒューイックの村に来てから、嫌なことが立て続けに起こるなぁ。やっぱり、この町は僕に合わないんだな、うん。明日の朝にはここを出てロバスを目指そう。

とりあえず、ヒロコにもセリナの件を伝え、明日の朝には町を出ることを伝えて早く寝る事にした。

枕がすこしばかり、湿っぽくなったのは内緒だ。

ふと気付くとまたあの世界。エドの世界に突っ立っていた。

「よぉ、コージ。やっと来たな」

「エド！　昨日も見なかったけど元気してた？」

2日会ってないだけだけど、なんだか凄く久しぶりに感じて嬉しくなる僕。こっちに来てから初めてできた男友達だからかな？

「おう、元気・・・と言いたい所だが、ちょっとな」

なんだか歯切れの悪いエド。何かあったのかな？

「すまん！　俺、おまえに謝らなくちゃ駄目なんだ！」

「え？　なに？」

いきなり凄い勢いで謝るエド。何かされたかな僕？

「セリナ」
「セリナが・・・どうしたの？」

エドの口からセリナの名前が出た瞬間、心臓がどくんと跳ねるのが分かった。

「貴族の命令で、セリナを攫った。拒否するならコージを痛めつけると脅されてセリナも仕方なく、貴族に捕まったんだ・・・」

はっと脳裏にひらめくものがあった。
エリカさんから紙を貰った瞬間、セリナは凄くびっくりしていなかったか？　町を見に行くといって僕達と別れる時「さよなら」と言ってなかったか？
それにセリナには携帯電話を渡しているのに、わざわざ手紙を渡してきた。手紙なんて手間の掛かる物をするより、携帯で連絡した方がはるかに手早く連絡できるのにも関わらずだ。

全部、あの貴族が絡んでたのなら納得だ。

「あの野郎・・・」
「おい、貴族の屋敷に向かうなら止めとけ！　ガイアフレームが１０機はいるんだぞ！？」

「そうか、ガイアフレームがあるのか・・・よし！」
「おい！　なんで逆にやる気出してんだよ？！　正気かコージ！」

すごく慌てるエド。僕を凄く心配してくれてるようだ。

「エド、聞いて。僕ね、貴族に会うまでは凄く楽しい事ばかりだっ

たんだ。セリナに会えたのもそうだし、エドとも仲良くなれた。ガイアフレームにも乗れたしね」

「・・・お、おう」

若干、顔を赤くするエド。照れてるんだね。

「だけど、あの貴族が出てきてから全部滅茶苦茶になった！　あいつはここらへんじゃ我が物顔で振舞って、誰も止める事ができないってのも分かってる。だけど！」

悔しい。悔しくて悔しくてたまらない。エドもあの貴族に逆らえずにセリナをさらったんだろう。だから夢の中に僕を呼んで、教えてくれたんだ。

「僕はもう我慢しない！　正直めちゃくちゃ怒ってる！　あいつを懲らしめてセリナを絶対に取り戻す！」

「お、おい・・・」

「勿論、エドも助ける！　僕の友達だから」

「い、いや俺は・・・」

「何か事情があるなら、今は何もしない。だけど、いつか必ず自由になれるように助ける！」

「・・・自由・・・」

「よし、そうと決まればすぐに起きて反撃だ！　エド、いつか事情をちゃんと話してよ？　じゃないと上手にできないからね」

「お、俺の事はとりあえず良いから、無茶するなよ？」

「分かった、行って来る！」

宿を飛び出し、急いで向かった先はハーベイさんのお店。
頼れるのはここしかない。

「夜分すみません、ハーベイさん！　昨日来たコージです、いませんか？」

ドンドンと、門を叩きハーベイさんを大声で呼ぶ。いまは形振り構っていられない。

「おいコージ、そんなに慌ててどうした？　こんな時間に来てもフレームには乗れんぞ？」

ゆったりとして出てきてくれたハーベイさんは僕の慌てた様子にびっくりした様子だった。
すぐに土下座をして、今まで狩って来た素材を全てハーベイさんの前に出す。

「ホワイトファング・・・いえ、デストロイヤーをこの素材で譲って欲しいんです。足りないのは分かってます。これはとりあえずの手付金として、残りは必ずお支払いします！
ですから、これでどうか譲って貰えないでしょうか！」

僕の出した素材では、ホワイトファングの値段にまったく足りない。
普通こんなお願いなど聞いてない貰えないだろう。だけど、ホワイトファングが居なければ太刀打ちできないのは分かりきっているので、こうするしか手が無かった。

「ふむ・・・」

何か考え込んでいるハーベイさん。お願い、僕を信じて下さい！
必死に祈っていると、ハーベイさんがおもむろに何かを書き出した。

「あー眠いのぉ。いやぁ全くもって眠くて仕方ないわい・・・おぉコージ、デストロイヤーなおまえさんが欲しいんじゃったなぁ・・・あれなぁもう売れてしまってのぉ」
「えぇ！？」

僕の唯一の手段が・・・
でも、落ち込んでる暇はない。こうしている間にもセリナは貴族の屋敷に・・・

「まぁ、待て待てコージよ」

脇目も振らず駆け出そうとする僕を引き止めるハーベイさん。

「何を隠そう、あれを買ったのはワシでなぁ。じゃが、知っての通りワシだとあれには乗れんじゃろ？　なんであれに乗ってくれる奴を探しとるんじゃ」
「え？」
「察しの悪い奴じゃのぉ。ほれ、あいつの倉庫の鍵じゃ。これにサインして持ってけ」

事態を飲み込めず、ぽかんとしてる僕に書類に名前をかかせて、鍵を渡して倉庫の方へと蹴りだすハーベイさん。痛さのおかげで目が覚めた。

「あ、ありがとうございます、ハーベイさん！　お金はきっと返します！」

「おーおー、はよいけ。わしゃ眠いんじゃ。とっとと行ってくれ」

ひらひら～と手を振ってお店に戻っていくハーベイさん。

去っていくハーベイさんの背中に向かって、感謝を込めてお辞儀をする。

ありがとうございます。このご恩は必ず！

「待っててね、セリナ！」

本気出せ（後書き）

突っ走る

巨獣　＞＞　魔石獣　に変更

カウンターアタック！

ガタゴトと揺れる馬車に乗って、わたしは貴族の屋敷に向かっている。
馬車の中には、わたしの他に用心棒と思われる男が二人、脇を固めて座っている。杖を取り上げたとしても、魔術師は油断できない相手だからだろう。
実際に、これぐらいの条件ならわたしでも逃げるのは容易い。

「コージ・・・」

あんな別れ方しかできなかったから、きっと恨んでるだろうなぁ。
コージが優しい事はわたしが一番知っている。タタ村が危ないって知れば彼はきっと黙って助けに来てくれるだろう。ましてやわたしが、貴族にさらわれたと知ったら・・・

携帯電話だと絶対に声に出てしまうから、連絡できなかった。貴族に関わったせいでコージが傷ついたり、ましてや死んだりしたら、わたしは自分が許せなくなる。

あーあー・・・初恋だったのになぁ。初恋は実らないっていうのは本当だったのねぇ・・・

涙が出そうになるのを、ぐっと堪える。こんな所で泣いていたら貴族は喜ぶだけだし、あんな人間に泣いてる所なんて見せたくない。
負けたくない。

とりとめとなく、そんな事を考えていると貴族の屋敷が窓の向こう

にぼんやりと見えてきた。もう、着いちゃったのか。

「ばいばい、コージ」

屋敷の門構えが、わたしには地獄への門にしか見えなかった。

ひさしぶりに屋敷に帰り、ほっとした気分になる。大勢の使用人という名の下僕。荒事のための兵士達。生意気な平民どもが増えてきたので仕方なく兵士を増やさざるを得なくなった。まったく。貴族が望めば望んだだけ、黙って差し出せば良いものを、最近は平民から成り上がった王の影響のせいか、簡単に差し出さない奴が増えてきた。

まぁ、今頃はその王もすげ替わってる頃だろうけどな。

だいたい貴族でもない奴が王になる事が間違いなんだ。貴族は貴族、平民は平民。流れる血が違うんだから、分不相応な事をすれば天罰があたるに決まっている。勿論、貴族には天罰など当たらず、祝福のみ授かる。

さてさて、今日はひさしぶりにさらってきた小娘を楽しむとするか。最近は、小賢しい奴が増えたおかげで、そういった楽しみも少なかったからな。生娘はひさしぶりだ。

さて、どうやら娘も着いたようだ。

屋敷の大きな門が、静かに開いていく。ガイアフレームを屋敷に入れるだけあってかなり大きな門で、かなり重いはずだがどういう仕組みか、軋みの音ひとつ立てずに開いていく。
大方、金にあかせて強化しまくっているんだろう。こんな所に無駄に金を使ってないでもう少しマシな使い方をしろと言いたい。

馬車が2台、慌てる様子も無く静かに入ってくる。人をさらっておいてこの堂々とした態度。人をさらう事に慣れきっている。まぁ、この屋敷に勤めてる時点で俺も人の事を非難できる立場ではないがな。

今度もまた若い娘が数人連れられてきたようで、誰も彼も諦めきった様子だ。

最近は静かだったのだが、次男のヒューイが帰ってきた途端これだ。あの駄目坊ちゃんは領主から箔をつけろとギルドのランクアップをする為に家を出ていたはずなんだが、まさかランクアップしたんだろうか。ホーバードを捕まえられる人間など限られているはずなのに、どんな魔法を使ったんだか・・・　まぁ、ろくな事をしてはいないだろうな。

ん？　誰か門に近づいてきた。こんな時間に何の用だ・・・？

「変身！！！」

近づいてきた不審な人物がそう叫ぶと、まぶしい光が溢れだし光が収まると、そこには全身を赤い鎧のような物を纏った異形がそこに居た。

「天誅！」

というや否や、何か鉄の棒のような物を取り出し魔法を浴びせてきた。

ババババッババババリィイイ！

鉄の棒を振り回すたびに、雷系統の魔法があたりを打ち抜く。最初に赤鎧を誰何しようとした門番たちがまっさきにやられ、馬車の御者達も巻き込まれた。

魔法が止まるや否や、すでに臨戦態勢になっていた衛兵達が斬りかかっていった。

ギィン！　ドンッ！　ギギィン！　ババババリィ！

鉄の棒は杖かと思ったが、もう一本は剣だったようで斬りかかっていった兵の剣を受け止め、すかさず蹴り倒した。そして何か呟いたかと思うと、さらに襲ってきた兵達の剣を受け止め、今度は雷の魔法を打ち込み兵達を無力化する赤鎧。一連の動作を流れるように行い、そこに焦りは全く見えなかった。

強い。これは援軍を呼ばないとここを突破されるのも時間の問題だろう。

と俺と同じように思った奴が先に居たのか、ガイアフレームが数機集まってきた。さすがにこれでもう赤鎧も捕まるだろう。

スッ

と赤鎧が手を挙げたかと思うと、何かがガイアフレーム目掛けて飛

んできた。

バッバババッ！

飛んできたそれは全て命中し、ガイアフレームの周りが激しく明滅する光で溢れている。光が収まると、そこにはどこも損傷していないガイアフレームの姿があった。・・・なんだ？見掛け倒しの攻撃なのか？

うお！？　何もダメージを受けてないように見えたガイアフレームだが、よろよろとしていて動きがおかしい。今もこちらに倒れてきそうだった。

ふと気付くと赤鎧は、いつの間にか出てきた白いガイアフレームに乗り込んでいた。

ゴテゴテと武装がついた四肢に、凶悪な頭部。沈み込んでいる足元を見るに、かなりの重量と攻撃力を見た目から連想させる、非常に危険なガイアフレームだ。

そのガイアフレームがこちらをギョロっと見た、その瞬間、狙っていたのだろう。白いガイアフレームの横手から青フレームが剣を構え突撃していく。

ガキィィイイン！

鉄と鉄がぶち当たる音が響き渡る。胴体部分を貫いたかに見えた剣は見事にかわされ、逆に白フレームの肘が、青フレームの胸部を打ち付け倒していた。ものの見事にカウンターを食らった形だ。最小限の動きで、不意打ちをあそこまで見事に返り討ちにするとは、一

体どれほどの使い手なんだろうか・・・？

「逃げる者は追わない、ただし向かってきた奴には容赦しない」

白フレームから、そう聞こえてきた若い男の声は戦場に凛と響いた。

カウンターアタック！（後書き）

次はコージ君からの視点

本当のお話

僕はホワイトファングに乗り込み事情を説明した。そして、戦闘に備えて寂しい武装を追加しセリナを追った。武装を追加したのは、シリアルナンバーを隠す意味合いと元々の形を分かりにくくする為もある。

そして、件の貴族の屋敷の場所はすでに把握している。エドがわかりやすく説明してくれていたのだ。

「して主、事情を聞くに今回はさすがに殲滅するであろう？　我はそういった事にうってつけであるからして、運が良いな主」

ころころと楽しそうな声でそう切り出すホワイトファング。だけど、その期待には応えられないね。

「いや、ホワイトファングには残念だけど誰一人として殺しちゃ駄目だ」

「ん？　だが我は手加減なぞせぬぞ？　どうするつもりじゃ？」

怪訝そうに返事するホワイトファング。

「とりあえず、屋敷へ行ってくれる？　その間に仕掛けをするから」

「了解じゃ」

ホワイトファングに追加した武装はミサイル。だけど弾頭は特殊な物を用意した。

対ガイアフレームというべき弾頭で、目標にあたる寸前に特殊な粒子を撒き散らしガイアフレームに付着させる。付着した粒子はガイ

アフレームの操縦系統を狂わせる効果があり、しばらくはまともな操作ができなくなる。

まぁ、操縦を狂わせると言っても前に進もうとすれば後ろに行ったり、右手を挙げようとすると左足が挙がる。といった具合の効果だ。よくしていたロボットゲームで、そういう効果のある攻撃を受けて四苦八苦した覚えがあるからだ。そういった攻撃が来ると分かっていれば対処できるかもしれないけれど、初見ではまずしばらくはまともに動けない。しかもちょっと改良を加えてあるので、まぁ行動不能になると思う。

あとは操縦術式の書き込みだ。

ガイアフレームにはさまざまなボタンがあり、そのボタンを使用する事で操縦する事もできる。前進、後進、ジャンプ、ダッシュ、スライド割り当てボタン、大攻撃、中攻撃、小攻撃、遠距離攻撃、ターゲッティング、近接攻撃、近接コンボコマンド、挑発ポーズ、など等。細かくなるので詳細は省くけど、ロボットゲームの感覚で操縦できるように色々と術式を加えていった。

やっている内に楽しくなってきたのは内緒だ。

「主よ、そろそろ屋敷に到着するが如何いたすか？」
「分かった、一旦ここで降りるから、合図したら肩のミサイルで攻撃して欲しいけど、いける？」
「それならば、容易いがこのまま突っ込まなくて良いのか？」
「うん、ちょっとストレス発散してくる！」

実は変身ヒーローのスーツも作ってあるので、それを試したいっていうのもある。スーツを着ておけば誰か分からないし、安全だ。し

かも目立つからインパクトが凄い。

ホワイトファングから降りて、屋敷へと向かう。とにかく馬車が着くより先に屋敷に入らないと。って、もう馬車が中に入って門が閉まりかけてる！

ダッシュで、門の中へ入り深呼吸。あ、しまった変身するの忘れてた。

「変身！！！」

びかっと、まぶしい光に包まれながら変身スーツを装着し、光が収まる頃には全身をスーツで覆っていた。えっと、何か決め台詞を言ったほうがいいのかな？　でも、身元がばれるとやばいし・・・ええい。

「天誅！」

思いつかなかったせいで、こんなことに。とりあえず「ノーミス」をぶっ放して、門番や屋敷の人間を大人しくさせよう。あ、たまには「月光」も左手に持っておこう。

ババババッババババリィイイ！

今日もモード「雷」で絶好調。馬車の御者も巻き込んでばっちり痺れさせた。あの馬車にはセリナが乗ってるはずなので屋敷の中に入れさせるもんか！

ふっと気を抜いた瞬間、衛兵がいっぱいこっちに来た。

うわぁあああ！　と無意識に「月光」で相手の剣を切り裂き、邪

魔だったので蹴り倒す。けり倒したと思ったら、次々に衛兵が！

「アクセル」

加速魔法をかけ、落ち着いて対処する。相手の剣を受ける。流してさらに受ける。面倒だから「ノーミス」でまとめてなぎ払う。時間がゆっくり流れるので実に簡単な作業だ。

「エンド」

そこで地面に振動が伝わってくる。ガイアフレームが出てきたな。

「ホワイトファング、ミサイル準備。・・・手を挙げたら撃って！」

タイミングを見計らって、ばっと手を挙げホワイトファングに合図をする。さすがはホワイトファング。全弾命中でガイアフレームたちは混乱に陥っている。その混乱に乗じてすかさずホワイトファングに乗り込み、状況を確認する。

「主よ、あのミサイルの弾頭は面白いな。くくく、あの無様な姿・・・」

ホワイトファングも大喜びだ。

とりあえず、屋敷にあの貴族がいるに違いない。散々好き勝手してくれたんだ、ちょっときっついお仕置きしないとね！

こんな時こそ、腰に手をあて相手を小ばかにする挑発ポーズだ。

ガキィィイイン！

ぇえええええええええええ！？　びっくりしたぁ！　急に横合いから青いガイアフレームが出てきたかと思ったら勝手に自滅していった。ていうか、普通こういう場合、接近警報とか鳴るんじゃないの？

「ねぇ、ホワイトファング。今倒れてる青いフレームが近づいてるって知ってた？」

「あぁ、当然であろ？　主も気付いてたから、うまくあしらったんでは無いのかえ？」

「いや、分かんなかったけどタマタマあーなったんだ、次からはしっかり教えてくれない？」

「・・・承知」

あ、ホワイトファングがちょっと呆れてるかもしれない。

周りを見ると、青いフレームを倒したせいか他のフレームは遠巻きにこちらを伺うばかりで近づいて来ない。実力を知らないから勝手に怖がってくれてるようだ。よし。

「逃げる者は追わない、ただし向かってきた奴には容赦しない」

ここは強気で行こう。セリナみたいな子を二度とさらったりできないように徹底的に。

本当のお話（後書き）

事実なんてそんなもの。

コージ君、運は相当良い物をお持ちのようです。

対峙

「なんなんだ、あれはっ！　誰か説明しろ！」

急に襲撃してきた白いガイアフレーム。貴族の屋敷に攻撃をしてくるなぞ、いかれてるに違いない。神をも恐れぬ所業だ。

「ヒューイ様、こちらへ。万が一があっては旦那様に申し開きできません」

「うるさい！　そんな事よりさっさとあいつをなんとかしろ！」

「えぇ、ヒューイ様が避難して頂いてから、手早く処理させて頂きますので」

くっ。こいつは親父付きの執事だけあって、すぐにああいえばこう言う。しかし、ここから逃げなければ、あの白いのに襲われるかもしれない。

「よし、早く安全な所に連れて行け」

「はっ、かしこまりました。ノイ、サラン！」

二人の護衛を呼びつけ、屋敷の中を移動していく。その間にも白い奴は暴れているようで時々、フレーム同士がぶつかり合うような音がここまで響いてきていた。

ちっ、イライラする。いったいどこのどいつだ。全く。せっかくのお楽しみが台無しだ。

はー・・・まぁいい。落ち着いたらまたかっさらってくれば良いだけの話だ。

ズガァァアン！　ズズゥウゥウン・・・

音がだいぶ近くなってきやがった。大丈夫なのか、おい。

「おい、本当に大丈夫なんだろうな？」

「はい、大丈夫です。ですが、急ぎましょう」

いざという時の脱出口へと急ぐ。だが、あと少しというところでガイアフレームの手が行く手を阻んだ。壁を壊し通路もぼろぼろにし、こちらを静かに見下ろしている。

「失礼します」

文句を言おうとした刹那、口うるさい執事が俺を掴み脱出口へと押し込んだ。あとは1人でここを出て行くだけだ。

「よぉ、がんばったな。おまえの事は親父に言っといてやるよ！達者でな」

とサービスで声をかけてやり、すばやく屋敷から脱出した。これであの口うるさい執事は死んだな。結構けっこう。ついてないと思ったが、あいつが居なくなるなら万々歳だ。

人に当たらないように気をつけながら、屋敷を壊してやっとあの貴族を見つけた。

せっかく追い詰めたと思ったのに、あいつは一緒に居た人達を見捨てて自分だけ、さっさと逃げてしまったのだ。二度と悪さできない

ように、お仕置きしようと思ったのに・・・

その後、セリナを連れて屋敷を出ようとしたんだけど、貴族の屋敷というだけあって、屋敷を護るかなりの人間が向かってきたのだ。ガイアフレームだけではなく、魔術師も数名抱えていた。ガイアフレームに対しては反転弾（操作不能にする弾の事）を撃ち込んで、四肢を破壊する事で無力化できたんだけど、人の身でガイアフレームに挑んでくる魔術師達に苦戦した。まさか、魔術師がガイアフレームに挑んでくるとは思わなかったので、まったく対抗策が無かったのだ。

結局、ホワイトファングから降りて魔術師を倒すしかなかった。

抵抗する人達が大人しくなった所で、馬車に乗ってる人を解放する。2台も馬車があるということは、セリナのほかにも攫われた人が居るんだろう。念のため、スーツは着たままで馬車の中を改める。

「扉開けますよ？」

声をかけて馬車の扉を開ける。中には、セリナと同じ年頃の女の子が3人呆然として座っていた。僕の姿をみると少しおびえたように馬車の隅っこにうずくまった。

「何もしないから大丈夫。貴族に攫われた人を助けたいだけだから、安心して？」

「は、はい」

ツインテールの女の子が、泣きそうになりながら返事をしてくれた。

「とりあえず、もう一台の馬車も見てくるから少し待っててね」

「はい、分かりました」

ツインテールの子の返事を聞き、もう1つの馬車に向かう。こっちにセリナが居ないって事は、向こうに居るんだろう。さっと行ってセリナを助けよう。気が焦っていたせいか、馬車に声を掛けることなく、扉を開けた。

瞬間、中から僕の胸に手が伸びてきた。

「“炎よ！　我が手より出でよ！　フレイム！”」

伸びてきた手は、トンと僕の胸を叩き、手の平から炎の奔流が迸る！

「っくぅわっ！？」

いきなりの事で何も反応できずに吹き飛ばされる僕。くそ！　まだ魔術師が居たのか！
って、セリナじゃないか！！！

「ちょっ、まっ・・・」

敵意が無いのを示す為に両手を挙げる！
それを何か勘違いしたのか、戦闘態勢を解かずに更にこちらに魔法を放とうとするセリナ。

「“其は戒め、我が敵を留めたらん！　ラシャラ！”」

これは拘束魔法だっけか？　紐を避けないとこれはまずい！

「アクセル！」

加速魔法を唱え、紐を避ける。避けたは良いけどこの状況を打破するにはどうすれば・・・
スーツを脱がずにセリナに僕って分かって貰うにはどうすれば良いだろう？　あ、そっか！

「エンド！　ボールライト！」

「！？」

球魔法を出した途端、セリナが目に見えて驚いていた。

「えっと、助けにきましたよ？」

ちょっと間抜けな感じがするけど、贅沢言ってられないよね。ていうか、セリナには後でお説教しなきゃ駄目だね。１人で犠牲になろうとして、みんなに心配かけたし。

「・・・はい」

事情を察してくれたのか、僕の名前を呼ばずに返事をしてくれたセリナ。少し顔が赤い
セリナを助けるという目的は果たしたから、さっさとこの嫌な屋敷からは出て行くとしよう。

セリナを助け出した後、馬車を奪って屋敷から逃走。屋敷に居た人間には、大掛かりな陣を用いて、僕たちの記憶をあいまいにする魔法を唱えた。陣自体も隠蔽してあるので、見つかる事は無いと思うけど、僕たちの事を覚えてるかどうかの確認はできないので少しだけ不安だ。漫画ではうまくいってたから大丈夫、と信じよう。

攫われた女の子は、馬車で家まで送って上げた。でも1人だけ、ミミという名のツインテールの女の子は帰る家が無いという事で僕たちと一緒に行きたいと言った。

「とは言ってもなぁ・・・」

この子、凄く体が弱そうだし旅に着いて来れるのかなぁ？　そもそも、未だに赤いスーツを来て素性の良く分からない僕に着いて来ようと言うのが良く分からない。

「そこの女の子は一緒に着いて行くんですよね？　じゃあついでにミミも連れて行って欲しいです」

「うーん、でも僕たちも目的があって旅をしているんだけど、危ない事の方が多いんだよ？」

見た目より幼く感じる口調なので、小学生ぐらいの子をあやす感じになってしまう。

「これでも魔法が使えるんだよ。だから大丈夫なの」

「いや、そうは言われても・・・　えっと、それじゃあ魔法を見せ

てみて？」

この世界で出会う女の子は魔法を使う率が高いなぁ。

「え？」

なんでかびっくりした表情の女の子。え、なんで？

「どうしたの？」

「いや、女の子の言う事を疑うんですかぁ？」

と、上目遣いでこっちを見る。いや、使えるって言ったから見たいだけなんだけど・・・

「いや、疑うとかじゃなくて魔法使う所が見たいなーって・・・」

「ほら！　ミミが魔法使えないって思ったから、そんな事言うんだよね？」

「いや、見ない事には使えるか分からないでしょ？」

「使えるって言ってるんだから、使えるって事でいいじゃないですかぁ」

あー・・・本当は使えないんだな、この子。でも、そこまでして魔法が使えるってアピールするのはセリナが魔法を使っている所を見たんだろうなぁ。だから、魔法が使えたら連れて行って貰えると考えた・・・って事かな？

ちょっと可愛いからって、なんでも許されると思ったら・・・その通りだ！

でも、どうしようかなぁ。うーん、深呼吸して落ち着こう。

すーはー。

僕が突然、深呼吸し始めるのを見て怪訝そうな顔をするミミ。あ、顔が見えないから深呼吸してるのが分からないから、変な動きに見えるせいか。

「んー・・・分かったよ、そういう事にしておこう。二人とも良いよね？」

一応、セリナとヒロコにも確認する。黙って頷いてくれてるからオッケーだ。

「じゃあ！」

「でも！　お兄さんの言う事はちゃんと聞く事。良いね？」

あ、年聞いてなかったけど、まぁいいや。僕より年下だよね、この子。

「ありがとう、お兄さん。ミミはミミだよ、ミミ＝テ・・・えーっと、テト村のミミです」

いま、明らかに何か違う名前を言おうとしたよね、この子。何か隠してそうだね。まぁ、自己紹介してくれたから、僕もしなきゃ駄目だね。スーツが邪魔だから変身を解く。

「どうも初めまして。コージ＝ヒロセです。よろしくねミミちゃん」

「ミミはこれでも１８なのです。子供扱いは駄目です」

セリナより年上・・・？　思わずセリナを見たけど他意は無い。つい見比べたとかも無い。

無いったら無い。

「えっと、わたしはセリナです。タタ村のセリナです。よろしくお願いします。ちなみに17歳です」

「えっと、ボクはヒロコだよ。よろしくね」

ヒロコは生まれたて・・・になるのかな？　あとでヒロコの年齢は僕と同じ16歳にしておこうと言っておこう。

「んー、セリナ」

「はい・・・」

僕の声は大きくなかったけど、セリナはびくっと反応した。名前を呼んだだけだけど、そこに込められた気持ちを感じ取ったんだろう。

「お説教だよ、いいね？」

「・・・はい」

その後は、セリナをとても心配したこと、危うくセリナが酷い目に会うのを知らずに別れる所だったこと、手紙の内容が悔しかった事、もうとにかく二度とこんな事をしないように、何かあれば絶対相談して貰うように、くどくどと説教した。

でも、僕は怒りすぎてセリナを泣かせてしまい、ヒロコに怒られた。その様子をミミはぽかーんと見ていた。こっち見んな。

そして、ちょっと残念なお知らせ。

せっかく仲間になったホワイトファングだけど、一度別れることにした。それというのも、ホワイトファングは長い間誰にも動かして貰えなかったおかげで、機体の燃料とも言える魔力が随分と減っていて、今のままだと実力の５％程しか出せないらしい。一時的に僕の魔力で補ってもだ。

魔力をてっとりばやく補給する為に、ホワイトファングが知っている秘密の場所へと行くらしい。数ヶ月から下手すると年単位で補給が必要で、補給している間は動かない方が良いらしい。僕がピンチの時は呼べば飛んできてくれるそうだけど、本当によっぽどの時でないと来てくれないらしい。この破廉恥ハーレム野郎め！　とかなんか怒ってた。

そして、みんなにホワイトファングを手に入れたおかげで、物凄い借金が出来た事を伝えた。セリナとミミの顔が蒼白になっていた。ヒロコはどうでも良いって顔だった。
でも、ハーベイさんに少しずつでもちゃんと返してかないとね。

「と、まぁこんな事になってしまった訳だけど、どうする？　今なら引き返しても大丈夫だよ？」

僕すごい借金持ちだからね。一緒に居ると苦労しそうだよー。

「いえいえ、わたしはむしろ死ぬまで一緒に居ないと駄目ですね。うん、わたしのせいで借金できちゃったみたいなものですから～」

足りない分は身体で返します、きゃっ♪　とか、なんか小声で言っ

てるセリナ。

「ミミはどうせ1人だったもん。1人でいるより、みんなが居る方が寂しくないから離れたくない」

「～♪」

ヒロコは本当に何も考えてない。すっごい能天気な顔でずーっとこっちを見てる。

「よし、それじゃあロバスに向かって行くとしよっか」

そしてロバス目指して僕達は、旅を再開するのであった。

コージが最初に気付いた森の中。若い女が二人、辺りを警戒しながら歩いていた。

「ここ・・・ですかね」

「そうですか、間違いないですか？」

青い髪の女と、仮面をした女がそんな会話を交わしている。

「絶対とは言えません。印の気配がかなり薄くなっていますし。でも、ほぼ間違いなくこの木の辺りで休んでいたようです」

「・・・そうですか。ご苦労」

目元を覆う仮面を押さえながら、暗い情熱を抑えるように応える。

「さぁ、ゆっくりでも良いです。確実に追い詰めて捕まえますよ」
「はい、エリス様」
そんな二人を見て森がざわめいていた。

破廉恥野郎！（後書き）

男の子も増えないかなぁ・・・
やっぱりライバルって要りますよねぇ

ロバスへの旅路

借金まみれになり、ホワイトファングには逃げられ、扶養家族？が増えて凄く大変な事情になってしまった僕。だけど、可愛い女の子達に囲まれてるこの状況はある意味ハーレムと言えるので、それが救いといえば救いだ。

なんて最初は思っておりました！

ろくな準備もできないまま、ヒューイックの町を出てきたので自給自足をしながらロバスを目指しているのだけど、足りない物が多いので問題だらけなのである。ミミに僕の能力については秘密にしているので、何をするにも偶然を装って色々な物を手に入れる必要があるのだ。

森の中に、ちょうど食べ頃の獲物（うさぎみたいな鳥みたいなはっきりしないけど、おいしいお肉の動物）がいて、セリナがすかさず捌いてるとか、岩塩が何故か野営地の傍ににょっきと顔を出して居たりとか、前日は雨だったはずなのに、乾いた枯れ木が何本も見つかるとかとかとか！

ミミも最初の内は、純粋に喜んでいたんだけど何度もそういった事態が続くと、怪訝な顔をするようになり、だんだんと僕やセリナを（ヒロコを疑う事はなかった）疑うようになり、終いには僕から離れずつきっきりになり、それがセリナを怒らせる事になり今やトイレや寝る時以外は常に、みんな一緒に行動するはめとなった。

正直、魔力でなんでも造りだせる僕の能力は規格外すぎて、簡単に使っちゃ駄目だなーって思う。ましてや、ひけらかすのは絶対駄目

だ。だけど、一緒に旅をする仲間に隠し事をするのもどうなの？
というジレンマに今陥っている。

そして今、ミミにじーっと見られながら僕は夕食を準備している。
卵と鶏肉（つぼいものれまたつぼいもの）が手に入ったので、ヒューイックの町で偶然手に入れたお米を使って、オムライスでも作ろうと思う。タマネギに似た野菜を切って炒めて、塩と胡椒で味付け。鶏がらを煮込んでガラを取り出し、その出汁でご飯を炊く。そしてお肉を1口大に切ってさっきのタマネギと炒めて更に塩を追加し味を調える。ご飯が炊けたら、混ぜ混ぜしておき冷ましておく。あとはふんわり卵を焼いて、ごはんを包んで出来上がり。ケチャップがないのでデミグラスソースっぽい物で代用した。

なんでご飯を作れるかって？　母子二人だったお陰で家事スキルがぐーんと伸びたせいだ。
思い出せば、家の事は大半ができるようになったけど、ほとんど友達と遊ぶということを
しなかったせいで、僕は友達が少ない。・・・少なかったなぁ・・・

「どうしたの、コージ？　心配しなくてもご飯おいしいよ？」

ご飯を食べながら、急に遠い目をした僕を心配してか、ミミがオムライスをほおばりながらそう慰めてくれた。ミミは人一倍、負の感情に敏感だ。

「それは良かった。ひさしぶりだったから上手にできたか心配だったんだ」

ご飯の生活が懐かしいよ。あー焼き魚と海苔が食べたい。

「初めて食べるけど、こんなおいしい料理を作れるコージって凄いねぇ。ミミ感動！」
「美味しくて泣けてきますけどね・・・」

わたしなんかより・・・とか呟いてるセリナ。ヒロコはなんか勝手に調味料を足して味を自分好みに変えて食べてる。前は黙って食べてたのに、進化してるなぁ・・・

「自炊してた時間が長かったしねぇ。まぁ、食事は美味しく食べれたほうが良いしね～」

と、僕もモグモグ。うん、ちょっとケチャップの味が恋しくなるけど、これはこれでアリの味付けだね。とりあえず、ミミには安心して貰えてるみたいだ。

夕飯も終わり、後片付けをして寝る準備をはじめた。うーん、たまにはお風呂にゆっくり浸かって身体をほぐしたいなぁ・・・でも、ミミがいるしどうしようかなぁ・・・？
こっちの世界はシャワーみたいな水を浴びる為の設備は大体あるんだけど、湯船がまったく無かった。タタ村に居た頃は、近くの川の水を温めて入っていたから問題なかったんだけど旅の途中ともなると、中々上手くできない。

この近所には川が無かったので、食事を作るのも、食器を洗ったのも水魔法で出した水を使ったのだ。うーん・・・何か水を貯められる物があったら良いんだけど・・・

「さっきからうんうん唸って、どうしたんですコージ？」

いつもの服装から、厚手のゆったりとしたワンピースみたいな服に

着替え、髪の毛を下ろしたセリナがそう尋ねてきた。

「えっとね、お風呂ってかお湯に浸かりたいなぁって考えてたんだよ」

でも、お湯をたくさん貯められる物が無いからねぇと呟く。

「寝袋では駄目なんですか？」

「・・・なるほど、できない事はないね、それ！　ありがとセリナ」

「いえいえ」

寝袋は綿が入ってるので、最初から候補外だったよ。とはいえ、そのまま使っちゃうと水が漏れてしまうので、内側にビニールの膜を貼っておかないと駄目だね。チャックの内側に取り外しできるような細工をイメージして魔力で創造する。

うぉっと・・・寝袋の内側だと見えないから創ってもミミにばれない・・・よね？

「お風呂に入ってくるから向こうに行くね！　覗いちゃ駄目・・・でもないか、うん」

野郎の裸なんて、好きこのんで覗いたりしないよね。とことこーっと、セリナ達から離れて、鼻歌まじりに寝袋に水を貯め、フレームの魔法ですこしずつお湯にして、裸になろうと寝袋から手を離した瞬間。

ダバーッ・・・

あー・・・支えがないとそりゃあ流れちゃうよねぇ。地面に穴を掘

ってそこに埋める形にすればいっか。よし。

今度は地面に穴を掘り、そこに寝袋を置く。先ほどと同じように水を貯めお湯にして手を放した。よし、大丈夫だ。やっとお風呂だ！

「あー・・・やっぱ気持ちいいなぁ・・・」

頭にタオルを載せながら、ある意味露天風呂を満喫している僕。おっさんくさいかもしれないけど、気持ち良いものは気持ちが良いのだ。

「やっぱり、星座とか違う感じだよなぁ・・・」

当然というか、やっぱりというか。星はきらきら瞬いているけど並びは全く違う。オリオン座なんか当然ないし、星の光り方もかなり違う。徐々に消えていくとかどういう理屈なのかさっぱり分かんないし。それでも、星の光は見てて癒されるものであり気持ちも晴れてくるものなのだ。

ふわっと時おり吹く風は、火照った身体に気持ちよく、やっぱり露天風呂はいいなぁと思う。そして考えてしまうのは向こうの世界と、似ているけどやっぱり違うこっちの世界の事。

何故僕はこっちに来たのか？　母さんは無事なのか？　向こうの世界には帰る事ができないのか？　疑問は色々と尽きない。

そして、こっちの世界に来たきっかけはきっと、あのメッセージ。

“もうすぐ会える”

会えるとメッセージを残すという事は、僕を特定しているはず。だけど、こっちの世界に来てから、僕を知っている人間に会った事は無い。ヒロコは精霊だから違うと思うし。

「一体、誰なんだろう・・・」

肉親以外の人間と関わる事が希薄だった僕は、あまり向こうの世界に未練はない。小学生の頃に行方不明になった父さんはともかく、母さんは確実にこっちに来てるだろうからやっぱりどこかで安心している。幼馴染の寛子が居ればもっと良かったんだろうけど。

ヒロコの名前の元になった幼馴染の寛子。久世寛子（くぜひろこ）。

「今頃、勉強してるんだろうなぁ・・・」

いつも僕は彼女に怒られていたので、僕が居なくなれば彼女も怒らなくて済むだろう。

でも、忘れられてたら寂しいなぁ・・・

そんなコージを月だけが優しく見守っていた。

あこがれのロバス

機甲都市ロバス

頻繁に現れる魔石獣を前に、必要に迫られて開発されたガイアフレーム。その最先端の技術を生み出す都市ロバス。常に魔石獣の脅威にさらされる事により、皮肉にも技術の革新が他の都市よりも数段上を行くようになり、フレームといえばロバスと言われるまでとなった。

ロバスは大変奇妙な形をしている。特徴的なのは都市の中心部に聳え立つ巨大な塔。その塔を中心に十字方向に広い、道と言うには余りにも広い通路があり、そのおかげで都市は４つのブロックに分かれているのだ。そして、分かれているブロックの外周部は魔石獣の襲撃を食い止める為にぐるりと、巨大な壁で囲われている。

巨大な塔の周辺は木も草も無く、見渡す限りの大地となっている。それもそのはず、その塔には常に魔石獣が寄り付き、荒れ狂い、そして朽ちていく場所だからだ。

今も目を凝らせば、塔の中から次々とフレームが出撃し、魔石獣に立ち向かう光景が見える。

魔石獣の数は１０前後であろうか。それぞれ異なる種類の魔石獣が塔へと向かっている。あるものは、空から。ある物は陸から、そして地中からも塔へと進む。その様は誘蛾灯に惹かれる蛾の群れとなんら変わりない。

そう今やロバスは、わざと魔石獣を呼び寄せフレーム製作の試験と

魔石獣狩りを兼ねる程までに強大になっているのだ。良いフレームがある所には、良いライダーが集まる。優秀なライダー達は、効率的な魔石獣の狩り方を知っていて、多少のハンデも物ともしない。そしてライダーによっては単機で魔石獣を倒す事もしばしば見かけられるのだ。

確かに魔石獣は脅威だ。塔が造られる以前は、群れで襲ってくる魔石獣が頻繁に都市に多大な被害を負わせていた。そして、魔石獣の習性を研究した結果、群れを作らせない様に魔石獣を誘き寄せる人の耳には聞こえない音を出す塔を造り、そこへ常に誘き寄せる事で、少しずつ魔石獣の数を間引き、魔石獣の脅威をコントロールしている。

魔石獣の被害から身を護り駆逐する為の技術が都市を発展させた。それが今、その技術は魔石獣の存在無しでは立ち行かぬ程までに魔石獣に依存していた。

そして、ロバスは今日も日夜休むことなくフレームを生み出し続けていた。

広葉樹が青々と生い茂る森の中。次第に木が少なくなっていき、見晴らしが良くなってくると、巨大な壁が遠くからでもはっきり見えてきた。

ヒューイックから旅をする事、おおよそ半月。ようやく、ロバスの外壁が見えてきたのだ。

「おー、やっとロバスかな？　ロバスだよね！　あの壁って！」

ガイアフレームの聖地ともいえる都市ロバス。都市を魔石獣と呼ばれる超巨大生物から護る為に造られたと言われる巨大な外壁。人の手で造っていれば１０年以上はかかりそうな壁だが、ガイアフレームが作業をしているらしく相当な速さで外壁が造られたらしい。ていうか、ガイアフレームを建築作業に使用できる人間がたくさん居るっていう事の方が驚きだ。ブルドーザーとかクレーン車みたいな扱いだよねぇ。なんか生活に密着してる感じが、すごく萌える！

「ロバスは、４つのブロックに分かれているのですが地下に通路があるので、どこから入っても、大丈夫なようになっています。いま見えているのが南ブロックですね。真ん中からちょっと右寄りに見える白い所が人が入れる門になります」

セリナがそう説明してくれるのだが、とにかく外壁が大きすぎて、人が入れる門がまったく分からない。外壁が黒いので白く塗っているそこが、人専用の門というのが分かるけど、目印がなかったらきっと迷っていただろう。

とりあえず外壁が見えてきたので、光る浮き輪君はしまっておく。

ここまでの道中で、色々なモンスターを狩れたので素材は結構色々ある。換金する素材が豊富にあるので、借金はあるけどロバスで４人で生活する分には充分だ。

「とりあえず、ゆっくりできる宿を確保してから、どうするか考えよっか」

「ミミは、都市は怖いから宿から出たくないなぁ・・・」

ミミはニートみたいな事言ってるなぁ。

「わたしは、魔法の講義を受けておきたいですねぇ。ロバスにはガイアフレームと戦う時の魔法講座が唯一ある都市ですし」

そんな危険な講座があるんだ、ここは。だから貴族の屋敷でガイアフレームに向かってくる魔術師達がたくさん居たのか。道理で厄介だったわけだよ・・・

「ボクは、人が多すぎる所は苦手だなぁ、マスター・・・」

ヒロコは精霊だからか、自然の中で居る方が好きなようだ。でも、ヒューイックの町は結構楽しんでたよね？　あの町ぐらいの人口なら平気って事なのかな？

「まぁまぁ。セリナ以外はロバスに行った事無いんだよねぇ？　とりあえず、中に入ってから決めた方が良いと思うよ」

意外と凄く気に入るかもしれないしね。特にヒロコは珍しい物も大好きだから。まぁ、ガイアフレームが造られている都市だから僕は絶対気に入る自信はある！

きっとこれだけ大きな都市だと、中古のガイアフレームとかジャンク屋とかがあって、さらには自作ガイアフレームキットとかあるかもしれない・・・　え？　パソコンじゃないからそんなのは無理って？　まぁ期待するのはタダなんだから、良いの良いの。

そんな事を考えていると門が近づき、ようやくロバスへと到着したのであった。

都市の洗礼

ロバスの門で、セリナはギルド証を見せ、ギルド証を持ってない僕たちは何枚か書類を書き、似顔絵を描かれた。いまさらだけど、この世界。僕が知らない言葉なんだけど何故か理解できるおかげで僕は読み書きや会話に困る事はない。まぁ、ヒロコのおかげなのかなーって思いつつ深く考えなかった。

「だけど、こんな書類を書くのは苦手だー！」

都市への来訪目的、住んでる場所、名前や年齢、犯罪歴とか魔法が使用できるかどうかや所持している武器などを詳細に書く。書くのが面倒ならば、控えている魔術師にアナライズの魔法をして貰うだけで書類の記入が免除される。だけど貴重なマジックアイテムや特殊な武器、防具などは、アナライズの魔法に反発してしまい正確な調査ができないので、記入する必要があるのだ。

無駄に色々なアイテムを作ったおかげで、山ほど書類を書く事になってがっくりだ。正直、全部を正しく書いてしまうと目立ちそうなので、アイテムの説明を色々考えるのが一番面倒なんだけどね。

「では、通行税として1人50シルバーになります」

書類を書き終わり、検査も通過したあと都市に入る手前で通行税を払った。さすが大都市だけあって、手続きが色々と面倒である。

「ロバスを出たり入ったりする度に、書類とか書くのって面倒だなぁ。僕たちもギルドに登録しよっか？」

「そうですねぇ。ヒューイックでは結局ギルドのお世話になりませ

んでしたからね」
「ボクもう書くのいやだー」
「ミミは字が書けなかったので、なぜかヒロコが代筆したのだ。意外と面倒見がいいよね。
ようやく検査から解放された僕たちは、ロビーから町へと続く通路を抜け、町へと入った。

ロバスの街中は、石畳で綺麗に舗装された広々とした通りがあり、馬車や見慣れない車のような乗り物がゆっくりと行き交っている。建物はレンガ造りで、通りに沿って綺麗に並んで建っている。そして特徴的なのは、ところどころに地下への入り口がある事だ。セリナの説明どおり地下で都市は繋がっていて簡単に行き来できる。地下道の凄いところはガイアフレームが通れるようになっている所だ。

また、魔石獣を大量に狩ることで魔石獣の素材が溢れており、それを利用したアイテムが安価で出回っている。さらに言えば魔石獣の魔石はガイアフレームの動力源として使われているので、ロバスはガイアフレームを造る者にとって大変利便性の高い都市なのだ。

そして面白いのは都市の４つに分かれたブロック毎で、造られるガイアフレームの特色が異なる事だ。

北側のブロックは多脚型のガイアフレームを主に作っており、魔石獣の姿を模した物も多い。人の形をしていない事でトレースモードを使用できず、術式方式の操縦のフレームのみになる。なので、玄人好みなフレームと評判のようだ。

西側のブロックは、魔術師が扱う為のフレームが造られている。杖

を持ち空中に複雑な術式を素早く描くため腕部は細めの物が多い。さらに操縦する人間の魔力を増幅する為のアンプリファーが背面に搭載されている為、少々機動性に欠ける物が多い。

東側のブロックでは、ごく一般的なフレームが大量に生産されている。基本的な人型であり、最初に作られたのも人型という事もあってか色々と改良されている。トレースモードもこのブロックで作り出され、新しい技術はだいたいここから造られる。

そして僕達のいる南側のブロックは特にまとまって何かを造っているわけではなく、職人がそれぞれ集まって自分の技術を披露するブロックとなっている。腕の良い職人や変人も居るので掘り出し物が見つかったりする。空を飛んだり、水中仕様のフレーム等の特殊なものはここで造られたりしている。

まぁ、基本的にフレームの技術のおかげで上下水道や建築、生活用品などの道具がかなり実用化されロバスはその恩恵を受けている。ガスコンロや冷蔵庫があるおかげで料理の幅が広がり、美味しい物がかなりあるみたいだ。

そして早速、屋台で買った凍らせた果物を食べるヒロコとミミ。セリナは、テルムというマンゴーみたいな味の果物のジュースを飲んでいる。僕はというとふつうの水を飲んでいる。

「ヒロコそっちの頂戴～」

「ん、交換しよ」

美少女（見た目は）二人が、フローズンフルーツを仲良く食べている姿は非常に微笑ましい。だけど、かなり人目をひいちゃうので、ちょっとあれかも。呼び寄せちゃうかも。

「お、そこのとっても可愛いお嬢ちゃん達！　俺達と一緒に遊びに行かない？」

そうそう、こういう人達。こういうナンパしている人達から見れば女の子が二人だけで、出歩いているのを見ると声を掛けるのが礼儀らしい。

「け、けけけ結構です！」

ミミを背中に庇いつつ、どもりながら返事するヒロコ。

「いいじゃん、二人だけなんでしょ？　おいしいお菓子食べに行こうよ」

「そうそ、俺達も二人だし丁度いいじゃん」

「！」

おいしいお菓子という言葉に、ちょっと心動かしている様子の二人。ほんとおいしい物に弱いよね、女の子って。だけどヒロコは良く知らない男性は怖いみたいで僕を見つけると、ミミを連れて僕の後ろに隠れてしまった。

「すいません、僕の連れなんです」

とはいえ、僕も慣れてるとは到底言えない。事実だけを述べて二人組みの様子を伺う。

「あっそう。じゃ、またね～」

「ばいばい」

だけど、その対応でよかったのか、あっさりと行ってしまう二人組み。ふぅ、助かった。
その後はみんなで、油で揚げてある砂糖をまぶしたドーナッツみたいな物を食べた。出来立てだったので熱々で美味しかった。

こういった物を飲んだり食べたりできるのも、ロバスには観光案内所があり、僕達のような田舎から来た人間に色々と教えてくれるので安心してお店を利用できるのだ。そして、宿についても教えて貰っていたので、ぼちぼち向かうことにした。

「スリーセブン」という名の宿は、ロバスでシリアルナンバー「７７」のルーツを見つけた人が良く泊まっていた宿らしく、前は違う名前だったんだけどその人にあやかって、名前を変えたらしいのだ。

「ようこそスリーセブンへ。何名様ですか？」
「４人だけど、１人部屋と３人部屋空いてますか？」
「少々お待ちください」

受付のヒゲを生やしたダンディーなおじさんが、僕みたいな子供相手でもしっかりと丁寧に応対してくれる。

「はい、空いております。何泊のご予定でしょうか」
「とりあえず、一週間ですけどおいくらになりますか？」
「４名様で、一週間ですと１６ゴールド８０シルバーとなります。前払いですと１６ゴールドで結構です」
「じゃあ、前払いでお願いします」

と、１６ゴールドを払う。ここに来る前に素材をある程度売り払っ

ているので、これぐらいなら大丈夫なのだ。

「はい、確かに頂きました。お食事は付いておりますが、召し上がらない場合でもお値段は変わりませんのでご了承願います」

「あ、はい分かりました」

「お部屋は3階になります。３１１と３１２をご利用ください」

とおじさんが部屋の鍵を人数分渡してくれた。案内の人は居ないみたいだ。

ひさしぶりに屋根のある所で寝れるので、やっぱり嬉しい。野宿だと地面に寝袋で寝てたから地面が固くて寝心地悪かったんだよねぇ。ヒロコたちを見るとやっぱり嬉しそうな顔をしていた。みんな文句１つ言わなかったけど、やっぱり柔らかいベッドの方が良いよね。

今日はゆっくり眠れそうだ。

会議はまとまらない

ロバスの中心にある塔「ティンラドール」その一角に、辺りの景色を一望できる豪勢な部屋があった。その部屋には、数名の男女が外の景色に気を取られる事なく、深刻な会議をしていた。

「で、王都でのクーデターは宰相ファウンデルス卿の主導で間違いないんですな？」

所々に赤いラインが入った長衣を羽織った、金髪の男性がそう確認した。

「ですね。私の方もそのように報告を受けております。ユージ陛下は投獄されてるとの事で存命のようです」

「生かさず殺さずで、傀儡にしてしまうつもりだろうが上手く行かないであろうな」

その言葉にテーブルについている面々から、微笑とも苦笑ともとれない笑いがさざめいた。

「それで、ロバスの方針としては如何いたすつもりか」

「わが都市は一都市とはいえ、フレームの所持数は他の都市の追随を許すものではない。いくら脅されようとクーデター派に恭順するなど有り得ない」

「とはいえ、全都市が力を合わせて攻めてくれば、たとえロバスといえどタダではすまん」

色々と意見がでるが、基本的には王党派、もしくは中立を守るとい

う物でクーデタ派に協力しようと言う意見は全く無かった。

「ただ、このまま静観すれば隣国に攻められるのは間違いないでしょうなぁ」

宰相ファウンデルス卿は、隣国のハイローディス帝国との繋がりが噂されており、いつ同盟という名の侵略を開始されてもおかしくなかったのだ。そうなれば、たとえロバスであっても攻め落とされる事になるだろう。

「では、早急にユージ陛下を救出しクーデター派を打倒するのが最善かと」

「それには、クーデター派に恭順を示したと見せて王都に潜入工作員を派遣し、内密に救出する手が考えられますね」

「フレームの武力を背景にしているロバスが、簡単に恭順の意を示すのは逆に警戒されないだろうか？」

「となると、しばらくは保留にし時期を見て恭順の意を示すという事になりますが、日が経つにつれユージ陛下が存命している確立が低くなっていきますがね」

最善と思われる意見が出ても、即座に否定的な意見が出て来てしまい会議は右往左往してしまう。それぞれが納得できる理由も説明しているので、誰もが意見をまとめかねていた。

「このままでは埒が明かないのは承知の上だが、しばらくは静観する振りをし、その間にユージ陛下の調査隊を派遣して危ないようであれば即座に救出するという形で宜しいか？」

「そうですね、タタ村の神童も丁度来ているようですし、彼女も調査隊に加えましょう」

「決まりですね」

結局、ユージ陛下の命を最優先という事で会議はまとまり、ようやく会議は閉会した。

ロバスはとりあえず出入りが面倒くさい。いちいち門でチェックするのは安全の為だってのは分かるんだけど、今まで町の外に行って素材を集めて生計を立てていた僕としてはその手間が非常にめんどくさく感じるのだ。

「あ、それなら心配ないですよ。ロバスには地下に古代遺跡がありますから」

「え、なにそれ？」

セリナに門がめんどくさいと愚痴ったら、そんな答えが返ってきた。どうも、ロバスの地下にはかなり深い所に古代遺跡があり、そこにはモンスターもいれば機械生命体？　のようなものもいるらしい。そして、ルーツはこの古代遺跡から発掘されたもので、非常に運がよければルーツもしくはそのパーツを見つけることができるらしい。なので、ある程度の強さの冒険者はロバスの古代遺跡を探索すれば、楽に生活していけるそうなのだ。

そして、ロバスには珍しい学園がある。勿論冒険者を育成する為の物で古代遺跡を利用して実地で色々なことを教えてくれるそうだ。この冒険者学園は、ロバスが出資していて入学して卒業するまでの

学費が年間２０ゴールド程度で良いそうだ。そこまで格安の理由として、優秀な冒険者を増やしいつまで経っても踏破できない古代遺跡を人海戦術で調べあげ、古代遺跡に眠っているはずのルーツやそのパーツを発掘し、ガイアフレームの発展の為に役立てるつもりだそうだ。

ミミは冒険者のような生き残る術を持ってない様に見えるので、学園に入学して何か手に職を持てるようになったら良いなと思う。勿論、僕やヒロコも一緒に入学しミミが寂しくないようにするつもりだ。

でも、とりあえず古代遺跡に入ってみてどの程度の物なのか確認して見ようと思った。

「セリナはどうする？　魔法の講義を受けに行ってくる？」
「うーん、そうですねぇ・・・　古代遺跡に行くなら少しだけ待って貰えないです？　ギルドで講義が何時あるか調べてきます」
「あ、わかった。じゃあ、ここで待ってるね」
「はい、行ってきます」
ていうか、セリナってそんなに魔法だけで、ガイアフレームと戦いたかったんだろうか？　見た目と違って意外と好戦的なセリナ。これこそギャップ萌えだよね。

「ミミ、ちょっと良い？」
「ん、何ぃ？」
「ミミって、ロバスの冒険者学園に入るつもりってある？　なんか色々教えてくれるそうなんだけど」

セリナが出て行った後とりあえず、なんのひねりも無く聞いてみた。

「え、冒険者学園？　お金ないから行きたくないなぁ」
「お金はなんとかするから大丈夫。もし行くなら、僕もヒロコも行こうかなって思うんだけど、どう？」
「え？　なんでコージがお金だすの？　それよりコージも一緒に行ってくれるって言うのは本当なのぉ？」
「勿論！　あとお金も出すし、ヒロコも一緒にも行くよ。ね、」
「うん、マスターが行くなら行くよー」
「うーん・・・」

なんか凄く迷い出した。遠慮なんてしなくて良いのに。

「ね、ミミ」
「ん？」
「確かに僕は凄い借金あるけど、僕達が学校に行って暮らす位のお金は楽にあるんだよ？
ここに来るまで一杯モンスター狩ったのは知ってるでしょ？」
「うん、それは知ってるけども・・・」
「だから、遠慮なんかしないで欲しいんだ。なんせ僕はミミのお兄ちゃんだしね」
いや、年齢は僕の方が下なんだけどね。気持ち的にっていうか。
でも、僕がそういうとミミは一瞬目を見張ったかと思うと、顔を真っ赤にして小声で分かったと呟きながら頷いてくれたのだ。

「まぁ、すぐにって訳じゃないから安心して。とりあえず、学園に行くって事で。ヒロコも一緒に頑張ろうね」
「うん、マスター」
「えへへ、ありがとう」

えっと、何か忘れてる気がするけど・・・うーん・・・なんだろう？
ま、ミミが笑顔だからいっか！

ミミの事　その1

ミミは、奴隷として売られるという最悪の状況からこっち、運が良くなっていると思うの。普通は奴隷になると凄く大変な目にあったり、惨めな事になる方が多いと思っていたのだけれど、屋敷で暮らしていた時のほうが、よっぽどひどかった・・・

ミミは、代々高名な騎士を輩出するテスタロッサ家に生まれた。ただ、ミミは妾の娘というだけあって誰からも期待されず興味を持たれることも無かった。ただ、そこにいる娘というだけで誰からも無関心だった。だけど、テスタロッサ家の嫡男の目に止まったあの日から地獄が始まった。

嫡男という事で、屋敷の誰も彼に逆らうことはできず、屋敷の中で彼は絶対君主だった。その中でミミは、汚らしい妾の娘というレッテルを貼られ、屋敷中の人間から蔑まされる事になった。屋敷の人間に見つかれば、打たれる、物を投げられる、腐った食べ物を無理やり食べさせられる、汚い言葉をかけられる。そういった物からはじまり、番犬をけしかけられたり、池に突き落とされたりと、だんだんと命の危険を感じるようなものに変わっていった。

そして、決定的に敵対される原因となった事があったの。

年頃になり剣を習い始めた嫡男は、素振りなどはすぐに飽きてしまい、生き物に向かって剣を振り下ろす事ばかり楽しげにやっていた。だけど、小さな生き物から始まった虐殺はだんだんエスカレート。やっぱり人を斬らないと一人前じゃないと言い出し、一番最初に斬られる人間としてミミが選ばれちゃった。

イママデニンゲンアツカイナドシナカッタクセニ・・・

にやにやとした顔で剣を構える嫡男を見た時、あぁ、ここで死んじゃうんだなぁと思ったの。だけど、剣を振りかぶったその時、ミミには見えたの。

強い輝きを放つ赤い光が。

今までに見た事のない禍々しい光にびっくりして、思わず避けたの。

そして、それが始まり。

嫡男が剣を振り上げる度に、現れる赤い光。それは、まさしく彼が揮う剣の軌道だったの。赤い光を避けたつもりが、嫡男の剣を避けている。彼が何度もミミに向かって剣を振るけど、どこに剣が来るか分かるから当たる筈が無い。そして、息を切らせ、苛立たしげに剣を床に投げつけて彼の剣の修行は終わった。

そして、その日の出来事がお舘様の耳に入る事になった。

それからは、縛られて殴る蹴るの暴行を受けるのは日常茶飯事。縛られる前は目隠しされて攻撃されたのだけど目隠しされても赤い光は見えるので、全部避けたら次からは縛られるようになったの。でも、何度もそうやって暴行を受けていると、どうやれば痛くないようにできるかが分かるようになって、だんだんと殴るほうが疲れきってしまうという事になっていった。殴られた所は痛かったけれど、その時はそれが当たり前なんだと思ってた。

どれだけ痛めつけても、一向に応えないミミを見て誰かが魔女だと

言った。本当に魔女だったら飛んで逃げていけるのになぁとぼんやり考えてたけど、気付けば魔力検査をさせられていて、どうやらミミには魔術師の素質がわずかだけどあるという事が分かった。

騎士の家に初めて生まれた魔術師の才のある子供。

普通であれば喜ばしいその出来事も、ミミの場合は苛めの為の格好の的が増えただけだった。魔法を習ってもいないから、魔法なんて使える訳がないのに、魔法を使えと囃し立てる。魔法が使えないと分かると、出来損ないと言い、妾の子だから出来損ないなんだと謂れの無い事を言われた。そんな事を毎日言われると、魔法の才能がある事が悔しくなった。

悔しさも悲しさも次第に感じなくなってきた頃、何故か綺麗に身支度をされ食事を与えられるようになった。食事に毒でも入っているのかな、と疑ったりしたけどそんな様子も無い。そして何故か笑顔の練習をさせられた。今まで、笑った事なんか無いから非常につらい練習だった。何も楽しくないのに笑顔。毎日毎日笑顔の練習。

いっそ殺してくれたらいいのに。

もう何がなんだか分からなくなったある日。ミミは売られた。

その日からミミは奴隷になった。

奴隷になったその日。既に売られる先は決まっていたらしく、馬車に押し込まれて手錠を掛けられた。そんな事をしなくても逃げたりしないのに。でも、先に馬車に乗っていた女の子達は、手錠をもの

悲しげに見つめ、ひょっとしたら外れないかとしきりに動かしたりしていた。

ミミを見ても、何もしてこない人を久しぶりに見た・・・

屋敷では誰も彼もミミの顔を見れば、悪態をつく、殴る、突き飛ばす、寒空に放り出す。そういった悪意ある事をされずに済んだ試しが無かった。

「ミミをいじめないの・・・？」

思わず確認してしまった。そんな事をすれば殴られるかもしれないのに・・・

「ミミちゃんって言うの？　こんなに可愛いから攫われちゃったのね・・・　あたしはエレン。テト村のエレンって言うの。こんな所で言うのも変だけど宜しくね」

帰ってきたのは笑顔だった・・・

「えっと、わたしはミシェル・・・です・・・　ここ、どこですか・・・？」

泣きそうな顔だった・・・

「ミミは、ミミだよ・・・　えっと・・・えっと・・・」

悪意を向けてこない人に何を言えば良いか分からない。黙っていて良いのかも分からない。だけど、こんなに嬉しい事は今までに無い。ミミに話しかけてくれるんだ。ミミを笑ったりしないんだ。ミミと

一緒に居てくれるんだ！

「ミミちゃん、大丈夫？　怖かったのね、よしよし」

「大丈夫だよ、ミミちゃん・・・」

気がつけば、頬が濡れていた。なんだろう？　視界がくにゃりと歪み、液体が流れ出し暖かい物が頬を伝う。二人ともミミに悪いことは何もしない。むしろ暖かい気持ちにさせてくれる。世界にはこんな人達がまだ居てくれたんだ。

「ありがとう・・・」

自然と紡がれる言葉。そう、ありがたいってこういう事なんだ。そうだ、こんな事もあったんだ。今まで、ありがとうと言う事も言われる事も無かった。

「どういたしまして！　こんなに幼いのにひどいよね、怖いよね」

「・・・」

二人とも、ミミを落ち着かせようと傍に来て手を握ってくれたり抱きついてきたりしてくれる。

そんな事をされていると自然とまぶたが落ち、いつの間にか安心して眠ってしまった。

ミミの事　その2

　エレンとミシェルはどうも攫われたみたいなんだけど、ミミは違う。屋敷の人に奴隷として売られちゃったのって二人に言ったら凄く驚いて、すぐにミミをよしよししってしてくれた。なんだか凄く得をした気分だった。

奴隷として売られ、馬車で運ばれて数日が経った。どうもどこかの貴族の屋敷に向かっているらしい。ミミは頑丈だから、また殴られたりするのかなぁ・・・？　せっかくの綺麗な服がぼろぼろになったらやだなぁ・・・

奴隷というものが今ひとつピンと来ず、そんな事を考えていた。

でも、エレンとミシェルというお友達が出来た今は、奴隷になったという事は凄く些細な事に感じられた。だって、二人はちゃんと顔を見てお話してくれるし、嫌な笑い方じゃなく暖かい笑顔をむけてくれるし、なにより、傍に居てくれるもの。ミミはきっと凄く笑顔になっていたと思う。今までの屋敷の生活に比べれば、ここは天国だ。嬉しくて嬉しくて仕様が無い。

最初の2，3日は、ずっとにこにこしているミミを見て、二人は不思議そうな顔をしてたけど、エレンとミシェルが居てくれるから嬉しいと言うと、二人とも嬉しそうにもじもじしていた。そんな仕草を見ると余計に嬉しくなっちゃう。

屋敷、と聞くと嫌な思い出しか無いけれど、これから行く屋敷は二人も一緒に行く。お友達が居るから、今から非常に楽しみだ。それでも、もし二人が痛い目に合いそうになったら絶対助けるんだ。ミ

ミだったら、頑丈だし避けちゃえるし絶対平気だもん。

「もう、エレンってばそんなにミミを見つめないで下さいよぉ」

二人を絶対に守る！　と意気込んでいたらエレンに見られてた。ちょっと恥ずかしい。

「ごめんごめん、ゆるしてミミちゃん、ギュー！」

「きゃー」

「ミシェルも～」

「ミシェルだいすきぃ～」

ぎゅうぎゅうみんなくっつく。たぁーのしぃ～！　こうしてると、屋敷で起きた事なんかぜぇーんぶ忘れちゃう。ううん、本当は覚えてるけど、嬉しくてどうでも良く思えちゃうから不思議！　むしろ、奴隷にしてくれてありがとう！って感じなの。

そしてご飯！　腐ってないのは勿論だけど、エレンとミシェルと一緒に食べるとおいしいの！　屋敷に居た時は、ほとんどご飯を食べなかったけど全然平気だった。むしろ腐ったものを食べさせられる事が多かったので苦痛だった。

なんだろう。何をしてもわくわくするし嬉しくなるし、楽しくなっちゃう。大好き・・・そう大好きな二人がいると、ミミは幸せなの。

そして運命のあの日。

ミミはコージと出会った。

屋敷に着いた途端に響き渡る轟音。怒号や何かが倒れる音、けたたましく行き交う人達。二人を怯えさせるのに充分なものだった。ミミは平気だったけど。

しばらくすると、静かになり馬車の外から彼の声が掛けられた。

「扉開けますよ？」

あとは知ってのとおり。

コージの素顔を見て、ミミは顔が赤くなるのを感じた。何故か頭の中に“この人だ！”って言葉が浮かんだ。違う馬車に乗っていた女の子が魔法を使ってて、助けにきましたよって言われているのを聞いて、魔法が使えないのに使えるって嘘を言っちゃった。何度も使ってって言うから、意固地になっちゃったけど、嫌われなかったかなぁ？　そして、ちゃんとミミを見て欲しくて、子ども扱いしないでとも言った。

ミミには帰る家なんか無いから、戻れない。エレンとミシェルは優しい家族が待つ家がある。だったら帰るほうが絶対に良い。でも、ミミは帰れない。帰りたくない。

ただ、コージにずっと着いて行きたい！

エレンとミシェルはコージが送ってくれた。優しい家族が待っているお家に。エレンは一緒に住もうと言ってくれたけど、どう考えてもミミは邪魔だと思う。でも、そんな事を言って貰えただけでミミは凄く嬉しかった。純粋に心配してくれたエレンにミシェル。二人はずっとミミの友達なの。

そして、セリナとヒロコ。いい匂いがして柔らかくて、綺麗な二人。ミミを見て凄く優しくしてくれるの。エレンやミシェルがしてくれたみたいに、ぎゅーっとしてくれるし、ヒロコはなんでか、ずっと手を繋いでくれるし。

「お友達想いでミミは優しいねぇ」

って、ヒロコに言われた。優しいのかな？　良く分かんないや。そんな風に首をひねっていると、セリナに抱きしめられた。そうやって抱きしめて貰ってると、エレンとミシェルとお別れして悲しくなってた気持ちがすぅっと落ち着いてきた。えへへ。こんなに幸せで良いのかなぁ～？

そしてコージは、そんなミミ達を優しく見守ってくれてました。

コージ。

すっごく謎の人なのです。奴隷じゃなくなって、コージの妹になってはや三日。ロバスという町を目指しています。その道中ですっごく運が良かったのです。

違います、全部コージの仕業です。食料が少なくなってきたら、ちょうどピピールとかいうおいしい獲物が現れて、ミミ達の食料になったり、寝る前まで無かったはずの岩塩が朝起きると生えてたり、たまたま見つけた洞窟にはいったら、何故か部屋になりそうな横穴が2つあったり・・・　最初は分かんなかったんだけど、ミミの目に見えるようになってきました。コージが時々光るのが。いつもの赤い光じゃなくて、優しい金色の光がコージから溢れるんです。なにか都合の良い事が起きる時は、必ずコージが金色の光を出すので

す。

ミミも不思議な力を持ってるんだけど、コージもなんだか不思議な力を持ってるのです。えへへ。ミミみたいに不思議な力を持ってるなんて一緒で嬉しいのです。ますます大好きになっちゃうのです。

ミミの事　その2（後書き）

ミミの話はとりあえずおしまい。

デー・・・ト？

「コージ、つぎはあっちに行きましょう」
「うん、セリナ」

僕とセリナは町の中を仲良く腕を組んで歩いている。

何故こうなったっかって？　うん、学園に行くっていうのをセリナに言うのを忘れていたからなのだ。学園に行く話しをしていた時にセリナが居なかったので、仲間はずれにされたと思ったらしく、ミミから自慢げにコージとヒロコと一緒に学園に行くのって聞いた瞬間のセリナの顔の絶望感は半端なかった。一生懸命なだめて、ようやく落ち着いてきたんだけど、なかなか許して貰えず、結局、今日1日二人きりでデートすれば許してくれるという事になったのだ。

まぁデートと行っても、普通に買い物をして町の中を案内してもらったり、観光案内所に行って、面白そうな所を教えて貰って一緒に回るってだけなんだけどね。ま、それでセリナの気が晴れるなら安いもんだよね。僕としても、可愛い女の子と一緒に回れるのは役得だし。

てなわけで、楽しもう！

「これは由々しき事態なのです、ヒロコ」
「うん、ユユシキジタイです、ミミ」
「コージはみんなの物であるからして、独り占めは駄目なのです」

「マスターはボクのだよ？」
「めっ！」
「うみゃー」

ヒロコも分かってないです。コージはミミが皆に貸してあげて居るだけなのに。大好きなセリナとヒロコだから貸すんですよぉ？

「えっへん。セリナがコージに・・・じゃない、コージがセリナの物にならないように見張らないと駄目なのです」
「そうなのです」
「でも、ミミはそんな見張れる魔法が使えないのです」
「あれ？　ミミは魔法使えるんじゃないの？　使えるでしょ？」
「魔法なんて知らないから使えないのです」
「そなんだ」

習ってないから、魔法なんて知らない。素質はあるみたいだけども。

「魔法なんて要らないのです！　こっそり、後をつければ良いのです！」
「うん、がんばろう！」

えーっと・・・ミミとヒロコの声がよぉく聞こえる。セリナとデートするってなった時に二人ともすっごく不満そうな顔をしてたから、何かするとは思ってたんだけど、彼女達はきっとこっそり後をつけているつもりなんだろう。うん、確かに姿は見えないよ。姿は。だけど、そんなに大きな声を出してるとばれると思うんだ。ていうか、ばれてるし。ミミは最初出会った頃の儚い美少女系が、非常識な美少女妹系に変化している。一体何があった！

セリナをふと見ると、余裕の笑みだ。後をつけてくる事は予想済みって事だったのかな？　意外と鋭いよねセリナって。ぐいぐいと僕に身を寄せながらセリナは上目遣いで覗き込んできた。だからでかい！

「行きたい所があるんですが、良いですか？」
「う、うん。良いよ良いよ」

可愛い女の子に、上目遣いでお願いされて断れる奴がいるだろうか。いや居ない！

慣れた足取りで、地下へと進むセリナ。地下と言ってもお外の光が届くように工夫されているし、届かないような所は魔法か何かで明かりが灯されている。そしてガイアフレームが通れるだけあって、広々としており地下の圧迫感はまったくない。

「道に詳しいんだね、セリナ」
「はい、今から行く所はかなりお世話になったところなので覚えちゃったんです」
「へぇ～」
「でも、そこ以外はあんまりなんですけどね」

えへっと笑うセリナ。そういえば、年に一度くるか来ないかって言ってたもんね。

「地下にも一応お店があるんだねぇ」
「はい、商売する人はたくましいんですよ？　それに地下にお店があると雨の日とかでも全然関係ないですから、意外と便利なんですよ」

「ふぅん、デパ地下みたいなもんなのかな？」
「え？」
「なんでもない。こっちのこと」

大雨が降ったせいで地下街が水没！　とか新聞やニュースで見た覚えがあったけど、ここの地下は大丈夫なのかな？　・・・きっと大丈夫だよね・・・？

「あ、こっちです。ここから上がります」

どうやら目的地は西ブロックにあるようだ。地下に道を作ったときに、通る人が迷子にならないように、案内板が結構置いてある。だから、おおよその方向は地下にいても分かるようになっていて非常に便利だった。すごく細かい配慮がされていて、この地下道を作った人は凄いなぁって思った。

「ここなんです」
「おー・・・」

セリナが案内してくれたのは、歴史を感じさせる非常に大きな建物だった。尖塔が四つあり、何か浮いているのを見ると魔法関連の施設かな？　正面に厳重に警戒されている門があり、入館する人を制限しているようだった。

「はい、これです」

門番に近づいて行き、ギルドカードを見せるセリナ。門番さんがカードを見た瞬間、背筋がピンと伸びて、セリナに敬礼してた。セリナってここのお偉いさん・・・？

「さ、中に入りますよぉ～」
「う、うん」

僕の姿を見て何か言いたげな門番さんをスルーして、魔法の舘？へと入っていった。なるほどぉ。後ろの二人が追って来れないようにここにきたんだ。ここまで来る間もミミとヒロコの大きな声が追ってきていたんだけど、尾行なんかじゃなくミミとヒロコが何をしたいか、何を見ているか大きな声で説明してくれるので非常に恥ずかしかった。

あの子達はほんと一体何がしたいんだろう・・・？　でも、とりあえずここに入ってしまえば、二人は追って来れないはずだから安心だ。

デー・・・ト？（後書き）

ミミ。生き生きとしています。

クリムゾン

うすぐらい室内に入ると、ほのかにひんやりとしていて、すごし易い感じだった。

「ここは、魔法を研究している施設なんですよ」
「あぁ、なるほどぉ。それでセリナがよく通ってたんだねぇ」
「はい。魔法が好きですから・・・もちろんコージも」

「ん？　何か言った？」
「いいえぇ、別に～」

何か小声で言ってたみたいなんだけどなぁ。でも、魔法を研究している施設っていうだけあって、魔術師を結構見かける。なんか、魔術師って塔に篭って1人きりで研究してる偏屈な人っていうイメージがあるんだけど、ここだとなんか学校みたいな感じだ。魔術師は生徒さんみたいな。

「で、わたしはここで研究した成果を色々と発表しているので、顔がきくんですよ」

レッドベアを1人で倒した手並みといい、貴族の屋敷で見せた動きといい、セリナはやっぱり凄い魔術師みたいだ。僕と1つしか変わらないのに色々してるんだなぁ～

「お、クリムゾンここに居たか、久しぶりだな」

向こうからやってきた、金髪ロン毛の背の高いお兄さんがそう言ってセリナを見ている。

「・・・クリムゾンって？」
「わたしは、タタ村のセリナです。その呼び方は止めてくださいトレイル」
「手厳しいねぇ。レイって呼んでくれって言ってるじゃないか」
と肩を竦めるトレイルさん？　レイさん？
「で、なんの御用ですか？」
「あぁ、君に召集が掛かってるみたいだよ。さっき、上の連中が探しに来てた」
「ん？　なんでしょうね？　とりあえず顔を出してきますね、コージ」
「うん分かった」
なぜかトレイルって人から逃げるようにして、セリナは奥へと消えて行った。
「さて、自己紹介が必要かな？君・・・？」
なんか、いちいち綺麗にポーズが決まる人だなぁ。ちょっと羨ましい。
「どうも初めまして。僕はコージ＝ヒロセです。ちなみに１６歳です」
「こちらこそ初めまして、いきなり変なところを見せて申し訳ない。私はレイモンド＝トレイル。ここで研究員をしてる者だ」
にかっと笑うトレイルさん。人懐っこそうな人だ。そして綺麗に決まるポーズ。

「早速なんだけど、クリムゾン・・・もといセリナとはどういう関係なんだい？」
「一緒に旅をしてる仲間なんです。彼女にはいつも助けられてます」
「え、彼女と一緒に旅してるのかい？　それは凄いねぇ。あの鉄面皮と一緒で良く胃に穴が空かないねぇ」
「え？」
「いやいや、なんでもないなんでもない。ところで、ここに連れてこられたって事は魔法に興味があるのかい？」
「はい、僕も多少使えるのでこういった所は非常に興味があります」
「だったら、良い所に連れていってあげよう」
こっちだよーと、無駄に綺麗なポーズで僕を手招きするトレイルさん。
「彼女はね、今まで誰もできなかった魔法の強化を成し遂げたんだ。彼女が炎系の魔法が得意なのは知ってるかい？」
「はい、よく炎系の魔法を使ってますね」
「見たことがあるなら、話しが早い。何の魔法を唱えてた？」
「バーンウォールだったかな？　あとバーンピラー？」
「なるほどなるほど。じゃあ私が唱えるから見てて」
「“炎よ！　我が前に踊りて其をしめせ！　バーンウォール！」
ゴォッ！
激しい勢いで炎の壁が現れる。だけど、セリナが使ってたのより薄いなぁ。と思ってるとすっと炎の壁は掻き消えてしまった。あれ？
３０秒ぐらいでお終いなの？

「とまぁ、普通に唱えるとこんな感じなんだ。あ、ちなみにこれでも私は一流と言っても差し支えない使い手だよ」

おーそうなんだ。あれ？　でも、そうなるとセリナって規格外なんじゃない？

「ふふ。気付いたようだね。彼女は恐ろしいまでの炎の使い手なんだよ。あと、呪文も僕のとは少し違ってると思う。私が彼女と同じ呪文を唱えても確かに炎の壁は出るんだけど、５秒と持たない魔法になってしまうんだ。まぁ威力は段違いなんだけどね」

セリナは“炎よ”って三回言ってたけど、あれって意味のある言葉だったんだねぇ。気分を盛り上げる為のものかなぁって勝手に思ってごめんセリナ。

「まぁ他にもあるんだけど、基本的に炎の魔法の改良について彼女は色々と研究を重ねているんだ。他には、身振りと手振りで術式を構築して魔法を唱える方法かな。」

あぁ、あれね。静かに魔法を唱えられるから不意打ちに使えるよねあれ。

「むむ、それも知ってるのかい？　彼女がそこまで君に手の内を見せてるとは驚きだねぇ」

「教えてって言ったら、全部教えてくれましたよ？　家に術式とか呪文とか書き記した物がたくさんありましたし」

セリナが色々見せてくれたおかげでこの世界の魔法を覚えられたんだよね。セリナありがとう。

「ますます、君に興味が沸くねぇ。ところで君はどの系統が得意なんだい？」
「えっとぉ・・・」
なんて言おうか迷っていると、セリナが凄い勢いで僕の所へやって来た。
「こんな所に居たんですねコージ。すこし助けて欲しい事があるんですけど良いですか？」
「え、うん。一体どうしたのセリナ？」
「ありがとうコージ。付いて来て貰えますか？」
とにっこり笑顔でお願いしてくるセリナ。
「ついでにあなたもです。トレイル」
と思ったらトレイルさんには、すっごい仏頂面。同一人物？　ってぐらいの変わりようだ。
「は？　私もかい？はてさて一体何があるのやら？」
僕とセリナのやり取りをぽかんとした顔で見つめていたトレイルさんだったけど、セリナに呼ばれて、にやりと凄く悪そうな笑顔をしていた。綺麗なポーズもしてた。
ほんと、凄いけど無駄な才能・・・だよね？

クリムゾン（後書き）

良い所ってどこだったんだろ？

黒セリナ

「で、その少年がセリナ君が推薦する人物なのかね？」

セリナに連れて行かれた部屋の中。なんというか、偉そうなオジサンが居た。

「はい、彼以上の魔術師をわたしは知りません。先ほどのご依頼は彼と一緒で無い限りお受けする事はございません」

強い口調できっぱりというセリナ。

「じゃが、その少年が優秀な術者という保障が全く無いでのぉ。さらにいえば信頼に足る人物かどうか・・・」

「あぁ、そこでそこのトレイルが役に立ちます」

えーっとセリナさん、トレイルさんの扱いがすっごくぞんざいなんですが・・・？

「コージならトレイルを打ち負かせます。で、わたしが推薦する彼を信頼できない方は他にいらっしゃいます？　身をもって信頼していただきますけども？」

すっごい目が笑ってなくて口だけで笑ってる顔だーーーーーーー！　僕を信頼できないなら実力でねじ伏せちゃうぞ♪　って顔に書いてある。現にそれを感じ取ったお偉いさん達が引きつった顔で力なく笑ってるぞ・・・？

「ほぉ・・・この子が私を打ち負かせる事ができるのかね？」

魔術に関してはそうそう引けをとらないと自負しているのであろう。
そう応えるトレイルさんは、視線だけで人を殺せそうな程、殺気だっていた。

「はい、わたしに勝てないトレイルなんて瞬殺ですよ♪」
「いやいや、ちょっと待って話が見えない・・・事もないけど、物騒な話は止めてくれるかなセリナ？」

僕が話しかけた途端今までの剣呑な表情から、一転して柔らかい表情になるセリナ。

「ごめんなさい。説明がまだでしたよね？　この人達がわたしにちょっと特殊な任務を依頼してきたんですが、わたし1人だと心細いのでコージにも来て欲しいなって言ったら実力も分からない人間を参加させられないって言われちゃって・・・」
「君は調査隊の1人として行くだけで、なにも全て君に任せるわけじゃな・・・」
「コージに説明しているので黙っててくれません」

セリナの説明に補足を入れてくれたおじさんが、黙らされた。おーい、セリナ目の輝きが無くなってるよ！　もどってこーーーい！

「えっと、どこまで話しましたっけ？　なんにせよ、コージさんは魔法でトレイルを倒してくださったら、わたしと一緒に任務に行けるって事なんです」

じっと見つめる僕を見て、やっと表情が戻るセリナ。でも、説明をはしょっちゃったよ。

「では、中央試験場に行きましょう。あそこならトレイルが全力を出しても問題はありませんしね。みなさん、それで宜しいですね？」

セリナのその言葉を皮切りに、みなさん一斉にどこかへ向かい出す。僕はというと、セリナに腕を掴まれて、どこかに連れて行かれる。でかい。

「はっ」

幸せな気分で歩いていたら、どうやら何時の間にか中央試験場に着いていたようだ。どこをどう歩いていたかさっぱり思い出せない・・・

こんな時こそ落ち着いて深呼吸。

すーはー

「では、コージさんとトレイルは合図をしたら始めてください」

え、ちょっと待って心の準備が！　気付けば試験場のど真ん中で相対する僕とトレイルさん。トレイルさん、ポーズが無駄に決まってカッコイイ！　って違う！

「はじめ！」

「“我が身の魔力を依り白に、我に力を与えたまえ！　オーディス！”」

確かあれは身体強化魔法のはず。自分を能力を底上げしてから戦う人なのか。僕は黙って「ノーミス」と「月光」を腰のホルスターか

ら取り出した。アクセルを唱えるのはまだ早い。ここはトレイルさんのお手並み拝見といこう。

「本気で行くよ、コージ君。恨むならクリムゾンを恨みなさい」

瞬間、凄い速さで僕の視界から逃れるように横に動くトレイルさん。そうやって戦うスタイルに慣れているのか、中々の速さで僕じゃなかったら追いきれないだろう。

「“風よ！　我が敵を戒めよ！　ヘティス！”」

風系の戒めの呪文のようだ。僕の周りに魔力で生まれた風が渦巻き、僕の動きを拘束しようとまとわりつく。これはちょっと動きにくそうだ。

「“炎よ！　我が敵を燃やせ！　ファイア！”」

僕の左から火の玉が飛んできた。よいしょっと避けると次は右、上、また左。という具合に火の玉がどんどん飛んでくる。これぐらいの威力なら魔法障壁で防ぎきれるかな？

「くっ！　魔法を避けるのは上手なようだな」

拘束呪文を唱えて高速で移動しながら死角をついているつもりで、攻撃してるのに当たらないもんだから、すっごく悔しそうな表情でそう言うトレイルさん。やっぱりポーズが美しいな、この人。

「でしたら、避けませんので当ててください。“マテクト”」

魔法障壁を唱えて、トレイルさんの魔法に備える。

「“炎よ風よ！　共に手を取り、切り裂き燃やせ！　フレイムカッター！”」

おー風と炎の複合魔法だ！　なんか凄そうな魔法にトレイルさんの本気を感じる。だけど。

「これじゃあ、セリナの殲滅魔法には足元にも及ばない」

風のかまいたちで標的を小さく切り刻み、炎で燃やして跡形も無く消してしまうような呪文だけど、セリナだったら火力だけで強引に辺りを燃やし尽くそうとする。この程度は炎ではなく、種火程度にしか感じない。

「・・・これで全くの無傷・・・？」

複合呪文が切り札だったみたいで、ちょっと驚いている。少しぐらいダメージがあると思ってたんだろうなぁ。ちょっと可哀想になってきたので、こっちも切り札っぽく見える攻撃でやってしまおう。

「じゃあ、こっちの番ですね。出でよアタックオプション！」

いや本当は叫ばなくても良いんだけど、なんとなく。このアタックオプションは、僕の意思で空中をひらひらと移動して、僕が撃った魔法を反射してくれる優れものだ。魔力の減衰率はゼロで、二つだしておけばずっと魔法をピンポン球に見立ててラリーができる。

「ボール・サンダー！」

「な、なんだそれは！？」

そしておなじみ球魔法。びりびりして貰おう。

「アローシュート！」
「うわぁぁああ！？」

「良いなぁ、あの魔法・・・」

僕の魔法を見てうっとり呟くセリナだった。ちゃんちゃん。

黒セリナ（後書き）

セリナ、コージの凄さを分かって貰えずご立腹。

王都へ向かえ

ロバスに来て三日目の朝。

何故か僕達は、王都グレイトエースへと向かって馬車に揺られていた。セリナに言われるがままに、魔法の力を見せた僕は結局、特殊任務とやらに同行する事となったのだ。

セリナに目の敵にされているトレイルさんは

「完敗だったけど、次に会う時は一泡吹かせるから君も精進しろ」

と、ふぁさぁ～とロン毛を靡かせて無駄に美しいポーズで、見送ってくれた。

事情を良く知らないミミやヒロコは、ぽーっとした顔をしてた。男の僕でもおーって思うぐらいだから、女の子だと効き目抜群だなぁ。ちょっとむっとしたけども。

でもそんな様子に気付かれて、むぎゅむぎゅのふにょふにょのぷにぷにな幸せな気分になったことは記しておく。女の子はいい香りだしや～らかいし良いよね。

で、特殊任務なんだけど同行者が二人いる。本当いうと僕たちのほうがオマケなんだけどね。茶色の髪で、メガネをかけた物静かで常に笑顔のお兄さん、ナイトルード＝ファラスさんと、水色がかった銀色の髪を短めにまとめている控えめな感じのお姉さん、エミリア＝エリツォーネさん。この人達が王都でする事があるので、僕達は護衛とサポートが主な仕事らしい。護衛はともかくサポートとかできるかなぁ？

「君達はほんとに賑やかだねぇ。もう少し静かにしてくれるかい？」

ヒロコ達と騒いでいると、ファラスさんに注意された。うるさくてごめんなさい。ガタゴトと揺れる車内は6人もいるとさすがに狭いので、他の人の迷惑にならないように気をつけないと駄目だね、反省。

「ふぅん・・・」

素直に謝って、大人しくしているとファラスさんが意味ありげな視線を向けてきた。なんだろう？　と思ってたらエリツォーネさんが静かに尋ねてきた。

「みなさんは今回の任務についてどこまでご存知ですか？」

「僕は護衛とサポートとしか聞いてないですね」

「わたしはある程度の事は聞いてます。ただ、無理に動く必要は無いと言われています」

ミミとヒロコは何も知りません～と正直に言ってる。

「今回の任務は少々危険が伴います・・・が、何も知らないままだと危険ですので少し設定しましょうか」

ふむ、と少し考え込むエリツォーネさん。

「みなさんは王都に旅をしに来た旅行者という事にしてください。たまたまこの時期に観光する事になったという心積もりで居てください。で、私とファラスはロバスで雇った護衛という形でお願いします」

旅行者っていうのは良いんだけど、護衛を雇うほど王都への道ってのは危ないのかな？

「最近、王都の近辺に強盗が頻繁に出没するようです。あと、道中では魔石獣が出る可能性もありますし、魔物も結構な頻度で襲ってきます。その対策として護衛を雇うのはそう不自然なことではありませんから」

「で、今から何か出ても自分とエリツォーネで対処しますので、ご協力をお願いします」

ロバスを出てからどこで何が見ているか分からないから、今からなりきっておかないと、もし何かあった時に、ボロが出てしまうかもしれないですしね。と、今までもそういった慎重を要する任務をこなしてきたのであろうファラスさんが、話を締めくくった。

本当は僕たちが護衛なのに、その護衛する対象に守ってもらうっていうのも変な話だなぁ。何かあったら困るから、ちょっとアイテムこねこねしようかな。

「よし、そいでは一丁やってみますか！」

気合をいれて行きますか！

「コージ？　もしかして、また何か創る気です？」

僕がやる気を出しているのを見てセリナがこそこそと耳打ちしてきた。

「あ。何かまずい？」
「うーん・・・」

そういえば、この二人は良く知らない人だから迂闊にマジックアイテムを創れる所を見せないほうが良いのか。と、なると何かあるたびに魔法で対処すれば大丈夫・・・かな？

「なにをするんだい？」
「いえ、王都まで行くのに気合いを入れてただけなんです。ね、コージ」
「は、はい、そうなんです。あははは」

ファラスさんに聞かれてどきっとしたけど、咄嗟にセリナが言い訳を考えてくれたのでそれにのっかった。セリナナイス！　危ない危ない。しかし、馬車の中を見渡すとこの面子って不思議な取り合わせに見えるなぁ・・・セリナは町娘だし、ヒロコだってそう。ミミは小さい女の子にしか見えなくて、なんで旅に出てきたのか不思議な感じだし。僕の格好はこの世界では変なので怪しく見えちゃうし。まともな格好なのは護衛役のファラスさんとエリツォーネさんだけ。

あ、そうだ。

「そういえば、セリナってさ」
「はい、なんでしょう？」
「魔術師としてやっぱり有名なの・・・かな？」

僕がそう聞くと、横で話を聞いていたファラスさんとエリツォーネさんがびしりと固まる。

「炎の申し子とか、改革者とか色々な二つ名がありますが、クリム

ゾンが有名ですね」
「魔法研究所でも、術式や詠唱を次々と新しい形に変えていきましたしね。魔法に携わるものは、一度はセリナさんの名前を聞いたことがあると思います」
なんか、二人ともなんで知らないの？　って顔で教えてくれた。セリナの事が好きなのね。
ていうか・・・そんなに有名ならなんでタタ村に住んでたんだろ？　あそこはどっちかというと魔法の研究をするには不便なところじゃないのかな？
「魔法を研究して効率の良い物に変えていったり、新しく魔法を考えたりするのは大好きなんですけど、目立ちたくないんです。人ごみも苦手ですし」
なので、自然が豊かなタタ村で静かに暮らしていたんです。とセリナ。本当にそれだけなんだろうか？　まぁ、深くは追求しないでおこう。有名っていうのは分かった。となるとすこし問題があるんじゃないかな？
「そんな有名なセリナが馬車に乗ってると、あやしいって思われるんじゃないかなぁ？」
「あ、そこは大丈夫です。わたしって発表会とかだと別人になりますから、この姿を知ってる方はあんまり居ないんですよ」
「あぁ、すまない。先程から少し疑問があるんだが、いいかい？」
僕たちの会話を割って、笑顔は崩さずファラスさんが尋ねてきた。
「はい、なんでしょうか？」

「今まで、話題として“セリナ＝クリムゾン”が出てきていたと思っていたのだが・・・ひょっとして・・・？」
「クリムゾンは嫌いなんで止めてください。タタ村のセリナはわたしですけども」
「「！？」」
すっごいブスッとした顔で応えるセリナ。
先程の固まり様とは比べ物にならない程、動かなくなる二人。あのセリナにタメグチというか上から目線で説教してしまった・・・とか、あのセリナさんと一緒の任務だなんて聞いてなかったんですけども・・・など絶望やら歓喜やらなにやら良く分からない雰囲気の二人。そういえば、みんな自己紹介なんてしてなかったもんね。
「まぁ、とりあえずそのままで問題無いって事・・・だね？」
「はい、そうですコージ。心配してくださってありがとうございますっす」
最後の言葉に力が篭っていたのは、何時の間にか僕のひざの上にちょこなんと座っていたミミを突き落としたから、言葉にでちゃったんだろう。セリナ・・・大人げないよ・・・
僕のじとっとした視線を感じたのか、顔を真っ赤にしてうつむくセリナ。うむ、少し反省してください。
「なぁ、あの二人は一体どういう関係なんだ？　あのセリナが普通の娘みたいになっているんだが・・・？」
「そんなのわたしが聞きたいですよっ」
「何か言いました？」
「「いえ、なんでもありません！」」

すごい背筋をまっすぐにして答えられた。

王都へ向かえ（後書き）

お邪魔虫がくっついてくる護衛ってどうなの？　でも、駄目って言われたら
きっとセリナ暴れる・・・

ファラスの疑念

ガタゴトと時折大きく揺れながら馬車は王都目指して進む。このロバスの馬車は妙な感じでハイテクなのである。御者の替わりに何か音がでるマジックアイテムがくっついていて、音にあわせて馬が動くみたいだ。勿論、目的地まで自動で進むので迷うことも無い。なのでロバスの馬車は御者いらずとなっている。

ロバスを出て約一週間。今のところ大きな襲撃とかはなく至って順調に馬車は進んでいた。

「あーあぁ・・・学園って楽しみだったのになぁ・・・」

ぽそりとミミがそんな事を呟いた。そう言えばみんなで学園に行こうって話したよね。

「ごめんなミミ。でも、また帰ってきて落ち着いてから学園に行けば良いし、なんだったら王都で学校に行くのも良いと思う。みんなで行けばどこだってきっと楽しいよ、うん」

「うん、そうだよね。我侭言ってごめんね、コージ」

ミミ、我慢するね。と健気な様子のミミ。で、何かを期待するかのようにじっと上目遣いでこっちを見るので、ミミの頭をぽんと叩いてから撫でておいた。すごく毛質が細くて撫でると凄く気持ちが良い髪なんだよねぇ。

「マスター、ヒロコも我慢してるよ～」

「わ、わたしもです」

とか考えてたら、二人にも催促された。・・・あれ？　馬車が止まった。今日はここで野営するのかな？

「今日はここらで野営しましょう。ここから先に進むと少し危険ですからね」

と言って、外にでていくファラスさんとエリツォーネさん。こんな感じでずっと二人は本当の護衛のように良く動いている。やらなくて良いと言われてるけど僕も少しぐらい手伝おう。ぶーぶー文句言ってる二人は置いて行こう。

「手伝います。枯れ木探してくれれば良いです？」
「本当に手伝わなくていいのに、君も強情だねぇ。まぁ、一緒に行くとしましょうか」
「はい」

女の子達はエリツォーネさんと一緒に食事の準備をしているようだ。

「コージ君、ちょっと尋ねたい事があるんだけど良いかな？」
「なんでしょう？」

今日は珍しいなぁ。何を聞きたいんだろ？

「最初は思い違いかと思ってたんだけど、君と一緒にいるミミという娘なんだが彼女の素性は知ってるのかい？」
「ミミですか？　彼女は貴族に無理やり攫われてた所をたまたま僕が助けたんですけど、帰る家が無いらしいので、一緒に居るんですけど」

今では可愛い妹です。年上だけど。

「いや、彼女には帰る家はある」

あ、やっぱりそうなんだ。でもきっと訳ありなんだろうな。

「ミミ＝テスタロッサ、それが彼女の名前だ」

なんかカッコイイ名前だなぁ。

「ミミ＝テスタロッサ、それが彼女の名前だ」

コージを探しに林の奥へ入った時、ミミの名前が聞こえた。声がした方を見るとコージと男の人が居た。コージに知られちゃったぁ・・・

「なんか、かっこいい名前ですねぇ、テスタロッサって」

でも、名前を知ってもコージは相変わらずコージだった。

「そんなに暢気な事を言ってる場合じゃないんだ。彼女は忌み子だ。噂では悪魔の力が乗り移った魔女という話だ」

あ・・・そうだよね、ミミって変な光が見えるからそんな風に言われてたんだっけ。

「魔女ってミミがですか？　そんなの有り得ませんよ。変な事言わないで下さいよ、もう」

あれ？　なんかコージが怒ってる・・・？　魔女って言われてたの黙ってたからかな？

「あれは危険なんだ。危険だと言う事で処刑しようとすれば全て避けたらしい。しかも目隠しをしているのに関わらずだ。その上、代々高名な騎士しか輩出してなかった家なのに彼女には魔力がある。なので何をしても死ななかったそうだ」

なんでそんな事コージに言うの？　そっとしといてよぉ・・・

「あんな小さな子を処刑って・・・　怖い所ですね。それに魔力があるのは結構な事じゃないですか。なんで怖がるのか訳がわからないですよ」

「普通に魔術を唱えられるなら問題ないさ。だが、彼女は魔力があるのにも関わらず、一切魔法を唱えることができなかったのだ。この旅でも、彼女から魔力が感じられるのにも係わらず、まったくと言って良いほど魔法を唱えることをしなかった。魔力があれば誰であれ唱えられる筈の魔法をだぞ。魔に魅入られて魔族になりかかっている人間ぐらいだ、そんな事になるのは」

魔法なんて教えて貰ってない。だから魔法なんて唱えられる訳ないもん・・・

「それに・・・」

「もういいです、これ以上ミミの悪口は止めてくれませんか？」

気付くとコージは物凄く怒っていた。体中から赤黒い光が漏れてくるほどに。そんなコージを見て男の人は、怯えていた。

「絶対、ミミの前で今の話をしないでくださいね？　良いですね」
「・・・分かった。だが、何かあったら・・・」
「そんな事はありません、絶対に」

自信たっぷりにそう言ってくれるコージは、すごくかっこよかった。

あーもう、むしゃくしゃするー！
ミミが魔女とか魔族とか、一体どっちやねーん！　ってすっごくツッコミたかったわぃ！
なんかエセ関西弁が出るぐらいおかしくなっちゃうよ、もう。こんな時こそ深呼吸。

すーはー

ミミが帰る家がないって言ったのは、帰ったら処刑されるからだったんだ・・・処刑なんかされるようだから、相当ひどい事されたんだろうなぁ。そんなの全然わかんなかった。確かにちょっと人見知りなところがあって、慣れてる人には甘えん坊なのに、普段はすっごく臆病なミミ。でも構ってあげたり一緒にいると嬉しそうに笑うミミ。何か訳ありだろうなぁとは思ったけど、これはヘビーだなぁ、まったく。

あれだね、ミミが魔族とか何かの間違いだね、うん。魔力があるのに魔法が唱えられないってきっと魔法を教えて貰ってないから無理なんだよ！　ミミみたいな小さな子を処刑とかいうぐらいの家だから、きっと家でいじめられてて、魔法を教えて貰ってないのに、教

えたって嘘をつかれて魔族扱いされたんだよ、きっと。

だから、僕がミミに魔法を教えれば何も問題なし！　なのである。

ファラスの疑念（後書き）

代々高名な騎士を輩出してきたテスタロッサ家も、腐ってきてるようです。

ミミが魔法を使わない原因を看破したコージ君。鋭すぎる。
だけど、教える魔法がコージの魔法だと、無理じゃね？　セリナでも無理だし。

正直やりすぎた。

「ボール・ライト！　ボール・アクア！　ボール・ファイア！」
「アローシュート！」

キュッゴッドォオオオン！

えーちなみに魔法を唱えているのはミミ。魔法を教えるよ！　って強引に教えたんだけど案外素直に言うことを聞いてくれて、拍子抜けするぐらい簡単に覚えた。セリナはいまだに真似できないのに、ミミって凄いかも。

「ねーねー、コージ！　見た？　今の見てくれたぁ？」
「もうその辺でやめときなさい。魔法使いすぎると倒れるよー？」
「えー、もっと使いたい～！　駄目ぇ～？」
「だめっ！　お兄ちゃんの言う事ちゃんと聞きなさい」
「はぁ～い・・・むぅ」

「むむむ、わたしでも真似できないのに、むぅ・・・」

あー向こうじゃセリナがすっごくむくれてる。魔法大好きっ娘として唱えられない魔法が悔しいんだろうなぁ。ましてや、今日初めて魔法を唱えたミミに負けたんだもんなぁ。

「とりあえず、ボール系統だけでも覚えてると便利じゃないかな？　補助魔法とかはおいおい教えようと思うんだけど」
「ミミちゃんは、そもそも戦っちゃ駄目ですしね。万が一のときに

身を守れる程度で大丈夫じゃないでしょうか？」
「そうだね。でもなんでミミはあんなに簡単に僕の魔法を覚えられるんだろ？」
「それはわたしが知りたいです・・・」

セリナがちょっと怒った感じでそう呟く。僕の魔法もそんなに難しくないと思うんだけどなぁ・・・なんというか、イメージだけが頼りなんだよね僕の魔法。

「詠唱もないのになんで魔法が発動するのか、まったく分からないんですよ」
「うーん、こればっかりはそういう物って思って貰うしかないんだけどなぁ」

ああでもないこうでもないと、セリナと喋っているとミミがむくれた。

「もう。ミミが魔法使えるようになったんだからぁ、もっと構って！」
「あ、ごめんごめん」

ミミは物凄くストレートに表現してくる。そして、見た目が幼いのもあってそれが別に不思議に感じない。年齢は１８歳って聞いてるけど、そんなの関係ないね、うん。可愛いは正義。

「コージ、ミミのお話聞いてくれる？」

神妙な様子で、僕を真剣な目で見てくるミミ。

「ん？　どしたの、急に改まって」

「んと大事なお話なの。ちゃんと聞いてくれる？」
「聞くよ、ちゃんと聞く」
「セリナとヒロコも聞いて欲しいの」
「はい、大丈夫ですよ」
「うん、わかった」

いつもの元気な様子と違い、静かに語りだすミミ。それはミミが今まで受けてきた事や敢えて話さなかった事を語ってくれた。なんというか、僕の想像通りいじめられてたみたいだけど、想像以上のかなりひどい扱いを受けていたようだった。でも、いじめられる原因となった力が気になる。

「ミミの事、怖くない？」

語り終えたミミがそう尋ねてきたが、ヒロコもセリナも黙ってミミをぎゅっと抱きしめていた。ぷるぷると震えていたミミもようやく落ち着いてきたようだ。そんなに話すのが怖かったのに、僕たちに打ち明けてくれるなんてミミは強いなぁ・・・

「僕達はミミの味方だからね、家になんて帰らないで一緒にいようね？」

僕の言葉にうなづくみんな。それでようやくミミにも笑顔が戻った。

「ミミ、じゃあ始めるよ」
「うん、いつでもどうぞ」

僕はミミがいじめられる原因となった力が気になったので、ミミに

お願いをしてどうなるのかをやって貰う事にした。

「月光」と「ノーミス」を構え、ミミに向かって駆け出す。

「月光」の攻撃範囲の直前で、強く踏み込み魔法を唱える。

「アクセル」

万が一、ミミが避けそこなったとしてもこれで対処できるはずだ。
一気に間合いに入り込んだ僕は「月光」を横薙ぎに払って回避しにくい攻撃を仕掛けようとした。

だけど、ミミはすでに動いていた。

僕の踏み込みが、地面に付くか付かないかの時点でミミは僕から見て左手前へと、ステップし始めている。右から左へと薙ぎ払おうとすると、その方向へ回避されると初撃もそうだけど、追撃もやりにくい。

しかも、僕の「月光」の届かないギリギリの所を見極めて軽々と動いているミミ。
たとえ、「月光」を振りぬいてさらに1回転する勢いで剣を振ったとしても掠めることすらできないだろう。

だいたい、突っ込んできてる僕に、前へ突っ込んでくる時点で、ミミは場馴れしてるだろう。アクセルの魔法のおかげで、冷静に状況を判断できるけど、魔法をかけてなかったらきっと簡単に背後を取られてお終いだっただろう。

「エンド」

「ほえ？」

攻撃を仕掛ける直前で終わってしまったので、不思議そうな顔をしているミミ。

「ミミ、すごい！」
「ほきゃー！」

感激のあまりミミを抱きしめる僕。だって凄いよミミは！

華奢な見た目のせいで、守ってあげないとすぐにへたっちゃいそうと思ってたんだけど、ところがどっこい。運動神経も良く、動体視力もかなり良い、さっきも僕の一挙一動を細大漏らさず見ていた。たぶん、アクセルなしで勝負を挑んだら僕のほうが負けそうな気がする。

「はにゃー」
「あ、ごめんミミ」

ちょっと強く抱きしめすぎたのか、真っ赤な顔をして脱力してるミミ。

「駄目ですよ、女の子には優しくしないと」

いつの間にやらセリナが傍にきて、ミミをささっと奪って行ってしまった。あとでミミにちゃんと謝っておかないと駄目だね。だけど、これからはミミに僕の剣の練習相手になって貰えるね。あんな凄い使い手と手合わせできるなんて、そうそう無いからね。うふふーちょっと楽しみ。

「マスター、ちょっと気持ち悪い」
「え」
顔に出てたみたい。恥ずかしいいいいい！

羊の皮をかぶった狼（後書き）

たぶんミミが一番強い。

女の子最強！

あ、評価して頂いてありがとうございます！　嬉しいです。

「これが“パン”でこれが“馬車”です」
「うん。うん」

字が書けないミミの為に、字だけでなく算数なども教える事になりました。テスタロッサ家の人間は相当ひん曲がった人間だらけだったようで、ミミに何も教えることなどしなかったようです。むしろ、勉強しようとしたのを邪魔してたみたい。

「それはいかん！」

と、張り切ったのはなんでかファラスさん。いや、なんで？

「噂を鵜呑みにし、いたいけな子供を疑った自分が恥ずかしい」

魔族の兆候などまったくなく魔法を使うようになったミミを見て、衝撃を受けたらしい。そもそも魔族になりかかってるなら、身体のどこかが分かり易いように変わってるはずだし、処刑しようとして逃げられてるとか言うのなら、なぜ簡単に奴隷にされて売られてしまっているのか？　１つ疑問が浮かぶと後は色々と噂におかしな点がある事に気付かされファラスさんは態度を改める事にしたらしい。ミミにも謝ってた。ミミはわたわたしてたけど。

ファラスさんは旅を良くしているのだろうか、おもしろい話や経験話などをたくさんしてくれて、非常におもしろいのだ。勉強の合間あいまにそういった話をしてくれるので、勉強してる事が楽しく感じられるのだ。その証拠にミミがファラスさんから隠れなくなり、

話をせがむようになっている。

そんな平和な旅を続けていたんだけど、ミミの恐ろしいまでの強さをこの道中で知る事になった。

魔石獣。

ガイアフレームでようやく立ち向かえると言われる、生きた災害。ロバスでは確かにガイアフレーム単機で撃破してる人もいたけど、あくまで慣れた人だったし基本的にロバスを襲撃してくるのは比較的若い魔石獣なのだ。

それが今回出くわしたのは、巨大で年数を経た魔石獣ゴロック。

ロバスとグレイトエースの街道をまたぐように、周回している魔石獣でかなりの被害が出ているらしい。最初、変な所に山があるなぁと思っていたら、どうやら疲れて眠ってたらしく僕達の馬車の音で目が覚めてしまったらしい。でかいくせにナイーブだなぁ、ちくしょう。で、魔石獣の嫌な所は、休眠状態になっていると自然物みたいに錯覚させられてしまう事だ。体内にある魔石のせいであると言われているが原因は不明である。このせいで、周回コースが分かっているのにも係わらず簡単に討伐できないのである。

「うん、大丈夫だよ見てて。お兄ちゃん、びりびり剣にして貸してくれるぅ？」

何を思ったか地響きを立てて動き出したゴロックを見てそうミミが呟いた。

「いや、ミミ。あれって魔石獣だろ？　逃げないとやばいでしょ」

「ううん、大丈夫。見えるから、時間はかかるけど大丈夫だよぉっ」

にこっと花が咲くように笑い、貸してと手をだすミミ。まったく気負う所はないようだ。

「せめて、みんなでやったほうが良い！」

「今回は1人でやらせて？　危なくなったら逃げるからぁ。ね？」

いざとなったら、助けられるようにだけしておくか。とりあえず「月光」の使用者認証にミミを追加。モードを雷にしてミミに渡す。

「じゃ、行って来るねぇ～♪」

と言うが早いか、ダンッ！！！　と地響きをさせ一気にゴロックに突っ込んでいくミミ。ゴロックの形状は簡単に言うと亀。ワニガメみたいな凶悪な顔とごつごつとした皮膚に巨大な手足。だけど、動きは俊敏で手足だけでなく、シッポも伸びて攻撃してくるらしい。

まずは左前足にとりついたミミ。タンタンッと足に剣を突き刺し、逃げては突き刺しを繰り返している。執拗に左前足を攻めて立てるミミに対して、左前足をひっこめて、頭を伸ばしてミミにかじりつこうとするゴロック。

だけど、左前足が引っ込んだ瞬間に右後ろ足に向かってすでに移動を終えているミミ。どうやって攻撃してくるか分かってるみたいで、先を読んで行動している。胴体の下を潜り抜けてる時にプレスされたらひとたまりも無いのに、良くやるなぁ・・・

左前足をひっこめているので、右後ろ足はひっこめにくいらしくしきりに逃げようと動くゴロック。左前足を出せばいいのに、逃げる

事に精一杯な感じでこいつは、お馬鹿なんだなぁって思った。だけど、よくよく考えたらゴロックを精一杯になるまで追い詰めているミミこそが凄い事に気付いた。だって、左前足を出そうとする度にゴロックに分かるように剣をそっちに向けて牽制してるんだもん。

シッポまで使ってミミを遠ざけようとするも全て回避されたあげくシッポに一撃を喰らい、びりびりと痺れてしまう始末。そして、まだまだ続くかと思われた瞬間にけりが付いた。

ミミの攻撃にたまらず右後ろ足までひっこめたゴロック。

だが、それこそがミミが狙ってた瞬間だったようで、ひっこめた瞬間ゴロックの甲羅の下側のど真ん中に剣を付きたてた！

その瞬間の反応はすさまじく４～５０メートルほど飛び上がったかと思うと、地面に落ちてきて、落ちる瞬間にミミにひっくりかえされてしまい後はもう起き上がることは無かったのだ。

「ただいまぁ～、もう大丈夫だよ。あれで何もできなくなったからね♪」

汗１つかかずに帰ってきて明るい声でそう嬉しそうに語るミミ。君のその細い身体でなんであんなに力が出るのか、おにーさんは驚きだよ。

驚いたけど、褒めてあげないとね。よしよし撫でて上げよう。

「よく頑張ったね、ミミ」

「ん～♪」

ミミは褒めてあげると凄く喜ぶ。きっと褒めて育てると伸びる子だよね。これ以上伸びてどこまで行くかは考えると恐ろしいけどもね。

・・・あれ？　セリナにしろミミにしろ、内のメンバーって女の子が断然つよい・・・
これってどうなのよ・・・ねぇ？

魔石獣ゴロック（後書き）

初見のはずのゴロックに対して自信溢れるミミ。不思議。

来ちゃった王都

王都グレイトエース。

バルトス王国の首都である。以前は海側にあるバルトスという王国の名前と同じ名前の都市が首都だったんだけど、ガイアフレームの発達によって、物流が海に頼らなくても済むようになり、もっと守りやすい都市を最初から計画して作って、そっちへ遷都しようということになって、今に至るということらしい。

グレイトエースが首都になってまだ5年程で新しく綺麗な町並みらしい。庶民上がりの王様が計画に携わったらしいのだが、才能があったのか今のところ都市機能に関して、不満は特に挙がっていないそうだ。首都機能を移すとなると、今までの行政を滞りなくできるように、無茶はできないはずなのに遷都は一ヶ月もしない内に終わったらしいし。なんだか凄い王様なんだなーってファラスさんから話を聞いてて思った。

そして今首都のゲートをくぐる為の検問が厳重に行われている。首都というより要塞のような厳しい印象を受ける。まぁ、ガイアフレームなんて物があるせいで、被害を抑えようとしたらどうしても物々しい雰囲気になるのは仕方ないんだろうなぁ。

「失礼する。・・・よし」

声がしたかと思うと、いきなり馬車の扉が開き兵隊らしき人が中を確認して戻っていった。検問の応対をファラスさんとエリツォーネさんに任せているので、馬車の中は未成年が4人いるだけだから、簡単に確認しただけっぽい。書類とかは皆の分を書いてファラスさ

んに渡してあるしね。めんどくさかった・・・

さて、首都に来たのは良いんだけど、何か雰囲気がおかしい。兵士たちが殺気立ってる感じがするし、どうも旅行者の行く先を制限しているらしく観光もほとんどできないみたいだ。わざわざこんな時期に来るなんてついてないって思ったけど、ファラスさん達はこの原因を探る為にきっと来てるんだろうなぁ。

「それでは、まず宿を探してゆっくり休む事にしよう。観光は明日からだ」
「はい、分かりました。それでお願いします」

なんというか、道中はずっと雇い主と護衛という関係を演じてたおかげで、自然と言葉使いや振る舞い方がそれっぽくなっている。意外となれるもんなんだねぇ。

「セリは、どうする？　何か調べておく事とかある？」

一応、この世界に縁も所縁もない僕とヒロコ以外は名前を微妙に変えて呼ぶことにしてある。セリナはセリ。ミミはミーシャ。最初はミーちゃんだったんだけど、なまってそうなった。

「いえ、特にこれといっては無いですね。この首都には初めて来たので勝手も分かりませんし。とりあえず、案内所で何があるか調べるぐらいはしておきましょうか？」
「まぁ、観光できる所を調べるのも良いかもね。行くかどうかは別にして」

首都の地理を把握してないと、何かあった時に逃げられないだろうし、合流するときに場所が分からなかったら、目も当てられないし

ね。でもなんていうか、この首都は道が凄く通り易くできていて、碁盤の目のように整然とした造りになっているので迷子になる事は少なそうではある。こんなに通りやすかったら攻め易くて危ないんじゃなかったっけ？

「いえ、それがそうでもないみたいですよ。むしろ、通り易くしておかないとガイアフレームをスムーズに戦線に送り込めないみたいで、こっちの方が何かと都合が良いようです」

「へぇ～、エリツォーネさんて詳しいんだねぇ」

「首都には結構頻繁に訪れていますからね。色々聞いているんですよ」

にこっという感じではなく、そっと笑うエリツォーネさん。そろそろエリさんって呼んでも馴れ馴れしくない・・・よね？　いい加減、舌を噛みそうになるんだよねぇ。

そうこうしている内に無事に宿に着いた。

「スーパーパワーホテル」

んー・・・なんというかネーミングセンスが欠如してるよねぇ？

僕のいた世界にも同じ名前のホテルがあったんだけど、そっちは全国にチェーン展開してて結構はやってたけど。

でも、どうやらこのホテルも首都のなかでは、有名らしく宿泊客も多いらしい。案内所が配っている冊子にも紹介されているぐらいだ。

宿について荷物を下ろし、落ち着いた所で今までしてなかった宿題とも言えるギルドの登録をここで済ませようと思う。そう、ロバスでも結局ギルドの登録ができずじまいだったのだ。なんだかんだで１つの町でゆっくりしてられなかったからねぇ。ギルドの登録してないと検問がめんどくさいのよ・・・

「それじゃファラスさん、ギルドに行って来ますね」
「スリにだけ気をつけてな」

ひらひらと手を振って、作業の手を休めずそう注意してくれるファラスさん。まぁすぐ近くだし、1人でも大丈夫だろう。あ、ミミはともかくヒロコは登録しといた方がいいよね。

セリナ達の居る部屋へ行き、ドアをノックするとミミが出てきた。

「お兄ちゃん何？」
「あ、ミミじゃないんだ。おーいヒロコー、ギルドに行くよー」
「ほーいマスター」

少し不満げなミミを置いて、ひさしぶりに二人きりな僕とヒロコの暢気なコンビは、ギルドへ行くために宿を出た。ギルドで絶対登録するぞー！

二人でおでかけ

「コージとヒロコだけで行かせて良かったのぉ？」
「たまには二人で居させて上げても良いと思いまして。そもそも二人で旅をしてたみたいですから、二人で話し合うこともあるかなと」
「そうなの？　セリ・・・とずっと一緒なんだと思ってたなぁ」
「ふふ、コージと知り合ってまだ一ヶ月ぐらいなんですよ、これでも」
「ほぇ、そうなんだ！」

「二人とも謎なところが多いんですが、何故か安心できるんですよね」
「うん、ミ、ミ、ミーシャも一緒。コージ大好きぃ」
「うふふ負けませんよ。少なくともここは」たゆん

「・・・ぅ、成長するもん、大丈夫だもんっ」
「まぁまぁ、二人が戻ってくるまで大人しく荷物をまとめておきましょう。ね？」
「すぐ帰ってくるかな？　ギルドって近くにあるんだよね？」
「そうだと聞いてますけど、早くかえってくるかどうかは・・・」

「コージって何かと巻き込まれ易いもんねっ」
「ですね。きっと今日も何か巻き込まれてますよ。ふふっ」

なんて話を、宿の一室でセリナとミミが話してるとは夢にも思ってもいなくて。
きっちり僕は厄介ごとに巻き込まれることになるのだった。

ひさしぶりにヒロコと二人で出掛ける。最初にこの世界に来て以来だから大体一ヶ月ぐらいぶりだ。だけど、ヒロコは僕の傍にいつもいるから、二人きりだからと言って特に話す事とかは無いんだよねぇ。

「今日こそギルド登録するよ、ヒロコ」
「ほいほい。なんかいっつもできないもんねぇ」

にひひ。と意地悪そうに笑うヒロコ。くそぉ、何が言いたい。

「きっと今日も登録できないよ、マスター」
「不吉な事を言うんじゃありません！　めっ！」
「あ、なんだろあれ？」

ヒロコが何かを見つけたようで、大きな声を上げた。もう、すぐに気が逸れるんだから。

「あ、ここって印持ちの人の協会だ」

首都って事で人が多く集まるから、それだけ印を持つ人も自然と集まるから協会があるって言ってたっけ。そういえば、僕も印を持ってるかもしれないんだよね？ちょっと調べて貰おっかなぁ。

「マスターって何か印があるかもしれないんだよね？　調べてかない？」
「奇遇だね、僕もそう思ってたんだ。よし、寄って行こう！」

えっと、シールアソシエーションって言うんだ。ギルド協会の建物と同じぐらい立派な造りで、それなりに認められてる組織なんだな

ぁって伺わせる。協会の扉は開け放してあって、誰でも出入りしやすいようになっている。僕とヒロコも初めて入るんだけど、開けっ放しの扉のおかげで、すんなり入れた。ほら、初めて入るところって結構気後れしたりすよね？　僕だけ・・・？

「こんにちは、シールにようこそ！　今日はどのような御用でしょうか？」

受付のお姉さんと目が合った瞬間に元気な声で挨拶されてしまった。

「あの、印があるかどうかって調べられるって聞いたんですけどできますか？」

「あ、はい印の検査ですね。今回初めてですか？」

「はい、今日初めてです」

「では、検査費用として１０シルバー頂きます」

高くも安くも無い値段で、結構気軽に支払える。なんだかんだで、印を持ってると便利なわけで、調べに来る人も多いんだろうなぁ。

「はい、では２０シルバー丁度です。ではあちらの赤い板が掛かっている部屋へこの札を持っていってください。そちらで検査をしますので」

僕とヒロコの分を支払って、なんかぺらぺらの札を持って赤い板がかかっている部屋に入る。そこには、すでに何人かが検査に来ていて大人しく並んでいた。並んでいる人をそっと見てみると、僕ぐらいの年の子から、けっこう年配の人まで男性も女性も関係なく並んでいた。昔は印を持ってる人って迫害されていたって聞いていたけど、今じゃそんな感じではないようだ。これだけの人が普通に検査に来てるって事は、印の力が世の中に認められている証拠だと思う。

「はい、次の方」
「あ、はい」

どうやら僕の番が来た見たいだ。

「あー初めての方ですね。では、少しだけ説明させて貰います」
「あ、お願いします」
「印を持つ方は、この機械を使って簡単に調べることができます。」

と言って、手元にある懐中電灯のような物を持ち上げる。

「どうなるかは今は言いませんが、これで調べて印があると分かった方は、次に印がどういう力を持つものなのかを向こうの黄色の板の部屋で調べます」
「あの印って生まれつき持ってるって聞いたんですけど分からないもんなんですか？」

そういえばエドが印は生まれつき持ってる言ってたよね。

「ええ皆さん生まれつき印を持っているんですが、力が出てない印の場合もございましてそういった印はいくら検査しても分からないものなんです」

あれ？　ということは誰でもみんな印を持ってるって事なのかな？

「まぁ、印持ちを毛嫌いしている方は、誰もが生まれつき印を持っているという説は真っ向から否定されていますけどね。とりあえず、時期によって印が出てくる可能性があると覚えて頂ければ良いと思います」

「で、どんな力の印かを調べた後、シールにて個人登録を行います。うちも人材の貸し出しを行っているので、誰がどんな印を持っているかを把握している必要があるのです」
「え、それって強制なんですか？」
「いえ、強制という訳ではありません。ただ、うちに所属している方が便利なので、調べた方はだいたい入会して頂いてますけどね」

ふーん、とりあえず印があるかどうか調べればいっか。

「では、そろそろ検査を始めましょうか」
「はい、お願いします」
「では、こちらを向いてください」

と、先程の懐中電灯をこちらに向ける。なんだかぼんやり光ってるかな？　よくわかんないや・・・

「はい、結構です。お疲れ様でした」

怪訝そうな表情をしてる間に検査は終わったようだ。ってこれで終わり？

「どうやらコージさんは印は無いようですね。また折を見て検査に来て見てください」
「あ、そうですか。ありがとうございました」

ちぇっ、印ないのかぁ。残念。ヒロコはというと、凄い笑顔で

「ない！」

とだけ教えてくれた。あっても無くてもヒロコはヒロコだもんね。

さぁ、次こそギルドに行くかー！

二人でおでかけ（後書き）

ギルドにいけません。何かの力が働いてるとしか・・・

きっと妖怪、ヨコミチソレコサンの力だと思います。

メッセージ

シール協会の建物から出て、いざギルド協会に行こうとしたその時。

「ん、あれ？　マスターちょっと行って来る」

「へ？」

ヒロコが急に路地裏に入って行った。まったくもう、今度は一体何を見つけたんだか。ヒロコは結構こうやって急にどこかへ行くことが多い。そして、猫や犬やなんかペットっぽいものを見つけてきては、捕まえて遊ぶのだ。

「今度は何を見つけたのかなぁ」

まぁしばらくすれば、戻ってくるだろうし少し待っておくかぁ。と、しばらく待ちの体制に入った僕の目に兵隊さんが移動していくのが見えた。そういえば、なんでこんなに兵隊さんが居るのか謎だよね。ちょっと聞いてみよかなぁ。

「すいませーん」

「ん、なんだ？」

「僕、観光に来たのですけど、なんで兵隊さんが一杯いるのか気になりまして、教えて貰えないかなって思いまして」

無愛想な兵隊さんにおっかなびっくり僕が尋ねると、怪訝そうな顔をしながらもちゃんと答えてくれた。

バルトス国の王様がどこかの国の刺客に狙われて、怪我をして伏せているらしい。刺客に襲われたのなら門を閉じて、入出国を制限すればいいのに制限したのは襲われてから一週間だけで、それ以降は

王様の意向で門戸を開くと、偉い人から宣言があったそうだ。

なんでも、門を閉じたままだと観光に来る人を締め出してしまうし、町の中の人も商売がしにくくなるので、一般人の生活が困ってしまう。だけどそれは避けたいと王様が言ったらしい。ただ、やっぱり刺客がまた入って来ないとも限らないので、こうやって兵隊さん達が街中を警戒しているとの事なんだって。

そう話してくれた兵隊さんは、うちの王様は凄い！　って顔をして説明の最後のほうはすごい熱弁になってた。とりあえずお礼を言ってその場から離れた。あれ？　なんかヒロコが入っていった路地裏が慌しくなってるぞ・・・？

まさか、ヒロコに何かあったんじゃ？

と思いつつ、路地裏に入っていくとそこには兵隊さん達に囲まれているヒロコの姿があった。一体何があったんだろ？

「すいません、僕の仲間が何かしましたか？」

「ん？　おまえもこの娘の仲間か。おい、お前達こいつも連れて行くぞ」

「え、ちょっと・・・」

辺りを見渡せば、建物の屋根が崩れて下に落ちたらしく残骸が転がっている。なかなか凄い壊れっぷりでこれをヒロコがやったのなら、兵隊さんが物々しい雰囲気なのも分かる。だけどヒロコは無闇に物を壊したりしない。何か誤解されてるんだ。

「うちのヒロコは物を壊したりする子じゃありません。やったのは

この子じゃないです。だいたい、こんだけ派手にどうやって壊すんですか！」

「大きな物音がして、我々が駆けつけた時にはこの娘とこの残骸があっただけだ。この路地裏から誰も出て行かなかったし、彼女以外に誰が犯人だと言うのだ？　言って見ろ」

「それは・・・」

「この娘は身分証も何もない。坊主は身分証はあるか？」

あー・・・ギルド証は作ろうとしてる所だったからまだ持ってないから、全く何も無い。

「おまえもか坊主。ちょっと詰め所まで来て素性を詳しく聞かせて貰おうか。行くぞ」

「・・・はい、分かりました」

今、この時点でどうやっても無実を証明できないので、とりあえず大人しく付いていくしかないか。現場に数名の兵隊さんが残り、二人の兵隊が僕たちを連行して行った。

結局、どうにもできないまま事情を聴取されて、素性が良く分からないし屋根を壊しているとは言い切れないので、様子を見るという事で所謂ブタ箱に1日お泊りすることとなった。だけど、そこで持ち物を「ノーミス」「月光」を含めて取り上げられた。指輪は外れないから、取り上げられなかったんだけど、僕に何か魔法の力があると思われて魔力を封じる部屋に入れられた。

「あー、なんでこうなったんだろうねぇ？」

「マスターごめんなさい。ボクも気付いたらこうなってたの」

牢屋で落ち着いてヒロコから話を聞いたんだけど、ヒロコは何かに

呼ばれた気がして路地裏に行ったのは覚えているんだけど、そこから先はもう兵隊に囲まれていたらしい。あの壊れてた屋根の残骸はまったく身に覚えがないらしい。ヒロコが嘘を言ってるとも思えないし、きっとあそこを壊した人間が、ヒロコに何かをしたんだろうと思う。

「ん？」

申し訳なさそうなヒロコの顔をじっと見ていると、額に何か光るものが見える。何か付いてるのかなと思って、おでこを拭いてあげようとしたその瞬間、それは起こった。

「聞いてるか光司。いや光司とは限らないが光司を知っている人間であるのは間違いない。訳があってこの精霊の力を借りて連絡させて貰っている」

ヒロコの目がうつろになったかと思うと、男性の声がそう語りかけてきた。

「今、王宮を逃げ出してドジった所にこの精霊を見つけた。俺はロバスに行く。これを聞いたらすぐにも向かって欲しい。“るり”も一緒にいる」

「母さんが？！」

「では、やばそうなのでこれで！　がんばれよ光司！」

と、その声を最後にヒロコが正気に戻った。

「ふぅわっ？　なにボクなにかした？！」

「何かしたっていうか、何かされてたみたいだね、どうもここからすぐにでも出て行かないと駄目になった」

正直、男の話は罠かもしれないと思ったんだけど母さんの名前を知ってることが気になる。こっちの世界の人間が知ってるとも思えない。いや心当たりならひとつだけある。

「メッセージ送ってきた奴か・・・」

たぶんそれ以外に考えられない。なら急いで母さんを助けに行かないと母さんが危ない。

さて、いっちょ牢獄破りをするとしますか！

メッセージ（後書き）

前科一犯・・・？

脱獄するよ！

さて、ここを出ると決めたからにはささっと出て行きたい所だけど・・・

「魔法が使えないんだよねぇ、まじで」

そう、この部屋は魔法がほんとに使えない。球魔法も、この世界で学んだ炎系の魔法もまったくもって発動しない。術式はちゃんと思い浮かべてるんだけど、そこに魔力を流し込めない。どうやっても僕の中から魔力が出て行かないんだよねぇ。

「武器は取り上げられちゃったしなぁ・・・何か良い物ないかなぁ」

幸いにも指輪は取り上げられなかったので、中に入っているものを漁る。光浮き輪君にライター、カートリッジが山盛りに、サインペン、メモ帳、買ったけど結局使ってないマント。

「ヒロコも魔法使えない？」

「ボクも無理だよマスター」

精霊のヒロコでも無理なのか。どういう仕組みなんだろ？　こんな魔法を完璧に封じるなんて凄い効果があるなんて・・・

「うーん・・・何かないかなぁ・・・」

ああでもないこうでもないと悩みながら、手持ち無沙汰な僕はカートリッジを放り投げては受け止めて遊んでいた。

「あっ」

カンッキンッカランカラン・・・

遊んでたカートリッジが、手から離れて床に落ちちゃったんだけど、落ちた瞬間カートリッジから魔力が流れた気配があった。カートリッジの構造上、先端を押すと魔力が流れるようになってるんだけど・・・試しに先っちょを押して見る。

魔力が流れてる。

てことは、術式を書いてカートリッジの魔力を流し込めば魔法が発動できるかも！

「ノーミス」を造る時に書いてた術式で役に立ちそうな魔法は・・・氷と炎かな？

メモ帳にサインペンで術式を書き込み準備を整える。最初は床に術式を書こうと思ったんだけど、床に書いたら魔法がどこに向かうか良く分からないんだよね。

「よし「氷」魔法！」

リリリリリリリリリンッ！

カートリッジの魔力をメモ帳に流し込むように押し付けるとしっかり魔法が発動した。よし、成功だ！氷と炎の魔法を交互に鉄格子に浴びせ、最後に氷魔法をありったけぶち込んで、鉄格子を蹴破った。

あれ？　なんだか外が騒がしい。もしかして気付かれたのかも。

「ヒロコ、気付かれちゃったかも！　急いで逃げるよ」

「わかったよ、マスター」

連れてこられた道を辿り、出口へと向かう。とりあえず、魔法が使えるようにはなったので防御魔法を唱えておく。何があるかわかんないからね。あとはトレイルさんが使ってた魔法をちょっと変えて拝借。

「“我が身の魔力よ、我が身を巡り我に無敵の力を与えたまえ！オーディス！”」

呪文をうまく変えると、同じ魔法でも効果がかなり違う事を教えて貰ったので改変版の身体魔法を唱える。この呪文を探す為にいくつか試したんだけど、身体強化はされたけど後の反動が物凄くて使えない呪文になったり、足の力だけが何故か強くなったりと色々あった。で、今のところ使い勝手がいいのがこの呪文ってわけ。

「ヒロコ、しっかり着いて来てね。・・・アクセル！」

オーディスとアクセルの重ねがけは魔力が凄い勢いで減っていくけど、急いで脱出しなきゃ駄目なので無理でも押し通す！　って、さっそく曲がり角に誰かが来てる！　足元を狙うために体勢を低くして、一気に角から躍り出て不意打ちをしよう。

ダッ！

身体強化の効果は凄まじく、アクセルの効果中なのに凄い勢いで景色が流れる。あっという間に曲がり角に躍り出た。衛兵が二人だ。よし、まだ気付いてない！
しまった「ノーミス」が無いから、近づかないと駄目なんだ！
とりあえず、体当たりをして二人をふっ飛ばしました。偶然、つぼにはいったのか二人とも気絶してくれたので良かったんだけど、こ

の行き当たりばったりじゃ駄目だ！

とりあえず、次からは相手を転がして紐で縛ってしまおう。よし、腰に何本か紐をぶら下げてっと。なんで紐なんてあるかって？　盗賊出たら縛る為にたくさんあるのだ！

次に敵が出てきたときの方針が決まったところで、勢い良く通路を駆ける。ヒロコもちゃんと着いて来てるようだ。

ん？　向こうから人が来てる。1，2，3，4人いる。顔を隠すほど深くフードを被っている怪しい4人組。ひょっとしてさっきから騒がしいのはこの怪しい奴らが入ってきたせい？

「先手必勝！」

とりあえず、先頭にいる小柄な人影の足を狙って手を伸ばす！

「えっ？」

足を払って転倒させようとしたのに、すこし掠めただけで避けられてしまった。オーディスでかなり早くなってるのに、なんで避けられる？！　だけど、掠めたから当たらないというわけじゃない！

敵は4人いるので、手早く倒さないと衛兵達が嗅ぎ付けてきてしまう。

って、なんかびっくりした様子の小柄な影。かと思ったら、凄い勢いで飛びついてきた！

後ろにいるヒロコに向かわれるとまずい！　と思って、相手を地面に叩きつけようとよく見るとフードが徐々にめくれてきて、そこにミミの顔が出てきた。あれ？

「エンド！」

「コージィイイイイ！」

ごすっ。

「ぉぉおおおおおおおぉ・・・・・・ぅ」

だめ。みぞおち直行コースは駄目だよミミ・・・

脱獄するよ！（後書き）

うたた寝したら、朝の五時。驚きの朝。

ハイテンション

ミミ達と合流した後は、ファラスさん達が用意していた逃走ルートを使う事ですんなりと牢獄から脱出する事ができた。

ファラスさん達も牢屋に用事があったようで、任務も無事こなせたようだ。どうも、捕まってた王様を探しに来たらしいんだけど、王様は自力でどうにか脱出してたらしい。さすが庶民派の王様、パワフルだなぁ。

お城から少し離れてようやく落ち着いて話をする事ができた。

最初、ファラスさん達は任務を達成するべく王宮に忍び込んだらしい。それで牢獄の周辺をうろついている内に、牢屋に捕まってたはずの王様の姿が見えないのでどうしたものかと思案していたところ、騒がしくなってきたそうだ。兵士達の話を盗み聞くと、どうもヒロコと僕が捕まった所が王様が逃げたルートと合致するらしく、僕達が逃走を手助けした犯人と思われて、尋問しようとしていたらしい。なので急遽助けに来てくれたそうだ。

「ほんと助かりました、ありがとうございます」

あやうく、兵士達の群れと鉢合わせするところだったようだ。で、早速で悪いんだけどロバスに戻らないと駄目な事をお願いしなきゃ。

「僕、急いでロバスに戻らないと駄目なんです」

「まぁ、私たちも用は済んだことだし早急に戻るつもりだけどね」

「そこで1つ提案があるんですが、聞いて貰えます？」

「ん？」

趣味と実益を兼ねた逃走方法を選択しよう。ちょっとぐらい無茶しなきゃ駄目だよねっ。

ギュィィイイイイイイイイイイイィィィ・・・・・・・

ホワイトファングに乗ってから、ガイアフレームに無性に乗りたくなった。ホワイトファングに乗る前は、憧れだけで済んだんだけど一度乗ってしまうとやっぱり中毒になるよね！

「お、おい。本当にこれで大丈夫なのか・・・？」
「大丈夫、大丈夫！　むしろ病みつきになるよ！」

なにかはっちゃけちゃった僕は、ガイアフレームの販売店に押し入り、頑丈そうなガイアフレームを強奪。一応、代金代わりに素材は置いてきたけども。そのせいで少し慌しくなったけどロバスに行くにはこれが一番早いんだ。

そうガイアフレームで、空を飛んで行くのが。

「飛行ユニットなんて聞いた事ないんですけど、これどうなるんです？」
「勢い良くすっとんで行きますよ！」

前からガイアフレームで空を飛びたいと考えてた僕は、飛行ユニットを考えていた。背面から胴体を抱え込むように装着部を取り付け、翼とエンジンを着けた物だ。ジェットエンジンならぬ炎魔法エンジンと言うべき物を左右に二基ずつ装備し、機動性を増す為に可動部

を取り付け垂直離着陸も可能としている。ただ僕以外には、頼りない板がちょいと付いてるだけなので飛べるようになるとは全く思えないだろう。

「エレメンタルフレア！　発進！」

ゴッ！！！！！！

即席で付けた名前を叫び、虚空へと飛び立つガイアフレーム。もとい空を飛ぶからスカイフレームとでも言うべきかな？

「う、浮いてる？！」

「・・・」

「うわぁ、すごく魔力消費してますねこれ。大丈夫ですか？」

「おー、飛びそう飛ぶぞ飛んでるぞぉ！」

「わぁ、すごぉい！」

コックピットの中は人で一杯だ。ハッチを開けて飛んでるから、風もびゅうびゅう入ってくるし。機体前方に結界張らないと大変な事になりそうだ。

手元のコントローラーを操作し、急上昇した後水平飛行へと移行する。セリナが呟いていた通り、スカイフレームは魔力の消費が激しいのだ。いま付けてる翼の浮力なんてたいした事はないと思うけど、少しは魔力の消費を抑えられるのだ。

「よぉし、このまま南東に向かって飛べばロバスに着けるけど、どれぐらいかなぁ」

行きは馬車だったけど、街道は結構くねくねしてるから、二週間ぐ

らい時間が掛かったんだよね。空だとまっすぐ飛べるから、関係ない。スピードも段違いだしね。たぶん本気だして飛べば1時間もかからないはずだ。抑えて飛んでも2時間ぐらいかも。

「たぶん、2時間ぐらいかかるからトイレとか気分悪くなったら教えてね！」

僕？　僕は空飛んでるからテンション上がって何時間でも行けそうなのです。よし、待っててね、母さん。

ゴォオォオオオンンッ・・・・・・・・ッォォ・・・・・・・ン

薄暗い森の中を疾走する男女を乗せた馬の頭上をガイアフレームが飛び去って行く。

「ありゃあなんだ？　おまえは何か知ってるか？」

大音量を響かせ一瞬で飛び去ったガイアフレームを、不思議そうに見つめ一緒に乗っている少女に尋ねる男性。

「こっちの世界の事なんてぜーんぜん知りませんよぉだ。それより、こっちに来てからの話をきりきり話してくださいね。主に女性関係を。・・・時間はたっぷりあるんですしね？」

にっこりと笑ってる少女。でも目が笑ってない。

「いや、向こうであいつが好きそうなもので何か・・・だから、牢

でも話しただろ？　女性とは何もな・・・ちょっ信じて本当だから信じてぇえええええ！？」

あ、男が馬から落ちた。南無。

うっかり

スカイフレームことエレメンタルフレアを駆る事、三時間弱。休憩を挟んで居たら少し時間が掛かった。ロバス近辺まで戻ってきたので、後は着陸して陸からロバスに行く事にした。空とぶと目立つもんね。

「ねーファラスさん。ロバスの検問楽に通れる方法ないの？」
「そんなものはギルドに登録しとけば良かろう。登録してないのか？」
「いやそのぉ、ギルドに登録しようとすると、何か起こるんですよねぇ・・・ひょっとして、誰か呪ってる！？」
「いやいや、無いから。ふむ、今回はなんとかしてみよう」
「ありがとうございます！！！」

さすがファラスさん、言って見るもんだね。これであの面倒な書類を書かなくて済むよ。町から町へ行くたびに、あれ書くの嫌だから、ギルド登録したいんだけどなぁ。お、もう深夜っていい時間なのにロバスは明るいなぁ。今日は北側のブロックから中に入ろう。

ガイアフレーム専用のゲートに行き、ファラスさんに手続きをして貰う。顔の確認はされたけど、面倒な書類はパスできた。良かった。

「では、これで任務完了だセリナさん。また何かあればよろしくお願いします」
「ありがとうございました。機会があればまたお願いします」

と、ロバスに入るなりセリナに敬礼しファラスさん達は、任務の報告に行くみたいで早々にどこかへ行ってしまった。おつかれさまー

とちょっとご飯一緒に食べたかったけどまぁ、いっか。とりあえず、ロバスに戻ってきたからメッセージの男を捜そう。

「あ」
「どうしたんですか、コージ？」
「一体どうやって見つければ良いんだ・・・？」
「ん・・・？」

ヒロコを通じてメッセージを残してきたのは良いけど、ロバスに行くとしか奴は言ってなかったから、どこに来いとか落ち合うとかそういう話は一切なかった。しかも、向こうはこっちを知ってるみたいだけど、こっちは向こうの事は何も知らない。知ってるのは声ぐらいだ。

「とりあえず、母さんらしい人が居ないか探して見るしかないかぁ」
「お母さんがロバスに居るんですか？」
「うん、どうもロバスに来てる・・・はずなんだけど、どこに居るかわからないんだよね」
「？？？　どゆことぉ？」

あー、そういえばなんでロバスに早く帰りたかったか言ってなかったっけ。なので、牢屋の中であった出来事を二人にも話した。あ、ヒロコも聞いてなかったから三人か。

「んと、コージ。聞いていいかなぁ？」
「うん、何？」
「ミミ、思ったんだけどね、お母さん、ロバスに来るのはだいぶ先じゃないかなぁ？」
「え、なんで？　だってロバスに行くって言ってたし・・・」
「だってぇ、昨日のお昼にヒロコと一緒に捕まったでしょぉ？」

「うん、そうだねぇ。昨日というか今日というか微妙だけど」
「いいのっ！　でねぇ、ヒロコに悪さした人はぁ、昨日の昼ぐらいに首都を出て行ったと思うんだぁ」
「あっ！」

そうだった！　メッセージを残した奴はヒロコに何かしてから首都を出たはずで、首都からここまで馬車で2週間ぐらいかかるんだった！　だったら、着いてなくて当然じゃないか・・・気が急いてると駄目だねぇ。自分の間抜けさ加減にちょっと悲しくなってくるよ・・・

「まぁまぁ、なんにせよ先に着いてる分には問題無いじゃないですか、コージ」

ね、と慰めてくれるセリナ。でも目がちょっと笑ってる。いいよ、自分でも馬鹿だなぁって思ってるんだし。ちぇっ。あーこの妙に空いた時間をどうしよう・・・こっちから探しに行こうにも相手の姿が分からないし。母さんは分かるけど隠されてたらさすがに分からないもんなぁ。

「トリプルセブンに行って、今日はもう寝ようか」
「そぉだね、ミミは明日ちょっと寝坊したいなぁ」
「うんうん」

なにせ強行軍だったもんね。僕も魔力の使いすぎで疲れた。宿でゆっくりしよう。

次の日の朝。ぐだぐだと昼間で寝て過ごす予定が習慣というのは恐

ろしい物で、いつもの時間に目が覚めてしまった。なんか二度寝する気分じゃないし、せっかくだから起きておこう。あ、そうだ、武器が取られたままだから新しく作っておこう。で、せっかくだからちょっと色々改良してみよう。

今回、魔力が使えなくなったけどカートリッジのおかげで助かった。なので、カートリッジでできる道具を増やしていこうと思う。というか、カートリッジ方式だと静かに魔法を詠唱できるからセリナみたいな不意打ちができる・・・と思う。銃タイプじゃなくてカートリッジをメインとして考えよう。

くるっと回してポンッて感じで、簡単に魔法を発動させられるようにするにはどうしたら良いかなぁ～？　普段から持てる物で、マジックアイテムじゃなくて、武器にもまったく見えない物で・・・

あ、懐中電灯みたいな形はどうかな？　スイッチを入れる事で魔力が流れて魔法が発動して、人差し指が当たる所らへんにもスイッチを作って押すと使う魔法を変更できるようにしてみようか。親指側のスイッチをAボタン、人差し指の方はBボタンにしよう。Aボタンを押し込む事で魔法を連射するようにし、Aボタンをスライドする事で、剣モードになるようにする。まぁ魔法によってはできないけども、できない魔法の場合は一発だけで終わるようになるかな。あと、今どの魔法を選択してるか分かるように、Aボタンの上側に窓をつけてそこに表示しよう。うーん、Bボタンの使い道が他にないかなぁ？　あぁ、Bボタンを押しながらじゃないと魔法が発動しないようにすれば、懐中電灯として使えるようにしよう。

武器はこれで良いとして、アクセルやオーディスとかの補助魔法やマテクトとかの防御魔法、リフォーガみたいな治癒魔法などを静かに唱えるのはどうしよう。懐中電灯方式でもできるんだけど、それ

だとなんかつまんないしなぁ。

カード形式だと、アクセルやオーディスみたいな魔力を随時消費する魔法が使い勝手悪くなっちゃうし。うーん、魔法の数も多いから魔法を選ぶのも大変だしなぁ。たくさんの魔法を簡単に選べて、発動もすぐにできるとなると・・・携帯電話！

携帯だったら魔法に番号を割り振れば、僕が覚えきれるかどうかは別として魔法がどれだけ増えても登録できる。あ、だけど相手を特定するのにどうしようかなぁ？　アンテナみたいな物を付けて、その方向に魔法が発動するようにすればいっかな。とりあえず、その方向で作って使い勝手が悪かったら、創り変えようっと。

懐中電灯型の道具を「ギル」携帯電話型を「千変万化」と名前をつけとこう。

うっかり（後書き）

母さん探して三千里。も移動していません。

腕試し

新しく作った「ギル」と「千変万化」のテストをする為に、ロバスにある古代遺跡に行く事にした。古代遺跡には、さまざまなモンスターが居るという事なので生活費というか借金を返すためと、新しい道具のテストにも丁度良さそうなのだ。

「お母さんがぁ、戻ってくるまで、時間あるからたぁくさん稼ごうぉね、コージッ」

自分の力がみんなの役に立つと分かったミミは嬉しそうだ。というか、ミミだけで大概のモンスターを倒してしまえるんじゃないかなぁ？

「ミミ、あんまり張り切らなくて良いからね。これ試したいし」

と、「ギル」と「千変万化」を叩いてアピールする。

「うふふぅ。どうしよっかなぁ～」
「ちょ、ちょっと、勘弁してよミミ」
「はいはい、ミミもコージをいじめて楽しまないの」
「はぁ～い」

ふぅ、ミミが言うと冗談に聞こえないからなぁ。セリナが助け舟を出してくれて助かったよ。ありがとうと目でセリナにお礼を言う。

「ふふっ」

目が合って、セリナも分かってくれたらしくにっこりと笑ってくれ

た。ヒロコは相変わらず、ぼーっとしている。

ロバスの古代遺跡。

数々の冒険者が集い、争い、傷つき、輝く場所でもある。ロバスという土地はモンスターと縁がある。古代遺跡に住み着いて虎視眈々と町を狙うモンスターに、町の外からは魔石獣が常に襲ってくる。だが、ロバスに住む人間は決して挫けない。むしろ、貪欲に生きる為にモンスターを狩り、喰らい、己の糧としていった。そして今では狩る側のモンスターは狩られる側へと変わっていったのである。だが、古代遺跡に住むモンスターも遺跡に残る道具を使いこなし日々進化しているようで、侮れない存在である。

そして古代遺跡の入り口は町が管理しており、必ず門番が立っている。２４時間休みなく門番が立っているので、もし大量のモンスターに追われたとしても対応できるのだ。最近は冒険者学園の生徒達も授業の一環として、入り口付近の見回りも行っているので出入り口の安全性はかなり高くなっていた。

なので今回は、浅い階層は急いで通過して少しモンスターが手強くなって来るといわれる１５階以降に的を絞る。この辺りから魔法を使ってくるモンスターやレアモンスターと言われる奴らが、ぼちぼち出てくるので稼ぎも悪くないみたいで、ある程度の冒険者に人気の階層のようだ。

僕達は特に何事もなく、１５階層まで辿り着いた。

「ここらへんから、ちょっと手強いみたいだから気をつけて行こうね」

「はぁい」

「わかりました、コージ」
「わかったよ、マスター」

さて、ここら辺はオークや、ホブゴブリンや警備ロボとか出てくるみたいだ。オークもホブゴブリンもスペルキャスターが混じってたりするので要注意だ。僕を先頭にヒロコ、セリナ、ミミと続き警戒しながら進む。通路自体は結構広いので一列で進まなくても良いんだけど、とりあえず一番最初に一撃を加えたい。んだけど。

「なんで、こうなるのかな？」

さっきから2回、モンスターと遭遇したんだけどどっちも後方から、つまりミミを攻撃してきてて、あっさり返り討ちにされているのだ。

「ミミは見た目が可愛いですし、華奢ですから狙いやすい相手だと思われているんでしょうねぇ」
「そうだね、みんなミミにまっしぐらだったし」

猫まっしぐらみたいに言わないで欲しい。でも、このままじゃテストできないから次に出てきたら突撃しよう。と、思ったら正面にオークのＰＴらしき集団が見えた。

「なんか丁度良いのが来たから、一人でやらせてね～」
「オークが5匹ぐらい居ますし、魔法使いも居るみたいですけども」
「それぐらいが丁度良いって。いってきまーす」

「千変万化」でマテクトを自分に掛ける。アンテナを自分に向けてぽちっとな。とりあえず、先頭の前衛を突破して魔法使いから狙っていこう。

とげとげ棍棒とラウンドシールドを持った前衛のオーク二匹が僕を見つけて、戦闘体勢をとり僕に威嚇してくる。僕は右側のオークに向かうようにフェイントを掛け、右側のオークのさらに右の狭いスペースを身をかがめて突破する。盾で僕を通路の壁に押し込もうとしたけど、僕の方が一息早くすり抜ける。

そして、その後ろに居た二匹のオークは突破されると思っていなかったようで、あっけに取られている。あっけに取られてるオークに「ギル」を向けAボタンを押し込みスリープクラウドを連射する。眠ったかどうかを確認せず、本命の魔法使いに向かって突撃する。

「ゲェーゲッゲッゲッ！　ファイアボール！」

何か呪文を言ってたみたいだけど聞き取れなかったけど、炎の玉が飛んできたのでファイアボールの魔法なのだろう。すかさずBボタン連打で炎にセレクト、Aボタンをスライドさせ炎の魔法剣を出した。

ボッボォウ！

炎の玉を「ギル」で絡めとり無力化する。そしてそのまま突撃の勢いを殺さずに魔法使いのオークに「ギル」を突き刺す！

「グギャァァア！」

悲鳴を上げるがまだ倒れない。すかさず、スライドしていたAボタンを戻して押し込む。

ボボボボボボボッ！

至近距離で魔法使いに、炎の玉を連射する。さすがにこれは効いたようで、即座にウインドウがポップし、選択画面が出てきた。とりあえず、選択は後回しにして残りの４匹を倒そう。

ブンッ！　ガツッ！！！

危ない危ない。背後から前衛２匹がやってきて一匹が僕の背後を、そしてもう一匹が仲間をたたき起こしている。「千変万化」を取り出しアクセルをコール。アンテナを自分に向けてぽちっと・・・っとぉ、危ないな棍棒に当たる所だった。よし、ぽちっとな。

ようやく魔法が発動してアクセル状態になり、冷静に分析する。僕の正面に棍棒が一匹、その背後にもう一匹。起きかかってるのが剣を持った奴。まだ眠ってる奴はダガーを持っている。このままスリープクラウドを連射すると凄く楽に倒せるけども、それだと僕の訓練にもならないしなぁ。時間がかかるけど一匹ずつ倒して行くか。

目の前のオークは僕に避けられた棍棒を再度振り上げ、脳天目掛けて勢い良く振り下ろしてくる。Ｂボタン連打で雷に合わせ、Ａボタンをスライド。雷の魔法剣を選択する。脳天目掛けて落ちてくる棍棒を前に出ることで回避し、横なぎに胴体に「ギル」をぶちかます。

これで一匹痺れてしばらく行動不能になった。目の前にはまだ僕に背中を見せてる棍棒オークと起き上がって僕を狙う剣オーク。とりあえず背中を見せる棍棒オークに向かい、剣オークに向かって勢い良く体当たりをする。体当たりの瞬間、ちょっと気持ち悪かったけど狙い通り、剣オークを巻き込んで二匹まとめて倒れる。その隙を逃さず「ギル」を叩き込み行動不能にする。

よし、これで全て無力化できたな。

「よし、終了」

オークを全てアイテム化し、一息つく。うん「ギル」は中々使いやすいや。でも「千変万化」は戦闘中に使えるアイテムじゃないなぁ。いちいちアンテナ向けるのは正直やりずらいので違う形を考えないと駄目だろうなぁ。

「コージおつかれさま」
「少しぐらいミミに残してくれてもいいのにぃ」
「マスターおつかれっ」

あっさりとオークを倒した僕を口々に労ってくれる皆。僕ならあれぐらい倒せて当然って顔をしている。まぁ僕もオークとかはゲームだと雑魚のほうだから、楽勝だとは思ってたけどもね。

パチパチパチパチ・・・

ん?どこからか拍手が聞こえる。

「やぁ、どうも。凄いねぇ君」

気付けば通路の向こうに、古代遺跡なのにもかかわらず、肩まである輝く金髪をなびかせ、若干垂れ気味の涼しげな青い瞳をした非常に顔立ちが整った戦士風のいでたちをしたイケメンと、3人の女の子が居た。

だれ?

腕試し（後書き）

イケメン出てきた。リア充ばくはつしろーーー！

またまた評価ありがとうございますっ！

「見せて貰ったよ、君の手並み。あ、僕はリュート＝アインって言うんだ、よろしく」
「あ、どうも。僕はコージです。コージ＝ヒロセって言います」

さっきの戦いを見られてたのか。いやはやちょっと恥ずかしいなぁ。リュートって人の後ろに、すっごく長い金髪を綺麗に伸ばしてる子と、ショートカットの赤毛の女の子に、ふわっとした薄い緑色の髪の女の子がいる。どの子も凄く可愛い。リュートってリア充だ！

「ところで君が持っている武器・・・かな？　見せて貰っても良いかなぁ？」
「ほえ？」
「リュートが見せてって言ってるんだから、早く出しなさいよ。ほらっ」
「あっ」

急に、リュートの後ろに居た薄い緑色の髪をした女の子が僕の傍に来たかと思うと「ギル」をかっさらっていって、リュートにそっと手渡した。

「あ、ありがとうティナ。」

リュートは女の子にそう礼を言うと、僕に済まなさそうな目を向けてきた。あ、ミミがちょっとむっとしてる。ティナって子の態度が気に入らないようだ。

リュートの事をこのリア充野郎って思ったんだけど、客観的に見れ

ば僕も三人の可愛い女の子を引き連れて古代遺跡に来てるので、僕もそんな風な目で見られてたのか。道理でときおり殺気だった視線を感じるわけだよ。

「ところで、コージ。この道具の使い方を教えてくれるかな？」

「あ、それはね・・・」

ティナって子が騒ぎ出す前に慌てて応える。リュートは「ギル」をクルクルいじったり振ったりしてたんだけど、ボタンの使い方が良く分からなかったらしい。なので、ボタンの使い方を丁寧に教えてあげた。

リュートはすぐに使い方を覚えて簡単に使いこなして見せた。僕はゲームとかでそういうのの操作には慣れてるんだけど、ゲームした事なんてないだろうに、リュートって相当器用なんだなぁと思った。

凄く楽しそうに「ギル」を操るリュート。リュートは嬉しそうにティナに話しかけている。するとティナが急に僕の方を向いてこう言った。

「この武器は勇者のリュートに相応しいわね。貰っておいて上げるわ」

「うんうん」

「そうだね」

リュートと一緒に居る女の子達がティナって子の言う事にそれぞれ賛同した。

は？

えっと突っ込みどころ満載だけどどっから行こう。

「ティナ、それだとコージの武器が無くなっちゃうよ」
「じゃあ、王様から貰った勇者の剣を１００ゴールドで売ってあげましょ。それで大丈夫でしょ。もうボロボロで切れ味は悪いけど、とりあえず頑丈だから良い物よ。本当ならリュートが使った武器だったらその１００倍出しても買えないんだし」
「だよね、勇者様の使った武器だもんねぇ」

あまりにも突拍子の無い状況に陥ると、人って何も考えられなくなるって本当だね。しばらく頭の中が真っ白になっちゃったよ。こんなときこそ深呼吸だね、うん。

すーはー。

「ちょっと待って。「ギル」を取られると凄く困る。やっと今日から使い始めたんだよ」
「何言ってるの？　もうリュートが貰ったんだから困るとか言われても知らないわよ。ほらこれ上げるから１００ゴールド出しなさい」

と言ってリュートの腰にぶら下がっていたぼろぼろの剣を僕に押し付けてきた。

「はい、受け取ったから早く１００ゴールド渡しなさい」

勇者ってのは、こんな人間を連れてて平気なのかなぁ？　なんというか強盗に入られて更に役に立たないツボを詐欺られてる気分だよ。セリナ達もぽかーんとしてて、びっくりしている。

「あーもう、じれったいわね！　とりあえずそこのオークのドロップ品貰っていくわよ」

あ、ちょっと！　オークの魔法使いが落とした宝石のついた杖なんて１００ゴールドを超えるレアアイテムなのに！？　どうしてこんなときに限ってそんな良い物ドロップしてるんだこのオークどもは！

「ふん、さっさとしないからこうなるのよ。まぁちょっと足りないけど我慢してあげるわ」

どういう手品を使ったのか、地面にあったオークのドロップ品は単価１ゴールド以下のもの以外は全てかっさらわれた。すごい強欲センサーだ・・・

「じゃあ、ありがとうコージ、またね」

呆然としていると、爽やかな笑顔でリュート達が去っていった。

「コージィ」
「ん？」
「勇者たちってぇ倒しちゃっていいかなぁ？」

ぶるっ

ミミが笑顔のまま物凄い殺気を放っている。今までじっと黙っていたのは怒りのあまり言葉が出なかったみたい。でも、それは駄目だ。

「ミミ、そんな事しちゃ駄目だよ？　そんな事したらあいつらと同じ、酷いと言うかおかしな奴になっちゃうよ？　分かる？」
「・・・ミミわかんない」
「因果応報、自業自得っていってね。悪い事をしたら悪い事が。良い事をしたら良い事が自分に帰ってくるんだ。だから、あんな悪い

事をしてても一応は人なんだから、人をやっつけちゃうなんて悪い事したら駄目なんだ」

「・・・うぅ、分かったぁ。我慢するぅ」

「よーし、ミミは良い子です！」

「みゃーーーーーー！」

ミミの頭を抱えてナデナデしまくる。髪の毛がばっさばさになるけど気にしなーい！

「わたしも勇者を倒してきますっ！」

「わぁあああ、セリナ待って！　話聞いてなかったの！？」

僕良い事言ったよね！？

「早く私を止めて下さいコージ！　そしてそしてっ！」

「あぁもう、とりあえずこっち来てっ」

何故かにやにやしているヒロコも強引に引き寄せて、みんなにくっつく。

「とりあえず、道具はまた作ればいいから気にしなくて良いからね。今回は、僕が「ギル」を僕しか使えないように細工してなかったのがそもそもの原因だし。それにここで揉めて悪い奴らに目を付けられるより、みんなが危ない目に遭わない様にする方が大事なんだ」

と言って、力を込めてぎゅっとみんなに抱きつく。

「だから、とりあえずこれでお終い！　もう気にしない事！　良い？」

「うん、わかったぁ」

「はい、コージ」
「はいはいマスター」
「よし、それじゃあ次行ってみよう！」

なんか微妙な雰囲気になっちゃったけど、気にしない。これから狩りまくって損した分を取り戻そーっと！

勇者（後書き）

リア充　ＶＳ　リア充

ちくしょう・・・

グッドラック

勇者。

よくある物語の中の英雄。弱気を助け強気をくじく正義の味方、みんなの憧れ。誰もが勇者になりたがる。だけど選ばれたごくごくわずかな人間にしか成れない。そんな存在。

「だけど、これは無いよなぁ」

１００ゴールドで買わされたボロボロの剣。剣身はところどころ歯毀れしていて、切れ味なんて無いに等しく、剣と柄の部分との結合もガタガタで正直、本気で振ったらすっ飛んでいきそうなぐらい、おかしくなっている。あー、良く見ればこれゆがんでるねぇ・・・

試しに使ってみたけど、頑丈なのは頑丈だ。だけど、あまりの酷さに結局魔法使ったし。

勇者の剣とか言ってたけど、リュートが使ってただけで勝手にそう言ってただけなんだろうなぁ。王様から貰ったにしてはひどい有様だし。でも、ここまで手入れもせずに使い潰さなくても良いのにと思う。リュートってにこやかに笑ってて、すごい良い人に見えたけど、物使いが荒い人なんだろうなぁ。この剣が可哀想になってきたよ。

よぉし、ちょっと手入れしようか！

勇者の剣に魔力を流し込んで、状態を調べる。うわー、剣の端っこの方は細かいヒビだらけなのに、良く折れたり欠けたりしないもん

だなぁ、これ。こんな扱いを受けるなんて酷いよなぁ。まったく。
今から綺麗にしてやるからな。

剣身の細かいヒビを徐々に埋めていく。溶かしながら隙間を埋め、固さを調整する。素材をあまり固くしすぎてもぽっきり折れちゃうだろうし、すこし粘りのある感じにして簡単には折れないようにする。あ、でも中心と外側で固さを変えるほうが良いかな？

慎重に魔力を操作し、丁寧に修理していく。ようしもう少しだぞー。
だけどあと少しで、全部が直るところでそれは起こった。

バシュッ！

と、大きな音を立てたかと思うと勇者の剣は一気に形を崩して、一個の鉄の塊と化した勇者の剣。

「え、なんでぇ！？」

慎重に魔力を流して修理していたのに、頑丈さが売りなはずなのになんで一気にこんな事に・・・と、思っていたら今度は急に鉄の塊が形を変えてブレスレットの形になり僕の腕に収まった。

「うっ！？」
「コージ、どうしたんですか？」
「どうしたのぉ！？」

ブレスレットが腕にはまった途端、このブレスレット、いや勇者の武器の使い方が分かるようになった。このブレスレットの名前は「グッドラック」本当に勇者の武器らしい。剣の形だったのは前の勇

者が剣しか使えなかったので、その形で固定されていたらしい。そして物凄く頑丈だったのは、前の勇者は恐ろしい程の力持ちで、勇者の力に耐えられる剣が無かったみたい。その為、「グッドラック」は勇者の力に耐えられる剣になり、おかげで全力が出せるようになった勇者はどんな敵でも、粉砕していったようだ。

で、この武器はイメージした武器を使用者の魔力を使って具現化できるアイテムなようだ。単純に頑丈な剣と願うと頑丈な剣がでるし、「ノーミス」が出ろって念じると本当に「ノーミス」が出てくる。細かい設計を考えてあげると忠実にそれを再現してくれるし、出せる武器は一個だけではなく、二個でも三個でも一瞬で具現化してくれる。試しに神話に出てきた武器を出したりしたけど、それっぽい物がちゃんと出てきてくれた。しかも、本体はブレスレットのままなので武器だとは誰にも分からない。取り上げられる事も無いだろう。念のため、外れるか確認したけど僕以外は誰も外せなかった。

でも、ブレスレットの形が本来の形っぽいのに、なんで剣の形になってたんだろ？　魔力を持ってない人間が使うとブレスレットが変形しないと使えないって事なんだろうか？　まぁなんにせよ、僕には非常に相性が良い武器なのは間違いないね。うん。ぷふっ

「あはは、いやぁこんな凄い物が１００ゴールドなんて安い、安いよ！」

思わず笑みがこぼれてしまう僕。「ギル」に愛着が無いかと言えばそんな事はないけども、こんなに凄い武器がただみたいなもので手に入ったんだから自然と笑ってしまうよね。

「良かったですね、コージ」

「良かったねぇ」

「グッドラック」の説明をした途端みんな笑顔になった。
だって、リュートに渡した「ギル」はカートリッジ方式だから、カートリッジの魔力が無くなれば使えなくなってタダの棒キレと変わらなくなる。もし、戦闘中にそんな事になったら大変だろうけど、仲間が居るからきっと大丈夫だと思う。そして、僕に押し付けたこの「グッドラック」には魔力切れで武器が使えなくなるとかそんな事が無い。僕が使えば銃だろうと剣だろうと槍だろうといつでもアーティファクト級の武器を新品で取り出す事が出来る。勿論、ブレスレットに仕舞う事もできる。

どっちがお得であるか、考えるまでも無いだろう。勇者の剣の本当の姿を知らずにみすみす安値で渡しちゃうなんてね。もうほんとにこれは。

「これが因果応報、自業自得なんだねぇ、コージッ」

そうそう。リュート達が悪い事をしすぎで、こんな大損しちゃったんだよ。僕たちは棚からボタモチ的に良い事が起きたけどね。

「とりあえず、ブレスレットになっちゃったし勇者の剣を返せと言われても、知らぬ存ぜぬで通せるね」
「まぁ、正当に買った物ですから文句言えないでしょうね」

うふふと笑うセリナ。

「よぉし、それじゃあ今度は「グッドラック」のテストと行きますか～！」
「はーい」
「はぁい」

「はいはーい」

キラーマシン

勇者様ご一行に会い、「グッドラック」を手に入れてからは順調に狩りが進んだ。一度、他のパーティがモンスターを多数引き連れて来たのに巻き込まれて、多勢に囲まれたんだけど、ミミがなんなく捌いてくれたおかげで、かなり儲かった。今回、古代遺跡という地下の迷宮なのでセリナは炎の魔法を封印している。フレイムぐらいは使うんだけど、あまり長くは使わない。やっぱり酸素が無くなったら怖いしね。

だけど、セリナの凄い所は得意魔法が使えなくなっても、敵を倒すのに貢献する事ができることだ。ど派手な攻撃魔法が得意なんで、結構おおざっぱに攻撃しちゃうタイプかと思ったら、まず敵を弱体、拘束、味方の攻撃補助、加速と流れるように魔法をかけ、敵の足止めの為に壁魔法をつかい多対一にならないようにコントロールし、タイマー魔法というべきだろうか。うまく敵を誘導して時間差で発動する魔法の餌食にしたり。とにかく、魔法は敵を倒すための手段として使い、倒せるのであれば何の魔法でも良いというスタンスで魔法を使う。改めて、神童と呼ばれたセリナの凄さが分かったのだった。

「ミミも凄かったけど、セリナの魔法の使い方は凄かったなぁ。見習わないと駄目だね」

「えっと、急にどうしたんですかコージ？　褒めてもなにもでま・・・いえ抱きついちゃいますよ？」

「ミミもぉーーー！」

「うはぅ！？」

セリナの魔法の使い方を反芻して、自分もああなろうと物思いにふ

けってたら、二人に突撃された。いや、気持ち良いんだけどあぁああああん!?

「ちょっと離れようね？　マスター？」
「・・・はい」

ヒロコがめりっと僕たちを引き離した。なんだか珍しいね、いつもだとにやにやしてるだけで助けようとも引き離そうともしないのに。どうしたんだろ？

「なんかね、向こうの方が凄く静かになったのマスター」

真剣な顔で怯えた様子で訴えてくるヒロコ。何かやばい敵が居るんだろうか？

「この遺跡に入ってから、いつもどこかからか生き物の気配が感じられたんだけど、さっき急に向こうの方の気配が次々無くなっていったんだ」
「ということは、何かやばい敵がそこまで来てる・・・？」
「そうかも。はやく行こうよマスター」

その言葉を受け何事かを感じ取ろうと、静かにしているセリナとミミ。

ギュィイイイイイイイィイイィイイィ

と、甲高い音を立てながらそれは来た。

全高４メートル近い大きさの人型機械。ロボット。急に現れたそいつは、そいつから逃げてきたであろうオークをぐしゃっと、卵を割

るより簡単に捻り潰していた。

頭部の横長に光るセンサーアイだろうか。それが僕たちの方を向いたように感じた。

「アクセル！！！」

本能的にこいつはヤバイ敵だと感じた僕は、いきなりアクセル状態に移行した。それはどうも正解だったようで、そいつの腕が徐々に持ち上がり僕たちの方へ向けられようとしている。あの腕は銃で間違いない。だとすると、遮蔽物を出して防ぐしかない。

「アースブロック！　アースブロック！　アースブロック！」

何故か一枚だと不安に感じた僕は、地面から壁がせり出す魔法を3連続唱えていた。さらに

「コロード！　ダウン！　プロテクナ！」

相手の防御力を下げる魔法、行動速度を遅くする魔法に防御魔法をかけた。

ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！

ロボの腕から案の定、弾丸が発射された。射線は確実に僕たちに向いているが壁が競りあがるので防げるはずだ。僕はかいくぐってでも肉薄するつもりだけど。ミミを見ると既にロボまで4メートルぐらいの距離まで迫っていた。さすが早い。

ロボの的を分散させる為に、僕も前進する。ミミが左からなので、

遅れて右側から突撃していく。そして、ロボに脅威に思われるようにビームサーベルとビームガンを出し威嚇射撃を開始する。

ビシュゥン！ビシュゥン！ビシュゥン！ビシュゥン！

ロボの腕が射撃武器になっているので、銃身を狙って撃ちまくる。ロボからも射撃は続いているが、僕は斜線から逃げるように動きつつ撃っている。壁が凄い勢いで崩れていき視界を遮る。土壁の破片が避けきれない程飛び散り、結構な数が僕に当たる。破片といえど勢いが良いので結構痛い。だけど歯を食いしばって斜線をみんなから外すべく動きまくり、銃を無効化するべく、撃ちまくる！

バギュッ！ギュッッグォグォグォ！

うまく命中したらしく腕部の銃は異音を発し、弾丸が出なくなった。これで一安心と思ったら、腕の横側から剣がせり出して来た。だけど、ミミがすでに接近していて脚部を「月光」の後継武器である「月詠」を叩き込んでいる。モードは氷のようだ。まとわりつくように動くミミを狙い剣を振り上げるロボ。だけど振り上げた瞬間にはミミがじっと見ていて、攻撃しつつもすぐに回避できる体勢をとっている。いつもながら凄い反応だ。それを見た僕は安心して、攻撃に移れる。

セリナがそこでようやく攻撃を開始した。呪文を何か唱えてるようだけどアクセル中ははっきり言って何を言ってるかさっぱり分からない。アクセルの唯一とも言える弊害だ。だけど、ロボに飛んでいく魔法を見ると熱線魔法のようだ。

バジュッ！

魔法が当たった箇所を中心に一気に真っ赤になり、どろっと溶け出して貫通していく。だけど、熱線魔法は攻撃面積が非常に狭いのでロボ相手には足止めにもならないようだった。でも熱線魔法が効くのならどこかにあるメインコンピュータを狙えば一気に仕留められるはずだ。

「ボール・アイス！　ボール・ファイア！」
「ボールシュート！」

ミミが接近戦を仕掛けているので頭部を狙って球魔法を撃ち込む。当たらなくても牽制になればそれで良い。案の定回避するロボ。ところがどっこい！　ほろりと先程出しておいたアタックオプションが回避したボールをロボに反射させる。

ゴバッゴギィィン！

何か浮いているのは分かっていただろうけど、まさか魔法を反射するとは思っていなかったようで、咄嗟には避け切れなかったようだ。そして、体勢を崩したロボにミミが迫る。執拗に足を狙って斬りつけていたが、ここで膝をおったロボに飛び乗り腕を攻撃しながら反動でさらに上へ。胸部、腕部、胸部、肩、頭部と連撃を一気に決める。その姿は重力の存在を全く感じさせない優美なものであり持っているものが剣でなければ、天女が舞を舞ってるようにしか見えない美しさがあった。

だが、実際はロボへの威力の篭った斬撃。

僕が作った一瞬の隙でここまで攻撃を決めてしまうミミ。そして止めと言わんばかりに頭部からひらりと降りたミミを庇うように、ロボの頭部に熱線魔法が突き刺さった。

「エンド」

ゴシャァアアアン！

そして、戦闘は終了した。

キラーマシン（後書き）

アクセル中の魔法は目をつぶってください。他の人が聞くときっと高速すぎて聞き取れないと思います。でも、正しい詠唱と術式と魔力を流し込むと言うプロセスをちゃんと踏むので発動するのです。きっと。

謎

みんなの協力でロボットを倒したが、あのロボットがここに来るまでに誰かが襲われていたかもしれない！　ヒロコが気配を感じなくなったって言ってたから、酷い事になってる可能性が高い。だけど今から行けば間に合うかもしれない。

とりあえず、ロボットの残骸は全て指輪に入りそうなので全部収納して、ロボットが通ってきた通路を逆に辿っていった。通路にはオークや、キャタピラーみたいな芋虫系のモンスターやオーガのような大物などもごろごろと転がっていた。

不思議な事にどれもこれも、虫の息ながら生きているのだ。それは僕たちの目の前でひねり潰されたオークも例外じゃなかった。オークって凄い生命力だ。

なんで生きてるのかは疑問だが、とりあえずまとめて倒してアイテム化して駆け抜けて行く。なんとなくだけど、倒れてる人が居ても助けられる気がする。と、思っていると僕の勘を証明するように、虫の息で倒れている人達を発見した。

「満ちるマナよ、彼の人達を癒せ！　リフォーガ！」

急いで倒れている人達に回復呪文を唱える。ちゃんと五体満足だったので怪我を治す魔法だけで大丈夫だ。魔法を使える人は、起き出すとこちらにお礼を言ってから仲間達を呪文で回復させていった。セリナとミミは、もしもう一度さっきのやつが出てきたら駄目なのであたりを警戒している。

他にも倒れてる人が居るかもしれないので、とりあえず回復した人達を置いて、僕達はさらに奥へと向かっていった。

結局、１５階のゲート付近まで倒れてる人が合計５０人ぐらい居た。あのロボットがどこから出てきたかは不明だけど、ゲート付近から出てきたのは間違いないようだ。怪我をした人たちが落ち着いた所で話を聞いたんだけど、あんなロボットはこれまで見たことがなく、似たようなロボットすら見かけた事も無かったらしい。もっと深い階層にならロボットも出てくるらしいんだけど、それともまた形が全く違うらしい。まぁ同じ奴なら恐ろしく強いはずなので、ここら辺一体どえらい事になってるだろうけども。

１５階層でそこそこ古代遺跡になれた人間を狙うかのように、場違いな強さのロボットが出てきた。なんでだろうって悩んでると、ロボットに詳しい人が教えてくれたんだけど、どうやらさっきの奴は５０階層とかに潜ってると極稀に出てくる代物らしい。一体どうやってここまで来たのか不明だ。

遺跡に不慣れな僕が色々考えてもよく分からないので、今日は町に帰る事にした。だって、ロボットを倒したのもそうだけど、駆けずり回って怪我してる人を治療していったから結構疲れたよ、僕。あ、今まですっかり忘れてたけど今日の戦利品をじっくり見てみよう。

「小型魔石エンジン星８型・・・？」

ガイアフレームなどに使われる魔石エンジン。それの小型版らしい。しかもかなり効率の良いエンジンみたいで、ガイアフレームであれば人間の魔力を使用して動くのだけどこのロボットは、人間の替わりにほんの少量の鶏の卵大ぐらいの魔力石で稼動していたようだ。そして、この大きさは、ガイアフレームにとってかなり有利になる。

エンジンスペースが小さいと、それだけ余分に武器を積んだり、積まない場合でも機体を軽くし、アンプリファーを余分に搭載する事で機動性を上げることができるからだ。
僕が抱えて持てるぐらいだから、かなり小さいと思う。ガイアフレームの全高が８メートル弱ぐらいだしね。逆に小さすぎるんじゃね？　って思う。とりあえず、こんな時は目立たないように指輪に収納する。これってハーベイさんに借金のかたに持っていけばだいぶ借金を減らしてくれるんじゃないだろうか？

「なんにせよラッキーだったなぁ。借金が見る見る減っていく感じだよ～」

なにせ今日だけで１万ゴールド近い稼ぎになってるはず。レア素材がかなり出たので物凄いのだ。だれかめっちゃ運が良い子が紛れてるね。ミミかなぁ？

「そういえば借金があったんですね。全然そんなの忘れてました」
「特にお金使うことも無かったもんねぇ。ミミは欲しいもの・・・無いもんなぁ」
「ここはボクが頑張って無駄遣いするべき！？」
「すんなヒロコ！」
「あはははは」

まぁ今日は特別運が良かっただけだろうけど、この勢いで稼げるなら早めに借金が返せるから肩の荷が下りる。みんなで学校にも行きたいし、ガイアフレームも好みの奴を作りたいからお金はたくさんいるし。

・・・まぁお母さんを探すにもお金はいるしね。うん。

今日は運よく色々と稼げたので、おいしいと噂の食堂でご飯を食べる事にした。
「レアリア」という名前の食堂は、ほどほどの値段で美味しいものを食べさせてくれると評判のお店らしく、夕暮れ時に来たら既に行列が出来ていたので僕たちも並ぶ事にした。まだ並んだ時間が早かったおかげか前に八人ぐらい並んでいるだけだった。

「何たべよっかなぁ、お肉がっつり食べようかなぁ」
「コージはお肉ですか？　私は定食が評判だと聞いてるのでそれにしようと思います」
「ミミは、コージと同じのにしようっと」
「ボクはサラダがおいしければなんでもいいや」

メニューを先に渡してくれたので、僕達はメニューを見ながらあれやこれや言いながら楽しみながら順番を待っていた。

「あれ、コージ。奇遇だね」
「ん？」

綺麗な澄んだ声で呼ばれた方を見るとリュートとその仲間達がいた。
う、嫌な予感。

「あらコージじゃない丁度いいわ、私たちの替わりに並んでくれたのね」
「え、ちょっと」

普段からそういう事をするのに慣れているとしか思えない手並みで、列に並んでいた僕たちを引っこ抜き、ちゃっかり自分達が今まで並んでましたって顔で列に加わった。人数がまったく同じだから、ま

ったく違和感なく納まってしまった。

「次の方、どうぞぉ～！」

そして、僕達が入れ替わった事に気付かなかった店員さんは、リュート達を呼んで店の中へと案内していった。

「・・・なんだろうデジャブというか、なんというか・・・」

「ほんと、なんなんでしょうねぇあの人達は・・・」

「コージィ、今度はどんな良い事あるかなぁ？」

「はりゃー」

僕達はあの手の人達に翻弄される運命にあるのかなぁ？　いやそんな運命すっごく嫌だけども、このまさかの状況にそんな事を信じてしまいそうになっちゃう。そして今更行列に並んでご飯を食べようとは思わないので、お店を離れることをした。僕たちの後ろに並んでた人達がひどく同情的な視線を投げかけてきてくれたのが、せめてもの救いだった。

謎（後書き）

毎日考えながら書いてるから、矛盾が無いかどきどき。こっそり修正しているかもしれません。うひひ。

幸運の女神？

いやはや。

勇者達に順番を奪われてから、みんなで最近できたファストフード系のお店に行って見た。こっちの世界では今まで無かった形式だったらしく、人気はそこそこ。だけど回転が速いので手っ取り早く済ませたい人には人気らしい。意外と新しいもの好きなミミが行って見たいというので、入った途端。

「おめでとうございます！　１万人目のお客様でーっす！」

「ふ、ふぁっ！？」

いきなり知らない人におめでとうって言われて、テンパるミミ。ただでさえ人見知りなのに急にそんな事されたら、挙動不審になるよね？　ミミは可愛いから、店員さんやお店に居た他のお客さん達に口々に可愛いと言われ、すごく真っ赤な顔をしてた。

店員さんが愛想よく説明してくれたところ、ミミが丁度、このお店「ラッテン・セッテン」にとって記念すべき１万人目のお客様だったらしく一緒に居た僕たちにも何か記念品をくれるらしい。何時来てもドリンク無料の権利をみんなに、ミミには特別に１日１０個限定のスペシャルバーガーを１日１個食べられる権利を貰えたのだ。本人確認のためか、僕も含めて手形を取られ、後日お店に手形のオブジェが飾られるそうだ。

「因果応報来たねぇ、コージ！」

「だねぇ。運が良いのか悪いのか・・・」

なんともなタイミングに苦笑するしかない僕。ミミはすっかり悪いことがあったら必ず良い事があると信じきってる様子でもある。まぁ、間違ってはないけどいつもいつもこんな感じになることは無いんだからね、ミミ。

「にへへぇ～、わかってるよぉ～っだ」

さっきまで、可愛い可愛いと周りから言われて顔を真っ赤にして縮こまっていたミミだけど、今は限定バーガーを早速おいしそうに頬張ってるおかげで、リラックスしてきたらしくいつものミミらしさが戻ってきた。

「だけど、私たちって言うかコージって何かと絡まれます・・・よね？」

「え！？　そうなの？　僕からまれてる？？？」

「不思議そうな顔をするマスターが不思議だよ」

「うん、コージっていつもぉ何かあるよね」

「ひょっとすると、何か憑いてるかもしれませんねぇ～？」

セリナにしては珍しくいたずらっぽい笑顔で、そうからかってくる。うぅ。

「まぁ憑いてるというのは冗談にしても、ちょっと運気を上げに行くのもいいかもしれませんね」

「というと？」

ロバスには、幸運をもたらすと言われる像があるらしく、なんでもその像にある事をすると運が向いてくるといわれているらしく、観光スポットにもなっているらしい。僕って言われて見ると、肝心なところで抜けてる気がするのでそういった幸運にすがるのも良いか

もしれない。気休めとはわかってるけど、気になるよね？

「でも、一体何をすればいいの？」

「それがですね・・・一人ひとり違うんです。この像が人気なのもそれが原因なのです」

なにやら、幸運をもたらすというのは伊達では無いらしく真剣に願っていると像から天啓があり、その通りに行動する事で運が拓けるらしい。ただ、聞こえる人間と聞こえない人間がいるので、そこの所も運だそうだ。像から話しかけられるって事・・・だよね？　本当にそんな事があるなら、聞いてみたいなぁ。

「なんか面白そうだね、明日行ってみよっか」

「うん、行く行くぅ～！」

「ですね、コージの運気を上げましょう」

「ボクが居れば問題ないはずなのになぁ～」

精霊であるヒロコはぶつぶつ言ってる。ヒロコが精霊なのは僕だけしか知らないんだから仕方ないんじゃない？　でもそろそろ話した方がいいかもね。僕のことも含めて。

「コージ、怖い顔になってるけど、どぉしたのぉ？」

いつのまにか、僕をじっと見ていたミミがそっと心配そうに尋ねてくる。

それに、なんでもないと首を振って答えて、残っていたジュースを飲み干した。

みんなで「ラッテン・セッテン」から宿にもどると、セリナに一通の手紙が届いていた。どうやら今回の任務について報告をして欲し

いとの事だった。そういやセリナって帰ってきてからずっと一緒にいるから、報告なんて全くしてなかったよね。それでいいのか？

「いえいえ、ちゃんと報告書は向こうに送ってるんですけど、口頭で色々聞きたがるんですよお偉いおじーさんたちは」

はぁ～と、ちょっと色っぽいため息を吐きながら、仕方ないかぁと呟くセリナ。魔法教会でのやり取りを考えているのか、すごい無表情になってて別人みたいになっている。そんなセリナの頭をぽんぽんと叩いておく。

「そんな顔しないの。せっかくの美人さんが台無しだよ？」

そんな僕の台詞にぱぁぁあああああっと、まぶしい顔を向けてくるセリナ。そ、そこまで眩しくしなくてもいいから普段から維持しようね、それ。セリナって最初から僕には優しい顔や笑顔を向けてくれていたんだけど、他の人には無表情か仏頂面が多いんだよね。仲間になってるヒロコやミミにはそうでもないんだけどね。とにかく温度差が激しい。

「じゃあ、セリナはお留守ば・・・んは可哀想だから、終わるまで待って皆で行こうね」

さっきいじめられたから仕返しに、と思ってセリナにお留守番してねって言おうとしたんだけど、言い切る前にセリナにこの世の終わりみたいな顔をされて断念した。だって、あんな顔されたらすっごく罪悪感が沸いてくるんだから意地悪できなくても仕方ないよね？

「わたしを待ってる間に勇者と会わないように気をつけてくださいね」

「・・・宿にこもっておこう。うん」

勇者パーティに会うと、嫌な目にあってから良い事があるんだけどやっぱり会いたくない。だって、そのうちもっと酷い事になりそうで怖いんだよねぇ、あの人達。

明日は幸運を貰いにいくぞーーー！

ロバスとグレイトエースを結ぶ街道沿いの森の中。一組の男女と二人組みの女性とが対峙していた。

「なんで、おまえがここに居る！　エリス」

「そういう陛下こそ、お忍びでこんな所まで来るのはいたずらが過ぎますよ？」

激しくにらみつける男に対し、すずしい態度で応対する仮面の女エリス。

「探し物のついでに、おいたをしてる陛下を見つけられるとはついてますね。さぁ、お城に戻りますよ！」

「抜かせっ！」

そう言ったが早いか、少女を抱きかかえ横っとびに逃げる男。

「じゃまだ！」

エリスとともに付き従っていた女性を、抱えている少女の足で蹴りつけ、脱兎のごとく逃げ出す男。

「あぁもうついてねぇ！　きりきり逃げるぞぉおおおお！」
「あの女性とはどういう関係？」
「いや！　今そんな事言ってる場合じゃないからっ？　空気読もう！　空気！」
「逃がしませんよ。行くわよリリィ！」
「はい、申し訳ありません！」

街道沿いの追跡が幕を上げた。

女神像の声

トリプルセブンをお昼頃出発し、僕たちは北側のブロックを目指して歩いている。地下道を通り一旦、西か東かのブロックに出ないと北側には行けないので、今は西ブロックを目指している。普段なら直接北ブロックへと行く道もあるんだけど、今日はあいにくその通路は封鎖されているのだ。

ロバスの街中は自動で周回するバスみたいな車がゆっくり走っている。最初見たときはびっくりしたんだけど、この車はどうもロバスの街中だけでしか動かない代物らしい。地下道をくぐって西ブロックに入り、バスをつかって北ブロックへ抜ける地下道へ行く。こうして移動すると、色んなお店が目につくなぁ・・・

宿を出て一時間程たってようやく北ブロックの女神像がある縦穴の淵にやってきた。女神像は北ブロックの真ん中にあるこの縦穴の底にあるらしい。縦穴に沿って道があり、女神像を見に行くであろう人達の姿が見える。西側が降りる人、東側が上る人と分かれているようで人波が行儀良く進んでいる。これだと行く人と帰る人でごったかえさないから進み易いよね。

「女神像って見に来る人結構いるんだねぇ」
「そうですね、今日は特に多いんじゃないですかね」
「ミミ、ちょっと頭痛するかもぉ・・・」
「ほーほー。ほーほーほー」
「ミミ、しんどいならおんぶしよっか？」
「うー・・・うん」

本当にしんどそうなミミをおんぶして、女神像へ向かう。確かにこ

れだけの人ごみだと、慣れてないとしんどくなるかもね。

「セリナ、ちゃんと僕の腕を掴んでて？　はぐれるかもだし」
「はいっ」

セリナが嬉しそうにぎゅっと右腕を掴んでくれる。ヒロコは黙ってても腕を掴んでる。

「これだけの人が居たら、声が聞こえる人も一杯いそうだよね」
「それが、1日に二人とか三人とからしいですよ、聞こえる人って」
「そうなんだ。でも、そんなに少ない人しか聞こえないのに、凄い人気だねぇ」
「それはやっぱり、効き目が凄いからじゃないでしょうか。冒険者の方や商売をしてる方のなかで、女神像の声を聞いた方は有名になっていますしね」
「あ、あれかな？　女神像っていうの」
「はい、そうです。あれが女神像です」
「へぇ・・・」
「大きくて綺麗だねぇ」

縦穴の底まで降りてくると、すこし広く拓けている所にぽつんと台座があり、その上に女神像が建っていた。特に綺麗とか凝った意匠が施されているわけではないけども、女神像の表情はすごく優しそうに微笑んでいて、見てると嬉しくなってくるものだった。ミミも女神像効果なのか、ひょいと僕の背中から降りると真剣に女神像をみつめていた。ふと気付くとミミだけでなくセリナもヒロコも同じようにしていた。

なので、僕もじっと女神像を見つめていた。

“よくぞ参られた、そのまま其処で剣舞を舞ってくだされ”

「へ？」

剣舞って、剣を持ってくるくる型を見せるあれのことかな？　いやそんなの知らないんだけども・・・？　ていうか、これが女神像の声・・・？

そう思って女神像をちらりと見ると

“そうです。わたしがあなたに話かけたのです。”

「セリナ」

「はい？　どうしました？」

「女神像の神託どおりに行動すると、運が良くなるんだよね・・・？」

「そうですね。まぁ、神託がどういう事を言うかはわたしも知りませんけどね」

「ちょっと、剣舞してくる」

「え、コージ？　ひょっとして？」

ぐっとセリナに親指を立てて、その質問に答える。

とりあえず、アクセルを唱えて剣を凄い勢いで振ったり、飛んだり跳ねたり、くるくる回ったりして、それっぽい事をするとしよう！

「すいません、これからここで剣舞をしますので、少し離れてくださいっ」

半ばやけくそ気味に大きな声でそう宣言する。ここ大勢の人がいる

から恥ずかしいけど、剣舞を黙って始めて人に怪我させたりすると大変だからね。

「グッドラック」から剣を二本、炎と氷の双剣を出す。

「ミミ、手伝ってくれる？　今からここで剣舞したいんだ」

「ミミ、剣舞なんて知らないよぉ・・・」

「大丈夫、僕の攻撃を剣で止めてくれればいいから、ほいっ」

ミミに氷の剣を渡して、僕は炎の剣。

「それでは、始めます」

僕が急に剣舞をすると言い出すと周りの人達は、即座に離れてくれた。神託関連だと分かってくれたのだろう。みんな興味深々で僕たちを見てる。

アクセルを唱え、ミミに斬りかかる。

なるべく大振りにして目立つように振る。上段、斬り返し、左右の連撃、踏み込んで下段狙い、めまぐるしく止まることなくミミへ斬撃を放つ。ミミは最初のうちこそ、観客に呑まれて表情が硬かったんだけど、動き出すにつれどんどん元気になって、すごい笑顔で僕の攻撃を全て受けきる。さっきまでおんぶされていた人間とは思えないほどだ。でも、そのおかげで僕のほうも段々楽しくなってきた。

興が乗り始めてしばらくたったころ、女神像が光ったように見えた。

「エンド」

アクセルを解除し、女神像を見てみる。あれ？　違ったかな、気のせいだったかな？　と思っていると声を掛けられた。

「お、コージじゃないか！　こんな所で何をしとるんじゃ？」
「ハーベイさん？！　なんでここにいるんですか？」

セリナの命の恩人？　のハーベイさんが何故かそこにいた。

久しぶりにハーベイさんに会って話を聞くと、ロバスに居るのはどうやら僕のせいでもあるらしい。ホワイトファングがお店から無くなった事に気付いた奥さんが、ハーベイさんを問い詰めたそうだ。だけどハーベイさんはホワイトファングに逃げられたと言って誤魔化そうとしたんだけど、そんな馬鹿な事を言ってお店をやっていけると思っているのか！　と嘘を見抜かれてすんごい雷を落とされたらしい。実際、あのあと貴族にも目を付けられたらしく、細かい嫌がらせを受けたりもしたそうだ。それで、ロバスでフレームを仕入れるついでに、厄落としをかねて女神像に神託を受けて来いと命令されたんだって。

「で、神託を受けに来てびっくりじゃ。まさかコージがおどっとるとは思いもせんて」
「いや、お恥ずかしい・・・いひひ」
「しかも、はぁ・・・めんこい嬢ちゃん揃いじゃないか。なるほどなるほど。あれだけ必死だったのもうなづけるもんじゃて」
「ほんと、ハーベイさんのおかげでみんな助かったんです。ありがとうございました」

深々と僕が礼をすると、セリナもミミもヒロコも揃ってハーベイさんに向かって礼をする。そんな様をみて照れくさいのか、手を振って応えるハーベイさん。

「で、ハーベイさんにフレーム関連のパーツで見て欲しい物があるんですよ」
「ん？　なんじゃ、嬉しそうな顔をしおってからに。これから、知り合いの店に仕入れに行くんで、そこで見せてもらって構わんかの？」
「はい、勿論です。では、早速向かいましょうよ」
「ん？　パーツを運ぶ手配をせんと駄目じゃろうて。コージ慌てなさんな」
「あ、大丈夫です。こう見えてもちゃんと持ってるんで」
「・・・ふむ、じゃあ行くとするかの。東側のブロックじゃ」
「はい、分かりました」

よし、ハーベイさんに借金返済計画の第一歩だ！

女神像の声（後書き）

主人公補正！

おかしな文章訂正。

売れる？　売れない？

「ほぉ、魔石エンジンか。程度のいいものであれば結構な値になるぞ。しかも星８型だとかなり良い物じゃな」
「はい、確か星８型って書いてました。直前まで動いてたんで状態は良いとは思うんですけどね。そこは見てもらわないと分からないですねぇ」
「ふむそうか。なら少し期待させて貰うかの」
知り合いの工房に行く道すがら、そんな話をハーベイさんとしながら歩いていた。

「一応、魔石エンジンを積んでた古代遺跡で出会ったロボットの残骸もありますから、それも見て貰っても良いです？」
「おうそうかそうか。古代遺跡のロボットとはまた珍しいものを・・・」
どうも古代遺跡にはロボットが出るには出るんだけど、深い階層に出る事が多いので残骸を持ち帰る事ができないそうだ。やってやれない事もないそうだけど、それ専門の為にパーティを組んで腕の良い冒険者を雇わなければ駄目なので、よっぽど良い素材となるロボットが出ない限り儲けが少ないらしい。

「おぅ、ここじゃここじゃ」
東ブロックに入ってブロックの中央から、東よりのエリアにその工房はあった。フレームの工房としては大きくも無く小さくも無い感じだった。あ、大きさと感じ的にヒューイックのハーベイさんのお店に似てるなぁ。

「トロッター商会？」
「うむ、わしの知り合いがやっとる店で色々と風変わりな職人も抱えておるんじゃ」
「へぇ～、そうなんですか」
風変わりな職人とか言われると、どう返せばいいか分からないですよハーベイさん。
「おーい、リック居るかぁ？　ちょっと工房を貸してくれんかぁ」
ハーベイさんの声を聞きつけて、青いつなぎを来た３０代ぐらいの茶髪を短くかった男性がこちらへやってきた。
「あぁハーベイさん、ご無沙汰です。またなんか面白いもんを見つけたんですか？」
「面白いもんを見つけたのは、このコージでな。コージ、こいつはリックだ」
「どうも始めまして、コージ＝ヒロセです。お邪魔します」
「ははっ、礼儀正しいねぇ。俺はリック＝トロッター、ここのオーナー兼職人だ」
おー、この人はフレームを造ったりするのかな？　凄いなぁ～。
「まぁ、立ち話もなんだし早速工房にいくとしよう。足が痛うてかなわん」
「はいはい。どうぞどうぞ」
と、苦笑しながらリックさんが工房へと案内してくれた。

「小型魔石エンジン星８型じゃと・・・」
「ですね、これ・・・」

さっき星８型って言った時は驚いてなかったのに、なんかすごく驚いてるハーベイさん。

「エンジンの型の説明からさせて貰うとな、１から１０までの型があり数が大きければ大きいほど高性能なんじゃ。出力や耐久性、魔力変換効率などが型が１つ上がるだけで大きく変わるんじゃ」

うんうん。ていうと８型ってのはかなり高性能なエンジンなんだ。

「で、エンジンの心臓部の魔石シートの形もさまざまな種類があってな、今見ている星型に楕円型、丸型、四角型などの形があり、これも形によって出力や特性が変わってくる。星型は汎用性の高い型じゃな」

だったら、結構汎用性の高い高性能エンジンってことか。良い物拾ったなぁ～

「あとどの型でも最高の１０型は滅多に出ないんじゃ。８とか９もかなり珍しいが１０ほどじゃない。現にこの店にも２台かの？　無い事も無いんじゃ」

ふんふん。だったら別に驚かなくても良いんじゃないの？　これ８型だし。

「ただ、小型となると話が変わる。８型が最高なんじゃ」

おぉ！　じゃあこれって滅茶レア物ってことなんだ！　ハーベイさん喜んでくれそうだ。

「ある意味、１０型を見つけるより難しい代物でなぁ。しかもこれだけ完全な状態となるとちょっと値がつけられんぞぉ」

え！　ひょっとしてレアすぎて売り物にならない・・・？　うそーん。

「あと、このエンジンをどっから出したかも疑問なんじゃがまぁいい。ロボットの残骸もあると言ってたが、それも見せてくれんかの？　このエンジンを積んでたからには装備にも珍しい物があるかもしれん」

おー、職人から見れば売れる物を掘り出せるかもしれないってことだね。よし。

「ちょっとあっち向いててくださいね」

「ん、分かった」

ハーベイさんとリックさんが向こうを向いたのを確認した後、指輪から残骸を取り出した。

「はいどうぞぉ、これです」

「・・・これはキラーマシンか？」

「ですね、いやはや興味深い」

フレームを扱う二人は、ロボットの残骸を見て機種が分かったらし

い。さすがに色々見てきてるだけはあるんだなぁ。今度、古代遺跡に着いて来て貰おうかなぁ。

「ほぉ、頭部を綺麗に焼ききってるなぁ。・・・ん？　魔法でここまで焼ききるとなると、とんでもない技量なんじゃが、コージおぬしか？」

「ううん、このセリナですよ。魔法が得意なんですこの子」

「はい、わたしがびびっとやりました」

えへって笑って応えるセリナ。うんうん、仏頂面を出さないように頑張ってるようで偉い！

「お、おぅそうか・・・、てことは、機体表面のこの傷はコージがしたんかのぉ」

「あ、それはミミです。見た目と違って凄いんですよ、ミミは」

「う、うん、ミミがやりましたぁ」

初対面の人はやっぱりちょっとおっかなびっくりなミミ。だけど、ハーベイさんのおかげで助かったと分かってるので、笑顔で答える。

「そ、そうか。コージよお嬢ちゃん達ばかり働かせて何をやっとるんじゃ、おぬしは」

「いやぁ、あははは」

「コージさんが、注意をひきつけてくれたから魔法が撃てたんです！　凄いんですよコージさんは！」

「そうだよ、ミミが動き易いようにできるのはコージだけだもん！」

「おぉぉ、分かった分かったすまんかったなぁ、嬢ちゃん達」

セリナとミミがハーベイさんを責めるけど、別に間違った事言ってないのになぁ。とりあえず、二人をなだめてその場を治める。

「ほほぉ・・・これは興味深い」

空気を読まずに一人、解体作業に没頭していたリックさんがそう呟いた。

売れる？　売れない？（後書き）

説明です。なんとなく設定はあるんですが、なんとなく設定なので固めないとヤヴァイ。

技術供与・・・？

「ハーベイさん、これご覧になってくださいますか」
「ん。どれどれ」

リックさんが真剣な表情でハーベイさんに指し示したのは、キラーマシンの腕の部分。銃がついていた部分だ。銃は銃身が壊れているんだけどもね。

「この武器は銃で、ロボットの武器としては珍しいものではないんですが、この弾を送り込むところにあるこの機械を見てください」
「お？　これがどうしたんじゃ？」
「魔力で動く機械なんですが、これに魔力を流し込むと・・・」

と、いいながらリックさんは機械の箱の部分を持ち何かを操作する。

がちゃがちゃがちゃちゃりんちゃりんちゃりん・・・

弾丸がどんどん機械から出てくる。あぁ魔力を変換して実弾を作ってるのね。「ノーミス」や「月光」で使ってるのと同じシステムなんだ。やっぱり魔力を利用して武器を作る人ってみんな考える事は一緒なのね。ふとハーベイさんを見ると、声も出ないほど驚いてる。あれ？

「ロボット共が弾切れを起こさんのはこれのせいじゃったのか」
「みたいですね。しかも、そんなに魔力を使わずに弾を生成できるので、この機体で小型星８型なんて化け物エンジンを積んでるんで、弾切れを起こす事は無いですね」

実弾は、弾丸の大きさにもよるけど衝撃波もなかなかに厄介なのだ。
数少ない何のマニアか分からない友達に話を聞いた覚えがあったので、僕も「ノーミス」で実弾を撃てるようにしたのだ。

「こんな綺麗な状態で、工房まで運ばれた事が無いからね。この残骸を詳しく解体してロボットの構造を調査すれば、ロボットの効果的な倒し方も分かるかもしれない。あとフレームの製作にも役に立つでしょうし、古代遺跡の攻略にも少しは役に立つ事でしょう」
「そうじゃな、残骸といえど馬鹿にはできんな。この魔力変換装置だけでもかなりのお宝じゃし。コージ、これ５０プラチナでどうじゃ？」
「えっと、小型魔石エンジンも一緒でどれぐらいになります？」
「うぅむ・・・すまんがエンジンも一緒となるとわしじゃ買い取りできんなぁ」
残念そうに呟くハーベイさん。

「えっと、それはエンジンが高すぎるって事ですか？」
「そうじゃ、下手なルーツより値段が張るからのぉ。デストロイヤーは別としてな」
「じゃあ、デストロイヤーもといホワイトファングと交換ってことで手を打ちませんか？」
「おお？　それはこっちにとって助かるが小型の８型じゃぞ？　本当にいいのか？」
物凄く驚いた顔で聞き返してくるハーベイさん。

「えっと、ちょっとばらして見せて貰えるならそれで問題ないですよ、はい」

構造さえ覚えておけば、自分で造れるもんね。

「あの時ハーベイさんに助けて貰えなかったら、今ここでこうして笑ってられなかったでしょうし、ばらして見せて貰えればたぶん自分で造れると思いますから、そのエンジンと残骸でホワイトファングの代金と言う事にして貰えませんか？」

「・・・うぅむ。こっちが一方的に得をしてるんじゃが、それは理解しておるか？」

「いえいえ、僕もじゅうぶん得してるんで、問題ないです！」

「あー、エンジンをばらすってことだが一箇所どうしてもばらせない所があるが、大丈夫か？　さっき造れるといってたが」

そこでリックさんが、疑問をぶつけてきた。

「ばらさなくても、外側から調べてみれば大丈夫だと思います。でも駄目なら駄目でそれでも良いです」

「よし、じゃあ取引成立じゃ」

「ありがとうございます」

「いやいや、礼を言うのはこっちじゃて。これで妻に叱られんで済むわい」

あっはっはっはーと大笑いするハーベイさん。これで僕もやっと借金を返せたのでほっとできるよ～。

「早速、ここでばらしたい所じゃが、やっぱり慣れとる自分の工房でやる方が良さそうじゃ。壊してしもうては元も子も無いからの」

「じゃあ一度ヒューイックに戻ります？」

「そうじゃな、そうしよう。すまんがコージよ、ヒューイックまで付き合ってくれんか」

「お安い御用ですよ。すぐに帰ってばらしましょう」
「コージはせっかちじゃのぉ」
「ふふーん、便利なものがあるんですよ！」

訝しげな様子のハーベイさんに、僕はちょっと得意気に笑って見せた。エレメンタルフレアの出番なのだ！

ヒューイックに行くので、晩御飯要らないと宿に伝える為に戻ったらファラスさんが何故かやってきててセリナ以外に何かのカードを手渡してくれた。

「これはロバスの通行許可証だ、上と掛け合って分捕ってきた。これがあればロバスの行き来が楽になる。どうせコージの事だ。まだギルドの登録はしてないんだろ？」
「はい、まったくもってその通りでございます」

なんでばれたんだろ？　まぁ、ギルドに入らなくても普段困らないしねぇ。

「この許可証があれば、見せるだけで通行できるから持っておくと良い。せめてもの礼だ」
「ありがとうございます、ファラスさん。今日はエリツォーネさんは一緒じゃないんですか？」
「あぁ、向こうは向こうで報告する事が多いみたいでな。誘ってみたが断られたよ」
「エリツォーネさんは忙しいんですねぇ。わざわざありがとうございますファラスさん」

こんな言い方をするとファラスさんが暇みたいに聞こえるかな？
大丈夫かな？

「ふふふ、まぁ次の任務まで暇と言えば暇なんだよ。書類仕事は得意なんで、すぐ終わるしね」

やっぱり僕の顔に暇って書いてたのかな。そんな風に教えてくれるファラスさん。

「これからヒューイックに行ってくるんで、この許可証は本当に助かります！　もぉあの書類審査は本当にめんどくさくて・・・」
「コージはおおげさだな、審査なんて決まった事書けばいいんだから楽じゃないか」
「書類が得意な人にはわかんないんです！」
「ははは」

うぬぬ腹は立つけど許可証を持ってきてくれたから我慢我慢。なんだかんだいってファラスさんて面倒見が良いよね。ミミにも丁寧に勉強教えてたもんなぁ。

「じゃあヒューイックに行ってきまーす！」

今度こそ発進だ！

ヒューイックまでエレメンタルフレアで一時間。今回はセリナ達は留守番してもらった。ヒロコは僕の精霊ってだけあって、僕の記憶を見れるらしく母さんの顔が分かるらしい。無いとは思うけどヒューイックに行ってる間に母さんがロバスに来たときに、居場所を突き止めて貰うつもりだ。セリナとミミはその護衛として残って貰ってる。

「ひょっほぉ～～～～い」

空飛ぶエレメンタルフレアで、はじけてるのはハーベイさん。最初はガイアフレームでヒューイックまで送るというと、腰が痛くなるから馬車のほうが良いとごねていたんだけど強引に押し込み、町の外まで行って飛行体勢になり、空を飛ぶと一気に態度が変わった。

「こんな強引な方法で空を飛べるとは思わんかったわぃ～」
「確かに魔力を馬鹿食いするんで、乗り手は選びますけど強引ってほどじゃ・・・」
「ばーか言えぇ～！　普通の乗り手じゃと１０分持てば良いほうじゃぞ。しかし、空を飛ぶのは快適じゃなぁ」
「最初は嫌がってたのは誰でしたっけ？」
「ふぁっふぁっ、そんな奴ぁ居ないじゃろ？　しかし、空を飛ぶユニットとは良いのぉ。じゃが、ちょっと無理やりくっつけた感があるのが残念じゃなぁ。わしじゃったら、もう少し効率よく乗り手に優しくするんじゃがのぉ」

お、無理やりにくっつけたのがばれてる。ハーベイさんはプロだからやっぱりそういう事が乗っただけで分かるもんなんだねぇ。そうだ！

「良かったら設計図渡すんで、改良してくれます？」
「コージはほんに気前がええのぉ・・・騙されたらどうすんじゃ」
「僕としてはフレームの種類が色々増えた方が、対戦したときに楽しいんですよ」

やっぱり、ロボットは対戦して切磋琢磨していくのが醍醐味だよね。ハメ技は勘弁してほしいけどね。

「フレームを造るより、乗ってる方が好きと言うわけか、なるほどのぉ。まぁ、見た所あんまり頭は良さそうには見えないしの」
「ほっといてくださいよ！？」

飛行ユニットの設計図を見ながら改良案を考えてたら、ヒューイックにあっという間に着いてしまいました。ヒューイックは審査が無いから楽でいいや。よし、早速エンジンをばらしてもらおう！

技術供与・・・？（後書き）

ごめんなさい、しばらくロボット話が続きます。

感想ありがとうございました。お話調整していきます！　いやお恥ずかしい。

遡遡

ヒューイックの町につきハーベイさんの工房へ直行する。まぁ、ほんというと道順を良く覚えてなかったのでハーベイさんに時々、指示されたんだけどね。あはは。ガイアフレームにレーダーは一応あるんだから地図機能とかも付けてくれたら良いのになぁ。

ん？　レーダー・・・？

「あぁっ！？」

「うぉおお、なんじゃコージ！？　急に大声だすな、びっくりするじゃろうが！？」

「あーごめんなさいハーベイさん、ちょっと自分の馬鹿さ加減にびっくりして」

「そうかそうか。馬鹿なのは知っとるぞい？」

いまさら言う事ではなかろう？　とハーベイさんに呟かれてしまったけど、いやいまさら言う事なんですよこれが！

以前作った魔物の素材から魔物を探すレーダー。これにもう少し機能を追加すれば母さんの居所も探せるじゃないか・・・あほだ僕。

「じゃあハーベイさん、早速で悪いんですけどエンジンをばらしてくれます？」

「あぁ、それは構わんがおまえはみとらんで良いのか？」

「あ、このマジックアイテムで録画させて貰いますので大丈夫です。ちょっと僕も急いで作らないと駄目なものができちゃったんで」

「録画・・・？　まぁ、大丈夫っていうなら構わんが。じゃ解体しとくぞ」

「はい、お願いします」

動画を取るアイテムを取り出し、ハーベイさんの作業を撮れるようにセット。念のために2個セットしておく。ハーベイさんがエンジンをばらしている間に、魔物探知のアイテムを改良しよう。

うーん・・・おかしい。

僕の血を媒介にして、似通った血の人間をまぁぶっちゃけ肉親を探すように探知アイテムを作り直したつもりなんだけど、何故か反応が三つある。ひとつは勿論僕なんだけど、あと二つ。ロバスの方面で固まって行動してるみたいだ。最初は誤作動というか、表示がにじんでるだけかと思ったんだけど、倍率を変えてみたら明らかに二つある。何度か作り直してみたけど、結果は何度やっても同じ、必ず三つの表示が出てきた。

作業をしているハーベイさんにちょっと協力してもらったけど、子供さんが二人いるそうで画面の表示はやっぱり三つだった。ハーベイさんの両親は亡くなってるそうだし、奥さんとは血が繋がってないから表示されないって事は、ちゃんと血のつながりを追いかけてるのは間違いないはずだし。え？　お孫さんがいる？　てことは、親子関係までしか追跡しないって事か。まぁそれはそれで故障ではないなぁ。

よし、機械が間違ってないという前提なら母さんと・・・父さんが一緒に居るって事なのか？

いやいや、いくら行方不明で生死が分からないとはいえ、まさか同じ異世界に飛んでるわけないよね？　いや・・・ちょっと待って？

「もうすぐあえる」

逆なんだ。僕と母さんは偶々飛んだんじゃなくて、父さんに呼ばれたんだ！

あのメッセージは父さんが送って来てたらなら、話は繋がる！　何かの原因で父さんが異世界に飛ばされて、しばらくこっちで暮らした後に僕達をどうやったか分かんないけど、この世界に呼び寄せた。母さんにもメッセージを送ってたから、あの黒い渦に向かってまったく恐れずに飛び込んだ、いやむしろ僕を巻き込んだ母さんの行動も納得できる。いや、単純に面白そうってだけでも飛び込むか、あの人は・・・

急に居なくなった父さん。大好きだった父さん。いつも遊んでくれて、何かと教えてくれて、めちゃくちゃ叱られたりもしたけど僕にとって、一番大好きで凄い人だった。
居なくなった時、しばらく立ち直れなかったけど母さんや弘子が居たおかげでなんとか立ち直れたけど。

ちょっと落ち着こう、深呼吸だ。

すーはー。

よーしよし。あくまでもこれは推測だ。もし間違ってたら目も当てられない。父さんが大好きだったから、こんな希望的観測が出てくるのは仕方ないとは思うけどあくまで推測の一つなのを理解しよう。とはいえ自分的には確度の高い推測であるとは思っている。

やばい、会いに行きたい。すぐにでも確認したい。

「だったら、すぐにでも行こう！　そうしよう！」

だいたいなんでもできる僕の力なら、ここから飛んでいくのも簡単な事。むしろガイアフレームより早く飛べる自信がある。というか、ロバスまでテレポートしてから飛んで行けばあっという間だ！

「ハーベイさん、ちょっと大事な用事ができちゃって今から行って来る！」

「お？　行って来い行って来い、こっちは程ほどに解体しておくからの」

「はい、行って来ます！」

よし、行くぞっ！

「なんだか、疎外感を感じるわぁ」

「訳のわかんないこと言ってないで、ちょっとは手伝ってくれよ、るり！」

「リリィ！」

「はい！」

「“風よ！嵐よ！　其の力をとくと知らしめよ！　ウインディーズ！”」

「またそれか！　ええぃ！　“絶刃裂波”」

そう言って男は片手に持ってる剣を地面をえぐるように振り抜く。

突き進んでくる魔法に衝撃波がぶつかり威力を相殺する。

「そろそろお疲れでしょ？　いい加減諦めてお城に戻ってはいかがです、陛下」
「手下にばっかり働かせやがって、おまえは本当にいい性格してやがるな！」
「部下の使い方がうまいと褒めて貰えるんですけどね、これでも」

「あ、来たっ！　おーい！」
「どした、るり？」

ゴオッ！

何かが凄い勢いで飛んできてそして通り過ぎて行った。

ロバス近郊の森までひとっとびした後、そのままレーダーの指し示す方向へと飛翔する。あわわ、速く飛びすぎると衝撃波が地面えぐってる！？　慌てて高度をとってさらに加速する。衝撃波が出るって事は音速超えてるのかな？　あははーどんだけハイテンションなのさ僕。あと少し。あと少しで真実がわかる。そろそろだから、ちょっと減速しよう。

「あ、来たっ！　おーい！」

そんな甲高い少女の声が聞こえた。勢い良すぎた僕は、素通りしちゃった。ちらっと一瞬見えたけど、誰かが争ってるように見えた。僕に声を掛けてきたのは黒髪の女の子・・・？ちょっと距離があったから分からないけど。母さんにしては、ちょっと若すぎるような？

とりあえず停止してからテレポートしますか！

「ほい！　アクセル！」

さっき飛び去った所へテレポートし、即座にアクセルで状況を確認する。

僕の右手に男女の二人組み。左手には女性の二人組み。どっちも二人組みだけど、男女の方の女性は見覚えがある。・・・母さん若返ってない？　それと父さん。

よっし！　父さんだ間違いない！　なんか記憶の中の父さんより若返ってる気もするけどあのニヤリとした顔は間違いなく父さんだ！

生きてたんだ父さん！　だけど、なんかこっちの女性二人組みが父さんたちを襲ってるみたいだ。こんにゃろぉ！

「ボォオオオルサンダァアアアア！　ダァアアアブルッ！」

「ボォォオオル・シュゥウウトォオオオオッ！」

気合を込めてびりびり麻痺まひ球魔法をぶち込む！　おとなしく痺れてろ！　いきなり攻撃魔法を撃たれても仮面をしてる女性は回避しようとしているが、逃がさない。僕は球魔法をコントロールし、二人に球魔法が直撃した。

あとは、盗賊を縛るための紐でふんじばってと。準備完了。

「エンド！　父ちゃん！」

父ちゃんに突撃した。

遁逅（後書き）

急展開。急展開過ぎる？　うん、ぼくもそうおもう。

父ちゃんに飛びついたら、母さんに飛びついてた。あれ？

「光司、やっと来てくれたねぇ～、母さんちょっと若返っちゃったわよ～」

「いや、なんで母さん？！　あれ？　父ちゃんは？」

「・・・俺はここだ・・・」

母さんに突き飛ばされたようで、父ちゃん、もとい父さんは地面に転がっている。

「久々の親子の対面なんだもの、勇司さんは後あと」

「母さんは良いだろうけど、僕、父さんと会うの久しぶりなんだけどっ！？」

「あー光司、強くなったなぁ。はっはっは。見ての通り父さんはるりに負けっぱなしだ」

地面に転がったままで、にやりと笑って力強くサムズアップする父さん。

「それより光司、昔みたいに父ちゃんって呼んでくれ。ん？」

「あーまぁ、また今度ね、また今度！　それよりそこの二人にはどういう経緯で襲われたの？」

「ろくに事情も知らないで、やっちまったのか。ぶはははは、まぁ助かったから良いんだけどな。まぁ俺はこの国で王様してたんだが、ちょいと追われる事になってな。こいつらはその追っ手だ」

「庶民上がりの王様って父さんだったの？」

「おう、その通り。びっくりしたか？」

「もぉーそんな話はどーでも良いでしょ？　ほら光司、お母さん若返ったのよーぴちぴちよー？」
「それはどうでもいい。てかなんで二人とも若返ってるの？」
「なんでかこっちの世界に来た時に疲れ知らずにはなったんだが、そんなに俺って若返ってるか光司？」
「うーん、そう言われると僕も父さんと会うの久しぶりだから分かんないけど、二人とも若くなってる気がするよ？」
「そうかそうか。若くなる分には悪い事はないしな。良かったよ」

そう言って目を細めて僕を見る父さん。父さんを久しぶりに見て、ちょっと涙腺が緩みそうになっちゃった。でもあれだ。積もる話はあるんだけど、母さんがどうでもいいって言ってから、物凄い勢いでいじけてる。あれは早めに構わないと物凄く後を引いて面倒くさくなる。

「物凄く可愛くなった母さん、久しぶり！　元気だった？」

母さんが調子に乗りそうな台詞を臆面もなく吐く僕。慣れたもんだ。

「でしょでしょでしょ？　母さん可愛くなったよね？　綺麗よね？　誰もが振り向くよね？」
「うんうん、だから早く行こうね」
「うん分かった、光司」
「・・・どうなってやがる・・・？」

父さんが居なくなってから、母さんの面倒くささがアップしたから、僕と母さんのやり取りを見て父さんが驚いている。本気出した母さんはこんなもんじゃないよ、父さん。本気でうざいからね？

ねっ転がってる二人を父さんに担いで貰って、ロバスへ向かおう。

テレポートで一気に飛んでもいいよね？　歩くとロバスまで結構距離あるしここ。

「父さん、母さん、ロバスまで飛んじゃって良い？」
「お、そんな事もできるのか光司は。身体は大丈夫なのか？　そんな事して」
「うん、大丈夫。簡単だからね、行くよ」

二人の手を掴んでロバスをイメージして飛んだ。

「っと。もう着いたのか速いなぁ」
「えっと、トリプルセブンで宿を取ってるんだけど父さんはどっかに報告とかしないと駄目なのかな？」
「あーそうだな。ちょっとロバスの顔役に挨拶してくるわ。るりは光司と一緒に宿に行っといてくれるか？」
「うん、いいわよ。光司と積もる話もあるし。ねっ」
「いや、どっちかというと父さんと積もる話があるんだけど・・・」
「ん？　何か言った光司？」
「ううん、何も言ってない」
「そうよね、気のせいよね、うんうん。じゃ勇司さんいってらっしゃぁ～い」
「おう」

父さんはそう力強く返事をして、二人の女性を肩に担いだまま町の中へ悠然と歩いていった。せっかく会えた父さんと離れるのはちょっと寂しいけど、またすぐ会えるからね。そうやってぐっと我慢して僕たちはトリプルセブンへと向かい、セリナ達と合流することにした。

「ふんふん。光司ちゃんこっちの世界に来てから女の子と縁がある

のねぇ。弘子ちゃんはどうするの？」
「いやいや、弘子をどうするもこうするも、そもそも何もなかったし。こっちの世界に来ちゃったから余計どうしようも無いでしょ？」
「ふぅ～ん？　鈍感太郎だったのねぇ、うちの光司は。まぁそこも可愛いんだけどねぇ」
「ちょっやめてよ恥ずかしい」

家に居た頃と変わらず、すぐにハグしてくる母さん。若くなって美少女と言って良いぐらいに可愛くなってるけど、母さんだと思うと全くドキドキしない。母さんだしなぁ。
トリプルセブンに着いて早速セリナ達の居る部屋へ向かう。

「母さんどきどきだわぁ。光司のお嫁さん達と仲良くできるかなぁ」
「何言ってるの母さん。おーい、ヒロコいるー？」
「ほいほーい、マスター？」
「あらコージさんですか？」
「うや？」

部屋の中に声を掛けたら、みんないっせいに出てきた。待っててくれたのね。

「あ、ただいま、みんな。えと、こっちの・・・」
「コージさんまた美少女捕まえてきた・・・」
「マスター、遊びに行ってたの・・・？」
「・・・・・・」

ミミはぽかーんとしている。ちょっと説明する前に濡れ衣をかぶせないで欲しいなぁ！

「若いけど母さんだから、これ！　なんでかこっちに来て若返った

の、ほんとだって！」
「うふふ、るりです。光司はこう言ってますけど色々宜しくね。そう、い・ろ・い・ろ」
「うもーーー！　間違ってないけど誤解を招く挨拶は止めてくれる母さん！？」
「コージ・・・」
「マスター？」
「コージィ・・・？」

このままじゃ埒が明かないので、部屋の中に入り今までの経緯を説明する。僕の造ったマジックアイテムで母さんと父さんを見つけ出した事。父さんは王様らしい事。とりあえず自分の馬鹿さ加減も説明しておいた。

「コージが人探しのマジックアイテムを作らないのは、何か訳があるか作れないのかと思ってましたが、単純に忘れてたんですねぇ」
「セリナは気付いてたの？！　教えてくれても良かったんじゃ・・・？」
「だって、教えちゃったらそこで旅が終わるし、勿体無いじゃないですか。えへっ」

しれっとそんな事をのたまいましたこの子。あーもうっ！可愛いからってこんにゃろおぅ。

「ふみゃーふみゃーコージっコージィ～・・・」
「あ～可愛いわぁこの子。ミミちゃんうちの子になりなさいよ。ねっねっ？」

ミミは母さんに凄く気に入られてしまい、ハグ攻撃されている。絵面的には美少女二人の絡み合いなんだけど、かたっぽが母さんって

だけで何も面白くない。ミミがんばれ。はぁ・・・

「えーっと、というわけでずっと行方不明だった父さんも含めて家族全員が揃ったってわけなんだ。父さんとはまだあんまり話できてないんだけどね」

「お義父様はどこへ行かれたんです？」

「なんかロバスの顔役に挨拶してくるってどっか行った。すぐ戻ってくると思うけど」

何か漢字が違う気がするのは気のせいだよね。

「そうなんですか。ちょっとお会いできるのが楽しみです」

「勇司さんは渡さないわよっ」

「え？　いえいえ滅相もございません！　お義母さんに勝てるなんて思いませんし」

「私に勝てたら勇司さんを狙うって事かしら・・・？」

「ち、違います！　私はむしろコージをねらってるほうでして・・・」

ごにょごにょとなんだか小さい声で呟くセリナ。顔が真っ赤だ。

「ん！　それなら宜しい。おおいにやりなさい！」

「はい、がんばります」

どうやら母さんは聞こえてたようだ。めんどくさい母さんの相手をしてくれてありがとうセリナ！　あー、早く父さん戻ってこないかなぁ。男同士で話したいなぁ。友達は親なんかうっとうしいだけって言ってたけどね。

コンコンッ

「光司はこっちの部屋にいるのか？」

どうやら父さんが戻ってきたみたいだ。

「さて、何から話そうかねぇ」

帰ってきた父さんは、部屋で落ち着くとふむと難しそうな顔をした。

「よし、最初っからじゃなんなんでダイジェストで行くぞ。まず、父ちゃんなこっちの世界に急に落ちたわけよ。で、落ちた先がなんでかロボットの中でさー、しかも魔石獣がどんどんここっちに来てる訳よ。夢中で動かしてなんとか倒しきったら、周りにたまたま居た人達にえらい喜ばれてなぁ」

最初はそうだったよなぁと呟く父さん。いきなりフレームに乗ったのか。ある意味うらやましいシチュエーションだなぁ。

「で、身体に訳のわかんない印があって、どうもそれが王の印という奴らしくってな。あれよあれよという間に、王様にされちゃったってわけなのよ。まぁ、今はその印は無いんだけどね」

「印って消えるもんなの？」

「あーいや。お前に移した。あははは－」

「は？」

「だって、るりと光司をこっちに呼んだ時にさ、ラディアスの奴がクーデターなんぞするから、やばい状況でさ。とりあえず光司だけでも逃がそうと思って、移動させたのよ」

「じゃあ、僕のでたらめな魔法の力ってそのせい？」

「いやぁ～王の印ってのはそういうのじゃ無かったと思うぜ？　現に俺は魔法なんてろくに使えないしなぁ」

「ふぅん」

「ま、とりあえずこっちの世界に来て王様になっても、るりと光司

を忘れられなくてな。こっちの世界の魔術師に向こうの世界に戻れないって聞いたけど、諦められなくてね。だったらこっちに呼んでしまえって思ったわけだ」

にこやかに笑ってるけど、父ちゃん中々に無茶をするなぁ。僕たちが嫌って言うと思わなかったのかなぁ？

「そりゃぁ嫌って言われるかもと考えもしたが、先に色々メッセージを送っといたから心の準備はできただろ？　駄目なら、指定した時間と場所に居なけりゃいい訳だし」

「それはそうだけど、友達に指輪とか渡したりしたから滅茶苦茶びっくりされたよ」

幼馴染の弘子には何か凄い勘違いされたしねぇ。

「本当は指輪で無くても良かったんだけどな。これを機に光司が何か告白じみた事をしてくれないかなぁと考えた、父ちゃんの親心って奴なのよ」

「余計なお世話だよっ！」

「はっはっはぁ。そいつは悪かったな光司」

ちっとも悪く思ってなさそうな顔をしてる父さん。

「隣の弘子ちゃんに指輪を渡してるのを見ましたよ、勇司さん」

「ほほぉ、やっぱりな」

「ちょっ母さん！」

くふふって感じで笑いながら父さんに報告する母さん。くそぉあの時は油断してたしなぁ。

「本当は平和な俺の国で、家族みんなで暮らそうと思って召還したんだけど、悪かったな。ちょっくら取り戻す為に動かないと駄目になっちまった」

真剣な表情で僕らを見つめる父さん。そんな真面目な顔をしなくても大丈夫。

「勿論、僕も手伝うよ。だって父さんが王様って事は僕、王子さま？　だよね？」

「母さんは勿論お姫さまよね～」

「いや、母さんお姫さまは違うでしょ。王妃じゃないの？」

「なんか王妃って響きだと、嫁をいびりたおす姑って感じがするからヤなのよ」

「あーそうですかー」

「あれ？　そっかコージって王子様になるんだ。うわぁどうしよう敬語で話しかけないと駄目だよねぇ・・・？」

「え、敬語ってなにぃ？　いままでどおりじゃ駄目なのぉ？」

「えー？　べつにいいんじゃないかなぁ？　ボクは変えないよ？」

「だって王族に敬意を払わないと、牢屋に入れられたりするんじゃない？」

「「うー」」

なんか部屋の隅っこでセリナ達が固まってなんか話し合ってる。どしたの？

「いえそのぉコージ様が王子様って分かったのでどう話しかければ宜しいかな、と相談しておりました」

「いやいやいや。いまさら僕が王子様とか言われても、礼儀とかそんなちゃんとできる訳でもないし、今まで一緒に旅をしてきた仲間

なんだから、今まで通り話しかけて欲しいなぁ？　だめ？」

だって今までただの高校生だったからねぇ。王族とか勘弁して欲しい。

「えっと、いいの？」

おずおずと首を傾げながら上目遣いで尋ねてくるセリナ。少し不安そうだけど口調は砕けて元に戻ってる。その不安げな様子がまためちゃ可愛い！

「うんうん、お願い、ねっ。セリナ、ミミ、ヒロコ」

「そこはボクの名前を一番最初に呼ぶべきじゃないかなぁ？」

「わかったよぉコージッ」

「改めてよろしくですコージ」

改めてよろしくね、みんな。

「ほぉほぉ、どれが本命だ？」

「ミミちゃんはわたしのですからね。セリナちゃん辺りが本命じゃないですか？」

「あーでかいしなぁ」

「あ・な・た？」

「いや、俺は客観的事実をだな？　アダダダダダ」

向こうはなんか犬も食わないなんとやらをしている。やっぱり仲が良いよねうちの両親は。

「よーし、セリナ達もよろしくお願いするね。あんまり危ない事はさせないようにはするから」

「ううん、ミミは大丈夫だよ。コージも知ってるでしょぉ？」
「当然、わたしもです。魔法といえば私に任せてくださいな」
「ボクは応援担当だよ～、空気じゃないよ～」

「あーそうだ。セリナちゃんてあのクリムゾンって二つ名のセリナちゃんか？」

そこで、ふと父さんがセリナにそう尋ねた。クリムゾンって名前は嫌いらしいよ、父さん。

「うー、できればその名前は止めて欲しいのですが、確かに私がそのセリナです～」
「本当に？　あーそっかそっか、そう言えば発表会だと別人って言ってたなぁ。なるほどなるほど。本当はこんな可愛らしいお嬢さんだったわけだ」

噂は色々聞いている。戦力として期待しているとセリナと握手していた。やっぱりセリナって凄いんだなぁ。

「ところで光司。印はどんだけ大きくなってる？」
「え？　印なんて無いんだけど」
「ほぉ。という事はほとんど印の力を使ってない訳か。やるなぁ光司。印は胸の所に必ずある。今はかなり小さくて分かりにくいだろうけどな」
「えー・・・？」

服をめくって、胸元を覗き込んでみる。みえないよ！　あー鏡かがみ。んー・・・このほくろみたいに見える奴かな？　じーっくり見たら何か細かく描かれてる気がする。

「力を使っていけば、嫌でも大きくなってくるさ、大丈夫」
「今のままでも充分だから、別に印の力なんて要らないんだけどなぁ」
「そう言うなって。便利なんだから受け入れてやってくれ、光司」
「う、うん。分かった」

あ、ハーベイさんの事すっかり忘れてたよ。向こうに戻ってエレメンタルフレアも取ってこないと駄目だし。まぁ最悪置いてきても問題ないんだけどね。でも、ハーベイさんが心配してるかもしれないから、一度戻って説明しに行こう。

波乱万丈父ちゃん（後書き）

サブタイトルを考えるの苦手です。
アクセス解析を見てによによしてます。

評価してくれる方がいつの間にか増えていて驚きつつ、喜んでます。
ありがとうございます。

そういえば。

テレポートで町と町の間を行き来すれば、めんどくさい審査しなくても良いよね。まぁ、行った事が無いところはできないから、最初だけは書類を書かないと駄目なんだけどもね。

でも、ヒューイックはもともと門番の人と挨拶するだけだったから良いんだけどね。急いでハーベイさんの工房へ向かいエンジンの解体がすんでるか確認しよう。

「ハーベイさん、ただいまー！　もうエンジンばらせた？」
「おうコージ。さっきばらし終えて今休憩中じゃ。やっぱり小型の８型は神経使うわい」
「おー、さすがハーベイさん、もう終わったんですね。で、この綺麗な奴は水晶ですか？」

ばらしたパーツの真ん中に、綺麗な長方形をした水晶のような発光してる物体があった。所々ラインみたいな物が見えるので、何個かのパーツを組み合わせて出来た物のようだ。

「それがエンジンのばらせない部分じゃ。その水晶みたいな物を媒介して魔石シートに魔力を流し込んで動力を得るみたいなんじゃがの」
「見た目はただのガラスみたいにしか見えませんねぇ」
「だが、硬度はたいしたもんじゃぞ。生半可な工具じゃびくともせんしなぁ」
「ふぅん・・・じゃあちょっと調べて見ますね」

「おかしな事をして壊してくれるなよ？」
「大丈夫ですって。いひひ」

とりあえず、水晶の表面をなぞって見る。すべすべで気持ちが良い。指でなぞった所がぽわんと光りだすのも綺麗だ。もっと指先に感覚を集中して丁寧に触って見る。んー、すごく分かりにくいけどラインに継ぎ目みたいなものを感じる。うまく繋ぎ合わせてるなぁ、ラインが見えてても継ぎ目が分かりにくいぞ。

「ハーベイさん。このばらせないパーツってどれもこんな長方形なんですか？」
「あぁ、そうだな。必ず長方形で大きさも全く一緒じゃ。だから交換できるようになっとるみたいじゃな、それは」

外側から慎重に探査する。全てのパーツの形を調べ組み合わせ方を、分析してなんとなく分かってきた。フレームには魔力増幅器は普通別にちゃんとあるんだけど、いくら増幅すると言っても元々は人間の魔力だ、フレームを動かすのに到底足りないだろう。だけど、この水晶みたいなパーツは取り込んだ魔力を人間の生命力を餌にして、とんでもない増幅を図るものみたいだ。魔力×生命力＝膨大な魔力を作ってるって事だ。ただ、生命力全部を魔力に変換してるわけではなく、多少はこの水晶が吸い取っているので常に人間の生命力を吸う必要は無いようだ。あれ？　だったらホワイトファングはなんで僕を載せて機体の回復をしなかったんだろ？　不思議だ。

詳しく調べる内に、この水晶は組み合わせるパーツが複雑で多ければ多いほど、増幅率が高まるみたい。水晶の大きさは一緒なんだから魔石エンジンももっと小さくできそうな物なんだけど、エンジンを小さくすると必然的にパーツも小さくなり、パーツ一つ一つにかかる負荷が大きくなり耐久性が格段に落ちるので、本体の素材に問

題が出るようだ。コストパフォーマンス的には、普通のサイズの魔石エンジンの方がかなり良いようだ。

「うん、この水晶の仕組みは理解できた。大丈夫、これなら僕でも造れます」

「この８型の水晶を作れるってのか？　それが本当なら物凄い事なんじゃが・・・」

「とりあえず、真似はできるだけで同じ出力が出せるかは造ってみないと分からないですけどね。良くあるでしょ、見た目は一緒なのにどうしても動かない時って」

「なるほどのぉ。まぁそれでも今までこの水晶部分は出力が低いものなら作れたんじゃが、これだけの物が作れるようになれば、頼もしいかぎりじゃな」

次は魔石シートを見せてもらおう。

これは透明なアクリル板みたいな物に魔石を並べて嵌めてるだけのようだ。ただ必ず7色の魔石を使わないと作動しないというのが不思議な所だ。７色の魔石が必要だけど、魔石の数は９でも１０でも別に問題はない。なので、どの組み合わせにすれば効率よく動力に変換できるかを探すのも魔石シートの組み合わせの楽しい所らしい。

これって改良次第ですごい化けそうな気がするなぁ。今までにある形以外にも、効率の良い形があるかもしれない。

形を探すのも良いけれど、単純だけど効果のありそうな改造をしてみよう。

「ハーベイさん、この1型魔石エンジン使わせて貰っていいですか？」

「おいおい、何をする気じゃ」
「ちょいと出力アップをしてみようと思うんですが、どうです？」
「大きさを変えないなら、いいぞ」

にやりと笑うハーベイさん。確かに大きくなるようだったら意味ないよね、だけど。

「当然じゃないですか。任せてください」
「よし、じゃあやってみろ」
「はい」

魔石シートはエンジンに対して垂直に差込まれている。この魔石シートを通って魔力が変換されるんだけど、このシートの前に魔力増幅用のシートを挟みこんでみようと思う。スペースが限られているから、そんなに増幅効果を付ける事は出来ないけど最低でも2倍にはなるはずなのだ。

魔石エンジンをばらし慎重に魔石シートを入れる隙間から、魔力増幅用のシートを差込もうとするけど、中々に狭い。これボトルシップを作ってる気分になるなぁ。こんな面倒くさい事誰もしないよね？　普通のサイズのエンジンだからできるけど、小型タイプならきっと無理だね、これは。

30分かけてようやく魔力増幅シートを装着し、魔石シートを差込む。

「ハーベイさん、これで最低でも倍に出力が上がるはずだから、計測して見よう」
「そんな簡単に上げられたら苦労せんて。ま、測っては見るがの」

僕とハーベイさんはお互いにやにやしながら、計測器を持った。

「じゃあ行きますよ！」

ギュィイイイイイイイイイ・・・・・・

順調にエンジンが回りだす。計測器を見ると順調に出力があがっている。

「むむ。1型エンジンの2．2倍ほどの出力で安定したな。何をしたコージ」

「魔石シートの前に、魔力増幅用のシートを一枚入れたんです」

「おぉっ！？　エンジン停止じゃ」

ギュゥゥウウンン・・・

慌ててエンジンを停止するハーベイさん。この方法はまずかった？

「その方法はちーとばかり危ないんじゃコージ。確かに出力は倍もしくはそれ以上に跳ね上がるんじゃが、いかんせん安定せん。長時間稼動すればするほど不安定になるのでな、今じゃその方法は誰もせんのじゃ」

「なるほど。じゃあ違う方法を考えないと駄目ですねぇ」

「まぁ、目の付け所は良いんじゃがなぁ。あぶなっかしいわい」

「ごめんなさい。次はどう改良するかハーベイさんに相談してからにしますね」

「めげんやつじゃなぁ、コージは」

「改造がうまくいったら楽しいじゃないですか、だから次こそ成功させますよ！」

「おーおー。がんばれよ。期待せんと待っとる」

「あ、ひどい」
「あっはっはっは」

まぁ、仕方ないか。所詮素人の思いつきだしね。でも次は絶対出力アップしてやろう！

北へ南へ（後書き）

テレポートを使い出して、めっぽう移動が便利。でも、ちょっと大味すぎて駄目かなぁと思う。一応行った所限定だからいいか。

一話の文字数を少しずつ増やそうと思ってます。

決意

ハーベイさんの工房をまた来ますと言って出て、すぐにロバスのトリプルセブンに戻る。よく考えたら、普通は「777」ってスリーセブンって言うよね？　ん、どうでもいっか。

宿に戻って、父さんにフレームの勉強してきたと言ったら、驚いてた。父さんにとってロボットは乗るものであって、造るもんじゃないらしい。乗れたらそれで良いそうだ。でも、僕がフレームのパワーアップをできるようになったら、便利だと思うので僕は僕で突き進もうと思う。

それで、今後の事を打ち合わせした。僕は父さんの子供というのが知れ渡ると狙われやすくなりそうなので、王国を取り戻すまでは伏せておこうという事だ。母さんも同じ理由で、伏せておく。今後の方針としてはロバスの力を借りて首都を攻め落とす事。方法としては他の都市への根回しなどを行い隣国の動きをけん制しつつ、大義名分を掲げ軍勢を集めて首都を攻撃しようという感じだ。ただ、隣国のハイローディスはすでにグレイトエースにて駐留している可能性もあるので、すばやく軍勢を集めて首都を鎮圧しなければならない。

「にしても、やっぱり兵士の数が足りないわなぁ」

「戦争・・・するんだね」

「まぁな。こんな父ちゃんでもこの世界じゃ覚悟を決めてやってきた。お前達には隠したくないから正直に言うが、人も殺した事がある。そいつが悪人でも関係ない。ただ、人を殺した」

「っ！」

こんな時は深呼吸。

すーはー

そんな事は無いと思っていたんだけど、どこかでやっぱりと思う自分がいる。それでも、父ちゃんは嫌いになれないし生きていてくれて嬉しい。他の人の命を奪ったとしても。ただ、僕は父ちゃんがそういった事をしてきたという事実を知っておけばいいと思う。

「今回もそういった事は正直避けられないと思う。光司、だから無理に手伝ってくれなくて良いんだぞ？」

「んー、僕は手伝うよ」

「光司・・・」

「そして誰も殺さない。きっと殺せないしね。だから、甘いと言われるかもしれないけど敵はみんな無力化する方向で戦う！」

「下手すりゃ、仲間を危険にさらす事になるぞ？」

「そうならない為に僕の力はあると思う。みんな一緒に考えて考えて考え抜けば、なんとかなるよきっと。今まで、結構なんとかなってきたし」

「能天気でいいなぁ光司は。おっと馬鹿にしたわけじゃないぞ。俺もそういった所を見習わないとなと思っただけだ。そうだな、一緒に考えればなんとかなる、か」

「そうそう。せっかくの異世界なんだから、最初から諦めちゃ駄目だよ、きっと。僕たちには元の世界の知識があるから、そこからなんとかなるって！　たぶん」

「ま、そうだな。よろしく頼むぜ光司。で、今回のクーデターの敵さんについて教えておくとしよう。敵を知り己を知れば百戦危うからずってな」

今回のクーデターの首謀者はラディアス＝デル＝ファウンデルス。

この国の宰相であり何代も続く大貴族だ。この貴族は、国の主導者は貴族でなければ愚民を導く事はできないという思想の持ち主らしい。

ただ、父ちゃんには王の印があったせいで渋々従っていたらしいのだ。表では従っていたんだけど、父ちゃんに自分の娘と結婚させて貴族にして対面を保つと同時に、王国に対する支配力を高めようとしていた。だけど、父ちゃんは母さん一筋だったので、既成事実を作ろうとして色々画策するも悉く失敗に終わり焦っていたようだ。

そのまま、誰も娶ることなく終わるなら何も無かったかもしれないんだけど、今回家族を召還するという話を聞きつけ、このままだと平民の血がのさばってしまうと考えたらしいファウンデルス卿は、クーデターを決行。計画自体はすでにいくつかあったらしく、その内の1つらしい。抜け目の無い事だ。

貴族のほとんどの人間が父ちゃんに敵対しているらしく、かなり厳しいらしい。なんでも貴族には血の力と言われる特殊な能力があるので、ほとんどの貴族が気位が高く戦争となると凄い力を発揮するそうだ。ただその力は、当主もしくはその代理の人間にしか発揮できないのが唯一の救いだそうだ。

ロバスは父ちゃんに対して友好的で、今回も父ちゃんが牢に捕まってると聞いてファラスさん達に探らせに行ってたようだ。なんでも、ロバスに魔石獣の百年に一度と言われる大群が押し寄せた時たった一人で撃退しちゃったのが縁らしい。なのでロバスの評議会は信頼できるそうだ。

と言う事でロバス以外は全て敵って言っても過言ではない状況のようだ。一騎当千と言える武将がいればだいぶ楽なんだろうけど、ロ

バスは生憎と傭兵は居てもそこまで武力で鳴らした将軍は居ないらしい。

ガイアフレームに関して言うならばエースパイロット級がごろごろ居る。こっちに関しては、フレームの数が劣っていても簡単に負けることは無いだろう。だけど、ロバスから出撃させてしまうと、ロバスの防衛が危うくなる。なまじ四つのブロックに別れているので防御するにも、数が必要になるのだ。

うん、僕だけで全部やっつけるぐらいのつもりで考えてみよう。

とりあえず飛行ユニットは攻めるのにだいぶ有利になる。空からの攻撃は避けにくいし、攻撃を当てようにも狙いをつけにくいだろう。ただ、攻撃手段は対人兵器として、麻痺弾とかトリモチ弾とかを用意する必要がある。ガイアフレームもトリモチ弾で動きを封じてしまえば、無力化できるかも。

ただ、攻撃部隊って色々な方向から攻めて来るだろうから、その時をどうするか？　フレームごとテレポートするのは魔力がごっそり減りそうだし、かといって僕だけテレポートしてフレームを乗り換えるのも、僕が降りたフレームが墜落して人が死んじゃうかもしれないし。うーん、乗り換えるのは駄目かぁ。だったら乗り換えない方向か。

あ～最初から無人で遠隔操作しちゃえばいいのか。

コントローラーとモニターをたっぷり用意して、遠隔操作しちゃえば僕にとってはある意味なれた環境でロボットゲームするのと変わりがないよね。複雑なマクロも組めるから、回避マクロと反撃マクロを組めば、ほっといても簡単に撃墜されないと思うし。あーでも

人が乗ってないとフレームの稼働時間に制限があるのか。まぁそこは仕方ないと割り切るしかないか。

あと前に作っておいたフィールド反転君も役に立つかもしれない。騎馬隊が突撃してきた所に違う方向へ誘導してあげたら、きっと混乱するだろうなぁ。ついでに落とし穴があれば効果的。そして、あとはとにもかくにも眠らせる。麻痺させたりするのもいいなぁ。とにかく死ななくて、怪我もしなくて、動けなくする！　をモットーに考えていこう！

よーし、のってきたぞぉーーー！

決意（後書き）

いきなり異世界にすっとばされた父ちゃんは、生きる為に色々してきたのです。
隠し通せばいいんだろうけど正直に言っちゃうのは、ある意味家族だから大丈夫という甘えから来てるのかもしれないですね。

さてこの後どうなるでしょー？

姉？　妹？　妹だね

「で、ユージン陛下はロバスへ逃げおおせたという訳か。いやはや、どうやってあの牢から逃げ出したのやら」

グレイトエースの王宮の一室。宰相であるラディアスは部下より報告を受けていた。

「どうも、手引きした者が居たようですが、それも足取りが掴めていない状況です」

「ふむふむ、結局まんまとしてやられ、陛下の引き立て役になったのだな」

「・・・申し訳ありません」

「役に立たぬ奴らめ。エリスめも戻ってこない所を見ると捕まったか、あるいは・・・」

青ざめた表情で返事をする部下を、興味なさそうに一瞥し思案するラディアス。

「ロバス近郊で消息を絶ったと報告を受けています」

「期待はせずに、次の手を打つべきだな。衛兵。使者との面会の準備をすすめろ」

「はっ、かしこまりました」

これ以上ここに居て機嫌を損ねてはまずいという風情で、急いで部屋を出て行く。

「貴族達へ招集をかけねばなるまいな。あとはあいつらが役に立つほど動いていれば少しは役に立つんだがな、まぁ所詮気休め程度だ

な」

最初から最後まで皮肉げな嘲笑をくずさなかったラディアス。その嘲笑は果たして誰に向けられていたものだったのだろうか・・・

「ミミちゃんは、わたしと一緒に居るのよ」

「はうあう」

朝起きてご飯を食べてると、わがまま女王がそうのたまった。

「そんな我侭ばっかり言ってると、みんなに嫌われちゃうぞー」

「光司はいっつもそう。もっと自分を出しなさいよっ！　本当はセリナちゃんやヒロコちゃんやミミちゃんやお母さんに、あんな事やこんな事したいんでしょっ!?　なんで逆らないのよっ！」

「あーもう！　なんでもかんでも自分を基準に考えて、押し付けるなっ！　しかもドサクサに紛れて何て事言うかなっ？　みんな、違うからね顔を赤くしないでっ?!　全部母さんの妄言なんだから！」

「光司ってこんなに常識ある子だったのか。父ちゃんの子だったらてっきり・・・」

「父さん、そんな所で言葉を止めないでっ?!　最後まで言ってよ、凄く気になるよ?」

「あ?　エロエロざんま・・・いなんてしないで、節度あるお付き合いしてるって信じてるよっ！」

本音がポロリと漏れる直前で、母さんの視線を感じて軌道変更しやがった。でも、ごまかしきれてないと思うよ?

「やっぱり！　あなたはお部屋でわたしとじっくりイチャイチャしましょうねぇ～」
「この雰囲気はイチャイチャじゃない！　いやだっ！　お部屋はいやだっ！」

いらん事言うからドナドナな目に会うんだよ、父ちゃん。ふふんと、得意気になってテーブルを振り返ると・・・

「・・・ちらっ」
「えへっ」
「うふふ」

何か微妙にピンクな雰囲気になってる気がする・・・どうしよう・・・

「てな訳で、ミミちゃんはわたしの娘って事になったからね。よろしく～」
「うわっ？　父さんは？」
「良いの良いの、必殺天チューしてきたし。あのね、母さん冗談じゃなくって、ほんとにミミちゃんとね、うちの娘として一緒に暮らしたいの」

ただの我侭かと思ったんだけど、母さんは本当に何か事情があって言ってるようだ。

「でも、ミミはそれで良いって言ってるの？」
「それはこれから。ミミちゃん、ちょっとこっち来て？」
「うー・・・」

低く唸り声を上げながらも、母さんに近づくミミ。そして母さんは、なにやらミミに耳打ちし、それを聞いたミミは、セリナとミミを交互に見比べ何事か納得したかのように、頷いた。

「よっし、商談成立！　ミミちゃん、今日からお母さんって呼んでねっ♪」

「う・・・ぅ、お、おかあ・・・さん？」

「ぬふーかぁわいい～♪　一緒にがんばりましょうねぇ～」

「う、うん。ミミがんばるぅ」

「良い子良い子」

なにやら、納得したらしい。まぁ、こんな事が無くてもミミは年上だけど妹みたいなもんだし、ただ母さんのおもちゃになる事が増えただけ・・・かな？

「俺にも可愛い娘ができたんだな。あ、でも光司次第でもっと増える可能性があるのか」

「うわっ、父さん！？　復活早いね」

母さんから天チューとかいうのを喰らったらしいけど、大丈夫なのかな？

「大丈夫だけど、部屋はいやだ、イ、イヤダ・・・」

「う、うん、分かった。だから、正気に戻って父ちゃん」

「お、おう。大丈夫だ、大丈夫。うん。で、話はついたみたいだし、ちょっと出てくる」

ロバスの評議会と打ち合わせに行くそうだ。僕も着いていった方が良くないのかな？

「いや、おまえは残っててくれ。結果は知らせるから心配するな」
「うん、分かった」

とりあえず、セリナ達にも相談してみよう。僕が考えた大軍を少数で無力化する案に穴がないか一緒に考えて貰おう。良い案があれば教えて欲しいしね。

「ていう案なんだけど、どうかなぁ？」

・・・あれ？　なんか皆すっごい白い目でこっち見てる。なんで？

「コージ？」
「はいっ、なにかな？」
「王様と一緒に、国を取り戻すというのは分かりました」
「そ、そ、そうなんだ。だけど、やっぱり向こうの方が数が多くてね。どうしようかなと」

セリナが無表情で尋ねてきたので、ちょっと怖くてどもってしまう。

「わたしとコージは一心同体、いわば二人で一人といっても過言ではない関係です」
「ミミとだよ」
「ボクとだよ」
「おほん。わたしたちとコージはとにかく一心同体なのです、わかりますか？」
「う、うん。そうだね」

なんか言い直すセリナ。うん、仲間だよね。

「いいえ、分かってない！　コージは分かってません！　ミミ！」
「うん、駄目だよぉコージ。ミミと一緒にぃ、戦えるように考えてくれなきゃ。めっ」
「ミミ“と”だめ！　ミミ“も”です！　みんな一緒です！」
「だけど危ないんだよ？　それに僕が一人で出る方が楽かなーって思うし、案が浮かばないんだよね」
「なら、みんな一緒に安全にできる事を考えましょう！　コージが一人だけでしようって考えるのが間違いなのです」

ねぇーーーって、なんか一致団結している女の子達。うーん、人手が要れば確かに少しは楽になるかもしれない・・・かな？　皆が一緒に戦ってくれるなら危なくないようにだけしなきゃね。過保護かもしれないけども。

うーん、皆で立ち向かうとすると、どうすればいいかなぁ・・・？

「えっとセリナ。魔術師としてされたら嫌な事を教えてください」
「斬りかかられると、詠唱とまっちゃうから嫌ですね」
「他には？」
「んー、最初に有利な状況を作ることから始めるので、先に嫌な事されないようにしてるからうーん・・・敵に近づかれるって言うのがやっぱり一番ですかねぇ」

うーん、と小首を傾げながら応えるセリナ。そうだよねぇ、セリナは流れるように敵の弱体、味方の強化を唱えるから、攻撃魔法を唱えるときって、だいたいが万全の状態なんだよね。

「なるほど、やっぱり気が散るような事は嫌って事だね」
「はい、そんな感じです」
「じゃあ、ミミ」
「はぁい」
「ミミは、どういった敵が相手だとやりにくい？」
「コージだよ」
「えーっと僕がやりにくいって・・・いやーそういうのを聞いてるんじゃなくて、こう遠距離から攻撃されると嫌とか、素手で攻撃してくる奴が嫌とかそういうのなんだけど、無いかな？」
「コージみたいにぃ、一瞬でも目を離すと何をしてくるか分っかんないのは怖いよぉ？」
「なるほど。色々手札を持ってるような人間は嫌ってことかぁ」
「うん、すっごくドキドキするからねぇ。コージはじぃっと見てないとねぇ」

とにかく自分がされて嫌な事を、相手にできるようなアイテムを作

っていこうと思う。そして安全の為に、本人が戦わないで魔力電池いわゆるカートリッジで動く人形を操る事にしよう。ただ、その操作方法をどうするか悩んでいる。とりあえず、本人は眠ってもらって人形に意識を移す方法にしてみよう。

「セリナ、ミミ。ここで眠ってくれる？　テストしたいんだ」
「はい、わかりました。ちょっとぐらいならイタズラしても良いですよ？」
「わかったよぉ、ミミ寝るねぇ～」

と、とりあえず人形に意識を移そう。ミミ達が横たわっている寝台の傍に姿を似せた人形が立っている。寝台の横にあるスイッチを押す事によって意識が移るはずだ。
ぽちっとな。

「あ、あれ？」
「ん？」

立っている人形の目があいて、びっくりした様子できょろきょろしている。成功だ。
いや、叩いて痛かったら失敗だ。よし、ペシペシ！

「？　何してるんですか、コージ。・・・あれ？　ほとんど痛くないですねぇ」
「何か当たってるのは感じる？」
「はい、手でぺしぺしってされてるのは分かるんですけど、痛くないんですよね。もう少し強めに叩いて貰ってもいいです？」
「わかった。行くよ？」

ぺしーん！

ちょっとセリナ人形の背中を強く叩いて見た。

「なんというか、ある程度以上の痛さが無かった事にされているみたいです。やさしく触られてる時は普通なんですけど、叩かれた場合は触れてるのは分かるんですけど、痛みは無いですね、これ」

「コージ、ミミに殴りかかって見てぇ？　本気でやってね？」

えっと、そうは言ってもどこに当たってもやばそうなんだよね。いやミミだから避けるか。よし、えいっ！

チッ！

「え？」

「ありゃ？　見えなかったよコージ」

ミミは辛うじて避けてはくれたんだけど、少しかすってしまった。反射神経は良いから回避できたんだけど、いつものような攻撃直後には回避行動に入っている動きはできてないようだ。

「人形だとミミの力が使えなくなっちゃうのかなぁ？」

「んー、かもしれないねぇ。どうしよっかぁ？」

んー、とりあえず攻撃が見えなくなったってことは、視覚の何かが足りないって事なんだろうか？　うーん、色々試して見よう。ミミの特殊能力だけど、どういった力が働いているかは良く分からない。試しに魔力や霊力を通し易いと言われるミスリルで、ミミの目の部分を覆い、人形の方にも同じようにミスリルで覆ってみる。これでどうなるかな？

「よし、行くよミミ」
「うん」

当たったら嫌だから、軽めにパンチを出す。

「コージ。そんなの見るまでもなく避けれるよぉ。ちゃんとやってよぉ」
「うん、ごめん。行くよ！」

気の抜けたパンチで怒られたので、本気で殴りかかる。

「あ～見えるねぇこれだと」
「お、良かった。たまたまだけど、上手くいったみたいだね」

よし、これでミミも人形で実力を出せるね。人形は基本的に操る人に合わせて作成しているので、実力を出せないようだと意味が無いもんね。

セリナの方は勿論、魔力重視タイプである。本体にカートリッジを埋め込み、詠唱魔法やセリナの編み出した無音魔法も唱える事ができる。勿論それとは別に「ノーミス」タイプの杖型「プリンシパル」を持たせている。

ミミは近接戦闘タイプだけど、遠距離攻撃もできるように「月詠」を渡して、ワイヤーガンを装備させている。ワイヤーガンなんだけど、空中にアンカーを固定できる特殊仕様で、ミミが三次元機動できるようになっている。基本的にミミの戦い方は捕まったらお終いな所があるので、捕まる可能性を低くする為だ。

とはいえ、セリナとミミの人形が壊れる事は無い。本体の素材はミ

スリル。魔力の伝達や粘性が高く強度もそこそこあったので、本体の素材に選んだ。そしてオリハルコンで表面をコーティングして、魔力の増幅や素材の強化を行った。さらにスーツを着せて正体不明にする予定になっている。そしてスーツと言うのは、正義の味方が着るあのスーツだ。対刃対弾は勿論、温度耐性、酸耐性、耐圧や毒のフィルター、ボイスチェンジャーやパワーアシスト、通信機能も装備している優れもののスーツだ。貴族の屋敷を襲ったのと同種の物である。

なので、人形が壊れる事はない。普通に壊れそうにない。むしろ壊れる所を見てみたいぐらいだ。懸念していた、強いショックを受けた際のフィードバックだけど何故か意図してないのにうまくいっているので安心できるし。

でも、念のため人形は予備を数体作成しておく。通信が断絶して、急に操作できなくなるとかは可能性としてあるもんね。

そう通信でこの人形は動くのです。電波でビビビ。

なぜかと言うと、よくよく考えたら敵に魔法を使われるのってかなり怖い。というか、せっかく無力化した敵を次々に復活させられちゃいそうなので、魔法を使えなくしようと考えたのだ。だけど、魔法を使えなくするという事はセリナも魔法が使えなくなっちゃう。

それじゃあ本末転倒って事なので、詠唱できないように無音にするか魔力がうまく働かないようにしようという事になった。これならセリナは無音詠唱もしくは「プリンシパル」で魔法を使える。敵にも無音詠唱の使い手がいるかもしれないけど、そういう敵はミミがささっと無力化すれば大丈夫だろう。

ただマジックアイテムの効果で魔法が飛んでくるという可能性もあるけど、これぱかりはどうしようもないので、相手が使い切るまでこちらが攻めたおすという事で話がまとまった。

今回、魔法に対して科学で反撃をしようと思う。その為に、必要なアイテムを製作するロボット達を作り出した。やっぱり大量に使うものがあるので一々僕一人で造ってると間に合わなくなりそうなのだ。なので、僕は造りたいアイテムをイメージして設計図と素材を作り出し、後は設計図と素材から目的のアイテムをロボットたちが組立をしていく。一度設計図に起こしたものは素材さえ準備して、指示してやれば組立してくれるので、非常に大量生産が楽になるのだ。

相手は人海戦術で攻めてくるので、こちらは少数精鋭で対応するしかないのだ。いや本当に割ける人員が居ないから物理的に無理なんだけどね。あははー。

なんにせよ、人を殺す為の道具ではない戦争の道具。ある意味矛盾した物をどんどん作り出して行こう。

国を取り戻す為に。

リモートコントロール（後書き）

じわじわと評価やお気に入り登録が増えてきてありがたいです。
今日の夜の更新はちょっと遅めになります。

特訓・・・？

ババババ、バシュッバシュッ、ゴッ！
ピキュピキュ、バシュゥン！

「うみゃー！？」
「あ、あ、あ、や、っは、う」
「ほっはっほっへっほ」

ついでだから、ガイアフレームの特訓、いや猛特訓をさせている。
とはいってもテレビゲームなんだけどね。僕が良くやってたロボットゲームを思い出して再現したもので、基本的な操作を覚えて貰うのに丁度良かったのだ。

これは意外にもヒロコが凄く上手かった。

画面を見ててびっくりしたのは、初心者は普通射撃武器でどんどん突き進む物なんだけど、いつの間にかカスタマイズまでこなして、軽量近接オンリー機体なんかに変更している。装甲も極限まで削ってあるので、すこしの被弾であっという間に機体が沈むような蚊トンボもびっくりな仕様だ。なのに・・・

「・・・うまいし・・・」

すげえ！　ゲームとはいえ、始めて3時間ぐらいなのに被弾一発もなしでゲーム半分までクリアしちゃうとか。どんだけ適応能力高いんだヒロコは。

「なんかね、こういうの操作したような気がするのボク」

「こんなマニアックな機体はそうそう無いよ！」

ていうか、フレームに乗った事なんて無いだろうに謎だ。とにかくヒロコがフレーム操作が上手いと言う事は分かった。機体は選ぶけどね。

セリナとミミはどうなったかなぁと振り返ると、二人とも鬼気迫る顔でゲームに没頭してた。え、何があった？！

「まさかまさかここでヒロコさんですか、そうですかこれ上手くないとだめですか」

「うぅーうーうー、これ上手くならないと構ってくれないのかなぁ～う～」

よく聞こえないけどぶつぶつ言いながらゲームしてると怖いよ、二人とも？　でも凄く上達してるようでなによりだ。そろそろ休憩して貰うためにも、何かオヤツでも買って来ようかな。うん。

そっと宿を出た僕は、おやつを作る為の食材を買いに出た。本当はそこら辺に売ってる屋台のお菓子でも良いかなって思ったんだけども、僕がプリンを食べたくなったのだ。材料さえあれば、冷やすのを入れても2時間かからないし。まぁプリンができるのを待って貰う間のお菓子として、チョコレートでも食べて貰おう。

こっちの世界の食材は、向こうの世界の食材と形が似てる物はほとんどが同じ味なので食材を探すときにまずは形が同じものを探せば、外れがない。たまに、まったく見当違いの味を出すものもあるので、味見はしないと駄目だけどね。

そして買ってきたのは卵、牛乳、砂糖、バター、ココナッツ風味の

お酒。これだけの材料があれば、いつも作ってたプリンができる。
よし、早速作るとするか。

ぽりぽり。ぽりぽり。

「チョコレートは、疲れた時に食べるとほっとしますねぇ」
「うん、おいしぃからこれ好きぃ」

ポリポリポリポリポリポリ・・・

「ヒロコは聞くまでもないですね、ふふっ」
「でも、あんなに凄い勢いで食べて大丈夫なのかなぁ？　あれっ？　そういえばぁコージはどこぉ？」
「そういえば、いらっしゃらないですね？　どこに行かれたんでしょ」
「むむぅっ。こっそり居なくなったって事はぁ、また女の子を連れ帰って来るぅ・・・？」
「た、たぶんそれは大丈夫じゃないでしょうか・・・？　コージって女性が苦手そうですし」
「そうかなぁ？　セリナやミミがくっつくとぉ、いっつもニヨニヨしてたよぉ？」
「ニヨニヨしてるだけで、手を出してこないんですから苦手なんじゃないでしょうか。わたしがあれだけ押し付けても何もしてこないんですもの」
「なるほどぉ。普通だったら、押し倒してそうだもんねぇ。セリナが言うとぉ説得力があるねぇ」

・・・気まずい。プリンを作って冷やして美味しそうにできたので、持ってきたんだけど、セリナとミミの会話が聞こえてきて思わず立ち止まったのが運の尽き。なんだか僕が部屋に入りにくい雰囲気に

なってるよ、これ。でも、入らない事には始まらないし、覚悟を決めよう。

「う、うんっ！　セリナ、ミミ、ヒロコ！　甘いお菓子を作ってみたんだけど、ここら辺で休憩しない？　ずっと訓練してて疲れたでしょ？」

テレビゲームはあくまで訓練なのだ。うん。遊びだけども。

「あ、コージ！　お菓子作ってたんですか？　ありがとうございます」

「わぁい、コージの作ってくれるのっておいしいから好きぃ～」

皆の前にプリンを一個ずつ置いて、用意しておいた紅茶と一緒に食べて貰おう。

「なんか、不思議な色と形ですね」

「食べてもい～い？」

「ボクはもう貰ってるよぉ～」

相変わらずヒロコは黙って食べちゃう。もう、いただきますぐらいは言いなさい。セリナとミミは最初、おっかなびっくりな感じで、つついてたんだけど意を決して一口食べた後は凄い早さで食べ始め、あっという間にプリンが無くなった。僕も久しぶりに食べたけど、やっぱりおいしい。鍋があればできるから簡単でいいんだよねこれって。

「とりあえず、あんまり急に根をつめてやりすぎても身体に毒だから今日はこれぐらいで、ゆっくり休もうね」

「はぁい。ではお言葉に甘えてゆっくりしますね」

みんなリラックスして、それぞれのんびりしている。ゆったりとして気が抜ける時間だ。うーん、今言う事じゃないかもしれないけど、セリナとミミに僕たちの秘密をちゃんと話して置こうかな。

「セリナ、ミミ。聞いて貰いたい話があるんだけど、良いかな」
「はい、なんでしょう？」
「ん？　なぁに？」

「えっと、突然なんだけど僕は、違う世界からやってきた人間なんだ。ここの世界には、父さんに呼ばれて来ただけなんだ」

二人は、僕が言ってる話が理解できない様子だったが、時間が経つにつれて理解できてきたようで、驚いた顔になっていた。

「うん、違う世界って言っても信じにくいとは思うんだけど事実なんだ。そもそも父さんは僕の世界だと行方不明で僕が１０歳の時に家から居なくなったんだ」
「そう、だったんですか・・・」
「で、父さんは元いた世界に戻ろうと色々頑張ったらしいんだけど、どうやっても元の世界には帰れないと分かったんだ。だから、家族みんなで一緒に暮らしたかった父さんは、自分が元の世界に帰るんじゃなくて、僕たちをこっちの世界に呼ぶ事にしたんだんだって」
「ひょっとして、最初わたしと出会ったときはこちらの世界に来た直後だったんですか？　変わった服を着てましたけど」
「うん、セリナと出会ったのはこっちにきてすぐだったよ。僕が居た所は自然なんか滅多に無かったから、いきなり森の中に飛ばされて凄く怖かったんだよねぇ」
「それで荷物も何も無かったんですかぁ・・・」

そこでヒロコに目配せをする。するとヒロコは分かってるという風に頷いてくれた。

「で、ヒロコなんだけど、彼女は人間じゃないんだ」
「「え？」」
「ヒロコは精霊らしいんだ。僕がこっちの世界に来た事で生まれた精霊なんだって。普通、精霊って人には見えないそうなんだけど、寂しいから見えるようになって貰ってるんだ」
「そ、そんな事ができるんですか・・・わたし精霊って初めて見ました」
「ミミも・・・」
「やだなぁ、照れるなぁボク」

そんなに照れる必要があるのかヒロコ。

「なんだかごめんね、隠し事したままで居て」
「いえ、コージには何かあるだろうとは思ってましたから大丈夫です。まさか違う世界から来てたっていうのは驚きですけどね」
「ミミは怒ってるよぉ」
「ミミ・・・」
「だからミミに許して欲しかったらぁ、今日は一緒に寝てくれないといーっしょぅ許して上げないんだからねぇ？」

セリナがしまったぁ！　って顔をしているのを横目に見つつ、ミミを見る。ちょっと顔が赤いのは照れてるんだろうなぁ。一緒に寝ないと許さないとか言ってるのはミミなりの優しさなんだろう。だって僕が役得なだけだもんねぇ。

「ありがとうミミ。一緒に寝るとか言わなくても分かってるよ。わざとそんな風に言って気にしてないって事を教えてくれてるんだね」

と言ってミミの頭をナデナデする。ミミもセリナも優しいなぁ。ついでにセリナの頭もナデナデする。気持ちいいなぁ、これ。

「むぅ、違うのにぃ・・・コージのどんかん」

「抜け駆けはだめですよ～、ふふ～ん」

何かこそこそと話し合ってるミミとセリナ。そうしてるのを見ると仲が良い姉妹みたいだ。

「もう元の世界には帰れないらしいんで、こっちの世界で頑張ろうと思うんで、平和に仲良く暮らすためにも一生懸命頑張って父さんを手伝いたいんだ。みんなもお願いできるかな？」

「ふふ、そんなのはいまさらですよコージ。お義父さんを手伝うのは当然です」

「ミミもぉ一緒に暮らすんだから、そんなのは当たり前だよぉ」

「うんうん、そうそう。がんばろうねマスター」

「うん、ありがとうね、みんな」

敵だらけって聞いて不安になってた僕だけど、こうして皆と一緒に居れて良かった。皆と居る限りきっと何があっても、なんとかできる気がする。きっと。

特訓・・・？（後書き）

お気に入り登録増えてうーれしぃ～

はしゃいですいません・・・

うっかりさんは血筋です

夜、そんなに遅くない時間に父さんが宿に帰ってきた。宿「トリプルセブン」この宿の名前の由来は父さんが乗っていたルーツにあやかったものである。なので父さんに聞いてみた。

「なんでスリーセブンじゃなくて、トリプルセブンなの？」

「単純に俺が間違えて覚えてただけなんだよなぁ。でも、もうトリプルセブンで定着しちまってるから言い出せないんだよね。うはは」

「・・・うっかりな所は父さんに似たんだね、僕」

「それだけじゃないぞぉ。女性に弱いところもそっくりだ！」

「もぉ父さんは、相変わらずだねぇ」

ひさしぶりに再会して二日。まだ父ちゃんを見る度に、うおー父ちゃん！　って言いながら飛びつきたくなる自分がいる。僕ってこんなに父ちゃんっ子だったっけ？あ、そうだ。プリン作りながら考えてたんだけど、楽に敵を倒す方法を思いついた。

「父さん、聞いて欲しい作戦があるんだけど」

「お？　何か思いついたのか？」

「うん、僕の力って結構なんでも有りなのは知ってるよね？」

「そうだな、漫画みたいだったな。いや実際漫画の力なのかあれは」

「ゲームも混じってるけどね。でね、とりあえず僕って一度行った所はテレポートできるんだ。だから、王宮にテレポートで飛んで行って、誰だっけファウンデルス卿？　をささっととっ捕まえたら戦争なんてしなくて済まない？」

「あー、わりぃそれは無理なんだわ。グレイトエースを造る時に色々と細工しちゃっててさ」

どうやら魔法がろくに使えない父さんは、グレイトエースを作るときにそういったもので簡単に王宮を攻め落とせないように、空間転移すればスポットと呼ばれる所に必ず飛ぶように設定してあったり、魔法が全く使えないように魔力がまったくない空間、ゼロ空間を王宮内の侵入されそうなところに設置してみたり、特殊なコインを持ってない者は通れないようになってる通路とか色々工夫を凝らしたらしい。

もうなんていうか、こういう事に頭が回るのって父ちゃん譲りだったのね。

「まぁ、そういう訳であいつも安心して王宮に閉じこもっているわけだ。だから首都を攻め落とすには正攻法しか無いんで、かなり無茶があるんだわ」

「正攻法っていうなら、僕が準備してる方法が役に立つかな？」

「ん、何か準備してるのか？」

「うん、異空間倉庫って言えばいいかな？　まぁ僕が用意できるだだっぴろい空間があるんだけど、そこで戦争に役に立つ道具をたんまり作ってるよ。あと、ガイアフレームをね改良して遠隔操作できるようにしたりしてるの。とりあえず道具の説明するから使えそうかどうか判断してくれる？」

「おう、分かった」

父ちゃんに、僕が今まで造ってきた道具の説明を丁寧にしていく事にした。冷蔵庫や電子レンジにコンロ。携帯電話に結界装置。光る浮き輪君やふよふよ絨毯に、電卓に懐中電灯。戦闘に役立つアイテムは、「ノーミス」「月光」「ギル」「千変万化」などのカートリッジ方式の武器に、フィールド反転君にセイフティベルト、アタックオプションなど。それぞれ取り出して見せて使い方を実演した。あと、今考えて製作中のアバターシステム。これはあまり数をつく

れないんだけど、こういうのがあるよっていうのを伝えておく。というか、僕はこのシステムを使って大暴れするつもりなんだよねぇ。あとは、今後製作する予定のアイテムの仕様を説明し、作って欲しいアイテムがあれば作る事を伝えた。

最初は話だけだったんで、たいした物は作ってないと思ってたみたいなんだけど実物を使って実演しだすと道具の出来のよさに父ちゃん驚いてた。そして、なんとかいけるかも？　って喜んでた。ただ、僕が道具を山ほど作る事になるぞーとは言っていたんだけどね。ふふふ。大量生産の体制もばっちりなのだよ父ちゃん。

「あー、そうだ。ガイアフレームもいじれるんだよな、光ちゃんは」
「うん、まだまだ勉強が必要だけどね。試行錯誤してもっといじれるように頑張ってるんだ」
「おー・・・じゃあ、俺専用にちょっと造れるか？　スリーセブンは王宮に置きっぱなしで乗れる機体が無いんだわ」
「うわーそういう事は早く行ってよ、父さん。ルーツなんて置いて来たら絶対敵に回るのは目に見えるよ・・・？　対策考えないと駄目じゃないかぁ。うーん、とりあえずスリーセブンの性能教えて頂戴？」
「すまんすまん。性能って言っても俺は細かいスペックはうといからなぁ。だいたいで良いか？」
「うん。性能もだけど、どういった敵を相手して、どうやって戦ったかも教えて欲しいな」
「おう分かった」

父ちゃんの話から、スリーセブンの性能を推測するとどう考えても化け物です。さすがは3桁ナンバーなのである。まぁホワイトファングも実力のほとんどを出し切れなかった状態で、既存のガイアフレームなんかは一蹴できる実力だったしね。

だけど、スリーセブンは高速機動一撃離脱型とも言えるほどのスピードに特化した機体で、飛行ユニットこそ付いて無かったみたいなんだけど、空中に足場を発生させる事ができるので、ほとんど飛んでるのと変わりない動きもできるらしい。そしてもっとも凄いのはコックピット内には慣性制御が使用されてるっぽくて、スリーセブンで無茶な機動をして血を吐いたり、身体に急激なGを感じたりという事はほとんど無かったそうだ。

「とまぁ、こんなぐあいでな父ちゃんスリーセブンに乗ったら強いんだぞぉ」

「で、そんな強いスリーセブンが敵に回るというわけね。ありがとうございました」

「う、なんだその言い方は。父ちゃん傷つくぞ？　大丈夫だって、スリーセブンは一応俺しか動かせないようになってるから、向かってくる事はないぞ？」

「甘いね父ちゃん！　そんな化け物機体があったら僕だったらなんとしてでも使えるように考えるもん。たとえ機体の性能を半分も出せないとしても、充分に脅威になり得る機体だからね」

「むむむ・・・」

「だがしかぁし！　そういう機体があると分かっていれば手の打ちようはある！」

「おお！　頼りになるな光ちゃん！」

「父さんも一応アバター作っておくね。じゃないと機体のGに耐えられないと思うし」

それに死んじゃったら元も子も無いし。

「あー、それは俺はいいや。生身でないと感覚が掴めないし殺気も感じられないからなぁ」

「いや、そこら辺は調整すればきっとなんとかなるって！」

「悪い。俺のこだわりなんだ、これは。わがまま言ってすまんな」
「うー・・・」
「おいおい、そう睨むなよぉ。大丈夫だってこれでも父ちゃん強いんだからな」
「じゃあ、僕とガイアフレームで模擬戦して」
「ほぉ？　言っておくが俺ってかなり強いぞ？　ゲームだと父ちゃん弱いけど」
「とりあえず、僕が納得できる強さか見せてくれるよね、父ちゃん？」
「おう！　見せてやるぜ光司！　まっかせろい！」
よし、ガイアフレームを準備して模擬戦をしますか！

まずは準備

本当はヒューイックのハーベイさんのお店でフレームを選びたかったんだけど、フレームの本場ロバスに居るって事で、こっちでフレームを揃える事にした。僕も父ちゃんも人型タイプを扱うので東側のブロックへ向かった。

父ちゃんが王様って事で、フレームの支払いは後払いにできるみたいだ。あと工房を借りて色々カスタマイズできるので、父ちゃんの要望に近いフレームを用意する事ができそうだ。ただ、どこでも踏み台にできる力場を発生させる物と慣性制御する装置を頑張って作ろうとしたんだけど少し問題ができた。足場を作る装置はなんとか代用品を作るめどが立ったんだけど、慣性制御は何故か上手く行かない。なので今回は諦めて足場を作る装置だけ装備して模擬戦をすることにした。

「話を聞いて似てる物を創ったんだけど、使い勝手が少し違うかもしれないけど大丈夫？」

「これは力場を発生させるんじゃなくて、空気を踏める代物って事なんだな？　ここのボタンを押しながら操作すれば、足元から下の空気を踏めるってんだろ？　なんとなくイメージできたから大丈夫だ」

「うん、力場を発生させるとなると魔力をどか食いしそうだから、燃費の良さそうな方式で作らせて貰ったよ」

「それでオッケーだ。あと慣性制御だっけ？　それはついてないんだな？　そんなの無くても父ちゃん頑丈だから、無くても大丈夫だと思うんだけどな」

「いやいや、普通頑丈だけで乗り切れるものじゃないからね、父さん」

父さんが軽量二脚型でエンジンは四角8型。瞬発力に富み、トップスピードに乗ればさらに加速できる仕様だ。全体的に細身のおかげで、かなりのスピードで動き回る事ができる。ただ、その分装甲は無いに等しいので軽量のバリアシールドを両手に埋め込んである。魔力を流し込めば円形にバリアフィールドを形成するんだけどその間はバリアシールドの操作に集中しなければならないし、腕を切り取られてしまうとバリアシールド毎無くなってしまうのが欠点だ。

武装は、実剣が2本。レイピア型の細剣と逆手に持てる短剣を装備している。飛び道具としては矢を魔力で飛ばす武器。弦の代わりに魔力カタパルトと言うべき装置で矢を高速で打ち出す物だ。マジックアローって言うらしいんだけど、結構使う人が多い武装らしい。あとは手裏剣のような物とナックルガード。他にも何か隠し玉で用意しているみたいだ。

対して僕の機体は汎用二脚型の星8型エンジン。さらに改良型の飛行ユニットも装備しておりだいたいどんな状況にも対応できる万能タイプである。機動性はそこそこだけど、飛行ユニットのおかげで直線的な動きに関してはかなりのスピードを誇る。装甲も申し分なく、重量もあるおかげで父ちゃんの機体に体当たりしても当たり負けることもないだろう。武装はロングソードにマシンガン。ロングソードは至って普通のものであり、伸びたり震動で切り裂くと言う事もない。マシンガンも単純に弾丸を発射するだけのもので、普通の武器だ。あと肩と脚部にミサイルポッドを付けて、弾幕を張りまくって牽制する予定だ。ほかにもスモークディスチャージャに、フレーム用のアタックオプションを用意した。父ちゃん強いって豪語してたからこれぐらいのハンデは当然だよね？

「なぁ光司。おまえのフレームの武装が父ちゃんのと随分違うよう

なんだけど？」
「僕、フレーム対フレームって今回が初めてなんだ。だからハンデだよハンデ。いいでしょ？」
「・・・おまえ、そんなんで良く模擬戦とか言ったなぁ。まいるぜ」
「僕ゲーマーだから、そういう面では強いと思うよ？」
「・・・ゲームと一緒かよ」

そう言って苦笑している父ちゃん。ゲームと言っても結構難しいからそんなに馬鹿にしたもんでも無いと思うんだけどなぁ。

「だって僕は今回アバターシステム使うから、ゲーム感覚でできるようにしてあるからねぇ。それにアバターシステムのおかげでかなり無茶もできるしね」
「ふふん、いくら薦めても俺が勝てば問題ないだろ？」
「勝てるなら使わなくても良いよ。勝・て・ば・ね」

バチバチと火花を散らす父ちゃんと僕。アバターシステムの便利さと安全さはぴか一なのに、父ちゃんは本当に頑固だなぁ。

「とりあえず、その性能で問題ない？」
「少しだけ、試運転させて貰って癖を掴めばオーケーだ」
「わかった、そんじゃ1時間後に戦闘開始って事でいい？」
「了解だ」

慣らし運転したら、模擬戦（せんそう）だ。

今回、模擬戦の立会人としてファラスさんやトレイルさんが来てくれている。

「なんでまたあなたが来たんです、トレイル」

「コージに会いに来たのであって、別に他意はない。あれだけ魔術が使えるコージがフレームに乗って戦闘すると言うんだ。興味を引かないわけが無いじゃないか」
「とかいって、コージの戦闘の癖を盗もうとしてますね。せこいです」
「なっ・・・言うに事欠いてなんて事を言うんだね、君は。敵情視察と言ってくれたまえ。何事も情報は大事なのだよ」
「綺麗な言葉で誤魔化しても、駄目ですよーだ」
「ぐぬぬぬ」

なんだかセリナと言い合ってるけど、やっぱりポーズが決まっているトレイルさん。そんな魔法のトップ2を見て、なんとも言えない表情をしているのはファラスさん。まさか、こんな低レベルな言い争いをしている二人が、魔法を使う事に関してはトップクラスだとは思わないよねぇ。

僕は慣らし運転よりもマクロ作成に余念が無い。普通の高校生の僕なんかが運動神経が物凄く良いわけがないので、コントローラで操作して攻撃や射撃やコンボを繰り出して、操作する方がよっぽど上手くできると思う。ホワイトファングのときに作った基本的なマクロは勿論、コンボの製作を大量生産している。コンボのマクロ同士を組み合わせて、さらにコンボを追加できるように工夫もこらしているので、場合によっては連撃が止まる事はないだろう

まぁ、実際に組み合わせて使うには経験が必要だろうけどね。

ようし、マクロの準備ができた。父ちゃんもどうやら準備できたようでこっちに向かって手を振っている。

ようし、模擬戦だ！

まずは準備（後書き）

戦闘は次です。準備に意外と手間取りました。

親子対決

ロバス、東ブロックフレーム試験場。

そこで二機のフレームが対峙していた。一機は青い細身の機体で、気負うことなく自然な姿で相手を睥睨している。対するもう一機は少しがっしりしている緑色の機体で、細かく足を踏み鳴らしたり身体を右に開いたり左に開いたりと、機体の状況を確認してるかのように動いている。

「さて、それでは私が合図をしますので、両者とも位置について」

「ゴー！」

ゴバッ！　と勢い良く衝撃波が二機の間を走る。どうやらこれが合図のつもりらしい。

細身の青い機体は、右手にレイピア左手に短剣を逆手に持ち相手にまっすぐに突撃していく。対する緑色の機体は慌てずに右手のマシンガンを向け即座に連射を開始する。

青い機体は即座に反応し、身をかがめさらに加速する。間合いに入った青い機体は緑の機体の足元を狙う。

ガキッ！

足首の間接部分を狙った攻撃は、見事に足の裏でブロックされ逸らされている。そして緑色の機体は近距離でもおかまいなしに、マシンガンをばら撒く。だが、青い機体はその攻撃すら少しの跳躍と、

自身を縦に回転する事で軽々と回避し、緑の機体に取り付く。
そして即座に足を使って緑色の機体の肩をロックし、フリーとなった両手で頭部を破壊しようとする青い機体。

だが、青い機体が武器を振り上げた瞬間に緑色の機体は急加速をし青い機体の体勢が崩れ攻撃は失敗に終わる。そして、体勢が崩れるや否や今度は青い機体を地面に叩きつけようと急制動を掛ける！

だが、急制動でついた勢いを緑の機体の肩を蹴る事でさらに加速させ、ふわりと安全圏まで離れる青い機体。むしろ、緑色の機体のほうが無理な急制動でダメージを受けたようだ。

「なんで、あの機体でここまでできちゃう訳、父ちゃんは？　ある意味すっげー変態なんじゃなかろうか・・・」
「対フレーム戦は初めてと言ってた割りに、良く動くなぁ。あの重そうな機体でよくやるよ、ほんと」

様子見の攻撃で相手の力量を測った二人は、相手の動きの凄さをはっきりと感じ取った。

「父ちゃんに近づかれたら相当やばいなぁ・・・さっきはたまたま上手く行ったけど、正直あんなトリッキーな攻撃されたらヤバイなぁ・・・中、遠距離で戦いたいけど、そうはさせてくれないだろうなぁ」
「あの機体は意外と頑丈な所が厄介だな。直線に限ってはこっちと変わらん速度もでるようだし。攻めて攻めて攻めまくって、隙を探すのが一番だなこれは」

距離を取ろうと動きまくる光司と、なんとしてでも喰らい付こうと急激な機動を見せる勇司。その制動はかなり無茶であり、身体にか

なりの負担が掛かっている事が想像に難くない。だが、戦闘が１０分、２０分と時間が経っても一向にその勢いが衰える事はなかった。

直線的な動きで距離を稼ぎ、空中へと逃げる光司だが、勇司の機体は空気を踏み固める事ができるので、すぐに追いつかれてしまい蹴りを喰らって地面に叩き落されてしまう。光司としてはミサイルを放って、マシンガンでちまちま削りつつ攻撃したいところだが、その動きはすでに勇司に読まれているようで中々思うように戦況を作る事ができずにいた。

「この機体でここまで何もさせて貰えないとか、おかしいでしょ父ちゃん」

「そろそろ、向こうの機体のダメージが溜まってきた頃合のはずだ。動きが鈍くなってきたら止めに一気に行けるな」

両者ともに決定打は無いにしても攻撃は直撃している。ただ、直撃の回数が光司が１５回ほどに対し、勇司は３回。五倍もの差が機体のダメージに如実に出ていた。

「くっそぉ、このままじゃジリ貧だ！　なんとか逆転する方法を考えないと」

ゲームはかなり上手い方だった光司だが、勇司と対戦してみてまったく通用しない事がわかった。正直アクセルを掛けながら戦って、落ち着いて判断し行動しているつもりなのだが、気がつけば追い込まれているのだ。

「肉を切らせて骨を絶つしかないよなぁ。だけどどうする？」

正直攻撃が当たりにくい上に、コンボを出しても途中で止められた

りカウンターを入れられたりと散々な目にあっている。油断を誘って強烈な一撃をお見舞いしたいけども・・・

ここはアバターシステムという事を最大限利用しよう。

「でりゃあぁ！」

何度目になるか分からない突進を、飛行ユニットの推力も合わせて行う。だが、父ちゃんは全く慌てずに、僕の突撃をかわそうとする。僕から見て右の方へと機体を移動させ、飛行ユニットを攻撃しようとしている。

逆手に持った短剣が飛行ユニットのエンジン部分へと突き刺さる！

そして僕はその攻撃が当たる瞬間を狙う。エンジンに刺さりわずかに動きが鈍った左腕めがけて、ロングソードを叩き込んだ！

勢いよく振りぬいた剣は、うまく左腕を間接部分から千切り飛ばした！　だけど、僕がロングソードを振りぬいた隙を狙ってレイピアがコックピットを狙ってる。

「怖いけどここが勝負時だ！！！」

レイピアで狙われてるのを気にせずにそのまま突っ込み、ロングソードを放り投げた右手で父ちゃんの機体の胴体を掴み、マシンガンをコックピットに向け至近距離から叩き込んだ！

ブラックアウト

「くそぉ、良くて相討ちかぁ・・・」

人形が深刻な状況になったと判断された事により、アバターシステムが解除されコックピットから戻ってきた僕。復帰して即座に勝負を確認した僕が見たものは、バリアシールドを展開している父ちゃんの機体。そして僕の機体のコックピットはレイピアが少し刺さっているようだった。ひょっとしたら人形に少し刺さってるかも。まぁ父ちゃんの機体の体勢を崩すために強引に引き寄せたから刺さりもするよなぁ。

「こおおおおじぃっ！」

うわっ！？　父ちゃんがめっちゃ怒って部屋に入って来た！？　なんで！？

「こんの馬鹿野郎！」

ごつん！

頭にかなり痛い拳骨が飛んできた・・・めちゃ痛い・・・

「模擬戦であそこまで無茶をする奴が居るか？！　しかもお前最後の攻撃、捨て身で相討ち狙いだっただろ！」

「う、うん。機体に乗ってるのはアバターだし、少々の無茶をしても大丈夫だなぁって思ったからつい」

「そんな無茶をして、万が一の事があったらどうするつもりだ！簡単に諦めるような奴が生き残れると思うのか、お前は！」

確かにそうかな・・・？　ここでやられても、新しいアバターを出して出撃すれば良いかなぁとか考えてたのは事実だし。

「ごめんなさい・・・」
「今回はシステムがうまく作動したから良かったものの、もし人形に魂が入ったまま戻ってこれなかったらおまえただじゃ済まなかったんだぞ？」
「・・・はい」
「おまえも言いたい事があるだろう。だけど、父ちゃんはアバターシステムは反対だ。あれは簡単に人を無茶な行動に誘う危険なものにしか見えん」
「うぅ・・・でも・・・」
「とりあえず、よく考えろ光司。そして何か父ちゃんを納得できる材料を持ってくるまではアバターシステムは封印だ。いいな？」
「・・・はい、分かりました」

うー・・・ちょっと調子に乗ってたかなぁ僕・・・反省・・・

親子対決（後書き）

まさかのアバターシステム封印。あーどうしよう。

フェア・アンフェア

父ちゃんとの模擬戦の結果、アバターシステムを父ちゃんに使ってもらうどころか、封印する事になってしまったので、納得させる理由を考えるのも必要だけど、意識を飛ばさずに利用できるように単純に電波で操作する方式に、切り替えられるように改造を施した。電波で操作する場合はミミの能力が使えないんだけど、実際に戦場にでるよりかはマシなのでその操作にも慣れてもらう事にする。

ただ、僕がガイアフレームに乗る場合は生身で乗るようにする事にした。

一度考え方をリセットして、普通に乗って安全性を高める方法を考える事にしたんだ。無茶な戦い方ばかりしていたら、それが癖になって普段の戦いでも無茶をするようになってしまったら、やられちゃう確立が物凄く上がってしまうから、まずいなぁと気付かされたので。

べ、べつに父ちゃんに怒られたから変えた訳じゃないよっ?!

だから、ガイアフレームに乗って戦う時に、こちらをサポートしてくれる無人フレームがあれば大分違うのではないか？　と思い、まずはサポートメカのデザインと機能を細かく考えよう。せっかくだからミミとセリナにもついでに意見を聞いてみようかな。ミミとセリナはフレームに乗るのはまだ早そうなので、慣れるまでは完全リモコンタイプで戦って貰う事になるだろうし。

「ミミもフレームにぃ乗る・・・の？」
「わたしもですか？」

「いやいや、乗らないから大丈夫。乗らずにフレームを操って貰うんだ」

そういって、今回一緒に考えて貰うフレームのサポートメカの概要を伝える。二人とも最初はぴんと来なかったんだけど、用は便利な使い魔的なものって伝えるとなんとなく分かってくれたようだ。

「やっぱりおいしい料理できたら嬉しいです」
「ミミはぁ空に散歩にぃ、連れてってくれたら嬉しいなぁ」

理解した方向がなんか違うけども。そういうのじゃなくて戦闘に便利な方向で考えて欲しいなぁ。

「ということは、魔法の詠唱を守ってくれるメカは嬉しいですね。あとは、威力を増幅してくれたりですとか、複合魔法の手伝いをしてくれるとか・・・」
「ちょ、ちょっと待って、メモとるからちょっと待って！」

何かのスイッチが入ったみたいにセリナが滔々としゃべりはじめた。とりあえず、セリナの言ってくれたアイデアをメモっていく。僕は魔法使いというわけではないので、そこらへんのアイデアはほとんど出てこないから凄く助かる。

セリナのサポートメカのアイデアとして、詠唱を邪魔されないように防御する事、詠唱の増幅をする事、魔法を唱えるメカ、複合魔法を唱える事、魔法を範囲化する手助けをする事、照準を補佐してくれる事などを考えてくれた。この世界の魔法の照準は目視で行い、基本的に狙った所がずれても発動してからは誤差修正する事ができない。遠視の魔法と攻撃魔法を同時に使うのは少々難しいので、使い手が少ないのが現状だ。現にセリナは遠視の魔法を使う事ができ

ないので、目視範囲内の敵にはめっぽう強いんだが離れた敵には、いまひとつ狙いが甘く強いとは言えない。まぁ、場所によっては範囲ごと吹っ飛ばす感じなので、大丈夫といえば大丈夫なんだけどもね。

「ミミはねぇ、何かなぁ。コンビ攻撃してくれたり、遠距離攻撃で隙を作ってくれたらいいなぁ」

ミミは一騎当千な能力を持ってるだけあってあまり要望が無い。むしろなくても困らないだろう。とはいえ、忘れてる事がある。

「ミミ、リモコンでフレーム操ったら能力が使えないんじゃない？」

「あ」

やっぱりそうだった。と言うことは単純に動いてる物を感知するようにしてサポートするのが良いな。さすがに殺気を感じるとかは無理そうだもんな。でもこの場合はフレームと同じサイズのメカじゃなくて、もっとずっと小型で数を多くする必要がある。そんな感じでいいかな？　と言うとミミは頷いてくれた。

サポートメカのアイデアはひとまずこれぐらいで、置いておこう。あとは僕が乗るときの安全確保としてどうするかを考えよう。ホワイトファングに乗っていた時に思ったんだけど、サポートＡＩが居ればかなり楽だったんだ。接近警報や多数の敵の照準の優先指定、脅威度の設定、武装の変更や変更に伴う照準の設定。よくよく思い返せば、かなり便利だな・・・よし、どのフレームにも乗せられるようなＡＩを作る事にしよう。

他に作るとしたら・・・脱出用ポッドかな？

ボタン１つで脱出できるのってやっぱり必要だよね。しかもこの世

界は魔法があるから脱出ポッドというか脱出魔方陣というものになるか。戻ってくる位置を指定できるようにしておけば、いざという時に迷わずに済む。

ほんというと魔法がある世界だし、漫画やゲームでも復活の魔法なんてものがゴロゴロしてるんだけど、こればっかりは試すのが怖い。今まで漫画やゲームの魔法はなんでも発動できたんだけど、こういうのに限って発動しなかったりしたら、目も当てられないしねぇ。

非常識な事をしてるんだけど、ある意味常識の範囲内で安全措置を取らないとね。あとは、どうやれば父ちゃんにアバターシステムを認められるか考えないと駄目だなぁ。ちょっと父ちゃんと話してみよう。

「父さん、ちょっと話いい？」
「ん？　うん大丈夫だぞ。どした？」
「なんで父ちゃんはアバターシステムに反対なの？　無茶しなかったらあんなに便利な物は無いと思うんだけど」
「まぁ、確かに便利なのは認めるけどな。だけどあれだと俺の戦争には合わないんだ。不公平すぎるんだ」
「なんで？」
「俺は命のやり取りをしてきたからな。自分は命を賭けないくせに、簡単に命を奪える状態ってぇのはフェアじゃないだろ？　それに慣れてしまったら人の命を奪うのに何も感じなくなって、何も思わずに人を殺めるようになっちまう気がしてな」
「だったら余計に父ちゃんはあのシステムを使わなきゃ」
「光ちゃん、話聞いてた？」

ちょっとぽかんとしてる父ちゃん。まぁ話を聞いてもらわないとね。

「逆なんだ」
「何がだ？」
「アバターシステムを使うとゲーム感覚で戦えるから、命なんか賭ける必要なんてないし、奪う必要もないんだ」
「・・・それで？」
「僕が元の世界でしてたゲームは所詮ゲームで、相手を倒したからって誰かが死ぬわけじゃない。そりゃあ物語の中の人物は死んだりするけど現実で人が死ぬわけじゃない。だから、僕は今度の戦争もそういう意味でゲームにしたいんだ。敵も味方も誰も死なないゲームに。だけど、そう思ってるのはこっちだけで向こうは死に物狂いで僕達を倒すためにやっきになって仕掛けてくるよね？」
「まぁ、そうだな・・・」
「その為のアバターシステムなんだ。僕達は倒されても倒されても復活する。だけど誰も殺す事はしない。そして、圧倒的な力でもって相手を無力化していく。父ちゃんならどう？　めちゃくちゃ強くて、倒しても倒しても復活してきてその上、殺そうとしないで手加減するような奴を相手にするのは？」
「うんざりするなぁ。先が見えないってのは気力がしっかりしてないと折れそうになるしな。なるほどな」
「だけど、模擬戦で父ちゃんに教えて貰ったんだ。確かに僕は無茶をしてでも相手を倒せば良いって。だけどそれは父ちゃんの言うとおり、危ない事なんだって」
「あぁ、捨て身でなんでも解決しようってのは危ない。成功したとしてもだ」
「だけど、その事を分かってればアバターシステムを使うのは良いかなぁって思うんだけども、駄目・・・かなぁ？」
そこまで聞いて父ちゃんを見ると、なんとも言えない目をしてこっちを見ていた。

「そうだよなぁ、父ちゃんの子供だけどちゃんと成長してるんだよなぁ」
「まぁ背だけは伸びたよ確実に」
「それだけじゃ無いんだけどな。くっくっく」

それから吹っ切れたように僕をみてこう言った。

「まぁ、お前達が使う分には文句は言わない。そんだけ考えてるなら良しとするとしよう」
「ほんと？」
「ただし、模擬戦の時の様な無茶はすんじゃないぞ？」
「うん、ありがとう父ちゃん！」

あいあいと照れ臭そうに、鼻を掻きながら返事をする父ちゃん。説得する気はなかったんだけど、なんかアバターシステムを使う許可が出て良かった！

父ちゃんと話してて思い出したんだけど、「７７７」対策しないと駄目だよね。予想外に父ちゃんが凄いって分かったからもっと綿密な対処方法を考えよう。

「しかし、コージ君がユージ陛下と知り合いとは驚きだな」
「知り合いと言うか親子なんですけどもね、ほんとは」
「ん？　何か言ったかセリナ」
「いいえ、別に。でトレイルは何か掴めたんです？」

今回のクーデターの件で魔法教会から呼び出しがかかり、赴いた先でトレイルに見つかってあれこれ聞かれているセリナ。まぁ、具体的に何をするかは王様というかコージのお父さんから直々に聞いているので、本当は出てこなくても良かったのだが、それはそれで教会に出入りしていないセリナが、今回の情報をどこから仕入れたかが問題になりそうだったので、渋々ではあるが出てきたのである。

「そうだね。コージ君は積極的に攻撃を仕掛けるタイプではない、というぐらいかね。彼は非常に優秀なスペルを持っているにかかわらず、それだけで戦う訳ではない。むしろ、君に戦い方が似てるんじゃないか？」
「いえ違いますね。確かに私はのっけから攻撃魔法を放つタイプではありませんが彼のように、相手の技を見てから反撃しようとは思いませんね。相手に何をされるか分かったもんじゃありませんし、正直臆病ですからね、わたしは」

そう語るセリナの顔は冷静であまり表情を出していない。だが感情が無いというわけではなく、魔法で戦う時の状況を想定して話している為に表情が無いだけのようである。

「あと、彼は他人を傷つけるのを非常に嫌がります。どれだけ怒っていようとです。わたしなんかには真似のできない事ですね、あれ

は」

と、うっとりと何かを思い出しながら呟くセリナ。

「まぁ、雷系の魔法をあんな麻痺程度でしか使わないっていう時点で、よく分かるな。あんな細かい調整をする方が逆に難しいだろうに、ほんと良くやるよ彼は」

そんなセリナを珍しい物をみる目でみやりつつ、コージの魔法の技術を思い出し感心しているトレイル。無論ポーズは美しい。

「コージはあなたと違ってとーっても優しいんです。彼の繊細な魔力操作を見ても分かりますよ。術式が非常に綺麗で優しげな光を放っていますから」

「・・・？　そこまで見える物なのか？　彼の術式は」

一瞬何を言われているか分からず、不思議そうな表情をしたがセリナの言葉の意味を理解して驚くトレイル。トレイルほどの術者でも得意な魔法の術式がぼんやりと光る程度なのだ。

「道具ですと、そこまではっきりは見えませんけど一度見れば分かるようになりますよ。私たちと同じ魔法を唱える場合なんですけどね」

「あぁ彼の魔法は特異すぎるからねぇ。あれって闇か光属性になるのか？」

「そこまでは、わたしにも分かりませんね。ただ、非常に使い勝手の良い魔法としか」

事情を知ってるセリナはそこは曖昧にぼかした。

「そうだな、あれは集団戦で非常に役に立つ。彼に教えて貰う事はできんのか？」
「難しいですね。ああ、教えて貰う事がではなくわたし達が理解するのが、です」
「術式はあるんだろ？　なら真似すればいい」
「無いんですよ、あれは。術式など全くなく、魔力を練り上げたかと思うと急に発動してしまうんですよ、コージの魔法は」

ミミが教えられてすぐに使えた事を思い出したのか、悔しそうに呟くセリナ。

「は？　どういう原理で発動してるんだ？？？」
「これはそういうものだと分かって欲しいとは言ってました。だけど、どうやっても理解できないのでわたしには無理でしたね」
「厄介な・・・だが、彼が既存の魔法の改良に手を貸してくれれば非常に助かりそうではあるな」
「あぁ、そういえばトレイルの魔法を改良してましたね。大人と子供ほどの差がありましたよ。勿論トレイルが赤ちゃんです」

可愛げのまったくない赤ちゃんですけどね、と憎まれ口を叩くのを忘れないセリナ。

「な！？　一体どの魔法を改良したと言うんだ！　しかも赤ちゃんとか・・・」
「“オーディス”ですよ。トレイルが2年がかりで完成させたあれです」
「よりによって“オーディス”と来たか・・・」
「ええ、あの状態のコージなら5秒もあれば私たちを無力化できるでしょうね」
「あいつは化け物か！？」

「あまり凄いとは思ってないみたいですよ、彼は。無邪気にわたしの事を褒めてたぐらいですし。彼がしている事の方がよっぽど凄いのに」
「まじめに教会に欲しいな彼は」
「それは無理だと思いますよ。事情は言えませんけど」

一国の王子が魔法教会でこき使われるというのは、あまり想像できないセリナ。

「ふむ、残念だな。まぁ、暇を見て色々考えて貰うようにするのは、悪くないだろうから、そっちから攻めるとしようか」
「攻めるとかイヤラシイ」
「・・・コージと付き合いだしてから、色々と変わったな君も」
「もうコージと付き合うとか、良い事言いますねトレイルにしては」

きゃっと頬を染めながら、嬉しそうに言うセリナ。トレイルにとってこんな姿をするセリナは今まで全く想像できない姿であった。それが良いか悪いかは別として。

「まぁ、がんばってくれたまえ」
「言われなくてもっ」

少々呆れ気味のトレイルの台詞に、力いっぱい返事をするセリナであった。

ロバスの中心にある塔「ティンラドール」にて勇司は、ロバスの議会の主な人間を集め、情報の交換と今後の方針などを話し合ってい

た。

「現在、グレイトエースには既にハイローディスの軍勢が駐留しています。大半が町の外で待機しているとはいえ、あれでは落とされたも同然です。あと軍勢の内訳ですが、歩兵が一万五千に重装歩兵は一万、騎兵は一万五千、フレームが百機の大所帯との事です」

「しかも俺の機体もしっかり奴らに牛耳られてるせいで、状況はさらに悪いわな」

「はい。ただグレイトエースに駐留している軍隊に関しては、うまく離間できればこちらの戦力にもなりそうです。躾の悪い犬共が我が物顔で町を闊歩していますので、かなり腹に据えかねてるようですしね。火種は結構あるかと」

「離間工作は必ずやっておけよ。貴族どもの平民の扱い方は劣悪だからな。いくら改善しろといっても馬耳東風だったからな。こちら側に付いてくれる人間は少なくないはずだ」

貴族の態度を思い出したのか、忌々しそうに吐き捨てる勇司。

「あとこっちに付きそうな貴族は居るのか？」

「いえ、ほとんどがファウンデルス卿についていてそれ以外は日和見ですね。ファウンデルス卿と敵対しているトリエス卿も、このクーデターでは中立を保つようですし。ですが貴族は全部敵と思って頂いて結構かと」

その言葉を聞いて、嬉しそうに含み笑いをする勇司の姿があった。

「いやいや、わざと向こうに流れるように工作しやがったなおまえ」

「何をおっしゃいますやら。ユージ陛下の貴族嫌いは有名ですから、それでしょう。私ごときが何を囁こうと変わりませんよ」

「ふふ、まぁいい。貴族なんざこの際だ。みんな滅べばいいさ。あ

ぁ違う、俺が滅ぼそう。自然に無くなるとか誰が許すものか」

圧倒的な戦力差がある事は分かっているはずなのに、強気な勇司。

「まぁ今回はうちの優しいブレインの顔を立てて、殺しはしないけどな。ただ平民と同じ身分にしてやるから、奴らにとっては死んだ方がマシだろうがな」

“うちのブレイン”という言葉に首を傾げる面々。ユージがそこまで信頼を寄せているブレインとまで呼ばれる人物が思い浮かばなかったからだ。

「まぁ伊達に今まで生き残ってきた訳じゃない事を証明するとしようかね」

そう静かに、だが力強く宣言する勇司だった。

反撃の狼煙（後書き）

コージもミミもヒロコもるりも居ない。エド君も出番がまだ先です。

お気に入り登録が話数分と同じぐらいになって非常にありがたいです。

話数をどんどん増やせば、お気に入り登録も増える・・・？（ごくり）

それぞれの思惑

「しかし、この王宮はたいした物ですなぁファウンデルス卿」

光沢を放つ重厚な鎧を軽々と着込んだ赤毛をざっくばらんに伸ばした隻眼の男は、ほとほと感心したように大声で感想を述べた。

ここはグレイトエースの王宮の一角、ファウンデルス卿はハイローディスの将軍と会見をする為に、王宮の応接間へ招待していた。あまり事をおおっぴらにしたくないせいか、非常に緊張した雰囲気がある。

「前王が色々計画して作ったものでしてな。そういった事に関しては知恵が回るようで、おかげで重宝しておりますよ」

「おやおや。すでに前王呼ばわりですか。もう勝ったつもりでいらっしゃる？」

ファウンデルス卿の発言に、いささか軽薄さを感じたようで隻眼の男は剣呑な瞳をむけ、ファウンデルス卿を威嚇した。

「ふふ。そんな目で見ないで頂きたいですな。あなた方ハイローディスの軍勢とこのグレイトエースに居る軍勢。さらには各都市の貴族から続々と援軍が来る予定なのですよ。どこに負ける要素があると言うのです、あなたは？」

「戦ってのは蓋を開けるまでは分からないものですのでね、相手の首を落とすまでは油断しないのが私どもの流儀でしてね。数だけで勝てる戦争というのはフレームが出てくる前の古い話です」

そうガイアフレームという異質な兵器が、発掘され更には独自で開

発されるようになってからは、数というものが戦局を支配するものでは無くなってきつつあるのだ。勿論、戦争をするのに数は必要ではある。だが、戦局をひっくり返すのにたった一機のフレームがあれば充分可能な場合もあるのだ。ただ、戦術的勝利を収めただけでは戦略的優位に立てるとは限らないので、一概には言えないのだが。

「それでも、戦争は数が必要ですよ、タイガー将軍。あなたのような歴戦の将軍が来てくださったのは望外の喜びでしてね。浮かれるのも無理は無いでしょう」

「だが敵が敵だけに油断はしたくないという事は覚えておいて頂きたい」

「了解しましたよタイガー将軍。で、ロバスに向けて進発されるのは何時頃にされるおつもりでしょうか」

言外にさっさと出て行けと言わんばかりの横柄さが滲み出ている。貴族というものの尊大さがこういった所でも、遺憾なく発揮されていた。

「部隊の編成と偵察が終わり次第、といった所ですかな。まぁ準備が出来次第連絡を入れさせて貰いますよ」

「なるほど、念には念をいれるというわけですな。分かりました。必要な物があればこちらにおっしゃって頂ければ、用意させて頂きますし、人員を派遣して準備も手伝わせて頂きますよ」

「いや、それには及びません。部隊の中には躾のなってない物もいますのでね。ただ物資の補給だけ頂ければそれで充分です」

「わかりました。では御武運を」

「御武運を」

音が出そうな程、見事な敬礼をして退出するタイガー将軍。

お互い協力しあうような口振りではあるが、内心は相手の情報をどうやって引き出そうかと腹の探りあいばかりしているだけで、外面はともかく内面はお互いが全く信用できていないのであった。

「で、どうだ。この町の様子は。攻め落とすのにどれぐらいの兵力でいけそうだ？」

自軍の陣地に帰るなりタイガー将軍は、周囲の参謀にそう尋ねた。

「正直、真正面から攻めるとなると、フレーム中心で攻めても五百機ほどはかかりそうですね。やるとすれば潜入して内部から城門を開けて突入するという形が理想ですが、それにしても、ここに駐留している軍勢の5倍は必要になるでしょうねぇ」

その質問に対し、待ってましたと言わんばかりに即座に答える一人の参謀。身長は高くも低くもなく、至ってどこにでもいる風貌を持つ男である。

「そこまで固いのかここは。どこの門からでも王宮まで一直線で食べ放題にしか見えんがなぁ」

「むしろそれが厄介なんですよ。一直線とはいえ通りやすいルートは限られてますし、向こうさんとしては援軍を送りやすいんですよね」

「そういうもんかね。だが、落とせない物じゃないんだろ？」

「そうですね。まぁ私たちであれば問題ない程度でしょう。ただ・・・」

「ただ、なんだ？」

「王の印を持つと言われるユージ王。彼の噂は話半分でも化け物以外の何者でもないですから、彼が居るとどうなるか分かりませんけどね」

観念した様子で肩を竦める参謀。お手上げとしか表現できないようだ。

「おまえにそうまで言わせる男か、ユージ王は。今はロバスに立て篭もってるらしいが、そこはどうなんだ？」

「まぁここよりは、いささか楽でしょうが魔石獣の横槍が厄介な場所ですからねぇあそこは」

「魔石獣か。まぁ戦争の最中に乱入なんぞされた日にゃ、確かに厄介ではあるな」

「ま、炙り出してどうとでも料理するとしましょう。引きずり出せば将軍がなんとかしてくれるでしょう？」

「まぁ、そうだな。じゃあ準備は任せたぞ」

「は、かしこまりました」

ロバスへの侵攻はすぐにでも始められそうであった。

ロバスに対して、ハイローディスの軍勢が進行を開始するという情報が入り、先手を打たれた形になった僕達。だけど、それは父ちゃんにとっても僕にとってもむしろ願ったり叶ったりの状況であるのだ。

「ふふふ、狙い通りだね父さん。あれだけの軍勢がどれだけ急いでも１０日はかかるのにね。遅い遅い。グレイトエースに取って返す

のに3日は掛かる所まで順調に進んで貰おうね」
「まったく、おまえは意外とこういうのが得意ってのにびっくりしたぞ父ちゃんは」
「ゲーム感覚で計算してるからね。だから、現実に合わないような案を出したときに父ちゃんに監督して貰いたいんだよねぇ。今のところは大丈夫なんだよね？」
「そうだな、別におかしな所は無いし、むしろかなりいい策だろうな」

光司の作戦案を聞いた勇司は、最初はおどろき、そして光司の能力のでたらめさを改めて感じ、つくづく味方でよかったと思ったのだった。

「じゃあ僕の作戦能力も馬鹿にしたもんじゃないんだね。うひひ」

光司の案は至って簡単である。

グレイトエースの王宮内へは転移魔法などを使って侵入することはできない。だが、周辺の土地へ転移する事は問題なくできる。なので光司は、ハイローディス軍をグレイトエースから引き離し、手薄になった所を３０機の飛行ユニットを装着したフレームでグレイトエースを一気に攻め落とす電撃作戦を採用したのだ。

そうグレイトエースは空からのフレームの襲撃に対しては特に有効な対策が施されていないのである。魔術師が飛んでくるのであればゼロ空間や、警報結界が反応し即座に警備体制が強化されるのであるが、フレームにはそんなものは無意味である。そもそも陸戦兵器であるフレームが飛ぶということが想定外なのである。

ある意味、光司の詐欺的な能力ではじめて可能となる作戦であった。

それぞれの思惑（後書き）

そろそろ激突・・・するのかな？

さらなる改良

そして僕が一人でやって来たのは、ヒューイックのハーベイさんが経営するガイアフレーム販売店。フレームのエンジンの出力を上げるためのアイデアがぽこっと浮かんだのでハーベイさんに聞いて貰おう。

「こんにちは、ハーベイさん居る？」

僕の声を聞いてハーベイさんが、ようやく見つけたという感じで飛んできた。

「おぉ、コージやっと来たか！　ちと、おまえさんに相談したい事があるんじゃ」

「あ、僕もアイデア聞いて欲しかったんで、丁度良かった」

ハーベイさんも何か僕に用事があったようだ。なんだろうね？　ハーベイさんは僕を店の奥のほうへと何故か丁寧に連れて行き、結局持って帰らずに置いたままにしていたエレメンタルフレアの前までやってきた。

「実はな、今ロバスの方で戦争になりそうなんじゃ」

ハーベイさんは深刻そうな表情でそう切り出してきた。

「あ、それは・・・」

「まぁ、聞いとくれコージ。わしはこの国の王様が好きでな。今までこの国は貴族が支配しとったせいで、わしらも理不尽な目に遭う事も少なくなかったんじゃ。じゃが、今のユージ王が即位してから

は徐々にそういった事もなくなって、わしらみたいな平民も暮らしやすくなってきたんじゃよ」

一気に喋りすぎてハーベイさんは疲れたようで、そこで少し休憩している。そこで口を挟んだりはしないよ？　空気読めるもん！

「で、今そのユージ王がロバスでピンチらしいんじゃ。じゃがこの飛行ユニットを提供すれば、かなり戦局が変わるはずなんじゃ！　なぁコージ、これをロバスに持って行って渡しに行かせて貰えんじゃろうか？」

ハーベイさんは必死の表情で僕にそう頼み込んできた。正直ハーベイさんが黙って飛行ユニットを持っていったとして、僕が怒る理由なんて無い筈なのに凄く律儀な人なんだよね、ハーベイさんは。

「ふふっ」

「な、なにが可笑しいんじゃ、わしだとてこの国が好きで何かできる事を探してじゃなぁ・・・」

「いやいや、別におかしくて笑ったんじゃないんですよ。嬉しくて笑いがこみ上げてきたんです。だけど、エレメンタルフレアは持って行かなくていいですよ」

「コージ、あの飛行ユニットは凄いんじゃ、あれがあれば・・・」

「僕がちゃんと渡してありますし、既に五十機分のユニットを製作済みです。だから大丈夫ですよハーベイさん」

「は？　そうなのか？　いやしかし何時の間に？」

一週間と経たない間に、そんな事になったら確かに驚くだろうねぇ。エレメンタルフレアが無かったらロバスまで行くのに時間かかるし、ユニットを作るのにも時間がかかると思うもんね普通は。

「まぁ、そこはこんな事もあろうかと思って、作ってたという事にしといて下さい。なので安心してください。ってな訳で僕のアイデアを聞いて貰えませんか？」

「あぁ、いいけど・・・そうじゃ！　この飛行ユニットは効率を上げとるんで、あとで設計図を見せるから、すでに作った分の改良の参考にしてくれ」

「え、もう改良できたんですか？　さすがハーベイさんですね、ぜひ参考にさせて頂きます。で、今回もってきたエンジンのアイデアなんですけども・・・」

前回の思いつきは試合に勝って勝負に負けた感じで、結局は失敗に終わったので、あれから暇を見つけては仕組みを色々考えてた中の良さそうな物を聞いて貰うつもりなんだ。

前回は、魔石シートの前に増幅シートを挟み込んだのが駄目みたいだったので、今度は単純に魔石シートを二枚重ねる事で効果を上げられないかと思った訳なのだ。そして、それをハーベイさんに伝えると驚いた表情をしていた。お、脈アリかな？

「ふーむ、シートを二枚重ねにする事でどれだけ変換率が上がるか分からんが確かにそれだと、安全にパワーを上げられそうじゃな。むしろ今まで誰も思いつかなかったのが不思議なぐらいじゃ」

「いやーこの案も没だったり、先に誰かにされてるかもっておもってたんで、ちょっと嬉しいですね」

これで、フレームの単純な強化が楽になる。まぁ、エンジンだけ強くしても本体の強度や素材の強度を上げるたり、足回りを強化しないとすぐにぶっ壊れる事があるんで、無茶はできないんだけどね。

「とりあえず、この二枚シート案は行けそうですね。これって、エ

ンジンの中で魔力がどういう流れになっているか見る事ってできるんですか？」

どういう具合に魔力が流れてるかが分かれば、魔力の流れを収束させたり、流れを変える事でエンジン内部の素材に影響を与えずにさらに効率を上げられるかもしれないし。

「それなら、ここにあるテスト用のエンジンでなら見れるぞ。フレーム技師がエンジンの事を学ぶときに使うものなんじゃがの」

「なんでそんな都合の良い物がここにあるかは置いといて、それでテストしましょうハーベイさん」

「まぁ、深く聞くな。じゃあ、こっちじゃ」

今度はお店の入り口の方へと戻り、物置になってる一角からごそごそと台座に乗ったエンジンを引っ張り出してきた。そして、エンジン上部のシート取り付け具を取り外し、魔石シートを二枚はめ込む。もともとシートの太さがばらばらなので、取り付け具にはかなり余裕があるのを確認していたので、簡単にできるとおもったのである。

「この魔石シートは何故か攻撃力が上がる不思議なシートでな、結構一般的に出回ってる物なんじゃ。増幅する魔力とは違う色の魔力が発生するんで、流れが分かり易く見えるはずじゃ。これを魔石同士をくっつけるようにセットしてと。よし、試運転するぞ」

「はーい。どきどきしますね」

そして、エンジンに魔力を送る機械のスイッチを押してテストが始まった。

エンジンが静かに回りだし、徐々に魔力が高められて行く。今回使っているエンジンは四角４型のごく普通のものである。魔石シート

がよく見えるようになってるけどもね。

「じー・・・」

「そんなわざわざ口で言わずに黙って見んかい」

いや僕は意識してなかったです、すいません。

そして、いよいよ魔石シートへと魔力が流れだすその瞬間が来た。

ぴかぴかっと光りだして、シートについてる魔石へと魔力が順番になが れて・・・あれ？　今なにか凄い違和感があったぞ・・・？

「おおぉ、順調に出力が上がっとるぞ。しかもちゃんと安定した出力になっとる。でどれぐらいになったのかの・・・おお？　６型と変わらん出力まであがっとるぞこいつは！」

ハーベイさんがエンジンの出力アップに非常に喜んでいるけど、今の僕はそんな事にはまったく気持ちが動かなかった。さっきの魔石へ魔力が流れる瞬間をもう一回見ないとこの違和感の原因がはっきりしない。何か凄く面白い物が見えた気がするんだ。

「ハーベイさん、この魔石シートは攻撃力が上がるんですよね？なぜか」

「あぁ、まぁ攻撃力といっても武器を持って攻撃するときにだけ何故か余分に出力が上がると言う不思議な仕様でな。理屈は分かってないが、便利なんで皆つかっとるんよ」

「オーケーオーケー。僕の勘違いでなければその理屈も分かりますよ」

「・・・なんじゃと？」

そして、エンジンが安定しているかのテストは後回しにして、一度

エンジンを止めて今度は録画できるようにカメラを用意して、もう一度最初から運転を始める事にした。見間違いでなければ、きっとさらに色々できる様になるはずだ。

「じゃあ、もう一回行くぞ。今度は安定テストじゃから暫くは止めずに行くからな」

「うん了解。準備オッケーだからいつでもどうぞ！」

僕の言葉を合図にエンジンが回りだす。魔力が徐々に高まって行きそして、魔石シートのほうへと魔力が流れ込み魔石が光りだす。問題はここからだ。ぴかぴかと光って魔力が流れ出し、エンジンは平常運転へと移行していった。よし、さっそく再生再生、確認だ！

さらなる改良（後書き）

こんな所で切るなんて焦らし？　えぇ、その通りですごめんなさい。

これからご都合でお話は進んで行きます。

お気に入り登録や評価してくださった方ありがとうございます

これってアリですか？

「やっぱり、これ漢字だ・・・」
「ん？　かんじ・・・？　なんじゃそれは」
「ん、気にしないで」

とはいえ気になるだろうけど、しばらく説明しないで置こう。エンジンを再始動させてビデオで魔石シートが光る瞬間を繰り返し見たんだけど、どう見ても「攻」の文字に光っているのだ。そして、攻撃力が上がるというこの魔石シート。これは確実に魔石シートに並べる石を漢字の形に光らせる事によって、その特性を機体に持たす事ができるシステムになっているとしか思えない。

となると、僕にとってこれは改造し放題って事なんじゃない・・・？

しかも、付加される特性は魔力が別途発生してくれる便利仕様だからエンジン出力が削られるってわけじゃないし。発生する魔力に合わせて機体の強化をする必要はあるだろうけど、そういった事は出力アップにはどうせ付き物だし。あと問題があるとすれば、付加する漢字の書き順を正しくしないと駄目かもしれないって事だ。あんまり画数が多い文字だと、正しい書き順をしっかり覚えてるか不安だ。

「とりあえず、エンジンは安定してますよね？　成功って事で良いのかな？」
「お、おうそうじゃな。これだけの誤差しか出ないのであれば安定して使用できるのは間違いないな。で、どうする？」
「ん？　どうするって？」
「この技術じゃよ。他人に教えずに自分だけで利用するなら、かな

り儲かるんじゃないのか？」

真剣な表情でハーベイさんが僕に尋ねてくる。なるほど、言われて見れば儲かるかもしれないよね、これって。まぁすぐにばれるからちょっとの間だけだろうけどね。

「あー、とりあえず今は人に教えない方向で。戦争が終わるまでは僕達だけで独占しておかないと相手に渡るとめんどくさい事になりそうですしね」

「まぁ、今は儲かるとか儲からないとか言っとる場合じゃないわな」

戦争が始まるから、儲けようとする人はいるんだろうけどね。僕達はそんな事してたら負けちゃうし。

「とにかく今は戦争を乗り切るための手を全て試して、後悔しないようにしたいんだよね。えっと言ってなかったけど僕も王様派だからね」

「言わなくてもわかっとるわぃ。じゃが、コージはなんぞコネでもあるんかの？　普通こういう物を持っていっても門前払いされるのがオチじゃろうに」

あー、そうだよね。普通、エンジンの強化できました！　じゃあ使うわ！　って感じには行かないよね。むしろ、何いっとるんだこいつって思われて、さらには罠を仕掛ける為にやってきた敵のスパイとか疑われそうだもんね。

「大丈夫だよ、安心して。非常に強力なコネがあるし、一応僕の腕前も信頼して貰ってるからね。きっと使ってもらえるよ。なんならハーベイさんも紹介しておこうか？」

「わしの事はええから、ちゃんと使ってもらえるならそれでええわ

い」

ハーベイさんは本当に父ちゃんというか王様が好きで、とにかく役に立ちたいって想いだけで動いてくれているようだ。王宮と繋がりを持とうとか、ちっとも考えてないし。こういう人が味方で本当に良かったと思う。あの勇者様一行と比べたらほんと天と地ほどの差があるよ。うん。

とりあえず、今はエンジンの出力アップの目処が立って機体を強力に仕上げる事ができるのは間違いないので漢字を使った特性付加は良く考えて利用しよう。

「じゃあ、またなんかアイデアが出たら来るよ！　ハーベイさんありがとう！」

「おぉ、飛行ユニットとエンジンはちゃんと王様に使って貰ってくれよー」

任せて頂戴。せっかく改良してくれたんだから、有効活用させて貰いますよ。だって俺以外が飛行ユニット使うと１０分ぐらいしか持たないって言ってたし。それでも大丈夫だけど、飛行時間は長いほどいいもんね。うん。

そういえば、ヒューイックには貴族の屋敷があったよね。とりあえず、先手必勝でフレームを壊しに行こうかな。ついでだし。あ、エレメンタルフレアの飛行ユニットを改良してから行こう。前のとき結構しんどかったもんね。

二度目の貴族の屋敷の襲撃は失敗に終わった。いや不発に終わったと言うべきかな。いったら誰も居ないんだもん。１０機はあったフレームもすでに移動してあり、僕が壊した屋敷も綺麗に修復されて

いた。だけど、誰も居ないという状況。今回の戦争に積極的に参加してるって事なんだろう。でもあの憎たらしい貴族が敵にいると思うと少しウキウキしてしまう。だって、けちょんけちょんにしても誰にも怒られないし、むしろ褒められそうだし。たぶん、あの貴族はどこに行っても目立つだろうからすぐにそういう機会を得られると思う。くっくっくっく。嫌がらせの為の小道具をいろいろと作っておかないとね。色々と・・・

「貴族を滅ぼす・・・」

王様が開いた会議の中に居たセリナは勇司の台詞を聞いて、呆然としていた。小さな頃から貴族というのは、村に暮らしていたセリナにとってある意味王様より畏怖すべき存在であり、不可侵のものであると叩き込まれていたからであった。現にヒューイックでの騒動の時も、簡単に逃げおおせるにも係わらず貴族には逆らう事ができなかった。それにセリナは今でも貴族に向けて魔法を放つ事はできないのだ。

「滅びるのは嬉しいんですけど、コージのお役に立てそうにありませんよね、このままだと」

自分は魔法を放つ人形だと、自分に言い聞かせて攻撃しようとした事もあったのだけど、やっぱり貴族を目前にすると詠唱などできなかった。詠唱どころか必要な術式が頭の中に全く浮かぶ事すら無かったのだ。この事についてコージに相談したいのだが、それには貴族に魔法を撃てない原因を言う必要がある。

「でもコージは優しいから言わなくても、相談に乗ってくれるかな」

最初は貴族みたいな格好をしていたので、内心びくびくしていたのだけれど、何故か彼とは少し話をしただけで、そんな内心の動揺も全く無くなって平常心を取り戻せていた。むしろ、不思議と信頼できる人間と認めてしまっていたのだ。

鉄面皮。クリムゾンや絶対零度などの二つ名がついたりもしました。

眉一つ動かさずに、魔物の子供や卵を殲滅して行くわたしの姿は冷静そのもの。不意打ちされても、まったく慌てずに返り討ちにする。だけど、使う魔法は激情の炎の魔法。物静かに、誰も真似のできない程の高温の炎を操る私は、クリムゾンと呼ばれ、殺戮の象徴として扱われた事もあった。

「人になんと呼ばれても、どうでも良かったんですけどね」

コージのわけ隔てないあの優しさが凄く嬉しかった。でも、わたしの過去を知って同情はされたくはない。いやそんな事をさせたくない。やさしい彼は、知ってしまったら動き出さずにはいられないだろうから。復讐の手助けを必ずしてくれるだろう。きっと彼の手が血で汚れる事になったとしても。

貴族も居ない、平民だけの平等な平和な世界から来たというコージ。

そんな戦いを知らない彼にはずっと優しいままで居て欲しいと願う。だからこそわたしは強くならねばならない。貴族など問題にもならない程に。

これってアリですか？（後書き）

セリナちゃん特訓がんばれ。え、しないの？　するよね？？？

対策

僕は、昨日ハーベイさんから貰った飛行ユニットの改良案を、じっくりと眺めてさらに効率を良くできないか考えていた。もともと飛行ユニットは、大雑把に飛べればそれで良いって物で、操縦者の魔力をばかすか食っていたのだ。僕も改良したかったんだけど、それをどうすれば効率よく改良すれば良いのかわからなかったのだ。

ハーベイさんの設計図を見ると、それがなんとなく分かってきた。僕は魔力を常時吸い出して飛行する為のエネルギーにしていたんだけど、ハーベイさんは最初に大量に魔力を吸い出すのだけど、吸い出したエネルギーが3割切るまでは魔力を吸い出す事をせず、3割を切ればまた大量に吸い出すという方式にしていた。さらに、魔力を貯めるタンクをわざわざ1個から2個にふやしていた。容量は1.5倍ほどなんだけど、タンクに貯まった魔力は増幅器を使ってもう1つのタンクへと移していき、少しでも余剰魔力を作るようにしていた。他にはエネルギーの伝達回路の変更だ。今までは、タンクから直接エンジンに向かって一つ一つラインが通っていたんだが、大きなラインをまず左右のエンジンに向かって引き、そこからエンジンへ流れるようにして、あとは無駄なバイパスはごっそり省いており、それで効率は大分上がっているようだった。

でも、これって先に作った飛行ユニットを改良するより最初から作り直した方が早い・・・

ハーベイさんの凄さが良く分かり、僕のずさんな設計が良く分かるなぁ。だけどこれなら、もっと楽に空を飛べるようになる。最初は飛行ユニットの改良をする暇がないと思っていたので、父ちゃんにロバスにいるエース級のパイロットを選んで貰うように頼んでいた

から、このおかげでさらに楽になる筈だ。

「でも、あのルーツが出てくるかも知れないんだよねぇ・・・」

父ちゃんの愛機「７７７」
３桁のルーツであり、父ちゃんの話を聞いた限りでは厄介な性能を持ち、邪魔をされるとどう対応すれば良いか分からない。最悪、僕が囮になって引き付けるしかないとは思っているんだけど。

市販されているフレームに乗った父ちゃんにすら勝てなかった僕。確かに、機能的には市販とはいえない部分はあるけども、そうでなかったとしても僕は負けてた気がする。色々考えて装備をつけたつもりだったんだけど、結局それは机上の空論なわけで現実には思ってた程うまく動けなかった。

もっともっと反則的な装備を考えないと駄目だよね！　ちょっと父ちゃんに相談してみよう。

「で、俺のところに来たわけか。でも、父ちゃんはそういったアイデアはてんで浮かんでこないんだけどなぁ」

部屋で寝ていた父ちゃんを叩き起こして、何かアイデアが無いか聞いてみたけど、帰ってきたのはそんな言葉。フレームライダーとしては一流なのにてんで使えないなぁ。

「でも、あれだけ見事にフレームを操れるんだからさ何かない？追加してほしい機能とか、武装とかさー」
「んー・・・、ちょっと待ってくれ。寝起きで父ちゃん頭がまわらん」

まだ夜の１０時ぐらいなのに父ちゃん寝るの早いよ。朝起きるのも早いし。すっかりこっちの生活に慣れてるよね？　ちなみに母さんはさっきミミと話しこんでた。ずいぶんと仲良くなっているみたいで僕としても嬉しい。

「んーっと、光司ちょっと飲み物貰ってきてくれるか？　あっつい奴」

「ほいほい、お願いする立場ですから速やかに貰ってきます！」

父ちゃんに敬礼して、下の食堂で熱い珈琲でも貰ってこよう。ついでに僕もなにか炭酸の入った飲み物を貰うとしようかな。でも、ほんと何か良い案ないかなぁ？

「んー・・・やっと目が覚めてきたかな。そんで、なんだっけフレームの新しい装備？　だっけか？」

「うん、父さんの愛機が出てきたときにどうにかしたいなぁって思ってさぁ。何かないかな？　「７７７」限定で効きそうな物でいいからさ～」

とりあえず現状は「７７７」を抑え込める何かがあれば事足りるからね。あんまり欲張って色々な物に対応できるような物を考えようとすると、きっと時間が足りないだろうし。僕の言葉に父ちゃんは、目を閉じて考えるそぶりを見せて黙考。うんうん唸ってるけども、そのうち段々静かになり、そして・・・

「父ちゃん寝るな！」

「おおぉ！？　ごめんごめん、で、なんだっけ？」

「なんでループになってるの！？　だから対「７７７」用の新しい装備だってば」

「うーん、とは言ってもあれを抑え込む為の装備ってもなぁ・・・

弱点らしい弱点といえば装甲が若干薄いってことぐらいじゃないか？」

「装甲が薄いってことは、でかい一撃あてれば即沈みそうなの？」

「当たればな。でもあれって作られてから一度も攻撃を食らってないみたいなんだよな。回避能力が馬鹿高いし、フレームのくせに空蝉の術も使えるし。どうやって当てりゃ良いんだ、あれ？」

「いや、それを僕が知りたいんだけどもさぁ・・・」

なんか首を傾げて凄く不思議そうな顔で僕を見る父ちゃん。そんな顔されても困る。

「罠・・・にひっかかるもんでもないし、複数で掛かっても反撃を食らうだけだろうしなぁ。抑え込むとか無理なんじゃね？　それにあれは俺しか動かせないから大丈夫だと思うって前にも言ったんだけどなぁ」

「でもきっと出てくるよ。僕は最悪な場合を考えて準備しておいたほうが、いざって時に慌てなくて済むから、考えておきたいんだよね。保険はあったほうが良いでしょ？　出てこなかったらそれはそれで、儲けものだし」

でもなぁ・・・と呟く父ちゃん。いまひとつ納得がいかないようだ。だけど、こういう愛機が立ち向かってくるっていうのはお約束だと思うんだ！

「じゃあ逃げる範囲を想定して、その範囲全てに攻撃をしかけるようにするのは駄目か？」

「使いどころが難しいんじゃないかなぁ、それ。でも、範囲攻撃っていうのはアリかなぁ。一発で沈める気でやるんじゃなくて、何十回も当てて弱らせて行く感じで」

「地道な努力をするしか無いって訳だなぁ。そうだ、高速で動くの

を逆手に取るってのはどうだ？」
「というと？」
「目に見えないぐらい細かい粒子をばらまいてさ、普通に動く分には問題ないんだけど、高速で動くと少しずつ削れていくようなそういう具合な物は作れないか？」
「そんな粒子を作る方が難しいような気がするんだけど。目に見えないって事は、風で流れそうだし、高速に動いてる時に当たると削られるって事は、高速でこられると吹き飛ばずにぶつかってくれるって事にならない？」
「そう言われると、なんか出来なさそうだよなぁ」
「んー、でもなんか良い案にも思えるんだよねぇ。・・・そうだ！　粒子っていうかナノマシンにして、間接部分に徐々にくっついていって、しまいには動きが鈍くなるって感じにしよう。で、ある信号を出すと離れるようにしておけば、僕達についたナノマシンは無効化できるって具合に」
「なるほど、動きを鈍らせさえすれば、なんとかなりそうだな。うん」

あ、父ちゃんも納得してくれたようだ。父ちゃんに相談してよかったよ。これは一人だと考え付きそうに無かったし。これで少しは「７７７」に対抗できそうだ。

対策（後書き）

閲覧数がすごく増えてびっくり。そして喜び。わーい！

調子に乗ってすいません・・・

前日。士気を高めよう

いよいよ明日、グレイトエースを攻め落とす。監視衛星からの映像を見ると、予定通り進軍しており、ハイローディス軍の士気の高さを伺わせた。ちなみに監視衛星はロケットを使って打ち上げたものじゃなくて、転移魔法でぽいっと宇宙に放り出しリモコンで良さそうな位置に誘導したものだ。まぁ何個かスペースデブリになっちゃったけどね。

今日は、一緒に突撃するパイロットの人達と作戦の最終確認を行う日だ。僕は飛行ユニットと脱出ポッドの使い方のレクチャーと、パイロット毎に調整した魔石シートの確認を行っていた。あれから使えそうな漢字を父ちゃんと考えたんだけど「速」「防」「盾」「転」「火」「射」などの文字を今回使う事にした。効果は「速」がスピードアップで今までの「早」より分かり易いぐらい速くなっている。「防」これは防御が上がる魔力フィールドが形成される新しい効果だ。「盾」これは味方を守った行動をとると、一時的に「防」を上回る効果の魔力フィールドが形成される。勿論、盾役になった場合は常時発動する。「転」はスピードアップと似ているが、機体の機動制御が早くなる物だ。くるっと反転したり、スライド移動したり、バックステップしたりといったちょんと動く動作だけが速くなる効果だ。接近戦にはかなり有効なシートだ。「火」これは火の魔法を使う時に効果が上がる。魔道系のユニットには勿論効果があり、飛行ユニットのエンジンも炎系の魔法で動いているので、推力が倍以上あがるのが確認されている。これをつけていると普段の半分の以下の力で飛ぶ事ができるのだ。「射」これは遠距離武器を使う時に、速射性と威力が跳ね上がる効果である。今のところマジックアロー限定ではあるけど。

他にも便利な漢字はあるとは思うんだけど、これ以上は手が回らないのでこれだけに絞った。とはいえ、今までに無い効果や性能がより向上しているのは間違いないのでパイロットから何も不満は無かった。

あれから、僕は機体の設定を変更した。

父ちゃんの真似をする形になったんだけど、高速機動型に組み直したのだ。本体にもブースターを取り付け細かい機動変更を可能とし、緊急加速用のＶＭＡＸを搭載しとんでもない加速を実現している。１０秒ぐらいだけどね。それ以上は僕が耐えられないし。あとは、戦闘をサポートしてくれるＡＩも作りたかったんだけど、これは案が煮詰まってないのと今の案のままだとサイズが大きくなりすぎるので、組み直した機体のコックピットに取り付けるスペースが無かったのだ。それになんでか結構重いのができちゃったから、改良しないとね、今度。

ここまで色々強化はしているけども、やっぱり不安はある。

今回、僕のわがままを通してくれた父ちゃん。この戦争で誰も死なす事をしないと厳命してくれたのだ。やっぱり王様ってだけでなく、善政をしいてきたおかげなんだろう。凄く信頼されているのが分かる。

明日の作戦の概要はこうだ。

まずは大規模転移魔法で、グレイトエース近郊へ衛星で安全を確認してから転移をする。その後、空から王宮へ侵入し入り口を確保。兵員輸送コンテナを王宮のテラスに横付けにし、内部へ侵入。父ちゃんを先頭にセキュリティを突破していき、執務室にいるはずのフ

ァウンデルス卿を確保。確保してから城に対して武装解除を要求する。

問題はセキュリティの突破になるけど、駄目なら人海戦術でぶっこわして行くしかない。その為に人数を引き連れていくのだ。あと、対人戦闘の際に殺してしまわないように無力化する為の武器も多数渡す予定である。

あとセリナ達には、アバターシステムで支援して貰う事にした。フレームに人形を乗っけて、リモコンで操作し突入の際にシステムで突入。人形との通信はフレームを介して行うようにする。電波が届かなくなる事は無いとは思うけど念には念を入れておく。他にも色々準備をしておこう。

「みんな、聞いてくれ」

明日の準備をしていると父ちゃんが、みんなに向かって話を始めた。

「明日、謀反を起こしたファウンデルス卿を討つ。奴は、俺がロバスの古代遺跡で復活した魔王に操られて正気を失っているので救い出すという名目で、わざわざ勇者を担ぎ出してまで大義名分を作ってきた。まぁ、実際は俺が言ったとおりこれは奴の謀反だ。今回の謀反はいきなり国の仕組みを変えるのはまずいと思って貴族達を野放しにしていた俺のせいでもある」

そこで言葉を区切り、みんなの顔を見渡す父ちゃん。

「だが、今回この謀反のおかげで貴族どもの真意がよく分かった。やっぱり相容れない存在と言うのはあるということだ。周りから見れば、俺と貴族には圧倒的な兵力差があり、確実に俺が負けるよう

な状況だ」

現在の状況を冷静に伝える父ちゃん。兵力差は圧倒的だもんね確かに。

「そんな事はありません。ユージ陛下は今までどんな敵でも破ってきたではないですか。ロバスの民はあの大襲来を忘れてはいません」

「そうです。たとえ普通なら負けるような戦でも陛下なら、なんとかすると皆信じています」

父ちゃんの負けると言う言葉に、すぐ反論をする人達。そうだそうだ負けるもんか！　と一斉にみんなが賛同した。

それを片手を挙げ制する父ちゃん。かっこいいねぇ。

「ありがとう。そして、今回も皆の言うとおり俺は勝つつもりでいる。いま続々と貴族どもがグレイトエースに集結しつつあるが、集まる前に全てを終わらせる。そして「７７７」さえ取り戻せば、あとは集まって来た貴族どもを順番に片付けるだけだ」

そう自信たっぷりに言う父ちゃん。どんだけ強いんだ？「７７７」って。

「だが、明日の突入は非常に危険を伴う戦いだ。しかし、成功させなければ始まらない！
諸君、俺に命を預けてくれるか？」

力の篭った目でみんなを一人ずつ見ていく父ちゃん。だけど、返事をするまでもなくみんなの気持ちは伝わったようだ。

「よし、俺が皆の命を預かった！　任せておけ、誰も死なせる事はない！　絶対にだ！」

わぁあああああ！　と歓声が沸きあがった。

いよいよ明日、グレイトエースを攻め落とす。

前日。士気を高めよう（後書き）

少し少なめ。
活動報告にヒロコ、セリナ、ミミ、ガイアフレームのイメージ図を描いたみてみんのＵＲＬを載せました。よかったら見てやってください。
でも、イメージ崩れたらごめんなさい！

反撃開始

王が不在になったグレイトエースは、不穏な静けさに満ちていた。
数日前までハイローディスの軍隊が町の中を我が物顔でうろつきまわっていたが、ハイローディス軍が進軍していった今は、駐留軍が町の至る所で見かけられるようになった。

「だけど、王様が魔王に操られてるって本当かねぇ？」
「それは良く分からないけど、今王様が不在なのは確かだからなぁ。ウワサが嘘でも本当でも、最近いやな雰囲気が漂っているからなぁ」

町の中では、王が魔王に操られているというウワサとそれを討伐する為の勇者の話で持ちきりであった。少し前から勇者が首都に来て、町の治安を守るために色々と厄介な事を片付けてくれていたので、町の人の勇者に対する態度は非常に友好的になっていた。

「勇者達は魔王を倒すために来てくれたのに、町の中で起きてる事もほっとけないとか言って、助けてくれるなんてほんと良い連中だよなぁ」
「そうだねぇ。お隣さんもこないだ助けて貰ったらしいよ。町に来たばっかりだって言うのに、忙しく動いてくれてるみたいだねぇ。倒れちまわないか心配だよ」

勇者達一行は、グレイトエースに来て日が浅いにも拘わらず、朝から晩まで精力的に働いているらしく町の中でその姿を知らないものは居ないようだ。

そして、ハイローディスの軍勢がグレイトエースを出て三日目の夜。
勇者達一行が明日王様を救出する為にグレイトエースを出発すると

いう事で、町の人々が勇者のために宴会を開いていた。

「はいリュートどうぞ。これ好物だったよね」
「あ、ありがとうティナ」
「あ、こっちも食べて下さいリュート」
「これもできたてでおいしそうですよ、リュート」
「レイシスもアルミナもありがとう。ちゃんと頂くね」

リュートの言葉に顔を赤らめるレイシスとアルミナと呼ばれた少女たち。リュートの世話を甲斐甲斐しく嬉しそうにしている。そして、そんな少女達の様子をティナと呼ばれた少女はそれを満足げに眺めていた。

“ふふっ、頑張った甲斐あってリュートの人気はうなぎのぼりね。この二人もリュートに心酔しているしね。この間もらった武器のおかげでリュートもおかしなぐらい強くなったから、きっと大丈夫でしょう”

請け負った任務の達成のためには、どうしても強くなる必要があり古代遺跡に潜り、鍛えていたのだが、リュートがたまたま貰った武器のおかげでデタラメなぐらい強くなり予定よりだいぶ早くこちらに戻ってきたのだった。

“そういえば、あの時の男の子。あの武器をどこで手に入れたのかしら？　ひょっとしたら他にも何か良い物を持ってたかもしれないわね・・・”

ロバスの町で再会した時は、丁度入りたかったお店で並んでたので変わってもらっただけで、しっかりと話をする事もなかったのが悔やまれる。

「ま、今のリュートなら平気でしょうけどね・・・」
「ん？　呼んだ？」
「んーん。なんでもないよ、リュート。楽しんでる？」
「うん、おいしい物がたくさんあって、嬉しいよ」

とにっこりとするリュート。この表情に皆だまされるんだなぁとぼんやりと頭の隅で考える。リュートの性格をよく知っているだけあって、つい笑みがこぼれてしまう。中身とは全く違う善人を装っているのは、ほとほと感心してしまう。

「良かったわね、リュート。ちょっと外の空気に当たってくる」

そして、自分の演技にも吹き出しそうになる衝動を堪えながら演じきるのであった。少し疲れてきたので、外の空気に当たって涼むために宴会場を突っ切って、庭に一人で出ていった。盛り上がってきた宴会場は、人いきれで暑くなってきたので外の少し肌寒いぐらいの気温が心地よく感じられる。丁度おいてあったベンチに腰掛けてくつろいでいる時にそれはきた。

ゴォオォオオオオオオオオオオオオオオオオォォオオォッォォォォッ・・・・・・

「な、なに！？　魔石獣？！」

轟音を響かせ、次々と何かが空を凄い速さで通り過ぎていった。空を飛ぶような魔石獣はこの辺りには居ないはずだが、こんな変な音を出す物は魔石獣ぐらいしか知らない。

「リュートッ！」

何か異変が起きている事だけは分かったので、急いでリュートを呼びに宴会場へ飛び込んだ。

大規模転送が終了し、一気にグレイトエースへと向かう。夜間であれば発見が遅れるし万が一にも飛行タイプの魔石獣が出る事もない。この周辺には飛行タイプの魔石獣が出ないという事だが、念には念をいれて行動することにした。

「ユージ陛下、このまま作戦通りお願いします。僕は王宮周辺を制圧してきます」

「了解、光司君。エース級がいるから無茶はする必要はないぞ。しっかりやれ」

「了解！　では御武運を！」

僕の言葉に翼を振って応える父ちゃん。父ちゃんのフレームも王宮に着くまでは飛行ユニットを付けているけど、王宮に着けばパージして動くと言っていた。僕は他のロバスのエース達と一緒に、王宮周辺を制圧する。

「光司。おまえはエディと一緒に南側を頼む。俺は東の正門側を制圧する」

「了解です、アラン隊長。行って来ます」

正門側にはフレーム格納庫がある為、隊長を任されているアラン隊長が数機を引き連れて正門方面に向かっていった。強襲して格納庫

を即座に制圧する為だ。僕はエディさんと一緒に南門に向かう。南側がたった2機しか向かわないのは、僕の機体は武装が対集団専用に、ミサイルを多数積載しているのと、エディさんがロバスで1，2位を争う程の腕前を持つので南門は2機で充分対応できるためだ。

エディさんの機体は四足歩行の獣タイプで、空を飛んでるにも拘わらず何故か四肢を走らせるように動かしている。いわく。

「こっちのほうが、なんとなくそれっぽくない？」

だそうだ。なんだか勝負に於いて勝ち負けだけではなく、美しい戦いを求めてるちょっとこだわりを持つライダーなのだ。

王宮の南側へ回るとガイアフレームが４機、こちらを警戒している。やっぱり腐っても王宮だ。どんな時でもフレームが常駐しているのだ。だけど、４機じゃ少ない。４機をまとめてロックオンし、黙って先制攻撃をする。向こうはまだマジックアローの射程圏外である。

ドドドドドド！

肩と脚部のミサイルポッドから十数発のミサイルが一斉に、４機のフレームへ襲い掛かる。もちろん弾頭は反転弾だから安心だ。エディさんは、僕の攻撃が当たる事を前提で急降下し低空から突撃している。

反転弾を食らった４機のフレームは、一斉に挙動不審になりまともに動く事ができない。その隙だらけのフレームをエディさんは、フレームの口に咥えた剣でフレームの四肢を切断し、４機のフレームを一瞬で無効化してくれた。

「コージちゃん、やるならやるってせめて一言言ってくれてもいいんじゃない？」
「エディさんなら、僕がミサイル撃った瞬間に動くって分かってましたから」
「おーおー、随分信頼されてるねぇ。ま、その通りだけどね」
とりあえず今のところ順調に事が運んでいる。このまま何事もなく進む事を祈ろう。

反撃開始（後書き）

読んでくださる方が急に増えて、とても嬉しいです。ひゃっほぉい！

機体のイラストは、ちょこちょこ増やしていきます。興味のある方はページの一番下にあるリンクの「作者マイページ」をクリックして頂いて、活動報告からご覧になってみてください。

作者名とユーザー名を統一していないとこんな罠があったとは。すみません

リミット１０分

グレイトエース王宮、ファウンデルス卿が居ると思われる執務室に一番近いバルコニーに次々と横付けするフレーム。その手にはコンテナがあり、続々と兵士が王宮へと侵入を果たしていた。その中にはセリナとミミの姿もあった。

四機、五機と続々とフレームが横付けされ、その度に兵士が侵入していく。そして、全てのコンテナから兵士を送り出すと、付近を旋回し警戒行動に移った。ただ一機、勇司の操るフレームはバルコニーに取り付いたまま、放置されていた。

「デニー小隊はこの先の通路で待機。レニー小隊は反対側を頼む。この通路を死守してくれ。いざとなればバルコニーまで戻ってフレームの援護を受けてくれ。だが、１０分は最低でも敵を足止めしてくれ。わかったな？」

「「了解です、陛下」」

デニーとレニーは双子の姉妹で共感覚を持ち、こういったコンビネーションが必要な際の任務には、必ずと言って良いほど任される二人なのだ。

「よし行くぞ！　付いて来い！」

「「はいっ」」

気合を入れて勇司は兵を引き連れて、執務室を目指して駆け出した。

南門を警戒している僕たちは、時折向かってくる魔術師たちを麻痺レベルの電撃と睡眠ガスで迎撃し、迂闊に近寄れないように抑え込んでいた。さすがはグレイトエースで、生身でフレームに向かってくる魔術師の数が半端ない。ヒューイックの町で経験していなければ、きっとてこずっていたであろう。いつ向こうの援軍のフレームが来るか分からない今はフレームを降りて戦うわけには行かないからだ。

「エディさん、どうですか。これだと無闇に傷つけないでしょ？」
「そだな。一応これの効果は見たんだが実際に使うと、非常に便利だな」

あとは反転フィールドを設置しておき、そこへ誘い込むように誘導すれば勝手にあらぬ方向へ向くのでそこへ攻撃をすれば不意打ちを狙えるので、麻痺や眠りに対して抵抗される事が少なくなる。便利な道具は使わないと勿体無いよね。せっかく作ったんだし。
僕達は南門を守備しているんだけど、ここから確認する限り他の門に比べここはフレームの数が少ないからか、かなり戦闘が頻繁に行われている。ある意味それは狙い通りなので僕の作戦案に間違いは無いと確信できる出来事だった。そして、埒があかないとなると次は強引にこじあけにくるはず。

「！」

悪寒が走り、反射的に前転し今の位置から全力で回避する。

ゴガッ！

「スリーセブン！　きやがったか！」

エディさんも、すでに臨戦態勢をとっており今しがた突撃してきた機体を牽制するように、低い体勢で威嚇している。突撃して来た機体は全身が光沢を放つ青く輝く素材で作られており、ブルーパールとでも言うような青くきらきらと綺麗な輝きを見せ、そこに居た。

馬鹿みたいに目立つその機体は、武器は持っておらず拳の部分にナックルガードがついているだけだ。つと静かな動きでこちらへと突撃してくる「７７７」。その速さは模擬戦の時の父ちゃんの動きを超えていた。だが、こちらも今回は機動性を重視した軽量二脚機体の上、ブースターを多数追加しているのでなんなく反応し、突撃を回避する事ができた。

「やってやる！」

至近距離でもおかまいなしに、反転弾を撃ち込む。

初めて見る武器に危機感を感じたのか、大きく空を駆け上がり反転弾の全てをかわしていく「７７７」おかしな話だが、僕はそれを当然だと思っていた。この程度で傷がつくはずがないと。

「エディさん、いきますよ！」
「オーケー！　派手にぶちかませ！」

ミサイルポッドに音波弾をセット。指向性を持たせられるそれを「７７７」へ放つ！
先程と同じように回避しようとする「７７７」だが、音波弾は有線付きなので軌道変更をこちらでできる！　弾頭の前方に向かって強烈な音波を放つそれを「７７７」に解き放つ！

ゴッ！

下方から上方へと向け解き放たれた音波は「７７７」の機体をわずかながら浮かせるほどの威力を見せた。そこへエディさんがマジックアローを連射しながら、突撃をする。

一瞬の躊躇をみせたものの、エディさんが組し易しと見たのかそちらへ突撃する事で、回避と共に距離を取り体勢を立て直そうとする。

だが、そこは僕が見逃さない。

ＶＭＡＸを発動させ急上昇し、頭を抑えて空中コンボを発動させる。とにかく冷静になる隙を一瞬たりとも与える訳には行かない。連撃を続けていくがすればするほど、簡単にかわすようになり、しまいにはカウンターを入れられてしまう。そこへ入れ替わるようにエディさんが斬りかかる。少しかすったようにも見えたけど、まだまだ余裕で回避できる攻撃だったようだ。さすがに向こうのパイロットは四足型との戦闘も経験があるのか、爪や尻尾に肩に取り付けられたマジックアローもなんなく回避してしまう。

駄目だ、エディさんは空中機動の経験が浅いせいか地上ほどの動きの切れがない。ここは音波弾の出番か。

バシュッ！

「７７７」に向かって音波弾が飛んでいく。それに気付いた「７７７」はミサイルに瞬時に近づき真横からミサイルをぶっ叩いた！

ゴォオオオォオオン！

何を考えてそんな所を叩いたのか知らないが、そんな事をすれば全

方位に音波が響くだけで至近距離にいた「７７７」が一番ダメージを被る。こちらにとってはオウンゴールで儲けた気分だ。エディさんもそう思ったんだろう、すかさず「７７７」に回転しながら突撃する。剣を咥えながらマジックアローを連射し、さらにはシッポまで突き出して突撃するという避けそこなうとえらい目に遭う攻撃だ。

だが「７７７」は、マジックアローを最低限の動きで全て回避し、後ろ回し蹴りの要領で鼻面を蹴りつけた。だけど、蹴りつけられたかに見えたエディさんは後ろ足をひねって、横回転から縦回転に切り替えシッポで斬りかかる技を見せてくれた！さすがにその攻撃は想定外だったようで、シッポは見事に胴体に叩きつけられ吹っ飛んでいく「７７７」それがこの攻防で初めてのクリーンヒットだった。

「この調子でどんどん行きましょうエディさん！」
「コージちゃんも強い敵が好きだねぇ？　生き生きとしてきたよ？」
「エディさん程じゃないですよ！　行きます！」
「おう！」

そして、「７７７」と僕達の攻防が再開された。

苦戦

「ようし、止まれ」

王宮の一角。執務室のフロアへと繋がる通路に勇司たち一行はたどり着いていた。ここに来るまで王宮を警護する兵達を気絶させ、その見張りの為の兵を少数残してきているので少々人数は減っている。

そして今執務室へ繋がる通路の罠を確認している所である。

「この先は特殊なコインを持つものしか、通る事ができない。無理に通ろうとすれば、この通路が無限回廊と化し出る事ができなくなる」

「ではどうされます？　魔法で通路の仕組みごと破壊するとかは無理でしょうか？」

「無理だろうな。だけど、心配するな。コインはここに一枚だけある」

「・・・一枚ですか・・・」

「そうだ。そこでだ・・・」

にやりと笑う勇司。今入る兵士はおよそ２０人弱。だがコインは一枚。これでは、せっかくの数のアドバンテージがこのままでは失われてしまう。だが、勇司はコインを持ったまま通路を進んで行ってしまった。

「陛下！　一人では危険です！　戻ってきてください！」

「はっはぁ。大丈夫大丈夫。一人でいきゃしないよ」

と言いつつも、一人で通路を渡りきってしまう勇司。

「セリナちゃん！　パス！」

通路の向こう側で勇司がそう声を掛け、セリナに向かってコインを投げた。アンダースローで投げたそれは、セリナの手元にすぽっと収まった。

「へ？」

さすがは設計に携わったという勇司は、セキュリティの穴を把握していたようだった。勇司が危険を侵してまで王宮に攻めに入ったのは、こういったセキュリティホールを熟知している為である。

「よーし、やっぱりだ。この要領で全員ここを通るぞ！　とりあえず全員を待つ時間は無い！　最初に決めた人数がこっちに渡り次第、急いで行くぞ」

「はい、わかりました」

五分経過。あまり時間をかける余裕はなさそうだった。

青く輝く機体は、獣型の機体と細身の機体を相手取り互角どころか、むしろ押していた。一度攻撃を喰らった「７７７」は、油断していた自分を戒めるように、特殊能力を生かした機動で、光司とエディを翻弄していた。しかも光司達が動きに慣れてきた頃にさらに加速を加えていき、「７７７」の速度はどんどん追いつけない領域へと突き進みつつあった。

「エディさん、もう少し粘ってください。あと少しできっと効果がでるはずです！」
「わかっちゃいるが、これきっついぞ？　援軍は期待できんか？」
「む・・・りですね！　抵抗が本格的になる頃のはずです。どこも手一杯ですよ！」

二機がかりで「７７７」に攻撃を仕掛けるが、パターンを読まれ直ぐに対応されてしまう。エディが空中戦がわずかながら苦手と知るや、一度も地上へ降りる事はなく、光司の武器のほとんどが遠距離武器で占めているのを見て、光司への機体へは接近戦を常に仕掛けてくる。そんな光司をサポートしようと、近寄ってきたエディの機体を光司にぶつけてしまうぐらい「７７７」には余裕があった。

「ははは！　ちくしょう楽しいねぇ！　陛下が乗ってないってのに、やっぱりでたらめな強さだよ「７７７」は！」

一度、勇司が乗った「７７７」と手合わせをした事があるのだろう。エディはそう叫ぶ。もともと目指していたものはそこだったのだろう。だからこそエディは、今回「７７７」とぶち当たる可能性が高いこの門の担当を志願したのである。

だが、エディが実感したのは「７７７」と勇司の腕の凄さだ。

「もっともっと凄かったぜ！！！　本気だせよ「７７７」！！！」

そう叫ぶや否や、飛行ユニットをつけているにも拘わらず、前転をすごい回転で行い「７７７」に向かって突撃する。そんな突撃など無意味とでも言わんばかりに「７７７」は、エディに向かって右手でパンチを放つ。

だが、パンチに当たる寸前に軌道を下方へと修正するエディ。うまく不意をつけたらしく足元に突撃される「７７７」　そしてそこからエディの連撃が始まった。

「うぉおおおおお！」

「７７７」が強力な磁力を発してるかのごとく、エディの機体はぶち当たってはその勢いで遠ざかり、また引き寄せられるようにぶち当たる。さすがにこの攻撃に対しては光司もサポートをすることができない。軌道が読めそうでまったく読めないからだ。

「これで大人しくなるか・・・？」

と期待したのも束の間。エディの機体が動きを止めた。いや、「７７７」の右腕に首根っこをしっかりと掴まれていた。そして、目にも止まらない速さで地面に叩きつけられた。

「がはっ！？」

「エディさん！」

叩きつけられたエディを助けるべく、無茶は承知で突っ込む光司。だがそれはやはり無茶であり、「７７７」は光司に向かって冷静に手刀を叩き付けた。

ガキュッ！

「うわっ！？　しまった！」

エディを助ける為に冷静さを欠いた光司はもろに手刀を食らってしまった。しかも、コックピットブロックへの直撃となり、コックピ

ット前面の装甲が吹き飛び、さらにコックピット内部の正面部分も吹き飛んでしまう。

ガンガランガラン・・・

ハッチが転がる音が響く中、体勢を崩しながらエディを拾い上げ間合いを取る光司。ハッチが吹き飛び、正直かなり怖い。

「っく・・・まさか、ここまで何も影響でないとかおかしいよルーツは・・・」

光司は正面に見える「７７７」を見やりつつ、軽口を叩いているつもりでいるが、声が震え体が震えているので、恐怖を無理やり抑え付けているのを隠しようが無かった。エディは、脱出ポッドを使う間もなく叩き付けられており、どんな状態か分からない。さらに援軍を求めようにも、すでにどこも乱戦状態であり「７７７」を食い止めるのは光司しかできない。

“せめて、ナノマシンの効果が出てくれれば・・・”

先程から散布しているナノマシン。間接部分に入り込み動きを鈍らせ、攻撃を回避させづらくさせる為の布石だったが、まだ生きてこない。計算ではそろそろ効いてきてもおかしくないのである。

「やぶれかぶれや、一か八かは絶対駄目だしね」

勇司と約束した。自分の命を賭け金にして戦う事はしないと。

「考えろ、考えるんだ・・・」

必死の形相で思考する光司。しかし、光司は気付いていなかった。
「777」の動きが止まっている事を・・・

苦戦（後書き）

光司くんの読みがまだ甘かったようです。ピンチ！

お気に入り登録が毎日増えてて、嬉しいです。小躍りしてます。

更新遅くてすみませんでした！

はぁっはあっはっ・・・はぁっはぁっ・・・

自分の呼吸する音がやけに耳につく。目の前には青く輝く機体「７７」が静かに佇む。エディさんは、気絶して動けない。僕だけ離脱すればエディさんは即座に撃破され、その後に僕も同じ道を辿るだろう。かといって、このまま戦うには分が悪すぎる。

・・・？　おかしい。さっきの攻撃から「７７」がまったく動いていない・・・？両手を自然に下げた形で、まっすぐ立ったままこちらを見ている。ナノマシンが効いてるなら確かに動けなくはなるけど、不自然だ。でも、このままにらめっこしていても始まらない。

スッ

「７７」が黙って腕を水平に上げ、王宮とは反対の方向を指差すようにゆっくりとそちらへ腕をむける。まるで逃げるなら追わないとでも言うように。僕達では止める事などできはしまいと高をくくっているように。

「そこまで挑発されて、僕だって黙ってられない！」

こうなったら、反転弾を捕捉してからぶちかましてやる。至近距離で撃てばこちらも効果範囲に入るが問題ない。いや問題はあるが、こっちは反転弾の効果を知っているから向こうより早く立ち直る事ができるはずだ。

エディさんの機体から手を離し、ＶＭＡＸ発動。手を広げ目前の「

７７７」へと迫る。悔しいかなすでにＶＭＡＸを見ている「７７７」は、優雅な動きですでに回避行動をとりつつある。だが、とりあえず手が届けばそれでいい！「７７７」が回避したせいで、真横を通り過ぎようとした瞬間に、地面を蹴り付け無理やり軌道変更する。狙い通り「７７７」に不恰好なラリアットをぶちかます格好になり、そのまま振りぬかずにしっかりホールドする。コックピット正面に迫る「７７７」の機体。モニター越しから見る場合と違い、目視で見るのは非常にどきどきする。正直、めちゃくちゃ怖い。

「だけど、今こそ勝機！」

至近距離で捕捉したまま、反転弾を放つ！「７７７」と僕の機体は反転弾の効果をもろに浴びる。その途端、ロックしていた腕が急にはずれ気を付けの体勢になる。そして向こうは向こうで、えびぞりしている・・・　なんでえびぞり・・・？

だけど悩んでいる暇はない。直ぐにでも反転効果を調べ向こうより早く立ち直らなければ。

がちゃがちゃとコントローラーを操作し、どう反転しているかを調べる。このとき大きく動かしては駄目で、一つずつ丁寧に細かくちょんちょんと動かさないと、転倒してしまう危険がある。慌てると結局時間がかかるのだ。

「７７７」を見ると、やはり反転弾の効果に動揺しているようで、傍目で見ても無茶な機動を繰り返している。いまのうちに癖を掴みきろう。大丈夫！　僕ならあっちより早く把握できる。ゲーマーなめんな！

だけど、僕が操作を把握すると同時に向こうの動きも止まった。まさか、向こうも把握した・・・？　いや違う！　動こうとしている

けど、じょじょに動きが止まりつつある。ナノマシンがようやく効果を発揮してくれたんだ！　これで「７７７」を抑え込める！

ピタリ

そんな擬音が聞こえてきそうなぐらい、完全に動きを止める「７７７」　その状態を見てほっとする僕。だけど、このせいで逆にピンチになるとは僕も思ってもいなかった。

ダンッ！

気をつけに近い形で止まっていた「７７７」だが、その体勢のままこちらへ向かってきた。完全に不意をつかれた形になった僕はもろに体当たりを食らい吹き飛ばされる。なんであの体勢からあんな機動ができる！？

倒れかける機体をなんとか踏みとどらせ、こうなった原因を考える。「７７７」はナノマシンが効いて動けなかったはずなのに、何故？　などと考えている時間を「７７７」は与える気はないようで、不自然な姿のまま空を駆け回り、こちらへ攻撃をしかけてくる。まるで見えない誰かに操られている長槍のように、僕に襲い掛かってくる。

不自然な格好のまま動くということはナノマシンは効いているはずだ。だけど、空を駆け上がり僕に向かってくる。と言う事は、あの空を駆け上る特殊能力のおかげで、動き回れるって事？　しかも反転弾の効果もナノマシンの効果で封じられてるから、特殊能力を発動するための操作を見つけるのが早くなったってこと？　そんなのあり？

・・・まずい、まさかこんな事になるとは。反転弾の作用として、一定の時間が経過するとまた操作パターンが変更される。操作に慣れた頃にパターンを変えてさらに混乱に陥れる為だ。だけど、この状況は操作パターンが変われば向こうが操作変更パターンを見つけるのが絶対早い。レバガチャであっても機体を動かすことなく特殊能力の操作を見つける事ができるからだ。やばい、これさっきより余計に状況がやばくなってるって！　くっそぉ、どうしようこれ！？

勇司は急いでいた。ファウンデルス卿の身柄を一刻も早く拘束し、王国の兵士達に自分の無事を知らせなければ、自分について来てくれた強襲部隊がいずれ討たれてしまう。離間工作を行っているとはいえ今はファウンデルス卿の偽情報のせいで、王国の兵士達はファウンデルス卿の言いなりなのだ。

どがんっ！

執務室のドアを蹴りあけ、中へ転がりながら突入する勇司。その勇司をサポートするようにミミが脇を固める。だが、中にいた人物はそんな騒々しい客人に驚いた様子もみせずに椅子に座っていた。

「ユージン陛下いけませんな。ドアはノックして開ける物で蹴破るものではありませんよ」

わざとらしく、ため息をつきながらファウンデルス卿は勇司をたしなめる。その態度をみるかぎりまさかこの男がクーデターの首謀者とは誰も思わないだろう。

「ぬかせ、とりあえず身柄を拘束させて貰うぞ。ラディアス。これで終わりだ」

そういって剣を突きつけようとした瞬間、ミミが勇司の前に飛び出し不意に現れた少年の剣を受け止めた。そして、力で対抗せずに相手の力を誘導し剣を使って少年を投げ飛ばす。

「あれっ、すごいね。こんな簡単に防がれるとは思わなかったよ」

くるっと何事も無かったかのように着地し、にこっと誰もが見惚れるような笑顔でそうつぶやく少年。勇者リュート。片手に「ギル」を持ち、油断無く構えている。そしてその脇には、勇者メンバーが静かに配置についている。

「勇者リュートよ。ユージン陛下は魔王の手下に操られている。助けられるなら助けて頂きたい。このままではこの国は滅ぶ」

「まだそんな戯言をほざくか、ラディアス！　おまえ正気か?!」

「どうやら、深く操られているか魔物が寄生しているかもしれん。いざというときは、勇者リュートよ、わかっているな?」

と冷ややかな目をしてリュートにそう伝える。それに対し、分かってると言わんばかりに弾ける笑顔で答えるリュート。

「魔物は退治しないとね。勇者の名のもとにっ！」

「俺はあやつられてねぇ！」

ガキッ！

剣が交差し力比べになる。だが、勇司はあっさりと引き後方に思い切り飛びさる。それと入れ替わるようにミミがリュートに向かい、

手数で圧倒する。さすがのリュートもミミの手数には辟易したのか間合いを取る。

「きみ、厄介だね。死んでよ」

だらりと「ギル」をぶら下げて、ミミへゆっくりと歩くリュート。

っ！

それは単純に勘だった。目には攻撃を仕掛けるサインは浮かんでいなかったが、悪寒を感じたミミは床にはりつくかのように、身体を沈ませる。

ダンッ！

ミミの髪の毛が数本はらりと落ち、気が付けばいつの間にかリュートが突きの格好をしていた。もし、ミミが即座に身を沈ませて居なければ、今頃剣の串刺しになっていただろう。しかも驚くべきことに、この攻撃はミミの目に何も映らなかったのだ。

「あれっ？　これも避けちゃうの？　・・・やだなぁ、ほんと厄介だねきみ」

そう呟くリュートの顔は、感情を何も表していなかった。

幸運と不運と勇者と（後書き）

お気に入り登録が１００件超えましたっありがとうございます！

ですが、今日の夜の更新は遅くなりそうです。

まさかの光司くんのピンチ。おかしいなぁ、こんなピンチになるはずじゃ無かったのに、どうしてこうなった？

再会

タイムリミットは刻一刻と迫ってきていた。操作変更のタイミングは僕でも分からない。完全にランダムなのだ。相も変わらず気をつけみたいな姿勢で、攻撃をしてくる「777」いまの状態だからなんとか凌げているが、操作変更された途端に撃墜されるのは間違いないだろう。

脱出しようにもエディさんを残していけない。エディさんの意識があったならきっと置いていけって言うんだろうけど、きっとそんな事できない。何かいい方法が無いか考えるが、こんなときに限って何も思い浮かばない。正直、コックピットが吹きさらしの状態で冷静に考えろとか無理。必死になって「777」の動きを見て防ぐので精一杯だ。

そうやって必死に「777」の攻撃を回避しようとしている時、それがやってきた。意図せずにがくんと、機体が左に傾いたのだ。

操作変更の時間が来てしまった！

そして、左に傾いた機体に合わせる様に「777」の手刀がコックピットへと向かってくる。向こうも操作変更があったはずだが、たまたま僕を攻撃するような操作の配置になったんだろう。ゆっくりとこちらへ向かって手刀が近づいてくるのが分かる。

ガッ！

手刀は僕の機体に命中した。幸いにも僕への直撃は避けられたんだけど、手刀は僕のすぐ脇を通過しシートを吹き飛ばしさらに奥へと

いったようだ？

手刀が突き刺さった衝撃で吹き飛ばされた僕には、もう良くわからなかった。

風景が流れる。なにか部品が僕と一緒に舞い上がっている。こんな高さから落ちたらきっと死んでしまう。あぁ、空を飛べば良いから死にはしないか。魔法を詠唱する。いや、詠唱できない。吹き飛ばされたショックで声がうまく出ない、さらには魔力も回らない。できるのは考える事だけ。普通こういうタイミングだと力に目覚めたりするのになぁ。・・・だめだ、考えもうまくまとまらない。これもふきとばされたせいか・・・　ぼくはここでおわるのか・・・？

“我を呼べっ！！！主よ！”

ずきんと頭に突き刺さるように声が響く。だれ？

“早くせぬか、我を、我を呼べ！主よ！”

なんでそんなに慌ててるのかな？　もうすこし落ち着きなよ。

「ホワイトファング」

僕はそう呟いて、白い光に包まれた。

辺りを白い光が照らし出し、光が収まったかと思ったら僕はコックピットにいた。あれっ？さっき、ぽーんと放り出されたよね、僕。

「まだ正気を取り戻しとらんかえ、主よ」

久しぶりに聞くその声。

「なんで僕、ホワイトファングに乗ってるわけ？」

ピンチになるまで呼ぶなって言ってたし、どっかに隠れてるって言ってたよね？

「主は本当に融通が効かなくて困る。ピンチになっても呼んでくれりゃせんのだからの」

おかげで危うく主を失うとこじゃったわい、と少しすねた口調で僕を責めるホワイトファング。

「え、だって、そのっ」

「とりあえず、話はあとじゃ。３桁が向かってくるぞぃ」

「あ、そうだ。あいつ厄介なんだよ、どうしよう？」

「そんな気弱な事でどうする、主よ」

急に現れたホワイトファングを敵と認定した「７７７」は操作に慣れてきたのか、先程よりトリッキーな動きで攻撃してくる。スピードに乗った攻撃は一瞬たりとも止まらない。

だけど、ホワイトファングは手にバリアを発生させながら、相手の攻撃を軽々といなしていく。って僕が操作してるんだけどバリアなんて出せるって知らなかったぞ？！

「これが都合良さそうなんで、出しといたぞ主」

「そんなのあるなら教えてくれよ、ホワイトファング」

「いやじゃ。良い女には秘密があるもんじゃ」

「フレームに性別もクソもないでしょ？！」

「そんなこと言うと、ご奉仕してやらんぞ？」

ご奉仕ってなにさ。でっかい機体（からだ）を活かしておっきな家でも建ててくれるの？

「奉仕はいいから、あれ倒すの手伝ってよ！」

とりあえず家は要らない。そして、「７７７」の攻撃はいまだに止まらない。

「ふん、無粋な奴じゃ。主、ケージを出すぞ」

「任せた！　って駄目だ、それって相手をぶっこわす奴だと出しちゃ駄目だよ？」

ホワイトファングが居てくれるおかげで、落ち着いてきた。戦闘中なのにこんな掛け合いができる程に。今まで全く勝てる気がしなかったけど、今は逆にどうやっても負ける気がしない。

「たぶん、大丈夫じゃ。安心せい、手加減してやるからの」

「オーケー！　じゃあ行こう！」

「うむ」

そう言うとケージの使い方が頭に流れ込んでくる。その名のとおり、閉じ込めるための檻のようだった。本当はそこから色々派生した攻撃を加えるようだけど、今回はとりあえず閉じ込めるだけで良い。

ポッと「７７７」に貼り付く白い光。それと同時に「７７７」の機体の上下左右に白い壁が現れる。危険を察知し、動き回るがそんな「７７７」をあざ笑うかのように白い壁は一定の距離を保ったまま追随している。そしてじわじわと間合いを詰めて行き、白い箱が完成した。「７７７」は脱出しようとしているが、その攻撃のことご

とくが壁によって弾かれている。

「本来はここから、ケージを圧縮してやるか、派手にまっぷたつにするんじゃがの。してみぬか？」

「物騒な事言わないでよ？！　とりあえず動けなくするだけで問題ないんだってば」

「つれない主じゃのぉ・・・」

心底つまらなさそうに言うホワイトファング。破壊衝動は相変わらずのようだ。あれだけ苦戦した「７７７」をあっさり取り押さえてしまったホワイトファング。シリアルナンバー的にはこちらが５桁で向こうが３桁と強さに非常に差があるはずなのだが、まったく意に介さなかった。あまりの呆気無さにいまいち思考が追いつかなかった光司だが、とりあえず「７７７」の封じ込めに成功したおかげで、余裕ができた。あとは他の門に対して援護射撃ができないかと考えた。

「ホワイトファング。そこに転がってるフレームの背中についてる飛行ユニットって分かる？」

「ふむ、それがどうした」

「いまこのグレイトエースの中にこの飛行ユニットを装備しているフレームが居るんだけど、分かるかな？」

「しばしまたれよ。町の中全てとはいかんが、多少は分かるぞ」

その言葉に光司は眼を光らせた。

「ということは、飛行ユニットを付けてるフレームを特定できるって事だね。ちょっと待ってね・・・これでよしと。衛星とリンクできるようにしたから、これでかなりの範囲を探査できるようになったと思うんだけど、どう？」

「衛星・・・ほぉほぉ。空の上から覗けるのだな。便利なもんじゃの、これなら簡単に識別できるの」

ホワイトファングは衛星の性能に満足してるようで、嬉しそうにいろいろ試しているようだった。

「で、その飛行ユニットを付けていないフレームに攻撃をしたいんだ。全部に」

「ほほほ。それは剛毅な事じゃな、わらわにうってつけじゃ！」

ホワイトファングの喜びようは、全部とか、一面とか、無差別とかそういった言葉が大好物そうだった。

「ここから、全部狙える？」

「朝飯前じゃ。いけるぞ」

「じゃあ反転弾をお願いします！」

「任された！」

ババババババッババババババババッバ！

ミサイルポッドから、次々に町の中に向けて反転弾が発射されていく。よしっ！　これで他の人達もかなり楽になるはずだ！

再会（後書き）

ホワイトファング帰ってきた。

アクセス数がすごい事になってきてます。読んで頂いてありがとうございます。おかげさまで毎日つづけられます！

8日の更新は夜だけになります。

勇司とラディアス

「君達は誰に攻撃しているのか、分かっているのか?!」

少々焦りながら、そう問いかける勇司。

「えぇ、勿論です！　リュートが剣を向けるのは魔物です。なので、あなたは魔物が王様に変身した偽者なのです！」

「えぇ、なにその論法は。セリナちゃん任せた！」

「はいっ」

勇者様ご一行には何を言っても無駄だと悟った勇司は、セリナ達に任せる事にした。そして勇者リュート本人は、ミミが一人で対処している。いや、他の誰も手が出せずにいた。状況を打破するには、ラディアスを拘束してしまう事なのだが勇司はそこへ踏み込めずにいた。

「なんだかんだで、勇者ってのは伊達じゃないってか」

ミミと戦っているリュートだが、勇司がラディアスを確保するために動こうとすると、しっかり牽制してくるのである。当のラディアスはと言うとまったく焦った様子も無く椅子に座ってこちらを見渡している。その姿はラディアスが王様と言われてもまったく違和感のない様子であった。

現在、連れてきた兵士達がぞくぞくと執務室へと到着しているが、この部屋の中には入られずにいる。この部屋にラディアスがいる限り、数で押す事ができない。リュート達を一刻も早く排除したいが、このままだと体勢を整えた駐留軍がなだれ込んできてしまう。すで

に、王宮に侵入してから１０分近く時間が経っている。援護しようにもできず、目の前に獲物がいるのに手が出せない状況に勇司は苛立ちを感じていた。

業を煮やした勇司が、勇者に攻撃をしかけようとしたその時、爆音が響いた。

「な、なんだ?!」

断続的に爆発音が響き渡り、しばらく続いたかと思うとぴたりと静かになった。広範囲に攻撃ができる光司が何かしたのだな、とあたりを付ける勇司。さすがにこの爆発音は気になるのか、その場にいる全員の動きが一瞬止まる。

ガキッ！

「おっと、油断も隙も無いね。駄目だよここは通さない。大人しくみんな僕に斬られてくれないと」

「・・・」

すばやく立ち直ったリュートとミミ。ミミは隙をついてリュートに攻撃をしかけたつもりであったが、即座に受け止められてしまう。リュートの武器「ギル」とミミの武器「月詠」はいわば兄弟である。モードを次々と変化させて攻撃をするのだが、両者とも中々決定打を放てずにいた。だがミミは、さらにモードを変化させリュートもそれに応じるようにモードを変化させていく。そうミミの狙いは、リュートの武器「ギル」の魔力切れ。コージから奪った「ギル」がカートリッジ方式だと知らないであろうリュートは、魔力が切れて使えなくなる事を知らないはずなのである。

「ころころ変えても無駄だよ。この武器は死ぬほど使い倒しているからね」
「そんなの関係ない」
リュートとミミが対峙している隙に勇司はラディアスの説得にかかる。
「ラディアス！　おまえも貴族でありながらその在りように疑問を持っていただろ？
　なんで急にこんな事をしはじめた！」
「ユージン陛下。あなたには分かりませんよ、貴族の血の呪縛がどう人を狂わせるのか。想像できますか？　正気を保ったまま狂気に侵される気分は？　狂気に侵されてなお正気の部分を認識させられる辛さを」
ラディアスは何も映さない目を勇司にむけた。
「今まで、だましだまし血を飼いならしてきたのですが、もう無理です。私の正気は狂気。その狂気がささやくんですよ、貴族のみがこの国の王になれる、と。だが、あなたは貴族ではない。即位の時は「王の印」があるということで、自分を騙してきました。その後は、私の娘か他の貴族の娘を嫁がせればあなたは貴族になると」
「・・・おまえ・・・」
「だが、あなたは家族を呼び寄せてしまった！　しかも子供までいるそうでは無いですか。その子供に王位を継がせる、それでは駄目なのですよ。あなたも次の王も貴族で無くなってしまう」
「だが、おまえは貴族を排除しようとした時、賛同してくれたじゃないか！　この国を良くしようって約束したのは本気だった筈だ！」
ラディアスを信じていたのであろう。勇司はラディアスの貴族至上

主義とも言えるその言葉を信じられなかった。

「その時はあれですね。無能な貴族のみ排除しようと考えていましたからね。なにも間違ってはいないでしょう？」

「なんつーか、詐欺師がいいそうな事を、のうのうと言いやがって・・・」

ラディアスの言葉を信じるなら、今までの自分の人を見る目は穴だらけだった事になる。

「もう良いでしょう。所詮、貴族と平民は相容れない存在なのですよ。もう諦めなさい」

「やかましい！　そんな諦めのいい人間じゃねぇんだ、俺は！」

「わかりました、リュート引きなさい」

ラディアスのその言葉に、黙って従うリュート。

「あなた方に見せましょう。古い貴族の血を。連綿と続くこの家の呪縛を！」

「ヒッ！」

ラディアスのその言葉に小さな悲鳴を上げるミミ。ラディアスは、そんなミミに向かって右手を突き出す。その動作を訝しがる暇も与えられず、見えない力で吹き飛ぶミミ。

「・・・あぅぅ・・・」

ラディアスの攻撃を受け、ぐったりとしてしまうミミ。そして、セリナもラディアスが正面に立った途端に、がたがたと震えだし棒立

ちの状態になった。

「まだ挨拶がわりなのですが、どうなんですかねこれは。私の狂気はまだ暴れたり無いようですよ、ユージン」

「“絶刃裂波”」

その言葉に攻撃でもって応戦する勇司。だが、その攻撃はかるく流されてしまう。

「おっと、ファウンデルス卿。こっちに飛ばさないでくださいよ。怖いじゃないですか」

「それぐらいどうとでもするだろ、おまえなら」

「ま、そうですけどね。あはは」

勇司の渾身の攻撃は二人にとって、そよ風程度にしか感じられないようだった。貴族の力は今まで見てきた勇司であったが、ここまでラディアスに力があるとは思わなかった。このままでは、この作戦は失敗する。勇司はすでに逃走を考え始めていた。

「逃がしませんよ、ユージン。あなただけ消してしまえば後はどうとでもなりますし。迂闊なんですよ、あなたは」

「くっ・・・」

ここ数年付き合ってきた仲だけあって、ラディアスは勇司の思考を読む。心の中をずばり言い当てられた勇司は、それでも逃げる事を諦めていなかった。

「“絶刃裂波”」

悪寒を感じた勇司は、ラディアスに向かって衝撃波を飛ばす。気が

つけばラディアスはこちらへ手を向けており、先程ミミを倒したであろう攻撃をしてきていた。それを切欠にして勇司の部下たちも、ラディアス達に魔法などで応戦する。

だが、その悉くがラディアスには届かない。

逆にラディアスが手を大きく横に振るっただけで、勇司たちが吹き飛ぶ。技もなにも無く純粋にそういった力なのだろう。ラディアスが動くこと自体が攻撃と化していた。

小さく呻く勇司たちを見たラディアスは止めを刺そうと一歩踏み出した。

だが、その時執務室の扉が大きく放たれた！

「外の方は片付けてきたよ！　・・・あ、なんでリュートが居るの？！」

光司が一人の少女を連れ、執務室へと入って来たのであった。

反転弾でフレームを無力化した僕は、即座に王宮に向かった。父ちゃん達が突入してからそろそろ十分が経過するからだ。エディさんは、反転弾連射の爆音で目を覚ましてくれたので南門の警戒をお願いしてきた。まぁ、眼を覚ましたエディさんが、すぐに僕に攻撃をしかけてきたのは内緒だ。

飛ぶように走るホワイトファングは、ものの十秒も経たぬ内に王宮に辿りつき壁を一気に駆け上がっていった。

「アラン隊長、聞こえますか？」

「その声はコージだな。白い機体はお前が乗ってるのか？」

そう、隊長に呼びかけた僕の声を聞いた周辺を警戒していたフレームも、警戒を解いてくれた。みんなに聞こえるように言わないと間違って攻撃されちゃうもんね。

「はい、訳あって乗り換えました。このまま執務室へ突入します」

「おい、さすがにフレームで執務室までは行けないぞ？」

「え？　ぶっこわして入ったら駄目なんですか？」

正直、なんでそうしないか不思議に思っていた。作戦は降りて行くってのが前提だったからとりあえずそう作戦を立てはしたんだけどもね。

「阿呆！　そんな事をしたらどこに飛ばされるかわからんぞ？　話を聞いてなかったな！」

「じゃあ、どうやって入るんですか？！」

「普通に降りて行くしかないんだよ」

「むむ、時間がかかりそうだけど仕方ないか・・・じゃあ一人で行ってきます！」

「あらかた無力化したはずだが、気をつけろよ。俺達はもう少しここで警戒している」

「了解です、アラン隊長」

僕の実力は「７７７」を捕獲した事で、隊長に認められたのだろう。一人で行くといってもすんなり認められた。

「じゃあ、ホワイトファング。ちょっと行って来るよ」

そう言って執務室に近いバルコニーに取り付いた僕は、ホワイトファングから降りる。

「待たれよ主。我がなにゆえに主と離れておったと思うのじゃ？」

ホワイトファングから降りてすぐにそう声を掛けられた。なにゆえとか言われても。

「いや、よくわかんない。魔力を回復するとか言ってたけど、ハーベイさんから話聞いてたらなんか辻褄合わないし。結局なんでなの？」

「ふふふ。とくと見よ！　これが我の１００％の力じゃ！！！」

「うっ」

なんかホワイトファングがまぶしく光ったかと思うと、すぐに明るくなくなった。あれ？　ホワイトファングはどこ行った？！

「ほれ、どこを見ておる主。我はここじゃ」

「え？」

そこには、黒い髪を長く伸ばした和風な女の子が居た。これは噂の擬人化か！いや、完全に人型になってるからなんていうんだっけ？

「うむ、察しは悪くないようじゃな。この姿を取るために少し魔力を補充する必要があったわけなのじゃ。フレームの姿のままじゃとわしの可愛さは声だけじゃろ？　それでは良くて５％ぐらいしか可愛さが伝わらんじゃろ？」

なんか自分で可愛いとか言ってるけど、反論はできない。確かに可愛いからだ。だけど、なんか納得できないんだけどな・・・

「なにをそんなに不細工な顔をしておる。行くぞ、時間がないのであろ？」

「う、うん。わかったよホワイトファング・・・って呼んで良いよね？」

「当たり前、と言いたいところじゃがせっかくじゃし、この姿の名前をおくれ？」

名前はやっぱり欲しいみたいで、上目遣いでお願いされる。

「うーん・・・なにがいいかなぁ。白夜（びゃくや）とかはどう？」

「あいわかった。白夜じゃな。では、よろしく頼む主」

「分かった、急ごう！」

「うむ」

どうやら白夜は気に入ってくれたようだ。よし、急いで父ちゃんを追わなきゃ！

デニーさん達の脇を抜け、執務室へ向けて走る僕たち。色々と仕掛けがあったけど、ホワイト・・・白夜が、その度に警告をしてくれたので事なきを得た。そして、最短コースで執務室のドアへと辿り着く。特に話し声とか聞こえないけど、終わったのかな？

「外の方は片付けてきたよ！　・・・あ、なんでリュートが居るの？！」

執務室へ飛び込んだ僕の目に映ったのは、大ピンチの皆と勇者リュート一行と知らないおじさんだった。

部屋に飛び込んだ僕が見たのは、床に倒れている皆と、相変わらず笑顔のリュート。それと、なんだか目が正気を失ってるようにしか見えない、怖い雰囲気を持つおじさん。

「“満ちるマナよ、彼の人達を癒せ！　リフォーガ！”」

危ないおじさんから目を離さずに魔法を唱える。たぶん、あのおじさんがファウンデルス卿なんだろう。そして、リュートはその手下。いや勇者が手下っていうのも表現的になんかしっくり来ないけど立ち位置的にそうとしか考えられない。

「いらぬ事はせぬことだ、少年」

ファウンデルス卿がそういって、手を振る。なんだ？

パシュッ！

「あつっ」

なんだ？！　一瞬胸が熱くなったかと思うと、目の前で何かが掻き消された気配があった。一体何が起きたんだ・・・？

「そうか、おまえが印を持つ者か。・・・ユージンの息子かっ！　リュート、あいつを先に片付けろ！」

凄く怒った感じで僕を睨み付けるファウンデルス卿。初対面なのに何故？

「あ、動いて良いんですね良かった。あの子知り合いなんですけど、仕方ないですねぇ」

などと、ちっとも仕方ないとは思ってない様子で僕を見るリュート。なんだろう、今の彼からは非常に危ない何かを感じる。回復魔法をかけたけど、みんなはまだ少し苦しそうに倒れている。だけど、持続性がある魔法だから、しばらくすれば動けるようになるだろう。

「主よ。あれは貴族じゃが、やって良いのか？」
「ホ・・・白夜、死なせるのは駄目ってのは分かってる？」
「むぅ、難しいのぉ。じゃが、やっていいのは間違いないのじゃな。では、わしがお役立ちな所を見せるとしようかの」

そうやって、軽く笑ってからファウンデルス卿に向かい合う。

ガキン！

「ほらっ、余所見してると危ないよ、コージ！」
「ちょっと、ほんと止めてよ？！」

今、咄嗟に剣を受け止めなかったら、首が飛んだであろう攻撃をしてきた。躊躇なくそんな事をするなんて、何か操られてるの？　リュートって。

「“炎よ！　我が手より出でよ！　フレイム！”」

リュートがひょいと身をかがめると、その瞬間に勇者の仲間が僕に魔法を撃ってきた。

「おっと、一騎打ちを邪魔するなど、無粋な真似を。おぬし達もまとめてわしが面倒見るぞ」

白夜がなにかしたのか、フレイムの軌道があらぬ方向へと向かう。

「また新しい娘を連れてると思ったら、なんか凄い娘を捕まえたんだねコージ」

「だから、なんでっ、攻撃してくるのっ!?」

リュートは軽口を叩きながらも、激しい攻撃をしてくる。口元は笑っているんだけど目が笑っていない。本気で怖い。

「いい加減、本気だしなよ。じゃないと死ぬ事になるよ?」

「くっ」

生まれて初めて、まともに殺気を受けた僕は一瞬怯む。しかもリュートとは少しとはいえ顔見知りだ。そんな相手を躊躇無く殺そうとするなんて、まともじゃない。

「僕はね、勇者なんだ。魔王なんかもうこの世に居ないのにね。なのに、勇者としての化け物じみた力はいまだに僕に受け継がれてる。君だって、おかしな力を持ってるんだろう?さっさと本気だしなよ!」

いつまで経っても攻撃をしてこない僕に腹を立てたのか、リュートは怒りの形相で僕に向かって来た。だけど、それでも僕は剣を受けるので精一杯だ。リュートは異常な力で剣を叩き込んでくる。なんとか耐えてるけど、このままだといつか倒されるだろう。

「僕におかしな力なんて無い!　それに勇者ってのは、その力で弱

い人を助けるもんじゃないのか？　こんな所で何をしてるんだよ！」
「コージもそう言うのか！　勇者だからってなんでもできるわけじゃないんだよ！！！」
ガキンッ！
「あぐっ！」
リュートが僕の「月光」の剣部分を斬り落とし、その勢いのまま僕の左腕を切り裂いた。モード雷のようだったけど、防御魔法のおかげで麻痺せずに済んだ。だけど痛い。焼けそうに痛くて、うずくまってしまいそうだ。
「どうしたの？　このまま切り刻まれたい？　ちょっと切れたぐらいで大げさだよコージは。そんなんじゃ、これからの僕の攻撃は耐えられないんじゃない？」
「うるさい！　“満ちるマナよ、我を癒せ！　リフォー！”」
回復魔法のおかげで、少し楽になる。だけど、僕が魔法を唱える瞬間も黙って僕を見ているリュートが不気味だ。
「回復魔法って便利だね。だけど、結局は僕に斬られるのにおかしな事をするねぇ」
「傷を治すのが何がおかしい？」
「だって、僕に斬られて死ぬのは分かってるのに、無駄に痛い時間が延びるだけじゃない？回復なんかしなかったら苦しむ時間が短くて済むじゃないか」
どういう理屈だ。リュートは自分が負けるとは微塵も思っていないらしい。確かに強すぎてどうやって大人しくさせようか、悩む。強

化と加速の重ねがけで、一気に決められるだろうか・・・？

「その理屈はおかしいね」

「どうしてだい？　君もわかってるだろ？　僕には勝てないのが」

「確かに手加減されてる気はする。だけど、こういうのはどうかな？」

「グッドラック」からビームガンを出し、リュートの傍を威嚇射撃する。

バジュッ！

一瞬光ったかと思うと床を溶かした。ビームだけあって、攻撃速度も威力も申し分ない。いや威力は強すぎて僕は、人に向けて撃ちたくない。お願いだから、これで大人しくしてくれリュート！

「へぇ、おもしろい物を出したね、今。それが君の・・・コージの能力って訳か。なるほど、余裕があるわけだ・・・」

「もう止めろリュート、これが当たったらただじゃすまないぞ？」

「ふふふ。それは楽しいだろうなぁ・・・　勇者なんだよ？　死にそうになっても、すぐに元気になっちゃうんだよ？　くくく」

なんだか余計に、リュートのいけないスイッチを刺激したようだ。

「だから、もっと楽しもうか、コージ！」

目をらんらんと輝かせてリュートが向かって来た。

勇者の理（後書き）

ずっと戦ってばかりで大変だす。はやくガチ戦闘は終わりたいです。

話数が伸びてきました。どこまで続くのでしょうか。自分で書いといてなんですが、もう少しうまく書きたいもんです。

勇者とは

喜々とした表情で向かってくるリュート。だけど僕は攻撃するわけにもいかず、避けて避けて避けまくる。時折、威嚇のために射撃するけども、どうも見抜かれているようで、全く動揺していないリュート。むしろ当てて見ろと言わんばかりに無防備な姿をさらしてくる。

そこでビームガンを「ノーミス」にこっそり持ち替えて、リュートに連射してみた。

「あぁ、何をしているのかな。僕には状態異常は効かないよ。あと軽い怪我なんかも時間が経てば回復していくし。僕を倒すなら、一撃で意識を刈り取るとか、全身消し炭にするとかしないと倒せないと思うよ？」

なにせ勇者だしね、とリュート。さすが勇者というだけあって規格外だ。だけど、ビームガンを撃つわけにはいかない。

「ほらほら、どうしたの？　傷がどんどん増えてくばっかりだよ？　お仲間もまだ寝てるようだし、邪魔だから片付けようか？　そっちの方が本気出してくれそうだしね」

「リュート待って！」

「待てないよ、ほらっ！」

ちらほらとようやく立ち直りかけて来てる皆に向かって、斬撃を飛ばすリュート。その延長線上にはミミやセリナも居る！

「アクセル！　“我が身の魔力よ、我が身を巡り我に無敵の力を与

えたまえ！　オーディス！”　おぉおおおおおりゃあぁ！」

全速力で斬撃に追いつき折れた「月光」で、なんとか相殺する。

「エンド！」

アクセルを使いっぱなしだと、リュートが何を言ってるか分からなくなって危ないので即座に解除する。でもどうしよう。今のを見てリュートが、凄く怖い邪悪な笑みを浮かべている。

「今のは何かな？　コージもやればできるじゃないか」

「もうほんと、勘弁してよ。どうすれば満足するんだよ」

「それは、動けなくなるまで叩きのめされたら。だねっ！」

さっきより凄い速さで踏み込んでくる。

「アクセル！」

ここまで速いと、僕の体を精密に動かさなければ捌ききる事は難しくなる。鍛えてる人間というのは、やっぱり尋常じゃない速さを持っているのだ。アクセルを掛けていても、ワンミスで攻撃を食らってしまうぐらいの速さでリュートは動いている。応戦しようにも、リュートの攻撃に隙がなく防戦一方になる。

だけど、やっぱり勇者は恐ろしい。右上から袈裟切りに来たので、回避する為に右へと身体を動かしたんだけど、それがリュートの狙いだったようで、袈裟切りが途中から横なぎに変化しあっという間に、僕は吹き飛ばされてしまった。

「エンド！」

アクセルをかけっぱなしでリュートと戦闘をしていると、集中力が物凄く必要になり頭がぐらぐらしてくる。正直すでにグロッキー状態だ。ふと白夜の方をみればファウンデルス卿と勇者のお付の女の子たちを一人で、こちらに来ないように捌ききっている。だけど、殺さずに倒すという事ができないようで、誰一人倒れている者は居なかった。でも、あの集団がこっちに来ないというだけで恩の字だけどね。

“・・・ぃて・・・さ・・・”

少し朦朧としてきた僕の耳になにか声が聞こえてきた。幻聴・・・？

“おね・・ま・・・き・・くだ・・・”

目の前のリュートが、つぎはどうやっていたぶろうかな、と物騒な事を呟いている。だけど、頭の中に声が響いてきて、そっちに意識をとられる。

“お願いします。わたしの話をきいてください”

意識をはっきり向けると、声がはっきりと聞こえてきた。なんだろう？

“やっと届きました。勇者を助ける為に手伝ってほしいのです。王の印を持つ人よ”

えっと、どちらかと言うと僕の方が助けてほしいんだけど、助けるっていうのは正気に戻すって意味でいいのかな？

“はい、そうです。いまの勇者は狂気にとらわれてしまっています。そのせいで私を使う事ができなかったのです。本当の持ち主はあの人なのに”

なるほど。「グッドラック」の声なのね。と、腕のブレスレットを見ると淡く輝いていた。

“今から剣を出します。名前は「グッドラック」私の本体と言える武器です。それで勇者を斬ってください”

ごめん、人殺しをしたくないからそれはできないよ。

“いえ、わたしが切るのは勇者の狂気のみです。あんな姿になった勇者を正気に戻したいのです。あの悪の権化と言われても仕方ない姿に我慢できないのです”

リュートは傷つかないんだね？　それは本当？

“はい、勇者の狂気だけを斬ります。やって貰えますか？”

分かった。できるだけ頑張るよ。じゃあ、始めよう。

どうやら呆けていた時間はほんの一瞬だったようで、目の前にはまだリュートがにやにやとしていた。

パシュッ！

腕に収まっていたブレスレットは、光を放ち一本の剣に変わった。その剣は装飾などはなく無骨なデザインながらも静謐な雰囲気が当たりに漂い、ただ事ではないオーラを放っている。

「うっ！？　何をしてるコージ！　まぶしい・・・」

「グッドラック」が僕の手に収まり、光は収まっているのだがリュートにはまだ眩しく見えているようで、こちらをまともに見る事ができないようだった。

「リュート、君はその力のせいでおかしくなっているんだ。本当の君はもっと優しい人のはずだ」

「おためごかしを！　コージに何がわかるって言うんだ！」

僕の言葉を聞いて、激昂するリュート。だけど、あてずっぽうで言ってるわけじゃないんだ。

「リュートは、コージもそう言うのかと言ったよね」

「あぁ、それがどうした！」

余裕がなくなってるのか、口調が荒々しいものになっているリュート。

「そして、勇者だからってなんでもできるわけじゃない。とも言った」

「そうさ！　勇者と言っても僕だって人間なんだ、神様なんかじゃないっ！」

「だけど、リュートは人に頼られてがんばって叶えようとしたはずだ。だけど、一度叶えるとどんどんと人の願いはエスカレートしていく」

「・・・人は身勝手さ。自分さえ良ければそれで良いやつばかりだっ！」

何かを思い出したように、涙交じりで叫ぶリュート。

「そんな目にあっても、勇者ってだけでリュートは頑張った。だけど、だれもかれもがリュートに頼るようになって、誰もリュートの事を考えなくなった。それで君は優しさを失ったはず」

「・・・」

こちらをまぶしそうに見ながら、僕の言葉に返事をしないリュート。

「もう勇者を止めても良いんじゃないかな？　君だって幸せになってもいいはずだよ」

「・・・うるさい。黙ってれば綺麗事ばかり！　ふざけるんじゃない！」

「綺麗ごとと言われようと、僕は教えて貰った事を言ってるだけだ。大人しくしろリュート」

そう「グッドラック」からリュートの事を教えて貰っていたのだ。聞けば聞くほど、彼は人に良いように利用されてきたのが理解できた。

「いまさら勇者をやめられるものかぁああ！！！」

こちらがまぶしいようで、片手で目を隠しながら突っ込んでくるリュート。

「その狂気と一緒に勇者を消して貰えリュート！」

そう叫んで僕は「グッドラック」をリュートに突き刺した。

勇者とは（後書き）

よくよく考えたら、投稿をはじめて約一ヶ月が過ぎました。
意外と毎日続くものですねぇ。自分に驚きです。

リュートの過去　その1

俺の家はほんとうに普通の家だった。父親も母親も、とくに何かに秀でているというわけではなく、至って普通だった。俺に「勇者の印」が出るまでは。

「そうか、リュートに印が出たのか。よかったな」

何も知らない俺は、父親に「勇者の印」が出てきた事を無邪気に告げた。その時の父親のなんともいえない微妙な表情はいまだに忘れられない。

俺の家はどうも勇者の家系らしく、今までも何人か勇者がでてきたそうだ。だけど、魔王が魔物を操って人間を襲う、という話は昔の話。魔族は最近ではたまに見かける程度の物だし、そもそも魔王が居ない。それよりも魔石獣のほうがよっぽど人間を襲うぐらいだ。基本的に生身で戦おうとする魔族。その身体能力は確かに遙かに人間を凌駕しており、自信を持つのも分かるが、人間にはガイアフレームがある。人間がガイアフレームに乗って戦えば相手がたとえ魔族といえど、そう簡単に負けるものではなかった。

だけど、生身で魔族に勝てる人間が勇者である。

特に魔力が身体を駆け巡っているという訳ではないのに、山をなぐれば山を割り、海を泳いで大陸へ渡り、地を走れば一日で千里を駆ける。その力は人を助ける為にしか勇者は使わない。勇者にまつわる話は大方、そんな感じの昔話ばかりだ。

そんな昔話を小さい頃から聞いていた俺は、勇者になれて本当に嬉

しかった。

村の中で困っている人が居れば、勇者の力ですぐに助けられる。力持ちになったので重い荷物を運んであげたり、疲れ知らずなおかげで畑を一日で耕してしまったり、身軽でどんな所でも軽々と上れる俺は皆の家の屋根の修理をしてみたり、誰かが隣の町や遠くに行くときは俺が行った方が早いので、そういったお使いは全部俺が行ってすぐに帰ってきたり、病気の人がいれば病気に効く薬草を勇者の知識で探して採ってきて薬を作って貰ったり。あの頃は人の役に立てる事が本当に楽しかった。村の皆は本当に優しかった。勇者の力に目覚めたとはいえ、俺もまだ12歳だったので無理するなと良く怒られたものだ。あの時は、うるさいなとしか思っていなかったけど、あの人達が本当に俺を心配してくれていたのだな、と今になれば分かる。

だけど、どこで嗅ぎ付けたのか俺が勇者だと言う事が隣町の人間にも伝わっていた。

比較的、人の往来が激しい隣町で噂になるとあっという間に領主にまで話が伝わり、俺は領主のすむ町まで連れて行かれる事となった。両親は村に残ると言う事で不安だったけど勇者は旅立つものだと思ってもいたので、すこし寂しかったけど村を出て行った。

「体に気をつけてな」
「無茶しちゃ駄目よリュート」
「大丈夫だって！　行ってきます！」

それが両親との別れの言葉だった。

領主の町に着いてからは勇者と言う事で、忙しい日々が続いた。村

でしていたような手伝いもあったけど、魔物を倒したり悪い人間をやっつけたりという仕事が増えた。村に居たときも狩りをしていたので、そういった事もできるんだけど、やっぱり心のどこかで嫌だなと思っていた。そうやって、日々を暮らしていると領主とも話をする機会も増える。その時に領主がぽろりと、村の人間が勇者が居ると伝えに来てくれて本当に良かったと漏らした。

その時に渦巻いた感情は、なんとも表現しがたい物だった。視界が真っ暗になりぐらりと地面が揺れ、意識が遠のきそうになった。だけど、心配そうな表情の領主をみて笑顔でなんでもありません、と応えた。

その頃から少しずつ俺の心に人を疑うと言う心が芽生えてきた。

この町では勇者というだけで、見返りを求めずに働く事を強制される。村に居た時はよかった。村の人間で知らない人など居ないので、困ったときは助け合いというのが暗黙の了解だった。だけど、大きな町になると知らない人のほうが多い。にもかかわらず、俺が勇者だと言うのは誰もが知っているので、なにかあればすぐに頼まれる。なにをしていようともだ。他の人の頼みを聞いている最中に、次の頼みをされるというのはしょっちゅうで、毎日朝から晩まで駆けずり回って、泥のように眠る。それでも、俺を労わる人など誰も居ない。それどころか、遅かったとか、それだけ？　とか不満を漏らす人達しか居ない。その頃は俺の力不足のせいで申し訳ない気持ちになっていたので、笑顔ですいませんと言うしかなかった。悔しくて仏頂面でいると、それでも勇者か！　と怒鳴られたからだ。

昔話に出てくる勇者は本当にすごい。なんでもできるし、誰でも助けていた。さらには魔王を倒すという事もしてのけるし、大勢の人を助けてきた昔の勇者ってどれだけ凄かったんだろうと、ため息が

でるばかりだ。俺なんか魔王を倒さなくて良いのに、人助けもロクにできない勇者だっていうのにね。

そうして領主の町へ来て三年が過ぎた。

その頃には、俺も要領よく仕事をこなすようになっていた。勿論、悪い方にだ。町の有力者の手間のかかる仕事をわざと請けて、外で暇つぶしをしてから町へ帰り、周りの人間に聞こえるように笑顔で依頼完了の報告をする。そして、たまに普通に町の人の依頼を受けて、最後に“あの人達には内緒ですからね”と一言付け加える。それだけで、町の人間は勝手に噂をしだす。勇者も所詮金で動くのか、と。実際は金を貰った事など一度もない。本当にこの町の人間は、自分勝手だ。自分たちは無料で俺を働かせて儲けたりするくせに、俺が少しでも儲けてると感じると非難しはじめる。この頃には俺は無駄に顔が良いみたいだと気付いていたので、笑顔で居れば乗り切れると分かっていた。不思議な物で毎日笑顔でいると他の人には凄い善人に見えるようだ。

そんなある日。幼馴染のヨルカがティナと名乗って俺を探してやってきた。

「あなたの両親は殺されたわ。領主に」

さすがにその言葉は受け入れられなかった。毎日、領主の為、町の為に働きづくしの俺の両親を何故殺す必要がある？　訳が分からない。

「こんなに役に立つ勇者を領主に隠して匿っていた罪は重いと言ってたわ。最初は村を焼き討ちにすると言ってたけど、リュートのご両親が・・・」

“匿っていたのは私たちです、村は関係ありません！”

そういって、俺の両親は罪を一身に受け処刑されたそうだ。

訳が分からない。何故そんな事をする必要がある？　最近でこそ要領よくやっているけど今までずっと一生懸命働いてきたじゃないか！

「落ち着いてリュート。もう半年も前の話なの。なんとかこの話を早く届けようと思って村を出てきたのだけど、道が分からなくてこんなに遅くなったの、ごめんなさい」

「なんでそんなに時間が・・・」

「村の人達のお金を集めたのだけど、どうしても馬車に乗れないから徒歩でここまで来たの。さすがに隣町までは馬車で行けたのだけど、そこから先がね・・・」

ごめんなさいと深々と謝るヨルカ。

そうやって謝るヨルカに俺はどうする事もできなかった。

リュートの過去　その1（後書き）

悪い点など指摘して頂ければ助かります。

毎日のユニーク数が凄くてびびってます。少しでも楽しんで頂けてるなら幸いです。

毎日更新できるように頑張りたいと思います。

リュートの過去　その2

両親が死んだ。

その事実を領主に問い質すほど、俺は馬鹿じゃなかった。ヨルカが教えてくれた事が真実だろう。形見として二人が身に着けていた指輪と遺髪を持ってきてくれたからだ。村に裏切られたと思ってたけど、村の人間、それも幼馴染に会って話しをしてみればやっぱり村の人間は信じられると思った。そして、領主にはいつか復讐をしなければ。

「ヨルカありがとう。教えに来てくれて」

「ううんいいの。あと、わたしはティナよ。大丈夫だとは思うんだけど、そう呼んで頂戴」

「分かったよ、ティナ。で、これからどうするの？　村へ帰っちゃうの？」

久しぶりに会えたのだし、どうせなら少しでも一緒に居たい。

「リュート。あなたの家にわたしを住まわせて貰えないかしら。勿論、わたしも働くし家の事だってする。だから、一緒に居させて、ね？」

ティナのその言葉に一瞬、息が詰まる。ちょこっと涙が出そうになったけどそれを堪えて元気良く返事する。

「大歓迎だよ、ティナ！　俺も一人で寂しかったんだよね」

「そ、良かった。よろしくねリュート。だけど俺って言うようになったのね、あなた」

そっけなく言うティナ。だけど、ほっとしたように息を吐いていた。顔も赤いし。

「そういえばそうだね。気付けば俺って言うようになってたなぁ。変？」

「うん。僕に戻しなさいよ。なんか無理してるみたいに見えるわよ」

「うっ・・・そっか、それじゃ僕に戻すよ・・・」

「そんなにショックを受けないの。男前が台無しよ？」

まったく誰のせいだと思ってるんだろう、ティナは。でも、ひさしぶりに何も気負い無く話しができた気がする。そう村に居たときのように。

ティナが来てからは、毎日が楽しかった。彼女は町で働きながら、マジックアイテムの勉強をしていて、マジックアイテムを組み合わせて色々な効果を生み出す「アイテム士」を目指しているようだ。

「わたしには魔力も力も無いからね。頭で勝負よっ」

有能なアイテム士はそれこそ魔術師にひけをとらない能力を持つと言う。それに悪巧みが得意な彼女の事だ。きっとそういった職にも向いているに違いない。

「失礼な事を考えてるんじゃないでしょうねぇ？」

「まさか、僕がそんな事を考えると思う？」

「その笑顔の時はだいたいそうなのよ。気付いてなかった？」

うっ。なにか隠そうとすると笑顔で誤魔化す癖が身についているので、ティナは既にお見通しだったようだ。

そんな感じでティナがいる事で僕にも余裕ができ、町の人に軽々しく扱われても気にならなくなってきた。だけど、仕事はそれまで以上にどんどんこなせるようになってきた。そして、そんな僕に王宮から仕官しないかという話がやってきた。ただ、この話はまだ内密にしておきたいとの事で、領主には内緒で僕に打診をしてきたそうだ。返事は焦らないとの事でこの町に一週間滞在するので、それまでに返事を決めておいて欲しいとの事だった。

「王宮に勤めるなんて凄いじゃない。何を悩んでるの？」
「いや、何か裏があるんじゃないかなぁって・・・」
「リュート。そんなに疑り深くなってたら、何もできないんじゃない？」
「だって、わざわざ領主に隠れて会いに来るとか、怪しくない？一応、王家の刻印のついた書状は確認したから信用はしてるんだけどね」

そこまでするのか、と呆れ顔のティナ。だけど、リュートにとってはそういった事はだまされない為には必要なのだ。でも、果たして王宮に行ったとして僕に何か良い事があるとは思えない。村からこの町に来ても、ろくに何もいい事が無かった。人が多くなればなるほど、勇者の力を求める人も多くなる。果たしてそれは良い事なんだろうか。

「まだ時間はあるんでしょ？　ゆっくり考えなさい。あと、あなたが行くなら、わたしも行くからね。逃がさないわよ？」
「それは僕の台詞だよ。これを機会に僕から離れようったってそうは行かないからね？」

特別なにかを誓ったと言うわけではないけど、この時には僕とティ

ナは離れられない仲になっていた。だが、その数日後あの事件が起きた。

夕方、家に帰るとティナが居なかった。最近はアイテム士と言う事で色々とこなす仕事の幅も広がっているようで、忙しいのかな？とぼんやり考えていた。今までは、黙ってそんな事をすることはなかったのに・・・

なにか嫌な予感がして、町へ飛び出した。

こんなときに勇者の力は便利だ。すぐにティナの気配を感じそちらの方へと向かう。なにかおかしい！　急いで気配のする方へ向かった。あと1つ角を曲がればティナが居るという所まで来たときに声が聞こえた。

「いいから来い、抵抗するんじゃない！　領主様に呼ばれて何が不満だ！」

「だから、行くならリュートも一緒にって言ってるじゃないですか、あっ！？」

バシッ！　と何かを殴る音。その音を聞いて僕は頭に血が上るのを感じた。

気付けば、僕を必死に止めるティナがいた。ティナの格好は服はぼろぼろに破れて、あちこちから出血し、殴られた跡もありかなりひどい状態だった。

「ヨルカ・・・なんでこんな・・・」

「ティナよリュート。わたしなら大丈夫だから。ねっ？」

気丈に笑うティナ。はやく治療しないと・・・

「もう良いのリュート。領主に呼ばれたなら、わたしはここまで。貴族に目を付けられたら逃げられないわ。王宮にはリュート一人で行って？」

「そんな事できるもんか・・・」

なんなんだ！　両親が殺されたのを知っても、領主のいう事には従って来た。これまでの働きであいつはだいぶ儲かったはずだ。それに領主が気に食わない人間や、都合の悪い人間を、悪い奴を始末してくれと言われて始末させられてきた。後で事実を知ったけど、それでも文句も言わずに従ってきた！　そしてティナが僕と一緒に住んでるのも知ってるはずなのに、なんで奪う真似をする？　あいつは何もかも奪わなければ気が済まないのか？　利用するだけ利用して、僕を使い潰す気か・・・？

「一緒に行こう、ティナ。君が一緒に行くのを条件にして王宮に仕える」

「リュート・・・」

王様はこの国の頂点だ。どうせ飼われるならトップに飼われた方がマシな筈だ。王に仕えたと知ったら、領主も簡単には手が出せない筈。そうと決まればあの使者に話をつけに行こう。今回の件でよく分かった。勇者と言う事で人はすぐに利用しようとする。ならば、僕が人を利用したっていい筈だ！

それからは、速かった。使者に話をつけ逃げるように町を出た僕達は、領主にこき使われる生活から逃れる事ができた。まあ領主が王様に代わるというだけだが、どうせなら一番上に使われる方が、何かと都合が良いだろう。エリスという名の使者は、使者にも拘わら

ず仮面をつけていた。そのせいで胡散臭いと思っていたのだが、面倒見は良いようで逃げるように出てきた僕達を黙って受け入れ、王宮まで案内してくれたのだ。

「ようこそ、リュート君。勇者と言う事で色々苦労したようだね。しばらくはゆっくりしてると良い。そのお嬢さんも一緒に住む家も用意しよう」

王宮に着いてすぐにファウンデルス卿と面会したが、第一声がそれだった。あまりの待遇の良さに驚き、勇者というだけで労いの言葉一つ掛けて貰った事のない僕にとって衝撃の出来事だった。

バルトス国宰相ファウンデルス卿。

ユージ王の懐刀と称されるこの人は、国内の改革を一手に担っていると聞く。大貴族と聞くが、貴族の粛清に対しても手をぬかる事なく、実施してのける豪胆な人物として有名だ。貴族なのに貴族を裁く。このような事をした人間は、今まで居なかった。貴族は常に裁く側であり、捌かれる側に立つ事など無かったからだ。もともと大貴族なだけあって、他の貴族に対しても睨みが利く存在なんだが、そこまで苛烈な人だとは誰も思わなかったのだ。

そんなファウンデルス卿が、僕を労いあまつさえ微笑みかけてくれている。これが驚かずにいられるだろうか。正直、どんな罠があるか怖いぐらいだ。

「ありがとうございます。それで僕は何をすれば宜しいのでしょうか？」

どうせ色々働かせられるなら、こちらから申し立てれば腹も立たな

い。人にやらされてするんじゃなく、僕がしようと思って動くんだ。

「クーデターをするのでね。君にも手伝って貰おうと思うんだ」

「え！？」

今とんでもない事を言わなかったか？　いやなるほど。僕の力を利用すればそういった事も楽になるだろう。僕に優しいのはちゃんと僕の利用価値が分かっているからだ。それなら話が分かり易い。

「とりあえず勇者の君は勇者として人々の役に立って欲しい。それだけだよ。その為の便宜は色々図らせて貰う。あと金銭面で困った事や、許可証が必要ならそう申し出てくれ。すぐに手配させる」

それなら今までしてきた事と何も変わりがない。いや、領主に命令された裏の仕事が無い分随分と楽だ。なるほどね。まずは町の人間のご機嫌取りをして勇者の言う事に信憑性を持たせる為・・・かな？　おもしろい。

「君の人気が上がれば上がるほど、仕事がし易くなる。・・・分かるな？」

「ふふふ、良いですね。人を煽るのが今から楽しみですよ」

「ほぉ、頭も回るようだな。なら、あとはどう動けば良いか理解しているな？」

「いつまでに人気者になってれば良いです？　あと流して置きたい噂は無いですか？」

「早ければ早いほうが良い。人気はあればあるだけ良いからな。あと噂に関しては随時エリスに伝えさせるから、その通り流せ」

「了解、任せてくださいよ。宰相殿」

あとは勇者のパーティとして目立つ人材を、用意して貰いティナと

協力して僕に心酔させる。人の良さそうな仮面を付けるのが得意な僕なら、これぐらい楽なもんだ。ティナは内心笑ってるだろうけどね。人を騙し、陥れ、利用する。もう勇者とは言えない程、腐りきるのにそう時間はかからなかった・・・

所詮僕には勇者の名を汚すしかできないんだ。

リュートの過去　その2（後書き）

うまく話が切れなかったので、この回いつもより話が長めです。

賭け

「ここは・・・？」

気がつけば、わけの分からない空間に居た。夢の世界なんだろうか？　ふわふわとしていて、暖かい気分になってくる。

でも、なんでこんな所に・・・確かさっきまで戦ってたはずなのに。記憶にないけど、死んじゃったのだろうか？

“勇者よ、分かりますか？”

ふと、そんな呼び声が聞こえてそちらを見やると、何か光り輝く物があった。勇者と言われてつい振り向いたけど、そんな資格ないよね。自嘲気味に笑うと、光っている物体は気に入らなかったのか、ゆらゆらと激しく揺らめいていた。

“あなたは大変でしたね。なまじ力があるだけに、なんでもできてしまって”

「そんな大変でも無かったよ。この力のおかげで生き残れたし、なんでもし放題だったし」

そう、いい事も悪い事もやりたい放題だったなぁ。その時の気分で色々してきたから、大変も何も無かったんだけどな。僕の力の使い方は、自分が如何に気持ちよくなれるかが基準だったから、気が向けば人を助けるし、そうじゃなかったら痛めつけていた。ばれないように処理もしたけどね。

“あなたの力はこの時代には不要なほど強い物です。本来なら魔王が出てくる筈だったのですが、何故か今回は出てこなかった”

「もう良いじゃないか。魔王は出てこなかったし、僕も倒されちゃったし。でもこれで勇者の血筋が途絶えてしまうのか。そこだけはちょっと申し訳なかったなぁ」

なんというか、この静かで穏やかな空間は死ぬ前に訪れるものなんだろうなとぼんやりと思う。でなければ、こんな馬鹿正直に自分の気持ちが出てくる訳が無い。ここでは見栄やしがらみ、遠慮などに一切影響されずに、言いたい事を素直に言える。

“いえ、あなたはまだ死んではいませんよ。王の印を持つ者に手伝って貰ってこうして話をさせて貰っているのです”

「王の印・・・？　あぁコージの事か。彼、お人好しだもんね。ヨルカにいいようにあしらわれてたし、凄く人にこき使われそうな人だよね」

現に戦っていた僕の為に、なにかを手伝っているみたいだし。そういえばこの声の主は一体誰なんだ？　知っているような知らないような。不思議な感覚だ。

“あなたの記憶を見させて頂きました。そしてやっぱりあなたには、記憶を失って貰うのが一番良いと思いました”

「なにそれ、怖いなぁ。駄目だよそんな事しちゃ。記憶が無くなったら、僕がしてきた悪事を思い出せないじゃないか。そんな都合良く忘れていいもんじゃないでしょうに」

そう、僕のしてきた事は到底人に褒められる物ではない。脅迫や強盗、詐欺や殺人などは当然のようにしてきたし、していない事を探す方が数が少なくて良いだろう。それにそんな僕の悪事を黙って受け入れてくれたヨルカにも悪い。僕だけ忘れて彼女が覚えているなんて、そんな負担を掛ける事は嫌だ。だけど、そんな僕の内心は関係ないと言わんばかりに声の主は続ける。

“あなたには何も目的が無かった。村を救うという事も、家族を守るという事も、魔王を倒すという事も、あなたにはそれらは目的になり得なかった”

「確かに、村を救うにも村は安泰だったし、家族を守ろうにも、守れる力を持った頃には既に亡くなっていたし、魔王に関してはそもそも居なかったしね。僕には目的なんて無かったね。うん」

そういえば僕に目的なんて無かったね。言われるがまま、請われるがままに生きてきた。でも村に居た頃だけは、ぼんやりとこうやって皆を助けながら暮らしていければ良いとは思っていた。考えて見れば、村に居た頃とあんまり変わり無いんだね、僕って。

“ですが、今は違います。あなたは幼馴染を守る為に自分を犠牲にする事を厭いません”

「いや、それは買い被りすぎだと思うなぁ。だって、いつでもどこでも危険な場所でも悪事を働いている時もずっと一緒なんだよ？普通、そういう事はさせないんじゃないかな？」

“では、そういう事にしておきましょう。とにかくわたしは、あなたがそんな風に自虐的になってしまって、せっかくの勇者の力が曇ってしまっているのが我慢できないのです”

「だから、記憶を消すって言うのかい？　馬鹿馬鹿しい。そんな事をしたって結局は同じ道を辿るに違いないよ。そんな無駄な事はやめようよ」

“では賭けをしましょう。あなたの幼馴染の記憶は残しておきます。あとは村に出た頃から今までの記憶を消します。その上で一年間生活をしてあなたが悪事に手を染めていればわたしの負け、勇者らしく生きていればわたしの勝ちというのはどうですか？”

「いや賭けをする意味がない。それに一年間で終わるという保障も無い。そんな分が悪すぎる賭けなんてしないよ」

“つれないですね。それでは、条件の追加としてあなたの勇者の力を抑え込むというのはどうです？　その上で一年間過ごすというのは？”

勇者の力が無くなる？　この化け物じみた力が？　そんな事ができるのか？

「嘘をついてないだろうな？」

“えぇ、仮にも勇者の武器ですから、そういった事もできるのですよ。逆に強める事もできますけどね、ほらっ”

と、何かをしたようで僕の力が更に強くなっていくのが分かる。・・・そんな事ができるのか・・・

「分かった。その条件で賭けをしようじゃないか。だけど、判定する人間が居なけりゃ勝ったか負けたか分からないだろうに。それは

どうするんだ？」

“一年後に思い出すようにしますよ、それは。その方が都合が良いでしょ？”

「またそんな保障もくそも無い事を平気で言うね、君は。・・・まぁ仕方ないか。力はあるようだから、そういった事もできるんだろ？　任せるよ」

でも、間違いなく悪事に手を染めてると思うけどね。

“では、一年後に会いましょう”

そう挨拶をしてきた勇者の武器の声を聞きながら、僕の意識は真っ白になっていった。

賭け（後書き）

この話がないとおかしいので割り込んで入れます。

ごめんなさいっ

そして決着

「その狂気と一緒に勇者を消して貰えリュート！」

そう叫んで僕は「グッドラック」をリュートに突き刺した。

「グッドラック」は、リュートに吸い込まれるように消えて無くなりリュートは気を失ったようだ。これで、リュートは正気に戻るんだろうか？　だけど今は「グッドラック」に任せるしかない。

「グッドラック」が無くなってしまい、僕には武器が無い。だけど、まだ魔法の力が使える。白夜を助けないといけないけど、とりあえず他の皆を動けるようにしないと。白夜が抑え込んでくれている間に一人ずつ回復していき、体勢を整える。だけど、ミミやセリナはアバターシステムのダメージが大きかったのか、まだ復帰できないようだ。なのでミミの「月詠」を借りておいた。

「光司助かった。正直かなりやばかった」

「ううん、間に合って良かったよ。こっちも白夜が居なかったらやばかったし」

お互い危ない状況で進んでいたようで、本当に白夜が居なければどうしようもない状況だっただろう。僕たちは非常に運が良かったのだ。この運を逃さないためにもすぐに動かなければ。

「あのファウンデルス卿の攻撃は僕には効かないはず。さっき何かしたみたいだけど、何も起きなかったし」

「そうだ。お前にある王の印。それがあいつの攻撃を無効化する。だが・・・」

「この印って本当は父ちゃんにあったんでしょ？　でも今は僕にあるんだからこの役目は僕にしかできないんだってば。任せてよ」

さっきから見てると、ファウンデルス卿は動くたびに何か見えない力を出しているようであれを食らうと、かなりダメージがあるようだ。さっきからこの部屋がちょくちょく壊れていってるのは、そのせいだ。

「じゃあ、行くよ。援護お願い！」
「分かった、任せたぞ光司」

勇者一行の攻撃は、さすがに食らってしまうから援護して貰わないと危ない。

「白夜、ありがとう！　そしてお待たせ！」
「ようやく来たか主よ。殺さずに戦うのはほんに骨が折れるのぉ」
「このおじさんと一騎打ちするから、サポートお願い！」
「わかったのじゃ、まかせろ」

とりあえず、白夜が居れば安心して背中を任せられる。

「お前の所為で、ユージンを貴族にできなかった！お前が来なければ・・・」
「なんと言われようと関係ないよ。大人しく捕まって貰うよ！」

いろんな事情があるとは思うけど、父ちゃんを信じて捕まえるだけだ。向こうの攻撃もそうだけど、僕の魔法も相手に効かない。となると、武器を持って戦うしか無い。「月詠」を構えファウンデルス卿に突撃する。ファウンデルス卿は腕を動かすけども、その度に攻撃は僕の目の前で弾けて消えるようで、実害は無い。

「くっ、厄介なやつめ」
「褒め言葉と思っておくよっ」

偉いさんっぽい人なので、こういう接近戦に慣れていないと思ってたけど、思った通りだった。「月詠」をバットのように振り回して攻撃しているんだけど、さっきから当たってばかりで、逆に怖い。当たる度に、「うっ」とか「ぐっ」とか言うし。痛いだろうから当たり前だろうけど、こうなるとなんだか弱いものいじめしてるようで嫌だなぁ・・・

ファウンデルス卿は、よろめきながら執務室の奥にある扉へと逃げていく。途中で机にぶつかったりしてフラフラになっている。僕はいい加減諦めて貰う為にその後を追いかけた。扉から逃げられては困るので、急いで先回りをする。

「待て光司、その扉に近づくな！」
「え？」

父ちゃんの厳しい声にはっとして振り向いている隙に、ファウンデルス卿が僕を扉に押し付けるように拘束した。そして僕の首には何か鋭利な物。

「ぐっ、このっ放せ！」
「うまい具合に掛かってくれてありがとう。さぁユージン。この扉の意味は分かるか？」

扉の意味って・・・大方どこかに脱出する魔法でも掛かってると思ってたんだけどそうじゃないんだろうか？　なにかのトラップなんだろうか？

「この扉には転移装置が二種類あってな。今はどうなってるんだろうなユージン」
「くそっ、やっぱりか・・・　ワザとらしくそっちへ行くと思ったらそういう訳か」
どうやら父ちゃんが扉に何かを仕掛けていたらしい。なら安全なんじゃないの？
「一つは城の外へ脱出できる装置で、何かあった時に非常に役に立つものだ。だが、もう一つは危ないものでな。使えば確かに一時的に助かるだろうが、普通なら使おうとは思わない代物だ」
「それは一体・・・？」
助かるけど使おうと思わない？　なんだろ、なぞなぞか？
「異世界に通じるのだよ。この世界に見切りを付けた時にでも使おうとしたんだろうな。ユージン陛下は、いざという時に異世界に旅立とうとしていたのだよ」
「くっ・・・そういうつもりで作ったんじゃねぇ！」
「いいや。この世界から逃げるつもりでも無ければこんな物作るわけが無い。言い訳は見苦しいぞユージン」
心底、あきれ果てた口調で父ちゃんを詰るファウンデルス卿。捕まってるから顔は見えないけどもきっと見下した目で見てるんだろう。
「どこの世界に飛ぶか分からないが、万が一でも元の世界に帰れる可能性に賭けたかっただけだ！　元居た世界に戻ろうとして何が悪い！」
「それが既に逃げだと言うのです。この世界で王となり責任が無い

とでもお思いか！　この装置の存在を知った時の私の思いが分かりますか！」

ファウンデルス卿はかなり怒っているようで、僕を捕まえる力が強まっていく。

「だが、もういい。とりあえずあなたのご子息を放り込めば私の溜飲も少しは下がるというものです」

「待て！　何が望みだ！」

「あなたが苦しみ、私がこの国の王になる事ですよ。ご子息が異世界に行けばそれが簡単に実現する」

王の印を持つ人間が居なくなれば、ファウンデルス卿を止める人間は居なくなる。そうなれば父ちゃんも他の皆もやられてしまい、ファウンデルス卿の思い通りになる。色々な思惑が交じり合い、じりじりと扉周辺に敵味方が集まり隙を見逃すまいと息をつめている。

そして、その静寂を破ったのはリュート。勇者リュートであった。

まさかリュートが動くと思っていなかったのか、ファウンデルス卿はあっさり吹き飛ばされ、僕の拘束を解いてしまう。そこをすかさずリュートが引っ張り、ファウンデルス卿から引き離してくれた。

「あなたが誰かは知りませんが、親子を引き離そうというのは感心できません！」

相も変わらず澄んだ声で、堂々と言い放つリュート。何時の間に気付いたのかは知らないけど、どうやら憑き物が落ちたように晴々とした顔をしていた。

「大丈夫ですか？　とりあえず助けましたけど・・・良かったですよね？」
「うん、ありがとうリュート助かったよ」
「え、あ、僕の名前を知ってるんですね」

どこか、頼りなげな瞳を向けてくるリュート。「グッドラック」は一体何をしたんだろう？

ファウンデルス卿が、何か動いているようだけどそれは全て僕の前で霧散している。リュートの事も気になるけど、ファウンデルス卿をどうにかするのが先だ。あまり追い詰めると何をしでかすか分からない。先ほどの出来事は情けをかけていてはこっちがヤラレルというのが良くわかった。もう何もできないように「月詠」を思い切り叩きつけファウンデルス卿を気絶させ即座に拘束し、床に転がしておく。

「これにて一件落着・・・だよね？　もうどんでん返しは無いよね、父ちゃん」
「よくやった光司。あとは、俺が宣言するだけで一応落着だ。みんなおつかれ！」

なんともあっさりな終わり方に、呆然としていた皆だったけど、父ちゃんの宣言でそこにいる皆が沸き立った。ようやく、一応の決着がついたのであった。

そして決着（後書き）

ちょっと色々消化不足のままで終わります。毎日暑くてパソコンも熱くて、汗だくになってます。クーラー？　そんなものは家には無いのです！

ここで会ったが百年目

クーデターの首謀者ファウンデルス卿を捕らえ、一応の決着がついた今回の騒動の最後の締めを行うべく、玉座の間へと向かう。この国の王様である父ちゃんが玉座の間から国民に対して終結宣言を行うそうだ。それでようやくファウンデルス卿に付き従っていた兵士達も沈静化し、安全になるようだった。

「雨・・・降るのかな」

湿った空気が水の匂いを運び、しばらくすれば雨が降りそうな気配を届けてくれる。そういえばこっちの世界に来て雨が降るのは、初めて見るかもしれない。今回の事件の首謀者ファウンデルス卿は、父ちゃんの右腕としてずっと働いてきてくれた功労者で、かなりの事を取りまとめてきたそうだ。大貴族にも拘わらず、貴族を排除したい父ちゃんの意向を汲んで法案を作成し根回しをしてきた人物だったらしい。だけど、今回の件で露呈した貴族の血の呪縛。これがある限り、いくら父ちゃんの言う事に賛同している貴族であっても結局は反対する事になってしまうようだ。むしろ反旗を翻す様になる。

「困ったもんだなぁ、色々と。貴族っていうもんをまだまだ舐めて見ていたようだな、俺は」

父ちゃんもその事を考えていたのだろう。いかにも困ったように頭をかいている。それにもう1つ懸念事項が。

「父さん、印が無いと貴族って抑えられないんじゃない・・・？大丈夫？」

「それも困った事なんだよなぁ。王の印に貴族達は逆らえないっていうのは伊達じゃ無かったんだなぁ・・・はぁ困った困った」

おおよそ人対人での戦いで、でたらめな強さを発揮していた貴族。あんなのがうじゃうじゃ居るとなると、面倒な事になるのは間違いないよねぇ。何故か貴族に対しては、平民の人達は力を十全に発揮できないようだったし。この世界がそういうルールに縛られてるように見える。

「で、父さん。この印って父さんに返す事ってできないの？」
「俺の時は、おまえに渡したいって中の奴に頼んだらできたけどな。中の奴に頼める？」
「え？　中の奴って何？　印に誰か居るの？」
「あー・・・おまえって印の力って、ほとんど使ってないんだっけか。それじゃあ中の奴は出てこないよなぁ。精霊はともかくとして」

そもそも印の力をどうやって使えばいいか分からないし。ファウンデルス卿との戦いでは自動で攻撃を無効化してくれてたけど、意識的にしていた訳じゃないからなぁ。もっと攻撃を受けて、中の人？が出てくるまで粘ってた方が良かったのかな？

「まぁ、中の奴が出てくるまではそういった事はできないと思うぞ。それにおまえにはあんまり印の力を使って欲しくは無いんだよなぁ。事情は言えないんだけどな。」
「前もそんな事を言っていたよね。でもどうするの？　印が無くても言う事聞きそうなの？」
「難しいだろうなぁ。あやしいと思ったら即、貴族の力を試してくる奴も居そうだし。光司はそういった力をぱっと防御できるアイテム作れない？」
「あー・・・」

どうだろ？　あの力って魔法とか物理的になにか飛んできてるって訳じゃ無さそうなんだよね。セリナやミミに渡していた結界がまったく意味無かったようだったし。結界が効かないとなると違う方法で無効にするか、魔法だろうと超能力だろうと、力であれば無効にしてしまう装置を作るか。何が有効になるか分かんないので両方作ればいいか。

「なんとかなるかも？　だけど、魔力をどか食いしそうだからずっと使いっぱなしとかは難しいかもしれないよ」
「いや、一時的にでも防げればそれで良い。助かるよ光ちゃん」

嬉しかったのか、僕の頭をなでぐりする父ちゃん。ひさしぶりに撫でられるけど恥ずかしいから止めて欲しい。

「ちょっと、止めてよ父ちゃん！　はなせー」
「わはは、わりぃわりぃ。嬉しくてつい」

そんな僕達の様子を参加するでなく、止めるでなく、じっと見守っているセリナ達。こういう時は助けて欲しいなぁ。ふとセリナと目が合うが、ついと逸らされてしまう。なんだろう？　セリナの様子がちょっとおかしい気がする。僕何かしたのかな・・・？

「セリナ、大丈夫？」

僕が声を掛けると、びくっとしてからこくこくと頷くセリナ。なんだかぎこちない動きだ。アバターシステムを使っているせいでは無いと思うんだけど、どうしたのかな？

「はい大丈夫です、コージ」

「でも、なんだか元気が無いみたいだけど・・・？　その・・・僕なんかした？」
「いえっ、そんなっコージが悪いんじゃなくて、わたしが・・・そのっ・・・」
少し涙ぐんだ表情でこちらを見上げるセリナ。ん、あれっ？　あいつは！
バシュン！
何かが僕の前で霧散した気配があった。貴族の力か！
「待てっ！　逃げるな！　そこの貴族！」
奇襲に失敗した奴は、即座に逃げ出した。あいつはセリナを攫った奴だ！　名前は・・・忘れた！　どこかの次男坊！　屋敷を出払ってたのはここに来てたせいなのか。あいつを野放しにしてたら、またなにか悪さするはずだ。
「あいつは、エディン家の次男坊ヒューイか。貴族の力は家長にしか受け継がれないのに何故だ？　油断するなよ光司」
「うん、分かった。セリナ、ミミ行くよ！」
「「はいっ」」
父ちゃんは事態を収束させる為に、宣言をしに行くのでここで別れる。白夜は念の為、父ちゃんに着いて行って貰った。
「ここで会ったが百年目！　今までの借りを返させて貰うよ！」
テンション上がってきたぁ！　あいつ用に作っておいた色々な道具

が今役に立つときが来た！　まずは、これだ。

パシュパシュ！

逃げながらも、何度も僕に向かって力を揮うヒューイだがそんなのは効かないよ。そろそろこっちの攻撃を喰らえぇ～～～！　そして、ぽいっと手に持ったアイテムを投げつける。

つんつんこちょばし棒。

とってもくだらない物だと思う。だけど、考えて見て欲しい。逃げている最中にただでさえ必死に走っているのに、こちょばされた時を。到底まともに走る事なんてできないだろうし、きっと物凄く腹が立つと思う。そう僕はあの貴族を徹底的におちょくる事にしたんだ。ぶんぶんと飛び回る棒は、的確にこちょばすポイントをつつきまくり、逃げ回る。笑いながら逃げる姿は物凄く滑稽だ。

「ぷっ」

「うふふふ」

現にセリナもミミもおかしくてたまらない様子で、追いかけている。

「くそっ、わはっやめっやめんかっ！　はっこのがっき、うひゃひゃ」

もう無茶苦茶です。だけど、もっと馬鹿になって貰わないと！　いけっ第二弾！

髪の毛一本抜き機！

説明しよう！　これは、髪の毛を一本だけ抜いていく優れ物のアイテムなのだ、以上！　あ、髪の毛が全部抜けるまで止めないジェノサイドモードもあるよ。そして勿論これはジェノサイドモード発動だぁあああああ！

一機だけだと、時間が掛かりそうなので２０機ほど一斉に投げつける。きっとあっという間に太陽が拝めるね。

「いっ、なんだ、わはぁっ、えぇぃやめっ、ちょっ、なんだ、おいぃ」

ぷちぷちと髪の毛を抜かれると痛いよね。だけどこちょばしは続行してるし何がなんだか分かっていないようで、滅茶苦茶に動きまくっている。そして、少しずつうっすらになっていく髪の毛。変な風に残してる部分があるのが、見てて楽しい。

でも、これってあれだね。見てる方も可笑しくて堪らない。今までなんでこんな奴が怖かったのか不思議なぐらいだ。一応、ヒューイも力を使って追い払おうとしているんだけど、この道具はどれもこれも小さい上にすばしっこいので、全然当たってない。

そして、さらに非道な道具を使おうと思う。

これを作る時さすがに人間としてどうなんだ？　と思って一応人間の尊厳を守れるようにはしたんだけど、それでもやっぱりその姿は人に見せられないと思う。でも使うよっ！

いけっ！　催しちゃう君！

つるんとした球のような形をしていて、それを見ていると和むよう

にふよふよとした形になるようにし、色もきらきらと変わるようにしている。だけど、こいつにぷすっと刺されると途端に便意が襲ってくる。2秒ぐらいで収まるんだけど、かなり強烈なのだ。実際には何かが出ちゃうって事は無い筈なんだけど、現在我慢してる最中ならきっと出ちゃう。

「はおっ!?　くっひひゃっ?　いっ、ほひっ?!」

なんだかすごい事になっているヒューイ。ちょっとやりすぎたかもしんない。ちょっと人としてどうか?　という姿になっちゃってるし。これぐらいで反省するかな?　すでに逃げる事などできずに、寝そべって時折びくびく動く塊になっちゃったヒューイ。貴族もこうなれば何もできないだろう。

気付けば、「777」を捕獲している場所までやってきていた僕達は、ヒューイを拘束して王宮へと連行していった。結局何がしたかったんだろうね、この貴族は。

ここで会ったが百年目（後書き）

くだらないアイテムです。個人的に髪の毛抜かれるアイテムは恐怖です。はげになっちゃう。

後片付け

無事にヒューイを拘束し、光る浮き輪君をはめて軽々と引っ張っていく。髪の毛一本抜き機は役目を果たしたのでしまっているが、つんつんこちょばし棒と催しちゃう君はいつでも動けるように待機している。

「でもこの人って次男坊なんだよね？　貴族の力が使えるのって家長だけじゃなかったっけ？　なんで使えたんだろうね？」

「うーん、家長を交代したんでしょうか？　でも、そうなるとおかしいですよねぇ」

「なにか目覚めたんだよぉ、きっと」

セリナはともかく、ミミ、それは無いと思うんだけど。なんにせよ、このまま皆のところへ連れて行ってふんじばっておけば、後で何かわかるだろう。ヒューイを捕まえて気が抜けていたんだろう。気付けば目の前に炎の球が飛んできていた。

「っ！？」

咄嗟に逃げようとしたけど、それより早くミミが僕とセリナを突き飛ばす。

ゴガンッ！

これは球魔法?!　って事は・・・

「エドッ！?」

「・・・そうだよコージ、その兄さんは返して貰うよ。悪いけど」

気がつけばエドが静かに佇んでいた。球魔法の爆発のせいでヒューイは僕達から離れた所へ吹き飛び、エドは悠々とヒューイを助け起こす。

「・・・遅いぞ、このガキ。あとでどうなるか分かってるだろうな？」

「すみません」

無様な姿を晒していながらもヒューイはやっぱり貴族で、エドに対して尊大な態度を崩さなかった。その尊大な態度からあいつがエドの弱みを握っているとしか考えられない。

「コージちゃん！　あ、ここに居たか。逃げられないぞそこの坊主！」

ぞろぞろとやって来たのは、エディさん達。エドを追ってここまで来た？

「コージ、そこの坊主は「７７７」に乗ってた奴なんだ。絶対に逃がしちゃ駄目だ」

「なるほど・・・」

真似の印を持つエドワード。彼なら父ちゃんの何かを真似て「７７７」に乗る事ができる。コックピットが丸見えになった時、動きが鈍ったのはフレームに乗って戦っていたのが僕だって分かったから逃がそうとしてくれたんだろう。だけど、ヒューイという駄目貴族に協力させられてるのは見逃せない。

「エディさん。悪いのはあそこのツルピカのヒューイなんです。あ

いつがエドを脅して戦わせていたんです」
「・・・あいつヒューイなのか」
その言葉を合図にエドは何事か呟く。
「コージ。悪いけど俺逃げるから。じゃあな」
「ちょっと、エドッ！　待って！」
その台詞が終わるか終わらないかぐらいに、エドとヒューイの姿が掻き消える。転移魔法か?!　エドは一体どれだけの引き出しを持ってる?
「どこへ転移したか分かりますか?」
「いや、無理だろうな。これだけ町の中がごったかえしている状況だと波が分からん」
普段であれば追跡できたであろう転移魔法は、戦闘の余波のせいで追いきれる物では無くなった様だ。僕のアイテムでもエドかヒューイの血か何か無いと探せない。ヒューイの髪の毛はどこかに落ちてるかもしれないけど、エドの炎の球魔法で吹き飛ばされてるみたいで、全くわからない。エドがヒューイに使われているとは言ってたけど、まさかこんな形で出会うとは思っても見なかった。
僕達がうなだれていると、父ちゃんの声が響いた。父ちゃんの無事を伝えるのと、今回の騒動は無事解決した事を告げる宣言だ。町のあちらこちらでファウンデルス卿の言葉を信じて戦ってた人達も、これでひとまずは落ち着くだろう。
だけど、ヒューイが逃げおおせたのは残念だ。家長ではないあの男が何故貴族の力を使えたのか謎のままだし、エドがヒューイのいい

なりになってるのも解決できない。でも、とりあえずの平和はこれで取り戻せた。

あとはグレイトエースの後始末を済ませ、ハイローディスの軍勢を国から追い払う事だ。向こうは一応こちらの要請を受けて国内を自由に移動しており、事態が収拾された今では早々に国に帰って貰う必要がある。そもそもがクーデターの首謀者のファウンデルス卿が呼んでいたので、正当な王の父ちゃんの要請ではない。そこらへんも含めて、今回の騒動の補償をどうするか決める必要もあるそうだ。

現在ハイローディスの軍勢がグレイトエースを出て四日目。この距離であればまだ飛行ユニットで簡単に追いつける距離である。なので、父ちゃんの「７７７」にも飛行ユニットを付けて追いかけさせ、交渉をする必要があった。勿論、グレイトエースには事態が収拾された事を知らない貴族たちが押し寄せる可能性がある。そいつらを叩きのめす為には僕がグレイトエースに居残る必要があった。

「じゃあ行って来る。すぐに帰ってくるから無茶はするんじゃないぞ」

「うん、分かった。一応、言われた道具は作っておいたけどずっとは使えないから気をつけてね、父さん」

「分かった。じゃあな」

そう言葉を残し「７７７」に乗り込む父ちゃん。アラン隊長や今回突入に参加した人達のほとんどを引き連れハイローディスの軍勢を追いかけていった。ちなみにエディさんは僕と一緒に居残りである。

「コージちゃんと居るほうが、色々ありそうだしね」

「失礼な。僕はトラブルメーカーじゃありませんよ？」

エディさんは、どうも僕をからかって遊ぶのが楽しいようだった。
ロバスから呼び寄せたエース級の人はエディさん以外居なくなったんだけど、元々グレイトエースに駐留していたパイロット達が居るので、安心は安心だ。

さて、この間にセリナと話をしようと思う。

昨日からセリナの様子が何か変だった。僕が何かしたせいで落ち込んでるのかとも思ったんだけど、そうではないみたい。あと白夜についても何も突込みが無いのも変だ。いつもなら真っ先に問い詰めてくるはずなのに。すごく元気が無くて落ち込んでるんだよねぇ・・・セリナが落ち込んでるから、慰めるとかじゃないんだけど、話をしない事には何も解決できない。

セリナの部屋の前で一度深呼吸をする。

すーはー

「セリナ、良い？　入るよ？」
「はい、どうぞ」

ノックをして返事を聞いてからドアを開けて、部屋に入る。今回どっきりイベントはなしだ。部屋に入ると、ベッドに腰掛けているセリナとくつろいだ様子でベッドに転がっているミミが居た。

「あ、コージいらっしゃぁーい。どうしたのぉ？　お出かけするのぉ？」
「ううん、違うよミミ。それは後で。今はセリナとお話しようと思って来たんだ」
「ミミ、邪魔ぁ？」

「ううん、そんな事ないよ。だけどちょっとだけセリナと二人きりにさせて貰えるかな？」
「うん、分かった・・・」

そういって、部屋から出て行ってくれるミミ。後で埋め合わせしないとね。

「えっとセリナ。どうしたの？　昨日から変だよ？」
「その・・・」

やっぱり元気が無い。

「僕には言えない事？　それならヒロコでも呼んでくるけど・・・」
「違います。いえ、そうなんですけどヒロコに言っても駄目なんです」

そこで観念したのかセリナは僕をまっすぐ見て話し始めた。

「私は貴族が怖いのです、コージ。昨日の戦いでも貴族が正面に出てきただけでどうしようもなく怖くてたまりませんでした」
「うん、それで」

僕はその場面は知らないので、セリナがどういう状態になったか分からない。

「今までもそうです。何かするときに貴族が敵に居るというだけで、絶対に勝てないと思ってしまうのです」
「そんなに怖いなら仕方ないんじゃないのかなぁ？　貴族ってそういう怖い存在なんだって聞いたし」

この世界では貴族というのは絶対とも言える権力を持ち、傍若無人にふるまう種族とも言えるほど無茶を繰り返しているようだし。そりゃ怖くて当然だよね。

「いえ、昨日のファウンデルス卿もわたしが力を十分に発揮できれば、なんとかできる相手でした。だけど、貴族に立ち向かう事ができなかったばっかりに、皆を危険にさらしてしまって・・・」

そういって静かに泣き始めるセリナ。

「いくら気持ちを奮い立たせようとしても駄目だったんです。どうしても、あの貴族の空気を感じた途端に何もかも考えられなくなってしまうんです・・・」

「それじゃあ戦わなくて良いんじゃないかな」

僕のその言葉にセリナが息を呑むのが分かった。

「貴族と戦えないんじゃ、コージの役に立てないじゃないですかっ！　私はもう要らないって事なんですかっ！？」

普段もの静かなセリナが大声を上げて怒っている。だけど、僕はそんな事を言いたいわけじゃない。

「ううん。セリナが要らないとかそんな訳ない。貴族とかと戦うのは父ちゃん達に任せて僕達は裏方に回ればいいし、無理に戦う必要なんて無いんじゃない？　セリナは凄い魔法を使えるのは間違いないんだけど、それ以外は普通の女の子じゃないか」

「うっ・・・」

「何か勘違いさせちゃってるみたいだけど、僕はセリナが魔法を使えるってだけで一緒に居るわけじゃないんだよ？　だから、魔法が

使えないってだけで自分に価値が無いとか思わないで？　ね？」

「う、うぅぅ・・・」

セリナと居ると楽しい。それが僕の一番の理由。タタ村を出てまで僕達に一緒に付いて来てくれて、この世界に疎い僕を馬鹿にもせずに色々と丁寧に教えてくれるセリナ。むしろ僕達が負担をかけすぎてるせいで、逃げられてしまわないかと考えたりするぐらいだ。

「じゃ、じゃあ、これからも一緒に居ていいって事ですか？」

しゃくりあげながらそんな事を聞いてくるセリナ。いまさらなんて事を聞くかなぁ？

「当たり前だよ。というかセリナが居ないと駄目なんだ」

主に知識の足りない僕達のアドバイザーとして。なんでも馬鹿にせずに教えてくれる人ってすごく貴重だなって僕は思うんだ。色々知っている人間って、こんな事も知らないの？　ってすごく馬鹿にしてくる人も居るから嫌なんだ。まぁ向こうからしたら、それぐらい自分で調べろって気持ちなんだろうけどね。

「はいっ、コージに一生付いて行きます！」

「う、うん」

先程までの泣き顔と違い、すごい満面の笑顔で元気よくそう答えてくれるセリナ。一生はどうかと思うけど、恋人とかできたらいくらなんでも離れるよね？

「それじゃあ、早速なんですが・・・」

さっきまでの、明るい雰囲気がまた何か不穏な空気へと戻る。いや、何故に？

「昨日連れてきた黒髪の女の子のお話をじっくり聞かせて貰いましょうか、コージ」

そうやってにっこりと微笑むセリナの顔はひさしぶりだった。目が笑ってなくて怖くてたまらないけど、いつものセリナが戻ってきてほっとしている僕がそこには居た。

後片付け（後書き）

これでバルトス国動乱は終結です。

これから学園編に突入していく予定です。たぶんきっと・・・

前半が大幅に抜け落ちてました。読み返してびっくりです・・・ごめんなさい。（七月二十二日修正）

新生活の第一歩

クーデター終結からはや一週間。

飛行ユニットでハイローディス軍の度肝を抜き、その戦慄の覚めやらぬ内に交渉をすすめなんとか丸く収めて父ちゃん達は帰ってきた。疲れて帰ってきた父ちゃんが言うには狐と狸の化かしあいだったそうだ。お疲れ様、父ちゃん。

父ちゃんが出発してからグレイトエースは平穏そのものだった。貴族たちが続々と押し寄せると思っていたんだけどそんな事は全く無く、どこかで父ちゃんの宣言を聞いて領地へと戻って行ったらしい。だけど今回の件について黙って済ませる訳には行かないので、三日後には貴族の意見というか弁明を聞くために招集するそうだ。そして、今回の件で貴族たちの血の呪縛が良く分かった父ちゃんは、あまり刺激しすぎるとまずいのが分かり、しばらくグレイトエースの復興の為という名目の元、貴族の長子を呼び寄せて働かせる措置をとるそうだ。最初は税金を上げて金を取ろうとか言ってたんだけど、それだと結局住民が苦しむだけで、貴族は屁とも思わないだろうという事で、人質を取るという事になったのだ。政治って難しいねぇ。

さて、そういった政治には不向きの僕達はロバスのとある一軒家でのんびりしていた。というのも、僕がいきなり王様の息子ですよーって出て行っても何も良い事が無いのでしばらく隠しとおす予定だからだ。まぁ貴族の力なんて僕には効かないんだけど、父ちゃんに印が無くなったってばれるのがまずい。一応保険として、アンチ貴族パワーマシンを作ったから、お城の中では父ちゃんも無事なんだけど、それでも父ちゃんに印が無い事を知ってる人間が少ないに越した事は無い。ヒューイが言いふらしているだろうけど、お城にい

る限り貴族の力では父ちゃんに傷1つ負わせられないので、その内そんな噂も消えてなくなるだろう。

そして、何故一軒家に居るかというと。

「ミミちゃん、お母さんと一緒におやつ作らない？　甘くてぷりぷりでおいしいの」

「う、うん。作りたい！　食べたい！」

最近わかったんだけど、ミミは集中すると語尾が普通になるようだ。いまもよっぽど食べたかったんだろう、語尾がまったく間延びしてなかった。クーデターの討伐の間、ずっと僕達と別れてここに居た母さん。その鬱憤を晴らさんとばかりにミミにかまい倒し、セリナを連れ出し、ヒロコと遊び倒している。白夜まで着せ替えを楽しんで遊んでるようだった。僕？　僕はいっつも母さんと一緒ですよ。とほほ。

「ほら光司、はやく来なさい。あなたが来ないとできないでしょ！　もうっ」

「もうって・・・　それ僕の台詞なんじゃないかなぁ・・・」

台所でみんな並んで、プリン作り。作業を手分け・・・するほどでもないので僕がまとめて作る事になる。あれ？　母さんとミミが作るんじゃなかったっけ・・・？

その事に気付いたのは、みんなでプリンをおいしく食べて後片付けしている時だった。

最初はミミと母さんだけでこの家に住む予定だったんだけど、結局僕やセリナにヒロコ、白夜も加わってこの家に住んでいる。結構広

い家で、部屋もたくさんあるので皆が一部屋ずつ使っても大丈夫なのだ。それに、ロバスの冒険者学園に通う予定なのでこの家に住むのが都合が良いんだ。

すでに昨日に、編入試験を受けていて結果待ちである。それぞれ特技もあるのでたぶんみんな合格してると思うけど。

この世界に来て家族みんなで無事に再会できて、厄介事もほぼ片付いて僕もこの世界で生きて行くのに色々と学ぶ必要があるので、学園は丁度良い。ミミも過去が過去だけに知らない事の方が多いし。元の世界に居た頃は勉強なんかしようとも思わなかったんだけどこっちに来たら、やっぱり知らない事が多いというのは不安で、生きる為には学ぶ必要があると感じたのだ。

「主よ、今よいか？」

こんこんと軽いノックの音と共に白夜の声が扉の向こうから聞こえた。

「はい、どうぞ。白夜どうしたの？」

扉を開けて白夜を中に招き入れる。今日は長い髪を後ろでまとめて浴衣みたいな服を着ている白夜。

「珍しいね僕に会いに来るなんて、なにかあった？」

「それじゃ！　なんでお主はわしをほったらかしにするのじゃ。まったくもぉ」

「え？　毎日一緒にご飯食べてるし、一緒に住んでるじゃない？僕なんかした？」

どうして、僕の周りの女の子はこう不思議な台詞が多いんだろうか。

「一緒に寝ておらん！　風呂も別々だし、ちっとも構ってくれん！　わしの主の自覚が足りんのじゃ！　ひさしぶりに帰ってきてもハーレムはそのままだし、この破廉恥王！」

「いや、女の子とそんな事しちゃ駄目でしょ？　なにぶっ飛んじゃってるのさ！？」

白夜の台詞に面食らっていると、部屋の扉がバガンッと勢いよく開け放たれる。

「そうです、そういった事はまず私が最初にするんですよ、白夜さん！」

「ボクはとりあえず来たよ、マスターうっひょー」

「コージは最近、女の子を拾って来すぎだとぉ、思うなぁ～？」

またややこしくなってきた・・・　そしてヒロコ。君は最近どこかに頭のネジを落としてきてないか・・・？

「みんなお風呂は入って来たの？　だったら僕もお風呂に行きたいんだけども」

一人ずつ相手にするならともかく、四人も相手をするのはもう収拾がつかないのでお風呂に逃げようと考えた。だけど、そんな考えはお見通しの四人だった。

「じゃあ、みんなで一緒に行きましょう！」

「それは良いな！　主、準備してくるぞ」

「「賛成～！」」

「じゃあ、みんな準備してきて～」

「「「「はーい」」」」

バタン、ガチャッ、ガチャン。

ようし、うまく追い出す事ができた。もう今日はお風呂いいや。明日の朝にでもゆっくり入る事にしよう。

翌朝。

ベッドでぐっすり眠っていた僕は、隣に誰か寝ているのに気付き驚く。

「母さん？　物心ついた子供のベッドに潜り込むのはどうかと思うんだけど？」

「せっかく若くてぴちぴちになったんだから、有効利用しないと勿体無いと思わない？」

「そういうのは父さんにしてください。というかどうやって入ったのさ」

鍵をかけてさらにチェーンロックまでしてた筈なのに。

「な・い・し・ょ☆　言ったら次から入れなくなっちゃうもん」

「いい大人がもん言うな？　まったくもう、母さんも早く出て出て！」

「あんっ」

変な声をだすな。まったくもって恥ずかしい限りだ。朝の生理現象を悟られないように強気で母さんを追い出す。そんなのばれたらあの人は何をしでかすか分からない。

「エド、どうしてるのかなぁ」

今日も夢の中にエドは来なかった。彼が会いに来るなら。まず夢の中で約束すると思うのだけど、こないだ別れてからは全くそういった事はない。彼の能力は特殊だからきっと何かされてるとかは無いと信じたい。

今日あたり冒険者学園からの通知が来るはずだ。きっと皆合格しているので学園生活が今から楽しみである。可愛い子とか居るのかなぁ・・・？　今現在、可愛い女の子四人プラスワンに囲まれている生活にも拘わらずそんな事を考える僕はおかしいのだろうか。

僕も頭のネジを一本どこかで落としてきたんだろうな、きっと。

新生活の第一歩（後書き）

まだバルトス国はごたつきそうですが、勇司がうまく処理するでしょう。
光司くんは学園で何を見て、何を感じるのでしょうか。
目立つメンバーを引き連れてるので、何かと目をつけられそうです。

学園初日

初めて学校に行く朝は緊張する。

それは、初めて行く学校でうまくやっていけるのか、新しい環境に期待をしているのか、色々と学べる事に対して嬉しさを感じているのか、よく分からない。不安と期待がない交ぜになって、結局は緊張するという心に落ち着く。だけど、見知った四人が居るからそういった緊張も次第に解けていった。

そのかわり、何か面倒な事が起きるだろうという予感めいた物はあったが。

結局、学園の合格通知は皆に届いた。誰一人欠ける事無く無事に合格したのだ。年齢はそれぞれ違うのだが、みな同じ学年からのスタートになる。この学園は意外と年配の人も通っているそうで、色々な年代の人間が居るそうだ。

今日から学園に通うという事で、みんな髪型を変えていたのが面白かった。セリナはくくっていた髪を下ろして、ふんわりとしたパーマが掛かってる。この世界でもパーマってあるんだーって感動した瞬間だ。ミミは相変わらず髪を括っているのだが、ツインテールからポニーテールに変化した。心なしか色々と成長してる気がする。ヒロコはなんかベリーショートになっていて前にヒューイックで買った髪飾りを付けている。最初誰かわかんなかった、思い切りが良すぎるよ、ヒロコ。そして白夜。何故かこの子がツインテールになっていた。

「楽しみですね、学校って行った事無いんですよね、わたし」

「ミミもぉ、行った事ないからぁすぅっごく楽しみなんだぁ～」
「ボク、寝てていいかな？」
「我もあまり勉学という物はしたくないのぉ。戦闘とか破壊とかは得意なんじゃがなぁ」
「・・・」

人じゃない二人のあんまりな言葉に台詞を失う僕。一番常識を叩き込みたい二人に限ってまったくやる気が無いのはどういう事だろうか。

「ヒロコ、白夜。しっかり勉強しないなら離れに住んで貰うよ？」

そう家には離れまであるのだ。そこは本館から結構離れたところにあり、ちゃんと人が住めるような環境ではあるんだけど、どちらかというと人と会いたくない時に使う為のものであり、普段住まいするような場所ではない。そして、人が好きな二人は当然その場所を嫌がる。

「そ、それは嫌なのじゃ。せっかくこの姿になれたのに、あんまりな仕打ちじゃぞ！？」
「ボクがいくら自然が好きだからって、それはちょっと・・・」
「じゃあ、頑張って勉強する事。いいね？」
「「わ、わかった」のじゃ」

ようし、これで赤点取った日にゃ、あそこへ閉じ込める事にしよう。そうして、真新しい制服に身を包んだ僕達五人は、冒険者学園の門をくぐった。

「え、五人とも同じクラスですか・・・？」
「あぁ、そうだ。まぁ色々あるわけだ。あはは」

そう言って軽い調子で笑うこの人が、僕達のクラスの担任のセイベール先生だ。男装の麗人って雰囲気の男性だ。ん、男性なのに男装っぽく見えるんだこの人。本当は女性だ！　って言われてもしっくり来るね、うん。

「まぁ、全員同じクラスに入れた方が問題なさそうだしね。ま、観念しなよ」

観念しなよと言われても、なにをどう観念すれば良いのか分からない。そう言って教室まで案内してくれた先生は、先に教室に入り何事かをクラスに伝えている。良くある転校生イベントの台詞だろう。そのうち、入れと言われたので皆一緒に教室に入った。

かわいぃー！　きれーい、きゃーなどの台詞が飛び交い、僕に注目している人間は居なさそうだった。そりゃこんだけ可愛い子が四人も入ってきたら、誰でもそっちを見て喜ぶよね？

「コージ＝Ｈ＝アース、１６歳です。趣味は・・・読書にします。よろしくお願いします」

そう言ってぺこりとお辞儀をする。一応男なんで、一番最初に自己紹介をした。ちなみにＨはヒロセのＨで、アースは地球の事。本名でもないけど偽名でもない名前を名乗る。

「セリナです。その内セリナ＝Ｈ＝アースになると思います。歳は１７歳です。趣味は魔法の改良です。よろしくお願いします」

その挨拶はどうかと思うんだけど、セリナ・・・

「ミミ＝Ｈ＝アースです。１８歳です。お願いします」

ミミは緊張しているようで、これだけ言うのも必死だった。その姿を見てクラスの反応はたまらなく可愛い生き物を見た！　って感じになった。

「ヒロコです。１６歳です。昼寝が大好きです」

欲望の赴くままだよね、君は本当に。昼寝が大好きと言われてもどう反応すれば良いか分からないと思うよ、うん。

「白夜じゃ。歳は聞くな。趣味は完全破壊や徹底抗戦などじゃ。よろしく頼む」

そういえば白夜の年齢っていくつなんだろうか。ルーツだから結構な歳だよね。たぶん。そんな事を考えてたら白夜に凄く睨まれた。怖い怖い。

「さて、それでは転校生達は適当に空いてる席に着け」

いやそこは、指示する場面でしょセイベール先生。面倒くさくなって投げたな。僕はせっかくだから、前の方で空いてる席を探す。教卓のまん前という非常に人が嫌がりそうなポジションが空いているので、そこへ座る事にする。僕の後ろも空いていたのだけど、四人が取り合いになって、結局ミミがそこに座る事となった。さすがミミ恐るべし。

「へへぇ。コージと一緒だねぇ、良かったぁ」

「だねっ。がんばろうね、ミミ」

そのミミの言葉に振り向いて笑いかける。ミミが一番学校に来たがってたもんね。一緒に勉強して頑張ろうね。

「よろしくね、コージ君。はじめまして、私はセシリア・アデルハイド・ミラーです。良かったらセシリアって呼んでくださいね」

と僕とミミの様子を見ていた右隣の女の子とばっちり目が合い声を掛けられた。

「あ、よろしくねセシリアさん」

背中まで金髪を伸ばした、凛とした雰囲気の女の子である。もしかして貴族なのかなこの子って。こんな貴族が来そうに無い学園なのに居るもんなんだねぇ。

「くすくす。お察しの通り貴族ですけど、あまりそういった事は気になさらないで欲しいですわ」

僕の視線が何かを語っていたようで、セシリアにそう釘を刺される。

「ごめん、じろじろ見すぎだよね。気をつけるね」

「いいえ、どういたしまして」

そうして、初めての授業が始まった。

最初の授業は剣術についての授業で、基礎体力をつける為に筋力トレーニングをしている。クラスの皆がそうやってトレーニングしている傍ら、僕達は体力測定を行っていた。腕立て伏せ、腹筋、えびぞり、５０メートル走、持久走。そういった測定の結果、ミミはやっぱり断トツの成績でＡ判定で、白夜も当然のようにＡ。セリナと

ヒロコも意外と凄くB判定だった。僕は至って普通のC判定である。成績はA～Fまでのランクがあり、ごく普通の高校生の僕は大した成績じゃないのは思った通りなんだけど、女の子に負けてるのはちょっと男として駄目だよね。あははのはー。

だけど成績を気にしているのは僕だけだったようで、セリナ達は特に失望したとか言う表情ではなかった。不思議そうな顔はしていたけどね。

「主は本気を出しとらんのぉ。目立つのが嫌とかいう奴なのか？」
「え？　いや僕の本気でだいたいこんな感じなんだけど、変かな？」
「質問に質問で返すな。普段の戦闘を見ているとAぐらい楽勝で出せると、踏んでおったんじゃが、そこはどうなんじゃ？」

白夜は眉間にしわを寄せながら、問いかけてくる。よっぽど不思議だったようだ。

「えー、別に手を抜いてる覚えは無いんだけどなぁ。みんなに負けてるのはちょっと恥ずかしいけどね」
「大丈夫です。そんなコージも大好きですからっ！」

急に出てくるセリナ。今は運動をするという事でポニーテールにしている。ポニーテールが大好きなので見とれてしまう僕。可愛いなぁ。

「えっと、なんだっけ。とりあえず僕は鍛えないと駄目って事だね」
「ミミと一緒に頑張ろうね？」
「いやーミミに付き合って貰うのは悪いよ、さすがに。スペックが違いすぎる・・・」

僕の訓練に付き合わせるのは、勿体無いよね。ここは少しでも近いほうが良いと思う。

「では、わたしが・・・」
「ヒロコ、一緒にやってくれる?」
「ボクならいつでもオッケーだよ、マスター！　じっくり付き合ってあげよう！」
「よろしくっ」

ヒロコとハイタッチをしていると、何故かセリナががっくりしていた。なんで?　まぁ基礎体力については鍛えておいて損はないはずなので、いっちょ頑張るとしますか！

学園初日（後書き）

ヒロコ。最近空気なヒロコ。戦闘には絶対不参加のヒロコ。

学園編です。古代遺跡へどんどん挑もうと思います。モチロン、フレームもいろいろ弄っていきます。

僕だって普通に幸せが欲しい

「はぁ、疲れた～」

今日一日の授業が終わり、机の上にぐでっとした。

「コージ君達は、今日は検査とか測定とかそんなのばかりでしたものね」

くすくすと笑いながら話しかけてくるセシリアさん。セシリアさんの言うとおり、僕達はずっと測定ばかりしていたのだ。やっぱりというか、なんというかミミは武術などの物理攻撃の面で凄い評価を受け、セリナは魔法関連の評価が物凄く高いものであった。白夜とヒロコに関しては、特異存在としての評価が成されていた。まぁフレームと精霊だからとんでもない力があるんだろうな、きっと。

そして僕はというと、なんとも平凡な成績しか残せなかった。可もなく不可もなくというものだ。あえて良い所を言うならセリナに教えて貰ってた炎の系統の分野のみ良い評価だった。

「だけど、みなさん凄い才能をお持ちなんですねぇ」

「うん、皆凄いんだよ。僕なんかと違って凄い才能があって、それをちゃんと鍛えてるっていうか。こうやって評価されると嬉しいけど、頑張らないと駄目だなぁって痛感させられちゃうねぇ」

こんな凄い子達が、何故か僕と一緒に居てくれる。そんな僕の取り得といえば・・・おかしな道具を作れるのと、この世界に無い魔法を使える事・・・かな？　この学園では使いにくい才能だよね。うん。その点、セリナ達は皆にわかり易い才能を持っている。

「コージ、お家に帰りましょ」

帰り支度が済んだセリナが僕を呼びにきた。ミミ達もすでに準備はできてるようだ。

「分かった、帰ろう。じゃあセシリアさん、また明日」

「はい、また明日」

セシリアさんに手を振って、教室を出る。広い校内なので門を出るまで十分は優にかかる。しかも一学年は四階に教室があるので、無駄に階段を上らないといけない。鍛えてると思えば、苦にもならな・・・い訳が無いよね。しんどいものはしんどいです。

「コージは、早速新しい女の子をひっかけましたね」

「えぇ？」

門に向かって歩いていると、不意にセリナがそう呟いた。目がじとーっとしてる。

「いや、隣の席の人ってだけでひっかけたとかそういう訳じゃない・・・よ？」

「しかも貴族の方ですし。貴族の方なら私が何も言えないのを知っていてひどいです！」

「そ、それは言いがかりというか、考えすぎだよ～・・・」

セリナが貴族を苦手だというのは知っていたけど、セシリアさんみたいな普通に見える人でも駄目っていうのは驚いた。というか、セシリアさんとセリナが仲良くなれれば意外と貴族に対する苦手意識が消えたりしないだろうか？　貴族って人外みたいな所があるけど

話をしてみれば、案外普通の人間と変わらない。そういった所をセリナに知って貰えれば貴族を怖がる事が少なくなるかもしれない。所詮、貴族も人だって分かればきっと。

「むぅ・・・」

黙って考え込んでる僕をみて唸っているセリナ。髪型が変わって更に可愛さがアップしている。一人で歩いていたらナンパとかされそうだよなぁ。

「あのねセリナ・・・」

このまま黙っていると、セリナに変な勘繰りをされそうなので、僕の考えを話してみた。

「うーん・・・確かにセシリアさんからは、そんなに怖いというイメージが無いですね。ですけど、攻撃できるかと言われればやっぱりできないと思います」

「そっちの方が都合が良いと思うよ。仲良くなってきて、貴族がどういう人間なのかが分かってきてから、攻撃できるようになれば、貴族恐怖症を克服したって事にならない？」

「でもぉ・・・うーん・・・仲良くなれますかねぇ・・・」

そういえば、今でこそ普通の表情をしてくれるけど、ちょっと前までは知らない人にはすっごい仏頂面で会話してたもんね。でも、今のセリナなら大丈夫じゃないかなぁ。

「そこらへんは、僕も協力するし皆も協力してくれる・・・よね？」

「「「うん（む）」」」

今まで黙って聞いて歩いていた皆は、一斉に返事をしてくれる。僕とセリナが話をしている間、じゃんけんをずっとしていたようだけど・・・何を賭けてたんだろう・・・？

「じゃあ、明日から貴族の人とも仲良くしていこう。ねっ」

なんにせよ、クラスメイトと仲良くなるのは良い事だよねっ。明日から僕もがんばろっと。

「で、主よ。今日こそ誰と入るか決めて貰うぞ」

鼻から息がでるぐらいの勢いで、胸を張って脈絡もクソも無く宣言する白夜。人の事を破廉恥王とか言うくせに、そういった事はさせようとするのが分からないっ！　万が一言う事を聞いて風呂に一緒に入ろうものなら、何を言われるか分かったもんじゃない。

「絶対いやだっ！　僕は一人で入るんだぁあああああ！」

「あ、逃げおった！　待てぃ！」

「コージ待ってぇ～～～！」

もじもじとしているセリナとヒロコ以外は、僕を追いかけてきた。だけど、僕の平穏を保つためには捕まる訳には行かない。行かないのだ！

どうにかこうにか家まで逃げ切り、部屋に立て篭もる。頭脳戦が苦手な二人で助かった。くそぉ、女の子とお風呂なんてそんな素敵うらやましい事なんか・・・だめだ想像しただけで鼻血でそう。しかも一回許しちゃうと後はそれが当然になっちゃいそうで怖い。まだ女の子と付き合った事もないのに、女の子とお風呂に入って出血多量で死んじゃうとか辛すぎる。

「で、どっちと入るんですか？」
「ボク・・・だよね？」

しまったぁあああああ！？　裏をかいたつもりがセリナにしっかり見破られてたぁ！？　もじもじしてたからてっきり、追って来ないとばかり・・・不覚。

「いや、あのね。そういう事はやっぱりお付き合いしてる人とするんじゃないかなぁ？」
「じゃあ、付き合って下さい」
「ボクもボクも」
「付き合うのは一人でしょうがっ！？　ていうか、どうしてこうなったぁ！？」
「だって、コージを今のうちに繋ぎとめておかないと、学園できっと奪われます！」

いや、今日の教室でも誰も僕なんか見てなかったよ？　買い被りもいい所だと思う。

「それはないない。だって僕って別にイケメンでもないし。心配しすぎ～」

というか、今の状態が女の子と一番接触している。今までは、女子と話しするとか遊びに行くとか、まったく無かったもんなぁ。それに僕の気のせいじゃなければ、セリナ達って僕の事・・・いや、無いか。ちょっとちやほやされたぐらいで、勘違いしてちゃ駄目だよね。

「にぶちん。もう知らない」

「にぶちーん」

ぷいっとそっぽを向くセリナ。ヒロコは面白がって真似をしている。最近、ヒロコの行動基準が良く分からなくなってきた。なにか宇宙から電波でも受信しちゃったのだろうか・・・

「とりあえず、男と一緒にお風呂に入りたがる、はしたない女の子は駄目です」

「「むぅ」」

建前はそう言っておこう。ここで本音ぶちまけたらきっと引かれる。

「でも、それだときっと収まらないのが君達だ！　よって水着着用ならオッケーだ！」

「「はいっ！　準備してきます！」」

目の色を変えて部屋を出て行く二人。だけど、扉をロックできないように鍵を壊して、チェーンロックも破壊していくところは微妙に冷静だ。どこまで僕の理性がもつか分からないが、これ以上はこんな騒動を起こすのはごめんだ。しかし、お風呂場で水着を着た女の子と一緒・・・でも裸で来られるよりは大丈夫だ、きっと・・・

「光司も成長したわね・・・母さん嬉しい」

「疲れて突っ込む気も起きないよ、母さん」

「まぁ、しばらくは覚悟しなさい。あなた、今朝だれも褒めなかったでしょ？　誰のためにお洒落したと思ってるんでしょうねぇ、この唐変木は」

「え？」

「ううん、なぁんでもなーい。それじゃご飯は後で食べれるようにしておくわねぇ～」

そういって、いつの間にか来ていた母さんは、楽しそうに食堂へと消えていく。お洒落を褒めなかったからこうなっちゃったって事？

うーん・・・女の子って良く分からない・・・

はぁ、嬉しい事なのに覚悟を決めなきゃ駄目とか、訳わかんないよもう。

僕だって普通に幸せが欲しい（後書き）

光司の評価はいたって平凡。本人も勿論納得。

授業風景

昨夜はお楽しみでしたね。

脳内でそんな台詞が聞こえる程、昨夜は大変だった。水着姿の美少女たち。しかもお風呂場で僕ときゃっきゃうふふなのである。母さんに、褒めないのがいけないと言われたので今度は馬鹿正直に、水着姿の皆を褒め捲くったのである。ついでに髪型も似合ってるのでそう褒めると、一人ずつ顔を真っ赤にしてお風呂場から消えていった。なるほど、こうすれば一人でお風呂に入れたのか。母さん、ナイス！

でも、本当の事とは言え女の子を褒めちぎるとか、僕には荷が勝ち過ぎたみたいで、あとから思い返して恥ずかしさのあまり赤面してしまう程だ。だけど、セリナ達はちゃんと褒めて上げないと色々面倒な事が起きそうなので、頑張らないと。

お風呂が終わって、晩御飯の時間になったんだけどそこの席でも妙な雰囲気は解消される事はなく、母さんが何か言いたそうな顔をしてずーっと黙ってた。時折、僕と視線が合うと顔を真っ赤にして俯いてしまう皆をみて、すごい笑顔になっていたけど。あれ絶対なにがあったか分かってる顔だよね。

こうして、僕の精神に多大な負担を残し、皆の心にも恥ずかしさを残したであろう一夜が終わった。

「ねぇコージ君、皆なにがあったのかしら？」

無事に朝を迎え学校に来て席に着いた途端、そう僕に尋ねてきたの

はセシリアさん。うん、今日のみんなは一味ちがうよね。目が潤んで、うっとりとした表情をしていて、美少女っぷりが凄い事になってるよね。

「んー・・・どうしたんだろうね、あはは～・・・」

この場では正直には言えない。だって、水着姿と髪型を褒めちぎりました！　って話をするとどうしてそうなったか話をしないと駄目になりそうだし。なんていうか、この綺麗なお嬢様にそんな事を話そうものなら、不潔！　とか罵られそうで怖い。

「もうコージったら、また女の子とおしゃべりして～」
「ほんとだ。ミミともぉお話しようよぉ」

と、こちらに気付いたようでにじり寄って来る二人。えっと女の子としゃべってたら怒られるというのに、君達としゃべるのは良いって事？

「セリナは綺麗な髪をしているよね。その髪型はセリナの落ち着いた雰囲気に良く似合ってる。あ、でも昨日してたポニーテールもすごく似合ってたなぁ。あ、ポニーテールといえば、ミミも可愛いよね。まえのツインテールも幼い感じに似合ってたんだけど、最近、ますます可愛くなってきたよね？　お肌もすごく白くて綺麗だし」

と、二人の顔を見た瞬間、昨日の褒め殺しモードが自動で発動したようだ・・・

「コージ・・・」
「コージィ・・・」
「・・・コージ君て、たらしなのね・・・」

ぼそっとセシリアさんが何かを呟いて、いそいそと授業の準備をする。やばい、きっとおかしな奴って思われたな、これ。でも、いつまでもこんな調子だと会話もままならない。意識的に抑えるようにしないと、クラスメイトに何を言われるやら・・・

「自分、天然のたらしやなぁ」

「ほわっ？！」

さっそく突っ込まれた！？　僕の左隣に座ってる眼鏡男子ラインハルト君。背も高く体格もすらっとしていて、赤毛のつんつん頭のナイスガイ。

「いや、さっきの台詞聞いてるこっちがなんかかゆくなってきたで？」

「あー・・・それにはヤンゴトナキ理由がございまして」

「よく分からん事を言うやっちゃなぁ。ま、ほどほどにしときやぁ」

そう言って顔を近づけてくるラインハルト君。

「転入生四人を狙っとる奴は結構居るさかいな。平凡な成績の君がそういった連中に狙われても良いっちゅーなら話は別やけどな」

とぼそっと小声で忠告してくれる。

「え、教えてくれてありがとう！」

「う、ほんま自分天然のたらしやなぁ。男も女も見境なしかい！？」

え！？　今なにかそんな事したかな僕？　なんかワザワザ忠告してくれたのが嬉しくて笑顔になってしまったのは認めるけど。

「まぁええわ。何かあったら言うてき。それなりにわしもやる方やさかい」

ラインハルト君は、ランバルト君と言うもう一人の赤毛の子とコンビで「ハルトバルト」とか言われている、このクラスで名物コンビなのだ。何かあったら頼らせて貰おう。

「わかった！　その時はお願いね、ラインハルト君」
「・・・なぁ、コージっていっつもこうなんか？」

僕のお願いを聞いて黙り込み、静かに顔をセリナに向けて質問するラインハルト君。質問の意図が読めないんだけど？

「はい。女の子には特にそういった感じです」
「うん、いっつもまぶしいんですよぉ」
「ほーほーなるほどねぇ。お二人さんも苦労するねぇ」

うんうんと頷きあう皆。いったい僕が何をした。と腑に落ちないなぁと見ていると先生が教室に入って来た。それじゃあお勉強をするとしますかぁ。

今日は魔法の講義だ。

魔法の系統の話から始まり、魔法の発動までの手順や特殊な詠唱方法。魔力の込め方から維持するための魔力の操作。そういった諸々の理屈をまず教えられた。セリナに教わったとおり、魔法を唱えるには最初に術式を思い浮かべるか、空中に魔力を使って書く。そしてその術式に自分の魔力を流し込みながら詠唱を始める。詠唱の最中には必ずその効果と範囲を思い浮かべながら詠唱を行う。その効

果と範囲をあやふやなままで詠唱を終えると、魔法もあやふやになり、失敗や暴走という結果になる。詠唱の間、術式を崩しても失敗だし、魔力の流し方も必要な量を流さないと失敗に終わる。流しすぎた場合は発動するんだけど、魔力がその分余計に消費されるので、おすすめできない。

今日は、今までの復習という事でさらっと簡単に話が終わった。説明の途中で当てられる人は何人か居たけど、ほとんどの人がしっかりと答えていた。

基本的に冒険者学園は授業料は古代遺跡の探索で得た物や警備をする事で支払う仕組みになっている。前に聞いた卒業までに支払う授業料が２０ゴールドって言うのは、どうやら二年ぐらい前の話らしい。今では学園の生徒数も増えており探索で得るお金が莫大な物になるので、授業料の代わりに古代遺跡の探索が義務化されてるだけで特に支払うお金はないそうだ。あると言えば、寮生の寮費や食費、特殊な教材を使う場合ぐらいのようだ。

なのでしっかり古代遺跡を探索できるようにならないと、授業料を支払えないのだ。しかも授業料については現金での支払いを受付けていないので、しっかり学んで稼げるようにならないと退学になっちゃうのだ。時々、授業料が払えなくなりそうになった生徒が無茶をして大怪我や死亡という事になるのはそのせいでもあり、警備する事で授業料を稼げるようにしたのはそういった人達への救済措置なのである。

「では、セリナさん。詠唱の違いによる効果の違いを見せて貰えますか？」

「はい、分かりました」

そうやってセリナを指名するという事は、セリナの実力を良く知っているんだろう。だけど、そんな事を知らないクラスメイト達には、なんで？　っていう空気が流れている。

「指名されたセリナです。よろしくお願いします。では、フレイムの魔法を例にして実演をしましょう。まずは」

「“炎よ！　我が手より出でよ！　フレイム！”」

セリナの手から炎が吹き出る。ちょっと熱い。

「そして、少し詠唱を変えて唱えます」

「“炎よ！　我が意のままに動け！　フレイム！”」

あ、動かせるんだこの魔法。そして、セリナの炎はゆらゆらと上下左右に動き始めた。そして炎が動き出して驚くクラスメイト達。ん？　あれっ？　何かひっかかるなぁ、なんで驚くんだろ。

「こうやって、同じフレイムでもまったく違う動きを見せる事ができます。詠唱が勿論ちがいますが、イメージする事も大事です。その二つが一致しないとあやふやな魔法になります」

「はい、質問です」

「どうぞ」

がたっと席を立ったのは、どこの王子様？　っていう感じの美少年レイモンド君。彼の周りにはいつも女の子が群がっている、まさしくリア充な人間だ。今も女の子達が黄色い声をあげている。凄い。

「後に唱えたフレイムは、初めて見るのですがそれはセリナさんが

開発されたのですか？」
「いえ、魔法教会で開発された物です。あんまり実用度が高くないと判断されたそうで一般的には広まってない詠唱みたいです」
「なるほど、ありがとうございます。セリナさんは魔法の改良が趣味とおっしゃってましたが、改良される際どういった手順で改良していくのでしょうか？　教えて頂ければ幸いです」
「至って普通の方法です。まず魔法の効果をイメージし、古代の文献などを調べて色々な魔法の詠唱の語句をかたっぱしから当てはめながら詠唱して、効果のでる語句をうまく繋ぎ合わせるだけです」
「た、大変なんですね。ありがとうございます。質問は以上です」

自己紹介の時のセリナの趣味をよく覚えているなぁレイモンド君。
ひょっとしてセリナの事が気になってるのかなぁ？

そんな事をぼんやりと考えていると、気付けば授業が終わっていた。

授業風景（後書き）

魔法の仕組み。シンプルイズベスト。大事なのはイメージなのです。

訂正ていせい。読み返すとおかしかった・・・

喜びのクラスメイト

古代遺跡。大陸の各所に点在する遺跡。共通するのは、機械仕掛けの敵が出てくる事とフレームが必ず安置されている事。それ以外の遺跡はただの遺跡であり、お宝が無いとは言えないけれど古代遺跡に比べるとやっぱり優先度が下がってしまう。

そしてロバスの地下に眠る遺跡はかなりの規模らしく、いまだに全容が掴めていない。遺跡を調査するための人員が不足している為だ。そしてその人員を輩出するために発足されたのが冒険者学園。冒険者と名を掲げてはいるものの、遺跡を調査するために生き残る技術に偏るのはその為だ。地上は魔石獣が闊歩し危険は危険なのだが、古代遺跡は古代の機械が徘徊しているのでかなり危険なものなのである。

これまでは遺跡の浅い層であっても、役に立つ道具が出てきていたので調査が楽だったのだが、最近は浅い層には魔物が住み着くようになり、調査をする際に手間がかかるようになってきたのである。

「そんな危ない事になってるんだ。前に潜った時は運がよかったんだねぇ、僕達」

あの時は、ささっと特に問題なく１５層まで降りられたもんね。まぁそこで危ない奴が出てきたから、運が良いとは言えないかもだけど。

「コージ君は遺跡に潜った事があるの？　一人で？」

「ううん、一人じゃないよ。セリナ達と一緒に１５層まで行った事あるんだ」

「へぇ～すごいのね」
「コージ、そんな所まで潜って大丈夫やったんか？　言っちゃ悪いけど、コージやったら5層ぐらいでも危ないんやないんか？」
「ぐさっ」
ラインハルト君が率直な意見を述べる。ううっ、確かに学園での成績を見る限り僕って普通の子供だもんね。
「それに比べてセリナちゃんやミミちゃんはすげーよな。俺達とそんな変わらんのにあれだけの技量を持っとるもんなぁ」
心底感心したように、セリナ達を見るラインハルト君。それにヒロコや白夜もおかしなぐらい強いんだよねぇ。まぁヒロコは全く戦わないけども。
「本気だせばコージは私たちよりよっぽど強いんです、ね、ミミ」
「うん。だってコージのほうがずっと強いもん」
「じゃな。わしをここまで従えられるのは主ぐらいのもんじゃ」
僕が弱いって言われるのが我慢できなかったのか、そう横槍を入れてくる。だけど、僕の成績を見る限りまったくもって信憑性が無いので、セシリアさんとラインハルト君はしょうがないなぁって顔をしている。
「そんな事言ったら、マスターが力づくで言う事聞かせてるみたいだよ、みんな？」
そんな微妙な空気の中なんか、ヒロコらしくないまともっぽい事を言う。やっぱり電波受信している・・・？

「ま、マスターの強さはボクたちが知ってればそれでいいのさっ、ね？」

と、セリナ、ミミ、白夜と順番に見つめていくヒロコ。

「ですね、わたしとした事が危うくライバルを増やす所でした。ヒロコの言う通りですね」

「そぉだね～、ミミ達がぁコージを守ればいいよねぇ～」

「うむ、わしらでガードすれば完璧じゃ」

いや、まぁコメントしづらいよ。でもお礼を言ってもおかしくない場面だよね。

「ありがとみんな。でも、無理はしないでよ？」

「それはこちらの台詞です、コージ」

「だよねぇ。結構危ない目にあってるのってコージだけだよねぇ」

「我といれば問題ないぞ」

「ふんふふんふふ～ん」

そんな僕達のやりとりを見て、ラインハルト君がにやりと笑った。

「まぁ、そんなもんは来週の遺跡実習ですぐに分かる。わしの実力も見てもらう、ええチャンスや」

「そうですね。わたくしも魔法と剣を組み合わせた戦闘術を見てもらいましょう。これでもそこそこ名が知れているのですよ？」

「へぇ～・・・二人とも自信満々だねぇ。いいなぁ・・・」

自分からすすんで鍛え上げた技ってやっぱり自信に繋がるんだろうなぁ。二人とも毎日すごい訓練をしているんだろう、今の二人の発言には何か重みを感じた。今僕が使える能力は、なんというか棚か

らぼたもち的な物なので、使いこなせてる自信がイマイチない。僕も何かを磨けばそう言える日がくるのだろうか。千里の道も一歩からっていうし、今日もヒロコとトレーニング頑張ろう。

次の授業は、今更な感があるが冒険者学園の成り立ちの講義だった。

今僕達が住んでいるのは西側ブロックなんだけど、冒険者学園は東西南北のブロック毎に校舎があり、一箇所にまとまっていない。なので同じ学年でもブロックが違う生徒達は交流があんまりない。と考えがちだが、古代遺跡で調査や警備をする事が多いので、そういった場所で何かと交流があるようだ。最初は南側のブロックから始まった学園だったらしいのだが、一度魔石獣の襲撃で破壊された事があり、その時に一時的に反対の北ブロックに仮校舎を建てたそうだ。北ブロックに校舎が建つと今度は北ブロックの人達の中から冒険者学園に通いたい人が訪れ、仮校舎が結局、本校舎となり修復が終わった南ブロックの校舎も結局そのままになった。そうすると今度は東西のブロックから、なんでこっちには校舎が無いんだ！　とねじこまれ、結局すべてのブロックに校舎が建つ事になったそうだ。

町の中心にある塔「ティンラドール」のある所に校舎を建てられれば問題なかったんだろうけど、生憎あの場所は常に魔石獣がやってくる場所となっており、大人しく勉強できる場所でもない。魔石獣を観察するのは良い場所みたいだけどね。

で、この講義が何を言いたいかと言うと。

「で、四つのブロックに四つの校舎。人が三人集まれば派閥ができるというが、校舎が四つもできると争いが始まるのだよ。毎年、ブロック毎の生徒が遺跡から稼いだ、売り上げを発表して、一位になったブロックにはボーナスがでる。まぁ、ボーナスと言っても各校

舎の経費や儲けを差し引いた分を校舎の生徒数で割った物だから、大金って程でもないがそれでも毎年一人頭三十ゴールドは分配されている」

その言葉を聞いて、色めきたつクラスメイト。三十ゴールドと言えば結構大金だ。浮かれない方がおかしい。

「それで来週から始まる遺跡調査の実習の為に班分けをして貰う。六人以上で班を組むように。あまった奴は適当に少ない所に放り込むから安心しろ」

それって安心できるのか？　僕達は五人だからあと一人誰か入ってくれたら良いだけだ。

「あ、そうそう言い忘れてた。転入生たちは固まらないようにな。全員必ずバラけてクラスメイトと仲良くなるように。いいな？」

うおー？　それはなんていうか僕は余った奴確定じゃないか！？講師のその言葉を聞いてクラスメイトの男子が早速セリナ達に熱い視線を投げかける。いや、女子もすごい熱い視線を注いでいた。じゃ、班をくめーと講師が言うと皆それぞれ動き出した。

「コージ君、よかったら一緒に組まない？」

持つべき者は、やさしい隣人。セシリアさんのその言葉に涙が出そうになった。

「おいおい、コージはわしと組まんとあかんでしょ？　ここは男同士仲良くいこうや」

おぉお!?　ラインハルト君まで誘ってくれる・・・男子にまで誘って貰えるなんて、なんだか新鮮だぁ～・・・と感極まってると、セリナ達から恨めしい視線が飛んできた。そして講師はすでにセリナ達の恨み光線で沈没していた。

「え、えっと二人とも組む相手はもう決まってるの？」
「あたしはエリーと組む予定よ。エリー以外は特に決まってるって訳じゃないわ」
「わいは、ランバルトと組む予定や。あとはレイモンドも来るはず」

レイモンドってあの王子様？　いや本当は王子様かわかんないけど、そう呼んだ方がしっくりくる。

「というと・・・みんなで組めば丁度六人にならない？」
「わいに、バルトにレイにセシーにエリーにコージ・・・そやな、丁度六人や。それでええか？」
「そうね、悩む必要が無くなったわね。それでいきましょ」

良かった。僕、余った奴にならなくて良かった・・・

「ん？　本人に承諾は無しかハルト？」
「そうだね、せめて確認ぐらいはしようよ、ハルト」

ふと振り返ると、筋肉質のがっちりした赤毛の少年と、王子様ことレイモンド君が立っていた。たぶん、この赤毛の少年がランバルト君だろうな。そして、セシリアさんの後ろに大人しそうな女子がおずおずとやってきて、何事か話している。

「ん、こっちはオーケーよ。よろしくね」
「よろしくです。エリー＝マグワイヤーです」

そして僕に向かって自己紹介をする大人しそうな女子ことエリーさん。

「えっと僕は、コージ＝H＝アースです。よろしくです」

「転入生の名前を忘れるほど耄碌してねぇよ。俺はランバルト＝スミスロスだ、よろしく」

「同じく僕も忘れてないよ、コージ君。僕はレイモンド＝ハンスベルです。よろしくな」

と、男子二人も自己紹介を済ます。正直クラスメイトの名前って全員覚えきれて無いのですっごく助かる。周りを見ると、他の皆もそれぞれ班を組んでるようだ。セリナ達も例外ではない。こうして、遺跡調査の班は無事に結成された。

親睦を深めたい！

遺跡調査の班を結成したからには、班の人達と仲良くならなければならない！

やっぱり一緒に戦う仲間って、仲良くなればなるほど強くなると思うんだ。現にセリナ達と仲が良かったからこそ、遺跡でキラーマシンを撃破できたと思うし。

「というわけで、みんなでご飯でも食べに行きたいと思うんだけど、どうですかっ！」

この世界に来て一気に友達が増えたので、てんぱってるのは見逃して欲しい。そんな僕の台詞にラインハルト君はにやりと笑う。にやりって笑うの好きだよね。

「転入生のおごりっちゅーなら、いくらでも行くで～？」
「おごりかどうかは兎も角、親睦を深める為にもそういった事は賛成だ」

ランバルト君は浮ついた感じではなく、落ち着いた感じで僕の意見に賛成してくれる。

「うん、いいかも。でも、これから行くにはちょ～っと準備が足りないかも？」
「でも善は急げとも言うし、そんなに気張らなくても良いんじゃないかな」

セシリアさんもレイモンド君も、特に反対ではないようだ。それじ

ゃあ、トレイルさんに顔見せついでに、良いお店を教えて貰おうかなぁ？　うん、そうしよう。

西ブロックの冒険者学園の校舎は魔法教会と隣接していて、実験場は共有して使用していたりするのだ。なので、トレイルさんを探すのに時間はかからない。

「じゃあ、良いお店無いか知り合いに聞いてくるね！　ちょっと待ってて！」

「お、おう。急いでこけるなよー？」

ラインハルト君の声を背に、魔法教会に駆け込む。そして門番の人にトレイルさんを呼び出して貰う。しばらくすると、なんだか美しい雰囲気を背にトレイルさんがやってきた。

「コージ、珍しいな今日は一人かい？　西ブロックに来てるのは知ってたけどひどいじゃないか。もっと顔を見せに来てくれても良いんじゃないか？」

そうやって抗議する姿も決まっていて美しく、いまひとつ迫力に欠ける。

「あはは、ごめんなさいトレイルさん。僕、こないだから隣の冒険者学園に通う事になったんです。それで、それでクラスの人と遺跡調査の班を組んだんだけど、いま一つ皆の事が分からなくって。それで班の皆と仲良くする為にご飯を食べに行きたいんだけど、どこか良いお店知らないかなぁ？」

「おぉそうか、学園に通うのか。でも、君は学園に通わなくても充分やっていけるんじゃないのかな？　セリナ嬢が推薦するぐらいだしねぇ」

いやその、そのセリナ嬢も学園に通っているのですよトレイルさん・・・

「え？　あ、そういえばそんな事言ってたなぁ。参ったなぁ、セリナ嬢がいたら講義しにくくて仕方ないなぁ・・・あ、話が逸れたね。えっとどこか良いお店って言うと・・・学生さんでも行けそうな所となると「ビアハイム」って所が良さそうだね」

そういって「ビアハイム」の場所を詳しく教えてくれる相変わらずポーズが美しいトレイルさん。なんだか動く度に光の粒子が飛んでるように見えるほど洗練されてきている。何をしたんだろうか？

「僕を入れて六人なんですけど、大丈夫ですかね？」

「それぐらいなら大丈夫。任せておきたまえ、お店には連絡しておくから楽しんでおいで。一応僕からの入学祝いって事で、支払いは任せたまえ」

「え、いや教えて貰って悪いですよ、そんなの」

「まぁまぁ。悪いと思うなら、わたしと再戦してくれればそれで良い。わたしとしてはそれはとても価値があるものなんだよ、コージ君」

なんだか凄く真剣な目で見られる。何もポーズは取ってないんだけど、凄くかっこよく見えた。うーん、心苦しいけどお言葉に甘えちゃおうかな。

「じゃあ、また再戦すると言う事で、今回は甘えちゃいます。ありがとうございます！」

「ふふ、じゃあ楽しんでおいでコージ君。また暇を見つけてこっちに来てくれよな」

「はいっ、それではありがとうございました！」

にこにこーと満面の笑みで見送ってくれるトレイルさん。なんだかお世話になりっぱなしだなぁ。今度、新しい術式を見て貰う事にしよう。トレイルさんならきっと使える筈。

皆を待たせないように校舎の四階までダッシュで昇る僕。結構息が切れるなぁ・・・

「お、コージ戻ってきたな。だめやったか？」

笑顔で駄目な方に期待しないで欲しい。

「ううん、「ビアハイム」って所で予約いれて貰ったよ。お金も気にしなくて良いって」

「は、なんで？」

予想外の答えにそんな短い反応しかできないラインハルト君。

「奢って貰ったの。ひさしぶりに会いに行ったら入学祝いだーって」

「いや、あそこって結構高くなかったか？」

眉間にしわを寄せてそう聞いてくるのはランバルト君。そういったお店に詳しいのかなぁ？　ちょっと羨ましい。

「そうねぇ。別に食べられないという訳じゃないけど、たまになら行けるかもって感じの値段だったと思うわ」

「それを六人分奢ってくれるとか、凄いなぁ。お金持ちなのその人って？」

王子様がそう聞いてくるけど、お金持ちかどうかは知らないなぁ・・

・

「うーん、どうだろ？　でも、すごく気軽に決めてたのは確かだよ？」

「ええんかなぁ・・・？　なんというか話が大事になってきた気がするわ」

「まぁ、楽しめば良いんじゃないかなぁ？　その人にはいつでも会えるからその時にでも改めてお礼も言うからさ」

お礼だけじゃなく、戦ったりもするけどね。なので安心して、皆でご飯に行く事にした。母さんには携帯で連絡したから、問題ないしね。

「コージはまだ帰ってきてませんか？」

班割りを即効で終え家に着くなり、るりさん（おかあさん）に尋ねるも、なにやら今日は晩御飯を外で食べてくるとの事で、帰ってくるのは遅いそうだ。

「ミミをほったらかしにするなんてぇ・・・もぉ」

今日はみんな不機嫌だ。遺跡調査の班割が誰もコージと一緒になれなかったからだ。ただでさえコージは優しくて素敵なのに、何も知らないクラスメイトと触れ合う機会が増えちゃうと、ライバルが増えそうで捨て置けません。

「それにちょっと心配です・・・」

なんだか学園に入ってからのコージは、少し落ち込んでるように見えるのです。それというのも、あの測定を行ってからです。たまたま私たちの判定が高かったのを見て、ショックを受けてたようですし、ヒロコと一緒に訓練しているようですけど、家の中ではどこか上の空ですし。あんな判定ひとつでコージの強さは測れませんし、コージの強さはわたしが良く知っています。だけど、コージは判定の結果にすごく納得しているように見えます。そして自分が平凡でないと駄目なような振る舞いをします。

「コージはね、理由を欲しがってるんだと思うんだぁ」
「なんの？」
「ミミ達がぁコージと一緒にいる理由、かなぁ」

あの判定で、自分が私たちに劣っていると思い、判定で優秀な私たちが一緒に居る事に疑問を感じたのでしょうか。自分が平凡だと思い込もうとしているのは、そんな自分でも私たちが離れていかないか確認したかったのでしょうか？

「理由なんて無いのにねぇ。あえて言うなら好きだからだもんね～」
「ですよね、大好きだから一緒に居たいって思うのに」

貴族と戦えないわたしでも、居ないと駄目だと力強く言ってくれたコージ。
はやくちゃんと伝わって欲しいです。コージが大好きです、と。

親睦を深めたい！（後書き）

愛されコージ。

あたらしい仲間

「それでは、班の結成を祝って、乾杯！」

とラインハルト君の音頭で、みんな一斉に手元の飲み物を飲む。この世界では未成年がお酒を飲んでもいいので、僕以外はみんなお酒を飲んでいる。僕は果実のジュースをごくごく飲んでいます。こっちのほうが値段的には高いんだけどね。

「ほな、それぞれの得意分野を自己紹介していくとしますか。まずはわしから。剣を持った近接戦闘が得意で、攻撃に関してはソコソコや思うとる。魔法に関してからっきしなのは剣一筋のせいで、何も使えんちゅーわけやない。ただ、魔法の修練をしとらんちゅーだけや。ほな次、セシーいってみよか」

「あ、わたしなのね。んっうん。わたしは剣に魔法を纏わせる魔法剣の使い手です。二刀流で戦います。オークであれば二対一でも、充分戦えるレベルです。魔法剣の属性は2種類。炎と氷を唱える事ができます。当然ながら両方の系統の魔法も詠唱可能です。こんな所かな。じゃ、次はランバルト」

指名された時はちょっと動揺していた感じのセシリアさんだったけど、あとは淀み無く応える。セシリアさんって二つの系統を使いこなせるんだ。やっぱりそれは珍しいようで皆賞賛の眼差しをセシリアさんに向けていた。

「え、これ順番じゃなく指名制なのか。えーっと、俺の得意分野はこう見えて回復魔法や防御魔法などの聖職者系のものだ。ただ肉弾戦もこなせるので、別に前衛に出ないという訳ではない。鍛えてるので重装備も可能だ。じゃレイモンド」

真っ赤な髪だからバリバリの前衛職かと思ってたんだけど、クレリックなのね。回復の要という事は、指揮官向きな人なのかな？

「ほいさ。僕は剣も魔法も使いこなす魔法剣士だね。それぞれはハルトやセシーには追いつかないかもしれないけど、両方の組み合わせでは負けないと自負している。ちなみにオークなら、魔法使いタイプが混じっていても三匹まで平気だ。じゃエリー行こうか」

レイモンドは魔法剣士かぁ。勇者っぽい見た目だし、そういうの得意そうだよねぇ。

「はい、よろしくお願いします。私は氷系統の魔法使いです。一応三位です。ではコージ君」

え、説明はやい！　とりあえず三位の氷の魔法使いって事だね。なかなか凄いのかも。

「えっと、剣も魔法も一応使えます。どれぐらいのレベルかは自分ではわかりません。回復魔法も使えます。あ、あとマジックアイテムを使いこなすのが得意です」

僕の自己紹介に不思議そうな顔をする面々。ちょっと変とは思うけど、正直に言いたかったんだ。あ、でもマジックアイテムを創れるってのは言わなくても良いよね？

「それはなんつーかでたらめやなぁ。ほんまに自分そんだけ色々できんの？」

「うん、できるけど僕の魔法って普通じゃないのもあるから、そこらへんは見逃して欲しいなぁ」

「唱える魔法の系統は何なの？」
「たぶん、全部いけると思うよ。どこまで唱えられるかは分かんないけどね」

僕の言葉にぽかーんとする皆。でも、唱えられるとは思うけど威力がそれに伴うかどうかは分かんないんだけどなぁ。あ、でも一応釘をさしておいた方が良いのかな？

「僕、ちょっと田舎者だから良く分かってないんだけど、そういった事って他の人には内緒のほうが良い？」
「うーん、話だけやと嘘くさいけど、それがほんまならあんまり言わん方がええなぁ。でも後は実力やな。古代遺跡でばっちり見せて貰う事にするで」
「・・・お、お手柔らかにね、ラインハルト君」

僕の自己紹介に考え込むようにしていたレイモンド君が、そこで声を上げた。

「それよりも、演習場を使わせて貰って皆の得意な技を披露するのはどう？　それを見ればお互いどれぐらいの技量か、一目瞭然だし」
「そうだな、お互いどれぐらいやれるか実際に見る方が戦術も立て易い。俺も皆がどれぐらいまで耐えられるかを見極めさせて貰いたい。班のリーダーを決めるのはそれからでも遅くないしな」
「じゃあ、明日からそういう感じで放課後残るって事で良いわね？　難しい話はこれで終わりにしましょ。丁度料理が来始めたしどんどん食べましょ。どれもおいしそうよ」
「だな、じゃ頂くとするか」

とその言葉を合図にそれぞれ食事を始めた。

「う、おいしい。ここの料理ってレベル高いよねぇ」
「しゃべってると食いっぱぐれるぞ」
「そっちの肉の奴こっちにもくれる？」
「ほいほい」
「うむ、うまいなぁ。おまえらもう少し味わって食えよ、みっともない」
「・・・ん～・・・」

それぞれが料理を楽しんでるようで、ある者は勢いよく、またある者は丁寧に、またある者はブラックホールのようにと、料理を片付けていった。おいしい料理があると会話も弾むもので、ラインハルト君が年上のお姉さん好きだとか、レイモンド君の女性の苦労話とかセシリアさんの家の人の過保護っぷりなど、色々な話を聞く事ができた。

「ふぅ食った食った・・・おわっ、まだデザートもあるんか。気が利くねぇ。ところでコージよ」
「なに？　ラインハルト君」

ごくごくとジュースを飲んでるとラインハルト君に声を掛けられた。

「それや！　そのラインハルト君ってのやめてくれんか。かゆいわ。君付けは無しや！」
「あ、それ私も思った！　もう仲間になったのにさん付けとか、止めて欲しいわね。勿論わたしも止めるわよ」
「遠慮しているのかもしれんが、これからはそういった遠慮は不要だ」
「「うんうん」」

そう言えば僕だけ皆を君付けやさん付けしてたなぁ。

「うん、分かった皆。じゃあこれからはそういうの無しで」

その後はデザートを食べて一服してから解散となった。

少し暗くなった道をゆっくりと家に向かって帰る。バスを使っても良いんだけど、今の時間は歩いて帰ると風が涼しくて気持ちが良い。明日から皆で訓練するから、色々準備しないと駄目だなぁ。「グッドラック」はリュートの中に消えていったから、あれに変わる武器が欲しい。システム的には「グッドラック」のものが最善なんだよねぇ。うん、決めた！　いっその事「グッドラック」を創るとしましょう。

「ただいまぁ」

挨拶もそこそこに家に入り、すぐに部屋に戻る。さぁ武器の仕組みをさっそく考えよう。「グッドラック」は武器を出す瞬間にのみ、魔力が少量放出していた。普段はブレスレット自身からは魔力を感じなかったので、魔力を変換して武器を作っている訳じゃないのかもしれない。その時、ふと指輪に目に入った。そう言えば、僕の指輪って「グッドラック」のシステムに似ているかもしれない。イメージするだけで取り出せる所だけだけど。あれっ？色々な武器を先に指輪に入れておけば似たような事ができる・・・な。

想像だけど「グッドラック」は普段から装着している人間のイメージを読み取って武器を創造しておき、取り出す時に転移魔法で装着者の手元に出している。

さほど魔力が篭ってた物じゃないのに、あれだけの数の武器を保管してたから、普段から魔力を周囲から少しずつ取り込み、それを増幅すると同時に武器を作っていたと思われる。凄く効率よく魔力を変換する仕組みがあればこそできる芸当だ。あと「グッドラック」の凄い所は装着者のイメージから武器を作り出せる所だろう。でないとビームガンなんかできる訳がないしね。

なんか考えすぎて疲れたし「グッドラック」のような効率の良い変換を実現できそうにないので、今日の所は武器をいっぱい作って指輪にしまっておこう。

幸せが僕を天国へ

「ん・・・？」

気付けば朝。昨日は帰ってから武器作りをしながら寝てしまったようで、お風呂に入った記憶もなければ、ベッドに入った記憶もない。現に今、なにか柔らかい物に巻き付かれている。・・・柔らかい？

しかもなんか良い香りがする。

それが何か気付いた瞬間、がばっと覚醒する。

「きゃん」

「にゅっ？」

上がった悲鳴は二つ。僕に巻き付いて寝ていたセリナとミミだ。半分眠りながらもベッドには入ってたようだけど、部屋の鍵を掛け忘れていたようで、ベッドの上にはみんなが勢ぞろいしていた。セリナ、ミミ、ヒロコ、白夜。それぞれが好きなように僕のベッドで寝ていた。

「あ、おはようございますコージ」

「コージィ、おはよぉぅ～・・・」

別に何も悪い事はしていませんよ？　って感じで挨拶をしてきたのがセリナ。まだ寝ぼけ眼でとりあえず挨拶をしているのがミミだ。

「おはよう。なんで皆僕のベッドで寝てるか聞いていい？」

こんな嬉し恥ずかしなイベントは心臓に悪い！　だって朝起きたら

美少女達が一緒に寝てるんだよ？　美少女一人でもありえないのに、それが四人も！

「えっと、それはですねぇ・・・」
「だぁって、コージがぁ昨日は構ってくれなかったから寂しかったんだもん～」
「そうだそうだ！　しかも班も別々だったよ、マスター！」
「そうじゃ、主と離れるとかなんでなんじゃ。もおぅ」
「と、そんな感じで寂しかったから部屋を覗いたら鍵が締まってなかったんで、夜這いにきたのです。えへっ」

えっと、僕が居なくて寂しかったって事なの？　それは嬉しいけれど、こんな普通な僕にそんな夜這いなんかしなくても良いんじゃないかなぁ・・・？

ぎゅむー

僕がぽかーんとしていると、みんなが寄ってきてぎゅーっと抱きしめられた。

「あー、しゃあわせぇ～・・・」
「補給補給。ふー・・・」
「うむやっぱり生身はいいのぉ・・・」
「うふふ・・・意外と逞しいんですねっ」

あ、ちょっとこれはそのダメダメダヤバイヨソノハウッ！？

どばひゅっ！

「えっ！？　コージ！？　血がっ血がっ！？」

「え、なになに？　どうしたの？　え、えぇ？」
「主しっかりするのじゃ！　気をしっかりもてぇえええ！」
「ふぇえええぇぇ？」

鼻血が出てしまった僕を許して欲しい。だけど、そんな破壊力満点なボディが悪いんだ・・・最後に見たのは皆が焦って僕を揺さぶってる姿だった。

「ん・・・ここは・・・？」

目が覚めると、いつもは使っていない部屋に寝ていた。一階にある広い部屋で皆でおしゃべりをする時に良く使っている部屋だった。

「あら目が覚めた？　気分はどう？」

気付くと傍らには母さんが座って、本を読んでいた。なんだか、頭がふらふらするし喉も乾いて仕方が無い。

「の・・・ごほっごほっ」

喉が渇いて水がほしいって言おうとしたんだけど、喉がカラカラなせいで咳き込んでうまくしゃべれなかった。なので目で母さんに訴えて見る。みずーみずー。

「水が欲しいのね、どうぞ。ゆっくり飲みなさい」

やさしい手付きで水差しを使って、上手に水を飲ませてくれる母さん。ふぅ～おいしい。だけど、頭はふらふらな上にずーんと重くなっている。風邪っぽいといえば風邪っぽいかなぁ。でもこれって単純に血が足りないだけの症状なんだろうか。さっき確か凄い勢いで鼻血でちゃったもんなぁ。

「驚くかもしれないけど、光司。あなたが鼻血を出して倒れてから二日経ってるわよ？」

「！？」

鼻血だしてそんだけ倒れるとか、どんだけひどい状態だったんだろう僕・・・あの美少女たちにはちょっと自重して貰わないと・・・

「ミミちゃん達は今、学校に行ってるわよ。来週から遺跡の実習があるんですってね。それに行きたいなら、もうしばらく安静にしときなさいな」

僕の班は六人ぎりぎりだから、一人でも欠ける事ができない。だから、実習に間に合うようにしっかりと治さないと駄目だよね。

「学校にはちゃんと連絡してるから、大丈夫よ。あとミミちゃん達にすっごく心配掛けたんだから、後でちゃんとお礼を言っとくのよ？」

でもぶっ倒れる原因を作ったのは、そのお嬢さん達なんですけどもねっ。母さんの言葉にも一理あるので頷いておくけど。別にお礼を言うぐらいは大丈夫だろう。

「母さん、ご飯頂戴」

「え？　食べられるの？　ちょっと待っててね」

まずはご飯をしっかり食べて、体力を戻そう。あんまりお腹は減ってないんだけど、寝てる間はろくに栄養を摂ってないないだろうから、回復も遅いはず。遅れてる分をちゃんと取り戻さないと、みんなに追いつけないし。しかも二日寝てたって事は、三日後には遺跡実習が始まる。たっぷり食べて、たっぷり寝て、超回復するぞぉ！

「若いって良いねっ！」

「誰にむかってぇ言ってるのぉ？」

あくる朝には、超元気になった僕。僕が居ない間はセリナとヒロコが料理をしていてくれたので、母さんの手料理を食べずに済んだというのも大きい。ここまで劇的に回復したのは今までに記憶にない。すこぶる身体の調子が良いので、心配するセリナ達をなだめて学園に行く事にした。昨日は学園から帰ってきたセリナ達に一斉に謝られた。だけど、僕がちょっと耐性が無かっただけで、普通に考えたら役得なのに謝られるのも変だ。なので素直にお礼を言ったら、みんなガッツポーズしてた。僕としてはそこで照れる仕草が欲しかったなぁ・・・

「でも、ほんとに大丈夫ですかコージ。今週一杯休んでた方が良いんじゃないですか？」

「うーん、あんまり休んでると体がなまっちゃいそうだし、早く皆と会いたいしね」

親睦を深めよう！　ってご飯を食べたきり会って無いしね。僕が倒れたって事でランバルトとセシリアがお見舞いに来てくれたそうだけど、寝てて記憶が無い。

「むぅ。一緒の班になれなかったせいでコージが遠くに行っちゃう

のです」
「もう大げさだなぁ、セリナは」
わざとらしく、俯いて泣き真似をするセリナ。それを見て他の三人も同じように泣き真似をする。ミミなんかは、僕の服のすそを掴んでそんな真似をするもんだから、周りから見たら僕って凄い極悪人に見える気がする・・・
「もう、みんなの事が大事なんだから落ち着いてよ。だから明日、皆で一緒に出かけるって事で良いでしょ？　ね？」
「「「「いいよー」」」」
にやり。
泣いたカラスがもう笑った。カラスというか小悪魔たちというか。ほんとにこの子達は手間がかかる妹みたいな存在だなぁ。僕には妹なんて居ないけど。
「おはよー」
教室に入って、ラインハルト達に挨拶をする。今日は遅めに入ったせいで僕の方が教室に入るのが遅かったのだ。
「お、コージ！　もう出て来て大丈夫なんか、自分？」
「あら、おはようコージ。元気そうね」
「おう、出てきたな。見舞いに行った甲斐があったな」
レイモンドは相変わらず女の子に囲まれてて僕に気付いてなくて、エリーはというと黙って片手を上げて挨拶を返してくれた。

「もう元気だから、平気へいき。今日さっそく放課後に模擬戦できるよ！」
「あほかおまえは。病み上がりでいきなりそんな事させるほど鬼やないぞ？」
僕の言葉に即つっこみを入れるラインハルト。だけど、ここは引く訳には行かない。
「でも明後日には、実習なんでしょ？　僕も皆の実力を確かめたいしさ。ね？」
「・・・意外とコージってば、頑固なのねぇ。ハルト、いいんじゃない？」
「あぁ、いざとなったら俺もいるから平気だろう」
とセシリアとランバルトが援護してくれた。
「うーん・・・まぁいっか。そやけど、なんか危ないと思ったら即止めるからな？」
「わかった。まぁ大丈夫だけどね」
おまえはほんましゃーない奴やなぁ、とラインハルトにこづかれながら苦笑された。放課後が楽しみだ。

幸せが僕を天国へ（後書き）

コージ君、許容限界を超えました。超えすぎました。

はじめての集団訓練

「コージィ、ごめんなさい・・・」

申し訳なさそうに、そう謝るのはミミ。ただでさえ小さい身体がそうやって申し訳なさそうに俯いてると、さらに小さく見えて居た堪れない気持ちになってくる。

「いや、まぁなんというか謝られるのも違うんじゃないかなぁ・・・」

どっちかというと僕が悪い・・・と思うし。事の発端は、魔法実習中にさかのぼる。今日は授業で魔法を唱えると言う事で演習場にて授業をしていたのだ。だけど僕は放課後にどういった事を皆に見せようか考えながら、クラスメイトが唱える魔法を上の空で見ていた。そんな僕に向かって故意かどうか分からないが、魔法の流れ弾が飛んできたのだ。上の空の僕は一瞬反応が遅れたのだが、ミミは即座に反応していて僕を抱きかかえて流れ弾から守ってくれたのだ。

だが、それがイケなかった。いや、イっちゃったと言うべきか。

抱きしめられる格好で地面に転がる僕とミミ。もちろん僕に覆いかぶさるようにミミが僕を押し倒している。最近、気のせいかもしれないけれどミミの色々な所が成長しているようで、この時もあまりの柔らかさに、思い出してしまったのだ。美少女達の抱擁を！

ばひゅっ！

あとはもうご想像の通り。少量ではあるけれど、鼻血のジェット噴

射をしちゃった僕は保健室に直行。もちろん放課後の訓練などラインハルト達に許して貰える訳もなく、現在ミミに謝られているわけだ。

「授業中にぼけっとしてた僕が悪いんだから、謝らないで？　むしろ助けてくれてありがとう、ミミ。で、あのその・・・聞きにくいんだけど・・・」

「ん？　なぁに？」

うっ、ずごく純真な眼差しが僕に突き刺さる。どちらかというと駄目な質問をしようとしてるから、質問をするのに躊躇してしまう。

「えっと・・・最近、背が伸びた？」

「ううん。伸びてないよぉ？」

失敗した！　きょとんとした表情で返事をしてくれるミミはとんでもなく可愛い。駄目だ聞けないや。成長したかなんて聞けないっ。

「ん？」

なんだか最近、ミミは成長してきている。気のせいかなって思ってたんだけど、こないだと今日の抱きつきで良くわかった。弾力が違うのだ！　それまでも確かに女の子だなぁってうっとりする程柔らかかったんだけど、今は違う！　ボリュームがあるのだ。色々と！

駄目だ思い出すな僕！

「どうしたのぉ、コージぃ？　息があらいよぉ？」

「な、なんでもない。大丈夫。だいじょうぶだからっ」

心配そうに覗き込んでくる、無防備なミミを宥めて事なきを得た。

とりあえずミミの事は帰ったら母さんにでも聞けばいいや、うん。

「じゃあ、準備はいいか？」

放課後。フォーメーションの練習をする事となった。と言っても僕は戦う訳ではない。

「さすがに可哀想だからな。今回はパーティに護衛される人間役をコージにして貰おうと思う。俺達も誰かを守りながら遺跡を移動するという事が無いとは言い切れないからな」

そう提案してくれたのはランバルト。僕のあまりの不憫さに僕が訓練に参加できるように考えてくれたのだ。護衛される人間とはいえ間近で皆の実力を見れるのでそう悪い物では無いのだ。で、敵役としては訓練場に容易されているダミーを使い、それを凌いで撤退するというのが、今回の目標だ。ダミー人形は強さを設定できるのでこういった訓練にうってつけなのだ。

敵は魔法使いが混じったオーク６人のパーティだ。魔法使いが一匹に、あとの五匹は全て前衛だ。がんがん殴りに来る実にオークらしい編成だ。

こちらはラインハルトとセシリアが前衛、レイモンドが殿をつとめ、ランバルト、僕、エリーというメンバーを挟んでいる形となる。戦闘中はランバルトが指示を出して配置を組み替えていくんだけど、基本的にはこの構成で遺跡内部を進む事になる。

今回は遭遇戦という事で、古代遺跡の中のように通路を設定しランダムタイマーでダミー人形が僕達に襲い掛かってくるようにして、それらしい演出をしてみる。

「グォオオオオオ！」

オークが襲ってくるのを今か今かと待ちくたびれて来た頃に、急にオーク達が襲って来た。

「ちょこざいな！　セシー！　抜けてったやつを頼む！」
「はい、任せてっ」

ラインハルトはセシリアが魔法剣にする為の詠唱の時間を稼ぐために、オークの群れに向かって前進する。そしてラインハルトが作ってくれた僅かな時間を使って、セシリアは炎の魔法剣を作り出した。

「“我が力に応え、その身を護りたまえ。ホーリーコート！”」

ランバルトが防御魔法を前衛二人に唱える。

「エリーは、氷系の魔法で足止めできるか？」
「やってみる」

「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」

前衛二人を抜けてこちらに来ようとしていたオークに向かって、拘束する氷系の魔法を唱えるエリー。だが、レジストされたようで一瞬動きが止まるものの、オークの勢いは止まらない。

「どっせい！」

突破してきたオークを盾を掲げて体当たりするランバルト。そしてすかさず僕の前にでてくるレイモンド。そういえばレイモンドの使える系統ってなんだろう？

「“風よ！　我が敵を斬れ！　カッター！”」

風の魔法をオークに向かって唱えるレイモンド。なるほど、よく似合ってるなぁ。しかもカッターの延長線上には、別のオークもいたのでついでと言わんばかりに、切り裂いていった。そして、ランバルトと場所を入れ替わりオークを攻め込む。

「“ゲェゲッゲッゲゥゲッ！　バーンウォール！」

向こうのオークが、前衛と僕達を引き離すつもりなのか炎の壁の魔法を唱える。これでラインハルト達は四対二で、僕達は二対三プラス護衛対象の僕となった。意外と頭を使って攻撃してくるダミー人形。侮れない。

炎の壁のせいでラインハルト達が見えにくいが、信じる事にしよう。レイモンドが相手にしているのとは別のオークが僕を狙って突進してくる。それに釣られてランバルトが動くが、それをレイモンドが気にした拍子に一気に二匹のオークは駆け抜け、僕達の退路を断つように動き叫んだ。

「グゲーーーッ！」

「“ゲェゲッゲッゲゥゲッ！　バーンウォール！」

そしてさらに時間延長するかのように炎の壁が出現する。そのせい

で僕達は炎の壁を背に戦う事になる。

「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」

目まぐるしく敵との位置関係が変わる中、冷静にエリーが呪文を唱える。だが、これもレジストされ今度はエリーがオークに狙われる。

「くっ・・・こいつら連携上手い奴らだなっと！」

エリーに向かうオークを真っ向から受け止め、僕とエリーを庇うランバルト。護衛対象が居るとやっぱり自分の力を発揮しにくいんだろう。ランバルトもレイモンドも必死に守るために動き回っている。

だが、しばらくすると炎の壁を突きぬけラインハルトが飛んで来た！

「待たせたなっ！」

「グゲェエエエエエ！」

どうやら向こう側は決着がついたらしく、オークの悲鳴が聞こえる。向こうでセシリアが止めを刺して回っているのだろう。こうなれば、後は早かった。二対一が次には三対一になり、あっという間にオークたちを殲滅した。

目的は撤退だったけど、倒しきったんだから良しとしよう。うん。

はじめての集団訓練（後書き）

学生の中でそれなりにできる人間なのでオークぐらいは倒せるのです。魔法使いが混じっているとそこそこ苦戦しますけどね。魔法は偉大なのです。

訓練と日常

訓練が終了し、舞台やダミー人形の後片付けをして学校を出て喫茶店に入る僕達。もっと強くなる為に今日の訓練内容を冷静に分析し、良い点と悪い点を洗い出すためだ。

「あー、まずはみんなお疲れさん。今日はランバルトの提案と可哀想なコージの為にちょっと変わった訓練をしたけど、皆の感想を聞きたい。セシーどうぞ」

ラインハルトが、そう切り出して今日の反省会が始まった。可哀想なコージって・・・

「またこのパターン？　いいけど。今日分かったのは、護衛対象が居るとやっぱり難しいのね。今日の敵は１０階層以上の奴らだったから余計にだけど、それにしても簡単に分断されたし、魔法の入りも悪かったわ。あれにはちょっと泣けて来たわね」

訓練の内容を思い出しながら応えてくれるセシリア。僕達からは見えなかったんだけど、セシリアの魔法も上手く決まらなかったみたいだ。

「じゃ、次はバルト」

「俺か。今日は分断されてしまった事でらしくもなく焦ったな。指示を出そうとしたが、うまくできずに事態を好転させる事ができなかった。結局個人の力だけに頼った下の下だったな、今日は」

断定した口調でランバルトは感想を述べる。口調だけを聞くと落ち込んで居ないように思えるんだが、顔を見れば苦々しい顔をしてい

るので今日の訓練は腑に落ちない事が多いのだろうと推測できる。

「じゃ、エリー」

「魔法がまったく駄目だった。要練習」

ぼそぼそっと応えるエリー。それなりに魔法に自信があったようで、それだけを言うと俯いてしまった。

「僕もだね。魔法を効果的につかえない、剣で敵をあしらえない、護衛対象もうまく守れない。ないない尽くしだったね。ただ、カッターを2匹に当てられた点だけは良かったかな。それ以外は実力を出し切れたとは言えない」

指名される前に応えるレイモンド。それを受けラインハルトも感想を述べ始めた。

「そうやなぁ。今日はみんな精彩を欠いていたとしか言えんなぁ。でもあれが本当の実力と言われても文句は言えん。常に１００％の力を出し切れるとは限らんのやからな」

そういって、皆の反応を伺うラインハルト。今日の訓練が実力だろうと言われてしまい、みんなは少し不満があるようだ。

「そやけど、結果を見てみぃ。敵の攻撃を凌いで撤退という目標が、なんのなんの敵を殲滅してもうた。わしらの拙い連携でも結果は十分以上のものが出せたと思わんか？」

どや？　って感じで再度みんなを見渡す。

「まぁ作戦目標と違う結果が出たのはたまたまにしろ、磨けばもっ

と上を目指せるやろうなと、今日とくに思った。」
「んーそうねぇ。結果だけ見れば悪くないっていうのは確かにそうね。満足はしてないけどね」
「うん、練習しなきゃ」
「そういう見方もあるわけね。なるほど」
「俺はやるからには一番を目指したい。その為の努力は惜しまないつもりだ」

口々に感想を述べる皆。確かに連携はちょっとまずかったけど、結果としては僕が攻撃される事もなく無事に終わっているよね。それにパーティを組んでからまだ日が浅い分、ランバルトも皆が出来る事を把握しきれていないんだろう。

「それに、今日はコージは戦っとらん。まぁバランスを調整するのは難しいかもしれんが、コージも戦えばさらに良くなると信じてる」

そういって僕を見てにやりと笑うラインハルト。またにやりって笑うし。もう。

「でも、僕って使いづらいユニットじゃないかなぁ？」

どれもこれも、それなりって感じなのでツボを抑えれば、ハマるかもしれないけども。

「そこは俺の腕の見せ所だろう。で、今日はどうだったコージ？」
「護衛対象になるのは、他の人にお願いしたいね。僕も一緒に訓練したいよ」
「なに言ってるの。間近でちゃんと私達の活躍を見たでしょ？　誰に何を任せられるか知るのも立派な訓練なのよ？」
「あんまりセシーやエリーばっかり見てまた鼻血だされたら困るけ

どな。ま、ほどほどにしとけよー？」
「ちょっ、ラインハルトは僕の事をどんな目で見てるのさ？！」
ラインハルトめ言うに事欠いてなんて事を？！　血の気が多いのは本当だけど、なんだか僕がすごいスケベみたいじゃないかっ？！
「まぁまぁ、そういうのは慣れだから大丈夫だよコージ」
「レイモンド！？　その突っ込みは想定外すぎるんだけどもっ？」
その後は、悪い点を洗い出し、何故そうなったかを各々理由を考えてくるようにという事になり解散となった。
家に帰ると、美少女達が出迎えてくれた。うん、やっぱりミミって成長してきてるよね・・・？　しかも凄い勢いで。本人は気付いてないのかなぁ？　僕に対する態度が全く変わってないんだけども・・・
「コージィ、おっかえりぃ～！」
そういって、僕に飛びつこうとしてセリナや白夜に止められている。うん、止めようね。そんな事されたら僕、また鼻血で噴水しちゃうからね？
「セリナ達も班の人たちと、訓練してるんだよね？」
「ううん。一回しただけでぇ、後は良いっていわれたよぉ？」
「私もですね。ちょっとやりすぎちゃったみたいで、リーダーの人が大喜びしてましたけども。今後は程々に動くようにしないと駄目

ですねぇ・・・」
「わしも不思議そうな目で見られてのぉ。あんな目は好かん」
「ボクは応援してれば良いから、楽だよ～」
あー・・・凄すぎて合わせるのも大変そうだもんなぁ、みんなは。
ヒロコはあまりの戦わなさに応援させてるんだろうな、きっと。
「凄すぎると、それはそれで大変なんだねぇ。僕も頑張らないとね。
あ、そうだ！　明日ってどこか行きたい所ってある？　一応、セシリアとエリーに女の子が好きそうな所を聞いてきたんだけども・・・」
と言っても、どこもかしこも買い物関連だったんだけどもね。覚えるのに一苦労した。
「一緒にお出かけできるなら、それで・・・と言いたいのですが、私は服を見に行きたいです。ロバスだと色んな服が売っていて見に行きたかったんです」
なるほどセリナは服ね。なるほどなるほど。
「ミミも服が見たいなぁ。コージにぃ選んで貰いたいの・・・」
「僕が選ぶより店員さんのほうが、可愛いの見繕ってくれるんじゃないかなぁ？」
「だぁめ。コージが選んでね？」
「もう、分かったよ。後で文句言っても知らないからね？」
「わぁい」
「あの女、中々やりおるな・・・」
「えぇ、いっつも私負けてるんです。可愛い顔して中々押しも強い

ですし・・・」

なにやら、セリナが白夜とぼそぼそと内緒話をしている。セリナ、白夜と仲良くなったんだね。良かった良かった。

「白夜は・・・どこでもいいよね？」

「主っ！？　その対応はいかがなものじゃ？！　わしだって傷つくぞ？」

「わぁ、ごめんごめん。白夜は自分で色々出せる見たいだから、服とかは別に要らないのかなって思ったんだよ」

「出せるけど、要らないって訳では無いんじゃぞ？　わしを傷つけた罰として、わしに似合う服を選べ。良いな？」

「はいはい。知らないよ、どうなっても」

小物が売ってる一角や服が売ってる一角は隣接しているので、色々合わせながら見て回るのが良いだろうね。あ、そうだ町ではぐれたりしたら困るからみんなに携帯を渡しておこう。あとお金も分配しておこっかな。借金も綺麗に無くなったしね。

「なんでボクには何も聞かないのかな、マスター？」

「ん？　ヒロコはどうせ小物とかが見たいんでしょ？　ちゃんと行くから大丈夫だよ？」

「む。むむむ。何も言わなくても分かって貰うのは嬉しいんだけど、なんだかマスターのくせに生意気だって凄く言いたい！　生意気だっ！」

「なんでさ！？」

もうヒロコは本当に何を考えてるか、さっぱりだよ。んと、とりあえずお金は今どれだけあったっけかなぁ？　一万ゴールドぐらいあったはずなんだけど・・・そこからお金を数えた記憶がないなぁ。

あ、やっぱり一万ゴールドぐらいだね。一人二千ゴールド渡しておこう。

「それじゃあ、お金と携帯渡しておくね」

そういって皆にお金と携帯を渡す。セリナには前に携帯渡しているからお金だけだけど。

「え、なんでこんな大金を渡すんですか？　まさかの手切れ金・・・！？」

「セリナの発想は想定外だ！　なんでそんな発想になるのさ？　これは今まで皆で稼いで来たお金だよ。僕が預かってたけど、ちょうど良いから分配してるだけだよ、もう」

「じゃあ、おこづかいだねぇ。えへへありがとうコージィ～！」

ごめん、おこづかいって感じじゃないぐらいどでかい袋に入れてごめん！　両替しとけばよかったよね・・・でも、指輪に入れておけば出すのも入れるのも簡単だから許してね。

ヒロコはともかく白夜はあんまりお金を使う事はないだろうけど、持ってたら何かと役に立つと思う。それに皆に渡しているのに白夜にだけ渡さないというのも、仲間はずれにしてるみたいで嫌だしね。

それじゃあ、明日のお出かけに備えて今日はゆっくりと寝るとしよう。

「なんでこうなってるんだろう・・・」

「班の人達とばかり遊んでるからです。私たちもコージ分を補給しないと駄目なんです」

「うん、コージがぁかまってくれないから仕方ないんだよぉ？」

「主の自覚が足りんのじゃ。もっと構え」
「すー・・・すー・・・」

なぜかその日は、下の部屋に布団を敷いて皆で一緒に眠りました。
鼻血、大丈夫・・・だよね・・・？

訓練と日常（後書き）

評価やお気に入り登録ありがとうございます！

サブタイトル苦手です。数字だけにしちゃおうかなぁとか考えたり。

人が増えてきて、コージ君も色々学んでいく予定です。

で、いまさら気付いたんですけど、大好物なツンデレが居ない。リアルでツンデレはきっと凹むでしょうけど、大好きですツンデレ。

みんなでお出かけ

少し冷たい空気を感じて目が覚める。最近は日中はかなり暑いんだけど、朝晩はかなり冷え込む。寝てる間に乾燥した空気にさらされていたのか、喉が渇いて仕方がない。台所に行って水を貰ってこよう。

「あー・・・」

なんか身体がすっごく重い。寝起きにしてもちょっとしんどい。これって鼻血出した影響なのかなぁ？　ずるずるとゆっくりながらも布団から這い出る僕。

ゴトゴトゴトッ

「ん？」

何か転がった音がしたけど気にしない。あー身体が軽くなった、寝起きでしんどかっただけみたいだね。お水お水。とてとてとゆっくりと台所に向かう。ロバスのこの家の水道はちゃんと蛇口から水がでるようになっているから、簡単に水が飲める。ロバスって便利な所だよねぇ。

「ふぅ、おいしかった。もう少し寝よっかなぁ」

まだ早い時間に目が覚めたらしく、まだちょっと外が暗い。部屋に戻ろう。

「ごめんなさい」

四人が起き出して、勢いよく僕の部屋に入って来た時は何事かと思ったんだけど、よくよく思い返してみると昨日は下の部屋でみんなと寝ていたのを思い出した。こっちに来て日が浅いのに、自分の部屋に戻る習性がついてしまっていたようだ。

朝、セリナ達が起きると僕が居なくなっていたので驚いたそうだ。しかも、どうやら僕は皆を蹴散らして部屋を出て行ったみたいで、それも皆が怒っている原因にもなっている。

「ひどいです、もう。罰として一週間一緒に寝て貰いますからね」
「はい分かりました」

全面的に僕が悪いので許してもらうには、なんでもするしかないのである。だけど、一緒に寝るっていうのは拷問に近いなぁ・・・でも、これに慣れたら鼻血を出さなくて済むようになるかもしれない。

「というわけで、トラブルもありましたが今日はお出かけするのです」

そうセリナが宣言して、僕達は朝の件でちょっと気まずい思いをしたけど、気を取り直して町へ遊びに行く事にした。

今日は他のブロックへ直接行ける内環状が使えるので、移動時間が前回ほど掛からないのであちこちを見て回る予定だ。まずは今回も北ブロックにある女神像へ赴いて、誰かが女神像に声をかけられないか確認して、次に南ブロックに行って服飾店へ向かう。その後は

お腹の減り具合にもよるけど、今度こそ「レアリア」に行く予定なのである。

「うふふ～・・・ふふふ」

バスに乗って移動している間、ミミはずっとご機嫌だ。終始笑顔をふりまき、周りの人間の目を男女問わずに奪っている。そして、その笑顔の先が僕に向かっているのを知ると大概が突き刺さるような視線を投げかけてくる。更に僕の周りにいるセリナ、ヒロコ、白夜を見て、視線の強さがヒートアップしていくのであった。

「今日は誰か神託受けられるかなぁ？」
「どうでしょう？　それこそ運がよければですね。ひょっとしたらコージがまた神託を受けるかもしれませんし」

え、あれって二度も受けられる物なの？　一回こっきりじゃないの？

「いえ、受ける人は立て続けに受けたりするものらしいですよ？普通は神託を受ければかなりの幸運が舞い込むので、あまり繰り返し来るものではないみたいですが」
「だったら、僕行かない方が良いのかな？」
「うーん、前の分はかなりの幸運というか必要な事だったような気もしますけど。別にそんなに気にしなくても良いと思いますよ？」
「うんうん、それにぃコージが来ないと寂しいもん」

ミミは嬉しい事言ってくれるよねぇ。嬉しくて思わず頭を撫でてしまう。そうするとミミは蕩けるような笑顔になり、周りの人間をさらに魅了した。うぉ、やばい。ここら辺でやめとかないと僕の身が危なそうだ。

女神像のある縦穴の通路は相変わらず混んでいた。だけど、今日は前に比べると少し人の流れが早くて、すぐに女神像まで辿り着きそうだった。

「して主よ。これに一体どんな意味があるのじゃ？」

「運が良いと試練を与えられて、それをクリアしたらもっと幸運が舞い込む・・・って事かな。運試しって感じになるのかな？　そういったのって分かる？」

「なるほど運試しか。わしは一か八かとか、のるかそるかとかいう言葉は好きじゃ」

「白夜が言うと、なんだか物騒な気がするなぁ・・・」

そうやって他愛ない話をしていると、あっという間に女神像の前に辿り着いた。女神像の前についた途端、ヒロコが妙な踊りというか動きをし始めたんだけど、それが神託を受けての事なのか、急にアホな事をしたくて始めた事なのか判断しかねた。だって、最近のヒロコって謎が多すぎるんだもん。唖然とした顔でヒロコを見詰めると、にこっと笑った。うん、これは単純にアホな事をしたくなっただけだな。

「誰か、神託受けた？」

僕の質問に頭を振る皆。今回は僕も何も聞こえず、ちょっと残念だった。まぁ、優しそうな顔の女神像を見るだけでも、充分楽しいからいっか。

「マスター、ボク神託を受けたように見えた？」

「ううん。アホな子に見えた」

「アホって何さー！　マスターのあほー！」

「はいはい」

「うわっ、なんかその投げやりな感じが更にむかつくー！　むきー！」
「うはは」
と、ヒロコとじゃれあっていると誰かとぶつかってしまった。
「あ、ごめんなさい」
「あぁ？　ぶつかっといて謝るだけで済むと思ってるのか、兄ちゃん？」
「え？」
なんだかヤクザみたいな事を言う人だなぁ。ちょっと見た目も怖いし。
「昼間っから綺麗どころはべらせて良い身分じゃないか。侘びに俺に寄越しな兄ちゃん」
そう言って、セリナの腕を掴もうとするヤクザみたいな人。あれ？　気付けば周りに人が居なくなってるし。僕とヒロコとじゃれあい過ぎて皆逃げたみたいだね。
「やめてください。無理な事言わないで下さいよ。危ないですよ」
セリナを掴む前に、その手をがっちりと掴み逃がさないように、しっかりと両手で持ち直す。
「なんの真似や？　こんな事をしてタダで済むと思ってるんじゃ・・・」
「うーん・・・おじさんって、痛い目を見ないと分からない人なのかな？」

セリナやミミに手を出して無事に済むと思っているんだろうか、この人は。嫌われたりしたらタダじゃ済まないって言うのに。

「コージ・・・」

なんだか、顔を赤くしてこっちを見ているセリナ。え、おじさんをセリナから守ってるだけなのに、なんでそんな反応になるの??

「ちっ、覚えとけよ。面は覚えたからな、兄ちゃん」

僕が余りにも真剣な表情で力強く腕を握っていたせいか、そう言ってその場から離れていってくれたおじさん。面は覚えたって、別にお礼なんて良いのにねぇ。律儀な人だなぁ。

「真剣に話せばやっぱり分かって貰えるよね。良かった良かった」

「コージ、ありがとうございます。うふふ」

「え、いや当然の事しただけだよセリナ」

被害者は出ないに越した事はないからね。そう思ってにっこり笑ってセリナを見る。セリナもそう思ってくれたのか、笑顔を返してくれた。何事もなくてほんと良かった。

みんなでお出かけ（後書き）

中々遺跡実習まで辿り着けませんね。自分で書いておきながらモドカシイッス。

遺跡実習開始

昨日は皆で服を見て周り、何度も試着してその度に色々悶着（ぽろりは無いよ）があったりしたけど概ね楽しく過ごし、「レアリア」で今度は食事ができたので、僕としては満足だった。それに良い事もあったし。皆も楽しく過ごしてくれたようで、笑顔で一日を終えた。

そして今日から遺跡実習が始まる。

いよいよ生徒だけで遺跡に潜ると言う事になって、教室の雰囲気は少し浮ついた物になっていた。先に遺跡に潜った者も居る様だったけど、そういった者達でさえ教室内の雰囲気に中てられて、騒がしい雰囲気になっていた。

「さて、今日から潜って行く事になるけど、コージ。体調は万全か？」

「うん、おかげさまで。昨日も楽しんだおかげでリラックスできたしね」

ランバルトが僕の体調を心配して聞いてくる。彼は回復の要だけあって、そういった事はやはり凄く気になるようだった。お見舞いにもわざわざ来てくれたぐらいだもんねぇ。

班は七つにわかれている。僕たちの班とセリナの居る班の六人が一番少ない人数で、多い所は十人。他はだいたいが八人ぐらいで構成されている。班のメンバーは仲が良いだけでなく実力も大体揃っている面子で構成されている。メンバーが多い班はそれだけ実力が低いとみなされているようだ。・・・あれ？　僕がこの班に居るのは

おかしくない？　あー他のメンバーが優秀すぎるから、転入生の中で一番駄目な僕を押し付けられちゃったって事なのかなぁ。うーん、足手まといにならないように頑張らなきゃね。

「ほいで、よくよく考えたら班の名前をまだ決めとらん。なんかええのんないか？」

あれ？　まだ決めてなかったんだ。そう言えば誰がリーダーかも決まってないのかな？

「じゃあ、リーダーの俺が決めさせて貰って良いか？」

あ、ランバルトがリーダーなのね納得。

「なんや、言うてみ。気に入ったら挙手で」

「トリックスターというのはどうだろうか。ひと癖もふた癖もある奴等ばかりだからな」

その言葉に苦笑いをしながらも皆が渋々という風に挙手していた。

「ようし、じゃあトリックスターで決まりやな。これでようやっと形が整ったわけやな。で、こないだの訓練で出した課題なんやが」

そこで言いよどむラインハルト。なんかこっち見てる。

「皆の意見を見せてもろたんやけど、わしとしてはコージが指摘してくれた事が、正しいような気がするんやけど、言うてええか？」

「え、うん。いいよ」

この間の訓練で、苦戦した原因を考えて紙に書いてラインハルトに

渡していたのだ。他の皆も渡していたから、パーティの力を向上させる為に真剣なんだなと分かった。

「まず分断されたのは、わしが突出しすぎてしもうたのが原因の一つやな。セシーの魔法剣の詠唱の時間を稼ごうとしたのが裏目に出たんやな」

「確かに。あれで前衛が乱戦になってしまったからね」

「そんで、突破した二体を対処できるやろうと、任せてしまったせいで分断できる空間ができてしもうた。護衛対象が居るっていう前提をすっかり忘れてたのが原因や」

そう、護衛対象が居るなら優先順位をちゃんと考えないと、ちょっとした事で崩れてしまいがちなのだ。そして、大概が取り返しのつかない事になっちゃう。ゲームだとリセットすれば良いんだけどもね。

「で、エリー。エリーの魔法が氷系にもかかわらず、炎の壁に近いオークに足止めの魔法をかけようとした。炎の近くにある氷なんかすぐ溶けてしまうわなぁ。迂闊やったわ」

「・・・」

「そこで切り替えて、攻撃呪文にしておけばオークの意識を分断できてもう少し楽に守る事ができたはずとコージが書いとるんやけど、その通りやと思わんか？」

「そうですわね。あまり固執しすぎると良くないのは意識しているつもりなんですが、咄嗟にできないのは、まだ私も未熟という事なのですね」

「うん、臨機応変にいかないと駄目・・・だね」

いや、なんかそんなに落ち込まれると少し罪悪感がある。

「えっとごめんね。なんか変な事書いちゃって」
「ううん、むしろそう言った事を指摘して貰える方がありがたいわよ。ね、エリー」
「そうです。まだまだ上を目指したいのでお願いします、コージ」
「ま、なんつーかこのぼけぼけーとしたコージが、まさかここまで的確な意見を出してくれるとは、信じられんやろうけどホンマの話や」
「ぼけぼけーって・・・僕そんなに緊張感無い顔してるかなぁ？」
いつもラインハルトは失礼な事を言うなぁ、もう。
「緊張感無い顔や思われとう無かったら、今日の実習で頑張る事やな、コージ」
「はいはい、わかりましたよーだ」

遺跡の実習に入る前に、それぞれ装備や荷物を登録する事になっている。実習なので、遺跡で得た物品は全て、学園が管理する事になっているのだ。実習から帰ってきた時に、入る時に持ってなかった装備をしていたり、アイテムが荷物の中に入っている場合は、横領していると看做されるので罰則が科せられる。なので、間違いなく申告する必要がある。あー・・・でも指輪に山ほど武器を保管しちゃったんだよねぇ。とりあえず「ギル」を二本だけ装備しておく事にして他の物は出さないようにしよう。あとは反転フィールドが五個にアタックオプションが十個。あー光る浮き輪君も念の為荷物の中に入れておこう。
アナライズの魔法と併用して、講師陣が装備や荷物を次々にチェッ

クしていく。今日は一年全員が遺跡に行くという事で百人程の生徒がいるのだけど、あっという間に僕達の番がきて、すぐに終わった。全員が登録を終わるのを待って、遺跡の入り口へと向かった。

僕達は人数が少ないので比較的早く入り口についたようで、六番目に突入する事になった。

「なんやコージの武器って、今まで見た事ない武器やけどそれ武器やんな？」

僕の腰にぶら下がっている「ギル」を見て、ラインハルトが不思議そうに聞いてくる。そういえば、皆には初めて見せるんだっけこれ。

「うん、僕にしか使えない武器なんだ。他の人が触っても使えないから便利なんだ」

「もしかして、アーティファクトって奴か？」

僕の話を聞いて、ランバルトがぬっと出てきた。びっくりしたぁ！

「ううん、自分で作っただけだから別に大層な物じゃないよ。僕にとって使い勝手が良い様に作ったから、どっちにしても他の人が使うのは難しいと思うけどね」

「自分で作ったって、そんなんで大丈夫なんか？」

う、そうか。知らない人から見れば僕が作った武器って不安材料になるか。一応、安心させておこっか。

「そいじゃまぁ、大丈夫な所をお見せしましょう。まずは「炎」」

Bボタン連打で炎に合わせ、Aボタンをスライド。炎の魔法剣を選

択する。

ぼぉおっ！

「なんや！？　どういう仕組みや？！」

「続いて「雷」」

Bボタン連打で雷に合わせる。すでにAボタンはスライドしているので、後はBボタンを押しっぱなしにするだけで雷の魔法剣になる。

パリッパリパリッ！

紫電をまとわりつかせた雷の魔法剣となる。そして、Aボタンのスライドを戻し、Bボタンから指を離して元に戻す。

「というわけで、他にも色々な属性を持つ剣を出せるし魔法も撃つ事ができる武器って訳。ここじゃ危ないから魔法を撃たなかったんだけど、なんなら後で見せよっか？」

・・・あれ？　返事が無い。

「おーい、ラインハルト？　この武器、大丈夫だよね？　ね？」

あまりの無反応ぶりに心配になってくる。

「おい「トリックスター」遺跡に入れ。お前達の順番だぞ」

「あ、呼んでるよ皆。早く行こう？」

「あ、あぁ・・・」

何故だか呆然としている皆をひっぱって、遺跡へと入る。ようし、

頑張るぞ！

遺跡実習開始（後書き）

結局作るだけ作って余り使う機会のなかった「ギル」を使う事にしました。

ちなみにリュートが奪った「ギル」は、すでにカートリッジが切れた事があったので、メンバーの女の子がカートリッジにコマめに魔力を注いでいました。

そして、忘れ去られている魔力を吸う設定のグローブ。なんだかんだで魔法をグローブで受け止めるのって勇気がいるので使えてないという駄目アイテムになってます。

本当の初陣

僕は良く分かっていなかった。

分かってるつもりだっただけで、結局何一つ分かっていなかった。

いや、心のどこかでは気付いていたかもしれないけれど、僕の能力がそれにうまく蓋をしてしまった。だから余計に僕は、分からないままで過ごしてきたのだった・・・

命を奪うという行為の重さを。

遺跡一階部分。ここから、調査が始まる。遺跡に入る前にガイドクリスタルという物を持たされた。これは、遺跡で生徒達がどこに居るか分かるアイテムであり、生徒が危険な状態に陥った際に、講師に知らせる為のアイテムなのだ。

非常に歩き易い平坦な通路を奥へ奥へと突き進む。今回の目標は八階層。そこに徘徊しているオークを少しでも多く倒す事が目的だ。八階層より下に行ってしまうとスペルキャスターが敵に混じってくるので、普通の学園の生徒には荷が重いのだ。

「ねぇ、コージの武器ってどんな事ができるの？　剣が実体化するなんて初めて見るわ」

さっき皆が呆然としていたのは、僕が詠唱する事なく魔法剣を出し、あまつさえ一瞬で切り替えた事に驚いていたせいだった。しかもあ

れだけ見事に属性を示す魔法剣は滅多に無いそうだ。せいぜいが、刃先が少し熱で揺らいだりとか、斬った相手から炎が出たりとかするぐらいだそうだ。

「さっき見せた魔法剣だね。属性に合わせた魔法剣だけじゃなく補助魔法とかの属性も持たせる事ができるよ。あとはそのまま魔法を撃つぐらいだね」

「剣になってる時に魔法って撃てますの？」

「ううん、魔法を撃つ時には剣は消えるよ。というか剣にしている時に魔法を撃つと剣が魔法になって飛んで行くね」

「へぇ・・・便利なのですね」

セシリアは自分が魔法剣の使い手なので、僕の「ギル」に興味津々のようだ。その後も、魔法剣での戦い方などを話し合ったりしながら遺跡内部を下層へ向かっていった。

「・・・おかしい。いくらなんでも敵が出て来なさすぎや。もう六階層まで来てもうたで」

普段ならもう少し出てくるみたいなんだけど、まだ一回も敵と遭遇していない。今日は実習で生徒がたくさん遺跡に来てるから敵が居ないとかは無いのかな？

「いや、遺跡は広いんや。それに敵はいっつもわんさか出てくるしなぁ。そやないと実習とはいえ稼げへんしなぁ・・・」

そういえばそうか。実習で生徒を多数、遺跡に送り込んでも敵が居なくなるほど殲滅できるわけじゃないし、かといって遭遇しない訳でもない。程よく会敵するからこそ、儲けが出てくるわけだし。だとしたら、なんで居ないんだろうね。

「まぁ、たまにはそんな日もあるか・・・このまま下を目指すで」
「了解」
「ああ、分かった」

それぞれ返事をし、さらに下を目指す。また前みたいにキラーマシンが出てくるとかは無いよね？　でも、あれは十五階層だったから、大丈夫かな。なんだかんだで、このトリックスターのメンバー全員は遺跡に潜った事がある。ラインハルトとランバルトは二人で良くこの辺りまで潜って、鍛えてたそうでいつもと違う遺跡の様子に、警戒心を強めていた。

「お」

先頭を歩いているラインハルトが小さく声をあげ、全員に止まれの合図を出す。手で右に曲がる通路の向こうに6匹いると伝えてくる。そして一度僕達に振り返り、準備は整ってるか確認する。そしてセシリアと頷きあい、すばやくラインハルトは通路の向こう側に移動する。

「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」
「よし、行くで！」

「グギャァツ！？」
「ガガッ！」

今度は足止めの魔法がうまくかかったようで、二匹のオークの足元が凍りで覆われている。他の四匹も不意打ちに驚き、戸惑っている。そこへラインハルトとセシリアが襲い掛かる。

ラインハルトが踏み込んで一閃。そしてその隙をカバーするかのように、セシリアもオークの左側からすばやく突きこむ。

「グギャァアアア！」

バシャァアアアアッ

セシリアが突いた場所から勢い良く血が流れ出す。そして、間合いを詰めていた僕達のほうにまで、飛び散ってきた。

その光景を見た僕は止まった。そして吐いた。

「コージ！？」

僕の異変にすばやく気付いたランバルトが、敵から眼をそらさないように僕を介抱してくれる。

「おい、大丈夫かコージ。しっかりしろ！」

「う、うん」

その間も戦闘は止まらない。ラインハルトの斬撃がセシリアの刺突がレイモンドの風魔法がオークをバラバラにし、穴だらけにしていく。腕がもげ、足がもげ、身体は穴だらけにされながらもオークは向かってくる。中には逃げ出そうとするオークもいるが冷静に止めを刺す皆。

その光景を見てさらに吐いてしまう。

「・・・おまえ、ひょっとして実戦は初めてなのか？」

「ううん、そういう訳じゃないんだけど・・・いや初めてか・・・」

僕が魔物を武器であれ魔法であれ、ある程度痛めつけると選択肢が出てくる。止めを刺さなくても、選択肢が出てきたんだ。

僕自身も剣で斬るというよりは殴る感じで戦っていたので、こんなに色々飛び散る戦いはした事が無かった。訓練でも血しぶきまでは再現していない。それに、魔物をアイテムに変えてしまうと痕も残らず、なにもかも綺麗になくなって、手元に残ったアイテム以外にその存在を証明するものは無い。よくよく考えるとこんな残酷な事はない。だって、遺体もなにも残らないんだから。僕の力は一体なんなんだ!?　・・・いや、力のせいにしちゃ駄目か。僕は喜んで今まで利用してきたんだから・・・

「これがみんなの戦場か・・・」

僕が吐いてる間に戦闘は終了し、皆がこちらに気付いたようで不思議そうな顔でこちらを見ている。

「コージ、どないした?」

ラインハルトが返り血を浴びたまま、こちらに駆け寄ってきた。

「うん、ごめん。こうやって戦闘するのって初めてだったから吐いちゃった」

「あ?　そうやったんか。ほなしゃーない。慣れるまでちょっと休んどけ」

「うん、ありがとう」

「コージ、この薬を水で飲め。すこしは吐き気も収まる」

と、ランバルトに渡された薬を水で飲む。だけど、オークの血臭が漂ってきて吐き気が込みあがって来る。だけどぐっと堪えて、吐くのを我慢する。目と鼻から命を奪った証拠が流れ込んでくる。だけど、これを乗り越えない事にはいつまでも経ってもお荷物のままだ。

「まさか初陣とは思わんかったから、ほいほい来てしまって悪かったな。とりあえず、アイテムの回収と討伐証明部位を切り取って一旦もどるか」

ラインハルトのその言葉にうなづくメンバー。

「ほらっ、くよくよしないコージ。初戦はそんなものよ、落ち込まないの」

セシリアがそう言ってくれるけど、やっぱり自分の情けなさが辛い。ん・・・何か来た？

「ラインハルト！」

「おう、お客さんのおでましのようやな！　でかぶつが来たみたいやで」

ドシドシと大きな音が響き、こちらに向かってやってきてるのが分かる。この階層でそんな大物が出るのだろうか。

「ここらあたりやと、ビッグパニモアあたりやな。突進には気をつけろ」

「分かった」

猪のでかい版という事か。それは確かにちょっと怖いな。ドシドシと通路の向こうから響いていた足音が近づいてきて、そいつは姿を

現した。

「・・・おいおい・・・まじか・・・」

僕達の前に現れたのは巨大なオーガ。この階層で見かける筈の無い魔物だった。

本当の初陣（後書き）

選択肢が出てくる事でゲーム感覚でいた光司君。
この世界の住人達はモチロンそんな物は出てきませんし、魔物を倒すのに容赦しません。内臓でろりんや血がどばどばなんか、当たり前の世界です。炎系の魔法や氷系の魔法であればそういった物を見なくて済む事もありますが、基本的に死体は目を背けたくなる惨状です。

オーガはレッドベアと同じぐらいの強さです。

まともに戦える光司なら楽勝です。ラインハルト達には少々難しい獲物で無傷での勝利は無理です。

イレギュラー

「“我が力に答え、その身を護りたまえ。ホーリーコート！”」

ランバルトの物理防御呪文が響き渡る。

「ぼさっとするな！　ハルトッ！　引き付けろ！」

「！」

まさかのオーガの登場に、一瞬立ち止まっていたラインハルトだが、ランバルトの声に我にかえって、オーガの一撃をかろうじて避ける。その太い手足から繰り出される攻撃は、恐ろしく早く範囲も広い。油断しているとあっという間に持っていかれそうだ。僕もうずくまったままだと、足手まといになるので一旦後方へと下がる。

「セシリア、エリー、足止め！」

「「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」」

二人が詠唱を揃えて魔法を唱える。片足ずつ凍らせる事ができたが、ほんの数秒で動き出すオーガ。力も半端じゃないようだ。

「“風よ！　我が敵を戒めよ！　ヘティス！”」

レイモンドが魔法を飛ばす。ほんの少しでも敵を弱める効果のある呪文をかけておいて、本気を出せないようにしないとやばい。僕も「ギル」のモードを雷にして、オーガを麻痺させるべく突撃する。

ラインハルトとセシリアの間を通って、オーガと相対する。だけど、

剣を向けた途端にさっきの血しぶきを思い出し同時に吐き気がこみ上げる。

「コージ無理すんな、下がっとけ！」

僕の異常に気づいたラインハルトが僕を気遣うが、その隙をオーガが狙ってきた。

「ハルトッ！」

セシリアが叫ぶがラインハルトは反応が遅れている。僕は咄嗟にラインハルトを突き飛ばすも、直撃が避けられただけで勢い良く吹っ飛ばされてしまうラインハルト。

「ぐあっ！」

吹き飛ばされたラインハルトを見て、形振り構わずオーガへ斬りかかる。だが、そんな幼稚な攻撃はオーガになんなく弾かれ、逆に僕も吹き飛ばされてしまった。

「あぐっ」

しまった、これで戦力が一気に減ってしまった。咄嗟に利き腕は庇えたけど、左腕がきっと折れてる。レイモンドが前に出てくるけど、彼は攻撃よりも回避が得意なので攻撃を加えて注意を引き付けるという事はできない。

「“満ちるマナよ、彼の人達を癒せ！　リフォーガ！”」

自分と転がっているラインハルトに回復呪文を唱える。うん、これ

は大丈夫か。

「ランバルト！　仲間にかける身体強化の祝福呪文ない？！　あったら教えて！」

「俺は使えんぞ！？」

「いいから、はやくっ！」

今のところ、オーガの注意はレイモンドに向いているけど、彼に攻撃力が無いと分かればきっと後回しにして、倒しやすい敵を狙いにくるはずだ。そう、僕やラインハルトを。その前にレイモンドとセシリアに身体能力向上の呪文を唱えて対処して貰いたい。僕の知ってる身体強化は自分自身にしか掛けられないのだ。

「“我が身を削り、祝福を与えたまえ！　ブレス！”というのが、仲間の身体強化の呪文だ。体力をごっそり使うはずだから気をつけろ」

「分かった。“我が身を削り、祝福を与えたまえ！　ブレス！”」

まずはレイモンドに向けて呪文を唱える。なんの説明も無しに魔法を掛けたけど、うまく立ち回ってオーガに強烈な一撃を見舞いながら攻撃を回避している。

次はセシリアにも唱えたいんだけど、リフォーガが掛かっているとはいえ、オーガから一発喰らった状態なので、この呪文を唱えただけでかなり疲れてしまった。魔力には余裕があるから、体力を回復しよう。

「“満ちるマナよ、我を癒せ！　リフォー！”　続けて“我が身を削り、祝福を与えたまえ！　ブレス！”」

リフォーで体力が回復したのを確認し、続けざまにブレスを唱える。
セシリアにも掛けたのでこれ
でしばらくは時間が掛けられるはずだ。ラインハルトの方を見るとランバルトが回復呪文を唱えている。それで少しは落ち着いたようだ。

ブレスが効いているとはいえ、オーガには再生能力がある。二人の一撃の威力は上がりはしたけど再生能力がある為に、オーガを倒すより先にブレスの効果時間が切れるだろう。だけど力を溜めたラインハルトの一撃を喰らわせる事ができれば、なんとかなるはずだ。なので考え付いた作戦を実行したいと思う。

「そのままで聞いて。レイモンドとセシリアは善戦してるけどこのままじゃ持たない。そして回復呪文をかけたとはいえ、僕はオーガから逃げ切れる程じゃない。だから、オーガを倒すしかない」
「なにか手があるのか、コージ」

ランバルトが真剣な表情で尋ねてくる。作戦はあるけど成功率はわからない。僕としては7割は成功すると考えているんだけど。

「僕の持ってるアイテムが鍵になるんだ。このアイテムを使うとオーガに無防備な背中をさらさせる事ができるんだ」
「背後を取れるという事か。そこをハルトに攻撃させるんだな。まずは足か」

さすがランバルトだ。アイテムの説明をしただけで僕がしたい事を分かってくれる。

「うん。その通り、足を狙って攻撃してもらうつもり」
「背中を向けるなら、それこそ背中めがけて攻撃した方がええんや

ないんか？」
「僕としては、機動力。つまりは足だね、そこを攻撃して動けないようにして安全に攻撃をしたいんだ。片足だと立ってられないだろうから、それだけで大分安全になるはず」
「て事だ、ハルト。一撃でオーガを倒せるなら別に背中を狙って貰っても構わんがな」

そういう事。いくらなんでもオーガを一撃で倒せる人間は英雄とかそういう人間だけだろう。

「なるほど、足だけなら俺でも立てないぐらいにはできそうだな。わかった、それでいこう」
「私は何をすれば良い？」
「エリーは囮なんだ。エリーが使える一番強い攻撃魔法であいつの怒りを買ってほしいんだ。できる？」
「やる。任せて欲しい」

本当は僕がやれれば良いんだけど、剣であれ魔法であれまだ攻撃できそうにないんだ。

「で、こっちに向かってくる所を僕がアイテムを投げつけるから、あとは僕が合図をしたらラインハルトは思いっきり攻撃して欲しい」
「分かった、思い切りぶちかます」

これで準備は整った。僕達ならできるはず！

「エリーお願い！」
「少し待って・・・
・・・
・・・

“氷よ！　全ての動きを凍てつかせよ！　ブリザード！”」

しばらく魔力を練っていたのだろう。瞑想をしてから呪文を唱える。そしてエリーの詠唱を聞いた途端、青ざめた表情でオーガから離れるレイモンドとセシリア。今の呪文が彼女の放つ最強呪文と知っているのだろう。事実、すごい勢いで通路が凍りつきエリーから猛烈な冷気がオーガに向かって放たれていく。

「グ・・・ガッ」

さすがにこの呪文は堪えたのか、動きが鈍くなっていく。だけど、それも束の間。オーガの体表面にまとわりついていた氷は、すぐに水蒸気になり怒りの形相でエリーに向かってくる。

「グガァアアアア！」

ズシンズシンズシン！

ここが勝負どころだ。反転フィールドを二個投げつけ準備完了だ。

「ラインハルト！　攻撃準備お願い！」
「おぉっ！」

ぐっと身体を沈みこませ、解き放たれる直前の弓矢のような力強さを感じる。そして、オーガが反転フィールドまで差し掛かる。

「いまっ！」

その掛け声と共にオーガに解き放たれるラインハルト。それと同時に反転するオーガ。

そして見事にラインハルトはオーガの足を切り飛ばした。

「グガッ！？」

ズシン！　ズザー！！！

右足を半ば以上斬られて転がり、先程のブリザードの効果が残る通路をまるでスライディングをするかのように滑っていくオーガ。そして、その先でブレスの効果のかかった二人がそれぞれ腕を狙って突撃する。

「おおおおっ！」
「はぁあああっ！」

さすがにラインハルトのように、斬り飛ばす事はできなかったが深手を負わす事ができた。これであとは落ち着いてやれば倒せるはず・・・だ・・・

そこまで見届けて僕は緊張の糸が切れたのか、ふっと意識を失った。

「“彼の者の眠りを覚ませ　ウェイク”」

バルトの覚醒呪文がコージにかかる。これですぐにでも目を覚ますやろう。しかし、コージが今回が初陣とは驚いた。訓練の時も、別に慌てたり騒いだりせんかったし武器にしても、使い込んでるあとがあった。それに十五階層まで潜ったって言ってたよなぁ？　まったく戦闘せんかったんやろかいな？　というか、コージの奴オークをぶった切った時の反応はまさしく初陣の奴の反応やったよなぁ。

そやのにオーガと戦った時は的確な指示を飛ばしてくれたからのぉ。なんやこいつはよう分からん奴や・・・

「・・・ん・・・あれ？　僕・・・」

「おはようさんやコージ。生憎、天国に行くのはまだ早いで」

きょとんとした表情でこっちを見るコージ。すると、途端にコージの腹が鳴った。

「お腹減った・・・」

「コージは、大物よね・・・」

うん、その意見にはわしも賛成やセシー。こいつはきっと大物になるわ。

僕が起きた時、メンバーと講師陣が周りに居た。どうやら、ガイド

クリスタルが僕達の危機を知らせてくれてたらしい。だけど、講師が到着した頃にはオーガは倒されていたようで僕達は過剰なまでの戦果を上げられたようだ。しかし、なんというか遺跡に潜るのは二度目なんだけど、どっちともヤバイ敵が出てきた。運が良いやら悪いのやらだ。

「ほいじゃ帰るで」
「え？　もう帰るの？　まだ来たばっかりだよ？」
「あほぉ。オーク六匹にオーガ一匹倒しといてこれ以上何をせー言うねん」

そう言われればそうかもしれない。そして今思い出したんだけど僕、左腕折れたままだった・・・　回復魔法で骨折は治らないのかな？
治る前にリフォーガが終わったのかなぁ？

「ランバルト、骨折って治せる？」
「どこが骨折しているんだ、見せてみろ」
「左腕・・・あれ？」

ずきずきしてたから、てっきり折れたままだと思ってたんだけど大丈夫だった。うぅ、痛いや、これ。

「骨折は治ってるが痛みはしばらく続くはずだぞ。リフォーガをかけっぱなしだとそれも和らぐが、反省もかねてそのままにしとけ。長くても一時間ぐらいだ」
「あー・・・ごめん」

骨折した原因を思い返し謝る。ていうかラインハルトにちゃんと謝らないとね。

「ラインハルトごめん！　オーガの攻撃喰らったの僕のせいだよね」
「わしは頑丈やさかい、気にすんな。それより、平気か自分？」
「どうだろう。ちょっと時間が掛かるかもしれない。ごめん」

平気かと聞かれて、僕が吐いていた事を聞いているのだと分かる。
魔物の血を見ただけで、かなりのトラウマだったもんなぁ。あれを克服して自分の手でしっかりと倒すとかできるんだろうか？　いや倒すとかじゃないね、殺す事ができるのかな。そもそも選択肢が出る能力が勝手に発動しちゃうから殺すって感覚が全く無くなっちゃう。

生きる為には生き物を殺す必要がある。

毎日食べるご飯は、そうやって殺した生き物を食べている事をちゃんと理解しないといけない。今まではそういった事から目を逸らしていたけど、冒険者として生きていくなら、知らない顔はできない。できないよね。

知らず知らずため息が出る。この世界に来てから、どれだけの生き物をこの手で殺してきただろうか。簡単にアイテムにできるって単純に喜んでただけで、その裏にある、アイテムを残して全てを消し去るという現実から目を逸らしていた。血も内臓も転がる事がなければ、殺したという実感はまるで無かった。

「・・・重いなぁ」

まずは僕がこの世界で生きていく為にも、命をかけて戦う戦場に慣れないとね。

「おーい、暗い暗いでコージ！　俺達はオーガを倒した英雄なんや

で？　辛気臭い顔してんなや、な？」
「なにそれ。悪いけど僕は英雄なんてガラじゃないからパス」
「あほぉ。英雄は勿論わしや！　おまえは従者その一や」
「あ、それ良いね！　でもどうせならセシリアの従者がいいなぁ」
「あら、私ならいつでも待ってるわよ？　なんなら今日からでも屋敷に来る？」
「えぇえええええ遠慮しときます」

くすくすと笑うセシリア。からかわれてると分かっているけど、セシリアみたいな美人にそんな事を言われるとやっぱりドキドキしちゃうね。そんな事を考えてると後頭部を撫でられる。・・・エリー？

「コージ頑張った。あなたが居なければこうして無事に帰れなかった。感謝してる」
「そうだね。魔法の支援もいろいろしてくれたから助かったよ。だけど、打ち合わせもなしにぶっつけ本番はなるべく勘弁して欲しいね」

さわやか王子様にさらっと笑顔で言われると、まったく嫌味に聞こえない。見た目って大事だよね！

「えーっと、ごめんね。慌ててたから、つい」
「ばーか、冗談だよ。みんなお前に感謝してる。勿論俺もだ」

がしっと頭をランバルトに掴まれてそう言われる。なんだか照れる。

「もう仲間なんだから、当たり前だよ当たり前！　僕も助けて貰ったんだからそういうの無し！　無しっ！」

大きな声でそう言ったけど、顔が真っ赤になっていたのだろう。僕

が照れているのがばればれだったので、皆が仕方ないなぁって顔で笑っていた。

結局、その日の実習は僕やラインハルト以外は大きな怪我をする事もなく、無事に終えた。僕はともかくラインハルトが怪我をした事実は、クラスメイト達を驚かすのに十分であった。だけど、僕をオークから助けるために怪我をしたと説明すれば、皆納得した。オーガを僕達が倒したという事実は講師陣に伏せて欲しいと口止めされているので、本当の事を言う訳に行かなかったのだ。まぁ、授業料二年分を支払い済みにしてくれるという事なので、僕達にも良い取引なのだ。

「コージ、大丈夫ですか？」

セリナのその声に振り返ると、ミミやヒロコ、白夜が心配そうに僕を見ていた。

「うん、大丈夫だよ。ラインハルトに守って貰ったから大した事ないし」

と少し痛みが残る左腕をしっかりと動かして見せる。

「ラインハルト達も大変だな。転入生の中でもお荷物を押し付けられるなんてなぁ」

「そうだな。こんな浅い階層でハルトが怪我をするなんて、よっぽどだよな」

お荷物って・・・どう考えても僕だよねぇ・・・　そもそもラインハルトは学園に入学する前から、遺跡を駆け回って魔物を倒していたそうで、かなり有名らしい。それに「ハルトバルト」なんてあだ名が既に広まっている時点で相当有名なのだというのが分かる。

「でもミミちゃん達は良かったよね、お荷物と一緒にならなくて済んでさ。そればっかりは担任を褒めてあげたいね」
「そうねぇ～、おかげで一緒の班になれたもんね、うん」

セリナ達はやっぱり可愛いからクラスで凄い人気なんだなぁ。べっこり凹む事言われてちょっと悲しい。

「おい、おまえらっ・・・」
「誰がお荷物ですか、みなさん？」

あ。

「コージさんをお荷物と言うなら、演習場に行きましょう。私を倒してからそういった事をおっしゃってください！」
「セリナさん、そこまで庇わなくても・・・」
「そうよ、無理しないで？」

だめだ、こんな空気は僕には耐えられそうにないや。

「ごめんなさい！」

それだけ声を振り絞って言うと、ダッシュで教室から逃げ出した。
ちょっとしょっぱいのは気のせいだと思いたい。ううん、気のせいだ。

許されざる罪（後書き）

凹んでるから立ち向かえない。光司くんは結構人に悪意をむけられると弱いです。
わかってない場合は強いんですが・・・

安心

無我夢中に走り出し、階段を上ったり下りたりしているとひっそりとした場所に出てきた。ベンチが一脚だけあって、一人になりたい時に丁度よさそうな感じだ。そう、今の僕にぴったりの場所だなぁ。

「はぁ・・・」

セリナ達やラインハルト達と話していると、クラス中からいろいろな視線を浴びているのは分かってたんだけど、こうまではっきり言われるとやっぱりへこむ。最初にラインハルトがセリナ達を狙ってる奴が多いって言ってくれてたから、まだ心構えができていたんだけど、今日みたいに既に気持ちが沈んでる時に言われると、自分がすごく駄目で価値がなく誰からも顧みられない人間に思えてくる。元の世界に居た時も似たような事があったっけ。あの時もクラス中から色々言われて逃げ出したなぁ。こっちの世界に来て少しは変われたかなって思ったんだけど、人間ってそう簡単に変われない・・・か。

「ん・・・？」

ふと人の気配を感じて頭を上げる。
すると、丁度こちらに向かってきている女の人と目がばっちり合った。黄色のリボンをしているので一個上の二年生なのが分かる。

「あれ？　先客が居るのね、珍しい。どうしたの？」
「え？」

どうしたとはどういう事なんだろう？　と疑問に思っているとハン

カチを僕に向かって差し出してきた。いや、ハンカチは持ってるんだけども？

「そんな顔してると、心配されるわよ？　ひどい顔」

あー・・・しょっぱい味の素で顔がひどい事になってるのか。ぐしぐしと制服の袖で乱暴に顔を拭いてしまう。

「あらあら。そんなんじゃ袖が汚れるよ？　男の子はこれだから、もう・・・」

仕方ないわねぇという具合に僕を見る上級生のお姉さん。というか、この場所はこの人が良く使ってる場所なのかもしれない。だとしたら、邪魔しちゃって悪いなぁ。

「ごめんなさい、ここ先輩の席なんですよね？　僕行きますから」

そういって、目礼をして先輩の横を通り過ぎる。

「アイシャ」

「ん？」

「私の名前よ、な・ま・え。君は？」

あとでここを使った事で文句言われるんだろうか。聞こえなかったふりで逃げよう。

「失礼します！」

「あ、ちょっとぉ！　きみっ、まちなさいっ！」

光る浮き輪君を即座に取り出し、全速力で走る。追いつかれたらア

ウトだ！　後ろで先輩が何か言ってるみたいだけど、無視だ！

「・・・はやっ。でも、わたしから逃げ切れると思ったら大間違いよ。二年で生徒会長をしてるのは伊達じゃないんだからね」

残された女生徒はそういって不敵な笑みを浮かべるのだった。

結局、逃げて来たのは良いけど鞄を教室に置きっぱなしなので、そのまま帰る訳には行かない。なので、しばらく時間を潰して皆が帰る頃合を見計らって教室に戻った。うん、教室には誰も居ないみたいだ。

「はぁ・・・明日から気が重いなぁ・・・」

あれだけはっきり言われるとなると、これからは結構本格的に何かされそうだし、こないだの魔法実習も実は狙われていたと言われても驚かない。しかもクラスメイトの結構な人から敵意を向けられてたし。かといって、セリナやラインハルト達に守って貰ったりすると余計にヒートアップしそうだもんなぁ、あの手の人って。

「これからは、なるべく一人で居るのが一番って事かなぁ」

そもそも学園には冒険者の事を学ぶ為に来ている訳だし。しっかり勉強して実力をつけさえすれば、文句を言われる事も無くなるだろう。・・・たぶん。

バガンッ！

教室の扉が異様な音を立てて乱暴に開きミミが飛び込んできた。

「コージィ！」

「ごふっ！」

なんかこれ前にも喰らったような気が・・・す・・・る・・・

「コージ、駄目ですよ。一人になんてさせません！　コージの事を知らない人が何を言おうが気にしなければ良いのです。それとも、私達はもう要らないのですか？」

携帯電話を片手に教室に入ってくるセリナ。どうやら、この教室にだれかの携帯を通話状態のまま置きっぱなしにして、僕が帰ってくるのを待ち構えていたらしい。良くそんな事を思いついたねぇ・・・

「コージは、ミミ嫌いになっちゃったのぉ？」

不安そうに僕を見上げるミミ。その瞳は涙が滲んでいて、今にも零れそうだった。

「みんなが僕に付き合う必要は無いよ。僕と一緒だと面倒な事に巻き込まれちゃう」

「それは違うぞ、主よ」

「え？」

「おぬしが居なければ、わし達は何も始まらん。そもそも主が居れば面倒な事など、屁とも思わんわ！」

「だねぇ。それにぃコージとぉ一緒に居れないならぁすぐ辞めちゃうよぉ？」

「あぁ、それは良いですねぇ。そもそも学園に入ったのはコージと

一緒に勉強したいだけですし、遺跡に潜るのなら私達だけで全く問題ないですしね。うん、辞めましょう」

「ボクも賛成！　マスターってば学園に来てからおかしいもん。辞めよう辞めよう！」

一斉に辞めようと言い出すセリナ達。そんなの駄目だろう・・・

「駄目だよそんなの。せっかく入ったんだから、ちゃんと勉強しなきゃ。辞めるなら僕一人で良いから」

「コージのわからずやーーー！」

バシッ！

え、セリナが殴った・・・

「私達が冗談で言ってると思ってませんか？　学園を辞めるのは本気ですよ。ね、みんな」

そのセリナの言葉に力強くうなづく皆。

「私達にとってコージが一番なんです。あなたを傷つける者は許せませんし、あなたが喜んでくれるならなんだってします。それぐらいあなたが大事なんです、コージ」

まっすぐな瞳で僕を見つめながらセリナは言う。でも・・・

「なんで・・・？」

「コージが大好きだからです。ほんとだよ？」

「そうです、大好きなんですコージ」

ミミとセリナが微笑みながら告白してきた。なぜかその言葉は僕の心にすとんと入ってきた。と同時にみるみる内に顔が熱くなってきた。なんだこれ。

「うっ・・・くっ・・・」

親以外の人から好かれるなんて思いもしなかった。昔から人付き合いの苦手な僕は家族以外の人にとって無価値なのだから。今でこそ他人と会話もできるけど、それはお母さんのおかげなのだ。だから僕も家族以外の人を好きになるなんて考えなかった。いや考えたくなかった。家族なら死ぬまでずっと家族だから、好きになっても安心だった。もし好きになって離れ離れになるのはとても辛いから。

「コージ・・・」

突然泣き出した僕を、みんなが優しく抱きしめてくれた。それはとても幸せな時間だった。

安心（後書き）

今日は短めです。すみません。
家族大好きは家族愛です、もちのろん。大好きだから安心して、ほっておけるし、甘えられる存在。そんな感じ。

そして明日は一話だけの予定です。風邪引いたようです。あふん。

自覚

泣きながら手をひかれて家路についた僕。なんというか、セリナやミミ、ヒロコに白夜は家族みたいなもので、ううん家族といって差し支えないぐらい好きになった。でも、手を繋ぐだけでも恥ずかしい。前はそうでも無かったんだけど、なんでだろうね？

なんで恥ずかしいのかなぁと、ミミの顔を見るとすぐにこちらに気付きニコッと笑いかけてくれる。その笑顔がなんだかとても嬉しくて、余計に恥ずかしくなってくる。あぁ駄目駄目。なんか凄く浮かれてるや、僕。

「えっと、さっきは皆学園を辞めようって言ってたけど、僕は辞めないから皆も辞めちゃ駄目。良い？」

「それは良いが、またいらん事を言う輩がいたらオシオキして良いか？」

「ですねぇ、私の範囲殲滅呪文を凌いでから文句を受け付けるようにしましょうか」

「ちょっと待て範囲で殲滅とか、わしの領分ではないか！　任せろ！」

「・・・二人とも駄目だよ。ミミも悪巧みしないの、顔に出てるよ？」

絶対にセリナ達を暴走させたら駄目だ。確かに僕はセリナの殲滅呪文もミミの本気の攻撃も凌いでみせたから、文句を言うならそれ以上の実力を示して貰わないと駄目っていう理屈はわかるんだけどこの二人が本気出すと、ちょーやばいもんなぁ。

「でも、このままだとコージが弱いと思われたままで、悔しいです・

・・」

すごく悔しそうな顔をするセリナ。なんだか僕の事なのにそこまで真剣に考えて貰えるのは嬉しいけれど、恥ずかしい。それにそんな顔をさせるのは嫌だなぁ。女の子は笑ってるほうが可愛いもんね。

「だったら、セリナとミミの二人掛りで僕と模擬戦しよっか。二人の攻撃を凌げれば少しは落ち着くんじゃないかなぁ？」

「え、本気でして良いんですかっ？」

セリナにとって自分の攻撃呪文を全開で放っても、確実に凌ぐ僕と戦うのは良い経験になるらしい。色々な術式を編み出し実際に使ってきたものの、その全てを出し切る程の戦闘は、今まで経験した事が無いらしく自分の全力を測りかねているみたいなのだ。

「くふー」

ミミはというと、攻撃というよりも抱きつくのがメインで前に戦った時は危うく組み敷かれて何か凄く危険を感じた。ヒロコやセリナが素早くひっぺがしてくれたから良かったものの、あれは何かやばかった。そして、今のミミはその時よりも破壊力抜群なボディなので僕も本気で逃げないと、めっちゃやばい。

「や、やっぱり一人ずつ戦おうっかなぁ・・・」

「駄目だよぉ、コージィ？　今度こそぉ、好きにするからねっ♪」

「クラスの人が見てる前で・・・？」

「むぅ。そうだった。誰もこない所でしよっ？」

「それだと意味がないから、だめっ。それと誤解を招く発言もだめっ」

「誤解じゃないんだけどなぁ～？　にへへ～」

僕の腕を抱え込みながらそんな事を言ってくるミミ。今日はそれがとっても恥ずかしい僕。なので、すぽっと逃げた。捕まった。逃げた。ダッシュ！

「もうやっぱり、二人と戦うのは無しっ！　なんか危ない！　早く帰るよ！　家まで競争！」
「あ、ずるい！　まってぇ！」
「え、早いですよコージ！」
「逃すものか！　とりゃぁ！」

あ、白夜が通り過ぎた。あれ、引き返してきた・・・って背中に乗るなっ？！

「よし行け！　わしの身体を燃料に疾く参れ！　しっかり押し付けてやる！」
「あ～～～！　そこはミミの席なのに白夜ずるいっ！」
「誰のものでもありません！　あえて言うならわたしのベッドです！」
「マスターもてもてだね、ひゅーひゅー！」

ヒロコ、君は一体いくつなんだ。駄目だ今日はすごく恥ずかしい。とにかくこの場をすぐに逃げ出したくて、一目散に家に向かいましたとさ。

僕の中で何かが変わった次の朝。意識して教室に入るとやっぱり色々と突き刺さる視線。でも、よくよく考えて見るとファウンデルス

卿やリュートの視線に比べたら、数が多いだけでちっとも怖くなかった。今までなんであれだけ怯えていたのか不思議。

「ぷふっ」

「お、コージ元気そうやないか、おはようさん」

昨日までの自分がおかしくて、つい笑った所にハルトがやってきた。

「あ、おはようハルト。昨日はみっともない所見せてごめんね」

「ぉおう。気にすんな、大丈夫なんか？」

「平気平気。ありがとね～」

あれ？　ハルトと会話しただけでまたざわつき始めた。そんなにずっと見ていて退屈しないのかなぁ？

「おい、転入生」

まぁ、他の人がどう考えようとハルト達ともセリナ達とも仲が良いのは変えようがないもんね。だって仲間だもんね。

「おい転入生、聞いてるのかっ！？　こっち向け！」

「ヴァイス、うるさい」

「ハルトは黙っててくれ。俺はそこの転入生に用があるんだ！」

んー・・・ヴァイスって名前なのねこの人。魔法実習の時に誤射した人だ。まぁ誤射じゃなかったんだろうけども。ていうか転入生って僕だけじゃないんだけど、この人はそれを分かってるのかなぁ？

「あら、わたしに何か用ですかヴァイスさん。決闘ならいつでも受けますよ？」

ほら、セリナが早速怒ってるよ。

「い、いえセリナさんではなくて、そこの転入生に・・・」

「あら、わたしも転入生ですよ？　さぁ何の用です、ヴァイスさん」

仕方がないなぁ。このままだと話が進まないからぼちぼち相手しないと駄目かぁ。

「セリナ、ありがと。それぐらいにしてあげて？　で、そこの人、僕に何か用ですか？」

「俺はヴァイスだ！　ろくな成績じゃないくせに生意気な奴め！　おまえがなんでハルトやセリナさん達に馴れ馴れしくしてるんだ！　身の程をしれ！」

ちらりとハルトの方をみると、あちゃーって感じで天を仰いでいる。この人、前からハルトにも突っかかってたみたいだね。でも埒が明かないから昨日みたいな事になって、それでも懲りずにハルトと話ししてるから、直接僕に言ってきたって所かな？

「えっと、同じクラスメイトなのに身の程とか言われても・・・？」

「ハルトは同じ学年だが、すでに何度も遺跡に潜って戦果を上げてるんだ。おまえみたいな有象無象とは違うんだよ！」

えー・・・そんな事言うならこの間の動乱に少なからず関わってる僕も凄いんじゃない？　言わないけど。

「そんなの誰が決めたの？」

「決める事じゃない、そういう物なんだ！　いちいち口答えするな！」

うーん・・・僕がハルト達と仲良くしてるのが羨ましいって事なんだろうなぁ。でも、そういうのって他人が決めていいもんじゃないと思うんだけど。

「んー・・・それじゃあ、模擬戦で僕が君に勝てば問題無いって事でいいのかなぁ？」

「・・・へぇ。まさか君からそう言ってくるとはね。ちなみに俺の成績は・・・」

「うん、僕より上って事でしょ？　いいよそれで」

「ほぉ、逃げるなよ転入生」

そう言い捨て戻っていくヴァイス。最後まで僕の名前を言わなかったなぁ、あの人。でもいい加減はっきりしよう。僕はセリナやハルト達の隣に立っていられる人間かどうかを。

自覚（後書き）

今日の投稿はこれだけです。

明日も一話だけになるかもしれません。

ミミ大活躍？

今日の授業は、昨日の遺跡実習の戦績発表だった。

「ようし、席につけ。じゃあ一位から発表する」

と、久しぶりに見る担任のセイベール先生が手元の資料をみながら発表していく。

「まずは“シューティングスター”だ。戦績はオーク三十匹にゴブリンが三十五匹と中々のものだ。制限時間内にこれだけの敵を探し出して倒しているのは見事だ」

“シューティングスター”はミミが所属している班だ。オークやゴブリンなら一撃で倒しちゃうだろうなぁミミなら。

「次は“ハイウィザード”だ。オーク十五匹にゴブリンが・・・四十七匹だ。ゴブリンとはいえこれだけの数を殲滅しているのは大したものだ」

“ハイウィザード”はセリナとあのヴァイス君が所属している。ふとヴァイス君を見ると得意気な顔をしている。所謂ドヤ顔だ。セリナの方は・・・じっと見られてる恥ずかしい。

「次は・・・あー“姫と下僕たち”だな。おまえら本当にこんな班名でよく納得したな。この班は・・・ゴブリンのみ六十匹だ。よくもまぁゴブリンだけに当たったものだな」

白夜・・・君だろう、こんな班名にしたのは。きっとゴブリンを一

気に六十匹集めて白夜がまとめて倒して、うっとりしてたんだろうなこれは。範囲殲滅とか虐殺が本当に好きだなぁ・・・　あ、遺跡実習中は白夜の不殺の制限は解いてある。人間に関しては絶対だめって言ってるけども、自分が危ない場合であればその制限も外して良いとも言っている。

「四位は“チアーズ”でオーク十匹にゴブリン四十匹。なんでこんなにゴブリンばかり倒せるのか先生不思議だぞー。今回は偏ってたのか・・・？」

ヒロコが応援ばかりするからそんな班名になったのだろうか・・・？　というか、ヒロコは戦闘に参加しないから、他の人たちだけの実力だよね。ヒロコに良い所を見せようとして頑張った人達は少なからず居るとは思うけどもね。

「五位は“アッティス班”て班名思いつかなかったのかね。リーダーの名前そのままじゃないか。あー惜しいなぁオーク十匹にゴブリン三十八匹か。四位と五位は接戦だな」

僕達の前にはゴブリンなんかまったく出てこなかったんだけど、他の班は大量に倒してるなぁ。僕たちのほうが先に入った筈なのにちょっと納得いかない。

「六位は“セブンカラー”か。オーク十匹のゴブリン十八匹。もうちょっときばって倒すように頑張れ」

まぁ、僕達が最下位ってのはわかりきってたけど戦績が二桁にも届かないのは僕たちだけだなぁ。オーガを入れても二桁にいかないもんなぁ。

「最下位は“トリックスター”だな。おまえら粒揃いなんだから、次はうまくやれよ」

その言葉に思わずハルト達と顔を見合わせる。僕達の戦績を言わないのはワザとだね。しかし、今回は上手くオーガを倒したっていうのにそれ以上に上手くやれとは、分かってるのに鬼だなこの先生は。ふと、ヴァイス君の方をみれば、憎々しげに僕を睨んでる。“トリックスター”が最下位なのは僕のせいだと言いたげだ。でも、そんな顔されてもなぁ・・・

「まぁ今回初めて遺跡に潜る人間もいる中で、お前達は良くやった。転入生はともかく、みんな今までの授業をしっかりと身につけて貰えてるようで何よりだ。で、実際に潜って疑問に思った事をじゃんじゃん質問してこい。分からなかった事をそのままにしておくと、後で痛い目を見るからな」

と、言ってその後は質問タイムとなった。モンスターの習性や遺跡内部での罠の有無。遺跡内部の疑問（例えば、何故床がどこも綺麗なのかなど変わった質問もあった）や、避難経路など様々な質問が飛び交っていた。

僕達の班は十階層、いや十五階層までの事なら楽に対処できるので、質問するようになるのはもっと潜った後になるだろう。オーガが浅い所に出てきたのは疑問だけど、この場で聞けるものじゃないので、僕達は何も質問せずに黙って聞いていた。

だけどそんな僕の態度が気に入らないのか、しきりにこっちを睨みつけてくるヴァイス君。

「ハルト、なんかありがとね。気使って貰ってたみたいで」

「あー・・・あーあー。根は悪い奴じゃないんやけど、すまんな」

ヴァイス君の攻撃が僕にいかないように、ハルトがずっと対処してくれてたみたいなので御礼を言っておく。ハルトって口は悪いけど、面倒見はすごく良いよね。意外・・・でもないか。

「でも、コージ大丈夫なんか？　おまえ手加減せんかったら、あいつ怪我するやろ？」

「まぁ、なんとかするよ。そもそも僕って人を傷つけるのって無理だし」

「・・・そんなんで、勝てるんか？」

「まぁ、なんとかなるんじゃないかな？　ほんとハルトって世話好きだよねぇ」

「なっ！？　もう知らん勝手にせい！」

ハルトが顔を真っ赤にして照れた。うひひ、いつもからかわれてる仕返しができた。でもまぁ、正直に言っておこう。

「ありがとう、ハルト」

その言葉にびくっとしたハルトは、その姿勢のまま小さな声で

「おう」

とだけ応えてくれた。

むぎゅぅっ

「ぅわっ！？　なにっ？！」

「コージィ・・・？　ミミも構ってぇ？」

いきなり背後から抱きつかれる僕。ちょっとミミさん目の前に先生いるんですよ？　皆の注目の的ですよ？　セリナからなにか黒いモノが感じられますよ？　本気ですかっ！！！

「あ、あとでね。お願いだから離して？」

「あのねぇ、ミミはねぇ今日こそコージとぉ、二人っきりで帰ってぇ・・・」

「話してじゃなくて、“手を”離して下さいミミさん、お願いします」

「ちぇ・・・」

しぶしぶと手を離してくれるミミ。聞き間違えたふりとは、オソロシイコ・・・

今日の放課後はヴァイス君と模擬戦だって言うのに、それまで身がもつか心配だよ。

「ミミさんは積極的なんですね。そんな風にはちっとも見えないのに」

「えぇ？　こぉんなに抑えてるのに、積極的に見えるんだぁ・・・そっかぁ・・・」

セシリアの言葉にそう返すミミ。なんだかお互い凄いショックを受けてるようだ。

「あれで抑えてるとか、コージってばどんだけ愛されちゃってる訳？　ていうか、そんなに年も変わらないのにあれだけ愛されるってやっぱり、あんな事やこんな事とかしちゃってる訳なのですかっ！？　いやっ・・・」

ぼそぼそとなにか小声で言ってるセシリア。断片的に聞こえてくる台詞から考えると、どうも僕は良からぬ事をしてるようにしか聞こえない。そういうの全くないからね！　むしろ襲われてるからね！？

「積極的に見られてるならぁ、せっかくだし本気出したほうがぁ、良いよねぇ・・・」

ミミはミミで、なにやら物騒な事を呟いてるし・・・　本気出すのは実習だよね？　そうだよね、ミミ・・・

「地獄に落ちろ、モテモテ野郎」

救いを求めてハルトを見れば、そんな言葉で撃墜された。ちくしょうぉっ！

さて、そんな疲れる事があっても放課後はやってくるのでありまして。ヴァイス君がそわそわというか、うずうずというかそんな感じに動き出しまして、そろそろ模擬戦かと思ってた時にそれが来た。

「ピンポンパンポーン♪　さてさて下校しようとしてる生徒諸君こんにちは！　生徒会長からのお願い放送だよ～！」

なんか能天気な放送が聞こえてきた・・・　園内放送もちゃんとあったんだ・・・

「お願いって言うのは、昨日の放課後にわたしが見かけた人物の情報を教えて欲しいんだ。特徴はね、髪の色は黒くて、背丈は小柄だ

ね。百六十ぐらいかなっ。青いネクタイしてたから一年生だね、うん。そしてこれ重要。放課後に泣きながら校舎を走ってたんだ。この特徴にばっちし合致する人物の情報を待ってるよぉん♪　生徒会室に居るから、何か知ってる人は是非是非来てくださいねっ。お礼もしちゃうぞっ☆　ではでは生徒会長からでしたぁ。ピンポンパンポーン」

よくよく聞けばこれ昨日の上級生の声じゃないか・・・生徒会長だと・・・？　この馬鹿っぽい放送をしたのが生徒会長とか有り得るの？

「ようし、コージ。正直に言え！　いやその前に生徒会室に行こか、な！」

「ちょっと待ってハルト、その破壊力のありそうな手は一体なに！？　僕をどうしようっての!?」

「はっはぁ！　それは勿論、俺があの生徒会長と仲良くなる為の礎になって貰う為やないか！　なぁに、心配いらん後の事は任せぇ」

はっと気付くと、僕の周りに男子生徒が十重二十重にうごめいていた。バルト・・・君まで動くとか、あの生徒会長って何者なの?!

いや、生徒会長か、うん。

「うわっ？」

急に後ろに引っ張られたかと思うと、僕は一気に包囲網を突破していた。

「コージは渡さないもぉん。べーだ！」

「ミミッ！　ありがとう！」

「よぉしっ、愛の逃避行だよぉ～♪　レッツゴー！」

「わぁあああああ、それは何か違うううううう！」

僕の叫びなんて聞くミミを持たず。そうだよね、ミミは言う事聞かないよねぇ。最近の成長著しいミミに対してお兄さんぶるなんてできないし。だけど、包囲網を突破してあっという間に、学園の外へ脱出できたのはミミにしかできない芸当だ。

愛の逃避行はともかくとして、二人きりでお茶でも奢るとしましょう。

ミミ大活躍？（後書き）

百話まで来ました。意外と長く続いて良かったです。

なんかアホな子ばかり増えてきてる気がする・・・

波乱を呼ぶ生徒会長

最近、お母さんの言うとおりになってきたの。

「お母さんと一緒に暮らせば、おっぱいもお尻もぼーんよ、ぼーん！　セリナちゃんにも負けないぐらい大きくなれるわよ～？」

なんでか背はあんまり伸びないけど、他はお母さんの言った通り。ぽよんぽよんって弾むようになったの。コージも嫌がってるふりをしてるけど、鼻血を出しそうなぐらい喜んでくれてるのは知ってるの。コージ達と一緒に居るようになってから、凄く毎日が楽しい。そりゃあこの間は大変だったけど、今となってはそんな事もあったよね～って程度の話。で、今日は運良くコージを捕まえて二人きりになれた。一緒にお茶を飲んで、お店を見て周っておやつを買い食いしてみたり、お揃いのコップを買ったりと普通の女の子がするような事がいっぱいできた。

「みんなにもお土産を買って帰ろうね、ミミ」

そう言ってちゃんと皆にもお土産を買って帰るコージ。今ぐらいミミの事だけ考えてくれたら良いのにねっ。コージのあほちん。知らず知らずほっぺが膨らんでたみたいで、コージにつんつんされちゃった。どうせならもっと下の膨らみをつんつんしてくれても良いよ？

「そういうのは、二人きりの場所で言うのが良いよ！　恥じらいを持ってください、恥じらいを！」

だって、コージしか見えてないから仕方ないと思うんだ。あ、でも泥棒猫は見えるね。セリナとかセリナとかセリナとか！　嘘ですゴ

メンナサイ、もう言いません。今、何か凄い怨念を感じた。セリナ可愛いけど怖いよぉ。

「うん、怒らせたら一番怖いんじゃない・・・ごめんなさいもう言いません、ほんとですからっ！」

コージも攻撃を食らってるね、うん。これ以上は考えないでおこーっと。空いてるコージの腕を取りきゅっと抱きつく。コージはミミが成長してるって気付いてないと思ってるみたいだけど、ミミだってちゃんと気付いて悩殺してるつもり。だって抱きついたら真っ赤な顔してあたふたしてるコージって可愛いもん。ミミも胸がきゅっとなって嬉しくなるから、とても良い事なの、うん。これからはこんな日をもっと増やしたいなぁ～。頑張ろうっと！

「ただいま～・・・お土産だよっ☆」

僕の台詞にジト目を止めないセリナに白夜。ヒロコだけだ、ひっかかってくれたのは。だけど、今日の脱出は仕方ないよね？　ミミが居なかったら僕、生徒会長の餌食だったんだよ？

「まぁ今日のミミとふたりっきりで逃げ出した事に関しては、仕方ないとしましょう」

僕の悪くないよね光線が効いたのか、はたまた諦めたのかセリナはそう言った。やぁ、助かった。お土産みんなで食べようよ、これフルーツのムースで冷やして食べると凄くおいしそうだよ？

「う・・・お土産はとりあえず、脇に置いておきまして。コージさんっ！　いつどこでなんで生徒会長と知り合ったのですか・・・？」

「えーっと・・・」

その事についても横に置いて欲しかったなぁ。そんな事を考えていると今まで静かだったミミまで、僕を逃がさないように腕をしっかりと掴んできた。だ、だめだ！

「あの、生徒会長かは知らないけど昨日の放課後女の人に絡まれました。決して知り合おうとして話かけたりしてません、ほんとうです」

ミミに気を取られている今、僕には嘘をつくという事ができない。だって、凄く気になるんだもん。

「では何故、あんな放送を使ってまでコージを探し出そうとしたか、心当たりは無いですか？」

「えー・・・何か言われてたけど、ぶっちぎって逃げただけで会話らしい会話なんてしてないんだよ、ほんとだよ？　泣いてた顔は見られちゃったみたいだけど・・・」

「それです！　コージの泣いてる可愛い顔を見てきっと一目ぼれされたんです！　そんな事で惚れるような人にはますますコージを渡せませんね！」

「え？　でもミミもコージの顔にびびっときたよぉ？」

「普通の顔の時は良いんですっ！　わたしもそうですし・・・」

セリナの語尾のほうが、ごにょごにょとしてて聞き取れない。でも、生徒会長が僕に一目ぼれとか無いと思うんだけどなぁ。あの人って人をからかって遊ぶのが大好きそうな人だし。あの能天気な放送とかひどすぎる。僕が泣いて走ってるのをわざわざ重要とか言って、言いふらすし！　うわぁあああああ、思い出したら恥ずかしくなってきたぁ・・・・

どうしてくれようか、あの人・・・

「あーそういえばヴァイス君との模擬戦すっぽかしちゃったなぁ・・・」

「良いんじゃないですか？　どうせ勝つのはコージですし。弱い人には言わせておけばいいんですよ」

「それより明日が大変そうだよねぇ・・・あの生徒会長って凄い人気あるみたいだし。ハルトはともかくバルトまで、僕を売ろうとしたぐらいだからねぇ・・・」

あの質実剛健なランバルトがそこまでするとは、相当な事だと思う。ぱっとしか見てないから良く分からなかったんだけど、そんな綺麗な人だったっけ？

「一度、生徒会室に顔を出す必要があるかもしれませんね。勿論、ご一緒しますからねコージ。一人だと何をされるか分かりませんし・・・」

「うん、それは僕も思った。あの人と二人きりで会うのはちょっと嫌かも・・・」

「コージ、やっと分かってくれたんですね！　私たち以外の女性は危ないんです、だから他の人に目を向けたら駄目なんですよ？」

いや、そういう問題じゃなくてもっとこう、いじられそうで嫌なんだよねぇ。

「とにかく明日だね。何かあったら宜しくね、みんな」

みんなの力を借りれば、何があってもきっと大丈夫だろう。ハルトバルトはちょっと怖いかもしれないけども、なんとかなるよね。たぶん。

「さぁて、どうゆう事か説明してもらおうかぃ、コージ」

ハルトが珍しく僕より早く学校に来てたかと思ったら、開口一番それだ。生徒会長の事を言ってるんだろうけど、僕自身分かってないから説明のしようが無いんだけどなぁ。はっきり言って迷惑だよ・・・

「説明って言われても、僕の方が聞きたいぐらいだよ。生徒会長なんて知らないし」

「ほうか・・・おまえさんは転入してきたから、生徒会長の事知らんねんな。あの人は学園設立以来、初めての二年生で生徒会長になった人でなぁ・・・」

どうやら、凄い才能の持ち主らしい。入学して以来、座学は勿論、実習についても常にトップ。性格は温和で優しい上に親しみ易く、ちょっと突飛な所もあるけれど持ち前の明るさでそんな面もカバーしているそうだ。上級生からの受けも良く、なにかとソツ無くこなす才色兼備を地で行くような人だそうだ。

「だったら余計に謎だよ。なんでそんな人が僕に興味を持つわけ？まったく持って迷惑だよ」

なんか、教室がいつもよりざわついてるけれど僕の言い分は止まらない。ハルトは僕が迷惑って言うのを聞いて、口をあんぐり開けている。まさか、生徒会長をそんな風に言うとは思ってなかったんだろうなぁ。どんだけ生徒会長の事が好きなのさ。

「だいたい、僕の恥ずかしい秘密を放送で暴露してる時点でもう大嫌いと言っても良いね。そんなに僕の事を知りたいなら、地道に自分で探せば良いのに放送を使うなんて非常識だよ、もう」
「いやでもな、コージなんというかエイジ・・・」
「はい、そこでストップ♪　そこのラインハルト君私の名前を言っちゃ駄目よ？」

背後から聞こえてきたこの声。この能天気で底抜けに明るい無駄に元気なこの声は！

「はーい、コージ＝H＝アース君。来ちゃった☆」

その台詞から僕はこの人が天敵だと認識した。

波乱を呼ぶ生徒会長（後書き）

８２話目「後片付け」の前半部分が抜けていたので、追加しました。
コピー漏れです、ごめんなさい。良かったら読んでやってください。

「で、なんの用でしょうか先輩。そろそろ授業が始まりますよ」

向こうのペースに乗せられちゃ駄目だ。この人にペースを握られたら何をされるか分からない。始めて会った時に復讐されるかもって思ったのは間違いじゃなかった。あの時、名前を名乗ってたら今頃一体どうなっていたか分からない。昨日のあの公開羞恥放送は僕の心にぐっさり刺さったんだ・・・

さっさと帰れって意味を込めて言ったんだけど、反応は予想外、いやある意味予想通りの所から帰ってきたよ。・・・はぁ。

「転入生！　貴様ごときがそんな口をきいていい方じゃないぞ！先輩に謝れ！　この馬鹿が！」

そんな失礼な事言ってないんだけどなぁ。ていうかヴァイス君。この人のせいで昨日の模擬戦が流れたの分かってないのかなぁ？

「昨日、模擬戦できなかったのはこの先輩の放送のせいなんだけど、分かってる？　あんな放送されたから急いで帰る羽目になっちゃったんだけど？」

「人のせいにするな！　おまえが臆病風を吹かせて逃げただけだろ！　いい加減身の程を知れ！　ろくな成績じゃないくせに・・・」

うもー・・・また成績言ってるよ～・・・　勝負に負けたらどうするつもりなんだろヴァイス君は。

「ちょっとちょっと、私を置いてけぼりにするのは止めてっ！？

あたしの為に争わないでっ？」

うざっ！

えっと、今日の授業はなんだっけ。あー武器を使った格闘だね。また基礎トレーニングの授業かぁ。まぁ鍛えたら鍛えただけ成長してるのが分かるから嫌いじゃないんだけどね。それじゃあ着替えてちゃっちゃと演習場に行こうかなっ。

「ふんふふんふふーん」

「鼻歌交じりに無視されるとか、初めて・・・」

「転入生！　おまえぇ！」

いやもう本当に勘弁して欲しいなぁ。この先輩泣き真似なんかして、僕の人気を下げようとか思ってるのかもしれないけれど、残念ながら既にそんなものは底辺を這いずり回っているのですよ。・・・考えすぎかもしれないけれど、僕がそんな風に考えるのを見越して演技をしてるとかじゃないだろうねぇ・・・？　今、自分で考えて心にぐさっと刺さったよ。

あ、こっち見てニヤリと笑った。この人分かっててやってるなぁ。今も教室内は僕をすごい非難の眼差しで見る人がほとんどで、ハルトバルトですらこれ以上の狼藉は許さないって感じで見てる。まぁこの二人は後で誤解を解いておきたいけどね。

「ハルト、お願いだからちょっと冷静になって欲しいなぁ？　それにそろそろ行かないと間に合わなくなるよ？」

「・・・まぁええ。とりあえず行くか、バルト」

「・・・おう」

「ちょっと置いてかないでよ、二人とも！」

ヴァイス君も生徒会長も真面目に相手にすると疲れるので、スルー頑張ります！

「行っちゃった。ちぇっ」

泣き顔が可愛いコージ君は、意外とクールでからかいがいがありそうだった。しかも、あんなに可愛いのにクラスでこれだけ嫌われてるのは想定外だ。今も、私が生徒会長で人気があるって聞いてるだろうにあの態度。だけど、仲の良い友達が居ないという訳じゃないから人嫌いって訳でも無さそう。

「あのエイジス先輩。ちょっと良いですか？」

どうやって攻略しようかなぁって考えてると、一人の女生徒が声を掛けてきた。

「ん？　何かな？　あ、あとコージ君の前では名前を呼ばないでね」

コージ君にはアイシャとしか名乗ってないから、名前で呼べって言えばエイジスの家名を知らなければアイシャと呼ぶしかない。名前で呼び合うと親密度アップだもんね！

「あまりコージをからかわないで貰えませんか？　失礼ですけど先輩ならもっと良い人捕まえられるんじゃないでしょうか？」

む。呼び捨てにしてるって事はこの娘、コージ君のお友達なのね。

ひょっとして彼女だったりするのかな？　ちょっと放っておけないなぁ・・・

「恋愛は自由なのですよ。ところであなたのお名前は？」

「え、あ、すみません。セシリア＝アデルハイド＝ミラーと言います」

あぁ、あの魔法剣使いの貴族の娘さんね。この子がそうなんだ。覚えたからね。

「よろしくね、ミラーさん。授業に遅れるから帰るね」

「あ、はい」

まずはお友達から始めて、ランクアップしていくとしますか。こんなキュンキュンする気持ちなんて初めてなんだからね。あの泣き顔をまた見るまで諦めないわよ！

強い日差しの中、えっほえっほと走りこむ。ペースを上げすぎるとすぐにへばっちゃうので、僕は自分のペースでゆっくりとだけど、確実に距離を伸ばしていた。横腹が痛くならないように気をつけないとね。前は考えなしに走ったものだから、途中で痛くなってかなり休んだんだよねぇ。普段から身体を動かしてないと、いざって時にも動かないよね。

「で、どうすんのやコージ。おまえにとって生徒会長は迷惑ってのは分かったけど、あの態度を見る限り満足するまで教室に来はるんちゃうか？」

「・・・あー・・」

ハルトには僕がハーレム野郎に見えてたみたいで、生徒会長にまで手を出したと勘違いしていたらしい。まぁセリナ達のような美少女とずっと一緒にいるもんだから、そういった誤解も分からないでも無いけれど、僕がどうやったらあの生徒会長と仲良くなれるか教えて欲しいもんだよ。いや、仲良くなりたくないから要らないか。あの人はなんかヤダなぁ。・・・はぁ。

「おまえ、ほんまに生徒会長の事が嫌いなんやなぁ。お前の今の顔すごい事になっとるで？」

「そんな事言われも、直しようが無いよ、この顔は」

だって、あの生徒会長は引っ掻き回してきそうで嫌なんだよねぇ。悪い意味でマイペースだし。あの人なら僕が苦しんでるのを笑いながら、お弁当を美味しそうに食べるぐらいはしそうなんだよね。なんというか、僕「と」楽しむっていうか僕「で」楽しむのを目的にしてるような気がする。

「俺からすれば、羨ましゅーてかなわんけどコージにゃぁ既に奥さんがおるもんなぁ」

あ、ハルトそんな事いうと知らないよ？

「ラインハルトさん、それは勿論私ですよね？」

「ミミだよね？」

「わし以外の誰でもなかろう。分かりきった事を言うな」

「ボク、ニゴーサンなんだよ」

一人だけ、なんか違うけどセリナ達はハルトにずずいと詰め寄って

いき、その迫力に返事をかえせずに青ざめた顔をしているハルト。
迂闊な事を言うと自分の首を絞めるって分かった？　いや僕も日々後悔してるんだよ・・・？

「ハルト、僕にはまだ奥さん居ないから。奥さんはせめて僕より料理が上手い人が良いなぁ・・・」
「「「「うっ」」」」

いや別に本当に僕より料理が上手じゃなくても良いんだけど、ハルトを助ける為にそう言っておく。だって、このままだとハルトがプレッシャーに負けてへこたれちゃいそうなんだもん。

「まぁほとぼりが済むまで、生徒会長さんを無視というか相手にしなかったらその内諦めて、僕にちょっかい出しに来なくなるんじゃないかな。・・・来て欲しくないなぁ」

なにはともあれあの人は目立つ。そして、そんな人を無視に近い形であしらってると僕は凄い悪人みたいに見えるから困る。誤解されたくない人にはちゃんと分かって貰えてるから今の所平気なんだけど、それでも謂れの無い中傷はやっぱり傷つくんだよねぇ・・・はぁ。

「まぁ、今日の放課後はヴァイスの奴と模擬戦すんのやろ？　そっちをどうするか考えといたほうが良くないか？」
「あー、うん。そうだよねぇ、なんかどうでも良くなってきちゃうぐらい気力が沸かないんだよねぇ。どうやったら効果的かなぁ・・・」

そうだ、生徒会長なんかにかまけてる暇なんか無かったんだ。ヴァイス君を納得できる形でコテンパンにして上げないと、今後も僕に

ちょっかい掛けようとか、ハルト達に抗議するとか続くからね。いい加減迷惑だ。真面目に勉強したいって、人がその気になってるのにこんな事で時間を取られるのはめんどくさいなぁ。

こんな嫌な気分の時は、深呼吸しますかぁ。

すーはー・・・すーはー・・・

いつもより念入りに深呼吸をして落ち着く僕。最近、攻撃的な事ばっかり考えてたから自分が刺々しくなってて嫌になる。だけど、深呼吸して少しましになった。よし、気合いれて頑張るとしますか！

伝えたい事

「転入生、今日こそ模擬戦をするぞ。いいな？」

今日は授業が終わるなり、僕を捕まえそう宣言するヴァイス君。そうだね、生徒会長が邪魔をしにくる前に演習場に行こう。なぜかクラスメイトのほぼ全員が僕とヴァイス君の模擬戦を観戦しに来るようだった。なんでだ？

「コージ、がんばってくださいね。ほどほどに」
「早く終わってぇ、早く帰ろうね、コージ」
「まぁ程ほどにしておけよ、主よ」

あーなるほど。僕が目当てって訳じゃなくセリナ達が目当てなのね。美少女を放課後も眺められるとなれば、付いてくるよね。

「ハルト、審判してくれるかな？　無理？」
「いんや、かまわんよ。・・・いやいやあかんか。班の人間やセリナちゃんたち以外から審判を選んだ方がええことないか？」
「あー・・・」

確かに僕に好意的な人が審判したら、ひいきしたって後から言われそうだよね。でも、誰か審判してくれる人って居るかなぁ。

「ごめん、誰か審判頼めないかな？」

念の為にクラスメイトに聞いて見る。反応はやっぱり芳しくない。うーん、どうしようかなぁ。

「やってもいいぞ。俺でいいなら」

そう応えてくれたのは、えっと・・・ホーン＝エヴァンス君だ。僕と同じ黒髪の男子生徒で、前髪を目が隠れるぐらい伸ばしていて髪の毛も結構ぼっさぼさにしてる。背丈も高く百八十位ある人だ。僕に少し分けてほしい・・・

「エヴァンス君、ありがとう。じゃあお願いして良いかな？　他に頼めそうな人が居なくて困ってたんだ」

「・・・わかった」

「コージはほんま、男女問わずやらかすなぁ、天然こえーわぁ」

「そうなんですよ、だから目が離せないんですよね・・・ほんとに」

なんかハルトとセリナが仲良くしゃべってる。意外とあの二人って仲が良いんだよね。

「ヴァイス君もエヴァンス君が審判で良いよね？」

「あぁ、別にかまわん。彼は君とはかかわりが無いからね」

あぁ、一応そこは気になる所なのね。意外と勝つ為にはしっかり準備を怠らない人なのかもしれないね、ヴァイス君は。それじゃ、模擬戦をするとしますか。

演習場には個人対個人の訓練の為に設備がしっかりある。対戦する人をまずスキャンし、個人情報を調査する。個人情報といっても住所や職業とかじゃなく、簡単にいうとＨＰやＭＰとステータスを数値化するのだ。あとはＨＰが無くなりそうな攻撃があればそこで戦闘を中止するシステムだ。簡単に言い過ぎたけど、極論すればそんな物なのである。

「武器や魔法、アイテムの使用の制限は無い。全ての力を使って戦う事をここに誓うか？」

模擬戦前の宣誓だ。これに承諾すればいよいよ模擬戦の開始だ。

「誓います」
「誓う」

「では、はじめっ」

ヴァイス君は魔法メインであり、武器は杖を持ってこちらを睨み付けてくる。属性は風。成績はほとんどがＢ以上である。魔法実習の前に魔力の測定もあったんだけど、ヴァイス君は魔力に関してはＡだったはずだ。勿論僕の数値はＣ。上級呪文や古代魔法などの魔法をかろうじて撃てるＢに近いＣだった。ちなみにＡだと、上級呪文でも古代魔法でもバンバン撃っても魔力の枯渇を心配しなくて済むレベルといえば、どれぐらいの凄さか分かって貰えるだろう。

「“風よ！　その力以て我を疾く走らせよ！　クイック！”」

移動速度が速くなる魔法か。魔法を唱える時間を稼ぐ為の布石だろうか。

「のんびりしてて良いのか、転入生。今なら謝れば許してやるぞ」
「いややるよ」
「よし後悔するなよ、転入生！」

そう言って杖をこちらに構え、呪文を唱え始めるヴァイス。

「“風よ！　我が敵を斬れ！　カッター！”」

詠唱から発動までの時間がかなり早い。僕にとってカッターは、回避するまでもない魔法なんだけど、相手の油断を誘う為にもオーバーアクションで回避する。

「!?」

回避したんだけど、すでに次のカッターが僕に襲い掛かってきている。ヴァイス君は恐ろしい速さでカッターを連続詠唱してくる。正直、この詠唱速度は厄介だ。ヴァイス君の顔を見れば、いつまで逃げられるかな？　と言いたげな表情をしていた。だけど、こっちにはアクセルがある。

「アクセル！　“我が身の魔力よ、我が身を巡り我に無敵の力を与えたまえ！　オーディス！”」

時間の進み方が緩やかになる。それに合わせて僕の身体もゆっくりとしか動かせないけど、オーディスのお陰でカッターを紙一重で回避しながらヴァイス君に近づくのは簡単な事だった。僕の動きを見て、カッターの軌道を修正してくるんだけど、ゆっくりと動く時間の中それは全くの無駄であった。

魔術師であるなら、近接戦闘は望むところでは無いだろう。このまま接近して取らせて貰う！

「エンド！」

オーディスはそのままに、ヴァイス君の前まで来た僕はアクセルを解除する。そして「ギル」の柄で殴りかかる。

「ふっ、馬鹿め」

殴りかかった僕の腕をいなすように杖で払われ、体勢を崩された所に蹴りが飛んでくる。その蹴りを辛うじてかわしたんだけど

「“風よ！　我が敵を斬れ！　カッター！”」

足の先にまとわり付かせるようにカッターを唱えて、一度は止まりかけた蹴り足を強引に僕の方に向けてきた！　なんて魔法の使い方をするんだ!?　しかも詠唱がまったく分かんなかったよ!?

基本的に蹴りをメインに攻撃をしてくる。そして回避すればカッターを使って軌道を変更。回避すれば更にカッター。もし受けた場合は、杖が唸りを上げて僕に向かってくる。この人純粋な魔術師じゃなかったの!?　むしろ格闘家じゃないか！

「魔術師と侮ったのが運の尽きだな、転入生！　このまま殴られて沈め！」

さっきから魔法をずっと唱えっぱなしだけど、魔力Ａのこの人は初級の魔法をいくら唱えようとその魔力が尽きる事などないだろう。むしろまだまだ余裕のはずで、魔力切れを狙える状況ではない。しかも、一度近接の間合いに入ってからは僕の方が距離を取れない有様で、逃げる事ができない。一番最初に移動速度を上げたのは魔法の詠唱の為じゃなく、僕を逃がさない為だったんだ。

「“風よ！　我が敵を戒めよ！　ヘティス！”」

僕が蹴りを受け止めて動きが止まった所に、拘束呪文を杖を僕に押し付けながら放ってくる。このままだと向こうの思い通りに戦闘が

進んでしまう。つまりは僕が負けてしまう。それは絶対だめだ！！！

「アースブロック！」

狙いは僕の足の下！　地面から壁をせり上げ、僕をこの間合いから少しでも離す！

ゴッ！

競りあがった壁はうまく僕を吹き飛ばすけど、それなりの衝撃が僕を襲う。ヴァイス君はしっかりと壁を回避して、間合いが広がった。

「“風よ！　全てを薙ぎ払う風よ！　薙ぎ払え！　トーネード！”」

そう思ったのも束の間、風の魔法が壁を吹き飛ばしまたもや間合いを詰めてくる。吹き飛ばされた壁の破片が僕を襲い、そこを狙ってヴァイス君が格闘をしかけてくる。

ゴスッ！

さすがに破片で視界を塞がれてしまっては攻撃を回避できずに、クリーンヒットを貰ってしまう。う・・・かなり痛い。一発当てた事で勢いづいたのか、次々に攻撃をヒットさせてくる。ガードして肘や膝が直撃しないようにしてはいるものの、他はガードを掻い潜って襲い掛かってくる。

そのヴァイス君のラッシュに歓声が上がる。

正直見くびっていた。ここまで魔法と格闘技を組み合わせて攻撃ができるなんて思いもしなかった。魔法を学ぶだけでも時間が掛かる

筈なのに、格闘技まで訓練している。しかも自分が使える魔法に合わせて技も組み上げているのだろう。普通の格闘技では有り得ない動きをしている。

「身の程を知ったか転入生！　貴様は何も鍛えた様子が無いにもかかわらず、ハルト達と肩を並べるなど笑止千万！　彼らは鍛えに鍛えてあの成績がある！　なのに貴様は一体なんだ！　力を持たず！　鍛える事もせず！　それで彼らと並びたいと思ってる連中に申し訳ないと思わないのかぁっ！！！」

ガキィッッッ！

ヴァイスの拳が言葉と共に僕に突き刺さった・・・

伝えたい事（後書き）

光司君ピンチ。言葉責めに弱いです。

始まりの終わり

「参ったと言え、転入生！　おまえみたいな信念も何もない奴に、肩を並べる資格は無い！」

無様に転がった僕にヴァイスの言葉が突き刺さる。そうさ。僕の力は全て貰い物だ。確かに自分で鍛えて力を磨いてきた訳じゃない。ただ、その場で便利に使ってきただけだ。

「だけど・・・」

「うん？　まだやるか」

今はもう力の使い道は分かっている。僕だって守りたいものが、守りたい人が居るんだ！父さんや母さんだけじゃなく、この世界で知り合ったみんなを！　その人達が傷つかないように僕だって・・・

「力を使えるんだ！！！」

「ほざけ！　おまえのは唯の暴力にすぎん！」

「アクセル！」

悔しいけど、ヴァイスの鍛え方は半端じゃない。アクセルとオーディスの重ねがけでも元もとの僕の能力値では、彼の動きを捉える事ができない。だけど、今越えなければ一緒に居られなくなる、それは嫌だ！

「アンリミテッド！！！」

だから限界を超える！

「おぉおぉおおおおおお！」

技も何もなく、ただ殴る。ブロックしようとしたら、それを掻い潜り当てる。攻撃を仕掛けてこようものなら、出がかりを抑え込み打ち砕く。人体の一番強い箇所は肘や膝だ。無防備な姿をさらけだす、ヴァイスの身体に容赦なく振りぬく。

「“満ちるマナよ、我を癒せ！　リフォー！”」

アクセル状態で普通の動きを可能にしているので、身体の各所が悲鳴を上げている。それを魔法で癒しつつ、さらに攻撃を加える。

「僕だって負けられないんだぁあああああ！！！」

僕の渾身の一撃で、吹っ飛んでいくヴァイス。

「エンド・・・」

さすがに魔力も底を尽きそうだ。いや、意識が朦朧としていて良く分からないや・・・

「勝者、コ・・・」

あ、僕の勝ちだ・・・良かった・・・

「あれが、コージの切り札か・・・」

正直、あんな動きをされたら勝つ事は難しい・・・いや、勝てないやろうな。しかも、あいつヴァイスの攻撃を受けてから、切り札を出しよった。まぁ出さざるを得ない程追い詰められたっちゅー事かもしれんが、最初からあれをしとれば、こんなダブルノックダウンにはならんかった筈や。ヴァイスの魔格闘も相手にするにはややこしいが、一撃や二撃喰らう覚悟でこっちの攻撃を叩き込めば後はなんとかなる。

「おい、しっかりしろ！」

バルトが二人に駆け寄り、回復魔法を唱えている。セリナちゃん達も慌てて駆けよっとる。あのモテモテ野郎め。ヴァイスも吹き飛びはしたが、死ぬほどの怪我は負っとらん筈や。コージは魔法の使いすぎと緊張の糸が切れて倒れただけやろうし。そういえば、あいつは何かというと良く倒れるやっちゃなぁ。

「コージ、大丈夫かしら。身体と言うより心が」

「まぁ、あんだけ強いのに成績はパッとせんのは事実やしな。そやけど、その力を無闇矢鱈に振り回したりはせんかったやろ？　そういった意味では、あいつは心の方が強いから大丈夫やろ」

そう。ある意味あの力を充分に発揮すればクラスメイトなど一蹴できよる。そやのにあいつは、そんな事ができるのを微塵も出さんかった。わしもオーガとの戦闘であいつの指揮を見てようやくあいつの力に気付いたからなぁ。そやないと、ヴァイスとの決闘なんてさせへんかったしな。今までは何かの理由であいつは自分の力を使う事を極力隠してたみたいやしなぁ。

「でも、泣きながら勝つとか心配なんだけど」

「あー・・・嬉し泣きやなさそうやしなぁ」

ヴァイスの奴はまっすぐに自分の不満をぶつけたんやろ。コージはコージで、その言葉に負い目を感じてしもたんやろな。まぁ今回の事はコージにもクラスメイトにもええ経験になったんちゃうやろかな。

「ふん。負けは負けだ。どうとでもしろ！」

保健室のベッドの上。僕とヴァイスはミイラのように転がっていた。ヴァイスは勿論、僕も無理な魔法をしたせいで、体中が物凄く痛い。他の皆はどうしたものか誰も居ない。薬や回復魔法ができる先生でも探しに行ってくれてるのかもしれない。

「ふーん。じゃあ僕の好きにさせて貰おうかなぁ・・・」

「くっ・・・」

物凄く痛いんだけど、勝者の権利って奴をちゃんと行使しとかないと落ち着かないよね。ふふふ、ヴァイスには悪いけどしっかり言う事を聞いて貰うよ。

「ヴァイス、君には僕をしっかり鍛えて貰うよ」

「は？」

鳩が豆鉄砲を食らったみたいな顔をするヴァイス。うん、驚いてる驚いてる。

「だって、君は駄目駄目な僕がハルトと肩を並べてるのが気に食わないんでしょ？　だったら肩を並べても文句が出ないぐらい僕を鍛えてくれたら良いんじゃない？　それなら君も満足だし、僕も得するし。一石二鳥だと思わない？　ね？」

「いや、ちょっとまて転入生・・・」

「あとその転入生ってのは辞めてくれるかなぁ？　僕の名前ぐらい当然覚えてるよね、ヴァイスなら」

「さっきからヴァイス、ヴァイスと馴れ馴れしい！　おまえは一体なにを考えてるんだっ！　あっつつつ」

興奮して騒ぐから、傷が痛むんだよ馬鹿だなぁ。

「誰が馬鹿か！　おまえよりはましだ！」

あ、口に出てたみたいだ。ごめんごめん。

「で、分かった？　ちゃんと僕を鍛えてよ？」

「なんで俺がそんな事をせねばならんのだ・・・」

「負けたでしょ？　僕に。僕、勝者だよ、勝者。ふふーん」

「ぐぬっ・・・し、仕方が無い、負けは負けだ。だが覚悟しておけ！　鍛えるとなったら手など抜かん。むしろ俺はおまえが嫌いだから、びしばし行くぞ！」

「はいはい、分かりましたよ、師匠」

「う・・・ぬ・・・」

何か葛藤している様子のヴァイス。もとい師匠。鍛えて貰うんだから師匠で良いよね？　そうと決まれば傷なんかパパっと治しちゃおう！

「“我に与え給え、彼の者の全てを癒す神々による聖なる奇跡！

パーフェクトヒール！”」

全回復魔法の呪文をバルトに教えて貰ったので、早速僕と師匠に掛ける。

「え、おいこれは高位の司祭でも難しい呪文じゃ・・・なんでお前ができる！？」

「まぁまぁ、できるんだから仕方ないじゃない。傷も治ったし早速訓練できるでしょ？」

「いやっ確かに治ったが・・・しかし、なんで・・・？」

「さぁさ、早速行くよ、師匠！　タイムイズマネーだよぉ！」

「お、おい！　押すな走るなはしゃぐな！　人の話を聞けぇえええええ！」

一日や二日で僕が強くなる事はない。だけど、鍛え始めるのは早いほうが良い。そしていつかヴァイスにも僕を認めて貰うんだ。必ず。

「むぅ、出て行くタイミングを逃しましたねぇ。最近コージはお友達を作ってばかりで私達が構って貰えないのです」

凄い勢いで走り去ったコージとヴァイスを眺め、愚痴をこぼすセリナ。その表情は嬉しいような悲しいような微妙な表情となっていた。

「ミミはぁ、昨日お出かけできたもんねぇ。でもやっぱり毎日居ないとぉ寂しいよねぇ」

「わしなぞ、最近乗って貰っておらんのじゃぞ？　わしの存在意義が薄れるばかりじゃ！」

「え、でも可愛さ１００％引き出すには、その姿は仕方ないって言ってなかった？」
「ヒロコは意外と細かい事を覚えてるのじゃ。油断ならん！」
ぎゃあぎゃあと姦しい三人。だが誰もコージを追いかけて邪魔をしようとはしません。あんな二人を見れば邪魔なんて誰もできませんよね。

「あーあ、コージを独占したかったのになぁ～」
「だけどぉ、仕方ないよぉセリナ。それに一緒に住んでるんだからぁ、いつでも挽回できるよ、ね？」
「そうじゃ、わしらは今まで一緒に居た仲じゃしの！　・・・わしの出番が少ない気がするのは気のせいじゃと思いたい・・・」
あやつはわしの主の自覚がまったく無くて困る！　と騒ぐ白夜。確かにコージってガイアフレームが好きって言ってる割には白夜に構わないんですよねぇ。ひょっとしてとは思いますがコージって女の子が苦手なんでしょうか・・・？

「でも、一緒に寝てれば大丈夫になりますよね、うん」

でもミミは今日も端っこに寝て貰いましょう。昨日一人だけコージと一緒に遊んだ罰です。今日もコージは疲れて帰ってくるはずですし、たっぷり優しくして私の虜にしませんといけませんね。うふふ。

始まりの終わり（後書き）

ここで学園編序盤終了です。

次は少し時間が進んでから始まります。

光司の一日　その1

朝もやが消えやらぬ頃、ロバス近郊のうっそうとした森に鋭い気合の声が響いていた。魔石獣が頻繁に出没するロバスで森があるのは不思議かもしれないが、獣道ならぬ魔石獣道なるものがあるので、魔石獣はロバスのブロックとブロックにある通路を通って「ティンラドール」を目指す。というわけで道を外れた場所は比較的安全なのだ。

「よし、朝錬はここまでだ。お疲れ」
「・・・はいっ師匠」

師匠の言葉に、荒くなった息を整えて返事をする。最近の日課のこの訓練もようやく耐えられるようになってきた。とはいえ、まだまだ師匠の凄さには追いついてないけどもね。

「今日は余力があるようだな。補助魔法を使わず走って帰れ」
「鬼師匠きたぁあああああああああ！」

しかし、これも愛の鞭だと思えば軽いもんだ！　なんだかんだで成長してるしね、僕！

「あ、おい・・・」

師匠が何か言ってたみたいだけど、猛ダッシュで家まで帰る。この世界は不思議なもので鍛えれば鍛えるだけ成長する。百メートル走で十四秒後半ぐらいの僕だったけど今では十秒を確実に切れる自信がある。ストップウォッチで計った訳じゃないけど、この速さは元の世界だとオリンピックで金取れそうだよね！　しかも、まだまだ

早くなれる余地があるみたいでタイムはどんどん短くなっている。

だけど、僕はむきむきまっちょって体型になった訳じゃない。いつもどおりひょろっとした体型で背は・・・まだ伸びてない。

「おはようございまーす！」

「おう、頑張っとるな！　無理すんじゃないぞー」

「はーい」

毎日、外と街中を往復していると門番の人と仲良くなって、今じゃ顔パスで通過できる。たまに新しい門番さんが居るので念のため通行証を持ってはいるけども、最近ではほとんど使う事はない。

朝日がゆっくり昇る中、肌寒い町の中を駆け抜ける。朝錬をしてきた後なのでこれぐらい肌寒い方が、火照った身体に気持ちが良い。それにバスもまだ動いていない時間なので大通りを悠々と走る事ができる。そして、少しずつ走る速度を落として行き、家に着く頃には歩くぐらいの速度に落としていた。クールダウンしないと身体に悪いって言うしね。家に帰ったらストレッチをしてお風呂に入って終了だ。

師匠との決闘もとい模擬戦から半年。師匠の監督の下に基礎から徹底的に鍛えられた。本格的な訓練なんか全くした事のなかった僕にとって、毎日血反吐を吐くぐらいの辛さだった。自分で師匠に頼んでおきながら、師匠を恨んだりする事もあったけど訓練を続けていく内に効果が現れてくると、現金な物でそれまで以上に訓練に打ち込むようになった。

「うー、気持ち良い～」

「気持ちいいねぇ～」

お風呂に浸かって伸びをすると、朝の疲れが取れていく気持ちになる。今日はまた遺跡実習があるので、気合を入れないとね。・・・あれ？　何か違和感があったような・・・まぁいっか。そろそろ上がらないとご飯食べてる時間が無くなっちゃうや。

「きゃっ」

・・・何か聞こえたけど平常心、平常心。ここで迂闊に反応してしまうとより危険になるのは明白だ。何事も無かったように扉を開け脱衣所へ。急いでタオルを巻いて着る物も脇に抱えて部屋に戻る。

僕はいまだに女性がちょっと苦手だ。いや大好きは大好きなんだけど、あまり話をした事がない女の子とは、いまだに会話するのもどもる。最近は特訓と銘打って、夜寝るときはみんな潜りこんでくるんだけど、これはこれで逆に慣れてしまって女の子を感じなくなってしまった気がしないでもない。なんというか極端だよね。美少女には何も感じないのに普通の女の子にはどきまぎしちゃうとか。普通逆だよね？

今朝も五人揃って学園に向かう。と言いたい所だけど、最近はプラスワンが着いて来る。

「おっはよー、コージ君！　今日も元気に走ってたね～」
「おはようございます、生徒会長」

あれから半年経つんだけど、いまだに生徒会長は僕につきまとっている。朝の登校時は必ずと言って良いほど一緒に行く事になっている。曲がりなりにも生徒会長なので色々する事があるようで、放課後はたまにしかちょっかいを出しに来ない。これが毎日来たりした

なら、追い出す事もできるんだろうけど程よく来るぐらいなので我慢できてしまう。なんだかんだで慣らされてるのかもしれない。

「コージ君は相変わらず冷たいねぇ。アイシャって呼んでよアイシャって」

「いえ、先輩ですし生徒会長ですし、なによりそんなに仲良くありませんし？」

「女の子には優しくしないと、もてないぞっ」

「いや、すでに美少女に囲まれて幸せですから？」

「もーあぁ言えばこう言う！　コージ君、つーめーたーいー！」

だって、生徒会長って属性的に母さんに似てて面倒くさいんだもん。他の人には迷惑かけないのに僕だけに迷惑かける所なんて、まったくもってそっくりだ。

「そんな所で駄々こねてないで行きますよ、せ、ん、ぱ、い」

「もういいよ、それで。ふーんだ」

セリナ達は基本的に生徒会長にはノータッチだ。いくら生徒会長が美人で人気があるとは言え、僕が全く相手にしてないのが分かっているからだ。だけど、毎朝毎朝こんなやり取りを続ける先輩は、よく飽きないよねぇ。いい加減、諦めて他の人を構ってくれたらいいのになぁ。

「そうはいかんのですよ、コージ君。私はあなた一筋なぁの。うふっ」

なんかポーズを決めてウインクまでしてそんな台詞を飛ばしてくる先輩。その光景をみた通学途中の男子生徒は顔を赤らめてうっとりと先輩を見つめている。いや、女生徒まで顔を赤らめている。すご

い破壊力だ。だけど、この周りの反応を見るたびに僕は思う。こんなに人気がある人がどうして僕に付き纏うのだろう、と。それとも僕がなびかないからこそ、この人の興味を買ってるのかなぁ？　かといって、生徒会長を好きになるのも無理だしなぁ・・・なんというか、僕がうざいと思う事を狙ったようにしてくるんだよね。

「じゃあコージ君、またねっ！」
「はい、またです、先輩」

こうやって普通にしていれば、何も問題の無い人なんだけどなぁ。

「ようコージ、お前は毎朝かわらんのんぉ。わしとしては、上手くいって欲しいような、そうでないような複雑な気分やわ」
「おはようハルト。そんな事より今日も遺跡実習だよ。今日もぶっちぎりで勝ちに行くよ！」
「そんな事っておまえなぁ・・・まぁ、興味ないって事はわしにも少しは目があるっちゅー事やからええんやけどな。まぁ、勝つのは当たり前やコージ。今日は大物も狙ってくで」
「うん」
「・・・ラインハルトさん、先程の発言は命を縮める事になりますよ？」
「おわぁ！？　お、おう分かった大丈夫！　むしろ上手く行って欲しくないから！」
「そうですか。不用意な発言は危ないんですよ？　うふ、うふふ」

黒セリナは見てるだけでも心臓に悪い。ハルトと顔を見合わせて変な事は言わないでおこうと固く誓いました。あ、師匠も来てる。

「師匠おはようございます！」
「あ、あぁお早う。コージ、お前はとりあえず最後まで人の話を聞

いてから動くようにしろよ？」
「え、あれ？」
「まぁ、何事もなく帰ったなら大丈夫だろう。あまり無理はするなよ」
「はいっ」

なんだか僕はやらかしたらしい。だけど、結果オーライだったみたいだ。師匠はいまだに師匠と呼ばれるのに慣れないようだった。曰く、自分がまだ未熟であるにもかかわらずそのように呼ばれるのに違和感を感じるようだ。ほんとに謙虚な師匠だ。

さぁて、今日も遺跡実習をがんばるとしましょうか！

光司の一日　その1（後書き）

半年ほど進みました。

光司君はこっちの世界にとけ込む努力をしているようです。

光司の一日　その2

「とりゃっ」

前衛型のオークを一撃で葬りさり、次のスペルキャスターに向かう。僕の今の装備は全部こっちの世界で調達したものだ。自作の武器は一つもない。あるにはあるけども、ちゃんと一からこの手で作成したものだ。何故かというと僕の魔力を元に能力で作成した武器で戦わなければ、あの選択肢が出てくる事がなく普通に戦えるからだ。

「“ゲェーゲッゲッゲッ！　ファイア！”」

急接近してきた僕に魔法を唱えてくるけど、それぐらい回避できない僕じゃない。

ザシュッ！　ドスッ！

詠唱できないように喉を掻き切り、止めに腹部を突き刺しぐりっと捻って剣を抜く。勿論血しぶきを受けないように素早く移動する。血がついた剣を振り、転がっているオークになすりつけて少しでも綺麗にしておく。

「コージ、お疲れさん。おまえさん、また速くなったなぁ」
「まぁね。日々鍛えてますからっ」
「コージも言うようになったわよね。半年前はピーピー泣いてたのにね」
「今でも泣きながら戦えるよ？」
「その反応は想定外だわ」

僕がこうやって戦えるのはヒロコのおかげだ。彼女が選択肢の出ない方法を教えてくれたからこそ、僕はこうやって皆と一緒に戦う事ができるようになったのだ。ヒロコは僕の精霊というだけあって、僕の能力について知ってるようなのだ。まぁ聞いても答えてくれない事もあるんだけどね。そこら辺は何か事情があるようだった。だけど、印の力っていうのは厄介なもんだなぁ・・・

「じゃあ、どんどん潜って行こうか」
「そやな。そろそろオーガと再戦してみたいけど、無理やろかなぁ」
「ちょっと冒険してみる？」
「二十まで足を伸ばす・・・？」

一応、十五階層までは実習で行けるようになっているけども、さすがに二十階層までは許可が出ていない。だけど、僕たちにとって十五階層はぬるく感じられるのだ。

「うーん、いざって時にアクセルを解禁していいなら平気だと思うんだけど・・・」
「せやけど、あれ使ってまうと証明部位を取れへんやろ？　アイテムは取れるからまぁ稼げるっちゃ稼げるんやけども」
「それに基本的にそれは無しって決めたじゃない。私たちの力がどこまで通用するかを知るのも重要だけど、通用しない時に撤退できる術を磨くのも勉強だと思うわよ？」
「そうだね。僕たちってあまりピンチらしいピンチって経験ないよね」

僕達のパーティは六人編成とはいえ、攻守ともに優れている。その上、メンバーの個人の能力も高めなので危機らしい危機は今まで無かった。

「まぁ、最初に潜った時のオーガぐらいやな。あんときはほんま焦ったのぉ」

あの頃と比べれば、確実に力をつけているがオーガと再戦して倒さない事には自信がつかない。正直、かなり強くなっているはずなのだ。

「二十階層までの強敵は何が居るんだっけ？」
「オーガは勿論、キメラにニードルベアにレッドベア。あとレッサーイビルが出るかもしれんなぁ」
「キメラとかイビルは厄介そうだね。特殊能力とか闇系の魔法は対処しにくいからね」

でも、やってやれない事は無いと思う。

「イビルの羽根は欲しい・・・」
「杖の材料に良いらしいね、あれ。魔力増幅の初級装備には必ずあれが付いてるよね」

初級装備とはいえ魔力増幅の能力が付いているという但し書きが付くと、それだけで杖の価値はぐんと跳ね上がる。買うとなれば十プラチナは必要だろう。それだけにイビルの羽根のドロップ率はかなり低い。

「で、どうするんだ？」
「行こう。冒険者を目指してるんだから、冒険しないとね」
「ま、ちょっと覗いてパパっとオーガ倒して戻ればええしな」
「そううまく行くかな？　誰かさんが居ると悪運ばかり凄いし？」
「レイ、それはひょっとして僕の事かなぁ～？」
「あっはっは」

「笑って誤魔化さない！　もう」

いやまぁ、本当にその通りなんだけど正直に言われるとぐさっとくるよね。結局、二十階層を目指すのに誰も反対が無かったので、急いで向かう事になった。一応下調べをしてあるので、二十階層を目指すのは苦ではない。

そうして、十九階層まで特に問題なく進む事ができた。途中ではオークの集団とも戦闘があったりしたが、ハルトが一人で撃破していった。正直、オークはどれだけ出てこようと雑魚でしかない。だが、ここでレッドベアが出没した。強さ的にはオーガと同じぐらいらしいけど、僕は既にあれを倒した経験がある。目でハルトに行くか聞く。どうやら先陣をきりたいようで、しきりに剣を持ち上げている。バルトに確認すると、オッケーのようだ。

ダンッ！

レッドベアには背後に熱を感じる器官がある。こちらに背を向けていても魔法でも無い限り不意打ちは難しい。そして予想通りこちらに背を向けていたレッドベアはすかさずハルトに向かい合い、上段の手を横に広げ、下段の手を振り下ろして来た。振り下ろしてくる手を潜り抜け、勢い良くレッドベアの背後に回りこむハルト。踏み込みの速さが尋常じゃないからできる技だろう。

背後に回りながら、剣を叩き込みはするもののレッドベアは剛毛なので、力が込めにくい体勢での一撃は致命傷にはならない。ただ怒らせただけだった。四本の腕を器用に使い、ハルトを攻め立てる。でも、背中がお留守だよレッドベアちゃん。

「“氷よ！氷よ！　我が意を以って槍と化し敵を貫け！　アイスラ

ンス！”」

エリーの氷系呪文がかっ飛んで行く。きらきらと氷を撒き散らしながら飛んで行く様はとても綺麗で、敵を無情に貫く氷の槍にはとても見えない。

グギャァアアアアア！！！

背後に熱を感じる器官があるとはいえ、どうも冷たい物が飛んでくるのは感知できないようでモロにアイスランスを背中に喰らうレッドベア。さぁ、止めを刺しに行こう。

セシリアと一緒にレッドベアに飛び込んで行く。ハルトも悲鳴を上げるレッドベアの腕を一本切り飛ばし、更に傷を増やすべく剣を振りかぶる。

そんな光景を見た僕は、勢い良くアイスランスを深く蹴り込んだ！

僕のドロップキックは見事にアイスランスに命中し、アイスランスは更に奥へと深く貫いていく。そしてセシリアの攻撃はレッドベアの胴体を何箇所か浅く穴を開けている。さらにハルトの剣もレッドベアの顔をぶん殴っているせいで、のた打ち回るレッドベア。無茶苦茶に暴れまわるので、一斉に距離を取る僕たち。

「“氷よ！氷よ！　我が意を以って槍と化し敵を貫け！　アイスランス！”」

僕たちの気配が遠ざかったかと思ったら、またレッドベアを貫くアイスランス。だけど、まだ暴れまくるレッドベアやっぱり生命力は尋常じゃない。だけどエリーはそれはお見通しと言わんばかりに、アイスランスを連射し、レッドベアを穴だらけにして止めを刺した

のであった。

こうしてオーガクラスの敵を、楽に撃破した僕たちであった。

光司の一日　その２（後書き）

戦闘ばかりですね・・・

光司の一日　その3

レッドベアを倒して、討伐証明部位のピロピロを切り取る。よりによってピロピロを証明部位にするとか・・・高級料理店に卸されるんだろうなきっと。一度だけ食べた事があるんだけど、あれは本当においしかった。

「ようし、本番前のウォーミングアップっちゅーやっちゃな。レッドベアを倒せるならオーガも楽に行けるっしょ」

「だね。強さ的にはそんなに変わらないって言うし。まぁ再生能力が厄介といえば厄介だけどねぇ」

「今なら充分な火力があるから大丈夫だよ。瞬殺まではいかないけど、そんなに時間をかけずに倒せると思う」

レッドベアを倒して勢い付いた僕達は、二十階層へと突入した。帰る時間も考えると、あまりこの階層に留まる事ができない。なので、急いでオーガを探して駆け足で遺跡を移動する。

キシャァアアア！

「お！？」

「びっくりしてる場合じゃないよっと！」

駆け足だったので、先に敵に発見されたようだ。相手はキメラ、通路の天井付近からハルト目掛けて飛び掛ってきたのを、僕は剣を交差させて受け止めた。その直後に襲ってきたシッポは僕が体勢を崩す事によって回避できた。来るのが分かってたから回避は簡単だった。そして、狙いが外れて泳いだ尻尾はレイによって切り落とされた。

「たまには僕にもやらせて貰うよ」

その言葉にレイと入れ替わるように後退する。その僕を追いかけようとしたキメラだけど、レイの正確無比な目への攻撃に驚き、慌てて首を振って回避する。

「“風よ！　その力以て我を疾く走らせよ！　クイック！”」

ただでさえ素早いレイだが、さらに移動速度向上の魔法で速度を上乗せする。一撃の威力がハルトや僕ほど無いレイだが、スピードに乗れば手数でそれを補う事ができる。四足獣であるキメラ相手には、レイのようなスピード重視の戦い方をする人間向きだ。あとはキメラのスピードが落ちた所に、一撃を加える準備をしておけば良い。

「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」

エリーがキメラの動きを止めようと魔法を放つが、キメラは簡単に回避してしまう。さすがに高速で動くキメラに魔法を当てるのは難しいようだ。だけど、キメラの気を引いたのは確かで、レイはその隙に間合いを詰めて足元を傷つける。

「あー・・・レイ。一人でキメラ倒せる？」
「時間はかかって良いならイケるけど。どう・・・来たんだね」
「きやがったか！」

ズシンズシンズシン・・・

聞き覚えのある振動がオーガの接近を教えてくれる。だけど僕達の

目的はオーガだ。だからキメラと戦いつつオーガを倒す！

「これぐらいで丁度良いハンデじゃねぇか」
「じゃあ、先に行くねっ」
「あ、ずるいぞコージ！」

ハルトの声を無視しつつ、オーガへ突撃する。前は簡単に返り討ちにあったけど、前の僕とは違うんだ！

「“我が身の魔力よ、我が身を巡り我に無敵の力を与えたまえ！オーディス！”」

二本のグラディウスを構えつつ、身体強化の詠唱をする。僕は防御を考えない。攻撃こそ最大の防御。相手がこちらを攻撃できないほど、圧倒し倒す事ができれば防御など要らない。踏み込みが回避になり、攻撃は相手の追撃を阻み、さらには死角をついて追い詰める。今の僕にはアクセル無しでも、その見極めができる。

こちらへ歩を進めるオーガ、右足が前に来ているのを見て相手の攻撃はもう二歩歩いてから来るのを確認。ならば、二歩目が地につくかつかないかで姿勢を低くし足元へ一気に飛び込む。これで、僕の姿はオーガの足に隠れる事になり、オーガは一瞬僕の姿を見失う。軸足の左足のアキレス腱を断ち切り、次の狙いは振り上げている右腕の脇。遺跡の壁を蹴りあがってオーガに飛び移り、右脇を上から下へグラディウスを斜めにして突き刺す。

グゴォオオオオオオ！？

オーガは咆哮を上げ、再生能力をフルに活動させている。だけど、その時には僕はもうグラディウスを抜き取り背後を取って、刃を水

平にして背中を突き刺している。そして、オーガの正面には剣を構え気力を溜めているハルト。あぁ、彼はやる気だ。

「“絶刃裂波”」

大きく振りぬいた剣の先から衝撃波がオーガに向かって突き進む。衝撃波はオーガを縦に真っ二つに切り裂いただけでは止まらず、後方へと流れていった。とっさに回避できる僕以外に誰も居ないから良かったものの、危ないよハルトは。

「最近、使えるようになったからってこんな所で使わなくて良いんじゃないかな、ハルト」

「わりぃわりぃ。せやけど、コージがわいを置いて行くからあかんねんぞ？」

「はいはい、レイの援護に行くよ、ハルト」

「いんや、もう終わっとるで」

「ありゃ」

ハルトの言葉どおり、レイとセシリアの連携で四肢を串刺しにされたキメラはエリーのアイスランスをたっぷり食らって息絶えていた。あとは討伐証明部位を切り取って、入り口に戻るだけだね。

「この階層も行けるだろうけど、今日は戻ろう。次からは最初からここを目指して来るという事で」

「もうそんな時間かいな？　まだ余裕あるやろ？」

「何言ってるの、証明部位を切り取ってたらあっという間よ？　それに帰りにオークに足止めされないとは限らないでしょ？」

「オークなら別にええやろう・・・あんなん足止めにもならんわ」

渋面でそう返してくるハルト。あー分かってないなぁ。

「倒すだけならね。倒して証明部位を切り取らずに帰っていくなら、どうぞご自由に」

「う・・・しゃあないかぁ。せっかくオーガを倒して良い気分やっちゅーに。まったくついてないわぁ」

何を言ってるんだか。オーガを倒そうと決意して即座にオーガと戦えて、あまつさえ倒せたんだから、僕達はかなり運が良いのにね。そんな事をちっとも理解していないのか、しぶしぶという感じで帰途につくハルト。他の皆はそんな事は無いんだけどね。こうして、今日の遺跡実習は終了となった。

そして、夕方。僕はセリナから魔法の個人授業を受けていた。彼女の魔法は炎に特化しているだけあって、凄まじい威力を持つ呪文が多い。だけどそれ以上に敵を弱体する呪文も豊富に使いこなしているので、僕もその呪文の習熟に時間を割いてもらっているのだ。一時間ほどしてセリナの個人授業が終われば、ミミと基礎体力をつけるためにランニング。彼女の速さについていけるようになれば、僕も一人前になったと胸をはれると思うので付き合って貰っているのだ。

ランニングを終えて家に帰って夕食。この時間とこの後のお風呂の時間だけは僕がゆったりとできる時間なのだ。なにせ寝る前には白夜とフレームの装備について、色々と案を出し合って実現できるかどうか、議論するからだ。今は白夜のようなＡＩをフレームに乗せる為にはどうすれば良いか？　が一番の議題になっている。大きさや能力は勿論大事だが擬人化する必要はあるのか、学習型にして個人の癖を反映するようなＡＩにするのか。はたまた、端末をフレームに積むだけで本体は別に安置しておく形にするかなど、話し合う事は意外と多い。

半年前、ヴァイス師匠に気付かされてから僕は貪欲に自分を鍛え上げている。今が人生で一番勉強や運動をしているだろう。だけど、まだまだ僕は追いつけて居ない。もっともっと上を目指して行かないと、学園でトップなど取れる筈が無いのだ。

そう。僕は生徒会長の成績を追い抜く。今の一番の目標はそれなのだ。分かり易い目標があって良かった！

光司の一日　その３（後書き）

光司くん、戦ってばかりですね。勉強も一杯してるみたいですけど、基本的に基礎体力がまだまだ低い方なので、鍛えまくってるようです。

暗躍する貴族

僕は新しい魔法を創り出す為に言葉を捻り出している。威力を高める為、範囲を限定したり広げたりする為、魔法の効果を向上する為、魔力を節約する為、僕が魔法を創り出す為にする事は言葉をあてはめる事だった。

この世界の呪文は日本語だ。

セリナの新しい呪文の開発の仕方を実際に見た時、それがようやく分かった。以前から魔法の呪文について違和感があったので、違和感の正体が分かった時は喉に刺さった小骨がすっきり取れた気分だった。なので、僕は呪文を聞きさえすれば、その呪文がどのような効果を及ぼすかはっきり分かる。だけどこの世界の人にとって、呪文を最後まで聞かないと呪文の効果は分からないのだ。自分が使う呪文で丸暗記してあるものなら、半分ぐらいまで聞けば分かるらしいんだけど呪文の序盤で理解できるのは居ないそうだ。一応、最初の精霊に対する呼びかけを聞いてどの系統かは分かるんだけど、それも言い方を変えてしまえば誰にも分からなくなってしまう。

フレームに使われているシートといい、魔法の呪文といい日本語が使用されているのは不思議だけど、嬉しい誤算だ。日本人がこの世界に来れば、魔法を使うのにまったく困らないのではないだろうか。いや、そんなにポンポン呼ばれても困るんだけどもね。うん。

で、僕が今創造しているのは「光」系統の呪文と「闇」系統の呪文。この二つの系統を利用すればアクセルやアイテムの収納などの能力が実現できる筈なのである。アイテムを収納している指輪に関しては、戦闘に関係ないので今でも利用しているんだけど、やっぱり自

分で学んだ魔法の力でマジックアイテムを作成したいという野望がある。「ギル」にしたってそうだ。あんな使い勝手が良い武器は他にない。自分で創っておいて言うのもなんだけどね。

今はグラディウスの二刀流で胸当てと篭手とブーツの装備で戦っているんだけど本当を言うとやっぱり「ギル」の二刀流にしたい。「ノーミス」と「月光」でも良い。とにかく印の能力とは関係無しに、武器や防具やアイテムを作りだしたいのだ。あ、勿論フレームも一から設計して組み上げたい。でも、今はとりあえず魔法だ。あれもこれもしたいんだけど、生憎と僕は一人しか居ないので、少しずつ、でも確実にこなして行く必要がある。魔法を創造するのは難しいんだけど、焦りは禁物だ。誰にも真似のできない僕だけの便利な、元の世界の魔法達を絶対再現するのだ！　そうする事で武器やフレームに使える素材を作成できるようになるし、この国に巣食う貴族達を一掃する力を手に入れられるはずなのだ。王の印があれば貴族は怖くないんだけど、生憎王の印を持っているのは僕一人だけだ。仲間を狙われてしまえば、それだけでお終いになる。

貴族といえば、ヒューイと行動しているエド。打ち上げた衛星を使って、彼を探してはいるんだけど、どうにも見つからない。絶対あのヒューイと一緒に居るはずなんだけど、うまく隠れているみたいで痕跡を辿れない。彼や貴族の被害者を助ける為にも僕は強くなりたい。

「コージ、今大丈夫ですか？　そろそろ休憩にしましょ？　温かいコーヒー持って来ましたから」
「あ、ありがとう。それじゃあ休憩するよ」
「はーい」

そういって、テーブルの上にコーヒーとお茶菓子を置くセリナ。最

近はこうやってセリナとお茶をする事が多い。昼間は暑いぐらいとはいえ、夜にもなると結構冷え込む。今日は夕方に雨も降っていたので蒸し暑くなるかと思ったら、いつもより冷え込んできたので温かいコーヒーは凄くありがたい。

「いつも良いタイミングで持ってきてくれてありがとう。セリナだって魔法の研究があるのにごめんね？」

「ううん、コージに休憩させるついでに私も休憩取りたいだけなんですから、気になさらないで下さい。それよりも・・・」

すすすと椅子を僕の真横に持ってきて、僕に身をぴったり寄せてくるセリナ。

「コージ、最近は少し頑張りすぎじゃないでしょうか？　ちょっと心配です」

そういって僕を見上げるセリナ。ほんのりと感じる彼女の体温とその上目遣い、心配そうな声音が僕を温かくさせる。そんなに頑張ってるかなぁ？

「頑張ってますよ？　一体何時寝てらっしゃるか心配です。いつ来ても起きてますから」

「ありゃ、心を読まれた。でも寝るのはちゃんと寝てるよ。セリナ達と同じベッドでしっかりと」

元の世界に居た頃には全く想像のつかない環境で、だけど。だって、女の子と同じベッドで寝るなんて、この年で・・・いや有り得るけれど縁の無い人間だったのに、それが今じゃはっきり口にするのも恐ろしい状況になっている。いや嬉しいんだけどね、慣れちゃう自分が怖いというか。

「もう、茶化さないでください。四時間寝てるかどうかじゃないですか？　しっかり休息をとらないと持ちませんよ？　魔力も寝てる方が回復しやすいんですからね？」

「心配してくれてありがと。だけど、波に乗ってるって言うのかな。学べば学んだだけどんどん吸収できるから、凄く楽しいんだぁ。今までこんな事無かったから余計にね。それに魔法やフレームなんて元の世界には無かったから、それを自分で出来る様になるのは物凄い事なんだ！」

いずれ自分の思い通りのロボットが作れるようになるなら、そりゃあ頑張るってもんだよねぇ。合体や変形したいから、いずれセリナ達にもフレームの操縦をばっちり覚えて貰うつもりだしね。ぐふふ。

「コージ、気持ち悪い笑いが漏れてますよ？」

「あ、ごめん。つい」

「もう、コージはフレームの事になるといっつも可笑しくなっちゃいますよね。めっ」

笑いながら僕の鼻の頭をツンとしてくる。こんな時ばかりはセリナも年上のお姉さんっぽく見える。訂正。年上の綺麗なお姉さんだね、うん。

「コージ、入るね。あ、やっぱりセリナ、ここに居た。ずるいぃ」

ぱっと部屋に入って来たかと思ったら、ぷぅっと頬を膨ませながら僕の傍に来るミミ。この半年でミミの成長は著しく、正直別人だ！！！　ってぐらい変わってしまった。僕と同じぐらいの百六十センチまで背は伸び、幼さが残っていた顔立ちも凛々しく華やかに変わり、体型も誰が見ても女性、しかもかなりスタイルの良い女性とい

うのが分かる程に成長している。僕達と生活するようになってから、精神的に凄く安定してきたらしく今まで成長していなかった分を取り戻すように、成長しているようだ。そのおかげで今では年相応の見かけになっている。いや、ある意味年以上の成長具合というべきか。

「よっこいしょっと。あ、あたしにもコーヒー飲ませてぇ～」

と言うが早いか、僕の膝の上に座り僕のコーヒーをゴクゴク飲むミミ。体が成長してもこうやって膝に座るのを止めてくれないミミ。むしろ・・・

「ごろごろにゃー」

色々とこすりつけてくる。色々と。以前だとこんな状態になるとセリナが黒くなるんだけど今では・・・・

「にゃにゃにゃにゃにゃん」

ミミと大差ない事になっている。最初の頃はそりゃあ鼻血だらけだったさ。二日寝込んで三日寝込んで、猫が寝込んで、僕は走って。あぁ、訳がわからない。とりあえず生命の危機を気合で乗り越え、この攻撃を耐えられる強さを持つに至ったのだ。嘘です、鼻血が出ないだけで身体は正直です。

「む、何者ですかっ！」

急に立ち上がり窓に向かって一喝するミミ。その姿は例えるなら、今にも獲物に飛び掛らんとする虎。ん？　窓に誰かいる・・・？

「危ない！」

覚えのある波動を感じ、咄嗟にミミとセリナをかばう。僕の直前で掻き消えたこの力は貴族の力か?!

「くくく。やっぱりお前が印を持っているんだな。それが分かれば充分だ」

しゃがれた男の声がどこからか聞こえる。窓のあたりに居るはずなのに、姿はまるで見えない。だけど、ミミは窓に向かって飛び掛り何かを攻撃した。

ガシャァーーーン!!!

窓が砕け散り、窓枠が外へと落下していく。それと同時に気配も消える。ミミの攻撃をかわして逃げたようだ。どこの貴族だろうか・・・ヒューイの声ではなかったけど一体誰なんだ?

「貴族の誰かが印を探してるみたいだね。これは屋敷に結界を張る必要があるなぁ。それと、トレイルさんとファラスさんに連絡して、屋敷の周りを見張って貰うようにしよう」

「ですね、早速連絡してきます」

「ミミは、コージと一緒に居るね」

「お願いします、ミミ。では」

誰かが僕の印を王の印と知り、奪おうとしているのだろうか。それとも洗脳して自分たちの操り人形にしてしまおうとしているのか?

なんにせよ、碌な事を考えてない連中という事だけははっきりしている。・・・まったく、貴族って奴は本当にどうしようも無い連中ばっかりだね。もう。

暗躍する貴族　（後書き）

ミミ、三段変形。合体は・・・まだです。

今後のプチ目標

ロバス郊外にひっそりと佇む屋敷がある。ひっそりと言っても、その威容は他を圧して存在感を充分に撒き散らしている。にもかかわらず、ふと屋敷から目を離すと途端に気にならなくなってしまう屋敷。

貴族の屋敷なのであろう。本館とは別に別館があり、そこには使用人達が押し込められているようだ。しかも敷地内にありながら目立たないように回りを木々で囲まれ、本館からは決して見えないようにしている徹底ぶりだった。外側から見ればひっそりと佇んでいるように見える屋敷だが、一度屋敷に入ればその豪華な造りが良く分かるようになっていた。

そしてその屋敷では、ある謀がすすめられていた。

屋敷の奥にある一部屋でヒューイは、黒装束の男から報告を受けていた。

「で、俺の言った通りガキが印を持ってたんだろ？　これでやっちまう奴がはっきりしただろ。あとは即座に実行するだけだ」

「まてヒューイ。おまえが逸るのも分かるが、今はまだ不味い。首都に長子を人質に取られてる今は迂闊には動けんのだ。まずは、他の貴族の協力をだな・・・」

報告を受けたヒューイを宥める男。四十代ぐらいでグレーの髪を簡単に後ろに撫でつけて、眼光は鋭い光を放っている。

「ぬるい、叔父貴はぬるすぎる。即断即決、果断実行。やるなら少々のリスクは気にせず行くべきだ！」

「それで返り討ちにあって無様な姿を晒したのを忘れたか、ヒューイ。貴族に対してあのような所業をしてのけたあの小僧。到底許せるものではなかろう？」

そう静かに語る男の瞳には、抑え難い復讐の炎がはっきりと見て取れた。ヒューイの無様な姿を思い出し、怒りを再燃させているようだ。

「・・・分かった。叔父貴がそう言うなら、我慢しようじゃないか。何か考えがあるんだろ？」

「くっくっく、だからそう言っておる。ヒューイ。お前は本当に貴族らしい貴族だと俺は思っている。だから、次の家督をジョーイが継ぐのには反対だ。絶対おまえが家をエディン家を継ぐべきだ」

「叔父貴・・・」

「その為にも、他の貴族の協力・・・いや犠牲が必要なのだ。まぁ任せておけ」

そして、壁際に今まで息をひそめて畏まっている黒装束の男に目を向ける。

「おまえは、コージというガキをしっかり見張っておけ。あと弱みが無いかもしっかり調べておけ。いいな？」

その言葉に大仰に頷き返す黒装束の男。そして、一礼をし静かに退出していった。

「うーん・・・完全に姿を消してるみたいだねぇ。て事は、熱源もしくは匂いで相手の位置を探すしかないかなぁ。心臓の音とかのほうが良いかなぁ？　うーん・・・」

侵入されたので衛星の映像を確認したんだけど、侵入者の姿はまったく映ってなかった。完全に見えないようで、他の探し方をする必要があるみたいだ。

「いや、ちょっと待てよ・・・」

もう一度映像を良く見てみる。窓から飛び出て逃げ出した場面をじっくりと見る。窓枠が地面に落ちる。いくつかの破片がちらばり草の上にばらばらと落ちる。まだ魔力を感知する警報は鳴っていない。ゆるやかな風が草を揺らした後、警報が鳴る。

魔力を使わずに何かの能力で姿を消しているみたいだって言うのは、分かった。屋敷の周りの柵を乗り越えようとする生き物を発見次第鳴るのが侵入者警報。屋敷内で警報除外装置が無い場所で魔法を使うと鳴り出すのが魔力感知警報。窓が落ちて少ししてから魔力感知警報がなったのは、外にでてすぐ転移魔法を使わずに時間を置いて使った為なんだろう。

「コージ、ここおかしくない？」
「どこ？」

僕が考えている間も、ミミが映像を確認してくれてたんだけど気になる所を見つけたようだ。

「いくよ、ここら辺をじっと見ててね」

窓枠が落ちる所からだった。窓枠が落ちてきて、地面に破片がちらばりおかしい所は分からない。

「ここの草をようく見てて」

「草？」

草が揺れているんだけど、ん？　人が掻き分けて進んでる・・・のか？　警報がなった途端に草は支えを失ったかのように、元に戻っていく。ただし、踏みつけられただろう草は倒れたままだった。

「よく見つけたねミミ！　ありがとう！　姿が消えてても重さは消せないみたいだね。どこから侵入したか、これで分かるかもしれない」

でも、対策を練るのが先かな。姿を消してるんだからどこからだって入りたい放題だろうし。仕方が無い、使いたくないけど、印の力を使って強固な結界装置を作ろう。他の人が屋敷の中に入れないようにね。

結界を張って次の朝。

「光ちゃん、久しぶりぃ！」

いつもどおりの日課をこなして、朝ごはんを作って食卓に運んでき

たら、父ちゃんが居た。どうやって入ったのこの人？　と思ったら母さんがウインクしてきた。なるほど、それで入れたのね。

「おはよう、父さん。単身赴任でずっと帰れない父さんの気分はどう？」

「せっかく一緒になれたのに、一人で寂しいよ光ちゃん。まったく貴族の馬鹿どもめぇ・・・って今回はその貴族のおかげで来れたんだよな。父ちゃん複雑・・・」

なんだか、一人で落ち込んだり怒ったりしてる父ちゃん。そこへセリナ達が降りてきた。

「おはようございま・・・お義父さん、おはようございます」

「あ、お義父さんおはよう」

「おはようなのじゃ」

「ぐにゅぐにゅ・・・」

約一名ぐにゅぐにゅしているが、他は父ちゃんに気づいて元気良く挨拶している。

「やぁ、眼福眼福。女の子が家に居るのは良いもんだねぇ、光司」

「肌が綺麗になって、さらに可愛くなった母さんを忘れてるよ、父さん」

「っ・・・」

あ、有無を言わせずにいちゃいちゃしに行った。いや行かされた。

南無。

「心配で見に来てくれたみたいだね。今後、貴族が動くかもしれないから対策を練らないとね。父ちゃんにはそこら辺をお願いするつ

もりなんだ」

この世界なら印を封じる薬とか結界とかもあるかもしれない。あとなんの力か分かってないと僕に何かしようとした時に対抗できない。でも、僕に印があるってヒューイ以外にもばれちゃったから、危ないのは父ちゃんかもしれない。注意しとかなきゃね。

「じゃあ、今日は学園にどうします？」

「んー・・・せっかくだし行くよ。街中で何かしてくる事もないだろうし」

「じゃあ準備してこよーっと。セリナ行こっ」

「はーい」

あっという間に朝ごはんを食べた皆はそれぞれ準備をしに部屋に戻っていった。さて、僕も片付けてから準備をしますか。

今日は昨日の戦績の発表だけど、怒られた。成績は結局一位だったんだけど、討伐証明部位の中にキメラやらオーガやらレッドベアが混じってるから、当然二十階層まで潜ったのがバレる。この間のように偶発的に戦闘が起きたわけじゃないしガイドクリスタルで位置を確認されてるから、隠し様が無いってのもある。でも、普段からの僕達の頑張りを知っているので、口頭注意だけで済んだ。前みたいに危機一髪な状況になってたら、危なかったんだろうけどね。

「あー・・・メカと戦いたいなぁ・・・」

「おまえは何を言っとるのだ?！　今怒られたばかりだろうが！

少しは反省しろっ」
「はーい・・・師匠は本当に固いよね～」
「だまらっしゃい！」
「あいたっ」

遺跡にはキラーマシンのようなメカも徘徊している。これがフレームのパーツに転用できるものもあるので、それ目当てに潜っている人も少なくない。確か三十階層を超えてから小さいメカが出てくるようになるらしいんだけど、そこまで降りるにはまだまだ時間がかかりそうだった。

「なら、私達と内緒で行きませんか？」
「！」

その手があったか！　そういえば学園に入ってからこっち、そういったお金稼ぎをまったくしてなかったよね。まぁお金は困らない程度・・・いや、普通に生活するには余るぐらいなんだけどフレームを作るにはまったく足りない額なんだよね。

そして、セリナとミミの二人がいればキラーマシンを撃破できる。そして今は白夜もいるわけで、遺跡の中でフレームが戦うとかある意味チートだ。まぁヒロコは応援しかしないんだけどね。とほほ。

だけど、キラーマシンをゲットするには五十階層まで潜る必要がある。その点だけは少し不安材料なんだよね。うーん、今回はお金稼ぎと割り切って能力を解禁して行こうかなぁ。いやいや駄目だ。やっぱり自力でなんとかできるまでは、行かない様にするかぁ。アクセルだけでも再現できれば安全だから、目標はアクセルの再現。だねっ。あ、でも「ギル」もできれば作っておきたいなぁ・・・　設計図はあるから後は素材の調達と加工と組み立てだけなんだよね。

「アクセルを再現できてからで良い？　なるべく使いたくないんだ」
「はい分かりました。行く時は教えてくださいね、コージ」
「うん、ありがとう」
そうと決まれば、買出しに行かないとねっ。ようし、頑張るぞぉ！

今後のプチ目標（後書き）

能力ではなく、自分で鍛え上げた力で頑張ろうと決めた光司くん。
だけど、その意思とは関係なく能力を使わないと駄目になるのです。

ガイアフレームをもっと出したいっ！
ていうか、改造したい！　だけど急にはできないぃいいいい・・・

ここを乗り越えたら、ロボット戦隊物に変わるんだ・・・たぶん

武器作成の素材集め

「ギル」をこの世界の品物で再現するには、ある素材が必要だ。それさえあれば後は加工して合金を作り、組上げるとできあがるはずだ。簡単に言うとそれだけ。だけど、ミスリルって普通に売ってるのかなぁ？　前は魔力でめきょきょって創り出したから何も苦労が無かったんだよねぇ。必要なのはミスリルが十キロに魔力を込める為のオーブに、術式を書き込む為の銅版。ミスリルって元々軽いから十キロともなるとかなりかさばる。

やってきたのは、東ブロックのリックさんのお店。フレームのお店なんだけど、そういった素材を扱ってるお店を知らないか聞きに来たのだ。もし、リックさんのお店でも扱ってるなら分けて貰えるかもしれないし。

「こんにちはー、リックさん居ます？」

丁度なにか作業をしている店員さんにそう尋ねると、少々お待ちくださいと言ってお店の奥に消えていった。はぁ～やっぱりフレームは良いなぁ。四足タイプも有りっちゃ有りだけど、あんまり流行ってないんだよねぇ。だからタイプが限られているのが残念だ。人型だと乗る人が多いから、色々選べて楽しいんだけどね。

「よお、どうした。フレームが欲しいのか？」
「はおっ！？　あ、あぁリックさんお久しぶりです。今日はフレームじゃなくて教えて欲しい事があるんです。今、お時間大丈夫ですか？」
「ん？　なんだ俺にできる事なら良いんだが」

久しぶりに来たので、ハーベイさんの知り合いの光司です！　って説明が必要かと思ったんだけど、それは杞憂に終わった。

「あのですね、武器を自作で作りたいんですけどそれの素材が必要になりまして、その素材っていうのがミスリルなんですけど、仕入れるお店とかご存じないですか？　あ、あと一ミリの厚さの銅版も欲しいんですけど」

「あぁ、そういう事なら俺でも力になれるぞ。うちにも在庫があるから持ってくか？」

「あ、良いんですか？　ミスリルはキロ辺りいくらぐらいなんでしょうか？　銅版は一メートル四方の物があれば大丈夫なんですけど」

「銅版はそれだと一ゴールドだな。ミスリルはキロ五十ゴールドだな。何キロ要るんだ？」

「十キロ欲しいんですけど、あります？」

「そんだけで良いのか？　すぐ持ってきてやる」

そういって、奥の方へと消えていくリックさん。良かった、フレームにもミスリルが使われてるみたいだったから、有るとは思ってたんだけど僕が要る分だけ在庫があって助かった。あ、帰ってきた。

「まずは銅版だ。あとはこれだな。ちょいとかさばるがミスリルだから仕方ない。」

諦めろって言って、僕にぽいと放り投げる。リックさんって意外と力持ちなんだな・・・

「じゃあ、五百一ゴールドです」

「おう、毎度あり！　また素材が要るなら何時でも来い。フレームに必要な素材ならほぼ取り揃えているからな」

「はい、ありがとうございます。また来ます！」

ようし、これで本体部分の素材が確保できた。次は魔法教会でオーブを調達に行こう。セリナも一緒に付いて来て貰ったら割引して貰えない・・・かな？　一度家に戻って聞いてみよっと。

「オーブですか？　買うのも良いんですが、魔物から取ってくるのも手ですよ？」

「え、魔物から取れる物なの？　オーブって・・・」

「はい、スライムとロックゴーレムとドラゴンですかね。スライムから取れる小さいオーブも中々に需要があるので、結構取ってくる人は居てますよ」

「へぇ～・・・そうなんだ」

だけど、せっかく武器に使うものだし良い物を使いたい。ドラゴンなんかから取れる奴ならさぞかし大きくて良い物なんだろうなぁ・・・

「あ、でもドラゴンの場合は良く分かりませんよ？　大きくてそれなりの物ですとか、小さくても物凄く魔力を込められる物ですとか。ピンからキリまで当たり外れが多いんですよ。一時期はガイアフレームでドラゴン狩りが流行りまして、空を飛ばないドラゴンは数が少なくなってしまいましたし。なので狙うなら翼竜になりますかね」

「それってガイアフレームが空を飛ばないから、翼竜がたくさん生き残ってるって事なの？」

「いえいえ、空の王と呼ばれる古代竜が居るのが大きな原因ですね。古代竜とその眷属がかなりの力を持ってまして、その竜の縄張りに

は誰も近づけないのです」
「なるほどねぇ・・・古代竜かぁ・・・」

なんというかロマンを感じるなぁ。昔から生きている竜って。なんか人間に変身してすごい力を持ってそうだ。ちょっと見に行きたいなぁ・・・

「コージだめですよ。古代竜は一吼えで山を割り、その羽ばたきは町を吹き飛ばすと言われています。そんな言い伝えがありますし、実際に竜の縄張りの近くには地面が抉れた後が残っている場所がありますから、戦おうとか考えちゃ駄目ですよ？」
「あれ？　でもそれなら翼竜も狩れないんじゃないの？」
「縄張りから離れた高山などにも、結構な数がいるので大丈夫ですよ」

あぁ良かった。でも、オーブを竜から取るのは凄く時間が掛かりそうだ。衛星で居場所を調べてすぐに行けるようにはしておくつもりだけど。今回は教会で良さそうなオーブを買って、それで作るとしますか。

「じゃあ、竜を狩りに行くときは一緒に来てね。今日は教会でオーブを買いに行く事にするよ。じゃないと時間が掛かりすぎるからね」
「行く時はいつでも一緒に行きますからね。コージが良いなら二人きりでも良いですよ？」

またどんどん語尾が聞こえなくなる。前からセリナって顔を赤くしながらそういう事が良くあるんだよね。そんなに恥ずかしい事を言ってるのかな？　ちょっと興味あるかも。それはさておき、セリナを連れて教会へと向かった。ミミ達はまだ帰ってないようで、外で何かしてるみたいだ。普通の女の子ならこんな時にウロウロさせた

りしないんだけど、下手すれば僕なんかよりよっぽど強いから大丈夫なんだよね。あははー。

セリナと一緒に魔法教会に赴き、せっかくだからトレイルさんを呼んでオーブを見せて貰った。良く考えたらトレイルさんが居るから、セリナが居なくても良かった？

「そんな事考えたらトレイルが消えて無くなる事になりますよ、コージ☆」

うおぉおおおおぉ、怖ぇえええ、心の中をさりげなく読まれたよ。セリナは要るよ、セリナは要るよ、セリナは要るよ！　心の中で三回そう唱えると、黒いセリナはどっかに行ってくれたようだ。危ない危ない。そんな生命の危機を露知らず、トレイルさんはオーブをわざわざ持ってきてくれた。そういえば、トレイルさんも名前はレイモンドなんだよね。レイモンドって名前は人気があるのかなぁ？

「コージ、これが内で程よく手頃なオーブだよ。ほとんどがロックゴーレムから取れた奴ばかりだねぇ」

「へぇ～・・・」

「ギル」のグリップ部分に入るぐらいの大きさのオーブをいくつか見て見る。一個だけじゃなく何個か入れて、動力にするのも悪くないからね。いくつか目ぼしい物を選びだして値段を聞いてみると、全部で二百ゴールドで良いらしい。良かったこれなら予算内だ。

「トレイルさん、ありがとう。これで自分好みの武器が作れるよ～！」

「そうか、また模擬戦をしに来てくれよ、コージ。君の魔法を打ち破る為にわたしも色々研究しているのだからね」

「あ、そういう事なら今度一緒に魔法を作りませんか？　トレイルさんの風系統でも良いですし、球魔法を一緒に作るのでも良いんですけど」

「え、コージさんの魔法って作れるんですか？！」

「あ」

僕の魔法に凄く食いついてくるセリナ。そういえばセリナは魔法オタクだったよね・・・僕が魔法を作れそうってそう言えば言って無かったっけ・・・？

「そんな事ができるのを黙ってるコージさんは、ひどいです。私がどれだけコージさんの魔法を習得したいかご存知なくせに。じー・・・」

「ご、ごめんセリナ。じゃじゃあトレイルさんと一緒に作るっていうのは・・・」

「い、いやコージ、わたしは良いぞぉ。二人っきりで作ってから教えてくれたまえ！　わははは」

グリン。

トレイルさんを一睨みしてまたこちらへ視線を戻してくるセリナ。どんな顔で脅したかわかんないけどトレイルさんの怯え様が怖い。一体どんな顔をしたんだろう・・・

「じゃ、決まりですね。一緒に魔法作りましょうね、コージッ♪」

「うん、そうだね、そうしようね。あははー」

「ギル」を創れるのはどうやら夜中になりそうだ。うひー・・・

武器作成の素材集め（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！　凄い勢いで登録数が増えてビックリ嬉しいです。これからもがんばりますので宜しくお願いします！

普通、ゲームとかだと素材を求めて魔物を倒したり迷宮の奥へ行って掘ったりして集めるものなんですが、普通に買って終わりました。

なにそれ!?

いや、でも早く欲しいからつい欲しい色じゃなくてもＰ○ＰとかＤ○とか
買っちゃったりしますよね？　そんな感覚です。・・・例えが悪いや・・・

「んー・・・別に属性の呼びかけが無くてもいけるんだけど、どうしよう？」

「難しい所ですね。でも属性魔法と思わせた方が、興味を持たれなくて良いかなって思います」

「え、なんで？」

「だって基本魔法なのに、全ての属性の攻撃ができるってなったら誰だって覚えたいに決まってます。属性魔法という事にしておけば自分の属性の魔法にしか興味が無いですからね」

「なるほどねぇ。なら一応呼びかけを付けたままにしておこうか？」

「はい、分かりました」

というわけで、球魔法の習得完了なのです。正確には作成完了といいますか。とりあえず全属性の球魔法を作り、シュートとアローシュートまでは考えました。これで後は派生魔法を考えるだけで済みます。って言ってもコージが考えるんですけどね。私はそれのお手伝い。ですが、コージが呪文の語句を辞書も無しにすらすらと、言い出したのには驚きました。その中には私も知らない表現もあって、さらなる威力の増加や利便性も追及できるようになるでしょう。今まで細かく魔法の調整をしてきたつもりでしたが、コージのやってる事を見ると、とてもとても大雑把にしかできていなかったんだなぁと実感しました。なので、凄く楽しくなってきてしまいました。おかげで今まで、語句を探すのに苦労していて実現できなかった案が、コージのおかげで実現できそうな勢いなのですから。

しかも、コージと二人きりで勉強だなんて・・・

勉強に疲れて一緒に崩れるように居眠りしてしまい、気づけば抱き

しめあって寝てるとか！　密室に二人きりで居るとコージがムラムラしてきて、押し倒してくるとか?!

「きゃぁ～・・・」
「え、なに?　どうしたの?!」
「あ、いえいえ大丈夫ですよぉ。全然平気です、ばっちりオーケーです」
「そ、そう・・・良かったね。じゃあもう遅いし部屋に戻るね」

パタン・・・

でもどうしよう、まさかこんな事になるって思ってなかったから、あんまり色気のある下着じゃないんですよね。今日に限って。でも、暗くしておけばそんなのも分かりませんよね?　それに地味な感じも意外とコージの好みなのかもしれませんし。だってあれだけ派手な生徒会長さんに何の興味も示さないぐらいですから、きっとそうに違いありません。あぁ、やっと私にも春が来るんですね。お母さん見てますか、あなたの娘は今日、女になります。

「・・・あらっ?」

さてさて、ちょっと遅いけどせっかくだし「ギル」の作成に取り掛かるとしますか。まずはミスリルに魔力を込めて硬質化させていこうかな。ただでさえ魔力を帯びている金属なんだけども、さらに魔力を込めていく事でミスリルが収縮して密度が高くなっていき、込められる魔力の量も格段に上がるのだ。でも、魔力をこめる作業が

これまた繊細なので少しでも失敗するとミスリルが崩壊してしまう。なので少しずつ集中してやっていこう。

四分の一程、ミスリルを切り取り台の上に置いて魔力を少しずつ込めていく。徐々に魔力を込めていくとミスリルの表面が赤く変色する。

「おっとと」

赤くなるのは魔力を込めすぎだからだ。もう少し抑えていくと徐々に青い色に変わっていった。このまま青い色を維持すると少しずつミスリルが小さくなっていく筈だ。魔力を一定量ずーっと流し込む。寸分の狂いもなく、よどみなく魔力を流すのは中々に大変な作業である。どれぐらい流し込み続けただろうか。少しずつミスリルが小さくなってきている。しかも青い輝きはどんどん増しているのだ。

「焦るなぁ・・・焦るなよぉ・・・」

ミスリルが半分ぐらいまで小さくなれば完成だけど、ここでちょっとでもミスをすると全て水の泡だ。なので先程よりさらに慎重に、慎重に魔力を流し込んでいく。

バタンッ！

「コージ、こっそり戻るなんてひどいです！！！」

「あっ！？」

セリナが急に部屋に入って来たのに驚いてしまい、魔力を大量に流し込んでしまった。そのせいで、急速に青い輝きは失われていき、小さくはなったけど暗い色合いの変な物体になってしまった・・・

失敗だぁ・・・

「え？　え？！　わたし何か悪い事しちゃいました・・・か？」

がっくり落ち込む僕を見て、セリナがおろおろとして聞いてくる。悪いといえば悪いんだけども、あんまり責めても仕方ないからねぇ。

「ううん、ちょっと失敗しただけだから平気だよ。今集中してるから、僕が良いっていうまで誰も部屋に入って来れない様に見張っててくれる？」

「は、はい、分かりましたコージ。ごめんなさいです！」

くるりと回れ右をして、部屋から出て行くセリナ。これで誰にも邪魔されずに集中できそうだ。よぉし、今度は最初からさっきの要領でぐいぐいやって行こう。

「ようし、魔力の量はこれぐらいで・・・と」

今度は残り全てに魔力を込めていく。さっきは最初の方に魔力を込めすぎてた時間があるので、今度は最初から最後までしっかり同じ魔力を流し込んでいく。集中、集中。今度は誰かが入ってきたとしても、集中が途切れないようにミスリルだけを見つめてひたすら魔力を流し込んでいく。ミスリルが次第に青色に輝きはじめ、さらに青色が澄んだ青色の光を放つようになって、少しずつ縮んでいく。綺麗な輝きを放つがそれに心を奪われてはいけない。僕は何事にも捕らわれずに、魔力を流し込む事だけに集中する。

「・・・できた！　と思うんだけども・・・」

青銀色に輝く合金ができる予定だったんだけど、青ガラスって言っ

ても良い位透き通った物体が出来上がった。透かしてみるとやっぱり向こう側が見える・・・なんだこれ？　とりあえず、「ギル」のパーツに使えるように加工しようかな。作り方が間違ってないからきっとこれで充分使用に耐えうる物ができるはずだ。

「うおっ！？」

気づけば回りには、ミミに白夜にセリナが勢ぞろいしてた。ヒロコはすでに眠っている。

「真剣な表情の主もそそるもんじゃのぉ・・・」
「だねぇ。かっこいいよねぇ・・・」
「えぇ。ずっと見ていたいです」

人間、集中すればこんな事になってても気づかない物なんだね。さっきの失敗と違って、今回はもの凄く集中できていたから、あんな青くて綺麗なのができたって事なんだろう。そして、あの青く輝く素材は尋常じゃない物のようで「ギル」のパーツを設計図を見ながら加工しようとしたら、勝手に設計図通りの形に変わってくれたのだ！

このおかげで後はオーブを一緒に組み込んで「ギル」が完成できた。

「できた・・・」

一から自分の手で作り上げた「ギル」だ。やっぱり自分の手で作ると感動もひとしおだなぁ。性能は分かりきってるから、テストをしなくても大丈夫だけど動作チェックだけは必要だよね。

「凄く綺麗な武器だね、コージ。これってまだ作れる？」

「あ、わたしの杖もこれで作って欲しいです」

ミミとセリナがおねだりしてきた。確かにこれはずっと見ていたくなるぐらい、澄んだ青色をしていて触ると少しひんやりしていて、ずっと使ってきた武器みたいに手にしっくりと馴染み、離したくなくなる程なのだ。

さっき残り全部をこの合金に変えていたので、セリナとミミの武器を作ってもまだまだ余裕がある。だけど、壊れてしまったら流石にもう一つ同じものを作れるだけの在庫は無くなるだろうなぁ。どうしよっか。またミスリルを買ってきて加工すれば、できるかな?

「わかった、今度二人にもこの金属で作るよ。でも今日は遅いからまた明日ね」

「うん、わかった。ありがとうコージ。ちゅっ」

「ありがとです、ちゅっ」

お礼にちゅっとされちゃいました。どこにされたかは想像にお任せすると致します。

謎のレアメタル（後書き）

お気に入り登録や評価ありがとうございます！　おかげ様でアクセス数がすごい事になりました。ひゃっほぉーいです！

ここから光司君の強さがどうなるのでしょうか。それは後のお楽しみです！

無問題が問題だ

朝起きたら父ちゃんがまだ家に居た。昨日は碌に話ができなかったから丁度良いや。

「おはよう父さん。こっちには何時まで居れるの？」

「週末までは、ちょいとこっちに居座ってるぞ。何かあったのか？」

あぁ、週末まで居るのかぁ。父ちゃんがこっちに来てからの話とか聞きたいんだけど、仕事があるなら無理かなぁ？　魔法で無理やり元気にして話聞かせて貰おうかなぁ・・・

「なんだなんだ、難しい顔して。父ちゃんに出来る事なら、なんでもするぞ？」

「えっと、父さんがこっちに来てからどんな生活してたのかなぁって思ってさ。前に聞いたときは詳しく聞けなかったし。だから、そんな話聞かせて貰えたり・・・する？」

あれ？　なんで父ちゃん目を潤ませてるわけ・・・？

「おまえはなんちゅーか、可愛ええなぁぁあああっ！！！」

ごすっ！

あ、飛びついてきた父ちゃんに思わずカウンター食らわせちゃった・・・ていうか、飛び付くの禁止でしょ。

「父さん、落ち着いてよ。なんというか、父さんが居なくなってからの僕たちの話もしたいしさ。あ、別に責めてる訳じゃないからね。

ただ話がしたいなってだけなんだ」
「うーん、そういう事ならいつでもオッケーだぞ。どんとこい！」
「じゃあ、また帰ってきたら話しようね。約束だよ！」
「おう！　あ、そうだ光司。お前が作ってくれた魔石シートな、あれ随分便利らしくて大人気だぞ。なんでご褒美って訳じゃないんだけど、お金渡しとく」
「あ、そうなの？」

なんかこずかい貰うみたいで嬉しいなぁ。って考えてたら、えっとプラチナ貨が十枚・・・を十列・・・？　百プラチナを渡された。なんかこずかいって額じゃねぇえええええええええ!?

「と、とととととうちゃん？　なんでそんなに渡そうとするん？」
「光司こそ、なんで関西弁みたいになってるんだ？　あのシートは一応独占って形にさせて貰うから、それを含めての代金みたいなもんだ。まぁ、いずれは市場にも出回るだろうけどな。遠慮せずとっとけ」
「う、うん、分かった。ありがとう父ちゃん」

このお金はフレームや武器作りの為に大事にとっておこう。だけど、これで夜のお楽しみがまた一つ増えたや。むふー。

さぁ待ちに待った週末。今週は父ちゃんと話もできたし、武器もあれから予備も作れたし装備品も作れたしで、充実していた。父ちゃんが城へ単身赴任に行くのを見送ってから、いざ遺跡へ！　今日はセリナ達と五十階層まで潜ってキラーマシンを拿捕するのだ。普通

に倒しても良いんだけどね。武器も作れたし、アクセルも球魔法も作れたし。準備万端、いざ出発だ！

「なんで先輩が居るんです・・・？」

意気揚々と家を出た途端、待ち構えていた先輩に捕まった。想像してみて欲しい。ようやく新しい武器（おもちゃでもオケ）をさぁ使おうと家を出た途端に、天敵に捕まった気分を。先輩は一応、目標でもあるのでその人となりを知っておく事は、やぶさかでは無いのだけども・・・

「そりゃあ、あれだよ。愛の力？　うふっ」

うざっ！

くねっと可愛らしいと思われるポーズを取り、僕をメロメロにしようとしているみたいだけど、そんなのは母さんだけで満腹だっ！！！

「これから出掛けるんで、日を改めて貰えません？」
「だぁめ。一緒に遺跡に潜るのは決定事項なのよ？」
「お一人でどうぞ。一緒の遺跡に潜るのは別に構いませんよ」
「の、じゃなくて、に、なの！　コージ君は意地悪なんだから！」

うーん、この人ほんとどうしよう。あー、転移魔法使って一旦逃げようかなぁ。でもこの人って、転移先を認識できそうなんだよねぇ・・・無駄に才能があるって聞いたし。

「いや、ほんと辞めてくださいよ。今日は「家族」だけでお出かけなんですから」
「いずれ私も家族になるんだから、良いじゃない。ねっ？」
「それは絶対無いですから、さも決定してるみたいに言わないでく

ださい」
「もう、照れちゃってぇ。このこのぉ」
いらっ。
あー毒には毒で対抗しよう。そうしよう。
「お母さん、居る～？」
「なに光ちゃん。あらお客さんねいらっしゃい」
「あ、どうも初めまして、アイシャ＝エイジスと言います。失礼ですけど、コージ君のお姉さんですか？」
初見でそう見えるのはあながち間違いではない。だけど、それは死亡フラグだよ先輩。
「え、やっぱり？　そう見えるよね？　光司のお姉ちゃんだなんて、もう本当の事言うのね。あなた、アイシャちゃん？　ちょっとこっち来なさいよ。見所あるわぁ～♪」
「え、あのっ！？　まって、えっと！？」
「まぁまぁまぁまぁ遠慮せずに、どうぞどうぞぉ～」
「あぁあぁぁぁ、お邪魔しまぁす」
さすがウザイ筆頭。僕の思惑どおり頑張ってくれた。母さん大好き！　こう心の中で思っておけば、母さんはご機嫌だから感謝の気持ちを伝えておこう。うん。先輩、母さんの相手頑張ってねっ♪
「さぁ、邪魔者は片付けた！　行こう、皆！」
「「「「はい」」」」
うん良い返事だ。

二十階層を超え、まだまだ下を目指す僕たち。今日はキラーマシンを目指すので五十階層をひたすら目指して降りて行く。なんというか、僕達が殺気だっているのだろうか。二十階層まで、まるで敵と遭遇しなかった。これって、また強敵が出てくるパターンかな？なんというか、ワンパターンというか。一応警戒しておこう。

「みんな。ここまで敵と遭わないのはおかしい。こういう場合はなんか階層に見合わない敵が出てくる確率が今の所、百パーセントなんだ。だから、ちょっと気をつけて置いた方が良いと思う」

「わしより、強い奴が出てくると申すか？」

「うーん、そう言われてみればそれは無いような気がするなぁ・・・

何かあったのかなぁ？」

僕の思考がひねくれすぎてるのだろうか？　二度ある事は三度あるって言うし、また強い奴が来ると良いなぁって期待している面もあるんだけどもね。今日のヒロコはいつもより静かなのも気になるし。・・・あれ？　そういえば最近、ヒロコって目立たないというか動きが悪いというか。調子がわるいのかなぁ？　あとで聞いてみよう。しかし、遺跡を降りて行って分かったんだけど、五十階層まで降りるのって大変だ。二十階層が目標なら、ここから探索すれば良いんだけど、まだ半分も来てないんだもんなぁ。エレベーターとか無いんだろうか？　いや、エレベータなんかあったら深い所から強い奴が溢れて出て来そうだから、まっさきに壊されてるかもしれないねぇ。だけど、深い所まで潜っていって帰ってくるのって、凄く気力がいるんだねぇ。

「誰か、モンスターハウスでも作ってしまってるのかもしれませんね」

「その可能性もあるかぁ。だけど、それならもう少しぐらい敵が居そうなもんなんだけどなぁ。根こそぎ引っ張るとか逆に難しそうだし」

モンスターハウスとは一箇所に魔物がひしめきあうほど、引っ張ってしまう事だ。トレインって言った方が分かり易いかもしれない。この世界にはトレインが無いから、セリナ達には分からないだろうけども。結構、魔物から逃げ回ってどえらい数の魔物を引っ張りまわしている冒険者は居る。それ専門の冒険者が五階層毎に居たりするらしい。強い人なら低い階層の魔物なんてどうって事ないんだろうね、きっと。

「でも、モンスターが居ないのは進むのに便利で良いじゃないですか。先を急ぎましょ」

「そうだね、どんどん行こうか」

かくして、今日は何も問題がなく進んで行く。問題が無いのが問題っていうか。せっかく作った武器達の活躍の場面がまったくないって言うのは問題だよ・・・とほほ。

無問題が問題だ（後書き）

せっかく武器作ったのに・・・
なぜか待ち構えている先輩。だけど報われない。南無。

帯に短しタスキに長し

三十五階層。ここでようやく敵が現れた。しかも、警備ロボットみたいなクモみたいな形をしたメカだ。背中にマジックアローが積んであるので、それで攻撃してくるのだろう。などと冷静に観察してたんだけど・・・

「わんさか出てくるね、こいつ」

「ギル」を使うまでも無く、パンチやキックで破壊していく。オークよりはある意味強いんだろうけど、少し固いだけで特に危険な相手じゃない。ミミも蹴りだけで、どんどん破壊していく。だけど、それを上回る数が次から次へとやってくる。ここまで多いとなると「ギル」を使って一掃してみよっかな？

「ミミ、僕の後ろに回って！　「ギル」を使うよ」

こくりとわずかに頷き素早く僕の後方へ移動するミミ。そして、追撃できないように、ロボットを蹴り飛ばしておくのも忘れない。

よし、モードを「光」にして撃ち払おう。Ｂボタン連打で、後はＡボタンを押し込むと。

バシュゥウウウウウウウウウウウウウウウ！

迸る閃光！　レーザーみたいな光線が出る魔法だったはずなんだけど、極太のレーザーソードみたいな事になってるよ！？　しかも、片っ端からロボットを溶かしていってるし！　威力がちょっとヤバイよ、これっ！

「連射モードでこれって事は、剣にするとどうなるんだ？」

目の前に広がるぐっちゃりと溶けて固まっていくロボットの塊をみながら、Ａボタンをスライドさせた。

ブォン！

一見、普通のレーザーブレードっぽく見えるけど思ってたより若干太い。威力はどんなもんなんだろ？　よいしょっと。

ジュッ！

ロボットの塊を乗り越えて、襲い掛かってきたクモメカに「ギル」の切っ先を向けた。たったそれだけで、メカは蒸発して消えてしまった。抵抗は何も無い。光属性の魔法は初めて使うんだけど、こんなに危ない魔法だって知らなかった。迂闊に人に向かって使わなくてよかったぁ・・・

とりあえず、モードを「雷」にセット。これなら、電子部品だけ焼け切って素材が取れるはず。スライドを戻してボタンを押し込むと。

ガガーーンッ！

紫電が轟音を立てて遺跡を駆け抜けた。なんか威力がおかしいぞ・・・だってクモメカがまた溶けちゃったんだもん。なんというかあのレアメタルで作ったせいで、威力が半端無く増幅されてる気がしてならない。だけど、お願いだからもっと抑えて欲しい。僕がそう願うと「ギル」が一瞬光ったように見えた。お願いを聞いてくれるん

だろうか。

「えい」

バリバリバリッ！

あ、良かった。これでいつもと同じ威力だよ。威力を調整する装置なんか付けて無かったから、お願いするだけで威力調整できて助かった。

「コージ、なんか「ギル」が強くなりすぎてるねぇ？」

「うん、びっくりしたよ。でも、お願いしたら威力が調整できるから便利になった！」

「へぇ・・・そんな事できるんだぁ・・・」

気づけば、「ギル」の試し撃ちでクモメカを一掃していた。今はお願いで調整するのでも良いけど、やっぱり調整できるように何か考えないと駄目だね。お願いで調整とか曖昧すぎるし。それに誤爆しちゃったら凄く怖い。

あれ？　ちかちかと光っているクモメカの残骸がある。応援を呼んでるんだろうか？

ギュッィイィイイイイィイィイイッン・・・・

「でりゃぁ！」

通路の奥から聞き覚えのあるローラー音が聞こえてきたのでキラーマシンだと確信し、奥から走ってきた所を胴体を狙って蹴り飛ばす。少しよろめいたキラーマシンは、腕のマシンガンを使わずに剣を突

きつけてきた！　だけど、その攻撃は予想の範囲内だったので僕は紙一重で避け「光」モードの剣、レーザーブレードを使ってキラーマシンの四肢と頭を狙って振り回す。

ゴトゴトトンッ！

「うん、切れ味抜群だね。これなら綺麗に切れてるはずだから売れそうなパーツが多く取れそうだ」

「コージずるい。出てきてすぐ倒しちゃったら何もする事がなーい！」

「ごめんごめん。でも、前にキラーマシンと戦った時は僕はほとんど何もしてなかったしさ。せっかくだから試してみたかったんだよ」

やっぱりというか、思い通りというか僕はキラーマシンでも楽に倒せた。今ならマシンガンでも掻い潜って無傷で済みそうだ。とりあえず、拿捕とは行かなかったけども四肢と頭を切断して動けなくなったキラーマシンは指輪に保管しておく。リックさんの所に持っていけば結構な値段で買い取ってくれるだろう。

「でも、さっきのちっちゃいメカがキラーマシンを呼び寄せたみたいだねぇ。まだ三十五階層なのにあれだけすぐに来るって事は、どこかに秘密の通路みたいのがあるのかなぁ？」

「そういえばそうだね。キラーマシンって五十階層から出てくるって言ってたのに、ここで出てきたもんね。クモメカも確かにちかちか光ってたから、それが関係してるかも」

さっきちかちかしてたクモメカもついでだし回収しておこう。

「ほかにも何か良さげなメカ居ないかなぁ？　せっかくだし五十階層まで行ってみる？」

「目的のキラーマシンは一台確保したんでしたら、別に無理しなくても良いんじゃないですか？　また戻るのも面倒くさいですし」
「うーん、でもどんなメカ敵が居るか気になるんだよねぇ・・・駄目？」

セリナの口から面倒くさいって聞くとは思わなかったけど、せっかくここまで来たんだし是非いろんな種類のメカを見て倒して持って帰りたい！

「のぉ主。こんな小物ばかり倒しても楽しくないのじゃ。さっきの小物の群れもわしならば綺麗に倒したぞ？」
「じゃあ白夜も五十階層まで行くの賛成してくれる？」
「ノーじゃ。後少しばかり潜った程度で、歯応えのあるメカが出るとは思えん。それならば、町に戻って甘くて冷たくておいしいアイスを食べたいのじゃ！」

くそぉ。白夜なら賛成してくれると思ったんだけど甘かった。遺跡実習で魔物をまとめて倒してストレス発散しているせいか、最近すこし丸くなってきたんだよね。良い事だけども、こういう時は範囲殲滅、ジェノサイドの申し子みたいな白夜に戻ってきて欲しかった。でも、今のままのほうが絶対良いよね。仕方ない諦めるか。

「じゃあ、もどろっか。僕も「ギル」の調整があるしね。転移魔法で・・・帰れないんだよね、しっかり戻るとしますか」
「はい、わかりました。帰ったらアイスクリームですね」
「ミミはミント味ね」
「わしはバニラじゃ、五つ重ねるぞ」
「ぐぅ・・・」

一人を除いて既にアイスを食べる気満々だった。まぁ焦っても仕方

ないか。深呼吸、深呼吸っと。

未熟な身ながら師匠と呼ばれる事、半年。いまだにその呼称は慣れない。だが、コージに己の技を伝える事に否やは無い。あの男は意外と根性があり見所がある。へらへらとして常に笑って誤魔化そうとしている軟弱な奴だと最初は見くびっていたが、ハルト達が班を組むだけの事はあって、恐ろしい程の強さを秘めている。

そして、何より凄いと感じたのはコージの成長するスピードだ。外見は特に変わりはしないのに、身体能力は最初に比べて格段に上がってきている。俺の訓練の賜物と言えばそうなんだが、それにしても驚くべき成長だった。俺が幼少の頃から鍛えてきた魔法の技はもとより、最近になってようやく形になってきた魔格闘についても、どんどんと吸収していく。とはいえ基本となる体力や身体の動かし方については、ようやく素人の域を抜け出した程度なので、まだまだ教え、鍛えるべき余地がある。あいつ自身、不思議な魔法や技を使うというのに、ほかの人間からも色々と教わっているようだ。

「しかし、気づけば慣らされるもんだ」

師匠と呼ばれコージを鍛えていく内に、毎日あいつの為の訓練メニューを考えるようになってしまった。こうすればもっと強くなるとか、教えるにはまだ早いが型を見せてモチベーションをアップさせようとか、身体能力の強化をさらに厳しいものにしようとか。自分の訓練にも勿論役に立つのだが、それは言い訳だ。メニューを見ればコージにもっとも効率が良いようになっているからだ。

「だけど、師匠としてまだまだ負けてやる訳にはいかんなあ」

今でも五本中二本取られる程の腕になってきているコージ。油断しているとあっという間に抜かれてしまいそうだ。それだけはなんとしても阻止したい。なんといっても、師匠面をするのは中々に気分が良いしな。

「・・・なんてな」

そんな理由はでっち上げで、コージと一緒に己を鍛える時間が好ましいのだ。だからこそ、そんな時間をできる限り引き伸ばしたいと考えてしまう。

「俺を追い抜け。そしてもっと強くなってくれ」

いつか俺もおまえと肩を並べて戦う日が来るように、俺も強くなろう

帯に短しタスキに長し（後書き）

すいません、遅くなりました。非常に眠くてやばいです。

明日は一話だけの更新になる・・・かも。

レーザーブレード！

ADD

「もうね、いい加減諦めていい頃じゃないでしょうか、先輩」
「ううん、むしろ引けないの。これだけ粘って何も無かったなんて女の恥だものっ」

いや、先輩ほど顔立ちが整って成績優秀な人ならそれぐらい気にする人なんて居ないでしょう。だから、一年坊主に構うのは止めましょう。

「えぇっ!?　わたしを捨てちゃうの？　そうなの？　ワンモアチャンス!!!」
「捨てるも何も拾ってません。そしてチャンスは絶対ありません」
「そうよね、すでに見も心も繋がってる二人だもんね。うふ」
「今の言葉に、どういう思考回路でその台詞につながっちゃうの・・・？」

本当に疲れる！　いくらすっごい美人の先輩だからといって、毎日こうやって相手するのは正直面倒くさい。まぁセリナ達のおかげで美人に慣れてるからこそ、こうやって冷たくあしらえるんだけどね。もしセリナ達が居なかったら、向こうの思いのままで僕は簡単におもちゃにされてたんだろうなぁ、と簡単に想像がつく。

「そこの二人待ちなさい。まさかとは思いますが、不順異性交遊などしていませんわね？」

そういって僕達を引き止めたのは、緑色のリボンの三年生だ。美しくなびいている金髪は毛先の一本一本まで整えられている。卵形の頭に綺麗に整った切れ長で少したれ目がかった青い瞳に、すっと綺

麗に通った鼻筋。すこし厚めの色気のある唇は、ぷるぷると瑞々しさを保ち少しだけ開いていて、男たちを虜にせずにはいられない。

なんだこの色気たっぷりの綺麗なお姉さんは・・・？　むしろあんたがそういう事をしてるんじゃないかと問い質したい！

「どうなのです？　はっきり答えなさい」

「あら。していたらまた変な事をするんですか、レインボー先輩」

「あなたでしたのね、生徒会長さん。最近、男に入れ込んでると聞いてたのですが、噂は本当だったのですね」

「男女が愛し合うのは自然の摂理。私にも愛する男性が居ても可笑しくありませんよ、レインボー先輩」

にまぁといやらしい笑みを浮かべる先輩。あぁどっちも先輩だから生徒会長だね。うん。

「生徒会長自らそんな事でどうしますか。学園の風紀が乱れます、風紀が」

「風紀委員長だからといって、生徒の間に燃え広がる愛の炎は消せません！　負けませんよ先輩！」

あーれ・・・？　こんな見た目なのに風紀委員長なの？　むしろ乱す人じゃないの？？？　だってこんな人が傍にいたら、ふつう絶対落ち着かなくなるって。・・・男なら。

「えっともう行って良いですか？　生徒会長に付き纏われて困ってたんです」

「えぇ～コージ君、つめたい～！」

あぁもう！　さり気なく僕の名前をアピールしやがった、あなどれ

ん人だ。

「つめたくて結構です。それでは！」

「待ちなさい。あなたのクラスと名前を教えなさい。わたくしは風紀委員長のレイチェル＝レインボーです」

興味を持たれちゃったかぁ、とほほ。生徒会長め・・・

「コージ＝H＝アースです。一年の赤組です。行っていいですか？」

「・・・覚えましたわ。あまり学園内ではしゃがないように」

「はい。失礼します」

とだけ言って、さっさとその場から逃げる。変な人に目をつけられちゃったなぁ・・・生徒会長のせいで！　もうぉおぅうぅうう！

「ほうか。ついに風紀委員にまで目を付けられてもうたか。まだ一年やっちゅうのに楽しい事になっとんなぁ、自分」

もぐもぐとパンを齧りながら、人事のように言ってのけるハルト。君の愛しの生徒会長も一緒に目を付けられたんだけどもね。好きならさっさと、かっさらって行って欲しい。

「ぶほっ。おまえ人には過激な事いうなぁ・・・自分の事は棚に上げてよく言うわ」

「それよりもさ、どうすれば風紀委員の目から逃れられるかなぁ・・・？」

「おとなしゅうにしとれば、問題あれへん。それか、生徒会長が来たら全力で振り切るぐらいしとったら平気なんちゃうか？」
「あの無駄に色々凄い生徒会長だよ。振り切れると思う？」
「すまんかった。そやけどおまえはその内、ベルスイートにも目ぇ付けられそうで怖いわ」
「なにそれ？　おいしいの？」
「あれだけ目立つ集団やのに、おまえは興味無いんやなぁ。生徒の中でも教師に次ぐ力を持つ人の集団や。たまに教師の替わりに授業を受け持ったりするしな。勿論、優秀な人材でないとベルスイートには入る事はできひんけどな」
「ふぅん。むしろハルト達のほうが呼ばれそうじゃない？」
「どうやろな。生徒会長はベルスイートを蹴ったっていうのは聞いたけどな」
「自由だねぇ、あの人は・・・」
まったく生徒会長はため息ばっかり出てくるよ、ほんと。

今日の魔法の授業は術式と詠唱について細かく解説してくれた。この世界には見えないけれど精霊が居て、常にあたりをさまよっているらしい。ヒロコもだいたいそんな感じだよねぇ。見えてるけども。それで、呪文の呼びかけに応じる際に、術式に通っている魔力のとおり具合を見て、力を貸すか決めるそうだ。まぁ、だいたいは魔力が通ってさえすれば、力を貸してくれるのだが、まれに術式に通っている魔力がお粗末すぎて発動しない事があるらしい。そして詠唱の内容を聞いてだいたいの内容を把握して、詠唱者のイメージを受けてそれに近い内容を発動させるそうだ。でもほとんどの場合が詠唱の内容だそうだ。

だけど、アイテムでの発動の場合は術式がメインとなる。だいたいが術式と詠唱語句が掘り込まれているんだけど、この場合術式に綺麗に魔力が流れるようにしていないと精霊たちの興味を引く事ができずに、詠唱語句をなぞって魔法を発動をさせてくれないそうだ。セリナが使う無詠唱というか身振り詠唱もこれに近いそうだ。

「このように術式は非常に大事なものなのです。詠唱とイメージさえしっかりしていれば魔法は発動しますが、やっぱり術式をおろそかにした魔法はそれなりの力しか発揮できませんので、注意してください。強引にイメージだけで精霊をひっぱっていく人も中には居ますが、あまり推奨できません。あくまで丁寧に精霊にお願いをして、力を貸して貰うという事を忘れずに魔法を使ってください」

なるほど。魔法は結局精霊にお願いするって事なんだね。自分の魔力でなんでも実現できているんだと思ってた。あれ？　でも基本魔法はどうなるの？

「はい、基本魔法はどうなんだ？　と思いつかなかった方は居ますか？　駄目ですよぉ、ここは疑問に思う所ですからね。で、基本魔法の場合の呼びかけは精霊に呼びかけるものでは在りません。これは回復魔法や祝福魔法にも言える事です。対象が物品であったり魔力であったり、体力だったりします。何にも呼びかけない事もありますが、その場合は魔力に呼びかけるのを省略してると考えてください。なんにせよ、呼びかけた物に力を借りるという事をしっかり認識した上で魔法を行使してくださいね」

結局は力を借りたい物に呼びかけるって事なのね。なるほど～。わかってたようで、ちゃんと理解してなかった。これからはそういった事も意識して魔法を使うようにしよう。

ＡＤＤ（後書き）

少し短いです。

生徒会長が目立つから、自然と光司くんも目立ちます。なので色んな人から
注目を浴びているのです。

兆候

ロバスの古代遺跡。古い昔から存在する遺跡、というだけで遺跡の内部は古びている訳ではない。むしろ、綺麗に補修されたりしているので遺跡というより施設といったほうがしっくりくる人間のほうが多いだろう。現に遺跡内でモンスターを倒して放置していたとしても、数日早ければ数時間の内に綺麗に片付けられ、まるで何も無かったかのように元通りになっているのだ。遺跡内部に何か状態を保つ魔法か、そういった機械が周回しているかは未だに確認できていないのだが、そういうものだという事実でもって、人々に受け入れられている。

だが、最近になって遺跡内部で異変が起こりつつあった。

「今、オーガを処理できる人間は何人残っている」

そう問いただしたのは、背の高いがっちりとした体格の男だ。灰色の髪を無造作に後ろに流し、一重まぶたが涼しげにすがめられた、男らしい大きな口をしている。ネクタイの色が緑色の所から学園の三年生だと分かる。

「現在、即座に動ける人間が十四名です。三十階層まで行ってる連中が戻ってくれれば全部で四十四名になりますが、いかがしますか？」

そう応えたのは灰色の髪の男と比べると細身の男だ。背格好は中肉中背で、あまり目立たない顔立ちをしている。この男も同じく三年生だ。

「少ないな・・・三十階層にまわし過ぎじゃないのか？」

「さすがにキラーマシン相手ですので、むしろ少ないかと。敵が多すぎるのですよ」
「だが、それでもカバー仕切れていないのが事実だ」
淡々と事実を述べその顔には感情は浮かばない。今ある戦力でどう打破するべきかその頭の中では考えられているのであろう。
「止めてくださいよ。今の二人体制でも厳しいんですから、一人で行ける人間も確かにいますが、行けない方が遥かに多いんですからね。ある意味訓練も兼ねてるので最低でも二人で行動する事を崩すのは駄目です」
「では、俺が・・・」
「それはもっと駄目です。他の隊員の成長に悪影響です。それなら、一年生の中からも選抜していく方がよっぽど建設的ですね」
「ふむ・・・」
一年生という言葉で動きを止める灰色の髪の男。
「サカキ隊長？　まさか本気で一年生を引き込むつもりで？」
「あぁ、俺だって一年の頃からやってきたんだ。今の一年ができないという事はあるまい」
その言葉に天を仰ぐ細身の男。
「サカキ隊長を基準に考えられては困ります。散々、天才っていわれて来たでしょう？」
「なら天才を探すだけだ。問題ない。後は任せる」
「あ、ちょっと隊長！　討伐はどうするんですか！？」
細身の男の絶叫は、ひらひらっと振られた手だけが応えてくれた。

曰く、お前がやれと。

「はぁ、仕様が無いですねぇ。できる事からやっていくとしますかね」

そういって、ため息を吐きつつ人員の手配を考えるのであった。

その人がやってきたのは突然だった。魔法の講義が終わり、帰宅の準備をしている途中に大きな身体をした三年生が人を探してやってきた。

「“ハルトバルト”は居るか？　ついでに“ハルトバルト”と組んでいる遺跡実習の班の人間も来て欲しい」

その姿と声にざわめくクラスメイト達。“サカキ様？”とか“ベルスイートの隊長さんだろ？　なんの用だろ？”などと色々言っている。みんな知ってる有名人なのねこの人。

「ラインハルト＝ヘイローです。何か御用ですかサカキ先輩」

「おまえがハルトの方か。話は全員集まってからにする。とりあえず、班の人間を全員集めて貰えるか？」

「分かりました」

て事は僕も行かなきゃ。なんというか、ぶっきらぼうでちょっと怖い感じの先輩だなぁ。なのでハルトに呼ばれる前に、ささっと近づいて行く。

「これで全員か。じゃあ付いて来い」

そういって、さっさと背を向けいずこかへ歩いていくサカキ先輩。その背中は誰も付いて来ないとは微塵も疑っていない態度だった。そうして向かった先は、職員室の隣にあるベルスイート本部と書かれたプレートが掛かっている部屋だった。あ、ベルスイートの人なんだこの人。昼間にハルトに言われた集団なのね。

「隊長・・・、本当に連れて来たんですね。本気ですか？」

がらっと扉を開くと、中に居た人が即座にそう問い質してきた。そんな事を言われては部屋に入るのに躊躇しちゃうよ。どうしよう。

「いいから入れ、一年坊。エイジは黙って人の配置を考えておけ」

「あ、ひどい。分かりましたよ、もう。人使い荒すぎますよ」

あ、口でぶんぶん言ってる。なかなかに愉快な先輩なようだった。

「適当に座ってくれ。俺はロウ＝サカキ、ベルスイートの隊長をしている。ベルスイートの行動として、生徒への指導や制裁、遺跡内部での揉め事を解決などしている。今回、お前たちを呼んだのは、遺跡内部での揉め事について手を貸して欲しいからだ」

て言われても具体的に何をするんだろ？

「揉め事って言っても、何をするんでしょうか？」

背筋をぴんと伸ばし、関西弁も無くなったハルトが先輩にそう尋ねる。

「最近、浅い階層においてレベルの見合わない魔物が発生するようになったのは知っているか？」
「えぇ、何度か遭遇もしてますし、倒してもいます。でもたまにある事だと伺ってますが」
「それが、俺達が昼夜を問わずこの半年間ずっと討伐していたとしても、納得できるか？」
「え？」

どうゆう事？　ずっと倒しているのに、倒し漏れが出てるって事なのかな？　でも、遺跡も広いんだからそういう事もあるんじゃないの？　と考えてると回りはそう思っていないようで、一様に驚いた顔をしている。あ、尋常じゃない事態なんだ。

「しかも、三十階層付近までキラーマシンが普通に出てくるようになっている。何かに追い立てられているかのように」
「でも、最近も三十階層まで行ったんですが、キラーマシンには会わなかったですよ？」
「それは俺達が破壊しているからだ。さすがにあのデカブツを見逃すわけに行かんのでな。かなりの人員を割いて警戒している」

なんか、遺跡が大変な事になってるって事でいいのかな。だから、僕たちも浅い階層に出てくる強めの敵を倒してこいっていう事？

「ここまで言えば、俺が何を言いたいか分かるだろう。人が足りなくなっている浅い階層でお前たちにも活躍して貰いたい。できるならキラーマシンの処理もだ」

そういって、僕達を一人ひとり見つめてくる。このメンバーならキラーマシンも行けるかな？　最悪、僕一人だけでも倒せるから問題ないんだけどね。でも、みんなで倒して成長して行くほうが、今後

さらに強い敵が出てきても対処できるようになる筈だ。

「では早速、今から行って貰いたい。準備は良いか？」

え、めっちゃ早いなこの人。ていうかまだ返事してないんだけど、沈黙は肯定って受け取ったんだろうか。なんというか断る気なんて無いけど、強引な人だなぁ～。まあ装備はいつでも出せるから準備オッケーだけどもね。

「少しだけ準備する時間を貰えますか。さすがに装備はロッカーにあるので」

「分かった、では準備が整い次第遺跡へ潜って貰いたい。入り口には話を通しておくので、なるべく早めに行ってこい。分かったな」

「了解です」

あまりされる事のない命令口調に、思わず即座に返事をする僕達。そうこうしていると、エイジと言われた先輩がやってきた。

「じゃ、決まりだね。僕はエイジ＝アルディス、よろしく。君たちはこれからベルスイートの一員として動いて貰うので、この腕章を身につけておいてくれたまえ」

「え！　わいらもベルスイートの一員なんですか！？」

素が出てるよハルト。めっちゃ驚いているようだ・・・って他のみんなもすごく驚いているというか喜んでいる。

「当然だよ、だけどベルスイートの一員となったからには、半端な行動をすれば即、隊規に沿って処罰するから心するようにね」

「はいっ、分かりました！」

「あ、すいません！」

一人だけ違う返事をした僕にみんなこっちを見る。そんなびっくりした顔しなくて良いじゃないか・・・

「えっと、僕はまだそのベルスイートに入らなくても良いですか？　正直、ベルスイートの事をほとんど知らないので、入っていいか良く分からないのです。あ、魔物の討伐については手伝うのは問題ないんですけども！」

「ほう。ベルスイートはおまえの眼鏡に適わないと、そう言うのか？」

サカキ先輩が僕をじっと見つめて、静かに尋ねてきた。なんというかプレッシャーを掛けてきてるみたいだけども、無理やり入れられるとかは勘弁して欲しいんだよねぇ。それにみんなの態度見る限り、ベルスイートに入ると凄く羨ましがられるみたいだし。自分がそういう所に相応しいかどうかも分からないしね。

「まぁ、そんなところです。生意気いってすみません」

そう言って言葉を濁す。だけど、嘘をついても仕方ないもんねぇ？　あ、みんな青ざめた顔してる。そんなにヤバい事を言っちゃったのかな、僕・・・

「ふっ、魔物を倒してくれるなら特に問題ない。だが、遺跡に潜る間だけでもその腕章は着けて置いてくれ。でないと、遺跡で教師に出会った場合連れ戻されるからな」

「そういう事なら了解です。わがままを聞いてくださってありがとうございます」

「それぐらい、良い。働きに期待している」

「分かりました、サカキ先輩」

戦果なら存分に期待して欲しい。根こそぎ倒しきるつもりで、やりますからね。ふふふ。

兆候（後書き）

今日も夜の投稿ができました。

お気に入り登録や評価ありがとうございます。お陰様でランキングの方も百位以内にしっかり残っているので、すごく嬉しいです。ぐふふ。

明日もがんばります！

ちょっと本気！

そういえば、新調した武器ってトリックスターの皆にまだ見せて無かったよね。今回が初お披露目って事になるかな。でも、素材が違うだけで結局使ってるのは一緒なんだけどもね。ふひひ。

「なぁコージ、おまえあれで良かったんか？」

納得いかないって風な口調でハルトがそう尋ねてくる。

「うん、別に入れなくても良いし。ハルト達を見てると良い所なんだろうなぁって思うんだけど、やっぱり自分で入りたいなぁって思って入らないと駄目じゃないかなって」

だって今日まで名前すら知らなかった団体だから、他に入りたい人からすればこんな失礼な事は無いよね？

「そない言うたかて、入ってしもうたらそれに見合うぐらいの人間になれば、それでええんちゃうんか？」

「んー、僕の努力したい方向性と違ったら、どうやっても見合う人間になれないし。それにまだまだ努力する事があるから、正直ベルスイートに入ってその活動に割く時間は無いんだよねぇ」

師匠の技をまだまだ盗まないとね。盗んでさらに改良していかないと、本当の意味で弟子になったとは言えないもんね。ようやく魔法の身体能力アップ無しで二本取れるようになってきたんだから、今やめるのは勿体無い！

「コージがそう言うなら、わしがとやかく言うもんやないか。ほな、

そういう事で」
「うん。じゃあ行こうか。セシリア達も準備できてるだろうし」
「おう。行くぞ」

遺跡に入る装備を整え学園の入り口に向かう。そうしてしばらく待っているとセシリアとエリーがほどなくやってきた。

「お待たせ。行きましょ」

セシリアのその言葉を合図に遺跡の入り口へと向かった。

遺跡の入り口で腕章を見せると、門番の人は即座に遺跡に通してくれた。夜から朝にかけては魔物の行動も活発化するので、冒険者ギルドに登録しているか、こういったある程度の実力を認められている者でもないとこの時間に入るのは難しいのだ。

「さて、隊長が言うには十五階層までに居るオーガを殲滅せぇっちゅう事やけど・・・」
「僕たちも遭遇した辺りに行ってみる？　闇雲に動いても探しきれないだろうし」

こんな時こそ魔物探しのアイテムの出番だ。一応、こないだ潜った時にオーガの素材も確保しているので、探すのは簡単だ。素材をセットしてっと。

「コージ、なんだそれは？　見た事のないマジックアイテムだが・・・」

「凄い便利グッズだよ。これでオーガを即探せるの」
「そんなマジックアイテムがあるのか?!」
「探したい魔物の素材は要るから、素材が無い魔物は探せないから不便なんだけどね」
「いやいやそんな事ないぞ、充分便利だ。遺跡の中で狙った魔物を探せるんだから、効率がかなり上がる」
「そないな便利なもん、なんで今まで出さへんかったんや?」
「色々事情があるのですよ、事情が」

自分で作れるか否かっていう事情がね。ようやく今まで作って来たアイテムを自作できるようになってきたので、こうやって使えるようになったって訳なのだ。言わないけどね。

「じゃあ使い方を教えてくれる? 交代で使って、戦闘と探索の人間を分けれるようにしましょ。たぶん、そっちの方が効率良さそうですし」
「なるほど。じゃあ使い方を教えるね」

と言っても、使い方は簡単だ。素材を入れてスイッチポン。あとは画面の表示で高低差や距離、数などが分かるようになっているから、その説明だけで簡単に使いこなせるようになるだろう。

「うん分かった。簡単」

エリーが真っ先に理解した。他の面々も少し時間が掛かったけど全員が理解できた。

「じゃあ、早速殲滅しに行くとしますか」

まずは五階層目指してまっしぐらなのです。って、オーガがそんな

浅い所に居るのはいかんのです！！！

「じゃあ、こいつは僕がやっちゃうよ？」
「コージ、任せたよ～」

返事をしてくれたのはレイだけで、後はみんな手を振るだけだった。
オーガは結局の所、大増殖しているのか三十匹以上紛れ込んでいた。
あんなでかい図体して、どっから入り込んだんだろうか不思議だ。
まぁこいつで最後だし、さくっと倒しちゃおう。

モードは「光」のままで剣を出す。最初の内はいろいろ試してみたけど、「光」が今回一番楽だったのだ。レーザーブレードを出している僕を見ても、なお組し易い獲物だと勘違いしているオーガは、威圧するかのように一歩一歩、地響きを立てるようにして向かってきている。

どさっ！　どさどさっ！

瞬時に間合いを詰め、足を切断。即座に手を返し、飛び上がって縦に真っ二つに斬った後は、再生できないように細切れにする。レーザーブレードは肉を焼き切る程の高温だから返り血の心配をしなくて良い点は凄い便利だ。

「ほい、終了。皆おつかれー！　十五階層までのオーガはこれで全部だよ～」
「・・・おー」

時間にして一時間。レーダーに映る敵影を片っ端から片付けていった。同時に二体三体は当たり前で、一匹を倒す辺りの時間は三十秒を切っていると思う。でもほとんどが移動時間だったのでこの一時間ずっと走りっぱなしだったのだ。エリーなんかは途中から魔法を使って移動していた。

「コージってこんなにタフでした・・・？」

「いや、わしらとそないに変わらんかったはずやけども・・・」

「最近のコージは、ヴァイスと鍛えまくってるみたいだからな。伸び盛りなのかもしれん」

「あの武器も凄いよね。色々な属性の魔法を付与できるのに、詠唱要らずなんて反則だよ」

「その上、不思議な魔法も使える。あれは覚えたい・・・」

なんか、皆こそこそと話し合ってる。僕にだけオーガの処理を任せてサボるとか！　まったくもう、最初はみんな乗り気だったのに飽きてきたから、僕に押し付けたんだね。これぐらいで疲れてるみたいに見えたから、おかしいと思ってたんだ。

「こらーーー！　さぼってないで、ちゃっちゃと帰るよ！　駆け足！」

そういって、みんなをぐいぐい押して行く。もう充分休んだから平気だよね？

「ちょ、まだしんどいってコージ！　やめぃ」

「またまたー、演技はもういいよハルト！　飽きたからって僕に押し付けたのは分かってるんだからね！　さぁ帰るよー！」

「あ、コージ待って、まだ膝がガクガクなの・・・」

「聞こえなーい！」

セシリアのちょっと情けない悲鳴が聞こえるけども、そこまで演技しなくても良いのにと思う。どっちにしても今日の日課をこなさないと駄目だから、早く帰らないとね！　討伐証明部位を先輩に渡して、すぐに帰ろうっと！

「意外、だね。一年がここまでやれるとは正直思ってなかったよ。隊長はどう？」

たったの二時間。

実際に遺跡に潜っていたのは、さらに短い時間だろう。それだけで、この大量のオーガを倒してきたと言う。本当ならば恐ろしい実力を持った一年坊だ。“ハルトバルト”という名前で有名であり、半年前にオーガに遭遇した際も誰一人欠ける事なく倒したあの面子はやはり当たりだったようだ。ほぼ全員がへとへとになるまで働いてきたのは、ベルスイートに入って良い所を見せようとはりきったせいだろう。結構な返り血を浴びた後があったので、少し無理をしたのだろうな。

ただ、一人だけ無駄に元気で返り血などもまったく浴びていない一年坊頭がいたが。魔法剣士のようだが、途中から転入して来たらしいので、あのメンバーの中では戦闘力が低いのだろう。見掛けもひょろひょろとしているし、背丈も高くないのであまり戦闘に向くタイプじゃないのだろうと推測する。だが、今回の戦果をあげたメンバーの一員であるのは間違いない。ベルスイートに入る事を辞退し

た事もそうだが、身の程をわきまえているのであろう。言い方は少々あれだったが。

「いや、俺もここまでするとは流石に思わなかったな。“ハルトバルト”と言われて浮かれてる連中かと少し心配していたが、杞憂に終わったなと思っている所だ」

「それに一人小猿みたいに元気な子が居るのも、良いね。あの子も戦力になるようになったらあの班は、もっと強くなるだろうね」

どうやら、あの一年坊の評価はエイジも同じらしいな。これは期待以上に良い手駒を手に入れられたようだ・・・

ちょっと本気！（後書き）

コージ君、班のマスコットと認定されました。

腕章の特典

うふふふふ。これは良い物を手に入れちゃったなぁ。この腕章があればいつだって遺跡に入りたい放題。今まで出来なかった夜の遺跡への突入がこれで出来る！　ギルド証があれば入れるらしいんだけど、ギルド証はランクがＢ以上じゃないと駄目だからギルドに入って依頼をある程度こなさないとＢランクなんて成れないもんね。セリナは魔法教会の関係上、Ｂランクまで上がってるみたいだけどね。うらやましい。

「と、言う訳でやって来ました夜の遺跡！」

こないだ倒したキラーマシンは、特に目立って良いパーツが無かったのだ。ごくごく普通のキラーマシン。やっぱりフレームに組めるパーツを手に入れようと思ったら深く潜らないと駄目なようだ。サポートＡＩも作成中断しているし、何かめぼしい物が欲しいんだよね。この間三十五階層にキラーマシンがやってきたのは、きっとどこかに秘密通路みたいな物があるはずなんだ。それを見つけ出せば僕一人でも、素早く深い階層まで短時間で行けるはず。なんだかんだ言って、遺跡を潜るのは時間が掛かるので、ちょっと空いた時間に七十階層まで行こう！　なんて真似は出来ないのである。

僕たちが一番最初に遭遇したキラーマシン。あいつは十五階層に姿を現した。と言う事は十五階層にも秘密の通路があってもおかしくないはず。今夜は少しでも違和感が無いか徹底的に十五階層を調べてみよう。

「うーん、今まで通過する事が多かったから良く分かってなかったけど、十五階層ってかなり広いんだなぁ・・・こりゃ参った」

よくあるドーム換算だと、きっと十個分ぐらい楽勝である感じだ。でも、遺跡ってぐらいだからそれぐらい広くて普通なんだろうか。これは探し出すのに時間が掛かりそうだ。うーん・・・何か良い方法はないかなぁ・・・出没する魔物を適当にあしらいつつ遺跡内をじっくりと探索する。壁に分かり易い継ぎ目がないか、転移魔法の魔方陣がないかとか、エレベータが無いかどうか・・・遺跡の行き止まりなどを見つけると、そういった物が無いか時間を掛けて調べていく。だけど、今の所めぼしい成果は上がっていない。そういえば、夕方にオーガを倒したけど今はどうなってるのかな？　ふと、そんな事を思い付きレーダーでオーガを探してみた。

「あれ。さっそく一匹この階層に居るなぁ。せっかくだし、倒しておこう」

なんというかごみ掃除の気分だね。せっかく綺麗にしたのにまた出てくるとか、なんて繁殖能力なんだ。あれだけの巨体だから食べる量も半端じゃないだろうに、生態系が狂ったりしないのだろうか？

それともこれぐらいオーガがいるのが通常って事？　あと最近わかったんだけど、オーガって思ってたより強くなかった。だから、半年前にオーガを倒したときに二年分の授業料を貰ったのは、ほとんどが口止め料的な意味合いが強かったみたいだ。まぁ一年生のほとんどがオーガを倒せないから、浅い階層からオーガが出るなんて知れたら、学園を止めちゃう人もいそうだもんね。

アイテムに従ってオーガの居場所に辿りつく。まだ気付いてないよ

うなので、横から一気に間合いを詰めて止めを刺す。光属性の魔法を入れたおかげで、魔物を倒すのが非常に楽になった。だけど、このオーガどこから出てきたんだろう？　この奥から来てたみたいだけど？　ちょっと調べて見よう。

「うん・・・？　行き止まりみたいだけど・・・」

オーガも迷ってここまで来たって事かな？　間違った事に気付いて引き返している途中で僕に倒された？　そんな間抜けな話もあるかな？　でも何かあるかもしれないから、じっくり調べてみよう。て言ってもどう見ても唯の行き止まりで、特に装置があるようには見えない。

「ん？」

良く見ると壁の天井付近に、四角い枠の中に緑色のガラス？　が嵌まってるモノがある。人型のポーズが無いだけで非常口のアレによく似てる形だ。怪しいと言えば怪しいんだけど、他に手がかりが見当たらない。どこかに隠されてるのかな？　非常口灯の真下まで来て見上げてみる。あれっ、なんか壁が光ってる。

“現在、この非常口は一方通行です。外に出るには他の非常口をご利用下さい“

そんな文字が壁に日本語で流れ出した。じっと見ていると右から左へ繰り返し流れ出す。非常口？　一方通行・・・？　外に出るには他の非常口・・・？　疑問に思いながらも壁に流れ出る文字を反芻する。その意味はどう考えても、ここが何かの施設でこの壁の先は本来は非常口として機能している物だ。そして、暫くすると壁の文字も静かに消えた。

「要はこの壁は外と繋がっているって事で間違いないのか。だからオーガが遺跡の内部に急に現れたりするんだ・・・ていうか、入り口はどこにあるんだろ？」

古代遺跡ってなんというか近代的な建物な気がしてきた。いや、どっちかというと未来の建物の可能性の方が高い。古代遺跡ってのは日本の未来なんだろうか。違うにしても日本語が使われているのは間違いないし、僕には遺跡の秘密を暴ける可能性が高いはず。

「ちょっとわくわくしてきた。フレームとか安置してる場所とかも僕なら楽に見つけられるかも・・・ぐふふ」

ちょっと壁に目印をつけておこう・・・って、駄目だ。遺跡内部って修復機能があるから傷とかつけても後から来てもきっと、わからなくなってるはず。て事は僕が道をしっかり覚えておく必要があるわけか。ここに来るまではかなり入り組んでたから覚える自信があんまりない。仕方ない、紙に地図を書いておこう。それが確実だ。

「非常口があるなら、やっぱりエレベータかそれに近い物がきっとあるよね」

しかも、非常口なのに一方通行になるとか変な仕様だし。なんで外から中へしか入れないんだろうなぁ？　とりあえず、これからは通路の天井付近も気をつけて移動する事にしよう。けど今日は闇雲に動きすぎて疲れたなぁ。嬉しい発見をしたけど、今日は帰ろう。うふふふふ。楽しみは後にとっておこーっと。

「・・・ようやく、帰るか」

元気が取り柄の小猿が一人で遺跡内部に居るのを見かけて、心配でこっそりあとを付けて見たがまったくの杞憂だった。まったく、あれがただの元気が取り柄の小猿にしか見えてなかった自分を殴りつけたい。

「オーガを瞬殺か・・・」

不意を付いたとはいえ、明らかに倒しなれている様子でオーガがまったく何もできずに倒された。あの青い不思議な武器も恐ろしい威力を秘めていたが、あの小猿は他の得物を持っていたとしても、同じようにオーガを瞬殺したであろう。それだけの踏み込みと斬り込みの鋭さがあの一瞬の戦いで分かった。いや、分からされたというべきか。

「恐るべきはあの小猿。いやアースとか言ったな。良く覚えておこう」

有望株の一年を見つけて、気分がよかったので気まぐれで遺跡に潜っていたがさらに嬉しい収穫があるとはな。いやはや、世界は広いと言う事だな。

「いずれ、遣り合いたいものだな・・・」

同じ学園。しかもブロックまで同じなのでいずれそんな機会もあるだろう。くくく、まったく楽しみだ！

腕章の特典（後書き）

光司くんはまだギルドに登録してません。

ロウにすぐにばれてしまいました。いやはや。光司の運が悪いのかロウの運が良いのか・・・

日々訓練。煩悩も訓練

夜の探索を早々に終えた僕は、帰ってセリナ達に今日発見した事を伝えた。と言っても今一つピンと来ないようで、これがどれぐらい凄い発見か分かって貰えなかった。がっくり。でも、僕が喜んでるから凄いんだろうなぁって感じの目で見つめられた。照れる。

「確かにそう言われてみれば、そんな形の物があったような気もします」

「天井付近とか良く見てるねぇ。上の方って案外、見てるようで見てないって今日思った」

今日のあれを見つけたのも、たまたま緑色に光っていたからであって、光ってなかったらたぶん、そういう飾りだと思って見逃していただろう。だって、光ってない奴だと下にいても何も出てこなかったしね。あれって壊れてたのかな？

「じゃあ、明日からミミ達と一緒に夜から遺跡探索するぅ？」

「遺跡は遺跡だけど、十五階層だけを徹底的に調べようと思うんだ。それ以上潜っちゃうと行きと帰りで時間を取られてしまうからね」

「コージと一緒なら、なんだっていいよぉ～」

むふぅと鼻息とも吐息ともわからない何かを洩らしながら、きゅっと腕にくっついてくるミミ。女の子らしい良い香りがふわっと鼻腔をくすぐる。最近、なんだか露出の多い服を着てる事が多いので、肌が接触・・・すべすべで柔らかいのが良く分かる。胸元もけっこう緩くなっているので、なんというかスケベ心がときめいてしまう。嗅覚と触覚と視覚に訴える恐ろしい攻撃なのだ！

「にひっ」
「ミミ、少し離れましょうねぇ。コージ？　伸びてますよ？」
ぐいっとミミを引き離され、セリナが膨れ面でこっちを見る。すいません、調子に乗っておりました。でも、おかずは一杯あるのにアクションできないのは辛い！！！　いやしても良いんだろうけど、それはまだ駄目なんだ！　あぁ！　僕は一体どこで発散すれば良いんだっ！
「ぽっ」
僕の邪まな波動を感じたのか、顔を赤らめるセリナとミミ。白夜はきょとんとしている。あー白夜と言えばフレームにまた乗りたいなぁ・・・飛行ユニットを付けて空を飛びまわるのも良いし、次から次へと襲い来る魔石獣とめっちゃ戦ったり、四足型や魔道型などの色々なフレームと模擬戦をしたり、変形・合体ができるフレームをハーベイさん達と設計してみたり・・・ぐふふ・・・
「っ！？」
あれっ？　今度は白夜が赤くなりだした。変なの。
「では、明日からは時間を決めて夜の探索をするという事で良いですか、コージ？」
「え、あ、うん。そうして貰えると嬉しい。個人的に遺跡に潜らないとお金稼ぎができないからね。なんか腕章をして潜る時も実習扱いみたいで、アイテムを渡さないと駄目だったんだ」
「そうなんですね。ベルスイートは最初ボランティア団体だったって言いますし、その流れを汲んでるのかもしれませんね」
「普段はお金に困ってるわけじゃないから良いんだけど、何か造ろ

うと思ったら全然お金が足りないから稼ぎたいんだ。なのでセリナよろしくね」

「はい、かしこまりましたです」

と、何かを期待するかのような眼差しを向けてくるセリナ。うぅ、こういうのは恥ずかしいんだけどなぁ。いや嫌いじゃないんだけどね。意を決して僕は、じっと待っているセリナを静かに抱き寄せる。

「お願いね、セリナ」

「ん・・・」

と言ってちゅっとする。

今まで、散々好きと言われて来たので流石の僕も勘違いじゃないと確信したので、最近はこういった事も時々するようになった。僕なりの彼女たちへの親愛の情のつもり。優柔不断な僕は誰か一人を決められないけど、それに不満を言う子は居ない。それに甘んじてると言われても否定できないけど、全員まとめて面倒を見る気で頑張る！　という気持ちでは居ます、はい。

あ、どこに、ちゅっとしたかは内緒です。

さて本日の授業のメインは近接戦闘なのです。剣を持った戦闘の技術を教えてくれるんだけど、今までは筋力トレーニングがほとんどだった。まぁ、体力測定でB以上の人間は既に剣術を教えて貰ってるんだけどね。うらやましい。セリナは魔術師という事で筋力トレ

ーニングに付き合ってくれてるんだけど、正直止めて欲しい。一緒に走っているとあの揺れる物体が僕の心を苛む。だって、僕の方をじっと見つめて、可愛らしく微笑みながら

「いつでもどうぞっ」

って感じで、揺らしながらずっと傍を走り続けられてご覧よ！　形振り構わず物陰に連れ込みたくなるのが人情だよね？！　肉体的にも精神的にも恐ろしい程に鍛えられるのがお分かりになるだろうか？　せめてトレーニングの時は誰にも見られない所で走って欲しい。あの揺れるインパクトはあんまり他の人には見せたくないしね！　だって、前かがみになるクラスメイトが多すぎるんだもん。

それはさておき。

素振り千回とか、剣を握ったまま走りこむとか、剣を構えたままじっと動かないとか、そういった基礎を乗り越えてきて、いよいよ今日！　ようやく僕にも技を教えて貰えるようになった。

「はい、興奮するのも分かるが落ち着けよー。はい、そこ！　違う興奮をしない！　よろしい。さて、ようやく技を出せるレベルまで漕ぎ着けた訳だが、今のお前たちではそうそう簡単に出せる技じゃないって事は、しっかり認識しておくように」

そういって、厳しい眼差しを僕たちに向けるセイベール先生。相変わらず男前の男装っぽい先生だ。

「今の実力では、この技を出す時点で負けみたいなもんだ。どんな攻撃にも言える事だが、繰り返し実行して覚える事で、攻撃の隙や無駄を省けるようになってくる。振り切るスピードや力の込めるタ

イミングに、戻し。そういった事を自然にできるようになるには、使いまくってコツを掴むしかないと先生は思っている。ここまでは分かるか？」

戻し？　攻撃した手を元の位置に戻すって事かな？　聞いて見よう。

「ん、なんだアース。戻し？　あぁその事か。とにかく剣を振ったら振り切ってそのままの姿勢で動かない奴が多すぎる。何のために素振りをしているか、分かってない奴が多い。素振りと一緒ですぐに剣を振れる体勢に戻らないと駄目なんだ。その事を戻しと呼んでいる。」

あーすいません。なんか振り切った後は決めポーズっぽく止まってたりします・・・

「ようし、それでは技を教えるから良く見ておくように」

そうして、教えてくれる技は初級にして最終の技になる「絶刃裂波」だ。父ちゃんもそう言えば使ってたね。父ちゃんはあれだけをずっと使ってきたそうで、あれ以外の技を使うと「絶刃裂波」が濁ると言って他の技を覚えようとしなかったそうだ。父ちゃんらしいや。

「“絶刃裂波”」

技の練習用の壁に向かって、剣を振りかぶって下ろす。それだけの動作で衝撃波が壁に向かって放たれる。衝撃波が地面を削りながら進むので、回避しようと思えばできない事もない技だと思う。

「この形が基本だ。まずはこれを千回やって少しでも覚えろ。あぁ、最初に気力を溜めてからでないと技は出ないぞ。溜めて込めて撃つ。

そんなイメージで技を放つように。いいな！」

すっげぇ大雑把な説明だ！　この人本当に先生で良いのか？　でも、やるしかないかぁ。

日々訓練。煩悩も訓練（後書き）

己を鍛えて耐える光司くん。疲れてぐっすり眠る為に無茶な鍛え方をしていると言っても過言ではないでしょう。がんばれ！

練習に夢中

まずは溜める。

下腹部に気力が溜まっていくイメージをし、呼吸と共に練り上げていく。魔力とも違うこの力を感じ取るのは、最初の内はわからなかったけど訓練する内に少しずつ捉えられるようになり、今では自然と練り上げる事までできるようになった。

そして溜まった気力を剣に込める。

剣を掴んでいる手から、刀身へと行き渡らせるように巡らせる。気力の通り道となる手のひらが温かくなってくる。いや、むしろ熱いぐらいだ。

「よしっ！」
「まてっ！！！」

ぶほっ！？　さぁ撃とうとした時に先生が止めに入った。いままさに撃とうとしてる所に気合を込めた声で止められると、さすがに集めていた気力もだいぶ霧散してしまった。むぅ・・・

「そんな目で睨んでも駄目だ。アース、おまえはそんなに気力を込めて一体全体何をするつもりだ？」
「いや練習です。先生言ったじゃないですか。ためてこめてうつ！って」
「限度があるわ、あほぉが！　その十分の一で十分だどあほう」
「むぅ・・・」

そこらへんは全然説明してなかったくせに、理不尽だ。言われたとおりにやっただけなのに、あほぉ呼ばわりは無いよねぇ？　でも仕方ない、言われた通りに気力を込め直す。そして、壁の標的に向かって放つ。

「“絶刃裂波”」

振り上げた剣を振り下ろす。標的がすぐ傍にあるようにイメージして、剣先を五十メートルほど離れている標的を狙う。地面を衝撃波が走り、まっすぐに標的を打ち抜いた。うーん、でもこれって衝撃波が見え見えだから避け易いよねぇ。どうにかして、かまいたちがびゅーんと飛ぶみたいにできないかなぁ？　振りぬいた時の角度で調整できるかなぁ？

「“絶刃裂波”」

さっと溜めて込めて撃つ。今度は少し上加減で振って見る。うーん、駄目だ。じゃあ最後にちょっと止めて、地面まで衝撃波が行かないようにできるか、試してみよう。

「“絶刃裂波”」

うーん・・・これも駄目。やっぱり衝撃波が地面を削っていき、めっちゃくちゃ分かり易いままだ。うーん、とりあえず千回ぶっ放して見てから、感覚を掴んで改良を考えるとしようかな。先生に聞いたらわかるかもしれないんだけど、あほぉ呼ばわりされて悔しいのだ。少しは見返してやろう。

そして小一時間ほど経って千回振り終えた。千回振るまでに標的が結構壊れまくったので何度も交換したりしたんだけど、早くコツを

掴みたくて急いで終わらせた。うーん、千回振ったけど回数を振る事に囚われすぎたせいか、良くわからない。もっとじっくりと試して見よう。先生がこっちを見てにやにやしてるけど、気にしない！

「んっ！？」

じっくりといろいろな振り方を試していく内に、うまく衝撃波が地面を走らずに標的をぶち抜く事ができた。今の振り方は、振り切った後にすぐに次の攻撃に移れるようにくっと剣先を揺らめかせたのだ。要するにちょっと持ち上げる感じにしてみたんだけど、振りぬいても、先生が言う所の戻しを意識すれば衝撃波が地面を伝わって行かないって事なのかな？　もう一度、そこら辺を意識してやってみよう。

「“絶刃裂波”」

バシュッ！

よしっ！　やっぱりだ！　これだと衝撃波が地面を伝わらない！

「基本の大切さが良く分かっただろ？　ん？」

いつの間にか傍に来ていたセイベール先生がそう聞いてきた。あー・・・素振りの話の事かぁ。なるほど、さっきも先生言ってたもんね。あれはこれを教えたかったんだな。

「それが分かれば、あとは使って使って使いまくって自分の技にするだけだ。まぁ何回振っても、満足するのは難しいだろうが頑張れよ」

「分かりました」

うーん、伊達や酔狂で先生やってるとか思っててゴメンナサイ、と心の中で謝っておこう。

昨日の今日だけど、またまた放課後はベルスイートの活動だ。十五階層までのオーガは倒しきったんだけど、今日もどこからか遺跡に入ってきてる可能性は高い。今日はせっかく覚えた「絶刃裂波」を練習したいので、あまり急がずに行こうと思う。皆にそう伝えると、快く了承してくれた。優しいよなぁ。

「また昨日みたいなペースで行かれたらこっちの身が持たへんっちゅーねん」
「ですよね。さすがに毎日あのペースは遠慮したいですわ」
「でも、コージは夢中になると突っ走りそうじゃない？　今日はコージに探査アイテムを渡しちゃ駄目だよ？」
「分かった、俺がずっと持って指示するようにしよう。それでいいか？」
「任せる」

僕が皆の優しさに浸っている間に、何かぼそぼそと話し合ってる皆。なんだろ？

「コージ。今日は練習したいんやろ？　皆で相談したんやけどな、今日はバルトにアイテムを持って貰ったらどや？　戦闘の度にいちいち持ち替えたりしてたら面倒やろ？」

あぁ、そんな事まで心配してくれてたんだぁ・・・

「でも、そこまでして貰って良いの？　だって僕のわがままなんだから、それぐらいちゃんとするけど？」
「ええってええって！　それぐらいどうって事ないから、ほらっ！　バルトもさせてくれ言うとる！　な！」
「あ、あぁ！　俺は昨日あまりアイテムを触る機会が無かったんでな。せっかくだからしっかり使って覚えておきたい」

なるほど。昨日は僕がほとんど握りっぱなしだったから、使い方を一応覚えてはいるけども、使う機会が余り無かったもんね。習うより慣れろっていうし、そういう事ならお願いしちゃおうかなぁ。

「じゃあ、バルトお願い。使い方が分からなくなったら何時でも聞いてね！」
「お、おう分かった。その時は頼む」

なぜか、顔が赤いバルト。使い方が分からなくて恥ずかしくなったんだろうか？

「しかし、あいつはほんま天然や。どう言えば分かって貰えるやろか・・・」
「うーん、分からないからこそ天然じゃないかしら？」
「あの笑顔が見れなくなるのは惜しい。言っちゃ駄目」

こんどはハルトにセシリアにエリーがぼそぼそと話し合ってる。なんというか内緒話が好きだねぇ。でも、僕にとって良い話をしてる気がする。さっきもなんだかんだ言って僕のために相談してくれてたみたいだもんね。ぐふふ。昨日見つけたアレも今日はしっかりと見つけるつもりだから、あんまり余裕が無いから皆の優しさが本当にありがたい。良い仲間を持ったよね、ほんと。

「一年坊、今日も行ってくれるか？」

準備が整いベルスイートの本部に行くと、今日もサカキ先輩が居た。先輩もさすがに二日続けて潜るとは思っていなかったようで、少しびっくりしている様子だ。

「えぇ、行けそうな日はなるべく潜ります。少しでも早く戦力になりたいですからね」

そう胸を張って応えるハルト。やっぱりベルスイートに入って嬉しいんだろうなぁ。凄く生き生きとした顔をしている。他の皆もそうなんだけどね。控えめなエリーですら嬉しそうな顔してるし。ん？

なんかサカキ先輩が僕をじっと見てるような・・・心なしか昨日より、獰猛な目つきをしている気がする。僕、なんかした？　してないよね？　あの目はなんか今にも戦いたそうな顔で怖い。気のせいであって欲しいなぁ・・・

「ふっ、ならば俺からは言う事は無い。もっともっと強くなってみせろ。あとは結果で示せ、良いな！」

「「「「「「はいっ！」」」」」」

うん、なんだかこの先輩の言葉は腹の中にストンと入ってくる。なんというか生まれながらの指揮官って人なのかなぁ、サカキ先輩って。どこぞの生徒会長さんも見習って欲しいもんだ。まったく。

収穫

今日は徹底的に非常口の場所をしっかり調べようと思う。光って無くてもひょっとしたら誤作動で外から魔物を入れちゃうかもしれないし、ひょっとすると何かの条件で外に出れたり他の階層に行けたりするかもしれない。形や大きさなどの特徴も入念に調べよう。

「今日は、８体ほどだな。昨日あれだけ倒してまだ居る事に驚くが、ベルスイートが動いてるからそれぐらいが当然なんだろうな」
「しかし、手が足りんって言うけど冒険者に依頼しとらんのやろか？」
「オーガを倒せるランクの人が出払ってるのかもしれないね。レッドベアを倒した方が実入りは良いだろうし。オーガはあんまり旨みがある獲物じゃないからなぁ」

遺跡の中で言えば確かにそうだ。外だとオーガの被害に困った人が依頼してくるのでそれなりの依頼額が手に入るだろうけど、遺跡の中だとオーガの素材しか儲けはない。素材といっても角や爪ぐらいで、それは他の物でも代用が利くからあんまり高額じゃないんだよね。

「でも、練習には丁度いいからそれだけ居れば十分だよ。うん」
「まずは八階層あたりだな。だいぶ上がって来てるようだな。急ごう」
「うん」

そういって、僕達は八階層目掛けて急いで走り出した。

「“絶刃裂波”」

僕が衝撃波を放つと

「“穿光”」

すかさず近づいたセシリアが刺突技を繰り出し、オーガに穴を開ける。レイピアでも、刺し所が良ければ一撃必殺になり得るのだが、セシリアはあくまで練習のようで刺突回数をどうすれば増やせるか、考えているようだ。

いまだに僕の技はオーガに一撃で致命傷を与えられる程ではなく、再生能力が少し上回る。だけど、連射能力はあるので少しずつオーガを削る結果となった。セシリアもつくつくしていたので、オーガは結局何もできずに沈んだ。気力をもっと溜めれば、技の威力を高められるんだけど、そうすると隙が大きくなるので使えない技になっちゃう。なので気の練り方を繰り返す事で、もっと効率の良い方法を自分で編み出す事が技の威力を上げる近道になりそうだ。八階層のオーガを倒した後は、一気に十五階層へ向かう。どうやら上がってきたのは一匹だけで他のオーガは十五階層もしくは十六階層に居るようだ。とりあえず十五階層のオーガは一掃する事にしよう。

今日は探索アイテムをバルトが持ってくれているので、戦闘が凄く

楽だった。それにペース配分も考えてくれているのか、昨日と違ってじっくり慌てず戦闘ができ、慌てて移動しなくても的確にバルトが次の敵へと誘導してくれたのだ。やっぱり賢い人がやると、効率が違うもんだね。うん。おかげで今日は遺跡内部の非常口をじっくりと探す事ができた。

「次で最後だな。さすがに今日は早かったな」

「だね、だけど良い練習になったよ。ありがとうバルト」

気付けば十六階層のオーガも上がって来ていたらしく、この階層に居るのが全てのようだ。

「まぁ、たまには人に任せるんだなコージ。俺がお前をうまく使ってやるぞ？」

「まだまだ未熟だから、一人前になったらお願いするね」

覚える事は山ほどあるからね。あと魔法の作成というかなんというか。セリナ達とも色々一緒にやる事があるので、なかなか一人前になれたと思えない。確かにそこそこは強くなったとは感じるんだけど、アイテムや魔法の力に頼りきってる所もあるからね。僕自身が強くなれば魔法の効果ももっと上がる筈だから、もっと鍛えて損はない筈だ。

うん・・・？　奥の方で聞き覚えのあるローラー音がしたような・・・？

「ちょっと貸して！　バルト！」

「あ、おい！？」

急いでキラーマシンの部品を入れてサーチする。居る！　この階層

にキラーマシンがまた出てきてる！　ひょっとしたらエレベータの場所が分かるかも！

「皆、キラーマシンが出てる。僕ちょっと行ってくるよ！」
「あ、おいコージ！　一人じゃあぶないって！」
「だいじょーぶーーーー！！！」

探査アイテムを片手に通路をひた走る。あ、オーガだついでに倒しておこう。気づいて無いようだから、気力をかなり込めて撃つ！

「“絶刃裂波”」

ばしゃっ！！！

ハルトと同じぐらいの強さの衝撃波がオーガを真っ二つに切り裂く。これでよし。証明部位は後回しにして、キラーマシンに急ごう。指輪に探査アイテムを仕舞いこむ。さらに「ギル」を二本取り出してモードを「光」にしてあとはBボタンを押しながらAボタンをスライドするだけだ。

バシュッ！

よし、戦闘準備完了！　あとは向かうだけだ。近づくとどうやら先客が居たようで、三人でキラーマシンと戦っている。ベルスイートの先輩達のようで緑色のネクタイをしているから二個上の先輩のようだ。少し苦戦しているようだから、助太刀するとしよう。

「先輩！　今助けますからね！」
「はぁっ！？　おい危ないぞ！？」

その言葉の後には既に僕にマシンガンの狙いを付けているキラーマシン。

ギィイィイィイィイィイィイィッ！

既にマシンガンじゃない音を奏でながら、僕を粉々にしようと弾丸が僕の周りを飛び回る。実弾は大きく避けないと危ないので、全力に近い踏み込みをする事で一気に狙いから外れる。そうして、剣の間合いまで入ればこっちのものだ。キラーマシンを駆け上がり首だけを切り取って、最小限の攻撃でキラーマシンを無効化した。

あー・・・だけど、今はベルスイートの腕章を付けてるから、これって提出しないと駄目なんだよなぁ。はぁ・・・残念。でもとりあえずは、エレベータかそれに近いものが近くにあるはずだ。時間が経つと分からなくなるかもしれないから急ごう。

「じゃあ、先輩！　後はよろしくです！」
「え、ちょっと、おーーい・・・」

どうせ手に入らないなら、ここでまごまごしてたら勿体無いからね。とりあえずこの通路の先に急ごう！

「あ、先輩！　お疲れ様です！　うわ、キラーマシンですね。これはまた綺麗に倒しはりましたねぇ。あ、すいませんここをこんぐらいの背丈の黒髪の一年生が通っていきませんでした？」

コージを追いかけて遺跡内を走って行くと、オーガの死体の次はぐったりしている先輩とキラーマシンを見つけた。コージの奴こっちに来てるはずなんやけどなぁ・・・

「あ、あぁあれはお前達のメンバーなのか。あいつ暴走しないようにしっかり見張っておけよ。まぁ、あれだけの実力があるなら突っ走るのも仕方ないかもしれんがな」

「あちゃぁ・・・なんぞ迷惑かけましたか・・・？」

あいつ何しよったんや？　時々、とんでもない事しよるから油断できんわ。

「ううん迷惑じゃないの。帰り際にキラーマシンに遭遇して苦戦してたのを助けて貰ったのよ。でも、あっという間に通路の奥に行ってしまったわよ？」

あぁ、技を覚えて使いたくて仕方なかったんやろな。まぁ困ってる人がおったらあいつは、すぐに助けに入るからな。迷惑をかけてないなら、良かった良かった。そやけど、あいつはなんであんなに急いどったんや？

「あ、情報ありがとうございます。ほな、わい達はこれで。みんな行くで！」

先輩達に一礼をして、奥へと進む。ほんまにあいつはしゃーないやっちゃ。勝手に突っ走って行ったかと思うと、オーガは倒すし、人助けしてるし、どっかへ行ってまうし。ちょっと説教せにゃあかんな。この先か。あ、おった。あいつは行き止まりで何をしとんや？

なんやえらいニヤニヤしとるけど、なんぞええもんでも見つけよったんか？　壁になんぞ文字みたいなんが、動いとるけど、なんや

？　あ、消えてもた。

「おい、コージ。おまえ一人で突っ走ってったらあかんで。おい、聞いとんか？」
「え？」

あかん、かなりトリップしとる。あのにやけ顔は、セリナちゃんやミミちゃんにくっつかれとる時と同じ顔や。何かよっぽどええ事があったな。

「あ、ハルト」
「あ、ハルト、じゃねーよ。一人で突っ走るな、心配するやろが」
「あー、うん、ごめんごめん。でも、ここらなら僕でも大丈夫だって。心配してくれてありがと」
「まぁ、おまえの実力なら大丈夫やろけどな。万が一って事もよう考えとけよ？」
「はーい」
「で、コージ。なにやら先程から浮かれた顔をしているが、何か良い事でもあったのか？」

バルトが浮かれてるコージに尋ねる。そや。わしもそれが気になるなぁ。

「うーん・・・まだ内緒。セリナ達とちょっと調べて大丈夫ならまた皆にも教えるね」
「なんやそれは？」
「んー・・・凄く良い事だよ、うん。ぐふふ」

あーあの気持ち悪い笑いはフレームの事を考えとるな。まぁ、教えて良くなったら教えてくれるやろ、コージなら。それまで待つとし

ますかね。今日のノルマは果たした事やし、さっさと遺跡から出よかいな。

「じゃ、また今度教えて貰うわ。みんな帰るで」

そうして、ベルスイートの活動二日目が終了した。

悩めるコージ

「本日もご苦労。昨日あれだけの数を狩って貰ったおかげで、今日はだいぶ楽だったようだな。三十五階層でキラーマシンの動きが活発化しているので、十五階層までは冒険者に依頼しておけば良かろう。明日も行くなら三十五階層でキラーマシンの討伐を手伝って貰いたい。勿論、二年のメンバーから二人お前たちに付ける。どうだ」

ベルスイート本部に戻るなり、サカキ先輩がそう切り出してきた。うーん・・・僕としてはベルスイートとしてではなく、自分でキラーマシンを倒さないと駄目な理由があるんだよねぇ・・・どうしようかなぁ。

「まぁ、明日までに決めておいてくれれば良い。では、帰って体を休めておけ」

僕の内心を知ってか知らずか、時間的猶予をくれたサカキ先輩。ちらりと一瞥をくれただけで、僕が悩んでいるのを察したんだろう。なんというか、人の機微を良く見てるなぁと思う。

「失礼します」

そう言って、一礼をしてから本部を退出する僕たち。早速、明日の相談しなくちゃね。

「で、どうするんだ？　キラーマシンと言えばかなり凶悪なメカで

有名だが。あいつを超えれるかどうかで、初心者の壁を突破できるかどうかと言える奴だな」

あれ。僕たちってまだまだ初心者なのか。オーガとか倒しまくってるし、ニードルベアやキメラも倒してるから、そこそこ行ってるのかと思ってたよ。

「不思議そうな顔をするなコージ。あくまで目安だ。だが、キラーマシンは射撃能力や移動速度、装甲の硬さなどからそれなりの実力が無ければ倒せる相手ではない。今日の先輩達は頭部だけを破壊していたが、あれはさすがだと言える。やはり、三年生は伊達じゃないな」

まさか僕がやりましたとは言えず、もにゅもにゅしてしまう。でも、キラーマシンは倒せるんだから僕もそこそこやれるって事だね。よっし！

「なんでガッツポーズしとんや、コージ？」

「え、なんでもない。気にしないで」

ふぅーんと呟き、僕をにやにやと見た後に皆を見渡す。

「まぁいつかは通る道って事や。早いか遅いかってだけで、明日やっても問題ないとわしは思うが、みんなはどうや？」

そう言い切るハルトは自信に満ち溢れ、キラーマシンごときに負けるはずがないとその態度で断言していた。

「そうね。でも銃火器を持ってるんでしょ？　それの対策を考えておく必要はあるわね」

「回避できるのはレイとコージぐらいだろ。受けるか逸らすにしても、何か魔法で防げないか？」
「アイスウォールなら、少しの間耐えれる筈。一枚で駄目なら何枚か重ねるのも良い」
「じゃあ、それで安全を確保してから前衛が接近していくって事でええか？　それとも、離れたままで、攻撃したほうがええんか？」
その言葉に唸る面々。実際にはキラーマシンとの戦闘経験が無い為、今まで聞いてきた情報を元に推論を組み立てるしかできないからだ。なので、僕が今まで戦ってきた経験からあいつの特徴を言う事にした。
「キラーマシンは離れるとマシンガンの餌食になるよ。あいつは弾切れしないから、離れてるだけ無駄。接近すればマシンガンは撃たないけど、かなり大き目のブレードを二刀流にして斬りかかってくる。でも、マシンガンを相手にするよりかは、接近してブレードを相手にした方が楽だと思うね。あ、だけど距離が離れてる時にキラーマシンにタゲられたら、マシンガンをぶっぱなしてくるから注意した方がいいよ～。エリーなんかは特に攻撃魔法の威力がやばいから、離れて攻撃魔法を撃とうとするとマシンガンが来ると思ったほうが良いね」
あれ？　みんなぽかーんとしてる。なんか最近このパターンを良く見る気がする。僕が真面目な事を言うのがそんなに可笑しいのか！
ぷんぷん。
「いや、コージ。おまえ良くそんなに知っとんなぁ・・・　なんというか説得力のある情報やけど、誰から教えてもろたんや？」
あぁ。情報の出所が気になるのね。それならそれなら。

「セリナやミミと一緒に居るとね、そういうのも分かるってものなのよ。えっへん」

クラスメイトには明かしていないけど、セリナはクリムゾンという二つ名を持っている。二つ名を持つほどの魔法の才能を持ってるだけあって、この学園でも魔法に関しては飛びぬけている。というか、教師の人がせがむぐらいだ。

そしてミミ。彼女は二つ名などは無いけど、模擬戦において今まで傷一つ負った事がない。さらに勝負を決めるときは常に一撃で相手を沈めてしまう程の実力だ。ハルトですら、粘りに粘っていたが結局最後は、一撃で沈められていた。まぁ、だいたいが一分以内に終わっているのが、五分以上粘ったハルトも尋常ではないが。

なので、そんな二人と一緒に居ると凄い恩恵があると思われるのだ。現に僕の言葉になるほどと頷いている皆。

「では、キラーマシンに対しては近接戦闘に持ち込む形で戦うと言う事でいいな。で、コージ。おまえは何かキラーマシンと戦うのに躊躇っていたようだが、何故だ？」

う。さすがはバルト。良く見てらっしゃる。やっぱりトリックスターのリーダーだけあって、皆の事をしっかり把握しているようだ。

「僕の我侭なんだけどキラーマシンから取れるあるアイテムが欲しいんだ。でもベルスイートとして潜ると欲しいアイテムが貰えないから、どうしようかなぁって」

正直に胸のうちを話す。だって、キラーマシンから取れるアイテム

があれば色々とできるはずなんだもん。一応、こないだ狩ったキラーマシンにあるかどうかも調べるけども、どうせなら、たくさん狩って充分な数のアイテムを確保しておきたい。

「んあ？　なんかそないにええもんが出よるんか？　エンジンとかやないんか？」

「あー、エンジンは別に良いんだ。もっとね小さくて、薄い奴・・・だと思う」

「なんやはっきりせんなぁ？　なんでそんなもんが居るねんな」

ぐふふふふ。それは内緒なのだ。

「また、コージの発作が始まったわ。なんやフレームに使える素材になるとかそんなんなんやろ。そやけど、フレームの素材に使えそうな物なら分けて貰うのは無理ちゃうか？」

「いや、欲しいのはそういうのじゃないんだ。たぶん、今まで捨てられてきてるんじゃないかな。僕が欲しいのはそういう類のものなんだ」

たぶんだけど、今までそういった話を聞いた事が無いので、僕が欲しいアイテムは捨てられているんだと思う。じゃないと、もっと遺跡探索が楽になっている筈だし。極秘にされてるって言うなら、話は別だけども。それならそれで、キラーマシンやメカをもっと積極的に倒してる筈だ。

僕の台詞に不思議そうな顔をする皆。まぁ僕も確証を得てないので抽象的な事しか言えないから余計にそうなるよね。

「ならどうする？　コージは潜らずに自力で行くか？　セリナ達と行けばキラーマシンもやれるんだろ？」

「今夜一晩考えさせて。明日にはちゃんと返事するから」

今日の夜に潜れば良いよね。それでアイテムをゲットできれば、僕が考えているとおりかどうかはっきりするし。なんにせよ、アイテムを手に入れなければ何も始まらないのだ。

「分かった。他には居ないか？　まぁどっちにしろ明日にはしっかり決めておくように」

バルトがそう締めくくって、その日は解散となった。

悩めるコージ（後書き）

なんだか、長々とひっぱってごめんなさい！

エレベーター

さて。

「とりあえず、キラーマシンを出すとしますか」

今日得た情報によると、キラーマシンにはカードがあるはず。認証カードというか、そんな感じな奴。昨日みつけた非常口なんだけど、あそこはどうやら非常口だけではなくエレベーターも兼ねる物らしい。入り口であり出口であり、一方通行にもなるしエレベーターにもなる。それを利用するにはカードが必要になるらしい。でも魔物はどうやって入ってきたんだろう？　カードを使ってるとは思えないし。謎なのである。

とりあえず、非常口にしろエレベータにしろ、カードがあれば利用できるという事だ。

バラバラになってるキラーマシンを、丁寧に床に並べる。やっぱり頭にありそうだよね、そういうカードって。手や足なんかは、戦闘に使うはずだから衝撃が凄そうだから、カードが曲がったり欠けたりしそうだし。そう思い、頭部をじっくり調べて見るといくつかカードが入りそうな隙間がある。後頭部の下側にあるスリットを調べる為、どんどん解体していく。あった。プラスチックでできているみたいなそのカードは残念ながら、少しひびが入っていた。倒した時の衝撃でひびが入ったんだろうか。ひょろいカードである。

「でも、使えるかもしれないから取っておこう」

こういうのって、中にＩＣチップが入ってたりしてそれを読み取っ

たりするかもしれないから、カードが少しぐらいひびが入ってたって、使えるかもしれない！　これで、今日は試す事が一つできた。

「コージ、今大丈夫です？」

コンコンというノックの音とともに、セリナがそう確認してきた。どうしたんだろ？

「うん、大丈夫だよ～」

「えっと、そろそろ遺跡に行きませんか？　あんまり遅いと眠る時間が無くなっちゃいますし」

「あれっ、もうそんな時間なの？！　ごめん、夢中になってた」

「だと思いました。じゃあ行きましょ？」

「うん」

危ない危ない。解体って意外と時間が経つのが早いんだよね。カードも一応確保できた事ですし、遺跡へ向かうとしましょうか。

今日はセリナ様のギルド証を入り口で提示して、遺跡の中へと入る。門番の人は良く知ってる人だったけど、僕以外にもこうやって遺跡へ潜る人間も居るんだろう。特に何も言ってくる事はなかった。こづかい稼ぎしたいもんね、やっぱり。

「まずは十五階層に行くね」

「はい、分かりました」

今日はヒロコは居ない。学校ではしゃぎすぎたのだろうか、早く就

寝していたのだ。なので、セリナ、ミミ、白夜と一緒に来ている。無理に起こすのも可哀想だから起こさなかったんだけど、なんかヒロコが居ないと落ち着かないねぇ。でも、ヒロコは戦わないから遺跡に潜るのに特に居なくても大丈夫っちゃ大丈夫なんだよね。うん。

夜の遺跡はちょっとだけ魔物が強くなるらしい。だけど出てくるオークは大概どれも一撃で沈むから強さが変わっても大差ない。そして特に何事もなく十五階層へ到着した。この間、一方通行になっていた非常口へ行ってみましょう。

「こんな行き止まりに何かあるんですか？」

「うーん、たぶんこのカードで良い事あるはずなんだけど」

カードをかざす場所が分からない。持っていれば発動するのかなぁと考えてたんだけど、とりあえずこの当たりで動き回るしかないか。

ピコン！　“認証しました”

「え、なんですか？！　呪文・・・？」

「よっしゃぁああ！　ビンゴォ！　よーし、これで使えるようになった！」

カードを認識するのに少し時間がかかっていたようだった。ひびが入ってるからたぶんそのせいだ。じゃないと非常口なのにあれだけ時間が掛かってたら、逃げれるものも逃げられなくなっちゃうもんね。そうして、僕は壁に近づいていった。

ガシュゥウンッ！

壁が真ん中から両側に音を立てて開く。僕は特に警戒せず中に入る。

その様子を見ておずおずと入ってくるセリナとミミ。白夜はというと堂々としたものだ。

「ここ、なんですか・・・？」

「ちょっと待ってね、僕の考えが正しければとっても役に立つものなんだ」

「役に立つ・・・ですか？」

中は少し広めの部屋が広がっていた。僕達が中に入ると入り口脇にある壁に文字が浮かび上がる。“出口”という文字と“数字を入力して下さい”という文字と数字が浮かび上がっている。これはタッチパネルだね。試しに“６５”と入力してみた。

ガシュゥウンッ！

「あ！　コージさん！　壁が閉じます！！！」

「大丈夫、落ち着いてセリナ。ミミ、驚かなくても大丈夫だから」

こういった物に慣れていない二人はずっと警戒しっぱなしで、ちょっと可笑しくなってしまった。これは大丈夫だと、しっかり言い聞かせてようやく落ち着いてきたようだ。扉が閉まると、わずかな振動と共にかすかな音とともに少しずつ降りているのが分かる。

「これ、動いてるんですか・・・？」

「うん、エレベータって言って遺跡を移動できるものなんだ。しかも結構大きめだからガイアフレームも搬入できるんじゃないかなぁ」

これだと外に直通で出れるみたいだしね。荷物運搬も兼ねているに違いない。

「確かにこれだけの広さだと、ガイアフレームも入りそうですね」
「いま、どこに行ってるのぉコージ？　なんだか降りて行ってる気がするんだけど」
「ミミ、正解。今６５階層を目指してる所だよ。ほら、もう着くよ」
「「え！？」」

驚いてる驚いてる。そりゃあ驚くよね。十五階層から一気にものの数分で六十五階層まで移動できたんだもん。一応、この先は危険だろうから武器を出して警戒しておく。

「そろそろ着くから、戦闘準備お願いね。すぐ戦闘もあるかもしれない」

そういうと即座に準備を整える二人。白夜はそのままで平気だ。

ポーンッ！　ガシュゥウンッ！

そんな軽い音が響き、扉が開いていく。結構大きな音なので、魔物が傍にいれば気をひいてすぐにでもこちらに気づいて襲ってくるだろう。うん、大丈夫そうだね。よし、キラーマシンを探そう。この階層ならすぐにでも見つかるはずだ。そしてカードをたくさんゲットしよう！

この階層のキラーマシンはちょっと手強かった。メインコンピュータがどうも胴体部分にあるらしく、首を落としただけでは止まらなかったのだ。まぁ四肢を切り飛ばせば大丈夫だろうと、即座に切り

落としたんだけども今度は、隠し腕と隠し足まで生えてきた。切り飛ばされて軽量化されたせいなのか、動きがかなり素早く面倒な相手になった。でも、カードが欲しいのでまたまた動けないように手足をなんとか切断し、無事にカードを取り出した。あとは同じ要領でキラーマシンを倒して行ったんだけど、見た目は同じなのに隠し腕を出す奴と出さない奴がいるのだ。だから、隠し腕を出さない奴は急に動き出してもすぐに倒せるように慎重に解体したりしたので、それに結構時間がかかった。

「でも、カードですか？　それのおかげで戻るのに時間が掛からなくて良いですよね」

「うん、おかげでこれからは気軽に遺跡を探索できるよ～」

「コージ、良かったねっ」

そう言って飛びついてくるミミ。セリナも慌てて飛びついてきた。白夜はすでに僕の背中でくーすか寝ている。素早く動くキラーマシンを足止めしてくれたので、疲れたんだろうな。白夜が居なければもっと時間が掛かってたと思う。なにせ、真っ向勝負で力負けしないんだもん百夜は。さすがはフレームなだけの事はあるね。

とりあえず、カードをたんまりゲットできたのでベルスイートとして遺跡に潜るのに問題は無いね。明日はみんなと一緒に遺跡に潜るとしますか！

エレベーター（後書き）

今日からしばらく更新回数が不安定になります。

１１時の更新は必ずしますが、夜の更新があったり無かったりします。

なるべく更新するようにはしますが、来週の頭まで少し不安定になります。

ごめんなさい。

双子の先輩

今日の戦果は普通のキラーマシンが五体、新種の変形するやつが十二体になった。勿論倒したキラーマシンは指輪に収納している。だいたい綺麗に倒しているので、結構いい値段で売れると思う。でも、一気に売れる数でもないので小まめに売りに行くか、ブロックをまたいで売りに行くしかない。指輪にいくらでも収納できるから、場所は取らないんだけどあまりたくさん入れすぎると、指輪の中がごちゃごちゃになりすぎて、いざアイテムを取ろうとした時に時間がかかりそうだ。なので、フレームの素材倉庫用に指輪をもう一つ作ってあるのでそこに移す事にした。

「うーん、カードも色々種類があるみたいだなぁ・・・」

最初に使っていたヒビ割れた奴が青色。他には赤色と黄色と白色とあった。それぞれに役割があるんだろうけど、とりあえずどれもがエレベータや非常口に使えるので調べるのは後回しにしておいた。赤色と黄色が一番数が多くて七枚、青色はひび割れの奴も入れて三枚、白色に至っては一枚しかなかった。

セリナ達には赤色を一枚ずつ渡しておく。いざという時の移動に使えるからね。バルト達にも一応渡すつもりだから、そっちには黄色を渡しておこう。あー・・・でも、カードを渡してしまうと出所を勘ぐられちゃうから、渡さずに僕が持っておく方が良いかな？　一枚だけならセリナ達から貰ったって言っても大丈夫そうだし。うん、そうしよう。

今日は重点的にキラーマシンを倒していたけど、他にもメカは結構いた。なのでまた明日の夜にでも倒しに行くつもりだ。そして、こ

まかく分解して何か良い部品が無いか探そうと考えている。なんにせよ、他のメカからもカードが取れないか良く調べないと駄目だね。まぁ、そこら辺は明日考えよう。今日は流石に疲れたから、とっとと寝るとしましょう。

そしてやってきました放課後。今日はキラーマシンを討伐すべく、二年生の先輩が同行してくれる事になっている。その先輩は二人でキラーマシンを倒せる実力を持っているそうなので、安心なのだ。

「テオ＝マクスウェルだ。よろしく」

そう短く挨拶をする先輩。栗色の髪を少し長めに整え、軽くウェーブが掛かっている。ぱっちり開いた目は大きめで愛嬌があり、口元は緩やかに笑みを浮かべている。だけど軽い印象はまったくなく、あくまで柔らかいイメージを感じさせる人だ。

「ミリア＝マクスウェルよ。この子の双子の姉なの、色々とよろしくね」

そう自己紹介したのは、髪を胸の辺りまで伸ばしている女性だった。双子というだけあってよく似ているのだけど、何故かこの人の方が男らしく感じてしまう。なんでだろ？

「今日はこの二人に同行してもらう。倒せるなら倒して貰って構わないが、基本的に見学しているだけで良い。今後、戦って貰うに当たって情報は必要だからな」

「はい、ありがとうございます！」
「じゃあ、よろしく頼む」
サカキ隊長の短い言葉を聞き、僕たちは遺跡へと向かった。

「それじゃあ、さっそく三十五階層まで行こうか。あとはキラーマシンが良く出没するポイントを回っていこう。それで良いね？」
どちらもマックスウェルなので、名前で呼ばないとどっちがどっちか分からなくなる。ちなみに今そう聞いてきたのはテオ先輩だ。うーん、探査アイテムはどうしようかなぁ。僕が首を捻っていると、同じように疑問に思っていたのか、バルトがこちらに目配せをしてきた。うーん、内緒って事で使う事にしようかな。

「あ、テオ先輩。内緒にしておいて欲しいんですけども・・・」
「ん？　どうしたの？」
「キラーマシンを探せるマジックアイテム持ってるので、それを使って探して回るのは駄目でしょうか？　そっちの方が楽だと思いますし」
「え？」
驚いた顔をしているテオ先輩。まぁ探せるのはキラーマシンだけじゃないけども。
「そんなマジックアイテムなんて聞いた事ないけど、どうしたの？」
「自作でタマタマできたんです。だからまた同じのを作れって言わ

れてもできません。なので内緒にしといて欲しいんです」
「へぇ～・・・マジックアイテム作れるんだ？　分かった内緒にしとけば良いんだね」
「はい、ありがとうございます」

簡単にマジックアイテムが作れると知られたら、色々作って欲しいって言われそうだから内緒にしといて貰う。セリナ達にもあまり大っぴらにしないで下さいねって釘を刺されてるしね。何事も控えめに行こう、うん。あ、買ったって言えば良かったかな・・・

「そんな便利なアイテムがあるなら、そうね・・・最初は私たち二人でするから次の奴はトリックスターだけでやってみない？　良い経験になるわよ」

いきなりそう提案してくるミリア先輩。それは願ったり叶ったりですな。さっそくハルトが食い付いてきた。

「それはありがたいんですが、ええんですか？」
「それぐらい良いわよね、テオ」
「うん。じゃあ決まりだね、それで行こう」

こうしてぞろぞろと八人で遺跡の奥へと向かう事となった。勿論、先頭は僕たちだ。三十五階層に着くまでは、先輩達に楽をして貰わないとね。あとカードは勿論使わないでおく。指輪にしまっておけば、カードを認証しない事が分かっているので昨日からしまいっ放しなのだ。

「でも、良くもまぁこれだけバランスの良い仲間が揃ったものね。羨ましい」
「運が良かったんですわ。このコージのおかげでうまくメンバーが

揃いましてん」

あれ？　僕なんかしたっけ？　・・・あー最初は僕の取り合いになってたんだっけ。僕のおかげと言えば、僕のおかげに・・・なるの？

「うふふ。彼、首を傾げてるわよ？　ほんとなの？」

「いやいや、ほんまですって！　コージ、忘れるのは早いんちゃうか？」

「なんか僕のおかげで良いのかなって、疑問に思ってただけだって。忘れてないよ！」

僕としてはハルトとセシリアの世話好きのおかげで、この面子が揃ったと思うんだけどね。

「で、コージ君に聞きたい事があるんだけど良いかな？」

「はい？」

テオ先輩が急に僕に話しかけてきた。

「エイジスと付き合ってるの？」

「それは有り得ません！」

「え！？　なんでっ！？」

いや僕からすれば、なんで付き合わないと駄目なのよ！　って感じなのですが。

「先輩せんぱい。コージはこう見えて、結構なタラシなんで既に奥さんが四人おるんですわ。そやさかい、生徒会長の入る隙は無いそうです」

ぐぬぬ、ハルトめぇ・・・間違ってないけど正しくも無いよね、それ！　見ろ！　その言葉を鵜呑みにした先輩達の冷たい目線を！
僕が鬼畜外道みたいな目で見てるじゃないか！

「コージ君、いくら一夫多妻制とはいえ若い内からそれは駄目だとお姉さんは思うな」
「うん、いくらなんでも一人をしっかり捕まえてからにした方が良い。でないと、将来困る事になると思うよ」
「いや、その・・・はい、分かりました」

なんというか弁明するのも難しいし、面倒くさい。なんか先輩が二人とも真剣な表情で説得してくるんだもん。僕がこのままだといずれ刺されて死んじゃうって考えてそうだし。ハルトを見ると、今にも口笛を吹きそうな顔で飄々としている。セシリアもエリーもだ。くそぉー後で仕返ししてやるぅ。

「うむ、分かってくれて嬉しい。じゃあ気を取り直して行きましょう！」

僕を更生できたと疑わないミリア先輩は元気一杯だった。とほほ。

「で、コージ君。どっちにキラーマシンが居るのかな？」
「この通路の先をまっすぐ奥まで進んでから右の方の奥に居るようです」
「ほいきた。行こう姉さん」
「了解っ」

三十五階層に着きすぐさまキラーマシン討伐に向かう。最初は言っ

ていた通りに見本を見せてくれるようだ。先輩はどういう戦い方をするんだろうか。かなり興味深い。どちらも剣と杖を持っているスタイルだ。魔法剣士・・・みたいだけど、なんか少し違う気もする。どっちにしろ戦いを見ればはっきりするかぁ。

テオ先輩は明るい見た目とは裏腹に闇系統の魔法を使う人だった。キラーマシンに接近せずに穏やかに立ってるなと見ていたら、キラーマシンもテオ先輩に気づいたらしく即座にマシンガンを連射してきた。

「“闇よ！　空間を反転させろ！　リバース！”」

テオ先輩に向かって放たれた弾丸は、次々にキラーマシンへと帰っていく。一瞬動きが止まったキラーマシンだったが、弾丸を反転させられた事に気づかなかったのか、もう一度連射する。そして反転する先輩。ようやく何か違うと気づいたキラーマシン。接近戦を挑もうと距離を詰めようとするが、そこへミリア先輩が魔法を詠唱した。

「“氷よ！　大気を凍らせ壁と成せ！　アイスウォール”」

キラーマシンの進路を阻むように氷の壁を作りまくるミリア先輩。キラーマシンの胸の辺りまでの高さがあり厚さもかなり分厚いようだ。

「“絶刃裂波”」

そこへかなりの気力を溜めた「絶刃裂波」をキラーマシンの首元を狙って放つテオ先輩。鈍い音を立ててキラーマシンの頭部が床に転がり戦闘は終了となった。

この先輩達、倒しなれてるや・・・

キラーマシンを真っ向から苦も無く倒す。これが二年生の実力なのか。魔法と技の威力はそれほど違うとは思えないが、使うタイミングと速度が違うのは分かった。

たった一年の差。されど一年の差。

さして大きな差ではない筈なのだが、明確な差異を目の前で厳然たる事実として突きつけられた。実力を持って一年と二年では違うものだと実感させられた。

「ハルト、お前ならキラーマシンを切断するだけの技を出すのにどれぐらい掛かる？」

「三秒。いや四秒はかかるやろな」

悔しいけどな、と呟くハルト。こいつも先程の戦いを見て思い出していたのだろう。先輩はわずか二秒ほどの溜めでキラーマシンを切り落とした。同じ威力を出すのにハルトだと四秒の溜め。たった二秒の差とも言えるが、戦闘中にできる事を考えればその時間は恐ろしく長いものとなる。

「大丈夫だって、僕たちならキラーマシンに負ける事はないって」

満面の笑顔でなにも考えてない顔をして励ましてくるコージ。だが、実際に何の不安も抱いていないのであろう。トリックスターとして戦って半年が過ぎた今、それぞれの実力はお互いが把握していると言ってもいい。勿論、一番の成長株はコージだ。こいつの成長具合は半端じゃなく、自分でも力を付けているのが良く分かっているの

だろう。

「コージは気楽でええなぁ。そやけどまぁ、キラーマシンに負ける事はないってぇのは同意やな。あとは先輩たちより早くキラーマシンを倒すだけや」

「気が早いわよ、ハルト。まだキラーマシンと戦っても居ないじゃない」

「でも、目標を立てた方が気合が入る」

エリーも同じ氷系統を使う先輩に対して、何か思う所があるのだろう。やけに気合が入っている。だけど、テオ先輩が使った闇系統の魔法は始めて見たな。使い手が非常に少ない事で有名で、そのせいで闇系の呪文はまだまだ発見されていないのが現状だ。先程使っていた呪文の効果も、現象から推測するしかできない。

「で、コージ。キラーマシンはどこにいるんだ？」

さて、俺達も経験を積んで成長せねばなるまい。

「じゃ、次は君たちでやって見る番だね。何かあったら、すぐにサポートするから安心してやってみて」

テオ先輩がそういって僕達を優しい目で見ている。戦闘の時でも、その優しそうな風貌はまったく変わって無かったんだけど、こういう人を怒らせたらどうなるんだろうね？　興味はあるけど当事者にはなりたくないね、うん。そういえば、テオ先輩がさっきの戦闘で使ってた闇魔法。僕以外に闇系統を使える人を始めてみたや。しっ

かり覚えたから、次の戦闘で早速使って見よう。

「じゃあ、皆ついてきて～」

アイテムを頼りに次のキラーマシンを探す。少し遠い所にいるようで、エンカウントするまで時間がかかりそうだ。三十五階層もしっかり調べていないから慎重に進んでいく。そして見た事のない装飾過多な扉を開けようとした時、ミリア先輩に止められた。

「ちょっと待ってコージ君。そこは結構な確率で危ないのが居るんだけど、そこを通らないと駄目？」

「ほえ？」

この扉を超えた先にキラーマシンが居るんだけど、アイテムを見る限り他に近道も無さそうだ。かなり迂回すれば通れるかもしれないけれど、時間が無くなってしまうだろう。

「危ないのって言うのは、なんなんです？」

「トリックパペットって言うメカよ。大きさは人と同じぐらいなんだけど、多彩な武器を使ってくるわ。防御力もキラーマシンとは比べ物にならないわね」

なんというか、どういう仕組みで動いているか非常に興味がある。是非、手に入れたいなぁ。

「しかも、倒したと思ったらすぐ爆発するし。なんというか、かなり強い癖にそんな事をするから手を出す人は居ないわね。何故か、この部屋にしか居ないようだから簡単に回避できるからありがたいんだけどね」

て事はその先に何か良い物がある可能性がある。他の人には分からなくても僕には分かる可能性が高い。それに、トリックパペットを爆発させずに持って帰れたらそれこそ良い物が山ほどあるかもしれない・・・ぐふっ。

「おいコージ。またフレームの事考えとるやろ。気持ち悪いのが出とるぞぉ」
「はっ」

落ち着こう。こんな時には深呼吸。

すーはー・・・

ふぅ。ちょっと妄想しちゃうと気持ち悪くなっちゃう癖をどうにかしないとね。トリックスターの仲間は理解してくれてるけど、知らない人が見たら即逃げられるぐらいだそうだ。へこむ。

「で、どうする？　その先に居ない時もあるけれど、結構な確立で居るわよ。しかも私たち二人でも倒せない相手でもあるわ」
「そんなに強いんでっか」
「そうねぇ。なんというかマトモに戦えないのよ。幻影をうまく使ってくるし、攻撃が当たったかと思ったら、身代わりの人形だったり。そこで油断したら、身代わりの人形の下から本体が出てきて手痛い一撃を食らったり。罠を仕掛けたりもするわね。気づけば一歩も動けない状況になった事もあったわ」

そうとう手酷い経験だったようで、遠い目をしているミリア先輩。

「結局、あいつは部屋から出れば追いかけて来ないから、氷魔法の壁で退路を作って逃げたわ。何をしてもダメージを与えられないし、

かといってこっちは徐々に削られていくばかりだったのよね。ほんと、嫌な思い出だわ」

なんか、嫌な思い出しかないのね。聞くだけで相当苦戦したのが分かるなぁ。でも、どんな敵かちょっと見てみたい気持ちもある。

「バルト」

「なんだ、コージ。・・・きらきらした顔をこっちに向けるな」

「トリックパペットって見たくない？」

「ないな。先輩ですら苦戦した相手だぞ？」

僕の言葉に速攻で渋面で答えるバルト。だけど、逆に考えてほしい。先輩が苦戦した敵を僕達がさらっと倒したら、キラーマシンを素早く倒すより凄い事じゃないだろうか。

「コージ君、声に出てるよ。確かにトリックパペットを倒せるたら凄いんだけどね。そう簡単に倒せる相手じゃないって」

苦笑交じりに指摘してくるテオ先輩。僕も簡単に倒せるとは思ってはいないけど、やってみないと分からないじゃないかな。宝くじも買わなきゃ当たらないって言うしね！

「じゃあ、ちょっと見るだけ。見るだけでいいから！」

「コージ、おっさん臭いわよ。あなたは本当にフレームが絡みそうになると、粘り強いわよね。どれだけフレームが好きなのよ」

自分でもそう思うけど、好きなものは仕方ない。しかも今はフレームに永らく乗ってないせいですこし禁断症状が出ている気がしないでもない。週末にでも白夜に乗せて貰おう。

「まぁ、さっきも言ったように部屋から出てしまえば追ってこない敵だから、見るぐらい良いんじゃない？」
「おぉ・・・」

ミリア先輩素敵！　良くぞ言ってくれました！さぁさぁ！とりあえず見るだけでも良いから見ようよ！

「・・・少しだけだぞ」
「やったぁー！」

バルトの言葉に喜ぶ僕。だけど喜んでるのは僕一人だけだった。・・・あれぇ？　んーどうでもいっか。早速、どんな奴か見てみよう。

ガッションッ

扉を開く音が響く。静かに開けようとしても、扉は結構な音を立ててしまった。これでは敵に気づかれない方がおかしい。でも部屋から出れば敵も追いかけて来ないとの事なので、少し隙間を開けて覗いて見よう。

この部屋は他の部屋とはまるで様子が違った。壁は言うまでも無く、床や天井まで装飾が描かれ、小さいながらも丸いガラスが多数はめ込まれている。それがどこから洩れてるか分からない光を反射し、綺麗に光を躍らせていた。

「あいつ・・・か」

そして部屋の中央につるんとした頭部の人形がいた。ピエロが首に着けそうな奴をすっぽり嵌めて、ひょろひょろとした手足は、素早く動くのに支障は無さそうだ。僕が部屋の扉を開けた事で、そのど

ちらを見ているか分からない頭部をこちらに向け僕達を観察している。どうやらしっかり見つかったよう・・・だ?

「!?」

部屋の中央にいたトリックパペットが、一瞬姿が消えたかと思うと次の瞬間にはもう扉の前に立っていた。なんだ? 移動したのが全く見えなかったぞ!?

「こいつは、えらく歯応えがありそうな奴だ」

気づけば僕は部屋の中へと一歩、足を踏み入れていた。

トリックパペット（後書き）

豪獣神。食玩ですけど凄くカッコイイデス。ドリルついててさらにロマンです。あなどれない・・・

すいません、もうしばらく一日一話更新が続きます。

僕は目の前に現れたパペットに剣を突き出す。狙いは腰の間接部分だ。だが、確かに貫通したかに見えた剣に手ごたえは無く、そのまますり抜けてしまった。

「残像！？」

そう思った瞬間、僕はさらに前方へダッシュする。いつの間にか後方に回ったパペットの攻撃をかわす為だ。だけど、パペットは様子を見るようにこちらを伺っているだけだった。

「コージ、無茶するな。おまえ本気でやりあう気か？」

「そうよ、勝手に一人で突っ走って！　危ないじゃない」

遺跡に入ってきてるんだから、危ないもくそも無いと思うよセシリア。

「素早い敵だけど、なんとかなりそうな気がしない？」

「先輩ですら、倒せなかった相手なんだぞ？」

なんかバルトの判断基準が今日はおかしい。いつも冷静に見極めている筈なのに。

「バルト、先輩だからって絶対じゃない。先輩達は駄目だった、だからって僕達も駄目って決まったわけじゃない。でしょ？」

「ぬ・・・」

「せやな、コージよう言った。それに先輩だけやのうて誰よりも強くなろう思うてるんやったら、自分たちの目でしっかり見極めんと

な」

僕達が戦闘するか決めかねているのを分かっているのか、パペットはゆらりゆらりと動くだけで、こちらに向かっては来なかった。

「そうだな。俺が間違ってたようだな。よし、皆やれるか？」

「オーケーだよ」

「いける」

「仕方ないわね、付き合うわ」

結局なんだかんだ言って皆も戦ってみたかったんだね。そして、僕達の意思が決まったと見るや、パペットはいつの間にか手に持っているマジックアローを無造作に撃ちだした！　って、壁や天井などのあらぬ方向に撃ちだしているのにこっちにアローが向かってくる。ホーミング！？

「なんの！」

僕とレイは素早く反応し、魔力の塊であるマジックアローを、気力を混めた剣で弾いていく。パペットはそれを見て動きながらマジックアローを連射してきた。

「せいっ！」

いつの間にか現れたハルトが、パペットの横合いから斬りかかる。だけど、その攻撃に驚いたりせず、するりとかわすと、これまたいつの間に取り出したのかもう一つマジックアローを取り出し適当に連射する。

「おわぁっ！？」

何故かホーミングするアローを、攻撃がかわされた瞬間に撃たれたので食らってしまうハルト。このパペット、武器を取り出す瞬間がまったく分からない。僕と同じ闇系の魔法でどこかに収納してるんだろうか？　となると、厄介だな。

「“氷よ！氷よ！　我が意を以って槍と化せ！　アイスランス！”」

少し動きが止まった瞬間を狙って、エリーが魔法を放つもどこからか取り出したワイヤーでアイスランスを粉々に砕く。そしてエリーの目の前までいつの間にか移動したパペットは、ワイヤーでエリーを攻撃する。

「あっ！？」

ワイヤーはエリーが持つ杖を弾き飛ばし、足に巻きついてそのままエリーを逆さに持ち上げた。あ、パンツ！

「って、なんて事してるんだぁあああ！」

あまりの光景に固まっている皆の中から、いち早く立ち直った僕は、エリーをぶら下げているワイヤーに向かって突撃、見てはいけないけど見なければいけない。

「“絶刃裂波”」

ゼロ距離からの衝撃波。エリーに当たらないように斜め上に向かって撃ちだす。そして、ワイヤーから解き放たれたエリーを抱きかかえ、パペットから距離を取る。

「大丈夫？」
「見た？」
「・・・」

見たも何も見えないほうがおかしい。ここはなんて言えば・・・

「助けたからチャラって訳にいかない？」
「見たかどうかを聞いている。見た？」

あくまで論点はそこなのね。心なしか顔が赤いエリー。こんな事をしてる場合じゃないと思うんだけど、レイとセシリアがパペットを攻撃しているおかげで、こちらには向かってこない。だけど、パペットはゆらりゆらりと揺れながら二人の攻撃を回避しながら、何故か顔をこっちに向けている。なんか馬鹿にされてる気分だ。

「えーっと・・・見ましたよ！　えぇ、ばっちりこの目で見ました！　水色の可愛いパンツだったですよ！」

パペットの怒りが何故かエリーに向かって逆切れの形で現れてしまった。

「今度はもっと可愛いのを見せよう」

なんで顔を赤らめながらクールな口調でそんな事を言うんですか、それは良いですから、結構です！　セリナ達に聞かれたら僕がやばい！

「全部、おまえのせいだぁあああ！」

八つ当たり気味にパペットへ斬りかかる。話は終わった？　という

風に首を傾げてこちらをのんびり見ているパペット。仕草は可愛いが余裕の現れなんだろうな。肩口から斜めに切下ろして、すぐさま返して切り上げる。切り上げる途中で風魔法で横なぎに変化させるが、その全てを読み切っているかのように、紙一重でかわしてのけるパペット。

そして、僕の連撃が止まる瞬間を狙ってレイがパペットに襲い掛かる。だけど、パペットはそんな僕達のコンビネーションなどお見通しで、レイの攻撃にカウンターを当てつつ僕に向かってワイヤーを飛ばして、僕達を跳ね除けた。

「くそっ。全然あたらないしかすらない！　レイはどう？」
「パペットの攻撃を食らってばかりだよ、こいつ逃げるの上手いね」

トリックスターの面子の中でスピードに抜きん出ているのは、レイと僕だ。その二人で近接攻撃を当てられないとなると、結構厳しい。どんな原理かさっぱり分からないけど、忍者みたいに身代わりの術や、残像を使われて僕達の攻撃はまるで当たらない。かすりすらしないのだ。

「ね、当たらないでしょ？　しかも、人を小馬鹿にした態度がすごく上手くて余計に腹が立つのよねこいつ」

ミリア先輩が憎々しげにパペットを見ながら、愚痴を言う。

「先輩達は見ていて下さい。仇はとりますから！」
「まだ死んでないわよっ！」

あ、仇をとるってそうだったっけか。いやいやごめんなさい。レイやセシリアの攻撃を回避してまわるパペットに業を煮やしたハルト

が、そこで動きだした。

「でりゃぁああ！」

力任せの一撃。ガンッ！　と凄い音を立てて床を削るハルト。レイとセシリアがハルトの参戦をみて、うまくハルトのほうに誘導したんだけど、それでもやっぱり当たらない。だけど、ハルトは諦めない。

雄たけびを上げながら愚直に剣を揮う。だけど、常に一撃必殺をモットーにしているらしいハルトの攻撃は戻しが遅い。なので、一撃をかわされる度にワイヤーの攻撃を貰っている。攻撃は全て回避しているのに、パペットはハルトに脅威を感じているのか僕達を相手にしている時より、攻撃を重視している気がする。

「“我に与え給え聖なる奇跡！　ヒールタッチ！”」

バルトの呪文が傷ついたハルトを癒す。いつも思うんだけど、触ってないのにタッチってこれいかに。まぁ、そんな事はどうでもいいか。

ハルトを援護する為に、レイとセシリアがパペットに向かう。だけど、パペットが警戒しているのはあくまでもハルトで、振り下ろそうとした剣をワイヤーで絡めとって止めたり、衝撃波を飛ばそうと気力を混めようとした瞬間に、マジックアローで吹き飛ばして集中力を乱したりしている。その間もレイとセシリアの攻撃は続いているのだが、変わり身の術や回避をするばかりで、まったくと言って良いほど攻撃を仕掛けない。

全力のハルトの攻撃は、かなり強い。現に今も床や壁にハルトの攻

撃の爪あとが残っていて、せっかくの部屋の装飾が結構ボロボロになっている。なんというか勿体無い。あれだけの威力を見せ付けられたせいなのだろうか、ハルトを警戒する理由は。あれだけの回避能力を持つパペットからすれば、ハルトの攻撃は鼻歌交じりで回避できるはず。なのに、ハルトだけを狙い沈めようとしている。

何故だ。

ワイヤーとマジックアローでは埒が明かないと感じたのか、パペットは銃のような物を取り出した。やばい！　あれがマグナム弾とかだったら、ハルトだろうと危ない！

「逃げろっ！」

僕の必死の叫びもむなしく、パペットから銃が発射された。

ドンッ！

「ぐわっ！？」

凄い勢いで吹き飛ばされるハルト。だけど、どこにも穴は開いていないし千切れ飛んでる所もどこもない。あの武器はなんだ？

「くあー・・・耳鳴りがする・・・ようもやってくれたな、この人形め！」

音の攻撃か！　あの人形め、中々に嫌らしい攻撃をしてくるな・・・だけど、それだけにハルトを真っ先に倒そうと考えているのが良く分かった。僕達がしてなくて、ハルトがしている事ってなんだ。分からない、何が違うっていうんだ。攻撃力が滅茶苦茶高いから狙っ

てくるって事なのか？　本当にそれだけか？

「でりゃぁ！」

バルトに回復魔法を掛けて貰い、即座に全力で斬りかかるハルト。
しかし、その攻撃はワイヤーでうまくいなされ、体勢を崩されてしまう。慌ててレイがフォローに入り、パペットのワイヤー攻撃を防ぐ事ができたが、パペットは執拗にハルトだけを狙う。

「“氷よ！　大気を凍らせ壁と成せ！　アイスウォール”」

このままだとジリ貧になると考えたバルトが、エリーに指示し立て続けに氷の壁を出させ、パペットを閉じ込める。そして、その間に出口に向かって僕達は逃げ出した。

バタンッ！

先輩が言った通り、扉を閉めるとパペットは特に追って来る事は無かった。
扉が閉まる瞬間に見えたパペットは、慇懃無礼におじぎをしていた。

・・・くそっ

明日へ繋ごう

「うーん、残念だけど今日は時間切れだね。お疲れさん」

テオ先輩がそう言い、僕たちは遺跡を後にする事にした。結局あれからキラーマシンを倒す事はできず、遺跡内をうろうろとするだけだった。本当は非常に良い事なんだろうけど、三十五階層付近にキラーマシンが居なくなっているのだ。おかげで、パペットで喪失した自信を取り戻すには時間が掛かりそうだった。

「まぁ撤退のタイミングとしては悪くなかったんだし、これも良い勉強になったって思わなきゃ。中々居ないよ、あれだけの強さでしつこく追いかけて来ない敵なんて」

確かにそうだ。ある程度強い敵はこちらを倒すまで追いかけてくるのが基本だ。だからミリア先輩の言う事も一理ある。あるんだけどやっぱり納得いかない。なんとかなりそうだと見極めた筈なのに、結局ダメージを与えられずに逃げ帰る結果になった。もう少し戦っていれば何か掴めたかもしれないけれど、あの場面では撤退するしかなかった。もっと、見る目を養わないと駄目だね。

「今日はキラーマシン一機だけって、喜ばしい事よこれは。このまま、上がってくる奴が少なくなってくれたら有難いんだけどね」

テオ先輩がそう愚痴る。聞けば、連日遺跡へ突撃させられているそうで流石に疲れがたまってくるそうだ。肉体ではなく精神的な疲れが。ベルスイートにおいて下っ端といえば二年生であった。だけど、僕達一年生が入った事で一番の下っ端はハルト達って事になった。とはいえ、ある程度の実力がなければベルスイートの活動はできな

いので、ハルト達が実力をつけるまでは、二年生が下っ端になるようだ。うーん、世知辛いねぇ。

「じゃあ報告して帰ろうか。あのパペットの攻略も考えなきゃだし」
「やっぱり諦めてへんか、コージは。まぁ、わしもあいつに一発ぶちかまさな気がすまんけどな。今日の借りを三倍にして返したるわ」

がっしと強い握手を交わす僕とハルト。うん、絶対あのフザケタ奴をぎったんぎったんにしないと気が済まないよね。呆れた顔をして僕らを見ているトリックスターの面子は気にしないでおこう。

ギュィイイイイイイイィィィ・・・

地下にある格納庫に響き渡る駆動音。今、ここではガイアフレームの起動テストが行われていた。いや、この巨体ではガイアフレームと果たして呼べるだろうか。一般的なガイアフレームの全高がおよそ八～十メートル。それがこの格納庫でテストが行われているフレームは三倍以上の四十メートルはある。その大きさは今までのフレームの大きさの概念をぶち壊す巨大さだった。

「おい、ギガンテスの調子はどうだ。いい加減使えるようになって貰わんとな」
「これはこれはゲオルグ様。作業は順調に進んでますので、あと少しお待ちください」

巨大なフレームの前で、忙しく調整をしていた小男はゲオルグが声

を掛けてきた途端にぺこぺこと頭を下げている。ギガンテスと呼ばれた機体は外観はしっかり出来上がっている様にも見えるが、これだけの巨体故に調整も難しいのであろう事が見て取れる。現に今も作業員が作業用通路を忙しく動き回っているからだ。

「そればかりだな、おまえは。で、あれを破壊するだけの力は当然あるんだろうな？　それができないと話にならんのだぞ？」

と、ゲオルグと呼ばれた男は小男に睨みを利かせる。その眼光の鋭さに震え上がりつつも小男はしっかりと答えた。

「そ、それはもちろんですっ。このギガンテスならば魔石獣を薙ぎ払いながら、あれをぶち壊す事ができましょう」

「なら良い。その力を存分に奮えるように調整を怠るな。いいな？」

「は、はい！　勿論であります」

それだけを言い、ふっと、鼻で笑いながら格納庫から去っていくゲオルグ。ギガンテスが出来上がる期限を切らなかったのだが、その事が余計に実力を示さないと恐ろしい事になると暗示していた。なんと言っても貴族というものは、平民を傷つけるのに躊躇いは無い。果物の皮はめくって食べるのが当然のように、貴族が平民を虐げる事は当然だと考えているからだ。

「だが、チャンスはチャンスだ。誰も見向きもしなかった巨大フレームの製作に資金を提供してくれるのだからなぁ」

フレーム開発のメッカであるロバスであってもそれは例外ではなく、巨大なフレームを開発、もしくは開発しようとしている職人は誰一人として居なかったのだ。今までに発掘されたフレームの大きさを何の疑いも無く模倣し、変えようとはしない。大きさは力だ。大き

ければ大きいほどその巨体から繰り出される攻撃は威力を増し、誰も止められなくなる。小回りの効くフレームがちょろちょろすると は思うが、それとてこちらの攻撃が当たりさえすればそれで粉々になる。小さければ、大きい奴に敵う筈が無いのだ。

「くっくっく。大きいってのはどんな気分だろうなぁ・・・」

自身が背の低い男であるが故のコンプレックス。体が小さく、いつもいじめられていた為、隠れるようにこそこそと生きてきた。体の大きな者は、体の小さい者を当然のように顎でこき使い、遊び道具にすらしていた。小男は自分の半生を省み、いつか見返してやると勉強してきた甲斐があったと考える。幸いにしてフレームの開発能力がある男は自身の見果てぬ夢をフレームに託せたからだ。

大きくなって、小さい奴を蹂躙してやるという夢を。

それは歪で暗い情念が生み出したフレームであった。

「お母さんね、寂しくて死んじゃうよ?」

帰るなり、ミミを抱きかかえたまま玄関に出迎えに来た母さんは僕にそう言った。丁寧に頭にはうさぎの耳のおもちゃが付けてあった。白夜につけたら似合いそうだ。

「うさみみ似合ってるね母さん」

まずは軽いジャブ。うざさメーターが高い時は、普段はストレートの威力の言葉でもジャブにしかならないのだ。

「うん、当然よね。母さんこんなに可愛いんだもん」

「うぎゅぅ・・・」

かなり色々成長したはずのミミなんだけど、母さんを振りほどく事はできないようだ。ちょっと涙目で僕に助けを求めている。だけど、ミミを抱きしめているからこの程度のうざさで済んでいる訳なので、今ミミを救出する事はできない。諦めてくれ。

「あ。また母さんをほったらかしにする。いいもぉーん、すねちゃうもーん」

目と目でミミと話し合ってると、そういって、ちらりちらりと僕の顔色を伺う。これは泣いて縋って引き止めての合図なのだ。やりたくないけど、ここでやらなきゃ後がすっごい面倒なんだ・・・

「うさみみの似合う可愛い母さんが、眩しくて話しかけるのが恥ずかしかったんだ・・・ごめんね母さん、僕が悪かったよ。だから機嫌なおして？　ね？　ね？」

ミミがぽかーんとして僕を見ている。うん、自分でも誰だ！　って思うんだからそんな顔で見ないで欲しい。お願い！

「・・・それほんと？」

「うん、可愛いよ」

ちらっとこっちを見る母さん。そして返事をする時に褒める事を忘れない。

「うさみみ似合ってる？」
「すっごく似合ってる。うさぎの女神様みたい」

警戒心の強い子猫が、少しずつ警戒を無くして来たかのように、にじりにじりとこちらへと顔を向けてくる。あと少しだ！

「・・・ちゅーしたくなる？」
「そうだね、ちゅーしたくな・・・ったら駄目でしょうがぁあああ！」
「あひょー！」

あと少しだっていうのに、我を忘れて怒鳴りつけてしまった。でも、いたずら小僧のように笑いながら逃げていった所を見ると、単に僕をからかってたようだ。はぁ、ほんといい大人な筈なのに疲れるよ。

「コージ、やっぱりお母さんにえちぃ事したいの？」
「ミミ、余計疲れるから変な事言わないで、お願いだから・・・」

ミミの純真な瞳でそんな事を聞かれると、どっと疲れが押し寄せてくるよ、ほんと。母さんは本当に碌な事をしないんだから。

とはいえ、母さんを最近ほったらかしにして夜な夜な出掛けたり、週末もセリナ達と出掛けたりしていたので、本当に寂しかったのかもしれない。父さんも単身赴任してるもんね。仕方が無い。今日は家でみんなでカードゲームしたりして、母さんに付き合う事にしよう。たまにはのんびりして身体をゆっくり休めなきゃね。うん。

怒りの反芻。よく噛みましょう

ゆっくり休む？　そんな考えくそくらえ。あ、ごめんなさい。うんこくってしまいなさい。

「あー・・・腹立つなぁ・・・」

思い出されるのはトリックパペットの姿。僕達が逃げる間際に見せたあの慇懃無礼なお辞儀。完璧に馬鹿にされてた。確かにまったくと言って良いほど僕達の攻撃は当たらず、向こうの思うがままにやられていたけど、それにしたってここまでコケにされてしまっては、あいつを倒さずにはいられない。

「僕って意外と負けず嫌いだったんだなぁ」

なんというか、ここまで悔しいと思うのは久しぶりな気がする。というか片手で数えられるぐらいしか無い。今はそんな事はどうでもいっか。とにかく今日の事を良く思い出して何かあいつを倒すための糸口を探さないと駄目だ。

「て言っても、特におかしな所は思いつかないんだよね」

一つずつ整理して行こうか。あいつの攻撃はどんなのだったっけ。まずはワイヤーだ。あれは使いようによっては、かなりの痛手を食らいそうな物だけどバルトの防御魔法のおかげで、肉が抉れるような威力ではない。当たり所が悪ければ骨折するかも？　ってぐらいだ。次にマジックアロー。威力はごく普通のようで立て続けに食らうとやばいかもしれないが、そこまで脅威に感じる物ではなかった。ホーミングしていたのが謎だったけど。次に音波銃だけど、あれが

一番痛そうだ。でも、一撃でやられてしまうという物でもない。

「こう考えると、あいつの攻撃は大した事無いんだよな」

だが、こちらの攻撃が一発も当たらないとなると事情が変わってくる。向こうは簡単に攻撃を当ててくるのに、こっちは全く当たらないんだから、ある意味じわじわと嬲り殺されるとも言えるだろう。いや、逃げる奴は追わないから殺しはしないか。プライドはずたずたにされるだろうけど。

だけど、残像なんて初めて見たなぁ。あれだけくっきり見えるものだとは思わなかった。というか、あいつの残像と本体との見分けがつかない。確かに剣は吸い込まれているはずなのに、手応えは無い。だけど、手応えが無いから残像とかではなく、ちゃんと攻撃を当ててくる。まるで攻撃の瞬間だけ実体化してる感じだ。いや、実際に実体化したり存在を希薄にしたりすれば分かる自信があるから、それは無いって分かるんだけどね。

「うーん・・・二人がかりでも三人がかりでも魔法でも駄目。魔法にいたっては掻き消されたりするし。基本的に防御能力が桁違いだよなぁ」

それに倒すと自爆するとか、どんだけ解析されたく無い奴なんだ。残骸が残っていれば分解して弱点を探したりできるかもしれないけど、ご丁寧に粉々になるというんだから全くもってあいつは人を馬鹿にするのが得意だと思う。でも、自分が倒される確立を減らすという観点から見れば、悔しいけれど凄いと言うべきだろう。

あと、何故かハルトを執拗に狙っていたのはなんだったんだろうか。

確かにハルトの馬鹿力は凄い。今日なんか特に壁も床も削りまくってたし。いつもは攻撃が敵に当たってるから分かってなかったんだけど、今日はまったく当たらなかったので、その被害は全部床と壁に向かったのだ。

・・・全部？

そう全てが壁や床に当たっていて、パペットにはまったくかすりもしていない。良く思い出せ。壁や床に攻撃が当たりそうな時は、ワイヤーで防がれてなかっただろうか。エリーのアイスランスも避ければそれで済むはずなのに、わざわざワイヤーで破壊していた。ハルトの技も出す前から邪魔をしていたし、レイの風魔法もワイヤーやマジックアローで相殺していた。という事は壁や床に何かあるのかもしれない。

これはちょっと試してみる価値がありそうだ。

「光司、ちょっと」

「ん、何？」

朝、学園に向かおうとしている僕を母さんが呼び止める。なんだろう珍しい。

「少し、気をつけなさい。ヒロコちゃん、様子が少し変なのよ」

「え？」

確かに以前と違って、最近家では静かなんだけど学園ではしゃいで

いるのかと思ってた。

「あの子、印の精霊なんでしょ？　あなたは忘れてるかもしれないけど「王の印」は光司が持ってるのよ？　印の力は使ってるの？勇司さんは極力使うなって言ってたんだけど」

「いや、印の力なんて良く分かってないんだ。だから使ってるかどうかは分からない。でも使ってないと思うんだけどね。印もちっとも大きくなってないみたいだし」

印の力を使ってないんだから、精霊のヒロコの力が減るとは思えないんだけども・・・

「そう・・・でも、ヒロコちゃんを気をつけてあげて。時々、あの子が苦しそうにしてるのは確かなのよ。だからお願い。ね？」

「分かったよ、母さん。教えてくれてありがとう」

少し気をつけてみよう。なんにせよ、印の力を使わなければ大丈夫でしょう。その為に自分を鍛えまくってるんだもんね。もっと頑張ろう！

「お待たせー、じゃあ行こっか」

母さんと話してる間、少し離れた所で待っててくれてる皆の所に駆け寄る。今日もエイジス先輩が一緒だ。

「ねぇねぇ、コージ君。好きな食べ物って何？」

「パンチョのモモ焼き」

ちなみにテリヤキチキンみたいな食べ物だ。パンに挟んで食べるのもおいしい。

「ちなみに私は、パニモア鍋なの。だけど、一人で食べるには寂しいから中々食べられないのよね」
「小さい鍋で食べたら大丈夫ですよ。一人鍋用の鍋って売ってなかったっけ・・・」

元の世界だと小さい土鍋で、鍋焼きうどんを食べてた覚えがあるから、あれで鍋とかすると一人でも楽しめると思うんだけどなぁ。

「違うわよ、一緒に食べないかって事。ほんとこういう事にはすっごく鈍いよねぇ、コージ君は。知らない間に可愛い女の子を逃してるかもしれないわよ～？」

毎日毎日エイジス先輩と顔を合わせていると、異性という感じがしなくてお姉さん的な感覚になってきた。少々うざい時はあるけれど、母さんに比べると全然マシだ。ふと、ヒロコを見る。いつもどおりぼーっと歩いている。だけど、おかしい。食べ物の話に全然食いついてこないのは、いつものヒロコとは違う。母さんに言われて気づくなんて、僕も駄目だなぁ。

「ヒロコ？」
「ほえっ！？」

僕に声を掛けられるとは思っていなかったのか、素っ頓狂な声を上げるヒロコ。

「エイジス先輩が、パニモア鍋を食べたいから付き合って欲しいんだってさ。おいしいらしいぞぉ？」
「え！　食べるよ！　おいしい物ならいつでもオッケーだよ！　何時行くの？」

「ちょっちょっと！　コージ君を誘ったのに失礼ね！」
「えぇ・・・ボクには食べさせてくれないの・・・？」

ぎゃあぎゃあと一気に騒がしくなった。よかったいつものマイペースなヒロコだ。なんというか、本当にぼーっとしてただけなのかもね。

「じゃあ、エイジス先輩とヒロコがお食事してる間に、私たちは「レアリア」でお食事に行きましょうか」
「うん、ミミも行くぅ～」

なにげにヒソヒソ話すからこの二人、恐ろしい。でも、行くなら皆で行かないと駄目だよ、二人とも。そして、じーっと白夜を見る。白夜に装備するパーツを考える。白夜には飛行ユニットをつけたいんだけど、もう少しかっこいい形にしたいんだよね。ブースターを追加して機動性をさらに確保したいし。フレームって空を飛ばないから、制空権を握れるのは強みになるんだよね。

「コージ、ストップストップ。にやにやが出てるよぉ？」

むにゅっと抱きついてきて、僕を正気に戻してくれるミミ。あぁ、ありがとう。最近フレーム中毒の禁断症状が出やすいんだよね。一人前になるまでは我慢しようと決めたんだけど、やっぱりどうしてもフレームの事を考えてしまう。その度に、セリナやミミが今みたいに正気に戻してくれるんだけどね。しかし、ミミ。また育ったようだね。

「あ、ちょっとイチャイチャ禁止！　生徒会長として見過ごせません！」
「じゃあ、帰ってからこっそりする事にしますね、生徒会長」

「それはそれでもっと駄目なの！　家でそんな事したら一体誰が止めるのよ！」
「いや、セリナ達が止めてくれますよ？？？」

そもそも、イチャイチャとかしてないのにね。僕の暴走を止めてくれただけだし。あまり外で暴走すると周りの人が引くらしいから、家で暴走するようにしようと思っただけなのにこの生徒会長は、小姑みたいにうるさいよね～。

「それよりもこんな所で油売ってると遅刻しますよ、エイジス先輩」
「大丈夫だもん、生徒会長だし」

生徒会長だと遅刻免除の特権でもあるのだろうか。いや、そんな物は無いだろうな。この先輩のいつもの適当な言い訳なんだろう。きっと。

「はいはい、それじゃあ一般生徒の僕たちは急ぐとしますよ。さよーならー」
「あ、ちょっとぉ！　置いていくのはもっと駄目よー！」

きっと誰かが拾ってくれますよ先輩。見た目だけは綺麗なんですからね、うん。

ネタバレ

昼休み。

学園というだけあって、ちゃんと学食が一階にある。という事は教室が四階にある一年生はとても不利という事だ。たまに、窓から一気に降りるツワモノもいるんだけど、教師に見つかれば昼食どころではない叱責を食らうので、ハルト曰くハイリスクハイリターンだそうだ。

今日は昼休みの時間もトリックスターの皆と話をしたかったので、山ほど弁当を作って持って来てあるので、昼休みになる前に声をかけておいたのだ。でないと、学食にいくハルトやバルトはダッシュで教室から出て行くからね。あ、レイは女の子から日替わりで差し入れ貰っているから、特に何も言わなかった。やっぱり顔か。顔が命なのか。

教室では手狭なので、屋上へ行き、バーベキューで良く使われる折りたたみ式のテーブルと椅子のセットを二つ出してくっつけて、その上にお弁当を広げる。基本はサンドイッチとスパゲティで、おかずとしてから揚げとかの肉やポテトサラダみたいな野菜で手軽に摘めそうな物を作ってもってきた。あとは温かいお茶をそれぞれに配って、準備オッケーだ。

「これはセリナさんが作ってくれたのか？」

ごめんバルト。セリナも作れるんだけど今日は僕が作った。味はそんなに変わらないからがっかりしないで遠慮せずに食べて欲しい。

「なんでコージはこないに料理できるんや？　おまえん家って、両親ともおるよな？」
「ん？　居るけど、僕が料理する事が多かったからできるようになっただけで、特にすごい事でもないよ。必要に駆られると人間、なんでもできるようになるもんだよ」
「そないなもんかね。まぁ、美味いもんにありつけるのはありがたいな」

そういって勢いよく食べてくれるハルト。おいしそうに食べて貰えると作った人間としては嬉しいものです。セシリアとエリーは微妙な顔をしてるけど、味付けが合わなかったかな？

「セシリアとエリーは、口に合わなかった？　少し薄味だから、一応こっちのソースを付けて貰ったら味を変えれるけど、どう？」
「いえ、とてもおいしいわコージ。おほほほほ」
「くやしいけど、おいしい」

おいしいなら良かった。とりあえず、食べながらで良いから昨日の事で気づいた事が無いか聞いて、リベンジで勝てるように作戦を立てたい。

「で、昨日の事なんだけど何か気づいた事ある？」
「気づいた事っちゅーか、あいつは何か実体が無いというか気配っちゅーんか？　今思えば、目の前におるはずやのにちっとも存在感が無かったって事かのぉ」
「殺気が無いって事じゃない？　どの攻撃も殺気がまるで無かったし。まぁメカだからそういった物がそもそも無いって事かもしれないけど」

メカだから殺気が無いという可能性は置いても、気配とかそういっ

た類の物は何も感じられなかったというのは間違いないようだ。とりあえずメモっておく。

「うーん、攻撃魔法が全部打ち消された事かな。どれだけ連射してもご丁寧に全部の魔法をワイヤーで打ち消してくれたからね。あとマジックアローで詠唱の邪魔もしてきたかな」

「たしかに。隙をついて無理な体勢な時を狙ったのにワイヤーで消された。マジックアローで詠唱の邪魔をされた」

魔法をよく使う二人組みとしては、魔法を打ち消された事が気になるようだ。そして、どちらもワイヤーで相殺されていて、マジックアローで詠唱の中断を狙われたというのを注目しておこう。

「攻撃を全て回避していたな。全てだ。普通、回避だけでなく防御という手段をとらざるを得ん状況がある筈だが、まったく防御をしていなかった。」

そうだよね、こういってはなんだけど僕達が必死に攻撃をして、かすりもしないというのは有り得ない。それこそ何かトリックがあるはずだ。・・・そう、トリックが。名は体をあらわすというけど、そういう事なんだろうか。

「冷静に考えると、僕達も別にベテランという訳じゃないけど駆け出しの冒険者という訳でもないと思っている。そんな僕達が攻撃を当てられないというのは、何か仕掛けがあると思うんだ。ここまでは、皆も考え付いたと思う」

僕の言葉に一様に頷く皆。そうあまりにも不自然なのだ。多対一の戦闘で圧倒的な速さを持っている訳でも無いのにかすらせもしないと言うのは。

「で、その仕掛けを暴く鍵はハルトにある」
「確かに、中盤以降はハルトを執拗にマークしてはいたけど・・・」
「ヒントは馬鹿力で攻撃・・・かな」

というか、ある意味答えといいますか。あくまで僕の推論なんだけど、少し先輩たちから情報を集めてみれば確実なものになると思う。

「そんなヒントじゃわからん、はっきり答えを言えよコージ」
「答えは放課後って事で。外れてたら恥ずかしいしね～」

ま、放課後までに先輩に話を聞いて推論を確実な物にしておこう。

さぁて、わくわくのリベンジタイムだ。先輩に聞くと思った通りの答えが返ってきたので確信できた。聞いたのはパペットが居ない時の部屋の様子と、パペットを倒した時の部屋の様子だ。それだけ聞けば十分だった。

「ようし、今日は昨日の借りを返すぞぉ！」
「理屈はわかったけど、それがほんまなら俺達かなり間抜けやったんやなぁ」
「でも、それなら攻撃が当たらない理由も説明がつくね。向こうの攻撃をどうやって誤魔化しているかが問題だけど」

仕掛けに魔法は使ってないから分からないんだろうね。魔法を使っていれば、魔力の流れを感じる事ができるから、騙される事は無かったんだろうけどね。魔法が進んでいる世界の弊害と言えるかな。

でもフレームもかなり発達してるから魔法一辺倒って訳でもないんだけどね。

「じゃあ、今回のリベンジはエリーとセシリアが鍵になるから、頑張ってね」

「分かった」

「ええ、手筈通りにやるわ」

そんな僕達をじっと見つめる双子の先輩。今日もまたマックスウェル先輩達が一緒に遺跡へ潜ってくれるのだ。今日も念のためキラーマシンを探すが、三十五階層には居ないようだった。

「と、言う訳で今日もトリックパペットと戦いたいんですが、良いですか？」

「昨日の今日だけど、大丈夫かい？」

昨日こっぴどく負けているので、日をおかずにまた挑戦すると言うので心配してくれてるのだろう。だけど、勝算が無いわけじゃないのでにっこりと答える。

「大丈夫です。先輩のおかげでたぶん勝てると思いますので。もし、僕の推察が間違ってればすぐに撤退します」

「そっか、なら頑張れ。俺達の手助けは要らないんだよな？」

「はい、見てるだけでお願いします」

「分かった」

さて、昨日の今日で悪いけどトリックパペットに仕返しさせて貰おう。

「じゃあ、エリーは魔力を練っておいてね。入ったら即ぶっぱなし

てね」
「分かった」

僕達が何をするか聞いている先輩は、半信半疑でこっちを見ている。
エリーがうなづいているので、これで準備完了だ。

「よし、行くよ！」

バタンと勢い良く扉を開けて、トリックパペットへ突撃する。相変わらず部屋の中央でぼーっと立ったままでいる。僕達が入ってきても、のんびりと動くだけで特に驚いた様子は無い。まぁ、当たり前か。

「“氷よ！　全ての動きを凍てつかせよ！　ブリザード！”」

そこへ、エリーが範囲魔法を唱える。ぐおー滅茶寒いぃいいい、痛いっ！　だけど、僕がエリーより前に出ておかないと詠唱後を狙われそうだからね。

エリーの魔法は部屋全体を凍りつかせる。だけど、部屋だけでパペットには霜一つ傷一つ付いてない。魔法の効果範囲にいた僕だけが無駄にダメージを負っている。

「“氷よ！　大気を凍らせ壁と成せ！　アイスウォール”」

続けて氷の壁の魔法の詠唱。部屋の入り口からこちら側を氷の壁で隙間なく埋め尽くす。ブリザードで部屋の温度を下げているので、氷の壁ができる速度も鬼のように速い。この連続した行動にパペットは混乱しているのか、全く動かない。そして、エリーの魔法が部屋のこちら側とあちら側を一箇所を除いて完全に塞いだ。

「“炎よ！　我が前に踊りて其をしめせ！　バーンウォール！」

今度はセシリアの番だ。氷の壁の隙間があいている一箇所に炎の壁を張る。少し弱々しい炎の壁だがその熱気で氷の壁は溶け出し、もうもうと水蒸気が立っている。よし、第二段階まで順調だ。あとは出方を見て、少しずつ奴を削っていくだけだ。

「ハルト！　思い切りやって！」

「おおさ！」

声に呼応するようにぐぅっと力を混めて、溜めて、撃つ！

「“絶刃裂波”」

ハルトの気合の篭った声が部屋に響き渡る。しかし、その技の矛先はパペットではない。そう、パペットの姿に向けては撃たず部屋の壁の装飾に向かって解き放つ！

ズガッ！！！

さすがはハルト、たった一撃で部屋の半分の壁一面をごっそり削ってしまった。しかし、その攻撃が終わった瞬間、氷の壁の向こう側にいた筈のパペットがハルトの眼前に現れワイヤーでハルトを吹き飛ばす。

「ぐっ！」

ワイヤーの攻撃を食らいながらも、満面の笑みを浮かべるハルト。僕も勿論、同じように笑顔になっているだろう。これで決まりだ。

僕だけじゃなく、他の皆も決定的瞬間を捕らえる事ができたからだ。

「魔力の流れは検知できず！　入り口の水蒸気も動きはなし！」

魔力の流れがないという事は転移魔法も使った形跡はなく、唯一の出入り口も水蒸気が揺らめいた様子もない。なので高速移動で入り口を通ってきた訳ではない。ならばどうやってパペットはこちらに来たか？

答えは来ていない。

「だいたい、おかしすぎるんだよ！　攻撃が余りにも当たらなさすぎだっ！」

ズガッ！

今までの鬱憤を晴らすように、床、壁、天井の装飾に向かって攻撃を加える。要は最初からパペットなんかは居ないのだ。ただの立体映像なだけで、実際の攻撃はこの部屋に巧妙に隠された武器による攻撃だったのだ。光学迷彩などを多用してワイヤーの出所をかくしたり、マジックアローにしても装飾から出ているのに、さもパペットが撃ちだしたかのように誤魔化していたのだ。ホーミングしていたのは、パペットから発射されていないのを誤魔化す為だったのだ。

で、全力で攻撃をしていたハルト。彼の攻撃は床や壁にまでダメージが及んでいた。あまり破壊されてしまうと、攻撃ができなくなってしまうせいだろう。なので中盤以降はハルトを執拗に狙って攻撃を加えていたのだ。

攻撃対象がわかれば後は簡単だ。

エリーが氷の壁を張って安全圏を作りだし、徹底的に装飾を破壊する。そして、それを徐々に広げていき部屋全体の装飾を破壊する。
それだけだ。

トリックパペット。部屋から出れないメカではない。部屋がメカというオチだったのだ。そりゃ部屋から出て来れないよね。

「これで最後っと！」

ズガッ！

これにてトリックは全て破壊（ネタバレ）完了である。

ネタバレ（後書き）

こんな程度しかトリック考えつきません。すぐに分かった方はごめんなさい。ちょっと強引なネタですが、許してね。

後のお楽しみ

「あー、すっとしたわぁ」

意外にも一番ストレスを溜めていたのはセシリアのようだった。すごい勢いで穴を開けていたからね。今は上気した顔もあいまって、花が咲き誇ってるような笑顔である。ほつれた髪がまた色っぽく見える。ただ、背後に破壊尽くした物が見えなければであるが。

「しかし、部屋が敵やったとはな。道理で攻撃がかすりもしよらん訳や」

「魔法を使わずこれだけの幻影を作り出す技術も恐ろしいが、それを見破るコージもとんでもないな」

「そう？　バルトなら僕が居なくてもすぐに見破れたと思うよ？」

なんだかんだで一番冷静なのはバルトだし。レイは冷静なように見えて、結構勘に頼るというか、直感を大事にするというか。まぁそんな感じ。

「いやいや、すごいねぇ。道理でパペットを倒そうと躍起になっていた俺達で倒せないわけだよ、なミリア」

「そうねぇ。幻影かと疑ったけど魔力の流れを感じなかったせいで、実体があると思って余計に当ててやる！　って必死になったもんね。範囲魔法で攻撃したりして」

テオ先輩とミリア先輩は、僕達がパペットの種明かしをしてびっくりしていた。今まで何回かパペットを倒してはいるんだけど、それはやっぱり流れ弾や範囲攻撃で装飾が破壊されてしまったので、パペットを自爆“といっても映像だけど“させて部屋の装飾の完全破

壊を免れていたのだろう。パペットが居ない時は必ず部屋の装飾がどこか壊れてる時だって言ってたしね。

「さて、それじゃあ奥に進んでみるか。何かええもんがあるかもしれんし」

「いやいや、既に先輩が通過してるから、そんなもんは無いぞハルト」

「ちぇっ、夢も希望もあらへんなぁ。ほいじゃ、引き返すか」

「おっとっと、待って待って。記念に奥を覗いてみようよ。何かおもしろい物が見つかるかもしれないし。ね、ね？」

せっかく倒したんだから、この奥に何かないか確認しておきたい。だって、トリックパペットから良い部品とかはゲットできなかったんだもん。カードを使って何かアイテムが出てくるとかあれば万々歳なんだけど、何か情報だけでもあれば恩の字だ。

「コージがそこまで言うなら、行ってみよか」

にっひっひ。何かフレームに役に立つものがあるといいなぁ～。うきうきとスキップしそうな勢いで奥へと向かう。強敵を倒した後は、なんというか良い物が出てくるのがお約束だよね。パペットの部屋から出て奥へと進む。

奥へと進むとやっぱり行き止まりになっていて、特に何もないように見える。だけど、ここにもあれがある。という事はエレベータになるし非常口にもなるという事だ。十五階層から移動したときはこ

こに出なかったという事は、上から下まで行くルートは色々あるという事だろう。単純に遺跡をまっすぐぶち抜いてるエレベータじゃないようだ。ん？　何かよく見ると少し飾りが豪華というか、枠が金色だ。

「やっぱ何もないなぁ。ただの行き止まりやな」

「そうねぇ。フレームが安置してる訳でも無し、パーツが並んでる訳でも無し。ほんと何もないくせにだだっ広い空間ね」

フレームも入るぐらいのエレベータの入り口だからねぇ。でも、ここから搬入したとして一体どこに運んで行くんだろうか？　分解でもしなきゃ通れないよね。ほかに何か仕掛けでもあるのかな、これって。カードを出さずに行き止まりに見える部屋をうろうろと探す。

「コージ、何してるの？」

床や壁や天井をくまなく調べていると、エリーが話しかけてきた。

「何か良い物ないか探してるの。触るとパネルが出てきたりするかもしれないからね」

「・・・パネル？」

「遺跡には結構あると思うんだけど、見た事ない？」

「ない、教えて」

そう言われて説明しようと思ったけど、どう言えばいいかな。四角の中に更に細かい仕切りがあって、数字が並んでる板・・・？　そんな感じで説明すればいいかな。実物を見せられれば一番いいんだけど、今のところ特に反応が無いんだよね。やっぱりカードを出さないと反応しないのかなぁ。

「それで、そのパネルで何をするの？」
「機械の操作・・・でいいかな。遺跡にある機械を操作する為にあるんだ」
「何故？」
「いや、機械を操作できないと困るでしょ？　使える物は使わないとね」

エレベータとか便利な物があるんだから、使わない手は無いよね。

「違う。何故、そんな事を知ってるの？　遺跡に詳しすぎる」
「あー、その何故なのね。うーん、知ってるからとしか言いようが無いんだよねぇ」

まさか、元の世界で似たような物があったから分かるとか、信じて貰うには難しそうだし。セリナ達には言ってあるけど、信じてくれるのは珍しいと思うんだよなぁ。

「また、今度」

僕の葛藤を知ってか知らずか、エリーはそう呟くと僕から離れていった。さて、他にも何か無いか探してみよう。金色枠以外にも、何かあると良いな。

「コージ、そろそろ戻るぞ。今から戻れば丁度いつもの時間ぐらいに帰れるだろう」
「あ、もうそんな時間なのね。了解」

結局、カードを出しているか利用直後ぐらいでないと、こういうのは起動しないようで、何も見つけられなかった。また今度、先輩たちが居ない時にでもじっくり調べに来よう。これから戻るけど念のためにキラーマシンの反応を調べてみる。うーん、やっぱりこの階層には居ないみたいだ。だいたいが五十階層以降に居るようだった。

「キラーマシンも居ないみたいなので、さっさと帰りましょう」
「いや、おまえを待っていたんだがなコージ。おまえはフレームが絡むと本当にマイペースになるな」

ため息混じりにバルトに愚痴を吐かれた。う、ここは素直に謝っておこう。後は帰るだけだけど気を引き締めないとね。今日でベルスイートの活動を開始して四日目。夕方と夜と遺跡に潜っているから、だいぶ日が経っている気がする。トリックパペットを倒した事だし少しはゆっくり体を休めた方が良いかも知れない。というか、そろそろどんなフレームを作るか決めていこうかなと思う。必要なパーツを自作するにしろ、どこかで調達するにしろ、どんなコンセプトで作るか決めないと揃えようがないしね。ハーベイさんの知り合いのリックさんに今度会いに行こう。あの人も職人だったし他にも色んな職人さんを知っているかもしれないしね。

ベルスイート本部に戻った僕達は早速戦果を報告した。今日の結果を聞いたサカキ先輩は一週間様子を見た上で大丈夫かどうかを判断したいそうだ。どうも他の隊員達も同様に狩る数が減少してきているそうだ。

「敵が減ってきている事は喜ばしい事だが、一年生の諸君にとっては逆に出番が増える事になるだろうな」
「それは、少ない数の敵であれば私達でも対処できるからという事

だからでしょうか？」
「そうだ。今までは二年が請け負っていた仕事で、実力を上げられそうな物は優先的に君たちに回そう。もっと強くなりたいだろ？」
「はいっ」
「とりあえずそういう事だ。では、帰りたまえ」

まぁ、一番の下っ端になったんだから仕方ないよね。テオ先輩が少し嬉しそうにしているのもまぁ仕方ない・・・よね？　ふう～。

妄想のトランスフォームフレーム

僕が乗りたいフレーム。まずは変形すると嬉しいよね。軽量で高速で動いて装甲がとても薄い。近接戦闘が得意なんだけど、中遠距離でも中々強いビーム兵器を持っていて、油断してると痛い目にあう。そんな大まかなイメージがある。

白夜みたいな、重装甲重火器大量破壊兵器装備のような圧倒的な攻撃力でもって、相手を封殺するのも悪くはないけど、やっぱり動き回って華麗に回避しまくって、ばったばったやっつけるのが好きだ。あくまで理想だけども。

だって、それだけの高機動を実現してもパイロットが耐えれるか分からない。マッハの速度で急上昇急降下、急停止から急発進。そんな無茶な事をすれば確かに敵の攻撃を回避できるだろうけど、中の人はミンチになっていてもおかしくない。ゲームだったらそこらへんは考えずに、滅茶苦茶に動くんだけどもね。慣性制御っていうの？　それを擬似的にしろ実現できる方法がないと、乗ったら最後そのまま棺おけになっちゃう機体ができあがる事になる。

うーん、重力を無効にする・・・重力、荷重・・・？　重さを無くすとどうなんだろう？　自分の体重を限りなくゼロに近づけたらそれだけ掛かる荷重が少なくならないかな？　たしか、重たい物ほどそういう力が働くはずだよね。あとは機体の方にも、同じように処置をしておかないときっと急な制動をした途端にばっきりどこかが折れてしまいそうだ。闇の魔法で重さを軽減させよう。ただ、常に重さを無くすのは操縦者だけにして、機体に魔法を掛ける時はスイッチでオンオフできるようにしておこう。常時発動はまだ難しい。

次は変形をどうしようかな。飛行機型になってかなり高速で移動できるようにしておきたい。なんというかそっちの方がかっこ良いよね。デザインは飛行タイプを念頭に入れて考える。手の部分を変形時にスラスターにして、足部分は機首にする。イメージとしては幅の広い短剣みたいな感じかな。そして、戦闘区域では人型で行動し、戦域から戦域に移動する時は飛行タイプになって、敵の予想を覆す速度で移動する。転移魔法をすれば良いと思うかもしれないけど、フレーム毎転移するとなると、大規模な陣と魔力が必要なんだよね。陣はともかく魔力を集めるのが難しい。グレイトエースの近くに転移した時は、ロバスの魔法教会の人達の協力があったから実現できたんだけどね。まぁ、逆に言うと敵も転移魔法を使ってくる可能性も低くなるって事なんだけどね。

次に武器をどうしましょう。

あれこれ武器を選択して、相手に合わせて多様な武器を持つのも有りなんだけど、それはこの軽量機体のコンセプトには合わない。だけど、ある程度の多様性は持たせたいから射撃武器が良いよね。とはいえ、手に武器を持たせる事はしない。だって、めっちゃ強い武器を持ってて敵に取られて使われたらそれこそ目も当てられない。僕はどっちかというとロボットに手は無くても良い派なのだ。だから武器はすべて内蔵型にする。レーザーブレードと射撃装置さえあれば、実弾にしろ光弾にしろ魔法弾にしろ撃つ事ができるもんね。この点は魔法様さまだ。

うん、だいたいイメージできてきた。後はこれを製作する為の部品を集めるなり造るなりしていくとしよう。あ、そういえば複座型にして白夜を乗せるとかはどうだろう。彼女のサポート機能は非常に助かるし、小柄だから今僕が造れるＡＩの大きさより断然コンパクトなのだ。いざとなれば、彼女に乗り移って脱出という手もあるし。

・・・やっぱ駄目だ、なんかそれは白夜を道具扱いしてる感じがするから、やめとこう。でも、複座型は考えておこう。

必要な部品として小型エンジンを三基乗せ、外部装甲にはミスリルを使いたい。あとはコックピット周りの操縦系統の統一規格部品を一揃えに魔動力を循環させる為のエティムズと呼ばれる鉱物。純度が高ければそれだけ、ロスなく魔動力を循環できるのでなるべく純度の高い物を買いたい。ミスリルも結構な値段するけどエティズムは純度が高くなればなるほど、値段が鬼のように高くなるもんなぁ。

えーっと、ちょっと待ってよ。確かフレームの素の重量って十トンぐらいって言ってたよね。装甲をミスリルにするとしたら、その半分が装甲になると考えても五トン。キロに直すと五千キログラム。ミスリルの単価はキロ五十ゴールド。しかも、今回は加工の手間を省くためにミスリルを謎のレアメタル化する予定なので、大体半分ぐらいになるから、ミスリルの値段がだいたいキロ百ゴールドと考えると・・・えーっと・・・五十万ゴールド？　コクピット周りも良いのを選ぶとなると五千～一万ゴールドはいるし、他のパーツとエティズムも入れて、諸々で百万ゴールドぐらいは必要になる・・・かな。

うおー、半端ねぇえええええ！

これはちょっとキラーマシンをどんだけ狩れば良いのか見当もつかない。え、いやあれだ。弾丸発生装置が確か五十プラチナで買い取るってハーベイさんが言ってたから、それ狙いで行くと二百機キラーマシンを倒せば行ける！　そうか、たったの二百機か！　そう考えればなんとかなりそうな気持ちになってきた！　毎日十機狩れば二十日で目標達成だよね。ある程度資金が貯まれば、即ミスリルを購入してレアメタル化して加工しておけば出来上がるのも早い筈。

とりあえず今手元に百プラチナあるから、それで買えるだけ買っておこう。

ぐふふふとか、にゅふふふとか聞きようによっては気持ち悪い声がコージの部屋から聞こえてくる。あーでもないこーでもない、これでいけるか！？　みたいな独り言をぶつぶつと大きな声で呟いている姿はちょっとかっこ悪く見えるってセリナは言うけど、ミミは気にならない。だって、あの変な顔になる時ってフレームの事を考えてるだけだもんね。男の子はロボットとか大好きだもんね。

あのフレームに対する熱心さをもうちょっとミミにも向けてくれたら良いのに。毎日、コージの前では薄着してるんだからチラチラと見るんじゃなく、しっかり見て貰いたいんだけどなぁ。それとも見てるのばれてないって思ってるのかな？

学園から帰ってきたら、すぐに上着を脱いでキャミソールでコージの傍をうろうろしてるのにちょっと離れた所からちらちらと見るんだよねぇ。ソファーに座ってたら、コージはテーブルの椅子に座るし、かといって同じテーブルにつくと、そっぽを向いちゃうんだよね。でも、ちゃんと話し相手になってくれるし、おいしいオヤツも食べさせてくれるし、学園で頑張ったら褒めてくれる。だけど、目のやり場に困るのか上着を着せようとしてくるんだよねぇ・・・そうか、目のやり場に困るんだ。うんうん、それは良い事だ。少しはミミの事を女の子として気にしてくれてる証拠だもんね。にひひ。

せっかくお母さんの言うとおり色々大きくなったんだから、前みた

いにお風呂に入れてくれたりお膝に乗せてくれたり一緒に寝たり・・・はしてるね、うん。あれ？　おかしいなぁ。コージがそろそろ襲ってきてくれても、良いはずだよね？　アピールがまだまだ足りないって事なのかな？　難しいなぁ。でもお母さんの言うとおり、当たって砕けろというか当ててむにゅむにゅしていけば何時かはきっと野獣になるよね。ミミがんばる！

新しいフレームの意義

二十プラチナ分のミスリル。四十キロあるんだけど、レアメタル化すると二十五キロほどになる。約半分だ。一度コツを掴めばレアメタル化は失敗しなくて済むんだけど、その過程で僕の能力が一つ分かった。

それは魔力の回復速度が尋常じゃないって事だ。僕の魔力の総量はかろうじてB判定になるかならないかなんだけど、魔力をすっからかんになるまで使ってもすぐに全快してしまう。まぁ魔法を使うとそれなりに疲れるので、二十四時間使いっぱなしとかは普通は無理だろうけど根性を出せばやれない事はないという状態なのだ。

僕が使う魔法は、どれもが魔力をすっからかんになるまで消費するものではないので、何時間でも連射が可能という事になる。なのでアクセルとオーディスをずっと掛けっぱなしでも倒れる事なく使い続けられる。とはいえ、脳みそと身体にかなりの負担がかかるので結局は使いどころを見極めて使うのが一番良いんだけどね。

さてさて、そしてこの出来上がったレアメタル。僕の魔力で造ったせいなのか、僕の意思を反映して形を変えてくれる優れもの。でもやっぱりかさばるんだよね。だから置き場所にちょっと困る。なので、今考えているフレームのデザインのミニチュアとして加工し部屋に飾る事にした。うん、超合金で遊んでる気分だね、二メートル近いからかなりでかい超合金だけど。・・・うーん、やっぱりもう少し小さくしよう、せめて六十センチぐらいに。そして変形前と変形後と変形可能モデルに分けて作る事にした。あと、白夜のミニチュアも作る。色は違うんだけどね。

なんて考えてると、くるくると目まぐるしく白夜のレアメタルの色が変わり、塗装済み完成品モデルみたいに綺麗に彩色されてしまった。なんでもありか、これは！

「あら？　これはフレームのミニチュアですか？」

セリナが僕の部屋に入ってくるなり、そう尋ねてきた。ちなみにノックはしていたけど、返事する前に入って来ました。ミミもヒロコも白夜もいる。ヒロコは少し元気がなさそうだけど、大丈夫なのだろうか？

「うん、今考えてるフレームのミニチュアなんだ」

「主よ！　我というものが有りながらフレームを新しく作ると言うのか？！」

「白夜はほら、攻撃力が凄すぎるから切り札として考えてるんだ。で今、考えてるのは高速機動型で基本的に一対一の為のフレームなんだ」

白夜が本気を出せば基本的にオーバーキルになっちゃう。一対一でも確かに強いんだろうけど、スペックが圧倒的過ぎるんだよね。

「確かに多数に囲まれた時にこそ、わしの真価は発揮されるのじゃが一対一でもそうそう引けをとるもんではないぞ。現にあの三桁を止めたではないか」

「だからこそだよ、白夜。僕の技量で「７７７」を止められた訳じゃないんだよ。白夜が止めてくれた。それはやっぱり、僕の技量では白夜に乗る資格が無いって事じゃないかな？　だから僕はフレームの操縦技術を磨いて、白夜に相応しい乗り手になろうと思うんだ」

白夜以外のフレームに乗るというのはやっぱり不満なのか、ほっぺ

をぱんぱんに膨らませて抗議してくる白夜。だけど今の僕では、せっかくの白夜の性能を生かしきれてない。それは凄く勿体無い事だと思うし、強敵が出てきた時に僕の腕が未熟なせいで撃破されたなんて事になったら泣ける。機体性能におんぶに抱っこではいかんのですよ。

「むぅ・・・わしに乗ったからと言って減るもんでなし・・・じゃが、その意気込みやよしじゃ。頑張って腕を磨くと良いぞ」

でも、たまにはワシにも乗るんじゃぞ！　と念を押されたけど白夜も賛成してくれるようだ。パイロットの技量で格上の機体に勝つというのは、漢のロマンだよね。

「でもコージは頑張りすぎじゃないかなぁ？　もう少しミミと遊んでくれても良いと思うんだけどなぁ？」

「う・・・」

なんというか、薄着でむにゅっと僕の腕を抱え込むミミにはちょっと困る。少し前までは妹的な風貌と体つきをしていたので、微笑ましい気分になれたんだけど今じゃすっかりお姉さんっぽくなってきて、セリナに負けてないぐらいだ。なにがとは聞かないで・・・

「そうですね、コージはたまには私と遊んでくれた方が良いです。ミミとはこの間一緒に楽しみましたもんね？」

「いや、楽しみましたっていうか不可抗力って事で話はついてなかったっけ・・・？」

ミミとは反対側からセリナがくっついてくる。若干黒い気がするので、腰がひける。

「そうだよぉ。不可抗力だからノーカンだよ、ノーカン。だからミミと遊んでいいんだよぉ～」

「いえいえ、順番でいうとやはりここは私が先では無いでしょうか？　コージとの付き合いもミミよりも長いですし。なんと言いますか、コージの好みも知ってますから私はお買い得ですよ、はい」

確かにセリナは最近料理の腕が上がってきてるし、僕の知らない料理を作ってきたりする。だけどそれが僕好みの味で、いつもびっくりしているのだ。ふと見れば白夜が僕の背後からしがみついている。ヒロコはと言うと、なんだか頭をゆーらゆらと動かしてリズムをとっている。不思議な踊りを踊ってる・・・さっきは元気が無さそうに見えたんだけど、相変わらず変で良かった。

「わしが言うのもなんじゃが、最近は朝から晩まで主は戦いすぎじゃと思うんじゃ」

「そうですそうです。たまには、遊んでくれても罰は当たらないと思います！」

「うん、ミミと遊ぼうよぉ？」

でも、僕には一万プラチナを稼ぐ目標ができたんだ。遊んでる暇は・・・無いとか言ったら僕の命が危ないな、うん。

「遊ぶって言っても、何をすればいいのやら・・・」

女の子がしたい事とかさっぱり分からない。遊園地ってこっちの世界にもあるんだろうか？　カラオケにしろ、ボーリングにしろこっちには無さそうだし。ゲーセンなんて論外だろうしなぁ・・・

「とりあえず、二人きりになれれば何でも良いのです！」

「「です！」」

そういう物なの・・・？　でも、二人きりになるのって無理じゃないかなぁ？　残った子が尾行してきそうだし。ミミとヒロコは前科があるしね。あ、目を逸らされた。

「でも、そろそろフレーム禁断症状が出てきそうなんだ。白夜に乗ってちょっと落ち着きたい」

フィギュアを触ってると少しはマシなんだけどね。

「なんなら、このまま乗って貰っても構わんぞ、主よ！」

「いや、乗れないから」

嬉々とした表情であほうな事を叫ぶ白夜。白夜用の飛行ユニットも完成しているので何時でも空へ舞い上がる事ができる。あ、そうそう飛行ユニットといえばハーベイさんも少しずつ作成しているそうだ。さすがに僕みたいに簡単に量産できないので、受注生産という形になるんだけどそれでも注文が殺到したようで、奥さんに喜ばれているそうだ。なので僕は飛行ユニットを造って儲けないと決めた。だって、僕が造ると一気に大量生産できちゃうので、価格がどーんと下がってしまってハーベイさんが困るかもしれないし。そもそもあの改良した飛行ユニットはハーベイさんの設計だからね。僕が勝手に売る訳にはいかないのだ。

だから僕はほかに金策を探さないといけない。キラーマシンだけだと時間が掛かりすぎるからね。待ってろよ、僕のフレーム！　すぐ形にしてやるからな！

そして、ぐふふといつもの気持ち悪い僕を見られてため息をつかれるのであった。

新しいフレームの意義（後書き）

すいません、少し脳みそオーバーヒートしております。二話更新はいましばらくお待ちくださいませ。

青い脅威

バルトス王国とハイローディス帝国の国境付近。バルトス王国へ向けて移動するフレームの一団がいた。フレームの色を青で統一されているその一団は、大きな音や声を立てる事なく、まっすぐバルトス王国を目指していた。だが機体の形はバラバラで、重装甲のものや魔術士タイプのもの、四足タイプもいれば軽量タイプもいる。そんなフレームの機数は全部で十機。一機にて軍の一部隊を押しとどめるフレームの実力からすれば、かなりの戦力である。そんなフレームの一団がゆっくりではあるが、確実な進軍をしていた。

だが、そんなフレームの一団の前に魔石獣が飛び込んできた。

グギャァアアアアアアアアア！

獲物が傍を通ったのを感じて擬態化を解いたのであろう。雄叫びを上げながら地面を這うように、フレームの一団へと突っ込む魔石獣。大きな口と二股に分かれた尻尾が久しぶりの獲物だと言わんばかりに、激しく蠢いている。

だが、自身の数倍の大きさを誇る魔石獣を前にしても青いフレームの一団は小揺るぎもしていなかった。

ゴガッ！！！

魔石獣の正面に立つ二機が魔石獣の突進を止める。ほかの機体は正面に立つ二機が突進を阻む事を信じて疑わないのか、魔石獣を取り囲むように散開している。事実、二機のフレームは魔石獣の突進を受け止め、あまつさえ押し返すと言う芸当を見せつけていた。

グ・・・ガギャァアアアアア！

自分より小さな獲物に、受け止められ押し返された魔石獣は怒りの咆哮を上げる。自分の肩口の辺りをうまく抑え込む二機のフレームに対して、大きな頭を振ってなんとか噛み付こうとするが、うまく行かない。そのもどかしさに魔石獣は四肢と尻尾を使って脱出しようとして、暴れだした。

その動きは辺りを地響きで震わせ、木々をなぎ倒しさながら災害の呈を成していた。さすがにこれだけの巨体の魔石獣が暴れるとなると、周囲に散開しているフレームも黙って見ているだけでは済まされなかった。

揃って抜剣するフレーム達だが、剣を向けるだけで一向に魔石獣に立ち向かう気配はない。

動かないフレームをいぶかしむ暇もなく、気づけば右側の肩口に取り付いているフレームがいつの間にか抜剣した剣を一気に肩口へと押し込んだ！

ガギャァアアアア！？

魔石獣が咆哮を上げると同時に、周りのフレームが一斉に突撃する。痛みでのたうち回る魔石獣の動きもまるで見えているかのごとく、かいくぐりさらなる追撃を行う。その動きは綺麗に統率されており、暴れ動く魔石獣を一斉に攻撃するのではなく、隙のある場所にいるフレームが攻撃を行い、その攻撃でできた隙を狙ってまた別のフレームが攻撃を・・・という具合に、狩りなれた様子で魔石獣にゆっくりとだが確実にダメージを残していく。

キュオォオオォォオオォォ！

今までとは違う咆哮を上げた途端、一斉に魔石獣からかなり距離を取って散開するフレーム達。今まで四足だった魔石獣が立ち上がる。体付きも後ろ足が二本足で立つ為に太く大きくなり、前足はすこし細く長くなっていた。二本足で立ち上がった事で高い所から睥睨する姿はその大きさもあいまって威圧感が更に大きくなり、見る者を震え上がらせる力強さがあった。

だが、そんな魔石獣の変態にも臆する事なく対峙する青いフレームの一群。いささかも動じない態度からある種の余裕も感じられた。

ッッガッ！！！

大きく吸い込んだ息を吐き出すかのごとく、口から青白い炎を撒き散らす魔石獣。地面は炙られ木々は焼け落ち、それでも火炎の勢いは止まらない。辺りを全て燃やしつくさんとすべく魔石獣は首をふって被害を拡大していく。

だが、そのブレスも自然を破壊しただけでありフレームには毛ほどのダメージを与えてはいなかった。魔石獣の突進を止めた鈍重にさえ見えるフレームであっても、それは例外ではなかった。攻撃手段と範囲をすでに理解しているようで、見事に被害はなかった。

ズシンズシンズシン！

ブレスが届かないと知るや、大きく足を踏み出し自分を受け止めたフレーム目掛けて突進を開始する魔石獣。その巨体を活かして真っ向から叩き潰すつもりのようだ。その姿をみてのろのろと後方へと

撤退を開始する重装甲のフレーム。燃え盛る森の中から、奥へ奥へと少しずつ火の無い方へと誘導するかのごとく逃げ出す。

ゴォオオオォオオオオオオ！！！

もう少しで魔石獣に追いつかれるという所で横合いから、吹雪が魔石獣に解き放たれる。勢いのある吹雪ではあったが、魔石獣は大してダメージを受けた様子もなく煩わしげに自分に向かって魔法を放ってきたフレームを睨み付ける。

ゴォオォオオオオオオオオオ！

ほぼダメージが無いと知っても、吹雪を叩きつける魔術士型フレーム。そして、その背後にもう一機、魔術士型フレームが支援の為か何か詠唱を始めだした。重装甲のフレームも吹雪を迂回して、吹雪を出すフレームを庇うかのように傍へ移動する。

それを見るや、歓喜の雄叫びを上げながら突進する魔石獣。

だが、それはフレームの一群にとって予定事項であった。

リンッ！

二歩、三歩、四歩。あともう少しでフレームに届こうとした魔石獣の巨体であったが、澄んだ音と共にその動きが止まる。見れば足元に大きな魔方陣が輝き、魔石獣を魔法で束縛しているようだ。

ギ・・・ガ・・・

見れば、動きが鈍ると同時に身体の表面をうすく霜が覆っていき魔

石獣はうまく体を動かす事ができないようだ。吹雪だけではうまくダメージを与えられなかったようだが、継続して唱え続ける事で周りの気温を下げ、さらに急激に凍らせる魔法でもって魔石獣を完全に凍りつかせたようだ。見ている間も吹雪は止まる事はなく、完全に魔石獣を覆うまでその勢いが弱まる事は無かった。

そして、完全に凍り付いて動きの止まった魔石獣に駆け上る軽量フレーム。手に剣を持ち頭上まで駆け上るとその脳天に勢い良く剣を突き刺す。軽量フレームが勢いよく刺しても深く刺さらなかったようで、かろうじて剣は直立している格好である。だが、軽量フレームは突き立った剣を足場に空中に踊り上がり、自身の自重と落下の勢いを利用してさらに深く剣を突き刺す。

見れば、魔術士型フレームが杖に紫電をまとわりつかせ魔法を撃つ体勢になっていた。

ゴォオオォオオン！！！

軽量フレームが魔石獣から退避したと見るや、雷の魔法を解き放つ。脳天に突き刺さった剣を通って魔石獣の体内を電撃が駆け巡る。一瞬で魔石獣を覆っていた霜は解け、黒こげとなった魔石獣は声ひとつ立てる事なくゆっくりとくず折れていった。

念のためであろうか。フレームの一群は四肢を切断し死体を燃やしつくし、魔石獣の痕跡を消し去った。ついでだろうか、燃え盛る森も綺麗に消火していた。

そして、何事もなかったように進軍を再開する青いフレーム達。目指すはロバス。国境を越え、今一度バルトス王国へ何かを仕掛けるつもりのようであった。

もっと仲良くしましょ！

「日替わりデート第一弾は、ミミでーす！　というわけでコージ、いこっ！」
「う、うん・・・」

あれ、おかしいな。僕は金策する予定だったんだけど、どうしてこうなった？

「うーん、なんだか楽しそうじゃないよぉ？　ミミとお出かけするのは嫌？」

僕の煮え切らない返事に、眉をひそめて身を寄せてくるミミ。いや、あのね。

「え、いやっそんな事ないよ！？　嬉しいよ！」
「えへへ、じゃあ行こっ」

すったもんだの挙句、ミミが勝利をもぎ取ったらしく最初にお出掛けする事になったようだ。なんというか、あのセリナから勝ちをもぎ取るとはミミさんも侮れないなぁ。今も嬉しそうに僕の腕を掴んで離さず、ぴたりと身を寄せてきている。

「じゃあ、ちょっと急ごうか。早めに行かないと席が取れるか心配だし」
「うんっ、わかったぁ」

向かう先は西ブロックで評判の演劇をする「エイルベート」と呼ばれる劇場だ。なにやらうまく魔法を使って演出しているらしく、す

ごく面白いと評判で少し高い値段ではあるものの連日賑わっているそうだ。魔法の演出という事で魔法教会も一枚噛んでいるそうだ。

「結構人が並んでるけど、次の公演には入れそうだね」

「うん、やっぱり凄い人気なんだねぇ。でも、本当にここで良いのぉ？　嫌なら別の所でも良いんだよ？」

「ううん、僕も興味あるし少し並ぶぐらい慣れてるから大丈夫だよ」

今月の題目は「姫のおなり！」というお転婆なお姫さまがお付の騎士を振り回しながら、悪い領主を成敗したり、村を苦しめているオーガを倒したり、隣国の王子に言い寄られてお付の騎士がハラハラしたりという物語らしい。何も考えずに単純に楽しめそうだった。ここの劇場は団員の数も多く、広さも充分にあるので三つある劇場を順番に使っているので回転も早い。というか、演劇ってそんなに人気があるもんなんだねぇ。

「劇を見るのって初めて。コージは見た事あるぅ？」

「劇・・・は、初めてかなぁ僕も。似たようなのは見た事あるけどね」

映画はたまに観に行ってたけど劇とかは、気後れして行った事ないんだよね。偏見かもしれないけど、お金持ちが観に行くものだと思ってたし。しかし、こうやって並んでいると僕達と同じようにカップルで来てる人が多い。そして、当然というかやっぱりというか並んでる人はミミにうっとりと見惚れる男性が多いと言う事だ。そして、隣にいる僕を見て不思議そうな顔をしてから、露骨に敵意のある視線を飛ばしてきて、一緒に来てる女性に耳を引っ張られたり、つねられたりして我に返って平謝りしている光景がそちこちで広がっていた。

「ん？」

出る所が出て、ひっこむ所は勿論ひっこんで、足もかなり長くてそんな短いスカートだとパンツ見えるんじゃないの？　ってぐらい長い。そんなスタイルも良くて美少女のミミは僕だけしか見ていない。だけど、これだけの視線を集めちゃうミミの服装は少し大人し目の物が良いかもしれない。だって、結構肌を出している服装だしスカートは超短めだし、胸元も恐ろしいほど自己主張が激しいしで、そういった目で見られるのは間違いない。かくいう僕も今はなんとか耐えてるけど、油断していると鼻の下が伸びるしね。

「ミミさ、もう少し大人しい感じの服にしない？」

「これ似合ってないかなぁ？　お母さんに見て貰って決めたんだけど。勝負服よ！　ってお母さん言ってた。あ、ちなみに下着も勝負下着なんだよぉ？」

母さん・・・ミミになんつー事を教えてるんですか、あなたは。

「いや似合ってるだけに、あまりこう他の人間に見られたくないと言いますか・・・」

「ふぅん・・・じゃあ、家で着てる分には良いよね？」

「まぁ、家でなら・・・」

「わかった、じゃあ家でどんどん着るようにするね。もっと可愛いのがあるんだぁ」

母さんに教え込まれているあなたの可愛いの基準がひたすら気になりますが、家の中なら良いかと考え直す。ミミは腕っ節は強いんだけど、一人で出掛けてる時にナンパされたりすると危ないよね。学園に通い始めてからも男性慣れしてないところがあるから、知らない人に話しかけられたりすると、あわあわしそうだ。まぁ、それで

も乱暴されそうになったら、すかさず脱出できるんだろうけどね。

「あ、そろそろ入れるみたいだよぉ」

列がゆっくりと進んで行き、劇の切符を買ったお客さんが劇場の中へと入って行く。どうもパンフレットも売っているようで、それを見ながら嬉しそうに歩いている人達が印象的だった。写真がないから絵で描いてるだろうに、凄い事してるなぁ。

「お席は只今ですと、どちらでも選べますがいかが致しますか？」

受付のお姉さんが僕達を見て、微笑ましい顔をして案内してくれる。一番前のブロックで三百シルバーで中央辺りが百二十シルバー。一番後方でたくさん席があるところが八十シルバーで、高い所から近くで見れる席が五百シルバーだった。一番高い所で五ゴールドなので、そこにする事にした。せっかくだから良い席で見てみたい。

切符を貰い、ついでに三十シルバーでパンフレットを購入して席へと向かう。パンフレットを見せて貰うと綺麗な絵で、劇をする人の紹介と劇の内容が綺麗に描かれていた。劇の内容に至っては色まで塗られていて気合が入っている。これで三十シルバーなんて元を取れるのかなぁ？　すごいや。ミミもパンフレットを気に入ってくれたようだ。

「見る前からわくわくしてきた」

「お話もおもしろそうだし、楽しみだね」

「コージも？　良かったぁ、ミミが行きたい所だったからコージはどうかなって心配してたんだぁ」

それでしきりに来る途中も聞いてきたのね。劇の事をどこで知った

か知らないけども、ミミも色んな事に興味を持ってきてくれてるようで嬉しい事だった。僕の事以外であまり自己主張してくれないから、心配していたのだ。強い力を持っていても小さい頃から、悲惨な環境に置かれていたから、何かを自分からしようという事をして来なかったというだけあって、母さんが構い倒すまではじっと僕を見ているだけの事が多かったのだ。

「うわぁ、ここから観るってなんか凄いなぁ」
「凄いよく見えるねぇ、コージありがとう」
「いいえ、どう致しまして」

僕達の席は、仕切りがあるので他の座席からは独立しているので他の人を気にせず劇に集中できる用になっている。結構舞台から遠く感じるんだけど、何か仕掛けがあるのか舞台が手に届くぐらい近くに見えるのだ。

「そろそろ始まるみたいだね」

気づけば劇場の中はお客さんで溢れ返っていて、今か今かと待ちわびる人の期待が劇場内を満たしていた。そうこうしている内に開演の挨拶が始まり、劇が開幕した。

「楽しかったね！」
「うん、また来ようねっコージ」

九十分ぐらいの劇だったんだけど、あっという間に終わってしまっ

た。魔法を演出に使ってると聞いてたけど、本当にちょっとした演出程度だけで大掛かりな物はなく、大事な所は演じる人間が全て表現していた。いや、これなら魔法の演出がなくても充分おもしろいと思う。やっぱり演じる人間が上手だと凄いんだなぁと感じさせられた。

「あら、コージ奇遇ね。ミミさんとデートですか」
「あ、セシリア。セシリアも観てたの？」

どうもセシリアも母親と劇を観に来ていたようだ。貴族の人でもこういうのを観に来るんだねぇ。やっぱりそれだけ人気があるんだね、ここって。

「それじゃあ、お邪魔しちゃ悪いからこれで、またねコージ」

そういって、セシリアはお客さんの中に紛れて見えなくなった。

「セシリアもがんばってるんだねぇ。うふふ」
「ん？　どうしたのミミ？」
「ううん、なんでもないよぉ。にへへ」

そういって笑うだけで、教えてくれないミミ。何か気づいた事があったようだ。ミミは可愛い見た目をしているけども、凄い能力を持っているんだよねぇ。天は二物を与えずっていうけどそんなの真っ向から否定しているよね。

「じゃあ、何か食べて帰ろうかミミ」
「うん」

そういって連れ立って歩き出す。劇場をでた所で色々な露天がある

のに気づいた。どうも劇を観に来たカップル目当ての商売のようでアクセサリーを売りに来ているようだった。いつもなら特に気にしないんだけど、劇をみた余韻のせいなのか今日はせっかくだから記念にミミに何か買っていこうと思った。

「ミミ、せっかくだからちょっと覗いて行かない？」

「え、ほんと？　良いの？」

まぁミミも目敏く露天を見つけてそわそわしていたから、行きたくなったっていうのが本当の理由なんだけどね。そわそわしているミミは微笑ましくて凄く可愛いのだ。

「お、兄ちゃん可愛い彼女だね！　どう、ペアで買うなら安くしとくよ！」

威勢の良いお兄さんの呼び声に、少しミミがびくっとするけどペアという言葉に目をきらきらさせて僕の方をじっと見つめてくる。

「ほら、彼女も選んで選んで。このブレスレットなんかはどう？二人とも結構細くて良い感じだからこれぐらい派手なのでも似合うよ」

ほわぁと目を輝かせて露天のお兄さんの言葉に聞き入るミミ。自分の腕とブレスレットを見比べてなにやらうんうん頷き、ついでに僕の方もじっと見てなにやらニコニコとし始めた。頬を赤らめているところを見ると何か妄想してるな、あれは。

「お、彼女さんも気に入ったみたいだよ、どうだい二つで三百五十シルバーを三百にしとくからさ買ってかない？」

ミミの様子を見て一気に攻めてくるお兄さん。これだけ、嬉しそうにしているミミを見て買わない手はないよね。今もほわほわとしているミミをちらちらと見ていく野郎共も居るぐらいだしね。見るなこんちくしょう。

「じゃあ、それ頂戴」

「お、ありがとな。そうだブレスレットに名前も彫れるけどどうする？　一個二十シルバーかかるけど、すぐ終わるし」

なかなか商売上手なお兄さんだ。僕は苦笑しつつもついでだからお願いした。

「ほい、毎度ありぃ！」

お金を支払って商品を受け取る。ブレスレットを見るとちゃんと名前が彫られている。というか、僕とミミの名前がハートを挟んで並んでいた。中々に粋な事をしてくれるお兄さんだ。

「ありがとぉ、コージ！」

ミミはよっぽど嬉しかったのか人目もはばからず、飛びついてきてぶちゅーっとされる。ちょっまっ！？

「えへへ。ちょっと恥ずかしいね」

「人が見てる所じゃ駄目だよ、ミミ」

「はぁ～い」

あまり反省をしている様子ではなかったけど、嬉しそうに頬を染めるミミを見て買ってよかったと露天のお兄さんに心の中で感謝した。

きっかけ

「そろそろ俺達だけで遺跡にチャレンジしてもええんちゃうか？」

きっかけは、ヴァイス師匠が班の人と一緒に遺跡に潜りレッサーイビルを撃破して、さらにはレアアイテムのイビルの羽根を二枚もゲットした事に始まる。レッサーイビルを狩れるという事は、十五階層よりさらに下を制覇しているという事だからだ。僕たちは遺跡実習では確かに一番ではあるが、それも表面上だけで水面下では他の班も頑張っているようで、ちらほらと遺跡で儲けたという話が聞こえるようになってきたのである。

「今やったらベルスイートの活動もそないに力入れんでええ具合になっとるし、少しぐらいワシたちも金儲けしてもええと思うんや」

「確かに、今は上までキラーマシンやオーガが上がって来る事は少なくなってきてるからな。しかし、ハルトが金儲けとか言うのは珍しいな」

確かに今まで強くなりたいという話は聞いていたけど、何かが欲しいとかそういった類の話は聞かなかった。武器にしても、常に手入れが行き届いているようで使い込んではいても古くなったという具合ではない。防具も常に軽装で胸当てと肩当てをつけるぐらいだし、特にお金がいるような事は無いようにも見えるんだけど・・・

「まぁまぁ、わしかて欲しいもんがあるっちゅーこっちゃ。エリーかてイビルの羽根っちゅーか、杖が欲しいやろ？　わしもそんな感じなんや」

「ふぅ～ん・・・」

その言葉に何か顔を赤らめているセシリア。セシリアも何か欲しいものがあるのかな？

「僕は賛成だよ。フレームを作るのにお金はいくらあっても足りないからね。正直、一人ででもキラーマシンを狩り尽くそうとか思ってたぐらいだし」

「コージ、ガイアフレームを作るとか正気・・・？　ガイアフレームが好きっていうのは知ってたけど、そこまでいくともう病気だよ」

レイが僕の言葉にあきれた顔をして、突っ込んでくる。いやいや。フレームをできれば自分好みに作りたいって思うのは男の子として当然の気持ちじゃない？

「いや、ガイアフレームは確かに欲しいとは思うが作りたいとまでは流石になぁ・・・　そもそも、どうやって作るのかすら見当もつかん」

「それは、一機ばらしてみればなんとなく分かるもんだって。部品を組み合わせて行くだけでできるんだから、プラモデルとかとそんなに変わらないよ？」

「・・・プラモデルが何かは知らんが、そもそも一機ばらすとか簡単に言うな。普通は無理だ」

「そうそう。ガイアフレーム馬鹿にしかそんな事はできないわよ。コージって別にフレームについて誰かに教わったりしたって訳じゃないんでしょ？」

「うん。あ、でも新しい装備を職人さんと一緒に考えたりはした事はあるよ？」

ハーベイさんやリックさんとかに、いざってなれば教えて貰えそうではあるけども。

「とにかくや、コージは狩りに行くのは賛成なんやな。誰か反対の奴はおる？」

そういって皆を見渡すハルト。そうっと下手に伺う様子で見回すのは反対されるって思っているのかな？　ある程度魔物を狩れるようになってきたから、僕達もそれなりに自信がついてるから自分の力でお金が稼げるってなると、賛成こそすれ反対する人は居ないと思うんだけどなぁ。

「だが、遺跡に潜るにあたって誰かギルドランクBの奴はいるのか？」

あぁ・・・忘れてた。そういえば遺跡に潜るには学生証もしくはギルドランクがB以上のもの後はベルスイートの腕章だっけ。しかも、狩った獲物を自分の物にしようとするならギルドランクがB以上なければ無理だし。僕にはセリナが居るから気にした事が無かったんだけども、誰か持ってるのかなぁ？

「それなら、わしが取ってきた。ほれ、これがギルド証や」

「おお！」

取ろう取ろうと考えて、結局徒労に終わって取れなかったギルド証。ハルト何時の間にこんなの取ったんだろう？　やっぱり、学園が終わってから一人で頑張ってギルドの依頼をこなしていたんだろうか？

「ついでに私も持ってるわよ。ロバスを出入りするのにこれって便利なのよ」

出入りするのにギルド証が便利なのは分かるんだけど、別に言わなくても良いんじゃない？　いつもなら堂々としているセシリアなの

に、少し大人しい感じなのも不思議だ。

「ほぉ、セシリアもね。ハルトとセシリアだけが持ってるんだな」
「たっ、たまたまよ！　たまたま便利だから持ってるだけですわ！　ハルトと二人だけしか持ってないのは偶然なだけなんだから」
「落ち着いてセシリア。誰も何も言ってない」
「・・・・・〜っ」

エリーに宥められるセシリア。別に持ってるのは良い事だよね？
んん？

「・・・という訳で、遺跡に潜るのは大丈夫ってわけや。他に何か問題あるか？」
「お金の分配はどうするの？」
「まぁ、それは最初に決めておかんとな。エリーはイビルの羽根が欲しいやろうし、他の皆も何か欲しいものがある筈や。だから、まず欲しいアイテムを申告して貰おうと思う」

うんうん。欲しいアイテムがあるからこそ遺跡に潜るわけだしね。
僕の場合はお金になるのなら何でも良いんだけども。

「で、遺跡に潜って得たアイテムは全て換金する。申告したアイテム以外は全部や。基本は全部山分けや。そいでもって、欲しいアイテムが出たときはそれを買い取って貰う形にしたい。そやけど、最初の内は現金はそないに持ってないやろから、先に欲しいアイテムを渡しておく。で、アイテムの買い上げ価格を調べておいて、どれだけの儲けかはっきりさせておいてメンバーへの支払いを待って貰う。まぁ支払いができるようになったら払って貰うんやけど、利息をどうするかが問題やなぁ」

なんか、意外と言ったら失礼かもしれないけどハルトがしっかりと考えているのが驚きだ。うん、僕だけじゃなかった。他の皆も唖然として見ている。いや違うセシリアだけがうっとりとした顔で見ている。

「あー・・・どうした？　こんなんじゃあかんか？」
「ううん、ハルトがそこまで細かく考えてるのに驚いただけだよ！」
「レイ、素直に失礼な事言うな！」

ハルトに捕まって頭をぐりぐりされているレイ。レイって意外といらん事いいだよね。

「利息って言っても、結局皆欲しいアイテムを協力して取るんでしょ？　別に無くてもいいんじゃないの？」
「いや、欲しいアイテムが高額すぎると利息も馬鹿にならんかなと思ってな。損とか得で考えすぎるのはあかんかのぉ・・・」
「まぁ、お互い欲しいものを手に入れられるかはわからんから、その心配もわからんでもない。だが、結局はお互いの信頼がものを言うんじゃないのか？」

まぁ、一人だけ欲しいものが出ないってなったら全力で頑張ると思う。戦果を上げればお金も付いて回るはずだもんね。

「じゃあ、利息とかは考えずに出るまで頑張るっちゅー事でええかいな？」
「そうね。それで良いんじゃないかしら」
「うむ。特に問題はないな」

僕とレイとエリーは頷くのみ。

「よし決まりや。じゃあ欲しい物を教えて貰おうかいな」
「ほいほい」
方針は決まった。後は皆で遺跡に潜ってしっかり稼ぐだけ。頑張ろうっと。

解禁

うーん・・・遺跡で稼ぐとなったら移動時間がネックだよね。潜れば潜るほど帰りの時間もそれだけ掛かる。エレベータを使えばそんな問題は一気に解決するんだけども・・・まぁトリックスターの仲間なら良いかな、うん。

「皆、何階層まで潜るつもり？」

「ん？　最低でも二十階層だな。行けそうなら五十階層まで行って、お前が倒したいっていうハイマニューバだっけか？　そいつを倒してみたいんだがな。途中で順調に行けばだから、あまり期待するな」

僕とバルト以外は、イビルの羽根が狙いだ。ハルトもイビルの羽根狙いっていうのはびっくりしたけど、何か事情があるんだろう。バルトが欲しいというのはハルパーというメカの装甲で、ブレストアーマーに丁度いい素材なんだそうだ。で、僕はというとハイマニューバというクモメカの親玉から取れる、子グモメカ発生装置が欲しいのだ。同じ所から粘性のある糸も出していたので、他にも何か違うものを出せるかもしれないし。前に倒した時は、糸を焼ききる為にセリナがちょっと火力を強めに出しちゃったので、爆発しちゃったんだよね・・・

「ところがどっこい。五十階層までぱっと行ける方法があったらどうする？」

「なんだと？」

ほんとは五十階層どころじゃないんだけどね。

「五階層までは歩いて行かないと駄目なんだけど、そこからは一気

に五十階層まで行けるんだけど、五十階層まで行ってから戻って行くっていうのはどうかな？」

「どうやって行けるかは分からんが、それが本当なら遺跡に潜っていられる時間が長くなるな。その方法とやらは何か条件があるのか、コージ？」

「条件というか、カードが要るね」

「そんな便利な物があるとはな。じゃあ案内してくれるか、コージ」

「ほいさ、任せて」

ではでは、五階層のエレベータに行きましょう。前は十五階層が一番近いエレベータだと思ってたんだけど五階層にも一階層にもエレベータはちゃんとありました。一階層にあるエレベータは人に目立つ所にあるんで、使いたくないんだけどね。

「しっかしコージはなんちゅうか得体の知れんやっちゃなぁ・・・マジックアイテムを作るわ変な魔法を使うわ、遺跡の事もなんでかよー知っとるし。しかもフレームも作れるんやろ？　そやのに別に今まで目立ってないっちゅうのがおかしい」

「ほら。僕って田舎に住んでたから目立つ訳無いでしょ？　今まで独学で色々してきたから仕方ないんじゃないかなぁ？」

タタ村のさらに奥でこっそり住んでたっていう事にしてるし、そういう事もあるんじゃないかな？　って思って貰うのには十分だと思う。

「いや、剣技をなんで覚えとらんのや？　変な魔法や変なアイテムばっかりで、ちっとも面白うない！」

あぁ、そういう事ね。剣技とか物理攻撃技ってそういえば考えた事無かったなぁ。魔法は特に意識せずに使えたから、異世界に来たか

らそういう物かなって考えてたんだけども、剣技とかコンボ技とかは人間の動きじゃないしなーって試しても居なかったんだよね。でも最近は師匠に鍛えて貰ってるおかげで人間離れしてきてるから、ひょっとしたらできるようになってるかも・・・？

「えっと、剣技とかはまだ力不足だったから試してないんだよね。でも、ひょっとしたらそろそろ僕にも使えるかも？」

「ほんまか？　できるんやったらわしにも教えてくれ、頼む！」

「でもハルトは「絶刃裂波」がかなり強くなってるんじゃないの？」

少なくとも僕よりでかい衝撃波を簡単に飛ばしているし。馬鹿力のおかげ？

「技のバリエーションはあったほうがええと思うんや。魔法を覚えればそんな事考えなくてもええんやろうけど、なんちゅうかポリシーって奴や」

と言って剣を鞘の上から叩く。魔法と剣を使いこなす人が多いこの世界で、剣一本で戦う人は珍しい。ハルトはそういうスタイルを目指しているようだ。

「「穿光」はわしの得物には合わん技やしな。もっとわしの力を活かした技が欲しいんや」

「ふぅん、なるほどね。何かハルトに良さそうな技を思い出しておくね」

「たのむわ」

目一杯叩きつけて外れても衝撃波で相手にダメージを与えたりとか、一直線にしか動けないけど物凄い速さの突き技とかあったはずだ。よく思い出しておこう。

「で、なんで行き止まりに来てるんだコージよ」
「ここから、行けるからに決まってるからだよバルト」

訳が分からないって顔をしないでよ？　さっきカードを使って行くって言ったじゃないか。ぱぱっと指輪から赤いカードを取り出し、しばらく待つ。

ポーン

「“認証しました”」
「え、なに?!」
「呪文かっ?」

あぁそっか。日本語でしゃべってるからこれって呪文に聞こえるんだ。セリナも同じ反応してたもんね。

「何か呪文が浮かんでる」

その台詞に一斉に戦闘体勢に入るトリックスターの皆。ちょっと待ってくださいな。

「大丈夫だよ。古代遺跡で使われる文字ってだけだから呪文じゃないよ。今のはエレベータを使えるって合図なんだ」
「おい、大丈夫なのか?」

ガシュゥウンッ!

いつも通り壁が開いたので僕はエレベータへと入る。

「皆も早く入ってきて。すぐに行くよ～」
「しかし、何かの罠じゃないのか・・・？」
「だったら案内しないって。ほら入って入って」

僕の言葉に恐る恐るといった感じでエレベータに入ってくる皆。エレベータって知っている僕にとってそんな皆は可愛く見える。あまり高い建物とか無いからエレベータが無いもんね。グレイトエースぐらいにはあっても良さそうなんだけど、無かったんだよねぇ。

「じゃあ、五十階層に向けて出発するよぉ」
「た、たのむ」

ガシュゥウンッ！

「え、おい！？　壁が閉じるぞ！？」
「閉じていいの！　ちょっと落ち着いてよバルト」

リーダーのバルトが動揺すると、皆も動揺する。いつもは冷静沈着なバルトだけど文明の利器には弱いようだ。タッチパネルをパッパと押して五十階層へと向かう。

「エリー、これ。これがタッチパネルなんだ。似たようなのを見つけたら教えて？」
「そう、これが」

まじまじとタッチパネルを見るエリー。ぼんやりと光っているパネルを不思議そうに見つめるエリー。パネルに浮かんでいる文字の形を覚えているようだ。エレベータが静かに動き出しすごい勢いで五十階層へと向かう。

「もうちょっとしたら五十階層に付くから、皆念のために戦闘準備をしてて。ついた途端に戦闘にならないとも限らないから」
「もう着くのか？　いくらなんでも早すぎるだろ」
「着くから落ち着いてハルト。入るときは良いんだけど出る時が危ないんだから、しっかりしてよ？」
「そ、そうか分かった」

なんというか現代にタイムスリップしてきた中世の騎士ような反応だ。いや知らないけど。

ポーンッ！　ガシュゥウンッ！

さあてと狩場に到着しましたよ。いっちょ張り切るとしましょう！

みんなの実力

今まではトリックスターの仲間とは最高で三十五階層までしか来なかった。だけど、それは実習の時間内という制限があるせいだったので、実力的には五十階層に来ても問題ないはずである。だけど、実習でエレベータまで使って狩りをすると学園にエレベータの存在がばれてしまうので、使わないようにしていた。

「それで、セリナちゃん達とこっそりと潜ってたわけか。なるほどのぉ。キラーマシンの倒し方について詳しかったんは実際に倒してきた実績のおかげっちゅーわけやったんか」

「道理でコージは遺跡のモンスターに詳しいわけよね。知らない事のほうが多いのに、不思議と遺跡に詳しいのはなんでだろうって前から思ってたのよね」

異世界から来たからこの世界の常識とかほとんど知らないから仕方ないよね。

「で、本気出せばどこまで行けるんや？」

口調はおどけた風だが、目は真剣に僕を射抜いている。内緒で抜け駆けして鍛えてたのを怒ってるのかな？

「今は一人で百階層までは対処できる程度かな。それ以上になるとセリナかミミの手を借りないと難しいね。数が半端ないし一撃の威力が僕だと足りないし」

そこまで行くとモンスターがパワードスーツ着用で襲ってきたりする。オークですらスーツを着るので強さが判りにくい。スーツの種

類は無いんだけど、カスタマイズしていたり習熟度が違ったりするので、恐ろしい手練のオークが居たりする。大型のモンスターも徘徊するしメカも大型化して子メカを多数出してくるので、苦戦する事も少なくないのだ。その代わり僕の修行には持って来いの状況なんだけどもね。

「という事は五十階層では、楽勝というわけか」

「うん、試しては居ないけどこの程度なら瞬殺できる自信はあるよ。イレギュラーがあったとしてもね」

さすがに無駄に鍛えてるだけあって、これぐらいは大口でもなんでもない。いくらハルト達が強いといえど、現在の僕の実力はトリックスターの中では抜きん出ているはずだ。

「それじゃあ、ここでコージが戦うのってメリットが無いんじゃないの？」

「ううん、僕が欲しいアイテムはここら辺でしか取れないし、皆が強くなってくれたらもっと奥まで一緒に行ける仲間ができるって事でしょ？　良い事ずくめだよ」

そういって肩を竦める。皆が強くなってくれればこの遺跡の踏破も夢じゃないと思っている。セリナとミミは強い。だけど、強い人間が多ければ多いほど遺跡の踏破の成功率は格段に跳ね上がるのは間違いないからだ。

この遺跡の先にはきっとフレームが眠っている。もしくはフレームの工場があるはずだ。エレベータは必ずフレームが入るサイズだし、遺跡の通路自体もトレーラーに積んだりすれば移動できる場所の方が多いくらいだ。あと警備メカが非常に多い。キラーマシンもちょっと過激だけど警備メカなのだ。威力の強い武装をしていたりして

いるが、死なない様に攻撃しているので間違いないと思う。だって百階層に入ると途端にメカの攻撃の本気度が変わったし。簡単に言うと殺す気で攻撃してくると言う事。重要な何かがあるからそうなったと僕は思う。階層が深い理由までは分からないが、この遺跡はそういった目的で作られた施設可能性が高い。

「ほぉ。コージも偉くなったもんやなぁ。わしらよりかなり強くなったって言いたいんか？」

「身体能力では負けてる事はあるかもしれないけど、戦闘という場面に限れば強いよ」

ハルトが少し睨み気味で詰問してくるが、伊達に僕も遺跡を潜ってきた訳じゃない。仲間といえど、いや仲間と認めているからこそ堂々と言い放つ。

「・・・そうか。じゃあ、しばらくは見とけ。すぐに追いついたるさかい」

「勿論。でも僕も追いつかれない様に頑張るけどね」

そのハルトの台詞にほっとしているセシリア。僕とハルトが一触即発の雰囲気に見えたんだろうね。ハルトは馬鹿じゃないし、実力も無いわけじゃない。だから、すぐに強くなってくれるだろう。

「じゃあハルト。ハイマニューバからじゃんじゃん狩ってね。大きなクモ型のメカで糸をだすわ子グモメカは出すわで厄介な奴だけど、尻尾部分ちかくは無傷で倒せるように頑張ってね♪」

「・・・おまえは鬼か！」

「まぁ最初はハルパーで良いよ。力は強いし、そこそこ動きも早いから気をつけてね」

ハルパーはゴリラ型のメカだ。かなり力が強く下手な鎧なんかは一撃でへしゃげてしまうだろう。だからこそ、こいつの装甲はそれなりの強度を誇るんだと思う。

「ハルパーの素材は持ってないから、まずはそれを探そう。それからは乱獲するよ」

「おまえ、見てるだけやからって無茶言いよるな」

「大丈夫だって、リンクしてきた敵は僕が処理するから。だから獲物に集中してね。慣れてきたらリンク処理もしないけどね～」

「・・・ヴァイスめ、こいつのサドさ加減はあいつの鍛え方のせいやな・・・」

まぁまぁ、いい訓練になるのは間違いないんだから頑張ろう。

五十階層をゆっくりと周って行く。エレベータから離れて曲がり角を慎重に進み、適当に方向を決めて進む。エリーがマッピングをしセシリアが先導を受け持つ。殿は勿論僕が担当し、レイはエリーの傍を付かず離れず護衛している。ふと、怪しい気配を感じ周囲を警戒する。あぁ・・・

「ハルト！　イビル！」

「なにっ！？」

僕が警告を発した瞬間、ハルトの影からイビルが現れる。レッサーイビルの成長したモンスターだ。だけど、こいつの羽根は退化しており高価な部位は尻尾となっている。なんというか変な成長しちゃ

ったんだよね、きっと。

ギョボォォオォオオオオ

寝る前に聞けば悪夢を見る事間違いなしな叫び声を上げるイビル。ハルトは僕が警告をしたおかげで、なんとか一撃を剣で防ぐ事ができたようだ。こいつは影から影へと移動する事ができるので、やられそうになると良く影に隠れてしまう。そのくせ、影から攻撃してきたりするので厄介な奴なのだ。最初から影から出てくるな！

「“我に道を示す光を賜らん事を願う！　クリアライト！”」

まずはイビル系の魔物に対する有効な魔法を唱えるバルト。彼の聖職者系の魔法はイビルには特に有効だ。この呪文も普通に辺りを照らすだけではなく、悪魔や魔族、アンデッドなどの不浄なる存在の位置を教えてくれる光なのだ。この魔法のおかげでかなりの数のヴァンパイアがその存在を減じたと聞く。

セシリアが炎を剣に纏わせイビルに斬りかかる。こいつらは魔法を纏った剣か銀製の武器でもないと攻撃が効きにくい。試しに普通の剣で斬りかかったら、半端なく固かったのが面白かった。物理的にそれだけ固いっていうのは、かなり無茶な動きができるんじゃないだろうか。半分この世の理から外れた存在っていうのは、再現できるならフレームの装甲に使えるんだけどなぁ。

「レイ！　風は凄い勢いで逃げていくよ！　やるならセシリアに炎の魔法を掛けて貰って」

風の属性は凄く苦手なのか全力で逃げ回る。風系の攻撃は、何においても回避するのがイビル系の特徴らしく倒したければ風系魔法は

使わないほうが吉だ。だって、影から影へ逃げまくって影に攻撃できる手段がないと、ダメージが与えられないもんね。

エリーが何かを思いついたのか、魔法の詠唱準備に入る。今回、僕は見学なので何もしないつもりではあるが、たまたまエリーの傍にいるぐらいは別に良いだろう。ちらりと僕の方を見たエリーは、特に微笑むなどはなくコクリと頷くと魔力を練る為に瞑想を始めた。

「“氷よ！　全ての動きを凍てつかせよ！　ブリザード！”」

コンコンと床を杖で叩き、くるんと一回転。これがブリザードの合図。いちいち声を掛けていたら敵にばれると言う事で、この味方毎巻き込むブリザードに関しては合図を決めていたのだ。そして、エリーが危ない魔法を覚えるたびに合図は増えるのは間違いない。

エリーの魔法が通路を凍らせていく。イビル自体は何か障壁のような物を出してブリザードを防いでいるので全くの無傷だ。逃げるのが得意なチキンだからか、憎たらしい事に意外と高い防御力を誇る魔物なのだ。

「“氷よ！　大気を凍らせ壁と成せ！　アイスウォール”」

続けて通路を塞ぐように壁を出す。そして、床も天井も壁も凍りに覆われた空間ができあがった。何が目的なんだろ？？？

「“氷よ！　全ての動きを凍てつかせよ！　ブリザード！”」

まさかのもう一発ブリザード。警告があったとはいえこれだけ逃げ場が無い場所だとちょいと痛い。それに閉じ込めた空間でぶっぱなすから、辺り一面分厚い氷に覆われてしまった。めっちゃ寒いし！

「エリー！　こいつにブリザードは効いてないぞ！？」

その言葉にこっくりと頷くエリー。事実イビルはなんの傷も負わず悠然とハルトとレイシアの攻撃をさばいている。エリーは分かってた魔法を唱えたようだ。となると、別にダメージを与える為に唱えた訳ではない・・・？

「レイ、一番強い風魔法」

なぜかそうレイに命令するエリー。風魔法は当たれば確かに削れるんだけど当たればの話だ。訝しがりながらもレイは風魔法を唱える為に瞑想をはじめる。僕もよく分からないので大人しく見ている。そして、何か嫌な気配を察したのかレイを見つめるイビル。

「“風よ！　全てを薙ぎ払う風よ！　薙ぎ払え！　トーネード！”」

ちょっ！？　レイまで風の範囲魔法を覚えてるの！？　でもイビルは影に入っちゃうから駄目だろうと心の片隅で思っていると、なぜかイビルはうろたえた様子で影に入っていない。そして、トーネードがイビルを吹き飛ばした。

五十階層

さすがに範囲魔法とは言え一撃でイビルを倒せるわけがなく、すばやく体勢を立て直すとイビルはエリーとレイから距離を取るようにハルトに向かっていった。

ギョォオォオォボォォオォオオォォォォ

腹まで響く低い唸り声を上げクリアライトの光を引き連れながらハルトへと肉薄するイビル。ハルトは愚直に襲い掛かってくるイビルに向かって剣をふるう。何も魔法を付与されていない剣ではダメージを与えられないのだが、そこは馬鹿力のハルトの見せ所で勢い良く飛び込んできたイビルをエリーとレイの方向へと撃ち返した！

「どりゃぁあああ！　いったぞレイ！！！」

“風よ！　我が敵を斬れ！　カッター！”」

空中を吹き飛ぶイビルにカッターが連射される。だが、イビルは尻尾を器用に使い空中で方向転換をしカッターから逃れる。

「もういっちょ！」

だが、そんなイビルの動きを予想していたのか一瞬で踏み込んできていたハルトはもう一度レイに向かって剣で吹き飛ばす。さすがに今度は体勢が悪かったのか、もろにカッターを食らい大分弱ってきたようだ。

「“其は戒め、我が敵を留めたらん！　ラシャラ！”」

間近で弱っているイビルに紐を投げつけ拘束魔法を唱えるエリー。
これで完全に影に入る事ができなくなる。こうなればあとは、一気に止めを刺すだけであった。

運よく残った尻尾を切り袋に入れるバルト。イビルの羽根ほどではないけど、悪くない物である。で、落ち着いた所でエリーに聞いてみた。

「エリーはさっきのイビルの影移動を封じた方法って誰かから聞いたの？」
「思いついて試してみたら、たまたま上手くいっただけ」
「しかし、ほかに何か方法はなかったんかいな。寒くてかなわん」
「それは無理。氷系しかできない」

だけどどういう理屈で影に入れなかったんだろう？

「影が氷に阻まれたせい」
「ん？　氷が邪魔で影まで届かなかったって事・・・？」
「だと思う」

綺麗で透明な氷で一面を覆われたせいで、影が直接触れる所に無かったせいでイビルは影移動ができなかったらしい。そんなのは簡単に通り抜けても良さそうなんだけど、便利な能力だからそれぐらいの制約があっても不思議じゃないか。使い勝手が良い能力だけになにがしかのデメリットはあるもんだしね。ちなみに僕がイビルを倒す場合は至近距離に近づいてから、「ギル」のモードを風にして連

射するだけでイビルは沈む。直前のモードは風以外にしておくのがコツなのである。

「じゃあ、氷をどかして次に・・・」

ゴバシャァ！

「うおっ！？」

「きゃっ？！」

行こうとしたら、ハルパーが氷の壁を破って姿を現した。その数三体。イビルの雄叫びのせいなのか中々の数が僕たちの前に現れた。

「“我が魔力もて、あらゆる加護を！　アブソーブバブル！”」

バルトが皆にダメージ軽減魔法をかける。事前にハルパーの尋常じゃないパワーを伝えてあるので普段であれば魔力の無駄遣いになるんだけど、今回に限っていえば妥当な魔法なのである。

ズゴンッ！ゴスッ！ゴギッ！！！

氷が気に入らないのか、通路に張り付いている氷を叩き割っていくハルパー達。その巨体に似合わず身軽な動きで、わずかな時間ですべての氷を粉々にしてまわった。

「ハルト、二体はやっちゃおうか？」

「いや、一体だけで良い。本当は全部やりたい所やが、全力出し切ってしまうからな」

「オケ。じゃあ奥のやつは貰ってくよ」

アタックオプションを二個取り出し、ハルパー目掛けて飛ばしておく。

「光よ、我が魔力を食らいて命があるまで留まりたまえ！　ボールライト！」

光球を出しハルパーの視覚を奪う。わずかな時間だけど、それだけで奥の奴の前まで辿り付くまでには充分な時間である。アタックオプションでお手玉状態にして、少しでも気を引いておくように光球を飛ばしておく。

モードは「光」

「ギル」の二刀流でハルパーの四肢を切断し、頭の部分は顎を蹴り上げ喉を露出させ「ギル」を差込みハルパーを無力化する。これならバルトが欲しい部分も綺麗に取れるだろう。そしてハルパー探索用に首のパーツをもぎ取っておいた。

ヒュゴッ！

僕の背後からハルパーが腕を振り下ろしてきたけど、片手一本で流し地面を抉らせた。

「ほら、ハルト頑張れ〜！　僕は一旦姿を隠すね」

そういって、熱遮断機能のついた光学迷彩マントを羽織る。そのまま静かに移動すれば相手がメカといえど簡単に見つからないのだ。

返事をする前に僕が見えなくなって驚いていたようだけど、ハルトはすぐに気持ちを切り替える。ハルトはでっかい剣をまるでバット

のように使いハルパーの攻撃を全て弾き返している。だけど、敵は二体いる。今まで僕を狙っていたハルパーもハルトを攻撃する方へと移動していった。

「“穿光”」

ハルトだけには無茶をさせないと言わんばかりにセシリアがもう一体の関節を狙って技を繰り出す。狙いは良かったんだけど、そもそも耐久性に自信のあるメカなので一回や二回関節を狙った所でくず折れる事はなかった。

「固すぎよこれっ！？」

あまりの固さに驚きの声を上げるセシリア。そんなセシリアにハルパーが両腕を振り下ろす。中々の速さでセシリアを狙うが、セシリアはぎりぎりで上手く逃げ回っている。ハルパーはずんぐりとした風貌の割に狙いが鋭い奴なので、油断していると一発二発良いのを貰ってしまう事もあるので、しっかり回避できているのはセシリアが油断せずに集中している証拠だ。

「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」

エリーがセシリアを支援する。メカだけに氷系の拘束魔法は入りやすい。簡単に右足が凍りつき動かなくなる。だけど、こいつは強引に足を動かすと右足についていた氷を粉々にしてしまった。さすがはパワーに定評のあるハルパーである。

簡単に拘束から逃れられたとはいえ、一瞬の足止めができるのは間違いない。となれば、セシリアと連携でできる事はある。

「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」
「“穿光”」

エリーが拘束し、セシリアが正確に関節を狙う。レイも囮となるべく周りを動き回り攻撃を加えるがいかんせん相性が悪すぎてまったく戦力になっていなかった。だけど、エリーとセシリアのコンビの攻撃が確実に右足にダメージを与え続け、やがて右足が外れ落ちた。だけどメカには生物の常識は通用しない。右足が外れた途端に“手”を使って移動を始めるハルパー。そして左足を器用に使って襲ってきた。

「なによこいつ!?　これってありなの?」

バルトはハルトの支援につきっきりであり、こちらに回る余裕はない。本来ならばレイが敵を引き付けて連携するはずなのだが、相性が悪い。レイの風の魔法では装甲を抜く事ができず剣での攻撃も軽すぎて話しにならない。セシリアのレイピアであれば刺突でなんとかダメージが与えられるんだが、レイはブロードソードで斬る主体の攻撃なのだ。頑張れレイ!

「“氷よ！　冷気をもって我が敵を留まらせよ！　コールドロック”」

エリーの拘束魔法が飛びセシリアが攻撃しようとした瞬間、凍りついた左腕を支点に巨体を回転させるハルパー。

「きゃぁっ?!」
「セシー!?」

飛んでくるのは左足だろうと予想していたセシリアは、ハルパーのラリアットをもろに食らい吹き飛んでいく。今までの縦の攻撃から急に横からの攻撃に変化したせいだ。バルトの魔法が無ければ今の戦闘不能になっていただろう。そして、セシリアが吹き飛んだのに驚いたハルトも攻撃を弾き返し損なってバルトに助けられていた。

「これ以上は駄目っ！　悪いけど処理する！」

僕はそう言い放ち、「ギル」の二刀流でハルパーを切り刻んでいった。

戸惑い

「“我に与え給え、彼の者の全てを癒す神々による聖なる奇跡！パーフェクトヒール！”」

ハルトとセシリアに回復呪文を唱える。バルトがびっくりしてるけどとりあえず黙っていてくれた。

「セシリア、油断しすぎだよ。初見の敵なんだから慎重にいかないと。攻撃パターンを変えてくるなんて、初歩の動きだよ」

回復呪文で落ち着いてきたので、セシリアに少しきついけどはっきりと今の駄目な所を言わせて貰う。なんというか、いつもより焦りが見えていたんだよね。エリーと連携を始めた所までは良かったんだけども。

「教えてくれても良かったじゃない」

「教えてたら大丈夫だったと思うけど、僕だっていつも知ってる訳じゃないんだよ？　今の内から油断しないようにするべきだよ」

さっきの戦闘ではセシリアが戦闘不能になった事により、そのまま全滅の憂き目もあった。勿論、そんなのは可能性の話にすぎないんだけど、実際にハルトがリズムを崩しセシリアも止めを刺されそうになっていた。レイでは止めきれないしエリーの魔法で吹き飛ばすにも時間が無さ過ぎた。

「・・・悪かったわ」

「セシリア、何も意地悪で言ってる訳じゃないんだ。ちゃんと納得してほ・・・」

「悪かったって言ってるでしょ！　ほっといて！」

普段、荒々しい態度を取る事のないセシリアが大声で怒鳴りそのまま少し離れた所に行ってしまった。その後をハルトとエリーがすかさず追いかけて行った。

「・・・僕は間違ってない・・・」

「そうかもしれん、だがコージ。おまえは強くなった事で増長してないと言えるか？　以前のおまえならもう少し違う言い方をしたはずだ」

「強くなったのは事実でしょ？　僕だって簡単に強くなった訳じゃない！」

「そのせいで見えなくなった物もあるんじゃないのか？　おまえだって、一人で強くなったわけじゃないはずだ。俺から言えるのはそれだけだ」

なんだよそれ・・・僕がおかしいみたいじゃないか・・・

「ま、一度落ち着きなってコージ。誰かが言わなきゃ駄目だけど言い方ってもんがあるし、タイミングもずれると上手くいかなくなるって。コージが間違った事を言ってないのは皆も分かってるさ」

そういって拳を僕の顔に当ててくるレイ。本当にそうかな・・・とりあえず、レイの言うとおり少し落ち着いた方が良いかもしれない。

すーはー・・・

深呼吸をすると少しは落ち着いたけど、やっぱりまだもやもやする。皆を追いかけているつもりが何時の間にか抜き去っていて、その事が僕を天狗にしてしまったんだろうか。でもそんなに嫌味な事を言

ったつもりは無いんだけど・・・

「ねぇレイ。僕の言い方ってそんなにおかしかった？」
「うーん、正直俺はそんなにおかしいって思わなかったね。それよりもコージの強さに皆が驚いたせいかなとは思うけども」
「どうゆう事？」
「ほら、コージの強さは成績で言うと僕達より下だったでしょ？それがいつの間にかかなりの実力差になっている。さっき使った回復呪文もかなり難しい奴なんでしょ？　バルトが動揺してたし」
「でも今でも皆に負けてる部分は色々あるんだけどなぁ・・・」
「コージはそう思っていても、ほかの皆は違うんじゃない？　むしろ足手まといになってると感じてるんじゃないかな」
「足手まといって・・・」

レイはのんびりとした口調でそう呟いた。だけど客観的にそんな風に言えるって事は、レイには僕には絶対負けない何かがあるという事なんだろう。事実、レイの早くて正確な動きはまだ真似できないし。

「まぁ、ぼーっとしたコージがこれだけ強いって分かれば焦る気持ちも分からないでもないけどね。どちらかというと今まで自分達の方が強いと慢心していたハルト達の方が、俺には問題があると思うなぁ」
「ぼーっとしてるってひどいなぁ・・・」

レイのいつもの物言いに思わず苦笑する。

「そう、コージの強さは認めないと駄目」
「うわっ？！　エリーいつの間に？！」

びっくりしたぁ。セシリアを落ち着かせていた筈のエリーがいつの間にか僕の背後に来ていた。

「そうだよ。その上で指摘された事を飲み込まないともっと強くなれない。つまらない見栄は損をするってね」

「うん。強くなるのに見栄は不要」

なんというか、ひょうひょうとしている二人にこんな風に慰められるとは正直思わなかった。レイもエリーもあまり他人に興味を持たない感じだし。

「ありがと二人とも。僕セシリアに謝ってくるよ」

「・・・悪くないのに？」

「うん、こんな事でぎくしゃくするのって嫌だし、僕もやっぱりちょっと嫌な部分はあったろうし」

なんというか、ハルパーぐらい倒せるのは当然って思ってたのは事実だ。そんな考えが僕の言葉の端々にのっかっていたんだと思う。

「コージ。悪いけど今日はこれで店じまいや。ちゃっちゃと戻るで」

「え、あ・・・」

セシリアに謝ろうとしたその時、ハルトがそう言って僕の動きを遮った。

「あとセシリアはそっとしといたってくれ。とりあえず今日は」

「うん、わかった」

ぼそっと小さな声で僕にそう伝えてくるハルト。セシリアはやっぱり怒っているんだろう。こういう事って長引かせるとあんまり良く

ないんだけど、ハルトがそう言うなら仕方ない。

「ハルト、それで良いのか？　コージは悪くないぞ？」

「すまんレイ。あとでちゃんとするさかい」

レイが僕の為にハルトにそう言うも、やっぱり今セシリアに謝るのは駄目そうだった。ちょっとがっかりしてる僕をエリーは慰めるように背中をさすってくれた。

「ほな、戻るで」

こうして、トリックスター初めての遺跡探索は幕を閉じた。

結局もやもやとした空気の中、解散を告げた。戦果としてはイビルの尻尾やハルパーの素材をたんまり持ち帰ったので稼ぎとしては悪くないが、如何せん重大な問題が浮かび上がってきた。

「コージの強さが突出しすぎてるよねぇ」

いやはや、毎日同じように学園で学んでいるというのに強さが段違いになっているとは果たして誰が気付くだろうか。コージがヴァイスに鍛えられているのは知っているけど、所詮は生徒と生徒の訓練にすぎないので、そんなに変わらないと高をくくっていた。それにコージの判定にも油断していた。学園の測定でかなり低い評価だったし、成長しているのは分かっていたけど、どこかで俺の方が上だと考えていた。

「というわけで、行くんだろハルト？」
「そういうこっちゃ。このままコージにおんぶに抱っこはわしのプライドが許さん」
「おいおい、コージに負けてるのがそんなに悔しい？」
「そういうのや、あらへん。いや、それもあるけど強くなる努力を最近、なまけとったのがあかんと反省しとったんや」

ハルトはコージの強さを認めている。だけど、ハルトの強さとコージの強さは違うという事をちゃんと理解しているようだ。全てにおいて負けてるという訳じゃない、鍛えればコージの強さに俺だって追いつける筈。

「だけどコージを仲間はずれにするのは可哀想」
「仕方ないだろ。コージが居ればどこかで安心して緊張感が無くなる。それでは俺達は強くなれないからな」
「安心じゃなく慢心ね。俺みたいに普段から冷静でいればコージが居ても居なくても変わりなく戦える筈なんだけどね」

戦いに対していつも同じスタンスで向き合っていれば、誰がいようと関係ない。ま、俺の考えだから正しいとは限らないんだけどね。

「またレイは笑顔でぐさっとくる事を言うなぁ。そのギャップがモテル秘訣なんか？　そうなんか？」
「知らないよ。意外と怒られたいんじゃない？　それに俺は別にもててないし。勝手にいろんな娘が騒いでるだけだよ」

それに女の子にうつつを抜かすよりも、こうやって仲間と騒ぐ方が楽しいしな。

「・・・慢心か。そうだな、確かに慢心してたかもしれんな」
「まぁ、反省は後にせい、後に。これから潜るっていうのに落ち込まれたらかなわん」
「分かった。後でじっくりと反省するとしよう」

追いつく為の第一歩ってとこかな。コージがあれだけ強くなったのなら、俺達だって負けてられない。あのおっとりとしたコージの事は好きだからね。彼と肩を並べられるようにもう少し努力するとしよう。

反省？

あー・・・ショック・・・

良かれと思って、セシリアに指摘したらこんな事になるとは思わなかった。セシリアだけじゃなくて、バルトも何か怒ってたみたいだし。でも今日の事は、言わないままでほったらかしにしてたら今後もっと危険な事になるから言わずにはいられなかったんだよね。レイとエリーは慰めてくれたんだけど、遺跡から戻っても結局暗い雰囲気のまま終わっちゃったし。

せっかく、皆で一緒に遺跡で稼げると思ったのになぁ。遺跡で僕が強いのは、単純に経験がものを言ってるだけなのに。確かに色んな敵を倒しまくったおかげで、強くなった実感はあるけどもね。だけど、戦えば戦うほど自分の未熟な部分がどんどん見えてきて、修行が足りないなって思っているのに、なんというか皆が僕の事を次元が違う人間みたいな目で見るのは止めてほしいんだけどなぁ。実際、体力測定では僕の方が下なんだし。

あー・・・なんか今日は何も考えたくないや。だけど、このまま家に帰るのもあれだし・・・うーん久しぶりにトレイルさんに会いに行こうかな。うん、そうしよう。学園に戻る事になるけどまぁ良いよね。家に戻るつもりで歩いていたけど、魔法教会は学園の横にあるのでもう一度学園に向かって歩き出す。

魔法教会に付き門番の人に、トレイルさんに僕が来た事を伝えて欲しいと言うと、僕の顔を見てから黙って取り次いでくれた。セリナと一緒に来たりトレイルさんに呼ばれて来たりしているので、覚えられてるんだろうなきっと。あの二人ってすっごく目立つし。ぼん

やりとそんな事を考えていると、トレイルさんが小走りにやってきた。

「いらっしゃいコージ君。来てくれてうれしいよ」

「突然お邪魔してすみません、トレイルさん」

通されたのはトレイルさんの研究室。僕にとって魔術師の部屋のイメージは色々な物がごちゃごちゃとしていて、座る場所もないというイメージなんだけど、トレイルさんの研究室は棚に色々あるけれど綺麗に整頓されていて雑然とした様子がまったくない。本当に研究室って感じだ。

「なんのなんの。最近、学園で頑張っているそうだね。私も実は学園の講義を受け持つ事もあるんで、色々と噂は聞いてるよ」

急な僕の来訪にもそういってにっこりと笑うトレイルさん。

「知らない事ばかりだったんで、講師に質問攻めばかりでしたしね。でも最近はそこまで質問したりしないですよ？」

「あれだけ魔法を使うコージ君が、何も知らないっていうのが驚きだがね。そういえばセリナに聞いたんだけど、あれから魔法を色々開発したそうじゃないかね」

きらんと眼を輝かせ、座ってるだけのはずなのに何故か格好良く見える。相変わらず無駄にカッコイイよねぇ。

「ええ。基本魔法なんですけどね。セリナと相談して属性魔法っぽく見せてはいますが」

「それを聞いてびっくりしたよ。なんて出鱈目なんだろうってね。しかし、基本魔法で伝わった方が冒険者たちには便利になるんじゃ

ないかね？」
「便利とは思いましたけど、やめときました。属性魔法の意味がなくなりそうでしたし。セリナも教えるのが面倒くさいって言ってたんで」
「まぁそれもそうだけど、セリナは仕方ない奴だなぁ。で、今日はどうしたんだい？」
「えっと・・・」
「そんなに落ち込んでるって事は何かあったんじゃないのかい？」
やっぱりばれちゃうよね。気づけばため息ばっかり出てるし。ふぅ。
「いやぁ、あはは」
「まぁ、喧嘩するのは良い事だよ。本音でぶつからないで友達になれる訳ないってね」
コーヒーをすすりながら、トレイルさんは意外と過激な事を言う。でもそうだよね。師匠ともぶつかりあったからこそ、仲良くなれた訳だし。ていうか、喧嘩したってなんでバレルんだろうね。不思議。
「わたしだって、人付き合いが上手なほうでは無いのでそれは良く対立したものさ。だけど、対立して理解し合えた人間は今でも良い友人関係を保っているからねぇ」
さらりと言ってるけど、やっぱり何度も色々な人とぶつかりあってきたんだろうなぁ。僕なんて人と喧嘩するなんてこっちの世界に来るまで全く無かったし。いっつも逃げてばかりだったもんなぁ。
「だからこの際、はっきり本音をぶつけあった方がいいと思うよ。中途半端にするとまたどこかで不満が出てくるからね。で、すっきりしたら私と戦うと良いと思うよ」

「いやいや、さりげなく何言ってるんですかトレイルさん」
「はっはっは」
無駄にポーズを綺麗に決めて誤魔化すトレイルさん。この人もセリナと同じで魔法を試したくて仕方ない人種なのだ。
「あーそだ。トレイルさんって光属性は使えます？」
「いやいや、風と炎で精一杯だよ。何か良い魔法でもあるのかい？」
「思考の加速魔法です。使いこなせればかなり便利ですよ」
「思考の加速・・・かね。それはどういう物なのかな？」
トレイルさんの興味を引いたようで、真剣な眼差しを向けてくる。
「正確には思考と五感もですかね。単純に言えば時間が引き延ばされるんです。魔法の効果で一分間が、実際には二秒も経ってないというか・・・」
「ふむ・・・時間の進み方が遅くなる、という事かね？」
「あぁ、そうそう！　そういう事です。剣で斬りかかられても、相手がゆっくり動くので簡単に回避できるようになります。もっとも限界はありますけどね」
「光属性ならそれが実現できるというのか。他の属性でできないのかね？」
「今の所、光の属性でしか試していないですね。他の属性だと雷か炎・・・が可能性があると思いますが、光属性ほどでは無いと思います」
光より早いものって無いもんね。雷なんかは電気と同じと考えれば可能性が無くはないし、炎にしても熱を加える事で早くなるかもしんない。

「今までに無い魔法の効果だからな、効果が薄かろうがそんな魔法があればかなり画期的だ。ぜひ、光の属性以外でも実現してほしい」
「それなりにデメリットもあるんですけどね。トレイルさんが使えるなら、メリットとデメリットを細かく調べて貰いたかったんですけどね」
「無茶言うなよコージ君。二つの属性を使える私でもかなり貴重なんだぞ。三つとか四つの属性を使いこなす魔術師なぞ聞いた事は無いぞ。いや、コージ君以外にな」

全属性ともなると何をかいわんやって事だよね。でも、アクセルを使える魔術師が少ないって事は、ある意味ありがたいんだよね。敵が使ってくるとこれ以上なく厄介だもん。・・・あれ？　そういえばミミって全属性使えるんじゃないだろうか・・・いや、でも球魔法を覚えたのって、こっちの世界の魔法にカスタマイズする前だったからどうなんだ？

「まぁ他にも便利そうな魔法を考えておきますから、その時は頼みます」
「風か炎の属性で頼むよ。あ～・・・炎はセリナに任せておけばいいだろうから、風で」

黒セリナを思い出したのか、苦い顔をしてそう訂正するトレイルさん。下手に炎の魔法のテストなんかしたら、セリナが知れば怒りそうだもんね。にっこり笑いながら熱線魔法を撃つぐらいはしそうだ。

「来てよかったです。なんか落ち着きました」
「たまには男同士で話をするのも良いって分かってくれたかね。これからも気軽に来なさい、だいたいここに居るから」
「はい、ありがとうございます。たまには、戦いに来ます」
「ぜひ、そうしてくれ」

トレイルさんなら、良い魔法の訓練ができそうだ。風系統で敵に使われると厄介な魔法をしっかり考える事にしようっと。

「くふふふふ・・・あと少しで満足のいく仕上がりになる。あぁ楽しみだ楽しみだ・・・」

巨大な地下の空間でギガンテスの仕上がりに、喜悦を隠しきれない小男。直立せずに座った状態でギガンテスが静かに待機している。流石にこれだけの巨体ともなると、パイロットだけの魔力では賄いきれるものではなく、現在は魔力タンクに魔力を補充している最中であった。

「トロン主任、こいつには武装が見当たらないんですが別で作ってるんでしょうか？」

ギガンテスを愛しげに見つめる小男にそう尋ねる作業員。確かにギガンテスの各部を見ても魔道具を仕込んだり、武器を収納している様子は無い。

「何を言ってる。この大きさが既に武器だよ。殴れば相手は吹き飛び、蹴りは全てを薙ぎ払う。それだけの大きさと力を兼ね備えているからこそ余計な武器など不要なのだよ」

なんで、そんな単純な事も分からないと言いたげな表情で作業員を見上げるトロン。作業員が自分より身長が高いせいで少々荒い口調

になっているようだ。

「は、申し訳ありません」

魔力タンクに充分な魔力が貯まりテストをすれば、自分の思い通りの性能を発揮するか分かる。理論的には間違いないのだが、いかんせんこれだけの巨体だ。今までに無いフレームであるので不具合が発生しないとも限らないのだ。だが、トロンには自信があった。なにせギガンテスは自分の分身でもあるのだ。自分の夢を叶えてくれる大事なフレーム。本当であれば自分で操りたかったが、魔力が少ないせいで断念せざるを得なかった。

「だがいつか自分で乗れる物も造ってやる・・・」

ギガンテスはトロンの野望の第一歩であった。

加速

「“光よ！我が思考にその光を分け与えたまえ！　クロックアップ！”」

こっちの世界用に作り直したアクセル。アクセルの状態を終わらせる為に闇属性の魔法もセットで覚えないと駄目なので使い手は非常に限られる物になってしまった。

「“闇よ！闇よ！　我が思考の光を打ち消せ！　ダウン！”」

これがアクセル終了の為の魔法。うまい語句を思いつかなかったので闇属性に頼る事になってしまったのだ。で、何故光と闇の魔法を唱えているかと言うとミミってひょっとして全部の魔法の属性に適正があるんじゃないかなって思って、試して貰うからだ。球魔法はほとんどの属性の球を出してたからね。

「うん、やり方は分かったよ！“クロックアップ！”」

「え」

属性への呼びかけをせずに魔法を唱えるミミ。

「“ダウン！”」

驚いている僕を尻目にすぐに解除するミミ。どういう事なんだろ？

「なんで属性の呼びかけ無しで魔法を発動できるんです？」

「だよね、今詠唱破棄しちゃったよね？」

「え？　魔法の効果は分かってるし、今の呪文だけで力を発揮でき

るでしょ？？？」

なぜか逆にきょとんとされてしまった。魔法を発動させるプロセスが何か違う。確かにイメージは大事なんだけど、属性への呼びかけも重要だ。セリナの魔法は呼びかけを重ねる事で威力を底上げしたし、発動する為の魔力をうまく誘導するのも詠唱なはずなのだ。

「魔力を術式にきゅっと流し込むだけなんだから、無駄な部分を省いたの」

「僕以上に理論もくそも無いねぇ。そういうもんなの？」

「詠唱すれば間違いなく魔法が発動するけど、理解できてるならむしろ詠唱ないほうが戦闘には使いやすいでしょぉ？」

「それはそうだけど、普通は難しいんじゃないかなぁ」

「そうなんだぁ」

ミミの説明どおりなら魔力さえ練り上げておけば、魔法名だけで魔法が発動する。この際大事なのは魔法のイメージであり、詠唱は無くても良いって事だ。

「“クロックアップ！”」

なるほど、確かに発動する。だけど、セリナが使ってる魔法は威力を高める為に詠唱が特殊な物が多いんだけど、それも詠唱破棄しても同じ効果を得る事ができるんだろうか？

「“ダウン！”」

色々試してみる必要があるね、これは。ミミのおかげで対人戦闘時の魔法の使い勝手がかなり上がるだろう。詠唱破棄できれば、対抗魔法を唱える時間なんてないからね。

「ちょ、ちょっと待って下さい二人とも。詠唱なしで魔法のコントロールが何でできるんです？」

僕も詠唱破棄をした事でちょっと慌てた様子でセリナが尋ねてきた。

「僕はコントロールしてないよ。とりあえず、術式には満遍なく魔力を流してるだけだし」

「ん？　術式に流す魔力を変えれば、詠唱無しでコントロールできるよ？？？」

「あ、そうやってコントロールするのか。なるほど」

という事は、どの魔法でもコントロールは可能って訳だ。術式のどの部分が威力を担っているか、時間を担っているかを理解しないと駄目だろうけども。

「私が言うのもなんですけどお二人とも出鱈目すぎです。そんな細かい魔力操作ができる人間なんてごく僅かですよ？」

「「そうなの？？」」

あ、ミミと返事がはもった。コツを掴めば詠唱破棄のほうが楽なんだけどな。

「ちなみに私には無理ですね。詠唱と術式の構築は切り離せないですし」

魔力操作は苦手なんですよねぇ、とごちるセリナ。最近魔法を習い始めた僕達が詠唱破棄できるのがちょっと悔しいようだ。いや、あれはかなり悔しがってる・・・やばい。

「で、でも、セリナって詠唱を細かく変える事で、同じ魔法でも凄く変化させられるじゃない？　今まであった魔法も色々効率良く改良してたりするんでしょ？　そんなのは僕達には無理だし」
「うふぅ、コージとミミだけしかできないのかぁ、にひひ」

ミッミミィ！？　君はなんて事言ってくれちゃってんの？　せっかくセリナの機嫌が元に戻りそうだったのに、今ので台無しだよ？！

「ミミ、そういえばあなたは抜け駆けが得意でしたね。まさか私の得意分野の魔法でも抜け駆けしてくるとは・・・」
「セリナがのんびりしてるから駄目なんだよぉだ。それに抜け駆けじゃないよぉ？　ちゃあんと勝負に勝ったんだもぉん」
「よく考えればじゃんけん勝負なんて、いかさまも良い所じゃないですか。それに乗った私達も駄目ですけども」
「むっ！　いかさまじゃないもん！」

いやミミさん、それは限りなく黒に近いグレーじゃないですかね？
あなたの動体視力であればじゃんけんなんて、いくらでも勝てるんじゃないですか？　今にも掴みかかって喧嘩しそうになってる二人の間に入ってなんとか仲裁しようとする。

「まぁまぁ、セリナも抑えて。セリナのほうがお姉さんでしょ？」
「いえ、最近はミミの成長も著しいですし、よくよく考えればミミの方が年上です」
「あ、そうだった」
「このままでは私の存在意義が脅かされるのです！」
「おっぱい攻撃はセリナだけのものじゃないもぉん、だ！」
「な、なにを言ってるんですか？！　そんな事はしてませんよっ？！」

ミミの台詞にすっごく動揺してるセリナ。声が裏返ってるセリナなんて初めてだよ。しかし、ミミ。おっぱい攻撃ってそんな言葉を女の子が言って欲しくないなぁ・・・

「ちゃんと見てたもん！　コージの顔がだらしなくなってたもん！　つるぺたのミミの胸も見てたもん！」

胸が見てたって斬新な表現だなぁ。さしずめ、さきっちょが目玉なんでしょうか？

「いまは全然つるぺたじゃないじゃないですか！　それに有効な武器を使わないでどうするんですか、ミミだって今じゃおっぱい攻撃しまくりじゃないですか！」

「ふふーんだ、きっとまだまだ大きくなるからもっとしちゃうもんねぇ～！　おっぱい攻撃はセリナだけのものじゃありませぇん」

美少女がおっぱいおっぱい連呼しないで欲しい・・・聞いてるこっちが恥ずかしくなるよ。

「「あ」」

ようやく僕がここに居る事を思い出したのか、間抜けな顔をして僕を見る二人。いや、もう遅いよ？　ちゃんとおっぱいおっぱい言ってるの聞きましたよ？

「えーっと、二人ともそういう事を言うのは程々にね？　はしたないよ」

「「はーい」」

言うのは駄目だけど、するのは大歓迎だからね。

監視衛星をフルに活動させているけど、いまだに次男坊はもとよりエドの姿をつかむ事ができない。貴族の屋敷はすでに全部洗い出しているので、その周辺を重点的に監視しているんだけど、ひょっとすると隠れ家に隠れているのかもしれない。それに姿の無い襲撃者もあれから一向に尻尾を出さない。警戒はしているので、次に来れば絶対捕まえてやるつもりなんだけど、ちょっかいを出して来ないからその機会も無い。

「こっちからエドの夢に入る事はできないしなぁ。向こうからコンタクトしてくれれば良いんだけど」

次男坊のヒューイを助けて逃げ出した事を考えると、それも難しいだろう。何を弱みを握られているか知らないけれど、ヒューイみたいな悪玉菌と一緒に居るのは駄目だ。こっちに来てから最初にできた友達。なんとかして救えないだろうか・・・　とにかく監視は続けて見つけ次第かっさらいに行けるようにしよう。

「でも、二十四時間見張るなんてできないしなぁ。僕がもう一人居ればいいのに・・・」

身体が三つ四つ欲しいよね。一人が資金集めして、もう一人がフレームを作って、もう一人は学校に行って、後一人が監視する。あ、監視は交代制にしないと疲れるだろうからあと一人いるか。って、妄想なのに、なんで細かく考えてるんだろうね僕は。あはは。

「ていうかっ！　魔法で分身作れば良いじゃん！」
光と闇の魔法を混ぜればできそうな気がする。
「“光と闇よ！　我が姿を違えずここに現せ！　ダブル！”」
「お、できたできた」
「だね、でもなんか少し能力落ちてる気がしない？」
「いや劣化してないはずだよ？　じゃあ、五人僕を作りましょうか」
「ほいほい」
「「“ダブル！”」」
さらに二人僕ができあがる。あと一回僕がダブルを唱えて五人の僕が出来上がりだ！
「なんというか、自分と話すって変な感じだね。それに声が変に聞こえるし」
「それは仕方ないから諦めなきゃ。じゃあ、みんなそれぞれ役割は分かってるよね？」
「たまには交代してよね。監視ばっかりするのは疲れそう」
「資金調達する僕はまずギルドでBランク取ってこよう。それがたぶん近道だからね」
「でも、この魔法って一人に戻る時経験や記憶はどうなるんだろ？　全部ぱーになったら勿体無いよね？」
「融合すれば大丈夫じゃないの？」
「ちょっと試してみようか」
「ほいほい」
とりあえず、記憶がどうなるか調べる為に二人にお金を隠して貰った。勿論、二人には分からないように部屋の外に隠して貰う。その

後で融合して融合した二人がお金を隠した場所を知っていれば記憶は大丈夫って事になる。そうなればたぶん経験も問題ないと思う。

「“光と闇よ！　我が分身を我が身に戻したまえ！　ユニオン！”」

合体する二人が手を繋いで魔法を唱える。ひょっとすると一気に一人になれるかもだけど今は二人だけ戻れば問題ない。

「あー、分かるね。大丈夫、記憶の引継ぎはできてるね。“ダブル！”」

記憶の確認をして即座にまた分身する僕。どれもこれも僕だから、意思疎通しなくても分かってくれてるのが便利だね。

コンコン

「コージ、一緒にお茶でもしませ・・・」

「「「「「あ」」」」」

僕達を見て絶句し、ふらっとするセリナ。おっと危ない。僕たちは一斉にセリナが倒れないように支える。これはちゃんと説明しておかないと駄目だねぇ。うん。

めざせ複数同時攻略！

五人の僕達を見て、失神しちゃったセリナが起きるまでに魔法で増えた僕に変装させる。じゃないとまたセリナが失神しちゃいそうだしね。で、ついでに他の皆も部屋に呼んでまとめて説明する事にした。

「分身魔法、ですか・・・」

「そう分身魔法。やりたい事一杯だから、一人じゃ身体が足りなくて。ついやっちゃった」

学校に行く僕がメインなので、僕の姿はそのままにしてある。他のメンバーは事前に変装させておいたので、セリナ以外は不審そうな目で見ている。ていうか、アニメのキャラまんまに変身するとか、僕って意外とお茶目だったんだなぁ・・・

「で、こちらのコージと似ても似つかない人達もコージという訳ですかぁ・・・」

「魔法使ってるのかな？　全然コージって分からないねぇ」

見た目は全然違うから戸惑うのも無理はない。セリナは一度五人の僕達を見ているので信じて貰えるとは思うんだけど。

「ねぇねぇコージィ、分身なんてできるって事はぁミミもセリナもコージを独り占めできるって事？」

「！？」

ミミの台詞にびくぅ！　と背筋を伸ばすセリナ。そして、肉食獣の目で僕を見る。うおぅ。

「できるけど、それは止めておくよ。あっちこっちで僕が居るってなったら、騒ぎになりそうだしね。セリナとミミと同時デートとかしたら、絶対に目立つし」
「でもでも、家の中なら平気でしょ？　ね？　ね？」
「そりゃ平気だけど、これ以上増やす気はないよ？　あまり増やしすぎると訳がわかんなくなりそうだしね」

流石にこれ以上の分身は、魔法に慣れるまでは難しそうだ。やってやれない事はないだろうけど、制限つけとかないとミミが暴走しそうでやばい。

「ちぇ・・・でも、増えてるならいっか」

ミミは本当にポジティブだなぁ。

「というわけで、今僕は五人いるのでよろしくね。家には常にこの二人が居るからね。でも貴族の監視しているから遊びに誘ったりしないようにね」
「そうそう。交代で寝てるからなるべくそっとしておいてくれたら助かる」

監視の一号と二号がしゅたっと同時に手を挙げ、さっそくコンビらしい動きをしている。自分と意思疎通できるように、リンク魔法を繋げているのでこれぐらいお茶の子さいさいなのだ。魔法で繋げていれば遠く離れていても融合ができるし、何かあっても全員あつまって対処できるから発動させない訳には行かないのだ。

「で、一人はギルド証を取りに行くからセリナにランクの簡単な上げ方を教えて欲しいんだ。さくさくっとBランクまで上げて昼間も

遺跡で稼いでおきたいんだ」
「そうゆう事でしたら、任せてください。コージさんなら三日もあればBまで行きますよ」
「助かるよセリナ、ありがと。で、フレームを製作する僕なんだけど資金が集まらない事には動きようが無いから、最初の内はハーベイさんにフレームについて教えて貰ったりエンジンの水晶みたいな奴の作成をお願いするね」

小型8型エンジンを三個積みたいからね。予備のエンジンもあったほうが良いからじっくり時間をかけて作っておいて貰おう。くそぉ、フレームを作る僕が一番楽しそうだ・・・
とか考えていると、他の僕も同じようにフレーム担当の僕をじっと見つめていた。

「うむ良くわかった。全員間違いなく主じゃな」

僕達の視線が何を意味するか分かったのか白夜がそう宣言する。今まで疑ってたの??

「まぁ主のパターンと情報はすべて一致しとるから間違いないのは分かっておるのじゃが、それはそれこれはこれじゃ。ここまでフレーム好きなのは主に間違いない」
「そんな所で僕って認識されるのもなんだかなぁ・・・」

でも、フレームの事を考え出すと気持ち悪い感じになるそうだし。ロボットに憧れが強い分どうしてもそうなっちゃうんだよねぇ。

「えっと、これからもコージだけ相手していたら良いって事でいいのかな?」
「その相手っていうのが変装していない僕って事なら、その通りだ

よミミ。ほかの僕は同居人が増えたってぐらいに考えてくれたらオッケ」

「お食事とかはどうされるんです？」

「適当に自分たちで調達するよ。それぐらいはできるし。ただ、台所を使ったりはするかもしれないから、そこは勘弁してね」

「いえいえ、良ければお作りしようと思っていたんですが、それは良いんですね？」

「うん、大丈夫だから心配しないでね」

基本的にフレーム担当が食事の手配をすべて面倒みるだろう。一番好きな事をしてるんだし、当然だよね！

「うひひ、夢中になって忘れたらごめんね☆」

「「「「ゆるさん！」」」」

「ちぇっ」

でもまぁ、僕の事だからフレームに夢中になって忘れる事もあるだろうなぁ。でも、なんとかなるでしょ。

「というわけで、よろしくね！」

こまめに融合しておかないと記憶の共有ができないから、気をつけよう。でも、融合無しで共有できるように考えておく事にしよう。

師匠との朝練の前に、剣技の確認の為に分身を作り練習をしておく。技を知っていても身体に馴染ませておかないと、いざって時に使え

ないし思いつかないんだよね。つくづく僕は習うより慣れろなタイプなんだなって思う。

「うーん、まさか残像が出るほどの速さを身に付けてるとは」

残像分身多重攻撃。ファントムアタックという剣技は、高速で動いて六体の分身を作り出し前後左右から攻撃を加えるもよし、四肢を拘束し大きな一撃を加えるもよし、同じ技を同時に繰り出して威力を底上げしたりなどの攻撃方法を取る事ができる。勿論、回避にも応用できるので攻防ともに役に立つものなのだ。だけど、自分がここまで素早く動けるとは思わなかったなぁ。あはは～・・・

「ハルトにはこの技かなぁ・・・」

夢幻剣。ゆっくりとした動きで剣を下からゆらゆらと振り上げ、敵に向かって振り下ろすと言うだけの技なんだけど、剣をゆらゆらと振る動作が相手を束縛する効果をもたらす。束縛が効かない時もあるけど、一撃の威力がすごい事になるので避けられたとしても相手に恐怖を与える事ができる筈。一対一用の剣技だがハルトには向いているだろう。必殺技ともいえる技があれば、戦い方も幅が広がると思う。

後もう一つがハルトのスピード不足を補う技だ。

ショックインパルスという技で範囲攻撃なので、使い所は気をつけないと駄目だけど範囲にいる敵をしびれさせる技だ。ハルトのような大剣持ちで無いと使えない技である。気合を剣に込めて、発声と共に気合を解放する技だ。これだけの説明だと普通のブロードソードあたりでもできそうな気もするんだけど、両手で持つ程の大剣でなければ、何故か技が発動しないのだ。モトネタのせいなんだろう

な、きっと。

そして一撃の威力がかなり軽めのレイには、カウンター技の八手撃を覚えて貰おう。これは技と言うより状態と言う方がしっくりくる。この技は一対一のカウンターを想定するのではなく集団の中に突っ込んでいき、囲んだ敵の攻撃の全てにカウンターを合わせるのだ。だけどこの技にも注意が必要で、効果範囲の攻撃は相手が誰であろうとカウンターしちゃうのだ。無いとは思うけど、うっかり攻撃しちゃったらすかさずカウンターが来るんだよね。

素早さはかなりの物だし動体視力も悪くないのでカウンター使いになるにはもってこいでしょう。あと一つ大事な度胸の方はいつもひょうひょうとしているので、分かりにくいけどたぶん大丈夫でしょう。

セシリアは・・・どうしよう。速さはそこそこ、一撃の威力もそこそこ。攻撃の正確さはかなりの物があるので、それを活かした技を覚えて貰おうかな。得物もレイピアだから丁度良いし。呪言剣って言ってネーミングが怖いんだけど、やる事は魔力をこめた剣で敵に文字を刻むというものだ。文字も色々あり効果がそれぞれ違う。この技の便利な所は効果を選べる事と、一度に文字を刻まなくても少しずつ刻んで行き、最終的に文字を全て刻み込んだ時点で効果が発動するという点だ。ただし、正確に文字を刻まなければならず結構難しい剣技なのだ。

こんなものかな？　朝練に行ってる僕が戻ってくるまで、練習しとこうか。技を教えるのに失敗したら恥ずかしいもんね。

悩める子羊

うー・・・昨日あんな終わり方したから、気まずいなぁ。かといって、このままずるずると仲直りしないでぎくしゃくしたままで居るのは嫌だから、がんばって仲直りしなきゃね。でも胃が痛い。

「コージ、どうしたんです？　お腹痛いんですか？」
「あーうん、ちょっとだけ痛いんだけど気にしないで」

無意識で胃をさすっているとセリナが心配そうに尋ねてきた。なんというかこんな事って経験がないだけに、緊張というかずきずきするといいますか。僕って喧嘩するような友達って居なかったもんなぁ。

「うふふ聞いたわよコージ君。お友達と喧嘩しちゃったんだってね。でも大丈夫よ！　この生徒会長である私が仲裁しましょう！」
「いや、なんで知ってるんですかエイジス先輩？　ていうか、子供の喧嘩に親が出てくるみたいですっごく嫌なんで遠慮しておきます」

ハルトあたりはエイジス先輩が好きだから、すぐにでも仲直りしてくれそうだけどもね。でもセシリアだもんなぁ。どう謝れば良いかさっぱり分からないんだよねぇ・・・エリーに聞いてみようかなぁ。

「つれないなぁ、コージ君は。たまには先輩らしい事させてくれても良いじゃない」
「いやいや。生徒会長なら公平に生徒に接して下さいよ？　僕だけえこひいきしちゃ駄目でしょう？」
「生徒会長だって人間です！　好き嫌いはあります！　勿論、コージ君は大好きです！」

「大声でなんて事言うんですかっ？！　そんなに叫ぶなら先に行きますよ！」

なんかエイジス先輩が暴走しそうなんで、慌てて制止する。この人は油断してるとろくでも無い事ばかりするなぁ。

「分かりましたぁー！」

元気良く返事しているけど、油断してるとすぐに変な事をするのが特徴だ。でも、エイジス先輩があほな事をしてくれたおかげですこし楽になった。こういうのを狙ってやってるのなら凄いけども・・・まさかねぇ？

「そいではまたねコージ君。喧嘩は早く仲直りしてね。バイバイッ！」

学校につくと直ぐにエイジス先輩とは別れて僕たちは教室へと向かう。さてさて、仲直りしましょうか。

「おはよう～」

挨拶をしながら教室に入ると、セシリアが居た。ほかの面子はまだ来てないようだった。

「セシリア、おはよう」

「おはようございます」

一応、返事は返してくれるんだけどちょっとつっけんどんな感じだ。話を切り出したい所だけど、エリーにどういえば良いか聞いてからにしたい。やっぱりまだなんか怒ってる感じがするし。こういう時、席が隣だと余計に緊張するなぁ。

「コージ？　どぉしたの？」
「ん？　なんでもないよ？」

なんとなく僕が緊張している空気を感じ取ったのかミミが、後ろからちょっかいをかけてくる。ミミさん、顎を肩にのっけるのは止めて下さいな。くすぐったいし恥ずかしい。そんな僕達をちらりと一瞥するセシリア。だけど、特に何を言うでもなくまた元に戻った。

「おうコージ、おはようさん」
「あ、おはようハルト。ちょっと良い？」
「ん？　なんや？」

ハルトが珍しく早く来たので、腕をひっつかんで廊下へと引っ張り出す。なんとなく僕が聞きたい事が分かっているのか、大人しく引っ張られるハルト。

「で、セシリアと仲直りはもう少しかかると思うぞ、わしは」
「えー・・・席が隣なのに暫くこのままって言うわけ？」

単刀直入にハルトにどう謝れば良いか聞いてみたけど、返答はそんなつれないお言葉。なんというか、バルトもちょっと怒っているらしいし。

「いやいや、怒ってるっちゅーか機嫌が悪いっちゅーかな。別にコージが原因で怒ってるわけじゃないんや。なんか他の事で気になる

事があるみたいやで」
「でも、なんか僕が余計に怒らせちゃったんじゃないかなって気になるよ・・・」
「ちゅーたかて、別にコージが原因やないのに謝られてもバルトも困るんちゃうか？」
うーん・・・確かに僕が原因じゃないなら、いきなり謝られてもどう返事をすれば良いか困るかな？　でも、気になるんだよねぇ。
「ほいでセシリアは、しばらくほっとけ。あいつも自分の強さに折り合いが付けば自然と仲直りできるやろうし。それまでの我慢や」
「それはちょっと厳しいよハルト。こんな状態がいつまで続くか分からないのは結構拷問だよ？！」
正直、早く仲直りしたい。僕の言い方が悪かったんだろうから、次からはちゃんと気をつけるから、この胃に悪い状況を改善したい。
「まぁ、落ち着けって。昨日の事は別にコージも間違った事を言ったわけやあらへんやろ？　そやのに、コージから謝るっちゅーのは昨日の事を間違った事やと認める事になるんやないか？　そうなると、今後似たような事が起きた時に困るのはセシリアやし、他の面子も何がしか影響あるのは間違いないやろ？」
「う、うん・・・だけど・・・」
「だけどもくそもないで。おまえは男らしゅーに、どんと構えとけ。間違ってないぞと胸を張っとかんと、ちょっと機嫌損ねられたぐらいで意見を変えとったら誰もおまえの意見なんぞ聞かんようになるぞ？」
「そう。コージはどっしりしてるべき。間違ってない」
「あ、エリーおはよう」

僕の挨拶にこっくりうなづくエリー。あれ？　髪型がちょっと変わってるかな？

「コージは強いのに細かい事を気にしすぎ。はげる」
「父ちゃんはげてないから、大丈夫だよ？！　それより髪の毛切った？」
「うん切った。そういう細かい事は大いに気にするべき」
「エリー、おまえはマイペースすぎるやろ・・・」

エリーは言葉は少ないけども、僕からセシリアに謝るのは駄目だと言いたいようだった。ハルトの言うように僕から謝るのは、今後の事を考えるなら止めておいた方が良いのかな？　それはそれで、精神的に辛いものがあるんだけどなぁ・・・

「いい訓練。精神修行だと思って。ね？」
「・・・う、うん・・・」

なんかエリーがこっくりと首を傾げながら話しかけてくるという実に女の子らしい仕草を見せたのでびっくりしてしまった。普段大人しいしあまり感情を出さないタイプだから、そういう女の子っぽい仕草をするなんて思わなかった。エリー自身も僕の反応が恥ずかしくなったのか、赤い顔をしている。

「私だって女子。コージは失礼」
「ごめんごめん。ちょっとびっくりしただけだって。この通り！」

なんにせよ、僕は僕のまま普段どおりにしないと駄目って事だね。

「あ、ハルト。昨日なんか技を知らないかって聞いてたでしょ？」
「おお、コージは魔法ばっかり珍しいもん持ってるからのぉ。コー

ジは剣も使えるさかい剣技でもそういうの無いか気になるんは当然やろ？」

僕とエリーの話を横でなまぬるい目をして聞いていたハルトだけど、剣技の事となると目を輝かせて食いついてきた。

「うん、それで昨日試しに知ってる技を試したんだけど、使えそうなのがあるから覚えてみるかなって思ってさ」

「ほぉほぉ、どんな技なんや？」

「一撃必殺な技と、相手の動きを鈍らせる範囲技の二つだよ。ハルトは素早い相手に翻弄される事が多いからね」

「一撃必殺なら今の“絶刃裂波”でも充分な威力あるんやけど、あかんか？」

「使い勝手は確かに“絶刃裂波”の方が色々と工夫できるから良いんだけど、一対一の戦闘で役に立つ必殺技なんだ」

「ふぅん・・・覚えとって損は無いっちゅー事か？」

僕の説明に興味が沸いたのか、嬉しそうな表情をするハルト。

「まぁ、実際に教えるのは後のお楽しみって事で。覚える覚えないは見てから決めてくれて良いしさ。でもきっと気に入って貰えると思うよ」

「えらい自信ありげやな。わかった楽しみにしとく」

駄目なら駄目で、どういう技が欲しいか聞けば良いしね。でも、今日教えるつもりの技はハルトは気に入るはず。

「「ふっふっふっふ・・・」」

「二人とも気持ち悪いから、止めて」

知らず知らずに含み笑いを漏らしていた僕たちは、エリーに太い釘をぶっすり刺された。

ワンサイドゲーム

ピリリリリリ！　ピリリリリリ！

「はおっ！？」

僕が精神修行ともいえる授業を終え、命の洗濯の休憩時間に携帯が鳴った。最近、まったく使ってなかったせいで存在を忘れてたからびっくりしたよ。

「もしもし？」

「やほ、僕だよ。監視の一号だよ」

電話の相手は家で監視をしている一号からであった。緊張感の無い受け答えとは裏腹に一号が伝えてきた事はかなり重要な件であった。

「白夜、一緒に帰るよ。今日は早退だよ」

「ぬ？　主、珍しいな。どういう風の吹き回しじゃ？」

「コージさん、どうされたんですか？」

「コージ？」

僕の台詞に驚いている皆。でも、一刻も早く早退したいので返事を待たず白夜の手を掴む。

「ごめん、後で説明するから！　じゃ、帰るよ！」

「お、分かったのじゃ。くふふ」

そう言うが早いか僕はダッシュで教室を出る。セリナが僕を呼んでいたけど、説明は家にいる監視の一号と二号に任せるとしよう。教室を出た僕はすかさず屋上へと向かう。

「白夜、飛行ユニットの性能テストをしにいくよ。国境付近に敵が居る」

手短に白夜に状況を説明する。隣国のエリート部隊っぽいのが国境を越えてこっちに向かってるのが監視衛星で確認できたのだ。

「ほほぉ。それはそれは嬉しき事かのぉ、あい分かったのじゃ」

そういって、空中へと躍り上がる白夜。そして存在がずれてホワイトファングへと変身する。ふわりと学園の屋上に出現したホワイトファングは、そのまま空中で静止し僕に向かって手を伸ばしてきた。

「じゃあ、行こうホワイトファング！」

「了解」

すかさずホワイトファングに乗り込んだ僕は、国境方向へと機体を向けた。

ハイローディス、バルトス間国境からバルトス国側へ四十キロ地点。山岳地方を抜け森林地帯へと移り変わる辺りに位置するその場所は、

魔石獣はもとより大型の魔物も多数生息する地帯として危険区域に指定されていた。

しかし、そのような危険な場所であっても緊張した様子もなく寛いでいる集団が居た。青で統一されたフレームを駆る集団である。

「ライガット山脈を抜ければ、後は平坦な道のりだ。目立たないように夜間に移動をするぞ。今のうちにしっかり休んでおけ」

たき火に当たりながら地図を見て位置を特定し、他の隊員にそう指示を出す細目の男。

「しかし隊長、ついこの間攻めたばかりでまた攻めに来るっていうのはどうなんですかね」

細めの男を隊長と呼んだ黒髪の女性は、少々呆れを含んだ口調で尋ねる。

「貴族どもに恩を少しでも売れるなら、売っておこうという事だろう。それに前回は完全にしてやられたせいで、まったく俺達の出番が無かったからな。俺達が力を発揮できればバルトスなど、どうとでもなると考えたのが上に居たんだろうな」

評価してくれるのはありがたいんだがね、と苦笑と共に吐き出す隊長。

「ですが、フレームの数や質は我が国に劣らないとも聞きます。王自ら駆る機体もルーツですし侮れませんよね」

「所詮、侮れないという程度って事さノア。ルーツであろうとそれを操るのは人間。油断もあれば隙もある。俺達はそれを作り出し、

崩していけば勝てる道理だ」

たき火に薪を放り込みながら、そう答える。今までも格上の相手を撃破してきた経験から来る自信が男の言葉に重みを持たせていた。

“隊長！　何か来ます！”

「落ち着けティアンム。そう騒がしくては相手に気取られるぞ」

突然、響いてきた声に導かれ空を見上げると白いフレームらしき物がこちらへと向かってきていた。

「バルトスの飛行フレームか。一機だけとはどういうつもりだ・・・？」

こんな場所に一機だけで居る事に怪訝に思いながらも、こちらに向かってくるフレームが敵なのは間違いない。

「のこのこと一機で現れた自身の不運を呪うが良い。悪いがこちらも知られるとまずいんでな」

“諸君、敵だ。即座にフレームに乗り込め。一気にけりを付けて休憩するぞ”

“了解！”

「居るね、青いからすぐに見つかると思ったけど意外と森に溶け込んでるね」

「まぁ、わしの目を誤魔化す事はできんがな。で、どうする主よ」

ライガット山脈の麓辺りに進軍してきているフレームの軍団を追い払う為に、急いでやってきたけど相手はたったの十機だ。半分も行動不能にすればすぐにでも引き上げるだろう。できれば一機ぐらい捕獲したい所だけどね。

「まずは反転弾で敵を混乱させよっか」

「任された！」

空中から青いフレームに向かって、降り注ぐ反転弾の雨。だが、その雨は途中で遮られてしまった。

「魔道フレームか。でっかいシールドを張れるんだなぁ、すごくない？」

「機体だけのせいではないな。乗り手の力だろうあれは」

咄嗟に十機のフレームを覆うような範囲の魔法障壁を張れるとか、すごい魔法使いなんだろう。攻撃魔法もかなり凄いんだろうな。

「来るぞ」

「はいよぉ」

ぎゅっと高まる魔力の気配は攻撃魔法が飛んでくるのを教えてくれる。僕は重力に逆らわず落下する事で勢い良く飛んできた氷の槍をやり過ごす。一気に数十本は飛んできてたので、急降下してよかった。下手にさばこうとしてたら、何発か食らっていた事だろう。

「いやはや楽しいねぇ！　やぁあああっほぉぉぉおおおおおっ！」

木々を普通のフレームでは有り得ない速度ですり抜け、攻撃魔法を放ってきたフレームへと強襲する。

「ホワイトファング！　エナジーフィストよろしく！」

「おうさ！」

拳にエネルギーフィールドをまとわりつかせ、魔道フレームへ踊りかかる。と見せかけた罠なんだなこれが！

「こっちが本命！」

いくら魔道フレームが機動性が低いとは言え回避行動を全く取らないのは有り得ないんだよね。くるっと振り返り斜め後方から僕へ斬りかかって来る二機のフレームへ反転弾の置き土産。ついでに氷の壁で僕の動きを止めようとした魔道フレームの杖を蹴り飛ばしておく。

「ちょちょいさ」

木々を潜り抜けマジックアローが僕を狙うが、その全てをエナジーフィストで防ぎきる。それを見た重装甲のフレームが剣を構え突撃してきた。だけど、真面目に相手をしてあげる僕じゃない。

「じゃあね！」

空中へと躍り上がり、地上戦しかできない敵を置き去りにする。有利な頭上から圧倒させて貰おう。

「ハンター射出！　続いてビットもお願い」

「ふふふ、乗ってきたのぉ。どんどん行くぞ」

ぽんっと勢いよく球体が射出される。射出された球体ハンターは、さらに円錐形のスレイブを多数生み出していく。ビットは目では見えないが散布されているはずだ。

「まずは魔道フレームを落とせハンター！」

僕はそう指示を出してすぐに、牽制に反転弾をばら撒いた。思った通り巨大なシールドを展開し反転弾を無効化する。だけど、そのせいで反転弾の閃光にまぎれたスレイブを見失っただろう。パパパっと木々の間が光ったかと思うとマジックアローが、僕目掛けて襲い掛かってくる。

「僕を攻撃してる場合じゃないんだけどね」

ガガガガガン！

突撃型スレイブが魔道フレームへ次々に、ダメージを与えていく。強力なスラスターによる高速機動でラムを当てられるととても痛い。しかも、縦横無尽に仕掛けるもんだからパイロットは上下左右に揺さぶられ、たまったもんじゃないだろう。

「あ、そうだ。警告するの忘れてた。ホワイトファング、警告するから声をちょっと変えて外部に声を伝えてくれる？」

「分かった」

本当はこんな所まで進軍してきてる敵軍に情けをかけてやる必要は無いんだけど、これだけ実力を見せれば帰れって言えば、帰るかもしれないし。問答無用で襲っといてなんだけどね。

「ん、んっ！　遠路はるばるご苦労様。ここはバルトス国の領地です。すみやかにハイローディスの方は帰って下さい。もしこの警告を無視するのでしたら、本気で破壊させて頂きます」

そういって、ロングライフルを創り出し少し離れた所に向けて、威嚇射撃を行う。

キュバッ！　ドッゴォオォオォオオオッ！！！

うん、やっぱりホワイトファングの武装はやばい。あんな威力の光線がフレームに当たったら一発で大破しちゃうよ。いや、下手すると蒸発しちゃう。

「さて、いかがします？」

空から睥睨するホワイトファングは、さながら魔王のように見える事だろうね。

迂闊

“隊長なんですか、あいつは！　我々がまったく相手にならないとかおかしいですよ！“

ボランドの焦った声が皆に伝わる。それも無理はないだろう。今までこちらより数の多い敵を葬りさってきた経験はあっても、自分たちより少数ましてやたった一機のフレームにここまで翻弄されてきた覚えはないからだ。

ティアンムの印の力のおかげで外部スピーカーを使わずに意思を疎通できる。今まではそれがかなりのアドバンテージとなり、たとえ数で負けていたとしても敵の不意をついたり隠密行動や連携をうまく行う事で勝利を得てきた。

「落ち着け、まだフィフィが行動不能になっただけだ。確かに空を飛ばれてはやりづらい相手ではあるが、私がなんとかしよう」

“フィフィは後方へ下がらせますか？”

冷静なノアの声が響く。やるべき事をしっかり把握しているのはいつもながら頼もしい。

「いや、いざという時は退く事も有り得る。あまり離れすぎないようにしろ」

“了解しました”

私の印の力であれば、喰らいつける筈だ。空を見上げ視界に白いフ

レームを収める。ぴたりと空中で静止している姿は凶悪な面構えのフレームではあるが、あたかも断罪を行う天使のように静謐で威厳ある力に満ちていた。

「行くぞ！」

目指すは白の正面、剣を構えてから力を出し惜しみする事なく解放した。

「え！？」

瞬時に白の前に移動し、構えていた剣を振り下ろす。白の光る手によって剣を弾かれるが、今度は白の直上に跳ぶ。機体の重量と落下速度を加味し、白へと剣を再度打ち下ろす。

ガッキィィン！

片手を振り上げ剣をさばこうとしたようだが、剣を手に打ちつけた瞬間に蹴りをお見舞いしてやる。見事に白の背面に直撃した蹴りは、確かな手応えと共に白を吹き飛ばした。そして休む間もなく、吹き飛んだ方向へと跳び体勢を崩している白へ剣を左から右へと横なぎに振るう。

フワリ

勢い良く振りぬいた剣は、剣の腹に手をつかれ綺麗に回避されてしまう。ならば、今度は真下に跳ぶ。この際、機体の体勢は左側が地面を向かせておき、白を打ち上げるように跳ぶ。横なぎに振るっていた剣を更に押し込むように、白へ接近したのだが更に勢い良く上方へと逃れられてしまった。

そこへ部下の援護射撃が撃ち込まれるが、白はひらりひらりと身を翻し適当にあしらっている。やはり白に直撃させるには生半可な事では無理なようだ。

白の正面に飛び込み、白が身を構えた瞬間に即座に後方へ飛んで剣を打ち下ろす。打ち下ろした剣を半身になる事でぎりぎりでかわした白は、裏拳で柄を叩いてきた。だが、柄に当たる前に少し横にずれるように跳び、打ち下ろした剣を切り返す。

コキィン！

裏拳の勢いを殺せずに回転していた白の足元から狙った剣は、足で剣の腹を蹴られて軌道を逸らされる。こいつ見てから反応するまでの時間が早すぎる！

キュキュキュキュン！

剣を振り上げた隙をカバーするかのように、マジックアローの援護が飛ぶ。普通の機体であれば距離を取る所だが、白は手でマジックアローをいなしながらこちらへ蹴りを放ってきた。

「ぐっ？！」

さすがにあれだけの数のアローが飛んでくれば距離を取るだろうと油断したせいで、モロに蹴りを食らってしまう。ごてごてとした足から繰り出される蹴りはかなりの威力で胸部装甲がすこし凹んだようだ。装甲はかなり強化されているはずなのだが・・・

「警告はしましたからね？　無駄な抵抗はよした方が良いですよ。

あなたたちとは腕も機体の性能も違うんです。少し本気を見せないと納得しないかな」

少々芝居がかった声で白がそう言うが早いか、機体の両腕が吹き飛んでいた。

「なっ、なにっ？」

たった一射。

いつの間にか構えていたライフルから放たれた光線は右腕を吹き飛ばし、後方で翻って左腕を吹き飛ばして虚空へ消えていった。地上へ落下しないように、常に跳んでいた私の機体の間接部分を正確に狙って狙撃されたのだ。

“隊長！”

これは退かざるを得んな・・・

「あ、そうそう。事情を調べるのに一人は残って貰うからね。覚悟するように」

そういって白は器用に指を振りながら宣告してきた。

「うーん、テレポートする機体とかどういう仕組みなの？」

「知らぬ。知らぬが機体というより乗り手の力ではないかの？」

急に眼前に瞬間移動をしてきた青い重装甲型のフレーム。騎士のような出で立ちのくせに瞬間移動とかびっくりさせるよね。ぱっぱかぱっぱか出ては消え、出ては消えするからちょっと慣れるまでに一発食らっちゃったけど、所詮集中している僕の目から逃げられるものじゃない。

「あのテレポートする機体を捕まえても逃げられそうだよね。動かなくなってる魔道フレームを捕まえよっか」

「そうじゃな、ケージで捕獲するとしようかの」

それが良いね。動かなくなってるとはいえ、魔道フレームは何をしでかしてくるか油断できないからね。え、あれ?!

ボフン！

地上にいるフレームから煙幕弾が放たれる。おかげで有視界戦闘ではなく計器による戦闘になりそうだ。こんな煙幕を張ってもホワイトファングのレーダーには、しっかり機影が集結しつつある様子が映し出されているから無駄なのにね。ご苦労さん。

「って、うそっ?」

十機あった機影が全て一瞬にして、レーダーから消え去る。

「ホワイトファング！　広域レーダーに切り替えて！」

「だめじゃ、今レーダー圏から離脱されてしまった。衛星からの映像でも分からん所に隠れてもうたようじゃ」

くそー、黙って捕獲すれば良かった。単体だけしか瞬間移動ができないと油断していた。まさかあれだけの数をまとめて瞬時に移動さ

せられるとは思わなかった。

でも、ハイローディスの部隊を退けるという目的は達成できたので良しとしておこう。目的が何かはわからないけど、どうせろくでも無い事に決まってるだろうし。ついこの間貴族と組んで攻めてきたばっかりだというのに、少数とはいえフレームだけで攻めてくるなんて何を考えているんだろう。また貴族のあほな人達が何か企んでるのかな？　この間、僕の所にも怪しい奴が襲ってきたぐらいだし、あながち貴族が何か企んでいるのは間違いないかもしれない。

だけど、久しぶりにフレームに乗って戦えたから、すっきりしたなぁ。

「撃破できんかったが、まぁまぁ楽しめたわぃ。じゃが、敵が空を飛べんのは相手にならんからつまらんのぉ」

「そうだねぇ。でもしばらくはバルトス国内でしか飛行ユニットは出回らないから仕方ないよ。敵にまわると厄介だろうからね」

フレームで戦うと相手のパイロットが見えないせいで、人を倒すという意識が少なくなるけど僕は常に意識して戦っている。ただ、戦闘技術に関しては実戦ではないとは言えネット対戦をやりこんでいたのでかなりの経験を積んでいるはず。現に今も圧倒できた。まぁホワイトファングの性能のおかげって所も大きいけど、うまく戦えたと思う。あ、そうださっきの機体の腕が落ちてるはずなんだけど・・・あった、あった。一応持って帰ろう。唯一の戦利品だしね。

「次はフレームじゃなくて、魔石獣とやってみよう。魔石獣なら気兼ね無く全力でいけるからね」

「今から行くか！」

「いやいや、週末にでも行く事にしようよ。ひさしぶりにホワイト

ファングの調整もしておきたいしね。今日の戦闘データも検証したいし、飛行ユニットの調整もしたいしね」
「ふむ残念じゃ。じゃがまぁ、整備して貰うのに異論はないぞ」
「じゃ、戻るよ。飛行ユニットの限界テストも兼ねて全力で行くからね」
「了解じゃ」

推力に半分、機体の重量軽減と進行方向への障壁を張るのに残りのエンジンパワーを割く。さてさて、何分でロバスに着けるか試してみよう。

僕達の行動開始！

慌てて学園を出てきたものの、ハイローディスの部隊は簡単にけりがついてしまった。もう少し激しい戦闘になるかと思ったけど、ホワイトファングのウォーミングアップ程度で済んでしまったのだ。なので、時間がたっぷりある。

「白夜に戻るのはちょっと待ってね」
「お、おう・・・分かったのじゃ」

僕の言葉になぜか怯えた様子のホワイトファング。何もおかしな事は言ってないよね？？？

「重力に干渉するタイプの飛行ユニットだから、しっかり整備しとかないと何か異常があったら困るしね。それにホワイトファングを整備させて貰った覚えもないし。長い間調整とかしてなかったんだから、この際しっかり調べようね」
「お、お手柔らかに頼む」

飛行ユニットは、基本的に重力のベクトルを変更する事で飛んでるように見せている物なので本当は飛んでるんじゃなくて、落ち続けているだけ。一応はスラスターも使って飛んでるように見えるので飛行ユニットと便宜上呼んでいる。

なんでこんな物を作れたかと言うと、ホワイトファングの武装の中に重力を操作するものがあったおかげである。その武装の応用として試作しまくってようやくできた物なのだ。偶然できたような物なのでこまめに調べておきたい。それに、重力を自由に操れる装備もしっかり使えるように、理屈を理解したい。

静かに家の上空に待機し、周りを確認してから素早く屋敷の敷地に着陸をする。国境から家まで約六百キロの距離を一分強で到達したホワイトファング。なんか恐ろしい速さだ。大阪から東京まで三分あれば往復できるって事だもん。飛行ユニットで移動するよりもかなりの速度を稼ぐ事ができる。しかも全速力でぶつかるだけで恐ろしい破壊力を出せそうだ。

フレーム作成の僕の誘導で、離れの傍に作った格納庫へと移動する。エレベーターで地下へ移動し空いているハンガーにホワイトファングを収める。地下格納庫には十機のフレームを格納できるようにスペースを作っている。勿論、それに付随する補給物資や装備の為のスペースも確保してあるので、かなりの広さである。

「おかえり。おみやげ頂戴。さっそくばらしてみようよ」
「もうちょっとこう労わってくれても良いんじゃないかなぁ？」
「そんな自分同士で水臭い。それに衛星で見てたから大丈夫なのは分かってるしね」
「ま、それもそっか」

青いフレームの左右の腕部。肩から綺麗に落としたので完全品である。エティズムの配線の仕方や腕部の構造を調べ、役に立ちそうな所は真似するつもりだ。なんか全部青い機体で統一していた所を見るとそれなりに、由緒のある部隊だと思うし。隠密を得意とするなら静音性や長時間行動とかに調整されてるだろうし、戦闘の為ならばそれなりの強化をされているだろう。たかが腕二本と侮る事なかれ。そこから得られる情報は職人にとって宝石よりも価値があるのだ。

「おみやげも大事だけど、ホワイトファングの整備と飛行ユニット

の使用データをしっかり調べるとしましょうかねぇい」
「うん、飛行ユニットはかなりのスピードが出せるのが分かったからね。今日は思う通りに動いてくれたけど、まだまだ稼動時間が少ないからね。少しでも異常があれば原因を探らなきゃ」
「ホワイトファングも気になるしね。エンジン三基積んでるんだよね？」
「サイズ的に小型だけど、出力はなんか凄いんだよね。増幅率がばか高いだけかもだけど」
「本人に聞いたら？」
「そんなのカンニングじゃん。ちゃんと自分で調べようよ」
「それもそっか」

そういってホワイトファングに向き直る僕たち。何故か身じろぎするホワイトファング。

「主よ、後生だからパーツが余ったとか、足りなくなるとか、元に戻せないとかは勘弁しておくれ」

なんというかホワイトファングが魂からのお願いとも言える声音で懇願してきた。やだなぁ、僕達がそんなへまをする訳が無いじゃないか。ビデオにも取るし、時間はかかるかもしれないけど元に戻すなんてお茶の子さいさいだよ。エレメンタルフレアに関して言えば一人で三時間もあれば分解して掃除できるからね。まぁパーツ数も少ない廉価フレームだからだろうけど、結局パーツが多いか少ないかだけで基本的な所は変わらないだろう。

「綺麗に磨き上げてあげるからね。期待してて！」
「そうそう！　豪華客船に乗ったつもりで安心してて！」

さぁて、お楽しみを始めましょう。

「結局は依頼を受けて、完遂しての繰り返しって事でいいんだね？」
「はい、そんな感じです。あとランクアップの試験が間に挟まるぐらいです」

金策班の僕です。セリナにギルドに関するレクチャーを受けてギルド登録を済ませた所です。名前や住所、犯罪歴を調べられて問題がなければ登録は簡単に終了する。今回、ランクＡ（Ｂじゃなかったらしい。おそろしやセリナ）のセリナからの紹介という事もあってか、すんなりと登録が済んだ。最初のランクはＨからとなり、街中で便利屋のような仕事ばかりをこなさないと駄目なようだ。だけど腕に自信がある場合は受付に申告し、監視員と共に討伐依頼をこなす事でランクスキップができるそうだった。

「すいません、ランクスキップしたいんですけど」

なので登録をしてくれた受付のお姉さんに、さっそく申告する。だけど、ランクスキップを申告した途端、お姉さんは心配そうな顔を僕に向けてきた。

「ランクスキップして早くランクを上げたいのも分かりますけど、まずは地道に依頼をこなす事で色々な事を知るという事も大切なんですよ？　確かに魔物を倒す事が主な仕事になりますが、ランクが上がればそれだけでは無くなってくるんですよ」

まだ若いんだから、焦らずに頑張らないと駄目ですよ、とやさしく

諭されてしまった。すいません、ギルドランクは遺跡に潜る為だけに欲しいんでそこまでランクを上げたい訳じゃないんです。

「ミランダさん、大丈夫ですよ。彼の人となりは私が保証しますし、戦闘だけが彼の本領という訳ではないんです。魔法にも造詣が深く、ガイアフレームの作成にも携わり、マジックアイテムも創り出せるマルチな才能を持つ方なんです。正直な所、ギルド証は遺跡に潜る為に欲しいだけなんです」

最後の方はミランダさんだけに聞こえるように小声で伝えるセリナ。えっと、そこまでぶっちゃけて言って良いのかな？　心証が悪くならないかなぁ？

「遺跡・・・というと、Ｂランクまで上げればそれで良いって事です？」

「はい、とりあえずそれだけあれば遺跡には行けますからね。あとは地道にランクアップすれば良いだけですしね」

セリナのその言葉に腕を組み、瞑想するかのように考え事をするミランダさん。

「さっきのセリナの言葉は本当なのかしら？」

「はい？」

「疑うようで悪いけど、魔法にも造詣が深く、フレームの作成もでき、マジックアイテムも創り出せる。どれもこれも一分野だけで、かなり才能が必要なものなのにそんなに年を取ってるようにも見えないのに、それだけの事ができるというのは本当なのかしら？」

「えぇ、魔法に関して言えば私と新しい魔法を開発できるぐらいですよ。むしろ私がお手伝いとも言えるレベルです。他の分野に関しては詳しい事はわかりませんが、作った物を見る限り今までに見た

事のない物を作ってらっしゃいますよ」

その言葉を聞いて明るい表情でポンと手を叩き宣言するミランダさん。

「じゃあ、その三つの分野で作った物を持ってきて貰える？　それを見て一定のレベルに達していると認められた時は即座にBランクにランクアップしましょう！」

「え、そんな事で良いんですか！？」

「そんな事って・・・一定のレベルに認められるっていう事は一つの分野でも大変な事なんですよ？　それを三つも認められるというのはほとんど無いと言っても良いでしょうね。判定にはそれぞれのプロにして貰うつもりですから」

きりっとした表情で宣言するミランダさんには悪いけどこの勝負もらったも同然だ！　しかもその分野のプロとも会える機会も貰える訳だし、願ったり叶ったりだねこれは。

「いつ持ってくれば良いですか？　今すぐでも良いですよ！　あ、フレームは家に来て貰わないと駄目ですね。なにしろでっかいんで」

「そうね、明日また来て頂戴。それぞれ何時判定して貰えるか打診しないと駄目ですからね。そう遅くならないと思うけど、大丈夫なの？」

「え？　何がです？？？　明日と言わず、早ければ早いほど僕としてはありがたいですけども、駄目ですか？」

僕の返事に少し驚いた表情をしているミランダさん。なんで？

「普通は自信作を作る為に時間を取ろうとするものだけど、逆にすぐして欲しい人なんて初めてみるわ」

「自信ありますからね。はやくBランクになりたいですし」
「あらあら、もうBランクになれるつもりで居るのね。ふふふ。自信があるのも良いけど過信は恥をかくだけですよ？」
そうたしなめるミランダさんだったけど、セリナと僕はその言葉ににやりと笑いを返すだけだった。

僕達の行動開始！（後書き）

学園に分身を置いていかずに早退したのは、白夜を早退させるのに自分だけちゃっかり早退しないっていうのは、駄目だ！　と光司くんなりに考えたからです。

何ルートだ、これ？

「セリナありがとね。セリナがアピールしてくれたおかげで早くBランクになれそうだよ」
「うふふ、あとでご褒美くださいねっ」

ギルドから帰る道すがら、セリナに感謝を述べると弾けるような笑顔でそう返してきた。それならあとでと言わず、今すぐご褒美というかプレゼントを買いに行こう！

「じゃあ、ちょっと寄り道して帰ろう？　セリナに似合いそうな服とかカチューシャっていうの？　見つけてるんだよね」
「え、え、え？！　わたしの服ですか？！」
「うん、きっとセリナに似合うと思うよ！」

男が女に服を贈るのは・・・となにやら赤い顔でぶつぶつと言ってるセリナ。へにゃっと崩れてる顔も可愛いけど、何を妄想しているか聞くのはちょっと怖い気がする。

「では、早速行きましょう！　ギルドの登録も予定より早く終わりましたからね。時間はたっぷりあるのです」
「だね、セリナさまさまだよ！」

そういって僕はセリナの手を握って、目的のお店へと足早に連れ立って行った。

セリナは緑色系の服を良く着ているので、淡い緑色のワンピースとショールを組み合わせた服を試着してもらった。ワンピースはシンプルなデザインだけど腰の辺りからスカート部分がふわりと広がっ

ていて女の子らしいセリナには良く似合い、ショールもワンピースより少し濃い色でほどほどに胸元を隠してくれるので清楚な雰囲気をまとうお嬢様な感じに仕上がった。靴も良く分からないけど、いつものだと服に合わないから店員さんに見繕って貰った。カチューシャは本体はオレンジがかった黄色で全体的に薄く花柄が彫りこまれている物で、しかも少し角度を変えてみると花に色がついて見える不思議なカチューシャだったりするのだ。

「うん、思った通りよく似合ってるよセリナ。可愛い」

「あ、ありがとうございます、コージ。大事な時に着ますね」

「ううん、普段から着ててよ。大事にして貰えるのも嬉しいけど、着て貰った方がもっと嬉しいし、また何かあったら買って上げたいしね」

そうセリナに伝えると、顔を真っ赤にして頬を押さえ身もだえしている。毎日そんな事しちゃうんですか？　そうなんですか？　とかまたぶつぶつ言っている。

「じゃあ、頑張って着るようにしますね！」

「う、うん。ぜひそうして」

なんで頑張るのかは良く分からないけども、横で店員さんが何やらにやにやと笑顔で居るけど気にしないでおこう。

上機嫌のセリナと共に屋敷に辿りつくと、早速ランクスキップに向けての準備を始める。自分で造ったものはそれなりに自信があるから、きっと見て貰えればランクアップは間違いないだろう。さてさ

て、ランクアップの為のブツはどれにしようかな？

フレーム関連でいえば飛行ユニットを見せれば、分かる人には分かるだろう。分からなくても乗って貰えば理解できるしね。念のために魔石シートも準備しておこう。反転弾も今までに無い武器だろうし、これも準備しとこうっと。魔法とマジックアイテムは、「ギル」に創った魔法を込めて持っていけば良いよね。あ、意外と携帯電話もびっくりして貰えるかも。魔力が無くても遠くの人と話ができるアイテムだから珍しいだろうし、遠話って魔法で実現しようとすると、結構難しいみたいだもんね。

あ、準備が簡単に済んじゃった。

これじゃあ寂しいから、フレーム関連で何か追加したほうが良いかなぁ・・・ま、いっか。あんまり手の内を出し過ぎると後で困りそうだしね。それにぱっと思いつかないや。とりあえず、僕は金策が目的だから高額アイテムを落とす魔物をしっかり把握しておこう。僕が五人になった事だし、自作フレームも五体あったほうが良いだろうから、ますます目標額が跳ね上がっちゃったんだよね。他の僕とは相談していないけど、まず間違いなく五体のフレームを作る事は賛成するだろう。

ようし、ぱぱっとランクを上げてどんどん金策して行くぞぉ！

「ん～・・・っ！」

監視衛星からの映像をずっと見ているだけっていうのは、かなり疲

れる。結構色々な場所を監視しているので、一個のモニターだけをずっと見ているという訳には行かないからだ。フレームが移動しているのは、さすがに目立つから見つける事ができたんだけど森の中を忍者みたいな奴が移動しているのは見つけるのは難しいだろう。うそ、ごめん、無理だ。だいたい何処を通るか知っていれば見張りようがあるんだけど、そんなの全く分からない状態だと見つけようが無い。

「エドどうしてるかなぁ」

貴族にこき使われてるのは間違いないので、次男坊を見つけさえすれば救出する事もできるんだけど、如何せんあのアホボンは隠れるのが上手い。それに貴族の屋敷というのは馬車というか装甲車みたいな乗り物が結構行き来するので、誰が乗っているか確認するのは乗り降りする瞬間だけしか無く、全ての乗り物のチェックをしようにも数が多すぎて、チェックが追いついてない状態なのだ。貴族達の毎日パーティを開くような金の無駄使いぶりを見てると腹が立って仕方が無いのだけど、いつか貴族を引き摺り下ろしてやると考えると少し落ち着く。普通の人は毎日毎日そんなに豪勢な食事なんてできないんだぞ！

「監視ってやっぱり辛いわぁ。忍耐力が試されるね、うん」
「という事で、ミミが癒しに来ましたぁ」
「うわぁ？！」

にゅーっと背後からしなだれかかってくるミミ。首にきゅっと抱きつかれ頬をスリスリされると気持ちが良い。気持ちが良いのは確かなんだけど、スキンシップは無しでお願いしますよ、ミミさん。

「どして？」

「ほら、見落としたら嫌だしね。話し相手になってくれるのは大歓迎だけども」
「そっか、そうだよね。じゃあ、お話し相手になって貰おうかなぁ～」
そういって、横にちょこんと密着して座ってくる。これぐらいは良いよね？　と目で訴えながら座ってるので、僕としても反論しようがない。僕が納得したと分かったらしいミミはそのままで話始めた。
「コージはこれからどうするの？」
「ん？」
「だって、コージって王様の息子だから王子様なんでしょ？　お城で優雅に暮らしていけるんじゃないの？」
確かに父ちゃんは王様だから、そういう事もできるよね。だけど、今は貴族の勢力が強すぎてそんな優雅に暮らすとかはできない。まぁ貴族のいいなりになっていれば、そうなるかもしれないけどね。
「ミミはここの生活は嫌？」
「ううん、楽しいよぉ。だけど、楽しすぎてこのままで良いのかなぁって・・・」
何か心配事があるのかな？　ミミらしくない少し憂いのある表情でそう呟いた。
「僕がこの世界でやっていくのに、色々学ばないと駄目だっていうのは前にも言ったよね」
「うん」
「この世界って、貴族がまるで神様みたいに好き勝手してるから、僕の目には凄く異様に見えるんだ」

なんか平民は貴族に逆らう事は許されないという空気が凄くある。いくら平民の方に能力があろうとも、貴族は貴族というだけで何の能力が無くても偉そうにしている。そんなだといつまでたっても、頑張ってる平民の人が報われないままだ。

「今はまだひよっこな僕だけど、いつか仲間を集めて力を付けて貴族なんか無くして平民だけの世界にしたいんだ」

「貴族ってやっつけれるのかなぁ・・・？」

ミミは貴族に物のように扱われてきた過去がある。ミミ自身も貴族のはずなのに、そんな過去があるせいでむしろ平民といっても差し支えないぐらいだ。ありがたい事なんだけどね。

「父さんも貴族を無くす為に頑張ってるみたいだけどね。だけど、僕は僕で頑張ってみたいんだ」

今は学園で学んで自分を鍛えるのに必死なんだけどね。まだ、何が問題か見えてない僕には、細かい目標を立てる事なんかできないからだ。だからこそ、色々調べないと駄目だし学ばないといけない。焦って貴族の屋敷に特攻したくなる気持ちはあるけど、今は我慢して力を蓄える時期だ。

「ミミも一緒に居て良いの？」

「むしろ、僕からお願いしたいぐらいだよ。まだまだ僕って友達も少ないしさ」

なんというか僕って、気が合う人としかまともに話ができないようで、いまだに友達が増えていない。変な知り合いばかり増えてるけども。

「うふふぅ。友達じゃなくてお嫁さんなら考えてあげるっ」
「いやっほらっ、そういうのはまだ早いっていうか・・・」
「まだって事はいつかはそうなるって事で良いよね？」

う、言葉尻をうまく捕らえられてしまった。ミミってそういう所が意外と抜け目ないよね。

「ま、まぁ否定はしないよ。うん」

でも、僕としてもこんな可愛い女の子をお嫁さんにできるなら何も問題ないわけでして。だけど、正直にそういうのは恥ずかしくて、結局はへたれな返事しかできませんでした。そんな僕をちゃんと分かってるという風な目でミミはじっと見つめていました。うぅ。

波紋が呼ぶものは

「トロン！　予定変更だ、転移陣で移動するぞ」
「はっ？！」

苛立たしげにギガンテスの起動準備をしているトロンに荒い言葉をぶつけるゲオルグ。

「計画変更だ！　ハイローディスの奴等がへまをしおったのだ！」
「よろしいので？　もう一度動かすのに魔力のチャージに時間が掛かりますが・・・」

動き出したギガンテスを止めるには時間が掛かり、その上貯めた魔力もどんどん消費していく。普通のフレームであれば止めずに待機状態にしておけば魔力の消費がかなり抑えられるのだが、ギガンテスの場合は待機状態であっても魔力の消費が尋常ではないのだ。

「どちらにしても、そろそろ潮時だ。転移陣の魔力はこのデカブツの魔力を使うぞ」
「・・・分かりました。ですが、どちらまで転移する予定で？」

己が自信作をデカブツ呼ばわりされ、少し怒りを滲ませたトロンであったが相手は貴族という事もあり、ぐっと堪えて返事をする。

「首都グレイトエースだ。その近くにある別荘まで転移するぞ」
「では、そのように準備いたします」
「急げよ。ここに長居している必要は全く無くなったからな」

ハイローディスの軍勢と協力して行動を起こす予定だったのだが、

何か手違いが発生したらしい。ゲオルグはトロンに言うだけ言って、すぐにまた地下格納庫から出て行った。

“おっちゃん、計画変更か？　こいつどこに移動させれば良いんだ？”

ギガンテスの外部スピーカーからパイロットの声が響く。今の会話をしっかり聞いていたようだ。

「また、ハンガーに戻ってくれ。そこからハンガーごと転移陣に移動させる」

“分かった！　せっかく起きたのにまたベッドに逆戻りとはついてないんじゃない？”

ギガンテスのパイロットからそう揶揄する声が降り注ぐ。どうも、ギガンテスを動かす事をあまり快く思っていないようだ。

「そういうな。とにかく急いでハンガーに戻ってくれ。ぶつけるなよ？」

“了解。慎重にハンガーに戻しとくよ”

その言葉通り、ギガンテスは静かにその巨体を動かし始める。地下格納庫がいくら広いとはいえ、やはりその巨体にとっては窮屈なスペースでしかない。だが、器用にその巨体を移動させている所を見るとパイロットは相当な手練れなようだ。その様を見て安心したトロンはひとりごちる。

「せっかくのデビューが台無しとはね。まぁ晴れの舞台は首都になりそうだから、よしとするべきか。ギガンテスの力を示すのに不足

はなかろうて・・・」

首都といえばバルトス国の精鋭が守護する場所である。そのような場所であっても少しも自信が揺るぐ事もなく、むしろ丁度良いとすら言いたげな表情を見せるトロンであった。

「買えないなら取りに行けばいいじゃない！」

高額アイテムを調べていた僕はふとそんな台詞を呟いてしまった。どこぞの王族じゃないんだけど、よくよく考えればミスリルなんて買うから高いんであって、取りにいけばそんなお金かかんないんじゃないかと、ミスリルを買うお金を計算していて考え付いた。

ミスリルをどうやって精錬？　っていうのかな、それをどうやってするかは分からないけれど、きっとミスリルもどこかに埋まっていてそれを掘り出して不純物を取り除いたりして、お店に並んでいるんだと思う。ならば、堀り堀りして必要な分を確保してしまえば、必要なお金を稼ぐのがだいぶ楽になる。

だってミスリルって高いんだもん。

でも、ミスリルってどこに行けば掘りに行けるんだろ？　なんかミスリルってエルフがひっそり作ってるっていうイメージがあるけど、この世界だと普通に大量にあるからそんな感じじゃないし。そもそもエルフって居るんかな？　エルフがいるならドワーフも居るよね。ドラゴンみたいなのは居るみたいだしオーガとかオークとかファン

タジーで定番の魔物も結構居るから、そういう種族が居ても不思議じゃないよね。でも、今まで見た事ないからこの世界には居ないのかもしれない。残念だけど。

えっと横道に逸れちゃった。とりあえずミスリルの出所をリックさんに聞きに行ってみよう。どこから仕入れているか聞けば、そこから芋づる式に場所がわかるでしょう。うん。でも今日は遅いからまた明日だね。あー、そうだ念の為に報告しとこう。

「おーい根っこの僕、起きてる？」
「・・・起きてるけど、根っこって何？」

不審そうな目で僕を見る僕。うん、おかしな状態だよねこれって。

「君から僕たちができたんだから、根っこ。大本なんだからなんか呼び方がないと区別つかないでしょ？」
「だからってなんかもう少しかっこいい呼び方は・・・思いつかないよね、僕だし・・・」

文句を言いながら自分で自分につっこみを入れている根っこ。うんうん、さすがは僕だけあって自分の事は良く分かっている。諦めたまえ、あっはっはっは。

「で、勝ち誇ってないでどうしたの？　何かあった？」
「ん？　いや一応報告しておこうと思ってさ。いろいろ調べたりしたし情報の共有は大事でしょ？」
「あ、そゆことね。それならこのオーブに手をかざしといて」
「ん？　それって何？　なんとなく分かるけど」

たぶん、記憶を共有するアイテムだね。

「まぁ、見ればきっと分かって貰えてるだろうけど記憶レコーダーだね。勿論、僕達にしか使えない代物だけどね。セーブって言ってから手をかざしてね。それで保存できるから。あと共有する時はロードって言いながら手をかざすだけ。簡単っしょ？」

「なんでもアリだなぁ。あれ？　でもセーブする前にロードしたらどうなるのさ？　記憶上書きされない？」

ゲームだと普通そうなるよね？　間違って保存して泣いた事もあるしね。眠い時にゲームしてるとたまにそんな事をしちゃう。

「その場合はロードできないから大丈夫。でも、誤作動あったら嫌だからロードの前に必ずセーブしといてね」

「怖いな！　でもまぁ便利だからそれぐらい仕方ないか。ほいじゃセーブ！」

オーブに手をかざし、情報を記録する。うん、何も感じない。本当にこれ保存してるん？

「ま、いいや。ロード」

その瞬間、ざっと記憶が頭に入って来た。うわ、これってきっつい。

「あ！」

「どしたの？　ってあー・・・」

思い当たる節があるのか、すぐさま顔に手をあてる根っこ。こんにゃろぉ。

「根っこずりぃ！　自分だけホワイトファングにのって楽しんでる

し！」

「根っこ言うな！　だって変なのが来てたから仕方ないじゃない。とりあえず僕もロード。ミスリルってどこにあるんだろね？」

言う事はそれだけか。ちぇ、良いなぁ。ホワイトファングに乗った記憶はあるんだけどやっぱりそれは過去の記憶であって、知っているけどその時の臨場感までは再現できない物なのだ。今思うのは、ホワイトファングに乗って楽しかったなぁってぐらいだ。やっぱり自分でフレームに乗って楽しまないと、あの刺激は味わえないよね。

「明日にでもリックさんに聞きに行ってくるよ。とりあえずはBランクのランクスキップが先だけど。はやく取ってじゃんじゃん稼ぎたいのになぁ」

「でも、作った物を見せるだけで良いなら、最速じゃない？　セリナのおかげだね、しかも贈り物グッジョブ！」

あ、やっぱりそこは突いて来るのね僕であっても。結局は自分の事なのにつっこみ入れて楽しいのかな？　楽しいな、うん。

「でもあれだね。金の亡者は頑張って稼がないとね。フレーマーは五機作る気満々だよ？」

「金の亡者って根っこ・・・しかもフレーマーってクレーマーみたいで凄く嫌なんですけど？」

ほとほと僕のネーミングセンスの無さには脱帽する。いや僕の事だけど。

「じゃ、なんか良いの思いついたら教えて。僕じゃ無理！」

「僕だって無理！」

「じゃあ諦めろ！」

「くっ」

くそぉ、何か良いのを絶対考えてやる。見てろよ！

「でも、ミスリルが一番高いからこれを大量に抑える事ができたら、あとの分の金策なんてお茶の子さいさいだと思うよ」

「だねぇ。変に改良を加えない限りこれ以上予算が膨れ上がる事はない・・・け、ど・・・」

根っこは自分で自分の台詞に内心つっこみを入れてるようだ。そうだよね、僕だからフレームの装備だけを考え出したら、追加で何か装備を考えて作ろうとするよね。それこそ外部パーツでタイプを変えるような事を考え付くぐらいはしそう。金策大変だなぁ。

「・・・・・」

「そんな生暖かい目で見ないでくれる？　大変な事になるなぁって実感してるんだから」

「手が空けば手伝うから、頑張れ」

「素直に応援されるほうが、心に刺さるよ根っこ・・・」

まぁ、僕たちのフレームが出来上がればそれこそトンでもない強さを発揮できるはず。

そう貴族なんて一掃できるぐらいのね。

あいつらはなんだかんだ言って、実力だけはある。あの無駄な強さをもっと他人の為に使うようであれば、もっとのんびりした世界になってたんだろうけど、あいつらは自分たちの為にしか力を使おうとしない。聞けばロバスが魔石獣に囲まれた時もなんとかできる力があったにも関わらず、見殺しにしようとしてたらしいからね。と

んでもなく気紛れで生きている奴らだと思う。

そんな奴らを懲らしめるのは僕のわがままかもしれないけど、見過ごす事はできない。それに大好きなフレームに乗って暴れる為に丁度いい大義名分だしね！　金策がんばるぞぉ！

ずる休み

「え、あれ?!　空が明るいよ?」
「ほんとだ。何時の間に・・・」

寝る前にフレーマーの様子を見に行くと、ホワイトファングの整備をまだしていたので少し手伝っていたら何時の間にか朝がきてた。
タイムマシン?

「主よ・・・先程からそう言っておったのじゃが、まるで聞いとらんのじゃのぉ・・・」

ホワイトファングが呆れた声でそう伝えてきた。いまは白夜じゃないので、表情は分からないけどきっと凄くどうしようも無いなぁって目で見てるんだろうなぁ。

「あと少しで主なパーツの掃除が終わるんだけどな。さすがにルーツだけあって、色々分からない部分があるよね。再現するにはちょっと難しい気がする」
「うん、市販のフレームには無いパーツが多すぎるよね」

なんというか、精密機器はまったく再現できていない。ホワイトファングにはレーダーや火気管制装置とかちゃんと付いているんだけど、既存のフレームには無い。そういうのは目視で確認するから無くても困らないっちゃ困らないんだろうけど。

「主よ、市販のフレームなぞ所詮デッドコピー程度に思って貰わんと困るぞ。今まで、様々なフレームが分解されて似たような部品で動くようにしてきただけじゃからのぉ」

さすがにホワイトファングは長生き？　してきただけあってフレームがどういう経緯で進歩してきたかご存知の様子だ。分解しまくって、パーツの担ってる役割を一つずつ調べて似たような動きをできる物で代用してできたって事かな。オリジナルの物って作るのが大変なら修理とかどうすんだろ。

「お主らがルーツと呼ぶ機体のほとんどはナノマシンで機体の修復ができるようになっておるからの。パーツがぶっとべば、物質変換で作れば良いだけじゃし。コアが残っておれば、いくらでも再生可能じゃ」

「え、じゃあ整備なんて要らないって事？」

「基本的には無くても困らん。じゃが、主達はフレームの事を理解したいのであろ？　それにパーツを一つずつ綺麗にして貰うのは、誤作動を起こす確立がぐんと減るから無くても困らんが、ありがたいものなんじゃ」

でも、主達の顔はマッドサイエンティストのそれで怖かったのじゃ、と言葉を続けるホワイトファング。ある意味、僕達の為に分解掃除に付き合ってくれたようだった。これってツンデレって奴？

「しかし、そうなると一から設計しなおさないと駄目かな？　ここまで精密パーツがあるとは思わなかったし」

「一から設計しなおす程の物じゃないんじゃない？　要はエネルギーを効率よく運用してセンサー類を充実させておけば、武装も格があがるだろうし防衛に関してもそれは言えるよね。再現できれば有難い機能も確かにあるみたいだけど、結局はオーバースペックすぎるんだよね。宇宙怪獣でも相手にするみたいだよ」

「確かに武装がぶっ飛んでるよね。宇宙が主戦場だったのかな？」

「ブースターも無いのに？」

「あー・・・ほんとだ。どういうコンセプトで作られたんだ？？？」

地上での拠点防衛の為の武装と言えない事もない。だけど、武器の威力が高すぎるというのは、昔はそれぐらいでないと破壊できない程のフレームがゴロゴロしていたのかもしれない。それはそれで怖いなぁ。

「主達よ、相談も良いのじゃがそろそろ組み立てを終えてくれるとありがたいのじゃが」

「んー・・・ホワイトファングには悪いけど、もう少し時間を掛けさせて貰いたいから、今日は学園はお休みにしてくれる？」

「そうだね、さすがに仮眠を取っておかないと始めての分解掃除で、駄目にしちゃいましたーって言うのは格好つかないしね」

それじゃ、ちょっと朝練に行ってからセリナ達には今日は休むと伝えに行こう。ちょっと眠いけどあとひと踏ん張り頑張ろうっと。

今日も珍しく早く来てみたが、コージ達はまだ来ていない。いつもなら、とっくの昔に来ていておとなしく席についとるはずなんやが・・・？

「セシー、今日はコージまだ来とらんのか？」

「うん、あたしが来てからまだ見てないわよ」

コージには悪いがセシーと喧嘩したままやと思わせとる。言われた瞬間はさすがにむっとしとったらしいが、時間が経つにつれ自分の

しでかした事がどれだけ恩知らずか悟ったセシーは青ざめとったけどな。まぁ、ちょいとした事情でそのまま怒ったふりを続けるようにお願いした。その方がセシーの罰にもなるしな。一石二鳥や。

「ねぇ、あたしが怒ってると思ってるから来てないとか無いかなぁ？」

「そこまで、神経の細い奴にゃ見えんけどなぁ。せやけど、来ないってのは変やのぉ」

コージはなんだかんだ言って、図太い奴や。それに仲直りしたいちゅうて相談してくるぐらいやし、逃げたりもせーへん。まぁどないしたらええか分からんくて、オロオロはしとったけどな。あいつは今まで友達とかおらんかったんやろか？　ど田舎から来たっちゅーてたけど、それでか？

「今日はコージは休みらしいな。さっき帰っていったぞ」

「ようバルト。コージ休みかいな？　何があったんや？」

「さぁ、そこまでは。俺の顔見るなり休むからって言ってそそくさと帰ってしまったしな」

バルトも要らん事言ったので、怒った振りを続けてもらってセシーと同じように罰を与えとる。コージが必死に仲直りしようとしてる様を見て、罪悪感を感じるがええ。

「コージが休むとなると、セリナちゃん達もかいな？」

「そうじゃないか？　彼女たちは清々しい程コージしか見てないからな。コージが休むなら一緒に休むだろう」

それはそれで学生としてどうかと思うが、ず抜けた実力を持つお姉ちゃん達だけに、少し休んだぐらいでは、その実力は小揺るぎもせ

んやろ。

「また何か無茶してないかしらコージ」
「確かに誰かさん達のご機嫌とりの為に、何かしらするかもせーへんなぁ？」
「うぅ」

わしの言葉に項垂れるセシーとバルト。悪いが俺達が強くなるまでは、そのままで居てもらうで。仲直りしたかったら早く強くなる事やな。

「それにコージは俺達のために、剣技も考えてくれとったで。セシーの為のも勿論考えとったしのぉ。たいした奴やっちゃであいつは」

まだ概要と見本しか見せて貰ってないが、使いどころを間違えなければわしの弱点を補ってくれる技だった。コージの言う必殺技のほうは、ちょっと勘弁して貰いたいかもしれんが威力だけは必殺技というだけあって、とんでもない威力だった。コージはわしが習得すればこんなものじゃないよと太鼓判を押してくれただけあって、楽しみにしとる。

「ハルト、コージの奴は休みなのか？」
「おぉ、ヴァイス。そうやコージは休みやで」
「朝は元気だったのだが、何かあったのか？」

そうかヴァイスはあいつの師匠だったよな。てかまだ朝練しとったんかい。いい加減ヴァイスも面倒見がええやっちゃな。

「さぁ、それがさっぱりや。おまえの方が詳しいんやないんかい。なんせコージはおまえの弟子やろ」

「魔格闘に限ればな。今では自分で技を考えるぐらいにまでなってるぞ。だいぶ体力もついてきたが、まだまだ鍛える余地が残ってるから俺としても楽しみだ」

あいつの頭は一体どうなっとんのや？　普段にへらっとした顔ばかりしとるから、騙されそうになるが、あいつほど努力しとる奴はしらん。身体を鍛えるのもそうやけど、なにやら魔法や戦闘の技も勉強しているらしく、趣味が勉強みたいな奴や。

「ちゅー事は、ヴァイスもどんどん強うなっとるちゅー事か。こりゃ、うかうかしとられんなぁ。次の実習は少々きばらなあかん」

「いつまでも一位を独占させはせんさ。あぁ、たまには俺と手合わせを頼むハルト」

「お安い御用や。でも簡単に勝てると思っとたら怪我すんで」

その言葉には返事をせず、にやりと笑うだけのヴァイス。こいつもコージと付き合うようになって、こういう表情もできるようになったんやなぁ。前はもっと余裕無い感じでギスギスしとったんやけどもな。お、セリナちゃん達が休みって事でみんなざわついとるな。あんだけの美少女やから騒がれるのも無理はないけど、コージの事は誰も言わんっちゅーのはどうゆう事や？　あいつって、こういう所で人気が無いのが不思議や。セリナちゃんは勿論エイジス先輩にも好かれるような奴やのになぁ？　・・・そやから嫌われるんか。ようやっと分かったわ。ははっ。

はじめまして。

さてさて、今日はギルドに行ってランクスキップがどうなるか聞きに行かないとね。昼過ぎぐらいに来て欲しいって言ってたから、先にリックさんの所に行ってミスリルの事を聞きに行こうかな。まだ時間はあるしね。とりあえずエレメンタルフレアを見える所に出しておこうっと。

ちなみにエレメンタルフレアは色々と改装してあったりする。どうにも全体の重量がある割りにパワーが不足していたので、エンジンを3型から6型に変えてシートを二枚重ねにして、速度を重さに見合ったパワーを発揮できるようにしている。魔石シートの文字は「疾」にして速度を上げている。武装は特に変えては居ないんだけど、ナックルガードを追加して格闘戦に対応できるようにしておいた。

金策の為だけに行動すれば良いとは言え、普段なら学園に行ってる時間に街をうろうろするのは何だか罪悪感めいたものを感じてしまう。でも、ギルドに行って証を貰いさえすれば後は遺跡に潜るか割りの良い仕事を請けるかするだけなので、そういった罪悪感なんてものは感じなくなるんだろうけどね。そんな風に考えながら歩いていると、すぐにリックさんのお店に辿りついた。

「おはようございます、リックさんはいらっしゃいますか～？」

お店の敷地内には、まだ朝早いだけあってお客さんの姿は見えない。お店の人がフレームを綺麗にしたり掃除をしたりはしているけども。

「はいはい、店長に何か御用です？　あ、君は前にも店長に会いに来てた子だよね？」

リックさんに会うので変装は解いているおかげか、店員さんは僕が以前に来ていた事を覚えていてくれた。髪型は変えたままだけど、よく気づいてくれたよね。さすがは客商売って事なんだろうか？

「はい、コージが来たと伝えてもらえますか？」

「ちょっと待ってくださいねぇ」

ぱたぱたとした足取りでお店の奥へ消えていく。なんというかのんびりしてる店員さんだ。ふと敷地にあるフレームを見ると、なんか人型の数が増えている気がする。前は魔道フレームも獣型フレームとかも結構万遍なくあったと思うんだけど、赤い人型フレームを目立つように配置し、その脇にもかなりの数の人型を配置して目立つようになっている。

「朝の早くからどうしたのかね。またミスリルが必要になったのかい？」

「あ、おはようございますリックさん。ミスリルが必要なのは必要なんですけど、ちょいと相談があるんです」

「ん？　ま、できる事なら相談にのるよ」

「単刀直入に言いますと、ミスリルってどこで採れるのか教えて欲しいんですよ」

まわりくどい事は嫌なので、直球でリックさんに尋ねる。

「うちは業者からミスリルを仕入れてるだけだから、良くは知らないけど竜王のふもとから許しを得て採掘してるみたいな話を聞いたけどねぇ」

「竜王から許しを得るって、竜ってしゃべれるんですか？」

「見た事ないから知らないけど、しゃべれるんじゃないか？　なん

なら直接聞いてみるかい？」
「え？」
「いや、最近コージ君ミスリルを良く買ってくれるでしょ？　意外とそれからミスリルを買うお客が増えてさ、だからミスリルの仕入れを少し増やしたんだよ。で今、業者がミスリルを持ってきてくれてるから、直接聞いた方が早いんじゃない？」
それは願ってもない事でござる！　是非にお願いします。
「そう、じゃあこっちだよ」
そういって資材倉庫に案内してくれた。そこには大きな荷馬車というか荷パニモア車が止まっていて、ずんぐりむっくりなヒゲのおっちゃんが居た。
「持ってきたミスリルは全部運んどいたぞ。次はいつ来ればいい？」
「ベルエリムさん、お疲れ様です。少しお話をよろしいです？」
「んお？　どうしたい。この坊主は誰じゃ？」
すんごいもじゃもじゃなヒゲなちっちゃいおっちゃん。もしや、ドワーフの方でしょうか？！
「この子はコージ君と言いまして、フレーム職人でもあるんですよ。で、ミスリルについて話を聞きたいらしくてね」
「はじめまして、コージ＝ヒロセです。ベルエリムさんはドワーフですかっ？」
「ガド＝ベルエリムじゃ。ドワーフだが、どうした？」
おぉ、ドワーフの方だ！　という事は手先が器用で鍛冶が得意って事だよね。間近で何か造ってる所見せて貰えたら、何か掴めるかも

しれない。って、いやいや今はミスリルだった。

「えっと、すいませんドワーフの方を見るのは初めてで嬉しくてつい。ミスリルについてお聞きしたいんですが、宜しいですか？」

「坊主のくせにしっかりしとるな。話の前に一つ条件がある」

「はい、なんでしょう？」

「おまえも職人と言われるなら、造ったものを見せて貰おうか。話はそれからじゃな」

そう言ってガドさんは、鼻息あらく僕を見つめてくる。職人として紹介された以上、造った物がある程度の物じゃないと納得してくれなさそうな雰囲気だ。えっと、見せるのは自分で造ったものならなんでも良いのかな？

「フレームじゃなくて武器でも良いです？」

「おまえさんが造ったんであれば、なんでもいいぞ」

じゃあ「ギル」でいいかな。これならどこに出しても自慢できる一品だし。手を振りながら指輪から「ギル」を取り出し、ガドさんに見せる。

「これなんですけど、どうです？　ミスリルを加工した武器なんですけど」

「こ、これは・・・ちょっと見せてくれるか？」

「え、どうぞどうぞ」

恐る恐るといった感じで「ギル」を受け取るガドさん。ミスリルを素にしたレアメタルだから、ガドさんも興味をひかれたんだろうな。

「少し試させて貰うぞ？」

「どうぞ」

さっきから、どうぞしか言ってないな。ガドさんは僕の返事を聞くや、なにやらぶつぶつと呟きながらじっと「ギル」を見つめる。しばらくすると「ギル」のグリップ部分の色が茶色に変わってしまった。うぉぃ?!

「坊主。コージとか言ったな。この鋼をどこで手に入れた?」
「え?　鋼じゃなくてミスリルを加工したんです。ミスリルって魔力こめたらそうなるんですよ」
「まさか、そんな単純な方法で”ドゥエーリン“（意思ある鋼）が出来上がるとは・・・」
「ドゥエーリン?　それって名前あったんですかぁ」

なんか顔中ひげもじゃだから、驚いているかどうか分かりにくいんだけど、ガドさんは驚いてるみたい。ミスリルから造った素材だけど、わかんないからレアメタル扱いだったからね。名前あるならそれにこした事はない。でも、とりあえずグリップの色を戻してっ!
あ、戻った。

「コージがこれを造ったのは間違いないようじゃな。ありがとう、これは返す」
「あ、どうもです。で、その・・・」
「ミスリルについて何を聞きたいんじゃ?」

良かった、無事条件をクリアできたみたいだ。

「えっと、ミスリルってどこで採れるんですか?」
「は?　そんな事を聞きたいんか?」
「はい、ミスリルってどこで採れるか全然知らないんで」

「ふむ、まぁええじゃろ。ミスリルはわしらが住む土地の傍で採掘できる。いや逆じゃなミスリルが採れるからわしらはそこに住み始めたんじゃ」
「普通に掘れば採れるもんなんですね、ミスリルって」
良かった。ドワーフの特殊能力で生み出すような物ならちょいと真似できるか、心配だったからねぇ。

「いや、まずは竜王に認められん事には掘るものも掘れんぞ」
「は？」
「そもそも竜王の縄張りにあるからな。竜王の祝福があるからこそミスリルはできるし竜王が認めなければミスリルを見つける事もできないぞ」
なんか変な方向に難しくなったぞぉ？！　竜王に認められるってどうすんのさ？！

「わしらもミスリルが採れなくなると困るから、竜王の手助けをしたりしとるしの。まぁおかげで竜王に手を出そうとか考える不埒な冒険者どもは、少なくなったな」
「えっと、僕も竜王に認められればミスリルを掘れるようになりますか？」
「認められればな。じゃが、わしらと同じ方法で認められるのは無理じゃと思うからそこは自分で考えるんじゃな」
「一体何をするんですか？」
「竜王は風竜だ。やつらの速さを生身で越えて見せれば認めてくれる。単純じゃろ？」
単純そうだけど、ドワーフの皆さんがどうやって認められたか不思議だ。どう考えても速さとは無縁な人たちっぽいのに。僕が不思議

そうな顔をしていると、ガドさんは種明かしをしてくれた。

「わしらは、道具を造ったんじゃ。すごい速さでわしらを撃ちだす道具をな。あの衝撃はドワーフでもない限り耐えられるもんじゃないじゃろうなぁ」

「えっと、人間大砲を造ったって事でしょうか？」

「人間大砲というかドワーフバリスタじゃな。着地を考えとらんから、みんな地面にめりこんでしまうのが玉に瑕でな」

これがまた中々に痛いんじゃ、となんでもないかのように呟くガドさん。竜王に認められる速さですっ飛んでいって地面にめりこむって相当な衝撃があると思うんだけど、ドワーフってどんだけ頑丈なんだ。

「ま、そういう訳でコージがミスリルを掘るつもりなら竜王に認めて貰うしかないぞ。おまえならわしが、竜王に話をつけてやってもいいぞ。認められるかは分からんが」

「え、ほんとですか？！　ガドさんの住んでる所ってどれぐらい掛かるんですか？」

「挽き車で三日じゃ。なんなら今から着いてくるか？」

「それなら、僕に送らせて下さい。挽き車ごとフレームで送りますよ。今日は昼からちょっと野暮用があるんで」

「あん？　フレームで送ろうが昼迄に着くわけないじゃろ。また今度にするか？」

「あぁガドさん。この子は面白い物を造ってるから大丈夫ですよ」

僕が言う前にリックさんが、ガドさんにおもしろそうに伝える。飛行フレームって初めて見る人は大抵おもしろい反応するもんね。

「じゃあ、少し待ってて下さいね。フレーム持ってきます！」

Bランクへの道のり

「地に住むわしらには到底考え付かんのぉ、これは」
「僕は逆に飛ばない方がおかしいと思いましたよ」

エレメンタルフレアでガドさんの村ベノアへと向かう。竜王のお膝元という場所なだけあって、山をいくつも越えた先にその村はあるらしい。

「しかし、空からじゃ少し分かりにくいな。だいたいの目印しかわからんぞ」
「少しぐらい迷ってもすぐに引き返せますから、迷ったと思ったらすぐに言って下さいね」
「おう、わかった。とりあえずこのまま真っ直ぐに頼む」

真っ直ぐと言われたので、レバーを操作し更に加速させる。ドンッと言う音とともに、シートにぐっと抑え込まれる。急な加速にパニモアが苦しそうに悲鳴をあげている。あああ、パニモアの事忘れてたよ。ごめんよ。

「この空飛ぶ奴もコージが作った奴なんじゃろ？　こんな小さい翼でなんで飛ぶんじゃ？」
「翼は気持ち程度ですよ。少しは浮力がつくけど、ほとんどがジェットでゴリ押しで飛んでるみたいなもんです」
「てことは、魔力が無くなれば落っこちるって寸法か？」
「そんな感じです。だけど、僕はこれぐらいなら減るより回復する方が早いから落ちる事は有り得ないですよ」

なんというか、僕は魔力の回復速度が凄いからね。でも最初の頃と

違って、普通の人でもそんな簡単に落ちてしまうような燃費の悪さじゃなくなっている。ハーベイさん、さまさまである。

「おう、見えた。あそこじゃ、あの山の裾にある所がわしらの村じゃ」

ガドさんが指差した先には、小さな村が見えた。山に沿うような形で家のほとんどが斜面に面して建てられていた。住居兼仕事場みたいな感じなのかな。

「川そばの空き地に下りてくれるか？」

「了解」

山をいくつも越えてきたので、ロバスから三十分って所でベノア村に着いた。ん？　遠くに翼竜がこちらを警戒しつつ飛んでいる。空飛ぶフレームは翼竜にとっては、あやしい縄張りを荒らす奴に見えるんだろう。何かある前にさっさと降りるとしますか。

「で、すぐに竜王に会いに行くんか？」

「いえ、今日はとりあえず村の場所を知りたかっただけですから、すぐに帰りますよ」

「そうか。あ、そうじゃリックの奴に次は五日後に行くと伝えてくれるか。すっかり言うのを忘れておったわ」

「あ、分かりました。それでは、また時間ある時に来ますね！」

「おう！　待っとるぞ！」

ガドさんとパニモア車をそっと降ろして、離れたのを確認してからエレメンタルフレアを離陸させる。まだ翼竜が警戒してうろうろしているので、さっさと帰りましょう。一気に最大戦速まで加速し、緊急加速も追加する。

ゴドンッ！！！

すごいGが僕を襲うけど、これがまた心地良い。こんなGの中で戦うのは結構辛いものがあるんだけど、実際に味わうとこれはこれでアリかなって思ってしまう。うろうろしていた翼竜もあっという間に、視界の外へと消えていった。

かなり速度をだしたおかげでロバスにはすぐに帰ってこれた。東ブロックへ着くと、今日は良く知っている門番さんだったので通行許可証を出さなくても通してくれた。フレーム毎でも入れてくれるぐらい、仲良くなってるからね。最初にロバスに来た時のあの書類の苦行が今では懐かしい。懐かしいだけで、またやりたいとは思わないけどね。

エレメンタルフレアを家に置いてすぐに、リックさんのお店へ行きガドさんの伝言を伝える。どうやらリックさんも次回の入荷を聞きそびれた事を後悔していたようで、僕の伝言をすごく喜んでいた。あっちこっちへ行ってると、ギルドに行く時間が迫ってきた。少し早いけど、待ちきれそうに無いのでギルドへと行く事にした。

冒険者ギルドは大通りに面した一等地に建っており、かなり目立つ。依頼をする人こなす人が行き交い、昼間もかなり混雑している。やっぱりロバスぐらい大きな町になるとギルドを利用する人がかなり多いのが分かる。

開けっ放しになっている正面玄関の入り口をくぐり、さっそく受け付けへと向かった。丁度僕を待っていてくれたのだろう。ミランダさんが僕に気づいてにっこり微笑んでくれた。

「ミランダさん、今日は。来ちゃいました」
「今日はコージ君。もう少し待ってね、そろそろ来る頃だと思うわ」
今日は何時判定が行われるかが分かるという事なので、僕としては判定してくれる人の所に出向いてでも良いからなるべく早く済ませたいと、ミランダさんに伝えた。

「本当にせっかちね。慌てる人は損するって言わない？　まぁ、そんなに慌てなくても大丈夫よ。すぐにでも判定してくれそうだし」
「え、本当ですか？」
「ええ。今回頼んだ方たちにあなたの名前を出したら、どうもあなたの事を知っているようで、二人はすぐにでも太鼓判を押しそうな勢いだったわよ？」

え？　そんな凄い人と知り合う機会なんてあったっけ・・・？　フレームはハーベイさんやリックさん、魔法で言えばトレイルさん。マジックアイテムに関して言えば知り合った覚えは無い。

「ほら、来たわよ。奥の地図の横にある扉からこっちに来てる四人組みよ」
「えーっとぉ・・・」

あ、無駄に歩くだけでも格好良い姿はトレイルさんだ。他は・・・あれっ？　あの子はリュートと一緒にいた女の子だ。あの子も判定してくれる人なの？？？　他は知らない人しか居ないし、どうゆう事だろ？　トレイルさんが魔法の判定してくれるのは分かるんだけども・・・

「やぁコージ。ランクスキップしたいそうじゃないか。というか君がギルドで活躍していない方が驚きなのだが」

「今まで何故かギルドに入ろうとすると、横槍が入ってばかりで最近になってようやくギルドに登録できたんですよ」

なんか誰かが呪いでもかけてるんじゃないかってぐらいギルドに辿りつけなかったもんね。

「はい、お久しぶり。覚えてる？」

僕とトレイルさんが仲良く話している中、ぶったぎって挨拶をしてくる女の子。ええっと・・・

「ティナさんだっけ？？？」

「そうよ。ティナで合ってるわよ、へたれのコージさん」

ぐはっ、何気に毒舌だよこの子。まぁ知る限りリュート以外にはツンツンしている人だったし。リュートは最近どうしてるんだろ？

「大丈夫よ。ちゃんと勇者をやってるわ。なんというか、本来のリュートらしい性格に戻ってて、毎日楽しそうよ」

「そっかぁ。グッドラックはうまくやってくれたんだねぇ」

まぁお咎めなしとはいかなかったみたいだけど、リュートは限られた中でうまく勇者をやってるようだ。

「で、私はアイテム士なわけ。自分で言うのもなんだけど新進気鋭の大人気アイテム士って事で、アイテムを見る目を買われて今ここに居るわけ。理解できた？」

「へぇ。知らなかった」

だから、すぐに「ギル」の便利さに目を付けてリュートに上げたっ

て訳なのか。それにしてはグッドラックは見逃してたみたいだけど・・・

「まぁ、私も精進しなきゃ駄目って良く分かった訳よ。あんな大事なアイテムを見逃すなんて大失態だったわよ」

「そのせいで僕の「ギル」に目を付けられちゃったしね」

「男がいつまでもネチネチうるさいわねぇ。で、今日は何を見せてくれるわけ？」

なんというかマイペースな女の子だよね、この子って。

「いやいや、待ってください。私がまだ自己紹介してないですよ。どうも、初めましてハーベイさんからお噂はかねがね伺っております。オーロ＝ペリカンです」

「あ、ハーベイさんのお知り合いの方ですか。初めまして、コージ＝H＝アースです」

あれ？　ペリカンって何か聞いたというか見た覚えがある・・・？

「ペリカン商会の若？！」

ティナがなんか驚いてる。あぁ、そこかしこの商売を手広くやってる商会の名前が確かにそんな名前だったよね。その名前を見て配達業がこっちにもあるのかと勘違いしたから、覚えてるんだよね。

「まぁそんな風に呼ばれる事もありますね。だけど、フレームに関してもこれでも結構うるさいんですよ？」

「そうですよね。意外と知られてないんですが、建設の為のフレームやロバス内を走るバスとかも若の発案だと伺ってます」

そこでミランダさんが補足説明してくれる。へぇ、この人がそんな事してたんだぁ。すごいなぁ。ていうかこの人がフレームの判定をしてくれるんだ。

「まぁハーベイさんから飛行ユニットについて聞いてますからね。あんな凄い物を造れるっていうんですから、それは腕の方はもう間違いないですよ、はい」

「どうもありがとうございます」

飛行ユニットに目をつけたという事は、やっぱり町から町へ配達する事を考えてるのかな？　空をぱぱっと飛べば、あっという間に移動できるし操作さえ覚えれば魔力が普通な人でも使えるしね。転移陣を使える人って少ないからねぇ。

「えっと、ここではなんですので僕の家に来て貰って構いませんか？」

「私は構わないぞコージ君」

「お茶ぐらい出るんでしょうね？」

「はいはい、行かせて頂きますとも」

それぞれの思惑はどうあれ家に来てもらうのは大丈夫なようだった。

「私も見届け人として同行するわね、コージ君」

ついでにミランダさんも来てくれるようだった。

さぁこれから！

判定はすぐに済んだ。

そもそもが僕の事を知ってる人に判定させるのは、間違いなんじゃないの？？？

「こっちは判定する人は能力で選んでるだけだもの。まさか全員あなたの事を知ってるとは思うわけないじゃないの。それに、私が見ても凄い事が分かるから問題ないわ」

「じゃあ僕はＢランクって事で問題ないって事ですよね？」

「ええ、問題ないわね。戦闘に関しても学園に問い合わせたら、あなた成績は良いそうじゃない。本当いうと戦闘能力も確認させて貰う予定だったんだけど、それも免除よ」

え、何故に学園に問い合わせなんかしてるんです？！

「セリナが教えてくれたのよ。先に学園側に成績の問い合わせをして下さいってね。というわけで、はいこれランクアップおめでとう」

「やたっ！　ありがとうございます！」

ようやくギルド証をゲットできたよぉ。なんというか、ここまでくるのに無駄に長かったよね。セリナさまさまだね！　普通に生活する分には別にギルド証なんて物は要らないんだけど、これがあれば金策するのに便利なんだよね。割の良い仕事や、討伐依頼なんてものは個人で探そうとしたらやっぱり時間かかるだろうしね。

「コージさん、このお茶菓子もっと無いの？　おみやげに持って帰りたいんだけど」

「あ、僕もお願いします」
「できれば、私もお願いする」

作るのに手間がかかって面倒くさいけど、大好きなマカロン。お茶請けに出したんだけど大人気なようで嬉しい。まぁセリナ達も大好きだから当然の結果だよね。むふー。この世界じゃお砂糖って高級品だから余計あまいお菓子ってみんな喜ぶってのもあるけども。

「えぇ!?　駄目よ、みんなに上げたら私の分が無くなっちゃうじゃない?」
「まだたくさんあるでしょ?　それにまた作れるから、母さんはできたて食べたらいいじゃん?」
「んー・・・じゃあクレープも作って。チョコバナナ」
「それぐらいなら作って上げるから、我慢ね」
「はぁい」

なんか最近、母さん見た目に引きずられてないか?　手間がかかるのに変わりは無いから別に良いんだけど、時々どっちが年上か分からなくなってしまう。父ちゃんが居るときは年相応というか母さんっぽいから、たぶん悪乗りしてると思うんだけど・・・

「コージ君、こんな若い子が母さんとか何の冗談だい?　継母なのかい?」
「そうよ、こんな若くて可愛い子が母さんとか、あだ名にしてもひどくない?」
「・・・・・・」　↑だまってマカロン食べてる。

これか。絶対これを皆に言わせたいが為に、幼いふりをしてるなこんにゃろ。

「若いだって、可愛いだって、うふふぅ～どう？　コージどう？　母さんまだまだいけるわよ！」

スパコォーン！

「ちょっと！？」

勢いよく母さんにハリセンで突っ込んだ僕に非難の声をあげるティナさん。だけど、これはお約束なのですよ、お約束。

「まだまだ何処に行く気だよ！　皆をからかってないでマカロン包んで持ってきて。悪ノリ禁止！」

「はぁい。ちぇ・・・」

僕と母さんのやり取りに唖然としてるトレイルさんとティナさん。そして、してやったりとほくそ笑んでる母さん。何時まで経ってもちやほやされたいらしい。

「ねぇ、なんでお母さんあんなに若いの？？？」

「継母なんじゃないのか？」

「いや、正真正銘あの人は僕を産んでくれた母さんだよ。若いのは・・・そうなっちゃったとしか言いようが無いんだよねぇ」

最近は家に居る事が多いので、家事を覚えようとしてたみたいだけど仕事はともかく家事だけは相性が悪いようで、今では方向転換して魔法を使って家事をしよう！　みたいな努力をしているみたい。わが母親ながら何を考えているかさっぱり分からない。

「ふぅん、まあ良いわ。またこのお菓子・・・マカロンだっけ？　貰いに来るからちゃんと作っておきなさいよ」

「ほどほどにしてよね。僕たちも良く食べてるし」

ミミが特に大好きなんで、無くなったら一大事だ。この世界で売ってないお菓子だしね。まぁトレイルさんにはちょくちょくお土産に持って行っても良いけども。いつもお世話になってるもんね。

「コージ君、よろしく頼むよ」

またもや無駄に格好良いポーズを決めながら、お願いしてくるトレイルさん。なんというか、毎日ポーズの研究でもしてないとここまで華麗に決められないよね??

「はいはーい、おみやげ持ってきたぴょん。早く帰りなさーいだぴょん」

「かっ、なっ?!」

母さんなんて事言うかなぁって言おうとしたけど、戻ってきた母さんの姿を見て絶句。なんでうさぎコスしてんだっ?!

「・・・えっとお邪魔しました」

皆が呆気に取られる中、唯一そう言ってのけたのはティナ。だけど、その視線は母さんに釘付けだ。なんかプルプルしているのは、笑いをこらえているんだろうか？　皆はしっかり母さんからお土産を受け取って、静かに帰っていった。

「これで邪魔者は消えたぴょん！　さぁ、クレープ作るだぴょん！」

「あんたはそれでも母親かぁあああああ！！！」

「きゃー」

あんな母さんが居ると確実に、僕の評判も急降下しちゃう。はぁ、と一つため息を漏らしてしまう。まったく母さんには参るよ。

コージの部屋には色々な物が置いてある。レアメタルことドゥエーリンで作られたフレームの模型や、今までに狩って来た魔物の素材、ノーミスや月光などの武器の予備。そしてお蔵入りになっているアバターシステムなどの今まで造ってきた物や、造りかけの物までところ狭しと部屋に置いてある。意外とこまめな性格なのか、きちんと棚に分類して整頓されており、物は多いが清潔な印象だ。

その部屋に一人侵入者が音も無く入って来た。

きょろきょろと部屋を見渡すと、ある一点に目を止めそちらへと移動する。その先にはコージの記憶を保存するオーブがあった。それに手をかざした侵入者はにやりとほくそ笑んだ。

「ホワイトファング、調子のおかしい所はない？　大丈夫とは思うけど」

「うむ、いい調子じゃぞ主よ。長い間動いてなかったせいで、感覚もぼけておったようじゃな。整備される前と後では、まったくもって調子が違うぞ」

そう言って、自分の動きを確認するかのように手や指を動かすホワ

イトファング。そういえば自律機能あるんだよね。ゴーレムに毛が生えたようなフレームだと単純な動きを指示する事はできるけど、フレームに関して言えば自律機能を持った奴を見た事は無い。「77」のルーツでさえ、そういった事はできないようだった。

「ホワイトファングってかなり特殊なフレームだよね」

「ん？　いまさらどうした？」

「しゃべるし、人型にかわるし、勝手に動くし。フレームの規格からかなりずれてるんじゃないの？」

「フレームを殲滅する為のフレームじゃしな。それに成長機能もついてるのもわしぐらいじゃないかのぉ。ただ、会話するフレームは結構居るはずじゃぞ」

フレームを殲滅する為って、普通フレームはフレーム同士で戦うもんじゃないの？

「ふむ、そういえばそうじゃな。じゃがわしのコアにはフレームを殲滅するという目的が刻まれておるだけで詳しい事はわからんのじゃ。おかしなもんじゃなぁ」

「なにか他に情報はないの？　例えば、どんな国があってどこと争っていたとか」

「そういうのは無い・・・な。そもそも国が分かれておった覚えは無いしの。主が現れるまではスリープモードで待機せよという命令は覚えておるが、肝心な事はブロックされとるようで、まるで思いだせんな」

フレームが作られた時代の歴史とか聞けるかとも思ったけど、無理かぁ。ホワイトファングを造った人はどうやら余計な情報を与えなかったらしい。与える時間が無かったのかもしれないけど。

「まぁ、なんにせよ調子は良くなったんだね？」
「うむ、感謝するぞ」

そして、ばしゅっと光ったかと思うと白夜に戻っていた。

「ん～～～っ！　たった一日この姿になってないだけで、懐かしさを感じるのはおかしなもんじゃなぁ」
「最近、白夜で居る方が多かったしそっちの方が可愛いから、良いじゃんない？」
「っば！？　か、かかか可愛いとか当たり前じゃ！　不意打ちでそんな事いうなぁ・・・」

顔を真っ赤にして怒る白夜。前に自分で言ってたのに、言われるのは慣れてないんだね。なんか、もじもじする白夜や弱気な白夜が凄く可愛く感じてしまうんだけど、僕ってサドだったんだろうか・・・違うよね！　きっとギャップ萌えしてるだけだよね！　そうだよね？！

「ん？　何を葛藤しとるのじゃ主よ？」
「いやいや大丈夫だよ、僕は普通だよ？」
「？　まぁいいわ、では早速じゃが今日はどうするのじゃ？」
「ホワイトファングの武装の研究をもう少し突き詰めたいんだよね。金策君がお金を稼がないと、フレーム製作が進まないから少しでも知識を深めておきたいんだ」

今はフレーム製作の事だけを考えてられるので、時間はたっぷりある。時間は有限だし有効に使っていかないとね。金策君がＢランクを取れてるなら、遺跡に行って金策のお手伝いしに行くのもありだけど、それは根っこがするだろうしね。

「グラビティ機関を出しとけばいいのか？」
「うん、お願い。重力を操れるようになれば攻撃も防御も自由自在だからね」
理屈はわからなくても、どの部品がどういった役割を持っているかをしっかり把握しよう。

抵抗

うぅむ・・・ホワイトファングの整備が目処がついたからちょっと眠ったんだけど、なんかすぐに目が覚めてしまった。変なテンションでずっと作業をしてたから、神経が昂ぶってたのかな？　やっぱりフレームをいじるのって楽しいんだよねぇ。ん？なんか、部屋に違和感があるけどなんだろう？

「あれっ、ヒロコ？　どうしたの？」

部屋をよくよく見渡してみれば、ヒロコがなんかぼーっと立っていた。手にはフレームの模型を持っている所をみると、それで遊ぼうとしたんだろうか？　ヒロコって意外とロボットゲーム上手かったから気に入ったのかな？

「あれっ、マスターなんで居るの？」

ベッドから僕が見ている事にようやく気づいたヒロコが驚いた顔をしてそう尋ねてきた。声を掛けても上の空だし、なんか調子悪いのかな？

「なんでもなにも僕の部屋に居てなんで悪いのさ」

「学園は？」

どっちかというとそれは僕が聞きたい事なんだけども？

「白夜を僕の都合で休ませたから、今日は僕も休みだよ。ヒロコこそどうしたのさ」

「んー、サボリ？」

なんで疑問系なんだろうか、この娘は。そういえば、前に母さんがヒロコの様子がおかしいって言ってたけど、何か関係があるのか？

「理由もなくさぼっちゃ駄目でしょ。まぁヒロコは精霊だからあんまり学園で学ぶ事はないのかもしれないけどさ」

「そういうマスターこそ休む時はちゃんと教えてくれないと駄目じゃない」

「セリナ達にはちゃんと言ったけど？」

「あれぇ？」

なんだろう。ヒロコと僕のさぼるタイミングがたまたま重なったからこんな事態になっちゃったのかな？　ていうか、フレームの模型は持っていかないで欲しい。

「で、ヒロコはなんでその模型を持ってるのかな？」

「え？　あれ？　えーっと、そうそう。ゲームできないから、これでも触って遊ぼうと思ったんだ。ボクもフレームに乗ってみたいし」

「ふむふむそれはとても良い事だ。それじゃヒロコの分もフレームを作らないと駄目だねぇ。金策君にがんばって貰おう」

フレームに乗ろうというその意気込みやよし！　女の子でもフレームに興味を持ってもおかしくないよね！　そしてコンビネーションで巨大な敵を撃破するのである。うん。

「えーっと、じゃあお願いしようかな。あはは～」

なぜか、少し焦ってる様子のヒロコ。なんだろ？　お金が掛かりそうだから遠慮してるのかなぁ？

「でもその模型は持っていっちゃ駄目だよ。それも一応レアメタルでできてるから、あとで使うつもりだし」
「はぁい」
「その代わりゲームはいつでもしに来てくれて良いから。やり方もちゃんと教えるし」
「ほんと?!　やたっ」

なんか久しぶりにヒロコのはしゃぐ姿を見た気がする。色々忙しくて話する暇も無かったしヒロコも大人しかったからねぇ。これをきっかけにまた仲良くできると良いな。

「乱獲じゃぁあああああ！」

ギルドランクがBになった僕はさっそく遺跡へと潜る。変身スーツを着た僕は、今までの鬱憤を晴らすように遺跡を駆け巡る。スーツの時の武装はちょっと違う。キラーマシンの武装を利用した銃を二丁に、レザーブレードを一本。あとは魔格闘による素手の戦闘と必殺技を駆使して敵を倒していくのだ。魔格闘の為に腕と足にすこしばかりギミックを仕込んだ手甲と足甲を装備している。

「トルネードキィイイイイイイイック！」

いちいち技名を叫びながら攻撃するのはお約束だ。いまハイマニューバが続々と生み出した子グモに絶賛囲まれ中なので、範囲攻撃技で一気に殲滅する。

「ソニックナックル！」

そして親グモのハイマニューバへ一気に詰め寄るパンチ技をお見舞いする。

パギィイィイン！

だけど、僕の攻撃はハイマニューバの直前でバリアみたいな物に阻まれる。しかし、ここからさらに僕は突き進む。

「トンファーブレード！」

トンファーなのかブレードなのか突っ込みたくなるけど、トンファーの攻撃が剣で斬ったみたいに相手を切り裂くのでこんな名前らしい。その攻撃でバリアを切り裂いたけど、ハイマニューバは前足を振り上げ僕に突き刺すべく、すごい勢いで槍のように繰り出してきた。

右、左、右、右、左と足とは思えない速さで、突いてくるがその全てが空を切る。そして、タイミングを見計らって足元へと詰め寄る。

「フライハァアアアイ！」

とか叫びながら、普通にアッパーを繰り出す僕。気分的にはぶっ飛べおらぁの方が合う。真下から突き上げた僕の拳をもろに食らったハイマニューバは、見事に天井にめり込み身動きが取れなくなっている。

「シャイニングスタースラァアアアッシュ！」

その状態からレーザーブレードで居合いをぶちかます。一瞬で五茫星を描くように剣閃をひるめかす。一瞬の間をおいて、ばらばらと落ちてくるハイマニューバ。スーツを着る前はそんなつもりは全く無いんだけど、これを着て戦い始めると何故か技名を叫ばずにいられない。しかもめっちゃ気合を込めてしまうという恥ずかしいオマケ付きである。でも、戦隊物とかってそういうもんだよね???

そして、手早くバラバラになったハイマニューバを指輪にしまい、次の獲物を探して移動を開始した。

そうやって五十階層から始めた乱獲は百階層に行くまでには、少し落ち着いてきた。いつもいつもレアなアイテムをゲットできる訳ではないので、こうやって乱獲して少しでも拾えるアイテムを増やしてお金を稼いでいく予定なのだ。つまりは質より量って事。オンラインゲームだとこんな事したら凄く嫌われるけど、遺跡の場合は大丈夫だよね・・・？

「さてさて、スーツを着たままこっから先に進んだ事無いけどやっぱり楽になるかな」

ヒーロー戦隊物のスーツを具現化して、僕に使いやすくメットの視界や武装の出し入れ、防御力やスーツを着た人間の能力の底上げなどをしているので、僕一人でこの先もやっていけるはずだ。色は赤だからすっごく目立つんだけどね。

手始めにカオティックブラウンと戦えれば、どれぐらいの強さになってるか分かるだろう。こいつはライオンのような容姿を持つ魔石獣で、セリナとミミが居れば楽に勝てる相手だ。なのでこいつに楽に勝てるようであれば、百階層でもうろうろできると思う。それにこいつのタテガミはより合わせて糸にすれば、かなりの強度を誇る

糸になる。普通により合わせても凄い糸だけど、魔力を込めながらより合わせれば魔力耐性を持つ糸になる。その場合物理耐性は少し落ちてしまうけど、それでも両方の耐性を持つ素材はかなり貴重なので、結構いい値段になるのだ。

「だけど魔石獣だけあって擬態化されるとまったく分かんないんだよねぇ・・・」

魔石獣の特性の擬態化というか完全隠蔽といいますか。本気で魔石獣に隠れられてしまうとまったく感知できない特性があるので、僕のアイテムでも探せなかったりする。さすがに魔石獣が怪我をしていると、感知できるんだけどそれも完全じゃない。なので魔石獣と出会うのは本当に運なのだ。それが良いか悪いかは別として。

そして今もっとも出会いたくないのは、ストレートベリーという魔物である。なんかストロベリーっぽい名前なんだけど、こいつは瘴気を撒き散らしながら精神干渉をしてくる嫌らしい奴なのだ。しかも時々次元斬りという技を放ってくるので、油断もできない。遠距離からの攻撃もこの次元斬りで防がれたりするので、接近戦が有効なんだけどいつ次元斬りが来るかビクビクしながら、戦う羽目になるので胃に優しくない敵なのだ。ミミであれば攻撃が分かるので、回避も余裕なのでそんなに不安にならないんだけどね。

そして、悪運は僕に微笑んでるようで。

フォォオオォォオォォォォォォ・・・

地獄から響いてくるような声が僕に迫ってきていた。うぅ、ほんとになんで嫌な奴が真っ先にくるかなぁ・・・

「本気出して行くぞぉ」

さぁて、悪霊もどきを退治するとしましょう。

それぞれの戦い

マスターを守らなきゃ。

ボクにできる事なんてたかがしれてるけれど、それでもこのまま印の力をあまり使わせないようになるべく離れておくぐらいはできる。最近になって少しずつ思い出してきた。ボクは王の印の下僕。王の印を持つ人に仕える精霊なのだ。マスターが変わると普通は前の記憶なんて思い出さない筈なんだけど、今回は何故か思い出せた。

いつまで経っても力を求めないマスターのおかげで、王の印が弱っているせいなのかもしれない。

今まで印を受け取った人は、例外なくあいつに力を求めていた。だけど、それは必ず代償がつきまとう。一見、害の無いような代償に見えるんだけど、そこがあいつの狡猾な所で力を求めた人にとって辛い経験をさせるようになっていて、印を持った人は皆ひどい目にあったのを見てきた。今度のマスターにはそんな風になって欲しくない。

最近、実体化するのが難しくなってきたのでマスターの部屋から魔力カートリッジを拝借した所を見つかってしまった。とっさに誤魔化したから気づいてないと思うけど。そしてマスターの部屋に行って偶然判ったんだけど、あいつが何か仕掛けたらしい事。だけど、それが何か判らない。

「ヒロコどうしたの？　ぼーっとして」

「ぼーっとしてるように見せ掛けて、油断させてるのだ！　とやっ！」

「あっ？！」

とっさにマスターのお茶菓子を一個奪う。危ない危ない、考えすぎるとマスターが不審がるよね。なんだかんだいって、マスターって結構気がつくからボクから意識を逸らすのって大変なんだよねぇ。こそっと認識阻害をかけてても、ふとした拍子にこっちを気にかけるぐらいなのだ。

「・・・まったくヒロコは相変わらずだねぇ」

「おいひいものはいふらへもはいるよ」

もぐもぐと咀嚼しながらしゃべる。そして、ボクを優しい顔をして見つめるマスターの笑顔を見ると、絶対に守らなきゃって思う。

「でも、こっちの世界に来てからヒロコにはお世話になりっぱなしだよね」

「ほぇっ？！」

「なんでそんなにびっくりするのさ。この世界に来た時からヒロコが居てくれたおかげで僕は、なんとかやってこれたんだと思うよ。本当に感謝してる」

あ、照れてる照れてる。あんまりこんな事を言わないマスターだけど、最近ボクがあまり構って上げてないせいでつい言葉に出ちゃったのかな？　なんだかんだで、ずっと一緒にいるもんね。

「そんな事言われても何も出ませんよーだ。ちなみにお礼はおいしい物が良い」

「今更こんな事を言うのもなんだけど、ヒロコが居なかったら僕どうなってたんだろうなぁ」

「ほえ？」

マスターなら一人でも色々できるから、どうもなってないんじゃないかな？

「だってさ、変な所に来たのは分かってるけどどうすれば良いか分かんないし、母さんとははぐれたし。それに魔法があるなんて知らなかったし、たぶん一人だと野生化してたような気がするよ」

なるほど。教える人が居ないとそうなってたかもしれないのか。そう考えるとボクはマスターの役に立ったと言えるのかな？

「野生化したマスターはちょっと見てみたいかも。餌付けしてお家で飼うんだ！」

「いや野性化してないからね？　それに人間を飼わないでくださいよ、ヒロコさん」

「うひひ、冗談だよマスター、ボクがそんな事するわけないじゃないか」

「なんかヒロコが言うと冗談に聞こえないんだよねぇ。でもまぁ僕が野生化したらその時はちゃんと見つけてよ？　餌付けでもなんでもしてくれて良いからさ」

「了解だよ！　その時はヒロコさまって呼ばせるからね」

「はいはい、ヒロコさま」

マスターと目を合わせるとなんだか可笑しくって、二人とも吹きだしてしまった。なんだか久しぶりに笑った気がする。

「最近、母さんが心配してたけどそんだけ元気なら大丈夫だね。よし、今まで甘いお菓子ばっかだったからポテチを作ってあげよう。きっとハマると思う」

「うむ、よきにはからえ！　あ、マスター！　そこのオーブって何

？」

ふと目にとまったんだけど、あのオーブにあいつの気配が残ってる気がする。

「あ、これ？　これは僕達の記憶を保存と呼び出しができるオーブなんだ。ほら、今って五人の僕がいるでしょ？　いちいち会って話ししてたら誰が誰に何を話したかこんがらがりそうだったから、皆がこれに保存してこれから話を聞けば効率的かなぁって作ってみた訳なのさ。でももうすぐこれも要らなくなるんだけどね」

「マスターって時々頭良いよね。やる事はめちゃくちゃだけど」

「ヒロコに言われたくないよ？！」

ぷんぷん、失礼しちゃうなぁ。でも、あのオーブはマスターの記録が入ってるだけって事だよね。てっきりマスターのとんでも兵器かと思って心配しちゃったよ。

「そんな事よりぽてちを下さい。ボクは早く食べたいのです」

「はいはい。ちょっと時間掛かるから大人しくゲームして待っててね」

そういって、ゲームをボクに渡して部屋を出て行った。今まで我慢してたから今日はもうちょっとマスターと一緒に居たい。うん、ちょっとだけだから今日だけだから許して貰おう。

「これはヒーローパワーって奴なのかな？」

苦戦するかと思われたストレートベリーに、簡単に勝ててしまった。
常に瘴気を撒き散らし精神汚染をかます奴だけど、このスーツには
まったく効き目が無かった。むしろ逆に瘴気を浄化していく始末で、
近づくと瘴気が綺麗に吹き飛んでしまった。それで判ったんだけど
ストレートベリーはどうも瘴気で体を構成していたらしく、瘴気が
無くなってそこに残っていたのは骨。なので、倒すのは非常にあっ
けなかったのだ。なぜか次元斬りもしてこなかったし。ストレート
ベリーにはこのスーツが相性良いみたいだね。まぁそのせいで、ス
ーツを着た時の僕の能力が良くわからないんだけど。仕方ない、次
いってみよう。

次も、その次も、またまたその次も。

何故かストレートベリーばかり寄ってくる。こいつって倒すのが面
倒だから、普通は逃げるらしいんだけど、僕は突っ込んで行くだけ
で勝てるので逃げはしない。でもこいつって高額アイテムを出す奴
じゃないから、倒すだけ無駄なんだよねぇ。

「あれ？」

五体目を倒した時にそれが出た。ストレートベリーには似つかわし
くない綺麗な水晶がころりと落ちていた。手にとって見てみると、
中に星が散らばっているみたいにきらきらしていて非常に綺麗な水
晶みたいな石だった。しかもテニスボールぐらいあるからでかいし。
なんかこれって非常にお宝な予感がする。

それならそれで、余計にストレートベリーを倒さなきゃ。お宝じゃ
なくても見た目が綺麗なんでセリナ達へのおみやげになるしね。

キュパッ

背後で聞き覚えのある音がしたかと思ったら、僕は見事に吹き飛ばされていた。カオティックブラウンの登場だ。ぼけーっと突っ立っていたせいで、組みし易しと思われたのだろう、擬態化を解いて襲い掛かってきたのだ。魔石獣はほんっっとに分かんないなぁ！

グァアォオウッ！

一吼えしたかと思うと、酸をはき散らかしてくるカオティック。

「“光よ！この掌に魔法の盾を！　マテクト！”」

すかさず防御魔法で酸を防ぐ。最初はこれが酸だと気付かなくて凄い量のよだれだなぁとびっくりしてたんだよね。少しだけ避け損なって腕に掛かったときは驚いた。

「バーストガン！」

ダララララララッ！！！

さてさて反撃開始です。二丁拳銃をフルオートでぶっぱなす。何か叫びながら撃ったけど気にしないで。バーストガンの弾丸は無限生成なわけで引き金を引きっぱなしで、次々と凶悪な弾丸を吐き出す。いくらカオティックが素早いとはいえ、二つの火線から逃げ切れる訳が無かった。一度直撃して動きが鈍れば後は無造作にカオティックに弾丸を次々に叩き込む。そして、実弾をたらふく食らったカオティックは流石に動きが止まった。

「シャイニングスタースラァアアッシュ！」

なんというか、止めを刺そうと思うと体が勝手にこの技を繰り出してしまう。もう一つ必殺技があるんだけど、もっと経験を積まないと出せないんだろうか。いつも次こそやろうと考えてるんだけどどうしてもシャイニングしか出せないんだよね。ヒーロースーツは強いけどお約束が色々ありそうで、中々使いこなすのに時間がかかりそうだ。

だけどこのヒーロースーツは強いんだけど、むらがある。今の場合は普通に使いこなせたんだけど、場合によっては同じ敵でも苦戦する事がある。なんというかピンチを演出するために力を抑えられてるような感じがする時があるのだ。結局は勝てるんだけど、なんというか危なっかしい。

「でもとりあえず、カオティックブラウンも楽に撃破できたなぁ」

これなら魔物を倒しながら、遺跡探索ができる。百階層までくれば、まだ荒らされてない区画があるはずだからね。ひょっとするとフレームが見つかるかもしれない。にひひ、ちょっとワクワクしてきた！

勇者の今

ロバスの北ブロックの一角。中心部から離れた所に位置する静かな住宅地にある小さな家にティナは入っていった。

「ただいま」

扉を勢い良く開け家の中に入る。ティナの声を聞きつけて家の奥から青年が顔を出す。

「おかえりティナ。お仕事はどうだったの？」
「ん。これおみやげ、おいしいわよ」
「はいはい。お茶淹れてくるね」

そう言ってまたリュートが部屋の奥に消えていきティナが行儀良く椅子に座ると、今まで黙って座っていた赤毛の娘がティナに話しかけた。

「今日は大人しくしてたわよ。とりあえず、今の所はね」
「そ、見張りお疲れさま。アルミナも食べなよ、おいしいわよ」
「ん、リュートと一緒に頂くわね」

アルミナと呼ばれた娘は、ティナがおいしいと薦めた事で俄然興味を引いたようだった。

「でも今日ギルドの仕事で出掛けたんだけど、びっくりしたわよ」
「どうしたの？」
「ふふ、マジックアイテムの見定めをして欲しいって仕事だったんだけど、そのマジックアイテムを造ったのがなんと、あのコージさ

んだったのよ」
「へぇ・・・？」
「何でそんな事になったかは知らないけど、他にもフレームの権威やら魔法の権威が来てて、コージさんの評価をしてたみたい。そんな中に私が呼ばれるなんて、中々私も評判が上がって来たって事じゃない？」

端から見てもうきうきとした様子のティナ。中々に珍しい光景なのか、アルミナは少し驚いた様子でティナを見つめている。

「アイテム士として、がんばってきた甲斐があるわぁ。そうだ！コージさんから何か便利なアイテムを貰って使って上げても良いわよね。私が使ってると周りが知ったら箔がつくよね？」
「そういう事もあるかもしれないけど、大丈夫なのかな？」

アルミナもコージの事は知っているが、あの「ギル」という武器を作ったのは到底信じられない。魔法に詳しくて武器にも詳しくないとあんな便利な物は作れないんじゃないかと思うが、あんな平和ボケした顔の少年がそんな事ができるとは到底考えられなかった。

「あら、私がしっかり鑑定したのよ？　以前の作品も見せて貰ったけどどれも今までに無いアイテムで、かなり便利な物だったわ。しかも武器だけじゃないしね、あの子かなり凄いわよ」
「へぇ」

ティナがここまで手放しで賞賛するという事は、コージさんの職人としての腕は信用しても良いのだろう。気付けば家の奥が騒がしい。どうやらリュートが戻ってきたようだ。

「はいはい、お待たせ。レイシスも呼んできたよ」

「おかえりなさいティナさん」
「はいはいただいま」

レイシスと呼ばれた少女になげやりに返事しながらティナは、リュートからお茶のセットを受け取ってテーブルにそっと置いた。そして、リュートが座るとすかさずその隣に座るレイシス。視線は常にリュートを見ている徹底ぶりだ。先程の受け答えもずっとリュートを見たままなのである。

「で、どうだったの？」
「ん、うまくいったわよ。いつもどおりね」

リュートの言葉に得意気に答えるティナ。そのやりとりは、非常に仲が良い事を伺わせるだけの雰囲気がたっぷりあった。その様子が面白くないのかレイシスは、二人の良い雰囲気をぶった切るように、テーブルにあった菓子をリュートに差し出してきた。

「はい、あーん」
「え、自分で食べれるよレイシス」
「私が食べさせるのは嫌ですか？」

身を乗り出すようにしてリュートに上目遣いでレイシスがそう尋ねれば、ティナは目で早く食べろと訴える。アルミナもなぜかそわそわと菓子を持ちリュートを見つめている。

「なんだかこれって恥ずかしいんだよ。わ、わかった食べるから食べるから泣かないで？」

意を決して口を開けるリュート。そして嬉しそうにその口にそっと菓子を入れるレイシス。女の涙は自由自在なのだ。もぐもぐと咀嚼

した途端リュートの目が輝いた。

「なにこれおいしい！　どうしたのこれ？」

「仕事先でおみやげにどうぞって貰ったの。見た目も可愛いしおいしいでしょ？」

そういってぱくっと食べるティナ。色とりどりで最初は飾りか何かと思って、びっくりしていたティナだが、思い切って食べた後は夢中になって食べてしまったのだ。

「そうなんですか？　私にも下さいリュートさん」

「え？」

「ちょっと待ちなさい、次は私がリュートに食べさせる番よ？」

先程からアルミナがそわそわとしていたのは、彼女もリュートにお菓子を食べさせたかったらしい。レイシスはそんな彼女にお構いなく、リュートに向けて口を開けて目を閉じている。困ったリュートはアルミナの手を握り、そのままレイシスの口にお菓子を放り込んだ。その様子をまるで無視して、一人のんびりお茶とお菓子を楽しんでいるティナ。この状況にもまるで動揺していない見事な男っぷりだ。いや女の子だけども。

「アルミナもあーん」

リュートがアルミナの手を握ってレイシスへ菓子を食べさせた事がショックだったのか、放心しているアルミナへリュートが菓子を放り込む。事態を収集するためとはいえ、リュートもなかなか混乱しているようだ。

「「おいしい！」」

「でもこれ売ってないから大事に食べてね。どうやって作るかもさっぱりだし」
「「!?」」

その言葉を聞いて、硬直するレイシスとアルミナ。自分で食べるかリュートに食べさせるかで葛藤しているようだ。売ってないし作れないがコージに言えばまた貰えるのが分かっているティナはその様子を見てほくそ笑む。

「リュート、今日はもう出掛けないわよね？」

そんな二人の葛藤はほっておいてリュートに尋ねるティナ。

「いや、夕方から出掛けるよ。アンナさんの所が困ってるみたいだし」
「酒場のアンナさん？　何かあったの？」
「なんだか、最近厄介なお客さんが来たりする事が多いらしくて、困ってるんだって。ライルさんは腕っ節が強いって訳じゃないから余計にね」
「あんたはほんとお人好しよね。どうせただ働きなんでしょ？」
「ううん、残ったお肉とかパンとか貰ってるよ？」

残らなければ何も無しという事だ。だけど、リュートはそれは正当な報酬と考えているようで、無ければ無いで残らなくて良かったですねとか言いそうである。

「それにお金が要る時は、適当に魔物をやっつければ良いしね。むしろ貰いすぎな感じがしてて申し訳ないんだけどね」
「ならちゃんとお礼言いなさい。それと無理はしないようにね」

この裏表のないリュートはティナがヨルカだった時に良く知るリュートだった。まっすぐ進んで困ってる人を見つけて手を差し伸べる。そんな純粋なリュートであった。あの日、コージと戦った後からこうなってしまったけど、それはそれで良かったとティナは思う。

「これでも勇者なんだから平気だって！　ティナは心配性だなぁ」
「うるさい。そういう事は怪我一つせずに帰ってから言いなさい」
「それは駄目です。怪我しないと治療できないじゃないですか」

急に出てきて僧侶にあるまじき台詞を堂々と言い放つレイシス。そもそも目的は治療なのかコミュニケーションなのか。なにかと口実をつけて二人きりになりたがる為に、たまに暴走するのはレイシスの悪い所であるようだった。

「はいはい、無茶言わないの。とにかく心配されたくなかったら怪我しない事！　いいわね？」
「はぁ・・・しょうがないなぁ。勇者の本気を見せるとしますか」

そう言ってにっこり笑うリュートはまさしく頼もしい勇者の顔をしていた。

ロバス古代遺跡百階層。

ここから先は完全踏破されていない階層である。下へ行く為の階段についてはほぼ調べられているのだが、地下へいけば行くほど広がっていく遺跡のフロアに対して、調査する人員が少なすぎるのだ。

さらに言うと、この階層まで到達するにはエレベーターを使わなければ丸五日はかかる程である。

光司は五十階層から百階層まで三時間もかからずに到達したが、これは地理を把握してソロで駆け抜ける事ができる光司だからこその芸当である。調査の為にはその為の人間も連れて回る必要があるので、五十階層から上は一日平均十階層上がる事ができれば早い方であった。

その理由としてフロアの広さもあるが、やはり徘徊する敵の存在が移動を妨げるのである。

“なんか見た事も聞いた事もないメカの群れが居る・・・”

同じ形をした四機のメカ。そのメカはどれ一つとして違う動きをせず、一糸乱れずに通路を移動していた。だがカラーリングはそれぞれ異なり、最後尾が白色でその前の二機は進行方向に対して左側が赤、右側が青、先頭の一機は緑という構成になっている。

“ひょっとするとかなり下の階層からスキップして来ちゃったイレギュラーなメカかもしれない・・・滅茶強いかも”

今までイレギュラーな存在は、その階層に似つかわしくない実力を備えた敵だった。どういう理屈で現れるかはわからないけど、大体がやばい相手だと思って間違いない。

“うー・・・チャンスと言えばチャンスだけど、一人の時に見つけるってついてないなぁ。せめてミミが居れば、悩まずに済んだんだけど”

通路の角で身を隠すように、悩んでいる光司の前に小さな球体がいつの間にか浮いていた。

「ん？」

その球体はどうも偵察の為のメカで、四機のメカは光司に向けて殺到してきた。

独り身はつらいよ

四機のメカが僕に向かってくる。先頭は緑色の機体ではなく青色の機体が僕の目を引くように急接近してきた。武装が分からないので、少し様子を見る。初見で強さも分からないので、アクセルで対応する。

青色の右手の先から、レーザーブレードが構成されていく。左手には光が集まっていくがそれがどんな武装かまったく想像がつかない。

バギィィン！　ギギッギギギギ！

レーザーブレードを受け、青い機体と対峙する。脳への負担を考えこまめにアクセルを解除しながら戦闘している。青い機体は僕がレーザーブレードを軽々と受けきったと見るや即座に体勢を入れ替えてきた。うまくブレードを引きながら、僕を赤い機体の目の前へと誘導してきたのだ！

バシュュウウゥゥウゥウウウ！

赤いビームが僕へと向かってくるのが見えたので、バックステップで回避する。が、なぜかビームが僕を追いかけてきた！慌てて床を蹴り上げ天井から更に斜め下へと回避する。さすがに長時間出力できないようで、それでようやくビームを振り切る事ができた。だけど、回避した所には青い機体がすでに僕を待ちうけていて、直前に気づいた僕はなんとか青い機体のブレードを受ける事ができた。

「こんにゃろぉっ！」

常に青い機体が僕に貼り付き、僕の動きを制限してくる。この短い時間で僕の動きを読めるようになったのか、移動の頭を抑えられるように攻撃を仕掛けてきて、本当にうっとうしい。ふと他の機体が気になって見ると、緑色が居なくなり変わりに青い機体がもう一機増えていた。え、いや緑色が青色にチェンジしたって事?!

「うっとうしいのが増えた!」

一機が僕の動きを制限し、もう一機が僕に手傷を負わせていく。かと思えば両方一気に僕に攻撃してきたり、赤い機体の砲撃を誘導したりしてきて、侮れないコンビネーションを見せる。青い機体の左手の光は射撃武器らしく時々こちらに向けて撃ってくる。

ここは分身攻撃を仕掛けるか。この相手に四体一は分が悪すぎる。

「はぁっ!」

一気に五人の僕を青い機体一機に差し向け、四肢を切り裂く。返す刀でもう一機倒そうとした時、もう一機青い機体が庇うように現れ、倒し損ねてしまった。赤い機体が居なくなってるという事は、こいつらは敵に合わせて色を変えて戦うようだ。そして、青い機体は両腕の武装をレーザーブレードに変更して、僕の分身攻撃をなんとか凌ぎ切っている。やっぱりこの青い機体は厄介だ。

分身二体で一機を押さえ、残りでもう一機を倒そうとした瞬間また一機増えて阻止された。白い奴が青に変わったか?!　いや、白は依然として距離を取ってこちらを伺っているだけだ。ならこいつはどこから来た?

「むぉおおお!?　三機もいると本当に嫌らしいなぁっ!」

分身だけど、結局の所僕は一人なんだよね。さすがにここまで長引くとこちらの体力がやばくなってくる。

「“穿光”」

「ギル」にこの技はあまり向いてないけど、一旦距離を取る為に青い機体に向かって無数の突きを放つ。さすがにこれは捌き切れなかったのか大きく後退して白い機体の周りに集結する青い機体たち。その隙に僕も分身を解いて体力の回復に努める。

ここまでで分かった事は、ちょっとこいつら厄介だという事。色を変えてこっちが嫌だと思う方法で攻めてくるとか、今までにないタイプだ。しかもあの白い奴は修理をしてるはず。でないと、さっき四肢を切り飛ばした奴が復活するのは有り得ない。という事はあの白い奴から先に倒さないと駄目なんだけど・・・

「様子を見るだけで全く近寄ってこないし、絶対距離を取るんだよなぁ・・・」

他の三機は僕が動く度に目まぐるしく色を変えて反応するんだけど、白い機体だけは色を変えたりせずに距離を取る事に専念していた。とりあえずこれはどうだ？

「バーストガン！」

ダララララララッ！！！

抜き手を見せないクイックドローで、二丁拳銃を連射する。だけど、緑色にチェンジした機体が弾丸をすべて止めて見せた。ホワイトフ

ァングのエナジーフィストのように両手をさっと振って一瞬で防御膜を作り出して防御してみせたのだ。

そして防御膜が消えた瞬間、赤色にチェンジした二機がビームをより合せる様に、発射してきた。

キンッパギィイン！

ビーム攻撃を見ていたので、アタックオプションを出していた僕は、赤色のビームを白色に向かって弾いたんだけど、すかさず緑色は防御膜を作り出して防いで見せた。さすがにこれぐらいじゃ隙を見せないかぁ・・・厄介だ！　ならばっ！

「トルネードキィイイイイイイイック！」

間合いを一気に詰めて、範囲攻撃技を繰り出す。だけど、緑色一機ではこの攻撃を防ぎ切れないと判断したのか、三機がすべて緑色にチェンジし僕のトルネードを防ぐ。一機だと押していた攻撃は、三機になると逆に僕が押されて弾かれてしまった。そして弾かれて体勢を崩した僕へ即座に青色にチェンジした二機が襲い掛かってくる。

レーザーブレードを二刀流にして、まずは僕を弱らせるつもりなのか足や手を狙って攻撃の手を休めない。メカなだけあって、大振りな攻撃を続けても疲れないし斬り込んでくる速さは鋭さを増すばかりだった。防戦一方に追い込まれた僕は、少しずつだけど手傷を負っていく。ブレードは必死に回避してるんだけど、蹴りや体当たりを混ぜてくるのでどうしても食らってしまうのだ。だけど、ここは我慢だ。ある程度距離を取るまでは・・・

「ソニックナックル！」

距離が離れた所で、白い機体目掛けて殴りかかる技を仕掛ける。青い機体は置き去りにできたが、緑色の機体が白い機体を守るために目の前に飛び込んできた。

ガキィィン！

「トルネードキィイイイイイイイック！」

ソニックナックルは受け止められたけど、トルネードキックは一機じゃ手に余るはず。タイムラグなく攻撃する事で、青い機体が緑にチェンジして防御する暇を与えずに白い機体を畳み込めば、勝機はあるはずだ！

そう思って気合を込めてトルネードキックを続ける僕の目の前には二機の緑色の機体。その二機が僕の攻撃を防御し、追いついてきた青い機体が一気に天井へ飛び真上から蹴りを放ってきた。

「くっ、なんでっ？！」

蹴りを避け切れずに少し食らって吹き飛ばされながら、もう一度状況を確認する。目の前に緑色が二機に青色が一機、そしてその奥にいつの間にか白い機体がじっとこちらを見ている。白い機体は、常に離れた所から見ていて一度も変わってなかったから指示をする機体で色を変えられないと思ってたんだけど、そんな事は無かったようだ。となるとどれを狙えば良いんだ？？？

そうこうしてる間に、緑色の二機が青色へと変色していく。緑色は一機残しておくようだ。

深呼吸をして精神を統一し、心を落ち着ける。視線は動かさず一点

だけを見ないようにして青い機体の動きを見逃さないようにする。
そして、カウンター技を発動させる。

「八手撃」

全く同じタイミングで四本のレーザーブレードが僕に迫る。だけど僕は左側へゆるりと動くと一本のレーザーブレードをこちらのレーザーブレードで違う方向へ誘導する。ちょんと軽く流したように見えるが、すごい勢いで隣りの機体へと斬りかかる格好になる。勿論僕は誘導してすぐにもう一機へレーザーブレードを向けており、いきなり同士討ちとなってしまった青い機体はどちらへ対処しようかと一瞬動きを止めてしまい、そこを僕ともう一機に斬られてしまう。

ここで追撃すれば一機ご退場願えるのだが、八手撃のつらい所は攻撃されない限り攻撃しない事なのだ。それに確認が必要な事もあるので、このまま転がっている青い機体は放っておき、健在なほうへと向き直る。

向こうから手を出すように、すいっと無謀にも青い機体の攻撃範囲に入り込む。しかし、あまりにも自然な動作だった為か、青い機体は反応できずお互いのブレードがキンッと合わさってしまう。

向こうを見ると緑色の機体が青く変色していっている。一機が大破しているので慌てて機種変更してきてるのだろう。こんな状態であっても白い機体は距離を取ったままで動こうとはしない。大破している機体を背後に背負い、僕は相手の出方を伺う。

ズザッ！

ようやく今の位置関係に気づいた青い機体は、思い出したかのよう

に間合いを取る。そして、変色を終えたもう一機と並んでこちらへ向き直る。一機が僕の前に出てきて時計回りに少しずつ位置を変えて僕の反応を見ている。だけど僕は微動だにせずまっすぐ前をみて背後に大破した機体を背負ったままである。そうすると今度はもう一機が反時計回りに移動を開始した。挟み込んで攻撃してきたら余計にカウンターの餌食なんだけどね。

時計回りに動いていた機体が僕の斜め後方に来て様子を伺っている。もう一機も同じように僕の死角へと回りこんでくる。今の僕の視界には白い機体だけしか映っていない。あーあいつが攻撃してきてくれたら楽なんだけどな。などと考えていたら白い気体が青く変わっていく。一瞬心を動かされかけたが、平常心を保つ。となると、白い機体はどこへ行った？

キンッ！ダラララララ！

いつの間に復活したのか転がっていた青い機体が起き上がり、背後から攻撃を仕掛けてきた。だけど背面も僕のカウンターの範囲なので、即座にバーストガンを持つ手でレーザーブレードを受け流し、バーストガンをしこたまお見舞いしてあげた。

弾丸はいくつかめり込みはしたけども、致命傷とはならずそのままた距離を取る。背後を振り返ったおかげで分かったんだけど、白い機体はこちらへと移動していた。移動というかチェンジか。だけど、それも目の前で青色に変わりつつある所を見ると、また向こうへと変わっていってるようだ。

これは長引く戦闘になりそうだ。

収穫なし

間違いない。白い機体は他の機体の修理を一瞬でしてしまう。こいつを倒すには一撃で部品を残さないように消し去るしか無い。もしくは四機同時に大破させるか、かな。今手持ちの技でそこまでの大技があったかなぁ・・・？　魔法だったら部品も残さず消し去るのがあるんだけど、詠唱と魔力を流し込むのにいかんせん時間がかかる。ヒーロースーツの必殺技は確かに強いけど一機だけしか倒せないし・・・

「まったく厄介な敵だなぁ、君たちはっ！」

突然叫びだした僕を、遠巻きにこちらを伺っていた四機のメカ（カルテット）は警戒するかのように、白い機体を庇う陣形を取る。

フォォオオォォオォォォォォォォォ・・・

カルテットに時間を掛けすぎたせいか、僕の背後からストレートベリーが襲いかかって来た。襲い掛かると言うかヒーロースーツの何かに惹かれてきてる気がしないでもない。

「邪魔っ！」

大きく手を振りかぶり、瘴気を掻き消すように空気をかき混ぜる。それだけで、呆気無くストレートベリーは存在が希薄になっていく。ある程度薄くなってから、頭部をひっつかみ瘴気の渦から一気に引き抜いた。

カラカラァン

これだけで、ストレートベリーは浄化される。あ、またでっかい珠が落ちてるや。指輪にさっさとしまっておこう。お土産がまたできた。

「ん・・・？」

あぁっ！　この手があるじゃないか！

「くっふっふっふ・・・僕の欲望を満たしつつ、一機ずつ倒す方法があるじゃないか」

ＡＤＤしたストレートベリーを処理してる間も隙を見せてなかったおかげで、カルテットは先程から微動だにしていない。いや、なんか魔力を回復しているのかな？　なんか魔力の流れを感じられる。周囲から魔力を取り込んでいるようだけど、メカなのに魔力をうまく扱えるんだなぁ。ま、それはさておき、気合い入れて頂くとしますか。

バーストガンもレーザーブレードも、腰に下げて素手の状態になる。そうして、ゆっくりとした足取りでカルテットへと向かう。今は青青緑白の構成だ。

そして、カルテットの警戒線を超えたんだろう。青い機体がゆっくりと近づいていく僕へと向かってきた。二機が直列に並びまっすぐこちらへと進んでくる。そのせいでその背後にいる緑と白の機体がよく見えない。

だけど、これはこれで丁度良い！

「シャイニングスタースラァアアアッシュ！」

居合いの間合いに入った瞬間、気合を込めて必殺技をぶちかます。
レーザーブレードを鞘に収めた瞬間に五茫星がきらめき青い機体は、
斬られた事を思いだしたかのように崩れ落ちる。

「その前に頂くっ！」

青い機体が崩れ落ちきる前に僕はすかさず左手を伸ばし、残骸となった青い機体の部品を次々に指輪にしまっていく！

ガギィン！

なんとか間に合った。二番手が斬りかかって来る前に倒した青の残骸を指輪にしまい終えて、すんでの所で青のレーザーブレードを受け止める事ができた。これで敵は三機。一機ずつ切り刻んで片っ端から指輪にしまいこんでやる！

“ファントムアタック”

六体の分身を出し、青い機体を取り囲む。一機を倒され慌てたカルテットは緑色を青にして投入してきたけど、遅い。

「“穿光”」

四方向からの刺突技で一気に細切れにし、分身を元に戻して悠々と部品を指輪へとしまう。今度は距離があるので、右手で牽制しながら着実に残さないように部品を回収する。これでカルテットはコンビに変更だ。白い機体がいくら一瞬で修理できても、部品が無ければ修理のしようが無い。ねじの一本たりとも残さず根こそぎ回収す

れば、さすがに大丈夫だろう。下手するとねじ一本から再構築しそうだもんなぁ。

後は、一機ずつ細切れにしてすかさず回収するだけの簡単なお仕事です。ファントムアタックで一気に削って終了です。

「はぁ、ちょっと疲れた」

これ、指輪が無かったら何時まで経っても倒せなかったね。だって、戦闘不能から一気に全回復しちゃうんだもん。接近戦も遠距離戦も対応できるし防御も結構固かった。あいつらを倒すには、ほぼ同時に四機とも殲滅するか部品一つ残さずやっつけていくしか無い。ミミとセリナが入れば、楽だったね。ミミなら一機ずつ細切れにしていくのは簡単だし、セリナはあれぐらいの大きさのメカなら溶かしきるぐらいの魔法を持っている。僕もできるんだけど詠唱に時間が掛かるから、一人じゃどうしようも無かったんだよねぇ。

うーん、陣式の魔法もそろそろ考えると良いかもしれないねぇ。一人だと威力のある攻撃を出すのに不都合がありすぎる。百階層より下を目指すなら、こういった敵も増えてくるだろうし、攻撃手段は幅広く持っていた方が便利だ。いつもいつもミミとセリナがいるわけじゃないしね。

あーだけど、カルテットは取れる部品ちゃんとあるかなぁ・・・倒すの優先にしちゃったから本当にズンバラリンなんだよねぇ。あの変色機構は便利だし。まぁ僕ならわざわざ色を変えたりはしないけどね。

「ん～・・・どうしようかなぁ。カルテットはたぶんこの階層にはもう居ないだろうし他にやばい敵は居ないはず」

カルテットとの戦闘でちょっと疲れたので、休憩しないとだるい。小腹も空いたから、脇の小部屋でこっそりと隠れて休憩するとしよう。もう少し探索を続けたいしね。

結局、百階層の探索は特に何も見つける事もなく終了した。たぶん、フロアの半分ぐらいは探索できたと思うんだけど、全体像が掴めないからはっきりした事は分からない。今までの階層の広さから類推しただけだからね。それに、この階層にはかなり広い通路が出てくるようになった。これならフレームが移動するのに支障がない。

「しらみつぶしに探せばどこかにフレームが置いてありそうなんだよね」

百階層に無くても、格納庫へ直行するエレベーターがあるかもしれない。この遺跡内部でフレームを運用していたなら、必ずそういうのがあるはずだ。・・・たぶん。

「ただいまー・・・って、なにこれ」

家に帰ると、甘い香りが漂いなにやらリビングが騒がしい。根っこが何かデザートでも振る舞ったのかな？　あ、マカロンがもう残り少ない筈だから作っておかないと駄目だね。

「おかえり金策。おまえマカロン食べすぎだろ。ミミが泣いてたよ？」

「いや僕だけで食べたんじゃなくて、お客さん来てたんだよ。根っ

こも知ってるでしょ？」

根っこも家に居たはずだから、知ってると思ったんだけど？

「ううん、学校さぼったから家の中でこそこそしてたし」

「さぼったから、家の中を堂々とうろつけないって事か。そかそか」

なんというか、学校さぼって家に居るとおおっぴらに遊べないよね。宅配便が来ても居留守つかったりして、家には誰にも居ませんよ～って、息を潜めちゃうんだよね。

「コージィ・・・マカロン・・・」

ぐずぐずと半泣きになりながら訴えてくるミミ。今から作るからなんか他の甘いもので我慢してて。って、クレープあるじゃん。

「いまから作るから、明日には食べれるから今はそこのクレープ食べててよミミ」

「あ、なんかミミは焼き菓子が良いみたい。クッキーもどきでも作ろうかって話してたんだよ」

「そっか、ミミは柔らかいのは駄目？」

「ううん、お口が固いのを求めてるの。固いのの口なの」

別にクレープが嫌だという訳じゃないらしい。

「お蔭様でゆっくり頂けます」

むぐむぐと切り分けたクレープをゆっくり咀嚼しているセリナ。うん、君は本当に上品だねぇ。それにひきかえヒロコときたら・・・

「やひがひもまっへるよ、まふたー！」

口が小さいせいか、食べる量は少しずつなんだけど口いっぱいに頬張る癖があるヒロコ。なんで右側ばかりに溜め込むんだろう・・・？

「食べてからしゃべりなさい。根っこ手伝って」

「あーはいはい。じゃ、大人しく待っててね。母さんはもうコスプレは終了してよね」

まだうさぎのままかよ。客観的に見てかわいいうさぎコスなんだけど、それが自分の母親となるとまた別の感情が浮かび上がってくる。

「うぅ・・・」

あぁっ、ミミがうじうじし出した。とりあえずもどきを作って我慢して貰おう。

ウィスパー？

「理屈がさっぱり分からぁあああああん」

グラビティの作用は分かるんだけど、どういう理屈でこれが重力を操れるのかがさっぱりわからんちんです。簡単に言うとクリスタルとちょろちょろっとした部品とセンサー類が組み合わさったなんだけど、たったこれだけでなんであの威力を実現できるのか理屈がさっぱり理解できない。

とりあえず、部品をコピーして組みかえれば使えるんだけども、やっぱりモヤモヤっとする。そんな僕の周りを何か仕事をくれと言わんばかりに、こちらを見ているプッチくん。いつまでも作業ロボットとか呼ぶと可哀想なんで、名前をつけてみたら意外と喜んでいるようだった。

「今のところ、プッチくん達に手伝って貰う事は無いんだ。ミスリルが掘れるようになったら手伝って貰うかもしれないから、その時はお願いね」

ぶんぶんと手を振り上げ喜びの動きをするプッチくん。最近、大量生産してないので出番が無くて暇を持て余してるみたいなんだよね。何か無いかなぁ。

「フレーマー、ミスリル買ってきたよー」

「あ、ありがとう、そしてお帰り。ミスリルが買えたって事は・・・」

「めでたくBランクになったよ。で、一人で潜ってきた」

「おー、おめでと。で、一人で遺跡はどうだった？」

金策がミスリルを買って帰ってきたという事は、それなりに稼げたという事だね。僕もちょっとぐらい身体を動かしに行こうかなぁ。

「変なメカ見つけて来たよ。めっちゃてこずった！」
「え、見せて見せて！」
「ほいな、バラバラなのは我慢してよ」

え、バラバラなのか。いつもみたいに綺麗にばらしてないって事は相当てこずったんだね。うわ、ほんとにバラバラだ。スーツの必殺技でずんばらりんにしたのかな。

「全部で四機分の部品があるはずだよ。全部同じ形してるんだけど、色は違うんだけど色ごとに役割が決まってて、敵に合わせて色を変えてくるんだ」
「ふぅん？　連携がすごかったの？」

正直そんなてこずる敵には見えないんだけど？

「連携もあるけど、一機厄介なのが居てね。どんだけ大破させても一瞬で修理しちゃうやつが居たんだよ」
「そいつだけ、先に狙えば・・・ってそれぐらい試すか。何か問題あったの？」
「うん、敵に合わせて色を変えるって言ったでしょ。白い奴、えっと修理しちゃう奴なんだけど、やられそうになるとすぐに色を変えて逃げちゃうんだよ。そのくせ、修理の為なら強引に突っ込んでくるから、いつまで経っても倒せないんじゃないかって心配したよ」

自分の説明だけど、良く分かんないや。オーブ使ってロードした方が早いかな。僕がクエスチョンマークを頭の上に浮かべてると、苦

笑しながら金策が提案してきた。

「記憶を共有したほうが説明の手間が省けるね。なんというか、細々と説明するのが面倒くさくなってきたよ」

「そんな事じゃ、はやくボケちゃうよ。頭は使えるうちに使わないと」

「いや僕は肉体労働専門で」

同じ僕なのに何を言ってるんだろうねぇ？

「根っこの部屋に行こう。ぱぱっと他の皆の一日も知っておきたいしね」

「了解、そろそろ根っこも戻ってるだろうしこれからの事も話しておこうか」

金策と一緒に根っこの部屋に向かう。格納庫を後にして屋敷へと向かう。屋敷の中はなんか甘い匂いが漂っていて、僕も何かつまみたくなってきた。

「さっきまで、お菓子を色々作ってたからね。クレープにクッキーにマカロン、あとプリンも作らされてたなぁ」

「またなんでそんな事に？」

「マカロンが無くなってミミがね」

「あーそりゃご愁傷様。でもミミってあんだけ甘いもの食べて全然太らないとか反則だよねぇ。いや、出る所は出てるから成長してるのか？」

「意外とお腹は出てたりして？」

「どうだろうねぇ？　二の腕はぷるぷるしてたっけ？」

金策としてたそんな話をミミがこっそり聞いてたのは、また別のお

話。

「おーい、根っこ報告に来たよー」

「おー・・・」

なんかスルメを齧りながらぐったりとしている根っこ。甘い物成分を摂りすぎたから、辛いもの分を補ってるみたいだね。

「あーそだ。そのオーブはもう使わなくて良いよ。いちいち報告に来るの面倒でしょ？」

「いや、別に面倒じゃないけど何か別の方法を考え付いたの？」

ぐったりしながらもやる事はやってるのね。でもどうすんだろ？と考えてると、根っこが指を上に向けた。上？

「あぁ、衛星経由で連絡できるようにでもしたの？」

「ご名答。てなわけで今から説明するよ」

“あーテストテスト。ただいまマイクのテスト中”

マイク持ってないじゃん。

“えー根っこです。突然の放送ごめんね。オーブに記録するのが面倒くさ・・・もとい皆が大変だと思ったので仕様変更しました。基本的に皆の情報は僕こと根っこに勝手に流れてくるようになってます。他の皆は人差し指を立てて「セーブ」と「ロード」をして下さい。それだけでナノマシン経由で衛星に記録が保存でけます”

「でけますって。で、根っこがしてる一斉放送？　みたいなのはどうやってすんの？」

ちっちっちと指を振って少し待ての顔をする根っこ。自分なんだけど少しイラっときた。

“で、全体放送だけど衛星に意識を飛ばして貰って後は普通に頭の中で会話してみて”

“こんなかんじ?”

“こう?”

“声だけじゃ誰か分かんないねぇ”

皆好き勝手会話し始める。なんだかんだで皆新しい物好きだし。あ、僕もか。僕も衛星に意識を飛ばす。すると他の僕が居る場所がぼんやりと分かる。この状態で頭の中で話をすれば良い?

“で、これって衛星に記録されてるって事?”

“うん、そゆこと。あそこなら誰にも触れないでしょ?”

“なんかあった?”

“オーブが誰かに触られてた感触があった。勿論屋敷の中の人間以外ね。だから大慌てでこの方法を考えた”

“セキュリティは何も反応してなかったけど?”

“だからやばいんじゃない。僕達の監視を掻い潜ってくるなんて敵ながら天晴れじゃない?”

“天晴れとか暢気な事言ってる場合じゃないでしょ。セキュリティどうすんの”

“もう対応済み。だけど、警報は鳴らさないであくまで監視と追跡をするようにしてる。こっちが気付いてるって分かったら向こうも警戒して来なくなるかもしれないし”

“セリナ達は大丈夫なの?”

“保険はかけるつもり。プレゼントという形で身を守るアイテムを渡そうと思う”

“この話は誰にもしちゃ駄目だよ。どこで聞かれてるかさっぱり分からないし”
“やっぱり貴族関連？”
“良く分からないんだよね。でも一番可能性が高いのは貴族だと思う。他に恨みかってそうな所ってそもそも思いつかないし”
“とりあえず、そういう事で皆気をつけるように”
“何勝手に仕切ってるの監視の一号”
“いや、ちょっとやりたくなった。今は満足している”
“へいへい。じゃそゆことで”

「とりあえず、竜王に認められるにはどうすれば良い？」
「ドワーフのガドさんは、ドワーフバリスタで飛んで認めて貰ったらしいんだけど・・・」

何事もなく全体会話とは関係ない話を始める根っこ。どこで聞いてるか分からないというから、そういう会話をしてもいないというスタンスなんだろう。ほんと貴族は色々ちょっかい掛けてくるよね。

「竜王は風竜って言ってたよね？　魔法で飛んでみせたら満足するんじゃない？」
「生身でやるならそれしか無いかぁ・・・人間大砲もおもしろそうだけど」
「誰が飛ぶのさ？！」
「勿論、金策でしょう。話つけてくる役目は金策なんだし」
「嫌だからね？　もっと格好良い方法考えようよ？」

まったく、格好悪いから嫌とか贅沢者め。格好良いじゃん人間ロケット。あ、ジェットパック背負って飛ぶのは駄目かな。

「ジェットパックってあんまり早くなさそうなんだよね。早さを求

めるならでっかいロケットを背負って飛ぶ方が良いだろうし、それはそれで格好悪くない？」

「うーん、駄目かぁ。もっとインパクト欲しいんだけどなぁ・・・」

ど派手にいったほうが竜王も喜ぶよね、きっと。

「まぁ、とりあえず魔法で行くって事で。もっと派手で楽な方法があればそっちでも良いけど、僕の体がぶっ壊れそうな方法は勘弁してよ」

「はいはい。じゃあ竜王はよろしく頼むよ～」

僕はカルテットの分解をするとしましょうか。うひひ。

仲良し二人組み

今日はコージが学園を休むという事でしたので、ミミを連れて魔法教会へ顔を出す事にしました。学園に行っても良かったのですが、せっかくなのでフレームと生身で戦う講座を受けに行くつもりです。私とミミはどうもフレームに乗るのが苦手なので、せめてフレーム同士の戦いの際に足手まといにならないように、学ぶ必要があるのです。

「ミミ、コージと一緒に居たかったなぁ」

まぁ当然のようにミミは、不満げな様子です。だけど、ミミを置いて私だけ講座を受けるのは不安なのです。きっと、コージに色仕掛けをするでしょうしね！

「コージも忙しいんですから、帰ってからお話すれば良いじゃないですか」

「だって、それだと独り占めできないからつまんないんだもん」

やはり油断できませんね。今日は白夜はホワイトファングのままという事ですし、ヒロコは寝たままで起きてきませんし、ミミを残したらとんでもない事になる所でした。ふと大人しくなったミミを見ると、家から持ってきたマカロンをもきゅもきゅ食べてます。本当に好きですねぇ。私はどちらかというと、せんべーなるものの方が好みですが。塩気のあるお菓子は意外とおいしいのです。

「ミミは別にフレームと戦えなくても良いんだけどなぁ」

「じゃあ、フレームに乗って戦うんですか？」

「うぅん・・・乗ってるだけじゃ駄目かなぁ。で、コージに守って

貰うの。セリナもそうしようよ？」

くりくりとした目をこちらに向け可愛らしい顔でそう提案してくる。コージに守って貰うのは嬉しいんですけど、それだと余計に危ない気がしないでもないです。コージが。

「だめかなぁ？」

「別にコージは怒らないと思いますよ？　でも、コージに何かあったらどうします？」

「うーん・・・」

ファウンデルス卿と戦ってから、コージは貴族をどうにかしたいと考えてます。おかしな力を持つ貴族と戦う為に私も力を付けておきたいのです。ミミもそうかなぁって思ったんですけど違ったんですかね？

「やっぱりセリナもコージを手伝うつもりなんだ」

「ええ、当然ですよ」

「でも、相手はあいつらだよ。危ないんだよ？」

言葉を濁しつつ心配そうにそう問うてくる。魔法教会といえど、どこで貴族の密偵がいるか分かりませんもんね。それにミミは貴族から虐待を受けていたから余計に怖いんでしょう。

「だからこそ余計に微力ながらお手伝いしたいんです」

「セリナってほんとコージが大好きだよねぇ」

「あら、ミミは違うの？」

「ううん、一緒～」

ミミはなんだか私の事を心配してくれてたようですね。確かに遺跡

では実力をお見せする事はできませんでしたが、そのせいでミミは見誤っているようです。でも、私もミミが勉強が嫌でわがままを言ってると勘違いしてましたから、おあいこですよね。

「では、行きましょうか」
「うん、ミミもコージの為に頑張る」

本当は今日の夜に受ける予定の講座でしたけど、昼間の講座に空きが合って良かったです。空いてなくてもトレイルに言って空けさせましたけどね。昼に行っておけば夜は自由にできるのでコージとゆっくりするつもりです。でも、ミミはもう少しマカロンを食べるのを控えた方が良いと思いますよ？

今日はセリナに連れられて魔法教会で勉強してきた。魔法の理屈は良く分からないけどフレームと戦う時に気をつける事を分かりやすく教えてくれた。それに話を聞いていて思ったんだけど、ミミの場合は攻撃してくるタイミングが分かるから、相手が大きくなっただけでやる事はあまり変わらないかなって事だった。魔石獣と違って中に人が乗ってるから簡単には行かないけど、フレームは関節という共通した弱点があるからどこを狙うか悩む必要がない部分は楽だと思う。

勉強してる間、ミミやセリナみたいな女の子がこういう魔法の勉強をしているのが珍しいのか、やたらと顔立ちの整った魔術師が声をかけてきたけど、セリナがきっぱりと遠慮しますと断るとすごすごと立ち去っていった。中には手を出そうとしてくる人も居たけど、

そういう人はミミがちゃんとお仕置きしておいた。やっぱりコージが居ないとちょっかい掛けてくる暇な人って居るんだねぇ。今日はコージに言われたから大人しい服を着てきたのにわざわざこんな事をしてくるんだもん。なんかセリナにはそれで大人しいのですか？　って眉を寄せて聞かれてしまったけども。チラリもヒラリも無いから大人しいと思うんだけどなぁ。

でもセリナもやっぱりコージの役に立ちたいんだね。本当はミミもフレームに乗れたら良かったんだけど、ボタンをポチポチと押して操作するのはどうしても覚えられない。もっと簡単な方法で操縦できればコージの役に立つんだけどなぁ。剣を使った訓練だとコージの役に立ってるんだけど、できればもっと役に立ちたいし一緒に居たい。今まで貴族に言いように扱われてきたせいで、知らない事が多いから学園に通うのは楽しい。少ないけどお友達もできたし。

「セリナはコージと結婚したいんだよねぇ？」

「え、えぇ？　き、急にどうしたんですっ？！」

ふと今まで気になってた事をセリナに聞いてみる。セリナは気付いてないかもしれないけど結構、結婚、結婚って呟いているのを聞くんだよねぇ。見ると顔を真っ赤にして動揺しているセリナ。耳まで真っ赤ですごく可愛いなぁ。

「違うの？」

「ち、違いませんけどそうやって改めて聞かれるとちょっと恥ずかしいと言いますか・・・」

とか言いながら何か想像してるみたいで、にへらって顔が崩れてきた。好きな事を想像すると顔が崩れるのはコージと一緒だよね。コージは気持ち悪くなるみたいだけど。

「ミミはそういうのできないから、セリナに任せるね」
「なんでです？」
「ミミはほら、なんだかんだ言っても家がね駄目な所じゃない？」
テスタロッサ家が万が一ミミの事に気づいてしまえば、どんな無理難題を言ってくるか分からないもん。昔と違って色々成長してきたから、すぐには分からないとは思うけどやっぱりミミはミミだから、じっくり調べられたらばれちゃいそう。
「・・・なら、コージと一緒に頑張ればそんな事を気にする必要はなくなりますね」
にっこりそう微笑むセリナ。それはそうだけど、貴族を倒すとか簡単に終わる事じゃないと思う。倒す前に婚期がどんどん過ぎちゃうし、ミミももうすぐ二十歳になっちゃう。
「う・・・だ、だいじょうぶです。コージの世界ではミミも私もまだまだ結婚には早い年齢だって聞いてます。きっとコージはそんなの気にしません！」
「んふふぅ、ちゃぁんとそういう事は聞いてるんだねぇ。結婚する気満々だねっ」
「そ、それは今は良いんです。とにかくミミが諦める必要は無いって言いたかったんです」
セリナはさっきからずっと顔が赤いままだ。そういう事を日ごろから考えていてもこうやって話題に出るだけで恥ずかしがってたら、コージと夜のイチャイチャタイムとか大丈夫なのかなぁ？　結婚したらそういう事をするんだよね。

「ミ、ミミは話が飛びすぎです！　ほらっ早く帰りますよ、コージがきっと待ってます」
「はぁい。別に恥ずかしがらなくても良いと思うんだけどなぁ」

そういうと余計に顔が赤くなるセリナ。今までも真っ赤だったのにまだ赤くなれるんだぁ。セリナって結構コージにくっついたりちゅっちゅっしたりするくせに、人に言われるのに弱いんだねぇ。にひひ、これは良い事知っちゃった。

「もぉっ。とにかく変な気を利かせる必要はありませんからね。わかりました？」
「うんうん。コージに一番可愛がって貰うように頑張る」
「うふふ、負けませんよ。私もコージから色々して貰ってますもん。頑張ってるのはミミだけじゃ無いんです」

あ、得意げなセリナって初めて見るかも。いつも隙だらけな攻めだから油断してたんだけど・・・ん？　ひょっとして最近よく頭につけてるカチューシャって・・・

「ん、そうですよ。コージから貰ったんです。良いでしょう」

ミミの視線に気付いたセリナが上機嫌で教えてくれた。ずるいっ！　でもミミだって負けてないもん、う、うらやましくなんかないもんね！

「そ、そんな事ないもん、コージは指輪くれたもん！」
「えぇ！？」

そう言って薬指につけた指輪をセリナに見せ付ける。確か薬指に指輪を貰うと勝ち組になるんだよね。母さんがそう言ってた。

「なんで右手？　あぁ・・・そういう事ですか。ミミさんは良いですねぇ」
「むぅ」

なんか小馬鹿にされた気がする。でも、コージからプレゼントをお互い貰ってるので勝負は引き分けって事かな。そんな話をしながら歩いているとすぐに家に着いてしまった。

「あらっ、トレイルですかね？　うちに何か用があったんでしょうか？」

ふと屋敷の向こうに見える人影を見ながらセリナがそう呟く。

「あの無駄に格好良いポーズする人？」
「あれでも一流の魔術師なんですよ。まぁコージ絡みで何かあったのかもしれませんね」

苦笑しながらトレイルさんの説明をして、挨拶をして家に入るセリナ。ミミも同じようにただいまって言いながら家に入る。行ってきますとただいまって挨拶はいいよね。

「おかえり～」

ミミ達のただいまに奥からコージが返事をしてくれた。にゃはっ突撃だよぉ～！

ミスリル欲しい

ドワーフの村ベノア村。山すそに細々と家らしき物が建ち、採掘と鍛冶、細工物で生計を立てている。僕がよく買うミスリルはほとんどがここから採掘されたものらしい。でもあれだけのミスリルや武器や防具を作って売ってるはずなのに、なんというかベノア村は控えめに言ってもみすぼらしい。どこにお金が消えてるんだろ？？？

「おい小僧、村になんの用だ」
「あ、こんにちは」

ガドさんとは違うドワーフが村に近づいた僕に誰何してきた。口調が荒いのはそれが普通なんだろう。現にドワーフは特段怒っている雰囲気じゃない。

「ガドさんは居ますか？　コージが来たと言えば分かって貰えると思うんですが」
「あぁガドか？　酒かっくらってまだ寝てるんじゃないか？」
「ありゃぁ。ガドさんの家教えて貰っていいですか」

まっすぐ行った先に井戸があるのでそこから北に行き、山にへばりついてる赤い屋根の家から東に三軒目にあるボロイ家だと教えてくれた。ぶつぶつと復唱してようやく覚えた。

「ガドさんこんちわー！」
「ぐごっ」

ガドさんの家に辿り着き、挨拶をした僕を出迎えたのは大きなイビキだった。外まで響くイビキって凄い。

「はいはい、ガドはまだ寝てるよ」
「へ」

そんな声と共に出てきたのは、小さい女の子?だった。いやいやよく見ると背こそ小さいが立派な女性のようだ。僕を確認するように見上げて、顔に見覚えが無いと分かるや即座に、不審げな表情になる。

「あんた誰さ?」
「えっと、昨日リックさんの紹介で知り合いになりましたコージって言います。今日はガドさんにお願いがあって来たんですけども」
「昨日、フレームで飛んできたって子かい? ほぉほぉおまえさんがねぇ。ま、あがりな」
「はい、お邪魔します」

見かけは人懐っこそうで元気な感じな女の子に見えるけど、ガドさんの娘さんなのかな? なんか凄く若く見えるけども。僕を家の中に案内したガドさんの家族はそのまま家の奥へと姿を消した。

「ほらあんた! お客さんだよ! しゃきっとしな!」

ガスッ! ゴスッ! ドンゴドンッ

えーっとここまでなんか凄い音が聞こえるんだけど、大丈夫・・・? 聞こえてきた声から衝撃の情報が分かったけど、その後の殴打音も僕の警戒心を揺さぶるのに十分だった。なんというかパワフルだよねドワーフって。

「おぉー・・・コージか。今日はどうした?」

「こんにちはガドさん。今日はお願いがあって来ました」

のそっと部屋から出てきたガドさんは、特に痛がるそぶりも見せずにゆっくりと椅子に腰を下ろした。かと思うと奥に向かって大声で叫ぶ。

「おいミーム！　酒持ってきて・・・おぉそうそうそれだ」

「それだじゃないよ！　リックさんとこに持ってく分は採ってきたのかい？！」

「その前に酒を飲まんでどうする？　あ、こいつにも出してやってくれ」

「え、いやっ僕はお酒飲めないんでおかまいなくっ！」

「「え？？？」」

ガドさんはともかくミームさん？　までなんで不思議そうな顔をするのっ？

「酒が飲めないなら、何飲んで生きてるんだい？　水なんか飲んでも気合出ないでしょ」

「あぁ、コージももう良い年だろ？　そんなこっちゃ立派な大人になれんぞ？」

「いやっ大丈夫ですからっ、ほんと水で十分ですからっ！」

「・・・そうかい？　じゃあ茶でも持ってきてやろうかね」

「茶だぁ・・・？　そんなのあったのかよ」

ガドさん、そんなのって言う・・・？　なんかドワーフのお金の使い方が分かってきた。明らかにお酒だよね。朝昼晩とのべつまくなしに飲みまくってるから凄い勢いでお金が無くなっていくんだろうなぁ。

「ほれっ、どうぞ」
「あ、ありがとうございます」

ミームさんが新しくジョッキを持ってきて、僕の前に勢い良くドンッと置かれる。コップなんて無いのね・・・と思いつつ一口頂く。

「ぶほっ！？」
「だははははははは！　やっぱそうかっ！　ミームよくやった！」
「ふふん、うちに来て酒を飲まないなんて馬鹿な事言うからねぇ」

茶色の液体に見えたので、お茶だと思って油断して飲んだら見事にお酒だった！　おおっ？！　なんかこれ喉が一瞬で熱くなったんだけどひどくね？！

「おまいらおにかっ！」
「コージの顔のほうが赤鬼だな。真っ赤になっちまってまぁ。弱いにもほどがあるぞぉ」
「だねぇ。人間はたいがい酒に弱いんだねぇ。情けない」

好き勝手言う人達だなぁ。こんな強い酒なんて飲めるわけないじゃないかっ！

「“彼の者を害する源を浄化せん　クリア”」
「おぉ？　魔法か。毒消しの魔法で酔いが覚めるのか？」
「そうですよ。程よく酔っ払ってる人には効かないみたいですけどね」

ふぅんわしには関係ない魔法じゃなぁ、とかっかっかと笑うガドさん。

「まぁ、これぐらいで勘弁してやるか。で、今日は竜王に会いに行くのか？」
「いえそれは今度の機会で。今日はガドさんに新しい素材を紹介しようかなと思いまして」
「新しい素材だと・・・？」
怪訝そうな表情で僕を見るガドさん。そんなガドさんの前に大きな鉱石とチタンの板を取り出した。
「ん？　これは・・・？」
「チタンって言う素材です。この鉱石に入ってるんですけど、取り出すのに手間暇かかるんですけど、鋼鉄より軽くて強い素材なんですよ」
確か不純物がめっちゃ多くてそれを取り除くに凄い手間暇が掛かるって聞いた覚えがある。
「ほぉ・・・見ても構わんか？」
「はい、どうぞどうぞ」
そう薦めると、鉱石と板を交互に持ちつぶさに鉱石を観察し、板を持ってその軽さと強さを確認している。
「おい、これは本当にめんどくさいな。この鉱石にチタンは少ししかねぇじゃねぇか」
「あ、分かります？　だけどそれに見合うだけの強さはありますよ」
やっぱりドワーフって凄いんだなぁ。こんなの見ただけでそういうの分かるんだから、うまく抽出してチタンを少しずつ生産してくれそうだ。

「で、どうです？　チタンは作れそうですか？」
「あぁ、石を集めるのに時間はかかるだろうが、集めて固めるのに何も問題はねぇな。でもこんな良い物を教えて貰ってもわしには返すもんはねぇぞ？」

いやいや。返して貰う必要は無いんですよ。チタンって結構色々な所にゴロゴロしてるから僕でも集められるんだよね。ミスリルはその点、竜王に認められないと採掘すらできないんだから、もし僕が竜王に認められなかった場合でもチタン鉱石と交換でミスリルをゲットできるように手を打つ必要があった。

「僕はチタンよりミスリルが欲しいんですよ。だけど僕が集められるのはチタン鉱石なんですよね。だから、竜王に認められなかった時の保険としてチタンを教えたんですよ」
「そういえば、”ドゥエーリン“を創るのにミスリルが居るんだったな。すまんがもう一度見せて貰っていいか？」
「ええ、かまいませんよ」

今日はこんな事もあろうかとインゴットもちゃんと持ってきている。そっとガドさんに手渡すと感動した面持ちで、インゴットを受け取る。

「この軽さでこの強さ・・・しかも粘りがあって、何にも侵されないまさに理想の金属。まさか本当にあったとはなぁ・・・」
「良かったらそれは差し上げますよ」
「ええのかっ！？」
「少量で申し訳ないんですが」
「そんな事はないぞっ、いや感謝する！」

ガドさんの喜びメーターが吹っ切れたみたいで、口調がちょっと変だ。見るからに大興奮している。そんなに珍しい金属だったのね。

「じゃが、”ドゥエーリン“で何を創る気なんじゃ？　武器はもう持っとるから防具か？」

「いえ、フレームをちょいとね」

「はぁっ？！　おまえっなんつー無茶で贅沢なもんを創ろうとしとんじゃっ？！」

「ちょっ、落ち着いて下さいよっ！？　そもそもそれが”ドゥエーリン“なんて知らずに創ったから仕方ないでしょう？！　それ加工がめっちゃ便利なんですからっ」

頭の血管から血がでそうな勢いで怒り出すガドさん。目を輝かせていっちょ噛ませろって言うかと思ったけど想定外だ。

「この意思ある鋼で、フレームをなぁ・・・まぁ確かに理想的ではあるがな。だが、なんというか武器には間違いないんだが・・・」

ぶつぶつと納得いかない様子で呟いているガドさん。まぁまぁ金属は金属なんですからちゃんと使って上げないと可哀想じゃないですか。それこそ、飾っておくなんて論外です。

「・・・そうじゃな。わしらにしか分からんこの金属の美しさを誰もが認める物に、作りかえていくのがわしらの使命じゃったな」

そういって手の中の”ドゥエーリン“をじっとみつめるガドさん。見ていると一瞬でブローチができあがっていた。え？　今なにしたの？？？

「ふふ、これは中々ええもんじゃな。これで細工物を作ってばかり

じゃと鍛冶の腕が落ちそうじゃが、イメージ通りに造れるのはまさに理想の金属だ」

楕円の土台の周囲に細かい模様がついていて中心には竜が今にも襲い掛からんと口をあけて威嚇している様子が立体的に浮かび上がっている。その前には勇者と思われる人物が対峙しているという実に細かいものだ。しかも彩色までしっかりされているので、物凄く綺麗で売れば凄い値段が付きそうだった。

「す、すごいですね！　ガドさんってそんな繊細で格好良いものが作れるんですね！」

「どあほう。これで生きてるんじゃからこれぐらい当たり前じゃ。まぁ、普通に造るならここまでの物は簡単にはできんがな」

てか、時間が掛かればできるんだ。ドワーフって手先が器用っていうのは知ってたけどここまで凄いとは思わなかった。まさに百聞は一見にしかずってやつだね。

「ほれっ」

「おぉ？！」

気軽な声と共にガドさんが作ったブローチが僕に飛んできた。あ、あぶあぶっ？！

「やる」

「はぁっ？！　え、駄目ですってこんな凄いもの貰えませんって！」

「じゃあ”ドゥエーリン“をまた売ってくれんか？　それが代金代わりって事じゃ駄目かの？」

「ミスリルが無ければそもそも作れないですし、僕もフレームに使いたいんでそんなにたくさんは売れないですけど、良いです？」

フレームが出来上がってしまえば、あとは自由に使えるから大丈夫なんだけど六機ぐらい作る予定みたいだから、かなりミスリルが必要なんだよねぇ。だはー・・・

「おう、また売ってくれるなら文句はないぞ！　しかし、”ドゥエーリン“はドワーフ泣かせじゃなぁ・・・」

「え、なんでです？　こんな凄いものドワーフの人にしか作れませんって」

「イメージしただけで、思った通りに変わってくれるんじゃぞ？人間でもできるじゃろう？」

「ううん、ここまで凄い物をはっきりイメージできないと思いますよ。確かにある程度は”ドゥエーリン“が補正してくれるとは言っても、もともとのデザインを逸脱するほど良くはなりませんし。こんな凄いものドワーフの人にしか無理だと思いますよ」

「・・・そうか」

僕の力説が心に届いたのか、ガドさんは少し照れたように静かにうなづいてくれた。

「柄にも無く照れてんじゃないよ、気持ち悪い！」

「なっ、おまえ言うに事欠いて気持ち悪いってのはなんだ！　そこは黙って見てる所だろっ！」

「はいはい、お邪魔虫は退散するよ。コージゆっくりしていきな」

僕達が話をしている間もかいがいしく摘む物や飲み物（さすがに魔法で酔いを醒まされるのは勿体無いと思ってくれたのかちゃんと水をくれた）を持ってきてくれていたミームさん。口調はあだけど、なんか肝っ玉母ちゃんって感じがしてうちの母さんとは大違いだ。

でもこれで、ミスリルゲットの道がさらに開いたね。良かった良か

った。

これは母さんの遺伝でしょうか？

ザリッ！

「っつ！？」

ガドさんと商談が成立して、ご馳走を頂いてさぁ帰ろうとした時に頭に痛みが走った。頭の中にやすりをかけられたかのような、骨に響くような痛みだ。急になんだ？　なんか誰かが無理やり頭の中に入ろうとしている感じがする。

「おい、どうしたコージ？　頭が痛いのか？　おいっ大丈夫かっ？！」

急に頭を抑えてうずくまった僕をすごく焦った様子でガドさんが尋ねてくる。でもなんか普通の頭痛と違ってすんごく痛いから碌に返事もできない。

「あんた！　竜王様が外に！」

「あぁ？！　なんだって？！」

え、竜王？　なんでまた僕が来てる時に竜王が来るの？

“出て来い。招かれざる客よ。誰の許しを得てこの地に留まっておるか”

「あいたぁっ！？」

「なんじゃ？！　どうなっとる」

なんか凄い威圧感のある声が頭の中に響き、さっきの頭痛が余計に酷くなった。とにかく、家の外にでて竜王とやらを拝む事にしよう。いきなり取って食いやしないだろう。でもこの頭痛は竜王の思念波のせいっぽいので、魔法防壁を張ってみる。うん、痛くなくなった。

“ほぉ、臆せず出てきたか。我が治める地に何用で踏み入った人間よ”

外に出ると、羽ばたきもせず空に浮いている竜がいた。翼を威圧するかのように広げ、首をぐいっと、もたげてこちらを睥睨している。うん。睨むというのではなく睥睨という感じだ。王者の威厳たっぷり。だけど、のっけから攻撃的な奴にびびってなんかやらない。

「空飛ぶトカゲが偉そうに。いきなり頭をかき回すように思念を飛ばすとか何考えてるの？　それにこの土地に入って欲しくないならちゃんと立て札立てとけばーか」

きっぱりと竜王らしき竜に向かって言い放つ僕。えーっと自分で言っておいてなんだけどキャラ変わってね？　さっきの頭痛攻撃が効いてたって事だろうか。無礼とかもうそういう次元じゃないよね、これ。

“生意気な人間風情が。そんなに食われたいか”

「そっちこそ。古来ドラゴンスレイヤーは人間がなるって相場が決まってるんだ。僕の刀のさびになりたいのか？　生意気なトカゲめ！」

あーれー？　なんか僕の意思に反して暴言がぽんぽん飛び出してくよ？　うん、手は動く足も動く。ちょっと待て、待って欲しい竜王

さん。何か変な魔法を僕にかけてない？

“良かろう。あくまでわしをトカゲ扱いか小僧。楽に死ねると思うなよ・・・”

そう言うやいなや翼を羽ばたかせ、突風を巻き起こす。その風の中にはカマイタチが潜み僕にむかって無数の見えない刃が迫り来る。

「ちょぉおおおっとお！　なんでこうなるのさぁ！」

たったかさーと見えないカマイタチを「ギル」で丁寧にさばいていく。だけど、さばいてもさばいても一向に翼を止めようとしない竜王。ちょおぉっと黙らせる必要があるかなぁ。ガドさん達は、ちゃんと退避したみたいだし。そろそろ本気だすとしましょうか。

「・・・って、戦いに来たんじゃないんだって！　僕はミスリルが欲しいだけなんだって！」

思わず出してしまった「ギル」をまたぞろ仕舞いながら、竜王に待ったをかける。

“散々好き放題言っておきながら、そんな言い訳をするのか情けない奴め！　吐いたつばは飲み込めないが道理。ミスリルが欲しくば実力でわしを黙らせてみろ！”

頭上から見下ろして、偉そうな態度でそう言い放つ竜王。まぁここら辺を治めてるから偉いのは偉いんだろうけど、ちょこぉっとお邪魔しただけでここまでひどい対応するのはちょっと大人げないんじゃない？　よーし・・・ここは開発中の魔法を使う場面かな。空を飛べるのが自分だけだと思ったら大間違いだよ？

“魔法を使うつもりか小僧。だが、風の魔法で空は飛べぬぞ。わしが風を支配しておるのだからな。人間は人間らしく地を這いつくばるがよいわ！”

そういってはばたきをさらに強めてカマイタチを飛ばしてくる竜王。でもドワーフ達には一応配慮しているようで、カマイタチがドワーフ達の家に当たる事はなかった。

「風の魔法を使わなくても、速く飛んでやるさ！　本邦初公開！空飛ぶ炎の魔法だ！　“炎よ！　我が身が天駆ける手助けをし我が意のままに迸れっ！　ジェットファイア！”」

あ、しまった一本しか炎が出てない。

「“炎よ！　もう一本出せ！ジェットファイア！”」

右手の先から勢い良く噴出し始めた炎を見て焦った僕は、勢い良く浮き上がっていく身体のバランスを取りながら適当にもう一本出す魔法を唱える。うん、左手にも炎が出た。

「って、手じゃなくて足に出せばよかったぁあああ?!」

まさに後悔先に立たず。でもこれで、まっすぐ竜王に向かって飛んでいける！

“炎の魔法だと?!　何故風魔法を使わずに飛べるのだ?!”

「頭を使って考えたからね！　トカゲのちっちゃいおつむじゃ分かんないかなぁ?」

“ぬぅううううう！　馬鹿にしおってぇえええええ！！！”

おおお、しまったなんか素で馬鹿にしてしまった。なんだろう、この毒を吐くとすっきりする気持ち。これ快感になりそうでやばい。はばたきながらもまったく動かない竜王に向かって一直線に向かったけど、そのまま蹴り飛ばしても楽しくないので思い切り通り過ぎてやった。

「追いつけるもんなら、追いついてみな！　追いつけなかったら竜王なんて大層な名前を名乗るのは禁止ね！」

“ふざけるな！　空で風が炎に負けるものか！！！　目に物見せてやる！”

あっはっは、愉快愉快。挑発に簡単に乗ってきてくれたね。竜王って割りになんか落ち着きが足りないよね。僕が言うのもなんだけど。

「じゃあ、ついてこい！　本当の速さを見せてやる！」

ただし、ジェットは手から出る。いやこれはビジュアル的にちょっと駄目でしょ。足に移動させようか。右手のジェットを一旦中止し、右足の裏から出るように念じながらもう一度魔法を唱える。

「“炎よ！　我が身が天駆ける手助けをし我が意のままに迸れっ！　ジェットファイア！”」

って、うぎゃぁあああ！？　バランスが！　バランスが？！　手と足からジェットを出してると、あらぬ方向へぐりぐりキリモミしながら飛んでしまう。とりあえず左手のジェットを止めろ、止める

んだ！　よし、次は左足にジェットを！

「“炎よ！　我が身が天駆ける手助けをし我が意のままに迸れっ！　ジェットファイア！”」

あっぶない危ない。もう少しで地面に頭から突っ込む所だったよ。でもこれで足からジェットを出しているので手がフリーになって、すっきりできた。

“くぉおぉ！　待たんかぁあああああ！”

僕が手から足へジェットを移動してる間も僕に追いつく事ができていない竜王。まだまだトップスピードを出してないのに、追いつけないとかちょっと鈍ってるんじゃないの？

「ねぇ、それで本気なの？　本当に？　風を司る竜王ならもっと本気だしてかないと駄目なんじゃない？」

ごおごおと風の音がうるさいので、大きな声で竜王に聞こえるように伝える。まだマッハを出してないのに付いてこれないとかちょっとがっかりなんですけど。

“言わせておけば・・・ぬおおぉおおおおおお！”

竜王が僕の発破に反応して、気合をこめだすと竜王の身体が光り出しぐんぐんスピードが上がっていく。おおっ！　なんかそれっぽくなってきたぁ！

「そうそう！　そういうのあるんじゃない！　さっきのが本気かと思ってびっくりしたよぉ」

“抜かせ、この姿になったからには貴様をあっという間に追い抜いてやるぞ”

光の粒子を撒き散らしながら、空を突き進んでくる竜王。さすがに気合をいれているだけあって、ぐいぐいと僕に接近してくる。僕もこれ以上のスピードを出すなら前面に障壁を出さないと辛くなってきた。障壁展開！　よしこれでもっと速く行ける！

「・・・あんた、あのぼっちゃんは何者なんだい？」

「俺が知るか」

ぐるぐると家の真上で追いかけっこをしていたコージと竜王が、まっすぐ飛び去っていく姿をぼんやりと眺めながら唖然とする二人だった。

コミュニケーションは大事です

鼻唄まじりに大空を飛翔する。フレームで空を飛ぶときと違って、風をそのまま体感できるのと鳥になったかのような、開放感があった。生身で空を飛ぶというのは、なんというか五感を刺激してくる。青い空に浮かぶ白い雲、ときおり雲に突っ込んでみたりして空にいるという事を実感する。風の香りも高さと場所によって、少しずつ異なっている。時々急に暖かくなったり寒くなったりするのは気流のせいなのかな？

こうやって生身で空を飛んでいると、なんだかんだでフレームで空を飛ぶのはコックピットに守られているんだなぁって、しみじみ思う。

“ぐぬぬぬぬぬ・・・・”

後ろから追いかけてくる奴がこんな竜王じゃなきゃ、もっと楽しかっただろうなぁ。なんというか竜王は風竜という事で、自分の空を飛ぶ能力に絶対の自信を持っていたみたいだったんだけど飛ぶ速度はそんなでもなかった。だって、風魔法で空を飛ぶというのが一般的だったみたいだから負けそうになったら、風を司る竜王は相手の風魔法を封じ込めれば良いんだからそりゃぁ負ける訳ないよね。

「おーい、そろそろ慣れてきたからジェットを一本にしてあげようか？　本気だしてそれじゃあいつまでも勝負にならないよー」

僕の揶揄する言葉にも返事をしない竜王。そのかわりと言ってはなんだけどブレスをかましてきた。遅い遅い。腕を頭に組んだまま、ブレスを紙一重でかわしてみせる。

“くっ・・・”

いまのブレスが最後っ屁だったのか、悔しそうにどんどん失速していく竜王。なにか様子がおかしい。力を使いすぎちゃったんだろうか？　このまま竜王が地面に叩きつけられても寝覚めが悪いので、僕も急降下して竜王を追いかける。先に落下地点へ着陸し、竜王が降りて来るのを待つ。

「“風よ！　全てを舞い上げる風よ！　吹き荒れろ！　トーネード！”」

そして、もう少しで地面に着くまえに風魔法で落下の衝撃を軽減する。すこし呪文を変えてるからうまく軽減できるだろう。でも竜王は結構大きいので範囲がすこし足りなかったようで、尻尾だけダランと先に地面についてしまった。でも、本体は無事だったから良しとして貰おう。

「僕のほうが速く飛べるって事で良いよね？」

しかも今回、まだ本気を出していないからね。ジェットの本数はあと二本は増やせるし意外と速いスピードで空を駆け抜ける事ができそうだ。

“・・・認めよう、お主は速い。だが、これだけではミスリルを渡す事はできん”

「えぇっ？！　なんで？　スピード勝負に勝てばミスリル掘っても良いんじゃなかったの？」

“それは鈍重なドワーフ達への試練であって、人間にはいくつか試練を受けて貰わねばならん”

こいつ僕に勝負で負けたからそんな事言うんじゃないだろうね・・・？

“これに関してはわしが掟じゃ。苦手な事を克服して覚悟を見せて貰う為の試練でな。人間は特にこれといって苦手な物がない分、試練も多くしてるのじゃ”

僕の疑いのまなざしを受けて、慌てて弁解するかのようにそう付け足す竜王。本当かなぁ・・・？

「でも、それにしたっていきなりあんな風に威圧的につっかかってくる事は無いんじゃないの？　普通あんな事されたらびっくりして逃げちゃうよ？」

“あれも試練の一環じゃ。わしの治める土地でわしの姿を見て驚いているようでは、ミスリルを採掘するなぞできるわけ無いじゃろうが。まぁ、手加減なしでやったのは許せ”

そんな事するからブラックな僕が出てきたんじゃないか。暴言吐くのが快感（くせ）になっちゃったらどうしてくれるんだ、僕のキャラが崩壊しちゃうよっ！

「で、ほかの試練は？」

“お主を見せて貰う為にドワーフ達と仲良くなって貰う。他にもこの地に住まう生き物とも打ち解けて見せろ。それができれば認めてやろう”

「期限はいつまで？」

“できるまでじゃ。期限が無いから慌てなくて良かろう？　まぁ諦めても別に構わんぞ。その場合は二度と試練を受ける事はできぬがな”

そうやって意地の悪そうな声音で僕を脅す。認めた者しか採掘できないミスリルだけに条件を飲むしか無いんだけど、本当に認めてくれるのかなぁ。なんか僕の事嫌ってるみたいに見えるんだよねぇ。

“ではさらばじゃ。せいぜい頑張って仲良くなるんじゃな”

竜王はそう言い残してふわりと浮き上がって、翼をはばたかせもせず飛んでいってしまった。横着しないで翼を羽ばたかせようよ。何の為の翼なんだよ。

だけど、仲良くしろって言われても友達を作るのが苦手な僕にはとっても嫌な試練だ。ひょっとして、最初の頭痛のときに竜王は僕の過去を覗いたのかな？　苦手な事を克服して貰う為とか言ってたし。うー・・・ミスリルを採掘できるようになるまで物凄く時間がかかりそうだよ。とほほ。

とりあえず転移魔法でベノア村へ帰り、ガドさんの家に向かう。なんだか、騒々しいけど何かあったのかな？

「お、コージ悪いがこれから仕事だ。竜王様がだいぶ恵みを降らせてくれたからな、かきいれ時なんじゃ！」

ヘルメットをかぶってつるはしと道具を入れた手押し車を押してい

るガドさんがほくほくした顔で僕にそう叫ぶ。

「そうなんだ。頑張ってたくさん掘ってきてね！　僕たくさん買うからね！」

「任せろ！　って試練はどうした？　認めて貰ったんじゃないのか？」

「えっとまだ試練があったんだ。まぁそれはともかく行ってきたら？」

「おう、じゃあ行ってくる！　リックにも宜しくな！」

「うん、分かった！　またね！」

えっちらおっちらといった感じで山へ向かうガドさんを見送って、僕は町に戻ることにした。この様子だとドワーフさん達は忙しくなりそうだしね。

「そういえば光ちゃん、誕生日はお祝いしないの？」

事の発端は母さんのその一言だった。そういえばこっちに着てからだいぶ経つから、僕も一つ歳を取っていてもおかしくないんだけど、こっちって一ヶ月が二十日で十八も月があるもんだから、よく分からないんだよね。

「ちなみに母さんは永遠の十七歳だから」

だからなんだと言うんだ。そんななりでも母さんがすでに〇十を超えているのは事実だ！　あ、あれっ？　〇十。おかしい母さんの歳

を考えようとすると何故か言えない。

「十七歳っ☆」

息子と変わらない年とかどうなのさ。でも女性の年齢はこれ以上つっこまないでおこう。母さんが相手だと何が起こるか分かんないし。そう思い母さんから目を離すと、セリナとミミが何か言いたそうな顔をしてこちらを見上げている。そうだよね、二人の誕生日を聞いてないよね僕。やべぇ。

「えっと僕の誕生日は置いといて、二人の誕生日はいつ？」

僕がそう聞くと二人はもじもじしながら答えてくれる。ちなみに四年に一度、隠し月というのがあるらしくその月はお祭りをして過ごすらしい。

「私は四月七日です。もう少しです」

「ミミは十一月六日だよぉ～」

「「え？」」

ミミの言葉に驚く僕と母さん。僕と誕生日が一緒だ、あ、いやこっちの世界の日付だから一緒じゃないか。ていうかミミはいつの間にか十九歳になってたのかっ?!　なんだかセリナは驚いてないけど知ってたのかな？　それにミミも別に拗ねてるように見えないし。誕生日を祝って貰えないって怒って良い所だよミミ。

「先ほどお義母様が言ってましたけど、コージの所では誕生日にお祝いするんですか？」

「うん、いつもより豪華な食事とケーキを食べてプレゼントも貰える日だよ」

「「ええっ？！」」

あ、今度はセリナとミミが驚いた。こっちじゃ誕生日を祝うという事はしないのかな？　でもおめでとうぐらいは言うよね？　いくらなんでも。

「こちらでは誕生日には親に感謝をする日なんですよ」

「あ！　前にミミちゃんが母さんとデートしてくれたのはそれでなの？」

「うん、えへへ」

母さんは思い当たる事があったようだ。いつの間にそんな事してたんだ。でも、親に感謝するっていうのは、それはそれで良い風習だよね。それなら、親に感謝しつつプレゼントも貰えて豪華な食事をしてケーキも食べる日って事にしようか。ていうか、母さんが感極まってミミをがっちりホールドしている。どっちもスタイルが良いから目のやり場に凄く困るよ？！

「で、コージさんの誕生日は？」

そう言って僕の顔を手で柔らかく挟み込んで余所見ができないようにして、セリナが笑顔で尋ねてくる。セリナお願いだから、さりげなく僕の顔を自分の胸を見るように角度を調整しないで？

「えっと、それが計算がややこしいというか・・・日付でいえば僕も十一月六日なんだけどこっちの日付に直すとすると・・・えぇっと・・・」

「え、ミミと同じ日なんですか？」

落ち着いて計算しよう。僕の誕生日だと何日目になるのかな？　ん

～・・・あ、切がいいなぁ三百十日目だ。という事はこっちの日付でいうと十五月十日になるのか。あ、僕も過ぎてるし。

「僕は十五月十日だね。僕も過ぎてた。あははのは」

「じゃあケーキは？」

僕の誕生日が過ぎてると知って、ケーキが食べられないって嘆きだす母さん。うん、それは間違ってるからね。子供の誕生日を祝ってあげられないって嘆く所じゃないかな？

「ミミも誕生日が過ぎてたし、遅ればせながら僕の分もまとめて作るよ」

でも、いつの間にかセリナと同い年になってたんだね。あ、どうせだから父ちゃんも帰ってきて貰ってパーティしよう。うん。そう思ってたら母さんが父ちゃんに電話してる。今頃気づいたんだけど、母さんって凄い魔力だ。下手するとセリナより多いんじゃない？

「勇司さんも帰ってきて貰うわね。今日はパーティよっ！」

料理は頑張るから飾りつけとかは任せたよ母さん。こっちの世界で初めてする誕生パーティなんだから張り切ってやっちゃってください。

「ケーキは三種類ね！」

そんなの無理って言いかけたけど、セリナとミミの目が半端なく輝いてしまったのでそんな事は言えなくなってしまった。仕方ない二号とフレーマーにも手伝って貰うとするか。

異物

「父ちゃん、久しぶりすぎる。忘れ去られてた？」

家に帰ってくるなり、父ちゃんは寂しそうに愚痴ってくる。別に忘れちゃ居ないけど王様だっていうし、そんなに頻繁に呼び出したりしたら国が傾くんじゃないのかな？

「物分りが良すぎるよ、光ちゃん！」

「はいはい、とりあえず入ってよ。いつまでも玄関で愚痴ってても仕方ないでしょ」

それに向こうの世界で今まで父ちゃんが居なかった生活に慣れてたせいもあって、居ると嬉しいんだけど距離感がうまく掴めないっていうのもある。再会した時はなんというか一時的にテンションが上がってたのと、ファウンデルス卿の件があったのでそういうのは特に意識しなかったんだけどなぁ。一応週末には父ちゃんも帰ってこれる事があるので、その距離感を埋めるためにぽつぽつ話をするようにはしてるけども。

「え！？　光ちゃんが増えてるっ？！　偽者？！」

中に入ると二号とフレーマーが忙しそうに料理の準備をしているのを見て父ちゃんが驚いている。あれっ？　言ってなかったっけ。

「あ、ごめん。僕の分身。偽者じゃないから安心して」

「分身か。一人お城に来て貰っていいかな？　父ちゃんと一緒に働こうよ」

目を輝かせて父ちゃんが僕にお願いしてくる。いや父ちゃんが危険だからお城に居ない方がいいって言ってたのに、もう寂しくなった訳？

「お義父様、わがままを言っては駄目ですよ。私たちだって我慢してるんですから！」

「そうだよぉ！　ミミだって我慢してるんだから駄目っ！」

セリナとミミが口々に父ちゃんを非難する。というか我慢って何よ我慢って。

「えー・・・」

そんな二人の反応に凄く残念そうに方を落とす父ちゃん。むしろ僕がえーって言いたい。それにこないだ気づいたんだけど王の印は根っこである僕にしかついていない。ほかの分身には何か痣みたいな物はあるんだけど、印はついてなかったんだよね。だから、お城に分身を行かせても貴族の力を防ぐ事はできないんだよね。

「ところで父さん。貴族は今のところどうなの？　長子を王都に取られて、何も言って来てないの？」

「まだなんも言ってこないな。良く分からんがあいつらにはあいつらなりのルールがあるみたいでな。基本的に自己中な奴等だからなぁ。当主に王都に出て来いって言ってたら相当反発してただろうけどな」

自分さえ良ければそれで良いって事？　武者修行に送り出してる心算でいる訳では無いのね。なんというか政務に近い所に置いておけば、何かと国の実権を握りやすくなるとかそういうドロドロした思惑は無いのかな。

「自分の領地を良くしようとは思うみたいだが、国をどうこうしようとは考えてないみたいだぞ。あいつらは保守的なんだろうながっちがちに」
「どうゆう事？」
「ん？　先祖代々の土地を寸分たがわず守りぬけばそれで良しと考えてるって事だ。そういう意味ではファウンデルス卿は貴族の中では変わり者だな」

あの人は自分で国を大きくしようと考えてたもんね。貴族ってあんまりそういう欲はないのか。貴族ってもっと欲まみれでギラギラしてるのかなって思ってた。あの次男坊を見てると特にそういう思いが強い。

「はいはい。そういう話はそこらへんでストップよ、勇司さんも光司も」
「ぶっ！？」

母さん今日はネコミミか。ウサミミとかセーラー服とかナースとかをすでに見ている僕には動揺がない。だけど今日の衣装はチューブトップで表面がふわふわした感じの何かを着ている。そして尻尾と手足には肉球グローブとスリッパという気合の入れ方だ。父ちゃんが帰ってくるから気合いを入れて黒猫さんなのですね。

「るりっ、そ、それはどうしたんだ？！」

なぜかひどく動揺している父ちゃん。似合い過ぎててびっくりしてるのかな？

「ふふぅん。これはね、光ちゃん。勇司さんの・・・」

「おっとぉ、ここから先は言っちゃ駄目だぜ、子猫ちゃん」

うん、分かった。母さんがワルノリして着てると思ってた衣装は父ちゃんの趣味だったわけね。冷ややかな視線をくれてやる。

「さぁさぁ、母さんは着替えようかな。手伝って上げるから部屋にいこう部屋に」

「うふっ、うふふふふふ。私たちは気にせず先に始めててね～」

「・・・・・・」

いそいそと部屋に戻っていく両親。えーっと突っ込むべきか突っ込まざるべきか。仲の良い夫婦っていうのは良く分かるんだけど、あんまり仲が良すぎるのは思春期の僕としては反応に困るところがあるよね！　セリナは何かを想像して鼻血だしてるし、ミミはもじもじしながら熱い視線を送ってくるし、ヒロコは意味ありげににやーって笑いかけてくる。白夜だけは、いつもどおりしゃんと座って何があったのか分かってない様子だ。

「えーっと、まぁそういう事だからあの二人はほっとこう。うん、今日は二人は居なかったって事で、よろしく」

最初からどっか旅行に行ってるという設定にしておこう。それじゃあ、一号も金策も呼んでパーティを始めちゃおう！

古代遺跡の一角。エレベーターから一人の人間が辺りを警戒するように出てきた。いや、良く見れば頭部には人間には無いものが生え

ている。

「・・・ここは、どこだ？　遺跡という所に来たのか・・・？」

辺りを警戒しながら、ひとり言をつぶやく。額から前方に向けて角が生え、耳の生え際辺りから後方に向けてプレートのような形の角が生えている。髪の色は青く瞳の色も青い。それ以外は普通の人間と変わりなく、日に焼けた肌をしているのが目立つぐらいだ。なんらかの事情で遺跡に来てしまったようで、いまひとつ動きがぎこちない。

「しかしこれは好都合かもしれんな。ここであれば身を潜めるのにうってつけかもしれん」

深い森の中を歩いていたらなすすべもなく急に引き込まれ、気づけばこの場所にいた。追っ手を気にしながら移動していたせいで、こんな事になったがこれで確実に追っ手をまけるだろう。追っ手が同じようにここにくる可能性も無いとは言えないので早急に移動する必要があるか。

広々とした通路にほのかに明るい空間、壁や天井は滑らかな板が綺麗に並べられていて、隙間にはナイフ一つ入らない。物音ひとつせず静まり返っている不気味な空間だが、噂に聞く遺跡の特徴と一致する。遺跡は人間が管理している町の中にある為、我々魔族が簡単に入る事ができない場所なのだが、まさか追っ手から逃げる途中でこのような形で入る事ができるとは、運が良い。

仰々しい扉を押し開けると、中には人形が一体佇んでいる。通路の板とは違いこの部屋には一面に装飾がしてあり、なかなかに豪勢な感じがする。そしてこの部屋を抜けない限り遺跡の奥へと進めない

ので面倒くさいが、人形を倒す必要がある。

バタンッ

部屋の中に静かに入り、わざと音を立てて扉を閉める。すると、それまで微動だにしなかった人形がいつの間にか目の前に立っている。瞬間移動か。逃げ足は早そうな奴だな。目の前に立った人形はいきなり軽快な動きでこちらを打ちのめさんと攻撃してくるが、いかんせん俺から見れば隙だらけだ。

「？」

反撃の蹴りは空しく空を切る。人形の体を足がすり抜けてしまい、一瞬驚く。人形のほうも驚いたようで、足が体をすり抜けてからワンテンポ遅れて距離を取っている。あぁ誤魔化す必要は無いぞ。その姿は幻なんだろ？　いまさら取り繕っても無駄だ。どこかにこの人形の幻をつくる魔具があるはずなのだが、この部屋のどこにも魔力を感じる事はできない。・・・面倒くさいな。面倒くさいが仕方ないか。そう思い気を取り直して、瞬時に魔力を込め一気に解放する。

バシュッ！

比較的魔力を込めて解放したおかげで、部屋全体がぼろぼろに破壊される。どこかに仕掛けがあったんだろうが、探す手間が面倒くさいのでこういう力技になった。ふむ、人形の姿が消えた所を見るとうまくいったようだな。

ここは魔力が少ない場所だ。たしか魔物も徘徊しているはずなので、そいつらから魔力を補充するとしよう。

スーパー湯煙タイム

湯煙です。なんといいますか現代人としてお風呂は毎日欠かさず入らないと気持ち悪いんですよね。でもこっちの風習では特に湯を貯めてつかるという習慣はなく、普通の人は水で体を拭くぐらいのようです。ロバスだと体を綺麗にする魔道具が流行っているみたいだけど、それは簡易シャワーみたいな道具でやっぱり湯船につかるという事はなかった。やっぱり綺麗な水というのは貴重品だから、無駄にできないって事なんだろうね。魔法を使えば綺麗な水をいくらでも出せるとはいえ、お水が貴重な事には変わりがない。

「コージ、どこを見てるんです？　ぼーっとしてたら危ないですよ？」

「ひょっとしてのぼせちゃったのぉ？　大丈夫？」

そういってこちらに近づいてくるミミ。待って！　せっかく現実逃避してたのに何かいろいろと駄目になるから待って！

「大丈夫、大丈夫だからこっち来ちゃ駄目だよ？　本当に大丈夫だよ？」

「でも、顔真っ赤だよ？」

「それはそのっ当たり前じゃないっ！」

えぇ。まさか女の子とお風呂に入るとか想定外だよ。直視したいけど、直視できないこの辛さ。しかも、なるべく考えないようにしているのに、こうやって声を掛けられるとついそっちを見てしまいそうになって、ちらっと見えた白い肌から何か色々と想像しちゃって鼻血もそうだけど、もう一箇所にも血が集まってきそうで非常にやばい。

「どうしてぇ？　ミミに教えて？　ね？」
「私も聞きたいですコージィ」

妙に色艶のある声で尋ねて来る二人。僕が目をつぶったせいかなんだか余計に色っぽい声に聞こえてしまって無駄に興奮してしまう。絶対この二人分かってて聞いてるよねっ！？

「そ、それはほら女の子と一緒にお風呂なんて恥ずかしいというか・・・」
「川で一緒に泳ぐようなものじゃないですか。何も恥ずかしくないですよ？」

そういってふにょっと背中に何かが当たる感触。

「ほわぁあああああっ！？」
「きゃっ」
「だぁめ」

とっさに退避したけど、すぐさまミミに捕まってしまう。そう、ミミは文字通りがっちり僕をホールドしてきました。そして僕の肩に頭を乗せてきてすりすりしてきます。

「もうコージは恥ずかしがり屋さんですね。ミミが後ろなら私は前からにしますね」
「！？」

そういってするりと横から前に密着してくるセリナ。そうするとミミが身をさらに乗り出してくる。動かないで！？　血が！　血が集中するっ！？

「セリナずるい。次変わってよ」
「次ですよ。ほら今はこのままで良いでしょ？　せっかく捕まえた事ですし」
「捕まえたのはミミなのに」
捕まえなくて良かったですよ、はい。だけど、なんでこうなった！
パーティしてたはずなのに！？　いや、パーティがすべての元凶だったか・・・ミミに誕生日プレゼントを渡そうと思ってたんだけど、ミミがそんなの要らないから一つだけお願い聞いてと言うんで、できる事ならと答えてしまったのが全ての原因。
「で、コージはいつまで恥ずかしがってるんですか？　せっかくですから楽しみましょうよ？　こんな機会は滅多にないですよ？」
「そうそう。こんな美少女と一緒にお風呂に入れる機会なんて絶対ないよ？」
ええ確かに二人ともとんでもない美少女ですしお風呂に入るという事で髪は下ろしていて雰囲気もいつもと違うから余計にどきどきするといいますか、下ろした髪だけでもどきどきするのにピンク系の白い肌が惜しげもなくさらされている様は、正直ガン見したい気持ちでいっぱいです。時よ止まれ！　だけど、じっくり見てしまうと二人に嫌われてしまうかもしれないし、逆に襲われる羽目になるかもしれない。どっちに転んでも大変なめにあうのは分かりきっているというか。
「ねぇねぇ。コージってフレーム作る為にお金を貯めてるんだよね？」
「え、うん。白夜がいるからフレームに乗れるんだけどやっぱり自分で考えたフレームに乗りたい気持ちはあるからね」

ちらりとミミに視線を動かすと正面のセリナの白い肩と綺麗な首すじがちらりと見えてしまう。鎖骨ってなんかどきどきするな・・・

「でも、フレームってそんな簡単に作れるものなんですか？」

「一から全部自分で作るとなると、面倒くさいだろうけど僕は売ってる部品を組み合わせて自分のアイデアをさらに組み込む形だからそう難しくないよ。でっかいプラモデルみたいなもんかな」

構造を一から考え直して新しい形を作るならともかく既製品を組み合わせるなら、素材を変えたりする事でもだいぶ違うものができると思う。

「はい、こーたーい」

「はいはーい」

僕が自分の考えに少し没頭してる瞬間を狙ってか、ミミとセリナが位置を入れ替える。待って!?　ミミ、今確実に見えるようにゆっくり動いたよね？　セリナも体から離れずにむしろ押し付けるように移動したよね?!

「ぶふっ！」

あわててこみ上げて来る鼻血を必死に耐える。耐えろ。ここで耐えないとこの素晴らしい時間が終わってしまう！　時間は止まらないんだ！　・・・待てよ。ここでアクセルをこっそり唱えればどうだろうか。気づかれずにじっくりと見れるんじゃないか？

「ありゃ」

「大丈夫ですかコージ？」

僕が急に鼻を押さえたので、なんかしてやったりという表情で僕を伺う二人。セリナなんて心配してくれてるかと思えば、凄いニコニコしてる。良し。今なら僕を心配して二人とも僕の前にいる。視線を動かせば二人ともじっくり見れる位置に来た。そっちがそういうつもりなら、僕だって遠慮しないぞ！

“光よ！我が思考にその光を分け与えたまえ！　クロックアップ！”

鼻を押さえてる手で口元も押さえ、呪文が聞かれないようにそっと呟く。よぉおおおし！　ガン見タイムだっ！　まずは元祖いけない身体のセリナからだ！　洗い髪がしっとりとしていてやっぱりいつもより色っぽい。しかも笑顔でこっちを見てるから余計にどきどきする。やばい、顔だけでもこれ結構くる。さらにここから下を見て僕は生き残れるのか？

いや男には引けない戦いがある。今、見ないでいつ見るって言うんだ！　まさに据え膳とも言える状況なのにアクセルを使ってまでばれないようにしてる僕が言うのもなんだけどここまでおいしい状況で躊躇ってる場合じゃない！

ゆっくりと視線を下へと移動していく。細くて華奢な首としみ一つない肌。やわらかそうな肩とその白さに興奮してしまう。そしてさらにゆっくりと視線を移動していくとセリナの大きな胸元と谷間が見えてくる。押し当ててくるから分かってたんだけど、やっぱりセリナって大きい。それも予想外に大きい。いつもは服の下に隠されているので分かりにくいんだけど今は隠すものが何一つない。さぁいよいよだ！　さらにじっくり見ようと視線を移していく。そして綺麗な色の二つの何かが見えてきそうになった所で僕の意識は途絶えてしまいつつある。

うん、じわじわと鼻血が昇ってきてたのは分かってたんだ・・・あと少しだったのに・・・

バシャン！

「え、コージ？！　急にどうしたんです？コージ？　コージ！」

「コージ！？　セリナお水で冷やそう！」

ぼんやりとした意識の中であられもない格好で慌てる二人の姿が見えたような気がしたけどきっと気のせいだろう。こうしてしまらない形でパーティは終わりました。

「コージ、最近ハルト達と喧嘩でもしたのか？」

師匠にそう問われたのは、パーティの次の日の朝錬が終わってからで、ハルト達と喧嘩して何日か経ってからだった。えっと、喧嘩してすぐにそう聞かれるかと思ってたけど、聞かれなかったので安心してたら今頃聞いてくるとか時間差攻撃すぎるよ師匠。

「えっと、まぁそんな感じです」

「やはりそうか。だが何が原因なんだ？」

「それはそのぉ・・・遺跡に入る時の心構えについて見解の相違があったといいますか・・・」

セシリアの戦い方の悪い点を指摘したら喧嘩になっちゃいましたっ

ていうか。気になったからつい注意しちゃったら喧嘩になってたというか。

「歯切れの悪いやつだな。はっきり言えばいい、戦闘で駄目な所を指摘しただけなんだろ。問題をあいまいにしていては、謝罪するにしても的外れな事になるぞ」

なんというか、師匠は僕とハルト達を仲直りさせたいと考えてるみたいだ。

「でも、ハルトに今はそっとしといてくれと言われてるんですよね」
「それでコージがいつまで経ってもぐずぐずとしていたのか。正直、見ててギクシャクしすぎだぞ。特にセシリアとお前が」

だって喧嘩したのはセシリアとだし、席は隣だしギクシャクしない方がおかしいよね？

「それに、僕から謝るのは駄目だってエリーもレイもハルトも言うんです。向こうから謝ってくるのをどっしり構えて待っておけって・・・」
「ふーむ・・・何か考えがあるんだろうが、それで良いのかコージは」
「え、良いも何も僕もほとほと困ってるんですよ。女の子と喧嘩なんかした事ないからどうやって仲直りしたらいいかさっぱり見当もつかないんです」

僕がそう愚痴るとぴくっと眉を上げ、じっと僕をみる師匠。

「そうか、では今日の放課後第七演習場に来い。いいな」
「え、なんです薮から棒に」

「わかったか？」
「え、はい」
久しぶりに威圧感たっぷりにそう断言されて僕はうなづかざるを得なかった。ふがいない僕にまた鬼の猛特訓が待ち受けてるんだろうか・・・それか新しい技の練習台とか？　なんにせよ放課後は気を引き締めておかないと駄目だろうね。

ミミのターン！

昨夜の事件はさっそくアップしといた。その内他の僕も気づいて記憶を共有するだろう。共有して鼻血を出すと良い。僕からのサービスだ。今もちらっと昨日の事を思い出すと鼻に込み上げてくるものがある。とくにミミはやばい。駄目だ思い出しちゃ駄目だ。

「朝から真っ赤な顔してどしたの？　ゆうべはオタノシミデシタ？」
「おはようございます先輩。朝から何を言ってるんですか」

今日に限っては当たってるんだけどね。この先輩にそんなそぶりを見せたら同じ事をするとか言い出しかねないのが怖い。

「え、楽しくなかったのコージ？」
「ミミ！」
「なになになに？　やっぱりお楽しみがあったの、ミミちゃん？」

そんな先輩の生態をよく理解していないのかミミが口を滑らす。とっさにセリナが嗜めたけど後の祭りだよね。先輩の顔が生き生きとして鼻息も荒くなってるよ。さぁどうやって誤魔化そう・・・

「コージと仲良くない人には教えてあげない」

騒がしくミミから聞き出そうとしているエイジス先輩に向かってミミがそう言い放つ。あれ？　ミミって意外とエイジス先輩を嫌ってる？

「えぇ、ミミちゃんひどぉい！？　こんなにコージ君と仲が良いのに、なんでそんな事言うの？」

「ちょっ、離して下さいよっ？！」

仲が良いアピールのつもりか、腕を絡めて寄りかかってくる先輩を引き離そうと頑張る僕。だけど力負けしてて引き剥がせない・・・とほほ。

「ううん、仲良くしようとしてない。あなたは自分を納得させる理由を探してるだけにしか見えない。そんなあなたにコージはなびかない」

そういって僕から先輩を引き剥がして距離をとって、あかんべをするミミ。なんだろ、ミミってエイジス先輩が嫌いだったのかな？今まで特に何も言わなかったのは実は嫌いで無視してただけだった？

「うーん、嫌われちゃったかな？　コージ君ごめんね、お姉さん先に行ってるね！　またね！」

「あ、はい。それではまた」

子供みたいに敵愾心をむき出しにするミミを見て、苦笑しつつ去っていく先輩。さすがに居た堪れなくなったみたいだね。でもミミがあそこまではっきり物を言うとは思わなかったなぁ。

「ミミは先輩が嫌いなの？」

「うん。あの人がコージの事を好きなら別に嫌いじゃないけど、あの人はそうじゃないから嫌い。きっとコージがあの人を好きになったら離れていくよ」

「なんというか厄介な人なんだね。でも、なんでそんな事がわかるの？」

時々ミミは普通じゃ思いつかない事を言うけど、僕が見る限り先輩

はそんな風に悪意を持って接してたようには見えないんだけどなぁ。セリナも特に何も言って来なかったし。

「だって、あの人コージに自分の事を話した事ないもん。それにコージの事も特に知ろうともしないし。おかしいって思ってからずっと見てたから間違いないよ」

「そういえば先輩の事ってろくに知らないなぁ」

というかミミは本当によく見てるのね。急にこんな事を言われてもピンとこないんだけどミミがここまで言うので、少し気をつける事にしよう。

「でもミミの話が本当なら女の人って怖いよねぇ。いつもあんな笑顔を見せてくれてるのに、腹の中では悪巧みしてたとか。もし知らずに好きになってたら女性不信になるよね」

「ミミとセリナは大丈夫だから安心して！」

そういって笑顔で飛びついてくるミミ。反対側にはセリナがさも当然という顔で寄り添ってきた。うん、この二人がそんな事をしないっていうのは信じられる。というか信じたい。もしこの二人に嫌われたら僕はどうなるんだろ？

「で、ボクの事を空気扱いにしていい度胸だ！」

どーんとミミを突き飛ばすヒロコ。うん、ずっと黙ってるからそういう話は苦手なのかなって思ってたんだけど、つっこみを入れるタイミングを待ってたのね。

「なによ！　ヒロコはおいしい物食べてたら幸せでしょ？」

「ふふーん、マスターが作ってくれる物限定でぇーす。それにボク

は君たちが知らないマスターの事も色々知ってるもんね。なのでアドバンテージはボクにある！」
「そんなの関係ないもん！」

ていうか、最近おとなしかったヒロコがまた活性化してきた！　君は暖かくなると活動的になるとかそういう変温動物的な所があるの？　というかミミと普通にやりあえるとかおかしいよね、ヒロコ。

「さぁさ、うるさい二人は放っておいて二人きりで静かに行きましょ、コージ」

ごくさりげなく。それでいて有無を言わせない笑顔で僕を誘導するセリナ。ミミとヒロコが争っている間に漁夫の利を狙っているね。でも、あのままほっといたらヒートアップして危ないと思うんだけども・・・あと白夜が・・・

「ん？　身体の調子はすこぶる良いぞ主よ。身体をすみずみまで見てもらったからの」
「お願いだからその姿のままでそういう事を言うの止めて下さい白夜さん・・・」

身体の調子がすごく良いせいか、白夜はすごい勢いであちこち走り回っている。走ってる間も「おお！」とか「はっはっは！」とか凄く嬉しそうである。なんか今日に限って言えば凄いカオスな空間と化している。

「あ！　セリナがまた抜け駆けしてる！　ずるい！」
「本当だ！　セリナはいつもボク達を争わせて抜け駆けしてるよね！　どろぼう猫めっ！」

僕とセリナの状態に気づいたらしいヒロコ達がぎゃーぎゃー騒ぎ出した。うん、先輩が居なくなった途端にはっちゃけ出したよねこの娘達。やっぱり先輩がいるとどこか遠慮しちゃうって事なのかな？

普段静かなのは嬉しいんだけど、みんなに我慢させてるっていうのはあんまり良くないよねぇ。

「はいはい、ストーップ！　今日の順番はヒロコと白夜でしょ。セリナとミミはちゃんと後ろから付いてきてよ」

「ちぇ」

「・・・はぁい」

なんか本気で戦いだしそうな雰囲気になってきたので、慌てて止めに入る。みんながみんな一騎当千の能力を持ってるだけに、騒ぎ出すと段々ヒートアップして周りの被害が凄い事になっちゃうんだよね。

「ふふーん」

ヒロコは満足げに僕の腕を掴む。腕を組むとかじゃなく掴む。で、時々かじる。なんだろうヒロコの様子がいつも通りと言えばいつも通りな筈なんだけど、何かひっかかる。こんな姿のヒロコが久しぶりで前はもっと違ったはずなんだけど・・・なぜか思い出せない。

「マスターどしたの？」

「え、あのね・・・あれっ？　何考えてたんだっけ？」

ヒロコに話しかけられて、ふと夢から覚めたみたいに、直前に考えていた事が霧散してしまう。んんん？　大事な事を考えてた気がするんだけどなぁ。

「いやボクにはわかんないよ？？？」
「なにかヒロコに関係する事だったと思うんだけど、なんだっけ？」
「なになに？　またおいしい物作ってくれるの？」
えーっと、そんな感じじゃなくてもっと違う事の気がするんだけど？？？

「ま、いっか」
「ぱっと思い出せないなら、たいした事じゃないんだよきっと。それよりミソとかショーユって何？　いま作ってるんだよね？」
「調味料だよ。あれがあると料理の幅が広がるんだよね」
作業メカが暇を持て余してたので、ずっと作らせているんだけどようやくできそうなのである。アナライズ魔法を覚えて麹菌を必死で探して、色々試した末にようやくここまでこぎつけたので、感動もひとしおだ。おいしい物を食べたいという執念は凄いよね。さすがは三大欲求の一つだ。

「おいしい物食べさせてくれるならなんだっていいよ！」
「僕の苦労なんて知ったこっちゃないって顔して・・・大変だったんだよ？」
「おいしかったら褒めたげる。なんならセリナ達みたいに一緒にお風呂にはいったげよっか？」

ニマニマと余計な事を口走るヒロコ。いや、提案自体は嬉しいけども誰が聞いてるか分かんないのに大声で言っちゃ駄目でしょうが？！
「いやいやマスター？　お風呂って何か知ってる人がいると思う？」
「・・・おおっ！　ヒロコのくせに賢いな！」
「くせには余計だよっ！　えいやっ！」

「ぬわっ！？」
「主は本当に馬鹿じゃなぁ」

いらん事を言っていつも痛い目にあうんだけど、止められないんだよね。白夜が呆れるのも無理はないよね。今日は先輩が居ないおかげで、いつもより騒がしかったけど楽しい登校となりました。たまにはこういう感じも良いよね。・・・たまには。

えーっと、やっぱり気まずいままなんですけどいい加減仲直りして仲良くしたいんですけどまだ駄目でしょうかハルトさん。

「まだや。まだまだきたえ・・・反省が足りん！」
「反省とかより僕の心が持たないよ・・・」

最近、なんだか覇気があるハルトはきっぱりと言い切った。なんか言ってる事は別になんてことない言葉な筈なんだけど、妙に言いくるめられてしまう。ふと視線を感じてそちらを見てみるとレイとエリーがこっちを見て強く頷いていた。

「まぁ、そうしょんぼりすんなや。そろそろ何か動きがあるはずよってに。そやけどおまえさんが先に動いてもうたら全部パーや。そやから黙って待っとけ」

ええな、と強く念を押されてしまう。ちらりとセシリアを覗き見てみると、向こうは向こうで聞き耳を立ててる感じだ。セシリアも仲直りしたいよね？　したいと言って？

「その事だがな、ハルト。ちょっといいか？」
「お、なんやヴァイス。どうした？」

なんか師匠が急に出てきてハルトを引っ張っていった。なんだろ、師匠もなにか考えてるんだろうか？　そういえば朝錬の時に今日は放課後残れって言ってたけど、それも関係あるのかな？

「ふぅん、あのヴァイスがのぉ。ええわ、その話のった！」
「その含みのある視線に抗議したい所だが、まぁ良い。じゃあよろしく頼む」
「おう、任せとき！」

なにやら話はまとまったようで師匠とハルトはがっちり握手を交わしている。なんかすっごく気になるなぁ・・・でも、放課後になればはっきり分かるはずだしそれまでは我慢しよう。

師匠と手合わせ

第七演習場。

魔法教会の協力もあって、学園の演習場は中々凄い事になっている。空間魔法を利用しているので三十もある演習場が一つのフロアに収まっている。演習場内の広さもかなり広くなっていて、広域殲滅魔法とかをぶっぱなしても平気な程だ。なので最近はセリナが良く演習場を利用していると聞いている。空間魔法を維持する為の魔力は勿論魔法教会の人と学園の人間で担っている。当然、僕も定期的に魔力の充填をしている。

「ようし、今日は俺と仕合って貰おうか。勿論、コージも装備を付けろ」

「はい師匠」

魔格闘となると装備を変えないといけない。肘当てに篭手、すね当てに靴。あとは幅の広いベルトをしっかりと装着する。装備が無くてもできない事は無いんだけど、あったほうがやりやすい。現に師匠も専用の防具を装備している。防具にはそれぞれオーブが仕込んであり、装着している人間の言葉もしくは動作や意思などで魔法を放つようになっている。タイミングよく魔法を発動させる事によって、魔格闘は無茶な攻撃を実現できるのだ。

「よし、準備はいいな。始めるぞ」

「はいっ」

すっと力を抜いた体勢の師匠。ざりざりと足の裏の感触を確かめながら、気だるそうにこちらへと歩を進める。僕は師匠の動きを見逃

さないように視線をぼんやりとして全体を見渡せるようにしている。

ガッ！

ふらりと身体が傾いたかと思うと、倒れこむ勢いを加速させ一気に間合いを詰めてまわし蹴りをはなってくる。僕も足を使って蹴りを受け止め、反対の足で反撃を試みる。だけど、師匠は蹴りを放った足で僕の足を踏み台にし、僕の反撃をかわすと同時に高く振り上げた足を打ち下ろしてくる。

“下上○！”

発動コマンドを念じ、打ち下ろしてくる足に対してサマーソルトを放ち迎撃する。だけど回転が中途半端だった僕の攻撃は弾き返されてしまい、必死に態勢を立て直す。ちなみに僕の魔格闘の発動はコントローラーで技を出すイメージにしている。ノリは格闘ゲームだ。

一度距離をとって仕切りなおしとなったので、今度は僕のほうから仕掛けてみようか。

“後ろ前△！”

コマンドを念じ、技を繰り出す。地面を滑りながら師匠に近づいていき、直前で地面を踏み込み肘を叩き込む。要はただの肘で攻撃するだけなのだが、その速さと威力は岩をも砕くものだ。

「甘い」

しっかりと僕の技に反応した師匠は、カウンター気味に膝を僕の背面から肩を痛撃してくる。肘の威力を上げる為に地面を踏み込んだ

瞬間を狙われてしまい、回避できずに吹き飛ばされてしまう。と見せかけ、吹き飛ばされる身体に手を使って横回転を加え手で師匠の軸足を狙う。きっと、回避する為に飛ぶと思うのでその瞬間を狙ってさらに追撃をする予定だ。

「ＬＳ２」

ボソッと師匠はコマンドを唱えて僕の手刀を飛ぶことなく地面を滑って回避する。そして、僕の目の前には師匠の構えている足がある。

ボッ！

単純な前蹴りが飛んできたけど、髪の毛が何本か千切れて飛んでいく。あぶなっ。なんとか顔面直撃コースから逃れたけれど、まだ気を緩められない。

「ＬＳ１　Ｌ４」

師匠のコマンドで僕の真横を通り過ぎた足が、勢い良く迫ってくる。とっさに地面に身体を投げ出し回避したけど、これは悪手だ。また師匠がぼそぼそとコマンドを唱えてる、やばい！

ゴンッ！

とっさに横に転がった僕の横の地面が大きく抉れてる。勿論、師匠の足のせいだ。いつも思うんだけど師匠って僕を殺す勢いで技をだしてるよね？　ね？　いつまでも転がったままだと良い的なので、急いで起き上がり師匠に向き直る。最近、師匠はけり技に凝っていてなんか今も手をポケットに入れたままで戦っている。どこかに居そうなキャラにも見えない事もない。だけど、ちょっと舐められて

る気がしてむかっとするのも事実だ。ようし、ポケットから手を出させるように頑張ってみましょうか。

蹴られた右肩をぐりぐりと回してほぐし、両手を構える。さぁ手数で押して足で捌ききれなくしてやるぞぉ！

“前前○！”

コマンドを念じてパンチを出す。うん、ただのパンチなんだ。だけど、このパンチは戻りが凄く早いので、凄い勢いのジャブだと思って頂ければ良い。さすがにこの速さのパンチを足で捌こうとはせず、うまく身体を動かしてかわしていく。かわしきれない物は肩や膝でブロックするなどして、決して手を出そうとはしない。師匠は師匠で絶対に手を出さないという縛りをつけているようだ。ぐんぐん前進し、回り込んだりして両手を使って攻撃していくが決定打にはならず隙を作る事もできない。

普通の技じゃ駄目だね。もっとぶっ飛んだ技でもしないと手を出させるのは難しいか。

“斜め前△”

コンボ始動技を師匠めがけて繰り出す。ただの手刀なんだけど、これは回避させる事が前提なので当たっちゃうと意味がない。さすがにそんな回避前提の攻撃とかは分からないので、さくっと回避してくれる師匠。ようし！　コンボ開始だ！

手刀を振り下ろした手を軸に身体を前転させる足が水平になった所で、まずはドロップキックへ移行する。当然、加速しているので威力は抜群だ！

単純に僕の手刀をステップバックで回避しようとした師匠は、急に飛んできたドロップキックに蹴りを合わせてくる。ようし、掛かった！　合わせて来た蹴り足を挟むように足を広げ、両足で足をロックする。

「！」

「でりゃぁ！」

気合と共に身体を横に回転させ、師匠の体勢を崩す。膝を固めているので下手に抵抗すると膝がめちゃくちゃ痛くなるので、倒れざるを得ない。そして、そのまま足の関節を極めてしまう。そしてすかさずもう一本の足も極めてしまおうと手を伸ばすが、それより先に僕の首に向けて足が伸びてくる。

「ふっ！」

僕は足を固めたまま横に転がる事で、その攻撃を回避する。もちろん、固めた足に捻りを加えて痛めつける事を忘れない。

「ぐっ！？」

関節技ってすっごく痛いからねぇ。さすがの師匠も苦痛で顔が歪む。でも師匠の殺人キックに比べたら可愛い技だよね？　と思ったら、フリーの足が大きく上がり勢い良く振り下ろされる。

ゴッ！

なんとも強引な方法で、師匠は僕の身体も地面への蹴り一発で浮かび上がらせる。そして、浮かび上がった瞬間に身をひねり、魔法も

使ってうまく脱出する。そして、とんとんと足を確認するように小さく跳ねてこちらを警戒している。一瞬かっちり極まったはずなのに関節柔らかいっすね。

「関節技はいやらしいな」
「殺人キックよりましですよ」
「違いない。次はこっちから行くぞ！」

さっきのコンボは派生コンボなので、違うパターンをお見舞いしようとしてたのに先手を取られてしまった。地面を抉るほど強い勢いで踏み込み、こちらへすっ飛んでくる師匠。しかもなぜかスケート選手みたいに横回転しながら飛んできている！

シャシャシャシャッ！

そして回転しながら蹴りを放ってくる師匠。蹴りを放ちながらも回転の勢いは衰える事なく続き、その回転のあまりの速さの為に蹴りのタイミングが読み辛い。なんて厄介な蹴り技だこれ?!　なんか、足が何本もあるように見えるんですけどもっ?!

「あつっ!?」

試しに蹴りを合わせてみたんだけど、あえなく弾かれメッチャ痛い。こっちも加速をプラスして重い蹴りな筈なのに、回転力も付加されているせいか軽くあしらわれてしまう。これが師匠の切り札だな！

ならば、真似てやる！

“左右左右□□□□・・・”

□を連打し続けて回転と蹴りを持続し続ける。僕のほうが少し回転が遅いけど、威力に関してはそう大差ない。

「ぬっ！」
「でりゃぁ！」

お互いの蹴り足が絡み合い回転が止まる。回転が止まった所で急接近し蹴りでは対応出来ないほど近づく。そして両手で腕を抑え動けないようにする。そもそもポケットに手を突っ込んでるから手は動かさないんだろうけどね。

「どりゃぁ！」
「がっ！」

そして勢い良く頭突きを食らわせる。うん、僕も結構痛い。だけど足技を封印しつつ攻撃するにはこれがベターだ！　さぁどんどん行くよぉ！

本命

ゴスゥッ！　ゴッガッゴッ！

うぅーん・・・気をしっかり持っていても、やっぱり頭突き痛い。師匠も結構血が出てるけどまだ手を出そうとしない。まったく強情だなぁ、手を出して反撃すればこの態勢からすぐに抜け出せるのに、あくまで手を出そうとしない。おかげでこっちもフラフラしてきた。そんな事を考えつつ、大きく背を反らしてもういっちょ頭突きをしようとした。

「せっ！」

僕が背を反らすのに合わせて師匠も勢い良く背を反らしてそのままバク転をしながら脱出していった。肩を抑えていた手が緩んでいたみたいで逃げられてしまった。

「いい加減手を出して戦いましょうよ、師匠」

「負けそうになればな」

この程度ではまだ出さないって事ですか。じゃあもっと本気出して貰わないとね！　腰を低く落とした体勢のまま滑るように間合いを詰める。

「しっ！」

間合いに入った所で後ろ回し蹴りを放つ、だけど師匠は僕の蹴りを無駄に飛び上がりながら回避する。空中戦を誘ってるね！

「せいやっ！」

蹴り足をすぐさま引き直し、空中の師匠に向かってやくざキックの要領で蹴りを放つ。だけど、待ち構えていた師匠は僕の蹴りを蹴りで合わせて更に上へと昇っていく。僕は手も使ってジグザグに師匠を追いかけ同じく駆け昇る。

「ふっ」

追いかけてくる僕を叩き落とすかのように、師匠が急に仕掛けてきた。回転とひねりを加えた蹴りは重く、とっさにガードした腕が一瞬痺れるほどのものだった。そして、ガードされたと知るやすぐさま距離を取る師匠。常に僕より上の位置の間取りを崩さない。

足をぶらぶらとさせ右へ左へゆらゆらとしながら、僕を見下ろす師匠。僕が上がれば同じように上がり、降りれば降りる。そして隙があれば仕掛けてくるという嫌らしい攻撃をしてくる師匠。空中戦を誘ってくるだけあって、その動きは無駄がないように見える。そして常に上を取られてるので、僕は不利だ。なんとかしないと。

「どうしたコージ。俺に手を出させるんじゃなかったのか？」

そういって挑発してくる師匠。うぬぬぬ。関節技に持っていけば手を出させるんだろうけど、空中戦だと逃げられちゃうんだよねぇ。何かいい手はないだろうか。よく考えろ！　・・・って、ロクでもない手を思いついた。これがうまくいけば手を出させる事ができるはずだ。

「うるさーーーい！」

僕は無策のまま突っ込むと思わせる為に、挑発にのって突っ込んで行く。ゆらゆらと浮いている師匠はそんな僕を冷静に見つめている。そして、蹴りの間合いに入った瞬間に師匠は鋭く僕に蹴りを放つ。それに対して僕は右手で横へ逸らしつつ、足をそのまま左脇に挟みこむ。

「ぬっ？！」

何か関節技を仕掛けられると思ったのか焦った様子で、反対の足で僕の肩を狙って蹴りを放ってくる師匠。思った通り！　蹴りを肘でブロックして浮かせ、すかさず右手を絡ませ脇に挟みこむ。さぁ両足はこれで封じたよ。

ニヤリ

「おまえっまさかっ！？」

「そのまさかですよ師匠！　食らえ電気アンマ！」

なんとか逃げ出そうと身を捩るけど、うまく動きをカウンター気味に合わせる事で押さえ込む。そして、必殺の電気アンマ！

「まじかぁあああああ！」

真剣な勝負にこれをするのもどうかと思うけど、勝負とは非情なものでもあるのですよ。下手に動けば動くほどダメージがいく。さぁ、手を出して足をどけない限りこの痛みはずっと続きますよ、師匠！

「さぁさぁ！　観念して手を出せぇー！」

「だぁっ！」

気合を入れて手を出して僕の足をどける師匠。どけると同時に足を引っこ抜いて間合いを取る。うん、いくら空中とは言え手を出せば電気アンマなんてすぐ抜け出せるんだよね。

「手を出しましたね師匠」

「・・・反則気味だが仕方ない。一旦降りるぞ」

そういって、地面に向かって落ちて行く師匠。あ、またポッケに手を突っ込んでるし。そんな師匠を追いかけ僕も地面に向かって落ちて行く。よっと。

「で、コージよ。今日ここに呼んだのは他でもないおまえに戦って貰いたい相手がいる」

「え、あれ？　新技を試したいだけじゃなかったんですか？」

「ん、それもある。だが本命はこっちだ。セシリア！」

えぇえぇ？　師匠がセシリアを呼ぶと演習場にゆっくりと姿を現す。しっかり武装している所をみると戦うって事なのね。ていうか、連戦ですか。

「お前たちは最近喧嘩したと聞く。そのわだかまりを決闘でぶつけてすっきりしろ」

「えっと喧嘩してるのに決闘したら余計こじれませんか、普通？」

僕の言葉にぴくっと動く師匠。その顔にはありありとそれは考えていなかったという表情が貼り付いていた。・・・ししょぉう・・・

それにセシリアも入ってきたは良いけどずっと黙ってこっちを見てるし。

「ぶつかり合って分かるものもある！　四の五の言わずにやれ！」

あ、誤魔化したし。

「コージ」
「は、はいっ！」

久しぶりにセシリアに名前を呼ばれた気がする。いや気のせいじゃないけども。

「ヴァイスのいう事も一理あるわ。それに私はやる気で来てるの」

そう言って、レイピアを静かに構えるセシリア。なんかストレスのはけ口にされそうな予感をひしひしと感じるんだけど・・・

「コージは魔格闘だけで戦うように。おまえの強さを俺に見せろ」
「・・・了解」

「はじめっ」

ヴァイスの合図と共に間合いを取る。そういえばコージと戦うのは久しぶりね。しかも今日は良くわからない魔格闘で戦うし。ヴァイスが考えた技術だから、今一つ情報が少ない。ただ、ありえない角度から攻撃してきたり、いつまでも連撃が止まらないとも聞く。

でも、本当をいうと決闘などせずにコージに謝りたい。ハルトに我慢しろと言われてたけどここでコージに勝てば謝っても良いと言っ

てくれた。だから、是が非でも勝たないといけない。でも、謝るために勝つというのもおかしな話よね。

「“風よ！　我が敵を斬る力を貸せ！　カッター！”」

レイピアに風の属性を付与する。動きのすばやいコージ相手には、スピードと正確性が必要だ。そして属性を付与した瞬間、コージが飛び込んでくる。

予備動作無しにいきなり飛び込んできたコージに右手で斬りかかる。私の剣を見切っているようで、紙一重で軌道から逸れるコージ。だけど、その目は私の剣をまったく見ていない。さらに懐に迫るコージに左手で横なぎに剣をふるう。

その攻撃を後ろに倒れながら回避するコージ。そんな体勢じゃ突いてくれと言わんばかりね！

「“穿光”」

一瞬で六回の突きを放つこの技。以前は四回しかできなかったが、ここ最近の遺跡めぐりのおかげでここまで放つ事ができる。だけど、コージは普通ならバランスを崩してもおかしくない体勢のまま、私の右側に回りこみ難なく回避してしまう。噂には聞いていたけど実際に見ると気持ち悪い動きねっ！

「“炎よ！　我が前に踊りて其をしめせ！　バーンウォール！」

コージに攻撃されるより先に炎の壁で動きを封じてから、間合いを取る。炎の壁なんてコージにはダメージにもならないだろうけど、目くらましにはなるはず。

ボッ！

と安堵したのも束の間、コージは炎の壁は回転しながら突き抜けてくる。そして回転したままこちらへと殺到する。

そして回転しながら蹴りを放ってくる。すごい回転のせいか風が勢い良く吹き付けてくる。蹴りをハンドガードでなんとかブロックしながら反撃の機会を伺う。あんなにくるくる回って目が回らないのが不思議。ふと、攻撃が止みあわてたように間合いをとるコージ。心なしか顔が赤い。やっぱりこの攻撃は負荷がかかるようね。ふとヴァイスを見るとヴァイスも顔が赤い。おかしいわね？

「“風よ！　我が敵を戒める力を貸せ！　ヘティス！”」

すばしっこい上に変な動きで翻弄してくるから、少しでも動きを鈍らせないと攻撃が当たりそうにない。右手のレイピアの属性はそのままにして、左手の方を動きを鈍くする属性を与える。まぁどっちにしても当てないと意味がない。

ヒュンヒュンヒュンヒュン・・・

レイピアをくるくると回転させながらコージへと歩み寄る。ちょっと大道芸っぽいけど、この技は意外と侮れないのよ？　コージもどういう意図で回転させているのか理解しかねているようで様子を伺うようにじりじりと時計周りに移動し始める。

キンッ！

くるくると回転するレイピアがコージに弾かれる。だけど、弾かれ

たレイピアはまた元の軌道に戻りさらに加速して回り続ける。さぁ、もっと弾いて下さいな。

不思議そうな顔でこちらを見ているコージ。それはそうよね、確かに横に弾いた筈がまた縦にくるくると回り始めるんですものね？コージは確かに強いのかもしれない。ですがこと対人戦においては私も中々の物ですのよ。

キンッキキキン！

一回で駄目なら、さらに数で回るレイピアを止めようと弾きまくるコージ。うん、術中にはまってくれました。少し痛い目を見て貰いますわよコージ。

地味な二人、いや一人？

「一号」
「んー？」

通称、エドを見つけてなし崩し的にあほ次男坊も見つけて制裁する為の監視部屋で、僕たち二人は監視作業にいそしんでいる。衛星から特徴が少しでも一致している人間の写真を片っ端から確認していき、確率
の高そうな物をどんどんチェックしていく。ついでと言ってはなんだけど、周辺国の様子も念のため監視してもいる。ハイローディスだっけ？　またあそこがちょっかい掛けてこないとも限らないし。

「僕達って、なんというか地味だよね」
「いやいやこれぞ縁の下の力持ちだよ。これで僕が一人だけなら、心の平穏も満たされるんだけどねぇ」
「まぁ、自分が二人以上いるとか異常事態でしかないしね。ドッペルゲンガーも真っ青だね」

僕としては一人でコツコツとする事は好きだし、人の目が無い所はなんか落ち着く。どっちかというと僕の根っこは、一人で居る事が好きなんだよね。それは自分であっても居ないほうが良い。

「だけど、僕もそろそろ仲間というか信頼できる人を増やす必要があるんじゃないかなぁ？　なんていうの物語の展開的にってやつ？」
「何、藪から棒に」
「いや別に突飛な話でもないでしょ。こういう作業も仲間がいればツテを頼って人探しもできるだろうし、貴族と戦うときでも一緒に戦ってくれる人がいれば心強いじゃない？」

そういうと一号は苦い顔をしている。まぁ理由はわからなくも無い。

「友達とか仲間ってどうやってできるんだろうねぇ・・・」

「自分から作ろうとか、無理ゲーだよね」

友達を作るぐらいなら、こうやって地味な作業をしている方が気が楽だ。楽なんだけどもやっぱり仲間を作りたい。だけど、こんな打算的な理由で仲間を作って良いんだろうか。僕にはそういった割り切り方ができない。だから仲間を作るという事がすごく難しく感じる。具体的にどうすれば良いか、全然分かんないもんなぁ。

「「はぁ・・・」」

同時にため息をつく僕達。正直、セリナ達が仲間になってくれたのだって奇跡みたいなものである。ハルトたちも向こうから声をかけてくれたから、仲間になれたのであって自分から進んで仲良くできるとか考えてなかった。話をするだけなら別になんとも無いんだけどなぁ。あとはテンションが上がってるとなんかそういった事もできる気がする。

「とりあえず、自分から声を掛けていかないと駄目なんだろうなぁ」

「でも、なんて声を掛ける？　仲間になりませんかーとかじゃ駄目でしょ？」

それに誰でも声を掛ければ良いって訳じゃないし。すごい人当たりが良くて優しそうな人でも、実はすごい詐欺師だったとか、なんかめちゃくちゃ威張ってるから強い人かと思ったら、見栄を張ってるだけの人だったら、どういう事になるか見当もつかない。

「うーん・・・本当に僕って自分から友達になったのってエドぐらいじゃない？」
「それにしたって切欠はエドが作ってくれたみたいなもんだし。ふんがー！」

三人寄れば文殊の知恵といいますが、ここに居るのは残念ながら二人というか実質一人。でもこんな事を相談するとかちょっと恥ずかしいからできないよね。

「というわけでうさぎさんの出番なのですよ！」

うんうん唸っている僕達の前にコスプレイヤーが居た。ど、どどどうやって入ってきましたかっ！？

「んもぉう。せっかく光ちゃんが二人もいるから、一人ぐらい母さんの所に来てくれると思ってわくわくしてたのに、いつまで経っても来ないから気合入れてきたよ！」
「いや、気合入れる方向が違うから。それは父さん用の気合の入れ方でしょ！」

僕たちに向かって無駄にお色気を振りまかれても正直困る。

「そこはそれ気分の問題ね。で、光ちゃんは友達ができなくて困ってるの？」

ビキリッ！

「そんなことあるわけないじゃない、やだなぁかあさん」
「ともだちができないなんてそんな、ひとをひきこもりみたいに」

必死に反論している僕たちをなんだか、きらきらした目でみつめてくるうさ・・・母さん。なんだろう、あのきらきらした目を見ていると言い知れない不安と期待が入り混じった複雑な気持ちが湧き上がってくる。いや期待しちゃ駄目だ、母さんだぞ?!

「まぁまぁ、そんなに警戒しなくても平気よぉ?　今はミミちゃん達は家に居ないからさっきの話は母さんしか聞いてないわよ」

そんな大きな声で話ししてたっけ?　って、えぇっ?!

「そんなにびっくりしなくても。うさぎさんの耳は伊達じゃないもの、聞こえて当然でしょ???」

「いや、その耳は間違いなく伊達でしょっ?」

「あんっ」

「えええっ?!」

母さんのうさみみを引っ張ったら変な声だされた。いやそれはどうでも良いんだけど、なんかうさみみが生暖かった・・・なにこれ。一号も触ってびっくりしてる。

「伊達じゃないって言ったでしょ?　せっかく魔法が使えるんだから半端な作りこみはしてないわよっ!」

なんか凄く胸を張って得意そうにそう言い放つ母さん。あたまいたい。

「母さんってコスプレ好きな人だっけ?」

「いや、そんなのは知らないんだけど。父ちゃんの趣味じゃなかったのかな?」

「そんな話題は良いから光ちゃんの悩みを解決よ!」

ちっ。さすがは迷惑ハリケーン。人の弱みを突っ込むのが得意なだけあって、こんな事ぐらいじゃ誤魔化されないよね。

「で、じっくり話してみんしゃい。勇司さんには内緒にしてあげるから」

ぴこぴことうさみみを動かしながら、にっこりと僕たちに詰め寄る母さん。ばれてるなら仕方ないか。観念してちょっと相談してみようかな、僕たちじゃ悩むばかりでちっとも前に進まないしね。

キンッ！キキキキキキンッ！

まだコージはレイピアを弾き続けている。ときどき、切っ先を支点にしてグリップを叩き付けたりもしてはいるけど、それですらうまく弾いてくる。コージの動きの早さばかりに目がいってたけども目もかなり良いのね。コージが弾いてどんどん回転が加速しているのに、いまだに綺麗にさばいている。

「よしっ！」

何か思いついたのか、コージがレイピアを受けずに回避しだす。レイピアの回転もかなりのものになり、風が渦巻くほどにまでなっている。これだけ早くなれば十分ね。まぁ十分どころかここまで加速したのは初めてだから、問題は私がしっかり制御できるかどうかね。

コージが何か次の手を打つ前に、こちらからさらに仕掛けましょう。

右手のレイピアを後方にかざし、左手のレイピアをコージに向かって振り上げる。あらっ？　コージが凄い勢いで顔を逸らしたわね。戦闘中に余所見とか余裕じゃない！

「“シルバーレイン！”」

回転するレイピアの切っ先から無数の銀光がコージに降り注ぐ。

「うっくっ！？」

咄嗟にガードしながら距離を取るコージ。殺気には凄い反応を示すみたいね？　余所見をしていた割にはうまく防御しつつ銀光の範囲から逃れようと動いている。だけど、この雨はまっすぐ進むだけじゃないのよ？

「ちょっ！？　なにこれっ？！」

あなたの魔力のおかげよ、コージ。あなたが弾くたびに少しずつ魔力を貰っておいたの。で、同じ魔力へ帰っていくように銀光を誘導してるわけ。そして、雨はまだまだ降り注ぎますわよ？

ですが、これだけ大量の雨を降らす事は初めてです。うまく拡散してしまわないように制御しませんと・・・正直コージの魔力は重い。おかげで私の魔力が弾き飛ばされそうになります。・・・欲張って集めすぎましたわね。

表面は冷静な顔を保ちつつその実必死に制御していますが、その間もコージは銀光をいなし、叩き落し、たまには食らってはいるものの、いまだに動きにキレがある。ほぼ全方位から襲い掛かるそれをここまで見事に反応するとは、正直コージを侮りすぎてました。普

通ならこれでだいぶ弱らせる事ができるのですが・・・

「なるほどなるほど！」

なにやら、納得した顔で頷いているコージ。見れば銀光を手や足でうまく誘導し、見事に相殺したりしている。回避するならまだしも、相殺していくとか嫌らしい対処の仕方をしますわね！　ならば、そんな事をする暇も与えないようにしましょう！

「“ストーム！”」

温存していた右手のレイピアも同時に解放する。右手と左手から銀光がとめどなく撃ちだされ、中にはくっつきあって大きくなって飛んでいくのもある。ストームは大小さまざまな大きさの銀光が相手を撃ちぬく技なのです。

これで駄目なら・・・いえ、今はそんな事を考えずに、ストームをしっかり制御してコージを降参させる事だけを考えましょう。

無双で決着！

なんと言って慰めれば良いのだろうか。

今、セシリアはしゃがみ込んで泣いております。気づけばこんな事になってました。

効くのかどうか良く分からないけど、とりあえず後頭部をとんとんと軽く叩き上を向きながら考える。うん、師匠もどう声を掛けるべきか悩んでいるようで、しきりに僕に向かってアイコンタクトをしてくる。できれば、師匠に師匠らしい所をここでも発揮して欲しいなぁって思うのは駄目？

セシリアとの決闘はなんともしまらない形で中断してしまった。

原因はパンツ。

いや、何を言ってるか分からないと思うが事実なんだ。女の子って可愛く見せる為にスカートを短くしてる子もいるじゃないですか。そしてけしからん風がいたずらをして、眼福を与えてくれる。ありがとう風。うん、話が逸れた。えっと、セシリアもやっぱりそこは女の子なのでご他聞に漏れず、なかなかに短い。細すぎず太すぎない健康そうで柔らかそうな太ももを、惜しげもなくさらしている。足もスラリと長いので非常に見栄えが良い。

だけど決闘にそういう格好してくると、大変な事になる。

何かほかの事に気をとられていたのか、セシリアは制服のまま決闘を挑んできた。僕も最初とくに気にせずに戦いだしたんだけど途中

で意識せざるを得なかった。そう、セシリアのあの剣技のせいだ。
あの技自体は僕も覚えたいぐらいで、非常に使える技だと思うんだけども、結構な風が舞うんだよね。で、短いスカートを履いてるセシリアがそんな技を使うとどうなるか分かるよね？

そう、パンツ無双。

決闘の最中に見えてるとか指摘する訳にもいかず、なんとか耐えていたんだけど余所見していると僕も痛いのでセシリアの方を見る事になる。舞い上がるスカート、視界に飛び込んでくる白い脚線美とその根元。意識を攻撃に集中しようと何度も試みたり、攻撃方法を解析する事で意識を逸らそうとしたんだけど、やっぱり視界に飛び込んでくる刺激的な情報が結局勝ってしまい、僕は鼻血をだしてぶっ倒れた。セリナとミミのおかげでそういう事に耐性が付いたと思ったんだけどそうでも無かったみたい。

でも、その刺激的な情報はしっかり心のメモリーに保存しちゃった！　具体的に言うなら衛星に映像として保存してるから、いつでもじっくり隅々まで見れる！

セリナとミミに言えば、そんな事をせずとも進んで見せてくれそうな気もするけど、やっぱり天然物って貴重だと思うんだ。そして、むっつりスケベと自覚のある僕はそんな事を頼むなんてできるわけがない。

「えっと、セシリアごめんね。見えてたんだけど、言うタイミングがなくって・・・」

ひんひん泣いてるセシリアがちらっとこっちを見た。そして、気まずそうに立っている師匠のほうも見る。

「・・・すけべ」
「えぇっと、ごめん」
「すまん」

なんというか、僕達に非は無いはずだけどここは大人しく謝るべきだろう。うん。顔を真っ赤にして目を潤ませているセシリアに逆らえる筈がないし！

「この勝負、私の勝ち？」
「えーっと、まぁお色気攻撃でやられたって事になるかなぁ・・・」
「ばっ！？」

あああああ！？　思わずポロリと本音というか、パンツ騒動を思い出させる事をつい言ってしまった！　師匠も視線でこのバカと言っている。

「コージのすけべ。でも勝ちは勝ち・・・よね？」

ぐずぐずと鼻を鳴らしながら上目遣いで尋ねてくる。セシリアは美人だ。だけど、小さな子供みたいにそうやってると物凄く可愛く見えてくる。

「えーっと、はいセシリアの勝ちで良いと思います」
「・・・思います？」
「いやセシリアの勝ちだ。そうだなコージ！」
「はい、その通りです！」

これ以上、機嫌を損ねてくれるなと言わんばかりに言葉を畳み掛けてくる師匠。フォローありがとうございます。意外と僕も負けず嫌

いのようで、こんな時でも負けを認めたくない気持ちがあった。

「ふふっ、良かった。勝てなかったら、ずっとこのままだったもん」

「えっと・・・？」

「あ、うん、ごめんね一人で納得しちゃってて。こないだの事、ずっと謝りたかったの。だけど、中々言い出せないしハルトにも反省の為にも、しばらく謝るなって言われるし。でも、毎日となりでコージが緊張してるのを見て、申し訳無くなっちゃうしで・・・」

反省の為にも謝るなっていうのが良く分かんないけど、これはハルトの差し金だったって事は良く分かった。ここ最近の胃の痛さをハルトに分けてやりたい！

「でも、あの日から私達も頑張ってるの。バルトなんか、皆が怪我しまくるもんだから、ぶっ倒れるまで魔法を使いまくってるし」

「またなんでそんな無茶してるの？」

最近、五人で集まって何かしてるなぁとは思ってたんだけど遺跡で無茶してたのかな？

「痛感したからよ。コージの方が明らかに私達より格上だって」

「え、別に格上とかそういう物じゃないと思うけど」

「ううん、そうなのよ。測定でコージって私達より下だったじゃない？　だから、どこかで私はコージより強いって思ってたんでしょうね。だから、この間コージにつっかっかちゃったんだと思う」

今なら前よりは随分近づいてると思うよ、うん。

「だけど、よくよく考えてみたらそんな能力でも私達とそんなに変わらない強さだったのよね。あれから随分コージは鍛えてるから、

きっと凄く強くなってるんだと思う」
「師匠が無茶してくれるからね」
「抜かせ。腕立ても腹筋も碌にできなかったお前を誰ができるようにしてやった？」
「普通はいきなり五百回とか無理だからね？」
うん、良く師匠のしごきに付いていけたよね。まぁ最初の頃はあまりの辛さに師匠を恨んだりもしたけど、今じゃいい思い出だ。
「それにねコージの足手まといにならなくなったら謝っても良いって言われたから、すっごく頑張ったのよ？」
「えーっと、それはそのぉ・・・ありがとう？」
なんか恥ずかしいな。でも、僕も少しきつく言い過ぎたからそこは謝りたいんだよね。
「そのセシリア。あの時は・・・」
「駄目っ！　まず私に謝らせて」
手で僕を制してセシリアがじっと僕の目を見つめてそう言ってきた。そして勢い良く頭を下げてきた。
「コージ、この間はごめんなさい。心配して言ってくれたのに、ちゃんと聞かずにつっぱねてしまって」
「ううん、こっちこそキツイ言い方しちゃってごめん」
「仲直りしてくれる？」
「勿論！」
やっとセシリアが笑顔になってくれた。しっかりと握手をして仲直り。はー・・・なんだか凄く長い間喧嘩してた気がするよ。

「うむ、やはり決闘は良いものだな。思った通りだ」
「・・・何言ってるんですか、師匠？」
「ん？　コージがぐずぐずと悩んでるから、この場を設けたんじゃないか。感謝していいぞ」

いやまぁ、結果的には仲直りできたんだけど普通はこんな事で仲直りとか無いからね？　むしろ危ない事だと思いますよ？

「まぁ、それは横に置いて。それよりも師匠！　あの手を出さずに戦う行儀の悪い戦い方はなんですか！　あれですか、ハンデのつもりですか？」
「当たり前だ馬鹿。俺が魔格闘でおまえに負ける訳がないだろうが。脚だけで戦えばちょうど良いだろう？　それにあれも馬鹿にしたもんじゃないぞ、思いつきでやってみたがあれはあれで強かった」
「え、練習してたのを使ったんじゃなくて、ぶっつけ本番？！　馬鹿にしてますね師匠！」

研究に研究を重ねて編み出した構えって訳じゃないのか！　その割にはなんか戦いなれてた感じがしてたんだけど。

「まぁ勝つのが目的じゃなかったしな」
「あれだけ痛めつけといて勝つ為じゃないとか、どんだけサドなんですかっ？！」
「普通だろ？」

駄目だこの師匠。決闘させる為に呼んでおいてダメージを与えるとかひどいよね？　ある意味セシリアに対するハンデだったのかなぁ？　戦闘も魔格闘しばりだったし。

「ヴァイスとコージって仲がいいのねぇ・・・」

なおもぎゃあぎゃあ言い合ってる僕達を見て、ちょっとあきれ気味にセシリアが呟く。まぁ毎日飽きもせず鍛錬してる仲だしねぇ。仲良くならない方がおかしいと思う。

「いや、俺はコージが嫌いだぞ。主に魔格闘を自分が編み出したみたいな顔をしてる所が」

「ええっ!?　そんな顔してませんよ?!　それに僕が編み出した技だってあるのはあるじゃないですかっ!」

「それが気に食わん。俺が思いつかずになんでおまえが思いつくのだ」

「言いがかりだっ!?」

そんな僕たちの様子を笑いをこらえながら聞いているセシリア。いいよ、思い切り笑ってくれても。でも、セシリアと仲直りができて本当に良かった。まぁちょっとは師匠に感謝しても良いかもしれない。・・・ちょっとだけね。

巨大兵器特攻

「あれっ！？」

ふと気付けばホワイトファングに乗っていた。微妙に細部が違う気がしないでもないけどこの慣れ親しんだコックピットはホワイトファングで間違いない。てかあれ？　乗り込んだ覚えなんて無いんだけど。

「何をぼやっとしておる主よ！　おぬしの楽しみにしていた巨大ロボット戦じゃぞ？」

「へぇっ！？」

よく目を凝らして見れば、機体の正面二キロ程に一体のフレームが見える。え、あれ？　二キロも離れてこれだけ見えるって、でかくない？　と思った瞬間向こうがこちらに気付き極太レーザーを放ってきた。

「ってぇ！？」

すんでの所で回避できたけど、装甲が一部溶けてしまっている。ホワイトファングの装甲を溶かすなんてやるじゃないか。

「すまん、エネルギーの収束を感知できんかった。察するに今のは威嚇射撃じゃぞ。気を引き締めてかかれよ」

「今ので威嚇っていうの？　なっかなかに燃えるシチュエーションだねぇ」

あれだけの熱量を一瞬で放ってくるデカブツ君。しかも全力じゃな

いって事は、本気で撃ったら凄いだろうねぇ。まぁ本気で撃てないのかもしれないけどね。

「オプション展開！　全武装チェック！　まずはなんとしてでも接近するよ！」

「了解じゃ主」

彼我の距離は二キロ弱。この距離を縮めなければ勝利は難しいだろう。そう思っているとデカブツは右手をこちらに向けていた。

「くるぞ！」

ホワイトファングの言葉通り、でかぶつから何か不定形な物が連射される。ぶよぶよと膨張と収縮を繰り返しながらこちらに向かって飛んでくるエネルギーの塊のようだ。

「一発も当たるなよ、かなりの威力じゃぞ」

「了解！」

伸びたり縮んだりを繰り返しながら飛んでいるので、回避しずらいが当たると一発アウトっぽいので必死に回避を繰り返す。時折、誘導されているのか急激にこちらに向かってくる塊もあったりしたけど、ホワイトファングのサポートでなんとかすり抜ける。

「ライフル！」

「おおよ！」

すり抜けた先に、塊の第二陣が迫ってくるのを見てライフルを放つ。一秒ほど開放して塊をなぎ払うように射線を動かす。って、うわっ！？

とっさに展開したエナジーフィストで、威力を弱めたけど少し抜けてきたせいで機体にダメージを負ってしまう。デカブツを見れば何かのフィールドが消えていく所が見える。防御するだけならまだしも、反射してくるとか嫌らしいフィールドだ。

「主！」

一瞬ぼけっとしていたせいで、塊の接近を許してしまう。やばい直撃する?!　とっさに手に持っていたライフルを振り上げ塊にぶつけながら、回避を試みる。ライフルがぶつかった塊は何も抵抗を見せる事無く、ライフルを溶かしてしまう。だけど、そのおかげで塊は縮み、回避できる余裕ができた。

「油断禁物じゃ。遠距離攻撃はほとんど効かぬかもしれんな。次は実弾で試して見るか？」

「うん。でも止まってる暇は無いから空中で撃つよ」

「それじゃと、照準が甘くなるが…あれだけでかければ大丈夫か」

「そういう事。じゃあいっくよぉー！」

空を飛んだまま百五十五ミリカノン砲を両手でしっかり掴む。本当は肩に取り付けて座った体勢で撃つものだけど、今回は精度を求めていないのでこれでいく。

「てぇっ！」

バッガアアアアン！

耳をつんざく爆音が響き、凄い勢いで吹き飛ばされそうになる機体を必死に制御する。おかげで両腕で固定していたカノン砲も何とか

無事だ。下手な事をすると銃身がまがっちゃうもんね。

「って避けた!?」

「あのでかさであも軽々と避けるか。一筋縄ではいかんのぉ主よ」

まっすぐにデカブツに吸い込まれるかに見えた弾頭は、するりと回避されてしまう。これだけ離れてて、あんだけ移動してるんだから相当な速さだ。

とか考えていたらデカブツの指が光った。

「なんとぉっ!」

指からなのに極太レーザーって、どんだけでかいのよ! 塊を出しながらも指先からレーザーを次々に連射してくる。もちろん塊にあたっているのはお構いなしで、近づこうとする僕を牽制するかのように、レーザーを放ってきていた。

「これって、近づいてもやられそうになったら、全力で逃げられそうな気がするね」

「じゃなぁ。フィールドを制限するしか無さそうじゃ」

「できる?」

「任せろ。じゃが、その間サポートはおざなりになってしまうが良いか?」

「わかった」

そう僕が返事をするや否や、エンジンが甲高い唸りを上げて動き出す。そして、ケージが一瞬目の前に現れたかと思うと、すっと消えてしまう。

「よし、これでここから半径三キロのバトルフィールドが出来上がった。あとは主の好きなようにやれ」
「ありがとうホワイトファング」

これでフィールドは限定された。あの動きの素早いデカブツを叩きのめすには近接攻撃で直接ぶった切っていくしかないだろう。だけどそれにはデカブツの動きを止める必要がある。となれば、不利は承知で射撃戦で嫌がらせをしていくしかない。先読み（ディスティニー）レーザーとカノン砲の連携で少しずつでも削っていこう。

「観測ビットとハンター射出！　目標はフィールド発生装置の破壊。無理なら別の手を考える」
「わかった」

頼りになる相棒ハンター。やっぱりこういう自律攻撃型のオプションって大事だよね！

「そして、カノン砲の連射だぁ！」

ハンターだけに攻撃を任せる訳にはいかないので、カノン砲で援護射撃を行う。いや、こんなでっかい奴で援護とかいう表現はどうかと思うけども。

さすがの塊もカノン砲の威力を消しきれないようで、射線上にある塊は綺麗に片付けられていく。撃っては冷やし、撃っては冷やし、反動で行きつ戻りつしながらも少しずつデカブツに近づいていく。

一発もかすりもしないカノン砲だけど、おかげでハンター達がデカブツに取り付く事ができたようだ。だけどデカブツが、でかすぎるので細かい様子があんまり分からない。ん、そろそろ観測ビットも

準備ができたようだね。

「さてさて、少しは効いておくんなさいよっと！」

気合をこめてカノン砲を撃つ。そして遅れてディスティニーを発射する。

胸部前面にまばゆい光が溢れ、デカブツの方へ集束した光が向かっていく。

計算する為に一瞬のためが必要だけど、デカブツはレーザーに吸い込まれるように動く筈。レーザーが当たれば反射フィールドが作動すると思うので、急いで移動する。

だけど思惑に反してデカブツはレーザーを反射せずに直撃を食らっていた。とは言っても、巨大な手の平で受け止めているのだけども。今、フィールドの制限にパワーを回しているせいでディスティニーの威力もフルに発揮できていないようだ。

手首から先だけ蒸発したデカブツは、ディスティニーの威力を認めたのか距離を取ろうと後退する。だけど、残念。ホワイトファングがフィールドを制限しているので、それ以上は後退できないよ。

カノン砲の連射速度を落とし、両腕の補修を行う。さすがのホワイトファングもカノン砲を腕で持ったまま射撃するのは無茶だったようで、攻撃を食らっていないのに両腕はひどい状態になっている。駄目だね、カノン砲を撃ってるとひどくなるばかりだ。

デカブツは僕の接近を阻むようにレーザーを連射してくる。だけど、そろそろその攻撃は慣れてきたので、驚く事無く避けていく。ただ、

これは牽制程度の出力なはずなので、いつ本気で撃って来るかだけは気をつけてはいる。

よし、ここは少しエナジーフィストを試して見よう。

カノン砲をしまい、両手をフリーにする。そして、両手を合わせるように構え、そのまま腰ダメにねじり、ぐいっと広げる。すると、両手に光の槍が現れる。

「こいつはどうだっ！」

大きく振りかぶって勢い良くデカブツに投げつける。いまだ辺りに漂う塊の間を縫って槍はデカブツ目掛けて一直線に駆け抜けていった

夜の夢の後

ガガァン！

デカブツの足元でエネルギースピアが爆発する。とはいえ、デカブツの大きさからすればほんの少しの爆発でしかない。だけど、デカブツには爆発が効くようで慌てて回避していた。カノン方を避けていた事もあって、実弾系が苦手なのかもしれない。

デカブツが慌てたように塊を大量に吐き出す。そして、さらに塊の存在に構わずに指先からレーザーをばらまいてくる。いや、むしろ塊を狙ってる…？

「っ！？」

その理由はすぐに分かった。塊はデカブツのレーザーを偏向、拡散させる効果があるようで、五本のレーザーはあっというまに十本、二十本と増えていきホワイトファングを取り囲むようにレーザーの雨が降り注ぐ。

デカブツのレーザーはホワイトファングにとってかすれば装甲を融解させてしまう威力がある。エナジーフィストを使ってある程度はいなす事もできるけど、これだけの数のレーザーともなると被弾率も高くなる。

「ちょっとうっとうしいな、これ！」

レーザーの雨はやむ事無く降り注ぎ、塊の数もいや増す一方だ。回避に手が一杯で攻撃することができないせいで塊の数を減らす事も

できず、レーザーも撃たれるがままなのでこのままだとジリ貧だ。
ここは強引だけど接近する方が被弾率も下がる筈。少々の被弾は覚悟の上で、まっすぐひたすらまっすぐにデカブツを目指す！

「少し我慢してくれよホワイトファング！」
「うむっ！」

地表すれすれを地面を削るように駆け抜ける。機体の修復が追いつかず右手は肘から先が溶けて無くなり、左腕も肩の装甲が剥がれ落ちている。脚部も似たり寄ったりで満身創痍といったところである。
だけど、近づいて近接攻撃で内部から切り裂いていけば、こちらの勝ちだ！

だけど、デカブツに近づいた僕をあざ笑うかのように僕の目の前に、多数のフレームが姿を現した。どうやらデカブツの足元に潜んでいたようだ。

「ちょおっと卑怯くさくないこれ?!」
「ケージ解除じゃ！　逃げるぞ主！」

だがしかし、逃亡を図ろうにも周りには塊が所狭しとひしめき合い、デカブツの近くから数え切れないフレームが多数こちらへと殺到してきている。

「ライフル！」
「おう！」

と、ライフルを出したけどすかさず撃ち落されてしまう。降り注ぐレーザーの雨にフレームからの弾幕。隙在らば押し寄せてくる塊の一群。すでに回避も追いつかず被弾するがままになっている。

「これはちょっとまずいかな…」

あらゆる警戒音が鳴り響く中、冷静になろうと努める。これが万全の体制であれば、対多数戦もなんとかなるんだろうけど、デカブツの足元に来るまでにすでに満身創痍の状態だ。こうなってしまうと、反撃もままならない。なんとか動く左腕を使い最後のあがきをしながら、逃亡ルートを模索する。一番、弾幕が薄い所はどこだ…

「上じゃ！　デカブツに向かって抜けるのはどうじゃ！」

「よしっ！」

塊と極太レーザーが来るとはいえ、大量のフレームからの弾幕などに比べると確かに一番マシなルートと言える。一気に駆け抜ける為にデカブツにギリギリまで近づいてから、上昇を開始する。

だけど、それは一番の下策だった。

「うわぁっ！！！」

「しまっ…」

脚部、胸部と順調に上昇をしてもうすぐ突破出来る所で僕が見たもの。それは大きく口を広げて、ホワイトファングを飲み込まんと迫り来るデカブツの大きな顔だった…

「うわぁあああああああああああっ！」

目が覚めた。いや、これは凄い悪夢だね…夢で良かったよ。さすがにまだ動悸が早い。そうだよね、あんなでっかいフレームなんて無いよねぇ。戦ってみたい気はするけども、あそこまで差があるとちょっとだけ厄介だろうね。まぁ、夢だから色々おかしな点があったから、実際にあんな大きなフレームと戦う事になっても大丈夫だろう。

何時頃からか、何故か皆と同じベッドで寝るのが当たり前となってきている。今日は僕の横でセリナとミミがぐっすりと眠っている。結構凄い勢いで飛び起きたけど二人は起きなかったようだ。よかった。

「でも、夢の中でも一人で戦うとか駄目だなぁ…」

ホワイトファングがいたから厳密には違うのかもしれないけど、やっぱりどこかで僕の味方は居ないと思ってるのかな。セリナもミミもフレームに乗るのは苦手だけど、あんなデカブツと戦うと知ったら何か援護してくれるだろう。

「…マスター？」

「あれ？　ヒロコ起こしちゃった？」

ちょっと離れた所にいたヒロコが声を掛けてきた。さっきまで横になっていたからてっきり眠ってると思ってたよ。

「ううん、寝てないからねボクは。精霊だからか別に無理に寝なくても良いんだよ」

その割にはしっかり食べるものは食べてる気がするんだけど、それ

はどうなんだろうか。

「じゃあ別にセリナ達とどこで寝るか争わなくても良かったんじゃないの？」

「やれやれ。マスターは駄目だねぇ、乙女心をなんと心得る！」

「乙女ってこんなに大胆なものなの…？　もっとこう恥じらいを持ってる物かと…」

なんというか、手をつなぐだけで顔を赤らめると言いますか…見詰め合うと頬を赤く染めてくれるとか、かいがいしく世話をしてくれるとか…

「そんな乙女はファンタジーだよ！　食べたら出すし、おっさんくさい所もあるよ！」

「いやそこは聞きたく無かった、というか考えたくなかったなぁ…」

いや、どこかで理解はしてるんだよ？　理解してるんだけど聞きたくない現実ってあるでしょ？　あるよね？

「というか、何を言わせるかなマスターは。叫びながら起きるから、心配してあげたのに。しかもうんうんうなされ過ぎだよ？」

「途中までは良かったんだけど、どんどん追い詰められたからなぁ。ていうか、うなされてたなら、たたき起こしてよ？！」

最初は巨大フレームと戦うぜ！　って意気込んでたんだけど、なんかどんどん不利になってきてえらい目にあったよねぇ。最後の方はボコボコにされちゃったし。

「何か不安があるから悪夢を見るんだよ。ボクでよかったら相談のるよ？」

「不安…ねぇ。貴族が何してくるかさっぱり分からない事かなぁ。一応、分身を使って警戒はしてるけど、結局数で押されたらどうしようもないんじゃないかって、不安になる」

この世界に来て一年程になるけど、知り合いはそこそこ増えてきたんだけど仲間と胸を張って言えるのって、一緒に住んでる皆ぐらいだ。ハルト達は友達だとは思ってはいるけど。

「セリナもミミも居るじゃない」

「そこはボクも居るってアピールしてよ、ヒロコ」

ヒロコは色々できるとは思うんだけど、絶対に戦おうとはしない。遺跡に潜ってる時も応援がほとんどで、たまに治癒魔法を使ったりするそうだ。でもヒロコってゲームがあれだけ得意だったから、フレームに乗って貰えれば良いコンビプレイができる気がするんだけど。

「ボクは応援係だからね。でもマスターがどうしてもって言うなら力を貸すけど？」

そういって何時に無く真剣な面持ちで、まっすぐ僕を見つめてくるヒロコ。

「ううん、ヒロコはそのままでいいよ。いつも通りふんぞり返ってくれたらそれで」

「えー！？　ふんぞり返ったりしてないよぉ！失礼しちゃうな！」

「あはは、ごめんごめん。なんにせよいつも通りで良いよ、うん」

まったくもぉ、とぶつぶつと怒ってるヒロコ。だけど、口元は笑っているから別に本気で怒ってるわけじゃないんだろう。それにヒロ

コが力を使うという事は、きっと王の印の力を使う事になるだろうから、なるべくなら控えて置きたい気持ちもある。時々ちくちくと痛くなる事もあるけども、印があるから特に何かあるとかは無い。それに中の人が居るって父ちゃんが言ってたけど、そんな人が出てくる印って本当に謎過ぎる。

「まだ早いから、寝るね」
「うん、おやすみマスター」
「おやすみ」

そして悪夢のことはすっかり忘れて、また夢の中へ誘われて行った。

色々見てみよう

「むあ…もうこんな時間なのかぁ」

重力兵器をいじくってたんだけど、気付けば寝てて良い時間になっていた。重力兵器のどのパーツを組み合わせれば良いかは分かってきたけど、僕が同じものを作ろうとするとなると、耐久性のない物ができあがってしまう。コアとなる重力素子なるものが、どうしても安定して固着してくれないのだ。

「でも、大量に作って誤魔化すのもありかなぁ？　とりあえず、魔力を使わずに重力を限定的にでも操れるのは強いよね」

ホワイトファングの重力制御型の飛行ユニットは魔法で重力を操っている。今回の武器に関しては電力を利用している。まぁ、その電力の元となるのが魔力なんで結局一緒の事だとは思うんだけど…

「魔力にしろ電力にしろ結局はエネルギーなんだよね。もっとこうエネルギーを純粋に取り出して、効率よく運用する事はできないもんかなぁ？」

それか使うエネルギーを統一して変換ロスをなくすとか。なんで魔力で動くエンジンを積んでいるのに、電力で動く武器を持っているかが謎だ。まぁ、ルーツに限っての話なんだけどね。ルーツ以外の作られたフレームは、すべて魔力で補っている。魔力を電力に変換するとどれだけのロスがあるか調べてないけど、等倍という事はないと思う。

「ん～…っ」

考え出すと止まらない思考を、伸びをして一旦リセットする。ずっと同じ姿勢で考えてたみたいで、体中が結構いたい。とりあえず、保存と読み込みをして寝るとしますかね。明日は、気分転換にフレームでも見に行ってみよう。何か良いアイデアが浮かぶかもしれないし。

足元から毛布を引っ張り出し、くるくるっと丸まって明日の予定をつらつらと考えていたら気付けば僕は寝入っていた。

「むはっ？！」

朝日が僕の顔を直撃している。机の上を見ると、朝食がさりげなく置いてあった。そういえば、昨日はご飯を食べていない気がする。おいしそうなオムレツとパンに鶏肉と野菜の炒め物が今日のメニューだ。冷蔵庫にはしっかり果物のジュースが入っている。ご飯のおいしそうな香りが胃を直撃し、はやく食べさせろとぐーぐー主張している。早食いは太る元だから、落ち着いて食べなきゃね。

パンに鶏肉をのっけてもぐもぐとかじる。今日はリックさんの所だけじゃなくて他のブロックのお店も見に行ってみるのも良いかな。魔道フレームも良いけど、多脚型のフレームも興味がある。そういえばエディさんは元気かなぁ？　四足型フレームでぐるんぐるん回りまくって戦ってたけど、あれは僕には真似できそうにない。きっとエディさんは三半規管が猫なみかそれ以上なんだろうなぁ。

もぐもぐと朝ごはんを食べながら思い出す。今更なんだけど、僕ってご飯用意する係りだったっけ。こっちの世界じゃゲームなんて無いから、時間の感覚が分からなくなるまで熱中する事なんて無いと思ったけど、ロボットって凄いよね。

「さてさて…そうと決まれば善は急げだ。ぶらぶら出かけるとしましょうか」

お金の方は金策が結構稼いでくれてるみたいで、軍資金も申し分ない。さすがにルーツは買えはしないけれど、よさそうなフレームがあれば買えるぐらいはある。なので、パーツを買うには十分だろう。まずは多脚型フレームのある北側のブロックを目指すとしますか。

行ってきますと母さんに声を掛け、家を出る。今日は歩かずにバスを使って北ブロックを目指す。通学路とは反対の車線のバス停から北ブロック行きのバスがある。前のバス停を発車してるみたいなので、もうじきバスが来るだろう。バス停には結構な数の人が並んでいて、ちょっとした通勤ラッシュだった。

結構押し合いへし合いしながら、立ったままバスに乗る。料金が安く、歩くよりかなり早いという事もあって利用する人はかなり居る。学園行きのバスも勿論出ているんだけど、数回このラッシュを経験してからは歩いて行く事にしたのだ。セリナ達が痴漢に会うかもしれないというよりも、セリナ達がある意味痴漢じゃなくて痴女だし。バスの中で密着しているのを良い事に、色々とけしからん事を仕掛けてくるのだ。あ、思い出すのは駄目だ。実にやばい。うん、窓の外を見て気分転換しよう。

地下通路を抜けて、北ブロック側の地上に出る。

北ブロック名物の女神像の看板があちこちに目立つようになってきている。まぁ、北ブロックの真ん中にあるわけだから、看板が無くても大体の方向は分かるんだけどね。でもあの縦穴って、最初からあんな風にあったのかなぁ？　フレームで掘って作ったのだとした

ら物凄い労力だと思うんだけど。今度行ったら、成り立ちが詳しく書いてある看板をしっかり見る事にしよう。

窓の外の景色を見ながらそんな事を考えていると、目的地の広場前のバス停に着いた。ここで働いている人も結構乗っていたようで、降りる人が僕の後からぞろぞろと出てきた。ちなみに僕はバスに立って乗る時は、なるべく前のほうに行って前方の景色を見る派だ。何故かこの世界のバスにはつり革が無く、ポールだけしかない。そんなにスピードが出てる訳じゃないからこれぐらいで良いのかな？

ブロックの中心部にあるフレームのお店は、大体が地下にスペースを持っている。地上はお店がひしめきあってるから、あんまり広いスペースをとる事ができないんだよね。それはパーツだけを売ってるお店も同じで、地上にはちょっとしたスペースと看板があるだけで、メインは地下になっている。なんでででっかいビルを建てないんだろうね？

どうでもいっか。僕としては色々見て回れればそれで幸せだしね。開店してるお店を片っ端から冷やかしていくとしましょう！

多脚型のフレームとその関連パーツがひしめく北ブロック。ここを見て回って分かった事がある。なんかコックピットの作りが全然違う！　僕の住んでる東ブロックは人型という事で、トレースモードと術式モードの選択ができるコックピットなので結構スペースをとった造りになっているんだけど、多脚型は違う。術式モードでしか操縦ができない為にパイロットを縛り付ける勢いの狭いスペースの

コックピットなのだ。

主にパイロットに掛かる荷重を軽減する為と安全性を確保する為に、乗り込んでしまえばがっちり固定され、動かせる部分は本当に手の先と足の先。首から上に関して言えばまったく動かすことができない。それだと首を動かして周りの状況の確認ができないんじゃないかなって思ったんだけど、首から上を固定している拘束具が魔法の物で、頭を実際に動かしては居ないのだけど、ちゃんと見回す事ができるのだ。

そして機能だけ考えれば、凄くお高い気もするんだけどトレースモードを取っ払っているせいで、値段的にはそこまで差が無いのが実情だ。これだけ、安全性が確保されているならエディさんがくるくる回っていても、大丈夫だったのに納得できる。

そして、ここで売られているフレームの形。それは本当に自由である。多脚型のフレームだけではなく、むしろ手が何本もあるフレームだったり球形のフレームだったり、ケンタウロスのような人型と多脚型が融合した形だったりと、自由な形のフレームばかりである。うん、これってトレースモードで操縦するのは無理…だよねぇ。人の形してないもん。

でもだからといって、ここにある多脚型のフレームが弱いという事は無い。トレースモードは確かに身体能力が高い人が乗れば、初めて乗った人であってもそれなりに戦えるフレームになるのは間違いない。だけど、術式モードでは身体能力が高い必要はない。手や足を使っていかにフレームに素早く正確に指示を出せるかが問題になるので、僕みたいなゲーマーであっても、いやむしろゲーマー向けの操作方法なのだ。そう、どんくさい人であっても、フレームに乗れば凄い人になれる可能性があるのだ。うん、あそこでずっこけて

る女の子も意外と侮れないライダーかもしれない…って、派手にこけたよねっ!?

「だ、大丈夫?!」
「ふぇっ…」

展示してある商品を回避しようとして、まず柱にぶつかり、よろめいて大きく動いた先にはフレームがあって、そこで後頭部を強打。派手な音を響かせて頭を抑えながら転がりまた最初の柱にぶつかって、自分に止めを刺していた。この間約二秒。なんというか、どんくさい事をしているはずなのに、やけにスピーディにこけている不思議な状態だった。

「凄く頭を打ってたけど、痛いよね? “我に与え給え聖なる奇跡! ヒールタッチ!”」
「え、あのっ、はうっ」

盛大に打ち付けていた後頭部に回復魔法を掛ける。頭の中身までは分からないけれどとりあえず内出血とかはこれで大丈夫だと思う。

「あ、ありがとうございます。もう大丈夫、大丈夫ですからっ」
「そう? じゃあ気をつけてね」
「え、あっ!」

なんか放っておくと、盛大にこけたりしそうな感じだけどずっと見てる訳にもいかないから、ささっと離れることにした。女の子は何か言いたそうだったけど、お礼とかはもう言って貰ったからそれ以上は要らないしね。

別に知らない女の子と話するのが苦手って訳じゃないんだからねっ!

変形！　合体！

北ブロックは多脚型がさかんという事もあって東ブロックとは違うパーツが多彩にある。驚いたのが戦車みたいに砲塔をのっけてる奴があった事だった。砲台という概念が無いのか、砲塔は正面を向いたままだけども。売り文句も“きみも重装型をぶちのこう”と物騒なんだかのんびりしているのか良く分からない文句になっている。あれだけの大口径だと確かに当たれば、とんでもないだろう。ちょっと萌えるね。

あと人気があるのがドリルパーツ。大小さまざまのドリルパーツがあり、多脚型だと尻尾をつけてその先にドリルを付けるのが人気だそうだ。やっぱりドリルって凄いね。そして、ドリルを取り付けるのにフレキシブルに動く尻尾も色々と取り揃えている。ほかにも隠し腕用の折り畳みが可能な腕部や、長大なブレードが一体化している腕や、逆間接の脚部などのパーツが見受けられた。

で、気になったのがセンサーの類を見かけない事だった。そういえばエレメンタルフレアにもそういった物が無かったので、自分で後付けしたんだけどそもそもフレームには無いものらしい。それだと完全に有視界戦闘しかできなくない…？　店員さんに聞いてみた所、魔道フレームにはフレームの魔力を感知する物が積んでるそうだけど、魔道フレーム以外はそういった物は積んでいるのは少ないそうだ。

「うーん…見える位置からのがちんこ勝負が主流って事かぁ」

やばい。レーダーで視界外からのミサイル攻撃なんてする僕は外道も外道じゃない？　確かにレーダーに頼らずに戦う事もできるけど、

結構遠距離からチマチマするのも好きなんだよねぇ。で、接近戦が苦手だと思わせておいて敵が近づいてきたらガンガン接近戦で戦うというのが僕のスタイルだ。

「でも、変形して一気に離脱するとかも萌えるんだよなぁ」

「ですよね！　変形って素敵ですよねっ？」

「へっ！？」

急に話しかけられたかと思えば、さっきこけてた女の子が興奮した様子で話しかけてきた。

「でも、変形するフレームってほとんど無いんですよ。たまに変形フレームありますとか書いてあるお店に行っても、脚が折り畳めるとか、腕が折り畳めるとかその程度なんですよね。がっかりです」

「え、でも脚が折り畳めるならそれは凄いんじゃないの？　そのまま二脚型になれそう」

「いえ、脚が折り畳めるのは単純に長時間移動する時に使う脚をローテーションする為だったりですとか、急な斜面を登る時に使うための予備脚だったりで名ばかりの物なんです」

大胆な変形とかは無いって事なのね。だとしたら今考えてるフレームなんかは、かなり珍しいだろうなぁ。人型から飛行機形態に変形するし。

「それじゃあ、フレームが合体して超巨大フレームになるとかは夢のまた夢かぁ」

「ががが合体っ！？　変形なら分かりますけど合体ってなんです？！」

「え？　五体ぐらいのフレームが変形して、一体の巨大フレームに変形して戦う感じ？」

「どういう感じなのでしょうか…？」

イメージできないのか、腕を組んで悩みだす女の子。

「フレームが脚に変形したり腕に変形したり、胴体と頭に変形してくっつくんだよ。だからでっかいフレームになるの」

「おぉっ！　なるほどぉ！　そんな大胆な変形をするフレームは見た事ないです！」

「いや、僕も見た事は無いんだけどね。で、君だれ？」

なんだか興奮して、ぐいぐい近づいてくる女の子。僕と同じぐらいの年かな？　ローブで顔があまり見えないようにしてるけど、凄く距離が近いので今はよく見える。シルバーブロンドを長く伸ばしていて、澄んだ水色の瞳が忙しくなく動いている。すっとした鼻筋は高すぎず低すぎず、すこし薄めだけど小さな唇は綺麗な桃色で可愛らしい。体型は…スレンダーですね。

「あぁ、すいません。初めまして、サラって言います。フレームが好きで良くお店を見に来るんですが、あまり話しできる人が居なくなってつい…」

「僕は光…アースって言います、よろしくです。えっと、サラさんってフレームが好きなんだ？」

「はい、自分でも作ったりしてるんですけど中々うまくいかないんです。変形できないんです。それに中々同士も見つかりませんし…」

自分でも作るってこの子って、どういう子なんだろ？

「どんな変形をしたいの？」

「最高なのは人型から鳥型なんですけど、四足型から人型になって、最近発明された飛行ユニットで空を飛べたら最高です」

「それぐらいなら、売ってたりするんじゃないの？」
「いえいえ、とんでもない！　二桁のルーツにはそういうのもあるのですけど、市販のフレームではそんな変形する物は無いです」
「二桁のルーツとか見た事ないんだけど、そういうのあるんだ…」
父ちゃんのは三桁だしね。二桁のルーツってのはどんだけ強いんだろうか。しかも変形機構がついてるとか、羨ましいね。

「ルーツ自体珍しい物ですからね。でもこの国には王様がお持ちの「７７７」がありますし、五桁とはいえルーツが売られてますよ。これって凄く珍しいんですよ」
あ、ホワイトファングってやっぱりルーツだけあって有名なんだ。今まで誰も動かせてないから、駄目な意味で有名なのかもしれないけれども。

「隣のハイローディスですら四桁が二機あるぐらいですからね。でも、その隣の国のエルディバには先程言った変形する二桁のルーツがあるんですよ！」
「へぇ…ある所にはあるんだねぇ。変形する所とか見た事ある？」
「いいえ、絵で見た事があるだけです。で、その絵に人型から鳥型に変わっていたのを見て凄くときめいたんです！」
なるほど、エルディバとやらの二桁ルーツは僕の考えている機体と似てるみたいだね。スペックはまったく分からないけどきっと桁違いなんだろう。

「で、コージさんは変形するフレームを探してるのですか？」
「ううん、フレームを作るのに何か良いアイデアが無いかなって、売り場をうろうろしてるだけなんだ。資金も中々貯まらないしね」

「あううう…普通はそうですよねぇ…」

僕の言葉に何か落ち込む様子を見せるサラさん。今の話のどこに落ち込む要素があったんだろうか？

「あ、いえ！　そのぉ…変形するフレームを知ってる人がいて嬉しかったんで、私と同じように変形するフレームを探したり作ろうとしてるのかなぁって勝手に思い込んじゃってて…」

「え？　いや、作ろうとしてるフレームは変形する予定だよ？」

「えぇっ！　本当ですかぁっ！？」

僕の言葉に物凄く食いついてくるサラさん。いろんな形のフレームはあるけれど、変形とか合体とかするフレームって無いもんね。だから、凄い食いついてくるんだろうけど、近い、物凄く近いよ？！

「あ、すみません。つい…」

「うん、ちょっと落ち着いて欲しいなぁ」

セリナ達には耐性がついてるんだけど、やっぱり知らない女の子だと恥ずかしい。話はできるんだよ？　だけど、近づかれるとそれもままならなくなるんだよね。いやはや。

「えっと、良かったら私の家に来ませんか？　できればで良いんですけど、私の設計しているフレームを見て貰いたいのと、アースさんの設計したフレームの設計図を見せて貰いたいなぁって思うんですけども」

駄目でしょうか、と上目遣いで物凄く期待の篭った目で訴えられる。いや、知らない人についてっちゃ駄目って言われてるし、まぁ話しするぐらいならそこら辺のお店に入ればできるんじゃないかなぁ？

「えっと、そこら辺のお店で話をするっていうのじゃ駄目、かな？」
「いいえ、全然オッケーです！　ありがとうございます！　じゃあ早速行きましょう！」
「って、ちょっと待って落ち着いて？　行く、行くからっ！」

逃がしません、と鼻息荒く僕の腕をしっかり抱え込み手近なお店へと引っ張っていくサラさん。うん、スレンダーだけど無いって訳じゃないんですね。でも恥ずかしいからちょっと離して欲しいです、はい。

「せっかく見つけた同士ですから、逃がしませんよぉ？」
「聞いてないよね、僕の話っ」

結局、ぐいぐいと引っ張られながらお店に入った。どこにでもありそうな普通な軽食屋に見えるんだけど、まだ早い時間なのに結構お客さんが入っている。

「はい、二名様ご案内～」

なんか、カップルを見るような微笑ましい視線を投げかけないで下さい。さっき知り合ったばかりの人なんですからね？

「え、なんで隣に座るの？」
「ん？　おかしいですか？　こっちの方がお話しやすいじゃないですか」
「いや、それで良いなら別にいいんだけど…」

最初のおどおどした感じが嘘のように人懐っこい。そして、サラさんに通路側に座られるとなんというか捕まった気分になる。

「で、アースさん。これちょっと見て貰えますか？」

そういって、どこからともなく設計図をテーブルに置く。どこかに圧縮してしまってたのかな？　サラさんの顔を見るとすごくうれしそうである。

「…これは、フレームの設計図かな？　所々抜けがあるみたいだけど…」

「はい、私が考えました。小型エンジンを三基搭載しています。なんで三基も積むかといいますと、これ内緒なんですけどね」

そういって周りを見渡して、さらに近づいてくるサラさん。

「三位一体理論と名づけたんですけど、三基のエンジンをこう配置すると莫大なエネルギーを生み出すんですよ。しかも小型エンジンの八型でないと効果がでないのでほとんど知られてないんです」

「小型八型ってほとんど出回ってないんじゃなかったっけ…」

「ですね。なので知ってる人が居ないんだと思います」

サラさんの設計図をよく見てみる。確かに小型エンジンが入るスペースが三箇所ある。胴体部分に三角形の頂点を下にする感じで配置している。むむむ。何かあった時に胴体と足にエンジンを分散する案を考えていたんだけど、せっかく三基積むならそれは勿体無いのかな。

「でも、普通に八型が三基あるだけで結構な出力になると思うんだけど、どうしてさらに出力を求めるわけ？」

何か大きな武装を積むのかなぁ？　と疑問に思った事をサラさんに

聞く。するとサラさんはなぜか恐る恐る答えてくれた。

「…それはこの翼です。これを鳥みたいに羽ばたかせる事によって空を飛ぶ予定なんですけどどうしても機体の重さを軽減できないので、出力はあればあるほどありがたいんです」

「なるほどぉ…」

羽でフレームを飛ばそうとするなら、確かに出力はどれだけあっても足りないぐらいだよねぇ。ていうか、この子飛行フレームは見た事ないのかな？

「アースさんは笑わないんですね」

「何か笑う所あった…？」

「フレームに羽を付けて飛ばそうと考えているって言ったら、皆が皆それは無理とか頭のおかしい子みたいに言って笑うのです」

「空を飛びたいから、鳥の形を真似するっていうのは別におかしくないと思うんだけどなぁ」

「やっぱり同士ですね！　話して良かったぁ」

よっぽど嬉しかったのか、僕に飛びついてくるサラさん。そして、そんなタイミングで注文した飲み物を持ってくるさっきの店員さん。並んで座って抱きあってる僕たちを見て、ほどほどにねという視線を投げかけてくる。

「ごゆっくりぃ」

誤解なんです、店員さん。

その後は、さらにフレームについて話をした。操縦方法の議論や、パーツの組み合わせによる相乗効果などをサラさんが教えてくれた

ので、僕も”ドゥエーリン“の事を教えてあげた。どうもサラさんはかなりフレームのお店に通っていろいろ試しているようで、僕よりかなりの知識を持っているようだった。

おかげで僕のフレームの改良案も色々出てきた。そして、僕を家に招待しようとするサラさんにまた明日設計図を見せる約束をしてその日はなんとか別れた。

試練のためのその一

やってきましたベノア村。くそとかげ事竜王の試練をクリアする為に、とにかく毎日村に来ては適当にうろうろして、困ってる人を見つけては一緒に解決するようにしてる。だけど基本的にここの人ってお酒があれば幸せな所があるので、酒絡みの問題が多い。

飲む相手がいないだのつまみがないだの、飲むネタがないだのそんなのばっかりだ。でも仕事も鬼のようにするからこの人達は、どこか憎めない。

僕の試練の為に竜王が村にやってきた事を知っている村の人たちは、気軽に試練がんばれよーと声をかけてくる。なんというか、竜王の試練を受けるという事はある意味仲間だと認められている事のようで、どの人もえらくフレンドリーだ。フレンドリーすぎて酒をすすめるのは止めて欲しいけども。

「おーし、そこで素早く炉に入れろ。そうだ」

そして話の流れで、ハンマー片手にカンカンカンと鋼を鍛えている。

「で、素早くいけ。金属におまえが求めるものをぶつけろ」

よく切れますように、よく切れますように！　力を込めて同じ方向へ流れるようにハンマーで鋼を整えていく。熱しては叩き、熱しては叩き。臨時師匠のエンジさんの工房にいる事も忘れて一心不乱に鍛えていく。叩いているとなんとなく、鋼に隙間があるのが分かってきたので、隙間を無くすようにガンガン行く。

「ふむ」
「こんな感じでどうでしょうか」
「悪かないな。ただもう少し繊細に扱え。叩いてる間は気を抜くな」
「はい、わかりました」

そうしてエンジさんの指導の下、鍛冶の手伝いを続けていった。

「で、ついでだ。ドワーフの技というのを見せてやる」
「はいっ」

エンジさんが持ってきたのはチタンの鉱石。しかも山ほど持ってきた。そして、おもむろに鉱石を叩き出す。ん？　炉にくべなくてもいいの？？？　僕の疑問をよそに真剣な表情でコンコンと鉱石を叩く。しばらく、そうやって叩いてエンジさんは満足したように僕のほうに鉱石をつきつけた。

「ほれ」
「はい。…えっとこれがなにか？」
「よく見てみろ。それが分かれば大したもんだ」

とは言っても、なんだべさ？　コンコンコン叩いてただけで、これといって特に変化は見られない。至って普通のチタン鉱石だよね。あれっ？　こんなに偏って集まってたっけ？　不思議なものを見る目でエンジさんと鉱石を見比べる。

「ま、そういうこった。こうやって石の声を聞いて動かせる。ただ指先が器用なだけじゃないってこった。がっはっは」
「ほへー…こいつぁファンタジーだなぁ」

いったいどういう物理現象なんだろうねぇ？　めっちゃ不思議。ゲ

ームで言うなら種族特性とでも言う所でしょうか。鉱物から狙った物だけ寄せるとか便利だよね。

「でも、これは僕には真似しろって言われてもできません！」

「当たり前だ！　ただの自慢だ」

「エンジさんひどいっ」

わしよりハンマーさばきが上手いからだ、とか言ってがははと笑う。なんか適当な事言って誤魔化された。でもうらやましいなぁ。まぁ、僕はチタン鉱石を大量に集めて持ってくればここの人達が、じゃんじゃん精錬してくれるのは間違いないね。というか、仕事を持ってきたほうがここの人達もお酒を飲む時間がほどよく減って良いかもしれない。

「コージ！　もういいか？　はやくいこうぜ！」

ドバンと扉を勢い良く開けて入ってきたのは、いたずら小僧のドワーフ。

「シャトラ！　こっちに来んなって言ってるだろうが！　おいコージ行っていいぞ」

「はいエンジさん。シャトラ行こっか」

エンジさんは声が大きくて乱暴な口調だけど、特に怒っていません。これがデフォです。ちなみにドワーフには幼名というのがあるらしく、成人の儀をするまではその名前を名乗っているそうだ。ちなみにエンジさんの幼名はペシャ。なんというか幼名って可愛い感じのが多いみたい。

「おい早くいくぞコージ」

シャトラ君は生意気そうな顔をしているドワーフだ。実際、すっごく生意気なんだけどちょっとお馬鹿なところがあるから憎めない仕様になっている。というか、基本的に口調が悪い人しかいないよね。

「はいはい、慌てて行くとこけるぞー？」
「そんな鈍臭くねーよ！　あっ！？」

うん、こけてないけど家にぶつかってるね。思い切り肩をぶつけて泣きそうになっているシャトラをおぶって村はずれに向かう。そこで悪がき達が待っているはずなのだ。

「おーい、お待たせぇ～」
「おそいっ！」

こちらを見つけて駆け寄ってきて、怒り出すミーシャちゃん。悪がき達のボスはこの子だったりするから驚きだ。ドワーフの女性って意外と可愛いのでこのミーシャちゃんも小さいし中々可愛らしい。でも、態度も物凄く可愛い過ぎるので、あまりの可愛さにぶんぶん振り回して放り投げたら懐かれた。

「はやく抱っこしろ！　シャトラは捨てろ！」
「そんな悪いことを言う口はこの口かぁ！」
「いらいいらいっ！」
「あ、コージが来たぞ！　おーい！　遊ぼうぜぇ～！」

パワフルな子供たちがわらわらと寄ってきた。子供といって侮ることなかれ。力は強いわ頑丈だわ、すばしっこいだわで複数まとめて相手するのはかなり疲れるのだ。

「おいシャトラ、なんでおんぶして貰ってるんだよ？　変われよ」
「コージなんでシャトラおんぶしてんだ？　鬼ごっこのハンデか？」
「はやく抱っこ！　はやく！　はやく！」
「おれ、走るの苦手だ。石投げたい」
「あーそーぼーーーーー！」

子供たちが口々に騒ぎ出す。これがカオス状態ってやつだね、いっせいにあれこれ言われても僕は聖徳太子じゃないんだから聞き取れる訳が無い。

「ストーップ！　すこし静かにしなさい！　いいか、これから君達に試練を与える！」
「お、なんだなんだ？　新しいな」
「試練って、竜王様の？」
「コージの試練はわたしを抱っこする事だ、はやく！」
「俺できるかな？」
「あーそーぶーーーーー！」

こいつら人の話をろくに聞かない。だけどそれが普通だから怒らない。そして、ガキんちょ達が耳を傾けるように小声で指令を与える。

「綺麗な石を探してくる事、制限時間は三十分。一番綺麗な石を持ってきた子は、ぐるんぐるんどかんだ」

ひゃーだのひゅーだの、きゃーだのと僕の指令を聞いた子供達は一斉に山や川へと向かっていく。ぐるんぐるんどかんとは、文字通りぐるぐるジャイアントスイングで振り回し四十五度の角度で空へ打ち出すダイナミックな技だ。ドワーフバリスタなんてできるぐらいだから、子供の頃からこれぐらい飛ばしても大丈夫なのだ。僕にとってドワーフの子供は軽いので、勢い良くすっ飛んでいく。

「シャトラ、まだ痛いか？」
「んー…もうちょっと」

すこしうったぐらいで回復魔法とかしてたら、過保護かなと思って自然治癒に任せてるんだけど、シャトラもこれで中々甘えん坊なのだ。普通ならあれぐらいの打ち身なんて、すぐに忘れて遊びまわる筈だからねぇ。

そして、子供達が探し回っている間にちょっとぐるんぐるんどかんの替わりになりそうなものを作る事にする。倒木をずるずると持ってきて適当な大きさに切り出し、子供が座れそうな程度くり抜く。適当な太さの枝をこれまた適当に切り分け、くり抜いた木に突き刺す。これで簡単だけど乗り物の完成だ。

そして乗り物より少し大きめの倒木を使って台を作る。台の上に乗り物を乗せて、倒木でぶっ叩くと、勢い良く飛んでいくはず。少々荒っぽいけど、それがまた喜ばれるのを知っているので、これでいいのだ。

事実、作業中ずっと背中に貼り付いていたシャトラは、目を輝かせてわくわくしている。

「コージ！　はやく抱っ…シャトラずるい！　降りろ！」
「いやだ！　今日は降りない！」
「ボスの命令だぞ！」
「う…ボスの命令は絶対だもんな。ちぇ」

なにかそういうお約束事があるみたいで、カオスで奔放な子供達だけどしっかりと守るべきルールはあるようだ。というか、ボスの命

令ってどこで覚えてくるんだろうね。

「さぁ！　抱っこすると良いぞ！」

「はいはい。ミーシャちゃんは青い石持って来たのか。中々綺麗だねぇ」

「当たり前だ。宝物だからな！」

鼻高々なミーシャちゃん。さすがドワーフの子供って事かな。普段からやっぱり石とかを探してたりするんだねぇ。ミーシャちゃんが帰ってきてからぞろぞろと続いてほかの子供たちも帰ってきた。そして、僕が作った乗り物を見て一様に期待した眼差しを向けている。良かった、気に入ってくれてるようだ。だけど、飛んで行ったらもっと楽しいよ？

「さて、みんな綺麗な石を集めてきてくれたようで、お兄さんはとても嬉しい。そこで今日はぐるんぐるんどかんじゃなくて、ホームランストライカーに乗せてあげよう！」

「「「「「おー！」」」」」

よく分かってないけどとりあえず乗ってくれる子供たち。うん、空気読んでくれる子達でよかったよ。そして、石を持ってきた順番にホームランストライカーに乗せる。

「じゃあ、行くからしっかり捕まってろよー！」

「はーい！」

「そおりゃっ！」

ゴスッ！　ヒューーーーーーーーーー…

あ、ちょっとやり過ぎた。

試練？　そういや忘れてた

ドワーフ。

小説やゲームでも良く出てくる、手先が器用な鍛冶や細工をさせればぴかいちの腕を誇る種族。厳つい見た目でだいたい背も低い。で、ドワーフの女性っていうのはあまり聞いた事がない。よくある説明としてはだいたいそんな感じ。

「うぉおおお、次、おれっ！　おれっ！」
「俺もホームラン」
「ぴゅーって消えたよ！　消えたっ！」
「お～…」
「どんだけ飛ぶんだよ、すっげぇ！」

飛んでいったミーシャちゃんは帰ってきません。だけど、遠くで笑い声が聞こえてくるので大丈夫でしょう。加減を忘れて打ち抜いたホームランストライカーは、ものの見事に放物線を描いて山に激突したようだ。たぶん、乗り物も壊れたなあれは。元の世界であれば重大事故間違いなしのこの出来事も、ドワーフのお子様達には人気アトラクションでしかないようで、今の一発で目を輝かせて乗り物をガタガタ揺らして催促してきた。

「ロンダ、用意は良いか？」
「おう、はやくしろコージ！」
「よーし、ぶっとべおらぁ！」

口汚く掛け声をかけてロンダをベノア村の空へと打ち上げる。いってらっしゃい、加減はせずにむしろフルパワーで行ったから存分に

楽しんでくれ。そして、目を輝かせる子供たちを待たせるわけにはいかず、どんどん子供たちを空へ打ち上げていった。

「コージ！　乗り物壊れた！」

ミーシャちゃんが、勢いよく帰ってきた。予想通り泥だらけである。怪我も打ち身もまったくない様子はちょっと想定外だけど。子供って体が柔らかいからある意味大人より頑丈なのかもしれない。

「壊れても持って帰って来てよ?!　作るより修理の方が簡単なんだから」

「また飛ばしてくれたら、次持って帰ってくる！」

「予備なんて無いからっ！?」

はぁ仕方ない、ちょっと行って帰ってくるか。ちょっと弾みをつけて空へジャンプし、そのまま魔法を唱える。

「“炎よ！　我が身を助け我が意のままに天を駆け登れっ！　ツインジェット！”」

「あっ！　コージ、飛んでる！」

「ちょっと取ってくるから、大人しく待っててよ」

まっすぐ、ホームランストライカーの着地点に向かって加速する。山肌に残骸が転がってるのを見つけたので、魔法を解除しあとは慣性で現場に到達。勢いが良すぎてちょっと土煙が上がったのはご愛嬌。うん、あいつら壊れたらそのままほったらかしだ。ぽいぽいと指輪に収納し、転移魔法で戻る。

「ただいま」

「あれっ？　なんで、どうして？　コージどこから出てきたの??

？」

「おーいコージ、乗り物こわれたーーー！」

急に現れた僕にびっくりするミーシャちゃん。そして大声を上げながら戻ってきたロンダくん。力任せに打ち上げたけど、どこも怪我無いね。頑丈すぎるやつめ。とりあえず、壊れた乗り物を指輪から取り出し、修理する。フレイムの魔法で焼きを入れ、次は壊れにくいように強化魔法を刻み込んで耐久性をぐんと上げてみた。

「ん？」

気付けば子供たちが興味津々で僕を見ていた。そうか、ドワーフって魔力はあっても魔法を使える人って居ないらしいから魔法が珍しいんだね。うむ、尊敬の眼差しで見てくれたまえ。

「コージ、魔法見せて」

「うん、もっと派手なやつが良い」

「さっき空飛んでた！　足から火がぼーぼーだった！」

「魔法初めて見た」

「空飛びたい！」

シャトラが魔法を見せてと言い出し、ミーシャちゃんが僕が空を飛んでたとバラしたせいで、順番に魔法で空を飛ぶ事になった。せっかく強化したホームランストライカーが…まぁ、こっちの方が楽といえば楽なんだけどね。十メートルぐらいの高さまで上がって落とすだけだし。うん、間違いじゃないよ？　なんでか高く飛んだら子供達は皆落ちたがるんだよね。痛くないのかなぁ…

「そろそろご飯の時間だね。皆お家に帰りなさい」

「えぇ～！？　まだだって！　もっと飛びたい」

「ご飯より飛ぶ」
「お昼ご飯なにかなぁ～」
「おう！　じゃあ食ってくる、逃げるなよコージ！」
「あ、待ってお兄ちゃん！」

自分が空腹だったことに気付いて勢い良く走り出す子や、まだまだ遊びが優先な子、なぜかそのままへたり込んで眠りそうになる子がいたけど、全員家に帰るように促した。よし、次は食堂へ行くぞ！

「ゴドックさん、お待たせ！」
「おせーぞ、コージ！　はやく入りやがれ」

普通ならここですいませーんと謝る所なんだけど、前に謝ったら何謝ってんだと不思議そうな顔をされた。なんというかドワーフの人たちって常に文句を言ってるような口調なんだけど、単純に口が悪いだけで怒ったりしないみたい。

「来たな！　ピリ辛を食わせろ！」
「そうだそうだ！　はやくしろぉ～」

昼間から酒飲みさんばかり。うん、酒場はないんだけど食堂がある意味酒場みたいなもんなんだよね。だって、お酒を出さない店って無いんだもん。なので、お酒に合いそうなピリ辛のつまみをあれこれ作ったら好評だったので、昼間はここで大量に料理をする事にしている。

「みんな仕事はどうしたのさ、仕事は」

「こないだの恵みのおかげで、たんまり働いたじゃねーか！　こまけぇなコージは」
「まだ掘ってる奴もいるけど、エドガーはなんか注文受けてるんだっけか？」
「あーあいつは酒も飲まんと、仕事ばっかりしおってからに。たまには飲みに来いってんだ！　あの偏屈野郎め！」

いえ、ゼンルトさん。世間一般的にはエドガーさんの方が褒められる事はあっても非難される謂れは無いと思いますよ。肉と野菜のピリ辛炒めをつくりつつ、すっぱ辛いスープも仕込んでおいたので、仕上げていく。ドワーフさん達って肉ばっか食ってるイメージがあるから、野菜もこういった形で取らせないと早死にしそうだ。

こうやって騒いでいる人達ばかりだけど、なんだかんだ言って不眠不休でさっきまで働いていたのだ。思い切り働いて酒を飲んで、死んだように寝るというのが生活パターンのようでエドガーさんのように、毎日ちゃんと酒もちょっとしか飲まずに働く人はごく少数だ。でも本当、酒を水みたいにがばがば飲んでるなぁ。

「コージ、お前も飲め！　ガキじゃあるめぇに、酒も飲まんでどうする！　うちのロンダですらもう飲んどるんだぞ？！」
「ちょっ、何飲ませてるんですかぁっ！？　ロンダはまだ子供でしょうが！」
「あいたっ！　客に手をあげるたぁ良い度胸だ！　お、やるかぁ？！」

ロンダの父ちゃんガバックさんがロンダに酒を飲ませてると知って、思わず頭を叩いてしまう。でも、ガツンと言っておかないと駄目だよね？

「そんな事を言うならシラフに戻しますよ？　良いんですか？」
「すまんかった」

酔っ払ってるのをシラフに戻されるのは、すごく辛いらしい。毒消しの魔法では酔いは醒めないけどパーフェクトヒールなら醒めるんだよね。酔い覚ましの為にかけるとか僕ぐらいしか居ないと思うけど。

「はい、できたよ。食べて食べて」

できたピリ辛炒めを、素早く配膳する。みんな嬉しそうに食いついてくれるから、作った甲斐がある。なんかがっついてすぐに食べてしまう感じに見える人達ばかりだけど、意外とそうでもなくてつまみをパクッとして、酒を飲んでうまそうにしてる人や、ちょこちょこつまみを食べて、思い出したかのように酒をあおる人。見た目は荒っぽい人ばっかりなんだけど、じっくりと楽しみながら食べたり飲んだりしてるようだ。

まぁ、こんな見た目の人達だけど細工物とかは本当に凄いものを作る。小さい物から大き目の物までなんでも作るんだけど、そのどれもが非常に細かい造りで繊細な作品ばかりだった。人によって得意分野は違うんだけど、どの人も恐ろしく精緻な物を作り出す。お酒を飲んでる時は、本当にダメオヤジっぽい人にしか見えないんだけどなぁ。

「おいコージ、しみじみした目でこっちみんな。酒がまずくなる」
「はっは、大方ガバックの細工でも思い出してんじゃねーか？　その顔であれができるんだから、コージが不思議がるのも無理はねぇって」
「おめぇも似たような顔をして何言いやがる！　それに、こまけぇ

やつはおめぇの方がうめぇじゃねぇかよ！」
「そこはほれ、徳の差って奴か？　はっはっは！」

うん、どっちもそんな顔であんな凄い物を作れるとか見るまで信じられなかったからね。ガドさんにしても、ドゥエーリンを使ったとはいえあれだけの物を作れるんだからなぁ。なんか、この人たちが本気で作った武器とかを見てみたい気がする。いわゆる伝説の武器って感じの物ができあがりそうだし。

「あ～酔ってきた。もう駄目だ、俺は俺は…おかわりっ！　だーっはっはっは」
「だから、おまえは細けぇ事を気にしすぎだっての。だれがわざわざそんな所まで見るってんだ？　あ、あら？　また口で負けそうになったからって分身すんなってぇの！」
「おーい、この不味くてすっぱい奴おかわり！」

…駄目な方に伝説を残せるかもしれない。

ブロック対抗戦へ

パンツ無双のおかげでセシリアと仲直りし、その勢いでバルトとも和解できた。なんだかんだで一週間以上喧嘩していたんだけど、もっと長い間仲違いしていた気がする。セシリアとバルト以外とは普通に話ししてたんだけど、やっぱり気まずいのは気まずかったしね。しかも喧嘩している間も実習があったから、ものすごーく嫌な空気の中で遺跡を周る羽目になって非常に胃が痛かったっす…

あ、ちなみに今までテストとかもありましたが真面目に勉強にいそしんでる僕にとって点が取れて当たり前なのです！　…えーっと本当の事を言うと、トリックスターの面子って能力高い面子ばっかり集まってるから、僕だけ下手な点が取れないという緊張感からテスト前にはめちゃめちゃ一夜漬けで勉強しているおかげです。

「ほいで、コージよ。今日はいよいよ前に言ってた技を教えてくれるんやろ？」

「うん、時間があったからマニュアルも作ってきたしそっちも見てね。最初に技を見せるから、マニュアルと僕の動きを見てそこから覚えてみてね」

本当は仲直りしてすぐに教える予定の技だったんだけど、色々あったせいで時間があったのでマニュアルも作ってみたのだ。図解付きだからわかりやすいと思う。ハルトにセシリアにレイ、それぞれに専用のマニュアルを渡す。それぞれが渡されたマニュアルを真剣に見ている。先にどういう技を教えるか言ってあるので、どういう物かマニュアルを見ながら型をなぞっているみたいだ。

「えっらい細かいなぁこれ。ようここまで細こう書けたなぁ」

「そうよね。しかもコージ流の改良できそうな所まで書いてるのが、またなんとも…」
「でも、よく考えて選んでくれてるよね。おかげでストッパーの役割がしやすくなるよ」

僕だってそれなりに考えたからね。これで技を覚えてくれれば僕とハルトが組んでも、レイとセシリアが組んで貰える。セシリアもそれなりにストッパーの役割ができない事もないんだけど、やっぱりレイの方が一枚上手だ。でも、セシリアには一撃が無いのでジリ貧になる事が多い。かと言って僕とセシリアが組めば、セシリアの出番はほとんど無くなる。

「それにそろそろブロック対抗戦があるし、対人戦も想定しといた方がええしな」
「あれ？　ブロックの順位って遺跡の売り上げで決まるんじゃなかったっけ？」
「それもあるけど、やっぱり直接対決もあるのよ。大体が三年生が中心になるんだけどね」

三年生っていえば、サカキ先輩が居るよね？　あの人ってかなり強いって評判じゃなかったっけ？？？　それなら大丈夫じゃないの？

「生徒会の役員とか風紀委員、ベルスイートの三つの組織のトップはくじで別れる事になってるの。でないと、東ブロックが有利になっちゃうでしょ？」
「へぇ、そうなんだ。なんだかんだであの人たちって優秀なんだね」
「そういう事を言うおまえが怖いわ」

別に馬鹿にしてる訳じゃないんだけどなぁ。エイジス先輩とサカキ先輩とは戦ってみたいから別のブロックになって欲しいとは思うけ

ど。

「でも、ブロック対抗戦って一年生も出れるの？」

「代表選抜に勝ち残れればな。ブロックからは五組のパーティしか出れん」

あ、カマチ先生がそんな事言ってたね。言われて思い出したよ。でも良く考えれば全部のパーティで総当たり戦みたいな事してたら時間かかって仕方ないよね。

「一年が出れるのは稀。上級生は一癖も二癖もある」

「それに、クラスメイトにもライバルはおるで」

「だね」

悪いけど、セリナやミミに白夜も対抗戦では敵だ。ヒロコは戦わないからあれだけど。でも、セリナ達と戦ったりするのは久しぶりだ。ひょっとしなくてもかなりの強敵だから気が抜けないよね。

「まぁ、コージの嫁はコージに任せるで」

「そうよね。コージのお嫁さん達はちょっと手に負えない感じの人達ばかりですものね」

「じゃあ、私は別のパーティに入れて貰わないと」

「まだ嫁じゃないからね？　しかも、さりげなく複数系で言うの止めてよね？　エリーはエリーで何言ってるの？！」

内心、闘志を燃やしているというのにこの水の差しよう。でもたまには他の人もセリナ達と戦ってみるのも良いんじゃないかなぁ。ハルトはミミと戦うと勉強になると思うよ。

「でもコージのお嫁さん達って正直、一番戦いたくない相手だよね。

一体、何をどうすればあそこまで強くなるんだろうね？」
「だが、そんな嫁達もコージの方が強いと言ってるんだろう？　正直この天然がそこまで強いようには見えないんだがな」
「もう君達は一度彼女たちと戦ってきなさい。嫁扱いするなら夫婦喧嘩させんな！」

確かにセリナ達には勝てるんだけど、いっつも死にそうな思いするぐらいギリギリの戦闘になるんだよ？　見栄張って平気な顔してるけど、正直胃が痛いです。

「うん、受けて立つ。来なさい」
「エリーはそのネタいつまで引きずるのっ？！」
「！」
「いや、そんな胸を張ってドヤ顔されても…」

最初の頃のセシリアの後ろに隠れていたエリーが懐かしいよ。あの頃は人見知りなのかと思ってたんだけど単純に猫を被ってたのね。セシリアの友達なんだから、普通なわけないよね？

「あいたっ」
「今、とっても失礼な事を考えたでしょ。顔に出てたわよ」
「いやぁ…あはは」

ハリセンですぱーんと叩かれてしまった。前に僕が使ったのを見て気に入ったらしい。派手な音が出る割に痛くないし、つっこみには最適だよね。

「ま、せっかくコージに技を教えて貰える訳だし対抗戦でお披露目できるように頑張るとしよか」
「コージ、私には無いの？」

「いや、エリーは剣を持って戦わないよね…？」
「おまえは嫁にプレゼントもできないヘタレなのか」
「いや嫁なんてまだ居ないから。分かったよ、何か魔法を考えたら良いんでしょ？　ていうかキャラ変えすぎ」

わざわざ椅子の上に乗ってまで僕を見下ろす必要は無いよね。とりあえず、対抗戦があるというなら、しっかり準備しておかないとね。というか、演習場の心配しないとね。僕とセリナ達が戦うと周りの被害が甚大だもん。どれぐらいまで大丈夫かカマチ先生に聞いておこう。

そういや今頃金策やフレーマーはどうしてるのかな。あいつらも訓練というか鍛えててくれたら僕の経験値もぐんと上がるんだけど、金策はともかくフレーマーはご飯も食べずにフレームをいじってるかな。僕たちにも対抗戦が始まるまでちょっと手伝って貰おうかなぁ。とりあえず、今どうしているか調べる為に指を立ててちょっとロードする。金策は試練の為にがんばってるけど、フレーマーはなんかデートしてるっ!?　でも、なんかデートはデートだけど変な子に捕まった感じかな？　なんにせよ頑張れ僕、骨は拾ってやる。

「コージッ、お嫁さんだよっ」
「ほわぁ!?」

いきなり背後から柔らかく包み込まれる。これはミミだなと思って後ろを振り向くと今度は前からも捕まった。なんという時間差攻撃か。

「ミミ、コージが困ってますよ。すこし離れたらどうです？」
「家の中じゃ喜んでくれてるから大丈夫だよ？　セリナこそ恥ずかしいなら離れたらいいのに」

「ふふっ、そうですね」

そういってあっさり離れたセリナだけど、余裕がありそうな台詞とは裏腹に顔は非常に真っ赤で潤んだ瞳でこちらを見ている。離れても暑いのか、ぱたぱたと服の胸元を開けたり閉めたりしてこちらをチラチラと覗き込んでくる。なんというか恥ずかしがってるセリナって、非常に可愛い。

「マスター、にやけすぎー。想像しすぎで鼻血出しちゃだめだよ？」
「いやっそのっ、何を想像するんだよヒロコ？！」
「だからナニを」
「ナニって何？　コージ？」
「女の子がナニナニ言うんじゃありません！」

間違って丁寧に「お」を付けて言われたりしたらとっても駄目だよね。いかん、こんな事を想像したらヒロコの思う壺だ。現在進行形でミミが背後からむにゅむにゅしてきていてセリナが恥らう乙女で何かが突き抜けそうだ！　ヒロコめ！

「ミミはちょぉっと離れてね？　鼻血出るから。で、皆どうしたの？」
「いえ、コージの嫁と連呼されてたようなので気になりまして」
「うん、呼ばれてるのかと思ったの」
「コージの嫁はわたしが居れば十分。セリナ達は戻って良い」

エリーはどこまで突っ走るんだろう…？　それは非常に危険なボケですよ？

「コージ？」
「コージさん？」

「いやっ誤解だって！？　何もしてないし、何もないからっ！」

ひさしぶりにセリナのさん付けが来た。やばい黒いのが出るっ！

ヒロコ！　笑って見てないで助けてっ？！　なんか浮気が見つかった駄目男みたいな言い訳しか口から出てこない。だけど、本当に何も無いんだからそれ以上言いようが無いっ。

どこを見ているか良く分からない目で僕とエリーを視界に収めてるはずのセリナ。その仏頂面というか無表情は非常に怖いんですが。

あぁ、でもトレイルさんとかはこの無表情セリナを相手に今まであんな軽口を叩いてたんですよね、なんというか非常に尊敬します。

今あなたの凄さがポーズだけでないってのが非常に理解できました！

「コージィ？」

「な、なにっ？」

「その子とは誤解ってさっき言ったよね？」

「はい、言いました」

「じゃあ、私たちとは誤解じゃないってちゃあんと言おうね？」

ミミのその台詞にざわっと色めき立つ教室内。なんだよ、興味ない振りしておいてしっかり聞いてるならこの修羅場を誰か止めてよ？！

「えっと誤解じゃないっていうのは具体的にどういう事を…いやっ言わないでっ言っちゃ駄目っすミミさん！」

「毎晩、一緒に寝てますし一緒にお風呂にも入ってる仲ですよねっ！」

「そこでなんでセリナが嬉々として答えちゃうかなぁっ！？」

はっ！？　迂闊にもセリナの台詞を肯定しちゃう事を言ってしまった。やばい、教室内の空気が非常に重い！　ここは逃げるしかない

っ！

「あっ！　逃げたぞ！　追えぇえええ！」

「待てぇえええええっ！」

なんか師匠の気合の篭った声も聞こえてきた気がするけど、気のせいだ！　全速力で逃げよう！　どこまでも逃げ切ってやる！！！

「これでコージに変な虫が付かなくて済みますね、ミミ」

「うん、良かった良かった」

「不公平、ちっとも良くない」

虹ふたたび

「そこのあなた。騒々しく走るのは止めなさい」

もう少しで追っ手を振り切れるかという時に、凛とした声が僕を止めた。色気あるど派手なレインボー先輩だ。だけど、ここで止まったら捕まる！

「すいません、急いでるんで！」

「あら、私から逃げる後輩は久しぶりですね。では遠慮なく」

どことなく楽しげでなんか物騒な気配を感じるけど、あの人って何する気だ？！

「まずは足止めね。“土よ！　大地に呼べ束縛する力！　スロウエリア！”」

「うのっ！？　なにこれっ！」

なんか、急に足が泥沼にはまったかのように動きづらくなる。周りを見渡しても特に変化したところは無い。だけど、急いで脱出しなきゃやばい気がする。

「反省しなさい。“土よ！　大地に解き放て腐敗する力！　ポイズンフィールド！”」

「痛い痛い？！　地味に痛い！」

足止めを食らって、毒の沼ならぬ毒の廊下が出来上がった。歩くたびに痛いし素早く動けないとか、じっくり痛みを味わえって事ですか。この人、魔法の使い方がえげつなくない？　そんな事を思って

いると、胴体に何かが巻きつく。…鞭？

「捕まえましたわよ。観念なさい？　風紀委員長の目の前で、警告を無視して逃亡しようとした罰を与えますわ」

「いや十分すでに痛い目に遭ってますからっ？！」

レインボー先輩と争っている間にクラスメイトが追いついてきたけど、僕と先輩を遠巻きに見てるだけで近づいてこない。なんかしてやったりという雰囲気が漂っている。まさか、誘導された？！

「…それに、地味に痛いとおっしゃいましたわね？　私自分の魔法が地味と言われる事が非常に腹立たしいと感じるのですよ？」

「ひぃっ」

めちゃくちゃ怒ってらっしゃる！　魔法は地味でも見た目が派手だからバランス取れてて良いんじゃないでしょうか？

「尚、見た目が派手だから調度良いと思ってる方を見ると、無性にいじめたくなるのです。今、いじめたくなったんですけど、そこら辺はどうなんでしょうか？」

「全然これっぽっちも女王様とか思ったりしていません、あ痛っ！？　痛い痛い！　なんか僕失礼な事言いましたかぁ？！」

「いいえ、反省してないようですので少し痛い目に遭って貰ってるだけです。それと誰が女王様ですか」

鞭が体を締め上げてくるわ、毒の廊下は痛いわ、まともに動けやしないわで踏んだり蹴ったりだ。この人風紀委員長って言ってたけど絶対まともじゃない！　うん、逃げよう。

「“炎よ！　我が身を助け我が意のままに天を駆け登れっ！　ツイ

ンジェット！”」

「なっ？！　逃げる気ですか！」

金策ありがとう！　君の空飛ぶ魔法は非常に役に立つよ！　この魔法だと鞭で僕を制止する先輩ごと引きずって、廊下から浮き上がる事ができる。なんとか僕を制止しようとしている先輩をノロノロ毒廊下に引っ張ったのを見計らって「ギル」で鞭を両断する。

「風紀委員長だからって、そんな危ない魔法は駄目ですよ？　しっかり味わって下さいね。それと走らずに飛んでるから良いですよね？」

「このっ、良い訳ないでしょう！　待ちなさい！」

「失礼しまーす！」

ちょっと廊下を走ってただけで、あんな痛い目に遭わせるとかどんな風紀委員だ。さらに罰を与えるとか恐ろしいよね。これ以上関わると非常に痛い目に遭うだけだろうから、とっとと逃げる事にしよう。

「ひどい目にあった」

教室に戻ると、にやにやして僕を見てる人達がいた。腹が立ったからその人達にあかんべとしておいて席に座る。そして、あんな目にあった僕としては癒しが欲しい。

「わふわふの柴犬を愛でたい。あのつぶらな瞳で見つめられたい…」

「シバイヌって何？　ミミってシバイヌになれる？」

うん、柴犬は犬だからミミには成れないからね。僕を慰めてくれようとしてるのは分かるんだけど、もうちょっと自分を大事にしよう。

「お母さんの変身グッズの中にもがっ」

「うん、それ以上言っちゃ駄目だからね、ミミ」

こくこくと頷くミミ。意外と鋭いところをついてくるよね。でも、母さんの変身グッズというか父ちゃんの趣味のコスプレの中に入ってもおかしくないよね。だけど、僕は柴ワンコと遊びたいのであって、コスプレを楽しみたいわけじゃないんだ。す、少しぐらいなら付き合っても良いけどねっ！

「よぉ、ご苦労さん。おまえ見てるとほんま飽きへんわ」

「そいつはどうも。あんまり笑ってると見物料とるよ？」

「すまんすまん。ほれ、あいつらを見てみぃ。おまえが嫁さんといちゃこらしとるさかい嫉妬の炎がメラメラや。次は何をしでかすか思うたらつい笑いがこみ上げてな」

そう言われて指先を向けられた方を見ると、確かにぎらぎらした目つきで僕を視線で殺そうとしている一団がいる。師匠？　僕って弟子ですよね？　なんでそんなに殺気を籠めた目で僕を見てるんですか？

「ハルト。師匠の女の子の好みってミミみたいな子なの？」

「さぁ、どうやったかいな？　まぁ、尽くす子は誰だって好きやろ。それに大きいしな」

最後の台詞はぼそっと僕に聞こえるぐらいの音量で小声で伝えてくる。最近は注意したおかげでチラリもヒラリも無い制服になってい

るんだけど、それでも、ミミは目立つ。大きさで言えばまだセリナの方が大きいんだけど、隠そうとしているのとそうでないのとではやっぱり目立ち方が違うんだろうね。

「でも、セリナもミミもやっぱり人気あるんだねぇ。僕、大丈夫かなぁ…」

「何言っとんのや。そんなもんは実力で排除せぇ、実力で」

実力でどうやって排除するんだろう？　まさか、すぐに暴力をふるうわけには行かないし。どっちかというと童顔な僕が凄んでも、誰も怖がらないもん。

「こういう事だよ、コージッ」

「そうそう」

ミミがむぎゅっと抱きついてきて、幸せそうにすりすりしてくる。それを見たハルトは正解やと言わんばかりにしきりに頷いている。だけど、ギラギラした視線を向けてきていた一団を見れば、諦めのため息と共に脱落していく人が多数見受けられた。依然として残っている人も若干脱力しているように見える。なるほど。

「それにおまえさんの戦闘力は、皆よう知っとる。それでもなお喧嘩ふっかけてくる奴がおったら、それこそ返り討ちにしてやればええってな」

「だけど、この実力行使は凄く恥ずかしいんだけども…」

「そこは嬉しいって言うと良いですよ。さぁ、援軍が参りましたよ」

「マスター来たよー」

「たまには、ちゃんと相手して貰わんとな」

「うん、平等にするべき、平等に」

セリナの台詞を切欠にぞろぞろと集まってくる。でも、こんな事したらなんか僕の評判がすごーく落ちていく気がする。セリナやミミ、白夜やヒロコまで友達が居るっていうのに僕にはトリックスターの面子しか友達が居ない！　師匠は友達というか師匠だし。僕だってもっと友達が欲しい…

「あの、エリーさんは何故ここにいらっしゃるのでしょうか？」
「援軍として居る。当然」
「それを言うならここはミミだけで十分だよ？　これ以上は無いってぐらい見せつけちゃうし」
「主よ、魔石獣は明日倒しに行くのか？　結局延び延びになって欲求不満がたまりまくりじゃぞ？」
「がんばれマスター、骨は拾って上げるよ☆」

よくよく考えれば、僕の周りには結構な頻度で誰かがくっつきにくる。そんな状態で僕が友達を作るのってすっごく難しいよね？　だから、一年近く一緒に勉強してるのに友達が少ないのって僕のせいじゃないよね？　無い…よね？　ハルトを見ればなんとも気の毒そうな表情で僕を見ている。うん、ハルトは分かってくれてる。この状態はごうごう燃え盛る家の中で爆弾を持ってうろうろしているのと同じって事を。だいたいが仲が良いはずなんだけど、ちょっとした切欠でヒートアップするんだ。だから、可愛い女の子達に囲まれて羨ましいという目で僕を見ている君達。それは間違いだからね？
　ここに座ってると身を削られていく思いのほうが強いからね？

「では、ひざの上は譲って貰います」
「「むー」」

全然話を聞いてなかったせいで、どういう経緯でそうなったか分からないけど気づけばセリナがひざの上に座ってきた。だいたい、ミ

ミに負けてわたわたしてる事が多いのに今日は珍しく勝負に勝ったのねセリナ。うん、僕の机ってどこにいっちゃったんだろう…？

「アースさんはいらっしゃいますか？」

この声はやばい！

突如投げかけられた声に身をすくませる僕を怪訝そうに見やるセリナ達。そして、レインボー先輩に誰も声はかけないが、視線でハーレムの中心を指し示すクラスメイト。こんな時ばっかり良い連携するよね、君達。

「なんですか、これは？　廊下で騒いだだけでは飽き足らず、教室内で女子を侍らせて悦に入ってるとは…　そういえば生徒会長ともなにやら親しげにしてましたわね、あなた」

「ええっと、誤解だと思います？」

「ほぉ、この状態でそんな戯言を言えるのは性根が相当な事になってる様ですわね。放課後に呼びに来ますから、逃げないように」

「えっと、何の用事でしょうか？」

「呼びに来ますからね？」

「はいぃ」

鬼のような形相で言い切るレインボー先輩に余計な事を言う隙は無かった。これは放課後に罰という名の処刑がありそうです。骨は拾ってくれよヒロコ。

委員長とおしおきと説教と

放課後、気が進まないけれどレインボー先輩に連れられてどこかに向かっている。たぶん、演習場のどこかに放り込まれて先輩の魔法の餌食にされるんだろう。土の属性の使い手って初めて見たんだけど、地味かと思ってた僕のイメージを見事に崩してくれた。集団戦でめちゃくちゃ便利そうな魔法だよね。ゴーレムを作ったり、壁を作ったり、落とし穴を作ったりという攻撃的でない魔法が主流かと思ってたんだよねぇ。

時折、ちらちらと僕のほうを見るのは逃げていないか確認しているんだろう。少し怒っているようにも見えるから、よっぽどこの先輩の逆鱗を刺激しちゃったみたいだ。まぁ、飛んで逃げたしハーレム作ってたしで、風紀委員のこの人にとっては印象最悪だもんなぁ。

「ここです。少しこちらへ来なさい」
「はい」

言われるままに先輩に近づく。なんだろうって思ってると、不意にがちゃっと手首になんか嵌められた。なんで？　ってびっくりしてると、足にもなんか嵌められた。これは嫌な予感しかしない。

「また飛んで逃げられては駄目なので、魔法は使えないようにさせて貰いましたわ。と言ってもそこまで長持ちするものではないのですけど」

使用許可を頂くのにだいぶ書類が必要でしたのよ、とどうでも良い事をぼやく先輩。魔法を封じられる僕としてはちーっとも嬉しくない。でも、こんな物で本当に魔法が使えなくなるのかな？　あ、本

当に魔法が使えない。魔力が流せないようになるんだ、へぇ…素材が何か特殊なのかな？

「さぁ、時間もあまり無い事ですし二度とあのような事をしないように、罰を受けて貰いましょうか」

「魔法が使えないぐらいで、逃げられないと思います？」

「あら？　能力的には魔力が一番高いじゃないですか。一番高い能力を封じられてまともに戦えるのですか？」

なぜか僕の成績を知ってるのね。だけど、こういうハンデ戦も調度良い訓練になりそうだ。幸い武器は取り上げられてないしね。

「僕の入っているパーティはご存知です？」

「えぇ、よく知ってますわよ。あのハルトバルトにセシリア嬢が組んでるパーティですわね。風紀を乱しそうなハンスベル君も居るのが玉に瑕ですが。彼らに付いて行けば成績もうなぎ登りでしょう？」

いいんだ。所詮僕なんて無名な存在なんだし。というかハンスベルって言うから一瞬誰かと思ったけどレイの事だった。彼はもてもてすぎるから風紀委員に目を付けられちゃってるのね。というか、僕だって結構貢献してるんだけどそういう話は伝わってないんだねぇ。

「それが間違いって教えて差し上げますよ。僕らは誰も寄生してる訳じゃないです」

「そうは見えませんけど、時間も無いですからさっさと行きますよ」

そう言っていつの間にか持っていた杖を構えて、僕に向ける。

「“土よ！　大地に呼べ束縛する力！　スロウエリア！”」

「またそれかっ！？」

結構な範囲で動きを阻害する魔法だ。慌てて距離をとり、「ギル」を身構える。

「“絶刃裂波”」

「“土よ！　我が前に大地の守りを！　ロックウォール！”“土よ！　我が敵を打ち倒せ！　マッド！”」

土の壁で盾を作って泥玉を放ってくる。先輩は一歩も動かない。うんうん、簡単に終わったらつまらないからね。泥玉は避けるまでもない、気合ですべて吹き飛ばす。接近させずに遠距離からちまちまと戦う相手にはどうすれば良いか。的を絞らせないで相手が疲弊するまで逃げ回るのもありだけど、相手以上に遠距離から攻撃するのもありだ。

「“絶刃裂波”」

「馬鹿のひとつ覚えではこの壁は崩せませんよ？」

微妙に角度を変えて壁の無い方向から、どんどん撃ち込む。そしてその度に壁を増やしていく先輩。もちろん、攻撃魔法も撃ち込んでくるんだけどその程度の魔法なら回避しながらでも技を放つ事ができる。そうしていると、先輩の周りに隙間無く壁ができてしまった。

「さぁ、反撃ですよ先輩！」

「あなたの技では、この壁を抜く事はできませんわ」

「その程度でしか撃ってませんからねっと“絶刃裂波”」

技を壁に当たらないように、空へ向けて解き放つ。そして、先輩のいる辺りへ落ちるように衝撃波を急降下させる！

「え！？　きゃあっ！」
「どんどん行きますよぉ！」

位置を特定されないように、周囲を回りながら技を放つ。どっちにしても壁があるからこちらの姿は見えないのだけど、いつまでも同じ方向からだと避けちゃうかもしれないもんね。仮にも先輩なんだしこれぐらいの修羅場は経験しているよね？　しばらく撃ち続けていると、何も聞こえなくなってきた。さて、一発でかいのを撃って壁をなぎら払っておこう。

「あれ？」

気合を少し込めて技を放ち、土の壁をすべてなぎ払ったんだけど壁の中はもぬけの殻だった。て事はどこかに逃げたね？　こういう時のお約束の定番としては背後から出てくるものだけど…静かに気配を探っていると背後で物音がする。背後にいる敵を惑わす為に瞬時に横移動してからバックステップして敵を視界に収める。

「ゴーレムか、先輩は土の中に居るのかな？」

大きくて中々素早いけれど、ハイマニューバとかのメカに比べたら鈍重すぎる動きだ。それに人間じゃないから、安心して斬り飛ばせる。次々に現れるゴーレムだけど、その場から動かずに“絶刃裂波”を飛ばして次々にゴーレムの四肢を切断して行動不能にしていく。たぶん、演習場のどこかにあのノロノロになる場所や毒沼みたいな場所が出来上がっているんだろう。ゴーレムはそこへ誘導する為の駒なのだ。

いい加減、このままだと先輩をやっつけられないので地中にいるであろう先輩の気配を探ってみる。…あれ？　地中に居ないけどどこ

に？　まさか！

「ばれちゃったわね。“土よ！　岩をも貫く槍を解き放て！　ロックドリル！”」
「よいせっ！」

僕に倒されてたゴーレムの胴体から先輩がするりと姿を現して魔法を放ってくる。至近距離からの魔法だったけど、なんとか「ギル」で逸らす事ができた。今の魔法って直撃したらただじゃ済まない威力あるんだけど、何してくれるのこの先輩は？

どんどん行くわよ、といい笑顔を浮かべた先輩は岩のドリルを連射してくる。誰だ土属性が地味とか言った奴は！　このドリル連射はめっちゃど派手だよ？！　しかも、最近発見した魔法の連射方法をしっかり利用しているし。魔法って陣を思い浮かべて魔力を流しこみながら呪文を唱えるんだけど、同じ魔法を唱える時は精霊への呼びかけだけで発動できるのだ。この際、最初に流し込んだ魔力とまったく同量の魔力を流し込まなければ発動しないので、まだ連射方法を使いこなしている人は少ないのだ。

「ん！　嫌らしい攻撃を混ぜてきますね先輩！」

時折、呪文を詠唱しているので威力を調整しているのかと聞き流していたんだけど、小さい岩のドリルを混ぜる事で遠近感覚を狂わせてきたのだ。危うく小さいとはいえドリルに貫通される所だった。

「誰がいやらしいんですか！」
「そんな格好をしておいて、それは無いと思いますよ先輩？」

最初に“絶刃裂波”を連射した時に無傷とはいかなかったらしく、

服がところどころはだけてるし、肌が露出している。もともと弾けそうな感じだった服は大変な事になってしまっている。

「よくそんな事を言われるんですが、どういう意味ですか？　今でこそ少しはだけていますが、いつもは制服を普通に着てるだけですのに…」

僕の言葉に何か感じる事があったのか、先輩の攻撃の手が止まった。

「いや、あんな色気たっぷりに着こなしておいて普通とか何言ってるんです？　控えめに言っても、色気たっぷりで風紀委員とはまったく逆の存在にしか見えなかったですよ？」

「え！？」

どうも本気で普通の格好をしてると思ってたらしく、物凄く驚いた顔をしている。なんというか真面目な人柄なのかな？　だから周りの人は先輩がショックを受けると思って、今まで誰も本当の事を言えなかったんだろうね。

「上着のボタンを少し外しているのは駄目でしょうか？」

「駄目ですね、胸元が見えすぎです。先輩は大きいんですから余計駄目です」

「上着の長さはこれぐらいで大丈夫ですよね？」

「いいえ、何かあればお腹が見えそうなのは短いと言っていいです。もっと長くするべきです。しかもなんでそんなに透ける素材を使ってるんですか？　それも元に戻してください！」

「スカートは…」

「短すぎますよ！　激しく動いたらパンツ丸見えじゃないですかっ！」

そんな格好をしていても、普段は行儀良くしている先輩はパンツ見えたり色々ちらりとしないんだけど、少しでも行儀悪い事をしたりいたずらな風が来れば一発アウトだ。というか、これだけはっきり駄目出ししないと理解してくれないとかどういう環境で育ってきたんだ…

「はぅぅぅぅ…」

大丈夫と思ってた事をことごとく否定された先輩は、随分とショックだったようでひどく落ち込んでいる。まぁ周りに居た男子生徒は目の保養って事で、わざと教えないようにしていたのかもしれないね。

「先輩、安心して下さい。風紀委員長いえ委員長スタイルにばっちり変えてあげますから！」

「…アース君？」

丁度良いタイミングで魔法も使えるようになった事だし、ここは本当の委員長スタイルという物を伝授しようじゃないですか。眼鏡をかけて黒髪で隙のない制服の着こなしをする良くあるイメージに出てきそうなザ委員長になって貰おう！

そうして、先輩を委員長に改造してトリックスターの皆が待つ演習場に向かった。最初は他の皆も心配してついて来ると言っていたんだけど、一人で大丈夫と言い切っておいて良かった。改造した先輩は明日からは風紀委員長らしくびしっとした隙のない出で立ちで、風紀委員の使命をまっとうするだろう。先輩のクラスメイトの男子はがっかりするだろうけど、そんなの知ったこっちゃ無い。

「お待たせ～、どう？　分からない所ある？」
「おう無事やったかコージ。とりあえず、一応形にはなっとるで」
「あ、丁度良かったわ。この刻む文字の効果を教えてくれる？　他にもあったら教えて欲しいわ」
「ねぇコージ。俺の場合はちゃんとできてるかどうか、試せないんだけども？」

なんとか自分でできる所までやってるみたいだね。だけど、レイの場合は盲点だった。そうだよね、カウンターできる相手が居ない事にはちゃんとできているか分からないよね？

「ハルトは恥ずかしがらずに真剣に動きをなぞってよ？　意味の無い動きじゃないんだから少しぶれると失敗するかもしれないんだからね。セシリアはとりあえず、書いてある文字を全部覚えてから他の文字を覚えるようにして。それだけでも効果抜群な物を取り揃えているからね」

ハルトとセシリアにはそう指示をだす。しっかり型をなぞって自然と技を出せるようになってもらうまで、何度でも反復して貰うのが一番だ。

「で、レイは僕が攻撃するから頑張ってね☆」
「なんだか俺だけ厳しい気がするのは気のせい？」

イケメン爆発しろとか思ってませんよ？　ええ！　思ってませんとも！　でも、ファントムアタックでつい力が入りすぎてカウンターにさらにカウンター当てたりしたのは、ちょっとした茶目っ気だと思って欲しい。モンスターの模擬戦でもやれ無い事は無いと思うんだけど、やっぱり実際に戦う方が覚えるのも早いよね、たぶん。

ぼこぼこになったレイをバルトが治療して、即座にカウンターの練習をする。そうやって繰り返し戦ってると、徐々にどの方向からでもカウンターを合わせられるようになってきた。こつは一点を注視しない事と止まらない事。あとはタイミング勝負になる。レイはかなり素早い身のこなしなので、僕より八手撃は向いていると思う。

ハルトとセシリアは今のところ僕が見ていなくても大丈夫そうなので、レイに掛かりきりで教える事ができた。でもエリーとバルトにも何か役に立ちそうな事を教えられれば良いんだけど、何が良いかなぁ。意外性を持たせるために、氷系の魔法で熱を奪う魔法を覚えてもらおうかな？　筋肉から熱を奪うようにすれば、加減次第で攻撃にも回復にもなりそうだし。ちょっと地味だけど、普段が派手だから別に良いよね。バルトの方は神聖魔法で能力の付与魔法を覚えて貰えればいいかな。ブレスと違って限定的な能力の底上げだから、今のバルトでも大丈夫だと思う。

「あら？　どちらさんですか？」
「あのアース師匠はこちらにいらっしゃいますか？」
「アース…？　あぁ、コージですか。ちょぉ待ってくださいね先輩、今呼びますさかい」

なんかハルトがにやにやしながら、こっちに来た。ん？　あら？
なんでレインボー先輩が来てるんだろ。何か問題でもあったのかな？

「おいコージ。美人の先輩さんがお前をご指名やぞ。またおまえは何したんや？」
「いやレインボー先輩だよ、風紀委員の」
「はぁっ！？」

すごい勢いで振り返るハルト。そして僕の台詞に皆も一斉に演習場の入り口を見る。いきなり遠慮のない視線を浴びた先輩は身を縮ませてしまう。まだ、あの格好になれていないんだな、きっと。

「レインボー先輩、どうしたんですか？　すぐには慣れないかもしれませんけど、その格好似合ってますよ」
「いえ、そのそれがですねアース師匠。その事についてご相談が。あと私の事はレイチェルもしくはレイレイと呼び捨てでお願いします」

さっきまでの派手な感じから一転。長い黒髪をまっすぐ下ろし、ふちの無いメガネをかけて貰った先輩。服装もしっかり隙の無い様にかっちりした物に換え、胸元もお腹もパンツも簡単に見えないようになっている。だけど、スタイル自体は良いので別に地味には成らない所がこの先輩の凄い所だ。色気たっぷりお姉さんからよくもここまで清楚なお姉さんに変貌を遂げたものだ。我ながら恐ろしい才能だね。

「…あれ？　今何か変な台詞が聞こえたような気が…？」
「なんでしょう師匠？」

師匠とかレイレイと呼べとか。自分の匠の技に惚れ惚れしてたんだけど、先輩が今おかしな事を言った気がするんですけども…

「どうされたんですか、師匠？　よかったらお話を聞いて欲しいんですけど」

「いや、話を聞くのは良いんですけど先輩。その師匠って言うのはなんでしょうか？」

「先輩じゃないです」

「先輩？」

重ねて先輩と呼ぶとむっとした表情で僕を見つめる先輩。

「おい、コージの奴またなんかやらかしたんかあれ？」

「当然でしょ。あの先輩があそこまで変身しちゃった原因に間違いないわね」

「で、当然のようにああなったと」

「浮気許すまじ」

「コージは美人を撃墜する率が高いよねぇ。俺なんかよりよっぽどモテモテだよ」

ひそひそと言ってるつもりだろうけど、全部僕には丸聞こえだからね？　浮気もしてないしモテモテじゃない。なんというかレイにだけは言われたくない。

「レイチェルです。それ以外はレイレイです」

「と、とにかくどうしたんですか？　相談なら話聞きますよ？」

「もぅ。良いです、とりあえず場所を変えても良いですか」

「はい、分かりました。ちょっと行って来る！　後で君達にもオハナシがあるからね！」

先輩に返事をして、トリックスターの皆に大声でおしおき宣言をする。軽く肩をすくめられたけどね。後で覚えてろ。しずしずと先導する先輩に付いて行った先は、風紀委員とプレートが掲げられた部屋。生徒会ならまだしも風紀委員もこんな部屋あるんだ、知らなかった。そして静かに部屋の鍵を開けて、僕をうながす先輩。風紀委員の部屋ってなんというか縁のない場所なので、つい恐る恐る入って行く。別に何も悪いことはしてないんだけども。

ガチャッ

えっと、鍵掛けましたか？　掛けましたよね？　でも大丈夫。僕なら窓の外から街中へ脱出できる。それより今は鍵に気付いてないように振舞うのが先決かも。でもなんか背後から嫌なプレッシャーを感じてやまない。

「師匠。とりあえず、手近な所に座ってて下さい。飲み物を用意してきますので」
「えぇっと、お構いなく」

会議がしやすいように、机と椅子が綺麗に並んでいる。とりあえず端っこに座る僕。堂々と正面の席に座るとか小心者にはできるわけがない。ハルトなら座りそうだけどね。

「お待たせしました」

待ってるのが退屈になってきて、誰も居ないから椅子をガッタガタして遊んでいたら先輩が戻ってきた。やべぇ、途中から夢中になって遊びすぎた。僕の前にあったかそうな飲み物を置いて、そのまま当然と言わんばかりに僕の隣に腰掛ける先輩。

「えっと、お話というのは…？」

何かのハーブティを頂きながら、しばらく間を置いてから先輩に問いかける。ハーブティが落ち着かせる効果があるのか飲んでるとなんだか冷静になってきた。

「師匠、まずはお礼を言わせて下さい。本当にありがとうございました」

「えっと、どういたしまして？」

すっと席を立って僕に向かって深く礼をする先輩。そんなにイメチェンを気に入ってくれたのか。

「こうなって初めて分かったのですが、私はどうも服装に性格がひきずられるようです。師匠に強引に変えて貰ったこの服装と格好のおかげで、私すごく冷静になりました」

「…そうですか。でも、今まで服装を変えようとは思わなかったんですか？」

「それが、先程までの服装ですと家にある全ての衣装が同じ系統に変えられてというか、自分で変えてしまっていたので変えようにも変えようが無かったんです」

「それで、変わる事無くずっと今までやってきたというんですね」

「はい。でも、ちょっとおかしいかなとは思ってたんです。だけど、クラスの男子からちやほやされると、どうでも良いかとなってしまいまして…」

お恥ずかしい事なのですが、と頬を赤らめてうつむく先輩。でもとりあえずは自分を取り戻したと言いますか、元に戻ったんなら良いんじゃないでしょうか？

「でも、師匠にはっきり指摘されたおかげで目が覚めました。その上、このようにかっちりした服装まで用意して頂いた上に髪の色まで変えて頂いて感謝の念がたえません」

でもすいません。僕のイメージでは委員長は黒髪なんですけど、これって良く考えたら日本での設定であって金髪が普通なこっちだと、むしろ黒髪は異質ですよね…

「それは良いんですけど、その師匠っていうのは止めて貰えないでしょうか？」

「いいえ、前のままでいればいつか野獣の手に落ちてしまったかもしれない私を救ってくださったんです。しかも、的確に私が望んでいた服装を用意してくれたんです。師匠が駄目ならご主人さまとお呼びしたいぐらいです」

話が変な方向に突っ走ってる気がする象。なんで、じりじりとこちらへとしなだれかかってきてるんでしょうか。そして、さり気なく膝に手を置いてくるのは何故なんでしょうか、さらには顔がどんどん近くなってきてるようなんですがだれかたすけ…

ドバンッ！

「コージッ♪　ミミと一緒に帰ろうねっ♪」

「あなたのセリナがただいま参上です。さぁ、泥棒猫には指一本触れさせませんよ」

扉が爆発したぁ！？　と思ったら気付けば僕は扉の前にいた。

「では、ご機嫌ようです」

「ばいばーい」

「えっと、さようなら先輩！」
「そんなの言わなくて良いの！」
「そうです、さっさと帰りますよ！」

おほー、助かったんだけど助かってないよこれー！　僕を抱えて走る二人の目が怖い。でも、下手にこれ以上女性に興味を持たれるよりはいっか良いよね良いんだよっ！

「逃げられてしまいましたか。ですが、まだ始まったばかりですし焦らずに行きましょう」

そういって、扉が破壊されて破片が散乱する部屋で、静かにお茶を飲みながら静かな笑みを浮かべていた。

他人のフラグは良く分かる

「これは一体どこでフラグが立ったんだろうか」

帰るなりセリナ達におしおきをされて、心身ともに疲労している根っこがそう切り出した。おしおきというかご褒美というか。なんども直に触らされて、鼻血をその度に噴水し、起きたらまた触らせ…どこを触ったかは内緒にしておくけど、天国と地獄を行ったり来たりしていたのは間違いないとだけ言っておこう。頼むから根っこよ。その記憶だけは衛星に保存するのはやめてくれ。

「根っこはともかく、僕の方はフラグとかじゃないと思うんだけど」

頭を強打していたから、つい心配になって回復魔法を唱えただけだし。

「馬っ鹿！　フレーマーの方は確実にフラグ立ててるよ！　客観的に見てたらすっごく分かるよ！　このスケコマシ！」

「いや、その台詞は結局自分自身に返ってくるっていうのは分かってるのかな？」

金策はなんか疲れた顔して責めてきた。曰く、子供の相手というのは一日中全力疾走するのと変わりが無いそうだ。よくそんだけ頑張って子供の相手ができるもんだ。

「それに根っこもそのイメチェンが原因なのは間違いないでしょうに。なんで君たちはそうフラグを立てちゃうかな？」

「「ごめんなさい」」

でも、サラって子はフレームにも詳しいし自分でも作ってるみたいだしなんか凄いんだよ？　ちょっと鈍臭いけど。

「はっくしゅん」

「お嬢様、どうされました？　お風邪でしょうか？」

「ううん、大丈夫。きっとフレームが早く作ってくれって急かしてるんですわ」

「…左様ですか。では、何かありましたら又お呼び下さい」

「はぁい、ありがと」

「…どこかで能天気なやり取りがされてる気がしないでもないけど、あの子とは友達になれそうなんだけどなぁ。僕たちってさ、なんだかんだ言って友達が少ないじゃない？」

「だから母さんが言うとおり趣味につっぱしって仲間を探してたって訳か。でもよりにもよってフレームの分野で何故に女の子と知り合うかなぁ？」

そればっかりは僕に言われても仕方が無い。戦うのが好きな女の子も居れば、セリナみたいに魔法が大好きな女の子も居るし、フレームが大好きな女の子が居てもおかしくない。知り合える確率は低いだろうけど。

「なってしまった物はしょうがない。それに根っこはともかくフレーマーの方は、なんか凄いお金持ちのお嬢様っぽいから、ミスリルを安く融通してくれるかもしれない」

「ん？　なんで金持ちって分かるのさ？　あーそうだねぇ、金持ちだよねぇ」

小型八型エンジンを三個以上もってる時点で莫大な資金が無いと無理だもんね。ひょっとしてとは思うけど、小型八型をあの子が独占

してるんじゃないだろうね？

「でも、僕たちだってお金持ちって言えばお金持ちでしょ？　なんといっても僕ってほら王子様だし～」

「ああそういやそんな設定あったねぇ。父ちゃん大丈夫かなぁ」

隣国のハイローディスは好戦的で、色々とちょっかいをかけてくる。こないだもこっそりロバス方面に侵入してたし。それが駄目なら今度は王族の一人を、花嫁修業と称してこちらに送り込んでくるようだし。何を考えてるのか良く分からないけどあれやこれやと、こっちにちょっかいを掛けてくるんだよね。

「週末には帰ってくる余裕があるんだから、大丈夫じゃないかなぁ？　一応、僕も貴族を監視してるから誰がどこでパーティしてるかは逐一報告してあるからね」

「まぁそれなら大丈夫かな？　それより僕らはどうすべかねぇ。ギルドの方にも顔を出してそっち方面でも知り合いを増やしておく？」

ギルドねぇ。そりゃあ、ギルドだと戦闘面に特化したような人がうようよいるだろうし、情報もあれこれ持ってる人もいるだろうけど、なんか顔を出しにくいんだよね。なんかああいう場所って因縁ふっかけられそう。偏見だけどね。

「金策がギルドに顔を出す気があるなら止めないけども、無理にいく必要は無いんじゃない？　僕なら行かないだろうし」

「そりゃ僕だってちょっと怖いけどさ、なんか凄い人とかも居そうじゃない？　ランクトリプルエスのギルドのエースとか」

「そんなランクなんてあったっけ？」

「ううん、適当に言った。でも、達人というかそういう頂点を極めた人達の噂話とかも聞けたら、会いに行く事もできるかもしれない

じゃん？」

なんとなくだけど、そんな凄そうな人って簡単に会えないんじゃないかな？　でも、ギルドにもとんでもなく強い人とかは居るだろうね。この世界には印持ちという特殊能力もある事だから、魔法が使えなくても弱いって事にならないからね。

「あー…まだふらふらするや。とにかく、知り合いというか友達増やすのは良いけどなるべく女の子じゃない方が良いって事で」

「でも、僕たちが選り好みできる立場だと思う？」

「「「「あー…」」」」

僕の言葉に皆ががっくりして、ため息をつく。うん、なんというか友達って作るの大変だよね。どうやったら嫌われないで済むかとか、何が好きなのかとか話してて退屈しないかだろうかとか、あれこれ考えなきゃ駄目だからもうイッパイイッパイなんだよね。

「コラァ！　またこんな所で固まってるし！　一人は必ずミミ達の傍に居ないと駄目でしょ？」

「そうです、こんな廊下の隅っこで集まってたら駄目ですよ」

ありゃ見つかった。そう僕達は廊下のすみっこや、空き部屋や厨房の影とかそういった所に隠れるように集まる癖がある。根っこの部屋に集まることも多いんだけど、最近は家の中で隠れるように集まるのが楽しくなってきたのだ。

「それに、コージさんはまだお楽しみの時間が残ってますよ☆」

そう言って、セリナは根っこをしっかり捕まえる。今は家の中なのでみんなくつろいだ格好をしているのに、セリナは何故に根っこを

見分ける事ができるんだろうか。すげぇ。というか、根っこは倒れて休んでる隙をついてこっちに逃げてきてたのか。

「次は目隠ししてから、全身で楽しんで貰うからね。ミミがんばるから」

「そして、その次は勿論私ですよぉ～」

この二人どんどん過激な方向に走ってないでしょうか…いくらなんでもそれは危険でしかない！　ここは僕として釘をさしておかねば。

「あの二人とも？」

「なんでしょう、フレーム好きさん」

あ、僕の事も分かるのね。

「あんまり過激な事すると本当に倒れちゃうからほどほどにお願い。それに僕ってほらお淑やかで、風でスカートがめくれたら顔を真っ赤にして恥ずかしがるような子とかが大好物だし」

「大丈夫です。私、すっごく恥ずかしいのを我慢してますから、きっとコージの好みです」

「ミミはコージなら、何されても平気だからそれは良く分かんない…」

「いや、目隠ししてたら分からないからね？　ミミは羞恥心を覚えよう羞恥心」

「はっ！？　じゃあどうすれば…」

よし、セリナがこっちに耳を傾けてくれた！　考えろ！　罰になってるようでなってない案を！

「それはやっぱり椅子に縛り付けて「可愛い」二人のファッション

ショーでもすれば良いんじゃないかな？」
「ファッションショー…ですか？」
「なにそれ？」
「要は色々服を着替えて見せるって事。で、可愛い所を見せ付けてみて。でも、僕は縛り付けられてるから何があっても手は出せないから、非常に辛い！　あぁ、可愛い子が目の前でアピールしてくれてるのに、僕は縛られてるからどうしようもない！　あぁ、なんて辛そうなんだろう！」
「「…」」
「ましてや、恥ずかしそうにチラリとかヒラリとかあったら、それはもうヤバいです」
ごめん根っこ。僕にはこれぐらいが限界のようです。だけど、先程の危険なお仕置きよりかは興味を持ってくれたようで、何かを考え込んでいる。後一押しだ！　何かないかな？　何か…そうだ！
「そして、あんまり可愛いとやっぱり可愛い子とお出掛け…いやデートしちゃいたくなるよね、きっと」
デートという単語を出した途端、目の色が変わる二人。そして、ライバル心を剥き出しにお互いをけん制しあう。
「んんっ、確かに私たちが考えてたお仕置きよりも、厳しい気がしますね。別にデートに釣られた訳じゃありませんが」
「うん、チラリとかヒラリはミミの得意分野だからデートはどこに行くか考えておかなきゃ」
「あら、ミミは勝ったつもりで居るのですか？　それは気が早いですよ」
「ん？　だって、ミミは毎日鏡を見て研究してるんだもん。それに家に居るときはそういうの着てるから、ばっちりだし」

「うふふ。楽しみですね」
「うふふふふ」

うん、攻撃対象を根っこから変える事ができたけどこれはこれで怖い。ピンク色の衝動のお仕置きが胃が痛くなる精神的にくるお仕置きになってしまった。だけど、根っこの方を見るとありがたいという風に僕を拝んでいた。

「では、連れて行きますね」
「またね～」
「「「がんばってね～」」」

さらば根っこよ。

オアシスよ、泉を湛えるオアシスよ

「どうですか、コージ？　これも可愛いと思いません？」
「ミミも見て見てぇ？　ほらっ、動くと凄いでしょっ？」

大ピンチです！

フレーマーのおかげで暗闇裸攻めを免れたので、ほっとしたのも束の間。現在、椅子に縛られて目の前でファッションショーが催されてます。ファッションショーなら問題ないと言われそうですが、違います。見えるんです。

フレーマーは言いました。

色々服を着替えてアピールする事だと。

そして、その言葉をどう捕らえたらこうなるのだろうか。たぶん、駄目な方向に言葉が組み合わさった結果こうなったとしか言いようが無いのです。でないと、こんな…

「えいっ」
「うふっ」
「ごふっ！」

鼻血をこれ以上出してなるものかっ！　手が動かせない以上、上を向いて耐えるしかないんだけど、あんまり上を見ていると二人を見る事ができない！　チラリズムが好きなんだけど今の二人はチラリズムじゃない！　いや、チラリズムかもしれないけれどひらっとスカートが翻る度に見えるはずの布が見えないと、本来ちらっとしな

い物が見える！

そう！　この子達下着を着けてない！

可愛い服を見せる。アピールする。その二つが組み合わさった今、二人の中で化学反応が起こり下着なしのチラリとヒラリのファッションショーが始まりました。

そして知りました。

毛というのは、どこの毛も同じ色をしてるんだなぁ…

ミミは胸は凄いけど、お尻はすらっとしてるんだなぁ。セリナはどっちも桃って表現が似合ういい形をしてるなぁ。顔を埋めたい！　匂いを嗅ぎたい！　舐めてみたい！　なんで目の前であんなにおいしそうな物がひらひらと舞っているのに、僕はなんで我慢してるんだ？　まて、慌てるな光司。ここはクレバーに行こう。そう、クレバーにだ。前に覗こうとしてどうなった？　こみ上げる鼻血を抑えきれずに野望を達成できなかったはずだ。ふたりのピンクの頂きをこっそり覗けるせっかくのチャンスを不意にした！　今ももう少しで見えそうだけど、椅子に縛り付けられてるせいで角度が悪い。キリンみたいに首を伸ばしてもちっとも頂きは見えないのだ。

でも上が駄目なら下だろう？

幸い、足は自由に動く。ならば、できる事は一つ！　椅子ごとこけて下から覗く！　近寄ってきた所を椅子毎ぶつかっていけば、あの魅惑のフルーツは僕のものだ！

「次はすこぉし、改造して見ました」

「やっぱり、下着がないと変な感じするね」

そしてまたついたての向こうで着替えをしてきた二人。静かな部屋の中で衣擦れの音が響いてくるのって、想像力をかき立てられるよね。セリナはニットの薄いピンクのサマーセーターっていうのかな？　そんなトップスと白のデニム地のスカート。ミミは袖のない白のブラウスにチェック柄のスカートをサスペンダーで吊っている。

「二人とも可愛いよ。でももう少し近くに来てくれると嬉しいなぁ」
「そおですか？」
「ん？　そう？」

獲物が近寄ってきました。

あまり近くに来すぎると、見えなくなるのでタイミングを見計らう。よし、今だ！
思い切り足で勢いをつけ体を右側に傾け椅子のバランスを崩し、椅子の片側で立つようにする。そして椅子の後ろの足を支点にして回転するように足を動かしながら体を捻り、背中から床に滑り込んだ。この間ゼロコンマ三秒！（嘘）

「きゃっ！？」
「うふっ」

背中から落ちた事によりうまく風が舞い上がり、ミミのスカートがふんわり持ち上がる。だけどセリナはとっさの事でスカートを抑え込んでしまった！　うん、非常に女の子らしい可愛い仕草なんだろうけど、デニム地で浮かび上がるわけないしょうぅぅうう！

と、思ったのは一瞬でした。

ミミは金髪だ。そして下から覗いた僕ははっきりと見た。今までのチラリなんかは正直まがい物としか思えないぐらいはっきりと見えた。これは行くしかない！

「ミミちゅわぁんっ！」
「あはっ♪」
「はっ！？」

だけど、椅子毎転がったせいで動けない。金色のオアシスが目の前に準備万端で待ってくれているのに僕は何もする事ができない。倒れてからしばらく経つのに僕に見られてるのが分かってても、傍に立ったままでいてくれるミミもきっと待ってるはず！

ええいっ！　縄なんて魔法ですぱっと切ってやる！

“「風よ！　我が敵を斬れ！　カッター！」”

ずばっと切れ味抜群。ちょっと腕まで切れたかもしれないけれど、目の前にオアシスがあるからそんなのちっとも気にならない。金色の草原の奥の泉にいざ突入だ！！！

「いざっ！」
「えいっ！」

あともう少しという所で可愛い掛け声と共に後頭部に非常にやばい衝撃が走る。だけど、ピンチはチャンス！　この衝撃を活かしてミミへ突撃する！　僕を今までの僕だと思うな！　くんかくんかしたりぺろぺろしたりもふもふしたりするんだっ！

「“其は戒め、我が敵を留めたらん！　ラシャラ！”」
「なんのっ！？」
「きゃっ♪」

紐が飛んできて体をまた封じ込まれる。ミノムシ状態にされてしまったけど、勢いは止まらない！　そして、ミノムシなままミミへ覆いかぶさる。勿論、顔は胸へ突撃だ。頂きを隠すサスペンダーを鼻でどけて、クンかクン…

「そこまでです！」
「うわーん」

ミノムシなので簡単に転がされてしまい、護身用に渡していたスタンガンを食らう。オアシスもやわらかマシュマロもお預けになってしまった。そして、目の前には静かに怒るセリナお嬢様。うん、そうだよね。突撃されなかった方は怒って邪魔をするよねぇ…

「もうあとちょっとだったのにぃ。セリナひどい」
「目の前でそんな事許すわけないじゃないですか。ミミだって私が襲われたら邪魔するでしょ？」
「ううん、邪魔しないよ？　だから、セリナも邪魔しないで」

しれっとした顔で嘘をつくミミ。なんというか、ごく自然に嘘をつけるミミちゃん怖い。

「嘘ばっかり！　じゃあ、今コージが私を襲っても邪魔しないんですね？」
「駄目だよ、やっとミミが襲って貰ったんだから順番は守って！」

でもスタンガンを食らって少し冷静になった僕は、非常にきまずい。

お風呂に一緒に入った時は、最初っから全裸だったから緊張してたんだけど、今回みたいにチラリとヒラリでしかも下着を着けてないとなると、徐々に理性をはがされていって暴走しちゃうようだ。

「えっと、そろそろ僕限界なんだけどお仕置きはもうお終いにしない？」

「うんうん、ミミを襲うのを我慢するのが限界なんだよね。いいよ、ミミのお部屋に行こう」

「ちっがっいっまっす！　ミミを襲ってみて私の良さに気づいたんです！　襲いたいのは私ですよね？　ねっ？」

僕が倒れこんでるので、二人とも四つんばいで僕のほうに詰め寄ってくる。あ、ちょっと首を伸ばせば見えるんじゃない？　喧嘩してるから僕に気がつかないだろうし。

「って、あー…ごめんなさい？」

しっかりどこを見てるか二人にばれて謝る僕。喧嘩してても視線には敏感なのね。勉強になりました…

「もう二人きりならいくらでも見せるんですから、我慢せずにお部屋に行きましょ？　ね？」

「違うよ、ミミのを見てたんだよ！　それにさっきセリナは隠したもん！」

「そ、それはとっさの事で恥ずかしかったんです！　それに恥らう方がコージの好みって聞いてます！」

「どうしたの？　また光ちゃんを取り合ってる？」

「はわっ！？」

「あ、お義母様！」

音も無く気配もなく。気付けば部屋の中に母さんが居た。子供の部屋に入るときぐらいノックして欲しいんだけども?

「したわよ?　あらあらあら?　光ちゃん中々えろい事させてるわねぇ…」

「いやっ、僕がさせた訳じゃないからねっ!?」

「じゃあ、楽しんでないって言える?」

「…ごめんなさい。楽しんでました。全部僕のせいです」

母さんの見透かすような視線を受け、つい謝ってしまう。昔からこの目で見られると嘘がつけません。

「よろしぃ。孫は欲しいけど悩むなぁ。まだミミちゃんと遊びたいしなぁ」

「じゃあ、お孫さんを産むのはとりあえず私が先って事で!」

「だめっ!　セリナは結婚だけしてれば良いの!　産むのはミミッ」

そして、落ち着いていたはずの二人の争いが母さんの要らない一言で再燃する。この人絶対分かっててやってるから、怖いんだよねぇ。

「悩め若人よ!　光ちゃんもせっかく分身なんてできるんだから、まとめて皆と結婚しちゃいなさい。そしたら母さんはお嫁さんが一気に四人もできちゃうもの」

「いや、分身で結婚というのは如何なものかと思うのですが…」

「なに言ってるの。結婚なんてぱっとやってぽんと産んで育てるだけなんだから、別に分身でも良いでしょう?　専用の分身なら浮気ってわけでもないでしょうに」

ええっと、専用ってなんというか僕は物扱いでしょうか。なんというか、母さんの思考は時々ぶっ飛んでるからついていけない時があ

る。

「専用のコージ…」
「私だけのコージ…」

ふとミミ達を見ると、なにやら専用という響きにうっとりしているようだ。駄目だからね？　部屋に監禁しそうな勢いの君達には絶対そんな事はしないからね？

こうして、いつもは余計な事しかしない母さんのおかげで僕の童貞は守られてしまった。どうせするなら、ちゃんとしたいから助かりました。珍しく母さんに感謝です。

マスコット的任務

授業の合間の休憩時間。少々騒がしいその時間には、机に突っ伏して眠る者や友人と会話を楽しむ者、用を足しに行く者など様々な人の動きが見られる。その中で黙々と授業の準備を入念に行っている者がいた。落ち着いた雰囲気と鋭い眼差しを持つロウ＝サカキである。ただ、この準備をしている時間に関して言えば、彼は普段より若干緩んだ表情をしていた。だが、その事に気づける人間は少数に限られるが。

“ようやく、これが完成するな。しかし、遺跡が傍にあるのは非常にありがたいな。必要な素材を楽に入手できるからな”

そう思考しながら、手元にある筒状の物を愛しげに見やる。その目は親がわが子を見つめる目とそう変わりがない。サカキとしては、遺跡が傍にあるお陰で魔物から入手する素材が、楽に手に入るこの環境は非常にありがたかった。ベルスイートの活動は基本的にボランティアなので、とくに報酬があるわけではなかったのだ。ただ、学園の施設の利用や単位には多少の色をつけて貰えるが、客観的に見ればサカキの活躍は対価といえるものではない。だが彼としては魔具（マジックアイテム）製作の施設を自由に使える事は非常にありがたかった。

「サカキ君、ちょっといいかな？」

「はい、なんでしょうかハダット教官」

思考の海を泳いでいたはずのサカキは呼びかける声に即座に反応する。呼ばれるがままに廊下へと出て教官の話を聞く形となった。

「最近、遺跡のほうはどう？」

「特に危険度の高い魔物の出現の報告は受けてません。浅い階層は順当に見合った魔物しか居ないようです」
「そ。こないだみたいなイレギュラーは無いって事ね？」
ふむふむとうなづくハダット教官。ただし、その顔はすこし疑問を持っている表情だった。

「それがどうかされましたか？」
「いえね。最近、三十階層あたりまでの魔物の数が急に減る事があるようなのよ。そりゃ勿論二十四時間開放されてるわけだから、冒険者のほうも潜る事があるんでしょうけどそれにしたって、人が少ないはずの深夜に十階層までオークの一匹も居ない時があるのはおかしいと思うのよ」
「それは…確かに妙ではありますね」
遺跡には数多く魔物が徘徊している。フロアも広いだけあって魔物同士の小競り合いは多少あるものの、基本的に冒険者を付狙う事で共存しているのだ。遺跡を見つけた当初は魔物は邪魔だと言う方針から、浅い階層から順に魔物を時間をかけて全滅させていったりしていたのだが、どれだけ全滅させても時間が立てば必ず復活するので、一度はどこから魔物が入り込んでいるのか詳細に調べたりしたが、結局原因は分からずじまいで現在のような冒険者に任せ入り口を見張る形に至っている。

「それに冒険者の報告にも、倒されたばかりの魔物を良く見かけるとかいう報告もあるのよね。だけど、傍には誰も居ない。よっぽどシャイな冒険者が居るのかもしれないけど、何か得体の知れない魔物が潜んでいる可能性もあるの」
「気のせい…で済めば良いんですが、危険性がある以上調べない訳にはいかないでしょうね」

正直、サカキとしては偶然が重なっただけでは無いかとも思うが、目の前の教官はそうは考えていないようだったので、話を振ってみる。

「そう、そうなのよ！　ほら、一年のあの子知ってる？　ディアス家のお嬢様。その子が遺跡に潜っても獲物が居ないのはおかしいってうるさいのよ。一応、学園の出資者のお嬢様だから、その子が調べろと言えば無視するわけにはもいかなくて…」

ここまで言えば分かるよね？　と言いたげな視線を投げかけてくるハダット教官。

「はぁ…分かりました。では今日の放課後にでも調べさせるようにしましょう」

「ううん、今すぐよ」

「は？　私はこれから授業があるのですが…？」

しかもサカキとしては非常に楽しみにしていた魔具製作（マジックアイテム）の授業である。今まで不器用ながらもコツコツと組上げてきて、ようやく術式を組み込んで調整していく所まで漕ぎつけた所なのだ。

「それがほら、お嬢様ってわがままじゃない？　そこで知る人ぞ知るベルスイートのボスの君に白羽の矢が立った訳」

今日の放課後に潜るから、それまでに原因を突き止めておけという事か。もしくは、授業を抜け出して自分たちで原因を究明すると言い出しかねないとか。おのれディアス家の小娘め、俺の楽しみを邪魔した恨みは一生忘れない…

「そんな恨みがましい目で見ないでよ。一年生だけどマジックアイテムを作るのが得意な子の事紹介してあげるから」
「一年でそんな凄い奴がいるのですか？」
サカキとしてはそれは初耳だった。初耳だったが、ひょっとしてという思いはある。
「コージ＝H＝アース君よ。あの勇者のパーティのアイテム士ティナも絶賛するほどらしいわよ？」
「そう…ですか…あいつが」
「あら？　もう知ってたか。あらぁだったらどうしましょ」
「では、今から行く調査に彼も同行させて下さい。彼の実力は私が保証します」
どうせ、調査といってもフロアを見回って安全を確認するだけで済む話のはずだ。ならば、そこにアースを連れて行けば魔具製作のノウハウを教えて貰う事もできるはずだ。
「んー…許可を取れるか分かんないけど、まぁそれでサカキ君がやる気を出してくれるって言うなら頑張りましょうか。じゃ、行きましょ」
「よろしくお願いします」
ディアス家のお嬢様よ。命拾いしたな、アースが居なければ俺の復讐がおまえを絶望の淵へ追いやっていただろうな。だが、おかげでアースの奴が魔具製作が得意という事が分かったんだからな。そこは感謝してやろう。

「と、いうわけなのよコージ君。分かった？」

と、明るく言われてもなぁ…

授業中にいきなり知らない教官が入ってきたかと思ったら、なぜか僕が廊下へ呼び出された。そこにはサカキ先輩も居て、なにか筒状の物を持ってこちらを見ていた。

「アース、あとで良いからこれを見てくれないか。マジックアイテムなんだが…」

「あ、サカキ先輩が作ったんですかこれ？　どんな目的で作ったか教えて貰えれば僕にもお手伝いできると思いますよ」

「そ、そうか！　じゃあ約束したぞ、絶対だぞ！」

「はい、これでもアイテム作りも得意なんです」

って、しまった!?　サカキ先輩が珍しく僕に頼みごとなんかしてくるからついマジックアイテムを作れる事をばらしちゃった。でも、サカキ先輩ならそうそう無茶を言ってこないだろう。それになんだか凄く嬉しそうだし。いつもはポーカーフェイスで内面を悟られないようにしている先輩だけど、今は嬉しさが顔に出ている。ほんとにマジックアイテムを作るのが好きなんだろうなぁ、これ。

「はいはい、許可は取れたわよ。喜びなさいサカキ君。で、アース君？」

「はい、なんでしょうか？」

とわけもわからず、教官から説明を受けて今に至る。ねぇ、これって僕要らないよね？

「えぇっと、ハダット教官？　僕が行く必要はまったく無いんじゃないでしょうか？　サカキ先輩は鬼のように強いんですよ？」
「うんうん。君はその鬼のように強い先輩のやる気を引き出すパワーアップアイテムなのよ。男の子なら授業をさぼれてうれしいって喜びなさいよ」

こんな初対面の教官にまで物扱いされるとか。昨日は昨日でミミ達専用に分身しろとか言われるし。僕ってそんなにマスコット的存在なんだろうか。主に役に立たない意味で。

「いやいや。僕だって授業受けたいですよ。それに遺跡に潜ってもお金にならないでしょ？」

学園の管理下で遺跡に潜った場合は、獲得した素材はすべて学園側に提出する義務があるのだ。だからこそ金策君がすっごく頑張ってるんだけどね。なぜか最近は子供と遊んでるみたいだけど。

「あ、うん。だったら今回の調査に関しては取れた素材は自分の物にして貰っても良いよ。大盤振る舞いしちゃう！」
「教官、それは…」
「え！　良いんですか？　レッドベアだったらピロピロもあるんですよ？　貰っても良いんですか？」
「うんうん、どんどん取ってって頂戴！　ほらっ、やる気でた？」

おー！　そういう事なら少しは金策できるし授業を抜ける甲斐もあるってもんだ！

「わっかりました！　是非、この任務に参加させてください！」
「お、おい…」
「めっ！　よろしい！　ではサカキ君と一緒に頑張っていってらっ

しゃい！」
「了解です！」

何か言いかけていたサカキ先輩を制して教官は、僕に任務を言い渡す。よぉし、じゃんじゃん狩るぞぉ！

アイテム好きな二人

お日様が暖かく見守る中、遺跡の入り口へと向かう。昼前だけど、冒険者のみなさんで遺跡前は結構賑わっていた。冒険者の人達ってなんというか荒々しい感じの方が多い。だけど女性もかなりの数が居るので、雰囲気はそんなに悪くない。実習で遺跡に入るときは集団行動だったから、あまり気にしなかったんだけど、僕みたいな若造がこれだけ人が居る中で遺跡に入ろうとすると、結構じろじろ見られるんだねぇ。

「で、アースよ。今日の任務は分かってるのか？」

「え？　遺跡に潜って魔物が減少している原因を探るんでしょ？」

確か魔物が急激に減ってるという事で、浅い階層にまたイレギュラーな奴が紛れ込んでるかもしれないんだよね？　オーガなら巨体だから見つけやすいんだろうけど、特に目立ってないって事はもっと小柄でやばい奴なんだろうなぁ。

「そう。魔物が減少しているという事は遺跡で稼ぐのは難しいという事だ」

「あ！」

あの教官に騙された！　今日は大盤振る舞いとか言うからつい稼げると思ったんだけど、よくよく考えたら獲物が居ないじゃん…冒険者のみなさんも結構いるから、獲物の取り合いになって余計に僕たちが狩れる獲物が居ないよねぇ、とほほ。

「すまんな。適当に見回って戻ることにしよう。で、その間に俺のこれを見て貰えないか？」

「え、あぁ。さっき言ってたアイテムですね。見せてくださいな」

そういって、サカキ先輩から筒状のアイテムを受け取る。どことなく「ギル」に似てない事も無い。って筒状のものであれば大体似てしまうんだけどもね、このグリップとか先端が発射口みたいになってる所とかがなんか似てる。

「で、これは…」

「あ、言わないで下さい。ちゃんと当てて見せます」

「そ、そうか…」

グリップの部分にオーブがいくつかはめ込まれている。そして先端にあるオーブだけ取り外し可能になっているようで、はずして見ると術式が書き込まれている。てことは、ここのオーブを交換すれば魔法を変えられるって事か。うん、機能もギルと一緒だねこれは。ただ、グリップ部分が機能してないね。このアイテムって握ってる人間の魔力を吸収して、魔法を発動させるタイプじゃないとおかしいんだけど、オーブの配置がおかしくて魔力を吸収できずに循環させている。これだといくら魔法を発動させようとしても、無理だ。

「サカキ先輩。これは魔法を撃つアイテムですね」

「！　その通りだ、魔力がある人間であれば魔法を撃てるようになるアイテムなんだ」

「無音詠唱の為だけのアイテムなんですか？　これだと一種類しか魔法を撃てないから、杖を持って魔法を登録して使った方が良くないですか？」

僕の言葉に、うっと言葉を詰まらせる先輩。この先輩がそんな事に気付かない訳が無いし、言い難い理由でもあるのかな？

「アースは知らないんだな。実は俺は魔法を撃てない。魔力があるにもかかわらずだ」
「え！」
魔力操作が致命的に駄目って事なのかな？　で、アイテムを使って無理やり魔法を使えるようにしようと考えたって訳か。
「で、おまえが思った通りアイテムを使って魔法を撃とうと考えたんだが、これが中々うまくいかなくてな。いま、ようやくそこまでのアイテムができたって訳だ」
「でもこれだと、魔法撃てませんよ？」
「なにっ？」
先輩の作ったアイテムを見てありのままを伝えると、すごくショックな顔をしてる先輩。しかもうろたえているのか、身振りまでしている。こんな先輩は珍しい。
「このオーブの配置だと魔力が循環しちゃいますから、魔法を撃つ為の魔力が足りなくなります。今まで発動しそうで発動しなかったんじゃないですか？」
「そ、そのとおりだ。それは直せるのか？」
アイテムの症状を言い当てると先輩は、なぜ分かった！　という顔をしてから不安そうな顔をして尋ねてくる。なんだろう、普段ポーカーフェースな先輩がこんなに表情が変わる所を見れるのは凄く楽しい。
「直せますよ。このオー…」
「できるのか！　これで魔法を撃てるのか！」
「あ、はい勿論です先輩」

なんか、凄い勢いで聞いてくるので魔法を撃てるという事だけ先に断言しておく。うん、ついでに僕の「ギル」も見て貰っておこうかな。先輩ってアイテム作るのが凄く好きそうだし。

「で、先輩。先輩のアイテムと似たような物を僕も作ってるんです。これなんですけど」

「見せて貰っても良いのか？」

「どうぞどうぞ」

僕から「ギル」を受け取った先輩は、しげしげと見つめてからあちこち触りだす。ボタンとスイッチが非常に気になるようでうんうん唸って考えている。なので、ついでだし各部分の機能を細かく先輩に伝える。

「なるほど、これは俺のアイテムの発展型とも言える作品だな。俺だとここまでの物は考え付かないな…」

「いえいえサカキ先輩も作り出せば、もっと良い物を作れますって。これの前の作品も見ます？」

「そんな物もあるのか、是非見せてくれ」

いかにも興味津々の様子だったので、僕もうれしくなってほいほい「月光」と「ノーミス」を取り出して先輩に渡す。

「機能的には変わらないんですけど、剣を主に使うか魔法を主に使うかで形状が違うんです。ただ、こっちの方が魔法の術式を交換するのは楽ですね。選択は面倒ですけど」

「こっちはなんというか、形が独特だな。この回転する部分に術式を入れるんだな？」

「そうです。で、そこに入れる術式を変えると魔法を変える事がで

きるんです」
「なるほど」

なんというか、先輩もアイテム作りが本当に好きなんだなぁ。

「良かったら分解してみて下さい。自分で分解してみればもっと良く構造が分かりますから」
「良いのか？　下手に分解して壊したりしたら…」
「大丈夫ですよ。それの設計図は頭に入ってますから何があっても修理は可能です」
「で、では分解させて貰うぞ！」
「どうぞどうぞ」

しっかり分解作業ができるように、床にシートを敷き邪魔が入らないように風の魔法でカーテンを作る。って、良く考えたら僕たちって遺跡の調査の為に来てるんじゃなかったっけ？

「って、しまった！　先輩先輩！　遺跡の調査忘れてました！」
「はっ！？　そうだったな、すまん。俺がしっかりしてないばかりに」
「とんでもない。「月光」と「ノーミス」は預けておきますので帰ってから分解してみてください。あ、そうだちょっと待って下さいね」

そういや使用認証つけてるんだった。先輩も登録しておかないと何も発動しないから壊れたかと勘違いしちゃうよね。

「はい、グリップを握ってください」
「こうか？」
「はい、ありがとうございます。では、それは先輩が持ってて下さ

いね。良かったら使って貰っても大丈夫です」
「分かった。感謝する」
という訳で遺跡の調査に向かうとしましょう。

遺跡の中はいつもより喧騒に満ちていた。というより、魔物を探し回る人で溢れかえってると言いますか。たまに魔物と戦ってる人も見かけるけど、その周りにも人が残念そうに佇んでる姿も見受けられた。魔物が適度に徘徊していた時はそうでもなかったんだけど、いざ居なくなるとやっぱり遺跡が広いとはいえ、人との遭遇率が高くなっている。

階層を下げていっても相変わらず魔物は見つからない。居るには居るんだけど、すでに戦闘中だったり倒された直後だったりなので、以前数が少ない事が分かっただけだった。十階層まではだいたいそんな感じだったけど、これより下でも同じなんだろうか？　逆に五十階層ぐらいから上がって来て、少なくなってる階層を調べていく方が獲物も狩れて丁度良いんじゃないだろうか？　そうなるとエレベーターの秘密を先輩に明かす事になるんだけど…

「ほぉ…」

嬉しそうに「月光」を触っている先輩を見ていると、言っても大丈夫な気がしてきた。なんというか同じアイテム作り仲間の連帯感っていうのかな？　そういうのをサカキ先輩からは感じられるもんね。

「先輩。ちょっと内緒の話があるんですが良いです？」
「ん！？　おうすまん。どうした？」
声を掛けるまでめっちゃ夢中になってたようで、ちょっとびっくりしてる先輩。
「このまま、素直に階層を降りて行くのは効率が悪いと思うんです」
「だが、床に穴を開けて一気に降りる事はできんぞ？」
「そ、そんな事は考えてません。それよりもっと楽で良い移動方法があるんですけど、あんまり知られたくないんで内緒にして欲しいんですよ」
「む、どういう事だ？」
謎かけみたいな僕の言葉に、眉をひそめる先輩。遺跡内部は転移魔法も封じられてるから他の移動手段というのは思いつかないんだろうね。
「内緒にしてくれると約束してくれるなら、教えます」
「…分かった。このアイテムに誓おう」
剣にって言わない所が、アイテム好きっていうのが分かっていいね。
「では、こちらに付いてきてください」
誓ってくれた先輩に頷いて、僕は十階層のエレベータへと歩を進めた。

首都から波乱がやってくる？

首都グレイトエース。

先の動乱の被害はすでに過去の物となり、人々は普段の生活を取り戻している。というのも、奇跡的に一般市民の人的被害が皆無であった為、市民にとって少し騒がしい日があったという程度の認識で済んだのだ。だが、そんな普通の生活が戻ってきたグレイトエースになにやら一騒動起きそうな空気が流れていた。

その発端はハイローディスの使者が先触れで王宮に入っていった数日前。そして現在、豪華な造りの移動邸宅とも言える車が王宮を目指して、首都を目指してゆるゆると進んでいる事が市民を騒がしくさせていた。

「くぁ…退屈です。ねぇ、全速力で進んで一気に駆け抜けたら気持ち良いと思いません？」

移動邸宅の中、窓際に座っている紫と銀色の混じった髪に濃い紫の瞳の少女はそう言って切れ長の目を輝かせて傍らに待機している若い男に話しかける。

「お嬢様、はしたない。あくびをする時はせめて口元は隠す程度の事はして頂かないと。王族としての立場を今一度よく考えて行動なさって下さい」

「そんなの知りません。叔父様が国王なだけで、別に私はちょっとお金持ちなだけだし。どうせバルトスに来るならここより、ガイアフレームがたくさんあるロバスに行きたかったわ」

そう言って、細いあごをテーブルに付いた手にのせ、きりっとした眉をひそめてため息をついた。あまり王宮へ行く事に乗り気ではないようだ。そして、態度をまったく改める事をしないお嬢様に、傍らで控える若い男は髪を揺らすほど首を振っていた。

「リリノア様。行儀見習いでこちらへ身を寄せるという事は、つまり…」

「分かってます。こっちの国へ嫁ぐのと変わらないって言うんでしょ？　でも、第二夫人じゃなくて何故王子狙いなんですの？」

「バルトス国のユージ王といえば、女嫌いで有名なのです。ですが、する事はされていたようで王妃と王子がいるというのも最近ようやく掴めたのです」

若い男の言葉に首をかしげ思案しているリリノア。

「それって、奥さんが居るって事よね？　だったら女嫌いではなく愛妻家という事じゃなくて？」

「そういう事になりますね。ただ、王妃の存在を確認したのはごく最近の事でしてそれまでは、どこの国から美姫を送られても即座に返されてたのは有名でして。特にあのアルラ姫を袖にしたのは有名な話です」

「エルディバの聖女アルラ様をですか？！　三姉妹の中でも特に美人なアルラ姫でも振っちゃうなんて、ユージ王の奥さんはすごい美人なんでしょうね」

ふ～んそうなんだぁ、と呟くリリノア。

「で、先ほどの話に戻りますが王子と婚約する事は先を見据えた戦略の為です。ユージ王は先の事からこれ以上夫人が増える事はないでしょう。ならば、未来の王は自ずと王子に絞られますからね」

「そういう事ね。なんとなく分かってたけど、はっきり言われてすっきりしました。ま、私は好きにさせて貰えるならどうでも良いですわ。で、その王子様はどういった方ですの？」

「先に手渡した資料に目を通してらっしゃらないのですね。道理でそのような乗り気でない態度なわけです」

リリノアのあまりにやる気のない態度にようやく合点がいったとため息をつく。その様子を見てリリノアは憤りを若い男にぶつける。

「当たり前よ。急にこんな話を持ってこられて納得できる乙女がいるもんですか！　見目麗しい栄えあるエルディバの王子様たちならともかく、力があるとはいえ所詮商売人のバルトスなんかに嫁げと言われても、心躍らないわよ」

そういってぷりぷりと怒って窓の外へ顔を向けるリリノア。そんな様子をわがままな妹を見るような目で穏やかに見つめる若い男。

「飛行フレームをご存知ですか？」

若い男のその言葉に勢いよく振り向くリリノア。その目はキラキラと輝いている。

「当たり前じゃない！　話でしか聞いてないけど、フレームが空を飛べるなんて物凄い発明だわ！　バルトスに来たからには一目飛行フレームを見ない事には帰れません。見るだけでなく操縦させて貰えれば幸せなのですが、王宮に入ってしまえばそれも叶わぬ夢となってしまうのですね…」

そういってわざとらしくよよと崩れるリリノア。非常に演技くさい。しかも大根。

「ここの王子が発明したそうですよ、飛行フレーム」

若い男の必殺とも言える一言に目を大きく見開くリリノア。勢い良く振り返った為に顔に髪の毛が掛かっているのだが、それも気にならないほど驚いているようで言葉もないようだ。

「…何故黙ってたのです？」

ようやく立ち直ったリリノアは、若い男に恨みの篭ったジト目を向け低い声で問いただす。

「いえ、資料に詳細に書いておきましたので当然目を通してらっしゃる物と思ってましたのでわざわざ口頭で伝えるのもおかしな話かと思いまして」

だがそんなリリノアの恨みの篭った視線をものともせず、しれっと答える若い男。

「そうよね、ロダンはそうやっていっつも私で楽しんでるわよね」

「いえいえ、とんでもございません。それに良くお考えになってください。我らが王が単純に事をすすめると思いますか？」

「私よりよっぽど綺麗なお姉さま方も居るのに何故と思っていましたが…そう、それ絡みなのですね。ようやく得心がいきましたわ」

そうして、ロダンを見やり催促するかのように手を伸ばす。

「どうぞ。これがバルトス国王子コージ様の資料でございます」

「ん、ありがと」

礼を言って資料を受け取り、真剣な面持ちで読み始めるリリノア。
その様子を満足げに見つめるロダン。ぱらぱらと勢い良く資料に目を通すリリノアの動きがふと止まる。

「ねぇ。ユージ王って女嫌いというか愛妻家ですわよね？」
「えぇ、それで間違いないかと」
「なのに王子は何故こんなに女性を囲ってるのでしょうか？」
「それはわたくしめには計り知れない事でございます」

役に立たないわね、と呟き再度資料に目を通す作業に戻るリリノア。
資料に何が書かれていたかは分からないが、リリノアにとってバルトス国の王子は女性に非常にだらしないという認識で固まったようだった。

一方、王宮では慌しい雰囲気で溢れていた。

「まったくハイローディスの奴等は、ちっともじっとしちゃくれねぇなぁ。うちはフレームこそ大量に配備してるが、結局は商売人の国だってぇのにどうしてここまでチョッカイかけてくるかねぇ…」

急遽、寄越される事になったハイローディスの王族の娘。行儀見習いという事だったので特段考えることなく、そういう風習があるものだと了承の旨を返したが、後で裏の意味を聞き慌てて部屋を長期滞在できるように用意したのである。

「商売人の国というのも先王までの話です。いまではフレームの保有数で言えばどこの国にも引けをとりません。その上魔石獣の被害

をこれだけ抑えている事はとても重要です」
「まぁ、こっちに来た時いきなり群れに襲われたしなぁ。あんな危ないもんは放置できんだろ」

勇司はそう言って、昔を振り返る。急に乗せられた青いフレーム。世界を埋め尽くさんとばかりに襲い来る魔石獣たち。それを乗りきりあれよあれよと王の座につき、離れていた家族と再会したかと思えば信頼していた友に裏切られ…

「色々あったと一言で済ませられる程度に、落ち着いてきた頃にこの話だろ？　というかどこでるりと光司の情報を嗅ぎ付けやがったんだ、あいつら？」
「さっぱり掴めませんね。王宮であれば何者かが潜入していれば、排除できるのですが」
「貴族に家族の事を隠し通すのもそろそろ限界だったし、頃合といえば頃合か。だけど、これ公表するのはまずいだろうなぁ…」
「何か問題があるので？」

公表する事で特に問題は無いと思えるのだが、勇司にとってはそうではないらしく珍しく渋面を隠そうともしない。

「ほら、うちの光ちゃんね学校に行ってるのよ学校。で、きっと友達もできてるだろうにそこへ王子様だーって発表があればどうよ？」
「そこは仕方ありません。それまでの不敬罪は不問に付すとして公表後は相応しい扱いをして頂くしか。あと口調が砕けすぎです陛下」
「そういうのって友情にひびがはいったり、余所余所しくなりそうじゃない？」
「それを見極めるのもまた王子としての責務でしょう。友人で居られるか、利用するだけのものになるのか。私達がいちいち関与する事ではありません」

そうきっぱりと言い渡され、がっくりと落ち込む勇司。どうも親馬鹿のせいで過保護になりすぎていたと反省しているようだ。

「分かった。とりあえずハイローディスのお姫様は王宮に居て貰って、折を見て学園に通って貰うことにしようかね。怒られたら怒られたでその時は黙って怒られよう…」

「まず確実に怒られますね。なるべく王宮の外で怒られてくださいね。では失礼します」

「この薄情者ぉ！」

勇司の叫びもどこふく顔で、臣下は自身の仕事をまっとうすべく静かに退出していった。

思惑

アースの案内の元、遺跡の奥へと進む。明らかに慣れた様子で進むアースを追って、移動方法とやらを考える。一番考えられる方法は転移魔法だが、遺跡内では使えない。だが、転移魔法を使える場所があるとしたら？　俺には転移魔法を使う事などできないが、もし簡単に深い階層まで行けるというのであれば、そのメリットは計り知れない。

「ちょっと待ってくださいね、サカキ先輩」

そう言って立ち止まった場所は、遺跡の奥の行き止まり。行き止まりという事は、やはりここだと転移魔法が使えるという事か。しかし、アースは転移魔法まで使いこなせるとは羨ましい限りだ。

ピコン！　“認証しました”

「！？　敵かっ！？」

「あ、大丈夫です。呪文じゃないので」

そう言っていつの間に出したのか赤いカードを壁にかざしながらアースは、落ち着いた様子でたたずんでいる。なんだ？　転移魔法ではないのか？

ガシュゥウンッ！

低く響く音を立てながら壁が横へスライドしていく。先程までは切れ込み一つなかったはずの壁が。そして、壁の向こうに広がる小部屋へと鼻歌まじりに入っていくアース。

「さぁさ、先輩。五十階層目指してレッツラゴーですよ」
「これは、なんだ？」
「エレベーターです。遺跡にもとからある便利な施設です。これを使うと遺跡の上から下まであっという間に移動できるんです」

これは想定外にも程がある。遺跡に入ってまだ一年足らずのアースが、このような重要な施設を発見していると誰が想像できるだろうか。俺も遺跡に何か秘密がないか探った事もある。この場所も行き止まりにも関わらず何度か足を運んだ覚えがある。人があまり来ない場所には秘密があると思ったからだが、俺は何も見つけることができなかった。

俺が意を決して部屋の中に入ると、アースがなにやら壁際で操作をしている。と、思えばすぐに壁がゆっくりと閉まっていく。アースが落ち着いている所をみるとこういう物なのだろう。壁がぴったりと閉じると、微かに部屋が揺れると同時に勢い良く下へと向かっているのが分かる。その間もアースは上機嫌でくねくね動いている。よほど、魔物を狩って金策ができる事が嬉しいようだ。しかし、何が欲しくてそこまで金を集めてるのだろうか？

「はい、つきましたよ先輩」
「…五十階層にか？」
「ザッツライッ！」

言ってる事は良く分からなかったが、五十階層についたのは間違いないようだ。先程と同じように壁が音を立てて開いていく。

「あっ、今日は珍しい！」

そう言って壁が開いている途中で、勢い良く飛び出すアース。何事かと思い、慌ててその後を追う。が、そこで見たものは…

「ベルドリアン?!　気をつけろアース!」
「大丈夫でーす!」

そう言って、軽々とベルドリアンの背中に乗るアース。大きくあぎとを開いていたベルドリアンの口の上を、緊張も見せず飛び越える。一歩間違えば口の中に入り、鋭い牙で咀嚼されるというのにだ。そして、背中に飛び乗ったアースは先程の「ギル」を取り出し光の刃で、ベルドリアンの四肢を切断していく。背中の装甲ほどではないとはいえ、ベルドリアンの皮はかなり分厚く硬いはずなのだが。

「エレベーターから出てすぐに獲物に会えるなんて、ついてますよ先輩!　これって珍しいんですよ!」
「それは良いが、妙に手馴れてないか?」
「いっつも潜ってますからね。この辺りなら目隠ししても歩けるぐらいですよ」

そう元気良く答えるアース。だが、こんな初っ端からベルドリアンのような大物を仕留めてしまうと持って帰るのに一苦労なのだが。こいつの皮を売るだけで確か二百ゴールドは下らないはずだ。などと、考えていると目の前のベルドリアンが消えてしまう。

「!?」
「さぁ、どんどん調査しましょうか先輩!」
「あぁ。しかし、あんな大物でも楽に仕舞えるんだな」
「まだまだたくさん入りますから心配しないでください。先輩の分もちゃんと持って帰りますからねっ」
「分かった」

平静を装ってカマをかけてみたが、やはり、アースが何かをしてベルドリアンを保管しているようだ。一瞬で物を収納できる魔法なのだろうか？　だが詠唱しているそぶりは無かったのでそういうアイテムか？　まぁ方法はどうであれ、かなりの量の荷物を運べるのは間違いないだろう。

「だがアースよ。今回の目的は調査だという事を忘れるなよ？　この階層は魔物が普通に存在しているようだし、すぐに上に戻っていくぞ」

「あう、誤魔化されないか。さすが先輩。でも、ちょっとだけ狩って行きたいなぁ…」

「だめだ。とっとと行くぞ」

「はーい、分かりました～」

いきなり五十階層まで来たので戻るのに時間が掛かるので、どんどん移動していかねば放課後までに調査は終わらないだろう。

「光ちゃん、あなたのるりが参りましたよ～♪」

昼休み直前。廊下から教室に響き渡る軽やかな少女の声。声に驚いてそちらを見ると一人の少女が荷物を抱えて立っていた。黒い髪をなびかせ、透き通るほど白い肌に良く映える黒い瞳。薄く小さな唇は弧を描いて、にっこり微笑んでいる。

「お母さん！」

「お義母さん！」

ミミとセリナが少女を見て驚いた声を上げる。白夜とヒロコも何か言いかけたようだが結局、少女に向かって手を振るだけにとどまった。どうやら彼女たちも知り合いのようであった。

「まだちょっと早かったかなっ？　失敗しっぱい。ていうか、光ちゃんのつっこみがなくて寂しいなぁ…」

そう言って、寂しげにつぶやくるりと名乗る少女。悲しげに眉根は寄せられ、潤んだ瞳を伏せがちにして先程までにっこりしていた唇も、今では悲しげに歪められている。そして少女の寂しげな表情を見た人間は男女を問わず、まだ見ぬ「こーちゃん」なる人物へと嫉妬の炎を燃やす。このような可憐な美少女を悲しませるとは何事か、と。だが、それは少女の罠だと誰も気づかない。同情を誘う程の悲しげな表情を見せる事で、この少女は「お母さん」と呼ばれていた事をすっかり無かった事にしている事を。

「お嬢さん、授業中だから入ってこないでそこで待っててね」

「うん。待ってる」

講義をしていたカマチ教官も、可愛い侵入者に優しく語りかける。あと少しとはいえまだ授業の時間があるので、仕方がないが待ってもらう事にした様だ。なぜか教官もすっかり騙されている様でお嬢さんと呼びかけている。そして、そのお嬢さんはミミ達に向かって内緒だと言わんばかりに、口に指を当てていた。

授業が終わると同時に、先程の美少女に殺到する人、人、人。それをお辞儀をしながら優雅に回りつつ、するりするりと人の波をかきわけミミの所へと進む。

「るり参上です！　お弁当持ってきたの！」

何か言いたげなミミを目で制し、そう宣言する。そして、すばやくミミの耳元に口を寄せると何事かをつぶやく。何かを囁かれたミミはなにやら楽しそうににっこりしていた。

「えっと、お嬢さん？　ミミちゃんとなにやら親しげやけど、ひょっとしてコージの関係者かいな？」

ミミと親しくしている様子をみて、ラインハルトは興味を抑えきれずについ口から質問がこぼれてしまったようだ。

「はい、光司とは一緒に住んでる仲です。初めまして、るりと言います」

そう言って、花が咲いたかのようににっこりと微笑みながら自己紹介をする。光司が見ていれば悪魔の微笑みにしか見えなかったであろう笑顔である。

「…あいつはどんだけ美少女と縁があるねんな？！　っとと、わるいるりちゃん、お兄さんちょっと興奮してもうたわ。せっかく来てくれたんやけど、コージは今ちょっと呼ばれて放課後ぐらいまで帰ってけーへんと思うで？」

「え、そうなんですか？　…そうなんだ…」

ラインハルトの言葉で見る見るうちにしぼんで行くるり。その様子を見ていた周りの人間は一斉にラインハルトに非難のまなざしを向ける。特にセシリアの視線は非常に厳しいものであった。

「るりるり、コージの分は残しといてミミとご飯食べよ？　きっとお腹すかせて帰ってくるよ」
「うん…そうだねっ分かった！　ミミちゃん大好きー！」
「あにゃー」

先程までの悲しげな表情から一転、満面の笑みを浮かべミミとじゃれ合うるり。ちらりともひらりも無い衣装とはいえ、美少女ふたりが絡み合う様は刺激が強いようで慌てて目を逸らす者、ちらちらと盗み見するもの興奮して顔を真っ赤にする者などで埋め尽くされていた。そして、絡み合ってるミミとるりの元にセリナ、ヒロコ、白夜が集まってきた。

「来ちゃった。私が光ちゃんのあれっていうのは内緒ね」

集まってきた彼女たちに向かって、意味深な台詞を周囲に聞こえるように言うるり。頬を桃色に染めて言う様は、どう考えても恋人だと言わんばかりである。そして、その様子に苦笑をするセリナ達。後の事を考えるとまた一騒動起きるのは間違いないからだ。

「とりあえず、ご飯たべよ？　おいしいって噂の物を買ってきたの」
「色々ありますね。あ、わたし飲み物を買ってきます」
「セリナちゃん、大丈夫。持ってきてるから、早速食べましょ」
「はーい」
「はい、いただきます」

もぐもぐと既に食べ始めているのは白夜とヒロコである。白夜は食

べるという行為に何か目覚めたらしく、ヒロコと競い合って食べていた。その様子を優しげな表情でるりは見つめていた。

潜む魔族

遺跡内を疾走する二つの影。魔物と出会えば瞬時に切り捨て、勢いを止めずにひたすら進む。その様子は魔物にとっての死神のような物であった。

「ようやく三十階層まで来ましたけど、なんだかここ魔物少なくないですか？」

「そうだな、そろそろ何か居るかもしれん。気配に気をつけろ」

「了解です」

そういって、狩りのスピードを幾分か落とす二人。遺跡内部では、放置されている魔物の死体などは自然に処理されてしまう。床や壁なども、時間がたてば修復されるのでいつまでも劣化しない不思議な構造になっている。なので、時間が経てば経つほどに戦闘の爪あとは消えていってしまう。

「少しでもおかしな所が無いか注意しろ。偶然が重なったと俺は思っているが、警戒するに越したことは無い」

「じゃあ僕は何かあると思って警戒しておきます。イレギュラーがいたら危ないですし」

今しがた倒したレッドベアから素材を剥ぎ取りながら答える光司。サカキの方は光司から伝えられたイレギュラーの存在について考え込んでいる。イレギュラーはエレベーターに乗ってやって来るので防ぎようがなく、何階層であっても常にイレギュラーが来る危険性を孕んでいるという事がサカキの危機感を募らせていた。

「しかし、俺は一度しか乗り込んだ事がないんだが、百階層はどん

な感じなんだ？」
「厳しいですよ。とにかく百階層からはメカがこちらを殺す気でかかってきますからね。まぁそのおかげでそこから先には何か重要なものがあると、言ってるようなもんなんですけどね」
とりあえず、今は一人で自由に動けるように鍛えている所ですけどね、と明るく言う光司。殺されそうな場所に頻繁に一人で足を運んでいるにもかかわらず、何か発見できる期待感のほうが上回っているようで、非常に楽しそうな表情である。
「おまえの強さの秘密はそういう所から来てるんだな」
「んー…でも、僕の仲間でも同じような事ができるはずですよ。最近はみんなも強くなってきてますから、制限も半分くらいで済みますし」
「制限？」
「あ、いえこっちの話です。なのでサカキ先輩も一度一緒に百階層に行きます？　メカから取れる豊富な素材がよりどりみどりですよ」
「う、それは有難い事だな。細かい部品やシリンダー、装甲はメカから剥ぎ取る物のほうが質が良いしな。今度、時間が合えば頼む」
「だいたい、毎日潜ってますんで暇がある時に来てみて下さい」
「わかった」
このような会話をしつつも、警戒は怠らない二人。あまり魔物を倒しすぎてもここまで来る冒険者たちの獲物を奪うことになるので、回避できる魔物はやりすごしている。
「先輩。あちらの方角なんですが、何か感じませんか？」
「魔力がぽっかり無くなってる空間がある…か？」
サカキは魔法を使う事はできないのだが、魔力を感知する術は心得

ている。魔力の流れを感知して魔法を撃つタイミングを分かるようにならねば、戦闘においては死を意味するからだ。

「やっぱり、そうですよね。自分の魔力を抑え込んでいるつもりが、周囲の魔力まで打ち消しちゃってる感じです」

「となると、かなり強い奴が紛れ込んでるな」

サカキの言葉に静かにうなづく光司。その目は焦るでもなく弱気になっているのでもなくただひたすらに静かな光を湛えている。そして、光司にうなづき返すサカキ。サカキもまた静かに先頭に立ち、光司を誘導していく。

なんの変哲も無い通路。

行き止まりでもなく、部屋へ通じる扉がある訳でもないただの通路。だが、光司とサカキは明らかにその通路に何かあると睨んでいる。ここら一帯だけ常に漂っている魔力が希薄すぎるのだ。光司は細長い棒状のアイテムをいくつも空中へと放つと、静かに時を待つ。

ボンッ！　ボボボボンッ！

「せっかく隠れているというのに無粋な物があるもんだなぁ。面倒くさい…」

光司が放ったアイテムが次々に爆発したかと思うと、壁際から一人の男がのそりと姿を現した。青い瞳に青い髪。そして特徴的な角。

「魔族か…」

「あれが魔族ですか。初めて見ました」

姿を現した男をみて警戒レベルを上げるサカキ。魔族とつぶやいた事を見るに相当危険な相手のようだ。何も知らない光司は特に緊張しては居なかったが。

「僕達、見逃してあげるから行きな。余計な事して人間に狙われるのも面倒なんだよ」

「殺して口封じ、しなくて良いのか？」

「死にたいなら、いくらでも手伝ってやるがなんで俺がそんな面倒な事をせにゃならん？　ここは餌が豊富で静かな所だ。隠れる場所にも事欠かない。そんな理想郷を誰が手放すと思う？」

面倒と口で言ってる割には丁寧に説明をする魔族。そんな様子の魔族に警戒を緩める光司とは対称にさらに警戒を強めるサカキ。

「青髪の氏族は非常に策士が多いと聞く。そんな奴が遺跡に一匹でも居れば安心できる訳が無い。悪いが討たせて貰う」

「詳しいもんだな。だが、俺は青髪の中でも変わり者でね。策を弄するぐらいなら寝て過ごす方がましってね」

警戒するサカキの様子を見て、いかにも困った顔をする魔族。特徴的な角が無ければどこにでもいる普通の青年のようにも見える。

「コージ！　やるぞ！」

「は、はい！」

「聞いちゃくれないのねぇ。若いってこうゆう事かねぇ」

サカキは腰に下げた刀を抜き放ち片手で構える。光司はというと戸惑いながら「ギル」を両手にそれぞれ構える。それを魔族は面白そうに眺めている。

先に仕掛けたのはサカキ。瞬時に間合いをつめたその速さは尋常ではなく、魔族もすくいあげるように振りぬかれた刀を危うく避けそこなう所であった。一撃をかわされたサカキは指先だけで刀を返し、再度魔族に切りかかる。

ギィン！

魔族はサカキの刀を手刀で受け、反対の手を急所を狙って鋭く突き出す。サカキ自身の腕が死角になって見えない角度からの攻撃にも関わらず、瞬時に刀を持つ手を入れ替え魔族の突きを払う。体が開いた二人は一瞬見合った後、互いに蹴りを放つ。だが、サカキは下段、魔族は前蹴り。その差が攻撃の主導権を握る事となった。

ッガッドッ！

サカキの下段で足を刈られ、体制を崩したところにサカキの後ろ回し蹴りが容赦なく魔族の腹部を直撃し、勢い良く壁に叩きつけられる。叩きつけられたその先、すでに光司は「ギル」を構えて魔族への追撃を行おうとしていた。

「おっとっと。なかなかやるね僕達」

「あら？」

特に手を抜いたつもりではない一撃は、するりとかわされてしまう。どうも叩きつけられた瞬間にすぐに移動していたようだ。だが気の抜けた光司の声がするので、反撃されている様子はないようだ。

間近に魔族の気配を察知した光司は、慌てる事無く「ギル」を振り抜く。それを紙一重でかわし、指先から何かを飛ばす魔族。しかし、光司も飛ばされた物に視線をやる事無く少し頭を動かす事で回避す

る。そして、空いている手でもう一度魔族へ切りかかる。

回避しながら、反撃を試みる魔族。それをまるで演舞のように舞いながら回避しつつ鋭く攻撃する光司。攻撃の動作と回避を同時に行う為、光司の動きはまるで隙が無かったが魔族も捨てたものでなく、光司の攻撃を一度足りとて受ける事無く回避しつづけていた。

そして、それを見てサカキは薄く笑っていた。

隙在らば一撃を食らう一進一退の攻防の中、均衡を崩したのは魔族であった。光司の攻撃を紙一重で避けたその瞬間、魔族は背後からの殺気を感じ防御体制を取った。だが、その一瞬の隙を光司が見逃す筈も無く。

「あだっ！？」
「今のは？」

一瞬だが確かに魔族の背後に何かが居たのだ。

「俺の技だ。一気にいけ！」
「はいっ！」

サカキの力強い言葉に元気良く返事をし、魔族に立ち向かう光司。
「ギル」のモードは雷。魔族とはいえ人の形をして会話できる相手に対して光のモードで切りつける事は光司にはできなかったらしい。だが、対人戦で相手を生け捕りにしようという場合であれば雷は非常に有効である。

「ぴりぴりするねぇ。面倒くさい武器だな」
「しゃべってる暇はないよぉ？」

光司の斬撃のスピードは一流といわれる使い手から見れば速いものではない。だが、意識的にか無意識かは分からないが、速さに緩急があり非常に緊張を強いられる動きを見せる。魔族もその変則的な動きに戸惑いを見せ始めていた。

母さんはしっかり母さんなのです

双剣乱舞。

青髪の魔族を光司は徐々に追い詰めていく。光司の止まらぬ剣閃を青髪の魔物は、少しずつ回避できなくなっている。光司の一撃を食らう度に魔族の体を痺れが蓄積していく。さらにはサカキの技が光司のカバーをするかのように、ありえない角度から魔族を切りつけていく。

「面倒くさいなぁっと」

「!?」

急激な魔力の収束と解放を感じ取り、とっさに距離をとる光司。その判断は正しかったようで、魔族を中心に破壊的な純粋な魔力が全方位に一気に放出され、光司とサカキは吹き飛ばされる。

「なぁ、これだけ弱らせたらもう良いんじゃない？　お兄さんは遺跡で大人しく暮らして行きたいだけなんだ。見逃してくれないかなぁ？」

確かに光司やサカキに切られている筈なのに、一滴の血すら流れ出ていない魔族。その表情は困った顔しか浮かんでおらず、痛みに耐えているようなそぶりは毛ほども無い。

「ふざけた事を…俺達がそう言われて見逃すと思うか？」

「そうだねぇ、普通に考えれば無いね。だけど、残念。もう逃げてる最中なのさ」

「なにっ？！」

言われて身構えるも既に魔族の体は存在が薄まりつつある。

「じゃ、君達に二度と会わないように人間と関わらないようにするよ。じゃね」

「まてっ！」

しかし呼びかける声も空しく、空気に溶けるように魔族の姿は消えて行った。あとにはサカキと光司の二人だけが遺跡に残っているだけであった。

「簡単に逃げられてしまったな。まさか魔族が隠れてるとは思わなかったな」

「どうやって逃げたんでしょうか？　転移魔法は使えないのに…」

遺跡内部では転移魔法が封じられる大規模術式が組まれている為、誰であろうと使う事ができない。だが、魔族は目の前から消えてしまった。

「先ほどの魔力の放出が怪しいな。しかし、これはどう報告したものか」

「どうもこうも大丈夫じゃないです？　さっき人間とは関わらないって言ってましたし」

そう言った光司に向けて鋭い視線を向けるサカキ。

「あいつは魔族の中でも策を弄することに長けた青髪の氏族だ。言う事はすべて疑ってかかったほうが良い。簡単に敵を信用するな、コージ」

「僕には本当の事を言ってるように見えたんだけどなぁ。面倒くさ

いって言う時心底面倒くさそうな顔してましたし」
「それも何かの企みに違いない。これは警備体制を考え直さないといかんな」

サカキの言葉に首をひねり納得のいかない様子の光司だが、この場合まともな事を言ってるのはサカキの方だと分かっているのか、それ以上は特に何も言わなかった。

「とりあえず、あいつを見かけたらすぐに逃げるように通達しておく方が良いですよね？」
「それは難しいな。奴は仮にも魔族だからな、公表すれば混乱を招くに違いない」
「うーん…とりあえず公表するのは、門番の人とか巡回警備してるような人だけにしときます？」
「そこら辺が妥当だろうな。じゃあ早速帰るとするか」
「はい、分かりました」

しっかし、魔族ってはじめて見たけどちょっと角が生えてるぐらいで後は人間と変わりがないんだねぇ。もっと羽が生えてたり尻尾が生えてたり目が三つあったりするんだと思ってた。だけど、良く分からない技を使っていた辺りが魔族の魔族たる所以なのかもしれない。魔族に逃げられたのは残念だったけど、五十階層から狩りをしていったおかげで少しは懐が暖かくなったから良しとしましょうか。

「アースただいま戻りました〜…？」

ちょっと上機嫌で教室に戻ると、何やらおかしな空気が場を支配していた。なんか、みんな僕の方を見てるんだけど、ミミ達がまた暴走していらん事を言ったのか…な？

「ん、席に着けアース。それと可愛いお嬢さんがお前を訪ねてきてたぞ。詳しい事はセリナ達に聞くと良い」

「…？　はい、分かりました」

なんか微妙な空気を感じつつも、大人しく席につく。ミミがにこやかに笑いかけてくるけどどこかいたずらした時の顔にも見える。やっぱり、何かやっちゃったのね。今度は一体なにをばらしちゃったんだろうか…後が怖いけど今はとりあえず、大人しく授業を受けるとしましょうか。あー…おなか減った。

「コージ、結局何しに授業を抜けてたんや？」

授業が終わると同時にハルトが、何をしてきたか尋ねてくる。色々聞きたいのは僕もなんだけど、とりあえずサカキ先輩の付き添いで遺跡に潜っていたとだけ伝えた。細かい事はあとで聞けばいいかと納得してくれたようで、ハルトの追及はそれで終わる。さぁ、今度は僕がミミ達に聞く番…だ？

「コージ。あの黒い髪の可憐なお嬢さんとはどういう知り合いだ？」

「へ？」

ミミに僕が居ない間に何があったか聞こうと思った矢先に師匠が鼻息も荒く問い詰めてきた。え、黒髪のお嬢さんって誰の事？　僕も疑問だったのでついミミのほうを見ると、ちょいちょいと手招きをされた。

「お昼にねお母さん来てたの。でも、お母さんってばれないように振舞ってたから皆勘違いしてるの。その上お母さんって、けなげな少女を演じてたからコージがすっごく嫉妬されてるの。お母さん大人気だったよ」

「あんの小悪魔めぇ…」

「で、いつまでそうしてるつもりだコージ？　ルリさんを悲しませた罪は重いぞ」

おー…師匠が見事に母さんに騙されてるぞぉ。確かに見かけは美少女だからまさか、僕のお母さんなんて思わないよねぇ。しかも、こういういたずらが大好きだとか思うわけないよね。ひじょーにやばい。

「師匠」

「なんだ、言い訳なら聞かんぞ」

「いえ、落ち着いて聞いてほしいんですけど、くだんのるりさんは僕のお母さんです」

僕の台詞を聞いた途端、怪訝な表情をする師匠。僕の言葉を脳が受け付けない様子だ。そして、僕の言葉を反芻してようやく意味を理解したらしく立ち直る師匠。

「ようしコージ、いーい度胸だ。あんな美少女を捕まえて母親だと？　もう少しましな事を言うかと思ったが、最高に面白い冗談じゃないか、えぇ？」

「わーん、やっぱり信じて貰えないぃぃぃぃ〜！」

僕の師匠だから、ちょっとは耳を傾けてくれるかと思ってたんだけど鬼のような形相で、さらに僕に詰め寄ってくる師匠。だいぶ信頼関係を築けたはずなのに、それを破壊してくれるほどの何をしたん

だ母さんはっ！　毎度のことだけど本当にあの母さんは余計な事をさせたらピカイチだよなぁ。たまに良い事もするけど。

「ミミさんやセリナさん。ヒロコさんに白夜殿と手広く関係を持っているくせに、その上黒髪の清楚なお嬢様なルリさんにまで手を出すとはなんたるうらやま…もとい、破廉恥な事をしているんだ、お前は！」

「師匠もやっぱり男なんですね、修行ばっかりしてるんでちょっと心配してたんですよ！」

「今はそんな事を話しとらん！　で、どうなんだ！　一体彼女に何をしたんだ！」

「分かりました、証拠を見せましょう証拠を！　師匠、家に来てください。そうすれば僕の言ってる事が本当だって分かって貰えるはずです」

僕はびしっと師匠に向けて言い切った。うん、決まったね。

「え、そんな事ならあたしが行くわよアース君家！」

「いや、席が近い俺の方が行くべきだろう？　な、そうだろ、アース！」

「いえいえここはやっぱり、ルリちゃんと同性である女性が行くべきですよね。良かったら私が行かせて貰っても良いですよ？」

家に来てくださいと言った途端に、なぜか他のクラスメートが僕に詰め寄ってきた。母さんは黙ってたり演技していれば相当な美少女だし、あの人って僕を追い詰めるためにそういった演技はすんごく上手だから、クラスメート達は簡単に手玉に取られてしまったな、これは。

「えぇっと、そんなにたくさん来られても部屋に入らないというか

…」

「じゃあ、勝負しましょう！　三回勝負よ！」

「アース、何人なら入れるんだ！」

「えっと、五人ぐらいなら大丈夫かと」

「ようし！　勝負に勝ち残った五人がアースの家に行けるって事でいいな？」

「えぇ、受けて立ちますわ」

「お、おい！　俺は最初に招待されてたはず…」

「駄目よヴァイス、ここは公平に勝負よ！」

「くそっ、こんな事なら屋上に呼び出してから問い詰めれば良かったか」

なんというか、非常に騒がしい事この上ない。気づけばセリナがいつの間にか僕の横に寄り添って僕を見ていた。

「お義母さん大人気ですね、コージ」

「この半分、いや四分の一で良いから人気を分けて欲しいよ」

「駄目だよ。コージが人気者になったら泥棒猫が増えちゃう」

「そうですよ、その代わりと言ってはなんですが満足させますよ？色々」

そう言って艶然と微笑むセリナ。そんなセリナを見て思わず生唾を飲み込んでしまう。ミミの方を見るとその通りと言わんばかりにしきりに頷いていた。

「主は幸せ者よの。これだけの美少女にかしづかれるんじゃからのぉ。勿論、わしも主を満足させるのにやぶさかではないぞ」

「うふふ、たまにはボクも本気だしてあげようかマスター？」

皆が騒いでいる間に、そういって詰め寄ってくる四人。皆の意識が

勝負に向いているからこんだけいちゃいちゃしていても、誰にも責められない。うん、余は満足じゃ。そんな風にのんびり過ごしているとどうやら勝者が決まったようだ。

どうやら師匠もしっかり勝ち残っているようだ。エリーも居るのが驚きなんだけども。あとは、フィリア＝メイノールさんにティーナ＝エリツォーネさん、あとは師匠との立会いの時に審判をしてくれたホーン＝エヴァンスくんだ。物静かそうな彼まで勝負に加わっているのに驚きだ。

「では、恨みっこなしって事で、このメンバーでるりさんは僕の母さんという事を確認して貰います。良いですね？」

勝負に勝ったメンバーとは対照的に負けたメンバーは非常にがっかりしているが、明日には詳細を教えるという事でなんとか納得させた。そして、総勢十人で家路へとつく。なんというか、師匠とエリー以外はあまり話しした事のないメンバーだったので、これをきっかきにちょっと話をする事ができた。

「ただいまー！」
「光ちゃんおかえり。ご飯できてるわよ」
「あ、お邪魔してます！」
「こ、こんばんは、お邪魔します」

家に帰ると母さんが珍しくエプロンをつけて出迎えてくれる。そして、母さんに緊張した様子で次々に挨拶をしていくクラスメート達。その誰もが母さんにまた会えて嬉しいといった面持ちである。本当に大人気なのね母さん。一体何をした。

「いらっしゃい。うふふぅ、「母さん」の読み通りね。ひぃふぅみ

い…うんうん数もばっちりね。良かったわぁ。みなさん、宜しかったら晩御飯も召し上がっていって下さいね」

そういって、母さんという台詞を強調して言う母さん。流石に僕と打ち合わせする時間もなく本人からカミングアウトされた事で皆がぽかーんとした表情で固まっている。

「教室ではごめんね。せっかくお弁当を持っていったのに光ちゃんったら居ないもんだからつい意地悪したくなっちゃったの。てへっ」
「それが母親のする事かっ！　可愛く誤魔化しても駄目だからね！」
「まぁまぁ。母さん腕によりをかけてご飯作ったんだからそれで許してよ、ね？」
「…母さんが作ったの？」

手作り弁当が腐臭放つ胃袋破壊爆弾と化したり、軽い朝食を作ろうとすれば何故か一時間かかっても出来上がらずに焦げた何かが出てきたり、初心に帰るつもりで卵焼きを作れば何故か赤い卵焼きができあがったり…

「ふふっ、母さんの魔法の腕を甘くみちゃ駄目よん。光ちゃんの料理をちゃぁんと再現できてるんだからねっ」
「なんというか、無駄に魔法の腕を上げてるよね母さんは」

なんにせよ、人が食べられるような料理が出来上がっているようだった。

「こんな所で立ち話もなんだし、みんな上がって？　僕も誤解が解けたようでほっとしたよ～」

僕がそういって促すと、ぎこちない動きながらも挨拶をしてリビン

グへと向かう。ミミ達がちゃんと先導してくれるので、僕は家のセキュリティを一時解除してゲスト登録をしてから皆の後を追う。うーん、結局こういう事になったのって前に母さんに友達ができないって相談したからなんだろうね。こうやって、家に人を招待する事でいろんな人と話すきっかけを提供してくれたんだろうな。

まったく。たまにごくたまぁにこういう事をしてくれるから、母さんは憎めないんだよなぁ。せっかく母さんが用意してくれた機会だし、僕も頑張って友達を増やすように努力しよう。

待ちきれないストーカー？

朝早く師匠との鍛錬から帰ってくると、家の前に車が横付けされていた。なんだか、嫌な雰囲気を感じたので、塀を飛び越え家の中に入る。例えて言うなら、暴走しているセリナの襲い掛かる一歩手前のような雰囲気なんだよね。

「おーい、フレーマー起きてる？」

心当たりはここだ。ロバス内でバス以外の車両というのは非常に高価である。かなりの富裕層でしか持ち得ない物であり、完全に嗜好品でしかない。なにせロバス内でしか利用できない物だからね。小型八型を三基も持ってるお嬢様なら持っててもおかしくない。

「んー？　起きてるというか寝てない？」

フレーマーはカードをいじくりつつ、僕のほうをゆっくりと振り向いて答えてくれた。また、何か思いついて徹夜で作り上げたっぽいね。

「本当に好き放題してるなぁ…今日って、サラって子の家に行く日なんじゃないの？」

「あぁ、そうだった。ちょっと寝てから北ブロックに行こうかな」

「たぶん、それ無理。家の前に車止まってるんだけど、たぶんサラって子じゃない？」

僕の言葉に驚いた表情をしているフレーマー。まだ朝の七時前なのにすでに家の前でスタンバッてるとか、びっくりだよね。家の場所を教えた覚えは無いし。

「えぇっと…セリナ達に見つかる前に行ったほうが良い？　良いよね、うん分かりました」

僕のお願いを聞いてもらえて良かった。ちょっとこぶしを振り上げて歯を食いしばってお願いしたけど、そんなのは良くある事だよね。フレーマーはそこら辺に転がっている設計図とかを片っ端から指輪に片付けながら、慌てて出て行った。

じゃあ、セリナ達を起こしに行くとしましょうか。朝ごはんは昨日の残りで良いから今日は作らなくて楽だ。離れから出て、庭を横切ってゆっくりと本館へと足を向ける。塀の向こうで慌しい動きが感じられるので、フレーマーが拉致されていったんだろう。

昨夜は家に来た人達とお話する事ができたので、非常に有意義な一夜となった。母さんの事も最初は半信半疑だったんだけど、父ちゃんと並んで写ってる写真や、僕の小さい頃の写真を持ち出してきたので、納得してくれたようだ。というか、写真を一体いつ持ち出してきたんだろうか？　向こうの世界に置いてきてるはずなんだけども。

「ほらー皆朝だよー、おきて起きて。たまには、僕をやさしく起こしてくれる女の子になって欲しいよ…」

僕の部屋へ入るとまだ皆はぐっすりと眠っていた。今日はミミとヒロコが真ん中でセリナと白夜は端っこだ。四人も居れば一人ぐらいは早起きしそうなものだけど、誰一人として起きてこない。というかヒロコ。君は精霊だから眠らなくて良いはずなのに、なんでごろごろしっぱなしなのかなぁ？

「ほら、寝ぼけ眼でうにゅうにゅ言ってる姿って可愛いと思わない？」

ヒロコはやっぱり寝たふりだったようで、僕の呼びかけでむくりと起き上がってきた。

「それは本当に寝ぼけてる子だったらの話だ。演技じゃちっとも萌えない」

「ちぇ、マスターはだんだん贅沢になってくるね。いけず」

僕が朝練にいく時に一緒に起きてご飯の用意をしてくれても良いんじゃぞ？

「ん。朝の事は黙ってて上げるから黙りなさい」

「イエスマム」

どうやら、家の前にサラって子が来てた事はヒロコには筒抜けだったようだ。戦わないけど流石は精霊ってところか。でも、ヒロコって何の精霊なんだろうか。

「ん？　僕は世界だよ。それ以上でもそれ以下でもない存在なのだ」

「火とか水とかそういう属性は無いって事？」

「というか、それらも内包する形だね。まぁ、そんなのはどうでも良いからおいしい朝ごはんにしよう！」

「あ、おはようございますコージ。今日も大好きです」

「あ、おはようセリナ」

起き抜けに僕を見つけたセリナがそう言いながら抱きついてくる。まだちょっと寝ぼけてるようだった。頭がなんかカクンカクンしてるし。その後はヒロコにも手伝って貰って皆を起こしていった。

そいでは、今日も頑張って勉強するとしますか。

早朝、まだ肌寒い中急いで玄関から飛び出して外を見回すと、一台の車が静かに僕の前に横付けされ、一人の少女が僕の前に舞い降りた。

「おはようございます、アースさん！　待ちきれなくて来ちゃいました！」

「あー本当に居たんだ、おはようございますサラさん。どうしてここが分かったの？」

正直、ストーカーと疑っても問題無いほどの手際のよさである。尾行された覚えはまったく無かったんだけども、どうやって調べたんだろうか。

「お父様に頼みましたの。そうしましたら、どうもご存知だったようでしてすぐに分かりましたわ。先日は、おいしいお菓子を頂きましてありがとうございます」

「ん？　お父様ってえーっとサラさんのお父さんって誰？」

「詳しい事は車でお話しませんか？　少しここは寒いです」

「あーうん、分かった。じゃあ、そうしようか」

僕の返事を聞くとサラさんは、嬉しそうに僕の背後に回って車の中へと押し込んでくる。結構小さい体なのに、意外と力強い。押されながらも、座席に付いた僕のひざの上に何故か座り込もうとするサラさん。なので、慌てて座席の奥へと移動する。

「むぅ。じゃあお家まで帰りましょう」

その言葉を合図に車が静かに移動する。ゆるやかで乗っている人間にまったく負担をかけないその運転に正直驚いてしまう。車がそこまで普及していない世界なのにここまで上手く乗りこなせるという事はそれだけ長時間運転してるって事だもんね。

「で、コージさん。あ、コージさんとお呼びしても宜しいです？」

「僕の名前までしっかり調べてるという訳ね」

ストーカー怖ぇえええ！？

「あぁあぁぁ！？　そんなに警戒しないで下さいよぉ。別に何も変な事してコージさんの名前を知った訳じゃないんですから」

「そういえば、さっきお父様がどうとか言ってたよね？」

「はい、私の父はオーロ。ペリカンの支配人と言えば理解して頂けるでしょうか？」

「あぁ！　こないだ来てたフレームの鑑定の人かぁ。あぁ、なるほどそれで小型八型を三基も持ってるわけなのね。道理で…」

そりゃぁ金持ちだわ。なんつーか、別次元の金持ちなんだろうねきっと。

「本当はあんまり言いたく無かったんですけど、コージさんなら大丈夫ですよね？」

「え？　今、むしろ危険を感じて大丈夫な気がまったくしないんだけどもっ？！」

金持ちって何するか全く分かんないんだよね。いざとなったら強引

にでも逃げ切ってやる。

「ふふふっ。取って食べたりしませんよ。やっぱりコージさんは大丈夫でしたっ」

「えーっと…？」

僕が危機感を募らせているというのに、このお嬢様はそれを見て嬉しそうに笑ってる。結構この人サドっ気があるのだろうか。これは早まったか…

「今日はたっぷりフレームについてお話しましょうね。家には工房もありますしフレームも第四世代の多脚型まで仕入れてありますから、色々試せますよぉ～」

「第四世代もあるんだ。あれって、人型しかまだ無い筈じゃなかったの？」

新機軸は大体いつも人型から発生して、ある程度広まってから他のタイプに派生していくはずだ。第四世代が発表されてまだ間もない筈だから、多脚型が出るのはまだ早いはずなんだけど。

「それが変形するタイプだという話だったので、居ても立ってもいられずつい…」

「どんな変形するの？」

そう尋ねると少し言い辛そうにこちらを見つめてくるサラさん。鳥型じゃないの？

「それがそのぉ…大砲…です」

「大砲？　と言う事は別に空を飛んだり、鳥型になったりとかはしないって事？」

「残念ながら。変形という言葉に惑わされて、先走っては駄目ですね。はい」

そういって、がっくりうな垂れているサラさん。どうやら、現物を見ずに買ってしまって後悔してる代物のようだ。ていうか、フレームを現物も見ないで買うとかどんだけお金があるのよ。

「まぁ、あれはあれで武装のアイデアとして凄く良かったんで、良いんです。えぇ、お父様に流石に叱られましたけど、あれも私の糧になっているのです」

「えっと、それで第四世代の特徴って何かなぁ？　いまいち知らないんだよね」

「エネルギー伝達率の速度が格段に上がりましたね。ある意味、ルーツに迫るほどじゃないでしょうか。今までのより小型化されたアンプリファーを各部に設置する事で、機動性能を確保できてます」

「単純に質の良いエティムズを使ってるって訳じゃないの？」

エンジンからのエネルギー供給はすべてエティムズを使ってるはずだし。

「いえキロ単価十ゴールドの物でしたよ。なので、質の良い物を使えば更に効率が上がるんじゃないでしょうか？　他には射撃武器用の照準器というものが追加されてました」

「それはちょっと便利かもね」

ようやくＦＣＳが出回って来るのか。といっても、レーダーも無い世界だから多少狙いがつけやすい何かが付いてるだけかも知れないけどね。

「コージさんの設計図を見せて貰えるのが楽しみです。変形するフ

レームって凄くあこがれます」
「あ、そうそう。一応、こういう形になる予定なんだ」
そういって、”ドゥエーリン“で作り出した模型を取り出して見せる。一応この模型もちゃんと変形できるから、いじってても楽しいのだ。
「え、あっ！　わあぁっ!?　見せて下さいっ！」
「はい、どうぞ」
意外と重いんだけど、軽々と受け取ったサラさんは目を輝かせながら模型をいじりだしている。人型から飛行形態への移行は単純な手順なので、サラさんもこねこねいじっている間に飛行形態へと変形させて喜んでいた。
「凄いです。このような形のものが空を飛べるとは思えません。いえ、投げて飛ばすというのであればどこまでも飛んで行きそうな形ではあるのですが」
「まぁ、あんまり普通じゃない手段で飛ぶからね。でも、間違いなく空を飛べるよ」
「この鋭角なフォルムがまた堪りませんね。ちょっと人型の時に線が細い気がしないでもないですが、飛べる事を考えたらそんなのは気になりませんよね」
「攻撃で装甲が変形しても多少なら影響ないようにしてるからね。そんな事は無いとは思うんだけども」
「なるほどぉ。色々と考えてあるのですねぇ。勉強になります～」
そういってまた模型をいじる作業に戻るサラさん。本当にフレームが好きな人なんだね。ちょっと安心しました。

世界の風

グレイトエースは商人の国の首都という事で、商売っ気たっぷりな所があるかと思ったんですけど、意外と整然とした町並みで中々に攻め落とすのに苦労しそうな感じが見受けられました。そんな訳でじっくりと堪能して色々調べないといけないと思ったのですが。

昨日の今日でまたまた移動しないと行けない可哀想な私。

なんてね。行く先がロバス！　しかも飛行フレームを開発した人の傍に行けるって事だからむしろ幸せっ！　通り過ぎておいてまた戻るのも、こういう事なら大歓迎！　本当は強引に王様にお願いしたんですけどね。私のために色々と準備して下さってたようで申し訳ないとは思うんだけども、やっぱりこの胸の衝動は抑え切れないものです。

「ロダン！　全速前進ですっ！　少しぐらい家が壊れても問題ありません！」

「姫様。他の方もいらっしゃるのですから、少々抑えてください」

あぁ、そうでしたわね。流石に王様もただロバスに行かせるのは忍びないと思って下さったようで、侍従を数名と護衛として飛行フレームが三機も警戒してくれていますの。間近で見上げるとやっぱり心躍ります。何故あの形と炎で飛ぶのかさっぱり分かりませんけど。

「むしろ、私が飛行フレームを操縦すれば早いんじゃないかしら？」

「姫様、抑えて抑えて！」

少々興奮気味の私をロダンが必死になだめてきます。うん、無理で

すわ。さぁ、ハーレムを作ってらっしゃる王子様、覚悟なさい。私が行くからには第一夫人は誰にも譲りませんし、他に妾も要りませんから、清い生活に戻して差し上げます。そして、二人で色々なフレームを作って大陸に名を馳せましょう！

「ねぇ、操縦するのが駄目なら乗せていって貰いましょう！」

「いい加減落ち着いてください姫様」

あら、ロダンを怒らせてしまったようです。目が笑ってません。操縦するのが駄目なら飛行フレームに家を抱えてもらって移動するのは駄目でしょうか。だって、ここからまた二週間ほどかけてロバスに行くのは、時間が掛かり過ぎだと思います。また機を見て提案する事にしましょう。ふふふ、待ってなさい飛行フレーム！

「慌しい姫さんだったなぁ。ハイローディスの人間にしては、珍しく裏表のない人間だし」

「あまりの裏表のなさに返ってとまどいましたけどね。フレームが目当てですと正直に言われた時は、一瞬意味が分かりませんでしたからね」

グレイトエース来た時よりも早いスピードで遠ざかるハイローディスの姫を乗せた家を見送りつつ勇司と側近の者は愚痴をこぼす。

「飛行フレームに興味があるのは分かるがこうも露骨に見えるのはどうも、落ち着かないね。裏で一体何をしているのやら…」

隣国がハイローディスしかないバルトスとは違い、ハイローディスはバルトスは勿論、エルディバ、ドーノス、クラエトライなどの列

強と国境が接している。そのような大国に囲まれながらも、一歩も退くことなく均衡を保っている。国の大半が山岳地方である為、大軍を擁する事ができないとはいえ、軍事行動がまるで無かった訳ではない。そして、そのことごとくを退けてきたハイローディスの手腕は褒めるべきであろう。

「それにあの姫様に付いていた執事に見覚えありませんか？」

「つらは見覚えは無いが、あの動きは見た覚えがあるな。鉄壁とか言われてる奴じゃなかったか？」

「その通りです、ちゃんと覚えてくれてるようで嬉しいです。王はいつも宴の席では食べてばかりですからね」

側近の言葉にうっと、喉を詰まらせる勇司。思い当たる節がありすぎるようだ。

「姫様の周りにはそれなりの人間がついてるって訳だな。うーん、光ちゃんに護衛つけといたほうが良いかなぁ」

「それでしたら、件の勇者をつければ宜しいかと。ロバスに滞在しているはずですから」

「勇者か、あいつなら確かに護衛として申し分ないけど、やって貰えるかなぁ」

光司の事が絡むとただの父親になるのか、自分の立場を忘れてそう呟く勇司。それを聞いておもわず苦笑をもらす側近。

「ユージ王。勇者は確かに魔王を倒せる唯一の方ではありますが、あなたはこの国の王様なんですから、勇者も否とは申さないでしょう。先の動乱の件もありますし」

「あーそれはそうだけど、勇者だぞ勇者。一応お願いはするけど、駄目だった場合に依頼できそうな人間を調べておいてくれるか？」

「はい、かしこまりました」

内心で勇者で行けると思いつつも、次善策の手配も怠る事はできない。何かあった時に動かせる人間が必要になってくるからだ。何事も無くすすめば問題はないがハイローディスがらみであれば、用心するに越したことは無いだろう。

「で、あの姫様にあれを貸さなかったのは、何故です？」

「何故も何も、あれを見られたら絶対欲しがるだろ？　飛行フレームならともかくあれはちょっと規格外だからねぇ。本当うちの光ちゃんは凄いよね。普通、首都からロバスまで二週間弱なのに、三十分で行き来できる乗り物作るんだもんなぁ」

「転移陣が使えない分、重宝しますよね。でも気をつけてくださいよ、ロバスは竜王の縄張りが近いんですから」

「いや、竜王でも追いつけない速度だから大丈夫らしいぞ。こないだ光司が竜王にスピード勝負に勝ったって言ってたし」

「そ、そうですか…分かってるつもりでしたが、王子は本当に無茶苦茶ですなぁ」

勇司から伝え聞く光司の武勇伝に、脱力する側近。色々と勇司から聞かされていても、なかなか慣れないようだった。

皆で揃って朝ご飯を食べてる時に、ふと思い出したようにセリナがこんな事を言った。

「コージの小さい頃って、とっても可愛いかったんですね」

「女の子みたいだったよね～」
「そういえば母さん、昨日アルバム持ってたけど、あれどっから出したの？」

そういえば、なぜか母さんは大量のアルバムを出してきて皆に見せてたんだよね。こっちの世界に来る時ってほぼ着の身着のままだったから、荷物なんて無い筈なんだけど。

「え？　向こうの世界から持ってきたのよ？」
「は？　どうやって？」
「それはこの式神さんたちの出番なのです」

そういって、何かごちゃごちゃと書かれた人型の紙を取り出す。えー…式神といえるのかな、これ。

「召喚魔法で生きてる人間は向こうの世界には行けないらしいんだけど、こうやって命が無い物だと送り出せるんだって。だから、持ってきて貰ったのよ」
「なんで来る時は生きてても大丈夫なのに、戻れないんだろう？」
「なんか体が作り変えられるせいとか、なんとか言ってたわよ。でねでね、式神チャンを使って向こうに置いてきちゃった物を色々持ってきて貰ってる訳なのよ」

んー、一応理屈はあるみたいだけど母さんの説明じゃまったく分かんない。だけど、向こうに置いてきた物を持ってこれるのかぁ…ゲーム…は作ったから別にいいし、小説や漫画ぐらいかなぁ持ってきたいものって。

「デジカメとパソコンとかも持ってきてるから、じゃんじゃん撮れるわよ」

「こっちの世界じゃまだ絵が主流でモノクロ写真なんて出始めなのに、そんなの持ってたら目立たない？」
「いいじゃないのよぉ、自慢しなさいよ自慢。ね、ね？」
「あんまり目立ちたくないから、セリナ達だけと撮る事にしとく」
「え、なんですか？　なにを取るんです？？？」

とことことセリナが傍に来る。ミミはまだご飯を食べてる最中で視線だけこちらに向けている。ミミは行儀が良い子だねっ！

「はい、セリナちゃん光司と並んで並んで、そうそう。光ちゃんはもっと抱き寄せる！　はい、いくよー、セリナちゃんはにっこりしててー」
「え、え？　えっと？」

戸惑いながらも微笑むセリナ。そして、何回もシャッターを切る母さん。連続でシャッターを切るのは母さんの悪い癖だ。デジカメだと後から消せるので、連写機能があるデジカメでもわざわざ自分の指で連写する人なんだ。だから、よくぶれてる写真ができる。

「プリンターにセットして、ぴーっと選んで印刷印刷っとぉ」
「どっから電気を取ってるわけ？　ていうか、いつの間にか配線工事してたりする！？」
「内緒内緒。魔法の練習がてら色々してるのよ、母さんも」

などと話してる間に写真ができあがる。

「わ！　わぁ～…」

出来上がったものを見て喜ぶセリナ。ぶれてなくて良かった。ミミはといえば会話に加わりたくて、一生懸命ご飯を咀嚼している。急

ぎすぎてちょっと涙目なところが可愛い。なので、デジカメで撮っておく。うん、これってやっぱり楽しいね。

「光ちゃんは向こうの世界には戻りたくないの？」

「ん？」

「だって、式神であれば向こうに戻れるんだから、色々調べれば戻れる可能性が無いとは言えないのよ？」

それはそうだ。こっちにくる時に体が作り変えられるなら、もとに体を戻してから元の世界に帰れば大丈夫かもしれないし、世界を渡るときに負荷がかかるというなら、保護膜を張ればいい。調べていけば何か解決の糸口が見つかる可能性は高いよね。だけど

「とりあえず、やる事やりたい事色々あるからね。戻りたくなってから調べても遅くはないだろうし、別に今のところは戻りたいとは思わないんだよね」

それにこっちの世界だと可愛い女の子達に囲まれてるし、ロボットには乗れるし魔法も使えるしね！　一番良いのは簡単に向こうとこっちを行き来できる事だけど、できるかどうか分からないし、今はこっちの生活に満足しちゃってるから戻りたいと思わないんだよね。

「ふぅん。そんなにミミちゃん達と離れたくないって事ね。うんうん、光ちゃんがそれでいいなら何も問題はないよ」

「母さんこそ、戻りたいと思わないの？　仕事も頑張ってたし」

「何言ってるのよ、勇司さんが居ない世界になんの未練も無いわよ。勇司さんが帰るっていうなら話は別だけどね～」

「あーさいですか。ごちそうさま」

いつまで経っても仲良しな夫婦で宜しいことです。見た目も若返っ

てる分、なんというかバカ夫婦ぶりがパワーアップしてる気がしないでもないけど。ふとセリナを見ると少し心配そうな安心してるようなそんな色々な感情がごちゃまぜになってる顔をしている。

「大丈夫だよセリナ。もし向こうに行くならちゃんと連れて行くから。黙って行く事はないから安心して欲しいな」

「はい」

「勿論、ミミもだよね？　コージ」

「うん、行く時はみんな一緒だよ。まぁ、行くならの話しだけどね」

まだ行けるとは限らないのに、気の早い話だ。でも、いつか。いつか向こうの世界に戻れるならば、皆を連れて行くのは間違いない。何だかんだ言って大事な人達だもんね。

大豪邸。

メイドさんが居て、警備の人が居て、池があって、プールがあって、でっかい庭があって、とにかくだだっ広い敷地には、快適に暮らす為にさまざまな工夫が施されており、いかにもお金持ちなんだなぁって思えるお屋敷。そうお家というよりお屋敷という言葉がいかにも似合う凄い家でございます。

「コージさん、どうしたんです？　そんなにぽかんと口を開けて？」
「あぁ、ごめんなさい。単純にサラさんの家にびっくりしてるだけです」
「くすっ。おかしなコージさん。じゃあ早速工房を見て貰いましょうか」

サラさんの言葉と共に車は敷地内の中央へと向かう。門から屋敷へ向かう道の途中、少しだけ東の方にサラさんの工房があった。意外とちんまい。

「などと思っていた僕が馬鹿でした」
「？」

サラさんに案内されて工房に入った僕だけど、工房がちんまいとかまったくの見当違いでした。ちんまい工房の中には簡単ながらもエレベーターがあって、即座に地下へ行けるようになってました。そして地下にめっちゃ広い空間が確保されていて、ずらりとフレームが並んでる様はかなり壮観です。なんというか、これだけの数のフレームを確保していて国から何も言われないんだろうか、これ。

「機体があってもパイロットは足りませんし、出撃する時もエレベーターで一機ずつ時間を掛けないと出れませんしね。届出もしてますから、何も危険な事はないですよぉ～」
「そういうものなんだ。結構こうやって地下にフレームを飾ってる人っているのかな？」
「ここまでの数は集めてる人は少ないとは思いますが、結構多いみたいですよ」
「なんというか、みんな考える事は一緒なんだねぇ…」
まぁいいや。とりあえずサラさんの設計していフレームを見せてもらおう。資材置き場を通り抜け格納庫より少しだけ高い位置にある部屋へ上がる。

「凄いねぇここ、フレームがよく見える。それに結構明るいよね？」
「ふふっ、ここからの眺めは凄く癒されるのです。あと部屋が明るいのはお外の光を取り込めるように工夫してあるそうです」
そして、当たり前のようにこの部屋にもメイドさんが居て、サラさんの世話を何かとしてくれるようだ。今も、すぐにお茶とお菓子が出てきたぐらいだから、結構な人数が工房に居てるんだと思う。フレームの整備とかもちゃんとしてるみたいだしね。

「コージさん、コージさん。これなんですけど、見て下さいますか？」
「えーっと、サラさんこっちの鳥の絵は？」
「人型からこの鳥型に変形したいのです。ですが、どうしても変形する仕組みを思いつかなくて悩んでいるんです」
なんというデザイン先行。人型の方は細かいパーツ設定してあるの

に、鳥形の方はなんというかイラストでした。この人型はどう考えてもこの鳥型に変形するのは無理でしょぉうっ！　装甲を後付けでもすれば可能かもしれないけど、それじゃあ変形の意味は無いもんね。

「サラさん、それは無理です。どっちか諦めて下さい」
「えぇっ！？　変形は無理なんですかぁっ？！」

一気に涙目になるサラさん。その瞬間、殺気の篭った視線が複数突き刺さってくる。目に見えてるメイドさん達の数より視線が多いぞぉ。

「無理です。少なくともこの人型から鳥型へは変形不可能です。変形後に物質変換で形状を変える事ができるなら、いけるかもしれないけれど」
「どうしても、この鳥さんに変形したいんです。なんとかなりませんかぁ？」

そういう事なら、デザインに少し手を加えればいけると思うけどそれを納得してくれるかどうかだね。サラさんがうるっとする度に視線に殺気を篭めるのはやめてよぉおおおおおお！　せっかくフレームの事を考えているのにあまりの殺気に流石の僕もかちんと来たので、手にコインを持ち殺気を出す人達へ向かって威嚇の為に鋭く撃ち込む。

「どどどどうしたんですかぁっ！？」
「あまり、わかりやすい殺気を出されると僕もおとなしくしてませんよ？」

と傍に待機しているメイドさんや、物陰や天井に隠れているであろ

う護衛の人達に向けて言い放つ。

「失礼いたしました」

周囲の人間を代表してメイドさんが謝罪してくる。というか、サラさんラブすぎるでしょうここのメイドさん達は。普通、連れて来た客人にここまで殺気を向けない…よね？

あーだめだ。なんというか、落ち着いて集中できないんだよねぇ。せっかく色々なフレームに触れる事ができる機会だというのに邪魔されるのは凄く腹が立つ。護衛や世話をしたいのは分かるけど、いちいちこうやって殺気を向けられるのは勘弁願いたい。

「えーっと、えーっと…ごめんなさい」

おろおろとして、謝ってくるサラさん。サラさんは悪くないんだけどもね。

「ううん、こっちこそごめん。床とか天井に穴あけちゃって」

「それぐらい大した事は無いのです。うちの者が迷惑かけたようでごめんなさい」

気を取り直して…といきたい所だけど、なんだか気持ちの歯車がずれちゃったようでせっかく変形機構を考えようとしていた気分がどこかへ飛んでいってしまった。うーん、困ったぞ。

「ごめん、ちょっと外走ってきて良い？　体動かしてたら何か良い案が浮かぶかも」

「え？　えっとぉ、気分を害されてしまいましたか…？」

そう言って潤んだ瞳で見上げてくるサラさん。目尻にじわじわと涙が溜まってきていると同時にまたもや膨れ上がる殺気。フレームの事を考えてる時にはかちんと来たけど、今はなんというか逃げ出したい気分。うん、逃げよう。

「ううん、僕よりメイドさん達が怒ってるみたいだから帰るねっ！じゃあ！」

「え！　ちょっと、ちょっと待って下さいぃ～！」

リミッターを解放して、なみいるメイドさんや護衛の人達の間をすり抜け、気配を絶ちながら外へと出る。ここもまだ転移魔法が封じられているようだった。わらわらとメイドさんや護衛の人達が何か言いながら出てきたけど、なんか捕まったらひどい事になりそうなので、即逃げる事にしよう。魔法は使わずに塀を飛び越え外へと脱出する。塀に何か仕掛けがあったようだったけど、反応される前に飛び越えたから平気だった。

うーん、大事にされているお金持ちのお嬢様の相手は面倒だね。ぱっと見ただけでも色々なフレームがあったから、後で見るのが楽しみだったんだけども、たぶんもう行く事はないかな。次からは断固拒否だ！

客に逃げられてしまって床にうずくまって呆然としているお嬢様。その姿もとても愛らしい。このような姿は初めて見ますが、胸が痛くなってくると同時にいとしさがこみ上げてきますね。

「ふぃーん、コ、コージさんがっお、怒ってかえっちゃったぁぁあ

〜！」

客人がお嬢様の制止を振り切り、脇目も振らずに出て行った事に胸を痛めて泣きじゃくるお嬢様。こんなに可愛いお嬢様を泣かせて放って置くとは許せない男ですね。

「お嬢様、大丈夫です。私がなんとかしますから」

「え、ほ、本当？」

えぇ、お嬢様を泣かせた罪をあがなわせます。そして、お嬢様に必ず謝罪させるとしましょう。あぁ、そんなに上気した顔で見つめないで下さい。イってしまいます。

「本当です。なのでお嬢様はこちらに座ってゆっくりお待ち下さい。もう一度お茶を淹れなおしますので、おくつろぎ下さい」

「う、うん。でもメイヤ目が怖いよ？　コージさんにヒドイ事しない？」

「えぇ、勿論です。お嬢様は何も心配なさらずとも良いのです」

お嬢様を安心させるようににっこり微笑む。あの男には必ず痛い目にあって貰わないと駄目になりましたね。ヒドイ事はしません、痛い目にはあいますが。

「では、少々お待ち下さいね」

「うん。ありがとうねメイヤ」

満面の笑顔でお礼を言うお嬢様に止めを刺されました。がくっと崩れ落ちそうになる体を必死に支え何事無いように振舞う。お嬢様の笑顔でイきました。これで一週間は寝なくても生きて行けます。さぁ、お仕置きをしに参りましょう。コージとか言いましたね。まず

は敵の情報を調べましょう。

ゴロック再び

モニターに写る大きな影。これは一度見た事がある。たしか…

「ゴロックだっけ？　ミミが一人で倒した魔石獣って？」

「ん、そうだけどどう…ってなんか襲ってるね、これミミは止め刺してなかったっけ？」

「そういえば、ひっくり返しはしたけど止めは刺してなかったかも…」

魔石獣と飛行フレームが三体、大きな家を巡って争っている姿がモニターに映し出されていた。

「これってこないだ来てたハイローディスの人達の家じゃない？」

「そう…かな。まだグレイトエースに着いて無かったのか。にしても、間の悪い人達だねぇ」

「どうする？　根っこに知らせて救助に向かわせる？　あれに何かあったら国際問題になるかもしれないし」

「んー…飛行フレームが三体もいれば、大丈夫じゃない？」

「いやぁ、それが見てると空の利点をまったく理解してないパイロットみたいで、飛びながら攻撃せずに、地上で戦ってるんだよね」

モニターを見れば確かに飛行フレーム三機全てが地上に降りて戦っている。これでは、上空から弱点を狙って攻撃ができない。

「一機は翼をやられてるみたいだけど、他のは釣られて降りちゃったのかな。このままだとまずいね。一応連絡しとこうか」

「うん、場所が場所だけに救援には時間がかかるだろうしね」

「ほいきた、あ、もしもし根っこ？　緊急事態発生。ん？　そうそ

う白夜も一緒に戻ってきてロバスとグレイトエースを結ぶ街道で、ハイローディスの使節が襲われてるのよ、うんそうそう。ゴロックがなんかまた暴れてるん。うん、じゃあ任せたよ」

「うーわー…やっぱ地上戦は厳しいね。足が速いならともかくほとんど動かないようじゃ耐え切れないよね」

「ハイローディスの使節団を死守するためか。だけど、飛べるやつは飛んで上から攻撃しないと…」

そう言って歯がゆそうにモニターを見続ける一号と二号。

「衛星にレーザーでもつけとけば良かったね。こういう時見てるだけっていうのは結構つらいものがあるわー」

「さっき連絡したから、そろそろ着くでしょ。ほれ、早速おでましだ」

連絡してから一分弱。モニターは高速で移動するホワイトファングを捕らえていた。

「ホワイトファング、魔石獣だよ。結構でかいけど、たぶん楽勝」

「ならエナジーフィストのみで行くかの。ハンデ戦もたまにはいいもんじゃ」

「いや、それでもたぶん余裕だと思う」

学園の屋上から一気にここまで飛んできた。街道沿いという事で、見落としがないように道なりに飛んできたけど、飛ぶことだけに特化したホワイトファングであればほんの数十秒で目的地まで辿りつ

ける。案の定、大きな魔石獣ゴロックの姿があっという間に視認できる距離までくる事ができた。

「ふぅむ。ならとっとと終わらせるとするかの」

「了解。魔石獣狩りはまた今度時間ちゃんと取って行こうね」

「うむ、頼んだぞ」

ゴロックの弱点は真上の甲羅の部分もしくはミミがやったように、底をざっくり刺せば良い。とりあえず、今にも飛行フレーム三機を踏み潰そうとして足を振り上げているので、すばやく足の下に潜り込み強引に持ち上げてひっくり返す。

「ほい、そいでこれでチェックメイト」

甲羅の底の真ん中、そこへ貫き手を深く突き刺す。それだけでびくっと四肢を振るわせたゴロックは動かなくなってしまった。うん、やっぱり楽勝だったね。そこで改めて襲われていた使節団を良く見る。人型飛行フレームが三機、家の形をした大きな車をかばうようにしてこちらを警戒している。一機だけ中破しているのは、ゴロックが急に現われて襲われたりしたんだろう。警戒されてるのが分かるので、コックピットハッチを開けて敵意が無いことを示す。

「どうもこんにちは。大変でしたね、急にゴロックに襲われて。大丈夫ですか？」

「あぁ問題無い、おかげで助かった。礼を言う。ところで貴殿は何者だ？」

うーん、波風立てずに信用して貰うにはどう言えばいいかな？　エディさんの名前を出せば少しは警戒を緩めてくれるだろうか？

「僕はコウジ＝H＝アースと言います。エディさんの知り合いです」
「その名前は…失礼だが、本当にご本人でしょうか？　念の為、あなたの母上のお名前を教えて頂きたい」

なんか持って回った言い方をしてくるという事は、父ちゃんから話が通ってる人なのかな？　母さんの名前を聞いてくるという事はたぶんそうなんだろうね。

「母の名はるりです。黒目黒髪の女性です」
「ありがとうございます。ご無礼をどうかお許しください」

そう言うと、すぐさま三機の飛行フレームは駐機状態になった。どうやら、詳しい説明は必要ないみたいだね。良かった良かった。あら？　家の中からなんか女の子が出てきてる。

「ちょっとそこのあなた！　そうあなたよ！　降りてきて下さらないかしら？」
「どうかされましたか？」
「どうもこうも、直接お礼を言わせて欲しいだけよ。降りて来て下さいな」

どこか高飛車な感じがする女の子だけど、中身は結構律儀な性格なようでそんな事を言ってきた。別にこれぐらいでお礼を言われる事は無いんだけど、ここで降りないと後でなんやかんや言われるかもしれないから、とりあえず降りる事にした。

「初めまして、リリノア＝ロデリック＝ハイローディスと申します。この度は危地を救って頂き感謝しております。宜しければ、あなたのお名前を教えて頂けませんか？」

僕が地面に降り立ち女の子に振り向くと、優雅に一礼をしそんな口上をのべてきた。名前にハイローディスってあるという事はこの子はお姫様?!

「え、はい。初めましてコウジ＝H＝アースと言います。ご無事で良かったです」

「うん、聞き間違いでは無かったのですね。あなたがコージ王子ですね。私この度、ハイローディスより行儀見習いに参りましたの。末永く宜しくお願いしますね?」

そう言ってにっこり微笑んでくる日本では有り得ない髪の色の女の子。僕が王子という事を知ってるから、これからグレイトエースに行って父ちゃんとお城で色々修行するのはこの子なのかぁ。末永く宜しくとかなんか大げさな挨拶だけど、ちゃんとそういって挨拶できる人は良いなぁって思う。

「こちらこそ、父ちゃ…いえ、父を宜しくお願いします。僕は訳あってグレイトエースには住んでないんですけど、ロデリックさんが居るなら僕も偶には顔を出すようにします」

「いえ、私はコージ王子の傍でと言いますか一緒に住む事になりましたの。お聞きになられて…ないですわよね、そういえば」

うん、それは初耳だ。というかグレイトエースに行かなくて良いの?

「ええ。コージ王子の傍へ一刻も早く行きたかったものですから、ユージ王には少し拝謁させて頂いただけで、無理を言ってロバスへ向かってる途中でしたの」

「あれ?　なんで僕と一緒に住む事になってるの?　え?　あれ?」

僕が混乱していると更ににこやかな笑顔でロデリックさんが、嬉し

そうに伝えてきた。

「それは勿論、私がコージ王子の婚約者だからですわっ」
「いや、僕がお姫様と婚約とか僕はただの一般人なので身分が違いすぎるから無理です」
「？　コージ王子は王子なのですから、一般人では無いですわ」
「そういえばそうだった！　あぁあってもっ！　いきなり婚約とか言われてもさっぱり分かんないし、礼儀作法とか全然知らないし、政治とかもぜんぜん駄目だめだよっ？！」

父ちゃんも父ちゃんだ。僕がそういうのを知らないのを知ってるくせに、こんな隣国のお姫様を婚約者にしちゃうとか何を考えてるのさ、父ちゃん！！！　そうやって、混乱をしているとそっと、彼女の柔らかな暖かい手が僕の手を包んでくる。

「ふふ、落ち着いてくださいな。今すぐどうこうするという訳では御座いませんので、安心して下さい。それに知らない事はこれから一緒に学んでいけば良いのですから、何も問題はありませんわ。勿論、お互いの事も学んでいきましょうね？」
「ううぅぅ、は、はいっ！　じゃなくてえっとなんと言うか、その、あのぉ…」

駄目だ、本物のお姫様だ！　なんかすっごく良い匂いがするし、カリスマっていうの？　なんかこう目が吸い寄せられて、離せないというか。だけど、なんというか気恥ずかしくて一刻も早く距離を取りたい！

「ふふっ、おかしな王子様ですね。噂とは大違いですね」
「えぇっ！？　僕の噂ですかっ？　一体何て言われてたんですか？」

想像はつくけど、想像が外れて欲しい！

「曰く、女たらしで美女と言えば全てあなたに引き寄せられてしまうという、そんなお話ですわ。でも、こんな初心な方がそうとは思えません。でも、これも演技なのでしょうか？」

笑みをこぼしながら、いたずらっ気満載の目で首を傾げて尋ねてくる。誰だ、そんな噂を流したやつは。そんな所ばかりじゃなくて、もっと他に言える所あるでしょ？　…いや表立っては無いのか…くそぉ。

「でも、周りの方には王子という事は伝えてらっしゃらないのですね？　理由を聞いても？」

「この国はうるさい方達が居るという事です。それに王子様って柄じゃないんで。ロデリックさんもそのコージ王子ってのは止めて貰えません？　呼ぶならコージと呼んで頂けるとありがたいです」

「あら、宜しいのですか？　そうやって優しくしてくださるのは、私を口説いて下さってると受け止めてしまいますわよ？」

うわーん、別にそういうのじゃないのにぃ～！　王子とか呼ばれるのはなんか、むずむずするから止めて欲しいだけなのに。だれだ、こんなお姫様にまで変な噂を流した奴は！

「お姫様、冗談はそこまでにしておいて下さい。王子も困ってらっしゃいます」

「コージ様、ごめんなさい。コージ様が可愛いのでついからかってしまって…」

突如現われた若い執事の人が、お姫様をたしなめてくれると大人しく謝ってくれた。とりあえず、執事の人に大感謝だ。

「えっと、そのあなたは？」
「失礼いたしました。わたくし、ロダン＝バルトワと申します。お気軽にロダンとおよびつけください」
「いえ、その、ありがとうございますロダンさん」
礼を言われるとは思わなかったのか一瞬目を見張ったかと思うと柔らかい笑みで答えてくれた。
「ありがたきお言葉。うちの姫様にもそういう所を見習って頂きたいものです」
「あら、感謝すべき所はちゃんと感謝してますわよロダン」
その言葉には返事を返さず黙って一礼をするのみのロダンさん。なんか仲の良い兄妹みたいにも見えて微笑ましいであります。
「そしてコージ様。私は呼び方を変えたのですから、ロデリックではなくリリーとお呼び下さい」
「はい、分かりましたリリーさん」
そう名前を呼ぶと嬉しそうに微笑んでくれた。

ゴロックに襲われたハイローディスの使節団の一行をケージに入れてロバスまで運ぶ事となった。なんだろう、ケージのこの便利さは嬉しいけれど複雑な気分だ。一行がいるので戦闘機動なんてできないけれど、陸路を行くよりはるかに早くロバスへ行ける。

「この機体は何故飛んでるのでしょうか？　あちらの飛行フレームについてる物はこちらには装備されてませんのに」

何故かちゃっかりホワイトファングに乗り込んできているリリーさん。意外とフレームの事を良く知っているようで五桁のルーツ、デストロイヤーの事を知っていて今まで誰も動かせなかったルーツに興味津々の様子だった。

「こっちは魔法を利用して飛んでるんですよ。どうやってるかは内緒ですけどね」

「うーん、内緒ですか。残念です」

「ふふん、そう簡単に分かる物ではないぞ。なんといっても我は特別だからの」

そうホワイトファングが得意げに語る。リリーさんが乗り込んで来た時に、ホワイトファングがべた褒めされたもんだから、さっきから上機嫌である。

「私の国にもルーツはあるのですが、このように会話できるルーツではありませんし、四桁ですのでいま一つ突き抜けて居ないのです。正直言ってうらやましい限りですわ」

「それでも、一般のフレームより強いんですよね？」

「強いのだけど、癖がある機体ですし攻撃より守りの方に特化されてる機体なのです」

いろいろと特徴があるもんなんだねぇ。ルーツって強いんだけどワンオフな機体ばかりって事かな。何のために作られたかも良くわからないし。

「リリーさんはフレームにお詳しいんですね」

「えぇ。一応専用の機体も用意しておりますわ。あまり乗る機会が無いので少々寂しいのではありますが」

いやぁ、魔石獣とかと戦う事が無い限りそういう物騒な物に乗る機会なんて無いですよ、普通は。しかもお姫様なんだし。

「そういえば、先日は私どもの親衛隊がご迷惑おかけしたようで」

「なんのこと？」

そういえば、青で統一された機体が国境を越えてきてたねぇ。

「ふふ、誤魔化さなくても宜しいではないですか。貴方がたったの一機で我が方のフレーム十機を退けたのは紛れも無い事実ですわ」

「は、ははは」

公式発表ではあの青い機体の部隊は、魔石獣を追って山脈を越えた所で遭難したという設定だったそうだが、あんな所まで追いかけてくる意味が無いし、魔石獣の足跡なども特に発見されなかったから嘘っぽい。まぁ魔石獣は休眠状態に入ってしまえば探すことも困難だから、そんな事は無かったと証明するのも難しいんだけどね。しかし、まさか向こうからこの話題を振ってくるとは思わなかったからびっくりしたよ。

「そのような政治臭い話は置いておきまして。コージさん、お願いしたい事があるのですが宜しいです？」
「なんでしょう？」
「必ず引き受けると答えて貰わないと、言えない事なのですが」
リリーさんの紫の瞳がぶれる事無く、まっすぐに僕の目を見つめてくる。なんというかつい従ってしまいそうな雰囲気が辺りに漂う。
「そう身構えなくても大丈夫ですわ。気軽にはいと言って頂ければ良いのです」
「分かりました。なんでも言って下さい」
「うふ、ありがとうございます。お願いというのはロバスに着いてから、街の案内をして頂きたいのです。二人きりで」
「二人きりですかっ。えぇっとうん、男に二言は無いです、僕で良ければ案内します」
街の案内ぐらいなら大丈夫だね、良かった。でもとりあえず、これだけははっきり言っておかないと駄目だね。
「それでリリーさん。先程おっしゃってた婚約の話なんですが、はっきりするまでその話は無かった事にして貰えませんか？」
「ユージ王から聞いた話ですから間違いの無い話ですけども、私が婚約者だと嫌ですか？」
「そういう訳ではないのですが、結婚する相手ぐらいは自分で決めたいのです。それに王子とか柄じゃありませんしね」
僕がそういうと意味深な笑みを浮かべるリリーさん。
「それなら、私とコージさんが好きあえば何も問題は無いという事

ですわね。すでに四人ほどそういう相手がいらっしゃると伺ってますけど、要は一番になれば良いのですわ」

うぇっ?!　なんかリリーさんはこっちの事情を把握してらっしゃる?　ならば分かって貰えるのではないだろうか。僕が女性と仲良くしてるとどういう目に遭うのか…

「なんなら、これからは二人で暮らしましょうか。それなら、何も怖い事はありませんよ?」

「ほぼ初対面の人と二人で暮らすとか、無理です」

いくら美人とはいえ、いや美人だからこそ二人で暮らすとか無理ですから。なんだろう、最近女性が僕に絡んでくるよね。学園でもエリーが気がつけば擦り寄ってきているし、レインボー先輩も何故か教室の前を巡回コースにいれてるし、フレーマーがサラさんに捕まってるし、生徒会長はミミに嫌われてから音沙汰ないんだけど、それが逆に怖いし。これが所謂モテ期なのでしょうか。

「それでは、おおっぴらには言いませんけど婚約者という私の肩書きはそのままにさせて貰いますわ。でないと、後から来た人間は不利ですしね」

「そういう事で差別とかはしませんよ。そろそろロバスが見えてきます」

「空を飛ぶとここまで早いものなのですね。ゆっくりと街道を通ってるのが馬鹿らしくなりますわ」

強引に話題を変えたけど、僕の意を汲んで話に乗ってくれるリリーさん。うん、なんかこの人って冷静というかカッコいい所あるよね。こういう人ならちゃんと話をすれば理解して貰えそうだ。良かった良かった。

「安心するのはまだ早いですわよ、コージさん。まだもう少し時間がありますので、コージさんの事を教えて貰えませんか？」
「ほわっ？！」

リリーさんが横の簡易シートから僕のほうへと身を乗り出して抱きついてくる。香水のすっきりとした香りが僕の鼻腔をくすぐり、右腕にあたる柔らかな感触とすべすべのお肌にさらさらと流れ落ちていく髪。そして下から覗き込んでくる美少女の顔。うっ…

「主よ、そのようなしまりの無い顔をしておるとセリナにまたぞろお仕置きを食らうぞ」
「おおっ、助かったよ白夜。うん、危ない危ない。リリーさんもう少し離れて貰えますか？　下手なことをして操縦ミスったら嫌ですし」
「もう意地悪ですね。コージさんがどう思ってるか知りませんけど、私は婚約の話に乗り気ですから、そのつもりで居て下さいね」

隣の危険な軍事大国のお姫様。そんな肩書きのお姫様が僕の婚約者なんだけど、いまこうして笑顔を見せてくれる様子からはそんな危険な響きを忘れるほどに、無邪気な面をリリーさんは見せてくれていた。

資料で見た情報とは大違いですわね。四人も家に囲っているというから、どれほどの美形かと思いましたら別にそういう訳ではないですし、可もなく不可もなくといいますか、むしろ地味目ですわよね。

背もそんなに高くないですし。性格もどちらかというと、温厚で女性が苦手な感じですね。コージさんの何をどうすれば女性を惹きつけるのでしょうか？　まぁたしかに、ちょっと迫ってみただけでみっともなく慌てたりする所や笑顔は可愛いかなって思いますけど、それだけでは少々決定打に欠けると思うのですが…

「それじゃあ、東ブロックにまわるね。今、そっちに住んでるんだ」
「はい、お任せしますわ」

ロバスの魔石獣寄せの塔ティンラドールがよく見える。正直、町の中心にそのような物を建造するとは正気の沙汰では無いと思っていたのですが、フレーム開発の町というだけあって常に押し寄せてくる魔石獣の脅威に効する事ができているようですね。

そして、東門が見えてくると急激にスピードを落とし旋回を開始するホワイトファング。デストロイヤーという名前は捨て、新たにコージさんに付けて貰ったらしい。五桁とはいえルーツだけあって凄い性能で、今もまったく揺れる事無く静かに東門へと降り立っていく。コージさんを見ると、鼻歌まじりで操縦していてフレームに乗るのが大好きなのが良く分かる。

「あ、町の中に入るのに手続きとかしないと駄目だよね？」
「えぇ、さすがに手続き無しで町の中に入れないですわ。でも、ロダンが手続きを済ませてくれますので、特に何もする事はないのですけどね」
「あ、そうなんだ」

フレームを操縦して気分が良くなったのか、コージさんの口調が砕けた物になっています。本当にどこにでもいる普通の男の子という感じです。それにこのようにざっくばらんな態度は中々に新鮮なも

のです。

「あとでコージさんのお宅にお邪魔して宜しいですか？」
「あれ？　家に住むんじゃないの？　あてが有るならそっちに行ってくれても構わないけど」
「よろしいんですか？」
「うん、部屋は余ってるしリリーさんのあの家も合体すればなんか使い勝手の良さそうな家になりそうだし。庭もまだ余裕あったから大丈夫だと思…います」

今まで視線はずっと私から外れていたのですが、話してる途中で私に目を向けてようやく誰と話をしているか思い出したようで、取り繕うかのように語尾が変わっていった。可笑しい人ですね。

「別に無理に口調を変えなくても結構ですわ、コージさん。普段通りの口調で話しかけて頂ければ私としましても嬉しいです」
「あ、ははは。ごめんね、丁寧に話しかけてるつもりだったんだけど、つい素が出ちゃって」

こんな感じですけど、この方ってフレームの操縦がとても上手なんですよね。今も玄人好みの術式モードで流れるような操縦をしていますし。トレースモードだと操縦は簡単なのですが、どうしてもわずかなズレが生じるので極めたい方はほとんどの方が術式モードに変わっていきます。色々とアンバランスな感じの方のようですが、これからは一緒の家に住むのですから、じっくりと調べていきましょう。勿論、ハーレムの方達の事もです。

ガーディアンテスト

うーん、サラさんの家から逃げ出してきたのは良いんだけど、これから帰って作業するのも気分が乗らないし、かといってのんびり買い物をする気分でもないんだよねぇ。うーん、どうしようかなぁ。困ったなぁと腕を組んで考えてると、ふと昨夜徹夜で作ったカードを思い出した。

この間、金策が持って帰ってきたカルテットからアイデアを拝借して召喚メカを作ってみたのだ。カルテットは一体につき一機能しか持たせてなかったんだけども、僕は四肢で機能を分けられるように変更してみた。カルテットに組み込まれていた魔力を吸引する装置と物質変換装置を見よう見真似で再現して組み込んである。あとは魔力カートリッジも装着可能にしてあるので、それなりの時間稼動できるはずである。ただ、所詮は机上の空論なので、実際に戦闘機動をした場合の稼働時間は分からない。

「たまには僕も体を動かしてみるかな、うん」

ギルドカードはあるから、このまま遺跡に直行してみましょう。でも、その前にサラさんの家から付いてきてる人を撒いてしまいますかね。指輪から外套を取り出して、すっぽりと被る。そして、裏路地へとふらふらと移動していき角を曲がってすぐに光学迷彩を発動させ、物陰でじっと待ち構えておく。

しばらく待ってると案の定、サラ家のメイド部隊らしき人達が角を曲がってきた。さすがにメイド服じゃなかったけど、角を曲がってきょろきょろと人を探して挙動不審になってるので、たぶん間違いないと思う。そして、目をつぶってしばらく黙って立ち止まってい

たんだけど、そのまま道を進んで行ってしまった。
大丈夫とは思うけど僕は念のため光学迷彩を解除しないまま、その場を後にした。

その後は何事もなく遺跡へたどり着き、エレベーターを使って八十階層までやってきました。ここら辺だと、敵の数もかなり増えてきてテストには丁度良い環境なのです。さすがに百階層は下手すると危険な場所なので、ここら辺がベストなのであります。

「ガーディアン、出ておいでっ！」

手元から一枚召喚カードを取り出して、掛け声と共に地面に投げつける。床に投げられたカードのガーディアンの絵柄が、そのまま立体化して目の前に出現した。そして、ガーディアンは僕に向けて右手を掲げ待機状態となっている。僕はその手に向かって左手を合わせてマスター認証を行う。ガーディアンのアイモニターがキラメキ認証が終了する。

「ほいじゃ、今から探索するけど君だけでモンスターを倒してくれるかな？」

僕がそういうとガーディアンは僕に向かって、スクリーンを表示させて確認してきた。

“任務：迷宮探索。魔物の討伐とマスターの保護。但し、マスター

の保護を最優先とする。以上で問題なければＹＥＳをタッチして下さい。追加があれば口頭でお願いします”

ふんふん。たったあれだけ言っただけでここまで理解してくれるんだねぇ。

「ほい、オッケーっと。じゃあ早速行こう！」

了解の合図とばかりに、ガーディアンは僕の先頭に立ち迷宮へと踏み出して行った。僕は魔力カートリッジに魔力を込めながらガーディアンの後に続いて歩き出す。ガーディアンはあたりを警戒しながらも、大胆に迷宮内を突き進んで行く。たぶん、マッピングしながら進んでいるのかな？　後でそこらへんも聞いてみよう。

八十階層にはオークが出てくる。こんな階層にオークと思う事なかれ。パワードスーツとかをちゃっかり装着しているので、結構侮れない強さを誇るのでございます。確かに、一体だけだと、そんなに強く無いんですけど何せやつらと来たらポピュラーな雑魚モンスターだけあって数だけはすごいんです。しかも、ここの階層にいる奴はほんとにオークかと疑いたくなるぐらい、賢いんですよね。やっぱり、環境によって魔物の強さも変わっていくという事なのでしょうか？　というか、魔物のくせにパワードスーツをどこで見つけてきたんだろうか…

「ブヒィ～…」

ですが、目の前でオークを容赦なく惨殺していくガーディアンの姿がありました。機械だからでしょうか、すんごく冷静で情け容赦ないです。遠い間合いでは、赤にて射撃をしまくり向こうからの射撃は緑で対応してまったくダメージを負いません。それで近くに寄っ

てくれれば青に変化して、片手は赤。撃って斬って走り回って並み居るオーク達を蹴散らしていきます。時々、右足だけ緑に変えたり赤に変えたりしながら防御したり、射撃したりして、メカらしい関節の動きで敵を翻弄しておりました。その上で、僕に攻撃がこないようにしっかり守ったり、撃退したりするので文句のつけようがありません。

「うーん、手足をまさに道具として上手く使ってるなぁ。瞬時に計算してるんだろうけど、ここまでできるとは思わなかったなぁ」

三十体のパワードスーツ着用のオークが五分も持たずに壊滅するのは、ちょっと張り切りすぎだと思うんだけども…　ガーディアンのなかなかの容赦の無さに驚いております。

今は倒しきったオーク達を赤で焼却処分しております。あれだけ攻撃や変化をさせていても、魔力が足りないという事はないらしくむしろ余り気味な感がある。うーん、魔物から魔力を補充してたりするのかもしれないね。ちなみにオークが焼却処分されているのは、高そうなアイテムは既に指輪に入れているからです。

その後も次々に出てくる魔物やメカを危なげなく撃破していくガーディアン。勿論、僕に毛ほどの怪我も無く、ガーディアンの能力の高さを十分に見せ付けてくれた。一体だけでこの強さかぁ…十体出せばかなりの戦力になるよね。命令を間違うととんでもない事になるだろうけど。さすがにミミのような近接能力はなく、セリナのような砲撃能力までは無い。だけど、その両方の強さに迫る能力を併せ持つので総合的な強さは、あの二人にまったく歯が立たないという訳ではない。遺跡のお供に十分な能力である。

「これなら金策の旅のお供についていけるね。うんうん」

あら？　なんか僕以外にもこの階層に来てる人達がいるみたいだね。向こうから警戒しながら移動してくる音が聞こえてくる。今は八十五階層まで来てるんだけど、遺跡の調査に来てる人達なのかな。冒険者はあんまりここまで深く潜って来ない傾向にある。何故かというとお金をある程度稼ぐだけなら、三十階層とか四十階層でも十分に稼げるからだ。どんな人達がここまで来てるのか気になったので、ガーディアンに作業を中断させ、一旦カードへと戻す。その上で外套を着込んで光学迷彩でじっと息をひそめて様子を伺う事にした。

「…大量のオークの死体か。まだそんなに時間が経ってないな。俺達以外の探査チームは無い筈だよな？」

「予算が無いので私たちだけと聞いています」

オークの死体を見て警戒した様子で辺りを伺う調査に来てる人達。全部で八人のパーティのようだ。多すぎず少なすぎずといった感じである。

「最近、多発している事件に関係しているんでしょうか？」

「あれは浅い階層での話しじゃなかったか？　ここは八十五階層だぞ。それにさっきもレッドベルドリアンが襲ってきたから、特に魔物の数が少ないとは言えないと思うが…」

赤ワニさんを倒してきたのかこの人達。なかなか強いんだねぇ。

「隊長、そろそろ休憩しませんか？　ここにオークの死骸があるという事は、多少は安全なはずですし」

「そうだな。近くに小部屋が無いか探して、そこで休憩を取る事にする。百階層まで後少しだが気を抜かないようにな」

よく見れば何人かは少し怪我をしている様子で、今はとりあえず応急処置だけをして移動している最中のようだった。回復魔法をかけたい衝動にかられるけども、こんな所に一人だけで来てるのが知られると、何かと詮索されそうなのでぐっと我慢しておいた。とりあえずエレベーターまで移動して、五十階層ぐらいでちまちま稼ぐとしますか。

はてさて困ったぞ。ゴロックを倒して、ハイローディスの一行をロバスまで案内してきたのは良いんだけども、今回は先触れを出す前に町に着いちゃったもんでロバスの方が受け入れ態勢を整える暇がなく、リリーさん達は現在宙ぶらりんの状態なのです。先ほど提案したように、僕の家で滞在して貰おうと思ったんだけど、ここで一つ問題が。

「国賓を一市民の家でもてなすというのは、前例がありません」

「だから、この方はユージ王のご子息で一市民ではないと言ってる！　この王からの封書に書いてあるはずだ」

「それだけでは証拠とは言えません」

要約すればさっきからこれの繰り返し。飛行フレームに乗ってきた人とロバスの役人さんでずーっと言い合いをしております。王からの封書に書いてあるとは言え、この場で開封する訳にはいかないよねぇ。開けたくなる衝動に駆られてはいますが。

ハイローディスの一行なんて厄介なものを受け入れるって言ってるんだけども、市民の生活に支障が出るのはまずいと考えてくれているのか頑なに了承しようとしないロバスの役人の方。でも、いつまでもここで押し問答していても解決しないんだから、僕の所で良いんじゃないのかなぁ？

「評議会委員の一人ペリカン氏が受け入れを了承して下さった。なのでそちらの方が負担する必要はございません。ここまでの護衛に関しては後ほど礼をさせて頂きますのでこの場はお引取り願いますか？」

しっかり役人さん達は仕事をしていたようで、さっそく受け入れ先を確保してきたようだ。しかもペリカンさんって事は大富豪だから、問題ないねうん。

「あぁオーロさんの所ですか、なるほど。分かりました、それでは失礼させて頂きます」

「ちょっとコージさん？　コージさんのお宅に行くお話しはどうなりましたの？」

「んー、僕が王子だっていう証明がねできないもんだから、一時お預けという事で。父ちゃ…王様からのお触れがあれば、信用して貰えるんだけどね。ごめんね」

気が抜けた拍子に素のままで話しかけてたら、リリーさんに敬語は止めてくださいと言われた。最初は気後れしたんだけど、普通に話しかけるようになりました、だって楽なんだもん。ハイローディスのお姫様って意外と庶民的なのですなぁ。

「また不思議な事情ですわね。情報として知ってましたけど、本当に告知してらっしゃらないのですね。でも、証明できましたらコージさんのお宅へお邪魔しますから、準備しておいて下さいね？」

「うん、分かってるって。それじゃあ、またね！」

お姫様とロダンさんに軽く挨拶をしてその場から離れる。ある程度意識して、お姫様に気軽に話しかけていたのは、なんというか僕が王子だと言い張ってくれていた飛行フレームの隊長さんに対する配慮と申しますか。これだけ隣国のお姫様と気安く話しかけていたら、ロバスの役人さんも覚えてくれると思うし、一般市民がお姫様にこんな話し方をしないはずだしね。でも、疲れたっす。

「では主、家に戻るとするかの」
「そうだね白夜。ごめんね度々早退させちゃって」
「なんのなんの。主と二人きりでお出かけできるのじゃて、なんの不満があるものか。むしろ、もっと呼び出して貰っても構わんぞ」

申し訳ないと思ってる僕を気遣ってそんな風に言ってくれる白夜。風貌が日本人っぽいので、笑顔でそんな風に言われるとやっぱりどきっとする。言葉遣いがあれだから、なんとか我慢できてるけども。セリナやミミやヒロコがいくら美人だとはいえ、やっぱり海外というか異世界の人なので、映画の向こうの人っていう感じがするんだけど、黒い髪で日本人っぽい顔の白夜だと、すごく身近に感じられるんだよね。

ご機嫌で僕の腕を取り、頭を傾けてくる白夜は本当に可愛い。中身は破壊大好きルーツだけどもね。すると、僕の視線を感じたのか白夜がこんな事を言ってきた。

「何じゃ主よ。ようやくワシの可愛さに気づいたのか？　良いぞ良いぞ。今は特に気分がいいので、なんでも言ってみ。家に帰ってからたっぷり言う事を聞いてやるゆえ」
「…こんな人通りの多い所でそんな事を言わないの。みんなびっくりしてこっちを見てるでしょうが。まったくもう…」
「赤い顔でそのように言っても、説得力が無いぞ？　ほれ、嬉しいであろ？　なにをしてもいいんじゃぞ？」
「ていっ！」
「あだっ！」

なんか調子にのってる白夜にチョップをお見舞いする。そんな顔を赤くするぐらい恥ずかしいなら言わなきゃいいのに、うちのお嬢様たちは僕が照れるような事をするなら、少しぐらい恥ずかしくても

躊躇いなくしてくるんだよねえ。でも、折角だし一つお願いしてみようかな？

「白夜、一つお願いがあるんだけど」
「お、なんじゃ？」
「着物を着てみて欲しい。きっと似合うと思うんだ」
「着物…か？　どういうものかは知らんが、着るという事は要は服であるのだな？」
「うん、着付けはたぶん母さんができると思うから、帰ったら母さんに聞いてみよう」

白夜には着物が似合いそうなんだよね。ミミ達が着ても可愛いだろうけどもやっぱり日本人っぽい白夜が一番だろう。母さんも似合いそうだけども。今日は早退しちゃったし、時間はたっぷりあるから母さんと着物の準備をする事にしよう。

正直驚きました。ホワイトファング、元デストロイヤーと呼ばれていた機体。コージさんが動かせるようにしたと聞きましたが、あれは特殊すぎます。ライダーを選ぶという事もですが、会話をこなしあまつさえ人型に変化するなど、見た事も聞いた事もありません。あのような機体があれば、要人暗殺など容易くできてしまいます。しかも、あのルーツには故障箇所が無いようで、完全に性能を発揮できる状態にあるようです。

「ホワイトファングですか。あれは欲しいですね」
「姫様。口に出てますよ。お気をつけ下さい」

つい口に出ていたようですね。ですが、自我のあるフレームですか…強引にでも奪っていきたい所ですがまずは仲良くなって、言う事を聞いて貰えるようにならねばだめでしょうね。そしてマスター認証をどうにかすれば、あるいは持ち帰れるかもしれないです。でも最優先事項はコージさんをおとすのが一番ですわね。彼をモノにしてしまえば、周りの者もまとめて付いてくるはずです。魔道の天才セリナ、テスタロッサ家の忌み子ミミ、ホワイトファングこと白夜。あと一人は良く分からないとの事ですが、どう調べても過去を洗えないという事は逆にとんでもない事かもしれません。

王子という事は知られていない筈なのに、とても良い人材を集めてるようです。いったいどのような手管で、口説いたんでしょうね。私も警戒して事に当たらねば、食べるつもりが食べられたという事になりかねません。今回、飛行フレームや役に立つフレームの技術を国に持って帰りさえすれば、自由に私のフレームを乗り回せると約束させました。なので、何としても技術を首尾よく行けば人材も確保していくつもりで頑張りましょう。

「ですがお嬢様。コージ王子のお屋敷の場所はご存知で？」
「いえ、ロダンが調べてるのでは無いのですか？」
「存じ上げません。王子と一緒にフレームに乗っていたので、そこらへんはしっかり聞いていると思ってましたが、その様子では違うようですね」

しくじりましたわ。フレーム談義に花を咲かせていたせいで、そこら辺の事は頭からすっぽり抜け落ちてました。でも、同じ町にいればそんな物はすぐに調べが付くはずです、何も問題はありません。でもコージさんはおかしな方ですわね。王子と周りに言っておけば今回もこんな事にならなかった筈ですのに。あまり王族という立場

には興味が無さそうな事を言ってましたけど、そういう方もいるのですね。ここは私がたっぷり王族の良さを伝えて上げるべきですね。

ええ、是非そうしましょう。

飛ぉおんでいけぇー！

問題は山積み～♪　なぁんにも～でき～ない～♪

あ～…本当どうしよう。リリーさん婚約者発覚だし、それに併せて僕が王子という事も公表するだろうし、サラさんの家のメイドさん達に襲われそうだし、遺跡には魔族が忍び込んでるし、いつまで経っても僕専用のフレームの資金が貯まらないし。

なんと言ってもリリーさん。あの人になんであんなに見栄を張っちゃったのか…　飛行フレームの隊長さんが間違ってない事を証明したい為に、あのお姫様に馴れ馴れしく話しかけていたんだけど、家に来てくださいとか今から考えたらなんでそんな事を言っちゃったのかなぁ。まぁ、ロバスにいる限りあのお姫様が僕の周りをうろうろするのは間違いないだろうから、いっそ家で一緒に住めば良いとか逆切れっぽく思ったのは事実なんだけど。それは結局言い訳でありまして…

やっぱりお姫様っていう響きが僕を惑わせていたんだと思う！

お姫様っていう肩書きだけで、なんと言いますか魅力が五倍増し？　なんだろう僕って意外と肩書きに弱い人間だったのかなぁ…今後気をつけておこう。

「ほれどうじゃ主？　可愛いかろ？　ため息なんぞついとらんで良く見るがよい」
「白夜ちゃんもなかなか可愛いわねぇ～」

白夜が着物を着て僕の周りをくるくると回って見せてくれる。黒い

生地のところどころにうさぎがぴょこんと飛んでいる柄で、白夜には大人しめな感じがするけれどこれはこれで中々似合っていた。

「やっぱり着物は良いねぇ。白夜も可愛くなったし、これからは着物で過ごす？」

「そ、そうか可愛くなったか？　じゃが、これをずっと着るのは大変そうじゃなぁ。主に母上が」

「そんな事ないわよ。毎日着てれば白夜ちゃんも着付けを覚えていくだろうし、着てる人は毎日着てる物だからね。しばらく着物で過ごしてみる？」

「いいのか？　なるべく母上の負担にならんようにワシも覚えるようにするが、お願いしてよろしいか？」

「うんうん。いいわよ～」

髪の毛を簡単にまとめてもらって、着物を着て嬉しそうに笑っている白夜。これはかなり目立ちそうである。それに草履をはいてるんだけど、慣れるまでは少し時間がかかるんじゃないだろうか？

「白夜、草履はどう？　足痛くなってない？」

「ん？　少々歩きにくいが、足は痛くないぞ。これでもフレームだからな！　ぬっふっふ」

「そういう物なのね。それにしても本当に似合ってるねぇ。これで町中を歩いたらすんごく注目されるんじゃない？」

「そりゃそうよ！　これだけ可愛く仕上げたんだもの、目立ってくれないと母さん困る！　ミミちゃんには何が似合うかなぁ。それとも着物は難しいかしら…」

母さんは白夜をがっしり捕まえて、ミミを想像しながら何を着せようか考えてるみたいだ。とりあえず、良い目の保養になりました。

あ、そうだ僕の婚約者の話って母さんは知ってるのかな？

「そういや母さん？」
「ん？　なになに」
「なんか、僕に婚約者がいるって話知ってる？」
「うん、勇司さんから電話貰ったわよ。なんでもお隣のお姫様らしいじゃない、今朝早くにこっちに向かってるそうよ？　それに併せて光ちゃんと母さんのお触れ？　もするらしいけど。でも、ここにはそのまま住めるらしいわよ～」

あ、僕の渡した電話をちゃんと活用してるのね。ていうか父ちゃんマメだなぁ。

「実はその婚約者をさっき百夜と一緒に救出してきたんだ。だから、もうロバスに来てるよ。本当にお姫様だった」
「え、なんで家に来ないの？　母さんもお姫様見たい」

僕のお姫様好きのＤＮＡはこの人から受け継いだんだなぁ。お姫様という単語にものすっごく目を輝かせすぎだよ母さん…

「そりゃあ、一般市民の家にはお姫様を置いておけないでしょ？　一応まだ父ちゃんからの通達は伝わってないから僕は王子じゃなくて、普通の市民なんだから」
「何よそれ、つまんない。光ちゃんもなんでそこで黙ってるのよぉ、お姫様をかっさらうぐらいの気位を持ってても良いんじゃないの？」
「だって、ここの役人さんも頑張って仕事してたんだもん。それに、王子って通達がいけばお姫様も家に来てくれるはずだから、それまで我慢してよ」

なんと言いますか、母さんはお姫様を見たかったようでぶーぶー文句言ってます。ちなみに白夜は母さんに捕まったままであります。

がんばれ百夜。というか、母さんも王妃になるんじゃないでしょうか…

「見るのとなるのは別問題。生まれつきのお姫様とか、いじりがいがあるじゃないの！」

さようで。

「で、主よ。セリナ達にどう言い訳するか考えたのか？」

「そんなのまったく思いつきませーーーん！　いやもう本当にどうすれば良いのよこれ！」

「んー、既成事実を作れば収まるんじゃない？」

「さらりと凄い事言うな？！　それって親としてどうなのよ、親として！」

そんなだから週刊誌とかに乱れる未成年とか早熟すぎる性生活とか、好き放題書かれるんだよ？

「だってここ異世界だし？　こっちじゃセリナちゃんでも行き遅れらしいじゃない。ミミちゃんが一番年上だけど、あの子良く我慢してるわよね。母さん感心しちゃうわぁ」

「セリナはもうすぐ十八だっけ。うーん、昔の日本みたいな感じなのかなぁ」

「それぐらいで考えてて良いんじゃない？　がんばれ光ちゃん！」

なんか真顔で応援してくる母さん。そりゃあ僕だって男だし、そういう事に興味がないわけじゃないけど、結婚かぁ。うーん、それよりまずは清い交際からと言いますか、こう段階を経て結婚という形に持って行きたいとか思うんだけど。人によってはする事してから付き合いだすという人も居るのは知ってるんだけどもねっ！

「そんなに悩んでても、なるようにしかならないわよ。セリナちゃんもミミちゃんも光ちゃんと一緒にいれれば満足って感じだし。健気よねぇ」

「でも、貴族を打倒するまでは結婚とかはしないほうが良いかなぁって思うし…」

「ダメねダメダメ。とりあえずやっちゃいなさいよー！　貴族の打倒なんてそんないつ終わるか分かんない事待ってたら、ミミちゃん達おばあちゃんになっちゃうわよ！　光ちゃんもせっかくこっちに来たんだから、もうちょっとはっちゃけなさいよ！」

「母さんははっちゃけすぎだよ」

うーん、だけど母さんの言う事も一理ある。貴族の打倒なんて今のままだと本当にいつ終わるか分からない。それに協力してくれる人間を探して行かないと駄目だし、活動資金もやっぱりそれなりに必要になってくるだろうし。それを考えたら時間がどれだけあっても足りないよね。ミミ達を安心させる為にも何か形になるものを渡しておくべき、かな。

「よし決めた！　ミミ達にも婚約者になってもらおう！　そんで指輪を贈っておけば少しは安心するよね？」

「えー指輪も良いけど子種は？」

「母さんはそこから離れようね、うん。さっきから母さんそればっかり言ってるからね？」

それに子種は子種で、誰を最初にするかという問題があります。うん、自分で考えてて恥ずかしくなってきたよ。

「うふふふ。最近は光ちゃんもミミちゃんが気になってるみたいね。母さんの作戦をしっかり実行してるようね」

「何をぼそぼそ言ってるの母さん？」
「なんでもなーい♪」

また何かろくでもない事を考えてたんだろうね。すごく悪い笑顔だったし、気をつけよう。とりあえず、指輪にも色々と機能を付けてから贈る事にしよう。

「セリナ、帰ろう！」

授業が終わったから早く帰りたい。今日もコージは百夜と早退しちゃったから、コージ分が足りなくなってきた。

「はい、帰りましょう。ヒロコも早く」
「ほーい」

今日はコージが居ないから、クラスの人達にすごく構われたんだけどやっぱりコージが居ないと寂しい。今も寄り道していかないとお誘いがあるけど、全部振り切ってコージが居る家にまっすぐ帰りたい。

「ミミ、ちょっと待ってください。いい考えがあるんです」
「え、早く帰ろうよ」

いい考えが何か分からないけど、走ったら十分ぐらいで家に着くよ？　あれ？　なんでセリナはソファーを出してきて、手招きしてるのかな？

「はやくここに座ってください。でないと置いていきますよ？」
「え、帰るんじゃないの？　なんで座るの？」
「ふふふ、騙されたと思ってここに座ってくださいな」

むぅ、早く帰りたいのに…

「では、行きます！　しっかり捕まっててくださいね！　“炎よ炎よ！　我が身を助け我が意のままに天を駆け登れっ！　ツインジェット！”」
「はわっ！？」

ソファーが飛んだ。凄い勢いで空へ向かって浮き上がり、町を見下ろす所まで上がったかと思うと一直線に家に向かって凄い勢いで飛んで行く。

「すごいすごーい！」
「コージさんの魔法です。これなら早いでしょ？」
「うん、くねくね道を曲がらなくていいから早いね、これ！　セリナ凄い！」

それに空は誰も居ないから、何も避ける必要がなくて本当にまっすぐ家に帰れる。というかこれコージの魔法って言った？

「セリナ」
「はい、なんでしょう？」
「この魔法いつコージに教えてもらったの？」
「え？！」

すごく分かりやすく目をそらすセリナ。ふふふ、最近セリナも抜け

駆けが上手になってきたよねぇ…ミミが母さんと遊んでた時にでも二人きりになってたのかな？

「別に二人きりで、密着して魔法を教えてもらったわけじゃないですよ？　キスしたわけじゃないですし？」

つまりは魔法を教えてもらうついでに、ぎゅっと抱きついていちゃいちゃしてたと。あまつさえお礼と称して熱いキスをして貰ってたという事でオーケー？

「うん、キスしたんじゃなくてされてたもんねセリナ」

「あっ！？」

よし、帰ったら同じ事をコージにして貰おう。勿論、二人の目の前で見せ付けるようにね。

金策飽きた

満足そうな顔をして家に帰ってきたフレーマー。サラさんの家、つまりはペリカン氏のお屋敷のメイドさん達に尾行されていた事を、ちゃんと衛星に情報を残していたのは良いのだけども、特に対策を練るでなく遺跡にもぐって遊んできてるとかどういう事よ？

「ごめんごめん、徹夜明けは変なテンションになるよね。ちょっと昨日作ったガーディアンのテストがしたくてつい遺跡に行っちゃいました」

まったく反省してない顔で悪びれもせずにそういうフレーマー。なんか、結構マイペースな人間になってきてる気がするのは気のせいだろうか。一度、分身と融合してまた分身しなおした方がいいのかな？　情報の共有はしているんだけど、人格がそれぞれの役割によって変化してきてる気がしなくもない。それか役割をローテーションして行く方が良いのだろうか。でも融合の方が早いから集まったら一度融合するようにしよう。

今日は夕方に学園から帰ってきたミミ達に僕に婚約者がいる事を伝えた。そして、僕が王子だという告知後に婚約者の発表があるという事も。ちょぉっと黒いセリナさんが出掛けたんだけど、今回の話に関しては父ちゃんが悪い…と思うので、怒りは父ちゃんにぶつけて貰うのと魔法を何か一緒に考えるという事でなんとか納得して貰った。ミミの場合は、婚約者ができようができまいが今まで通りに攻めて攻めて攻めまくって一番になると宣言してました。正直、一番怖いです。ヒロコはふーんって言っただけだし白夜は着物を着て褒められまくってたのでご機嫌で僕に婚約者ができたのは別に何も考えていないようだった。

その後で、ミミ達とも婚約したいので指輪を贈ったらえらく喜ばれました。涙ぐんで喜ぶ様子に今までほったらかしにしてて悪かったなぁって思いつつも、果たして本当に僕は大丈夫なのだろうかという不安が沸きあがってきた。泣いて喜ばれるほど好かれてるというのは嬉しい反面、僕なんかがそこまで慕われて良いのかな？　という気持ちが沸いてくる。

「一応、今日あった事は衛星経由で皆も分かってると思うんだけど、さてこれからどうしようかという事なのです」
「とりあえず、皆集まってる事だし融合して分身しとく？」
「そうだねぇ。なんか性格がちょおっと変化してってるよね」
「僕はそういう自覚は無いんだけども、他の皆がそう言うならそうなんだろうねぇ。なんというか情報と経験は別物って事なのかな」

皆が揃うとそれぞれが勝手に色々意見を出し合うんだけど、今日も当然同じように各々が勝手にしゃべりだして、話がどんどん膨らんでいった。なので、先に融合してから会話するよ！　と仕切ってようやく融合後、再度分身が終了した。わが事ながらまとまりがない。おかしいなぁ、前はもうちょっと以心伝心な感じだったよね？

「んー…やっぱり一度リセットすると、違うようだね。個が薄れてるっていうのかな？　根っこ以外の記憶には薄く膜が張ったような感じがするね」
「だね。基本はやっぱり根っこって事がよく分かるよね。ていうか、この鼻血ブーな記憶がめっちゃやばいんですけども…」

すいません。やばいから衛星には上げなかった情報が融合しちゃったから、結局皆に行き渡ってしまいました。思い出すだけで鼻の下が伸びるね。僕以外、皆すんごく鼻の下が伸びてるからちょっと恥

ずかしい。やらしい事を考えてると僕ってこんな顔になってるんだね。

「で、フレーマーが切れちゃって泣かせたサラさんだけど、どうする？　今、リリーさんがお邪魔してるお屋敷なんだよね？」

「二人ともフレームが好きそうだから意気投合しそうだよね。そういった意味では、今後またサラさんから接触がありそうではあるよね。メイドの人達は敵意むきだしだろうけど」

一号と二号の言葉に面目ないとしゅんとしているフレーマー。一応、役割をふってはいるけど分身したてだから別に謝る必要はないんだけどもね。

「なにがあってもサラさんのお誘いだけは断固拒否という事でお願いします。あの屋敷に行ったらなんかメイドさん達が気になって気になって仕方ないし」

「というか、こんなにちょくちょく殺気を向けられるのは嫌だねぇ」

娘が大好きな親馬鹿なお父さんが、駄目男に娘さんを下さいと言われた時の怒りようと言えば分かって貰えるだろうか。サラさんの機嫌と接し方一つで全方位から殺気を向けられるのは、面倒です。今もサラ家のメイドさん達が家の周囲を探ってるようだし。どんだけサラさんラブなんでしょうか、あの人達は。

「そういえばフレーマー、レアメタルの模型はちゃんと持って帰ってきた？　指輪の中に入ってなかったんだけども」

「あ！　持って帰ってきてない！」

「少ないけれどあれも、レアメタルなんだから忘れてきちゃ駄目でしょ。取り返しに行かないと駄目じゃん」

「行くにしてもミミかセリナに付いてきて貰わないと、面倒なこと

になりそう」
「そうだね、一人で行くのは嫌だね。でも、模型を取りに行くにしても告知後のほうが良くない？」
「それが良いかな。僕が王子だと分かればあのメイドさん達も下手な手出しはできないだろうし。今だと何されるか分かんないんだよねぇ」

そういって身震いするフレーマー。そういう悪寒は強烈に残ってるのね。でも、王子と告知されたら学園のほうが騒ぎにならない…よね。僕、友達少ないから今までとあんまり変わらないよねきっと。トリックスターの面子なら僕が王子だろうと、気にしないだろうしサカキ先輩も態度を変えるとかはしないだろう。口調は少し丁寧になるかもだけども。

「サラさんの話しが出てるから聞くんだけども、今どれぐらいのお金が集まってると思う？」
「え、あれ？　素材は結構あるのになんで換金できてないの？」

サラさんと何の関係があるか分かんないけど金策が現在の貯蓄状況について聞いてきた。記憶を探ってみたら毎日遺跡に行ってる割には大した金額じゃなかった。指輪には結構な数の素材が溜まってるにも拘わらずだ。換金できなかったんだろうか？

「それが、一気にあちこちで換金してしまうとすんごい値崩れが起きちゃったんだよね。今はようやく戻りつつあるんだけど、今後は市場に出す量を調整していかないとせっかくの素材が安く買い叩かれちゃうのよ」
「そういうもんなの？　キラーマシンの装置なんかは売れれば売るだけ儲かりそうなもんだけど？」
「それがさ、一箇所だけに売るのはまずいかなぁってあちこちに売

りに出したら、何故か価格競争が始まって…」
「品薄になって人気が高騰して値上がりしなかったの???　…してないね」

あの手のパーツって、中々市場に出回らないから結構高値で取引されてた筈だよね？　ハーベイさんも高額で買い取ってくれたし。狙ってる人は多いと思ったんだけどなぁ。

「それがあちこちの店舗で同時に売りに出たせいか知らないけど、まったく買い手がつかなかったようで結局、買い取りの値段と変わらない値段で販売しちゃったそうでさ。次に買取お願いしたら売れないから今は良いって断られちゃったのよ」

一応最初に二十個売れたから千プラチナは稼げたんだけどもね、という金策。金策の言葉を引き金に素材換金のときの交渉の苦労が頭に浮かび上がってきた。あー、最初千プラチナ儲けた時はすぐに目標金額達成できると浮かれてたなぁ。

「うーん、ハーベイさんが五十プラチナで買取してくれたから結構な人気商品だと思ったんだけども、実弾ってあんまり人気ないのかなぁ？」
「ロバスぐらいフレーム好きが集まる場所なら、実弾好きがたくさん居てもおかしくないんだけどねぇ？　これは何が高額で売れるか市場調査をしたほうが金策効率が良い、かな？　どう思う？」

というか、ハーベイさんがキラーマシンの部品を高額で買い取ってくれたから、金策といえばそれって感じになったんだよね。お店やギルドに周っていろいろ調べた方が、結局近道になるかもね。

「駄目だね」

良い案かなと思ったんだけど、金策が静かに反対した。違う方法じゃないと駄目かな？

「そんな風に個人で稼ぐには、僕たちの目標額は大きすぎる訳なのよ。ならどうするか？」

一万プラチナ。今じゃ五万プラチナぐらいが目標金額になっちゃってるけど冷静に計算してみると、円に換算したら億の単位なんだよねこれ。あははー。

「…なるほど、それでサラさんの家が関係してくるのか」

「そういう事。かなりの商売人なはずのオーロさん所から、お金を借りちゃえば良いんだよ」

「借りるって簡単に言うけど、とんでもない金額なんだけど？」

「だから納得させるだけの材料を、皆で考えようって訳。ちまちま金策するよりもそっちのほうが絶対早いよ」

自信ありげに笑ってる金策。さてさて、どうしましょうかねぇ？

リターンエース

朝日がまぶしい。昨日はちょっと夜更かしをしたので、直射日光が目に沁みる。なんてことは無く、睡眠時間が少し減ったぐらいでは特になんとも無かった。うん、若いっていいね！

僕達が必死に色々考えている中、家に侵入しようとしたサラ家のメイド部隊が五名いた。しばらく反転フィールドを利用した無限回廊を、彷徨ってもらってからお帰り願ったんだけど、また懲りずにやってくるようなら、今度は捕まえてお仕置きする事にしよう。

「コージ、顔が悪い顔になってるよ？　何考えてたの？」
「え、そんな顔してた？」
「うん、すんごく意地悪な顔だった」

よっぽど僕はサラ家のメイド部隊が嫌いなようだねぇ。よっぽど、殺気を向けられたのが気に食わなかったみたいで、メイド部隊が僕のことを探りに来てるのが分かってるから、どうやれば嫌がるかって気がついたら考えてるからねぇ。気をつけよう。ペリカンさんからはお金を借りないと駄目だけど、メイドの行動はしっかり証拠を保存しておけば、後で何かの役に立つかもしれない。

「はぁ。最近は何か色々あってばたばたしてるから疲れてるのかなぁ？　ついつい悪巧みしちゃうんだよね」
「ふぅん、そうなんだぁ」

そういえば、最近ちっとも深呼吸してないや。ふー…やっぱり落ち着くねぇ。朝の空気というのもあって、体がしゃきっとするよね。

「コージお疲れなのですか？」
「んー、疲れてるっていえば疲れてるのかなぁ？　でも、寝込んだりする程じゃないからそんなに心配しなくても大丈夫だよ」
「はぁ、そうですかぁ…」

そうはいってもセリナは心配なようで、僕が嘘を付いてないかじっと見つめてくる。うん、僕の疲れは身体的なものじゃなくて、精神的なもののほうが大きいよねたぶん。そういえば遺跡に魔族が潜り込んでる事ってセリナ達に言ったっけ？　あれ？　言って良かったっけ？

「突然、唸りだしてどうしたんです？　やっぱりどこか具合が悪いんじゃ…」
「セリナそんなに心配しなくて大丈夫だよ。マスターは頭が悪いだけだからっ」
「ヒロコはもう少し僕の事を心配してくれても良いんじゃないかなぁ？」

ヒロコはいつでもマイペースだ。気になる事があれば、なんでも聞いてくるんだけどそうでなかったら、ぼーっとしてる事が多い。いや、ぼーっとしてるというか宇宙とでも交信してそうな目付きで黙っている事が多い。精霊だもんで、自然と会話してるのかもしれないけれどそういうのは人の目を気にして欲しいと思う。

「ボクはマスターの事なら、なんでもお見通しだからね。今もきっとどうでも良い事で悩んでたんでしょ？　それに、本当に考えなきゃ駄目なのは婚約者と王子様の事だと思うなぁボクは」
「う」

痛いところをついてくるなぁヒロコは。そうなんだよねぇ、今でさ

えセリナ達がいるのに、更にお姫様が加わるとなると一体どうなるのか見当も付かない。下手をするとサラさんも加わってくるかもしれないし。いや、メイド達が居るからそれは無いと信じたい。

「でもコージが王子様だーって皆が知ったら驚くだろうね。人気者になったらどうしよう？」

「そんな事にはならないと断言できるけど、貴族の動きが怖いかもね」

「どういう事ですか？」

「んー、王子が冒険者学園に居ると知ったら、貴族のぼんぼんも入学してくるんじゃない？　下手すると僕と面識を得ようとわんさか貴族が来るかもしれない」

王子様とお近づきに…って感じで、同年代の子供を持つ貴族って何かと顔を合わせようとするよね。って、僕が知ってるのは漫画とか小説での話しなんだけども。なんか政治が絡んでくると、本当にぼーっとしたままじゃいられない。

「それは大丈夫じゃないでしょうか。貴族の長子は今グレイトエースに居るはずですし、万が一学園に来るとしても随分先になるんじゃないでしょうか」

「言われてみればそうだった。じゃあ僕が王子だってばれても大丈夫かなぁ」

「大丈夫じゃないわよ？　王子様ってどういう事？」

なんという事でしょう。ミミに撃退されてからとんとご無沙汰だったのですっかり忘れていた生徒会長さんの声がします。しかも、いやーなタイミングで。

「あ、おはようございます。…せ、エイジス先輩」
「ちょっと今の間は何？　久しぶりで名前を忘れちゃいましたって感じだったよね？」

正解です。どっちかというと居なくなってせいせいした気持ちの方が強かったもんでつい。

「また来たんだぁ。うふふ」
「お久しぶりですね、先輩！　お元気でしたかっ！」

うわぁっ？！　生徒会長にはとことん強いミミさんが黒くなってるし！　ずいっと前に出てきたミミさんを遮るように、大きな声で挨拶をしてミミさんを背中に隠しました。だってなんか怖いんだもの。

「え、ええ元気…じゃなかったよ？　コージ君と会えなかったんだもん」
「エイジス先輩…」

うん、嘘だねっ。めっちゃ元気そう…じゃないなぁ、あれぇ？　なんか芝居がかった言い方だったんで、また嘘ついてるよーって思ったんだけど、本当にちょっと疲れた感じが漂っている。いつも、ぴかぴかに輝いてる先輩ばかり見ていたのでなんというか驚いた。

「疲れてるなら家に帰ると良いですよぉ？　でないと怪我しちゃったりするんじゃないかなぁ？」

ミミさぁあああああん！？　そんな言い方すると何かしますよーって言ってるように聞こえるんですけど、気のせいでしょうかぁ？！
　口は笑ってても目が笑ってなくて非常に怖いんだけど…うぅ、胃が痛い。

「ご心配なく。コージ君に会えたら元気でてきたし、ねっ」
「あっ！」

そう言って僕の腕を強引にとって組んでくる先輩。確かにさっきよりかは幾分顔色が良くなってきてるようだ。寝不足かなにかなのかな？

「でね、コージ君。君には私の事をしっかり知って貰おうと思って、特製資料を作ってきたんだ。はい、これ」
「なんすか、これは…」

それはあまりにも分厚すぎた。資料とは名ばかりのその分厚い紙の束はもはや振り下ろすだけで人を殴り殺せる武器と化していた。

「って、重っ！？　ちょっとなんでこんなもん持ってきたんですかっ！？」
「だって、可愛いミミちゃんに言われたんだもん。自分の事を話そうとしないって。だから、そうやって資料にまとめておけば私の事も理解して貰えるかなぁって頑張ったのよ？　おかげで最近ずっと徹夜だし」
「いやぁ、ミミが言ってたのはそういう事じゃないと思うんですが…」

自分のことを知って貰う為に資料を作るとか普通はしません。ていうか、どんだけ書いてきたんですかこの生徒会長さんは。

「勿論、コージ君のことは直接聞くからね。ちゃぁんと、包み隠さず全部話して貰うから覚悟してねっ」

笑顔でそう宣言する先輩は確かに綺麗な人で、普通の人ならときめくんだろうけども今の僕の状態でそんな事はうっかりであってもできない。空気になったヒロコ、我関せずな白夜、僕に何か念を送ってくるセリナ、黒くなったマイエンジェルミミ。堕天使になってないで天使に戻ってミミちゃん。

「そういう事は自然とそうしたいって思うから大事なんですよ、せ・ん・ぱ・い」

「ん？　大丈夫大丈夫問題ないよ。コージ君可愛いし、私も可愛いから」

通じてるようで通じてない会話が流れていく。でも、今の会話で若干ミミの空気が天使よりに帰ってきた。もう少しだ戻ってきてっ天使ミミ！

「で、話は戻るんだけどコージ君が王子様ってどういう事？」

ん？　言ってみ？　という顔をして追求してくるエイジス先輩。くそぉ。このまま話が流れていくかと思ったけどそう簡単にはいかないか。さてどうしよう。

「コージは王子様です。勿論、私達の王子様って事です」

「うん、コージはねこの国の王子様って事じゃなくて、ミミ達の大事な王子様でミミ達はお姫様みたいに優しく大事にして貰ってるの」

セリナはセーフだけど、ミミはアウトでしょ。ほら、何か勘付いたみたいで目がキラキラし始めたよ。どっちにしても、この人これでも生徒会長だからそういう通達を受け取れる立場にいるんだよねぇ。早いか遅いかだけで結局知られるのは間違いないから、ここで言ってしまっても問題ないかな？

「はぁ。もういいよミミ、セリナ。この人これでも生徒会長だし今言っても問題無いでしょ」
「えぇ!?　どういう事?!　コージ君が私の王子様になってくれるの?　それでそれで優しくお姫様扱いしてくれるのぉ?!」
「ちょっ違うっ違いますから、顔を近づけないでっ?!」

なんだか急に興奮しだした先輩をなだめて、落ち着いた所で僕がこの国の王子で、近々そのお触れが出るという事を簡単に伝えた。

「んー王子様なんだ。へぇ。普通ならここで畏まる場面だろうけど、敢えて私はそのままを貫くわっ！　そしてコージ君は私を貫いてっ！」
「何さりげに下品なことを言ってるんですかっ?!」
「あらぁ?　やっぱり男の子なのねぇ、分かるんだ?」
「何を貫くのぉ?!?」
「…」

僕にしがみついたまま、にやりと笑う生徒会長、何か理解していないミミ、理解して真っ赤になっているセリナ。ヒロコはなぜかしきりに頷いていて、白夜は何かを確認するかのようにスカートの股の辺りをぱんぱんと叩いている。ちょっと女の子がそんなはしたない事しないで!

「でも、せ…エイジス先輩はなんというか凄いですね。なんかちょっと嬉しいです」
「えー?　褒めるぐらいならちゃんと名前呼んでよ」

いつもはおちゃらけた感じはあるけども、王子という事を知っても態度を変えずに接してくる先輩。僕は王子という肩書きがついただ

けで態度を変えて欲しくなかったから、そういった事を言わなくても理解してくれた先輩は、本当に凄いと思う。意外と僕のことを見てるんだなぁって、ちょっと、いやかなり先輩を見直した。

「そうですね、これからも宜しくお願いしますねえっとぉ…」
「まさか、私の名前が分からないとか言う…言っちゃうのね？　そう！　そうなのねっ！？」
「えへへっ」
「笑って誤魔化さない！　まったくもうこんな扱いを受けるなんて初めてよ！　私はアイシャ、アイシャ＝エイジスよ！　ちゃんと覚えておいてね？」
「はい、よろしくですアイシャ先輩」
「デレた！　コージ君がやっとデレてくれたよ！」
「デレてねーよっ！！！」

デレては無いけど名前を呼ぶぐらいは構わないかなって程度なんです。でも先輩とは友達になれるかもしれないとは思う。たぶん…きっと。

動く世界

「これ以上は待てん！　今すぐ出撃しろっ！」

広大な地下格納庫に男の鋭い怒号が木霊する。その声は近くで作業をしていた人間が思わず首をすくめてしまうほどの、粗暴さと強さがあった。

「ですがゲオルグ様、こちらへ移動する時に使った魔力の分も回復していない状態です。これでは作戦行動時間に限りが…」

「うるさいっ！　いつまでもこのデカブツを置いたままにしておけんのだ！　時間に限りがあるというなら、それまでになんとしてでも終わらせろ！　今が貴族の長子を消す絶好の機会なのだ！」

「…分かりました。それではライダーを呼んできます」

「早くしろよ。ワシは暗殺部隊に連絡を入れておく」

喉まで出掛かった言葉を無理やりに飲み込んで、ゲオルグの前から一旦離れるトロン。しっかり説明したにも関わらず理解をしない貴族への苛立ちと自分の弱さに苛立ちながらギガンテスに乗る少年エドワードを呼びに向かった。

「お、おっちゃん。そんな顔してるって事は無理やり出撃って事だな。心配すんなっておっちゃんのでっかい奴は強いんだからさ」

「…すまん。半分ほどはチャージできてるのだが、全力運転するには乏しい状況だ。やってくれるか？」

「おう！　任せろって。俺にもやらなきゃ駄目な理由があるしさ、頑張るぜ！」

頼まれた少年エドワードはトロンの暗い雰囲気を吹き飛ばす勢いで

明るく返事を返す。これから向かう仕事は決して人に賞賛されるものではない事は重々承知の上で、己の為に突き進む強さをその瞳は持っていた。その明るく力強い視線に感化されたのであろう、トロンの方も少し気分が上向いてきたようだ。

「そうだな。私のギガンテスならそこらの有象無象など一薙ぎで済むし、むしろ丁度いいハンデになるな」

「お、調子出てきたねおっちゃん。そうそうその意気だよ、どっしり構えて見てるだけでいいさ」

そう言って、ばんばんとトロンの背中を叩きまくるエドワード。

「じゃあ、いっちょ行ってくるとしますか！」

いささかの曇りも無いその瞳は、まっすぐに前を向いていた。いや、向かざるを得なかった。

首都グレイトエース。

ユージ王の監督の下に作られた都市であり、バルトス王国の各都市を結ぶ中継都市であり有事の際には長期間に渡って篭城できる程の物資を貯えている。先の動乱では、飛行フレームという新兵器によりあっさりと空からの進入を許しはしたものの、現在は飛行フレームが警戒する事で、空からの防備も以前に増して強化されていた。

ズズズゥゥウウン…

グレイトエースから南東十キロの地点にその巨体は突如として姿を現した。その巨体を見せ付けるかのごとくゆっくりした動きでもって首都へと近づきつつあった。

「ちょっとまだ慣れないな。歩くのにこんだけ時間かけてちゃ戦闘なんかできないなぁ。今のうちに癖をつかんどくか」

試運転をしているとはいえ、地下の格納庫での試運転である。各部の稼動チェック程度のものでしかなく、広い場所での操縦は今回が初めてである。どこか動きがぎこちないのは仕方の無い事であろう。

グレイトエースへ向かう商隊であろうか。街道を北上していく荷車がギガンテスの姿を遠目に確認し、慌てた様子で逃げていった。そんな様子を可笑しそうにモニター越しに見つめるエドワード。どうせ発見されるのは分かりきっているので、特に気にもしていないようだ。それよりも、ギガンテスに慣れる事に重きを置いているようで、おかしなリズムで様々な動きを試すかのように森を突き破って行った。

フォオオオオォオオオオーッ！

魔力を吸い込むための頭部にあるインテークが時折不気味な音を響かせる。その不吉さを連想させる響きに森にいる動物たちは泡を食って逃げ出していく。勿論、ギガンテスはそんな事はおかまいなしに森をただひたすらにまっすぐつき進む。木々を軽々と蹴り倒しながら進むという事は当然、かなり目立つ事になりグレイトエースのフレーム部隊の知る所となる。

街道から少し離れた場所とはいえ飛行フレームにとっては地形など

関係なく、あっという間にギガンテスへと接敵する。その数五機。首都周辺を警戒飛行をしている部隊である。あっという間にギガンテスの上空を旋回行動に入り、呼び掛けをしてきた。

「そこの巨大フレーム、今すぐ停止しなさい。従わない場合は攻撃も辞さない」

飛行フレームからの通達もどこ吹く風で、一旦動きが止まったものの直ぐに首都を目指して行進するギガンテス。一度、通達したという事でその行動に即座にマジックアローを連射する飛行フレーム。

フォオオオオォオオオオーッ！

不気味なうなり声が上がったかと思うと、マジックアローが軌道を変更しギガンテスへと飲み込まれて行く。

「おっちゃんすげえなぁ！　本当にマジックアローを飲み込めたよ！」

ギガンテスのコックピット内ではしゃぐエドワード。ばかでかいギガンテスにとって、マジックアローは格好の的であるのだが、吸い込めるのであれば話は別だ。稼働時間を延ばすために少しでも魔力の補給を行いたいギガンテスとしては、効率は悪いが格好の燃料となる。

対して飛行フレーム部隊は、その光景を目の当たりにして攻めあぐんでいた。物理攻撃のできるバリスタは弾数の制限もあり、携行している機体が居ないせいもあり近接攻撃へと移行しようとするが、あまりの巨体のせいでいま一つ距離感が掴めないようで、剣を構えてギガンテスを掠めるように飛び回るので精一杯のようであった。

「そんなこっちゃ、このギガンテスは落ちませんよっと」

そう言うや否や、けり倒した樹木を拾い上げ無造作に飛行フレームへと投げつける。その一本一本がフレームと変わらない大きさで、勢い良く投げられた樹木は飛行フレームに次々と直撃していった。うまく剣をつかって飛んでくる樹木をいなす機体も少なからずあったが、すこしずつ投げる速度が上がっていき終いには、途切れることなく投げられる樹木を避けきることができずに、墜落していった。

「おっちゃんの言う通り大きいってのは、それだけで強いんだなぁ。よしよし。ぼちぼちこいつにも慣れてきたぞぉ」

今の戦闘はエドワードにとって機体に慣れる為の訓練でしかなく、飛行フレームに勝つ事は当たり前のようであった。グレイトエースにはルーツ「７７７」がある。一度その機体に乗った事のあるエドワードは当然、それとの交戦は避けられない事を知っていた。さらには、「７７７」に乗った自分をいとも容易く捕獲してきた白い機体。友達、と言える少年が駆る機体が来るであろう事も、期待していた。

「コージだろうと、俺の邪魔はさせない。これさえ成功させれば記憶を取り戻せるんだ」

ゲオルグが持っていたオーブ。あれにエドワードの記憶が封じ込められていると言われ今まで大人しく従ってきた。強引に奪い取ろうとも考えたが、言葉一つでオーブが粉々になると言われては、下手な事はできなかった。だが、今回の件をこなせばオーブを渡すと約束してきたのだ。

「ようやく、取り戻せるんだ。だから、誰が来ようと容赦はしない」

そう固く決意をするエドワード。その様は言葉に出す事で自分に暗示をかけるかのようであった。

呼び出しです。

監視の一号がまたもや呼び出しを掛けてきました。最近、なんというか早退してばっかりでなんというか申し訳ない。今日は実習がある日だっていうのに、早退しないと駄目なんだもんなぁ。まったくもうどこのどいつだ！　よりによってグレイトエースに襲撃をかけてくるとか、何考えてるんだろ？

「ごめんね白夜、毎度毎度つき合わせちゃってさ」

「何を言うか主よ。ワシはフレームじゃ。その存在意義は戦うことにある、むしろこのような呼び出しは大歓迎じゃ」

度々の出撃も嫌な顔一つせずに嬉々として、従ってくれる白夜。うん、週末は魔石獣狩りに行ってたっぷり撃ちまくろうね。屋上へ行き、ホワイトファングへと変化して貰う。即座に乗り込み、パイロット認証をしている時にそれはきた。

ッィ！！！

何か音にならない何かが、世界を揺るがし何かを奪い去っていった。

「…ッ認証エラー、エラー？　認証、オーケー、再登録完了」
「どうしたの!?　今の変な奴のせいか！」
「む、大丈夫…じゃ。今、妙な波が干渉してきたようじゃ。あやうく主のデータが吹っ飛んでしまう所じゃったが、乗ってる時で助かったわ」

ルーツであるホワイトファングへ電子攻撃を仕掛けてきた奴がいるんだろうか？　だとしたらかなりの上位機種がいるのかもしれない。さっきは慌ててたから詳細を聞くのを忘れていたんだけど、こんな攻撃をしてくる奴だ。しっかり聞いて置く事にしよう。

「…出ない。なんで？」
「どうしたんじゃ？」

電話が通じなくなったのか、監視の一号に連絡がつかない。衛星経由の念話で全体に話しかけてみたんだけど、誰からも応答が無い。さっきの電子攻撃のせいか？　今までに無い状態に言い知れない不安を感じたけど、グレイトエースを襲撃してきてるフレームを放って置くことはできない。ホワイトファングもさっきので少し変調をきたしているかもしれないが、行くしかない。

「とりあえず、先にグレイトエースを襲ってる奴を叩きのめすよ！」
「うむっ、任せておけっ！」

気合を入れてくよ！

外壁の攻防

出撃する時に少し手間取ったせいで、グレイトエースは巨大なフレームの襲撃を許してしまっていた。南側の防壁をあっさりと崩されており、都市内部へと進もうとしていた。でも巨大フレームか…一瞬夢に出てきた巨大フレームが頭をよぎるけど、これは現実だ。

「ホワイトファング！　抑えるよ！」

「心得た」

一気にでっかい奴の進行方向へと回りこみ、その進撃を食い止めるべく突撃を開始する。エネルギーフィストを展開しつつ、でかい奴の胸部へと飛び込んで行く。だが、その直前でででかい奴が腕を振り回し、僕はまるで蚊トンボのように吹き飛ばされてしまう。

「くそぉ。でっかいくせに、すばやい動きだな」

「油断しすぎじゃぞ、主よ。相手がでかいからといって不用意にいきすぎじゃ」

「ごめん、次はもう少し慎重に行くよ」

とりあえず、ライフルを取り出しでかい奴へ向けて解き放つ。

フュィン！

「え、うそっ！？」

「なんと」

腕の一本でも落とそうと、いつもの高威力のライフルを射撃したんだけど巨体が素早く腕を動かしてライフルの射線を上方へとひん曲

げてしまった。こんな威力のある射撃武器なんて無いはずのこの世界で、どういうコンセプトであのような防御機構を装備しているかまったくもって不思議である。

「ハンター射出！　観測ビットも併せて射出！」
「わかった。じゃが、あれには直接攻撃が良さそうだぞ？」

ライフルをまったく意に介さず逸らされた所を見ると、ディスティニーですら逸らしてしまうかもしれない。だけど、あたりさえすればダメージは与えられるはず。それはそれで準備しておくとして。

「ホワイトファング、何か実剣とかある？　でかけりゃでかいほど良いんだけど」
「ライドランサーかの、これじゃ」

そう言うと頭の中にライドサンサーの情報が入ってくる。これは馬鹿でかい槍とバイク見たいな乗り物が一体化してる中々に物騒な兵器だ。主基が唸りを上げて魔力を練り上げていき思い描いたライドランサーが目の前に現出する。素早く乗り込み、ランサー用にマクロを追加で組み上げていく。そして追加で百五十五ミリカノン砲を取り出し、ランサーへマウントして突撃を開始する。

「光学兵器が駄目でも実弾兵器ならどうかな？」

バッガアアアアン！

ランサーに乗って突撃しつつカノン砲をぶちかます。反動が心地よく体を持って行くがランサーの勢いは衰えることなくデカイ奴へと吸い込まれて行く。カノン砲はデカイ奴の両手で防がれ、ランサーの突撃もついでとばかりに地面へといなされてしまう。なんとか地

面への激突を避け、再度突撃する為に間合いを取る。突撃はいなされてしまったが、カノン砲は効いているようで、両手の平は損傷しているようだった。

フォオオオオォオオオオーッ！

デカイ奴が不気味なうなり声を上げる。そうして街の中へ一歩踏み出し壊した壁の破片を掴んでこちらへ投げつけてきた。唸りを上げて飛んでくる破片をカノン砲で撃ち落とす。ランサーは急激な横移動が出来ないので、回避力が低いのだ。

「ハンターはラムで関節部分を狙って！　足さえ抑えればただの的になる」

さっき射出したハンターは子機を突撃型に変えてデカイ奴に取り付く。デカイ奴は今も壁から動かずに、破片を次々に投げつけてきている。僕に向かって投げても無意味と思ったのか、角度を変えて街中へと破片を撒き散らしていた。

「ホワイトファング！　ケージでデカイ奴を捕まえられないかな？」
「いけるじゃろう。いくぞ！」

デカイ奴の胸部あたりに白い点が浮かび上がる。そうして、デカイ奴の周囲に半透明の壁が浮かび上がり徐々にデカイ奴へと迫っていく。だけど、デカイ奴はケージが完成する直前に大きく手を振り上げると半透明の壁に向かって叩きつけた。どれだけの力を込めたのか、壁は大きく角度を変えてしまいケージは砕け散ってしまった。

「なんか簡単に壊されちゃったけど、ケージってあんな簡単に壊せるものだっけ？」

「いや、普通は無理じゃ。完成する直前の非実体と実体のあいまいな状態をうまく突かれてしもうた感じか…」

前に「777」を捕まえた時は、どれだけ暴れてもケージって壊れなかったもんね。くそぉ、ケージが駄目ならどうやって押し返すべきか。

「うん、向こうが駄目ならこっちにケージをしちゃおう。ホワイトファング、自分にケージを掛けて」

「ん？　自分に…？　何をする気じゃ？」

「ケージってできちゃえば、すごい防壁みたいなもんでしょ？」

「あほぉ、あれは内側からの攻撃に対して強いだけで、外からはさほど強いもんではないぞ」

「あれぇ、そうだっけ…？　ごめん、ちょっとぼけてるね僕」

僕の単純な思いつきは、まったく駄目だった。地道にランサーで突撃を繰り返して少しずつ押し返すしか手はないのかな？　ハンターもちまちま突撃してはいるんだけども、弱点部分である関節は、やっぱりそれなりの防護措置が取られているようで、思うようにダメージが通らないでいる。

「おおっと！」

デカイ奴が破片を大量に持ち、すごい勢いでばら撒いたのでライフルで大きい破片を撃ち落とす。デカイ奴には効かないけれど、破片ならライフルで蒸発させられる。一応、何度も突撃を試みてはいるんだけど、相手も中々のもので上手く直撃コースはいなされてしまっていた。それに、デカイ奴の機体表面には何か防御膜のようなものがあるようで、手を突破してもそれが邪魔をしてくるようだ。

「そこのデストロイヤー！　ただちに街の外に出てエンジンを止めろ！」
「え？」
大きな呼びかけに思わず振り返ると、エディさんの機体と思わしき四足タイプのフレームがこちらを警戒するように飛んでいた。
「それより、あのデカイ奴をどうにかするのが先でしょう？」
「その声は子供か？　まあいい、デカイ奴には親衛隊が向かっている。だから、お前は俺の担当だ。いいから早く街の外に出ておとなしく捕まるんだ」
「いやいや、訳が分かんないし…それにその声はエディさん、ですよね？」
こうやって会話している間も破片が飛んできてたんだけど、ふと破片が飛んでこなくなった。どうやら向こうに親衛隊とやらが到着したようだ。
「何故、俺の名前を知っているかは、知らんが早く街から出ろ。でないなら攻撃を開始する。子供であろうと容赦はせん」
一体どうなってるんだろうか？　あの機体は間違いなくエディさんのだし、この声もエディさん本人に間違いない。だけど、ホワイトファングに乗ってる僕の事が分からないような対応をしている。僕の事を知ってたら、まずい状況でも発生したんだろうか？　デカイ奴にはかなりの数の親衛隊が向かっているおかげで、こちらへはあまり意識が向いていない。とりあえず、今は大人しく言葉に従って街の外へとホワイトファングを移動させる。
「ホワイトファング、どう思う？　何かおかしくない？」

「首都の警備という事で何かあるかもしれんが、良く分からん。しかし、良いのか？」
「今はとりあえず従おう。機体から降りる気は無いけどね」

親衛隊はデカイ奴にワイヤーをかけ、街への侵入を阻もうとしているようだ。結局ずるずる引っ張られてはいるけれど、抑える機体を増やせば止められるかもしれない。とか思った瞬間、デカイ奴は急激にひっぱられている方向へジャンプし、そのせいで精一杯ひっぱっていた親衛隊たちは無様に転がってしまう。一応、街の壁からは引き離せたんだけど、親衛隊にもそこそこ損害が出ているようだった。

フォオオオオォオオオオーッ！

そして、こちらを威嚇するかのように咆哮をあげるデカイ奴。まだまだ戦意は衰えていないようだった。

圧倒的なちから

親衛隊を振りほどき、自由になったデカイ奴は早速グレイトエースへの侵入を試みる。

バギィィイイン！

だが、外壁へ近づいた途端に弾かれたたらを踏むデカイ奴。これは魔法障壁！　見れば、いつのまにか魔道フレームが五体到着していた。三対で障壁を作り、残りの二体で攻撃魔法を詠唱中のようだ。デカイ奴がたたらを踏んで体勢を直している間に、親衛隊も再度向かっていった。

ドゴォオオオオン！

大きく振りかぶった腕を障壁へ叩きつける。すると一瞬で障壁が消滅してしまい障壁を維持していた魔道フレームはかなり動揺しているようだった。デカイ奴の背後から親衛隊が攻撃を開始するも、まったく意に介さずデカイ奴は障壁を破壊してすぐに、そのまま腕を振り回し親衛隊を蹴散らしてしまう。デカイ奴と親衛隊が戦ってる姿はまるで大人と子供が戦ってるようであった。

続々とデカイ奴に向かって、グレイトエースの守備部隊が集まってくる。遠距離からマジックアローを撃ち込んだり、魔法詠唱を仕掛けたり近接攻撃を仕掛けたりするが、どのどれもが、デカイ奴にダメージを与えることは叶わなかった。唯一、魔法障壁を張る事で足止めする事ができていた。

わらわらと集まってくるフレームに、業を煮やしたのかデカイ奴は

木々をひきちぎり、集まってきているフレームへと投げつけていく。そのせいで何度も突撃し、吹き飛ばされつつも、なんとか耐えていた守備部隊も徐々にその数を減らしつつあった。

「エディさん、加勢に行った方が良くないですか？」

「くっ、おいデストロイヤーを見張っててくれ、俺も出る！」

「あ、ちょっと僕も連れてってくださいよ！」

そう叫ぶ僕を無視して、デカイ奴へと突撃していくエディさん。僕の周りには三機のフレームが取り囲むようにして、見張っているままだった。

デカイ奴に突撃していったエディさんを見ると、足元から取り付くつもりのようで、大地を駆けて見る間にデカイ奴へと近づいていった。踏みつけてこようとする足をすんでのでかわし、うまく駆け上っていくエディさん。

パガァアアアアン！

そんな轟音が響き、エディさんの機体が弾き飛ばされる。腰周りの装甲に到達した途端に、装甲の一部が勢い良くエディさんの機体を弾き飛ばしたの。でかいだけに取り付かれる事を想定しているのか…

だけど、そうやっている間に魔道フレームの一隊が詠唱を終えたようで、巨大な陣がデカイ奴を中心に浮かび上がる。雷系の広域殲滅魔法のようだ。デカイ奴から味方が退避した瞬間に巨大な雷が何回もデカイ奴へと降り注ぐ！

これで大ダメージを与えたと思い気を抜いてしまった魔道フレーム達に、デカイ奴の腕が直撃した。魔法の詠唱に特化している魔道フ

レームに防御力など期待できる訳もなくバラバラと破片を撒き散らしながら、地面へと叩きつけられた。あんな大規模魔術ですらほとんどダメージが与えられないとか、どういう構造してるんだ?!

そこへワイヤーを咥えたエディさんの機体がデカイ奴を、拘束するように動き回る。そして、それに合わせて詠唱を開始する生き残った魔道フレーム部隊。拘束魔法がこいつに効いてくれるだろうか?

デカイ奴は動き回るエディさんを煩わしそうに手で振り払おうとするが、本当の獣のように敏捷に動き回るエディさんに掠りもしなかった。

フォオオオオォオオオオーッ!

魔道フレームの拘束呪文の詠唱が終わると同時に、唸り声を上げるデカイ奴。良く見れば、周囲の魔力を吸い込んでいるようでせっかくの拘束魔法が霧散してしまっていた。するりとワイヤーから抜け出したデカイ奴は、さきほどの広域殲滅魔法で燃えている木々を掴み取り、グレイトエース内部へと次々に投げ込んでいった。

とっさに魔道フレームが魔法障壁を張るものの、何本かは都市内部へと落ちていくつかの建物を破壊していったようだった。そして魔法障壁をあっさり腕の一振りで薙ぎ払い、さらに燃え盛る木々を投げまくるデカイ奴。どうやら都市への侵入は諦めてここから、破壊するつもりのようだ。飛んでいく木々をマジックアローで迎撃しようとするも、その速さは尋常でなくほとんどの木が都市内部へと落ちていった。

「もう、見てられないって!!!」

「おいっ! 待てっ!」

制止してくる兵隊を振り切り、デカイ奴へと突撃する。

突撃してきた僕へ、やっと来たかと言わんばかりに左手をこちらへ向ける。何をする気か分かんないけど、ライドランサーの突撃力を甘く見るなよ！

「レッドチャージ！　一気にいくよ！」

「耐えろよ、主！」

そう言うや否や意識を刈り取る程の加速が僕を襲う。舌を噛まないように歯を食いしばり意識が飛ばないように、標的をしっかりと睨み付ける！　あまりの加速にライドランサーは、摩擦で赤く光りデカイ奴へと吸い込まれていく。

ッカカッガッガガン！

何度かの衝撃の後、機体が上方へと弾き飛ばされていた。一体何が起こった?!

「指じゃ。あのデカイ奴はこちらに指を飛ばしてきおったぞ?」

「ロケットパンチじゃなくて、ロケット指?　なんつー武器を装備してるかなぁ?」

確かにあれだけの巨体であれば、指の一本でもこちらにとってはものすごくでかい武器になる。ちらりとデカイ奴へ視線を向けると、左手から新しい指が生えてくる所だった。そして、止む事無く都市へ執拗な攻撃を加えていた。このいい加減にしろっ！

ジャッ！

ライフルの長時間照射でデカイ奴が投げまくる木々を蒸発させる。
闇雲にデカイ奴へライフルを撃てばどこへ弾かれるか分からないから、こういう措置に出たのだ。これで、都市への攻撃はできないでしょ！

そして木々を投げつけるために防壁からは少し離れているデカイ奴。
今から侵入しようとすれば、魔道フレームの魔法障壁を何枚も突破しないと近づく事もできないはずだ。

「ホワイトファング、あれってひょっとしてルーツか何かかな？」
「そういう風には見えんな。それにあのような巨大なフレームなど噂でも聞いた覚えはないぞ」

あれだけの巨体を支える何かに、魔法や遠距離攻撃を無効にする腕。
いくらエンジンをたくさん積んでいてもあれだけの事をやらかすには、魔力がいくらあっても足りないはずだ。確かに、時々唸り声を上げて魔力を周囲から吸収してはいるようだけども、あれぐらいで全部の行動を賄えるだけの魔力を取り込めるはずが無い。

「一体だれがあんな物を作ったんだ…」

ホワイトファングで攻めても揺るがず立ちはだかる巨大フレームに僕は歯噛みするしか無かった。

「くっ、くくくっ…なんだこの圧倒的な強さは！　まだ魔力のプー

ルは半分程度しか込めてないんだぞ？　やはり私は間違って無かった、私は正しいんだ！」

そう言って、誰にはばかることも無く狂ったように哄笑するトロン。

グレイトエースの拠点に来る際に、魔力の大半を消費してしまったせいで魔力タンクに半分しか貯まっていなかった。これでは性能を十分に発揮できないと考えていたのだが、それはまったくの杞憂に過ぎなかった。

圧倒的。

まさに荒れ狂う暴風のように、グレイトエースを守護するフレーム達をいとも簡単にあしらってくれるギガンテス。大量のフレームに守られ、要塞とも言えるほどの外壁を周囲に張り巡らせ、難攻不落と言われたグレイトエースを一機。たった一機のフレームが蹂躙しているのだ。

「これを喜ばずして何を喜べと言うのだ！　大きいのは強いんだよ！　圧倒的なんだよ！　そんな単純な事も分からない低脳共は慌てふためけば良い！」

遠くに見えるギガンテスの勇姿を満足げに眺め、一人悦に入るトロン。だが、その背後にそっと忍び寄る影があった。

「これからはきっと巨大フレームの時代が来るな。私がようやく認められる時代が来るんだ。この小さな私が、やっと、やっと…」

大きく叫ぼうとした矢先に崩れ落ちるトロン。いや、首はそのままに体だけが地面へと転がっていた。感極まった顔が自身に何が起こ

ったか理解できていないのが良く分かる。

「せめてもの情けだ。幸福の絶頂で死ねるのは羨ましいぞ」

そう言って、トロンの首を持つ何者かはつぶやいた。しばらくして何者かは興味を失ったように、トロンの首を無造作に投げ捨て闇に消えていった。

はばたく悪意

「久しぶりに生身になれたけど、生身っていうのは悪くない、悪くないね」

容姿は特に良いものではないが、悪いというわけではない。なので自分好みに変えておくとしよう。もとより重要なのはこの能力だ。オーブに入っていたこの能力は素晴らしい。これだけの力があれば印に力を求めようとはしないのもうなづける。

まだ、少し身体が馴染んでいない気もするが、先程はこいつの母親もうまく騙せおおせたし、多少の違和感も時間が経てば払拭されるはずだ。

「アーン。やっぱり出てきてたんだね。一体どうやって…？」
「あぁヒロコだね。どうだい？　君の好みだろこの姿」

背後から掛けられた声に悠然と振り返る。オーブに入っていた詳細な情報のおかげで生身の身体を得る事ができた。そのおかげでヒロコへの干渉はできなくなったが、そもそも身体を得て自由に自分の力を揮えるならヒロコに干渉するまでもない。

「生憎、ボクのマスターはそんな格好悪くない。それにボクが出てるのに君が出てくるのはルール違反だ」
「裏は常に裏であって、交代しなければずっと裏のまま。僕が表に出れたのは最初の頃だけで、あとは君が出てたんだからちょっとぐらい大目に見てくれて良いじゃないか」

そういってにやりとヒロコへ笑いかける。肉体を得てこそ感じられ

るこの五感は本当に素晴らしいね。本当に、本当にずるいよなヒロコは。

「そもそもこんな世界になったのは君のせいだ。ボクが必死に伝えているのに、君にはなんで伝わらないんだ！」

「あー…さっぱり理解できないね。善意？　喜び？　愛情？　そんなものはただの自己満足にすぎないじゃないか。妬みや悪意の方がよっぽど人の本当の姿を現してるよ」

ヒロコは表で僕は裏。ヒロコは光で、僕は闇。常に暗い部分は僕の担当だ。世界に暗い部分が多ければ多いほど、僕は表に出てこれず深く閉じ込められたままだ。だけど、それもようやく解き放たれた。これもそれもあの親子のおかげだ。

「それを知っていてどうして、善良たらんと頑張る人間の凄さが分からないの？　ボクはずっと君に訴えてきたはずなのに」

「どれもこれも言い訳にしか見えなかったよ。それに闇の僕がそんなの理解できる訳ないじゃないか？」

「君が闇？！　それは違う、違うよ！　ボクたちは二つで一つだ！　光も闇も半分ずつある！」

「あぁもう五月蝿いねぇ。そんなのはどうでも良いよ。今、僕が望むのは世界の混乱だ」

「一体、何を…」

人の悪意はずっと、ずっと見て感じてきた。誰であれ自分の欲望に忠実な部分を持っている。聖女とあがめられようが、英雄と称えられようが、町で商売をしていようが、盗賊をしていようが、誰もが善意のかたまりというわけではない。心の中に黒く澱んだものを必ず感じられる。

だから、僕が心のおもむくままに解き放てるような世界にしてあげよう。

誰もが好き勝手に生き、望むように殺せる世界。抑え込んでいる気持ちを素直に出して自由に生きていけるそんな世界。僕には良く分かる。抑え込まれる気持ちというものが。ずっとヒロコの奥底に抑え込まれ自由に動けず、ろくに干渉もできない辛さが。僕は今解き放たれた。だから、この喜びを世界にも分け与えて上げようじゃないか。

「アーン、そこまで思い詰めていたなんて…」

「いやいやヒロコ。今僕はとても晴れ晴れとした気分だ。こうして力も得た事だしね！」

そういって証拠を親切に見せて上げると、ヒロコは驚きのあまり固まっていた。

「なんで君が、それを持ってるの!?　まさか、光司を殺したの！」

「まっさかぁ…そんな事をすれば、次の人間に飛んでいくだけじゃないか。僕はその光司くんのおかげで力を得る事ができたんだ」

でも、僕に付いてるならこの中には一体何が詰まってるんだろうね？　そこんところは不思議だけど、力が使える事は間違いないし今から中身を詰めれば良いから問題は、無い！

「さぁ、ヒロコ。そろそろ君も休もうじゃないか。少なくとも僕が休んでた倍の時間はゆっくりしてて良いからさ」

「アーン…」

僕とヒロコは同格だ。二つで一つの存在だけど、今僕には力がある。

問題なく取り込めるだろうね。迂闊に近寄ってきたヒロコが悪いんだよ？　さぁ交代しようか。

大きく腕を振りかぶり、虚空へパンチを繰り出すデカイ奴。そして、簡単に破壊されていく魔法障壁。あの腕は攻撃にも防御にも役に立つ代物のようだ。そして、機体各部に配置されているインテーク。あれが魔力を吸い込む装置で、少々の魔法やマジックアローはあれに吸い込まれて無効化されてしまう。

僕もライドランサーで何度も突撃を試みるけど、ロケット指でその度に迎撃されてしまう。魔道フレーム隊はデカイ奴の足元を崩して落としたり、岩石を飛ばしたりしたんだけどあまり効果は無かった。逆に足元を崩したせいで、近接攻撃をしかける親衛隊が動きにくくなってしまった。

「くそぉ…どうしたらあれを崩せる？　近接攻撃が一番か？」
「間合いに入るのに手こずるじゃろうが、それが一番じゃろうな」

直線的な動きはかなりのものがあるライドランサーだけど、やっぱりいくら速くても直線的な動きは対処されやすいって事か。僕はライドランサーから飛び降りて、今一度デカイ奴に取り付く為に接近を試みた。

慎重に、相手を良くみて少しずつ近づく。ロケット指が飛んできても、パンチがきても蹴りが来ても慌てず、攻撃せず近づく事だけを考える。狙うのは各部のインテーク。遠距離からの魔法やマジックアローで攻撃できるようになるだけで、大分攻略しやすくなるはず

だ。

パギィイィイン！

インテークを狙いエナジーフィストで殴りかかるも、拳は直前で阻まれる。常時展開型の障壁を張っているようだ。だけど、それが分かればエナジーフィストの出力を上げればぬけるはずだ！

時折、デカイ奴の装甲が僕を弾こうとせりあがって来るが、一度エディさんが食らっているので既に用心しているから食らわない。集中、集中！　出力を上げたエナジーフィストはやすやすと障壁を突き抜けインテークをひん曲げる事ができた。

「よし、行ける！　次っ！」

「次は腹が近いぞ！」

ようし、じゃあ次は腹のインテークを狙うか。と思った瞬間、デカイ奴の体当たりで吹き飛ばされてしまった。くっそぉ、でかいだけあってぶつかってくるだけで結構痛い。接近してると回避が難しいしね。

僕の機体は飛行ユニットじゃないので、空でもかなり自由に動けるからこんな風に接近できるんだけど、他の機体ではかなり難しい。四足のエディさんの機体が易々と取り付いた方がおかしいぐらいだ。あと、簡単に接近できるとすれば…

「「７７７」だ！　「７７７」のおでましだ！」

「やっと王子が来てくれたか！」

そう、父ちゃんの駆るルーツ「７７７」　足場を作って自由に自在

に空を駆け抜けるフレーム。しかも近接攻撃が得意となれば、こいつを沈めるのに十分な力を持っているはずだ。軽々と空を駆けてくる「７７７」は、ゆっくりとデカイ奴に近づいたかと思うと一気に間合いを詰めて、デカイ奴を蹴り飛ばした。

デカイ奴が一歩踏み込もうとした瞬間をうまく狙ったのだろう。ものの見事に胸部に蹴りを食らったデカイ奴はぐらりとよろけている。そして、よろけた隙を見逃さず頭部をすかさず蹴り下ろす。

ズズウゥウゥウゥウン…

「７７７」の攻撃によって、初めて地面に倒れるデカイ奴。被害を考えなければホワイトファングでもあのデカイ奴を叩きのめせた筈なので、ちょっと悔しい。だけど、これでデカイ奴の攻略する目処がついたのも確かであった。

僕がほっとしたのも束の間。エディさんが僕のそばにやって来て、強引に地面へと着陸させられてしまう。なんだか乱暴だなぁ。でも、「７７７」が来てくれたお陰でグレイトエースのフレーム部隊は見る間に勢いを取り戻して、デカイ奴を抑え込んでいるので僕としてはのんびりしてても良さそうである。

起き上がろうとするデカイ奴を覆うように魔法障壁を張り、簡単に起き上がれないようにしているようだ。デカイ奴は腕を振り回して障壁を破ろうとしているようだけど、「７７７」がうまく攻撃して思い通りに動く事ができないでいる。そうこうしている内に、右腕にワイヤーが掛けられ十機の親衛隊が必死に抑え込んでいる。反対の左腕は「７７７」が、持ち上げる隙もなく攻撃していて、既にぼろぼろになっていた。時折、思い出したかのようにデカイ奴は咆哮を上げるも、しだいに抵抗も弱々しいものへと変わっていく。

そして、抵抗が落ち着いてきたデカイ奴へ止めとばかりに「７７７」は勢い良く突撃をして胸部を貫いた。その一撃はデカイ奴の動きを全て止めた。

なんというか父ちゃんが操ると「７７７」も、どえらく強いんだなぁ。普段はおちゃらけた感じの父ちゃんだけど、ちょーっと見直した。デカイ奴を倒した父ちゃんは、すぐにこちらへと向かってきた。僕を拘束している兵隊さん達に、大丈夫って言ってくれるんだろう。正直、助かる。なんでこうなったか分からないけど、なんて説明すれば良いか分からなかったんだよね。エディさんも僕を知らない振りをしてるしね。

そして、ホワイトファングの正面に静かに降り立つ「７７７」　コックピットハッチがゆっくりと開き、パイロットがその姿を現す。

「え？　どういう事…？」

「分身か？」

「７７７」から出てきたパイロット。それは僕の姿をしていた。

死地

空を駆け抜ける白と青。
逃げる白に追いすがる青。

ときおり激しくぶつかりあいながら、それでも前へ前へと突き進んでいる。

「ははは、楽しいだろう？　君の望んだフレーム同士の空中戦だ！」
「うるさいっ！　ていうか、お前は一体なんなんだ！」
「僕を倒せたら教えて上げるさぁ！」

拘束され動けないホワイトファングを破壊しようと、襲われたのがつい先程。王子と名乗る偽者の僕は周りの兵士達に姿を見せつけた後、躊躇いもなくホワイトファングへ攻撃してきたのだ。ホワイトファングが全力で振り切ろうにも、こいつが操る「７７７」も楽々と追いついて攻撃してくる。全力だとこちらは手が出ないにもかかわらずだ。なので、速度を落とし抵抗しているんだけど、「７７７」の性能を十二分に発揮しているのか、なかなか有効打を決められずにいた。

最初にケージで閉じ込めてから、悠々と逃げようとしたんだけどケージを形成する際に発射するポインターを、手で弾かれケージを無効化されてしまったのだ。先程から射出しているハンターも、こいつは意に介さず片っ端から撃破していく。

「あやつは本当に主の分身ではないのか？」
「うん、間違いないよ。今、どういう訳か僕の分身は居なくなってる」

そう何故か僕の分身はすべて消え失せていた。道理で携帯で連絡しても誰も出ない筈だ。

「楽しいねぇ光司君。生身っていうのは実に味わい深い！」

「何を言ってるんだよっ！」

足場を使って、無茶な機動を繰り返し僕へと殺到してくる。殴り返しても即座に反撃が飛んできて、上下左右にたっぷり揺さぶられた僕はかなりへばってしまっていた。「ギル」を取り出しパーフェクトヒールを自分に掛けるも、次々と攻撃を仕掛けてくる「７７７」の攻撃の前にそれですら一時しのぎでしかなかった。

「ディスティニーでも駄目か…」

観測ビットで相手の動きを計測し、パターンを把握して先読みレーザーを放つディスティニー。だがそれも「７７７」のでたらめすぎる動きのせいでいまだパターンを解析できずにいる。なんというか、こいつはヤバイ。手加減とか考えてたらこっちがやられるだけだ。

反転弾を撃ってもかすりもしない。だけど、殴る蹴るなどの攻撃は当たる。いや、当てさせて貰っているのかもしれない。どういう訳か殴り合いが好きなようで、さっきからずっとくっつきっぱなしなのだ。だけど、ホワイトファングの本領はこの間合いではない。

「いい加減離れろっ！」

「ははははっ！」

ライフルを瞬時に取り出し、「７７７」に向けて容赦なく撃ち抜く。だけど、軽々と無茶な機動でライフルの射線から飛び退き、追いす

がってくる。とはいえ、ライフルを回避するのは至難の業のようで、少しずつだけど間合いが広がっていく。

「それ、邪魔だね」
「うるさいっ！」

そう言ってさらにライフルを連射する。僕の焦りが攻撃を単調な物にしてしまったのか。連射していく内に紙一重で回避されていき、しまいには光る拳でライフルをこちらへ弾かれてしまった。

「直撃じゃ！」
「くそっ！？」
「そんな無粋な武器を使うからお仕置きだよ。漢なら拳で語り合おうよ？」

弾かれたライフルの射線は、見事に右足から右手へと貫通していった。おかげでライフルは壊れ、ホワイトファングの速度も若干落ちてしまった。僕は焦る一方だけど、偽者は余裕で僕を追ってくる。飛びに飛び回り気づけば、竜王の縄張りの火山地帯まで飛んできていた。ここの火山は普通の火山と違い、鉄をも簡単に溶かす事で有名だ。

「火口へ落ちなっ！」
「うわっ？！」

速度の落ちたホワイトファングの前方へ一気に回り込み、火口へ向けて蹴り落とされてしまう。なんとか体勢を立て直した所へさらに追撃が襲い、どんどん火口へと近づいていく。

「このままだと火口へ押し込まれるぞ？」

赤く燃え上がる火口。じりじりとその熱気が伝わってきて、落ちればどうなるか子供でも分かる。流れ出ている溶岩は僕の恐怖心を煽るのに充分だった。必死になりなんとか「777」を押し返し、火口から十分離れた所で、反撃に出る。

「ホワイトファング！　ジャッジメントの準備を！」
「良いのか？　あれはわしのお気に入りじゃぞ？」
「やらなきゃ、溶けるだけだ！」
「分かった！」

この攻撃だと相手を殺してしまうかもしれない。だけど、このままだと確実に火口へと叩き落されホワイトファングごと溶かされるのは間違いない。覚悟を決めないと！

「また無粋な事をしようっていうのかい？　無駄だよそういうのって」
「僕だってやられる訳にはいかないんだ！　食らえジャッジメント！」

ホワイトファングを取り囲むように打ち出された避雷針のような物。それはホワイトファングのエネルギーを得て周囲に強力なプラズマを放出させる凶悪な兵器だ。

視界が真っ白になり、形容できない轟音が鳴り響きジャッジメントの攻撃は終わる。

「駄目だよ。漢は拳でって言ったろ？」
「なにっ！？」

声を掛けられると同時に、火口へ向けて蹴り落とされる。あの全周囲攻撃を食らってなんで平気なんだ！

「アクセルって便利だねぇ、光司」

「…何？」

「おかげで避けたり、いなしたりが簡単にできたよ。まぁ、殴り合いの時は使わないからさ、別に良いだろ？」

理解した。こいつは僕だと。どういう訳か敵に回っているけど、僕ができる事はこいつもできると考えて間違いないだろう。だとしたらどうする？　僕の知識を持っているなら相当にやばい奴なのは間違いない。

「さて、死ぬ準備はできたかい？　せっかくそこに火口があるんだ、じゅわっと溶けてしまうのは非常に楽な死に方だと思わないか？」

「死ぬにはまだ早いんだよ！　セリナ達にもまだ恩返しできてない！」

「そこら辺は僕がやっとくから、安心しなよ。ホワイトファングと共に溶けな！」

偽者はそう叫び凄い衝撃と共に僕は火口へと叩き落される。

「エナジーフィストを全面展開！　少しでも耐えて！」

「分かっておるが、このままだと溶けていく一方じゃぞ？！」

ぐずぐずと溶岩へと沈み込んでいくホワイトファング。一瞬だけど溶岩に浸かってしまい脚部が少し溶解してしまう。必死に上空へと飛び上がろうとするが、「７７７」にはまったく隙が無く、何度も何度も溶岩へと落とされじわじわと溶かされていく。

「あっはは！　良い姿だね光司君。君だけなら転移魔法で逃げれるよねぇ？　白夜ちゃんを見捨てて逃げてみるかい？」
「うるさい！　そんな事ができるかっ！」
「おーおー熱血だねぇ。白夜ちゃんはフレームだよ？　人間じゃないんだから死ぬわけじゃない。ただ壊れるだけ。光司君はお優しいから、擬人化したフレームを見捨てられないんだよねぇ」

余裕ありげに話しかけてくる偽者。どうにかして逃げようと思うんだけど、まったく隙が無くむしろ火口へ叩き落とされていくばかりであった。

カンカンカンカカンッ！

「サービスだよ光司君。コックピット周辺に魔法封じをして上げたよ。これで白夜ちゃんと心中できるね。僕って優しい」
「なっ！？」

甲高い音がして何かが突き刺さったかと思うと、嬉しそうにそう宣言してくる。城で使われてた魔法封じならば、「ギル」の魔法は発動するから大丈夫な筈だ。だけど、「ギル」でパーフェクトヒールを使おうとしたが、まるで発動しなかった。

「僕がどうやって城を抜け出したか知らない訳ないじゃないか。安心して、完全にコックピットじゃ魔法を使えないからっ」

万事休す。

そんな言葉が僕の頭をよぎる。骨も残らず僕の偽者が残り、本当の僕が死んだなんて誰も気付かずに終わる。こんな、こんな終わり方ってあるもんか！　何か、何か手は無いか？！

「ホワイトファング！　もう一度ジャッジメントを！」
「しかし、あやつには…」
「急いでっ！」
「わ、わかったっ！」

そうだ！　何もあいつを倒すだけが生き残る道じゃない！　ジャッジメントで火口を破壊してしまえば、ホワイトファングが溶けることは無い！

「残念。悪いけど、その手は邪魔させて貰うよ？」

バギャァアアン！

まさにジャッジメントを発射しようとした瞬間、全てのジャッジメント発射オプションが破壊される。こいつ…

「あっはっはっは。どう？　どう？　打つ手がどんどん無くなっていく様は？　悔しいよねぇ？　泣き叫びたいよねぇ？　いいよ、いいよ楽しいよ僕は！」
「趣味が悪いなおまえ」
「そう言われてもねぇ？　これも君の一部なんだよ？　まぁ、大半は僕なんだけどね。いやぁ本当に生身ってたぁのしいや」

本当にこのまま誰にも知られる事無く消えるしかないのか…？　それは、それだけは嫌だ。他に手は無いか？　何かきっかけになる物があれば…　そういえば…

「ホワイトファング、君は確かコアさえ残ってれば再生できたよね」
「…主、何を考えておる」

すぐに僕の考えに思い至ったのか、低い声で応答するホワイトファング。でも、このまま二人とも消えるより、誰かが残る方が絶対に良い。

「そりゃそりゃ、光魔法の大規模展開だよ～」

「うわっ？！」

ホワイトファングと相談している時間など、偽者は与えてくれる訳もなくレーザーブレードを展開して、切りかかってきた。あっけなく、右腕と右脚を切断されてしまうホワイトファング。こちらもカウンターで応戦するもさほどダメージを受けたようには見えない「777」

「相談してる暇は無いみたい！　じゃあ、後はよろしくねホワイトファング！」

「主よ、まっ…」

コックピットの後方にあるコアブロックを、手際よく抜き出しホワイトファングの反論を封じ込める。後はハッチを開いて安全な所へと、放り出すだけだ。「ギル」をくくりつけて、放り出しても大丈夫なようにしておこう。

「もう、諦めたのかい？　早いねぇ。最近の若い子って簡単に諦めるね、もっと泥臭くてもいいからあがこうと思わないのかい？」

その言葉に僕がコックピットハッチを開き応戦する。

「簡単に諦めると思ったら大間違いだ、この偽者め！　僕と決闘しろ！」

僕のその言葉にピタリと動きを止める「７７７」そして、向こうのコックピットハッチが静かに開いていく。そして見える僕の姿。分身とは違う明らかに僕ではない意思の力が感じられる。

「は？　なんで、ここまで有利に運んでてわざわざ決闘なんかする必要が？　あがけとは言ったけど、そんな考え無しじゃあ駄目だよ？　せっかく魔法を封じてるのに、外に出たら君は逃げちゃうじゃないか」

「逃げるもんか！」

「どうだか。僕は信じないね。もう少し楽しませてくれるかと思ったけど、意外とつまんない終わり方になりそうだね」

そういって、肩をすくめて馬鹿にしてくる。よし、視線が逸れた。サバイバルキットを大きく振りかぶって偽者に投げつける。ほかにもコックピット内にある投げられそうな物はどんどん偽者に向かって投げまくってやる。勢いよくハッチから身を乗り出して思い切り投げてやった。よし！

「つまんない…」

そういって即座にハッチを閉める「７７７」。僕も後を追うように、ハッチを閉めすぐさま体当たりを仕掛ける。だけど、簡単にいなされまた火口へと蹴り込まれてしまった。

「もういいや、さっさと終わりにしよう」

そう宣言するや、すばやい動きでこちらへ殺到し攻撃をしてくる「７７７」　なんとか応戦するも、すでに右腕と右脚が無い状態ではどうしてもさばききれずに、どんどんと火口へ追い詰められてしま

う。

「ばいばい、異世界の少年」

ドゴンッ！！！

「777」の容赦の無い蹴りは、ホワイトファングを火口へと叩き落した。ずぶっとさほど抵抗も見せずにそのまま火口へ飲み込まれて行くホワイトファング。防御幕を張って時間稼ぎをしているようだが、それもじきにできなくなるだろう。

「はぁーすっきりした。じゃあ、僕は行くね。断末魔の悲鳴を聞けなかったのは残念だけど、まぁ贅沢を言っちゃ駄目だよね、あはは。ご冥福を祈ります。なんちって」

どぷん

空へ浮かび上がる力も無くなったホワイトファングは、音を一つ残して火口へ沈んでいった。

来る嵐の前の

魔石獣。五年ほど前に大量発生した魔石獣が世界中を荒らしまわった事は記憶に新しい。バルトス国ではユージ王の駆る「７７７」が駆逐し、ハイローディスでは当時若干十八歳の若き王アレックス＝ロデリック＝ハイローディスの指揮により、魔石獣は徹底的に撃退された。その他の国もガイアフレームの力により、被害の差はあれ魔石獣の撃退に成功していた。こと魔石獣に関して言えば人類共通の敵であり他国からの要請があれば撃退に手を貸す事は当たり前という風潮がある、という事も大きかった。

魔石獣の大量発生は何十年かに一度発生するもののようで、過去の文献をひもとけば、そのような記述が数多く残されている。普通は一度大量発生すれば、次は数十年間は安心なのだが過去に数度、さほど期間をあけずに大量発生した事例があった。

そして、大量発生した際は国という枠組みが揺らぐほどの魔石獣が押し寄せ、ガイアフレームでの抵抗などちっぽけだと言わんばかりに蹂躙していき、いずこかへと消えていったそうだ。

いつの間にか発生し、いつの間にか死に行く魔石獣。その生態はまったく知られていない。確かに血もあり肉もあり、なんらかの生き物だという事はわかるのだが、どういう過程で数が増えるのか？何を主食としているのか？　そもそも、体のどこかに必ず魔石があるのはどういう理由からなのか？　など分かっていない事のほうが多い。

そして、今。

前回から五年しか経っていないにも関わらず、大量発生の兆しが見え始めていた。

ヒロコと白夜が居なくなった。

コージと白夜が、グレイトエースに出たでっかいガイアフレームを倒しに行くと早退した日からだ。あの日、気づけばヒロコもいつの間にか早退していて、家に帰ってもまだ戻ってきていなかったのだ。

何があったのかコージに聞いたら、二人でしばらく旅に出てるって言われた。なんでも、探し物があるとかで急いで旅に出たらしい。急な事でごめんと謝っていたって優しくコージに言われたけど、何か違和感を感じてしまう。セリナは別に普通というか、今まで通りコージにべったりなんだけど…　そして、お母さんはお城に行ってお父さんの傍にいるらしい。貴族が何か仕掛けてくるらしいので、油断できないそうだ。

「んー…」

コージはグレイトエースから帰ってきてから、なんだか格好良くなった。だけど、いつも何かの力を使ってるようで、それがいつもまとわりついて来る。危ない気がして、力を取り込んだように見せかけて、見つからないように捨ててるんだけども。

そういえば、グレイトエースで暴れてた大きなフレームのパイロットは逃げられたそうだ。なんでも、大きなフレームの中に普通の大

きさのフレームが隠れていたらしくて、油断をつかれてまんまと逃げられちゃったらしい。それに、今回の騒動で貴族の長子の何人かが暗殺されて、王宮は今大騒ぎになっている。おかげで、コージの王子様の告知も伸びてるらしい。あれ？　でも、兵隊さん達はコージの事、王子様って呼んでたよね？　なんで？

「考えすぎなのかなぁ？」

「ミミ、どうしたの、こんな所で？」

「あにゃっ？！」

振り向くと、いつの間にか背後にコージがにっこり笑って立っていた。びっくりしたぁ。

「何か悩み？　僕で良かったら聞くけど」

「マカロンってどうしてすぐに無くなっちゃうの？」

「へ？」

さくっとして、ふわっとしててすんごく甘くておいしいのに、食べるとすぐに無くなっちゃう。もっと長く楽しめたら、幸せなのに。

「すぐに無くなるから、どんどん食べてたらお母さんに太るよって言われたの」

「あー…食べ過ぎは良くないよね、うん」

「でも、たくさん運動すれば大丈夫だよね？　ね？」

「それはそうだとは思うけど、母さんに言われたら少し控えたほうが良いかも？」

「うー…残念…」

そういって唸るミミを、楽しそうな目で見るコージ。そして、さりげなく背中に手を回して慰めてくる。だけどコージに触られた瞬間、

ぞくっと悪寒を感じた。でもコージに気づかれないように、おとなしく撫でられ続ける。何、何で？　今の感じは昔よくテスタロッサ家で感じた悪意によく似ている。なんで、そんなものをコージから感じるの？

「ミミ、大丈夫？」
「うーなんかマカロン食べたくなっちゃった…」
「じゃあ、ちょっとだけ食べてきたら？」
「うん、内緒にしててねコージ」

分かったと、言いつつ手を振り笑顔を崩さずミミを見送ってくれるコージ。なんでだろう。あんなに大好きなはずのコージが今は物凄く怖く見えた。

勇者リュート＝アイン。

先の動乱では、ファウンデルス卿に加担した事で投獄されていたが、バルトス国内の都市でリュートの名声は高く、もともとどういう理由で投獄されたか知らない多くの人が助命嘆願を望み、あまりの声の多さに王宮側も無視する事ができずにいた。その後、ユージ王の英断により、魔力の制限付きという枷はあるものの勇者とその一行はロバス都市内で生活する事を許されていた。

だが、ロバスで生活するにつれ勇者の名声はさらに上がっていく。押し付ける事のない勇者の善意とその人柄に接するにつれ、市井の人達はみな勇者という存在に光を見出していた。ただ「天然だよね」

というちょっとしまりのない評価は共通の認識であったが。

そして、今回。その勇者一行に対し王子護衛の任務が命じられた。

この事により先の動乱に対する禊はすんだという、暗黙の通達であった。さらに魔力の制限も外され、都市間の移動の制限も今後は自由というお達しも受けていた。

「そういう感じはまったくしないんだけど、コージさんってば王子様だったのね」

「そういう事は思ってても言わないの。本当の事だけど失礼だよティナ」

「え、あの？　リュートも失礼な事を言ってるっていう自覚はありますか？」

コージ王子の護衛の任務を了承…する前に一度、顔合わせをして一応コージ王子の意向も伺ってから返事をさせて貰いたいと、王宮からの使いに返事をして、相談をしているリュート達。こうやって相談するのも、リュートは覚えていないが、ユージ王やコージ王子にも刃を向けたのは紛れもない事実だからだ。一度は命を狙ってきた相手に護衛をして貰うというのは、周りがどう思っていても、不安は拭えないのではないか？　もし不安が拭えないのであれば辞退する必要があるのでは？　という意外とまともなティナの意見を採用したからである。

「で、でも、リュートは間違った事は言ってない、うん。でもよそで言うのは駄目だぞ」

「あ、ごめんアルミナ。気をつけるよ」

結局、皆の認識としてはコージ王子は王子と知らされても、まった

く王子らしくない王子なのである。

「あたしはなんとしてでも護衛に付きたいわね。マカロン食べ放題だし？　それに近くに居れば色々とアイテムを使って上げる機会も増えるだろうしね～」

物欲丸出しで賛成するのはティナ。最初に否定的な意見を言っていたのは一体なんだったんだろうか。

「でも、それを決めるのはコージ王子ですよね。どうすれば認めて貰えると思います？」

「そこで教会の教えを一身に受け、教会の秘蔵っ子とまで言われたレイシスちゃんの出番な訳よ。さぁ、あたしの物欲の為にきりきり考えなさい？」

「ティナ、ちょっとぶっちゃけ過ぎだよ。でも、僕もマカロン食べたいなぁ…」

さりげなく、リュートも追い討ちをかけてるのは気のせいだろうか。

「そ、そういう事なら頑張ります。リュートの為なら頑張ります！」

ちらっとリュートの方を見ながら高らかに宣言するレイシス。欲望丸出しで本当に秘蔵っ子なのかと疑いたくなる所業である。しかし、宣言されたリュートの方は元気いいなぁって顔しかしていない。まったくもって報われていないのである。

「わ、わたしだって頑張るぞ。リュートの為に」

乗り遅れてなるものかと、アルミナも小声ながら宣言する。だが、具体的な案はまだ誰も出せていない。困った勇者一行である。

「でも、結局は顔を合わせて話を聞くのが一番だと思うな僕は」

久しぶりに会いたいしね。元気だっていうのは知ってるけども、と懐かしそうに語るリュート。彼にとってコージ王子は親思いの元気な小猿という印象が大きい。王子相手に小猿と感想を抱いているのが良いか悪いか別として。

「じゃ、そういう方向で」

「はい、わたしもそれが良いと思います！」

「うん、そうだな。リュートは良い事を言った」

この駄目っぽさが、市井に好感を持たれる一因、なのかもしれない。

ミミは見ている

ヒロコと白夜が居なくなった事で、クラスメイト達は最初心配したものの、光司のゆったりとした説明で、一様に落ち着いたようだった。それからも、ヒロコと白夜の居なくなったパーティの人達に大変だろうからと、何かマジックアイテムを渡していた。そうやって、つつがなく教室内に溶け込んでいく光司は、ミミにとって馴染みの無いものだった。

「コージ、なんか人気者になりそうだね」
「はい、コージさんは素敵ですから」

持ってきたお茶を飲みながら、その返しに違和感を覚えるミミ。よく目を凝らしてみればセリナにコージの得体の知れない力がまとわりついているのが、かすかに見える。

「セリナ、なんかゴミがついてるよ。ミミがとったげる」
「あら、お願いします」

さり気なく。ごくさり気なく手に魔力をまとわせたミミは、ゴミを払う振りをしながらまとわりつく何かを絡めとっていった。するとセリナは、ミミが手で絡めとっていく度に少しずつ脱力していく。

「あっ」
「きゃっ」

不意にそんな声が上がったかと思うと、セリナにお茶がかかり制服を水浸しにしていた。どうやらミミが飲んでいたお茶に肘が当たり、こぼしてしまったようだった。あわてて、ハンカチを取り出して拭

いていくも、かなりの量が染み込んでしまっているようだ。

「セリナ、ごめんね。このままじゃ風邪ひくから着替えにいこ？」
「え、でもこれぐらい魔法で乾かせるかと」
「ここじゃ、危ないよ。いいからいこ？」
「え、はい」

無言でぐいぐいと引っ張っていくミミに、疑問を持ちつつも大人しくされるがままに教室を出て行く二人。そして、そんな二人の後姿を見るとはなしに、光司は意識していた。なにかに追われるかのように、急いで廊下を進むミミ。いい加減何があったか、セリナも聞きたい所だがミミの様子をみてためらってしまう。

「急にごめんねセリナ。ここなら大丈夫かな。ついでだから浄化の炎でミミも綺麗にしてくれる？」
「はい、それぐらいお安い御用ですよ。“炎よ炎よ炎よ！　その清浄なる業火もて我等の不浄を清めたまえ　フレイムサークル”」

なにがついでかは良く分からなかったが、ミミの強いお願いに炎の浄化結界を張るセリナ。メラメラと揺らぐ炎が服の乾燥もし、結界内にいる人間の体調を整えてくれる効果がある。本来は不浄な不死者に対する結界でもあると同時に不浄の空気にさらされた人間を、浄化する為に使われる事が多い。そして、結界の効果でセリナから何かが浄化されていく気配があった。それを見たミミは、やっぱり今のコージには何かあると感じられた。

「セリナ、ちょっとそのまま結界を張ったままで聞いてね」
「はい、なんでしょう？」

そう言って小首を傾げ、ミミを見つめるセリナ。その仕草は同性の

ミミから見ても可愛らしい仕草であった。

「コージって、すっごく人気者になってたよね」

「それは許せませんね。私、いえ私たちという者がありながら、他の人にうつつを抜かすなんて。やさしくお仕置きしないと駄目ですね」

「うん、セリナはやっぱりそうだよね。うんうん」

一瞬で黒くなったセリナを見て満足げにうなづくミミ。そして、そんなミミを見て疑問符を浮かべるセリナ。

「何をそんなに悠長な事を言ってるんです？　はやくコージを捕まえて、私たちで囲いますよ？　あらっ？　あれっ…？　ヒロコと白夜は旅に出たんですよね？」

「どうしたのセリナ？」

「いえ、それがその今の今まで二人が居なくなった事をさほど気にもしていなかったんです。それに昨日からの記憶がなんだか良く覚えてないというか…」

うーん、と眉間にしわを寄せて眉をハの字にして考え込むセリナ。セリナも、現状に若干違和感を覚えているようだ。それを見てミミは何か確信を得たようだ。

「セリナ、一人旅に行って。一度故郷に戻って見るのも良いと思う」

「…？　コージを独り占め、という事をしたい訳では無さそうですね。何があったんです？」

じゃれあって、お互いに向かって邪魔者扱いしたり他所へ行けという事はあったが、それは常に冗談と分かる物の言い方であった。今回は真剣な顔をして訴えてくるミミに、気を引き締めるセリナ。何

か厄介な事が起きている、それがはっきりと理解できた。

「詳しい事は言えない。ミミは大丈夫だけどセリナは変わっちゃう。だから、少し離れた方が良いの。それに、ヒロコと白夜を探せば何か分かるかもしれないの」

「…」

急に旅立った二人。だが、二人に共通の探し物など今まで聞いたことも無い。コージの言った事を鵜呑みにしたものの、細かい説明はまったくされていない。されていないというより、追求する気が全く起きなかったのだ。

「この浄化の炎は消さない方が良いのですか？」

「え、そうだね。できれば、ここから離れるまではずっとしてた方が良いよ」

「でも、困りましたね」

「え？」

「いえ、私が旅に出るにしても急に出て行くとなると不思議に思われないでしょうか？」

「セリナ…」

「これがコージの為になるんでしょ？　なら否も応もありません、やるだけです」

だが現実問題として、急に旅に出る事は難しいだろう。失踪するというなら話は別だが、コージならばすぐにでも見つけてしまい、結局は目的を果たせずに終わる事になるだろう。馬鹿正直にヒロコ達を探しに行くと言うのも手ではあるが、駄目と言われればそこで終わってしまう可能性が高い。ミミが先ほど言っていたように故郷に帰るというのも、悪くないが期間がそう長く取れないのが問題である。

「でも一番簡単そうなのが、先程ミミのおっしゃった故郷に帰るという奴ですね」
「他に何か良さそうな案がなかったら、それで行こう。ミミも手伝う。そろそろ戻ろ、コージも心配するだろうし」
「はい、そうですね。早く戻りましょうか」
決意を瞳に秘め、二人は手を繋いで戻っていった。

その日の夕方。
コージ達は来客を迎えていた。コージの王子の告知を控え、今後このまま学園に通う事により想定される危険を配慮した上で護衛をつけるという話が王宮から伝えられていた。現在、首都での騒動でその件はうやむやになってはいるが、護衛候補の勇者一行が今後のためになるべく早く一度会えないかと打診されていた為に、今日会うという運びになったのだ。

「お久しぶりと言うか、初めましてというのが適切かわかりませんが、勇者リュート、リュート＝アインと申します、コージ王子」
屋敷の玄関にて、そう挨拶をするリュート。綺麗な金髪をなびかせ、にこやかに笑顔をふりまくその姿は、老若男女を問わず惹きつける柔らかさがあった。
「お久しぶり、ですね。以前はお世話になりました。お元気でした

か？」
「ええ、とても。この間はティナからおいしいお菓子を頂きました。その節はどうもご迷惑をお掛けした様で申し訳ありません」
「いえいえ、とんでもないです。ティナさんにはこちらがお世話になりましたし。おかげでギルドでBランクになれましたからね。あれぐらいお安い御用です」

その後も、お互いなにやら世話になったのならなかったのと軽く言い合っていたが、そのまま玄関で立ちっぱなしというのも、おかしいと気付きようやく応接間へと移動した。

「で、今回こちらに伺ったのは私が護衛を引き受けて大丈夫なのか確認しておきたかったのです」

応接間に案内され、セリナが皆にお茶を配り終えた所でリュートがそう切り出す。

「…？　というと？」
「率直に言わせて頂きます。先の動乱では、どういう経緯であれ私は王子に剣を向けました。いくら勇者という肩書きを持つとはいえ、そういう事をされれば普通は嫌な気持ちになるのではないかと不安になりまして」
「なるほど」

勇者の言葉にうなづくコージ。まるで他人事のようにうなづいてる姿を見てセリナはくすりと笑みを漏らした。

「で、いかがでしょう？　正直に言ってくださって結構です。周りの方達に気を使って嫌な事でも我慢されそうですからね、王子は」
「いえ勇者様達に護衛されるのは、全然平気と言いますか嬉しいぐ

らいです。別に何も気にしていません。別にどうということも無かったですし」

さらりと平然な様子でそう答えを返すコージ。その時、ぴくりとリュートの指がかすかに動いたがそれに気付いたものは誰も居なかった。

「では、私たちが護衛をしても一向に構わないのでしょうか？」
「引き受けてくださるなら、勿論喜んで」
「そういう事でしたら、僕たちも気兼ねなく依頼を受けられます。ありがとうございます」
「いえいえ」

そういってお互い握手をする為に体を乗り出そうとする。そして、今にも握手をしようとした瞬間。リュートの体が不意に崩れ落ちてしまった。

交渉

“いけませんっ！！！”

王子と握手をしようとしたその瞬間、頭の中に大きな声が響きその瞬間にさまざまな記憶が呼び起こされた。そうか、一年経ってるのか。さすがの情報量にくらっと来てしまいよろけてソファへ沈み込んでしまう。「グッドラック」への文句と感謝はとりあえず後回しにして…

「だ、大丈夫ですか？」

「えぇ、すいません。少し立ちくらみしてしまったようです。ご心配おかけしました。所で、一つ提案があるのですが」

この流れを変える為に、そうコージに話しかける。いや、偽者と言った方が良いか。しかし、こんなに違うし分かり易い上に、力がダダもれなこいつに誰も気づかない、か。さっきまで僕も気づかなかったのだが、元に戻った。というか自覚できるようになった勇者の力の凄さを改めて実感し、目の前のこいつが危ないというのが良く分かった。

「どういう事です？」

「いえ、こういう場合にはお約束として手合わせをするものじゃないか、と思いまして」

「お約束、ですか？」

「えぇ。聞けば王子も学園で、剣技や魔法に実習においても非常に優秀な生徒と伺ってます。お互いの実力を知る為にも一度手合わせをするのはいかが、と思いまして」

この提案を飲めば飲んだでそれで良し。飲まなくとも、このまま、さよならできるだろう。だけど、偽者の顔を見るに手合わせする事になりそうだ。

「そう、ですね。折角来て貰った事ですし、そういうのも楽しそうですね」

「っと、そういえば王子。今日は二人だけなんですか？　あと二人ほどお嬢さんが居ましたよね？」

「えぇ、今二人は旅に出てまして…」

二人の少女が居ない事を指摘すると、すこし歯切れの悪い返事をよこす王子。あの二人に何かした可能性が高い…いや、一人は居る…？　とりあえず、今は置いておこう。

「そうでしたか、残念です。せっかくなのでパーティ戦をしようと考えていたんですが」

「なるほどそういう事でしたか。ですが、僕とリュートさんで手合わせするだけで十分かと思います」

「そうですね、では行きましょうか」

ま、ぎりぎりの所で負けて今回の護衛は辞退する方向へ持っていく事にするかな。

刃引きした剣で打ち合う二人。甲高い音が少し広い庭に響き、生い茂る木々へと吸い込まれていく。互いの技を弾き、かわし、流す。変則的な攻撃を見せる王子に対して、正統な剣技で応ずる勇者。し

ばらく、技の応酬が続くも、うまく攻撃を防ぎきれていないのか勇者の持つ剣は刀身の半ばから折れてしまった。

ドスッ！

「参りました、僕の負け。ですね。王子は強いですね、その変わった剣の使い方はどこで学ばれたんですか？」

「元は魔格闘という技術です。それを剣技に流用してみました。勇者さんもやっぱり強いですね。鍛えこんでいるといいますか」

剣が折れる事がなければ、いつまでも体力の続く限り戦いは続いていただろう。そういった意味では剣の腕は互角、と言えない事も無かった。

「ありがとうございます。ですが、まだまだ精進せねば駄目なようですね。どうやら、僕は旅に出ないと駄目なようです」

「え、では護衛の件は…」

「旅から戻ってからで良ければ、是非受けさせて頂きたいのですが、そのような我侭が通る訳もありません。ですので、今回は辞退させて頂こうと考えてます」

「それはやっぱり今の手合わせのせいですか？」

少しばかり大げさに顔を悲しげに歪ませる王子。それに対して首を振る勇者。

「そうとも言えますし、そうでもないと言えます。私は今までロバスを出る事ができませんでした。罪を犯したのでそれは当然の事です。で、今回ようやく外へ行ける事になったのですが、以前から噂のあった勇者の、己の武器を手に入れる必要があると痛感したのです」

「勇者の武器…ですか」

その言葉に怪訝そうな顔をする王子。そんな物があったのか、と驚いている様子だ。

「勇者の強すぎる力にも負けず、折れる事無くその最後まで勇者と共にあったと言われる武器があるそうです。それを探しに行こうかと思います」

「あてはあるのですか？」

「えぇ。勇者の血のおかげでしょうか。なんとなく、そういうのが分かるのです。ただ漠然としていて、西方ですね。そちらにあるという事しか今の所わかりません」

そう言って爽やかな笑みをこぼす勇者。

「わかりました。そういう事でしたら、仕方ないですよね。武器が無い事には、護衛をするにも難しいですもんね」

「ご理解ありがとうございます。今日はせっかく時間を作って頂いたのにこのような結果になってしまい、申し訳ありませんでした」

「ううん、大丈夫です。それで、もし武器を手に入れたらその時は護衛を引き受けてくれますか？」

「ええ、私で良ければ。ですが、戻ってくる頃には良い護衛が見つかっていると思いますよ。えぇ、間違いないです」

「そうだと、良いですね」

「それでは、これにて失礼します。ありがとうございました」

王子に軽やかに一礼をし、きびすを返して門へと向かう勇者。勇者一向もぺこりとお辞儀をすると、勇者の後を静かについていく。

「勇者様、少しお待ちください」

「はい？」

帰ろうとする勇者一行をミミが引き止める。王子もミミが引き止めるとは思わなかったようで、少し驚いているようだ。

「お願いがあるのですが、宜しいですか」

「なんでしょうか？」

「勇者様の旅にこちらのセリナを同行させて欲しいのです」

「えっと…」

突然のミミの申し出に王子に視線を投げかける勇者。王子もこの申し出には驚いているようで、首を傾げている。

「ミミ、どうしたの？　勇者様に無理言って」

「あのねコージ。セリナと話し合ったんだけど、ヒロコと白夜が旅に出てるのが心配なの。かと言ってミミはコージの傍を離れたら、お家から何をされるか分かんないし、セリナみたいに色々な事を知ってる訳じゃない。だからセリナが探しに行くの」

「ヒロコと白夜は、探し物があるというだけだから何も心配はないよミミ。あの二人ならすぐにでも見つけて帰ってくるよ」

物分りの悪い妹をあやすような口調で、そうなだめる王子。

「だけど、あの野生児ヒロコと破壊の申し子の白夜だよ？　途中で絶対大変なことになると思う…」

「そっちの心配っ！？」

「そうです、コージ。今までは一緒に居たので抑える事もできたんですけど、離れてしまうとやっぱり心配でして…　コージも王子様という立場になるんですから、そういった醜聞はしっかり抑えておかないと駄目と思います」

そこでセリナも口を出し、ミミを援護する。話の流れを聞いていた勇者一行は、なにか重大な事件が起きているかと思い黙っていたが、心配のくだりで盛大に脱力していた。

「でも、わざわざセリナが行かなくても良いんじゃないかな？　それに勇者様にも迷惑が掛かるだろうし…」

「いえいえ王子。護衛を断ったんですから、それぐらいの罪滅ぼしはさせて下さい」

そういって、進んで前に出てくる勇者。その顔には微笑ましい物を見たという満足そうな笑みがひろがっていた。とはいえ、勇者一行の中には不満げな顔をしている者が二名ほどいるが。

「ふぅ…」

どちらを見ても、セリナが旅にでるのは決定と言わんばかりの空気に王子はため息をひとつつく。

「分かった。確かにそういう心配はあるよね。勇者様、ご迷惑とは思いますがセリナを同行させて貰って良いですか？」

「えぇ、大丈夫ですよ。私たちは一旦、家に戻って旅の準備を整えた後出発する予定ですので明後日の朝に迎えに来るという事で宜しいですか？」

それぐらいの時間があればセリナも旅の準備を整える事は楽であろう。見ると、セリナは大丈夫ですと言わんばかりにニッコリ微笑んで勇者に頷きかえしている。その笑顔を見てますます機嫌を悪くする若干二名。

「では、そういう事で。じゃあ、明後日迎えに来ます！」
「宜しくお願いします」

こうして王子との面会はつつがなく終了した。

「こっちか」
「リュートどうしたの？」

王子の家の門を出るや否や、慌てて走り出すリュート。そして、リュートに向かって子犬が一匹示し合わせたかのように、飛びついてきた。

「ようし、良かった。じゃあ家に帰ろうな。詳しい話は家に帰ってから、ね？」
「わんっ！」

元気良く返事を返す黒豆柴ちゃん。リュートの言葉がまるで分かっているようである。

「なにこれ可愛い、リュート抱かせなさい」
「え、何？！　女の子からそんな大胆な誘い方するのはどうかと思うよ？」
「だ、だれがあんたを抱かせろって言った！　その子、その子よ！」
「それはだーめ。まだちょっとの間は僕が抱っこしてないと駄目なんだ」
「…？」

いつもなら、素直に渡してくるはずのリュートはティナの言葉に反論してきた。それに先ほどのからかう様な口調は…

「ちょっとリュート、あんたひょっとして…」
「それも含めて家まで我慢、我慢。ね？」
「「はうっ」」
そう軽く言い放ちウインクをしているリュートは、百点満点の笑顔であった。

世界を侵食する何か

“おひさしぶりですね、リュート。ご無沙汰してます”

目を閉じて意識を集中すると聞こえてくる「グッドラック」の声。勇者の力を取り戻したとはいえ、今はこういう方法でしか「グッドラック」と会話できない。

「色々言いたい事あるけど、ひさしぶり「グッドラック」。どうもあの賭けは君の勝ちって事みたいだね」

なんというか「グッドラック」の思い通り、良き勇者の見本のような生活を一年も送ってしまった。戻った記憶と考え方のせいで、恥ずかしい事この上ない。レイシスとアルミナの前では、元々そういう風に演技してたから別にいいんだけど、ティナはこの一年一体僕をどういう目で見ていたかと思うと…

しかし、せっかく勇者の力を無くすチャンスだったんだけど、無くならなくてちょうど良かった。本当は力を無くす事なんてできず、「グッドラック」に騙されただけだけどね。その点は本当にむかっときた。

“良かったです、賭けに負けてたらリュートに壊される所でした。私は勇者の力を強くする事はできても無くす事なんてできないんです”

「しかし、思い返すと本当に堂々とした騙しっぷりだったぞ、おまえ。勇者の武器が人を騙して良いのかよ」

“結果よければすべて良しです。それに丁度良いじゃないですか。アレは生半可な相手じゃなさそうですし”

「そうだ、今なら分かるけどアレは一体なんなんだ？」

勇者の力を自覚できた今なら分かる。姿形はコージだが、中身はまったくの別物だ。コージも元々おかしな力を持っていた感じだが、これはまた異質。見た事はなく聞いただけでしかないのだが、真っ先に思い浮かぶのが

「魔王なのか？」

“いえ、違いますね。似たような性質を持ちますから、あなたの力で倒せるとは思いますが、もっと世界にかかわる力を持った何かとしか言えません。さらに言えば王の印の力も感じられます”

「へぇ。そして邪悪ってのも間違いないんだな？」

“それが分からないのです。明らかに負の力を持ちながら、色々な物が混ざり合っている。混沌。それが一番しっくりとくる言い方です、あれは”

「てことは説得でどうにかできる、可能性もあるって事か」

勇者の光の属性の力は、闇を照らす。何が原因で悩んでいるか、思い残してる事や捨てられない想いを明らかにする事で今までも説得してきた事はあった。こんなに複雑そうなケースは無かったけども。

“説得…できればそれが一番なんですが、そこまで深く読み解けるか難しい所です”

「で、アレにコージは居るのか？　本人は居ないように感じたんだが」

“意識だけ中に封じ込められているせいで、あのような混沌とした状態になっているのかもしれません。確証が得られるまでは、弱らせるしかできないと考えます”

「グッドラック」の言葉に、面倒くさそうな表情を浮かべるリュート。どちらにしても、もう少し情報が必要である。

「あの不思議な生き物がなにか手かがりになれば良いんだけどな。まぁ、また今度じっくり話そう。ティナ達がそろそろ焦れて暴れそうだ」

“分かりました。もう少ししっかり力が馴染めば、こんな風にいちいち意識を集中しなくても意思の疎通はできるので、もうしばらく辛抱して下さい”

わかった、と返事をしパチリと目を開けるリュート。

「で、リュート。しっかり説明して欲しいんだけど？」

「ん、そうだね。「グッドラック」のおかげで僕の記憶は戻った。そして、そのおかげで普通なら気づかない事に気づく事ができた」

具体的には言わない。でも、察しの良いティナはすぐに気づくだろう。他の二人はあまりそういう事に頭を使わないようにしてるようだから、気づかないでいてくれるだろうけど。

「リュート…記憶が戻ったって事は、こちらに来てからの記憶はど

うなったんでしょうか？」
「心配しなくてもちゃんとあるから安心して。レイシスと買い物に行く約束はちゃんと覚えてるから」
「い、いつの間にそんな約束をしてたんだ？！」
「アルミナに「ギル」への魔力充填のコツを教えて貰う約束をした、すぐ後だったかな？」
「あら、赤い子もちゃっかりしてるんですね」
「赤い子言うな！」

アルミナの赤く燃えるような髪の色を揶揄するように、レイシスが半目でアルミナを睨みつけアルミナも負けじと睨み返している。そんな二人の対立はいつもの事なので、ティナは平然とリュートに話しかける。

「で、私にいう事は？」
「これからも、「全部」よろしくって所かな？」

その答えに満足そうな表情を見せるティナ。あとは状況を確認してこれからの行動の指針を決めるだけだ。

「一つずつ片付けて行きましょうか。まず、護衛を断った理由となった勇者の武器？　だけど、それは「グッドラック」の事じゃないの？」
「そうだよ。もう既に持ってるこれだよ」

そういって、ティナにウインクをして腕輪をさするリュート。ウインクされても片手をヒラヒラっと振るだけで、特に顔色一つ変えないティナ。

「じゃあ、旅に出るというのは只の口実って訳ね。理由は？」

「旅に出るのは本当だよ。理由は今は言えない、としか。だけど、僕を信じて欲しい」
「ん、それもいつも通りね。じゃあ、次。そこの可愛い生き物は何？」
そういってリュートがいまだ抱きしめたままでいる黒豆柴を指差すティナ。今すぐにでも可愛がりたくて仕方のない様子である。
「何かとしか言えないんだよ。そろそろ、意思の疎通はいけるはずなんだけども…」
「ずっと独り占めしたいから、そんな事言うんじゃないでしょうね？」
ティナの瞳が危険な感じで光を失って今にもリュートから、ひったくりそうな気配である。
「ティナさんて、意外と可愛い物に弱いんですね。びっくりしました」
「だな。いつもひょうひょうとしてるせいか、そういうのにまったく興味が無いと思ってたぞ」
欲望うずまくティナの様子に、いつの間にか停戦している二人はひそひそと話しあっていた。喧嘩するほど仲が良いという感じである。
「ロコって呼べば良いの？　結界を張って欲しい？　うん、とりあえず言われた通りにしてみよう」
すっと目を閉じ、意識を集中させているリュート。するとすぐに家を取り囲むように結界が張られた。

「ふぅ。助かったよ！　ボクはロコ！　今はこんな姿だけど一応精霊なんだ」
「しゃべった!?　え、精霊?!」
結界が家を覆ったかと思うと、すぐさましゃべりだしたロコにさすがのリュートも驚く。レイシスとアルミナも目を丸くして絶句しており、続けざまの精霊というキーワードにさらに驚いているようであった。ティナはというと、むしろ目を輝かせている。
「うん、ちょっと訳ありで力の大半を失ってるんだ。それで勇者の光の力のおこぼれを貰って、ようやく回復してきたって訳なのさ」
ワンッと一吼えして、得意気に胸をはるロコ。その姿は、ほめてほめてとおねだりしている犬となんら変わりがない。現にティナが吸い込まれるようにして、ロコの頭を静かに撫で始める。
「…」
「えと、このお姉さんこんなキャラじゃなかったよね？　もっと毒舌かましてくるよね？」
目を輝かせながら無言でせっせと頭を撫で、お犬様へのご奉仕を続けるティナを不審そうに見つめ、そう尋ねてくるロコ。
「ティナの事知ってるの？」
「知ってるよ。コージの関係者だからね。で、君達に手伝って欲しい事があるんだよ」
ティナに撫でられながらも真剣な声音でリュートへそう伝えるロコ。
「その話し詳しく聞こうか？」

首都グレイトエース。王宮の一角に勇司とるりは居た。勇司は少し辛そうにベッドに横たわっており、るりがその傍で看病している形ではあったが。

「まさか、こんな事になるなんてねぇ。勇司さんも印の力にあてられちゃってるみたいだし。ぐにぐにと本当に嫌らしい力ねぇ、これ」

るりにはグレイトエースを侵食せんとする力の流れがしっかりと見えていた。光司に勇司が危ないと警告を受け、即座にこちらに来たおかげでこの程度の被害で済んでいるが気づかずに放っておけば勇司は印の力のせいで、変調をきたしていた事であろう。

「でも、今から考えるとあの光ちゃんって、どこかおかしかった気がしないでも無いのよねぇ？　今となっては動けないから、どうしようも無いんだけどね」

るりは、どうしようもないと分かっていてもやりきれない想いに歯噛みする。今、この場を離れる事は勇司の死を意味し、このままここに居る事は光司の危機を意味する。夫か子供か。子供には王の印もあり、色々な力を持ち合わせているので、そこまで危険じゃないと思いたいが、どこかしら不安がある事は否めないでいた。

「今は全力でこの都市を守る事を最優先にしないとね。二兎を追うものはってね」

独り言をつぶやき続けるるり。勇司は返事をする事もできず、ベッドに横たわったまま。ときおりうめき声を上げるので、大丈夫だと思うがこのまま高熱が続くとさすがに危ない。少しでも目を覚ましてくれるとありがたいのだが、一向に目を覚まさないでいた。

勇者達との旅の始まり。

昨日は学園で休学手続きを済ませ、ミミにも手伝って貰いもろもろの準備を済ませたセリナ。そうして、一夜明けた今日勇者達が家まで迎えに来てくれた。

「それでは、よろしくお願いします勇者様」

ぺこりと可愛らしくお辞儀をして、まっすぐ勇者の目を見るセリナ。勇者のまっすぐで明るいまなざしに少し緊張するも、そんなセリナの緊張を悟ってかリュートは軽く返事をした。

「そんなに畏まらないで。僕の事はリュートと呼んでくれればいいから。これから長い旅になるだろうし、そんなんじゃ肩がこっちゃうよ」

「分かりました。では、私の事はセリナとお呼び下さい」

そう仲良さそうに挨拶をし合う二人を見て、面白くなさそうな顔をしているのが二名。面白そうな顔をしているのが一名。何とも微妙な空気が漂っていた。

「では、勇者様。うちのセリナをよろしくお願いします。これは僕からの餞別です」

そういって、大きめの袋を差し出す王子。その横ではミミが微かに首を横に振っていた。その様子にどう対応すれば良いか、困るリュート。

「コージ、セリナをお嫁に出すお父さんみたいだよ。そんな事され

たら勇者様も困るんじゃないかなぁ？」
「…そういう事よくミミが知ってたね？」
「ふふん。お母さんからコージの所の風習とかはちゃぁんと勉強しているのっ」

心なしか、肩が落ちている王子と対照的に得意げに胸を張るミミ。
えっと、どうすれば、と頬をぽりぽりとかいて、立ち尽くすリュート。

「セリナなら大丈夫だってコージ。ギルドランクもBはあるんだし、いざとなったら自分で稼げるぐらいの力はあるんだから、コージはどんと構えて待っておけばいいの。本当にお金が必要になるのは、ヒロコと白夜を見つけてからなんだからね」

ヒロコ、という名前にぴくっとするティナ。だが、それもリュートの背後に居たおかげで誰にも気づかれなかったようだった。

「そ、そうだね。分かった。じゃあ勇者様。よろしくお願いします」
「はい、分かりました。お預かりします」

そして、セリナは王子の下を離れる事となった。

皆が皆旅装に身を包み、これから長旅をするとはっきりと分かる格好である。今回、セリナが旅に出るのはヒロコと白夜を探す為。そして、二人から話を聞いてコージはどうなったのかを調べる為の旅なのである。だが、そんな事は事情を知らない勇者一行に明かせる訳も無いので、二人の捜索という事柄だけを勇者達に伝える。

一方、勇者一行は可愛い精霊ロコからのお願いもありかなりの事情を知っていた。勇者の武器を探す為の旅というのは、建前に過ぎず白夜の発見とコージの発見が目的となっていた。ロコから色々な話を聞く内に、セリナはコージにぞっこんだという話もたっぷり聞かされているのだが、こうやって間近で見れば見るほどセリナは柔らかい雰囲気を持つ美少女でプロポーションも隠しているようだが、抜群である。特にあの胸の大きさはどうなってるのかと、自分の胸と見比べてしまう程である。こんな美少女がそばにいれば、セリナの方に気が無くとも、リュートのほうがふらふらと惹かれてしまうのではないか？　という不安がレイシスとアルミナの両名にはあった。だって、歩くたびに揺れるんです。

そして、そんな二人を面白そうな目で見つつ大きめの袋を幸せそうに抱きしめているティナ。時折、袋を愛でるように頬ずりする様は、通行人の目を引くものであったが、本人はまったく気にしていない。むしろ、袋の方にしか気がいっていない程である。

「そうなんだ。二人はそんなにトラブルメーカー？　なんだ」

「えぇ。ヒロコはおいしいものに目がありませんから、気づけば屋台にひっかかってお金も払わずに通り過ぎたり、白夜といえば破壊する事が大好きな上に力も強いので、しょっちゅう周りの物を壊していたりしていました…」

あの二人にはほとほと手を焼いているんですと、はふぅとため息をつくセリナ。うつむき気味にため息をつく様は、憂いた瞳と相まってひどく色っぽい。髪をかきあげる仕草で首もともはっきり見えて、余計に見る者に劣情を抱かせる。だが、そんなセリナの言葉にティナの持つ袋が少し暴れた事にはティナしか気づいていなかった。

「という訳で、本当はミミも来れたら良かったんですが、ミミまでコージのもとを離れるのは危ないので今回は私だけ旅に出てきたのです」

「うん、あの子なら王子の傍にいても平気だしね。普通ならすぐに染まっちゃうからね。セリナもその結界はしなくても大丈夫だよ。僕の傍にいれば耐性がつく」

「…リュートさん？」

「うん、詳しい話はあとでね。すくなくともロバス内でする話じゃないし。ちょっとセリナにはしてもらいたい事があるんだ」

「してもらいたい、事ですか？」

先ほどからのリュートの台詞に、多少警戒心をあらわにするセリナ。自分たちの事情が勇者一行に分かる訳が無いと思っていたからだ。

「君の魔法。かなり凄い奴があるらしいじゃないか。それをね、すこしばかり使って貰いたい。だから、急いで町を出ないと駄目なんだ」

「そんなに緊張しないで、セリナ。これを見ればあなたも一発で理解するわ」

そう言って袋をぎゅっとするティナ。そんな風にされても何がなんだかまったく理解できない。

「…？　分かりました。とりあえず、急いで外へ行きましょうか」

悪いコージの息がかかってるのではないかという、疑念は持ったままロバスの外へと急ぐセリナ。これが罠だとしても、一矢報いて逃げるぐらいの実力はある。ひそかに魔道具や術式を準備しつつ、勇者一行の後についていく。

町の外へ出る為に、門へ向かう勇者一行。セリナはロバス内の通行許可証を持っているので、すぐに手続きは済んだのだが勇者達は、あの事件から初めて町の外に出るという事で、いろいろと煩雑な手続きが待ち構えていた。ちょっとげんなりしているリュートを慰めつつ、ようやく町の外へと出ることができた。

「もう少し、人気のない所へ行こう。何かあったら危ないし」
「リュート、そんな言い方したらセリナが驚くじゃない。先に見せるわよ」
「ちょっ！　待って待ってそこらへんもあるから、森の中へ入って言われたの忘れたの？」
「うるさいっ！　あたしが構いたいだけだ！」
「もう少し！　もう少しの我慢だから待って！」
「三秒だけ待つ！」
「先に行くねーーー！！！」

町の外へ出るや、リュートとティナはそんなやり取りをしつつ森の方へと駆け抜けて行った。勿論、ティナはリュートにお姫様抱っこの状態で運ばれている。警戒していたのだが、馬鹿みたいなこの状況に唖然とするセリナ。そして、残った二人に目を向けるが、すぐに後悔をする。

「ティナ…いつも興味が無いような顔をしていて、あのような手でリュートに抱っこして貰うとは…許せません」
「あ、あぁそうだ！　ティナはずるい！」

ただただ嫉妬に燃え狂う二人の少女。このような人物に表裏を期待するほどセリナも馬鹿ではなく、今までの警戒は杞憂に過ぎないのではないかと思い始めていた。

「追いかけましょうか」
「えぇ！　急いで行くわ！　でないと森の中でリュートが危ない！」
「そ、そんな破廉恥な事をっ！？　だ、駄目だ！　そんなの駄目だ！」

自分とミミも傍から見ればこのような感じだったのだろうかと、少し反省しつつ魔法の詠唱の準備をするセリナ。

「お二人とも、しっかり捕まってくださいね。急ぎますよ」
「え、あうっ。この感触はずるい！」
「ああっ！？　なんで？　なんで、こんなにあるっ！？」
「何をおっしゃってるか分かりませんが、行きます！　“炎よ炎よ！　我が身を助け我が意のままに天を駆け登れっ！　ツインジェット！”」

二人の脇を抱え飛行魔法でリュートを追いかけるセリナ。本当は歩いて行っても良かったのだが、二人があまりにも急いでいたのと、勇者の実力を測る為に魔法を使った。勇者リュート。やはり伊達に勇者と呼ばれている訳ではない。先ほども、人を一人抱えてあのような速さで駆け抜けていったのだから。

「きゃーーーーーっ！」
「はぎゃぁあああああぁあ！」

うるさい二人と共に勇者のもとへと急ぐセリナであった。

自由に羽ばたく為に

リュート達を追いかけた先は、木が生い茂る森の中であった。セリナ達が到着した時には、袋の中から一匹の可愛い黒豆柴が、外に出されティナに好き放題されていた。リュートはというと、全力疾走の影響か地面に大の字で横たわり、大きく息を吐いていた。それを見て慌てて駆け寄るレイシスとアルミナ。

「あーもうふっかふかで気持ちよくて小さくて可愛くて堪らないわねこれは！」

「…少しは僕を労わって、くれても…良いんじゃないかなぁ？」

息も絶え絶えにリュートが抗議するも、まったく気にしていないティナ。黒豆柴を可愛がる事に夢中で、レイシスとアルミナの非難のまなざしも全く意に介していなかった。もっとも、二人ともリュートの世話ができるので、この状況に否やはなかったのだが。

「えっと、何がどうなってるのでしょうか？」

置いてけぼりなのはセリナである。リュートに追いつけば何か分かるとは思ったが、今目新しい物といえばティナが抱きかかえている生き物だけであった。たぶん、今まで袋の中に隠してあったのだとは思うのだが、そんな風に隠しておく必要のある生き物とは思えなかった。

「け、結界を張ってるから、しゃべっても大丈夫だよロコ」

「あー、ちゃんと張っててくれてるんだね。さすが勇者！　セリナ、ボクはロコ！　セリナの知ってる名前で呼ばないでね。気づかれちゃうから！」

「え？　ロコ…？」
「分かりやすいでしょ？　一文字取っただけだし。で、この姿なんだけどマスターの故郷にいる動物でこっちには居ない動物なんだ。その方がマスターに気づいて貰いやすいでしょ？」
「えっと、その。少し状況を整理させて貰っていいです？」
いきなりそうまくし立てられても、あまりの事に状況を把握できずに混乱するセリナであった。ロコが語るには、コージは偽者と入れ替わりこの世界をめちゃめちゃにしようとしている事。コージは無事だけど、遠くに飛ばされてしまってどうなったか分からない事。セリナから白夜も居なくなったと聞いたけど、それは分からない事。
「で、偽者なんだけどかなり強いんだ。リュートならなんとか戦えるかも、だけど倒しきる事はできないんだ。それに王の印も持ってるから…」
どういうカラクリか、王の印まで持っている偽者。印を持っているなら本物じゃないのか？　という質問は当然のようにあったが、王の印の精霊であるロコには似て非なる何かという事は、はっきりと分かるとの事だった。
「それで、どうするんですか？」
「マスターをまず助ける。王の印は無くなったけど、偽者の身体に干渉できるのはマスターだけのはず。マスター一人だと無理だろうけど、みんなで力を合わせればなんとかなると思うんだ」
「じゃあ偽者を倒すのは、コージを助けてからという事ですね」
「うん。マスターを助けるのも勇者達にも手伝って貰うって事で話が決まってるっていう訳。何があるか分からないからね」
勇者一行に協力を求めるのは非常に心強いものがあるのだが、ティ

ナという少女の存在が非常に気になる。彼女は事ある毎に一方的にもぎ取っていった。何か見返りが無ければこの一行は動かないのではないのだろうか？

「うん、それはボクでなんとかなるから心配しないで…」

心なしか落ち込んだ口調でそう断言するロコ。何かの取引が彼女とあったようである。というか、今まさに可愛がられている現状で何があったか察することができるであろう。

セリナの二つ名クリムゾン。

その名を轟かしめたのは一つの魔法である。なぎ払い燃やし尽くす容赦の無い炎。魔力の続く限り放たれるそれは、敵は勿論の事、味方でさえもあまりの暴虐な力に恐れおののいた。

「そう、そのあたりを狙って全魔力を注ぎ込んでね。外れたら修正するからそのつもりで頑張って」

「はい、分かりました」

地面に横たわり空を見上げた姿勢で、魔法詠唱の準備を行うセリナ。そして、その傍らには空を指差し狙う方向を伝えるリュート。

「で、アルミナは幻術を維持しといてね」

「ん、わかった」

リュートの依頼にごく最小限の返事だけよこすアルミナ。その様子に満足げにうなづき返すと改めてセリナへと向き直る。

「じゃあ、始めてくれる？」

リュートの言葉に頷きかえし、練り上げた魔力を術式へと流し始めるセリナ。

「“炎の王よ！　汝の全てを滅ぼす炎を貸し与え給え！　クリムゾン！”」

セリナがかざした手に収束する力。赤からオレンジ、黄色、白へと色が変わると共に、セリナの手には半円状の薄く光る防護幕が展開される。

ッッッ！

一直線に空へ。

細く長い魔力の炎は、狙いたがわずリュートの指示した空へと吸い込まれていく。精霊を束ねる王への呼びかけを行う事で、可能となるクリムゾン。彼女以外にこの魔法を唱える事ができる者は居ない。

「これがクリムゾンの由来…」

凄まじい魔力の奔流を感じとり危うく幻術を解きかけるアルミナ。魔力を練り上げるのに時間が掛かるのはこれだけの破壊力を秘めた魔法であれば頷ける。しかも、継続時間が長い。唱える事ができさえすれば、誰も近寄ることなどできないであろう。

今回は空へと向けられた魔法であるが、これが地表へと向けられたなら大地は燃え、生き物は溶けさり、爆炎うずまく荒野と化すであろう。

「円を描いて。小さく、小さくだよ」

空を見上げるリュートの指示に従い、極々わずかにかざした手を動かす。

「ずれた。左に、そうそうその調子で、オッケーもういいよ」

「ふぅ…」

リュートのその声に魔法を中断し、ほっとため息をつくセリナ。維持していた時間としてはほんの十数秒ほどであったのだが、今回は距離が離れていた為にそれを維持する為の魔力が莫大な量であったのだ。さらにクリムゾンの影響で周囲の温度が上がり、セリナも汗ばんでいた。リュートだけはうだるような暑さの中平然とした顔で、満足気にうなづいていた。

「よし、これで簡単に追跡できなくなったって訳だね、ロコ」

「うん。マスターの衛星はあれだけだから、これで大丈夫だと思う。また作ったらまた壊せば良いし。だから、空もたまには警戒してねリュート」

今は袋から出されティナに抱きかかえられている黒豆柴のロコ。存在を吸収されそうになった時に、ほんの一部だけ分離する事で存在しているヒロコの分身である。

「でも、空になんかフレームが浮かんでるみたいだけど、あれは良いの？」

「それはまた別口だから、気にしないで良し！　とりあえず、ちょっとこの人どうにかして」

そうこの暑苦しい中であっても、汗だくになりながらロコを手放さずにいるティナ。そのせいでロコはへたばって舌を出して、だれきっていた。

「ティナ、それぐらいにしないと次は無いそうですよ？　ほら、ロコおいで」

「くっ、ちょっと今まで一緒にいたってだけで、仲良くして。うぅ…」

セリナの言葉に嬉しそうに、飛び移るロコ。そして、そんなロコの嬉しそうな様子に目を輝かせながらも、恨みがましい視線をセリナにぶつけているティナ。色々と忙しいようだ。

「で、これからどうするんです？　西へと言いますが、ハイローディスを超えた先なのでしょうか？」

「そこはボクにも分からない。でも、西のほうにマスターの反応があるのは間違いないの」

反応はあるのだが、そこから一向に動く気配が無いそうで、一体どういう状態にあるのかさっぱり分からないようだ。呼びかけをしようにも、現在の光司に印がついていないようで、呼びかけもできない状態なのだ。今は覚えている気配を頼りになんとか居場所を感じ取っているだけである。

「とりあえず、ロコはもう少し力を取り戻さない事にはどうしようもないからね。あんまり力を使いすぎると存在が消えてしまうよ？」

「はいはい、分かってるって。セリナ、もう少しリュートの傍に行

って」

セリナにそう言って自分から動く気は全く無い様子のロコ。セリナもロコの扱いを分かっているようで黙って従う。そうすると面白くないのは、レイシスとアルミナだ。見目麗しいリュートに優しげな雰囲気を持つ美少女のセリナ。二人がこうやって並んでいると、お似合いのカップルにしか見えない。

「むぅ…こんな強敵は初めてですね」

「え、わ、私は？」

困惑するアルミナをよそにセリナをじっと見続けるレイシス。ロコからどれだけ光司に対してとんでもない事をしてるかたっぷりと聞いているはずなのだが、目の前の状況を見た途端に、そんな事はすっかり吹き飛んでしまったようだ。

「では、少し休憩してから向かうとしますか。まずはヒューイックを目指してそこから国境を越えましょう」

「そういえば、セリナはそこら辺の出身だったよね？　なんだっけ…」

「タタ村です。コージと出会ったのもそこです」

「近いなら寄ってく？　それぐらいの時間はあるだろうし」

「いえいえ、大丈夫です。お気遣いありがとうございます。両親は既にいませんし、お世話になったジャンさんには、たまに携帯で話をしてるので大丈夫ですから」

「ん、そっか。じゃあ、そういう事で」

傍から見ると仲睦まじく見えなくも無いが、本人達は特に意識しては居なかった。

「なんでしょう、後から出てきたくせに何やら仲が良過ぎるのです」
「う、うん。あの二人は絵になるよな。で、私はライバルだよな？」

アルミナが涙目でそう問うも、目の前で繰り広げられる光景に目を奪われているせいで、まったく気づく事のないレイシス。恨みがましい目でセリナに抱っこされているロコを見やるティナ。本当は皆の視線を感じているリュートとセリナであったが、このまま無かった事にしたくなるほど妙な雰囲気だったせいで、無駄に話を長引かせてしまう。この勇者一行が仲良くしていくには、今しばらくの時間が掛かりそうであった。

動く王子、勇者のちから

グレイトエース近郊の貴族の屋敷。エディン家の別荘の一つである、この屋敷に一人の人物が訪れていた。特に伺いを立てた訳では無いようで、屋敷の人間は一様に警戒していた。

「今日は話があって来ただけで、何も喧嘩をしに来た訳じゃないよ。ここの主人に取り次いでくれないかな？　デリン＝エルミート＝ゲオルグに」

固く閉じられた門扉を軽々と吹き飛ばして、屋敷内に入ってきた少年。勿論、門の外で警備をしていた人間もいたのだが、誰もその少年を止める事はできなかった。

「コージ＝ヒロセが来たと言ってくれ。これでもこの国の王子だ」

少年は堂々とそう宣言した。その言葉に慌てて屋敷へと走る者、その言葉を信用せずに取り囲む者。どっちにしろ、これだけ派手に動けばここに居る人間に伝わるはずだ。十重二十重に取り囲む人を楽しげな様子で見渡し、屋敷の一角をふと見つめる。

「どうも、初めまして。こうして直接会うのは初めてですよね？あなたの甥のヒューイ殿には色々お世話になりましたが」

「なっ？！　何だ、何が起きた！？」

突如王子の前に現れた一人の人物は、急な事に驚き咄嗟に逃げようとする。

「おっと“逃げないでこっち向いて”下さいね、ゲオルグ殿。何も

取って食おうって訳じゃないんですから」

王子の言葉にぴたりと動きを止め、振り向くゲオルグ。その顔は未知なる出来事に対する恐怖がありありと浮かんでいた。だが、周りの警備の人間に気づくとなんとか虚勢をはり、王子に対して声を張り上げる。

「おまえは一体何者だ！　ここは貴族の屋敷でおまえのようなどこの者か知れない者が気軽に入ってきていい所じゃないぞ！　今なら見逃してやるから、とっとと出て行け！」

「ヒューイの継承権」

ゲオルグの怒声にもまるで怯む事無く、ぼそりとつぶやく王子。

「継承権がどうした。そんなものはエディン家の事でわしには何も関係は無い」

「そうですね。別にあなたが何を画策しようと、エディン家を変える事はできないのですよ。えぇ、絶対にね」

「何が言いたい！」

「ギガンテス、グレイトエース…あぁ可哀想にトロンは殺されましたか。あなたはつくづく分かり易い方ですね」

「ハワードッ！」

「おっと」

ゲオルグの一声で、王子の影から攻撃を仕掛けた者が居た。だが、不意をついたはずの一撃は一歩動くだけで、王子は仕掛けた人間を拘束してのけた。

「ハワードって言うんですね。変わった能力を持ってらっしゃる。なるほど。意外と使える人間には恩をすりこむんですね。ねぇ、ゲ

オルグさん僕の力はある程度分かったでしょ？　僕は最初にも言いましたけど、何も取って食おうって訳じゃない。むしろ、あなたにとって喜ばしい話を持ってきたんですよ」

「貴様、何が目的だ…？」

薄ら笑いをずっと貼り付けたままの王子に対し、不気味な力を感じたのかゲオルグは搾り出すような声でそう問いかけた。

「ヒューイをエディン家の党首にして上げましょう。その代わりといってはなんですが、あなた方には僕に協力して貰いたいのですよ」

「ヒューイを党首に…？　そんな事がおまえにできるのか？」

「えぇ勿論です。これを見ればいくら頭の回転が悪いあなたでも分かるでしょう？」

と言いつつ、胸をはだける王子。そして、その胸にはっきり浮かぶ王の印を見たゲオルグは驚愕している。

「ここまではっきり印が出ているとは…」

「あなた方が観察していた頃とは違うんですよ。貴族に対するアドバンテージは分かりますよね？」

「あ、ああ…だが、それなら最初から力を使えば、問題無かったのではないですか？」

「それじゃあ、面白くないですからね。仮にも協力を仰ぐのですから説得をしようと思っただけです」

「で、コージ王子。私は何をすれば宜しいので？」

はっきりと浮かび上がる印を前に恐縮するゲオルグ。もし印持つ者の不興を買えば、簡単に自分の命など吹き飛ぶ事は明白であるからである。そのような事態を避ける為に印が浮かび上がっていない内に、始末しようと考えていたのであるが、今となってはどうしよう

もない。

「その呼び方おかしいと思わないかい？」

「と、申しますと？」

「だって、王の印は僕にあるんだよ？　王子じゃなくて陛下と呼ばれないと駄目じゃないかな？　ね、ゲオルグもそう思うよね」

「はっ、仰る通りです」

「じゃあ、そう呼ばれる為に手伝ってくれるかい？」

「仰せのままに」

にやにやと笑う王子を前に否やと言える訳も無い。だが、こうやって声を掛けられたという事は王子が王になった暁には、おこぼれに預かれるはずである。それにあそこまではっきりと浮かび上がっていた王の印。ユージ王ですら、もっと小さな物であり貴族への影響力は無いとは言えないが、先ほど受けた強制力に比べれば暴風とそよ風ほどの差があった。

「そうやっていい子にしてれば、ヒューイの継承権もそうだけどいい目を見せて上げるから、ちゃんと付いておいでよ？　貴族が裏切ったら、一言で済むからね」

「裏切るなどとんでもない。陛下に永遠の忠誠を誓いましょう」

まだ王子という身分だが、これぐらいのおべんちゃらは許されるであろう。見れば王子もまんざらでも無さそうな顔でゲオルグを見下ろしていた。

ヒューイックの村を街道沿いに西へ進む勇者一行。リュートにべったりとくっつくレイシスとアルミナはともかくとして、セリナは顔を赤くしつつリュートから距離を取っている。
ティナはロコに釘付けだ。

このような状態になったのは、ヒューイックの村に着く前からである。衛星がある内は迂闊な事ができなかったリュートは、今までの生活を続けていた。だが、リュートの記憶が戻った事を知るレイシスとアルミナ達は日に日にそわそわとしだし、リュートを見つめる目が熱く潤んだものに変わっていった。ティナは相変わらずロコに夢中であったが。

日に日に過激に、リュートに積極的に迫る二人の様子に、少々引き気味なセリナは直接本人に問いだ出せずにリュートに原因を聞こうとした。だが、秋波を送る二人にとってそれは面白い事ではなく、我慢し続けてきたせいもあって爆発した。

「リュート！　記憶が戻ってるんですよね？　一年我慢してきたんですから、今晩あたりたっぷり可愛がって貰って良いですよね？ねっ！」
「あ、ず、ずるい！　勿論、私もっ！」
「あー…」

記憶が無い頃は清い関係でいたのだが、記憶が戻ったのであればもう我慢をする必要は無いと言わんばかりにリュートに詰め寄るレイシス。ついでに便乗するアルミナ。そんな二人の様子に、セリナがいるのにそういう事をいたすのはどうしたもんかと、少しだけ悩むリュート。でも、ちょっと離れてやればいっかと軽く結論を出してしまう。

「じゃあ、今日は二人ともまとめて可愛がってあげるからね。たまにはそういうのも良いでしょ？」
「え、一人ずつ順番にして貰う方が嬉しいけど…」
「う、うん。順番が良い…」
「そんな顔で言っても説得力ないからね。決まり。今晩はまとめて可愛がるからね。二人きりはまた今度」

リュートの言葉に恥じらいつつも、勝ち誇った視線をセリナに向けるのを忘れないレイシス。アルミナはすでに今晩の事に気がいってるのか、上の空である。

「で、ティナはど…」
「だまれ」
「はい、すいません」

この人達はそこまで進んでいるのかっ！？　と驚愕のあまり思わず勇者一行を不躾な視線で見渡してしまう。具体的な行為は知識でしか知らないセリナであるので、どのような事になるのかはまったく想像がつかないでいる。それにもしそうなった場合は、勿論コージにリードして貰いたいというせいもあって、積極的にスキンシップはするものの、最低限な知識しか持ち合わせて居なかった。

「えっと、五人でもできるんですか？」
「ぶほっ」

なので、思わず自分たちの環境と照らし合わせてそうリュートに聞いてしまったセリナを誰が責める事ができようか。

「い、いや。基本は二人だからね。それ以上は特殊だからね？」
「あっ、ご、ごめんなさい！」

律儀に答えてくれるリュートに、正気に戻り恥ずかしげに謝罪し慌てて距離を取る。ヒューイックの村に着くまでは野宿である。宿であれば、壁を隔てているし部屋が離れてしまえばあまり聞こえないと思うが、外であれば後々の為に情報収集ができるかも、と出歯亀根性丸出しで考えるセリナ。だが、それは間違いであったと気づくのは散々盗み見した後であった。

「ロコ、私はコージと添い遂げることができるのでしょうか…」
「セリナ、ボクは昨晩の出来事は参考にしないほうがいいと思うんだ」

少々顔を赤くしたまま、抱きかかえたロコにそう愚痴るセリナ。勇者は女性にとっても勇者であったようで、事が終わった後は二人ともぐったりと満足そうに気を失っていた。そんな二人をやさしく介抱していたリュートであるが、彼はまだまだ大丈夫そうな気配を漂わせており、後片付けにきたティナとも結局そのまま事におよび始めたのである。それ以上はもうさすがに、見ていられなくなったセリナはそそくさとその場を離れたのであった。

「で、でも、コージが望むならあのように振舞うのもやぶさかではありまえん！」
「セリナ、かんでる」

結局、その日以降しばらくの間セリナがリュートに近寄る事はできなかった。

日常を取り戻したい

日に日に侵食していく力。どうして、ここまでして巧妙かつ慎重に取り込んでいこうとするのだろうか？　きっと何か理由があるはず。一気に皆が居なくなった屋敷。今では世話をやく為にメイドさんや執事さんが居るようになり、なんだか知らない家に来ている気分にさせられる。

「ありがと、下がっていいよ」

今は食事中。メイド達にかしづかれ奉仕される事に慣れているような態度。昔よく見た光景だった。少し違うとすれば、コージ、ううん王子は少しだけ優しげな表情をするという事だろうか。もっとも、どす黒い何かがその表情の裏に隠れているのが見えてしまうのだが。

「コージ、もういいの？」

「うん、あんまりがっついても仕方ないからね。だけど、僕よりもミミの方が小食でしょ？」

笑顔なのに、今にも襲い掛かってきそうなそんな気配を漂わせながら王子は静かに聞いてきた。逃げ出したくなるのをぐっと堪えていつもどおりに答えを返す。

「女の子には色々あるんですぅ～！　油断してるとすぐに増えるんだからね」

「そう？　女の子らしい所がちゃんと増えてるように見えるけど？」

「見えない所が大変な事になるのっ！　コージの意地悪っ！」

そういって、ぷいっと目を逸らす。いやな視線が身体中を這い回る

けど、なんとか堪える。少しでも気取られると、きっとミミはミミで無くなってしまうだろう。

「ごめんごめん。じゃあ、僕は部屋に戻るけどミミはどうする？」

「うん、お風呂入ってから戻る…と言いたいけど今日はお風呂入れないから、部屋で大人しく寝てるね」

「そう、分かった」

一瞬、不思議そうな顔をしたけど結局突っ込んで来ずに王子はそのまま部屋へと戻っていった。これがコージだったら、一緒にお風呂に入る？　って誘う所だけど、王子の場合は本当に入ってきて何をされるか分かんないから迂闊な事は言えない。スキンシップはそのまま頑張ってるけど、少しずつ減らしていっている。

ミミもとぼとぼと部屋へ戻ろうとすると、執事さんが静かにこちらの気配を伺っているのが分かる。力に侵食されていても仕事に忠実なんだねぇ。あれ？　むしろ侵食されてるから忠実なのかな？　ミミを片時も目を離さずに見張ってる感じだもんね。一応、何か用事があったら呼ぶんだけど、ちゃんとしてくれるから問題は無いんだけど、心の休まる暇が本当に無い。だけど、コージがくれた指輪。あれがミミを手助けしてくれている。この指輪からも力が出ているんだけど、それはミミを護ろうとする力だ。王子の力に対しては効果が無かったんだけど、普通に攻撃魔法や物理攻撃とかのミミを害そうとする物に対しては、きっちり護ってくれる代物だ。

“ちょっと試してみよっか”

部屋に戻り、屋敷に漂う王子の力の残滓を掴み取る。これって本当になんなんだろう？　ごく少量のそれをつまみ、指輪に近づけて見る。

“これ、分かる？　これもミミに近づけないようにしてくれると嬉しいな”

指輪に向かって声に出さずに語りかけて見る。あんまり普通じゃないのは自覚してるんだけど、コージがくれたものは何かこっちの言う事ぐらい分かってくれそうな気がする。特段、指輪が光ったりはしなかったけど指で摘んでいた力はふいに揺らいだかと思うと、ミミから離されていった。

“ふふっ、やっぱりだ。賢いねぇ。でも近づけないのは寝てる時だけで良いからね？　うん、あんまり無理しないでね”

そういうと王子の力の残滓がミミの近くまで漂うようになってきた。忠実に言った事を守ってくれているようだ。ほんと賢いなぁ。迂闊に普段から力を発揮してもらうと、王子の目についてしまいそうだからねぇ。部屋でもひとり言を呟いたら、筒抜けになりそうだから、ひとり言も注意しないといけない。

「セリナ、ヒロコと白夜見つけたかなぁ…」

コージと一緒に生活してきた三人のお姉さんとも言える存在に心をはせる。年はミミの方が上…って言い切るには難しい所だけども、何かと面倒見のいいお姉さん達。今まで、コージを取り合って喧嘩したり、晩御飯のおかずを取り合って叱られたり、一緒に裁縫してみたり、学園の帰り道に女を磨く修行をしたり、買い物に行ったり…　色々な、色々な事をした。

出会ったのはごく最近。会ってから一年半、程だろうか？　もっと昔から一緒にいたような錯覚しちゃうけど、ミミは売られるまでは

あの屋敷に居たんだよね。屋敷に居た頃は今なら分かるんだけど、半分死んだみたいに魂が抜けかけてたと思う。だから、夢の出来事のように思ってしまい、自分の中で切り離されてしまっている。

大丈夫。今も辛いのは辛いけどあの頃と違って、ミミにはもう大事な人たちが居る。だから、絶対に負けてやるもんか。最近、王子が一人で出かけたりして色々としてるみたいだけど、どうも貴族と会っているようだ。ミミに隠れてそんな事をしても、貴族の力は独特の物だから、気づかない訳が無い。そして、王子から漏れ出すもう一つの力。それは王の印の力。貴族を従える為の絶対的な力が、以前と違って凄く強まっている。

セリナ達が帰ってくるまでの我慢。

きっと、コージも連れて帰ってきてくれるはず。それが今のミミの唯一の拠り所だった。

「お嬢ちゃん達、大人しくしてもらおうか」

ヒューイックを抜け、ハイローディスを目指して旅を続ける私達の前に山賊さん達が現れました。そういえば、コージと旅を始めた時もヒューイックの近くで盗賊さんに襲われましたねぇ。懐かしいです。でも、コージを探している今は正直邪魔でしかありません。

「え、それって僕も言われてる？」

そうですよね、リュートさんは誰がどう見ても立派なイケメン？
ですもんねぇ。コージは背もそんなに高くないですし、可愛らしいから間違われてもおかしくなかったんですけども…

「あぁ、俺はお前が特に好みだ。性別とかは気にしない」
「おいおい」

隠すことなく堂々としたカミングアウトです。ヒゲがもさもさしてる男臭い人がうっとりとリュートを見つめてそう言いました。最初何を言ってるか分かりませんでした。山賊の仲間も同意とばかりに、しきりに頷いている人間が結構居ます。これ、女としては男性に魅力で負けてると言われてるも同然なので、ちょっと悔しいです。別にこの人達に言い寄られたい訳ではありませんが。

「な、悪いようにはせんから、大人しく捕まっとけ？　な？」
「いやぁ…それは勘弁して欲しいなぁ…」

山賊さんは見えてるだけでも、十名は居ます。意外にも魔法を使う人もいるようです。森の奥には当然のように弓を持った人が隠れているようですし、なかなかに大きな集団のようです。やっぱり国境付近とか田舎にはこういう方が住みやすいんでしょう。

「なら力づくで行くしかないが、本当に良いんだな？　痛い目に合わせたく無いんだ」
「そういう事はまっとうに働いて、恋人にでも言いなよ」
「じゃあ、リュートはあたしに言ってくれるよね？」
「い、いやそこは私だろう」
「うるせぇっ！　そいつから離れろこのくそ女どもっ！　穢れるっ！」
「なんですってぇっ！」

「なにぃっ!?　おかしいのか、私はどこかおかしいのかっ?!」

ぎゃいぎゃいと騒ぎ始めましたけど、ここは先制しちゃって良い所ですよね。せっかくですから、ちょっと試してみましょうか。うん。

「“炎よ、踊れ！　バーン！”」

呪文の短い初歩魔法。ファイアより小さな火がぽっと灯ります。敵に向かって飛んでいったりはしませんが、思った所に火を出せます。あら、注目を集めてしまってますね。

「なぁ、そこの嬢ちゃん。そんな初歩の魔法で何をしようってんだ？　こっちにゃ魔法使いも居るんだ。そんな魔法じゃちっとも驚かねぇよ。ちなみに俺はおまえが好みだ」

ぎゃいぎゃいと山賊のリーダーらしき人がリュート達とやり合ってるので、代わりなんでしょうか。ヒゲの生えたぴっかりと頭の光る山賊さんが私に話しかけてきました。正確には私の胸に向かって話しかけてます。すけべ。

「はい、これ初歩の魔法なんですけど炎は炎なんです。だから凄いんですよ」

「はぁ？」

意味が分からないという顔で、周囲の山賊さんに同意を得るように見渡す。なにやら意見が一致したようで、私をおかしな子を見るような目で見つめてきました。胸をですけど。

「まぁ、いいや。ちぃとばかりオツムがゆるくても、あそこの具合さえ良けりゃ何も問題は無いってもんだ。じゃあ、ちょっと痛いけ

ど我慢しろよ」

そういって、私に近づいて来ようとするぴっかりさん。はい、駄目でーす。視線にて狙いを定めて、魔力を放出します。連続でしまくります。

「あっちゃぁあああああぁあっっ！」

「あ、あちぃあちぃ！？」

とりあえず、目に見える山賊さん達には燃えて頂きました。勿論、ちょっと遠くにいた魔法使いさんも燃えてます。うん、意外と良いですねこれは。私の唱えたのは初歩の魔法。特に攻撃魔法という訳ではないのですが、炎は炎です。触れば熱いですし、木でも燃えます。指先にぽっと灯る程度の大きさですが、さすがに全身にくまなく灯されてしまっては普通じゃ居られなかったようです。あ、背中には灯してないから全身じゃないか。

ヒュカッ！　カカカカッ！

はい、矢が飛んできます。ですけど、コージに護られてる私に届く事はありません。リュートさんは矢が到達するより先に叩き落してますし。援護の必要はまったくありませんね。そして、矢の飛んできた方向に山賊さんを見つけ燃やしてあげます。見つけさえすれば燃やせますから、見敵必殺という奴です。

ごろごろと転がりまわって火を消そうと必死に山賊さん達は動いてますが、消えた端からちゃんと火をつけて上げましょう。いやらしい目で見た罰です。私はコージの物なんですからねっ。

「セ、セリナ？　そこら辺でもう良いんじゃない？」

「あら？　でも、さっきそこの山賊さんなんかはロコを蹴り飛ばそうとしましたよ？」

私の言葉に無言で、指差した山賊になにやら突き刺すティナさん。うん、私の邪魔をする人はもう居ませんね？　ん、よろしい。リュートさん達が身を寄せ合っていますが、それは些細な事です。レイシスさんとアルミナさんは、リュートさんに体をこすりつけてるようですし、ああいうプレイなのでしょう。私リュートさん達のおかげで少し男女の事が分かるようになりました、はい。コージともきっとばっちりです。さぁ、こんな山賊さん達は放っておいて、早く行きましょう。わざと残ってくれたミミの為にも早くコージを見つけて帰りたいんですから…

東奔西走

ロバス。

バルトス国のフレーム生産の八割ほどを担う重要拠点である。現在はそれに加え、魔石獣の数を減らすという国情を安定させる意味合いも多く含まれるようになった。ティンラドールの魔石獣を呼び寄せる音は、この国でしか利用する事ができていない。他国がこのシステムを利用しようとしても、何故かうまく行かないのだ。

そして件のティンラドールにて、現在フレーム増産の通達が届いていた。

「反対です。この案にあるフレームをこれだけの数、増産するとなれば全ての職人に協力を仰ぐ必要がありますし、時間も足りません。品質も保証できかねます」

現在、フレーム増産に対する会議中である。王宮からの通達であるとはいえ、全てが飲めるわけではない。今まで、王宮に納入するフレーム生産に関しては、ある程度自分たちの利益を守りながらできる事の妥協点を探って決定していた。だが、今回は異例で一方的にこのように通達してきたのである。

「ここには、他国との戦争の他にも魔石獣が今後大量発生する可能性があると書かれてある。ならば、我々はこの条件を飲むしかないのではないか？」

「馬鹿なっ！　大量発生は五年前にあった所ではないか、戯言を。それに戦争に使うというならば、尚の事下手な物を作る事などできん。この期間でやれというのは事を性急に運びすぎる」

人気のフレームの生産を行うブロック、マニア受けするフレームの生産が主なブロック。やはり、売り上げの違いで意見もだいぶ異なってくるようで、先ほどから結局話はまとまらずに、賛成派はやきもきしていた。

「それにだ。大量にフレームを作った所で、ライダーはどうする。にわか作りのフレームに、にわか造りのライダーで戦争をするなど、笑い話にもならんぞ」

「ライダーに関しては冒険者学園で、フレーム科を作る方向ですでに動いておる。それにトレースモードであれば、ある程度の実力を備えた者であれば対応できる」

「その実力を持った者をどこから引っ張ってくるのかね？　冒険者か？　彼らを戦争の為に傭兵にできるとでも？」

「金次第で、依頼できるはずだ。冒険者学園の成績優秀な者をひっぱる事もできるだろうし、市井にも優秀な者はいる」

それを聞いて、やれやれとため息をつく反対派の男。

「ふむ。そうですな、冒険者学園から成績の優秀な者や市井にも確かに、「酔いどれ」や「ピンクタイフーン」などが居るのは聞いてます」

「そうだ。探せば他にもゴロゴロしているはずだ。ロバスはフレームの為の都市だからな」

「で、それを雇い入れるお金はいずこから？　フレームの増産でただでさえ、素材の調達や加工、人件費に搬送費など莫大な金が掛かるというのに、さらに金を掛けるというわけですか？」

「ぐ、そ、それは…王宮からの通達だから、何か案があるはずだ。そう、これは王宮からの通達で我々が拒否できるものでは、そもそも無いではないか」

「今までの慣例を無視したこのような通達には、正直疑問だ。現在、グレイトエースでは、貴族の長子が暗殺されるという事件が勃発した後なのだ。補償問題もあるだろうに、何故いまこのタイミングで一方的にこのような通達があるのかが、そもそも疑問とは思わないのかね」

そうやって、議場を見渡す反対派の男。反対派も別に売り上げに響くというだけで、反対をしている訳ではないようだった。

「その件で王が動けないという理由で、今回このような一方的な通達になったのであろう？　それに、慣例を無視されたとは言うが、今までが王の寛恕にすがっていただけで、本来はこのように通達された事に従うのが我々の義務であろう」

反対派の意見に、そういって誤魔化す賛成派の男。王宮からの通達というのは流れを掴むには絶好の材料と考えたようだ。

「本来の王と臣民の関係に戻っただけと言うのかね」

「そうだ、何もおかしい事はあるまい」

それが本当だと言うのなら、貴族に対する王の態度は有り得ない。王にとって貴族は従える者であり、廃止してしまう者達ではない。

「こんにちは。少し失礼しますよ、みなさん」

反対派が反論しようとしたその時、議場の扉が大きく開き一人の少年。いや、王子が挨拶をしながら入ってきた。

「たぶん、こういう事になってるんじゃないかなって思って、補足説明にきました。説明させて貰っても宜しいでしょうか？」

小柄な少年ではあるが、さすがは王子という事であろうか。このようにロバス内での実力者が集まる場でも緊張する事無く言葉をつむぎ、皆の注目を引きつける。そして、皆の注目が集まった所で、扉を音を立てて閉める王子。

バタンッ！

ただ、扉を閉めただけだというのにその場に居た者は、何故か檻の中に放り込まれたような気分になってしまった。だが、それが事実だという事に気づく者は誰も居なかった。

「んー…？」

人目の無い所では、セリナのツインジェットで飛んで時間を稼いでいたのだが、ロコの様子がどうもおかしい。西へ向かってまっすぐ進んでいるのだが、しきりに首を振りつつ何かを確認するかのように鼻をスンスンと鳴らしたり、ぐるぐると尻尾を追いかけたりしている。

「きゃーぅ…あっ、みゃっ、はうぅぅぅぅ」

そんなロコを見て奇声を上げているのは勿論ティナである。クールな毒舌がうりの彼女はどこかに行ってしまっている。さすがに他の面子は慣れてきたようだが、この崩れっぷりにどこか納得いかない雰囲気があるのもまた確かであった。

「ロコ？　どうしたんですか、さっきから。ティナさんがおかしくなってるじゃないですか」

失礼なことを平然というセリナ。だが、誰もその言葉に異を唱えない。むしろ、しきりに頷くばかりである。

「うん…なんかね、空を飛んでるとマスターの場所が別の所にある感じがするんだ」

「西ではないという事ですか？」

「西なんだけど、上？」

そう言って空を見上げるロコ。上と言われても、見上げた先には空しかない。

「どういう事です？」

「ボクが聞きたいよぉ。一応、西のほうなんだけど角度が上なんだ。ぎゅーんと上」

「空の王の縄張りが近いせいで、何か分からなくなってるとかじゃない？」

「古代竜の力が何か干渉してるって事です？」

リュートの言葉にふむ、と考え込むセリナ。確かにこうやってツインジェットで飛んでいる（ちなみにイカダのようなものに乗って飛んでます）と遠くに竜が警戒するように飛んでいるのを見かける。バルトス国とハイローディス国の国境にまたがる山脈の南の方にある空の王、古代竜の縄張り。現在飛んでいる地点からは、西ではあるが少し南へ進まないと駄目である。

「で、どうする？　空の王の縄張りに居るなら尚の事早く行かない

とまずいんじゃないかな？」
「そう、ですね。コージが戻ってこないのも、ひょっとすると捕まってるせいかもしれませんし」

コージがいつも通りの状態であるならば、すぐにでも戻ってきてくれるはず。もしくは何らかの手段で安否を教えてくれるはずなのだ。セリナは偽者に騙されていたせいもあり、何も疑問に思わなかったが、今ならこの状態はおかしいと分かる。一番心配したのは、すでに死亡している事だったが、それについてはロコがきっぱり否定してくれたので安心していた。とにかく、生きてさえ居ればそれで良いのだから。

「では少し飛ばして行きます！　皆さんしっかり捕まってて下さいよ！！！」

ちなみにレイシスは、高い所が苦手なようでぎゅっと目をつぶってリュートに抱きついている。アルミナは別に平気だが、レイシスが抱きついているので同じように抱きついている。そして、ティナはロコにおいでと言わんばかりに両手をひろげるも、ロコはそ知らぬ顔でセリナの足元に挟まる。

そして加速する空飛ぶイカダ。地面を歩く人は、空を見上げる事は少なく幸いにしてその姿を見られる事は無かったのだが、空を飛ぶ竜にとっては警戒すべき対象としてその目に捉えられていた。

アーン

時間は少しさかのぼる。

ゲオルグの協力を受け入れた王子は、ゲオルグに一人の人物に会って貰いたいと言われ、ゲオルグの別荘の一つであるグレイトエース近郊の屋敷に来ていた。そこはギガンテスが隠蔽されていた屋敷である。

「ここに誰が居るんだい？」

「私も色々と研究していまして、その一つに貴族の力の解明というものがありまして」

そういって勿体ぶった口調で王子に答えるゲオルグ。

「へぇ…、ヒューイの事を愛してるんだねぇ」

「えぇ。あやつほど貴族らしい貴族はいませんから」

半ば揶揄するような王子の声にも、よどむ事無く答えるゲオルグ。彼の悲願はヒューイがエディン家を継ぎ、ゲオルグの憧れる昔の貴族の姿をその目で見る事である。その為に財を成し、全てヒューイに注いできた。

屋敷の地下へと続く道を王子を伴って、下っていく。地下格納庫とは違うその道は、貴族の研究を行っている部屋へと続いている。基本的に転移魔法による進入を阻むために、貴族であっても、屋敷内の移動は徒歩によるものとなっており、今も螺旋階段を靴音を響かせながら下りている。

「こちらです、陛下」

がちゃりと鍵を開けて、扉を開き王子を中へと誘う。一緒に中へ入り、再度鍵をかける。手慣れたその動作から、この部屋は常に鍵を閉めて人の出入りを制限している場所のようだ。

「おや、ゲオルグ殿。また、素材を持ってきて下さったのです？今回は本当に大量の材料を持ってきてくださいますねぇ」

少し血生臭い匂いが漂う部屋の中。棚や機材が多く立ち並ぶその向こうから、楽しげな声が聞こえてきた。どうやら、部屋の奥でなにやら作業をしているようであった。

「今日は残念ながらそうではない。大事な御方を連れてきたのだ、粗相のないようにな。陛下、こちらがティリス＝ブラウンシェット。貴族の血を研究している者です」

言われて部屋の奥でなにやら作業をしていた人物は、立ち上がり王子の傍へと歩み寄ってきた。ひょこひょこと歩く所を見ると、すこし足が悪いようだ。少し後退した頭髪につぶらな瞳の小柄な体格の中年男性である。

「そう。そういえば、党首でもないのにヒューイは力を使ってましたっけ。そうですかこの人があれを実現したんですか」

「あっはっはっは、そうなんですよ、あれ、私の作品なのですよ、陛下。なんとか実現できたんですけど、一つ作るのにえらくお金が掛かってしまいましてね。今はもっと安くもっと強く力を引き出せるように改良してる所ですよ」

貴族であるゲオルグが大事なお客と言ったにもかかわらず、軽い態

度を変えないブラウンシェット。どうも、自分の研究にしか興味がない人物のようだ。

「で、なんだか凄い事になってるみたいだけど、これ考えたのあなたなんですか？」

部屋の向こうのガラス越しの研究施設を見ながら王子は、楽しげに問いかける。

「えぇ。苦労しましたよ、最初は。材料がないもんですから自分の血を抜いて集めては確かめる毎日で、頭もろくに回らないまま研究を続けてましたからね。ゲオルグ殿のおかげで今じゃ、もう材料に事欠きませんし種類まで増やしてくれる有様です。もう、毎日研究が楽しくて仕方ないんです、あっはっはっは」

「愉快な人ですねぇ、ゲオルグ」

「おい、ブラウンシェット！　失礼のないようにと言っておるだろうが！」

「いやいや、責めてるわけではありませんよゲオルグ。本当に愉快な気持ちになってるのですよ」

ガラス越しに見える研究。それは真っ当な人間であれば考えても実行はしないであろう所業であった。だが、王子はそれをみて怯むどころか嬉しくて堪らないような顔であった。

「いやいやすみません、礼儀を知らないものでそう言って頂けると助かりますね」

「ですが、よくここまで調べあげた物ですね」

「さっきも言いましたが大変でしたよ。調べて調べて、ようやく血の力が使える原因を掴めましたからねぇ。おかげで、何故貴族は王に逆らえず、平民は貴族に逆らえないかも良く分かりました」

「そこまで知ってるんですか。それがどういう意味を持つか分かりますか？」

「いやぁ、王にこの事を知ってると知られれば命を狙われるかもしれませんねぇ。といいますか、あなたも既にご存知なんですね、危ないですから黙ってた方が良いですよ？」

なにやら意味ありげに言葉を交わす二人にはらはらしながらも怪訝そうな表情をするゲオルグ。

「一体、どういう事でしょうか…？」

「いや、ブラウンシェットは賢明な人だなって理解できたって事です。ブラウンシェットさん、悪いですけどあなたの知ってるその事は喋れない様にさせて貰いますよ。殺せば簡単なんですが、まぁあなたの賢明さに免じてこれで手を打ちましょう」

そういうとブラウンシェットに手をかざす王子。何かは分からないが、特に興味がないのかされるがままになっているブラウンシェット。特に痛みも感じる事は無かったようでブラウンシェットが暴れる間も無く、すぐに手を下ろす王子。

「で、申し遅れましたねブラウンシェット。僕はコー…いや、もういいか。僕はアーン。王の印を持つ者だ」

「あれ？　王の印を持つ…？」

アーンの自己紹介にさすがのブラウンシェットも気づいたようだ。今まさに生命の危機があったという事を。

「そういう事、僕が王だよブラウンシェット。今は勇司王がこの国を治めているけど、印は僕にあるんだから、王になるのが当然だよね」

「そ、そうですね、そうだと思いますよっ」

声は裏返ってはいるが、口調は特に変わらないブラウンシェット。本当に駄目なようだ。

「あとブラウンシェットの研究に僕も手助けできると思うよ。素材にしてもすぐに調達してきてあげるし」

「それはありがたいです。これで私のような貴族の三男坊でも力が使えるようになるんですね」

「あ、それはできるけどできた物を渡す人間は制限するよ」

「なるほど、そう言えばそうですね。使える人間が増えすぎても問題ありますね。ならば引き出せる力を今以上にする方向を考えた方が良いですね」

「うん、当面はそれでいいよ。いう事を聞かない頭首を倒せば渡せる人間も増やせるから、君は引き出せる力を今以上にしておいて。あとゲオルグ、無用な詮索はするなよ。まぁ、知った所で何かできる訳じゃないが、うっとうしいからな」

「は、はい重々承知しております、陛下」

ブラウンシェットとアーンの会話についていけずに、おろおろしていたゲオルグはアーンに釘を刺されてびくりと体を震わせつつ返事をした。コージではなく急にアーンと名乗った事もあり、何がどうなってるか色々考えを巡らせていたが、この威圧感を前に今はそうすべき時ではないと改めて感じた。

「まぁ、良い人材に会わせてくれて感謝してるからそんなに畏まらなくてもいいよゲオルグ」

「は、もったいないお言葉ありがとうございます」

この力に恐怖を感じることもあるが、味方であると知っていればこ

れほど心地よい威圧感はない。無心に。ヒューイの為に生きてきた時の様に、このアーンにただひたすら無心に仕える事が結局ヒューイの為になると考え、ゲオルグはアーンに忠誠を心に誓った。

アナ

何があっても、どうとでもなると思っていた。

薄い膜が張ったような感じで世界を見ていたというのが、今となっては凄く分かる。分かった気がしていたのは、結局は気のせいで僕は何も理解できていなかった。何か問題が起きれば、すぐに力を使いたくなったのも印の力の影響だったようだ。王の印が無くなり新たに浮き上がった印。

義手となった右手で浮かび上がった印をそっと撫でる。

今までの印と違って、ヒロコのような精霊が出てくる訳でも力を使えとささやいてくる訳でもない。とはいえ無制限になんでもできる力ではなく、大きな力を使おうとすれば、それなりの代償を伴う。だから今まで鍛えてきた力は役に立つ。

この世界はおかしい。

平民は貴族に逆らえず、貴族は王に逆らえない。それは、権力云々の問題ではなく魂に、血に刻まれてしまっている何かなのだ。そんなのは絶対おかしい。

偶然、この隠れ里に飛んできてそれが良く分かった。ここには、王も貴族も平民も居ない。そんなごく当たり前な、でもこの世界に来てからは見かけなかった世界が広がっていた。

「あ、起きてちゃ駄目だろ。まだ、安静にしてなって。心配なのは分かるけどそれで体を壊してちゃ元も子もないだろ。魔法だって万

能じゃないんだぞ」

光司が身体を起こして考え事をしていると、開いている扉から、青い髪の少女が心配そうに声を掛けてきた。

「でもいつまでも寝てられないよ、アナ。ここに来てからだいぶ経つし、ちょっとずつ身体に慣れておかないと、いざって時に困るし」

「そんな事言って、またこないだみたいな無茶すんじゃないぞ？怪我人だってのに、あんな召喚魔法まがいな事をした時は肝を冷やしたぞ。あー思い出したら腹立ってきた」

そう言って頬を膨らませるアナ。そして、反省を促す為なのか顔を近づけて、おでこでごつんと軽く押す。

「この子にも心配かけちゃったし、早く回収しないと危なかったんだ」

アナにおでこを押された光司は、傍らに置いた細長い箱を大事そうにそっと撫でていた。

「だったら、俺に言えば良いだろ。そうやって一人でなんでもしようとするのは光司の悪い癖だ。もっと頼れ」

「ありがと」

アナの言葉に思い当たる節があったのか、素直に礼を言う光司。謝るよりも礼を言ったのはこれからは頼るようにするという意思表示であろう。

「わっ、わかれば良いんだ。光司には胸を貸し借りする仲なんだから遠慮すんなよ」

「えっと、貸したのは良いんだけど、借りたのはできれば誰にも言わないで欲しいなぁ…」
「当たり前だ、これは光司と俺だけの秘密だ！　誰にも教えてやらん！　リズにだって教えてないからな」
「そっか。ありがとう、内緒にしてくれて。なんというか、仕方ないとは言えあんな風に泣いちゃったのはやっぱり恥ずかしいから…」
そうやってその時の事を思い出したのか、顔を赤らめる光司。そんな様子の光司を見て、うれしそうにはにかむアナ。
「でも、それ本当に良かったのか？　時間を掛ければお前の印の力でどうにかなったんじゃなかったのか？」
「僕、馬鹿だからね。こうやって目に見えて分かる形じゃないとすぐに忘れちゃうんだ。これは戒めだよ。だけど、自虐的になってる訳じゃないから心配しなくても良いよ」
右手を見つめながら、うつむき加減でそう呟く光司を見ると、やはりどこか自虐的に見えてしまうようで、アナはそんな光司が心配になった。
「アナ？」
「貸してやる。だから、そんな顔すんな。暗い顔をしてたら、不幸が寄ってくるぞ。なるべく笑顔で居ろ」
「ん」
最初は気恥ずかしさから、身じろぎしていた光司だが優しく包まれてそう言われ、大人しくされるがままになっていた。
「ありゃ。なんかお客さんが来たみたいだ。いつものとはちょっと毛色が違うみたいだけど、だいぶ前からこっちにまっすぐ来てるみ

たいだ。ちょっと行って来るから大人しくしとけよ、光司」
「分かった。アナこそ無茶しないでよ、リズにまたからかわれるよ」
「問題ない！」

そして、アナは風のように出て行った。

空飛ぶイカダで、光司の探索を続ける勇者一行。魔法で空を飛んでいるとはいえ、イカダには五人と一匹が乗っているので、ゆっくりとした速度で進んでいた。

「また、見られてるね。空の王の縄張りに近くなるほど、警戒されてるねやっぱり」
「攻撃してこないだけ、まだマシよ。こっちも空の王と戦いたい訳じゃないから、これ以上刺激しないようにしないとね」

リュートとティナは、こちらを警戒して飛んでいる竜を見ながらそう話し合う。戦って勝てない相手ではないが、光司を探している途中で無駄な事をしたくないのが本音である。

「ロコ、やっぱりコージは空に浮いてるのですよね？」
「うん、地面じゃないね。このままっすぐの方向に居る感じがするもん」

道さえあるのであれば、竜達に警戒されないように道を進めばいいのだが、この辺りは森林地帯で道があるといっても、獣道のようなものばかりである。その上まがりくねっているのもあり、急いでい

るセリナにとってはできれば進みたくない所であった。

「何か見えませんか？　かなり大きなものがこっちに来てます」
「ひょっとして、来ちゃったのかな？」
「うん、で、でかいぞ！」

これから向かう先の方角から、大きな青い影がこちらへ向かってきてるのが見える。空の王の縄張りで巨大な青い影といえば、疑う事無く空の王、その竜であろう。

“俺様の縄張りに何の用だ、人間よ”

空飛ぶイカダの進路に立ち塞がる巨大な蒼き竜。古代より生き永らえてきたその巨体はいまだ衰える事なく、優美に空を舞いその力強い存在感は空の王の名に相応しいものである。

「初めまして、僕は勇者をやってるリュートと申します。今、探し物をしていましてこちらの方まで来てしまった次第です」

セリナが口を開こうとした瞬間、リュートに手で制され、その間に自己紹介をすませるリュート。

“探し物か。よもや竜を狩ろうとしているのではあるまいな？“
「まさか。竜を狩る意味もありませんし、そんな事を頼む人間も居ないでしょう」

現在、空の王の縄張りには様々な種類の竜が身を寄せ合っているのも事実で、それを狙って密漁を企てる輩も居るには居るが、もっとこっそりとしているであろう。

“では、早々に帰れ。ここは俺様の縄張りだからな。魔石獣も暇があれば飛んでくるからここは危ないんだ、安全なうちに帰れ”

縄張りを荒らした事を怒ってる訳ではなく、どうやら心配してくれているようだ。

「ご心配ありがとうございます。ですが、探し物があちらの方向にあるというのは分かってるんです。どうしても探し出したいので、ここを通らせて貰いませんか」

リュートはそうやって、あくまで下手に出て交渉する。交渉で探索できるようになるならそれに越したことは無いからだ。さすがのリュートもこんな巨大な竜と戦うのは、少し遠慮したいようだ。

“ふむ。お前たちが探しているのはどういう物だ？　俺様が見つけてきてやろう”

「その、人を探しているんです。黒目黒髪の少年です。何か知りませんか？」

我慢できずにセリナが声を掛ける。そして、その言葉に竜は過激に反応した。

“お前達、光司を狙ってやってきた刺客かっ！　あいつは渡さねぇぞ！”

「えっ！　違います、助けに来たんですっ！！！」

“問答無用！　今、王の印の力が拡がってる中、まともな人間が居るものか！　それに良く見ればそこの奴は王の印の精霊じゃねぇかっ！”

「おーっと、これ戦わないと駄目かなぁ？」

「のんびりしてんじゃないわよ、リュート！」

「ちょーっと現実逃避をね、したくなっちゃっただけだよ。分かってる」

猛々しい咆哮を上げる空の王を前に、そんなやり取りをするリュートとティナ。だがそれは、強敵を前に緊張をほぐす為の儀式のようなものだった。

「いくよ「グッドラック」。教えて貰った力、有効に使わせて貰うからね」

リュートの言葉にご随意に、と言わんばかりに腕輪が光った。

意気投合

オーロ＝ペリカンの娘、サラ。その家に現在隣国のハイローディスの姫が滞在している。

当初、隣国の姫と言う事も手伝ってぎこちない応対となっていたのであるが、同じ年頃の娘という事も手伝って、打ち解けていくのにそう時間はかからなかった。最初の内は二人とも猫を被って「おほほほほ」などと笑いあっていたのだが、サラが自室に招待した時に光司が忘れていった模型を見られた瞬間、化けの皮がごっそりはがれた。

話の途中で視線が一点に釘付けになって動かないリリノア。その視線の先を追って固まるサラ。自分の趣味が一般的ではないと承知しているので、これはやばいと冷や汗が流れだしどう言い訳しようかと思っていた所、リリノアがフレームについて矢継ぎ早に語りだした。最初は意味がわからずポカンとしていたサラであったが、目の前のお姫様がフレーム好きであるとわかった瞬間、弾けた。

「いいなぁ、リリノア。私もルーツに乗りたかったなぁ」
「ふふん、こればかりは変わってあげる事はできないわ。私だって、ルーツに乗って暴れまわりたいんですもの」
「でも、コージさんが王子様だったのはびっくりです。だから、あんなに女性を囲ってたんですねぇ」
「サラもコージを狙ってたわけ？」
「いえいえいえいえ、そんなわたしなんか…　ただ、ずっと工房でフレームを一緒に作ったりテスト運転したり、一緒に寝食をともにしたり、気づけば子作りしてたりしたいなぁって思っただけです」
「いや、そこまで考えてたら十分狙ってるんじゃない？」

頬を染めて身を捩じらせるサラを見て、あの王子様はどれだけ手を出せば気が済むのだろうかとコージの顔を思い出す。身長はヒールを履いてると若干勝ってたし、顔も精悍というよりは可愛らしい苦労を知らないような顔でしたし、なよっとしててどこか頼りない雰囲気を漂わせてましたし。まぁ、フレームを操縦する時はきりっとして格好良かったですけども…

「そういうリリノアこそ、まんざらじゃ無い様子ですよね。それに、婚約者だから間違いなくモノにできるんですよね。うらやましいなぁ」

「うっ、いやその私はコージのフレーム操縦の技術と作成能力は認めましたけど、別に人となりに惹かれている訳ではありません！」

「じゃあ、婚約者譲ってくれないでしょうか？」

「それはいや！」

言い合って、睨み合う二人。だけど、それも長く続かずにすぐに笑い出す。

「でも、サラはコージに逃げられてそれっきりなんだったっけ？」

「はい、メイドさん達はまた連れてくるって言ってくれるんですけど全然で…　直接家に行っても、いませんって言われて終わりですし。登下校も捕まりませんし、屋敷に侵入しようとしても、コージさんの家って難攻不落ですし。私どうすれば良いんでしょう？」

うるるっとした瞳で見上げてくるサラ。だが、その発言の中からやってはいけない事をいくつかしてる節があるのに気付き、若干引いているリリノア。

「とりあえず、私から言える事はしばらく大人しくしてるのが一番

ね。コージに対して何もしない事」
「え、そんなのコージが寂しがるじゃないですか？」
「ううん、違うと思う。いや、違うからねサラ。まぁ、普通はあなたみたいに可愛い子に言い寄られるなら、喜んで飛び込んでくるでしょうけども、コージはねぇ…」

すでに、とんでもない美少女に囲まれて生活しているコージには、サラは危険な爆弾にしか見えないのではないかと思った。フレーム好きな所は気に入るかもしれないけれど。

「やっぱり、コージを束縛してる女の子をどっかにやるのが先決って事です？」
「うん、可愛い顔で怖い事言うのやめましょうね、サラ。そういうのがコージが逃げてく原因だと思うわよ」
「コージが逃げるのは追いかけて欲しいっていうサインです。よっぽど、きゃっきゃうふふしたいんですねぇ」
「あー…じゃあ今会えないのはそういう事なんじゃない？」
「と、いいますと？」
「ほら、物語でもあるじゃない。長い間会えない二人は、その期間が長ければ長いほど愛を募らせていくっていう奴」

リリノアの説明に、それは気付きませんでしたと目を輝かせるサラ。自分に都合の良さそうな設定は受け入れやすいようだ。

「なるほどぉ！　それで、コージと全然会えないんですね。そうですよね、今も一人しか囲ってないですから、他の女の子とも会わないようにして、愛を育んでるんですね！」
「ちょぉーっと待ったぁ、どうして今のコージの状況を知ってる訳？」
「え？　毎日調べてるからですよ？」

「とりあえず、本当にそれ止めなさい。これ割りと本気の忠告だから」
「んー…」
リリノアの迫力のある台詞に、うんうん唸りだすサラ。よっぽどストーキングを止めたくないようである。リリノアとしても、敵に塩を送るような真似をしたくないのであるが、このままだといつかコージが刺されて拉致されるのではないかと心配になったのである。
「じゃあ、我慢できたらルーツに乗せて貰えるように約束してあげる」
「うっ…くっ…」
「変形フレームだっけ？　それも一番に乗せて貰えるようにお願いもしちゃうわよ？」
「…我慢します。メイヤにコージの件に関する全ての計画を止めるように言って来ます」
「全ての計画とか聞き捨てならない言葉が聞こえたけど、とりあえずいってらっしゃい」
とぼとぼと歩くサラを見て、どうして私がこんな苦労をしなければならないのだろうかとため息をつくリリノア。そして、心の中でコージの貸し一つだからね、と呟いた。
ゴォォォォォォォ！！！

空の王のブレスが空飛ぶイカダ目掛けて、燃え盛る奔流となって襲い掛かる。だが、リュートの防壁によってブレスは防がれ、セリナの魔法によってすぐさまブレスの勢力範囲から脱出する。空の王も首を振りつつ狙いを定めようとするも、高速で動くイカダに的を絞ることができなかった。

「あのブレスはもって三秒って所だね。それ以上は突破される」

「分かりました。なるべく早く逃げます」

「ちょっと貰うわよ」

べりっと音を立てて、ティナがイカダの一部をはがしてなにやら付けてばら撒いた。

「弱点弱点、見つけてくださいなっ」

ばら撒いた木屑は、空を舞い次々と粉々になって拡散していく。それはイカダを追いかけてくる空の王へと吸い込まれていく。

「“土よ！　鉄をも貫く槍を解き放て！　ロックドリル！”」

アルミナの魔法が空の王へ解き放たれる。セリナがイカダの制御に集中している為にアルミナが魔法での攻撃の要となっている。アルミナも術式を見ているので、同じ魔法を使えるのではあるが、セリナ程の速度を出すことはできない為である。

“小賢しいっ！！！”

アルミナが解き放つ無数のドリルは、首の一振りで粉々にされていく。ブレスでは、追いきれないと考えたのか、空の王は風の刃で追撃をする。不可視のその刃は切られた後に飛んできた事が分かる厄

介な攻撃であった。その上、先ほどから何かを振り払うかのごとくブレスを撒き散らしながら追いかけてくるので、一瞬たりとも油断はできない。

「“斬”」

リュートが「グッドラック」から取り出した剣をふる。ふにょりと柔らかくふるわれた剣であったが、その威力は絶大であった。

空間がずれる。

空の王を中心としたかなりの距離の空間に断裂が走り、時間が止まったかのように静寂に包まれる。世界も切られた事に気付かずに、一瞬ずれたままであったがすぐに思い出したかのように、修正されていく。

“やるな！　危うくずれる所だったぞ！”

「いや、普通だとずれてるし最低でも羽だけでも落とすつもりだったのに、無傷ですか」

一応強めの武器「フレセッツ」という、込めた意思に応じて斬る剣を出したのだが、空の王には効かなかったようだ。昔の魔王ですら両断できた程の武器だった筈だが…

「僕の意思が弱い…という訳じゃないか。あいつが強すぎるんだね」

「リュート。あいつ、どうも見えてるのが本体って訳じゃなさそうよ。器を操ってるだけみたい」

先ほどから、木屑をちぎっては投げちぎっては投げして、なにやらしていたティナがそう教えてくれる。あれが本体ではないと言うな

ら、幻という事であろうか？　それにしてはやたらと威圧感も攻撃力もある幻である。

“そろそろ止まって貰うか。レピス！”

空の王がそう宣言し、その身体から何かがリュート達に向け飛来する。いや、正確にはイカダに向けてだ。

「おいおいっ！？」
「きゃぁっ！」

飛来する何かは、リュートの結界を突きぬけイカダを破壊していく。一つ一つは小さいものではあるが、数がやたらと多くレイシスの防御魔法も打ち破りイカダを破壊していく。

「このぉっ！」
「ロコッ！」

崩れながら落下していくイカダから、勢い良く飛び出したのはロコ。空を駆け抜け、不意をついた空の王の頭に取り付く。

“印の精霊もどきが、死にたいのかっ！”
「ボクは死なないよーだ！」

空の王とロコが組み合っている最中もイカダは崩されつつあり、危険と判断したセリナは急いで地表へと降りていく。ロコが空の王の気を引いてくれてるおかげでなんとか間に合いそうであった。

おあずけ

「はっ」

イカダが地表に激突する直前に、自分たちから木々へと飛び移るリュート達。レイシスとティナはリュートに抱えられて無事に地面に降り立った。

「リュート、ロコを助けに行くわよっ！」
「セリナ、僕を抱えて飛んでくれ」
「えっとぉ…」

セリナとしては、一人で飛んで行ってロコを助けるつもりであった。リュートというお荷物を積んだまま飛んで空の王の攻撃を回避できるかという不安要素もある。

“その必要はねーよ！”
「リュート！　レイシス！　結界張って！　急いで！」

頭上から降り注ぐ空の王とロコの声。その声に慌てて地面を陥没させるセリナ。結界を張るリュートとレイシス。ティナはロコの姿を必死に探しているので、アルミナが慌てて地面に伏せさせた。

ビカッ！！！

辺りを包む光の奔流。どこから来ているのかまったく分からないが、結界の外側がまったく見えない程のまばゆい光は下手に動くと危険だと分かる。例え、この光がどこか優しげな感じがしていてもだ。

「よし、もう結界はいいよ。行くよ皆」
「え？」

ふと気付けば結界の外側からロコが、結界に頭突きをして存在をアピールしていた。光に包まれていても大丈夫なようで、ティナがロコの姿を見るやすぐさま突撃していった。

“急ぐから乗れ。とりあえず消したとはいえ、すぐにまた復活するぞ”
「詳しい訳は後。はやくアナの背中に乗って」

いつの間にか空の王も地面に降りていて、リュート達に背中を見せている。ロコが何も警戒せずに空の王に飛び乗ったのを見て、慌てて追いかけるリュート達。

“じゃあ、しっかり捕まってろよ”

ティナはロコを掴み、そんなティナをリュートがしっかり固定しレイシスとアルミナがその脇をしっかり固める。セリナだけ一人でしっかり捕まっていた。そして勢い良く飛び出した空の王は、まっすぐ空へ飛び立って行った。

空中都市イーサルーク。古代竜の縄張りに存在する唯一の都市である。竜に認められた、もしくは呪いを払われた人間のみ都市に入る事ができる。古代竜の目をかいくぐって都市を目にしたとしても、入る事はかなわない。もし、魔法を使って空を飛べば竜に見つから

ない訳がなく、即座に処理されていた。

そして、アナベルはそんなイーサルークで竜の巫女、まどろむ古代竜の力を借りて都市を守る役目の少女である。「竜身」と呼ばれるその力は他の竜の巫女も使う事が出来るものではあるが、今代ではアナベルが一番強くその力を引き出す事ができていた。

「悪いけど、しばらくこの部屋で大人しくして貰うぞ。お前たちは血の中に呪いがあるからな」

竜の姿から、普通の人の姿に戻ったアナベルがリュート達にそう伝える。

「そんな事は初めて聞きましたけども…」

「セリナ、アナの言ってる事は本当なんだ。セリナが今までどうやっても貴族に歯向かえないのはそのせいみたいなんだ」

「…」

ロコの言葉にはっとした顔で振り向くセリナ。

「とりあえず、呪いをなんとかすれば良いんでしょ？　で、いつまでここに居れば良いのかしら、俺女さん？」

「アナベル＝フォーニクスだ。名前は好きに呼べ。とりあえず、二日はここに居てもらう必要がある。それでも、呪いが出て行ってないようなら延長する」

「それならそれで言いわ。で、肝心な事を一つ聞きたいんだけど良いかしら？」

「なんだ？」

「コージさんは、ここに居るっていう事で間違いないのね？」

「居る。だが、まだ動かせない」

「コージに何かあったんですか?!」

動かせないと聞き、悲壮な顔をしてアナベルに詰め寄るセリナ。少しむっとしながらもセリナを手で制しなだめるアナベル。

「光司は怪我をしている。だが、俺の看病のおかげで一命を取り留めたから安心しろ。じゃあ、二日後にまた来る。用があればそこのベルを鳴らせば良い」

そうセリナ達を安心させて部屋から出て行くアナベル。少々慌てていたようで、走っていく音が聞こえた。

「で、ボクがアナの代わりに詳しい事を説明するね」

ぴょこっと、それまで大人しくしていたロコがティナの束縛を逃れて、皆の前に立つ。詳しい話は後でと言われていたので、てっきりアナが説明してくれるのかと思ったのだが、どうやらロコがしてくれるらしい。

「二週間程前、つまりボクと白夜が居なくなった日だね。あの日、王の印の精霊の反乱があったんだ」

「王の印の精霊…?」

「うん、正直に言うとボクもそうなんだ。彼の名前はアーン。アーンとボクは印の力を世界のバランスを考えながら使うように誘導する為にいるんだ。ボクは直接で、アーンは内面から。世界が変われば役目も変わるんだけど、長い間変わる事が無かったんだ」

急に世界と言われて、背筋がピンとしたのはリュートだけである。他の面々は大人しく話を聞いている。

「それは置いておいて、とにかくコージの内面で動くはずのアーンが何故か表に出てきてしまったんだ。コージの姿で」
「それが今ロバスに居る偽者なんだね。姿形はまったく一緒だったね」
「うん、そして何故か王の印まで持ってるんだ。おかげでボクはなすすべも無くほとんどの力を取り込まれちゃったんだ」

結局は王の印の精霊だから逆らえないんだよね、と耳を足でがしがしかきながらつぶやくロコ。その様子にティナは…略。

「でね、ボクの意識だけをこうやって少しだけ切り離して、様子を伺ってた訳。ボクは気付かなかったんだけど、アーンは前から印の力を利用して世界に呪いを広げてたみたい」
「その呪いというのは、何なんですか？」
「王の印を持つ者が強くあるための呪いかな。貴族は王に逆らえない、平民は貴族に逆らえない。そして、王は貴族の力を取り込めるし、貴族は平民の力を取り込める。もともと王の印を持つ者は、貴族を言いなりにできたから、害される事はなかったんだけど、力を取り込む作用は無かったんだ」

そこまで言って、話漏れがないか考えているロコ。

「あ、そうそう。ここでおもしろいのは王は平民に逆らえないって所かな。だけど、王なんて平民と出会う機会がそもそも無いから、誰も知らないみたいだけどね」
「平民である私たちであれば、王でも倒せるという事ですか」
「うん。貴族の邪魔がなければね。今のままだと、貴族が立ちふさがったらどうしようも無いから駄目なんだ」

確かに、平民は貴族に逆らえないという呪いであれば、王の周りに

いる貴族によっていとも簡単に阻止されるのは自明の理である。

「で、ここで呪いを解かないと駄目って事なんですね。でも、どうしてここは呪いを受けずに済んでいるんですか？」

「古代竜の加護だね。彼は本当に古い竜だから、世界がおかしくなってきた事にいち早く気付いて、こうやって結界をつくって人間を保護してるんだって。まぁ、世界がおかしくなったのって、ボク達王の印の精霊が出てきてからしいんだけどね」

「どういう事です？」

ロコ達のせいと聞いて、驚いて聞き返すセリナ。

「昔から印はあったんだけど、僕たちみたいな精霊が出る事は無かったんだ。だけど、精霊が出て来た事で、印の大半が王の印に従うみたいになっちゃって、アーンが色々できちゃう下地ができたみたいなんだ」

「それならアーンという精霊が悪いんですよね？」

それを聞いてロコはうーんと困ったように唸っている。

「アーンとボクは同じというか、印から生まれた双子？　うーんなんと言えばいいのかな。とにかくどっちも同じ存在だから、アーンがした事にはボクにも責任があるんだ」

「じゃあアーンを倒したり封印すれば、ロコはどうなるんですか？」

「たぶん同じようになるかな？　倒されたら倒れるし、封印されたらボクも封印されちゃうと思う。できれば倒すよりアーンを封印できれば良いんだけど正直、あいつの力がどんどん強くなっていってるから、どうなるか分からないんだ」

困ったもんだよね、とくるくると回りだすロコ。

「どっちに転んでもロコはただじゃすまないって事じゃないですか！」

「そうは言っても、こんな風になるまで気付けなかったボクにも責任あるし、王の印とボク達は一心同体で、切り離せないモノだから仕方ないんだ」

「コージがそれで納得すると思いますか？」

「無理だろうねぇ。だけど仕方ないんだ」

「ロコ、そんな簡単に諦めてちゃ損するわよ。あなただけ無事に元通りになる事に罪悪感を感じるのは勝手だけど、仲間が居なくなる私たちの辛さを考えたらそれぐらい感受すべきだわ」

今まで黙って話を聞いていたティナがそう切り出した。

「そうです、諦めちゃ駄目です！　皆で考えればきっとなんとかなるはずです」

「うーん…困ったなぁ…」

「黙りなさい。こんな可愛い生き物を封印なんてさせてたまるもんですか！　リュート協力しなさいよね！」

「はいはい。でも、ティナがそこまで入れ込むとは思わなかったよ」

「可愛いは正義よ！」

何やら良く分からない雰囲気になっているが、結局どうすれば良いのか、これからどうなるのかはまったく説明されていない。だが、時間はまだあるのでとりあえず誰もその事は追及しなかった。

やばいやばいやばいやばい！

話には聞いてたけど、なんだあの美少女は？！　光司の奴、俺の事可愛いとか言ってくれたけど、あれは世辞か？！　あんな美少女と今まで一緒に住んでて何も無かったってどういう事だ？　胸もでけーし、優しそうだし、すげー女っぽいし！　光司の理想はどこまで高いんだ…？

「今のうちに、既成事実つくっとかねーとやべぇなぁ」
「何を昼間っからとんでもない事を口走ってるのです。あなたには巫女の自覚はあるのですか？」
「あーもう、うるさい奴に見つかっちゃったよぉ…」

ずかずかと、歩き回るアナを捕まえるメイド服の女性。静かな雰囲気なその女性は表情が出ていないにもかかわらず、怒っているのが分かる。

「またあのコージ殿がらみですね。あなたはただでさえ言葉遣いが悪いというのに、あの方が来てからは品性の方も悪くなったと見えます。そんな事では殿方は振り向いてくれませんよ」
「うるさいなぁ、おまえはお袋か！　光司はそのままでいて良いって言ってくれたんだ！　リズにとやかく言われる筋合いはない！」
「容姿はそこそこ良いんですから、落としたいならそれらしく振舞えば良いというのに、嘆かわしい。ほら、もうすこし襟をはだけさせてですね…」
「だー！　もうっ、リズは一体俺をどうしたいんだよっ！」
「え？」

「不思議そうな顔すんなよ！　さっき、俺をたしなめてたよな？　巫女の自覚あるのかって小言いってたよな？」

ぎゃいぎゃいと怒るアナを見て、にっこりと笑顔を返すリズ。この子は本当に馬鹿な娘だなぁという感じの笑顔で、当事者にとっては物凄く腹が立つ笑顔だ。

「もうアナ様は、本当に仕方のない方ですねぇ」

「なんで様付けしてんだ？　その顔やめろなんかすっげー腹が立つ」

「かしこまりました。でも、アナはコージ殿を本当に婿にするつもりなんです？」

「たりめーだろ？　あいつは俺が居ないと駄目駄目なんだ。だから当然俺が面倒見ないと駄目だろ？」

「はぁ…追いかけてきた方達を見るにそうは思えないのですが…」

アナのようなガサツな娘とはまったく違う少女セリナ。たしかに光司は頼りなくて危なっかしい所だらけだが、あの少女が居るならば入る隙間など全く無い様に見える。

「正直、あのセリナという処女が居れば普通は満足するんじゃないのですか？」

「おまえ、さりげなく何口走ってるんだよ。つーか、そんな、しょ、しょ、しょ…じょとか分かるのかよ」

「分かりますね。彼女だけ間違いなく処女です」

「えぇっ、他の奴は違うのかよっ！　俺とそんなに年も変わらないように見えるのに、それが普通なのかっ！？」

「驚く所はそこですか」

どうせなら処女かどうか分かる所を驚いて欲しかったと言わんばかりに、がっかりした様子を見せるリズ。だがすぐに思い直したよう

に、面を上げる。

「とりあえず、アナはコージ殿を諦めた方が良いんじゃないでしょうか？　きっとあれですよ拾った動物を見捨てられないような気持ちの方が強いんじゃないです？」

「そんなんじゃねーよ！　もうほっといてくれ」

そういってプリプリと怒った様子で、アナは逃げていった。その様子を見て眉間にシワを寄せて考え込むリズ。

「うーん、これは意外と本気ですねぇ。今まで浮いた話一つ無かったアナがねぇ。一体コージ殿のどこが良かったんですかね？　悪い人ではないのですが、良い人どまりで終わりそうな方なんですけどもねぇ」

そういって、廊下のど真ん中で本気で悩みだすリズであった。

「光司ただいまっ！」

「あ、アナおかえり。無茶しなかった？」

ぼーっと窓の外を見ていた光司は、元気良く入ってきたアナを迎え入れる。開口一番そのような台詞が出てくる所を見るとそれなりに心配していたようだった。

「大丈夫だって。「竜身」を使えばやられる事はねーよ」

「なら良いけど、アナが怪我したりするんじゃないかって心配なん

だ」

「光司、やっぱりおまえは良い奴だな」

アナが「竜身」となり、光司に見えるようにそこの窓の近くを通ってみせた時、光司は驚く事無く、笑顔で手を振って応えてくれた事を思い出す。その時はアナが「竜身」を使える事を言っていなかったのだが、光司は目をみた瞬間それがアナだと分かり手を振ったらしい。突然、イーサルークに迷い込んできた光司を保護する為に神殿に匿っていただけの人間だったのだが、その一事からアナは光司に興味を持ったのだ。

「で、リュートやセリナはどうだった？　元気だった？」

「もう！　後二日すれば会えるんだから、別にその時でいいじゃん。光司の馬鹿」

「うーん、だってやっぱり僕も心配だしさぁ。それにミミは来てないみたいだから、何かあったのかなって心配なんだ。何故か衛星が使えなくなってるからね」

王の印を失った事により、なんでもありの力は使えなくなっていた。いや、使えなくは無いのだが、それなりの代償が必要となり気軽に使えるものでは無くなっていた。怪我の影響で一時的に魔力が減衰している今は、ほとんどの魔法や能力が使えない状態である。

「ていうか光司、セリナってすげー美人だな」

「うん、セリナって凄い美人だよね」

「馬鹿っ！」

「えぇっ！？」

そこはアナを褒める所だ光司。そんなこと無いよとかそういう言葉を期待していたアナはつい怒って顔を逸らしてしまう。だが、そん

な事ではあのセリナに負けてしまうと思い直し光司に向き直る。アナとて自分の言動や行動がガサツだという自覚はある。このまま、無為に時間を過ごせばあのセリナに光司を取られてしまう事は明白だった。

「まぁいいや。えっと、そのぉ…光司はやっぱり女の子は、おしとやかな方が良い…のか？」

「うーん、その方が女の子らしいなとは思うけど、人それぞれかなぁ」

「じゃあ、別に俺みたいなのでも女の子っぽく見えるのか？」

「何言ってるの？　アナは女の子でしょ？？？」

青い髪にきりっとした目元。涼しげな風貌のアナベルは男装をしても良く似合いそうである。セリナには負けているが出る所はちゃんと出てるし、女性らしい体付きである。比べる対象が悪すぎるのであって、アナも黙っていれば充分に美少女といわれる部類に入る。

「そ、そうか。じゃあ俺を嫁に貰ってくれるのかっ？！」

「待って。今話が飛んだよ？！　女の子からお嫁さんに飛んでったよ！？」

「貰ってくれるのか？　どうなんだ！？」

「アナー落ち着いてぇ！」

ベッドに横たわる光司にぐいぐいと押し倒す勢いでアナは迫ってくる。すでに色々と密着状態である。顔も鼻がくっつきそうなぐらい近づいており、アナが鼻息荒く迫ってくる様子はちょっと残念な感じである。

「落ち着いてられるかっ！　セリナみたいな美少女が迎えに来たからにはもう待てん！」

「そう、そうなんだ、セリナとミミと婚約してるからそこにさらにアナまで結婚とか、そんなの駄目だよぅ！」
「なんだとっ！　なんでお前俺というものがありながら、二人も婚約者が居るんだよ、おかしいだろ！」
「えぇっ！？　時系列的に無茶だよっ！」
「愛は時空を超える！！！」
「とりあえず、落ち着いてよーーー！」

病み上がり？　怪我上がり？　そんな感じの状態の光司は、アナを跳ね除ける程の元気は無い。本気を出せば行けるのかも知れないが、そんな事をすれば反動が怖い。すでに何か茹で上がっているアナは光司の話を聞かずに暴走しっぱなしで止まる様子がない。それどころか服に手を掛け脱ぎ始めようとしていた。

「ちょ、ちょちょちょっとぉ！？　この部屋扉無いよ？！　外から丸見えだよ？！　なんで服脱ごうとしてんの？！」
「既成事実作るために決まってるだろう！　止めるな光司！」
「えぇぃ、動きにくいなぁ！　でりゃぁ！」
「あうっ」

何を言っても服を脱ぐのを止めなさそうなアナを、完全拘束する為にがっちりとアナを抱きしめる光司。密着して照れているアナには分からないが、まったく色気のない拘束具合である。

「そういう暴走する子は、女の子っぽくないよアナ。うん、僕は恥じらいを持ってる子が大好きだ！」
「え、大好き？」
「うん、だからこんな事したら駄目だよ？　分かった？」
「分かった…大好き…」

乙女フィルター装着したアナには、大好きしか聞こえていない。いや、聞こえているのだが聞いていないというべきか。ぽーっと上気した顔で、ゆるんでいるアナの顔は幸せそうで、光司もやっと分かってくれたかと安心した反面、何かとんでもない事をしでかした感がないでもない。だけど、暴れて色々限界な光司はそれを考える余裕が無かった。

「うふっ、うふふふふふふふ」

上にのしかかったまま笑い出したアナを重いと思いつつも、疲れきった光司は何をする事もできず、そのまま眠りについてしまった。

朝食のひととき

呪いを解くという部屋に入って一夜明けた。部屋といっても、大部屋に全員いるのではなく個室があるのでそれぞれ好きなように部屋を使っていた。

「おはようございます」
「あ、おはよう。セリナは朝早いんだね」

リュートはそう言うが、セリナにとってはいつもより少し早いぐらいの時間である。特に早く起きたという自覚はない。リュートは起きぬけのようで、着衣は乱れて髪も少々寝癖がついている。備え付けの水瓶から水を汲み一気にあおるリュート。

「朝ごはんは、あるみたいだね。どうしたのこれ？」
「先ほど、ここの人が運んでくださいました。足りなければ呼んでくださいって言ってましたよ」
「ふーん、なんだか至れり尽くせりだねぇ。ま、楽でいいけど」

そういって、用意されている朝食をむしゃむしゃとつまみだす。ちなみにメニューは肉と野菜のキッシュに、肉の炒め物、コンソメスープに少し固めのパンに生野菜があり、飲み物も果物の絞り汁が二種類準備されていて、なかなか贅沢である。

「普段はリュートがご飯を作ってるんですか？」

リュートの楽でいいという台詞に、ふとそう思うセリナ。

「え？　あぁ、そうだね。以前は作ってなかったんだけど、ここ一

年ぐらいは僕が作ってたね。ティナの方が上手なんだけど、最近はたまにしか作ってくれないんだ」
「コージと言い、リュートと言い男の人でも料理できるんですねぇ。私も少々できるようにはなりましたけど、やっぱり毎日作らないとうまくならないですよね」
「作るのもだけど、食べてくれる人が居るのと居ないのとでまた違ってくるよ」
「なるほど」

そういうものかと納得するセリナ。その間もむしゃむしゃと食べているリュート。さっきからつまみ食いという感じで手で次々と食べていて行儀が悪い。なのでセリナはたまらずリュートが食べやすいように、食器を用意し色々と取り分けてあげた。

「あ、あんがとさん。これ美味いからついそのまま食べてた」
「ティナさんに見つかると、怒られますよ？」
「ううん、もう諦めたから。リュートったら何度言っても、そのつまみ食いのまま食べちゃうのよね。ちゃんとよそって食べないのよ」
「あ、おはようございます」
「おはよー」

いつの間にかティナが起きだしてきていた。リュートと違ってしっかり身だしなみを整えてから起きてきたようだ。気づけば居たのでどの部屋から出てきたかは分からなかったが。

「ティナおはよう。これ結構おいしいよ、ティナも食べなよ」
「あんたねぇ。セリナは待っててくれてるみたいなのに、肝心のあんたがそれでどうするのよ」
「誰かさん達のせいでゆうべも頑張ったから、お腹減ったからしょうがない、しょうがない」

「じゃあ、今晩はお預けで良いのね？」
「ごめんなさい」
「あははー、レイシスさんとアルミナさん呼んできますねぇ」

リュートとティナの力関係を横目にその場を離れようとするセリナ。だけど、タイミングよくリュートの居た部屋の扉が開きつやつやとしたレイシスとアルミナが出てきた。

「おはようございます、リュート」
「おはよう」

レイシスの視線はリュートのみ。アルミナは一応そこに居る皆へと挨拶をする。挨拶に返事をして、浮かしかけた腰をまた戻すセリナ。アウェイ感たっぷりの現状にちょっと居心地が悪いがどうしようもなかった。

「とりあえず、今日一杯までここに居ないと駄目なんだよね？」

用意された朝食を半分ほど一人で食べたリュートは満足したのか、そう確認してきた。昨日の昼頃にこの部屋に入ったので、明日の昼までは居ないと駄目なのであろう。

「二日って言ってたし、明日の昼までじゃない？」
「明日までリュートといちゃいちゃし放題ですね」
「そうだな、うん。し放題だ」

リュートの食いっぷりはいつもの事なので、気にせず朝食を取りながら返事をするティナ達。もっともレイシスとアルミナは朝食そっちのけでリュートの世話を焼こうとしている。

「うーん、今後の方針としては事情を説明してここの人達にも協力して貰って、アーンだっけ？　そいつをどうにかするって事は良いんだけど、もっと情報が欲しいよね」
「そうですね」

どこか上の空で返事をするセリナ。仲の良いリュート達を見て思い出したのか、コージの事が気になるようでどこか落ち着かない様子であった。

「早くコージに会えるといいね。怪我してるっていうのは心配だけど、昨日の人の様子を見るに大丈夫でしょ」
「そうですね」
「駄目だこりゃ。まぁ、やる事は決まってるしいっか」
「そうですそうです。そんなおっぱい魔人は放っておいて良いと思います」

セリナが上の空なのをいい事に何気に失礼なことを言うレイシス。どうあがいても勝てない質量差を非常に気にしているようだ。

「昨日の人が何か説明に来てくれたら、暇つぶし…いや情報収集できるんだけどなぁ」
「あんた退屈してる訳？」
「退屈って訳じゃないけど、部屋でじっとしてるのが嫌ってだけ。時間が勿体無い」
「だったら、そこの二人と朝から盛ってりゃ良いじゃない」
「えぇ！？　こんな明るい内からするのは恥ずかしいですっ！」
「はおっ！？」

ティナの言葉に一気に真っ赤になる二人。さすがに明るい内は色々見られて恥ずかしいようだ。だが、そんな二人の様子にキランと目

を輝かせるリュート。

「これはアリ…だなぁ」

そうつぶやくや否や、レイシスとアルミナを抱えて部屋へ戻ろうとするリュート。うれしいけれど恥ずかしいから抵抗しようとするも、やっぱり嬉しいが勝っているようで、弱々しい抵抗しかできない二人。

「こらっ、冗談だから止まりなさいリュート。そういうのは帰ってからにしなさい」

「駄目？」

「セリナを放ってそんな事ばっかしてると、あんたエロエロ大魔神だって思われるわよ」

「エロエロなんだけど？」

「いいから、大人しくしてなさい。ひょっとしたらアナが来るかもしれないでしょ」

「アナって？」

「あんたの言う所の昨日の人よ！」

「あぁ、了解。そうだったそうだった。そうかぁ、我慢するかぁ」

大きなため息をつきながら渋々二人を解放するリュート。解放された二人はもじもじとしながら、黙って部屋に戻っていってしまった。

「なんか、あんたって色々と突き抜けたわよね？」

「そうかな？　そうかもね。今は勇者って嫌いじゃないから、そのせいじゃないかな」

「そ。なら良いわ、前の仮面つけたままの時よりそっちの方が良いし」

「ヨルカにはお世話になりっぱなしだったもんね。まぁこれからも

世話をかけるつもりなんだけどね。よろしくっ！」
「ヨルカ言うな！」
「ごめんごめん、二人きりのときだけだよね、あはは」
「あんた、ほんと変わったわ」

今までのどこか演じてた様子が見えたリュートと違い、素のままでいる。昔のリュートを知っているティナとしては、そちらの方がリュートらしくて好ましかった。

コンコンッ

「入るぞ」

ノックしてすぐにそう声がして、アナが部屋へ入ってきた。あまりノックの意味がない。

「アナさん、おはようございます」
「丁度良いタイミングだね。色々聞きたかったんだ」

部屋を見渡し、人数を確認するアナ。だが二人足りない事に気づき、首を傾げる。

「来るのが早かったか？　朝食が終わって一服している頃を見計らって来てみたんだが」
「あ、今部屋にいるだけで皆朝食は終わってますよ」
「そうか、なら後の二人も来て貰って良いか？　情報交換をしたいんでな」
「はい、分かりました」

アナの言葉にすぐに部屋へ二人を呼びに行くセリナ。そしてすぐに

二人を連れて戻ってきた。

「じゃあ、揃った事だし少々お互いの知っている事を腹を割って話すとしようか」

そういってリュート達を見渡すアナ。その視線がセリナの上で長く止まったのは、胸の大きさではないと信じたい。

孤独な二人

大地に横たわる細身の赤いガイアフレーム。あちこちに傷が見られるその機体は、木々の間を縫うように体を滑り込ませ、さらに枝や葉っぱなどをかぶせ、傍まで行かないとわからない様に擬装されている。そして、その傍らには一人の少年が、意気消沈した様子でたき火で暖をとっていた。

「ちくしょう…あいつら結局俺たちを使い捨てにしやがって…」

ピピールの肉をたき火で炙りつつ、悔しげな様子で愚痴るエドワード。落ち着く為であろうか、森から採ってきたであろう何かの葉っぱをむしゃむしゃとむさぼり始める。エドワードがグレイトエースを強襲し、命からがら脱出して屋敷の近くで見たのはトロンの無残な死体だった。その一事から、ゲオルグは約束を守る心算などかけらもないと理解したエドワードは、すぐさま身を隠した。

「おいしくない」

そう愚痴りながらも葉っぱを食べる手は止まらない。あまりの不味さのせいだろうか、エドワードの目からは涙がこぼれ出した。こみあげてくる嗚咽を止めようとして失敗し、結局出てくるがままに、泣きながら葉っぱを食べるエドワード。

「おっちゃん…」

短い期間であったが、エドワードには良くしてくれたトロン。何かと貴族の矢面にたってくれて、エドワードがあまりこき使われないように体を張ってくれていた。そんなトロンは貴族の為に巨大フレ

ームを作っていたのに、出撃させた途端にあのような最後を迎えてしまった。貴族にとってはあれだけの物であっても簡単に使い捨てできる物だったのだ。

「ゲオルグ。絶対に許さねぇからな」

とはいえ、相手は貴族だ。生半可な事では傷一つつける事すらかなわないだろう。印の力も貴族と戦って勝つには力が不足している。となると、別の方法で何か考えねばならない。焼きあがった肉を、ナイフで削ぎながら少しずつ食べる。コージに頼りたくなってしまうが、グレイトエースでは敵同士。相手がコージと分かっていても攻撃したエドワードにとっては到底頼れる相手ではなかった。

「一人ででも、やってやるさ」

ゲオルグがどこに居るかは、真似た力のおかげですぐに分かる。今はロバスに滞在しているようで、あのヒューイの為に色々画策していると思われる。最近、漂い出した王の印の力のようなものが同じようにそちらの方から流れてくる事から、コージもロバスに居るのかもしれない。ひょっとしたら、ロバスで鉢合わせするかもしれないが、その時はその時だ。少しずつだが確実に肉を食べ続ける。今は少しでも力をつける為にも、食事は欠かせない。味わって食べると言うよりも、栄養をとる為の行為といった様子でエドワードは何かに思いを馳せながら、食事を続けていた。

コージは、最近よく出かけていく。出かけるというか、気づけば屋

敷の中に居ないというのが正解かな。メイドさん達に聞いても要領を得ないし、何をしてるか不安になる。そして、頻繁に屋敷に来る貴族。ゲオルグという名の貴族が、次々に貴族を連れてきてはコージとなにやら話し込み帰っていく。一度、コージになんで貴族を連れてくるのかと聞いてみたが、必要な事なんだと諭されるように言われただけで、詳しい説明は何もなかった。ミミの過去を知っているのに説明もしてくれない。こんな事は以前のコージからは考えられなかった。

「うぅ…気持ち悪い…」

貴族の持つ力のせいなのか、違う原因かは良く分からないが貴族が屋敷に頻繁に訪れるようになってから、良く気分が悪くなるようになった。あのファウンデルス卿と対峙した時のような威圧感というか、それに似た何かが胸を苦しくさせる。苦しさを紛らわす為に携帯でお母さんに連絡を取ってみる。だが、呼び出し音が鳴るばかりで繋がる事は無かった。

「お母さん、どうしたんだろう」

ミミにとって親といえば、ルリとユージになる。ミミを産んでくれた親は、記憶になく父親といえば一度、冷たい眼で見られたきりだった。正直、昔の事はあまり思い出したくないし、思い出せなくなってきている。なんとなく、辛い目にあった事だけは分かっているけど、昔の記憶なんてそれで十分だった。

ヒロコと白夜が居なくなってから、色々とおかしくなってしまった。

お城の方では、この間の襲撃事件の事で不満の声を上げる貴族の声が高まり、反乱一歩手前のみたいだし、ロバスの方では魔石獣の大

量発生が噂されていて、にわかに慌しい雰囲気になっている。学園の方でも、魔石獣の話を聞いているようで講師陣も忙しくしている。そのせいで実習がほとんど無くなり、実技の訓練と座学が合同で行われるようになっていた。そしてコージは、あまり学園に顔を出さなくなったのに、たまに顔を出せば皆から声を掛けられるようになっていた。

前のようなちょっと格好悪いコージじゃなくなってるから、当然なのかもしれないけども。

それにしても困った。

最近、コージ達が居なくなったのを良い事に学園で色々ちょっかいをだされるようになってきた。何かと食事に誘われたり、手紙を貰ったり、遊びに誘われたり。確かに皆が居なくなって一人ぼっちで、退屈そうにしては居るけども、そういう気分には全くなれない。友達と遊ぶのは別に不満じゃないんだけど、突然断りもなしに男の子達が合流してくるのは困る。今、色々大変なことが起きそうな気配があるからミミとしては、遊んでる場合じゃないよ、と凄く言いたくなる。

そして今もメイドさんが来客を伝えに来た。

ちょっと具合が悪いのは事実なので、断りの旨を伝えて帰って貰っている。コージ達が居た時とは違う種類の忙しさで、なんというか本当に疲れるばかりだ。

「はぁっ、しんどい」

最近、まとわりつく変な力もどんどん強くなってきていて、ぐるぐ

るぽいっとする事が多くなってきている。ベッドに横たわり、ミミは自分の体を守るように自分をぎゅっと抱きしめる。前はちょっと甘えたくなったり不安になったりすると、コージをぎゅっとして落ち着いていた。ぎゅっとすると気持ち良いんだよね。

「んっ」

ついついコージを思い出そうとして、自分で胸をぎゅっとしたりして慰めてしまう。せっかくこれだけ大きくなったのに、コージは全然何もしてくれないから、寝てる間にコージの手に感触を覚えて貰う為と称して色々としていたのだ。だから、コージは知らないかもしれないけれど、コージの手はミミの全身をくまなく触っている。だけど、自分でしていてもコージに触って貰ってる時ほど気持ち良くは無かった。思わず気持ち良さが足りなくなって、つい下半身に手が伸びるも、変な力がうごめきだしたので慌てて中断する。

「はぁ…、もう少し大丈夫だと思ったんだけどなぁ」

色々な意味を込めてそう呟く。

セリナやヒロコ、白夜達とコージで遊んでいる時は本当に楽しかった。楽しかったし、できない事なんて何も無いんじゃないかと錯覚もしていた。だから、自分も強くなって何があっても大丈夫になってきたんだと思い込んでいた。だからこそ、変な力が見えないセリナを勇者に託して残ったのに、皆が居ないとこんなに違うとは思わなかった。

「うん、このままじゃ駄目だよね」

気分が落ち込んで居る時は体を動かそう。何かあった時に動けるよ

うに、しっかり力をつけておかないと駄目だよね。気持ちをすっきり切り替えて、ベッドから飛び出て装備を整える。向かうはロバスの森。魔石獣が活発化しているようで危険な状態になってきているようだけど、体を動かすには丁度良い。そして、メイドさん達に出かけてくると伝えて、ロバスの森へと向かった。

アナとリュート達のおはなし会

アナに腹を割って話をしようと言われるも、少々とまどいを隠せないリュート達。ロコに大丈夫と言われ、アナには光司は無事と言われるも目に見える証拠がまったくないのだ。血の呪い云々に関しては、思い当たる節もありロコの太鼓判を信じて部屋で大人しくしているが、それとは別の問題であった。

「アナさん、知ってる事と言われてもこっちは、そちら以上に何かを知ってる事は無いと思う」

「慎重だねぇ、勇者様。まぁこっちを信用して貰う為に、光司から借りたもんがあるんだけど。セリナ、これが何か分かるか？」

「なんでしょう？」

アナは静かに左手を上げ手を見せる。その左手の指にはまる指輪を見てセリナは、視線を強くする。

「それは、コージの指輪ですね」

「そう、光司の指輪だ。これの機能は知ってるよな？　むやみやたらに外せないし、認められた人間以外は中の物を出す事もできないってね。ほっ」

アナの掛け声と共に出てきたのは、「ギル」であった。

「これで信用できないか？」

「コージなら、指輪をリュート達には外せなくして私には外せるように設定してくれてるはずです」

「ご名答。まずは勇者リュート。この指輪を外してみな」

「ん？　お安い御用ですよ」

差し出されたアナの指から指輪を外そうと手を添える。だが、リュートは指輪を外すことは適わなかった。何度か首を傾げて挑戦するも、結果は同じだった。その後にセリナが促されて指輪を外す。今度はすんなりと指輪は外され、セリナはそのまま左手の薬指にさも当然のようにはめなおし、携帯を取り出す。

「これをコージに渡して下さい。そして私にかけるように伝えて来てもらって宜しいですか」

「かける？　とりあえず光司にそれを渡してくれれば良いんだな？」

「はい、お願いします」

アナはゆっくりと頭を下げるセリナを思案気に見つめてから、携帯を取り一旦部屋を出て行った。そして、アナが部屋を出た途端に自身の携帯を取り出すセリナ。ティナは理解しているがリュート達は何が何やら分からずに、成り行きを黙って見守っていた。

しばらくして、静かに呼び出し音が鳴りセリナが即座に携帯をつかむ。

「コージ、大丈夫ですかっ?!」

『セリナ、ごめん心配かけて。僕はなんとか無事だよ』

携帯の向こうでアナがなにやら騒いでいる声がするが、久しぶりに聞くコージの声に安堵の息を漏らすセリナ。気が緩んだのか、少々涙目になっている。

『さっそくで悪いんだけど、アナは大丈夫だから。イーサルークに迷い込んだ僕を助けてくれた恩人なんだ』

『恩人じゃない俺は光司の嫁だ！』

「あらあらあら…」

漏れ聞こえてアナの声。久しぶりの携帯越しの再会ではあるが、黒セリナが出てくるには充分な内容であった。静かにまるで騙し絵を見ているかのように黒セリナになったのを見たリュート達は、何かは良く分からないが震え上がってしまう。

『ちょっとアナ、大事な話をしたいんだから静かにしてっ！　セリナ？　セリナさんっ？　アナの嫁云々は気にしないでね、アナはちょっと思い込みが激しいんだ』

「随分仲の宜しい事ですね、コージ。うふふっ」

そして、更に聞こえてくるいちゃいちゃしている様子。それを聞くにアナがコージにキスしまくっているのだが、黒セリナにとってはワザと見せ付けるようにキスをしているように聞こえていた。

『セリナッ、その黒いのを僕に向けないでっ？！　むぐっ』

『これで分かったか？　チュッ！　俺は光司が大好きで光司も俺が大好きだからな！　チュッチュッ！　俺が光司に危害を加えるとか有り得ないって事だ！』

「ええっと、ロコ…あぁ、ロコは部屋の外でしたね。コージはあちらの方に居るのは間違いないですね、はい」

携帯を握り締めゆらりと立ち上がるセリナ。ふらりと立ち上がって向かった先は、アナが出て行った部屋の出口である。

「ちょっと待ったセリナ！　今ここから出たら呪いが解けないんじゃないかなっ！」

「あらリュート、邪魔するんです？」

勇者リュート二十歳。今まで生きてきた中で最大級のプレッシャーを感じて、思わず結界を張りそうになって思いとどまる。

「落ち着いて考えてほしいセリナ。今ここで出て行ってコージをとっちめても、呪いを解く為にまたここで二日間過ごさないと駄目じゃないか。明日には出れるんだから、とっちめるのはその後にしたほうが、じっくり色々できるんじゃないかなっ？！」

リュートを引きずりながら黙って出て行こうとしていたが、そこまで言われてようやく止まるセリナ。そしてくるりと反転して、肩を掴んでいたリュートの手から逃れ反対にリュートの肩をがっしりと掴む。

「良い事を言いましたねリュート。勿論、あなたは私の味方ですよね？」

「そ、そうだねセリナの味方だよ。だから、この手を離してくれるかな、地味に痛い」

「あら、すみません。という訳ですコージ。とりあえず血をたっぷり補給しておいて下さいね。天国と地獄を見せて差し上げますからっ」

『…お手柔らかにお願いします』

今のやり取りを携帯越しにしっかり聞いていたコージから、観念したような返事が返ってくる。地獄はともかく天国ってのは興味があるなぁという顔でセリナを見つめるリュート。先ほどのお預けの件もあり好奇心が恐怖に打ち勝ったようだ。少々エロ親父のような顔をしているリュートのほっぺを軽くつねってから、先ほどまで座っていた椅子に戻り大人しく座るセリナ。リュートも頬をさすりながら同じように席につく。

「待たせたなっ！　これで良く理解してくれたと思…う」

慌しい足音の後に、勢い良く戻ってくるアナ。元気の良い声音だったが、セリナを視界におさめた瞬間に勢いも次第に弱くなっていった。

「アナ」

「な、なんだ?!」

「私たちより先にコージに手を出したら、死ぬまで後悔させてあげますからね」

にっこりとした顔で物騒な事を伝えるセリナ。その台詞にあからさまに動揺するアナ。

「手を出すって、どこまでしたら駄目なんだ…?」

「既に手を出した後、という事で宜しいです?　覚悟はできましたか?」

がたっと大きな音を立てて、まったく笑顔を崩さずに椅子から立ち上げるセリナ。

「わぁっ!?　待てっ!　待て待て待て!　出してないっ、まだ出してないからっ!　ちょっと先っちょを入れただけだ!」

何を?　と考える間も無くセリナはアナを背後から捕獲する。その素早さはリュートですら目で追いきる事はできなかった。

「え!?　あれっ?　セリナって魔道師なのになんでこんなに強いんだっ?!」

「さぁ、アナ。コージと何をしたかちゃんとお話して下さいね?」

「えっとだなぁ、そのぉ…」

ごにょごにょと、素直にセリナになにやら耳打ちするアナ。一瞬アナを捕獲している手が強まったりしたが、その後はゆるまりアナは解放された。そして、アナから離れる際にセリナは釘を刺すように耳打ちをし、アナは青い顔をしてしきりにうなづいていた。

「とりあえず、大丈夫でしたね。アナ、良かったですねっ軽いお仕置きで済みそうで」

「あ、お仕置きはあるんだ…」

「とりあえず、話はまとまったかな?」

「はい、大丈夫です。私も安心しました」

リュートの問いに何事もなかったかのようにそう返すセリナ。黒セリナはどこかへ行ってくれたようだった。

「気を取り直して行くぞ! で、今の状況だが非常におかしな事になってきている。それは知っているか?」

「とりあえず、コージの偽者が何かをしようとしているっていうのは知っているけど、具体的には良く分かっていないという所かな。あとバルトス国は、偽者、あ、アーンっていう名前らしいんだけど、そいつの支配下にあると思って貰って間違いないと思う」

「最近、印の力がこれまでに無いほど活発化しているからな。しかも、悪意が混じっているだけに普通の人間は簡単に取り込まれるだろうな」

リュートの言葉に深刻そうな顔をするアナ。印の力に対抗するために、呪いを解いた人間を増やして結界の範囲と力を払えるように訓練しているのだが、急激に強まってきた力に自分はともかく、国民がどこまで対抗できるか、不安になっていた。

「あれは王の印の力ってのは間違いないんだよね？」
「そうだ。印は色々あるが、意思を持って世界を変えようとしているのは王の印だけだ。始まりの印ですら、そんな事はしようとしなかったって聞く」
「ロコから聞いたけど、世界を良くしようと頑張ってきたって言ってたけども」
「世界を良くしようっていうのは、印の都合のいいように世界を保つという事だ。何も人間達にとって良い世界じゃない。印にとって世界は生かさず殺さずで長く続く方が有難いんだからな」

リュートのロコを庇うかのような言葉を、ばっさりと切るアナ。古代竜とリンクできる彼女にとって、昔の記憶をおぼろげながらも理解できている為だ。

「でも、ロコはアーンの企みを阻止するために、あんな姿になってまで伝えてくれましたよ？」
「それも結局は世界が破滅へ向かって、自分たちが存在出来なくなる事を恐れただけに過ぎない。そもそも血に呪いをかけている時点で、良い様に利用しようとしているのが分かるだろ？」
「でも、それって本当に王の印がした事なのですか？」
「セリナ。ロコをかばいたい気持ちは分かるが、そんな事ができるのは始まりの印「全」と「王」の印にしかできない。そして、今まで「全」の印を持つ者は一人しかいなかった」
「じゃあ、その「全」の印を持っていた人がしたんじゃないんですか？」
「残念ながら、こんな呪いが蔓延しだしたのはここ五百年ぐらいの間だ。そして「全」の印を持った人間が居たのは千年以上前の話だから有り得ない」
「うー…」

アナは古代竜の意識をひきずっている所がある為、古代竜のマスターであった「全」の印を持つ者を貶めるような発言は容認できなかった。

「アナはロコをどうしたい訳なんだ？」

返答次第では協力できないという目付きでリュートが、まっすぐアナを見つめる。リュートにとっては、ティナが気に入っているロコも仲間という意識がある。

「どうもこうも無いね。ただ、あれは信じすぎるなと言いたいだけだ。良い事も確かにしているんだろうが、逆もまた然り。敵でもあり味方でもある厄介な存在なんだってのを覚えておけ」

リュートの視線に負けることなく、そう言い放つアナ。その言葉に反論したいがうまく言葉をつむげないでいるリュート達。

「今まで精霊と一緒に行動してきたお前たちに、こんな事を言うのは酷だという事は重々承知している。だけど、今まで王の印の力に抗ってきた俺たちの言葉も耳に留めておいて貰いたい」

納得するには時間が掛かると思ったアナは、そう言葉を締めくくった。そして、リュート達の感傷を振り払うために次の話題を持ち出した。

「そして俺達の今後の方針だが、まずは光司の仲間といえる人間を救い出す事だ。血の呪いをどうにかしない事には、反撃もままならないからな」

「救い出すとは具体的にどうするんです？」

「具体的な作戦とその後の工作については、光司が役に立つ物を持っているから説明は光司が動けるようになってからにしておく。お前達も力になってくれそうな人材がいるなら早めに教えて欲しい。向こうに対抗するのに人材はいくら居ても足りないからな」

リュート達にも知り合いというべき人間はかなり居る。だが、今回は連れて行く訳には行かず危険は承知で置いてきてしまっているので、アナのその言葉は非常に有難いものであった。

「分かった。それで救出した後は、どうやってこの状況をひっくり返すつもりで？」

「片っ端から血の呪いを解き、貴族達を排除する。王は貴族達から力を貰っているからそれだけでだいぶ弱ってくれるはずだ。なのでそこを討つ」

「時間の掛かりそうな作戦ですが、気づかれずにできるでしょうか？」

「方針としてはそうだが、具体的に煮詰まる所まではいってない。なので、意見があればどんどん伝えて欲しい。光司にも考えて貰っているが、とりあえず今は救出作戦に集中しようと思う」

アナには一応作戦の目処は立っているのだが、それは敢えて言わずにいる。もし作戦が頓挫してしまった時の代案が欲しいからだ。絶対成功する作戦など無いが、それに近づけることはできる。失敗のできない作戦だけに慎重に事を進める必要があるのだ。

「とりあえず、そんな感じで宜しく頼む。あ、あと今日はお前たちは呪いを解けていくときに少し辛い目に会うと思う。だから、早めに休んでそれに備えておいて欲しい」

「辛い目というのは、具体的に言うと？」

「高熱が出たり、息苦しくなるとかだな。汗も大量にでるから、水

分はしっかり摂っておけ。でないと辛いぞ」

直前になってそんな事を言われて、なんとも言えない空気になるリュート達。事前にそう言われていたとしても、結局は呪いを解くために頑張ったとは思うが、問答無用でここに居るリュート達にとってなんとなくだまし討ちに会ったような気分になってしまうのだ。

「明日には光司に会えるんだから、それぐらい我慢しろ。じゃあ、また後でな！」

とりあえず、言う事は言ったとばかりに爽やかな笑顔を見せながら部屋を出て行くアナ。残された面々は、一斉にため息をついていた。

前夜

ぐっぱぐっぱと、義手の右手を握ったり開いたりしてみる。

意思ある鋼“ドゥエーリン”で作ったおかげで、動きに支障は無い。

脱出の際に、とっさに“ドゥエーリン”で周囲を囲ったんだけど熱がしっかりと伝わったせいで、右手を失い右目も視力が落ちてしまった。転移魔法を転移先を設定せずに発動したのは賭けだったけど、イーサルークに運良く辿り着けた。王の印が無くなって、現れた全の印。古代竜のマスターだったという初代の全の印の人との繋がりのおかげで、イーサルークへと導かれたんだろう。

アナベル＝フォーニクス。

最初に僕を見つけてくれた命の恩人。全身に火傷を負っていた僕を即座に、治癒魔法で回復して看病してくれた。彼女はこの国で一番古代竜との繋がりが強いらしく、「竜身」と呼ばれる変化をする事ができる。そんな彼女は、この国を守るために古代竜の力を借りて結界を広げたり、空に浮かぶこの島に恵みを降らせたり、外敵を駆除したりとすごく頑張っている女の子だ。

僕がここに辿り着いて目が覚めた時、落ち着くように抱きしめてくれた。右手を失い、右目も見えにくくなっていた僕は、物凄く混乱した。そして暴れまわった。右手が無くなったという事実を暴れれば消せると信じて、がむしゃらに暴れる僕を力強く抱きしめてアナはこう言った。

「右手が無くてもおまえは生きている！　生きていれば、なんだっ

てできるだろうが！　おまえにはキンタマついんてんだろ！！！」

正直、今思い返してもキンタマは無いだろうと思うんだけど、生きていればなんでもできると言われ、さらには凛々しいアナからキンタマ云々と衝撃的な発言をされ、僕は正気に戻れた。まぁ、暴れすぎて疲れて落ち着いたという話もあるけれど。最初、アナは僕の事を情けない奴にしか見えなかったので、そう発破をかけたんだそうだ。

そうやって、少しずつ落ち着いてきた僕はアナに事情を説明した。その上で心配しているであろうミミ達に連絡をしようとした。

「国の外と連絡を取るのは止めとけ。魔力を辿られたら一発でおまえの事がばれるぞ」

アナは王の印の力と長年に渡って戦ってきたせいで、奴の力に詳しいようだった。だから、ミミ達を安心させたかったんだけど、連絡をとれず終いであった。そうなると、今度は自分自身の力で会いに行くしかなかった。無くした右手を義手にして、力を蓄える必要があった。それに一時的にだろうけど、魔力が減っているようで魔力の回復をするために休養しつつ、準備を整えなければならなかった。

「なぁ、おまえは俺が怖くないのか？」

アナにそう尋ねられたのは、「竜身」を使った彼女が窓の外を横切った晩の事だった。火傷の痕が残る僕に向かってそう聞かれるのは、最初すごい嫌味な事を言うなぁと思ってしまった。だって、その時はまだ結構痕が残っていたからね。

でも、真剣な表情のアナを見てそうじゃないと分かったのでよくよ

く考えてみた。あの日、ベッドで身を起こして考え事をしていた僕は、ふと何かの気配を感じて窓の外を見た。その瞬間、大きな竜が窓の外を横切って行くのが見えた。ちらりと僕を見ていたのを感じて視線を返すとその瞳から何故か竜はアナだと確信が持てたので、笑顔でいってらっしゃいの意味をこめて左手を振った。たぶん、その行動を見てそんな事を聞いてきたんだろうなぁ。

「あの大きな竜はアナベルさんなんだよね。見てすぐに分かったよ」
「俺は竜になれるんだぞ。こうもっと何か無いのか？」

何か困惑した様子のアナだった。何か負の感情をぶつけられなくて焦ってる風でもあった。その姿から竜になって強い力を得る事ができるんだろうけど、色々言われてきたんだろうと簡単に察しがついた。

「アナベルさんは、普通に可愛い女の子じゃないですか。さらに竜になれるとか、お得な感じですよね。凄いですよ」
「へっ！？」

本当は可愛いというよりかは、綺麗な方なんだけどその時は何故かそう口に出してしまった。でも、可愛いと言われてびっくりした顔をしていたアナは可愛い顔をしていた。それから、アナと名前で呼ぶようになり僕の名前もちゃんと呼んでくれるようになった。アナは何故か僕の名前をちゃんと「こうじ」と呼んでくれる。こっちの世界だと大体が「こーじ」という感じに聞こえるんだけど。更に僕の名前の漢字までちゃんと覚えてくれたので本当にびっくりした。

「へぇ、光を司るって意味なのかぁ。いい名前だよな。それに比べて俺は名前負けしてるなぁ」
「アナベルって青くて小さくて可愛い花の名前なんだよね？　別に

名前負けしてるなんて事はないんじゃない？」
「世辞は止めろよ光司。こんなガサツで乱暴な奴があんな可愛い花の名前を付けられてるんだぜ？　まったく似合わねぇっつぅの」
「はいはい、似合いません似合いません。ちっとも似合っていませんよぉ～」
「頭撫でるな！」

ガサツだとか乱暴だとか色々言われる事はあるだろうけども、アナは本当に優しい子だ。だから、本心から似合っている名前だと思っている。そういった事もあり、僕とアナが打ち解けるのに時間は掛からなかった。僕の体力回復の為にほぼ毎日治癒魔法をかけに来てくれるアナのおかげで、焦る事無く着実に体調を戻していった。僕は勿論、アナに色々な事を話した。ヒロコの事から始まって、セリナ、ミミ、白夜。父ちゃんと母さんの話や学園の仲間の事。フレームの事まで細かく話を続けた。アナは意外と言っては失礼かもしれないが、かなり聞き上手だったので僕も話がしやすかったせいもあると思う。

そして、昨日になってセリナがリュートと一緒に僕を探しにやってきてくれた。王の印の力のせいで向こうから僕を探しに来るとは思ってなかったので、正直驚いた。一体、どうやって王の印の力の呪縛から逃れてきたんだろうか？　ミミが来ていない事も何か関係しているのかもしれないけれど、詳しい事は聞いていないから分からない。

ベッドから起き上がり、ゆっくりと立ち上がって窓のそばに立って外を見やる。

今はこれだけの動作ですら、結構な時間が掛かる。リハビリをしているので、これでもかなり良くなってきた方なのだ。それに加速度

的に状態が良くなって来ているので、あと少しで元のように動けるようになると思う。そして明日になればいよいよセリナに会える。

「さすがにちょっとびっくりするだろうなぁ」

火傷の痕は大分無くなってきたんだけど、首元から右頬にかけて少しだけ火傷の痕が残っているし、右手に至っては肘から先が義手になっている。右目はすぐにはばれないと思うんだけど、聡いセリナの事だからすぐに気づいてしまうだろう。ひょっとすると、嫌われてしまうかもしれない。そう考えると明日会うのが少し怖くなってしまう。だけど、例えセリナに嫌われてしまったとしても、彼女達にはまだ返していない恩がある。このおかしな事になっている世界を、普通の状態にしないとその恩は返しきれないだろう。

「おい、そんな所に突っ立ってないでベッドに戻れ。夜は冷え込むんだから暖かくしてろ」

「大丈夫だって。少し暑いから涼んでただけだよ」

忙しいだろうに、仕事の合間を縫ってアナが様子を見に来てくれたようだった。そこそこ遅い時間なので、今日はもう上がりなのかもしれない。

「おまえは本当に目を離せないなぁ。明日はセリナと会うんだろ？しっかり休んでおかないとぶっ倒れたりしたらどうすんだ」

「そこまで弱っちゃ居ないってば。それに僕にはこの義手もあるしね」

ちょっと自慢げに右手をアナに掲げてみせる。それに対して無言で握りこぶしを向けてくるアナ。だけど、少し甲高い音がして僕の義手に簡単に防がれてしまう。

「なんというか、義手というのに抵抗があるよなそれは。まぁおかげで安心はできるんだけどもな」
「せっかく作るんだし、色々とギミックを仕込まないと嘘でしょ。それにこれから戦う事は間違いないんだからこれぐらいの備えはしておかないとね」
「そうだ、言われてたミスリルは用意しておいたぞ。結構な量だったから運ぶのも大変だったけどな」
「ありがとうアナ。救出作戦で必要なからくりにどうしても必要だったんだ。それで幾ら掛かったの？」

代金を請求すると思われているのが嫌だったようで、光司のその言葉に鼻にしわを寄せるアナ。その様子はちょっと犬っぽかった。

「金は取らねぇよ。ちょちょいと、大人のキスをしてくれたらそれで満足だ！」
「いや、それはそれで僕の命の危機が迫る…」
「セリナ怖いよな。あいつ魔道師なのにどうしてあんなに迫力があるんだ？」
「何か計り知れない力が働いているとしか。僕もあのセリナを前にして冷静になれないから全く分かんないんだよ」

二人して黒いセリナの恐怖に怯える。本人を前にした訳でもないのにこの怖がり様。かなり二人ともトラウマになっているようである。

「とにかく明日はセリナを怒らせないようにしようね」
「そうだな、賛成だ。今日は添い寝するだけで我慢しよう」

添い寝というよりも、恐怖から一人で寝る事ができないので身を寄せ合うという感じか。その夜。怯えている二人は、そのまま手をつ

ないで寝る事で安心して眠る事ができたようだった。

再会

リュート達が寝泊りしている一角。その部屋から少し離れた所で、一人ロコは待っていた。血の呪いを解くという事は王の印の力を、一部であれ解除するという事であり同じ部屋に居ることができなかった為だ。多少の時間であればロコでも、居る事はできたのだがティナが構い倒してくるので、大人しく部屋の外で自由を満喫していたのだ。

そして、今日はいよいよ呪いが解かれる日である。ロコは部屋の外からこっそりと中の様子を伺う事にした。

朝、というよりは昼前になってようやく部屋から出てくるセリナ。それを皮切りに次々と部屋から出てくるリュート達だが、誰もがくたびれた感じでぐったりとしている。ぐびぐびと勢いよく水分を補給し、落ち着いてきた所で風呂に入りだす。女性陣から順番に入っていき、リュートはその間じっと座って瞑想していた。

「ようやく、落ち着いてきました。皆さんはどうです？」
「そうね、ちょっとだるいけど平気よ。寝起きが一番辛かったわね」
「もう大丈夫だよ。というか、何か力が漲ってくる感じなんだけどひょっとして、呪いのせいで勇者の力って抑えられてたのかな？」

セリナの言葉に、大丈夫とうなづく面々の中リュートだけは一人首をひねっていた。どうやら、呪いが解ける前と後で力加減が違うようだ。

「リュートって、今までの勇者の中でも一番力が強いとか言われてませんでしたっけ？」

「嘘か本当か知らないけど、そう言われてるわ。魔王不在なせいで、使う所は無いけどね」
「リュートはそんな力を使わなくても、立派な勇者ですから無理に力を使う必要なんてありません」
「うん、立派な勇者だ」

首をひねるリュートの傍らで好きに色々言っている女性陣。対するリュートは新しく目覚めた力に対し「グッドラック」になにやら聞いているようで、大人しい。どうも瞑想をしなくても「グッドラック」と会話できるようになっているようである。

「力の事はとりあえず良いか。今日はいよいよコージとご対面となるわけだけど、どうするんだい？」
「どうする、とは？」
「連れて帰れるのかなって。彼、怪我してたみたいだしすぐには動かせないようだから、このままアーンとの戦いに突入するには荷が重いんじゃないかな」
「でも、あまり時間を掛けると待ってるミミが、可哀想です」
「うーん、それはそうなんだけど救出作戦には僕たちだけで行って、コージはここで体調が整うまで休んで貰ってるほうが良くない？」
「それは…そうかもしれません」

リュートの言葉に力なく返事をするセリナ。今までコージが怪我をしているという事を聞いてはいたのだが、なんとなくコージなら平気な顔して戻ってくると思っていたのだ。それに待っているミミの事を考えると、コージが一緒に救出しに行くほうが絶対喜ぶと思いすぐにでもコージと一緒にミミを救出に行けると考えていたのだ。

「そんなに落ち込まないの。なんならセリナは残ってても良いんだから。ね？」

優しくそう声をかけてきたのは、意外にもティナである。その言葉に、深く考えていなかったセリナは潤んだ視線をティナに向ける。

「ううん、ごめんなさい。ちょっと自分が考え無しだったのがショックだっただけです。ミミ達を助けに行くのに、人任せにはできませんし救出作戦にはちゃんと行きます」

「む、無理しなくて良いんだぞ。セリナみたいに特化してないが、私だってファイブカラーの異名を持ってるんだから、心配しなくても良いんだぞ？」

アルミナまで援護射撃を開始するが、その言葉ににっこりとうなづくだけでセリナの意思は固いようだった。レイシスだけは、一連の流れに不満そうな顔をしていた。どうも、セリナが一緒に来る事が少々嫌なようだった。そんなレイシスに気づいたリュートは、大丈夫ですよとささやき穏やかにレイシスをなだめている。

コンコンバンッ！

「よし、準備は良いか皆の衆！」

ノックと同時に元気良く部屋に入ってくるアナ。いつでも元気一杯で悩みなど全く無い風情である。ちょっとしんみりしていた雰囲気の中、一気に明るい雰囲気に変わっていった。

「ん？　やっぱりちょっときつかったか？　お前達なら若いから大丈夫かと思ってたけど、むしろ強すぎる分呪いの力も強かったのかもな！　とりあえず、ちゃっちゃと行こうか！」

「まだ部屋から出るのは早いんじゃないんです？」

「ん？　大丈夫だ。そうやって、症状が出たらそれでお終いだから

な」

どうも人によっては早く症状が出る人間もいるようで、最速で三時間、最大でも二日以上かかった人間は居ないそうだ。ともあれ、アナが太鼓判を押してくれたのだから、セリナ達に否やは無かった。

部屋から出ると、ロコがすぐに合流してきた。ティナに捕まるより先にセリナに飛びつこうとしていたのだが、ティナのセンサーがロコを逃すはずがなく、敢え無く拘束されてしまった。そんな様子をアナは一瞥しただけで何も言わずに、宮殿へと黙って案内していく。

途中、宮殿の女官とすれ違うがアナを見るや静かにかしづき、じっと通り過ぎるのを待っている。畏敬の念をあらわす者も居れば、畏怖の対象として固まる者、恐怖のためにすくむ者などが大半であった。リュート達に気軽に接する所から、周囲との関係もそのようになっているとばかり思っていたリュート達にとってその反応は、少々面食らうものであった。

そんな様子を気にするなと言わんばかりに、口の端を上げ苦笑するアナ。そして、ようやく目的地に辿り着いたようで、とある部屋の前で一旦止まる。その部屋は扉がなく入り口が大きく取られているあまり無い感じの部屋であった。くいっと指で部屋の中を指し示し中へ入れと促すアナ。

「いらっしゃい。せっかく来てくれたのにこんな格好でごめんね」

部屋の外の気配に気づいたのか、中からそう声が掛かる。そして、その声を聞いたセリナはすぐさま部屋の中へと入る。ベッドから起き上がりこちらを見ている少年。久しぶりに会うコージを目にしたセリナは、今までとの差異に気付かず一目散に抱きつこうと駆け寄

る。

「ふっ！」
「あっ！」

あと一歩で飛びつけるという所でそんな掛け声が掛かり、気づけばセリナはコージに背後から抱きしめられていた。

「あらっ？」
「アナッ！　そんないたずらしちゃ駄目でしょう！」
「ふんっ」

どうもアナが何やらいたずらをしたようで、セリナは何故かコージとは反対の方向を向いていて、いたずらに気づいたコージが慌てて抱き止めたようであった。そして、セリナは気づく。自分を抱きとめてくれている手に。

「…コージ、この手はどうしたんです？」
「うん、アーンとやりあった時にちょっと右手が焼けちゃって、こうなっちゃった」

明るく言うコージに勢い良く振り向くセリナは、さらにコージに火傷の痕を見つけ自分を優しく見つめるコージの右目がどこか焦点がぼやけているのに気付く。

「あはは、あんまりじっと見られると恥ずかしいな。まだ火傷の痕が残ってるからね」

どこか、遠慮がちにそう訴えるコージ。その姿はベッドにいる事も

相まってどこか弱々しい。今までの頼りない風情というのではなく、触れば壊れてしまいそうな危うさが感じられる。そんなコージを見て、たまらなくなったセリナは静かにコージを抱きしめる。

「む、うぐっむぅっ！？」

「あ、ご、ごめんなさいっ！」

自分の谷間の凶器さを忘れていたセリナは慌てて抱きしめていた手を緩める。そして、そんな様子を今まで黙ってみていたアナがずかずかと近寄ってきて、コージとセリナの間に割って入った。

「とりあえず気は済んだだろ？　光司はまだ病み上がりだから無茶させるな」

「はい、すみません。コージ、大好きですからね！」

弱々しいコージを見てられず、安心させるかのようにそう宣言するセリナ。その言葉にどっと安堵した様子を見せるコージ。むくれるアナ。取り残されているリュート達。久しぶりの再会はそうやって幕を開けた。

光司の知っている事

「えっと、どこから話そうかな」

ベッドに起き上がった光司は、左右にアナとセリナに挟まれながらそう切り出す。

「まずは、あのコージの偽者。アーンについて知ってる事を教えて欲しい」

「あの偽者アーンって名前なのか。あれっ？　なんで豆柴がいるの？　しかも黒」

「マスター、ボクはロコ！　ちょっと訳有りでこんな事になったんだ！」

話が進みそうで進まない。だが、今は仕方ないかと少し諦めるリュート。だが、そんな事はロコを抱いているティナが許さなかった。

「ロコの事は後にして。早くアーンについて知ってる事を話してくださいコージさん」

「なんか、ロコが嫌がってるみたいだけど…なんでもないです。えっと、アーンの事だね」

僕もちょっと戦っただけで知ってる事は少ないけれど、と前置きをしてから光司は語りだした。アーンは自分の能力を完全にコピーしていると。その上で自分より使いこなしているし、王の印を持っているからどうも好き放題人の意識を変える事ができているらしい事や、生身になってはしゃいでいたので、元々は何か違う存在だったみたいな事など、戦いの最中に得た記憶を元に情報を提供した。

「その上、コージの記憶もしっかり持っている訳だよね？」
「そうだね。その点については思い当たる節があるから、間違いなくあると思う」

光司が分身を利用していた際に、記憶を保存していたオーブ。あの中に入っていた情報はある意味光司のすべてと言っても過言ではない。光司はそれを基にして作り上げたのがあのアーンだと推測していた。

「でも、ロコはどうしてここに居られる訳？　王の印の精霊なら、アーンの傍から離れるのは難しいんじゃないの？」
「うん、ボクの力のほとんどはアーンに吸収されちゃってるよ。今はリュートの勇者の力のおこぼれで生きながらえている感じなんだ」

ティナの腕の中で窮屈そうに返事をするロコ。

「じゃあリュートと一緒に居れば、ロコも大丈夫って事だね？」
「そうだね。少なくともしばらくは。アーンが気づけば何かしてくるかもしれないけどね」

とはいえ、現在は王の印の力を遮断しているので見つかる確率は極めて低いので安心しても良いとも言える。

「で、ロコはアーンの目的は何か分からない？」
「世界を好き放題できる世界にするみたいな事は言ってた。アーンはちょっと勘違いしてる所があって、自分が悪意とか闇とかそういう負の部分を司る精霊だと思ってるんだ。そのせいで、世界に混乱をばら撒こうとしてる」
「魔石獣が最近活発になってきたってアナから聞いたけど、それも関係があるのかな？」

良く見舞いに来てくれるアナから、領地の見回りの間に魔石獣と最近よく遭遇するようになったと聞いていた光司は何か関連があるのではないかと考える。

「うーん、関係なくは無いと思うけどボクにもちょっと分からないんだ。そもそも魔石獣がここまで増えてるのが良く分からないんだ」
「でも何か関係があると見て置いたほうが良いだろうね。タイミングが良すぎる」
「それは、魔石獣もアーンの指示通り動くかもしれないってこと？」
「それぐらいできてもおかしくは無いだろうね」

光司は冷静に敵の戦力を分析しようとしているようだ。そんな光司の様子にセリナも何ができるか考え、ふと情報を得る為に便利な衛星を破壊した事を思い出す。

「コージ、ごめんなさい。衛星を壊したの私なんです」
「それで衛星が使えなかったのかぁ。まぁ、また作るから大丈夫だよ。でも、どうやって狙ったの？」
「狙いは僕が指示したよ。なかなかに難しかったけどね」
「リュートの視力は一体どうなってるのさ…？」

見ようと思えば、どれだけ遠くても視る事ができるそうだ。さすがに透視はできないようだが。そして、やはり戦いを始めるには情報収集が必要だと感じた光司は、もう一度衛星を作る事を決意した。ただ、アーンも同じものを作る可能性があるので、排除する機能を付けた衛星も用意するつもりだ。

「で、アナから聞いてると思うけどバルトス国で救出したい人を教えて欲しいんだ。どちらかというと影響力のあるような人が良い。

いや違うな、敵に回ると厄介な人か」
「でも、そういう人こそ既に向こうも押さえてるんじゃないか？」
「うん、だから救出といっても身代わりを残すつもり。前に作ったアバターシステムが今回の作戦にすごく役に立つんだ」
「アバターシステム？」

すでに一度利用しているセリナと光司から聞いているアナは理解を示しているが、ほかの面々は首をかしげるばかりだ。なので、おおまかな概要を伝え納得して貰う。

「ちょっとだけ、改造しておく必要はあるんだけど材料はアナに用意して貰ったし、後は必要な人数分のアバターを作るだけなんだ」
「え、でも救出して欲しい人の似顔絵なんて描けないし持ってないわよ？」
「うん、だけど記憶はあるよね？　だからこのオーブに助けたい人を思い浮かべて触って欲しいんだ。そうする事でその人の情報が記憶されるから、その情報を元にアバターを作るから安心して」

ティナのもっともな疑問に、なんでもないように答える光司。ティナは光司ができると言うのでそれ以上は追及せずに、再びロコを愛でる事に戻る。

「でも結構な人数になると思うけど、そんなにたくさん作ってコージは大丈夫なのかい？」
「うん、特殊な金属を使うからたいした手間はかからないんだ。細かい情報は欲しいけど、それさえあれば、簡単に作れるよ」
「光司、“ドゥエーリン”を作るのは程ほどにしとけよ。まだ魔力は回復しきってないんだからな」
「大丈夫だってアナ。そこまで魔力が要るものじゃないから。それに、早くしないとどんどん洗脳されてっちゃうから…」

光司はるりや勇司、ミミが心配なので一刻も早く救出に行きたい気持ちがあるのだ。ただ、現状に自分を省みて焦っていてはうまく行くものも行かなくなるので、必死に抑えているだけなのである。

「あぁ、コージ。ミミちゃんなら王の印の力に侵食されてないよ。自力でどうにかしてるみたいだし」

「そう、ですね。ミミはおかしくなってた私を正気に戻してくれました。ミミの力でひょっとしたら見えてるのかもしれません」

「そっか、ミミはとりあえず無事そうなんだね。一人でアーンの傍に残ってるって聞いてちょっと心配してたんだ」

となると心配なのは、光司の前の王の印の力の持ち主であった勇司である。力を求めた際に何かあったという事を以前聞いた事があるので、なにがしかの影響がある可能性が高い。るりが一緒に居るらしい事は聞いているのだが、るりが勇司を守れるのか、そもそも自身を守れるかはまったくの未知数である。魔力は高いようであったが、実際に魔法を使う所を見る事は少なかったのだ。

「悪いけど、今回は敵に回ると大変な人を優先的に救出します。一般の人も助けたい気持ちは分かるけど、それをしてしまうとキリが無いから」

「でも、助けないって訳じゃないんだろ？　なら、良いさ。個人的な知人にはちょっとしたお守りを渡せばそれで事足りるし。それぐらいは良いだろ？」

「うん。そうだね、何か作るなら僕も手伝うけど」

「いやコージはさっき言ってたアバターとやらを作るのに専念してくれ。ティナも居る事だし、なんとでもなるさ」

そういってティナの頭を撫でるリュート。もっともティナはすぐさ

ま、うざったそうにその手を払いのけていたが。

「そっか、ありがとう。ごめん、ちょっと疲れたみたい。今日はこれぐらいで良いかな？」

ひさしぶりに大人数と会話をして、少し疲れた様子の光司。良くなってきたとはいえ、やはり少々疲れやすいようであった。

「あまり無理するな光司。力は戻ってきてるみたいだけど、まだ体力が回復してないんだ」

「うん、そうみたいだね。ちょっと休ませて貰うよ」

「分かった、ゆっくり休んでくれコージ」

そういってベッドに横になる光司を見ながらリュート達は静かに部屋を出て行く。

「じゃあ、私はいつもどおり一緒に横で休みますねコージ」

「あ？　いつもどおりって何だ？」

「しー！　静かに！」

見れば光司はすでに眠りについているようだ。なんだかんだ言って、セリナが傍に居る事で安心したのだろう。そんな光司の様子にどこか納得の行かない様子のアナ。気持ちとしてはセリナと同じようにここで休んで行きたい所ではあるが、いつもの役目がある以上そういう訳にもいかなかった。

「光司に変な事するなよ？」

「アナじゃないんですから、寝てる間にそんな事はしません」

笑顔できっぱりそう言われたアナは、顔を真っ赤にして黙って出て

行ってしまった。そんなアナの様子をみてセリナは少し黒くなる。

「あら、少しカマをかけただけなんですが、これは昨日何かしましたね…」

そう言って傍らで眠っている光司を責めるような目で見るセリナ。だが、安らかに眠ってる姿を見て黒いセリナはどこかに行ってしまったようだった。

「ほんと、目を離すと駄目ですねコージは。でも、アナはコージの命の恩人みたいですし少しは我慢しましょうか」

そう呟き、もそもそとコージの右手を取り横になるセリナ。ちょっと変わってしまったコージを自分に馴染ませるようにしっかりと抱きしめて、セリナは光司をじっと見つめていた。

バルトス国飛躍の懸念

ガイアフレーム大増産計画。

王子の指導の元、ロバスではガイアフレームの生産が活発に行われていた。四つのブロックがまとまって同タイプのフレームを生産している為、新商品の開発は滞っている。だが、それに対して各工房に不満の声は無く、一致団結して生産に当たっていた。

それに対して、危機感を抱いているのは他国の間者である。

バルトス国は豊富な資源を海上、陸上を問わず輸出する事によって巨万の富を得てきた。ハイローディスに守られた形になっている地理的な条件も相まって、攻め落とすにはまずハイローディスを落とすか、海上戦力を整える必要があった。だが、バルトス国と違いよつどもえとも言える国境の為、うかつな戦力分散は即座に攻められる要因となる。今まではたかが商人の国と侮っていたのだが、ここにきてガイアフレームの大増産という戦力の増強を計られるのは、他国への侵略の兆候であるといえた。

ガイアフレームは正直金が掛かる。

メンテナンス用の予備のパーツや資材、整備する人間にライダーの養成。格納庫の警備関連に開発用の予算やルーツ確保のための費用など多種多様に渡って金がかかるのだ。そもそもが魔石獣から国を守るという任務があるせいで、損耗率も高い。しかも、バルトス国にてガイアフレームがどんどん開発され代替わりしていくせいで、修理をするより買い替えをする方が結果的に安上がりな事もある為、早い頻度で機体の入れ替えが行われ余計に予算がかさむ事になる。

そのせいで軍事大国と呼ばれるクラエトライですら、四百機のガイアフレームを確保するのが精一杯であった。しかも旧式のフレームもかなり混じっている数字だ。他国においても、事情はあまり変わる事はない。ただ、どこの国も貴族が私有しているフレームがある為、総戦力を考えるとこの数字は上回る。

とはいえ、今回バルトス国が隠すことなく増産しているフレーム。その数、五百機。

すでに保有している百五十機と合わせると大陸有数のフレーム保有国となる。まずハイローディスを攻め落とし、左回りでも右回りでも好きなように一国ずつ攻め落として行く事もできるであろう数字であった。ガイアフレームだけが戦争の決め手とは言えないが、バルトス国は飛行フレームまで完成させている事もあり、他国の危機感は否応無しに上がっていくのは仕方のない事である。

そして、自国の消滅の危機を感じ取ったリリノアは、バルトス国の真意を確かめるべく単身コージ王子へ面会を申し出た。

「急に面会を申し込んできてどうしたんです、リリノアさん」

「まずは急な申し出を受けて下さって感謝しますわ、王子。この度はどうしても伺いたい事ができましたので、こうしてやって参りました」

以前、助けられた際とは違う雰囲気に戸惑いながらもそう切り出すリリノア。この短い期間に王子の身に何かがあったとしか思えない変貌ぶりである。

「ふふ、婚約者なんですからそう畏まらずとも結構ですよリリノア

さん。で、聞きたい事とはなんでしょう？」

王子は聞かれるであろう事は確実に気付いている筈だが、何も知らない風を装って静かにほのかに湯気の立つカップを口にしている。態度も落ち着いたもので、リリノアが聞きたい事に関与していないのではないかと思われる程の落ち着きぶりであった。

「単刀直入に伺います。何故、ガイアフレームをあれだけ増やしているのでしょうか？　あれほどの数を生産するとなると他国も黙っていないと思いますが」

「ははっ、リリノアさんは本当にまっすぐですねぇ。良いでしょう、正直に答えます。あれはこれから来る魔石獣の大量発生に備える為なのです」

リリノアの間者を放っている事を隠すつもりのない怖いもの知らずな質問にうれしげに答える王子。だが、その答えにはリリノアは満足しない。

「お戯れを。五年ほど前にロバスで大量発生してユージ王が食い止めた話は今でも語り草になっております。周期的に言えばバルトス国に魔石獣が大量発生するのはまだまだ先の話。別の意図が隠れているとしか思えませんわ」

「別の意図とは何でしょうか？」

「戦争、ですわね。そうであれば我が国にふたをされた形のバルトス国がどこを真っ先に攻めるのは自明の理。それを止めたく思うのは自然な流れではないでしょうか」

リリノアがそう思うのは勝手であるが、動き出した計画をそう簡単に止められるものではない。見返りが無ければ人も国も動かない。

「で、リリノア姫は何を用意してきてくださったのです？」
「現物が届くのは少々先になるのですが、我が国が保有するルーツの詳細なデータです。他にもフレームの運用方法についての極秘資料もお渡しできるかと思います。そして、私とあなたの間にできた子供に対してのハイローディスの王位継承権です」
この場合飲まれるのはハイローディスかバルトスか。その時の国の力関係で変わるものではあるが、開戦を少しでも長引かせたいハイローディスとしては、それぐらいの条件を出すのは当然であった。
「あはははははっ」
「…これでは、足りませんか」
真剣な訴えを前にさも楽しげに笑い出す王子に、搾り出すように問うリリノア。この条件も確かに良い物とは言い難いが、資産が豊富にありフレーム生産の技術においても秀でているこの国にハイローディスが提示できるものはあまり無いからである。
「いやいや失礼。別にその条件がおかしいという訳で笑ったんじゃないんです。そのリリノアさんの中ではバルトス国が侵略を開始するのが前提となっているのがおかしかったんです」
「…？　では、本当に侵略の意思は無いと仰られる？」
「えぇ、勿論ですよ。僕としてはこのバルトス国で手一杯ですからね。フレームが五百機あっても、魔石獣の大量発生に対抗できるか難しい所なのです。しかも、僕の予感だと生産が間に合わない可能性すらあるのです」
リリノアが見ても、本当にフレーム増産は魔石獣に対抗する為のものとしか見えない王子の発言。だが、それだけの力を持った人間が魔石獣を倒しただけで由とするであろうか。そういった懸念はある

ものの、これ以上つついて蛇を出すのも得策ではないと考えたリリノアは、追求するよりもより良い確約を貰う方向へと思考を切り替えた。

「そうでしたか、私のとんだ早とちりのせいで王子には不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした。お許し頂けるでしょうか？」

「いえいえお気になさらず。愛国心の表れだと思えば特に気にならないですし。願わくば我が国に輿入れした後は、バルトス国に対して同様に思って頂ければ幸いです」

「ええ、それは勿論ですわ王子。でもやはり故郷は恋しくなるものです。バルトス国に魔石獣が大量発生するのであれば、ハイローディスも無事には済まない可能性もありますので、お願いがあるのですが」

「なんでしょう？」

「宜しければ我が国にもフレームを買い取りさせて頂きたいのです。図々しいお願いなのは承知しておりますが」

生産されているフレームの内少しでも買い取る事ができれば、それだけバルトス国の戦力増強を阻むことになる。財政が厳しいことも知っているが、ここで金の出し惜しみをしていては結局は後悔する事になるであろう。

「うーん…それは難しいかもしれないですね。ですが、リリノア姫のたっての頼み。なんとか都合をつけましょう」

「本当ですかっ！？　ありがとうございます！」

もっと条件を提示してくるかと思ったが、思いのほかすんなりと行き本気で喜ぶリリノア。普段であれば裏があるのではと疑うところであったのだが、焦りがリリノアの油断を誘っていた。

「それでは、そのように手配致しますのでまた使いの者を送ります」
「ありがとうございます。本当になんとお礼を言えばいいか…」
「リリノア姫の優しい心根を垣間見せていただいたこちらこそ、お礼を言いたいぐらいです。願わくば両国の繁栄をこれからも続けられるようお願い申し上げます」
「本日はありがとうございました。これからも宜しくお願いしますわ、王子」
「ええ、それでは」

こうして王子とリリノアの面会は、両者ともに抑えきれない喜びを与えつつ滞りなく終了した。明るい喜びと暗い喜び、似て非なるものが生まれた。

準備

「なんか、不思議な感覚だね」

肩をぐるぐる回し、おいっちにーと体を点検するかのようにほぐしているリュート。ティナやレイシス、アルミナも同じように体を動かしている。

「おかしな所は無いと思うんだけど、ちょっとでも変な所があったら教えてね」

アバターの作動点検。救出作戦をするにあたって、参加メンバーのアバターを実際に使用して貰って違和感がないかのチェックを行っていた。以前に作っていたシステムなので問題はないとは思うが、人によっては何か違和感があるかもしれないので、念には念を入れて入念にチェックをしているのである。

「あのちょっとご相談が…」

「レイシスさん？　なんでしょう？」

レイシスがくいくいと光司をひっぱり、少し人の輪から外れた所へと連れて行く。

「このアバター？　なのですが、まったく私の体型と同じなのですがコージさんは何故私の裸をここまで忠実に再現できてるのでしょうか…？」

レイシスがなにやら、ごそごそとしていたのは色々と自分の体を見ていたらしい。そしてあまりの一致ぐあいに、これを作った光司は

すごい変態だ！　と思った訳ではなく、なにやら考えがあるようだった。

「えっと勘違いしないで聞いて欲しいんだけど、僕は数字でしか分からないから実際にレイシスさんの裸を見たわけじゃ無いです。それに忠実に元の体を再現してくれているのは“ドゥエーリン”のおかげで僕の力だけじゃないんです」

「いえ、そこはどうでも良いんですがちょっとお願いがあるんですけども」

「え、気になるのはそこじゃないの？」

「そ、そのですね…」

なにやら赤い顔をして、光司にこっそりお願いをするレイシス。レイシスがリュート以外の男性と話をするのが珍しいので皆が注目しているのだが、そんな事情を知らない光司はなんだか責められてる気分になって非常にいたたまれなくなっていた。そして、レイシスのお願いを聞いた光司はそのあんまりな内容にちょっと顔を赤らめた。

「えっとできない事は無いんだけど、それはなんというかそのぉ…」

「良いからできるなら、ささっとやっちゃって下さい！」

「なんというかせっかくの“ドゥエーリン”が、こんな風に使われちゃうとか…」

レイシスの剣幕に渋々という感じで、なにやらぶつぶつ言いながら調整を行う光司。するとレイシスのアバターが分かりやすく変化した。一部分が盛り上がり、服が妖しい感じになってしまっている。

「ふふふ、お礼を言っておきますねコージさん」

「お安い御用です。お安い御用なんですけど、うーん…」

レイシスがお願いしたのは、胸をセリナの大きさにして欲しいという物。セリナのデータがあるので、まったく同じものを再現できるのであるが、今はアバターを動かして違和感が無いかを調べていたので、まさかそのようなお願いをされるとは夢にも思わなかった光司は、ちょっと納得いかない顔であった。

「ほらほらリュートッ！　これだけ大きければ色々できますよねっ！　具体的には挟んだり、埋もれたり、洗ったり！」
「ほんとだ、凄いねぇ！　夜が楽しみだ！」
「ぶほっっっ！？げほっごほっ！」

レイシスとリュートのやりとりに盛大にむせる光司。そこへセリナが真っ赤な顔をしてリュート達の夜の情事を伝える。それを聞いて光司もセリナ同様に真っ赤になる。そして、そこへ真っ赤な髪のアルミナが必死の形相で近寄ってきた。

「コージ、さん！　わ、わたしにもセリナの胸を！」

レイシスを見て焦ったアルミナは自分の胸を持ち上げながら光司に必死に訴える。台詞はおかしくないのだが、客観的に見れば謎な台詞である。もっともアルミナに自覚は無い。

「セリナの胸って…」

そう呟いてはっと思い至る光司。レイシスにセリナの胸。夜にはリュートといちゃいちゃ。ということはセリナの胸があんなことやこんなことされちゃう…？　とか考えていると何故か早速レイシスがリュートに胸を触らせようとしているのが目に入った。

「わぁぁあああ！　待った、ちょっと待ったぁーーー！」
「お？」
「きゃっ？！」

リュートがレイシスの胸に触れるまさにその直前で、なんとか阻止する光司。そして、慌てて調整をしてレイシスを元の設定に変更した。

「あ！　なんで元に戻しちゃうんですかぁっ？！」
「ありゃ残念」

当然のように抗議するレイシスとがっかりしているリュート。そんな二人を負けじと睨み返す光司。

「レイシスさん、セリナの胸を使ってなんて事しようとしてるんですか？　そんな風にするなら絶対設定の変更はできません！」
「セ、セリナの胸だけど、私に付いてるんですから良いじゃないですか！」

光司の剣幕に一瞬たじろぐも、すぐさま言い返すレイシス。リュートは何かに気付いたのか、すごく良い笑顔である。

「駄目です。セリナのデータを元にしてるんですから、セリナのなんです。レイシスさんに付いてても、それはセリナがされてるのと変わり無いんです！　だから、そんなの絶対駄目です！」
「コージさんの意地悪！　リュートをもっと悦ばせたいだけなのに！」
「ままま、レイシス。ちょっとちょっと…」

ぷんすか怒るレイシスをぐいっと引き寄せて、なだめるリュート。

ついでに何かささやいているようである。その様子を見て光司は、リュートはこのリア充めっ！　と敵意をあらわにする。

「それは嫌です！」
「でしょ？　コージが怒ってるのはそういう事。わかるよね？」
「…分かりますけど残念です。せっかくの機会でしたのに」

何故か光司を置いてけぼりにして、いちゃいちゃしだすレイシスとリュート。そして光司に放置され、さらにはリュートにも気にかけて貰えず、なんだかちょっぴり悲しくなっているアルミナ。セリナは何故光司が怒り出したのか分かり、嬉しそうに微笑んでいる。

「というわけで、お騒がせしました。でも、セリナのじゃなくても良いからレイシスの胸を大きくできたりしないの？」
「できない事は無いと思うんだけど、下手にいじると造り物っぽくなっちゃうと思う」
「そういうもんなの？　まぁ、今は別に無理にして貰う必要はないから、今度じっくり時間をかけて試して欲しいなぁ、だめかな？」

さわやかな顔をして、結構駄目なお願いをしてくるリュートに光司の勇者という存在に対するイメージがガラガラと音を立てて崩れていくのを感じた。だけど、むしろ崩れてしまったほうが親しみやすいな、とも思った。

「時間があればね。まぁあんまり期待しないでね」
「分かった、期待して待ってるね。それはそうとコージ」
「ん、何？」

がしっとコージの肩を掴み、体を寄せてリュートは光司にだけ聞こえるようにささやく。

「セリナちゃんとはまだしてない訳？　仕方がわかんないの？」
「なっななななにを言うかなぁ！？」
「いやいや、ナニの事だけど。分かんないなら僕がティナ達とする所見て勉強する？」

一瞬何を言われているか理解できず、ぽかんとしている光司。だが理解が頭に浸透していくにつれて、リュートのとんでもない提案にリュートを見つめる。レイシスだけでなく、他の女の子ともそういう事しちゃってるのですかっ！？　とリュートの顔を見ていると自然と顔が赤くなる。

「コージ、悪いけど僕にはそのケは無いから。というかさ、こないだセリナちゃんに覗かれてた時に妙に興奮したからさ、ちょっとコージに勉強がてら手伝って貰おうかなって思ったんだけど、どう？」
「…興味はあるけど、え、遠慮しときます…」
「残念。セリナちゃんと一緒に覗けば、そういう雰囲気にもっていきやすいと思ったんだけどなぁ。まぁ、気が向いたらいつでも相談してよ。ねっ」

今まで関わった事の無かったオープンスケベにとまどいながら、うなづく光司。そして、光司を見ていたセリナと目がばっちりと合ってしまい赤面してしまう。こうして光司にとって未知の体験をしたアバター作動試験はつつがなく終了した。

「コージ、大丈夫ですよっ。リュートにできるんですから、コージだって私とミミとヒロコと白夜ぐらいまとめて相手できますよ」
「なんでそんな自信たっぷりに言い切るのセリナッ！？」

つつがなくとはいかなかった。

いい湯だな

うーん、体力が戻ってきたとは言えやっぱりまだまだ本調子には遠いんだよね。今日はアバターの調整をするぐらいはできたんだけど、終わったら疲れがどっと出てきてすぐに寝てしまった。なので、今は変な時間に目が覚めてしまってどうしようか悩んでいる。

セリナが僕のベッドで一緒に眠るようになってからは、アナも当然のように一緒に寝るようになった。一人でゆっくり寝たいなというのは、贅沢な悩みだというのは理解できるんだけど、良い香りと感触のせいで暴走しそうになるのを抑えているのはかなり辛い。

ロバスに居た頃は何故かすっきりする日があったりしたので、こういう事は無かったんだけどなぁ。

静かに行儀よく僕の右手を抱きこんで眠るセリナに、恐る恐るという感じで左手をそっと掴んで僕の肩におでこをくっつけて寝ているアナ。うん、普通はセリナ達みたいに大胆には慣れないよね。二人に捕まっている状態なので、そっと腕を抜き静かに身を起こす。

ヒロコは力の半ばをアーンに奪われ、白夜は大破したままで僕が治すまで人の姿を取ることはできない。ミミはアーンの傍で捕らわれているも同然の状態。ロバスに居る仲間もある意味人質みたいな状態だ。父ちゃんと母さんもグレイトエースから動いていない所を見るとアーンに何か手を打たれたんだと思う。

携帯を取り出してすぐにでも連絡をつけたい所だけど、そんな事をすればアーンに気付かれるのは間違いない。そして今度奴に見つかれば、弱ってる僕なんかすぐに殺されてしまう。今までなんだかん

だで殺気を向けられたりしたけど、結局は王の印のおかげでというかアーンのおかげで生き延びてきたという話で、そのアーンが僕に刃を向けてきたという事は自分の身は自分でなんとかしないと簡単にやられてしまうだろう。

ならば、躊躇ってる余裕は無い。

治癒能力を飛躍的に上げてくれるナノマシンを作り、力をフルに発揮できるようにならなくてはならない。今までは魔力が減衰していたおかげで、作成能力は限られていたけど毎日欠かさず“ドゥエーリン”を作り魔力の回復をはかっていたおかげで、ようやく魔力に関してはほぼ元通りになってきた。

そして、王の印が無くなって分かった事。何をするにしても代償が必ず必要だという事だ。

今まで記憶にある漫画や小説の知識を利用していたのだけど、この世界の法則にのっとっていない物は、必ずといって大きな代償を必要とするのだ。寿命が少し減るとか、魔力の上限が削れるとか、肉体にダメージが帰ってくるとか、記憶の一部が失われるとか。今まで何もそういった代償を求められなかったのは、すべて王の印のアーンが肩代わりしていたからだ。いや肩代わりといっても、後でとんでもない利息をつけて取り立てるという話なので、闇金みたいなものだろうか。

そして今僕が作ろうとしているナノマシン。こちらの世界の法則にのっとって作ろうとすれば、一から自分でナノマシンの制御プログラムに素材の作成を行わなければならない。正直いってそんな事はできるわけもないので、新たに僕に浮かび上がった「全」の印。この力に頼る他なかった。始まりの印とも言われているこの印には、

王の印の力も含まれている。なので魔力を消費してナノマシンを作る事はできるのだ。勿論、代償は要る。僕の寿命の十年分だそうだ。

正直、これでも少ない代償だと思う。それにまだまだ寿命なんてピンと来ないせいでタダも同然な気がしているぐらいだ。自己増殖、進化、治癒、防衛、隷属などの機能を盛り込んでいるナノマシン。一つ作ってしばらく待って置けば勝手に僕を守るために増殖し、体調を整えてくれる。僕の意思に反応する上に、機能が足りないと思えば追加で増やす事もできるはずで、自分を守る為の物としてはかなり良いものだと思う。

だけど、斬られても即座に回復しちゃうとかって、人で無くなるって事なんだよねぇ。

実際にはすぐには回復しないんだろうけど、明らかな致命傷であっても時間があればナノマシンの機能が僕を元に戻してくれるだろう。

うん躊躇ってちゃ駄目だよね。さっそくナノマシンを作って動けるようになろうか。

「全」の印に願う。それだけで僕の意思を受けて代償を得て力を発揮してくれる印。この印はこちらから願わなければ何もしない。「全」というだけあって、全ての印の力を持って居るのだけど、自動で持ちうる全ての力を発揮してしまうと、打ち消しあったり反発したりするものもあるので、結局力を出し切れなくなってしまうからだ。

「さてさて、よろしくお願いしますよナノちゃん」

僕の呼びかけに反応するかのように、じわりじわりと体が何かに浸

っていく感覚が分かる。見た目には何も変わった所は無いけれど、ナノちゃんがいい仕事をしてくれてるようだ。現状の状態をよくするというだけなので、無くなった手が元に戻ったり、視力が回復するということは無い。火傷は…治ってるみたいだ。あら、視力も回復してきたかな。手はすでに傷口がふさがっているという事もあり、いくら待っても手は生えてこなかった。まぁ当たり前か。まぁ、これからは腕が落ちても足が落ちても、ナノマシンがくっつけてくれるだろうし簡単には死なない体になった。さすがに首を落とされると死んじゃうかもしれないけれど、試すつもりはない。

僕は測定で特に目立って良い能力は無かったんだけど、魔力に関してはちょっと凄い能力があった。それは回復速度が桁違いという事と魔力操作に関しては他の追随を許さない程の物だという事だ。現在、ナノちゃんは僕の魔力を消費しながら動いているけども、消費されていく片っ端から回復していく。なので、どれだけナノちゃんが増えても僕の魔力が枯渇すると言うことは無いだろう。まぁ、魔力総量を上回るような消費量であれば無理なんだけど、ナノちゃんはそんなに魔力を食わないエコな仕様なので、大丈夫だと思う。

セリナとアナを起こさないようにそっとベッドから出る。

長い間、体を拭くだけだったからお風呂に入りたくなったのだ。リハビリと称してここの宮殿を散歩していた時に、お風呂の場所はちゃんと聞いておいたから道に迷うことも無い。あ、着替えないなぁ。お風呂で洗って乾かそうか。着てる物って全部アナが用意してくれた物だから僕はどこに何があるか全く分からないんだよねぇ。うん、仕方ない自分で洗って乾かしてもう一度履こう。

そうと決まれば、風呂場へと直行しよう。あっとその前に。

「えっと、護衛の人さんちょっとお風呂行ってくるから。僕はご覧のとおり治ってるから見守ってくれなくても大丈夫ですよ」

いくら怪我をして寝込んでいてても、気配を殺して傍に控えている人達の事ぐらい察知できる。なんだか凄い成長したよね僕。元の世界に居たときにこんな事ができるようになるなんて思っても居なかったよ。

そして、鼻唄まじりに部屋を出てお風呂へと向かう。あらっ、護衛の人は心配なのか一人着いてきてる。まぁ、アナから厳命されてるかもしれないから仕方ないか。とりあえず護衛の人は気にせず、お風呂ですお風呂。

脱衣場で服を脱ぎ、いそいそとお風呂へ行く。贅沢にもここは温泉をひいてあるので二十四時間いつでも入ることができるのだ。なので、夜遅くであっても、朝早くでも人がいることが在る。そう聞いていたので、お風呂場から人の気配がしていても特に気にせずにお風呂場に直行した。

ざばぁっとお湯をかけて、少し温まる。先に体を洗って…うん、詳しく説明する必要は全く無いよね。とにかく、体を洗ってお風呂に浸かった。久しぶりのお風呂をじっくり堪能していると女湯の方が騒がしい。露天風呂だからよく聞こえてくるんだけど、こんな時間に騒いでるとか元気だなぁ。明日から忙しくなるし今はゆっくりお風呂に入って英気をやしなうとしますか。うん。

これから

お風呂から上がると着替えがちゃんと準備してあり、見守ってくれている護衛の人に感謝しつつ新しいそれに着替える。一応、風呂場で洗って乾かした服一式はそのまま部屋に持って帰る事にした。ベッドでは、セリナとアナが眉にしわを寄せてお互いを牽制するかのように手を向けて寝ていた。寝ながら一体何をやってるんだか。すっきりして眠くなってきたので、微妙にできているベッドの隙間に潜り込み寝ることにした。

「光司、おい起きろ」

アナが頬を指でつついて僕を起こそうとしている。いつの間にかぐっすり眠っていたようで、ついさっき寝たばかりな錯覚に陥る。

「ふはぁ…おはようアナ」
「うんおはよう。んじゃ早速」

寝起きでちょっと寝ぼけていたい僕に、朝からむちゅぅと吸い付いてくるアナ。昨日も寝起きは口臭が気になるから止めてと言ったんだけど、それが良いんだと断言されて今日も強烈に吸い付いてくる。くんくんと鼻を鳴らしながら、今日は大胆に舌を絡ませてくるのでなんか、ワンコに朝から顔中を舐められてる気分になる。ちょっと匂いフェチで動物っぽい所があるよねアナは。

などと冷静に分析しているように思いますが、右手の義手にかかる圧力がすごい事になってきているので、浮かれられないというのが現状です。セリナさん、義手だからといってそんなに思い切り力をこめないでください。

「セ、セリナおはよう」
「…」
あまりの圧力にアナをなんとか引き剥がし、そう挨拶をするも目を閉じたままでいるセリナ。アナのよだれでベトベトしている顔を拭き、セリナに軽くちゅっと挨拶をする。たぶんこれで間違ってないはずだ。
「おはようございますコージ。でも、アナより先に起こして欲しい所です」
「何言ってんだ？　自分で起きりゃ良いだろ」
「そんなアナみたいに、自分からなんてできません。はしたない」
「なにぃ！」
「なんですか？」
「二人とも落ち着いて。朝から喧嘩しないの」
意外にも喧嘩するほど打ち解けている二人に驚きつつ、そうたしなめる。だけど、僕がたしなめるのはまったく持って逆効果だった。
「そもそもの原因はコージが、ちゃんと優先順位を守ってくれないからですよ？」
「何言ってんだ、俺が一番なんだから間違いないだろ？」
「強引に自分からしてる方は、勘定に入れません。コージからして貰う事が重要です」
「なんだそれ。そんなに待ってられるか。俺はしたい時にする！」
「アナは自分に自信がないから、コージを襲う真似をするんですね。自分に自信があれば、黙っててもコージはしてくれますもん」
「な、なにぃ？！」

あー間違いなく嫌な予感しかしない。というか、ここに来てからスキンシップが過激になってきてる気がするのは、リュート達の影響だろうか。あのリア充どもめ。

「じゃあ、光司！　俺、裸で待ってるか…」
「はい、ストップ！　ちょっと静かにしようね二人とも」

このまま暴走していく気配があったので、二人を制止してベッドから跳ね起きる。

「え！？」
「コージ？！」
「この通り、回復いたしました。魔力のほうもほぼ全快したから、これで僕も普通に動けるようになったよ」

得意げに二人にそう宣言するも、アナはそんな僕をじっと見つめる。

「光司、おまえまた何を無茶した？」
「言うほど無茶じゃないよ、アナ。知識にある機械を作って治療しただけだから」
「機械？　どこにそんなものがあるんだ？」
「目に見えないぐらい小さい奴だからね。それがたくさん僕の体に入って治してくれてるんだ。本当に小さいから、代償もそんなに無かったから、心配しなくていいよアナ」

アナは「全」の印についてある程度の事を知っているので、そう付け加える。心配するような探るような目をしていたアナは僕の言葉にとりあえず、納得したようだ。平均寿命が八十歳ぐらいある内の十年が無くなっても七十歳。それでも、結構な寿命だから軽い代償だよね。

「コージ、代償って？」
「うん、王の印が無くなって新しく印が浮かんできたんだけど、その印は何か力を使おうとすると代償を求められるんだ」
ぐいっと耳をひっぱられて強引に振り向かされて、セリナに返事をする。じぃっと目を見詰めながら話を聞いていたセリナだけど、なにやら疑いの眼差しを向けてくる。
「で、そんなに無い代償とやらは「具体的に」どういう物だったんでしょうか？」
「えーっとぉ…」
具体的にという所を、強調して尋ねてくる。さすがはセリナ、隠し事できないっす。
「寿命がちょっぴり削れただけです。ほら僕って長生きだから、ほんとちょっとだよ？」
「なにぃ！？」
「で？」
やっぱりと言わんばかりに、さらに追求してくるセリナ。アナは単純に驚いている。
「えっと、寿命が七十歳ぐらいになっちゃった。てへっ」
「本当ですか？」
「うん、ほんとほんと。だから、そんなに心配しないでセリナ」
十年減ったというより、何歳までと言った方が安心するだろうと思って言ったのだが、それが正解だったようでセリナもちょっとほっ

としているようだ。

「でもコージ。そんな危ない印はあまり使わないで下さいね？　寿命が減ってしまうと私たちの幸せな生活の時間が減ってしまいます」

「うん、それは駄目だな。中々いい事を言うじゃないかセリナは」

「あら。アナはまだ居たのですか、そろそろ朝の祈祷の時間じゃないです？」

「むっ、確かに時間だ。礼を言うセリナ！」

竜の巫女のアナは色々と忙しい。僕たちと行動を共にするために、今のうちに色々と仕事を引き継いでいるせいでもある。古代竜の力を良く引き出せるアナはイーサルークを維持するのに、非常に有難がられている存在なのだ。まぁ怖がってる人も多いけど。恩恵はありがたいけど、傍にいられると落ち着かないという感じみたいだ。

「アナさんて、本当に素直で嫌味を言うと自分が悲しくなってきます」

「やっぱり、さっきのはそういう意味で言ってたのね」

元気良く出て行ったアナを見て、少し肩を落とすセリナ。アナは良くも悪くも対等な人間関係というものをあまり知らないせいで、さっきみたいな純真というか疑う事を知らない所がある。そもそも、古代竜の力をうまく引き出せる人間に対して、強気に出たりからかったりする人間がいる訳がない。

「アナもコージを狙っていますけど、負けませんからね？」

にこっと微笑みながら、そう宣言するセリナ。寝起きの少しぽやっとした雰囲気がすごく可愛らしい。そう思ったのも束の間。

「もしアナに負けるような事があれば、コージをずっと監禁して一生面倒見ますね」
「げほっ！？」
ちょっと寝ぼけてるような顔をしていたけど、本当に寝ぼけているようで黒い本音がだだ漏れだった。怖いよセリナ。
それぞれあてがわれた部屋で、朝食をすませ再び光司の部屋へ集まったのがお昼少し前。早起きしていたセリナと光司は、オープンな部屋でいちゃいちゃとする訳にもいかず、もじもじとした時間を過ごしながら、リュート達を待っていたので少しくたびれてしまった。
「やぁ、おまたせ。あれ？　コージなんだか元気になってない？」
昨日より笑顔が眩しくなっているリュートが悪びれる事無く、そう挨拶しながら部屋に入ってきた。なんか、リュートには僕の状態がわかる様だ。さすがは勇者。
「うん、もう体調はばっちりだよ。心配かけました」
「あら、どんな魔法を使ったわけ？　気になるわね」
「魔法というか、印の力ですよ。ある程度魔力が回復してきたんで、ようやく元に戻ったって訳です」
「ふぅん。お得意のアイテムで回復したとかじゃ無いのね？」
「いえいえ、印の力です」
ここで迂闊にナノマシンの事を言うと、アイテム士のティナさんは

目を輝かせて追及してくるに決まっている。

「で、印の力で何を作ったわけ？」

「あー…」

駄目だ、この人の嗅覚は恐ろしい。追求をかわしきれなかったみたいだ。だけど、目に見えない程小さいアイテムだから説明のしようも無いんだよねぇ。なので、煙にまくことにする。

「プログラムに従って行動してくれる、目に見えないぐらい小さい使い魔という感じです。それが僕の体調を管理してくれるようになったんです」

「その右手は元に戻せなかった訳？　火傷とかは治ってるみたいだけど」

「右手は怪我も塞がっているので、このままだったんです。まぁ、戒めの意味もあるんでこのままで良いんです」

「ふぅん。なるほど、使い魔。使い魔ねぇ…」

なんとか誤魔化せたようだ。あながち間違った説明じゃないから、このままナノマシンは使い魔という事で押し通そう。だけど、ティナさんは相変わらず他の人だったら言いにくい事でも、ずばずば聞いてくる人だね。ロコを可愛がってる姿を見て、性格変わっちゃったのかと思ったけども。

「そっかそっか。とにかく元気になって良かった。少しは鍛えてるみたいだし、救出作戦に人手は多いほうがいいからね」

「少しはって…これでも結構頑張った方なんだけどなぁ」

恐ろしく強い勇者から見れば、あれだけ頑張った僕も少し鍛えたルーキーぐらいにしか見えないようだった。リュートの言葉に少し落

胆しつつも、いつか越えてやろうと決意をあらたにした。

自由の定義

ロバスとグレイトエースを結ぶ街道。他の都市にも繋がる街道だけあって、多くの人がこの街道を利用している。現在、ロバスでガイアフレームの増産が急ピッチで行われていることもあり、いつもより街道を通る人の姿が多く見受けられた。

そうなると、街道を通る人を狙ってよからぬ事を企む輩が増えてくる。

グレイトエースに近いとはいえ、街道を守る守備隊は街道全てを守りきれる訳ではない。なので、守備隊の隙をつきさえすれば賊達もおいしい目を見る事ができるのである。勿論やりすぎれば、討伐隊が組まれろくな事にならないので、ほどほどにする必要があるが。

だが、そんな事を意に介さぬ集団が今、街道の商隊を襲おうと身を潜めていた。

「バイアン、我慢できないのか？　あいつらを襲えば、そろそろ俺達にも討伐隊が組まれるぞ。もう少し間をあけてからにしないか？」

「さっきも、その前も女が居なかったから今あいつらを見逃せば、次はいつ女がいる商隊が通るかわからねぇ。討伐隊、いいじゃねぇか。暇つぶしにはなるんじゃねぇか？」

街道脇の木々の間で、小柄な男と大柄な男が物騒な会話をしていた。

「ついに俺達も討伐隊デビューか。まぁ、なんとかなるか」

「ははっ。ハッカ迷惑かけるな！」

「そう思うなら良い女を回せよ。俺も先にしたい時だってある」

「気がむいたらな、じゃあ野郎ども！　俺の合図を待ってろよ！」
「俺を置いてくなよ、バイアン」

木々の間に息を潜めて待つ仲間を置いて、二人だけで商隊へと走り寄る。小柄なハッカを前にして、大柄なバイアンがその後を追いかけるような形だ。バイアンは時折、大きな仕草で背後を確認するように動き、ハッカは必死に走っているように見せかけていた。

そんな二人の様子は、商隊の護衛達にいち早く発見されていた。最初、小柄な男が大柄な男から必死に逃げているように見え、大柄な男が強盗か何かかと思ったが、時折背後を何かに追われているかのように確認し、小柄な男を守るかのように走ってくるのを見て、魔石獣が追いかけてきているのかもしれないと、警戒態勢を取った。

「おい、そこで止まれ！　いったい何があった？」

とはいえ、見知らぬ他人がこちらへ向かって走ってくるのを黙って見逃す訳にはいかず、そう問いかける商隊の護衛。

「何が？　あぁ、これから何かがあるぜぇ？」
「何？」

大柄な坊主頭のバイアンが、にやりと笑いながらそう答える。と思った瞬間その姿がかき消えた。それと同時に荷車を引くパニモア達の悲鳴があがる。見れば、いつでも駆け出せるように準備をしていたパニモア達がすべてひっくり返り、地面をのた打ち回っている。牽引されている荷車ものた打ち回るパニモアにあわせて、左右に揺さぶられたりひっくり返りそうになっている。

「どうした！？　何があった！」

「わからん！　だが、パニモア達の足がやられたようだ！」

突然の事にとまどいながらも状況を把握するために動く、護衛達。矢傷でもなく魔法が飛んできた訳でもなく、突然足が折れた状況に困惑する。そんな状況をよそに、バイアンが楽しそうに笑っていた。

「おいハッカ！　極上の女がわんさといるぜ！　こいつは当たりだ！」

「おいお前勝手なことをするな、すぐに立ち去れ！」

いつの間にか、商隊の間をうろうろして荷車の中を勝手に覗いているバイアンを護衛の一人が、つまみだそうとした。だが、そんな事をまったく気にせず次々と荷車を覗いてはうれしそうな声を上げるバイアン。

「やるならさっさとやれバイアン」

「わぁーったよ！　お前も好きだなぁ」

「何を言ってる、早く立ち去れ」

護衛はようやく立ち止まったバイアンの肩をつかみ、追い出そうとした。だが、バイアンはまったくびくともせず、大きく手を振り上げた。

「野郎ども！　はなてっ！」

大きなその声と共に木々から大量の矢が降り注ぐ。ザアッ！　という音とともに商隊全体へと降り注ぐ雨は、そこにいる人間に平等に降り注ぐ。だが警戒していた護衛達も黙ってやられていない。咄嗟に盾を掲げるもの、魔法の障壁を張り巡らせる者、回避しながら矢を落とす者。全員が無傷とはいかなかったが、咄嗟の状況にしては

良くやった方だと言える。だが、不思議なことに荷車には矢が一本も刺さっていなかった。

「なんだ、まだ結構残ってるな、もういっちょ放て！」

バイアンがそう大きな声を張り上げると、再度矢の雨が降り注ぐ。もう一度同じように矢の雨を防ごうとしたが、今度は違った。先ほどは防いだ矢の雨を何故かまともに食らってしまっている。残っているのは魔法の障壁を張っていた男だけである。

「くそっ…お前たち、盗賊か」

「おう。バイアン盗賊団だ。泣く子が黙るかは知らないがな。ははっ」

「“氷よ！　我が意を以って槍と化せ！　アイスランス！”」

「ハッカ」

パギィイン！

バイアンを狙って放たれた魔法は直前で不可視の盾に防がれる。見ればいつの間に来ていたのかハッカが、面倒くさそうに佇んでいた。魔法が防がれたとは言え、このまま座して待つ訳には行かない魔法使いは、さらに持てる魔法を連射する。だが、手を変え品を変え放つ魔法は、不可視の盾を破壊する事はできても、すぐさま沸いて出てくる不可視の盾を前にバイアンに当てる事はできなかった。

「おまえが良い女だったら、生かしておいても良いんだがな。残念残念」

「くそっ！　“氷よ！　我が意を以って槍と化せ！」

「おそいよっと」

詠唱を唱え終える前にバイアンは掻き消え、魔法使いの背後に回っていた。

「あばよ」

「ぐはっ」

どれだけの力がこめられたのか、バイアンの拳は魔法使いの胸を貫き一撃で魔法使いの命を刈り取った。そして、矢の雨を受けた商隊の人間を情け容赦なく丁寧に殺していくバイアン。ハッカはその様子を面倒くさそうに見ているだけである。たまに一矢報いようと護衛がバイアンを返り討ちにしようとするも、その度にハッカが生み出す盾によって防がれバイアンに止めを刺されていた。

「さてさて、労働の後はお楽しみだよな。おいハッカ。今日は先に選んで良いぞ」

「まじかよ！？　本当に当たりなんだな今日は！」

嬉々として荷車へと向かうハッカ。だが、その足がぴたりと止まる。バイアンはその様子を見てちゃかそうと声をかけようとするが、ハッカの前で起こる現象に眼を奪われた。

「おいおい、ここで魔石獣かよ！？」

ずるりと世界へ飛び出してくる魔石獣。バイアンが殺した護衛の人間の血の匂いにひかれたのか、たのしげに地面を踏み鳴らし咆哮をあげる魔石獣。

「ちっ、しゃあねぇなぁ。逃げるぞハッカ」

そう言って逃走を計ろうとするバイアン。だが、それも魔石獣がハ

ッカを押さえ込むようにくわえた事で頓挫する。ハッカも黙って押さえ込まれた訳ではなく、盾を何枚も展開したのだが、あっさり踏み破られてしまったのだ。

パニモアとは違い細く長い足に、長い首。優美なラインを描く胴体と凛々しい顔は魔石獣というよりも、聖獣に似た趣を感じさせる。だが、眼だけは猛々しい赤い色を灯しており禍々しい雰囲気を放出していた。

「おい、化け物。そいつは俺の可愛い舎弟だ。それ以上何かするってぇなら、容赦しねぇぞ？」

自分より巨大な魔石獣を前に、一歩もひるむ事無く立ち向かうバイアン。賊とはいえ身内には甘い性格のようだった。そして、バイアンの言葉を吟味するかのようにじっとバイアンの目を見つめる魔石獣。

「おいバイアン。やめとけこいつは尋常じゃねぇぞ。俺ならしばらく死なん。その間に逃げろや」

「ハッカよぉ、俺はやりたいようにやってるだけだ。今は逃げたくねぇんだよ」

「この馬鹿…」

ハッカと組んでからは、逃げるという事は無かった。それはもう好き放題に生きていく事ができるようになった。自分が先に死ぬのは構わないが、ハッカが死ねば地獄の底まで付き合うつもりでいた。

「魔石獣、上等じゃねぇか！　俺の力でやってやるよ！」

気合をこめて叫ぶバイアンの姿が掻き消える。と、同時に魔石獣の

体が衝撃音と共に揺さぶられる。所々、体がごそっと消えたりするが即座に復元してしまう。ハッカを抑えている足も一瞬消えるも即座に復元され、ハッカが脱出する事は適わなかった。

“ただの盗賊かと思ったけど、なかなかどうして。義理人情に厚いじゃないか。いいね、君達”

「あぁ？！」

「魔石獣がしゃべった…？」

“あぁ、別に魔石獣がしゃべってる訳じゃないよ。僕はアーン。世界を作り変える王だ”

「？？？　どういう事か分からんがハッカを離せぼけ！」

魔石獣がしゃべろうが、かまわずに悪態をつくバイアン。

“しかも印の力をここまで使いこなせてるなんて凄いよ君達。なんで盗賊なんてやってるのさ？”

「やかましい！　窮屈だからだよ！　あれするなこれするな、ああしろこうしろ！　なんでぼけどもの言う事なんぞ聞かねーと駄目なんだよ！　俺は自由に生きたいだけだ！」

“で、踏まれてる君は？”

「似たようなもんだよ、好きなように生きて好きなように死ぬ。それだけだ。いい加減足をどけろ獣野郎！」

“ふふっ、ひどいなぁ。せっかく君たちにこの子を上げようと思っ

てるのに”

「は？　何を言ってるんだ？」

“そのままの意味だよ。こいつの名前はロニキス、今日から君たちの下僕だ”

「こいつは魔石獣じゃねぇのか？」

“そうだよ。だけど、僕の命令に従う可愛い生き物だよ。試しに命令してみなよ、ちゃんと言う事聞くからさ。あぁ、名前をちゃんと呼んで上げてね”

「ロニキス、足をどけろ！」

嘘でもなんでも、とにかくしんどくなってきていたハッカはロニキスにそう命令する。すると、アーンの言うとおりロニキスは即座にハッカから足をどけた。

「まじかよ…」

その様子を見て驚くバイアン。今まで色々な噂話を聞いたりしたが、魔石獣が人の言う事を聞くという話しは聞いた事はなかった。

“餌は時々人間でも食べさせればいいからね。普段は世界の隙間にいるから、必要になったら名前を呼べば良い。どこにいてもすぐに出てくるから”

「おまえはなんでこいつを俺達に自由にさせる？」

見返りもなしにこのような事をする奴はろくな奴ではない。仲間以外は信用できないバイアンは即座にアーンに噛み付いた。

“なんでって言われても気に入ったからだよ。君たちみたいに欲望の赴くままに生きている人間を応援してるんだ。世界もその内そういう風に変えるつもりだからね”

「よく分からんが、タダで貰うのは気に入らん。何か欲しいものは無いのか」

“欲しい物？　それは君たちだよ。僕の仲間になってくれれば良い。あぁ別に今すぐあれしろこれしろって言う訳じゃないよ。ただ、好きに暴れまわって欲しいっていうのが僕の願いだ”

「あぁ？　それじゃあ今までとなんも変わらねぇじゃねぇか。それは仲間っていうのか？」

「俺達は今までどおり好きにしていれば、それで良いと言う事か？」

“そうそう。ロニキスも居るしもっと派手にしてくれても良いよ。そっちの方が楽しいからね”

「胡散臭せぇが、まぁいい。何かあれば言ってこい。気が向けば言う事を聞いてやる」

魔石獣を自在に操るであろうアーンに対して、気負う事無くそう言い切るバイアン。ハッカも同様の考えのようで、しきりに頷いていた。

“じゃあ、期待してるよ。じゃあまた”

そして、ロニキスは静かになり残されたのはバイアンとハッカ。そして、遠巻きに静かに近づいてくるバイアンの仲間達。

「いっちまったか？　はぁ、なんか気が削がれたがお楽しみと行くか！」

「おう、俺が一番に選んで良いんだよな？」

「いいぞいいぞ。選んで来い！」

「よっしゃぁああ！」

喜んで荷車へ向かうハッカ。勿論バイアンは気まぐれなので、ハッカが選んできた女を横取りしようとか考えている。まぁ、今日は変な事があったのでそういう気は無くなったようだが。

「おい、大丈夫だからこっち来い！　戦利品をまとめろ！　まとめた奴から順番に女を選んでいいぞ！」

バイアンの言葉に歓声を上げる盗賊達。とりあえず魔石獣は怖いが、バイアンが大丈夫というので、気にせずに戦利品を漁る。こうしてバイアン達は魔石獣を手に入れ、さらに自由に生きる事ができるようになった。

セリナ到着

「分かった。セリナ、父ちゃんと母さんをお願いします」

コージにそう頼まれ単身グレエイトエースへと潜入したセリナ。ロバスにはアーンがいる為、有事の際に脱出するのに戦力を確保しておくためだ。グレイトエースには貴族がいるのだが、血の呪いを解いたセリナにとって貴族はもう敵ではない。それを証明するにもセリナは単身グレイトエースへ潜入する事を志願したのだ。念のためにとカードを二枚渡されてはいるのだが。

“この布は便利なものですね”

光学迷彩を利用したマントを使って、悠々と潜入する。魔法を使えば即座に発見されるのであろうが、魔法を利用していないこのマントであれば見つかる事は無い。油断しなければという前提ではあるが。

現在、グレイトエースでは巨大フレームの襲撃により被害を受けた貴族達が、城へ押し寄せ王と面会を求めている。現在、ユージ王は床に伏せているという話もあるがそれで納得する貴族達ではなく、この際自分に有利なように話を進める為に官僚達に根回しやごり押しをしつつ、集まった貴族達で結託しているようである。

情報収集と自分を試すために集まった貴族達の間をすり抜け、城の上へ上へと目指していく。貴族達の間を抜けてわかった事は長子を亡くした貴族達は、賠償金を分捕る事とフレーム関連に関する利権や、領地を広げる事しか考えていない。そして、セリナにはそんな貴族達はただの薄汚い人間にしか見えなかった。

“あいつに復讐しても良いのですが、ここはお義父さんとお義母さんの救出が優先です”

自分の両親を死に追いやった貴族。それが、楽しげに談笑している。湧き上がる黒い感情を押し殺しながら、先へ進む。以前なら目の前に立っただけで、足が竦み顔を見ることすらままならなかったのだが、今では簡単に魔法を放てそうである。

“これなら、いつでも復讐はできますね。アナには感謝しませんと”

気を引き締め、王宮内を慎重に進んでいく。途中のトラップなどは、コージから聞いており対処法もしっかり聞いてある。本来ならば穴の無いように、セキュリティホールは埋めておくものだが、なんらかの原因で敵が王宮に立て篭もった場合に突破できないのも問題なので、敢えて残してある穴を利用して、奥へと進んで行った。

ユージとるりが居るであろう部屋に近づいていくにつれ、アーンの力が強まって行く。

コージから貰った指輪の機能のおかげで取り込まれずに済んでいるが、もし指輪がなければ即座に取り込まれていたであろう。そして、今ここにうずまく力は普通の人間には毒にしかならないようで、王の居室へと続くこの一角への入り口付近には、多くの死体が折り重なって放置されていた。体の異変に気づいたが力尽きたのであろう。おかげでこの周辺には人がまったく居なくなっていた。

「こんな所にねずみが紛れ込んでるねぇ、中々度胸がある奴だな」

アーンの声がどこからか聞こえてくる。いきなりの事でびっくりし

たセリナだが、悲鳴を上げるのだけはなんとか堪える事ができた。動揺していては咄嗟の事に対応できなくなる。

「でもおかしいねぇ、僕の力が効いてないなんて。イーサルークの奴らか？」

アーンの力のせいで、どこから話しかけてくるのか分からない。だが、こちらが下手に動かなければ向こうもこちらがどこに居るか分からないはずだ。そう思っていると、アーンの力が更に強まり黒いもやのような物が漂い始めた。

「まぁいいよ。ここから誰も出る事はできないからね。転移魔法は使えないし、城を破壊して逃げる事もできない。出入りできるのはそこの入り口だけ。でも残念だねぇ。生きてる物はそこから出れなくなってるんだ。せめて情報だけでも持ち帰ろうとしても帰れないならそれも無理だよね。ご苦労様」

揶揄するようなアーンの口調に、歯噛みするセリナ。道理で死体が入り口付近に集中していた訳だ。皆ここから出ようとして出られずにあそこで力尽きたのだ。

「これだけ言っても何も動かない所を見ると、諦めてないみたいだね。まぁいいよ。時間が経てば嫌でも理解するさ。さようならねずみさん」

さも楽しげに笑いながらアーンの気配が薄れて行った。今居たのはどうも本体ではなく意識体とでもいうものであろうか。こうやって、王宮に入ってきた人間をからかう為だけに時折意識を飛ばしてきているようである。

“趣味の悪い奴ですね。ですが、転移魔法などで脱出できないのは事実かもしれませんね。ここまでは読み通りという奴ですね。さて、コージの策はうまくいくでしょうか”

セリナはそもそも転移魔法を使えない。転移魔法の為の魔道具はあるのだが、アーンの自信たっぷりの様子から使用できないであろう。とにかくここは、るりとユージに会うのが先決だ。急いで王の居室へ急ぐ。そして、扉をノックして扉の隙間から一枚の写真を滑り込ませる。

するとすぐに反応が返ってきた。

即座にアーンの力が弾き飛ばされたかと思うと、扉が少しだけ開く。あまり時間は掛けられないと踏んだセリナは開いた扉へ迷うことなく体を滑り込ませた。そして、部屋へ入ると同時に周囲を確認し、るりとユージの姿を確認してからマントを外し姿を現す。

バタンと大きな音を立てて扉が閉まり、るりがセリナに飛びつく。

「もう、こんな所まで来てぇ！　わざわざ助けに来てくれたのセリナちゃん！」

「はい、お久しぶりでお義母さん」

るりはアーンの力によってここから動く事ができず、外の情報をつかむ事ができなかった為、光司やミミ達が無事かどうか知る術が無かったのだ。

「で、ミミちゃんは？　光司が無事なのは分かったんだけど、他の子はどうしたの？」

「それを含めて現状をお話します。脱出はその後に。お義母さんと

お義父さんにも協力して貰わないと駄目なんです」
「ん、分かったわ。話して頂戴」

可愛がっていたミミの事が心配なるりであったが、ここから脱出さえできれば自分が助けに行けるので黙ってセリナの話を聞く。そして、アーンという敵が何かを企んでいる事、光司が今ミミを助ける為に別行動をとっている事、今この一角はアーンによって封鎖されている事などを順を追って説明して貰った。

「光ちゃんたら、おかーさんをほったらかしにして自分だけミミちゃんといちゃいちゃするつもりね、ぷんぷん」
「えっと、お義母さん？　さすがの私も泣きますよ？」

るりのあまりのミミへの偏愛っぷりに、決死の覚悟でここに飛び込んできたセリナもさすがにちょっと凹む。るりはなんと言ってもコージの母親なのだ。その母親に気に入られなければ今後の生活に支障があるのは火を見るより明らかだからである。

「あーごめんね、セリナちゃん。せっかくここまで来てくれたのに。大丈夫よ、セリナちゃんもちゃんと好きだからっ！」
「それなら良いんですけども…」
「ごめんね。勇司さんがずっと起きてこないから、ちょっと滅入ってたのよ。そんな時にセリナちゃんが来てくれて嬉しかったから、ちょっとはしゃいじゃった」

確かにユージはいまだに、ベッドで寝たままで起きてくる気配は無い。息苦しそうにしている訳でも、辛そうな表情を浮かべている訳でもなく、ただ眠っている。最初の頃こそ熱が出たりしていたのであるが、るりの看病のかいあってか次第に落ち着いてきたのである。

「では、とりあえず脱出の準備しますね」

そう予告して指輪からアバターを取り出すセリナ。るりとユージにそれぞれのアバターを登録して貰い、いつでも動かせるように準備をする。そして、コージから渡されたペンダントをそれぞれ身に着けておく。

「なるほどねぇ。でも光ちゃんたらもしここが魔法も使えないようになってたらどうするつもりだったのかしら？」

「そこは、お義母さんが絶対阻止してるから考えなくて良いって言ってましたよ？」

「むむっ。光ちゃんたらかーさんの事分かってるぅ～。もう愛されてるわよね私ってば」

「いえいえ、お義母さん達の事を任された私には負けてると思います」

「セリナちゃんてば言うわね。でも、小さい頃の光ちゃんを知ってるのは私だけだもんっ！　可愛かったわよぉ～」

「いえいえ、成長したコージと色々して子供を作ればお義母さんには負けません！」

「いやいや…」

結局、セリナが果たす役目はるりと勇司に会って、アイテムを渡すだけ。危険があるとすれば、貴族達が集団で襲ってくる事とアーンに気づかれて襲われるという事であったが、それも結局なんとかなった。あとはコージが救出してくれるのを待つだけなので、役目を果たして安心したセリナはるりと、じっくり話し合おうと決めた。

作戦開始

ロバスにある冒険者学園。普段であればこの時期には恒例のブロック対抗戦の予選が始まっている時期である。だが今年は、とある事情でブロック対抗戦が中止の運びとなっていた。

「魔石獣の活発化か。これだけの報告例を見るに、あながちあの噂も否定できないわけか」

ベルスイートの本部。山と積まれた書類を処理しながら、愚痴をこぼすサカキ。よほどの事がない限りブロック対抗戦が中止になる事などあり得ないのだが、今回の魔石獣騒動はよっぽどの事態である。

魔石獣の大量発生。

五年前のあの時、サカキは魔石獣の脅威を防ぐために子供ながらも町の防衛の為の頭数として門に配備されていた。そして、地響きを立てて迫りくる大量の魔石獣の群れの姿を良く覚えている。あの戦いの中で自身の力に目覚めたサカキもこれで死ぬのかと覚悟を決める程のものであったが、毛局はユージ王の駆る「７７７」の活躍により、死地から逃れることができた。

だが、今この時期。ユージ王は床に伏せており、あの時のような活躍は期待できない。かわりにアーン王子が「７７７」に乗るという話なのだが、五年前のユージ王のような活躍を期待するのは酷というものであろう。それにサカキは、アーン王子にどこか造り物めいた胡散臭さを感じていた。違和感と言えばいいのか。以前、アイテム作りの話をした時のような暖かい雰囲気を感じる事ができない。むしろ、笑顔の裏に下心が透けて見える。それが分かるにも関わら

ず、惹かれてしまいそうになる心情が納得できないのだ。

“それに俺の中の何かが急速に成長しているのが分かる”

強い相手と相対する事で、急激に成長するサカキの力。今、こうしてベルスイートの本部で座っているだけにも関わらず、神経が研ぎ澄まされていき、目に見えない何かを押し出そうと自分では扱えない魔力が、体内を循環していた。そして今、何者かの気配がこちらを伺っているのが、はっきりと分かった。

「ここには俺しかおらん。そろそろ出てきたらどうだ」

「えっと、お久しぶり…で良いのかな？　光司ですサカキ先輩」

バサッと布がはらわれる音がして、部屋の中に突如として現れた人物はそう声を掛けた。

「しかし、隊長から呼び出しって何があったんやろなぁ？　またコージがらみっちゅう感じもするけども」

「行けば分かるわよ。にしても、ハルトはまったく態度を変えないわよねぇ。私でさえつい敬語がでちゃうっていうのに」

「それがこいつの良い所だろ、セシー。そもそもこいつのそういう所に惹かれたのではないのか？」

「う…あまりそういう事言わないで。慣れてないんだから」

ランバルトの指摘に顔を真っ赤にして、そう呟くセシリア。反論と

いうにはあまりにも弱々しい態度である。そんなセシリアを見てラインハルトは可愛くて仕方ないという風にセシリアを構い出す。

「ははは、セシーは可愛いやっちゃのぉ」

「あん、もぉっ」

乱暴に頭を撫でられ、恥ずかしそうに俯くセシリア。にやけるラインハルト。

「でもセシリア良かったね。頑張ってアタックした甲斐があったねぇ」

「ミミちゃんには、ちょくちょく見られてたものね。色々アドバイスありがとうね」

「いいえ、どういたしましてっ」

そう。今回の呼び出しはトリックスターの面々だけではなく、ミミやヴァイスも何故か連れて来るようにと、言われていたのである。これだけ、アーン王子の関係者を呼び出しているのにアーン王子を呼び出さないという事は、何かそれ絡みであったのだろう。

「しかしセリナ嬢が旅に出てもう一ヶ月以上経つのか。居なくなって寂しいものがあるなぁ」

「おいおいヴァイス。ヒロコちゃんも白夜ちゃんも居なくなっとんのに、分かりやすいやっちゃなぁ？」

「な？！　お、俺は別にそういう意味で言ったのではなくてだなぁ…」

アーンの力が蔓延する中、相も変わらずコージの仲間たちは元気な様子だ。

「やほミミちゃん。サカキさんに呼ばれたんでしょ？　一緒に行こ？」
「アイちゃん！　うん、行こう行こう」

通路の横合いから生徒会長こと、アイシャ＝エイジスがミミを見つけて飛びついてきた。彼女はこの現状の中、自力でアーンの力を受け流している稀有な存在なのだ。アーンの力が見えるミミは、まったくといって良いほど汚染されていないアイシャを見て、驚いたのを覚えている。

天才の印。

彼女はそう自分の秘密を教えてくれた。何事においても才能を開く事ができる印の力は彼女を今の地位にまで押し上げてくれた。どのような事も少しの努力で一流と呼ばれる力を手に入れる事ができる彼女は、今回のこの状況でも遺憾なく発揮されて自身を守る力を育て上げた。コージにちょっかいをかけたのも、自分がとくに磨き上げてきた魅力に対してまったく動揺する様子を見せなかったのがきっかけである。

「ていうか、何時の間にか生徒会長とミミちゃんは仲良くなってるんだねぇ。不思議だ」
「うん、前は無関心だった筈」
「今は仲良しだもん、ねー！」
「ねー！」

ミミとしては、孤立無援の中たった一人の味方なのである。一応、教室内ではせっせとアーンの力の除去作業を行い、汚染がすすんでいくのをある水準で留めるようにしてはいるものの、やはりコージの事を良く覚えていない皆と一緒にいるのは、悲しくなってくる。

そんな中で、はっきりとアーンとコージの違いを分かってくれるアイシャと、仲良くなっていくのは自然な流れだった。

アイシャとて、同様の事情である。そして、コージのハーレム要員のミミと仲良くしていればコージともっと仲良くできるんじゃないか？　という下心もしっかり持っている。中々にしたたかなアイシャであるが、ミミが可愛くて仕方ないという気持ちもしっかりとあった。

そうこうしてる内にベルスイートの本部へと辿り着く。中に入るとすでに、風紀委員長も到着してハルト達を待っていたようだった。

「急な呼び出しですまなかった。諸君には少しやって貰いたい事ができたのだ」

呼び出した面子が揃った所でサカキがそう切り出した。ちらちらと揃った面々は、互いの顔を確認しつつ何があるのかといぶかしむ。これだけの面子を集めるのであれば、少々厄介な話が持ち上がっているとしか思えないのだ。

「これから、ロバスの郊外の森に行って頂きそこである人物と会って欲しいのだ。その際に町から出たと分からないように、隠密行動で門を突破して貰いたい」

そして、皆の思惑通り厄介なお願いをしてくるサカキ。しかし、ロバスの外に出て人に会うというだけなのに、どうしてそのような事をする必要があるのだろうか？

「これは訓練の一環だと思って貰いたい。最近、魔石獣の動きが活発化している。その為にブロック対抗戦を中止してまで、生徒の訓

練に充てている事は承知の事と思う。これもそうした訓練の一部で詳しい理由は伝える事はできない」

集まった面々の疑問を払拭するかのようにそう宣言するサカキ。だが、結局は詳しい事が分からずより混乱を呼ぶ台詞でしかなかった。しかし、そのような動揺をまったく意に介さずサカキは言葉をつなげる。

「一切の質問は受け付けない。では、諸君。今よりロバスの郊外の森へ向かってくれ」

「ふぅん…りょーかい。じゃあ行きましょうか皆さん」

サカキの強引とも言える命令に、大人しく従うアイシャ。ミミとなにやらぼそぼそと内緒話をしていた彼女は、うろたえる面々を引っ張っていくかのように、先頭に立つ。さすがは生徒会長というカリスマであろうか、サカキに疑問をぶつける事無く静かに出て行った。

「さて、俺もエイジを連れて目指すとするか」

勢い良く立ち上がったサカキはなにやら準備をしてから、エイジを探すため部屋を出て行った。

頃合

世界に滲み出るかのようにして生まれる魔石獣。世界にとって異物でしかないその生命体は人の悪意や暗い情念によって生み出される。あまりにも暗い情念を受け取った世界は、その情念に引きずられない為に魔石獣を生み出す。人々の抑圧された負の感情こそが、魔石獣の親だ。

「いい感じで魔石獣が集まってきたね、そろそろ僕の大活躍の出番かな」

くくっと楽しげに笑うアーン王子。今まで王の印の片割れとして負の感情をコントロールしてきた彼にとって魔石獣を操る事などたやすく、感じ取る事もお手の物であった。ティンラドールの評議会用の部屋の一室で、アーンはじっくりと工作を行ってきた。今はほとんど屋敷に帰ることも無く、学園にもたまに顔を出す程度になっている。世界各地を覗いては争いの種をまいていくアーン。その甲斐あって魔石獣が生まれやすい状況が作られつつある。

「そろそろ、頃合かな。ゲオルグ、僕は英雄になってくるぞ」
「はっ。「777」の準備は整っております」
「ここから見てるといい。ルーツの強さ、ひいては僕の強さをじっくり堪能する為にね」

気軽にピクニックにでも行くような気軽さでアーン王子は出て行く。貴族に対して絶対の力を発揮する王の印。その力は理解していても、ガイアフレームを駆って魔石獣を倒すとなればまた別の話である。五年前の魔石獣の大量発生。ユージ王の活躍で被害は最小限に食い止められたが、何も「777」単機の活躍ではない。住民と駐留軍

のサポートがあったからこそ、あの程度で済んだのである。
しかし、アーン王子は単機で片を付けるという。
「だって、そっちの方がインパクトがあるだろ？」
今更アーン王子に死なれてしまっては困るゲオルグは、何度も引き止めたものだがそんな言葉を返され唖然としたのを覚えている。現在ロバスでは急ピッチでガイアフレームが増産されている。現状で二百機ほどが完成しようとしており使おうと思えば使えない事は無い状況である。
「ハワード」
「はっ」
「アーン王子をお守りしろ。おまえならできるな」
「いえ、ここから動く事はできません」
「何？」
「先に言われております。アーン王子から伝言です。ゲオルグ様は心配症に過ぎると。僕の力は印だけじゃない、安心して見ているようにとの事です。一切の手出しは無用とも仰ってました」
「…そうか。しかしハワード、万が一という事が…」
「僭越ながら、手合わせをした私としましてはそのような事はないと断言できます」
「それほどのものか。分かった、大人しく見ているとしよう」
「はっ」
ヒューイの継承権を与えてくれたアーン。今となってはヒューイよりもアーンに力を注いでいるゲオルグにとって、アーンを蹴落として自分が貴族の上に立とうとは思わない。なにより、目的の為には手段を選ばずゲオルグの思い描く理想の貴族像のように、流血をい

とわずに事を運ぶアーンはゲオルグにとって、ヒューイ以上に大事な存在となりつつあった。

「雨が降ってきたな」

見れば外は雨が降ってきている。暗雲がたちこめこれから何か良くない事が起こりそうな雰囲気が雨から感じられる。だが、このような状況はアーン王子が英雄になるには相応しい状況であろう。ゲオルグは腹をくくり落ち着いて状況を楽しむことにした。

「雨が降ってきたわね。急ぎましょう」

アイシャの言葉に黙ってうなづく面々。ロバスの検問を突破し、悠々と森へと足を運ぶ。検問を突破する際に危うく見つかりそうになったトラブルはあったものの、順調に目的地へと近づいていた。

“やっとコージに会える。にひひっ”

サカキは誰に会えとは言っていなかったが、この行動の流れから言ってコージがこの先で待っているのは間違いないとミミは考えていた。傍らを静かに走るアイシャも同様に考えており、はやる気持ちを抑えながら警戒しつつ森の中を進んでいた。最近、魔石獣の発生が数多く報告されており、危険度が増している為だ。奴らが不意打ちしてくれれば、回避するのは中々に困難な為に警戒を怠る事はかなり危険な事であった。

「ふっ！」

世界がにじむ。それは魔石獣が出てくる兆候である。それをミミは見逃さずにすかさず攻撃を加える。それを見た他の面々も一斉に臨戦態勢に入る。

古代遺跡内にも出てくる魔石獣カオティックブラウンである。その数五匹。ミミが一人で戦うなら楽な相手ではあるが、ハルト達には少し厄介な相手である。だが、ここは外。レインボーの独断場であった。

「“土よ！　大地に呼べ束縛する力！　スロウエリア！”」

見事にカオティックブラウンの行動を阻止するように魔法を解き放つレインボー。そして動きが緩慢になった魔石獣へハルト達が殺到した。

「ミミちゃん、いっくよー！」
「オッケー、まかせてー！」

だが、それよりも早く飛び出したアイシャがミミと連携を始めた。

「“絶刃裂波”」

アイシャが放つ青白く光る衝撃波がカオティックブラウンへ襲い掛かる。そしてカオティックブラウンをなんなく切り裂いた衝撃波は、ミミへと向かう。

「“裂波返し”」

だが、ミミに当たる寸前にうまく弾き返し次のカオティックブラウンへと狙いを変える。一歩間違えばその身を切り裂く衝撃波をまるで、テニスのボールのラリーのように気軽にやりとりするミミとアイシャ。レインボーの魔法のおかげで動きが緩慢になってるといえど、その技量は他の者達を圧倒した。

「ラストォ！」

アイシャのその掛け声と共に戦闘は終了した。

「ちょっと生徒会長にミミちゃん。俺達の出番も残しといてもらわんと」

「あ、ごっめーん。許してね？」

「えへへ」

五体もいた魔石獣。それがこの二人にかかればあっという間に片付いてしまう。先ほどの連携もいつの間に練習したのだろうか。かなり手馴れた様子であったので、だいぶ練習をした事は良く分かった。

「しかし“絶刃裂波”であんな事ができるとは思いませんでしたね」

「うん、ミミちゃんて凄いよね。私適当にいっくよーって言っただけなのに」

「えっ！？」

アイシャ曰く、真っ先に魔石獣に気づいたミミが敵中に孤立していたので、それをどうにかしようとして“絶刃裂波”を放ったらしい。それもわざわざ見えやすくした上で。だがミミはそれを何故か弾き返して、うまく魔石獣へと誘導したのを見て、アイシャも咄嗟に真似をした。というのが先程のラリーの真相らしい。

「なんつーか、でたらめですなぁお二人共。わしらも大概色々言われるけどお二人にはかないませんわ」
「まぁまぁ良いじゃない。それより先に急ごう？」
「了解、ちゃっちゃと用事を済ましましょうか」

カオティックブラウンの素材も少し気になったが先を急ぐアイシャ達。ちなみに一番の功労者はレインボーだと思うのだが、それについては誰もが忘れ去っていた。レインボー自身は今の目立たず地味だけど分かる人には分かるという立ち位置が気に入っているので何も言わなかったが。

「だけど、本当に魔石獣が頻繁に出てくるみたいね」
「そうだね。ちょっと森に入っただけで出てくるぐらいだから、奥に行けばどうなっちゃうんだろ？」

以前、コージと共にロバスへと来た時にはこんな所で魔石獣が出てこなかったのを覚えている。町に近づくにつれ数が少なくなって居たはずだ。ロバスのティンラドールが続々と魔石獣を引き寄せるので、塔の周辺は逆に凄いことになってはいたが。

だが今はサカキの言っていた人物に会うのが先決だ。魔石獣の発生の原因をつきとめるには情報も時間もまったく足りない。それから急いで目的地を目指すミミ達を魔石獣が襲い掛かるが、さほど時間をかけずに次々突破していく。はやくコージに会いたいが為にミミとアイシャが時間を掛けていられないとばかりに、瞬殺していく。

「何か綺麗な力を感じるね」
「そうね、あの力のせいで魔石獣が慌てて逃げ出してきたって事かな？」

目的地に近づくにつれ、何かを感じ取る二人。ランバルトも何かの力を感じ取っているようだ。森に入ってから魔石獣がでずっぱりだったので目的地にいるはずのコージが心配だったのだが、杞憂に終わりそうだった。

「あれは勇者の力だね。きっとセリナも居るよ！」

「何っ、それは本当かっ！？」

ミミの台詞に喜ぶヴァイス。ここまで近づくと一度勇者を見ているミミは、その力が勇者の物だと理解できた。旅に出ていた勇者がここに居るという事は何かを掴んで戻ってきたという事だ。そしてなによりコージを連れ帰ってきている筈！

「じゃあ先に行くね！」

たまらずミミはなりふり構わず全速力で駆け出していった。

押し寄せる悪意

地響きを立て、迫りくる魔石獣の群れ。ベノア村付近の山々から続々と湧き出し、ロバスを目指して走る魔石獣。ベノア村を目指して走る魔石獣もたまには居るが、竜王の縄張りに入った片っ端から竜の攻撃を受け沈んでいく。それらを突破しベノア村に到着した魔石獣も待ち構えていたドワーフ達の武器の餌食と化していた。

しかし、その数は湧き出してくる魔石獣のほんの一部。湧き出る泉のように続々と出てくる魔石獣の大半が山々からロバスを目指して駆け出していく。

「撃てぇっ！」

ガコォォォンッ！！！

ドワーフバリスタに廃材を乗せて魔石獣を狙い打つ。ドワーフですら軽がると飛ばすバリスタは魔石獣相手にも有効な武器であった。そして、武器を作りそれを扱う事にかけて自信のあるドワーフ達は、バリスタの攻撃で弱った魔石獣を次々に屠っていく。

空を見ればかなりの数の竜が地上へ向けて攻撃しているのが分かる。ブレスを吐き急降下から爪や尻尾で攻撃し噛み付き、叩き潰す。大型の魔石獣は上部や下部に弱点がある事が多いので、空を飛ぶ竜の格好の的であった。だが、魔石獣も黙ってやられてはいない。降下してきた瞬間を狙い、仲間の魔石獣ごと竜を攻撃し空へ舞い上がらせないようにしてなぶり殺していく。

空の覇者の竜ですらその状況だ。ドワーフ達もただで済む訳が無い。

油断せずとも数という暴力の前に噛みつかれ、叩きつけられ食い荒らされていく。人と比べて頑健なドワーフは多少の怪我はものともせずに反撃していくのだが、徐々に戦闘能力を失っていく面子が増えていった。

“この地を荒らしてただで済むと思うな、木っ端どもがぁ！！！”

ゴォッ！　と吹き荒れる風が襲い来る魔石獣をなぎ払う。竜王がたけり狂う感情のままに魔石獣を蹴散らしていく。同時に竜王から降り散る光が傷ついた者達を徐々に癒していく。

「竜王様じゃ！　竜王様が来たぞ！　魔石獣がなんぼのもんじゃい！」

「ようし、もういっちょ踏ん張るぞ！」

竜王の登場に沸き立つドワーフ達。竜達も王の出現に士気が高まっているようだ。だが、意気揚々とする面々を見ながら竜王は、焦る内心を必死に押し隠していた。いつもであれば、魔石獣の出現とともに駆けつけなぎ払えるのだが今回は勝手が違った。竜王の寝床近くに大型の魔石獣が大量に押し寄せ、その処理に追われる羽目となり駆けつけるのが遅くなったのだ。ある程度は片付けてきたのだが、いまだに沸き続ける魔石獣の姿を見て竜王はどこまで守れるのか？

という思いを必死に隠していた。

“落ち着いて戦えよ。こんな雑魚どもにくれてやる命はひとかけらも無いのだからな！”

押し寄せる魔石獣を次々になぎ払いながら、竜王は戦い続ける事を決意した。

「くそぉっ!?　こんなんじゃちっとも減らせねぇ!」
「文句を言うな!　愚痴を言う暇があったら少しでも減らす努力をしろ!」

ロバス近郊、北西に三十キロの地点。山のふもとから続々と押し寄せる魔石獣の群れを発見した偵察隊は、ロバスへの報告をする一機を行かせ上空から魔石獣をマジックアローで攻撃していた。最初は空から攻撃する事でノーリスクで魔石獣を倒せる事に、満足していたのだが撃っても撃っても数が増えていく魔石獣に次第に恐怖を覚えてきた。

「うおっ!?　な、なんだ?!」
「全機、固まるな!　散らばれっ!!!」

魔石獣も黙ってやられる事を是としない。いつの間に出現していたのか中型魔石獣ゴロックが自身の口や甲羅から何かを撃ちだしてきたのだ。三体のゴロックは空を飛ぶフレームを叩きのめさんと、雨のように次々と射撃してくる。急な反撃に驚いたものの、飛行フレームに乗って二百時間以上のライダー達は、すんでの所で回避する事ができた。だが、ゴロックが攻撃してくる以上迂闊な攻撃は今後できなくなる事を意味していた。

だが、マジックアローと空を飛ぶために必要な魔力がそろそろ尽きようとしている。先ほど援軍を呼びに向かった機体がそろそろロバスに着いて、援軍を連れてきても良さそうな物なのだが…

「隊長、そろそろ魔力が尽きます。ゴロックを相手にするには、心許ないです」
「分かってる。だが、あれを町へ無傷で通す訳にはいかん。少し援護してくれ、俺が先頭の一匹に取り付く」
「無茶です！　万が一墜落したらどうすんですか！」
「その時はまっすぐ戻れ！　いいな！」

狙いを定め、身を翻し先頭のゴロック目指して急降下する。こちらの動きに気づいたゴロックは即座に対空射撃を行ってきた。ひたすらまっすぐ一直線にゴロックへ向けて急降下する。それが功を奏したのか、被弾する事無くゴロックへと接近する。

「焦るな、焦るな…」

ぐんぐんと近づくゴロック。視界を埋め尽くさんばかりにこちらへ撃ちだされる弾。当たれば地上に群れをなす魔石獣の餌食となってしまう為、失敗は死を意味する。それだけに慎重かつ大胆に決める必要があった。

「いっけぇえええええええ！」

視界一杯にひろがるゴロックの背中の頂点。そこを目掛けて手持ちの大剣を投げつける。そして、地表すれすれを狙って急速離脱。気づいた魔石獣どもが襲い掛かるもフレームのスピードに追い付けるものは居なかった。

「どうだ！？」

戦果を確認する為に、離脱しきれていない内にも関わらず背後を確

認してしまう。それが良かったのか悪かったのか。仲間の魔石獣を巻き込む事をいとわないゴロックの射撃が飛行フレームの胴体を直撃し、羽根やエンジン部分をかすめていった。

「隊長っ！！！」

「お前たちは戻れ！　俺は町まで持ちそうにない！　このままベノア村へ向かう！　町は任せたぞ！」

「せめて村まで護衛を！」

「竜王の縄張りを荒らす気か！　いいから行けっ命令だ」

「…ご武運を！！！」

直撃を食らいダメージを追ったフレームをだましだまし空へと舞い上がらせる。先ほどの攻撃は危うくコックピットを直撃する所だったが、すんでの所で右手を犠牲にしたお陰でなんとか避ける事ができた。だが、飛行する為のユニットまで被弾してしまいこのままではしばらくすれば墜落してしまうだけとなってしまった。

竜王の縄張りにあるベノア村までなら、なんとか辿り着けるだろうがこの状況で村が無事かどうかは不明だ。竜王の縄張りだけに大丈夫だと思いたいが、無事でなければ自分の死を意味する。

「持ちこたえててくれよ…」

祈りにもにた思いを込めてそうつぶやいた。

ティンラドールの最上部。そこから見る眺望はなかなかに爽快なものがあった。ティンラドールが高い塔という事もあり視界をさえぎる物が無く、三百六十度どこを見ても遠くまで見通すことができた。その為もあってか塔に登りにくる人達も多く、眺めを楽しんでいった。

だがそれも平時の話。

現在、ティンラドールから見える光景は絶望しか生むことは無い。なまじ三百六十度見渡せる事もあり、どこを向いても魔石獣が押し寄せてくるのが分かってしまう。黒い奔流となってじわじわと押し寄せる魔石獣。五年前に押し寄せてきた時と同じように大量発生しているのだ。だが前回と違いユージ王は不在。現在グレイトエースにて床に伏せているというユージ王が「777」を駆って助けに来ることは無い。

「いいねぇ。絶望ってやつがここからは良く味わえる。大丈夫なのにね。ほんと笑えるよ、僕の茶番にこうも乗ってくれるんだからね」

「777」に乗り込みティンラドールのてっぺんに居座るアーン。これだけ近くまで魔石獣が押し寄せていれば、門からでも楽に見える事だろう。

「守備隊が頑張ってくれてるけど、焼け石に水だよね。ていうか、まだまだ増やせるしねぇ。がんばれーロバスを守れ守備隊たちよっ！　ははっ！」

小馬鹿にした口調で楽しげに独り言を言うアーン。そして目を閉じて何かを感じるように身じろぎ一つせずにいる。だがしばらくすると、じわじわと笑顔になっていく。

「街中にも放って上げたら、もっと良いかもねこれ。いやぁ混乱するだろうなぁ。よし、そうしよう！」

いい事を考え付いたと言わんばかりに目を輝かせるアーン。魔石獣の襲撃はまだこれからである。

世界の現実

にわかに騒然とし始めたロバスの町。避難勧告が出され、地下通路にあるシェルターへと移動を開始する人々。個人でシェルターを持たない住民は、地下通路へと移動する必要があった。

「お母さん、だっこ」
「早くしなさい、すぐそこなんだから！」

手を引かれている子供は周りの大人のぴりぴりとした空気に呑まれ、母親に抱っこをせがむもすげなく断られ、立ち止まる。その間も周囲の人間は止まる事無く慌てた様子でシェルターを目指していた。

「ジェイ！　座ってないで早く来なさい！」
「だっ」

ぐしゃっ

「え？」

何かを言おうとした子供は突如現れた魔石獣に踏み潰された。子供だけではない。ちょうど魔石獣の下に居た数名の人間も魔石獣の餌食となっていた。

ギャオォオオオオオオオオオッ！！！

「うわぁあああああっ、はやく逃げろぉっ！」
「ハンス！　ハンスゥ！！！」
「ジェイ？　え、うそ・・・」

「早くシェルターへ逃げろぉおおお！」

避難する住民の真っ只中に現れた文字通り降って沸いた魔石獣。見れば避難している人間を狙ったように、そこかしこに魔石獣が降って沸いていた。そして、たった今踏み潰した人間をせっかくだからと言わんばかりにかじりつき咀嚼する。

ぼりっごりっばぐっ…

骨を砕く音がはっきり聞こえ、見る見る内に原形をとどめなくなるまでになる。悲鳴を上げて逃げ惑う人間を尻目に、悠々と食事を堪能する魔石獣。避難する住民の数が多く、まだまだ完全にシェルターに避難できずに居る人間を餌としか見ていない魔石獣は、次にどれを食べようかとじっくりと眺めている。

ガンッ！

獲物を吟味していた魔石獣に背後から襲い掛かるもかわされ、石畳を叩く音が響く。避難する住民が混乱しないように、配置されていた警備隊の一人が魔石獣に攻撃をしたのだ。

トトトトトン！

ギャアアアァォオオオオッ！

だが、かわした所へマジックアローの雨が魔石獣へと吸い込まれる。すると、それまで黙って食事をしていた他の魔石獣も、警備隊へと頭を向けた。

「今のうちに、慌てずに逃げろ！　魔石獣は俺たちが引き受ける！」

警備隊のその言葉に慌てて地下通路へと向かう住民達。その姿を見て住民達に意識が向かないように、魔石獣へ突撃する警備隊十名。魔石獣の数は四体。珍しく群れで行動するタイプのようで、ロバス周辺では見られないタイプの魔石獣だ。

「引き付けるぞ！」
「了解！」

マジックアローの牽制が魔石獣へと襲い掛かる。この程度であれば致命傷になることは無いが、うっとうしい事この上ない攻撃ではある。案の定、魔石獣達は餌をあさるより先にうっとうしい警備隊へと襲い掛かって行った。

ガンガガガガンッ！

「ぐあぁっ！？」
「なにっ？！　うわっ？！」

剣を持ち前衛を努める三人に代わる代わる突撃して離脱していき、見事な連携を見せる魔石獣。予測していなかった連携にものの見事に吹き飛ばされる。

「“斬”」

攻撃後一瞬動きが止まった所を狙って、警備隊の一人が技を繰り出す。剣を大上段に振りかぶり瞬時に間合いを詰めた警備隊員が、魔石獣の横腹を狙って振り下ろす。だが、少しかすっただけで身を捻ってかわした魔石獣は、剣を地面に叩き付けた姿勢の警備隊員に向かってするどい爪を繰り出した。

「“電光”」

剣を支点に飛び上がって隙だらけの胴体へ斜めに剣を叩き付ける。だが、普段であれば致命傷を与えられるその攻撃も、別の魔石獣が体当たりしてきた事により狙いがずれてしまう。着地し油断なく仲間の下へと回避する警備隊員。そして、警戒態勢でこちらを伺う魔石獣。

「一筋縄ではいかない相手のようですね、隊長」

「魔石獣にあれをかわされたのは、初めてだな。こいつら知恵がまわるみたいだな」

普通の魔石獣であれば、敵をあなどりたとえ一体であっても強気で攻めてくる。ましてや今は四体もいて、人間の数は十人程度。だが、目の前の魔石獣は敵が少ないからといって侮ってくる様子は無い。そして、嫌な笑い…というか雰囲気を感じた瞬間。

「まずいっ！」

いまだ地下通路へ逃げ込めないでいる住民へと目を向け、駆け出したのだ。慌てて魔石獣に立ちふさがろうと走り出す警備隊。だが魔石獣の尻尾から何かが撃ちだされる。

「ぐぬっ？！」

そして瞬時に向きを変えてきた魔石獣が、追ってきた警備隊員を体当たりで吹き飛ばす。

「げはっ…」

「隊長！　うあっ？！」

体勢を崩したところへもろに体当たりを食らった隊長は、気を失いそうになった。まんまと魔石獣の罠にひっかかった警備隊員は、簡単に無力化されてしまった。そしてその様子に満足した様子の魔石獣は、用は済んだとばかりに住民達へと向かう。

「ジェイ…ジェイ…」

あまりのショックに避難する事を忘れ、ぶつぶつと呟きながら座り込んでいる女性。血まみれの服の切れ端を大事そうに持ち、呆然自失した様子だ。そんな様子の女性にゆっくり歩み寄る魔石獣。

「おいっ！　逃げろ！　早く逃げろっ」

大きな声を出そうとするも、吹き飛ばされた衝撃で声がうまく出ないせいで届かない。そして、逃げ遅れていた子供達が魔石獣に追い立てられ、追いつかれた子供はばりばりと食べられている。親は助け出そうとするのだが、魔石獣が牽制するかのように立ちふさがり、子供達を助けられずにいた。

グルルルルルルルゥ…

歯噛みする大人達を見て満足げな唸りを上げる魔石獣。胸元にある魔石も満足げに明滅していた。だが、その満足も長くは続かなかった。

青い旋風。

強い風が吹き一瞬目を離した瞬間、魔石獣達は居なくなっていた。

「な、なんだ？」
「魔石獣は？」

そんな当然の疑問に降って沸いてくる答え。

「大丈夫ですか？　魔石獣は倒しました！」

空を見上げれば「７７７」が魔石獣を細切れにしている所だった。
そして、コックピットハッチが開き、乗っている人物が顔を出した。

「アーン王子だ…」
「王子が来てくれたぞ！」

五年前の大量発生の時、見事に撃破してくれた「７７７」の姿を見た住民達は次々に喜びの声を上げる。ユージ王は病に倒れていると聞いていたが、かわりにアーン王子が来てくれた事を素直に喜んでいる。

「はやく、地下に非難して下さい。またいつ、魔石獣が出てくるか分かりません！」
「分かりました！　王子はどうされるんですか？」
「僕は行くよ。ユージ王のかわりに僕が魔石獣を蹴散らしてくる！」

静かにハッチを閉めて、空を駆けていく「７７７」。そして、魔石獣が再び現れない内に急いで地下へと生き残った住民は避難していった。

ブレード装備で押し寄せる魔石獣の中を駆け抜ける四足型フレーム。飛行フレームを外し、大地を駆け抜ける姿は自由を取り戻した一匹の獣に見えた。

「くそっ！　きりが無いぜこいつらぁっ！」

「エディ隊長！　突出しすぎです、もう少し下がって！」

「やかましい！　俺が出てるんじゃねーよ！　こいつらが勢い良すぎんだよっ！」

大きな声で拡声器でやりとりするも、魔石獣のうなり声やらなんやらで聞きづらい。魔石獣襲来の報を受け、援軍に向かおうとしたエディ達の前に数を数えるのも馬鹿らしくなって来るほどの魔石獣の大群。既に援軍どころの話ではなく、ロバスへ近づけないように足止めされていた。大型の魔石獣をパージした飛行フレームで撃破したエディはそのまま地上を駆け抜け、魔石獣の数を怒涛の勢いで蹴散らしていった。

魔石獣の体液でどろどろになったエディの機体。攻撃の要のブレードも、徐々にがたが来ていた。雲霞の如く押し寄せる魔石獣を数え切れないほど倒したものの、一向に数が減った様子が無い。いや、減ってはいるのだがそれ以上に増えているようなのだ。

「くっそ！！！　ブレードが折れた！　おい！誰か俺にブレードを寄越せ！」

「無茶言わんで下さい隊長！　だいたいどうやって取り付ける気ですかっ！」

「くわえるに決まってるだろ、馬鹿！　いいから落とせ！」

そのやりとりの間も、エディは魔石獣をけり倒し踏みつけ止まる事無く倒し続ける。だが、ブレードが無い今は先ほどのような勢いはなかった。そして、エディの要求どおりに空中から落とされたブレードを器用にジャンプしてくわえ攻撃を再開する。そして勢いを盛り返す魔石獣狩り。上空からも勿論魔石獣を倒すために攻撃を加えているのだが、徐々にロバスへと進んでいく。このままではロバスが蹂躙されるのは時間の問題であった。

「このままじゃ、ジリ貧じゃねぇか。こんな消耗戦はやなんだよ！」

終わりのまるで見えない戦いを前に、折れそうになる心を叱咤するかのごとく叫ぶエディ。今ここで立ち止まってしまえば、ロバスの住民は魔石獣の餌食になる。五年前と違いかなり町から離れた所で迎撃に向かえたのだが、あの時よりも数が多いので結局は防壁まで押し切られてしまうだろう。せめて、防壁に辿り着くまでに一体でも多く倒し防壁での攻防に負担をかけないようにしたい。したいのだが。

「くそっ、魔力がもう持たねぇか…」

エディ自身も疲弊している事もあり、フレームの残存魔力が残り少なくなってきた。このままでは魔石獣の波に飲み込まれて消えてしまう運命だ。

「おい、補給に一旦戻るぞ。少し穴を開けてくれ！」

「了解です、隊長」

即座に空からマジックアローが一点に降り注ぎ、エディが撤退するスペースが出来上がる。その瞬間を見逃さず、飛び出したエディは一目散にロバスを目指して行った。

蟻の一穴

「さぁてさて。絶望感が広がってきたねぇ。クライマックスの演出といきますかぁ」

ロバスの北東の壁の外側で浮いている「777」は、町から良く見えるようにここから先は通さないとばかりに両手を広げ、迫りくる魔石獣をにらみ付けている。だが、そんな視線の先の魔石獣達に変化が訪れた。

「隊長の抜けた穴をふさげ！　少しの間でいい！　ここが踏ん張りどころだぞ、野郎共！」

「私は女ですが、了解」

「りょ…」

エディが補給へ行く間、部隊の指揮を任された副隊長はエディを追わせまいと魔石獣の進軍をなんとか食いとどめる。魔石獣の進軍速度が時速五キロが十キロになったという感じか。だが、エディの抜けた穴は大きく何体かのすばやい個体がエディを追ってロバスへ駆け抜けていくのを阻止できなかった。だが、少数の魔石獣であれば問題ない。ここで無理をして全部防ごうとは考えない事だ。副隊長は自分の技量を過信せず、いまできる最善の事を行うだけであった。

だが、エディが抜けて間もない今。魔石獣達の動きに変化が起きていた。

「なんかおかしくないですか？　一箇所に魔石獣が集まっているような…」

「好都合だ。まとめて倒しやすいと考えろ！　ただ、油断はするな」

「了解！」

魔石獣達は押し合いへし合いしながら、大型の魔石獣ディリアスへと集まっていく。大型にしては珍しく人型の魔石獣は、御伽噺に出てくる災厄をもたらす魔石獣の尖兵として有名であった。人型をしている事からそのような逸話ができたと、そう思われていた。そして、大量に集まってきた魔石獣達はディリアスへと溶け込んで行き、次々に吸収されていく。だがそのような変化も大量にわき続けている魔石獣のせいで、誰も気づいていなかった。

不意にディリアスから伸びる手。

地上から空へ。飛行フレームへと伸ばされた手。その意味をいぶかしむ間も無く副隊長は吹き飛ばされていた。

「クルーズ副隊長！！！」

吹き飛ばされたクルーズ副隊長機。エディと同じ四脚タイプの飛行フレームは、ただの一撃でばらばらと部品を撒き散らしながら墜落、爆発炎上した。だが、その様子をしっかりと確認している暇はまるで与えられなかった。

「ギリルディアッカ…？」

魔石獣ディリアスを中心として、その身を現しつつある災厄の魔石獣ギリルディアッカ。その禍々しい巨躯は災厄の魔神というに相応しい恐怖を感じさせ、今もなお魔石獣を取り込みながら、飛行フレーム隊へと向き直る。

「高度を取れっ！！！　にげっ…」

最後まで言えず地面へ叩きつけられる。ギリルディアッカはその巨体を活かし自分の周りをちょろちょろする飛行フレームをうるさげに叩き落していく。瞬く間に五機のフレームが大破。大幅に数を減らされた守備隊に、魔石獣を押しとどめる力はもう無くなった。

グレイトエースを襲ったギガンテス。その大きさを大幅に超えるギリルディアッカは当然のように町からも確認する事ができた。そして、絶望を抱えながらもシェルターへと向かおうとする人間が見たのは、別のギリルディアッカ。落ち着いて広場に行きぐるりと周囲を見渡せば、遠くにギリルディアッカの姿が見て取れる。その数四体。時々爆発しているのは飛行フレームが落とされている為であろう。

「もう駄目だろ、これは…」

シェルターへと向かおうとしていた人からぽつりと漏れる言葉。ロバスに住む人間として飛行フレームの強さは、十分に信頼に値するものであった。常に押し寄せる魔石獣を意識せずに安心して暮らせるここの生活は、ガイアフレームが魔石獣を駆逐してこそのものであった。地下避難施設や防衛設備が整っているとはいえ、魔石獣が町の中へと入ってくれば、どうなるか分からない。先程もどうやら魔石獣が町中に入ってきたという噂もあり、安心できる材料が一つずつ無くなっていく。

自分達の無力さ故に、泣くことも叫ぶことも怒ることもできずただ呆然と立ち尽くす人々。何をどうやっても自分たちには等しく終わりが訪れるのだと思うと、何をやっても無駄と諦めてしまった。

だが、どんな時も諦めない人間はどこにでも居る。

「ごめんなさーい、危ないから広場から出てくださーい！」
「本当に危ないから、どうか早く非難してください」
石畳を削りながら、爆音を立てて一機のガイアフレームが広場へ突進してくる。その分かりやすい暴力的な登場に、我を忘れていた人達は慌てて逃げ出していく。そして、何事が起きるのかと、離れた所からガイアフレームを見守る。
「ちょっともう少し安全運転できないのですか？　それなら私が操縦したほうがよっぽどマシですわ！」
「こればかりはリリノアに譲れないですもん。ほら、早く砲撃準備をお願いしまーす」
「もう、あとで変わってよ！　絶対だからね！」
広場を埋め尽くす程の巨体のフレーム。広場にあったベンチや噴水などを邪魔だといわんばかりに破壊しつくし、自分の場所を確保し始める。程なくしてガコォンッ！　と大きな音が響いたかと思えば胴体の横手から出てきた二本の杭打ち機が石畳を深く突き刺す。体勢を低くし背中に背負っている二本の筒が動き出し長い砲塔と化した。超巨大な二本の長い砲身を肩から出ている支腕が伸びて支えている。あまりにも長い砲身は支えるものが無ければ微妙にずれてしまう為だ。
「ギリルディアッカ、御伽噺の化け物だなんて相手にとって不足無し！　ですわ。この第四世代フレームの砲撃をとくと味わいなさい！」
このロバスを襲った未曾有の事態にサラは出番とばかりに、格納庫で眠っていた第四世代フレームを持ち出したのだ。大型の魔石獣を

狙うために出撃したのだが、さらに巨大なギリルディアッカの姿を見て門の外から出ずにこちらへと急行したのだ。

「ショックアブソーブ準備オッケーだよ。細かい照準は任せたよリリノアちゃん。いつでもどうぞ！」

「任されましたわっ！　っとその前に、周りに居る方は耳を塞いで建物の影に隠れなさい！　五秒だけ待ちます。

行きますっ！！！」

バッガァアアアアアアアアアアンッ！！！

鼓膜を破るほどの轟音が広場に響く。衝撃波を撒き散らしながら吸い込まれるようにギリルディアッカへと砲弾は弧を描いて飛んでいく。

「・・・六、五、四、三、二、一」

「着弾確認。次弾装填、砲身冷却開始」

「これだけ離れてても当たるなんて、化け物ですわねこのフレーム。的が大きいとは言え初弾で当たるなんて…」

砲撃が命中したギリルディアッカは、着弾した箇所が大きく抉れ立ち止まっていた。今までのフレームには付いて居なかった新しい装置。射撃を補佐する為の装置は革新的なものであった。

「さぁさぁ、どんどん行きましょうリリノアさん。まだまだ的はたくさんありますからね」

「ですが、方向転換に時間がかかりますわね」

「大丈夫ですよ、ちょっとしっかり捕まってて下さいね。せーの」

バゴッ！！！

音を立てて杭打ち機が石畳から勢い良く抜き出される。そして、勢いよく浮かび上がったかと思うときっちり四十五度時計回りに方向を換え、着地と同時に杭打ち機を再度打ち込み機体を固定する。砲塔を微調整し次のギリルディアッカへ照準を合わせる。

「リリノアさん、しっかりして下さいどんどん行くんですからねっ」

「うぷっ、少々お待ちください。こんな無茶な方法で方向転換するなんて思っても見なかったものですから・・・」

サラは平気な顔をしているが、リリノアは予想外の動きの為に頭を揺さぶられ気分が悪くなってしまったようだった。

「とりあえず、全部のギリルディアッカに一発ずつ撃ち込まないと駄目ですから、しっかりしてください」

「サラの鬼…わかりましたわよ、どんどん行きますわよっ！」

「そうそう、じゃあ気合いれて行きますね」

いつの間にか、こちらを伺う目が期待に満ちたものになっている事を感じながらサラとリリノアは期待に応えるために次の獲物に狙いを定めた。

イーサルークへ（前書き）

予約投稿がなんかできてなかったっすＯＲＺ

イーサルークへ

「コージは…どこ？」

指定された地点には勇者リュートとその仲間が居ただけで、肝心のコージの姿は見当たらなかった。くんくんと鼻を鳴らし動物のようにコージを探すミミ。だが、そんな様子のミミを見てリュートは現実を突きつける。

「悪いけど、コージは今ここには居ないよ。代わりにこれを渡せって」

「…」

黙ってビデオ再生機をミミに渡すリュート。そして、再生ボタンを押すように促す。ミミはコージが作ったものと分かるそれを躊躇する事無く再生する。

“ミミ、久しぶり。色々細工をしないと駄目だったんで、再会はまたの機会という事で”

そんな出だしからコージのビデオが始まった。目の前に居ない人間に話をするという事はやはり難しい事で、コージは悪戦苦闘しながらミミに今までの事を必死に伝えていた。所々言葉に詰まったり、言い間違えたりしながらのビデオでもなんとか事情を掴めた。だがミミは話よりもコージの様子の方が大事だった。少し短くなった髪、そして義手をしている右手。あの偽者コージ、アーンに色々とされたようだ。

「という事なんだ、ミミちゃん。早速で悪いんだけど、イーサルー

クに向かおう」
「うーん、そっか。そうかぁ…」

リュートとミミが現状を把握して、話し合っていると他の面々がようやくリュートの結界へと到着してきた。なので、コージからのビデオレターを見せる。いきなり勇者と出会えた学園組は、一瞬憧れの眼差しを向けるもののコージから伝え聞く内容を把握して、それどころではなくなってしまう。そして、ビデオレターを見ている間に徐々にアーンの呪縛が浄化されていく。ラインハルト達は自身の変化に戸惑うも、そこらへんの説明もビデオでされている為、大人しく聞いていた。

「で、私達のアバター？　はどこにあるのかな？」
「あっちで待機してるから、大丈夫。まずはこのネックレスを付けてね」

説明が終わり、勇者に臆することなく平然と尋ねるアイシャ。まずは行動だ。リュートとコージの関係はどういうものなのか、非常に聞きたい所ではあるが事態が切迫している事が理解できる為、まずは言うとおりに動く事を選択した。そのアイシャの様子を見て他の面々も次々にリュートからネックレスを受け取り、用意されたアバターへと向かう。

「またか…」

結界を張っているリュートは結界へとぶつかってくる魔石獣の多さに辟易していた。何も今日に限ってここまで大量発生しなくても良いのではないか、とため息が出るばかりである。そうこうしている内にティナがこちらへ合図を寄越してくる。どうやら準備が整ったようだった。

「一旦、イーサルークの近くまで転移魔法で飛んで貰うよ。そこでアルミナが待ってるからそのままイーサルークに入国して欲しい。細かい手続きとかは大丈夫だから安心して」
「ほんまにイーサルークに入れるんです？」

空に浮かんでいる都市という事は噂で聞いた事はあるものの、その位置的な条件と古代竜の縄張りという事もあり簡単に辿り着ける場所でもないというのが常識であった。ビデオでコージがいくら大丈夫といっても、いま一つ信憑性に欠けていた。

「コージが大丈夫って言ってるんだから、大丈夫だよっ。早くいこっ！」
「まぁ、ミミちゃんの言うとおりだよ。案ずるより生むがやすしってね、覚悟を決めて行っておいで」
「はぁ…」

そして、ミミ達は手筈通りイーサルークへと向かっていった。

「しかし、今日は魔石獣の数が多すぎない？」
「そうね、こんなに頻繁に見かけるのは珍しいわね」
「これもアーンの影響、という事ですか」

この地に残る皆のアバターを死守するために、しばらくの間はリュート達は動く事はできない。それにまだここへ来る人々も居るので、なるべく安全を確保しておきたい。コージから預かった一枚のカード。それを取り出し、呼びかける。

「ガーディアン」

カードから機械人形が呼び出され、右手を掲げている。コージに言われたとおりに手を合わせ認証を済ませる。そして、この周辺に出没する魔石獣を殲滅するように命令した。リュートの命令を受けたガーディアンは即座に行動を開始し、結界から抜け出していった。命令を忠実に守るガーディアン。ここから動けないリュートの代わりに安全を確保してくれるであろう。

「始めまして、アルミナと言います。お待ちしてました。ここの奥へまっすぐ進んでください。そこに飛竜がいますので、乗って頂ければ後は勝手にイーサルークまで飛んでいってくれます」

転移陣の先で待ち受けていたのは、燃えるような赤い髪をした魔導師。フードで顔を隠しているため少し怪しい感じがするのだが、魔導師は結構こういうタイプの人間が多いので気にせずに言われるがままに奥へと進む。

飛竜に乗ったことの無い面子に配慮してか、飛竜の背中には少し大きめの御輿みたいなものが乗っており、そこへ座ってしっかり捕まっていれば落ちる事は無さそうだ。ミミとアイシャは飛竜を見るやすぐに乗り込み、女性だけを呼び寄せて空へと飛んで行った。

「じゃあ、飛竜ちゃん。お願いねっ」

ミミの掛け声と共に、女性陣を乗せ嬉しそうに空へと舞い上がる飛竜。あとに残されたのは、ラインハルト、ランバルト、レイモンド、ヴァイス。行動力のある女性の勢いを目の当たりにして、ポカンと

したままである。

「少しはためらうとか無いんかい…」

「これだけでかい飛竜に、気軽に乗り込めるのは流石は生徒会長と言う事か」

「でも、一番乗りはミミちゃんだったよね。エリーもなんだかんだでさっさと乗り込んでったし。うちの学園の女性は強いよね」

「セリナさんは無事なのだろうか…」

そんな様子の男性陣をはやく乗れといわんばかりに、じっと見つめてくる飛竜。慣れてる人間であれば、催促しているのだなと分かるのだが生憎とここには飛竜の表情や気持ちが仕草からわかる者は居ない。よって誤解が生じる。

「お、おい…やっぱこの飛竜なんや怒っとらんか？　なんやじっとこっち見とるで」

「気、気のせいだろう。きっと大丈夫なはずだ」

大人を十人ぐらい乗せても大丈夫そうな飛竜の巨体から片時も目を離すことなく、そう
言い合うハルトバルト。そんな中仕方ないなという具合に肩をすくめてレイモンドが一人飛竜の背中へと乗り込んだ。

「ほら、時間が惜しいから早く行こうよ。大丈夫だって、なにも取って食いやしないから」

そう軽く言い放つレイモンド。その言葉に心ここにあらずと言った感じでヴァイスが乗り込み、残るはハルトバルトのみ。進みは戻りを繰り返している二人に業を煮やしたのか、突如首を伸ばした飛竜は一人ずつ加えては背中に放り投げる。

「うおっ？！」
「ぬっ」

ポンポーンとテンポ良く背中に乗せた飛竜は満足したのか、そのまま上昇していく。だらしなく御輿に乗っていた二人は急上昇に慌てて座りなおし、しっかりと捕まって目をつぶっている。

「なんつー乱暴なやっちゃ！　ぬおー、飛んどる！　飛んどるで、バルト！」
「待て、落ち着かせろ。くそっ、服によだれが…」

愚痴をこぼすランバルトにどこ吹く風で飛竜は、気持ち良さそうに空を舞いイーサルークへ向かった。どうもこの飛竜は人を乗せる事に慣れているようだった。

「いやぁ、自業自得だと思うよ。二人とも」

レイモンドは文句や愚痴を言うハルトバルトにそう断言した。ここからはイーサルークは見えない。だが、この飛竜の速度であればすぐにでもイーサルークが見える事だろう。噂話でしか聞いた事の無い幻とも言われる都市に入れるという事で、いつになく浮かれているレイモンド。風の属性の魔法が得意という事で、余計に空に浮かぶ都市に興味を持ったようであった。

演出

バッガァアアアアアアアアアアアンッ！！！

ギリルディアッカへの砲撃は続く。二門の砲塔は一門ずつ使用する事にし、冷却の時間を稼ぐ。氷魔法を利用した冷却システムがあるとはいえ、このような連続使用は砲身が破裂する可能性があるせいだ。

「一向に堪えた様子がありませんわね。削っても削っても再生するのは流石と言うべきでしょうか」

「いい加減再生できなくなっても良いと思うのですが、どうなってるのでしょう？　にしてもティンラドールが邪魔ですね」

四方向に一体ずつのギリルディアッカに対し、撃ち込んだ砲弾は三十発を超える。撃ち込んですぐは着弾箇所が抉れているのだが、四方向に撃ち込んで一周した頃には再生が済んでいるという形だ。一方向に一気に叩き込み一体ずつ沈めたい所だが、そんな事をしている間に他の方向から町に近づかれてこちらがやられてしまうであろう。

バッガァアアアアアアアアアアンッ！！！

方向を転換し再度砲撃をする。一応、膠着状態にまで持ち込む事ができたのだが守備隊なり他の町からの援軍がない限り、状況は悪くなるばかりで良くなる事は無いだろう。

「ですが、諦めませんわよ！　町の人が避難する時間はこれで稼げましたし、後は少しでも長く持ちこたえるだけですわ」

「でも、リリノアちゃんがここまで頑張らなくても良かったと思うよ？」
「ふふっ、上に立つ者がこういう時に動かなくてどうするんです？　少なくとも我が国ではこういう時こそ真価を発揮するものなのです」
サラの疑問にいい笑顔で応えるリリノア。だが、その顔がモニターを確認して凍りつく。
「正面に魔石獣ですわ！　サラッ！！！」
「任せてっ」
サラは要請に応え脚部にマウントされている砲台を準備し、リリノアは魔石獣に狙いをつけ脚部砲台を連射する。
ダンッダンッダンッ！！！
最初の一発は回避されたが、一発はかすり、一発は命中。マジックアローと違いかするだけでもダメージはある。外した砲弾が店舗を破壊するが、仕方ないと割り切る。
「町中にまで魔石獣が出てくるなんて、どういう事…？」
「門を突破されちゃったのかな？　でも、そんな様子は無いですよね？」
「そうね、門を放棄して避難するならここを通るはずですし」
そして、かなり長い時間ここで迎撃行動を取っているのに守備隊の一人もここに来ないというのもひっかかる。いくらなんでも確認の為に誰かが来てもおかしくない状況である。

ダンッダンッ！！！

「厄介ね。今は数が少ないからなんとかなってるけど、増えてきたら取り付かれるわ」

ひょっこり顔をだした魔石獣を撃ち殺しながらリリノアは愚痴る。

「本来はこの状態の時は護衛機が居ないと、駄目ですから。そういえばバルトワさんはどうしたんですか？」

「あいつはくそ真面目…失礼、非常に真面目ですからフレームの使用許可申請に行ってますの。あれでも、名持ちですからこんな時には役に立つのですが融通が利かないと言いますか…」

リリノアはサラが乗るフレームの補佐という名目で乗っている為、そこらへんの許可はどうとでもなるが、バルトワはそうは行かない。とはいえ普通はこのような有事であれば、そんな事に気をかけずとも良さそうな物だが、名持ちであり国の代表としてバルトス国に来ているという意識が強いバルトワはそこらへんを疎かにできない性格であった。

「とりあえず、無いものねだりをしていても始まりません。私達で今できる最善を尽くしましょう」

「分かった。バルトワさんもここで砲撃してればすぐに分かるよね？」

「それは期待して良いです。許可が下り次第こちらに向かってきてくれますわ」

リリノアは今はそう信じて魔石獣の撃退を続ける他無かった。

“くそっくそっくそっ！！！”

ロバスの町を駆け抜けながら、歯噛みする光司。町中に魔石獣が出現し、そこかしこで蹂躙していく。見かけた端から片付けていくのだが、それでも犠牲になる人達を減らせるだけで、全てを助けられる訳ではない。今すぐにでもアーンを叩きのめして、こんな事を止めさせたい気持ちを必死に抑え込んで、逃げ遅れた人が居ないかロバスの町を走っていた。

“なんでこのタイミングでっ”

本来であれば救出作戦を極秘裏に行うだけであったのだが、非常に悪いタイミングで魔石獣の大量発生が起きてしまった。リュートから予定していた人間はイーサルークに送ったという合図を受け取っているので作戦自体はほとんど問題なかったのだが。

遠くでときおり砲撃の音が聞こえる。そして門の方は押し寄せる魔石獣を食い止めるのに必死だ。何故か門の内側にも魔石獣が出現している為、守備隊は対応に手間取っている。中型や大型の魔石獣を町中へ入れてしまえば、尋常でない被害が出てしまうのだが町中に居る魔石獣を放っておく事もできない。門の外と内に対応する為に兵力を分散しようにも、人手がまったく足りていない。門の付近の魔石獣に対応するだけがやっとで、守備隊は追い詰められつつあった。

光司としては、アバターを潜入を見届ける為に町中に潜伏しているだけの予定だった。勿論有事の際は動くつもりでもいる。今であれ

ばアーンとも戦えるかもしれないが、確実に倒せるとは言い切れない。なので迂闊な行動をとる事は厳禁であった。あったのだが、魔石獣がロバスを蹂躙しているのを黙って見ている事はできなかった。幸い、アーンが今「777」に乗ってるらしい事は分かっている。それにさえ気をつければ向こうに気取られる事は無い。

義手を駆使し、魔石獣に気づかれぬまま屠っていく。四六時中はめているおかげで、意思の伝達は順調で意のままに形を変え、本当の自分の手のように動かすことができる。利き腕を無くしてしまったので、最初は心配していたのだがまったくの杞憂で義手に“ドゥエーリン”を使う事を思いついた自分を褒めたい気分になる光司であった。

“それにしても、アーンの奴は何を考えてる？　わざわざ自分が居る町に魔石獣を襲わせるなんて、まったく意味が無い…いや。あいつの事だから、きっと何か理由があるはず”

どこかフザケタ奴ではあるが、何も考えずにこんな事を起こすわけが無い。それに、どうも事前に魔石獣の襲来に備えていた様子があるので、何か考えがあったとしか思えない。

“ひょっとしてアーンは魔石獣を制御できないのか？　でも襲ってくる事は分かるからこうやって備えていたはず。でも、あいつならわざわざこんな準備なんてさせなくても、自分で簡単に片をつける事ができるはずだ”

アーンと戦った光司には良く分かる。これぐらいの数の魔石獣などアーンにとって物の数に入らない。蚊を叩き落すかのようにごく気軽に殲滅してのけるだろう。自分でも殲滅は可能なのだから。

疑問を残しつつも光司は合図の鈴が鳴るまで、一匹でも多くの魔石獣を倒す。今はそれだけを考えて光司は町を駆けていった。

“そろそろ行こうかな。なんか町中からいらん事をする奴がいるみたいだし。せっかくの僕のインパクトが薄れちゃうよ、ほんとに”

アーンの予定ではギリルディアッカが門に近づいて来た所で、一気に殲滅していこうと考えていたのだが、どこの誰かは分からないが強力な砲撃でギリルディアッカを見事に足止めしていた。とはいえ、地を這う魔石獣の足止めまでは不可能だった為、こうして門の前には大量の魔石獣が押し寄せてきていた。一応、「777」に乗ってぼちぼち魔石獣を倒してはいるのだが、まったく本気を出していない。

「皆っ！　このままだと魔石獣に押し切られてしまうだけだ！　だから今から「777」に隠されていた力を使って特攻する！」

“なんというか悲劇のヒーロって奴？　いやぁ正義面っていうのはむずむずするねぇ”

内心でそんな事をアーンが思っているとは露知らず、その言葉に驚きと悲しみを無い混ぜた声を上げ、アーンを引き止めようとする守備隊の面々。守備隊の飛行フレームはすでに飛ぶ事はできず、固定砲台がわりに使われている。空を飛ぶ「777」に付いて行ける者は誰も居ない。

「アーン王子！　特攻など止めて下さい！　これだけの数の魔石獣の群れにあなた一人が突っ込んだ所で、無駄死にするだけです！」
「アラン隊長、心配してくれるのは有難いのですが僕はこの国の王子だ。民を護る義務がある。それに別に死にに行く訳じゃない」
「…ですが、一人で行かれるのは無謀です」
「大丈夫。五年前も「７７７」は魔石獣の侵攻を食い止めた。なら今回もきっとできるさ、じゃあ行って来るよ」
「アーン王子！！！」

アランがそう叫ぶも機体はすでに飛ぶ事は叶わず見送る事しかできない。タンッタンッと空を蹴り魔石獣の群れへと向かう「７７７」の無事を祈る事しかできなかった。

“あーしまったなぁ。住民はみんなシェルターに避難してるんだっけか。ちょっとギャラリーが少ないけど、後でなんとかするかー”

門に居る守備隊の悲壮感とは裏腹に、ごくごく気軽な様子のアーン。魔石獣ごときがどれほど押し寄せようと、産み親であるアーンに逆らう事等できないので、その態度も当然といえば当然であった。

「イッツショォータァーーーーイム！」

「７７７」は力場を発生させ、それを足場にする事で空を翔る。これはその応用。力場を発生させ魔石獣に向けて次々に飛ばしていく。しかし、ある程度その技で魔石獣を倒したアーンはインパクトが弱いと考えたのか、今度は別の方法をとる事にした。

「突撃ぃー！」

本気のホワイトファングにすら追いつく機動性を発揮し、青い閃光

と化す「７７７」はそのまま魔石獣の群れへと突っ込む。青い光に触れた魔石獣は、ちり一つ残さず消え去り一瞬たりとも「７７７」の進撃を阻むことはできない。ロバスの町の外周をぐるりと駆け、一気に大量の魔石獣を消滅させるアーン。

“うーん、これじゃあちょっと簡単に終わりすぎかなぁ？　ちょっとピンチが欲しいかな？”

飛び回り魔石獣を減らしつつ、どうやればもっと人気を取れるか考えるアーン。だが、この光景は守備隊にとって驚くべきものであり、アーンが思っているほど簡単なものではなかった。群れの中には小型の物から大型のものまで多種多様の魔石獣がおり、それを撃ち倒すのに非常に時間がかかるものであり、犠牲が出るのは必至であった。それをアーンは一瞬で犠牲も出さずにやってのけたのである。

「こんな簡単に…」

「これなら、俺達助かるんじゃねーか？」

「ああ、さすがは王子だ！」

押し寄せる魔石獣を青い光が消し去っていく光景をまるで夢でも見てるかのような表情で、見つめる守備隊の面々。だが、それも青い光がいつの間にか集まっていたギリルディアッカに叩き落されるのを見て再び絶望へと変わっていった。

対決？

イーサルークにある宮殿。飛竜達は竜の巫女が住まう場所へミミ達を案内してくれた。付いた先には巫女が待ち構えており、ギロリとミミ達を一瞥したかと思うと付いてこいと言わんばかりに手を上げ、宮殿へと向かう。数歩歩いて一行が付いて来るのを確認し、ずんずんと宮殿へと急いで向かった。

「俺達、なんか悪い事したんか？」
「さっぱり思いつかんな。俺達というよりも、女性陣と何かあったのではないか？」

案内してくれる水色の髪の少女のつっけんどんな態度に、ひそひそと話し込むハルトバルト。自己紹介もなく黙って案内する少女は、どう見ても怒ってるようにしか見えない。

「またコージがあの子になんかしたんじゃない？　で、美少女ばかり来てるもんだから怒ってる。というのが僕の意見だね」
「あー有り得るなぁ。コージの奴はほんまどこ行っても変わらんのぉ」

レイのありそうな意見にため息をつくハルト。だが、気を取り直して前方を歩く女性陣を見るのではなく、せっかく来たイーサルークを良く見ようとキョロキョロとしだす。噂で竜が治める都市とは聞いていたが、ベノア村とは規模も場所も違う。まさか、都市全体が空に浮いているとは思っていなかったのだ。

「だが、イーサルークは凄い所だな」
「ああ」

景色を見ているハルトに気付き、バルトが話しかける。このような状況でなければイーサルークの中を見て周りたい所である。空の上に浮かぶ島といっても、周囲を見ても山もあり平野もありどこにでもある都市の風景に見える。広大な土地が空に浮かんでいるのでそう錯覚させるのだ。もっとも、外縁部にいけば地上が見え、そのような錯覚を起こすこともないのだろうが。

「飛竜が普通に飛んどるんやなぁ。なんつーか、ここに住んどる奴は肝っ玉が違うなぁ」

「慣れてるか慣れてないかの違いだろう。俺達も見慣れればどうという事は無くなる」

「そういうもんか？　ついつい身構えてしまうんやけどなぁ」

宮殿へ向かう道を歩いていると、飛竜が普通に空を舞っている。結構な低空を飛んでいる時もあり、その度にびっくりして剣を構えてしまいそうになる。そこでふと気が付くハルト。

「そういえば、俺達武装解除されとらんがこのままでええんか？」

「言われてみればそうだな。あの宮殿へ入るならこのままでは、咎められかねないな」

その言葉に案内していた少女がぴくりと反応する。そして、獰猛な笑顔をハルトバルトに向け挑戦的な言葉を投げかける。

「おもしろい事を言うなお前達。俺を傷つけようと思うなら、そんななまくらじゃ五分と持たんぞ？」

「は？　お、俺？　えーっと、気に障る事言いましたかいな。すんませんな」

少女の口調に戸惑いつつもそう謝るハルト。少女の八つ当たり気味の言葉に気を呑まれ素直に謝っている所を見ると、何を言われたか良く分かっていないようだった。そんな頼りない風情のハルトをふんっ、と鼻を鳴らして歩き出す少女。

「嫌われたな」
「だぁっとれ」

とりあえず、先の言葉を聞くに特に武装解除せずとも宮殿へと入れるようだ。そして、質素ながらも頑丈な造りの宮殿へと案内された一行は、どんどん宮殿の奥へ奥へと歩を進める。そして、だいぶ歩いた後に宮殿の中心にある広場の脇にある大部屋へと到着した。

「男はあっちだ。今手招きしている男が居るだろ？　あいつの所へ行け」

そうつっけんどんに最低限の言葉を投げかける。八つ当たりされては適わないとばかりにハルト達は言われたとおりにそそくさと移動していった。

「しかし光司はどれだけの女を囲えば気が済むのだ、まったく…」

男達が移動していったのを確認し、改めて女性陣を見つめてそう愚痴る少女。ぼそぼそと呟いたつもりだろうが、ミミやアイシャはその言葉を聞き逃すことは無かった。

「よしっ、良く聞け。俺は光司の嫁のアナベル＝フォーニクスだ。ここで竜の巫女をやっている。お前達にはそこにあるベッドに入って貰い、血の呪いを解くと同時にアバターの操作を行ってもらいたい」

アナの言葉に反応したのはアイシャ。自分の方が立場が上だと言わんばかりのアナの態度におもしろいおもちゃを見つけたという笑みがこぼれる。

「うふっミミちゃん、コージのお嫁さんだって。面白い事言うよねこの子」

「うん。ミミ達がお嫁さんなのにコージを独り占めしようとか、コージの事何も知らないよねー」

「ねー」

「おいそこの二人。俺に喧嘩を売ってるのか？」

ぎろりという表現が良く似合う表情で、アイシャとミミに詰め寄るアナ。だが、そんな様子にひるむ様子など全く無い二人。むしろにこにこと機嫌良く笑っているぐらいだ。

「ううん、喧嘩にもならないよ？　だってあなたみたいな自分勝手な人をコージが、お嫁さんにする訳ないもん」

「そうよねぇ。優柔不断で結局ハーレムになっちゃってるような、だめだめなコージ君が今更一人に絞れるとか有り得ないもんねぇ。お嬢さんお嫁さんを自称してるだけでしょ？　そんな嘘はおねーさん関心しないな」

「む、くっ」

優柔不断でだめだめ。まさに光司の表現にぴったりだ。ついこの間もセリナという美少女と再会したというのに手を出す様子のない光司。そしてさらに光司の大事な人間という事で美少女達がやってきた。今まで自分の容姿を気にした事が無かったアナベルだったが、セリナが来たのをきっかけに少しでも可愛くなりたいと思い始めて、色々気にしだした所へセリナに負けず劣らずの美少女達がやってき

た。だからこそ、見た目でまったく勝ち目が無いと思ったアナベルは先制攻撃といわんばかりに、光司の嫁だと宣言して牽制したつもりだったが、あっさり見破られてしまい悔しそうに口をつぐむ。

「ふぅん」

そんなアナベルの様子ににやにやとするアイシャ。ミミは言い過ぎたかなという感じにペロッと舌を出していた。

「そうやって争っていれば、私がコージをかっさらうのも簡単だ。是非、争って欲しい」

「エリー、あんた空気読みなさいよ空気。あ、ちなみに私はコージ狙いじゃないから安心してね、フォーニクスさん」

突然、宣戦布告をするエリーをたしなめながらセシリアは目立たないようにエリーをひっぱる。そんな様子に今自分がすべき事を思い出したのかアナベルは咳払いをして、ミミ達に向き直る。

「とりあえず、ベッドに入ってくれ。呪いを解くのは早ければ早いほうが良い」

ベッドと言うより棺桶のような形のベッドに、腰が引けながらも恐る恐るベッドへと向かう。

「っとお前だったか、お前だけはこっちに来てくれ」

「ミミ？」

皆と同じようにベッドに入ろうとしたミミだが、アナベルに呼び止められる。

「そうだ。お前は貴族の血が入っているそうだな。平民の血も混じってるらしいというのも光司から聞いている。間違いないな？」
「うん。たぶんそれで合ってる」

他の人間には聞こえないように耳打ちしてくるアナベル。あまり知られて欲しくない事柄だけに無表情を装って返事を返すミミ。

「なら、あの縁が赤いベッドに入ってくれ。それで大丈夫だからな」
「うん、分かった。ありがとうフォーニクスさん」

アナベルの配慮に素直にお礼を言うミミ。まさかお礼を言われると思っていなかったのでその眩しい笑顔に面食らうアナベル。なので、思い切って聞いてみた。

「なぁ、さっきなんで俺のことを自分勝手だって言ったんだ？」
「ん？　だってコージにオーケーして貰ってないのにお嫁さん宣言したんだもん」
「えっと、なんでオーケー貰ってないって分かるんだ？」

あぁ、そこからか、と呟いてアナベルに向き直るミミ。

「だって、そんな大事な事をコージがミミ達に言わない訳がないもん。それに先にセリナが来てるのに、宮殿が壊れてる所も無かったし。本気じゃないならセリナの前であんな事言っちゃ駄目だよ？大変な目にあっちゃうからね？」
「もうあった…すごく怖かった…」

アナベルのその様子に苦笑をもらすミミ。黒セリナに会っちゃったら怖いよねぇ、うん。とアナベルを慰めながら背中を撫でる。

「あいつ魔導師のくせになんであんなに強いんだ?」
「コージが絡むときだけだから大丈夫だよっ。味方だと頼もしい限りだよ、うんっ」
「そうか、そうかぁ…」

ミミの説明におぼろげながらに理解を示すアナベル。

「うん、じゃあベッドに入るねフォーニクスさん」
「アナだ。光司はそう呼んでくれるから、ミミもそう呼んでくれ」
「うんわかった。じゃあアナまたね!」

アナベルに小さく手を振って笑顔でぴょこんとベッドへ入るミミ。
そんな可愛らしい仕草を見せるミミにセリナは怖かったがミミとは仲良くなれそうな気がしたアナベルであった。

あがくもの

ギリルディアッカの巨体が「777」を容赦なく叩きのめす。それも一体だけでなく四体がまとまり手や足を使って、攻撃を加え小さな「777」の姿は土煙ですぐに見えなくなってしまった。地響きと共に大きな音が町まで届き、それを聞いた守備隊の人間は助けようと考えるも、あまりにもひどい有様に向かう事すらできなかった。

「ギリルディアッカに王子が…」

「そ、そんな…」

悲痛な声があちらこちらから上がる。だが、そんな声をよそに町中から今が好機とばかりにギリルディアッカに砲撃が加えられる。一箇所に固まったギリルディアッカへこれで終りだと言わんばかりに次々に弾着する。

「ぼさっとするな！　俺達も王子の弔いだ！」

「おうっ！」

「くそぉおおお！」

マジックアローに、最近出回るようになった連射銃を守備隊は次々に撃ち込む。砲撃と違い威力は低い物のこれだけの数で押せばそれなりに効き目はあるはずだ。なんにせよ、ここでギリルディアッカを撃ち倒さなければ、やつらはそのままロバスを蹂躙するだろう。

そして、ようやく「777」に攻撃するのに飽きたのかうるさげに守備隊へと向き直るギリルディアッカ。砲撃で体の一部が吹き飛んだりしているものの、行動に支障は無い様だ。

「化け物め…ひるむな！　ここが正念場だ、足を狙って撃てっ！」

アランはむざむざ死なせてしまったアーン王子の仇を討つ為に、部下を叱咤する。自身も門に備え付けてあるフレーム用のバリスタを脚部を狙って狂ったように撃ち出す。町からの砲撃が胴体、門の守備隊からは足を狙い撃ちされる。だが、四体の内三体に攻撃が届くものの、一体だけは三体の影になりほぼ無傷の状態でこちらを伺っている。

オォオオオオオオオォオォオォオォオォオッ！！！

無傷の一体から怨嗟の声が上がる。不気味なその咆哮は聞く者すべてを震え上がらせる力があった。事実、その咆哮のせいで攻撃がぴたりと止まってしまった。そして、町の方では大きな音と共に煙が上がる。先程からギリルディアッカを吹き飛ばしていた射撃地点付近である事から、砲塔が爆発したのかもしれない。

そして怨嗟の声を上げてから再び勢いを盛り返すギリルディアッカ達。

低くくぐもった笑い声のような物を上げながら、ゆっくりとゆっくりとロバスへと向き直る。その様子は獲物をいたぶる魔物がよくする行動であった。地響きを立て、威容を見せ付けるかのように焦らず歩いてくる。散発的に守備隊から攻撃があるものの、ギリルディアッカが手を上げ何かを撃ち出す事で、攻撃を加えていたフレームは吹き飛んでいく。

とにかく前へ！

「アラン隊長！？　どこへっ！？」

「前に出る！　援護を頼む！」

このまま座して待てばロバスは壊滅するだけである。そう考えたアランは門を飛び降り単機ギリルディアッカへと走り出す。同様に門を飛び降りアランに続こうとするものがいる。エディだ。

「隊長、お供しますよぉ」

「エディ、おまえは残って指揮を取れ」

「嫌ですよ隊長。おいしい所を一人で持っていこうったって、そうは行きませんって」

「このやろう」

「それに隊長のその剣をぶち込む隙を作れるのは俺以外いないでしょ。という訳でどこまでもついていきますよ」

「そうか。期待している」

エディの説得は諦め、ギリルディアッカをどう切り崩すか考えるアラン。捨て身ではない。ただいつもより危険度が高いというだけで、アランとしても死ぬつもりは無かった。エディの言うように自分の剣をぶちこめば勝機は見えてくるはずだ。あまりの重量と取り扱いが繊細な為、使い手を選ぶ試作武器「断罪剣」。

「来ますよ」

こちらに気づいたギリルディアッカが手を向け、何かを撃ち出して来る。不可視の攻撃だが手を向けた方向に何かを飛ばしてくるのは分かっているので、難なく回避する二人。そしてそんな様子の二人に言われた事を思い出したのか、守備隊から援護射撃が開始される。

エディが先行し先頭のギリルディアッカに取り付く。エディの機体は四脚タイプなのでギリルディアッカが余計に大きく見える。注意

を引く為に隙を見つけては攻撃を加え、すぐさま飛び退る。先頭の一体だけでなく、他の三体もちょろちょろと動くエディを狙って手を向けて攻撃をするも、直撃だけは避けて逃げ回るエディ。

「隊長！　「７７７」はまだ健在です！　気を失ってるだけかもしれません、俺が引き付けますから隊長は「７７７」を叩き起こして来て下さい！」

「だが、おまえだけで四体も相手にさせるのは」

「いいから早く行って下さい！　集中力が持ってる間に！」

「やられるなよ！」

さすがのエディも必死に避けて回っているようで、いつもの余裕はまったく無い。エディの言うように「７７７」の機体が遠くに見える。ギリルディアッカの攻撃でも、機体はしっかりと耐え切ったようであった。

「王子、すぐ行きますよ」

ギリルディアッカを迂回せず、最短距離を駆け抜けるアラン。最初は迂回しようとも思ったのだが、迂回してそこで見つかってしまえばどうあがいても「７７７」まで辿りつく事ができずに終わると考え、まっすぐ向かう事にしたのだ。

エディの奮闘のおかげで、狙われること無く「７７７」まで近づけた。途中、一度目を向けられたようだが、エディの神がかったフレームの操作のおかげでギリルディアッカはすぐにこっちから気を逸らして、なんとか辿りつく事ができた。エディは乗ってきたのか、今も地面に降りる事無くギリルディアッカを足場がわりにして四体を翻弄している。

「王子！　無事ですかっ王子！」

「７７７」の機体正面に立ち、機体を立ち上がらせる。その間も大きな声で呼びかけを行うも返事は無い。どうも気絶しているようなので直接ハッチを開けて、無事を確認する必要があった。

そう決断するや否や躊躇う事無くハッチを開け、「７７７」へ生身で取り付くアラン。即座に外部操作パネルを撥ね開けハッチ開放操作を行う。エディが戦闘をしている最中にこのような行為は危険以外の何物でも無いのだが、王子が生きているのならば救出する必要があった。

「くそっ！？　何故ハッチが開かん！？」

間違いなくハッチを開ける操作をしているのだが、一向にハッチが開く気配が無い。さすがの「７７７」もギリルディアッカの攻撃で故障したのであろう。一見無傷のように見えるのだが、よりにもよってそこが故障するというのは、なんとも皮肉な話である。

「フレームで無理にこじ開けれるか…？」

仮にもルーツである。無理にこじ開けて何が起こるか分からない。下手をすると自壊してしまう危険性があった。そうなれば中に居る王子もただで済む訳が無い。

「王子！　起きて下さい、王子！」

仕方なく装甲を思い切り叩き、必死に呼びかけを行うアラン。ガンガンと拳を撃ち付けかなり大きな音を出すも「７７７」からは何の反応も無い。ここであまり時間を掛けてしまってはエディの負担が

大きく、引いてはこちらが狙われて撃墜されてしまう危険性がある。だが、今は必死に叩き続けるしかアランには手が無かった。

ロバスの広場。サラとリリノアが砲撃を行っていた場所は、かなり荒れていた。二人の乗っていたフレームは大破しており、すでに動かなくなっていた。だが、コックピットハッチが開いているところを見ると、すでに脱出しているようである。いや、脱出しようとしている最中であった。

「中々安全設計ねこの機体。気に入ったわ！」
「何言ってるんですか。私が絶妙のタイミングで機関部をパージしたおかげでこの程度で済んだんですよ？　褒めるなら私を褒めて下さい」
「そうなの？　サラ偉いですわ！」
「えへへ～」

砲身は無残にもひん曲がり、機関部の爆発のせいで広場は吹き飛ばされ所々火の手が上がっている。サラの言うように最初から砲台部分を切り離す機構があったようで、機体からだいぶ離れた所で機関部が転がっている。そのおかげでコックピットは無事だったのであろう。

「結構削れたと思ったんだけど、あいつの再生力は異常ね。一体でも厄介なのに四体もいるんだからもっと火力が必要よね」
「ですが、この子以上の火力を備えている機体はありません」
「魔道フレームは持ってないのです？」

「ありますが、大規模殲滅魔法はセットされていませんし、制限があるからそもそも無理です。とりあえず一旦屋敷に戻りませんか？」
「そう。残念だけど仕方ないわね。ロダンも結局来ませんし、体勢を整え直すとしましょう」
「はい、行きましょう」

このような状況の中でも、二人の少女は明るさを失わず元気であった。かけらも諦めずに立ち向かうサラとリリノア。二人は軽快な歩みで屋敷へと向かっていった。

動けない希望

「リュート、正直どう？」

結界を張りこの地にて、アバターを死守する役目を担う勇者一行。関係者の転移が終わりあとはアバターが目覚めるのを待つばかりとなっているのだが、魔石獣の尋常でない発生を見たティナはリュートが持ち堪えられるのかを知りたかった。

「いや結界を維持して魔石獣を跳ね除けるだけなら、余裕だよ。前より力が強くなってるからね」

「これだけの広さなのに？」

「うん。自分でも出鱈目だとは思うんだけど、まったく負担になってないんだよね。それにほら」

そうやってリュートが指し示した結界の一角。そちらを見れば結界に触れた魔石獣はダメージを受けてのたうち回っている。そして、そちらへ意識を向けるリュート。結界が一時的に槍の様に形を変え、魔石獣に止めを刺す。そんな様子がちらほらと見受けられ驚くティナ。

「どうなってるわけ？　結界で攻撃できるとか聞いた事ないわよ」

「そう言われてもできるんだから、良いじゃない。まぁ魔石獣ぐらいにしかこんな事できそうに無いけどね。たぶん、人間相手だと何も起きないと思う」

「そういう物？」

「試してないけど間違いないと思う。なんにせよ、今は便利な力だから有難く使わせて貰うだけなんだけど、さっきから尋常じゃ無い気配がするから早くそっちへ行きたいんだけど…」

木々に囲まれそれなりに目立たない所を選んだ所為で、周囲の状況がよく分からない。ただ、大きな地響きや音が何か大変な事態が起きている事を教えてくれている。それに加えてリュートの心に訴えかけてくる危機感が、危険な存在が近くに居ると警鐘を鳴らしていた。

「かといって私やレイシスはこの結界を出て様子を見に行くなんてできないわよ。こんな数の魔石獣の群れに突っ込んで無事に済むとは思えないわ」

「そうですね、こんな数の魔石獣の発生は初めて見ました。五年前は旧首都のバルトスに居ましたから…」

「うん、二人に行って貰おうとは思わないよ。僕も一緒に行かないと不安だし。というか、ミミちゃんが戻って来てくれたら、様子を見に行って貰いたいんだよねぇ。まだかなぁ」

リュートに取っては魔石獣の群れは、全くの有象無象でしか無いのだがティナ達にとっては危険な存在であるという認識はあった。だが、コージの仲間のあのミミという子は違う。一年前の時とはいえ勇者と互角と言える戦いをした彼女であれば、これぐらいの魔石獣の群れぐらい蹴散らす事ぐらいどうって事はないだろう。

「ロバスにはコージが潜伏してるから、なにがしか手は打つと思うんだけどさ」

結界周辺に寄ってくる魔石獣は倒せるのだが、その数はロバスに押し寄せる量から言えば焼け石に水としか言えない程度でしか無い。町の安全の為にもう少し数を減らしたい。一年とはいえロバスに暮らしてきて、世話をしたりされたりして増えていった知り合いに何かあったらと思うと、じっとしていられなかった。

「少しは私を信用しなさいっての。皆に渡してもらってるお守りは、この私が作ったのよ？　まぁコージさんにも少し手伝って貰ったけどね。ちょっとやそっとの事じゃ傷をつけられることも無いわ」

「…それは理解してるつもり、なんだけどねぇ。やっぱりこの状況をほっとけないんだ。これも勇者の血っていう奴かなっ？」

とはいえ、今は座して待つしかリュートにできる事は無かった。そして必死に我慢しているリュートをティナとレイシスは黙って慰めてあげていた。

ギリルディアッカが一箇所に集まった事により、魔石獣の流れが変わった。ロバスを目指さずギリルディアッカへと続々と集結し、その身の糧へと変わっていく。最前の砲撃などにより受けたダメージはいまだ残ったままであり、現在回復しつつある所である。大きく抉れた身体のまま、動いているギリルディアッカは不気味な存在であった。

そして、魔石獣の流れが変わったことにより、各門の守備隊も一箇所に集結しつつある。こういう有事の際は地下通路の存在が非常に重宝される。エディとアランがギリルディアッカを足止めしている時間を利用して、迎撃体制を整えつつある守備隊。北門に戦力を集中し、他の門は最低限の数を残すだけにしている。魔石獣の流れがギリルディアッカへと進むと分かり、急遽このように戦力を移動させたのである。

「援護射撃が欲しいところだっ・けっ・どっ！」

ギリルディアッカの抉れた部分を広げるように、蹴りつけて方向転換し逃げ回るエディ。その自由奔放な動きに、いまだ捕捉できずにいるギリルディアッカ。エディも最初の内は欲を出して攻撃も加えようとしていたのだが、二兎を追うものは一兎も得ず。自分へひきつける為に動き回る事に専念し、攻撃しようという考えは捨てた。そうでもしなければ、攻撃の隙をつかれてもっと早い時点で叩き落されていたであろう。

「隊長はまだかねぇ」

腕をかいくぐり、見えない衝撃波を避け、蹴りをすり抜け、相手を翻弄しつつ自分へ引き付ける。グレイトエースを襲った巨大フレームよりさらに巨大なギリルディアッカ。その巨体から放たれる攻撃は、かなり神経を削っていくものであった。当たればただでは済まない攻撃。モニター一杯に迫る拳や足。あまりにも巨体な相手な為、どうしても紙一重で回避する事になってしまうのだが、攻撃の風圧でガタガタと揺さぶれる機体。

今までに無いプレッシャーの中、エディは必死に意識を繋ぎ止め緊張感を持続させていた。

「７７７」にアラン隊長がアプローチし、必死に呼びかけを行っているのは分かっている。分かっているのだが、未だに動きが無い所を見るとやはり「７７７」はもう駄目だと言う事なのだろうか？王子はやられてしまったのだろうか？

「いかんいかん！　集中集中！」

時間が経てば経つほど不安が湧き上がってくる。無傷に見えた「７７」。なれば中のライダーも無事な可能性がある。先程見せた「７７７」の絶大な力。何故かギリルディアッカは見事に叩き落したが、「７７７」がうまく攻撃を当てれば逆にギリルディアッカを倒す事も可能なはずだ。今この状況をどうにかできる可能性が一番高いのはやはり「７７７」なのだ。だからこそ、エディは囮の役を買って出たのだが…

先程から警報がコックピット内に鳴り響く。

エディの集中が途切れる前に機体の方が音を上げてしまったようだ。だましだまし操縦するのもそろそろ限界のようで、さすがのエディも焦りを隠せずにいる。

「くっそ！　こんな所で死んでたまるかよっ！」

今、自分が落とされてしまえばアラン隊長も王子も即座にやられてしまうのは自明の理。アラン隊長だけなら、なんとかなるかもしれないが「７７７」を放置できる訳が無い。エディにはジリ貧なこの状況を、ひっくり返すだけの力は無かった。そして、どうやって時間を稼ぐか考える間もなくあっけなく終わりが来た。

酷使し続けてきた脚部が踏ん張りが効かず滑り、絶妙な操作で耐えていたパーツに余計な負荷がかかる。

「しまっ！？」

回避行動を取っていたが、ものの見事に張り手を食らい吹き飛ばされるエディ。そしてエディにとって運の悪い事に吹き飛ばされる先にはコックピットハッチを開けて呼びかけを続けるアランの機体と

「７７７」の機体があった。

絡み合って吹き飛ぶ三機のガイアフレーム。エディの機体は四肢が吹き飛び、そちらこちらにパーツを撒き散らしている。アランの機体は頑丈だったという事もありエディの機体の体当たりにも耐えたのだが、衝撃を殺すことはできず「７７７」を巻き込む形で地面に横たわってしまった。さらに不運な事に生身のまま投げ出されたアランは、地面に叩きつけられパーツの一部に右半身を挟まれていた。

そして、小うるさい蝿を叩き落したギリルディアッカは満足気に止めを刺すべく嫌らしい笑い声を出しながら、いまだ無傷な「７７７」へと向かってきた。

狙いどおり

胴体部と頭部だけ残ったエディの機体はアランの機体を吹き飛ばし、「７７７」に覆いかぶさるように転がり、動きは無い。吹き飛ばされた衝撃でエディは気絶しているようだ。アランは右半身に圧し掛かる破片のせいで、苦痛のうめき声を上げている。エディとアランがやられ町から二人を助けよとばかりに攻撃が加えられるが、それを意に介さず肩越しに町に視線をやり、歩みを止めないギリルディアッカ。

“あっははは！　いい具合に観客も集まってきたし、このピンチっぽい状況！　いいねぇ！　いやぁ、ギリルディアッカの嫌らしい演技も、僕にしか演出できないよね、うんうん”

「７７７」のコックピットの中、足と腕を組みリラックスした様子で愉しげに笑うアーン。アランがハッチを開けようとした時もロックを外さず放置し、エディの活躍を適当に応援し、ギリルディアッカでピンチを演出する。アーンにとっておとぎ話に出てくる災厄の魔獣であろうと魔石獣は魔石獣。意のままに操れる可愛い道具でしかない。そして、首尾よくピンチの自分を救う為に特攻してきた守備隊の隊長達。フレーム操作に関してかなりの実力を示している二人が、ギリルディアッカを食い止め、守備隊に希望の光を見せた所で、叩きのめす。

“あー感じるよ、絶望って言うやつ？　お、でもまだまだ諦めてない奴もいるねぇ。そうそう僕に期待をかけてくれるのは良い事だと思うよぉ？　さて、あともう少し演出したら僕の出番にしよっかな、うん”

人の負の感情を糧にする事ができるアーン。気がつけばそんな事になっていたが、別に不満はない。そのおかげで今こうして力を発揮できるのだから。

「777」を取り囲むようにして、集まったギリルディアッカ達。その内の一体がアランの体を押しつぶしていた破片を取り除く。アランを助けるのか？　と一瞬考えたがギリルディアッカがアランを吊り上げたのを見て守備隊から悲痛な声が上がる。

「ぐっあああっくぅっ？！」

丁寧にも押しつぶされていた右半身の方を掴み持ち上げられるアラン。悲鳴を上げるアランを見て笑っているギリルディアッカ。そして、今度は無造作に「777」に覆いかぶさっているエディの機体を手で割り、中にいたエディを持ち上げる。

こちらは気絶しているようで、ぐったりとしているままである。持ち上げられたエディを見てアランは怒りをあらわにするが、自身も持ち上げられている状況ではどうにもできなかった。そうギリルディアッカがアランを使って遊び始めたのだ。

「ぐあああああああああああっ！！！」

みちみちっ！　と、肉が裂けていく音が聞こえる。じわりじわりといたぶるようにギリルディアッカはアランの身を引き裂いていく。そして、エディを持ち上げたギリルディアッカはエディをおもちゃの様に振り回し、その様子を笑いながら見ている。

「があああああぁああ？！」

おもちゃの様に振り回されたエディも激痛によって気絶から覚める。無理に振り回され肩の関節が無残な事になっている。そして起きたエディにアランの惨状を見せ付けるように持ち上げるギリルディアッカ。

「くっ、隊長!!!　こいつらっ無駄にいたぶりやがって!　あぐっ!?」

「エディッ、すまんっ!　くあっ!?」

威勢は良くとも絶望的な状況に陥った二人は、さすがにこれで最後だと諦めていた。フレームは大破しこうやって捕まってしまった上で生き残る事など到底無理であろう。それこそ奇跡という奴でも起きない限りこの状況をひっくり返す事などできはしまい。だがエルディバで信仰されている神であってもそんな事は無理だとは思うが。

ッッッッン!

だが、諦めていた二人に奇跡が起きた。光の刃が音もなくギリルディアッカの腕を瞬く間に切り落とし、空中に放り出された二人を青い光に包まれた「７７７」が見事にキャッチしていた。

「アラン隊長、エディ隊長!!!　大丈夫ですかっ!!!」

「っ王子こそご無事で…」

「助かりました王子」

「ごめんなさい、気絶してた僕を守ってくれてたんですよね?　一旦、町にお二人を送ります。少し我慢してください」

アーン王子はそう断ると「７７７」を軽やかに駆る。直線的な動きではなく、緩やかに弧を描くようにギリルディアッカをすり抜けていき、手に抱える二人に負担が掛からないように、だが迅速に町へ

と戻る。

復活した「７７７」がアランとエディを救った姿を見て、歓声を上げる守備隊の面々。それに応えるように片手を挙げる「７７７」。

「二人を宜しくお願いします」

そして、ゆっくりと二人を守備隊に預けると改めてギリルディアッカへと向き直る。アランとエディはすでに痛みのあまり気を失っていた。

「王子、我々と力を合わせてあいつを倒しましょう！　飛行フレームは無くとも門を開けて討って出ます！」

「王子はさっきまで気絶していたのですから、ここから指揮をとって下さい！　後は我々が敵を引き受けます！」

口々にアーン王子へと声をかける守備隊の人間たち。一緒に戦おうと言う者、王子の体を労わる者、王子だけでも逃げてくれと懇願する者、王子の強さをあてにして囃し立てる者など様々な声が次々上がる。だが、アーン王子はそんな声を一蹴する。

「あいつらは僕が倒す！　アランやエディをこんな目に合わせた奴を絶対に許さないっ！」

「王子！！！」

力強く宣言したかと思うと、止める間もなくギリルディアッカへと突進する「７７７」。先ほどは同じように突撃していてやられてしまったのだ。今度、やられてしまうと助けに行けるような腕利きはもう居ないのだ。さすがの王子も頭に血が昇ってしまったのかと、この後に起きるであろう惨劇を思い悲しみに包まれる守備隊。

だが、それは杞憂に終わる。

「７７７」の前に次々に現れる光の刃。「７７７」を侮って無造作に襲い掛かってくるギリルディアッカを軽々と切り裂いていく。無数に飛んでいく光の刃は、一度斬っただけでは飽き足らず何度も繰り返しギリルディアッカへ襲い掛かる。

強く青く輝き出す「７７７」。それに呼応するかのように光の刃は動きを早め、ギリルディアッカを包み込む繭のようになった。

「消えてなくなれっ！！！」

アーンのその言葉と共に光は消え、ギリルディアッカの姿も同様に消え去っていた。さらに言えば先程まで大地を埋め尽くさんばかりに迫っていた魔石獣たちも消え去っていた。

急に辺りを覆った静寂に、状況を掴めない守備隊。

だが、「７７７」が勝ち鬨を上げるようにガッツポーズを取るとようやく状況を認識したのか、ざわざわとしだす。

「やった…のか？　やってくれたのか？！」
「居ない！　魔石獣どもも居ないぞ！！！」
「勝った？　ギリルディアッカにも勝ったのか？　夢じゃないよなぁ、おいっ！」

“ちょっともう！　ガッツポーズしてるんだから、タイミング合わせて喜んでよ！　まったくもう人間は思いのままにならないねぇ、まったく”

そして、劇的な勝利をもたらしてくれた「７７７」を喜びを持って迎える。大きな歓声は町に響き渡り、目端の効く守備隊の人間はシェルターへとすかさず知らせに行く。まさかの魔石獣の襲撃も結局は「７７７」によって、見事に撃退された。そう「７７７」に守られたのだ。前の襲撃でユージ王が「７７７」を駆って撃退したという事実は、「７７７」とアーン王子によって救われたという認識へと上書きされていった。

無邪気に喜ぶ群集を見てアーンは思う。

愚かですぐに人を妬み、自分の事しか考えない人間達。そうじゃない人間も居る事は知っているがアーンにとっては、負の感情を撒き散らす者達こそが人間の本質を表していると思っていた。こうやって群集の喜びに応えるなか、もっと早く倒せなかったのか？　力を隠していたのか？　という思いも伝わってくる。アーンにとってはそういう感情こそ、喜ばしいものである。

“人間ってのはままならないけど、だからこそ面白いな。どこまでも贅沢なこいつらを幸福の絶頂から絶望のどん底へ叩き落すのは、きっと楽しいだろうなぁ”

コックピットハッチを開けて笑顔でみなの声援に応えるアーンが、よもやそんな事を考えているとは誰も思いもつかなかった。思いつく訳が無かった。

「転移魔法っていうのは、世界を繋げて通る魔法なんだ。で、転移魔法を使えないようにする術式をよく調べてみたんだけど、一つ穴を見つけたんだ」

そう言ってコージはにやりと笑って、その穴を実演してくれた。そして、コージの言葉通りに穴があるのが分かった。これを思いついたのは父ちゃんのおかげだけどね、と言って笑ったコージ。でも、こんな方法で転移魔法を突破するとは誰も思わないだろう。多少の細工は必要だが、今回の作戦においてはその細工を施すのは楽な条件だった。

「なるほどねぇ。だから魔法が使えないと意味がない訳ね。でもセリナちゃん光司にせっかく会えたのに、ごめんね？」

「いえ、また後でたっぷり甘えますし。それと、ちょっと言われた事があって少しコージの傍から離れていたかったっていうのもあるんです」

その台詞におやっ？　と思うるり。表面上は平静だがついにうちのヘタレが愛想を尽かされたのかと内心ちょっと焦っている。

「あ、コージが嫌いになったとかそういうのでは無いのですよ？ただ、コージの不安を取り除いて上げたいんです」

「どういう事？？？」

「それはですね…」

セリナはコージと出会って、何故か無条件と言える程に惹かれてしまった。一目惚れという言葉でくくる事ができるかもしれないが、

王の印という原因がそれをさせてくれない。世界を自分達に都合良く変えてきている王の印。その王の印が、印を持つ者にとって居心地の良い世界、都合の良い世界へと変えてこの世界は良い所だと思わせる為に力をふるっていた。その一つとして人に好かれやすい様になっていたのでは無いか？　とコージが言っていたのだ。

だから、ちゃんと自分の本当の気持ちを見つめなおして欲しいと。そんな理由もあってセリナはこの任務を志願したのである。

「で、セリナちゃんは王の印の影響が抜けるまで光司と離れて、本当に好きかどうかを確かめたいっていう事かな？」

「そんな所です。でも、それって全く意味が無いんですけどね」

「ん？」

「だって、きっかけは印の力だったかもしれませんが、コージが優しくしてくれて今まで大事にしてくれたからこそ、どんどん好きになったんです。印の影響が無くなろうとこの気持ちが無くなる事はありません。今でも大好きなんです！」

ぐっと拳を固めて断言するセリナを、惚気るねぇとからかう、るり。だが、ここまで惚れさせるとはうちの子は一体セリナちゃんに何をしたんだろうかと、ちょっと興味があった。

「でも、王の印ってそんな力があったのね。さてさて勇司さんは何をされたのやら」

「まだ、目を覚まさないですよね」

いまだベッドで眠ったままの勇司を心配そうに見やる二人。寝てる間もるりの献身的な世話のおかげで、勇司は眠っているものの健康そうである。

「まぁ、あのアーンをとっちめるのは外に出てからね。んー…やっぱりそんな乱暴な事は光ちゃんに任せようっと」
「そうですね、お義母さんはお家にいて下さい。帰る場所を守ってて下さい」
「そうするね。アーンには私の代わりに一発拳骨くらわしといて」
「はい、分かりましたっ」

にっこり笑顔で返事を返すセリナ。そして、内心ではコージの母親と仲良くできるこの時間は非常に大事だと考えている。コージをゲットするには、親とも上手くやれない事には話にならないと教えられたからだ。印の影響から脱する事も確かに、大事な目的ではあったが、セリナにとって一番大事な目的は、るりやユージと仲良くなるという事だった。

そして今しばらくはこのまま待機する必要がある。ミミに許しているリードを少しでも取り返そうと頑張るセリナであった。

ミミが目を覚ますと、勇者一行が相変わらず結界の中でいちゃいちゃしていた。ただ普通に話をしているだけなのだが、空気がなんというか甘ったるいのだ。

「あ、戻って来たね。調子はどう？」
「ん、大丈夫だよ。ミミは前にも使った事があるから」
「そっか、それはなにより」

それでは早速コージの元へ行こう！　と意気込むミミをリュートが

止める。

「ミミちゃん、もう少し待って。他の人にも聞いて欲しい事があるからね。それに今は静かになったんだけど、さっきまで魔石獣の群れがロバスに大挙していたんだ」

「じゃあ、ミミが早く行ってやっつけてこないと！」

「大丈夫。ティナが調べてくれたんだけど、もう魔石獣は居なくなってるみたい」

ほんと、ついさっきまではうるさいぐらい居たんだけどもね、と肩をすくめるリュート。その言葉を肯定するように、リュートにそっと寄り添いうなづくレイシス。

「うー…せっかくコージに会えると思ったのにぃ」

「まぁまぁ。退屈ならコージからのメッセージをまた聞いてたら？」

「…そうする」

そういってリュートからアイテムを受け取り少し離れた場所で、メッセージを聞くミミ。その姿からはとてもリュートと互角に戦った人間には見えない。ただの普通の女の子だ。

「ティナ、食べ物とかの用意しといて。そろそろ戻ってくる人が増えてきそうだからさ」

「ん。分かった」

アバターを操作していて困るのが栄養の摂取と、排泄である。短時間であるなら何も問題はないのだが、今回はかなりの長期間に渡る操作になるのである。本体が眠っているベッドにはそれなりの処置がされているのだが、アバター自身も生きている人間と同様に食事をとり睡眠をし出すものを出す必要があった。でなければ、周囲の

人間に疑われるからだ。

「でも、コージさんってほんと凄い物を作るわよねぇ。ちょっと弟子入りしようかしら」

「それ良いですわね！　ティナさん是非そうしてはどうです？」

ぽつりと漏らしたティナの言葉に、すぐさま賛同の意を示すレイシス。普段からリュート絡みでしか会話をしないレイシスの意図は明白だった。ティナが居なければその分、リュートの時間を独占できるからだ。勿論、レイシスは赤毛の子の事をすっかり忘れている。

「それは駄目。若い男女がそんないやらしい」

「何言ってるのよ、リュート？　大丈夫よコージさんはヘタレだから、私に手を出すなんてありえないわよ」

自身の魅力を脇に置きあくまでコージをこき下ろす事で、安全を証明するティナ。うんうんと勢いよく頷いて、ティナが弟子入りする事を非常に望むレイシス。

「それにコージの迷惑になるよ、絶対。セリナさんにミミちゃん、えぇっと、それに他にも二人居るんだからティナに何かを教えてる時間なんて絶対無いって」

「そこらへんは要領良く時間を貰うわよ。それに作ってる所を見せて貰うだけでも全然違うし。アイテムをより良く使うなら、どうやって作られているかもしっかり知らないと」

ティナはそうやって作る所からしっかり調べる事でアイテムの力を引き出し、アイテム士としての地位を確固たる物にした。なので、コージが作るアイテムを使うならその作り方を学ぼうとするのは、ティナとしては当然の事であった。当然、その事はリュートも知っ

ているのだが、なんとなく気に食わない。

「なら、別に弟子入りする必要は無いじゃないか。何か作る時に連絡さえ貰ったら、見にいけるでしょ」

「あんた、タダでそんな事できるわけないでしょ？　そういう事はそれなりの対価ってものが必要なの。まったく」

おいしいとこ取りな提案をするリュートをたしなめるティナ。もしリュートの言うような事を許していては、職人はたまったものじゃないだろう。

「コージだったら別に良いよって言いそうだけどなぁ」

「いえリュート、やっぱり何かを得るには何か代償が必ず要るのです。ティナさんが言う事はもっともな事です」

至極まっとうな事を言うレイシスだが、本心は別だ。ティナよ出て行け！　これに集約される。クールに見えてする事はしっかりしているティナを、最近はリュートも良く相手をするので危機感を覚えているのであった。

「そうそレイシスの言うとおり。あんたそういう所で時々世間知らずなとこあるわよね。変なの」

「世間知らずの勇者様なのです。だからティナが居なくなると非常に困ります」

「あーっと、すまんが少し良いか？」

このままではいつまでも話しかける事ができないと考えたサカキは、話をぶったぎる。先ほどからこちらに戻ってきていたのだが、勇者達が話をしているので少し遠慮をしていたのだ。

「あ、どうも。戻ってこられたんですね。あっちに食べ物と飲み物を用意してるんで、つまんできて下さい。説明はみんな揃ってからしますので」
「了解だ。では、また後で」

見ればいつの間にか、かなりの人数が戻ってきている。ミミは隅っこで繰り返しメッセージを見ていたのだが、いつの間にか三人ほど増えて一緒に見ているようだ。

「さてさて。心と体を分離して浄化するとか、コージはえらく念入りにさせるよね。まぁ相手があんなだし仕方ないかな」

少し賑やかになってきた結界の中。リュートはコージに頼まれた事を実行する為に、じっくりと力を溜めていた。

戦乱の火種

ロバスで起きた魔石獣の襲撃。いつもより早い周期のそれは今回も「７７７」の活躍によって撃退する事ができた。とはいえ今回は町の中への進入を許した事もあり、各ブロックでは修復作業が行われていた。町が破壊されたままでは、パレードをしようにもできない為、急ピッチでフレームを使って作業は行われている。

先に増産されていたガイアフレーム。二百機分が順次ロールアウトされ、今回の修復作業に駆り出され、町の人に歓迎されている。間に合わなかったにせよ、事前にフレーム生産を計画していたアーン王子の先見の明はそれなりに評価されていた。今回の町の修復作業も機体の習熟をかねたものであり、アーン王子はなにやら色々効率的に物を考えるたちで面子にはあまりこだわらないと評価されている。

勿論、英雄という評価が先についてまわるが。

災厄の魔獣ギリルディアッカ。おとぎ話に出てくる魔石獣が四体も現れ未曾有の危機に瀕したロバスであるが、アーン王子一人の活躍で町は救われた。今回の魔石獣の大量発生は他国にも影響があったようで、バルトス国ほどではないが被害が出たようだ。

そんな中、妙な噂が流れていた。

今回の魔石獣の大量発生は他国によって仕組まれたもの、というものである。神聖帝国エルディバ。始祖エルディバが興した一神教ペレリス教を国教とした宗教色の強い国が、今回バルトス国を魔石獣に襲わせたというものだ。

王権は神によって選別されるという教義のエルディバに対して、印を持つ者が王になるバルトス国。他国であれば世襲や闘争で人間同士の争いの中勝ち得るものであるが、印のようなあやふやな物で王を選ぶという馬鹿げた方法を取るのはバルトス国のみである。

そのような方法を取るバルトス国を神を冒涜したとして、魔石獣を差し向けたのではないかという噂が立っている。曰くエルディバの国境線をまたがないようにエルディバ国からバルトス国へ移動しているm魔石獣の群れの姿を確認した報告が多数あった為だ。魔石獣の群れが来る方向を探っていた各国の軍が、エルディバの国境から流れてくるのを確認しているのでほぼ間違いのない情報のようである。

このような噂が立ちエルディバとしては、寝耳に水の出来事である。各国に対して害意がない事を示すために、訪問団を派遣し復興の協力を申し出ている。今回、各国に被害が出ているのだが、どういう訳かエルディバのみ魔石獣の被害が無かったのだ。

状況証拠だけで疑う訳にはいかないが、どこの国においてもそんなエルディバからの訪問団の協力を受け付ける事は皆無であった。エルディバとしては、今回一番の被害を受け尚且つ自国を一番疑っているであろうバルトス国にも訪問団を派遣したかったのであるが、ハイローディスが国境を越える事を拒否した事と、海に面していない国土の為船団を抱えておらず訪問する事を断念せざるを得なかった。

今は現状を回復する為に、問題は浮いたままになっているが、いずれこの件が何からの形で戦争の火種になる事はありうる事であった。

「戦争となれば、一番困るのは我が国だからな。エルディバの訪問団は絶対に通すなよ」

国境のどちらを向いても他国だらけのハイローディス。小競り合いから小さい紛争が起きる事も珍しくないこの国。もし、バルトス国がエルディバ国と戦争を行うとすれば、通り道であるハイローディスも旗色を鮮明にする必要が出てくる。

商売人という側面が強く資金の豊富なバルトス国、宗教色が強く兵の錬度や意識の高いエルディバ国。エルディバは常に美姫が居る事で有名で、昔から他国と婚姻関係を結ぶことが多く周辺国との繋がりが強い。反面バルトス国は商売を行う為、金に汚いという評価が多く商売だけの付き合いと割り切られている事が多い。

新興国のハイローディスは、他国との友誼がそれほどでもない上いつか征服しようと考えている為、バルトス国と協力体制をしきたい所ではあるが、そんな事をすればバルトス国以外の国が大挙してハイローディスを攻め、その上でバルトス国へと雪崩れ込む。エルディバとバルトスの戦争であるはずなのに、矢面に真っ先に立つのがハイローディスという事になれば目も当てられなかった。

となれば、バルトス国の戦力を分析し戦争に勝てるかどうかを調べる必要が早急に出てくる。この時期にエルディバとバルトスが接触して、交渉の結果悪い方向へ話がこじれてしまってはハイローディスにとって、非常にまずい事となる。

「魔石獣の群れが確認されているので通過は認められないと、伝えるようにしております」

「それでいい。混乱しているのは確かだからな。少しでも長く足止めしておけ」

「はっ、かしこまりました」

バルトス国が隠す事無く増産していたガイアフレーム。魔石獣の大量発生の対応の為にという名目であったが、結局間に合わず単純にバルトス国の軍備が増強されるだけの形になる。そもそもバルトス国が何故事前に魔石獣の大量発生の情報を掴んでいたのかは謎なのだが、今回の件が自然発生で無くエルディバ国が仕掛けた陰謀で、バルトス国がそれを掴んでいたのであれば納得できる。

「しかし魔石獣を操れるという話は、むしろバルトス国の方に出てくると思ったのだが…」

今回襲撃されたロバスにあるティンラドールという塔。あれは魔石獣を常におびき寄せる事のできる唯一の塔である。他国もその有用性を認めて同様の塔を建設してみたのだが、効果はまったく発揮できず、いまだにその秘密は解明されていない。その為に魔石獣の生態に詳しいと思われるバルトス国は、いずれティンラドールで集めた魔石獣を金で雇って兵隊にするんじゃないか？　という笑い話があるぐらいだ。

「なんにせよ、情報が足りない。急ぎ、バルトス国の戦力を洗いざらい調べよ」

「はっ」

ハイローディスの王、アレックス。若き国王は、この状況を国土を拡げるチャンスと捉え野心に燃える様を隠そうとしなかった。

行き交う人で賑わうロバス。多数の死傷者を出したものの、あの大群を前にこれだけの被害で済んだ事を喜ぶ声の方が大きく、町は活気を取り戻しつつあった。そして今回町の人間にとって意外だったのは、貴族の一部が防衛戦に加わり少なからず魔石獣を撃破し、活躍の一端を担っていた事であった。

さすがは貴族。と貴族の活躍を目の当たりにした人間は、そう評し貴族の活躍を意識せずに町に広めていった。そのおかげか町の中で貴族の姿を目にしても、賞賛するような眼差しを送る者が少なからず居た。

だが、そんな雰囲気の中で一人必死に貴族への敵意を隠して潜伏している少年が居た。

「あいつも違う…」

薄汚れたマントのフードを目深にかぶり、目立たないように物陰から通りを伺う。昨夜降った雨が地面を濡らし、うずくまっている少年のマントを濡らすも、それに気を取られる事無く通りを注視していた。魔石獣の襲来もどうにかやり過し、ロバスに潜伏を続けるエドワード。勿論、貴族への復讐の為である。自分を簡単に見捨て、報酬であった記憶も渡す気が無かった仕返しというのもあるが、一番の理由としてはトロンを殺害した事である。

「エド」

「っ！？」

名前を呼ばれ咄嗟に逃げ出そうとするが、いつの間にか忍び寄っていた人間の手によってすかさず嵌められた腕輪のせいで逃走を断念

せざるを得なかった。

「運の良い小僧だな。おまえにはまだまだ働いて貰う予定ができたとの事だ」

「離せっ！　俺を見捨てておいて良くそんな事が言えたなぁっ！」

「騒ぐな」

腹に加わる衝撃。虚を付かれて加えられた一撃は、エドを黙らせるのに充分な効果があった。口で言うだけでは飽き足らず実力行使を加えたのは、ただのきまぐれか。静かになったエドを抱え男は、路地裏へと姿を消した。

「？！」

路地裏へと進んだ瞬間、殺気を感じすかさず飛びのく男。見れば地面に針のような物が突き刺さっていた。

「何者だ？　とか聞かないしちゃんと避けるし。中々やるみたいだけど、エドは返して貰うよ、そこのおじさん」

「…」

人知れず死闘が幕を開けようとしていた。

光司とエド

「エド、後でしっかり話を聞くからね。いいね？」

エドワードを捕まえている男の事はまるで無視をして、能天気な様子で話しかける光司。気軽な態度で相手を侮っていると取られても仕方ない対応だが、対峙している男は油断なく警戒している。光司としては、わかり易く隙を作っているのだが男がひっかからずに、黙ったままで居る事に、少し感心していた。

にじりにじりと光司を警戒しつつ、距離を取る男。

「うん、ハワードさんだったかな？　姿を消しても無駄、だから。僕はどこまでも追うし、おじさんは逃げる事はできない。諦めてエドを離して」

「…それはできん」

名前を知られている事に驚きつつも、ぼそりと言葉を返すハワード。光司の言葉にハワードは光司の力を思い出す。姿を消したとしてもこの少年であれば、なんらかの対抗手段を用意している可能性はある。ただ、対抗手段を用意できないが為のブラフ、という可能性も捨て切れなかった。なので、姿を消すために意識を集中する。

パチン！

「ハワードさん、無駄って言ったよね？　まだ諦めてないのは人としては良い事だと思うけど、仕える人間をそもそも間違ってると思う」

「子供には分かるまい」

自身の能力が使えない事を確認したハワードは、目的を変更する。エドワードの捕獲から殺害、及び自身の逃走だ。そして、光司に諦めたと思わせる為、降参したように体の力を抜いた。

だが光司は左手をすっと上げて指を銃の形にし、ハワードへと指を向ける。

「バンッ！」

「ぐっ」

光司がそう呟くと同時に、ハワードに風穴があく。エドワードに突きつけていたナイフもいつの間にか叩き落され、光司の呟きで次々に風穴があいていくハワード。

「物騒な事を考えた罰だよ。じゃあ、ちょっと細工するから眠っててね、おじさん」

なすすべも無く一方的にやられたハワードが、意識を手放す直前に見たのはにやりと笑う光司の顔と二体の機械人形であった。

「…ぬ？」

いつの間にやら地面に倒れていたようだ。状況を把握する為に周囲を見渡せば、大きなカバンが落ちている。

「すいませーん！　怪我は無かったですか？」

カバンの持ち主であろう少年がそういって息を切らしながら駆け寄ってきた。その状況から自分がこの少年の持っていたカバンの直撃を食らって倒れていたのだと理解した。

「問題ない。だが、気をつけろ」

「はいっ、すみませんでした！　お詫びといってはなんですが、取っておいて下さい」

そういって、いくばくかのお金をこちらに握らせようとする少年。だが、そんな物より欲しい物があった。

「それはいい。それより、この辺りで人を探している。短く刈った金髪で年の頃はおまえと同じぐらいか。目の色は青で背はおまえより少し低いぐらいの少年なんだが。見かけなかったか？」

「いえ…そのそういう背格好の子って結構いるので、心当たりがあり過ぎると言いますか…」

「そうか。ではしらみつぶしに探すとする。では」

そう言って、顧みる事無く歩み去るハワード。どうやら刷り込みはうまくいったようだった。安堵のため息をついた少年は、背後をみやり何やら合図をする。

「ね、大丈夫だったでしょエド」

「あぁ、そうだな…」

「改めて、久しぶりエド！　悪いやつに脅されて大変だったね」

「…そうか、知ってるんだなおまえは」

久しぶりに対面するエドと光司。喜びを隠せない光司とは対照的に

暗く沈んだ表情を隠さないエド。

「知ってるよ、色々。グレイトエースを襲った巨大フレームに乗っていたのもエドなんでしょ？　何かを取引条件にあんな事をしたっていうのは分かるんだ」

「だとしても、許されるもんじゃないだろ」

「城壁が多少崩れたのと怪我人がでたのは確かだけどね。気休めかもしれないけど、死んだ人はいないし」

「それに俺は今捕まる訳には行かないっ！　おっちゃんの敵討ちもまだなんだ！　だからっ！」

「ちょちょっ！？　ストップストップ！」

戦う姿勢を取り始めるエドを慌てて止める光司。

「何か勘違いしてるみたいだけど、僕は別にエドを捕まえに来たんじゃないよ？　それよりも仲間になって欲しいというか、友達として一緒に来て欲しいというか…」

「あ？　なんだって？」

「なんでもないっ！　と、とにかく捕まえに来たって訳じゃないって事は間違いないよ！」

慌てた様子で弁明する光司を見て、やっぱりこいつは変わらないなと思いつつエドは言葉を返す。

「コージと一緒に行きたいのは山々なんだけどな。俺はまだ目的を果たせてないから、ちょっとばかり無理なんだ」

「それを説明したいんだよね。ほら丁度良いや。あっちの通りから衝撃の事実が歩いてくるから」

「あん？」

そんな謎の言葉をかけつつ、フードを目深に被って目立たなくなる光司。その行動を見て自身もフードをかぶり光司の言った通りへと目をやる。

「!?」

そこへ歩いてきたのは、態度や髪型に若干の差異は見られるものの光司だった。慌てて、横の光司を見るも確かにこちらにも光司がいる。

「あれはアーン。僕とエドの敵と言える存在だよ」
「どうゆう事だ?」
「まぁまぁ。ここはあいつに見つかるかもしれないから、移動するよ。付いてきて」
「分かった」

足早に路地裏から路地裏へと駆け抜ける光司。光司はエドを信頼していると言わんばかりに一切振り向く事無く目的地へまっすぐ向かった。

目まぐるしく客が行きかうお店「ラッテン・セッテン」へと入り、席が空くのを待って二人がけの席に座り、光司とエドは他の客と同じように注文した食べ物を食べ始めた。

「ちょっと待て。なんでのんびりこんな所で飯食ってんだ?!」
「あらかた食い終わってから、我にかえられても…」

エドと違い光司は、よく噛んで食べる方だ。すごい勢いで食べきったエドは、満腹感のおかげで周りを見渡す余裕ができた。この店は繁盛しているようで、かなりの数の客が談笑しながらくつろいでいる。席空きを待つ客もそれをとがめる様子も無く大人しく待っている。だが、待っている客も店員が空いた席へ次々と誘導していくので、それほど待たなくていいようになっているようだった。

「で、話があるっていうのにこんな所じゃまずいだろ」

「いやいや、ここだと誰も他人を気にしないから逆に大丈夫なんだ。まずは現状を教えるね」

そうやってぽつりぽつりと静かにエドに語りかける光司。違う世界から来た事から始まり、先ほど見たアーンこそがこの世界を変えてきた張本人と言う事。そして、今もさらに悪い方向へと世界を変えようとしているという事。そんな事を今までに起きた事件をまじえつつ、エドに分かりやすい様に、省略して話した。

「ふぅん、お前もなんだかんだで苦労してんだな。だけど、えらくその義手は馴染んでるみたいなんだけど、そんなに早く動かせるようになるもんなんか？」

「あぁ、これ？　ほら僕ってどこか規格外だから、これぐらい余裕っすよ！」

「自分で言うか、ったく」

「で、なんとなく分かって貰えたかな？　僕たちの敵があいつって」

「まさか呪いたぁねぇ…その話が本当なら敵っていうのは頷けるな」

「ところでエドはなんであいつらに従ってたの？」

どこか聞きにくそうに光司は尋ねる。

「別に難しい話じゃねーよ。俺の記憶をあいつらが持ってるって聞いて、返して貰う為に頑張ってたってだけだよ」
「記憶…？」
「あぁ。俺の真似の印ってぇのは、相手の技を記憶ごと真似るというか覚える訳だ。その分俺の記憶が薄れていく。おかげで家族の事がすっかり抜け落ちるっていう寸法さ」
「それが代償？」
「らしいな。だけど、ゲオ…あいつらがけったいな形のオーブを持ってきてお前の記憶はここに入っている、返して欲しくば…ってね、あとはご存知の通りってわけだ」
「なるほどねぇ…で、エドは記憶を取り戻したいの？　それとも家族を取り戻したいの？　どっち？」
「どっちって…」

光司の言葉に悩むエド。記憶を取り戻せば家族の思い出も取り戻せる。だが家族を探し出せるか分からない。かといって家族を取り戻してみても、記憶が無ければそれは赤の他人も同然である。思い出すことができればそんな事もないのだろうが、そんな兆候は今までまったく無くむしろ忘れていく一方であった。

「うくっ…エドって意外と騙されやすいタイプなんだね」
「なっ？！」

深刻な表情で悩むエドを見て、こらえきれずに吹き出す光司。

「どっちって言われて馬鹿正直にどっちかを選ぶ必要は無いじゃない。正直に言ってよ、エド」

笑いを収め真剣な表情でエドを見つめる光司。言われて始めてエドは気付く。自分の正直な気持ちに。

「そんなもん、どっちもに決まってる！　記憶も家族も取り戻したいに決まってるだろ！」
「そうそう、普通はそうなんだって。あんな風に悩んでたら、また悪い奴に騙されちゃうよエド」
「知らんっ！」

恥ずかしかったのか赤い顔をしてそっぽを向くエド。そんなエドをなだめるように光司は宣言する。

「エド、家族も記憶も取り戻そう。まずは記憶の方なんだけど、それって印の力のせいだと思う」
「そう、なのか？」
「うん。真似の印って使い込まない内は他の印の力を真似るだけしかできない。それもほんの少しの効果しか発揮できないんだよね。でも、複数の印を真似る事ができるから、物凄く強力な効果を発揮できるんだ」
「言われてみれば、最初はそんなだったような気がする」
「でしょ？　それで、使い込んでいく内に相手の剣技や魔法、フレームの操縦能力や身体能力、そういった物も真似る事ができるようになって、さらにはどんどんオリジナルに近い能力を発揮できるようになってくるんだ」
「その代わり代償も大きいけどな」
「そう。代償を払わないと力を発揮できない。という事は、真似た力をすべて解放したらどうなる？」
「どう…なる？　記憶が戻るのか？」
「ご名答。脳みそって結構色々ちゃんと覚えてる物なんだ。記憶ごと真似ている力を解放してやれば、また思い出せるようになる筈だよ」
「そんな単純な事で…」

確かにエドは今まで真似ていくばかりで、解放した事は無い。入れ替えする事はあっても覚えた事を減らすという事は無かったのだ。

「真似た力を捨てるのは惜しい？」

どこか意地悪な表情でそう尋ねてくる光司。

「馬鹿言え、すぐにでも解放してやる」

「あ、ちょっと待って！」

「なんだよっ！　せっかくすぱっとやっちまおうと思ったのに！」

「いきなり全部解放すると脳みそに負担がかかるから、時間をかけてやったほうが良いよ」

「そうか。分かった、一個ずつやっていこう」

光司の言うとおり真似た力をひとつずつ解放していく。解放する事で記憶が戻ってくるのが分かる。その勢いにうめき声を上げながら、少しずつ少しずつ能力を解放していく。っそして、嗚咽をあげ始めるエド。

「大丈夫？」

「あ、あぁ大丈夫だ。思い出せた。俺、妹を探していたんだ…」

エドの両親は既に亡くなっているらしく、残っている家族は妹だけらしい。その妹も生き別れになったきり行方が分からない。もうだいぶ月日が経っているので、最悪もうこの世に居ないかもしれない。

「コージ、ありがとな。おまえのおかげで記憶が戻ったよ。こんな単純な事にも気づけないほど俺って馬鹿だったんだな」

「ううん、エドを利用していた奴らが悪すぎるだけだって。じゃあ、

記憶が戻った所で次は妹さんを探そうか」

こともなげに言う光司にさすがに悪いと思ったのか、エドは引き止める。

「いやコージ、記憶を戻してくれた上に妹まで一緒に探して貰うのは気がひける。こっからは俺一人で大丈夫だから、おまえは心配すんな」

「いやいや、僕の目的を覚えてる？　エドを引き抜きに来たんだよ？　だったら、エドが気になってる事はすべて解決してからじゃないと、引き抜けないじゃないか」

「いや、そんな事言っても人一人探しだすのにどれだけ手間がかかるか分かってんのか？　それにだいぶ時間も経ってるから、妹もどうなったか分かんないんだぞ？」

その言葉に自信ありげにニヤリと笑って返す光司。どうしてそんなに自信たっぷりな顔をしているか不思議で仕方ないエドであった。

合流

「しかし、この飛行フレームっていうのはすげーなコージ」

エレメンタルフレアに乗り、エドとその妹を乗せロバス方面へ飛ぶ。転移魔法などでは目立つので久しぶりにエレメンタルフレアの出撃である。初めて飛行フレームに乗ったエドはおおはしゃぎだったが、妹のネアは先程から固まったままであった。

「ネアさんは、高い所は苦手なのかな？　エド、ちょっと低めに飛ぶから少しは大人しくしててよ！」

「おーわかった！」

「ありがとうございます」

少し低い方が地表が良く見えて逆に怖くなるかもと思いつつ、ネアの表情を見ながらゆっくりと低空飛行へと移行する。ほっと息をついた所を見ると低空飛行で大丈夫なようで安心する光司。

ロバスから南東にある小さな村でエドの妹のネアは住んでいた。幸いにもネアは親から受け継いだ薬師としての技術と知識があった為、なんとか自立して今まで生活してきたそうだ。とはいえ、小さな少女が一人で生活するには色々問題があったので村長が後見人になってくれていたらしい。

「親が村長さんと面識があったので、今までなんとかやって来れたんです」

「そうなんだ。でも、一緒に来て良かったの？」

「もともと兄を探す為にお金を貯めてるって言ってるんで、大丈夫です」

とはいえ、小さな村ではお金を稼ぐのも難しく中々貯まらなかったそうだ。行商の人間に兄の事を聞いたりしても、手がかりはまったく掴めなかった。なのでやはり自分で探しに行かないと駄目だと感じていた矢先に、僕達が訪ねてきたのだった。

「そっか。なんにしても、無事で良かったよ。よし、そろそろ下に降りるかな。エド、ここからは飛ばずに行くから戻ってきて」

「え、もう終わりかよ。分かった」

ネアさんと会えて嬉しいんだけど、長い間会ってなかったのもあってどう接すれば良いか分からないようで、エドはちょっとネアさんと距離を取っている。まぁ、会えた時に号泣してたから、恥ずかしいだけかもしれない。

今、目指しているのは合流地点。リュート達が待機してくれている場所だ。そこまで飛んで行けばすぐ着くんだけど、飛行フレームは目立つので歩いて行かないと駄目だった。それでも、徒歩で行くよりは断然こっちの方が早く着く。着くんだけど、今のコックピットの状況から考えると無限にも思える時間であった。

エドとネアさんは、お互いどうしていいか分からず微妙な雰囲気をかもし出している。長い間離れてたんだし、この際色々話し合ってその隙間を埋めたら良いんじゃないの？　と思うんだけど、そう簡単なものではないらしい。なんか、二人して気にはなるんだけど話かけられない、みたいなそぶりを繰り返すばかりでちっとも前に進んでなかった。なんか付き合い始めたカップルってこんな感じだろうなって思う。はやくセリナ達に会いたい。

「あと三十分も有れば合流地点に着くから、それまでゆっくりして

てよ」
「ゆっくりできねーよ、こんな椅子じゃ」
「あ、あたしは平気です」
「慣れると結構、すわり心地いいんだけどなぁ。ゆっくりできないなら、エドが代わりに操縦する？　こっちはまだマシだと思うけど」
「いや、今はフレームの操縦すんのちょっと怪しいから遠慮しとく」
「あ、そう？　練習がてらやってみたら良いのに」

覚えた力を解放したエドだけど、技術的な物はなんかうっすら覚えているらしい。やっぱり真似してから使い続けていた技術は、ちゃんと自分の技となっているそうだ。本来はこうやって覚えてすぐ解放して、色々な技を身に着けていくのだろう。

「そういえば、兄とコージさんは、どういうお知り合いなんですか？」
「えっと、僕がエドに狩りの穴場を教えて貰ったのがきっかけだったかな。それから、色々話すようになって、友達になったんだ」
「そうなんですか。でもお二人ともあまり狩りをするようにはあまり見えません。意外です」
「意外といえばこれでもコージはモテるんだぜ。なんか二人から言い寄られてたよな？」
「うっ」

今はそれどころじゃないです、とは言えず言葉に詰まる。そんな僕をちょっと冷ややかな目で見てくるネアさん。ご、誤解じゃない…

「まぁまぁ、そんな話はさておき。なんだか、おかしな気配を感じるんだけどエド何か分からない？」
「んー…いや、まだうまく馴染んでないせいで、よく分からんけどどうしたんだ？」

「気のせいかな？　魔石獣の群れが出てたせいかもしれないね」

何かおかしな強い気配を感じたようにも思うんだけど、神経を研ぎ澄ましてみても今はとくにそういった気配は感じられない。魔石獣の残滓がうまく交じり合って強い気配を感じさせた、のかな？　何かが隠れてる訳でもないようなので、そういった類だろう。

「で、コージさんがモテるというのは分かりました。でも、複数の女性を侍らすのはあまり感心できません」

「えっと…ごめんなさい」

流れでうまく誤魔化せたかと思ったんだけど、駄目でした。今後はあまりネアさんとは顔を合わせられないね、うん。会うたびに怒られそうだ。

「と、ところでコージ。結局、俺は何をしたらいいんだ？」

「それは落ち着いてから話すよ。まぁ、大きな事を言うなら世界を救おう！　って事かな？」

「はぁ？」

おちゃらけた様子で言ったので、まともに取り合わないエド。今はネアさんも居るので、なんとなく話をしづらいのだ。今もなんかちょっと怒ってるみたいで、エドもびびってるし。なんとなく微妙な空気の中、フレームが歩く音だけが響く。きまずい。アイコンタクトでエドにどうにかしてよって、お願いするけどもエドは無理！　ってひきつった顔で返してきた。

「お二人とも言いたい事があるなら、はっきり言って下さいね？」

「い、いや別に言いたい事があるって訳じゃないんだネアさん。な、エド」

「俺にふるなよ。とにかくネアが無事で良かった、良かった」
「兄はしつこいです。それはもう何度も聞きました」
「しつっ！？」

エドの不用意な一言でネアさんの機嫌が悪くなってしまった。まぁ兄の知り合いが女性にだらしがないというのを知ればそうなってもおかしくないよね。なんにせよ、これ以上いらん事を言って空気を悪くしないように、操縦に専念する事にしよう。

かすかに地響きが聞こえてくる。音を立てないように静かに歩いているのだろうが、完全に消す事はできない。ずっと集中して待ちわびていたミミには、すぐに分かった。

「コージ、来たよ！」
「やっと戻ってきたか。これでようやく少し休めるね」

大きく伸びをして体をほぐすリュート。ミミは飛び出していきたいけど、フレームに乗っているコージの邪魔をしないようにじっと我慢している。だが、フレームの足音が聞こえてきた所を見るともうすぐここに辿り着くようだった。

のそり、とリュート達のいる空き地へと姿を現すエレメンタルフレア。その姿を見て大きく手を振り、ぴょんぴょんと跳ねて喜びを表現するミミ。何故かそれを見て一瞬動きが止まったように見えたが、すぐに待機姿勢に入ったので誰も気にする者は居なかった。

そして、一瞬足りとも待てないミミはコックピットハッチが開いている最中から突撃する。

「コージ！　おかえりっ！！！」

「た、ただいまミミ…」

いつも通り頭から突っ込まれ、油断していた光司はモロに頭突きを食らう。それでも、なんとかミミを見て返事を返す。そんな光司をペタペタと撫で回すミミ。そして、最後に顔をしっかりと見つめてから改めて人目もはばからず抱きついた。

「うぅーーー！」

「苦労掛けたねミミ。よく一人で頑張っててくれたね、ありがと」

白夜もヒロコも居なくなり、セリナを逃がしてたった一人アーンの傍で、生活を続けていたミミ。最初はアーンを光司だと思い込んでいたので、自分が助けなきゃと意気込んでいたのだが、やはり一人では何度かくじけそうになっていた。そして、事情を聞いて光司が大変な目に会っていたのを知り、心配でたまらなかったようだ。

そんな声を押し殺して泣くミミを光司は静かに抱きしめていた。

「リュート、セリナから合図はあったんだよね？」
「あぁ、大丈夫だ。セリナちゃん大分早く着いたみたいだよ？」
「うわぁ、大丈夫かなぁセリナ…」

ミミをなだめながらリュートにセリナの首尾を聞き、ちょっと不安になる光司。勿論、セリナがドジをしているとは思わない。ただ、こんな状況の中自分の母親が何かはっちゃけていやしないかが、心配なのである。

「コージくんっ♪」
「あぁ、アイシャ先輩お久しぶりです」
「ここに嫁もいる」
「お久しぶりです、アース師匠」
「なんというか、えらい事になっとんな？　それ大丈夫なんか？」
「えっと、ちょっとまだ混乱してるけどコージはなんか大変な目に会ったのね？」
「セリナさんはどこだ？」

ミミの突撃の影に隠れていたけど、皆も僕を待っていてくれたようだった。なんか久しぶりだ。エドはなんかこの空気に気後れしていて、目を白黒させている。

「皆、色々と今大変な事が起きてるというのは、分かって貰ったと思う」

騒がしい皆に向けてそう言葉を放つ。それぞれ、頷いて現状を把握している事を示してくれる。それを見て言葉を続ける。

「僕一人じゃたいした事できないんだ。だから悪いんだけど、皆に力を貸して欲しい」

力を貸して欲しいも何もすでに巻き込んでいるのに、今更という気もするがこういう事はちゃんと言っておかないと気が済まない。一応、ビデオレターで確認はして貰ってはいるんだけど…

「大丈夫よ、コージくんっ♪　おねーさんにどーんと任せなさい。ね、ミミちゃん」
「うん、アイちゃん」
「そうや、ここに来とるっちゅーことは承諾したちゅーことや。なんでもやったるで」
「嫁として夫の危機に駆けつけない筈が無い」

口々に賛同の意を示してくれる皆。サカキ先輩達の姿は見えないけど、すでに行動で示してくれていると考えて間違いないようだ。ていうか、アイシャ先輩とミミがなんか凄く仲良くなってるし。

「で、ついでと言ってはなんだけど、今まで内緒にしてた事を皆にも伝えておきたいんだ」
「なんや、また新しい女の子をひっかけてきたんか？」

ハルトがそう茶化してきて、セシリアとエリーにひっぱたかれている。叩かれてびっくりしてるハルトを見て少し笑ってしまう。

「えっと、信じて貰えるか分かんないけども僕はこの世界とは違う世界から召喚魔法でこっちに来たんだ」
「違う世界？」
「えっと、どうゆことだ？？？」

「そやからコージは規格外やったって事か？」

僕の言葉に一斉にハテナマークを浮かべる面々。別に言わなくても良かったかもしれないけど、この際だからはっきり言っておこうかなと思ったんだけどこの様子を見るに、今言わなくても良かったかもしれない。勢いって怖い。

「僕はこの世界に生まれてきた人間じゃないって事。もっと科学文明の進んだ世界から来たんだ。あっちじゃ魔法なんて物は無いし、魔石獣もガイアフレームも無い世界なんだけど、貴族や王が世界を支配していない世界なんだ」

市民が国を導く。王や貴族も居ない訳じゃないけど、この世界のように無茶な事はしないしできない。だからこそ、この世界の異常さが理解できる。そして、その元凶がアーンだというのが分かった今、どうにかしないと駄目だと思ったのだ。

「この世界ははっきり言っておかしい。一部の人間が一方的に大勢の人を好きなように弄ぶ。こんな事は間違ってる。僕がいた世界では到底許されない事なんだ。そして、その元凶が僕の偽者のアーン、王の印の精霊の片割れなんだ」

「王の印が…？」

「うん、この間まで僕に王の印があったんだ。そのせいで、危うく死んじゃう所だったんだけどね。でも、本来は王の印にそんな力は無かった筈なんだ。アーンの奴が長い間、時間を掛けてこの世界を少しずつ狂わせていったせいで、王や貴族が好き放題する世界に変わっていってしまったんだ」

全の印を持つ今、王の印の力も理解できるからそう断言できる。

「だから、この世界も僕が元居た世界と同じようにしたい。王や貴族だけが幅を利かせる世界は終わりにしたいんだ」

そこまで言って皆の顔を見渡す。見渡してみると僕が異世界から来たっていうのは、あまり気にされていないみたいだ。

「そんなら、別に違う世界から来たとか関係あらへん。今まで内緒にしてたっちゅうから、なんやもっと凄い秘密でも隠してたんかと思ったわ」

「そうねぇ、もともとコージってば変な所があったから、今更別の世界から来たとか言われてもふーんとしか思わないわよね」

「違う世界か。行けるものなら行って見たいものだな」

僕の話が終わったと見るや、騒ぎ出すハルト達。なんかセシリアがひどい事を言ってる気がするけど、気にしたら負けだ。そうやって騒いでいる中、アイシャ先輩だけが僕を真剣な目でじっと見つめていた。

「コージ君。ひとつ良い？」

「良い？」

「なんでしょう？」

見ればミミもアイシャ先輩と同じように僕を見ていた。二人してどうしたんだろう？

「コージ君は、違う世界から来たのよね？」

「えぇ、そうです」

「じゃあ、終わったら向こうに戻っちゃうのかな？」

そういってじっと見つめてくる二人。真剣な二人の雰囲気に他の皆

もつられて僕を見て、はっとした表情をしている。

「うーん、今の所というか帰る予定は無い、ですね。そもそも、こっちから元の世界には行けないみたいですし」

「じゃあ、行けるようになったら帰るの？」

うぇっ？！　なんかしつこく絡んでくる先輩だ。そこまで先輩に好かれてたっけ？？？

「こんな事いうとあれなんですが、元の世界にあまり未練は無いですし帰る気は無いですよ。こっちでミミ達と暮らせる方が幸せだと思いますし？」

「そこに私も混ぜると良いと思うよ、コージ君っ！」

「ちょちょっ！？　ミミが潰れます！」

僕の台詞を聞いて、喜色満面で僕に飛びついて来るアイシャ先輩。さっきからずっと抱きついているミミの上から更に抱きつこうとするので、なんとか押し留める。ミミは特に気にしてないけど、これ以上密着すると自分が何をするか分からない。

「じゃ、そろそろ話は終わった？」

「あ、リュート待たせてごめん。あとエドの事も皆に紹介したいからもう少し待ってて」

「あ、俺か？」

「えっと、こちらが僕の友達のエドワード、えっとリュクスだっけ？　今まで貴族たちに脅されてたせいで、苦労してきたんだけどちゃちゃっと助けてきたんだ。で、今回の件に協力してくれる非常に心強い味方なのです。はい、エド自己紹介！」

「ええっ？　仕方ねぇなぁ…あぁっと、エドワード＝リュクスだ。真似の印を持つ人間だ。今はまっさらな状態でろくに力を持ってな

いが、よろしく頼む」
「次はネアさん」
「えっ！？　あたしもですか？！　えっと妹のネア＝リュクスです。薬師をしています」

自己紹介が終わると、エドとネアさんに一人ずつ自己紹介していく皆。うん、僕ならいっぺんにこんだけ覚えるのって無理だね。もう少し時間がかかりそうだから、こっちはこっちで作戦をすすめておこう。

「じゃあ、リュート。セリナに合図をして貰える？　今からこっちによびだすって」
「分かった。…いいよ」

配布してある腕輪の通信機能を使って、合図をすれば腕輪が光るようにしてある。作戦をクリアする度にこれで合図をして作戦の進行が分かる様にしているのだ。

「じゃあ、今から召喚魔法を行います」
「召喚魔法って初めて見るなぁ」

転移魔法で移動は不可能。そもそも転移魔法は同じ世界同士の移動をするもの。そして、城にある転移魔法を封じる仕組みは、世界の移動を封じている。ならば、召喚魔法で一旦違う空間を経由しこの世界からのしがらみを断ち切って、再度この世界へ移動する。とはいえ、召喚魔法といえどピンポイントで対象を選ぶのには条件がある。なので、召喚魔法をするに当たって呼び出す為の目印をセリナに持って行って貰ったのだ。

「“我が道標を抱く者をかの地からこの地へと、道を開いてここに

あらわせ！　サモン”」

あまり僕が大規模魔法を使わない方が良いんだけど、召喚魔法はこの中では僕ぐらいしか使う事ができない。まぁ、リュートの結界があるおかげである程度はごまかせるはずだ。

空間が歪み白い渦が僕の正面に浮かび上がる。あとは向こうで渦に飛び込んで来るのを待つだけだ。母さんが悪さをしてなかったら良いけど…

「よばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃーーーーん！」
「じゃーん！」

変な掛け声と共に母さん達が出てきたので、魔法を止める。そして改めて母さん達の方へ向き直り…

「母さん…セリナを巻き込まないでよ…」
「どうですか似合ってますか？　ぴょん」
「え、可愛いから良いでしょ？？？」

渦から飛び出てきたうさぎを見て、呆然としている皆。うん、また母さんがやってくれたよね。セリナは胸が大きいから破壊力抜群だから、危険だと思う。そして、そんなうさぎな二人に挟まれてぷらんとしている父ちゃん。あれ？　眠ってる？

「父ちゃんはどうしたの？」
「印の影響だとは思うんだけど、かれこれひと月近く眠ったままなのよ」
「アーンが何かした？」
「それは分からないわ。ただ、あいつの力が勇司さんにしがみつい

て離れないのは確かよ」

確かに父ちゃんにはあいつの力がしっかりとくっついているのが分かる。とりあえずイーサルークに行ってじっくり調べよう。

セリナの答え

ロバスに居た面々とは一旦別れ、一路イーサルークへと向かう。イーサルークには皆の本体が居るので、別れると言ってもアバターと別れるだけなんだけどね。セリナの衣装は目に毒なので、お気に入りのマントを取り出し羽織ってもらう。母さん？　いや、別に母さんのはどうでもいい。

「光ちゃん、今なんか失礼な事を考えなかった？」
「ん？　気のせいじゃない？」

母さんのつっこみをさらっと流す。母さんは王宮でずっと一人で戦っていたせいで、かなり疲れているみたいだ。

「じゃあちょっと眠いから、だっこ」
「いや、父ちゃんをおんぶしてるのにさらに抱っこできないでしょ」
「でも眠い」
「もう少しで着くから我慢してよ。アバターの操作ベッドに入れば好きなだけ寝て良いから」
「私で良ければおんぶしますよ？　お義母さん」
「ん」

半分目を閉じたままでセリナに向かって両腕を上げる。そんな母さんに背中を向け、ひょいとおんぶするセリナ。すいません、母がご迷惑をお掛けします。なんだかんだで気が張っていたんだろう、おんぶされた母さんはすぐに眠ってしまった。

「じゃ、行こうか。ほんとにあと少しなんだけどなぁ」
「いいじゃないですか。お義母さん、疲れてたんですよ」

微笑みながらそう返してくるセリナ。ほんといい娘さんやぁ。ロバスから転移し、イーサルークの王宮内へと急ぐ。アナに用意して貰った部屋は、かなり広い上にかなりの数がある。さすがは竜の巫女さんである。

「光司、戻ってきたな！　待ちわびたぞ！」
「あ、ただいまアナ。色々助けてくれてありがとうね」
「気にするな。で、そちらが光司の両親なのか？」
「ごめんね、二人とも寝ちゃってて。母さんはともかく、父ちゃんはちょっと様子がおかしいんだ。診てもらえるかな？」
「む？」

アナに父ちゃんを任せている間、セリナは母さんをアバターの操作ベッドへと寝かしつけてくれる。ぱぱぱっと準備を済ませて素早く寝かしつけを完了していた。母さんのアバターはグレイトエースに置いてきたので、アーンには脱出した事を気づかれずに済むと思う。

「血の呪いで間違いないと思うんだが、光司は異世界から来たんだよな？」
「そうだよ。なんで血の呪いが父ちゃんに？」
「わからん。だが、ここで寝て過ごせばじきに呪いも解ける。だから安心していいぞ」
「そっか。ありがとアナ。でも父ちゃんに血の呪いがあるという事は、アーンが何かしたってことなのかな？」

というかそれしか思い当たる節がない。この世界に生まれてきた人間ならともかく、異世界から来た僕たちに血の呪いなんかある訳が無い。

「王の印を持ってた影響って事かもしれんな。まったくロクな事をしないな」
「母さんが言うにはしがみついてて、はがせなかったって言うんだけど大丈夫かな？」
「…そうか。なら、時間を掛けてじっくりやろう。そこから出してこっちに連れて来てくれるか光司」

少し考えてから、そう促すアナ。長い間、戦ってきたというだけあって色々と対抗策があるようだ。大人しく父ちゃんをベッドから出して、おんぶしアナの後を着いて行く。少し歩きこじんまりとした普通の部屋へ案内された。

「この部屋なんだが、ここにアバターのベッドって出せるか？」
「あー、予備もさっきの部屋に置いてるから持ってこないと駄目だね。一旦そこのベッドに父ちゃんを置いて持ってくるよ」
「先に言えば良かったな。すまん」
「ううん、アナはここで待ってて」

うっかりうっかり。まぁずっと寝っぱなしの父ちゃんだから、別にすぐにアバターベッドに寝かさなくても良いんだろうけどね。急いでさっきの部屋に戻り、ベッドを指輪に収納する。そして、また父ちゃんの居る部屋へと戻った。そして、部屋にベッドを設置し改めて父ちゃんを寝かした。

「いつになるかまでは、分からんがこれで光司の父ちゃんも起きるはずだ」
「ありがとね。これでやっと一安心だよ」
「そうか、それは良かった。で、だなぁ…頑張ったんだからこう、なんというか、そのぉ」

もじもじとこちらを見るアナ。先ほどまでの毅然とした態度は、どこかに消えてしまったようだ。うーん、ご褒美が欲しいって事なんだろうけど、どうしたら喜んでくれるかなぁ？

「コージ」
「ん？」

悩んでいたらセリナがいつの間にか忍び寄って来ていた。いや、本当は気づいてたけどね。

「一人で王宮に忍び込むのは大変でした」
「え、セリナなら楽勝でしょ？」
「大変だったんです！」
「あ、うん。大変だよね」
「王宮に入ったらアーンが罠を張ってましたし、見つかった時は食べられるかと思いました」
「え、見つかったの？　それ聞いてない」
「コージから借りた道具のおかげで、事なきを得ましたから大丈夫です。でも、すっごく怖かったです」
「そっか、ごめんねセリナ」

さすがはアーンって所だ。だけど、あいつが見逃す訳が無いと思うんだけど何か理由があるんだろうか？　セリナを改めてじっくり見ても、何か監視的な物がついているようには全く見えない。

「見つかったと言っても精神体のような物で、入ってきた人間を脅す為の物のようでしたから、アーン本人は気づいてないんじゃないんでしょうか？　あそこは入ったら出れないように細工をしていたみたいですから」
「なるほど。そこらへんは予想通りって事か。相当、自信があるっ

て事か」

僕が疑問に思っている事を察してくれたセリナはそう教えてくれた。恐怖や絶望といった負の感情を好むアーンとしては、必要な小細工だったんだろうけどあの場所で魔法が使えるようにしたままだったのは失敗だったね。

「アーンの力も見えるようになるぐらい蠢いてましたし。かなり気持ち悪かったです。それで…」

そう言ってススッと顔を赤らめながらすり寄ってくるセリナ。しばらく離れていたんだけど、セリナの態度は以前と全く変わりが無い。いや、でも今まで印の力のせいでよくも好き放題してくれたわね、とか何かどんでん返しが待ってる可能性も無いとは言えない。駄目だ、こんな風に疑うのは精神衛生上非常に良くない！　男ならすぱっと覚悟を決めよう。

「セリナッ！」
「は、はいっ！」
「おわぁっ！？　いつの間にセリナが居るんだ！？」

あ、アナが正気に戻った。だけど、とりあえず今はセリナだ。すり寄って来ていたセリナをがしっと掴んで正面からまっすぐ見つめる。見つめられると恥ずかしいのか、時折視線を外しながら僕を見つめ返してくれるセリナ。

「グレイトエースに行く前に、僕言ったよね。セリナの本当の気持ちを見つけて欲しいって」
「はい、言いました」
「正直、悪いことをしたと思ってます」

「は？」
「印の力のおかげで、色々好き放題してごめんなさいと思ってます」
「えっと、コージ？　先に私の話を聞いて頂けたら嬉しいんですけど？」
「いや、本当にセリナには何をされても文句を言えないだけの事をしてきたという自覚があります、覚悟は決めてますからどうぞ！」

歯を食いしばって目をつぶる。セリナの様々な痴態を思い出す。非常にご馳走様でした。こっちの世界に来て、最初に出会った女の子。まぁヒロコは精霊なので別って事で。親切でなにかと世話を焼いてくれて非常に助かった。好意をもって僕に接してくれて、様々なアタックを仕掛けられたけど、それもこれも王の印の影響だったというのは、非常に心苦しい物だ。そもそもセリナみたいな可愛いお嬢さんが、僕なんかを好きになる訳が無いし。

「コージさん？」

あれ？　黒いセリナが来てる。そこまで怒ってたのか？！　黒いセリナさんは、僕をがしっと掴むと目が笑ってない笑顔で僕を見つめてきた。そしてアナが後ずさりしていくのが視界の端で分かった。

「なんでしょうか！　何をされても文句は言いません！」
「話を、聞きましょうね？　いい子ですから」
「は、はいっ！」
「…やっぱり話は良いです。答えから言うとこういう事ですっ」

ぽすっとセリナが体当たりしてきて、ベッドに押し倒される。そして、セリナは僕の顔にそっと手を沿えてきたかと思うと、顔を寄せて…

「あ、あーーーーーーーーー！　ずるい！　ずるいぞ、セリナッ！」

空気をまったく読まないアナが、叫び声を上げる。その間もセリナの口撃はやむ事無く舌が侵入してきて、口の中で舌が絡まりあう。目を閉じて必死に求めてくる顔は、とろんと上気し夢中になっているのが分かる。これが答え？

しばらくそうやって絡み合って、離れるセリナ。ぺろりと舌で口の周りをゆっくりと舐めている顔は非常に大人びていて、僕は惚けたように見つめるしかできなかった。

「大好きです、コージ。これが私の答えです」

僕の上に乗ったまま、にこっと笑うセリナだった。

不安

ロバス名物の車に乗って王子アーンに付き従う二人の少女。

魔石獣撃退の主役を担った王子と共に、ギリルディアッカを相手に一歩もひかずに手傷を負わせた戦乙女。彼女たちの活躍のおかげでロバスの町への侵入を防ぐ事ができたといっても過言ではない。聞けば一人はアーン王子の婚約者と言い、もう一人もフレームに関してアドバイスをするほどの才媛だそうだ。

「でも、あんなほそっこい体であのギリルディアッカを止めるって、本当なのか？」

「本当だって、広場で見たから間違いない。ごついフレームに乗って颯爽と現れたかと思ったら、馬鹿でかい大砲をバカスカ撃ちまくってたのを見たしな」

「はぁ…王子といいあの戦乙女といい、末恐ろしいなぁ」

ロバスにシェルターがあるとはいえ、先の魔石獣の襲来は尋常じゃなくシェルターに逃げ込まずに家で最後を迎えようとする人間も少なからず居たのだ。そのおかげでアーンやリリノア、サラ達の活躍はしっかりと町中に広がる事となった。

凛とした雰囲気をまとい見目麗しい隣国の姫リリノアに、きめの細かい白磁のような肌と神秘的な雰囲気を持つサラ。リリノアはともかくサラは勇ましい雰囲気などまったくない。並べて立つと対照的な二人だが、どちらも民衆の受けが非常に高かった。

リリノアはこういうパレードに慣れているので堂々とした態度で臨み、サラはどこか腰がひけた感じではあるがそれが奥ゆかしい態度

に見えない事もなく、人気を高めている。

だが、そんな二人の戦乙女に負けない輝きを放つのがアーン王子である。

意志の強そうな瞳で民衆を見据え、にこやかに手を振って答える。ロバスを以前も救った「７７７」を駆り、ギリルディアッカ四体を屠った真の英雄。堂々とした態度ではあるが驕ったところは感じられず、若いという事を自覚しながら民衆の期待に応えようと必死になっている様が伺える。時折、傍らの戦乙女を労わるように支えたりする仲睦まじい様子は、非常に好感が持てる態度であった。

戦勝を祝うために大急ぎで実施されたパレードであったが、おおむね順調に進んでいる。民衆は生き残れた事に感謝し、二度も町を救ってくれた「７７７」があれば今後も安泰であると信じて疑わなかった。

だが、アーンには分かっていた。

光があれば影があるように、賞賛する者が居れば恨みを募らせる者が居る。現に今も恨みを込めてじっと見つめる目が遠くにあるのが分かる。今回、守備隊だけでなく町の住民の中にも少なからず魔石獣による被害があった。親を失った者や子を失った者、夫や妻を亡くし呆然としている者。肉親や親しい者を失った者が大勢いる中で、パレードを急いで行ったのには訳があった。

それはアーンの姿を目に焼き付けて貰うためである。

失った者達は今は呆然としているだけであろうが、いずれ正気に戻る。その際、にこやかに人々の賞賛を受けていたアーンを思い出し

て、こう思うだろう。

あいつがもっと早く助けてくれてれば、死なずに済んだのに。

被害を受けていない人間はアーンを賞賛するだけであろう。だが、被害を受けた人間にとってアーンは愛憎せめぎ合う対象となる。町を救ってくれて自分も生き残った。その事は確かに感謝しても良い事だが、もっと早く魔石獣達を倒してくれてさえ居れば、死なずに済んだ人間が居るんじゃないのか？　そういった感情が湧き上がるのを止める事ができなくなるだろう。それがアーンには非常に望ましい。そのままアーンを憎まずに清く正しく生きる人間も居るだろう。だが、アーンを殺したい程憎む人間もまた居るだろう。

強い光には濃い影がつきまとう。

憎しみ、怨み、妬み。親しい者を亡くした者にとって、アーンが二人の少女を大事そうにしながらパレードを行う姿は少なからずそういった感情を呼び起こしてくれる筈だ。そしてそんな感情こそアーンにとって、非常に好ましい糧となる。そういった感情を育てる為にも、この二人の少女を大事にするさまを見せ付けて行く事となるだろう。

ちらりとリリノアとサラに視線をやると、恥ずかしそうに微笑を返してくる。そんな二人にアーンは大胆にも民衆の前で口付けを交わす。突然の出来事に騒然となる民衆。だが、すぐに歓喜の声に変わって行く。そんな周りの様子にリリノアとサラはさすがに恥ずかしいようで、腰を抱き寄せるアーンの胸に顔を隠すようにして、寄り添っていた。

民衆の望む英雄像。それをとことん叶えて行く事がアーンの第一目

標であった。

パレードの行路から離れた所から、様子を伺う光司。ミミの協力を得てロバスに再度潜入し、アーンの動向を伺うために危険を冒してここまで来た。だが、来てみれば何を思ったのかアーンはパレードを実施し、にこやかに民衆に応対している。リリノアやサラも巻き込んで英雄気取りである。…いや実際に英雄であった。

「こんな事をしてなんの得がある？」

「人気が出る…って言っても、そんなのあいつが欲しがるようには思えないよね」

光司とミミはアーンの思惑をいまひとつ掴めずにいた。アーンのする事に意味が無い訳が無く、何かを企んでいるのは間違いないのだがそれがさっぱり掴めない。ここで何をするか少しでも手がかりを得なければ、今後の方針に支障が出る可能性が非常に高い。

アーンは非常に高い人気を得ており、どちらを見ても王子と戦乙女を称える者達で埋め尽くされていた。確かにこの人気は普通であれば、非常にありがたいものではある。だが、すでに貴族達とわたりをつけ、血の呪いのおかげで民衆を言いように扱えるアーンがわざわざこのような茶番を演じる理由が全く理解できない。

「見つけたわ」

「！？」

ふらりとこちらへやってきた女性が、光司を見ておもむろに呟く。目はにごりどこか焦点が合っていない。ぼろぼろの布切れを握り締めてこちらを伺うただならぬ様子に、緊張する光司とミミ。

「…違う。あなたじゃない」

だが、幽鬼のような女性はじっとぼろきれと光司を見比べてから首を振りぶつぶつと何かを呟きながら立ち去っていってしまった。

「そうか、魔石獣の被害にあった人なんだな…」

「かわいそうだね」

亡くなった人を探し続けているのだろうか。ふらふらと右へ左へしながら人混みへと消えてその姿はすぐに見えなくなってしまう。それが切欠で周りをよく見れば、暗い雰囲気を漂わせている人達もちらほらと見つける事ができた。地面を見てうなだれている者、空を見上げ慟哭している者。悲しみにくれる人達が家に居ずに何故この場所に居るかは、分からないがそういった人達もパレードを見ているのは間違いのない事実だった。

「ね、あいつの力薄くなってない？」

「言われてみれば、確かに…」

人の心を惑わすアーンの力。それが人々の熱気に当てられたかのように、薄くかすかに漂う程度の物になってしまっている。先ほどアーンが通過していったにも係わらずこのような状態という事は、何か理由がある？

たとえば、貴族達に対する支配力が弱まり、民衆を操る力が弱くなったのだろうか？　だからこういう普通の方法で民衆の支持を得る

ような行動をとって地盤を固めている必要がでてきた。今、ロバスではガイアフレームの増産が急ピッチで行われている。予定数生産すれば他国と比べても、軍事力は飛躍的に上がるだろう。そう、他国に戦争を仕掛けるぐらいには。ロバスでこれだけの支持を得る事ができれば、バルトス国の他の都市を説得して戦争を仕掛ける事もできるかもしれない。

一つ国を挟んで向こうにある神聖帝国エルディバ。

今、その国との関係がきな臭い物になっていると聞いている。隣国のハイローディスがあるおかげでそうそう戦争という自体にはならないとは思うけど、こうやって地味に民衆に支持を得て行くアーンを見ていると、不安がこみ上げてくる。

「一体何をする気だ」

牙をむき始めた王の印の精霊アーン。その実力は底が見えなかった。

進まぬ議論

「ただいま」
「ただいまー」

アーンの偵察を終え、一度リュート達の家へと戻ってきた光司達。結局、アーンが何を目指しているのかは掴めなかった。情報が掴めず疲れている光司に駆け寄り、すかさず世話を焼くセリナ。上着を受け取り飲み物を用意し、さりげなく隣に座る。

「その様子だと、芳しくなかったみたいだね」
「うん、あいつが何をするのか全く見当がつかないというか。ただ、あいつの力が薄くなってきたのは間違いないかな」
「結界の中からだと分からないんだけど、そうなの？」
「そうね。若干、気が楽だったのは確かよ。パレードの空気のせいかと思ってたけどね」

光司達とは別に外に出ていたティナは軽くそう答える。

「あと隣国のお姫様と、この町の大富豪の娘と一緒にパレードに出てたのが気になった」
「隣国の姫って、婚約者って発表があった子か。ハイローディスと仲良くする腹づもりなのかな？」
「そこが良く分からないんだよね。フレームを大増産してるから、戦争でもしそうな気もするんだけどハイローディスと仲良くするなら、戦争なんてできる訳ないでしょ？　まぁ海路っていう手もあるだろうけど、そうなるとバルトスまで北上しないと行けない訳だし。なんかしっくりこないって言うか」

バルトス国の港は旧首都のバルトスにしか無い。ロバスから行くには山脈を迂回する必要があるのでかなり距離がある。

「戦争をするって言うなら物や金、人が動くはずだから、そっちの方から何か情報が辿れないか調べてみるよ」

「はいはい、分かったわ。他に何か調べておく事はある？」

「これって言うのは無いかな。とにかく気をつけて調べて欲しいってだけで」

「コージさんは本当に心配性ね。大丈夫よ」

そう言われても性分なので、と苦笑を返す光司。パレードを見て実際に感じたのは、ごく普通に溶け込んでいるアーンは実は無害じゃないのか？　という思いである。事実、魔石獣を操れるという事を知らなければ、今回の事も騙されてしまってただろう。世界を自分たちに都合の良いように変えようとしているアーン。負の感情を司ると信じているらしいアーンが、人の喜ぶ事を進んでしているのがどうも気になる。後で何か落とし穴があるとしか思えない。

「だけど、何が落とし穴になるのかさっぱり分かんないだよなぁ」

「ロコが来れれば良かったんですけどね」

「まぁ仕方ないよ。ここに来たら危ないからね。まだ見つかる訳には行かないし」

リュートのおかげで多少は力を付けたロコだけど、やっぱりまだまだアーンの傍に近づくには心許ないのでイーサルークで待機しているのだ。ティナさんはロコを構えなくて不満そうだが、ロコのぬいぐるみを自分で作って気を紛らわしている。どんだけ好きなんだ。

「だけど、リリノアとサラさんは大丈夫かな…」

今のところの気がかりはそこである。魔石獣の襲来の時、フレームを持ち出して善戦したせいでアーンに目を付けられたのだろう。なまじっか二人ともフレームを操作できるので戦果もそれなりに上がっていたそうだ。

「そのお二人は少々冷たい言い方かもしれませんが、コージとはあまり関わりの無い二人です。それに今となってはアーンに近すぎます」

「どうにかして、助けられないかな？」

「なに？　コージは面識あるんだっけ？」

「うん、ちょっと前に知り合った二人なんだ。リリノアはともかくサラさんは苦い記憶しかないけどもね」

オーロ家のメイド達はサラを溺愛している為に追い掛け回された過去を思い出し身震いする光司。大量のガイアフレームを所持していたサラであったが、その趣味が今回は仇となってしまった。リリノアがオーロ家に滞在していたせいもあり、不運が重なったというか。アーンが関わっていなければ、幸運な事例に入る事柄だったのだろうが。

「その二人がどの程度洗脳されているかによるんじゃないかな。正直、町の中に普通に暮らしていただけでも、あれだけ洗脳されてたから…」

「近くに居る二人は危ない、か」

それなら尚の事救出する方が良いと思うが、洗脳される以外は安全なはずでもある。機を見てかっさらう方向で考えるべきだろうか。

「あいつと一緒に居る間はとりあえず無事と割り切って、離れた瞬間を見計らって助ける方がそりゃあ良いだろうね」

僕の案にリュートも賛同してくれる。迂遠なのは重々承知しているが、危ない橋を渡るのは今じゃない筈だ。

「分かった。あの二人は今は保留という事にしよう。あ、ティナさんお願いしてた人形ってどれぐらいで作れそう？」

「もうできてるわよ。言われた通りに作ってみたけど、これで良いの？」

「あ、凄いそうそうこれで良いんだ、ありがとうティナさん」

「でもコージさんが作った方が早いんじゃないの？」

「いや、流石に人形はどうかなぁ？　ドゥエーリンを使えばなんとでもなるだろうけど」

そう答えながらティナから人形を受け取る光司。どことなく白夜に似ているフォルムだ。ごそごそと何かを取り出した光司はその人形に大きめの箱のような物をしっかりとはめ込む。他にも細々とした物を取り付け、人形を立たせる。

「これでどうかな？」

「若干デフォルメされているのが気になるが、良しとしよう。さて主よ、言いたい事がある」

光司の呼びかけに語り始める人形を見て、勢い良く詰め寄るティナ。どうやら、この外見はティナの好みで作られているようだ。

「なんじゃ、おぬしは呼んでおらん。主よ、あんな無茶をしてわしが喜ぶとでも思うたか？」

そしてさっそく邪険に扱われるティナ。デフォルメされて可愛い姿をしているといえど、声音と態度から言い知れぬ怒気が伺える。だ

が、光司はそんな怒気もどこ吹く風で語りかける。

「おかえり白夜。減ってた魔力がようやく貯まったから今まで時間かかってごめんね」

「うるさい、わしは怒っておるのじゃ。ライダーを犠牲に生き残るフレームの気持ちがお前に分かるのか！」

「あれはあれで、勝算はあったんだよ。説明してる暇は無かったからあんな形になったのはごめんね」

「そんな言葉一つで許すと思ったら大間違いじゃ」

どうやら白夜はかなりお冠のようだ。

「でも、白夜はなんだかんだ言って許してくれるんだよね。新しい機体を用意するからまた僕を助けてくれるかな？」

「なんじゃ、ホワイトファングじゃ不満か？」

「そういうんじゃないんだけど、せめてものお詫びって所かな。きっと気に入ってくれると思うんだけど」

「ふんっ。気に入らなかったらもうワシに乗せてやらんからな」

今まで暖めていた機体の図案に手を入れ、どのような状況にも対応できる形の機体。きっと白夜も気に入ってくれるだろうと光司は自信有り気に白夜に微笑んで見せた。

「話から察するに、その子はひょっとしてガイアフレーム…なのか？」

「うん、元はデストロイヤーって名前の機体のコアだよ。なぜか人型を取れる珍しいフレームなんだ。まぁ、ルーツだから何があってもおかしくないんだけどね」

そういって白夜人形を抱きかかえる光司。白夜は嬉しいが怒ってい

るポーズを崩す事ができず妙な動きを繰り返している。

「なんか、コージは出鱈目だよね」

「出鱈目なのはおまえもだろリュート。まったく、夜はもう少し静かにしろってんだ」

「あ、おはようエド」

いかにも寝不足ですという感じのエドがだるそうにして出てきた。あくびをしながら腹をかいている仕草は非常におっさんくさい。

「というか、リュートもコージもどんだけ美人を侍らせてんだよ。おまえら少しは世のもてない男共に配慮しろ、配慮！」

「「えーっと、申し訳ありません？」」

「謝るんじゃねぇよ！　余計惨めになるじゃねぇかっ！」

まったくこいつらは、と呟きながら椅子をテーブルから離してどかっと座るエド。そしていつの間にか白夜はセリナとミミとの再会を喜びなにやら話し込んでいる。

「で、なんか掴めたのかコージ？」

「いや、それがさっぱりなんだ。あいつが何をしようとしてるかさっぱりで」

「そうか。でも、結局はあれだろ世界征服」

「うーん、そんな単純なものかなぁ？」

「難しく考えすぎだろ。それができる力があるんだから、まずそこを目指すだろ」

「確かに征服してしまえば好き放題できるわけ、か。じゃあ邪魔をするにはどうすれば良い？」

「魔石獣に襲われたばかりだから、戦争をすればもっと犠牲者が出るとかなんとかそういう方向で、噂でも流せば良いんじゃないか？

誰だって自分が犠牲になるのは嫌だろ？」

「でも、あいつって人気あるみたいだから煽られたらそんな気になっちゃうんじゃない？」

「だけど、兵隊を襲うとかはできねぇだろ？　あぁ、フレームの工場をちょちょっといたずらするとか、兵隊の隊舎にも何か仕掛けるぐらいはできるか？」

これといった決め手になるような案は出ず、とりあえず出した案を検討して実行しようという事で話が落ち着く。いきなり国単位の話を妨害しようとしても、案が出ないのは当たり前であろう。

「じゃあ俺はちょっと出てくるわ」

「無茶はしないでよ、エド」

「ほいほい、じゃあな」

二つのハーレムを目の当たりにしてエドが居たたまれなくなって出て行ったとは、結局誰も気づかなかった。

帝国打倒へ

パレードが終わり市民の熱狂覚めやらぬ中、ティンラドールにてアーンはロバス内に常駐する主だった実力者を集めていた。

「急な召集にもかかわらず、このように集まって頂いてありがとうございます」

「まずは、私共からお礼を申し上げたい。この町を救って頂きありがとうございます王子。

アーン王子のご活躍のおかげで町は救われたのです。その王子の招集とあらばすぐに駆け付けるのは道理です」

そういって示し合わせたかのように、立ち上がりアーンに向かって最敬礼をする一同。それに鷹揚にうなづき返すアーン。

「王子として当然の義務ですので、これぐらいで。さて、今回集まって頂いたのは聞いて頂きたい話があるのです」

「と、いいますと？」

「今回の魔石獣の騒動についてです。一つ噂をご存知でしょうか」

「あれですかな？　神聖帝国エルディバが首謀者という噂ですかな」

「ええ、それです。皆さんはどうお思いでしょうか？」

そういって、集まった面々を見渡すアーン。

「失礼ながら、噂の域を出ないと思います。いくらエルディバといえど魔石獣を思いのまま操り他国を襲わせるというのは無理があるかと」

「そうですな。それにエルディバが我が国を襲う理由が無い。むしろ、ハイローディスが襲われなかったのが不思議なぐらいです」

口々に噂を否定する声が上がる。国を挟んで向こうの遠い国のエルディバ。その国がわざわざ攻めて来るというのは無理があるというのが、大方の意見であった。

「ご意見ありがとうございます。ですが、皆さんそれが事実だとすればどうします？」

アーンのその一言は議場を一気に沸かせた。

「馬鹿なっ！？　いえ、王子に対してではなく魔石獣を操るなどそんな話は聞いた事がありません！」

「もしそれが本当なら、狙いは一体なんなんでしょうか？」

「事実だという証拠を王子は掴んでらっしゃるのですか？」

突拍子も無い話に、一斉に質問を投げかける。礼を欠いた態度ではあるが、それだけ慌てている証左でもあった。

「まずは皆さん、一度落ち着いて下さい。順を追って説明しますから」

アーンの大きくも小さくもない声でそうたしなめられ、静かになる議場。落ち着いて話を聞いて貰えるまで、少し間を空けるアーン。

「まずはここティンラドールの説明からしましょうか。この塔は魔石獣を引き寄せる為に建設されました。特殊な音波を出すことで魔石獣を次々引き寄せるというのは皆さんご存知だと思います」

一旦話を区切り、理解されているか確認してから話を続ける。

「音によって魔石獣を操れるというのは、このティンラドールで実証済みです。そして、つい先ごろエルディバで一つの笛が発見されたそうです。伝説の吟遊詩人の使っていたフルートだそうです」
「もしや、それで魔石獣を操ったのでしょうか？」
「僕も実際に見たわけではありませんが、笛の一吹きで魔石獣を追い払ったという話を聞きました。それをしたのが、発見したという村民という事で話題になりエルディバの王室へ献上されたという流れだそうです」

ここまで言えば分かりますねという具合に見渡すアーン。だが、納得している者もいればまだ疑問に思っている人間も少なからず居た。

「魔石獣を操れる可能性があるというのは、分かりました。ですが、我が国がまっさきに襲われる理由にはなりませんぞ、王子」

そう追求してきたのはユージ王にエルディバの美姫との婚姻を斡旋した貴族であった。エルディバの重臣と姻戚関係であり、懇意にしている貴族である。

「いえ我が国が襲われるのは噂話にも理由があったでしょ？」
「王の印が目障りという訳ですか？」
「そんな理由でこんな事をするとは…」
「それに、実はその噂を流したのは僕なんですよ皆さん」

そのアーンの言葉に、ざわめく一同。

「別に根拠も無しにそんな事をした訳ではありません。そういった話を掴んだからこそ、僕はフレームの増産をお願いした訳ですし、ロバスに「７７７」をわざわざ持って来ていたのは、情報を掴んでいたからです」

「では、かなり以前から王子はご存知だったという事ですか？　では何故その時におっしゃって下さらなかったのでしょうか？」

「事実を知る者以外には、荒唐無稽な話すぎるからだよ、議長。実際、事が起こって僕の行動の訳を話して、ようやく皆さん少しだけ納得されましたよね？　これを事前に話しても信じて貰えるわけが無い」

少しだけ地が出た様に声を荒げるアーン。その態度に深く反省をする議長。知っているが話せないジレンマを抱えながら対応していたのかと思うと、その内情を慮ると深く反省をするしか無かった。

「ですが、そういう事は今は良いです。本題はここからです」

気持ちを切り替えたのか、冷静に話を続けるアーン。

「我が国は神聖帝国エルディバに対して宣戦布告をします。此度の魔石獣による侵略は到底見過ごせる物ではありません。断固として戦う意思を示そうと思います。皆さんには協力をお願いしたい」

きっぱりと言い切るアーンにざわめく議場。バルトス国はハイローディスに蓋をされているという地理的事情から、ほどほどの軍隊しか存在しなかった。さらには、侵略戦争というものを今まで行った事が無くいい意味で平和、悪い意味で腰抜けと称される国であった。

「ですが、そんな事をしてもハイローディスが通行を許可する筈もありません。かといって海に面して居ないエルディバに船で行くという事もできません。どうしてもエルディバを攻めるというなら、最低でも一国の協力が必要となります」

「ええ、それも理解しています。ですが、ハイローディスに通行の許可を出して貰う為に使節を派遣します」

「王子。ですからハイローディスは首を縦には振りませんぞ？」
「振らなくても良いんですよ。その為の策はありますから」
「本当に宣戦布告をされるのですか王子？」

震える声でそう尋ねるのは、エルディバと懇意にしている貴族であった。

「そうです。今回のような魔石獣の襲撃が度々起こっては、民の生活に支障が出ます。毎日、襲撃が無いか脅えるような日々が来るとなったらどうするんですか？」
「そ、それはなんとも言えませんが、エルディバは神を崇める国で他国とも血の繋がりを持つ歴史ある大国ですぞ？　我が国がエルディバを攻めるとなると、他国が黙っていますまい」
「ならば猶予を与えるとしましょうか。あなたは即刻エルディバへと赴き、今回の騒動について謝罪を要求して下さい。そして、二度と魔石獣を使って町を襲わせないと確約を貰って来てください。期限は一ヶ月。それを過ぎても戻ってこられない場合は」
「分かりました。早速エルディバへ向かいます」

青い顔をして返礼し早々に議場から出て行く貴族。意外と甘い処置だと残った面々は思う。あの貴族はそのままエルディバへと帰属するだろう。王子はどうもそれを理解しながら、わざと出て行かせたとしか思えなかった。

「他に反対だという方はいませんか？　今ならまだ出て行く人を引き止める事はしません。これから相手をするのは歴史ある大国です。かなりの困難が予想されますが、負ける気はありません。魔石獣を使って他国を侵略しようなどという、卑怯者を見逃す様な真似は僕にはできません」

きっぱりと言い切る王子を見て、若さを感じる。そう感じた面々はこの若いまっすぐな王子を助けなければいけない気持ちが湧き上がってきていた。

「一応、僕の中にも案はあるのですが皆さんの協力が必要です。この場に残られたという事は、僕の手助けをして下さると思っても宜しいでしょうか？」

「ええ、もちろんです王子。なんなりとお申し付け下さい」

「そうですぞ、こんな魔石獣を使って怪しげな事をしてくるような国など断固として許すわけには行きません」

「なんにせよ、ロバスだけで話をまとめる訳には行きませんな。取り急ぎ他の都市にも連絡をつけましょう」

アーン王子はユージ王の名代として動いていると行っても、独断で戦争を起こす事はできない。バルトス内の各都市に協力を仰ぎ、準備を始める必要があった。そんなにわかに活気づいてきた議場を見て、にこやかな笑顔をふりまくアーンであった。

政権奪還へ

神聖帝国エルディバへの宣戦布告の噂が慌しいロバスの町を駆け抜けてから半月程経過した。

いかなる理由かいまだ沈黙を保ったままのグレイトエースのユージ王。王室へ向かう通路から入っていって出てきた者はおらず、先の巨大フレームの襲撃で死亡した貴族の長子の呪いだと言われ、王の安否を確認できずに今に至っている。城で働く役人達も、王の裁断が必要なものがある為なんとしてでも確認したいのだが、すでに百名近くもの捜索隊が帰ってきていない現状を考えればこれ以上の犠牲を出すことはできなかった。

そして王の不在を良い事に自身の利権を拡大せんと暗躍する貴族たちも、あらかた満足な結果を持ち帰って行ったようでグレイトエースの城は、閑散とし退廃した雰囲気が漂っていた。現在、ロバスにてアーン王子が代理で政務を執り行っている関係上、首都機能はロバスに移権したとも言え、首都グレイトエースは宙ぶらりんになっている格好であった。

かと言って首都に住む住民は簡単に移動はできない。王が不在というのは不安な要素かもしれないが、結局は居ても居なくても生活をしなければならず、城下町は以前と同様とは言い難いがそれなりの賑わいを見せていた。

「ここからでも、良く分かるなあれは。視線をつい外したくなる」

「でも、なんとかしないと戦争って事になったら大変ですよ、勇司さん」

イーサルークにて容態を回復させた勇司。やはり印の力の影響で動けなかったようで、るりが居なければあのまま城の一室で朽ち果てた事であろう。光司やるりから、アーンの陰謀を聞いた勇司。自身がこうむったツケは自業自得だが光司が受けた傷は、勇司にとって到底許せる物ではなかった。

そして、必死になって体力を取り戻した今こうしてグレイトエースへと舞い戻ってきた。アーンによる宣戦布告をひっくり返すためには自分が王に返り咲く必要がどうしてもあったのだ。

本当は現在の政務が執り行われているロバスへ向かう方が早いのかもしれないが、ロバスに居るアーンの前にのこのこと顔を出せば即座に拘束され、今度こそ人知れず幽閉されそのまま死ぬ事になるだろう。なので、今は空城となったグレイトエースで今一度名乗りを上げる必要があった。それとて、アーンが来れば危険なのだが王として各都市に触れを出す事ができ、政権の正統性はこちらにある事から、アーンの周りにいる貴族たちや民の動きを幾分か牽制する事ができる。

光司やその仲間達は破壊工作や懐柔策を持って、戦争の準備を遅らせてはいるもののアーンはその工作を上回る物量でもって、着々と準備を整えつつあった。

「じゃあリュート君行こうか」

「ええ、行きましょう。なんというか、不思議な気分ですね」

「一年ぐらい前だっけか？　そん時からすれば、こんな事になってるとは思わんからなぁ」

グレイトエースで相対した事のある勇司とリュート。あの時から勇司が王、リュートは勇者という立場は変わらないが、同じ陣営では

なかった。それが今はこうして肩を並べて共通の敵と戦う為に城を目指す。

まずは勇司の味方をしてくれる貴族達の招集である。自ら足を運び呼びかけをする。ただし、洗脳されている可能性が非常に高いのでそれを解除する為にもリュートについて来て貰ったのだ。ある程度の数を集めて城で復権を果たす。それがアーンの暴走を止める為に必要な、勇司にしかできない仕事だった。

大地を駆けるピンク色の機体。対するは青の機体。両機とも基本的なフォルムは似通っており、ライダーに合わせて微調整されている機体のようだった。

その細身の機体からは信じられない程巨大な剣をするどく振り回すピンクの機体。しかし、青い機体は手に持った細身の剣で、軽々といなしていく。ある程度の時間続けられるピンクの機体の剣舞。だが、青い機体はパターンを掴みでもしたのか、急に反撃を開始した。

巨大な剣をかいくぐりながら、剣の軌道を体勢を崩すようにずらしていく。そうやって少しずつ隙を作っていき、機体へダメージを与えていく。対するピンクの機体も流される事を理解したのか、動きをますます鋭くし無駄をそぎ落として一撃を研ぎ澄ませて行くも、今一歩青い機体へ、強力な一撃を食らわせる事ができなかった。

「やっぱりミミは強いねぇ。トレースモードの方が断然動きが良い

ね」
「むぅ、コージ余裕あるね。絶対に当てるからっ！」
「じゃあ、ちょっと本気で行こうか」
青い機体の脚部から、細長いパーツが分離し更にそこから子機が次々生み出された。
「む。それ嫌い」
「苦手な物は克服しましょう。じゃあ、行くよ」
今まで守勢一方だった青い機体は攻勢に転じる。足から分離したパーツ、ハンター。その子機も青い機体に付随して周囲に展開している。子機はそれぞれ射撃も斬撃も可能なタイプであり、対処は非常に厄介である。ミミの獲物は大剣一本。ウェポンラックには他にも勿論武装はあるのだが、ミミはあまり使いこなせていなかった。
「うみゃーーーー！」
大剣一本で、無数のハンターと子機の攻撃を回避し反撃まで行うミミ。光司も攻撃に加わり相当な手数な筈なのだが、恐ろしいほど無駄のない動きで対応していた。だが、それも攻撃のスピードを上げた光司の剣撃と子機の攻撃の嵐の前に被弾してしまう。
「ふんにゅ！」
ミミは仕切りなおしと言わんばかりに変形して一気に光司から距離を取る。だが、それは光司の狙い通りのパターンであった。
バッガァアアアアアアアアアアアアアン！！！

耳をつんざく轟音と共に背部に担いであった長距離砲が情け容赦なくミミへ撃ち込まれる。

「動きが直線的過ぎるよー。逃げるならもっと勢い良く逃げるか、空へ逃げないと。そんな地表を水平移動してるだけじゃ、いい的だよ」

「コージの鬼ぃ！」

「そうですよー」

結局、ミミは良い所なく終了した。

「なんか、フレームに乗ったコージは人が変わった様になりますね」

「そうか？　鍛えるというならあれぐらい当然じゃないか？」

戦いを見ていたセリナの呟きに、不思議そうに返すアナ。

「うーん、そうなんですけど以前はあそこまで容赦ない事はしなかったんですよね」

「うーん？」

アナのおかげでミスリルを山ほど入手できた光司は、さっそくフレームの製作を開始した。自分の機体は勿論、ミミやセリナ、リュートやハルトバルト、エドやセシリア達の分まで調子に乗って作成していた。

そしてフレームが出来上がるがいなやこうやって特訓を続けている。ちなみに白夜は今はティナが作った人形に入って観戦している。白夜のサポートが入ればとんでもないハンデがついてしまうからだ。

「そりゃ、わしに乗ってて死にそうになったんじゃからの。主も死

ない様に必死に教え込む道理じゃ」
「それも理解できそうな話ですね。でも、うーんなんでしょうか…」
「まぁ主も悪いようにはせんて。次はセリナじゃろ、頑張って散ってこい」
「う。頑張ります…」

そういってセリナは自身の赤い機体へと重い足取りで向かった。ミミのピンクの機体は泥まみれになっているのを見れば、自分も似たような運命を辿るだろう事は容易に推測できる。

「コージ、お手柔らかにお願いしますね」
「うん、ほどほどにね」

ハッチを開けた状態でそう答える光司は実ににこやかな笑顔だった。

着々と

ロバス南東部ラーティア平原。バルトス国内の穀物の三割を生産する穀倉地帯である。この広い大平原があるおかげでバルトス国は潤っていると言っても過言ではない。今は収穫を終え閑散とした平原だが、そんな穀倉地帯の一角にアーンの指示によってとある施設が完成していた。

広大な土地を石畳ではなく平らな固い地面で全面が覆われ、巨大な塔が敷地をすべて見渡すようにして立っている。その傍らにはいくつかの格納庫が見受けられ、フレームが待機状態で駐機している。巨大なエレベーターが有りどうも地下にもなにやら施設があるようではあるが、地上からではその規模は伺う事はできない。

「アーン王子、完成したフレーム二百機の搬入作業が終了しました。残りの三百機の生産の進捗状況は四割という所です。いかが致しましょうか」

「その三百の中から百をハイローディスに回す分に取っておいて。エルディバへ攻めるなら二百あれば十分だから」

「了解しました、そのように手配します。あとハイローディスへ運ぶ分ですが、飛行ユニットは外しておいて宜しいですか」

「あぁそうだったねぇ…向こうは喉から手が出るくらい欲しい物だろうから外しておいてくれる？　奴らに渡すタイミングは僕が決めるから」

「了解しました。それでは」

管制塔から施設の全容を眺めていたアーン王子は、施設の出来栄えに非常に満足していた。

「あれももうじき完成するから、エルディバを落とすのは簡単になるね。それよりも今うっとうしいのはイーサルークの奴らか」

誰も居なくなった部屋でそう語りかける。

「そうだな、なにやら竜の動きがにわかに活発になったと聞く。それに最近おまえの力が弱まってきたのはあいつらが何かをしたせいじゃないのか？」

誰も居なかった筈の部屋に声が響く。気づけばいつの間にかアーンの傍らに青い髪の角を生やした人物がそっと佇んでいた。

「いや？　それに関しては僕が力を緩めてるせいだから気にしないで良いよ。それよりも勇者なんだけど、あいつの動きはまだ掴めない？」

「あぁ。あいつめ常に結界を張っているようで中々俺達では動きが掴めん。手の者を使ってはいるが、まだ足取りを掴めずにいる」

「役に立たないな。でも、イーサルークと勇者がつるんでいるのは間違いないんだね？」

「それは間違いない。イーサルークへまっすぐ向かう姿を確認した者が居たそうだ」

「ふぅん」

魔族の言葉に思案ありげに俯くアーン王子。

「ふふっ。セリナは何かを見つけたって事か。ミミは逃走したみたいだし、あいつの女は中々やる気満々じゃないか」

「何か嬉しそうだな」

「嬉しいよ。中々骨がありそうな奴が向かってくるって分かったんだしね。さて、盛り上げるにはどこまで隙を見せれば良いと思う？」

にかっと魔族に笑顔を向けるアーン。

「隙なぞ見せずに全力で倒すべきだ。古来、余裕を見せた者は大半が自滅する」

「自滅ねぇ。それもまたありそうなシナリオかな。でも、そう見せかけて復活するとか第二形態とか楽しい要素も組めて楽しそうだよねぇ」

ぶつぶつと意味不明な言葉をつぶやくアーンを気味悪げに見つめる魔族。言葉だけを見れば自滅する事すら望んでいる節があり、楽しむという事だけを追い求めているようにも見える。

「おまえは勝つ気はあるのか？」

「勝つ？　君は何を持って勝利だと思ってる？」

「質問に質問で返すな。勝利とは我々魔族が人間に取って代わる事だ。あいつらより数が上回れば支配もたやすくなる」

「でも君達も元々は人間だったんだろ？　ってまあそんな事はどうでも良いか。で、僕の勝利って言うのは僕好みの感情を味わえればそれで勝利なんだよ」

「感情を味わう？」

「そうさ。質もそうだけど数も多ければ多いほどが良い。そして、その感情が僕にぶつけられれば最高さ！　上がったり下がったりする感情という物をじっくり楽しむ。それが僕の勝利だ」

今も楽しんでいるようで、不遜な笑みを漏らしているアーン。そんな態度に疑問を覚える青い髪の魔族は強く問い詰める。

「なら尚の事、徹底的に叩き潰せば良いじゃないか」

「ううん、分かってないね。悪いけど、僕は既に勝利してるんだ。

今もいろんな感情を僕は食らっている。これをもっともっとおいしい味付けをする為にこんな事をしてるだけなんだよ？　言わば、晩御飯の下ごしらえさ」

「人間を滅ぼす気はあるのか？」

「無いね。生かさず殺さず希望と絶望の間を行ったり来たりして貰うよ。それが一番おいしいからね」

「それで俺達と手を組んだという訳か」

「そういう事。君たちならうまく飼い慣らしてくれるだろ、人間を」

「絶望を与えるという事なら、うずうずしてる奴らは多いがね。希望なぞ与えん」

「そこは僕がやるよ。まぁ、それもこれも世界を征服した後だからどうしたいか考えておくし、君達も今から取り分をしっかり相談しとくと良いよ」

「現実主義なんでね。物を前にしてからしっかり考えるさ」

「ふふっ、別にどうだって良いよ。あ、そうそう一つ忠告しとくけどさ」

「なんだ？」

話は終わりだと言わんばかりに踵を返した魔族に、アーンから言葉を投げられた。

「迂闊な事はしない方が良いよ？　今はまだこの国の人間は僕の物なんだ、僕の物に手を出す奴は誰だって容赦しないよ。憎しみってのは美味しいんだから」

「…心得た」

そういって姿と共に魔族の気配が消えた。

「さーってと、次は何をしようかなぁ～？」

今度こそ誰も居なくなった部屋で、平和そうなアーンの声が大きく響いた。

協力はできる。だが、表立って協力する事はできない。

「くそっ、どいつもこいつもっ！　と怒った所でどうにもならんな、すまん」

「いえ、大丈夫ですよ。ですが、貴族というのも中々弱いもんですねぇ」

ロバスに居る主だった貴族の中で勇司に協力をしてくれる貴族を尋ねていたのだが、結果はおもわしくなかった。リュートによって洗脳は解けたものの、現状を把握するや否や流れがアーンにある事を察した貴族は、誰もが表立って協力する事を拒否したのだ。今、勇司には王の印は無く無理にいう事を聞かす事などはできない。もしあったとしても、そんな事はできなかっただろうが。

「だが、旗印があればあれらも変わってくる筈なんだ。貴族どもの矢面には立ちたくないって答えがほとんどだったからな」

王という勇司の立場を補佐し、内政を取り仕切る人物。勇司が欲しているのはそんな人物である。最初それを依頼しようと思っていた人物は、既にアーンに味方をしていたので次の候補の人間に手当たりしだい当たっていったのだが、どれも色よい返事は返ってこなかった。確かに貴族の長子が死亡した件や、巨大フレーム襲撃の際の補償の件に今回の戦争の件などの無駄に厄介ごとがてんこ盛りなこ

の状況に、わざわざ苦労をしょい込んでくれるようなお人好しは貴族の中は勿論、平民の中にも居はしないだろう。

「あー、旗印ですか。貴族の横槍にもびくともしない人物なら一人心当たりあるんですが、どうでしょうかねぇ…」

「なにっ!?　リュート君、それは誰だ!?」

「言っていいのかな。ほら、あれですよファウンデルス卿ですよ」

「ファ…ラディアスかっ！　確かにあいつならこれぐらいびくともせんだろうなぁ。だが…」

「おっしゃりたい事は分かります。ですが、イーサルークで一度呪いを解いてみてはどうでしょうか?　ひょっとしたらこちらに付いてくれるかもしれませんよ?」

勇司との戦いの際、ファウンデルス卿が口走っていた呪いという言葉をリュートは思い出していた。自覚のあるそれをイーサルークで解けるかどうかは分からないが、王の印の関係の物であるならば解ける可能性が非常に高い。

「すまん、少し考えさせてくれ」

「ええ、大丈夫です。待ってますから」

とはいえ、勇司としては一度裏切られて刃を向けられた身。今までの功績を鑑みて投獄の後幽閉という形になっているが、もう一度以前のように働いて貰えるかどうかというのは能天気に見える勇司を以ってしても難しい問題のようだった。そもそもファウンデルス卿をどうやって説得するかという問題もある。

必死に考えこむ勇司の姿を穏やかな顔で見つめるリュート。るりは勇司の傍らにそっと寄り黙ってしがみついていた。

光司君の告白。もげろ

「おい、起きろ光司。こんな所で寝てたら風邪を引くぞ」
「んあ？」
強い力で揺さぶられて目が覚める。ここどこだっけ？　あ、そうか昨日もフレーム作りながら寝てしまったんだっけか。
「くぁあああああ…ん～、アナおはよう」
「寝ぼけてるな。まだ夜だ」
「ありっ？　じゃあ、もう少し頑張るかな」
「んーコージ、起きたんです？　もう少し寝てましょうよ」
「ち、セリナも起きたか。というか、寝るならちゃんと部屋で寝ろ！」
何かご立腹な様子のアナ。心配してくれるのはありがたいけど、ちょっとやそっとじゃ病気にもならないし、いつの間にかセリナがくっついてたから暖かかったんだよね。ていうかあれ？
「ばれた」
「ミミもいつの間に。毛布の中に潜り込んでて息苦しく無いの？」
「大丈夫だよー！　コージにくっついていたかったんだもん」
「おまえらずるいぞっ！　俺がやっと仕事を片付けてこれからって時に、こんな所で光司を独占して！　探すのに苦労しただろ！」
「でもおとといは、コージを巫女の部屋に連れて行って私たちを締め出しましたよね、アナ」
「昨日もなんだかんだいって、コージを独占してたし」
「う、うるさい！　そ、それが今まで通りなんだっ！」

ぎゃいぎゃいと騒ぎ出す三人。女揃って姦しいという状況だね。自分を取り合って三人の美少女が喧嘩するっていうのは、漫画や小説では良くあるシチュエーションだけどいざ自分の身に降りかかってくるとなると、対処が難しい。正直、この状況がおいしいと思う自分もいるし、さっさと誰か一人を決めてとことんいちゃいちゃしたいっていう気持ちもある。

セリナに告白されてから、ミミにも真剣に告白された。自分で自分にもげろっ！　って言いたくなったのはどこかひとごとの様に思ってた所為だと思う。今まで煮え切らない態度で居たのも、どこか納得できない部分があって一歩引いていたんだけど、色々とはっきり分かった今はもう違う。

アナにしたって、僕を助けてくれた命の恩人だ。彼女は僕を世話をしていくうちに、僕の事が好きになったようだ。そりゃ僕もあれだけ甲斐甲斐しく面倒を見てくれたアナに惹かれなかった訳じゃないけど、やっぱりセリナ達が居たから気づかない振りをしてた。まったく無駄だったけど。だからって、俺がまとめて面倒を見てやるとかは、中々言える台詞じゃないよねぇ。

ん？　なんか急にぴたっと動きが止まったけど、どうしたんだろ？

「本当ですか、コージ？　面倒を見てくれるってプロポーズですよねっ？！」

「まとめてって事はミミも良いんだよね？　ね？」

「ようやくその気になったか！　だが、俺だけ面倒を見てくれても良いんだぞ」

あっれぇ…？　口に出してた？

「今はこんな状況ですから式は先で良いんですけど、すぐにでもちゃんと貰って欲しいって言いますか…うふっ」
「うん、ミミもセリナの後で良いからちゃんと貰ってね！」
「ん？　後も先も無いだろ？　貰う？？？」

セリナとミミが大胆発言かましているけど、アナはなんの事か分かってない。なんというか無垢だよね。ていうか、それで良いのか君たちは。

「少し落ち着いて？　えっと、そりゃ僕はセリナもミミもアナも好きだけど、誰を選ぶか悩んでたんだけど…」
「え？　さっきまとめて面倒みてやるって言いました！」
「そこで黒出さないでっ？！　いやっ、まとめて面倒見れるなら見たいけど、そんなの良いの？！　普通は誰か一人だけ選ぶものじゃないの？」
「じゃあ、セリナを選んだらミミはどうなるの？」

その状況を想像したのか、なんだか潤んだ瞳でミミがそう問い掛けてきた。

「そりゃ、僕を諦めて貰ってもっと良い人を見つけて貰うしか無い、かな」
「ミミはコージが良い。コージしか要らない」

いつもニコニコとしていて、怒った表情をあまり出さないミミにしては珍しく、怒った様子ではっきり言い切るミミ。

「俺もそうだぞ。光司ぐらいしか男は知らんしな！」
「アナ、その言い方はどうかと思うけど、うわぁなんか責任重大になってきたぞぉ」

なんかアナってインプリンティングされたひよこみたいに、初めてまともに相手をしてくれた異性に懐いてるってだけな気がしてきたぞ。いや、それはそれで普通なら有りな展開かもしれないんだけど、既に二人を抱えてる僕の場合は問題があるんじゃないだろうか。

「そうです、責任重大ですよコージ。優しくて暖かい気持ちにさせてくれるコージに惚れさせちゃった責任はちゃんと取ってくださいよ？」

「あ、でもちゃんと平等に可愛がってくれなきゃやだよ？　セリナのおっぱいお化けばっかり可愛がるのは無しだよコージ」

「えっ、ミミも大きいじゃないですか？！　それにお、お、おっぱいお化けとか言わないで下さい！」

「いや、お化けで十分だ。なんだよ、そんなの俺には付いてないぞ」

「待って、待って？！　こんななし崩し的に決めちゃって良い訳ないでしょ？！　なんか話がどんどん決定事項になりつつあるよ！」

なんか、雰囲気的に僕がまとめて面倒を見る的なことになってるんだけど、この三人はそんなので本当に良いんだろうか？　良いなら良いで僕としては、異論は無いんだけどこんな大事な事は、ちゃんと向き合って話をしたい。

「大丈夫です、コージなら五人ぐらいできます！　リュートだって三人相手してたんですからっ！」

赤い顔をして断言するセリナ。ていうか、何の話をしてるの何の。

「だってミミはコージが好きだし、コージもミミの事好きなんでしょ？　問題ない、よね？」

「俺も光司が大好きだぞ。部屋に閉じ込めておきたくなるぐらい」

「分かった。僕がここでぐだぐだ言ってても駄目だね。うん」

なんか、こういう告白はもう少しロマンチックにというかムード良くというかそういうのを期待してたんだけど、こういう締りの無いのも僕らしい、かな。

「えっと、セリナ」

「はい」

「僕は君が好きだ。この世界に来てからずっと傍に居てくれて、優しくて時々怖い事になるけども、いつも僕を見守ってくれたセリナ、君とずっと一緒に居たい。居てくれるかな？」

「はいっ、ずっと一緒に居ますコージ」

泣き笑いの表情でしっかりと返事をしてくれるセリナ。やっぱりセリナは可愛いな。

「ミミ」

「うん」

「大好きだよ、ミミ。最初は吹けば飛びそうな弱々しい感じで、守っていかなきゃって思わせる子だったけど、本当はすごく強くてびっくりしたよ。打ち解けていくうちに、明るくて可愛い笑顔を見せてくれたミミ。いつもいたずらをして僕を楽しませてくれるびっくり箱みたいな君と一緒に居たい。駄目かな？」

「いいよ、居てあげる！　ずっとだよ！」

明るく元気に返事をしてくれるミミ。いつもどおりの笑顔に戻ったようで良かった。

「最後にアナ」

「おう！　どんとこい！」

「ぷふっ、相変わらずだねアナ。死にそうになっていた僕を必死に助けてくれたアナ。君には感謝してもし足りないよ。いまこうしてここに居るのも君のおかげだと言っても過言じゃない。改めてお礼を言うよ。ありがとうね、アナ」

「お、お礼は良いからもっと違う事を言えよ」

「ごめん。アナ、言葉使いは荒いけど本当は優しい君が大好きだよ。ちょっと態度が悪くて言葉が悪いおかげで誤解されやすい君だけど、本当はすごく優しくて傷つきやすいのを知ってるよ。そんな君の傍にいて、少しでも力になれたら良いなって思うんだ。一緒に居て良いかな？」

「良いぞ！　なんなら部屋にずっと居てくれて良いぞ！」

アナも元気良く返事を返してくれる。相変わらず僕に対しては、素直な感じだ。いつもこんな感じだったら良いのにね。

「コージ君っ♪　誰か忘れてないかな？　かな？」

「そうですね。誰かと言いますか、私たちと言いますか」

「嫁の存在を忘れるのはどうだろう」

「コージ、お前すげえな。ハーレムとか羨ましすぎるだろ」

「不潔です、見損ないましたっ」

三人に告白をしてほっとした瞬間、ぞろぞろと皆がやってきて口々にはやしたててきた。いやちょっと待って、全然気づかなかったぞ？！　アイシャ先輩の仕業かっ！

「えっとみなさん、どこから聞いていたのでしょうか」

「大丈夫です五人ぐらい、からかな？　セリナって大胆だよね」

「ひゃぅぅぅぅっ」

「というか、こういうのアリなの？　王族でもあるまい…って王族だったわね」

「えへへー良いでしょう！」
「三人まとめて面倒を見るぐらいだから、あと少しぐらい増えても問題ないよね、コージ君っ」
「具体的にはこの私」
「そして、私と」
「どうなってやがる？　おいコージ、おまえ一体何をしてきたんだよ今まで！」
「美人さんをはべらせて、嫉妬を買い捲ってたぞ」
「そうよね、コージってなんだかんだ言っていつも美少女と居たわよね」
「なんだよちくしょう、俺にも一人ぐらいそういうのが居ても良いじゃねぇか…」

みんな好き勝手にしゃべるもんだから、もうカオスだ。というかエド、本音をぶっちゃけ過ぎだよ。アイシャ先輩もなんか気になる発言をしてたけど、これ以上は無理だ！

結局、告白はしたものの締まらない雰囲気で終了してしまった。まぁ、これもお約束って奴かな、うん。

父と子はわがまま

「拗ねてる？」
「ボクは拗ねてない」
「わしも拗ねとらん」

最近、黒柴のロコと人形形態の白夜は一緒にいる事が多い。姿が変わったので視点が同じという事と人とは違うという事が理由かもしれない。

「さっきの話は聞いてたでしょ？　別にロコと白夜を除け者にした訳じゃないんだ。二人には悪いけど僕はなんだかんだ言って人間なんだ。君たちより先に死ぬ」

精霊とロボットのコアな二人は、言うなれば不老不死だろう。精霊のヒロコは既に少なくとも五百年は生きている筈だ。白夜に至ってはルーツというだけあって、さらに年数は伸びるはずである。そんな二人にとって人間の寿命なんて一瞬で終わるものだろう。だから、そんな二人を最後まで面倒を見るとは言えない。絶対に僕が先に死ぬから。

そんな事を考えていたら、ロコにがぶっと噛まれ白夜に蹴られた。痛くないけど。

「先に死ぬから、ボク達には何も言えないって事？　それはボク達を馬鹿にしすぎだよ」
「だな。そんなものはとっくの昔に覚悟の上じゃ。その上で望んでおるのだ」
「じゃあ、僕はわがままを言って良いって事？」

見た目がわんこと人形の二人だけど、怒りは十分伝わってきた。

「そんな遠慮が要る仲だと思ってないよ、ボクも白夜も。ボク達が彼女たちより魅力が無いって理由なら納得するけど、たかがそれぐらいの理由で除け者にされてるなら、流石のボク達も怒るよ？」

「おいヒロコ、ワシの言いたい事も残してくれぬか」

「あ、ごめんごめん」

すねる白夜を慰めるロコ。わんこだけに慰めるのも大変そうだ。

「ごめん、ありがとう二人とも」

「まぁそういう事じゃ。で、主はワシ達に何を望む？」

白夜がそう言うと静かに僕を見つめてくる二人。僕がこの二人に望む事、それは

「いつかではなく、僕と一緒に死んでくれる？　死ぬと言っても二人がどうやれば死ねるかわかんないから、僕が死んだら一緒にお墓で眠って欲しいんだけど」

「分かったよ、死んでからハーレムキング、美女の精霊と電子の精霊と共にここに眠るって墓石に刻んであげるね」

「え、僕だけなんか扱いひどくないそれ？」

「そうか電子の精霊か。なるほどそう言えなくもないなくっくっくっ。ワシも了承だ」

二人ともなんか明るく笑ってるけど、僕が相当無茶苦茶なお願いをしたのは分かっている。その気であればいつまでも生きていられる二人に終わりを求める、こんなわがままは無いだろう。だけど、遠慮が要らないという言葉を信じて本音をぶつけ、それに対して二人

とも躊躇する事無く応えてくれた。

「ヒロコも白夜も大好きだよっ！！！」

「うわっマスターがでれた！　でれたよ白夜！」

「でれたのは良いが、この体勢はきついぞ主」

二人をぎゅっと抱きしめて感謝の気持ちを伝える。豆柴のふかふか感はやっぱり気持ち良いんだけど、白夜の感触もなんか気持ち良い。これは癖になりそうだ。

勇司が成り行きで王の座についた頃に、既にバルトス国の宰相としてその座に居たファウンデルス卿。領民に対して行き過ぎな法案を出しがちな貴族たちを掣肘し、自身は大貴族という家を背景に勇司が知る頃から既に力を存分に発揮し始めていた。

だからこそ、ファウンデルス卿の理想を崩しかねない王の存在は当初煙たがられており、勇司とファウンデルス卿の関係は表面上は淡白な物であった。

だが、勇司が国の内情を知るにつれ改革を行いと考え、疑問点や問題点を事細かにファウンデルス卿に尋ねるようになった。勿論、勇司とて宰相一人に聞いた訳ではなく多数の人間に聞いて回っていた。その中で比較的まともな答えを返すファウンデルス卿の下へと足しげく通うようになるのには、そう時間はかからなかった。

信用できると分かればとことん信用する性質の勇司は、自分の思うところをファウンデルス卿にぶちまけた。自分がなぜかこの世界に来た事、家族を残してきた事、帰れるものなら帰りたい事。現在は請われて王となってはいるが、もともと普通のサラリーマンだった勇司には荷が重い事。バルトス国の政治を良くする為に話をしに来た筈が、なぜか勇司のすべてをさらけ出す事になったのは、ファウンデルス卿の聞き方のせいだろうか。勇司の世界の政治形態を聞いたファウンデルス卿は、それに非常に興味を持った。自身が考える形に非常に近いものであったからだ。

最初は自分の計画が盗まれたのかと疑心暗鬼に陥りかけたのだが、少し誘い水を向けるとべらべらと語りだす勇司を見て、安心をした。かつその人となりを知る為に情報を引き出したが、予想外に話をしてくる勇司に対して保護欲をそそられたのは、無理も無かった。

そこから二人が仲良くなるのは早かった。

仲良くと言っても国を良くするという利害関係が一致したという認識であったのだが、気がつけばあれこれ問題を持ってきてはすまなさそうに頼ってくる勇司の面倒を度々見る内に、ファウンデルス卿もほだされていった。勇司の名前をちゃんと発音しようとしてうまく言えず、ユージンと言ってしまうのも今となっては懐かしい。

異世界から来たという事を知っている為、こちらの世界に根付いてもらおうと他国の姫や国内でもまともな貴族の娘たちをあてがおうとした。しかし、勇司はそのどれも首を振り話をすべて断った。中には美姫で有名な三姉妹の一人も居たというのにだ。

そして、その原因を探る内にファウンデルス卿が知ったのは勇司はまだ元の世界に未練を残しているという事。

勇司は勇司で、秘密にするつもりは無かったのだが、タイミングが合わずファウンデルス卿に打ち明ける機会の無いまま、日々が過ぎていった。結局は、自身の説明が足りなかったばかりにクーデターが起きたのではないかと、今では勇司も思っていた。

だからこそ、自分のせいで幽閉される事になったファウンデルス卿に負い目を感じている。

リュートは勘違いしているようだが、勇司はファウンデルス卿に恨みや憎しみを抱いていない。むしろ、許しを請う立場だと考えていた。

「来たかねユージン。その顔を見れば大体何を考えているか想像はつくが、今はそんな事を話しに来た訳じゃないだろう？」

常に仮面をつけているエリスに案内され、面会した時の第一声がそれだった。幽閉されているという身分を慮ってか、昼であるにもかかわらず窓には分厚くカーテンがしきられ、部屋の中は魔法具で薄暗い明かりが点っている中、ファウンデルス卿は座ったままで迎えた。

「失礼ですが、ファウンデルス卿。現状をすでに把握しておられるのですか？」

「あぁ、リュート君か。まぁ、だいたいは分かるよ。ロバスに居る王子を名乗る何者かが、ユージンを幽閉し専横なふるまいをしているという事ぐらいだがね。しかし、あの城から良く出れて来れたもんだね」

「息子と妻がやり手でね。楽をさせて貰っている」

「お久しぶりですね、ファウンデルス卿。私が妻のるりです」

「娘かと思っていたが、妻だとは。いつぞやは失礼しましたね」
るりの自己紹介に少し驚いた顔をするファウンデルス卿。

「さて、それでどうしたいのかね。私は幽閉の身。さらに言えば、迂闊な事をすればまたぞろクーデターを起こしかねない身の上だ。その危険を承知でここまで来たのだろうが何か手はあるのかね？」

幽閉されながらも情報収集は欠かさなかったという事だろうか。いやに落ち着いた調子で勇司に問いかけてくるファウンデルス卿。自身が求められている役割も把握しているようだ。

「良いのかラディアス？」
「どうしたユージン。おまえは王で私はその臣下だ。求められれば応じるべきだろ？」
「その事じゃない。俺の言葉が足りなかったばかりに、おまえをこんな目に会わせてしまった俺を許すのか？」
「それはお互い様だよユージン。私は湧き上がる血の衝動を押さえ込むのに必死で、おまえの動きを気にはしていたが問い詰めなかった。おまえはおまえで、寝る間も惜しんで調べていたのだろう？お互い、間が悪かったというべきだろう」

感情をあらわにしている勇司とは対照的にたんたんと語るラディアス。その燃え尽きたかのようなラディアスの様子に、力強く宣言する勇司。

「分かった、今後は気にしない事にする。それでいいな！」
「ふふ、そう言っている。そうは言ってもおまえは罪悪感が中々抜けないんだろうがね。くっくっ」
「うるせぇ、どうせ俺には腹芸は似合わねぇよ！　で、ラディアス

おまえの呪いをどうにかできるかもしれないんだ。付いてきてくれるか？　いや、付いて来い」

「ほぉ、便宜的に呪いとは言ったが本当にこれは呪いなのかね？　いやはや、それなら理性で抑えようとしてもどうしようも無いわけか。滑稽だな」

「そうだ、だからそんな風にする必要はない。無感情とクールは違うぞラディアス」

「分かった、でどこへ行く？」

「イーサルークだ。そこでなんとかできる」

「ユージ王、呪いが解けるかもってだけで確実じゃありませんよ？」

慌てて説明するリュートに揃って返事をする勇司とラディアス。

「「可能性がある限りなんとかなる！」」

その仲の良い様子にぽかんとするリュートと、おかしくて堪らない様子のるり。

「勇司さんならともかく、ファウンデルス卿も意外と気合と根性な所があるんですね」

「ええ、長く共に過ごせばそうなりますよ奥方。あと私の事はラディアスと呼んで下さい」

「ええ、よろしくねラディアスさん」

案ずるより産むが易し。ラディアスへの協力要請はそのように終わり、ほっと一息をつく勇司であった。

アーン拘束

時は進む。

ユージ王の復活とファウンデルス卿の復権。

その伝えは一瞬にしてバルトス国全土へと広がっていった。もともとこういった事を想定して首都の機能の中に主要各都市への伝達を円滑に行う機構を構築しているおかげである。そして、ファウンデルス卿の復権と共にさきの首都襲撃事件の補償の通達が行われる。今回の犠牲者には相応の補償を執り行う事とし、正確な算定額が出るまで一ヶ月は必要と宣言した。勿論、洗いざらい徹底的にファウンデルス卿に調べさせてからと脅す事も忘れないユージ王。

まさか幽閉されていたファウンデルス卿が復権するとは誰も思っておらず、王が沈黙している間に好き勝手に王宮に入り利権を漁ってにんまりしていた貴族達は、戦々恐々とした思いを抱いていた。

次に行ったのは、戦争の準備に対する布告である。

フレームの増産や食糧の備蓄、兵士の訓練などの行動はそのまま継続して行う事とし、王もやはり戦争を行うつもりかと思わせた。だが、それは魔石獣に対するものであり他国を侵略する為の力ではないと力説し、人々を混乱させた。

アーン王子は王から戦争をすると言われてそう動いてきたのでは無かったのだろうか？

魔石獣の陰謀はエルディバの仕業であり、その暴挙を食い止める為

の聖戦。今までその為に働いてきたり、物資を提供したりしていた。かなりの負担だったのだが、これ以上魔石獣の被害で町を荒らされるぐらいなら、今は我慢しようという気持ちで頑張っていた。特に毎回被害を被るロバスの町の人は、そういった思いが顕著であった。

魔石獣から町を救った英雄アーン王子。かたや、町の危機には静観し君臨するユージ王。ユージ王が王になってからは、貴族達も少し大人しくなってきたのだが反乱や襲撃が立て続けに起こっているのも事実だ。今まで頑張ってきた市民としては、アーン王子を応援したい気持ちが沸いてしまうのも無理は無かった。

「さて、王子を名乗るアーン殿。貴殿は勅許に基づきその権利を剥奪し、拘束させて頂く。なお知らずに協力していた面々の罪は不問とする王の言葉だ。感謝するように」

ロバスのアーン王子が住まうティンラドールの一角に、ファウンデルス卿率いる軍勢が乗り込んでそう宣言した。常に現場へ赴くというスタイルがファウンデルス卿のモットーであり今回もこのようにして、矢面へと立っている。

「へぇ、ユージ王も頑張るねぇ。だけど、肝心な事を忘れていないかい？　僕こそが王なんだよ？　わかる？　“ひざまずけファウンデルス卿”」

余裕の態度を崩すことなく、自身の優位を疑わないアーン。だが、アーンの言葉にもかかわらずファウンデルス卿は何も反応を見せる事は無かった。

「なんの冗談かねアーン君。王でもない君の言う事など聞く訳がなかろう？　政治は子供のオモチャでは無いのだ。牢でしっかりと反

省するんだな」
「んー…？　最近旅行でもした？　ファウンデルス卿」
「答える義務は無いな。よし、連れて行けっ」
「お待ちください！　なんの権利があってロバスの英雄を拘束されるのですかっ！　理不尽極まりないですぞ！」
「そうです、ロバスを救ってくれたのは間違いの無い事実。今、この方をそのように無体に扱うのであれば相応の覚悟が必要だとお思い下さい」

ロバスをその身を以って救ってくれた事実は今も鮮明に思い出される。そんな英雄が王によって拘束されそうになり、ロバスの重鎮達はたまらず抗議をし始める。さらにファウンデルス卿と言えば、一年ほど前に王に反旗を翻した人物である。町の救世主であるアーン王子を任せるには不安がある。

「先程私は言った、勅許だと。王の命により動いているのだ、そのような行動は王に楯突く行動とよくよく考えてのものか？」
「例え王といえど、理不尽には抗する。そのような姿勢を示してくださったのはそもそもが王である。その王に叛旗を翻した貴殿を信じられる訳が無い」
「そうだ！　誰の許可を得ておまえはこの場に居るんだ！」

一人が反論しはじめると続けてアーンを擁護する発言が次々と続く。今もアーンの前にはそういった重鎮による人の壁が築かれ、拘束しようとする兵士達を威嚇していた。その様子にも怯む事無くファウンデルス卿は、堂々と一人で立ち向かう。

「何度も言う。王の勅許により私はここに居る。それ以上の理由が要るのか？」

何を言われても動じないファウンデルス卿。その意思もぶれる事はなく揺るがない。真っ向から正論を叩きつけ反論を全て封じていた。

「だが、事を性急に運びすぎではないのか？　これでは王子があまりにも…」

「王子とは誰の事を指している？　その権利はすでに剥奪されている。そこにいるのは唯の少年だ。力はあるのかもしれないが、このような事態を引き起こした責任は取る必要がある」

「しかし…」

どうにかして譲歩を引き出そうと考えるがどうしても引き出せそうに無い。そして、力なくうな垂れる重鎮達。

「いいよいいよ皆。ちょっと王様の所に行って来るよ」

「王子！」

「アーン王子っ！」

どこか楽しげな雰囲気でアーンは立ち上がり、ファウンデルス卿に歩み寄る。だが、近づく前に兵がアーンの前に立ちふさがり、腕に封印を施していく。

「ふぅん。魔法が使えなくなる封印ね。なかなかいい出来だね、これっ」

「大人しくしなさい」

拘束されているというのに、余裕の態度を崩さないアーン。あちこちから聞こえるすすり泣きのような声を聞き、悲劇のヒーロー的な自分の立場に酔っているようにも見えた。

「あとこの封書を厳重に保管しておくように。王印がしてあるので、

その時が来るまで開ける事はまかりならん。良いな」
「…かしこまりました。厳重に保管しておきましょう」

ファウンデルス卿からしぶしぶといった形で、封書の入った箱を受け取る重鎮。これで最後かと思うと何か一言伝えようと思うのだが、結局何も言えずに佇んでいた。そして、アーンはファウンデルス卿に連れられ、部屋を出て行った。

「で、どこに連れて行くの？」
「首都グレイトエースだ。だが、おまえはそこに着くまでに逃げるのであろう？」

気軽な様子のアーンに、どこまでも平静を保つラディアス。衝撃的な発言を投げかける時も特に変わった様子は無い。

「別にどっちでも良いんだけどね。うーん、どうしようかなぁ」

気軽に逃げる事ができる事を打ち明けるアーン。ラディアスとしてはアーンの性格上こう言えば逆に興味を持ってグレイトエースまで着いてくると見ている。人間を侮っている事が良くわかるので、どんな策を練ろうが平気だと考えている為だ。自分の好奇心や人の慌てふためく様を見る事がアーンの趣向だというのを、ラディアスは見抜いていた。ただ、グレイトエースに来ないなら来ないで打つ手はいくらでもあった。

「会いたくないかね、ユージ王に」
「そうだねぇ。どうやってあそこから抜け出したのか興味はあるね。あそこは僕でも脱出できないぐらい変態な仕掛け一杯してたんだけどなぁ」

頭を捻るアーン。そんなアーンの腕輪をラディアスは外すように指示した。

「いいの？　僕逃げちゃうかもしれないよ？」
「それならそれでお尋ね者として触れ回るだけだ。好きにしろ」
「お尋ね者かぁ。なかなか良い響きだねそれ。世の中を正すために市井に隠れるアウトロー！　果たして民を救う事ができるのか？　なんてね」

どこまでも軽い調子のアーン。それを見ても特に咎める事無く歩を進めるラディアス。アーン拘束の報はしばらくすれば、国中へと流れる筈だ。その影響を思い浮かべ今後の動きを脳内でシミュレーションするラディアス。ただの少年にしか見えないアーン。だが、王の印を持ち自身も不可思議な力を使い、民を惑わす力を持つ。そんな独裁者は不要だ。

「一人の英雄は要らないんだよ。一人のね」
「ん？　何か言った？」
「いや。独り言だ」
「ふーん」
「お待ちください、ファウンデルス卿」

連行されるアーン達に、澄んだ少女の声が投げかけられる。

「ん？　お嬢さんはどなたです？」
「初めまして、私はハイローディスから参りましたリリノア＝ロデリック＝ハイローディスと申します。アーンの婚約者でございます」
「ああ。そう言えばそうでしたね。で、その婚約者がどのような用件で？　今回の勅許でその婚約の話もご破算となると考えて頂いて宜しいかと思いますが」

隣国のハイローディスからの婚約者となれば、無碍にもできない所があるので現状は顔を出して欲しくない相手であった。

「勅許と申されましても、私も国から言われてここに参っておりま す故、そう易々と国へ帰る訳には行かないのですよファウンデルス卿」

「では、ロバスにてしばらく滞在なさるが宜しいでしょう。その為の費用は当然こちらで持ちますので、ご随意にお過ごし下さい」

「いえ、私もグレイトエースへ連れて行って頂きます」

厄介払いしたいラディアスであったが、リリノアはどうしても着いて行く必要があった。でなければ、あのファウンデルス卿である。清濁併せ呑むファウンデルス卿の手腕は、隣国のハイローディスの調べで判明していた。なのでどこでアーンを暗殺してなかった事にするか知れたものではないからである。

「ふむ。無骨な集団ですので姫にご無礼を働くやもしれませんし、道中の安全も保障はできかねます。それに移動の手段をお持ちで無ければ我々に着いて来れませんが、大丈夫ですかね？」

「それならこちらで用意しますのでご安心を。では、北門でお待ちしておりますわ」

これで交渉成立と言わんばかりに、そういい捨てさっさと立ち去るリリノア。言質を与えた訳では無いのだが、一本取られた形のラディアスであった。

「うーん愛されてるよね僕。うらやましい？」

「そうだな。あれだけまっすぐな目をしている人間は見てて羨ましい物だな」

アーンの言葉などどこ吹く風でそう呟く。リリノア姫が着いてくるというのなら、もう一人サラという娘も当然同行するだろう。まず確実にフレームを持ってくる筈である。戦力としても期待できるだろう。

「さぁ行きますよ」
「はいはい」

ラディアスの呼び掛けに無礼な返事を寄越すアーンを咎める者は誰も居なかった。

計画通り

「ファウンデルス卿をお守りしろっ！」

ロバスからグレイトエースへアーンを護送する途中の事。魔石獣に追われる二人組みが突然、護送隊の前に飛び出してきたかと思うと魔石獣もろとも護送車へ突撃してきたのだ。そして、二人組みを取り押さえるよりも早く森から矢の雨が降り注ぎ、護送隊は混乱した。

護送車には乗らずパニモアに揺られていたファウンデルス卿は、とっさにパニモアを操り事無きを得たが、襲撃した者達はいまだ健在な為安心はできなかった。

この襲撃に驚いたのは、リリノアとサラである。

念の為にと二人ともフレームに乗り随行していたのだが、突然の事にどちらに味方をすれば良いか分からずたたらを踏むばかりであった。当然、矢の攻撃は受けているのだがそんなものはリリノアとサラの二人にとっては、小雨程度にも感じられない物である。

「ファウンデルス卿、お迎えが来ちゃったみたいだから僕は行くよ。悪いけど、これからはもっと自由にさせて貰うから、楽しみにしててね！　ばっははーい！　あっはっは」

護送車の屋根に飛び移り、ポーズを取ってアピールするアーン。その真横を四足の魔石獣が付き従っているのだが、余裕綽々の態度である。

「深追いはするな、捨て置け！」

「しかしっ！」
「これも予定の内だ、リュート君もう良いぞ」
「了解。だけど、僕の出番が無くて良かった良かった。いつ、あいつが手を出すかずっとひやひやしてましたよ」

野暮ったい護衛隊の兜を外しながら、応じるリュート。どうやらリリノアとサラの二人組みはアーンの姿を見るや、襲撃者を追いかける振りをして付いていったようだ。その先を見つめながらリュートはファウンデルス卿に語りかける。

「あの二人確保したかったんですけど、さすがにフレームに乗られると手も足も出ませんね」
「彼は上から見てるんだろう？　何か手立てを考える筈だ。だが、最悪の場合も想定しておいた方が良いな。先ほどの奴等は随分と手馴れていた」
「ですね。ま、とりあえずアーンの動きはこれで制限されるでしょう。じゃあ負傷者を助けに行ってきます」
「頼む」

咄嗟の事で防ぎきれなかった矢の雨を受けた兵達が、少なからずいる為応急処置を施しに走るリュート。そして、今後のアーンの動きを想定するラディアス。

「奴の味方があれだけでは無い筈だ。盗賊どもに魔石獣。わざわざロバスから移動させたフレームも気になる。ちゃんと抑えてくれていれば助かるのだが…」

アーンを牽制する部隊とは別行動を取っているエドの部隊。そちらには最近できた基地への潜入とフレームの確保を命令してある。今までの固有戦力外のフレームとはいえバルトス国の全フレームを集

めた数よりも多いぐらいの機数である。ライダーの問題があるにせよ、そんな物が国内を自由に動かれては国が傾く原因となりかねない。

「フレームも結局は手段でしか無いので、抑え込む手は有りますがね」

以前と違い今は自由に思考を巡らせる事ができる。大貴族という家柄を守る為に自身を縛り付けていた血の呪縛。更には王には逆らえず、平民を従える事のできる呪い。今はその枷が外され、王の命に従わずとも良いが無条件に平民を虐げる事もできなくなっている。だが、本来それが真っ当な状態である。枷から解き放たれた今は、身に染みて実感できる。

「さて、忙しくなりますね」

アーンに逃げられ護送隊はようやく先ほどの混乱から立ち直ろうとしている所で、散々な状況である。だが、見上げた澄んだ空のおかげであろうか妙にラディアスの心は晴れ渡っていた。勇司に連れられて行ったイーサルーク。古代竜の縄張りにあれ程の規模の都市、しかも空中都市が存在した事にも驚いたが、ラディアスにとってはその政治形態の方に驚きを隠せずに居た。時間が無い今は聞きたい事も聞けずにいるが、事が終わればしっかりと学ぶつもりである。楽しみは後に取っておく性質で良かったと心の底から思うラディアス。でなければ、脇目も振らずにイーサルークで知識を貪りつくそうとしていただろう。

王の印は今まで自身の為に人間を食い物にしてきたらしいが、カラクリが分かった以上思い通りにさせるつもりは無い。古来からの人間の武器である知恵を使って、一泡吹かせてやる心づもりである。

今回の件でもアーンの性質の一端を掴む事ができた。今後の策に活かす為には大事な情報である。

「ファウンデルス卿、あと子一時間程で移動できますがこのままグレイトエースへ向かいますか？」

「いや、私達は一旦ロバスへ戻る。そこから、飛行フレームを使って戻る方が早いだろう。戻る頃には部隊を運ぶための準備も整っている筈だ」

「最初、伺ったときは疑問に思っていましたが、こういう事だったのですね」

「内密にしておいてすまなかったな。兵が事情を知っていては、あいつに気取られる可能性があったのでな」

今回の目的はアーンの持つ権利を剥奪する事のみ。周囲に告知する事で今まで自由にしていたアーンの動きを封じ、こちらに主導権を握るためである。

実の所ラディアスとしては、アーンを捕らえたとしてもそれを抑えておく手段が無い。リュートと光司が倒せる可能性を持ってはいる。だが光司が印の力を使いこなせていない上、王の印の呪いがはびこる今は、バルトス国の民の力は全てアーンへと注がれる事となる。さらにアーンの計画の全容がつかめない今はまだその機会ではないと踏み、敢えてアーンを泳がせる作戦を選んだのだ。結果、民に塁が及ぶ可能性が高くなるのは承知だが、足取りを掴む為の策も考えており、いざという時には対応できるように取り計らうつもりである。

まずは呪いを解く事。それがアーンの力を削ぎ、現状では一か八かの賭けでしかない対決を五分以上に持って行ける事になるはずだ。

分の悪い賭けは嫌いじゃない、という人間はいる。勇司はそういうタイプであるが、ラディアスとしては勝率が高ければ高いほど好む。だが、時間は限られている。与えられた時間の中で最大限の努力をする。それがラディアスのモットーだった。

ラディアスが幽閉されている間、休止していた諜報網。洗脳されていた主要諜報員を取り急ぎ復活させ、更なる情報を求めている。アーンを取り巻く環境、行動、思想、趣向。相手は精霊だという話だが、その手足となって動くのは人間である。以前から情報の有用性は把握していたのだが、大貴族というプライドを主張する血の呪縛のせいで使いこなせていなかった。だがこれからは、そういったつまらない障害は無い。思う存分に自由に動く事ができる。さらに勇司の息子である光司。彼が作る道具の数々は、情報を集める為に非常に役に立つ。

「自由とは良いものだな。せっかく手に入れたものだ、二度と手放すつもりはないぞ、アーン」

相手は永き時を生きる人を超越した存在であるアーン。だが力を合わせれば決して負ける事は無いと信じて決意を新たにした。

空の脅威

”じゃあ行くとするか”

光司が突き止めたアーンのフレーム用の基地。そこには現在二百機の飛行フレームが納品されている筈であった。

飛行フレーム。

光司が開発し、バルトス国しか保有していない航空戦力。空を飛ぶというので有れば、飛竜や巨鳥などを利用するか、風の魔法で飛ぶという手段があるが、フレームに関して言えば今まで存在していなかった技術であった。

厳密に言えばルーツの中には空を飛ぶものも存在するのではあるが、分解して構造を解析するという訳にも行かず技術を取り込むという事ができず、開発するのでは無く発掘する方向へ動くようになっていた。

それ故ガイアフレームという陸戦兵器を戦場へ運ぶのには時間が掛かっていた。パニモアとほぼ同じ早さで移動できるとは言え、結局は戦争の速度というものは予測できる早さであり、従来と変わる物ではなかった。

そこへバルトス国の飛行フレームである。その今まで誰も成し得なかった技術革新を前に各国は、その技術を入手しようと諜報員を派遣したりしたものの、飛行フレームの重要性をいち早く認識したバルトス国の軍は、蟻をも漏らさぬ程の警戒ぶりを示し情報の漏洩を限りなく防いでいた。

”こんなだだっぴろい所に基地を作るなんて、馬鹿じゃねーかと思ったが…身を隠す場所が無いっていうのは、どうしてどうしてやりにくい事この上ないな”

見渡す限りの穀倉地帯の平原に作られた基地。身を隠す森からはかなり距離があり、姿を晒してすぐに襲撃したとしても、この距離であれば基地はすぐに対応できるであろう。

”それでも、ここを抑えなきゃやってられねーって話だもんな。行くしか無いな”

光司から専用のフレームを与えられ、部隊を率いてここまでやってきたエド。真似の印の力をすべて解放したエドだったが、イーサルークで光司のフレーム操作技術を取り込み、体に覚え込ませた後にまた解放してある。記憶をまた失ってしまっては堪らないのでそういう使い方をしていた。

率いている手勢はフレーム二十機に五百名の兵士達。二百機からのフレームが駐機している基地へ攻め込むには少なすぎる人数ではあるが、ライダーを用意していない事は確認済みであるのでこの人数で作戦を決行する事となった。

作戦を開始するためにそろそろと移動を始めた時、突如基地の方から轟音が響いてきた。

「な、なんだ？　基地の方か？」

基地の方から砂埃が舞い上がり、地響きが続いている。先ほどまでは全く動きの無かった基地だが、いざエド達が作戦行動を開始しよ

うとした途端のこの現象。

「こっちの作戦がばれたってのか？」

「にしては、タイミングがおかしいです。ばれているならギリギリまで引きつけるのが道理かと」

「確かにそうだな。という事はこれはチャンスかも。よし身を隠す必要はない、堂々と急いで突撃するぞ！」

砂埃がいまだ上がる基地。なにか異変が起きているというなら混乱に乗じてうまく制圧できるかもしれない。そう考えたエドは急いで基地へと向かう。

「先に行くぞ！」

甲高い音を響かせ瞬時に変形をしたエドの機体は、風を切って単機先行する。エドだけであれば十秒もかからずに基地へと接近できるからだ。

「おわっと！？」

だが、基地へ接近を果たす前に先制攻撃を浴びる。砂埃が大量に舞い上がりよく見えないが、何者かがこちらを狙って射撃をしてきたようであった。

超低空飛行から、機体を右にひねってから回転しながら急上昇をして上を取るエド。さらに追撃をされるもそのスピードを捉える事はできなかったようだ。

「なんだ、ありゃ？」

基地上空を旋回し、確認をしたエドが見たものは巨大な三角形の板のような物であった。基地の地下に隠されていた物のようであったが、その大きさが尋常でなかった。基地の幅とそうたいして差がない大きさは、まさに要塞。今もなおエドの機体を牽制するように続く射撃は、その要塞から放たれている物である。

「まずいな、こんなやべーもんがあるとか聞いてないぞ光司」

地上で展開している部隊を援護する為に対空射撃をかいくぐりながら、攻撃を加える。だがエドの攻撃は要塞に届く前に霧散してしまっているようで、まったくダメージを与えられていない。だが攻撃の手を緩めれば地上部隊に攻撃が集中してしまうであろう事は、理解できる為無駄とは知りつつも要塞にまとわりつくようにして、旋回を続け攻撃を続行する。しばらくそうやって時間を稼ぐことができれば、地上部隊も気づいて撤退してくれるであろう。

だが、そこでエドの予想を上回る事態が発生した。

基地に突如現れた要塞。それが徐々にではあるが移動し始めているのである。更に轟音を響かせ始め浮かび上がろうとしていた。

「おいおい、あんなデカブツが飛ぶってぇのか？　一体なんの冗談だこれは」

周囲に砂埃を舞い上げながら、空へと浮かび始める要塞。最初はゆっくりとした速度であったが、時間が経つにつれてその速度は上がって行く。エドもこれが空に上がってしまうのは非常に危険だと感じ、攻撃を試みるも要塞周囲に発生する薄い膜のような物がエドの攻撃を阻む。

非常に低速ではあるものの確実に空へと舞い上がる要塞。その非常に巨大な物体がエドの視界を占め圧倒する。続いて嵐のような対空射撃がエドを迎え撃つ。だが、嵐の隙間をかいくぐって要塞から距離を離さずしっかりと食らい付くエド。

そして飛びながら百五十ミリカノン砲を準備する。飛行形態時は正面方向にしか射撃する事しかできないが、このデカブツ相手でも威力は申し分無いはずである。

「いっきなりこいつを使う事になるとはね、食らいやがれっ！」

バッガァアアアアアアアアアアン！

一瞬だけ機体をひねらずまっすぐ飛んでいる瞬間を狙って、カノン砲を撃ちこむ。耳をつんざく爆音と共に強力な砲弾が要塞に向かって飛んでいく。

「なっ?！　カノン砲を防ぐってか?！」

要塞に着弾する前、何層もの薄い膜が砲弾の前に現れていた。その薄い膜は要塞本体に砲弾が到達するまで次々現れて威力を殺いでいく。だがさすがはカノン砲という所か、威力を全て消しきる事はできなかったようで要塞表面に多少の傷をつける事はできたようだ。

「なら、手数を増やしてやるっ！」

回避しながら、ウエポンラックからミサイルポッドを選択。翼面下部と機首の側面に出現したミサイルポッド。ガシャッと音を立ててシャッターが開き、回避しながら飛ぶエドの機体から無数のミサイルが要塞へ向けて撃ち込まれる。

バッガァアアアアアアアアアアン！

さらにカノン砲を撃ちこみ、回避しながら更にミサイルの雨を降らせる。対空射撃が一斉にミサイルを迎撃にかかるが、その間は薄い膜を展開できないようで砲弾が着弾するかに見えた。

だが、薄い膜は今回は砲弾の進路を微妙に変える事で対処し、砲弾は要塞の装甲表面を浅く傷つけるだけしかできなかった。そして、砲弾を処理した後にすぐさま再開される対空射撃でミサイルを全て叩き落していった。

「厄介な膜だな…一度受けた攻撃は解析してる感じだな。こりゃあまり手の内を見せらんないか」

そう考えたエドは要塞のデータを取るかのように周囲を飛び回る。上、下、側面の全てを見て回り攻略法を考える。なかなかに厄介な数の対空砲を配置してあり、実弾と魔法弾が織り交じって飛んでくる。魔法弾は追尾してくる物もあり、回避するにはそれなりの技量が必要であった。

詳細なデータを取る為に周囲を飛び回るエドに業を煮やしたのか、要塞から動きが見えた。

今までの滞空砲とは違う、巨大な砲塔がせり上がってきたかと思うと、一斉にエドへ砲門を向ける。

「あっちもカノン砲を用意してるってか？　うっわこりゃやべぇ！」

凄まじい轟音と共に砲弾が飛んでくる。直撃は勿論かすっただけで

も、かなりのダメージを受けるであろう弾丸がぐんぐんエドに迫ってくるのが分かる。

「くっ！　抜けれるかっ！？」

滞空砲火も止む事無く続く中、カノン砲まで回避せねばならない。しかも、こちらと違って向こうはカノン砲を連射する事ができるのだ。正直言って単機では相手にならなかった。

『エド、撤退して。そいつはいくらなんでも想定外すぎる。衛星からそいつは把握してるから今は無事に撤退する事だけ考えて』

「おいおい。こいつには二百機の飛行フレームが乗っかってんだろ？　そんな簡単に諦めて良いのかよ」

『一機でどうにかなる相手じゃないよ。それにそこで叩き落したら地上にどれだけの被害が出るか想像が付かない』

「ちっ。言われて見れば確かにそうだ。じゃあ撤退する」

一瞬だけ人型に変形し機体に急制動をかけ、さらに飛行形態に戻し急降下して要塞から離れるエド。かなり体に負担がかかる機動だが、安全に制空圏内から脱出するにはこれが一番手っ取り早かった。

こちらが諦めたのを悟ったのか、対空砲火は止み静かになる要塞。後は悠々とその姿を晒したまま北へと進路を向け、静かに飛び去って行った。

根付く恐怖は

巨大飛行要塞。

アーンが基地に隠していたものはとんでもない物であった。あれがあればどの国へでも、すぐに攻撃する事が可能な移動要塞。予定では五百機ものフレームを搭載して飛ぶ予定であったのだろうが、現在は二百機ほどのフレームしか搭載していない。

とはいえ、一度に二百機ものフレームが首都に攻め込んでくれば多大なる損害を被る事は、間違いないであろう。この事実を知った光司達はまず各国への通達を優先し、国民へ飛行要塞の目撃情報を求めていく事にした。

というのも、衛星からその姿を追っていた光司なのだがしばらくするとカメラに捉えられなくなり、追跡が不可能となってしまったのだ。気象衛星もかねていたので付近の気流に異変が無いか調べても見たのだが、どういうカラクリかまったく反応が無く、お手上げの状態であった。

「しかし、こんな短時間であんな物を作るなんてアーンめ」

「幸いにも移動速度は遅かったから、すぐに何かあるって訳じゃないと思うけどな」

イーサルークへ戻ってきたエド。結局、目的を果たせずに帰ってきたのでファウンデルス卿に早速報告を入れた。失敗した事はエドにとって悔しい出来事であるが、報告しない訳には行かないからだ。

「それにライダーが揃ってない筈だから、せいぜい動かせたとして

も一割がいい所だと思う。思うんだけど、何か忘れてる気がするんだよね」

「見つけたら即たたき落としてやる」

「そうだね、とにかく見つけない事にはどうしようもないかぁ」

雪辱に燃えるエドを見ながらも一抹の不安を感じている光司。アーンが作り上げた飛行要塞の形に見覚えがあったからだ。光司がよくやっていたゲームの中で敵の要塞として出現したもので、内部に潜入してエンジンを破壊して落とすというミッションであった。もし、そのゲームと同じような設定であるならば内部から破壊するしか、あれを落とす手段は無いであろう。

そして、あの大きさであるなら内部にはフレームが待ちかまえているのは間違いない。しかも落ちたときの被害を考えるならば、安全な場所へ誘導して落とすか、管制室を乗っ取って奪い取るか。どちらの作戦を取るにせよ難易度が飛躍的に上がるのは間違いがなかった。

「コージ、少しいいでしょうか？」

「ん、なにセリナ」

「実は作って頂いたフレームがなにやら最初の形から変わってしまったのですが、大丈夫なのでしょうか？」

フレームが大好きな光司。セリナとしてはそんな光司から自分用にと作られたフレームだったので大事に乗ってきたのだが、今日の訓練の為にいざ乗ろうとすると昨日置いた筈の場所には違う機体が置いてあった。だが、あちこちを探しても自分の機体は見つからないし、整備員達に聞いても誰も動かしていないという。なので、念のために自分の場所に置いてあったフレームのコックピットを確認した所、中には自分が置いたクッションや小物類が積んであった為、

機体を起動させた所どうやら見慣れないこの機体こそが自分の機体だという事が分かったらしい。

「あードゥエーリンのせいかなぁ。ごめん、こうなる可能性を考えてなかったよ。とりあえず、セリナが悪い訳じゃないから心配しないで」

「よ、よかったです」

意志のある鋼ドゥエーリン。今回、フレームを作るにあたり大量に使用した。設計通りにパーツを思い浮かべて、作っていったのだが、その際に搭乗者の事も思い浮かべながらしていたので、その意志が反映されるようになってしまったのだろう。乗れば乗るほど、自分流にカスタマイズされていく機体。便利だけど、その仕様を知らないとびっくりするだろうね。今、駆け込んで来たミミ達みたいに。

結局の所、ドゥエーリンで作られた機体はその全てが元の形から変化していた。武装についても変化が起きているようで、自分で作ったんだけどびっくりさせられてしまった。

「ちゅうことは馴染むまで使いこまんと、良くならんって事か」

「だが、馴染めばかなりの力を発揮できる事は間違いないだろうな。実際動きやすくなってきてる上に、反応も間違いなく上がっているからな」

自分の機体の詳細データをプリントアウトして確認しているサカキ先輩がそう断言した。実際の機体を使用したシミュレーションがあるんだけど、攻撃の命中率や回避率に様々な反応速度、機体の全開稼働時間や掛かった時間などの情報を細かくプリントアウトできるようになっているのだ。さらに、後から動画再生で自分の動きを客観的に見ることができるので、自分の短所や長所を把握するのに役

立っている。

「あー編隊を組んで出撃するのとかちょっと夢だったのになぁ」

なんというか、中には変形機構が無くなってしまっているものまであるのだ。ていうか、セリナのなんだけど。

「大丈夫だよコージ！　ミミのはちゃんと飛んでいけるからねっ」

「私だって飛ぶのはいけますから安心して下さいコージ」

ミミはともかくセリナはきっとツインジェットの魔法で飛ぶと言ってるんだろうけど、機体にはちゃんと重力制御とスラスターが付いてるから機体だけの力だけで飛べるからね。無駄に魔力を使って飛ぼうとしないで欲しい。

「でも、それならこれからはなるべくフレームに乗ってないとダメだよね？」

「ダメって事は無いけど、乗ってる方が自分にあった物になりやすいだろうね。どこまで進化するかは僕にもちょっと分からないけどね」

悪いことにはならないだろうけど、あまりそれにかまけてばっかりいられない。フレームに乗って戦う事も今後増えるだろうけど、それで決着がつくわけではないからだ。

「とりあえず今後は、自分の場所を間違わないようにだけ気をつけてね。整備する人達にもぼくらのフレームはこういうもんだっていうのを伝えておくよ」

伝えるのもバカらしいデタラメな仕様なんだけど事実なんだから仕方ない。でも、ロボットの武器とかってこの世界の人より僕の世界

のほうが色々なアイデアがある筈。とんでも理論でできてる物もあるけども、そこはこっちもとんでも世界なんで応用できるかもしれない。なんにせよ、色々と知っている方が選択肢が増えていいかもしれない。前に母さんから持ってきて貰ってるから、文字は読めなくても絵を見るだけでも随分違うだろう。

「で、コージよ。アーンって奴はいま雲隠れしとるんやな？　ここがばれてて狙ってくるっちゅー事はないんか？　わしが向こうさんなら、まず間違いなく狙うぞ」

「確かに、エルディバに宣戦布告はしたけどもアーンからすればイーサルークほど目障りな所は無いか。ハルトの言うとおり警戒する必要があるね」

「だが、エルディバに宣戦布告をした意味もあるはずだ。何が狙いで分かれば先手が打てるのだがな」

「こちらの戦力を二分する訳には行かないですからね。動くにも何か確証を得てからでないと危険ですよね」

「いや、アースだけなら単機でもどうとでもなるんだろう？　ここは敢えて分散すべきだ」

「そうなるとイーサルークが手薄になって狙われたりしたら、かなりの被害が…」

「古代竜の加護を受けている巫女も居る上に、俺達が居るだけでは不安か？」

「そういう訳では無いんですが、なんというかあいつは本当にやばいんです」

アーンと直接対決した事で、あいつの怖さが身に沁みて理解できている僕としては、皆を危険に晒したくない。

「逃げていてはいつまで経っても前に進めんぞ、アース」

「え？」

サカキ先輩の強い口調に驚く。それに逃げてるってどういう事だろう…

「おまえは俺たちを守るという名目で自分を誤魔化しているだけだ。よく考えろ、おまえはそんな弱い奴ではない筈だ。おまえがいつまでもそんな腑抜けたままだと足手まといになる」

「ちょぉサカキ先輩、それは言い過ぎちゃいますか？」

「馬鹿を言え、言うのが遅すぎたぐらいだ。いい加減ここらで目を覚まして貰わないとこいつにとっても俺達にとっても良くない」

「僕は足手まといですか？」

「そのままであればな。ここ最近のおまえは慎重にすぎる。アーンが脅威なのは理解できるが、俺からすればおまえも似たような物だ」

「そうは思えません」

「だからこそ、おまえはもう一度一人でアーンと立ち向かうべきだ。そして、仲間をもっと信用しろ。おまえが居なくとも持ち堪える事ぐらいできる」

その言葉で気付く。なんだかんだ言っても僕は心のどこかで、皆の力を信じきれていない。僕が居ない時にアーンが来れば、一掃されてしまうのではないか？　そして、残った僕が一人でアーンに立ち向かえばその時こそ僕の最後じゃないのか？　そういう思いがあるからこそ僕は皆と一緒に居る事に拘っていたのだろう。

本当言うとファウンデルス卿の作戦も僕は反対した。アーンと直接顔をあわせるなんてとんでもない事だと思ったからだ。結果的にファウンデルス卿は無事だったのだが、それも運が良かっただけだとしか思えなかった。

僕は、逃げていた。アーンに叩きのめされ死を感じたあの瞬間が僕

の心に、あいつへの恐怖をしっかりと植えつけていったのだ。だからこそアーンが怖くてあいつと対決する事を心のどこかで恐れ続けていたのだ。

サカキ先輩の強いまなざしを受けて僕はうなづき返し、少し勇気を出そうと決めた。

光司の決意の夜　　モイデイイ？

リュートとラディアス。今回この二人はアーンを拘束する為に共に行動している。勇司を倒すために手を組んだ事もあるこの二人は、短くない期間を共に過ごしただけあって意外と馬が合う。その事実を知りながらもこの二人を組ませる勇司の信頼度が伺える。

「エドワード君は失敗したようですね。想定外な事が起こったようなので仕方ないようですが」

「だけど、フレーム二百機が自由に動かれるのは痛いですねぇ。でもファウンデルス卿は何か手が有るんですよね？」

「フレームの無力化はできませんが、動きを制限する手段ぐらいですか。コージくんやユージンなどには小言を言われそうな手ですがね」

「ま、手段を選べないなら仕方ないじゃないですか。他に良い手があるならともかく」

リュートは勇者と言えど別に清廉潔白でもなんでもない。むしろ、あくどい手だろうと目的を果たす為ならどんな事でもしてきた。そういった意味ではファウンデルス卿よりよっぽど手段を選ばない人間だった。

「結局、最小限の死者で済むように選ぶしか我々にはできない。それとて一歩間違えば計算が狂ってしまう。言い訳にしか聞こえないとは思いますがね」

そういって肩をすくめるラディアス。そして表情を引き締めてリュートを見る。

「早くグレイトエースへ戻りましょう。ユージンには奥方が付いているとはいえ手薄なのは明白です」
「連れて来た部隊を置いていくなら、すぐにでも戻れますけどそうします？」
「いえ、部隊を連れて帰る必要がありますからね。飛行フレームもありますから時間も大丈夫でしょう。それにロバスで打っておく手もありますから。」
「了解。でも空を飛ぶというのは、本当に便利ですよね。ロバスとグレイトエースを一日で行き来できるんですからね」

であるからこそ、敵にその技術が渡ってしまうと大変な事になる。

「とにかく、先手をようやく打てたかと思ったらまた後手に回りそうですからね。気をつけていきましょう。そうですね。やっぱりリュート君はロバスで結界を張っておいて下さい。大変だとは思いますが他の都市にも行って貰う事になりそうです」
「え、僕一人で全部回れって言います？　言っちゃいます？」
「今の所は、です。あれに対抗できる結界を即座に張れるのは君しか居ませんからね。急いで解呪の為の装置をコージ君が作ってるようですが、君は君で動いた方が効率が良いでしょう？　リュートには専用のフレームがある事ですし、移動もそれほど時間がかかりません。それにリュートには他の都市の様子も見てきておいて欲しいのですよ」
「はぁ、了解です。でも、ファウンデルス卿は大丈夫なんです？」

リュートが随行せずにグレイトエースに戻るというならば、途中で魔石獣やアーンの手の者が襲ってきた時に対応できるか不安が残る。すでにラディアスの呪いは解いてあり、貴族としての力は使えなくなっているからだ。

「大丈夫です。確実に相手は私を侮っているでしょうから、いつでも殺せる私を狙う可能性はほとんど無いと思いますよ」

そういって思わせぶりにリュートに目くばせするラディアス。

「あー…そういう人でしたね、あなたは。じゃあロバスで結界を張り終わったら、南から東回りで都市を回って行く事にしますよ」

「そうですね、グレイトエースは最後にして貰う方が良いでしょう」

後は餌に食いついてくれるかですね、という言葉は飲み込むラディアス。先の対面でアーンはすでにラディアスが貴族の力を失って居る事に気付いている筈である。そして、コージにも確認をしたがラディアスの力は貴族の力しか見ていない。なら、その力が無い今は組し易い相手と侮ってくれるだろう。リュートと別れて行動し、魔石獣にタイミング良く襲われるならばラディアスには見えてくる物がある。

「じゃあ、僕達はこれで」

「ええ、早く帰って来て下さいよ」

ロバスへと到着しお互いの仕事の為に別れる二人。多少の危険は覚悟の上でそれぞれがアーンに対抗する為に動かなければならない。だが、そんな事はおくびにも出さずに自信有りげな表情を崩さないラディアスとリュートであった。

僕は明日一人で出る。白夜も一緒だから厳密には一人じゃないんだ

けども。

アーンが飛行要塞でどこを攻めるか分からない為、可能性が高い場所へ向かって被害を抑える必要があるからだ。最初にアーンが宣戦布告したエルディバ。どういう意図があってここを狙うと言ったのかは分からないが、ここを狙う可能性は極めて高いだろう。現在、各国に飛行要塞とアーンの件について通達はしているものの、返答は極めて厳しいものであったらしい。父ちゃんによると、飛行要塞はただの別働隊で動かして通達によって、バルトス国とは無関係を装い各国を蹂躙させた後に、何食わぬ顔して侵略してくるつもりだろうという事を遠まわしに言われたようだ。

これによりバルトス国の立場は非常に悪い物となってしまった。各国が団結してバルトス国を攻めてきて飛行要塞を止めるように要求してきたとしても、僕達には飛行要塞を止める手立てが無い。そうなると、見せしめと言う事でバルトス国は蹂躙されるであろう事は火を見るより明らかであった。それでも飛行要塞は止まらないだろう。

そんな事態を防ぐ為には飛行要塞による被害を食い止める必要がある。

現在、ステルスによって居場所が掴めない飛行要塞なだけに後手に回ってしまっては、姿を現して攻撃し始めてから動いていては、間に合わないのである。僕一機だけでも、先に現場に居る事ができれば事情が変わる…はず。サカキ先輩は自信たっぷりに太鼓判を押してくれるんだけど、そこまで自信たっぷりにされると逆に心配になってくる。自信がまったく無い訳ではないんだけどね。

エルディバの次に狙われる可能性が高いのはイーサルークである。

グレイトエースは首都機能が付いているので国を乗っ取った後に使うのは便利なのだけど、軍が守るここを無理に攻める必要は無いだろう。父ちゃんが居るから狙われそうな気もするんだけど、どちらかと言えばいつでも落とせる所なだけに、空を飛ばなければ落とせないイーサルークを先に狙うだろう。なんだかんだで、アーンにとってはイーサルークは目の上のたんこぶ的な存在だからだ。

大規模な戦闘が始まってしまえば、転移魔法も妨害されたりする可能性が高い。なので、飛んで帰る必要があるんだけどエルディバからイーサルークは非常に距離がある。それに距離があるという事はそれだけ罠を仕掛けやすいという事でもある。

だけど、そんな事は承知の上で僕は行く。それが僕にしかできない事であるのと、アーンに対して立ち向かう第一歩だからだ。

「コージに何かあったら直ぐに駆けつけます。だからコージも私達のピンチに直ぐ来て下さいね、待ってますから」

「うーん、助けて貰うのが良いかなぁ。逆に助けるっていうのもアリかなぁ？　ね、コージ、どっちが良い？」

「ピンチとか無い方が良いんだけど、駄目？」

例によってイーサルークであっても夜は一緒に寝ている僕達。いやっ寝るって言ってもまだ清い関係ですよっ？　何も…してない事はないですけど、なんというかこれだけ慌しいと中々そういう雰囲気になれず疲れて寝る事の方が多いのです、うん。

「でも、しばらく離れ離れですね。寂しいです。だからその…」

「という事で、コージッ！　しよ？」

「ぐぶふっ？！」

ムードもへったくれも無い、見も蓋も無いストレートなお願いすぎるよミミ!?　セリナは言い切れずにもじもじしてるんだけど、ミミは若干顔が赤いだけで明るい表情だ。

「告白してくれたのに、いつまで経っても貰ってくれないですし、あれから結構アピールしてるのに気付いてくれませんし、結局今日まで何も無いってひどいです」

「だよねー。寝たふりしてるかと思って色々したけど、本当に寝ちゃってるし。こんな可愛い子が隣でオッケーサインだして寝てるのに、熟睡するってヒドイよねー」

「色々したっていうのが気になるけど、そのごめんなさい」

僕だって健康な男の子です。そういった事に興味が無い訳ではありません。ありませんがいきなりそうなるのは心の準備ができていないというか、そもそもが二人を相手にするとかそんなハードルが高い事を望まれても、本能の赴くままにいっちゃっていいのか、いやそんな事したら変態だと思われてしまう。

などと、ぐるぐる頭の中で考えてる隙に部屋が薄暗くなる。急に暗くなったので目が慣れないけど二人の息遣いが傍にあるのは分かる。

「コ、コージ」

「コージィ…」

むにゅっと密着してくる二人。徐々に慣れてきた目に映るのは二人の白い肌。いつの間にか全て脱ぎ捨てている二人は、生まれたままの姿で密着してきている。左側にはミミ。出会った頃からは考えられない程成長した身体は非常に女性らしいラインを描いておりそのきめ細かい肌もあいまって、はかない風情が劣情を誘う。そして右側はセリナ。もともと大きかった胸はさらに大きくなったようで僕

の腕を柔らかく包み込みかなり恥ずかしそうにして、真っ赤になっている様が慣れてきた目に映る。全身がほのかに赤く火照っている様子はすぐにでも嘗め回したくなる程だ。うん、本音出た。

「初めてなので、その優しくお願いします」
「ミミも初めてだけど、少しぐらい痛いのは大丈夫だからね」

二人とも上目遣いで、そうお願いしてきた。ここでヘタれるのは男じゃない！　うん、僕も本音をぶちまけよう！

「セリナ！　ミミッ！」
「あっ！」
「えへっ」

結局、仕事が終わって夜遅くに帰ってきたアナも含めて可愛がり、三人を貪り尽くすのに夢中になりすぎて朝までずっとしてしまいました。

シャイニングブレス、出ますっ！（前書き）

健康に生きる尾床　様。ありがとうございますっ頂きました。

シャイニングブレス、出ますっ！

「じゃあ行って来いアース」
「行って来ます！」

サカキ先輩に見送られ僕は元気よく返事を返す。

「浮気すんなよ！」
「浮気しちゃやだよ？」
「浮気しないで下さいね…」
「次は私が予約ねー！」
「私も」
「ふふっ」
「おーい君ら、少しはコージの心配したらどうや？」

新しい白夜の身体、もとい機体「シャイニングブレス」今僕はその機上である。これから出発って所で挨拶してたんだけど、この状態。冷や汗がたらりと流れちゃう。セリナ達の姿を見れば何があったか一目瞭然だから、色々言われるのは仕方ないと思っていたけど、これはちょっとなんというか…僕ってそんなに浮気してた？

「あの顔は分かってませんね。これでは帰って来る時に女の子が増えてないかとても心配です」
「でも昨日あんなに喜んでくれたから、させたげないって脅したら良くない？」
「え、ミミは我慢できるのかっ？！」
「…無理。早く帰ってきて欲しいなぁ」
「私も無理です。コージが戻ってきた時に女の子が増えてたらどうなるか自分でも分かりません」

セリナ、ミミ、アナのあけすけな会話に、何か言いたそうにしているハルト達。師匠はなんかちょっと涙目なんだけど、どうしたんだろう？　とにかく、僕としてもセリナ達の意見には大賛成である。

「じゃあエルディバに行って来る。何かあったらすぐ戻るから、連絡してね！」

エンジンを回しながら大きな声でそう伝える。そして、わざわざ作ったカタパルトへとシャイニングブレスを進める。

「コージ＝H＝アース、シャイニングブレス、出ますっ！」

カタパルトが機体を加速させる為に、意識が飛びそうなぐらいの勢いで機体を打ち出す。そしてこの台詞って今まで言って見たかったんだよね、くぅ！　そして、射出されると同時にくるっと横回転してからすぐに変形し、さらに加速。一気にイーサルークから距離を取った。

「ノリノリじゃな主よ。それに昨晩はお楽しみでしたね？　って奴だったんじゃな」

「ぶほっ？！　白夜で出て来て言う事はそれっ！？」

「ふんっ」

以前からしたかった発進シーンを再現できた事で悦に入っていたら、白夜がぴょこっと顔を出してそんな事を言ってきた。白夜は以前と違って機体丸ごとを人化するのではなくコア部分を中心として人化する事によって、魔力の消費を抑えて行動する事ができるようになっていたのだ。勿論今まで通り機体丸ごとの人化もできるんだけど、この状態でそんな事されたら空へ放り出されちゃう。

「ロコはともかくワシは混ぜてくれても良かったじゃないか。まったく主はひどい主じゃ」
「そうは言っても始めちゃったら呼びに行く余裕なんて無かったんだ、ごめんね？」
「んぅ…ひどいのじゃ」

落ち着け僕！　一度してしまえば、がっつかなくなるからそういう男はモテるとか聞いた覚えがあるんだけどむしろ今の僕は逆だ。

がっつきたくて仕方が無い！

昨日というか朝までしてたんだけど、まったくもって足りなかった。回数を重ねる毎に艶やかな声を上げるようになって来るから、もっと良くなって欲しくて僕も頑張った。途中から来たアナはハレンチじゃー！　って叫んでたんだけど、慣れて来るとした回数を競うかのようにおかわりを要求してくる程順応していた。しかも、その時ばかりは「俺」といわず「アナ」と自分を呼んでおねだりして来るからギャップ萌えした。セリナは声高に要求したりせず、じっと行為を反すうしながら潤んだ瞳で訴えて来るのが控え目なセリナらしかった。意外だったのはミミ。なんというかアナと一番取り合いをしそうな感じだったんだけど、順番が来るのをにやける頬を押さえながら真っ赤な顔をしてじっと待っていたんだよね。あれは可愛かった。

「って、何を考えておるのじゃ主？」
「はっ！？」

そうとうにやけた顔をシテイタノデハナイダロウカ。白夜がすねた様子で僕にしなだれかかってきている。ここコックピットだし、狭

いからなんというか妖しい雰囲気になってきてしまう。密閉空間で美少女と二人きりで迫られるとか、やばいよね？

「今はワシを見て欲しいのじゃ」

「い、今は駄目だからね白夜。こんな所でするっていうのはちょっとあれだし」

元の世界じゃ車でいたす人もいるらしいけど、こっちの世界でもフレームの中でいたす人とか居たりするんだろうか？　トレースモードにすれば結構動けるもんね。いやいや、いい加減、この話題から気持ちを切り替えよう、うん。

「真面目な顔をして、無かった事になんてさせんもん。くっついてやるのじゃ」

今、白夜がもんって言った！？　そして、シートベルトでがっちり固定されている僕のひざに上り正面からむにゅっと抱きついて来る。一体これはなんの拷問だ！　僕が何をしたっていうんだ！

「くっくっくっ、もだえ苦しむが良いわ」

「せめて、せめてもう少し我慢しろ僕！　ここはいくらなんでもあれすぎる！」

「むぅ、強情な奴め」

白夜とするのは浮気じゃなくて本気だから良いんだっ！　とか叫びたい所だけど、今ここでそういう事しちゃうのは、大事な所をもがれてしまいそうな気がするから駄目だ。

「ほら、エルディバには一応使者として行く訳だから、よれよれの服で行くわけにいかないでしょ、ね？」

「そんなのは魔法でなんとかすれば良いのじゃ。主は意地悪じゃ」

そう言いながらより一層密着してくる白夜。エルディバまでの道程は精神的に長い物になりそうだった。

神聖帝国エルディバ。なんか宗教で結束している国らしく、軍事色の少ない国らしい。そしてここのお姫様達は、すっごい美人で有名らしい。そのせいか、ほぼ全ての国の王族と姻戚関係にあるようだ。やっぱり美人は引く手あまたなんだねぇ。そう言えば、父ちゃんにも僕にもなんか婚約話が持ち上がってたりしてたみたいだけど、詳しい事は分からない。

他国との繋がりがもっともあるエルディバ。ここを真っ先に狙おうとしたのは偶然だろうか。ここを狙うとなると、横槍が入って来る可能性が高い。高いというかまず確実に他国の軍勢がやってくるだろう。いくら空中要塞で電撃作戦を成功させたとしても、維持する事が難しくなるのは明白だ。

さらに言えば宗教というものを信じている人達は、死ぬ事を恐れないという話を聞く。エルディバのほうも一神教という事で、敬虔な信者というのはかなり居るそうだ。そういう人間を敵にまわすというのは、非常に厄介だと思う。

宗教によって結束しているこの国は、ある意味、攻めるよりも攻めた後に維持するのが難しいのではないだろうか。宗教を認めておけばある程度は抑えられるのかもしれないけども、旗頭である姫達が何か言えばそれだけで信者は動くとなれば、落ち着いてられないし。なんというか、戦争を仕掛けるには非常に難しい所だという感じしかしない。

「んふっ」

それに隣国のハイローディス。そこの姫のリリノアは現在アーンと共に行動しているという。ハイローディスとアーンが組むという事になれば、それは非常にまずい事となる。裏で手を組み、空中要塞で好き勝手あちこちで暴れ回り、そ知らぬ顔でバルトス国を非難し戦争を仕掛ける大義名分を手に入れられるからだ。

しかも、バルトスはハイローディスに蓋をされている形の国土なので逃げ場が無い。それにエルディバ程他国と国交があったり威信があったりするわけではないので、海を渡って亡命しようとしても、拒否されるのがオチだろう。

今回、空を飛んでいるとはいえ他国の領空を侵さないようにエルディバへ進路を向けている。一度海へと進み北上。そして川をさかのぼってエルディバへと向かう予定だ。高高度を気づかれないように飛んで行っても良いんだけど、万が一にも領空侵犯を訴えられたりしないように普通に飛ぶ事にしたのだ。

「にゅふふ」

そういえばエルディバにも変形するルーツがあるってサラさんから聞いた覚えがある。シャイニングブレスも変形するけど、こちらは飛行機だから鳥みたいな形に変わる向こうさんとは大分趣が違うとは思うけど。それに二桁のルーツって言ってたから、そうとう機体性能も良いんだろうなぁ。ロバスの遺跡じゃ結局ルーツどころかフレームすら発見できなかったからなぁ。百階層よりもっと潜れば出てきたんだろうけど、さすがにあそこから一人で潜っていくのはちょっと危なかったからね。また今度絶対見つけに行こう。

そう言えばハーベイさんは元気にしてるかなぁ。あの人のおかげで飛行フレームが使い物になる形になったんだけど、結局飛行フレームは普通に販売できなくなっちゃったからなぁ。また奥さんに怒られていないかちょっと心配だ。

「ふっ、うんっ」

「…ちょっと白夜。僕だって我慢してるんだからねっ?!　さっきから好き放題して！　いい加減僕も怒るよ！」

「…うん叱って？　お仕置きして？」

ガンッ!!!!

「ひゃっ?!」

今の台詞はミミか！　ミミの仕業か?!　危うく手を出す所だったよ、まったくもう！　正気に戻る為に殴ったおでこが非常に痛い。そのおかげで正気に戻れたから良かったけど。あー義手で良かった。

「とりあえず、座っても良いから大人しくしてね、ね？」

「わ、わかった…のじゃ」

血をだらだら流しながら必死にお願いしたら、白夜も分かってくれたようだ。何もしないって言ってる訳じゃないんだから、我慢して欲しい。ていうか、今ここでしちゃったらきっと飽きるまでしちゃって、エルディバには着きませんでした！　ってなりそうだからね。まったくもう、後でたっぷりさせて貰うからね！

緩衝地帯の町トーラウ

海を越え川をさかのぼりうねうねと進むとようやくエルディバの領地が近づいてきた。ここからは人型になって街道沿いを進むことにする。白夜に頼み街道沿いをゆっくりと進んでもらい少々休む事にした。とりあえずこの先にある中立地帯にある町トーラウに向かう。

「この辺りで待機してれば、エルディバに入らなくても対応できそうだね」

「ん？　エルディバに入らんのか？」

「万が一入国拒否とかされたら駄目でしょ？　衛星からの映像で見てると飛べばそんなに遠い所じゃなさそうだから、居心地が良いならトーラウって所で居てもいいかなぁとは思ってるけど」

「ふむ」

とにかく腹ごしらえをしたい。集中して操縦してたもんだから、気を抜いた瞬間にお腹がすいてる事に気づいたんだよね。トーラウはいろんな国の隊商が行き交う町らしいので、色々な物がありそうだ。ここは中立の緩衝地帯とはいえ普通こんな危ない場所に町なんてできそうに無いんだけど、最初は流れ者や素性の知れない人間が寄り集まって集落を作ってたそうだ。その内、国を捨てた人達も流れてくるようになりどんどん町として広がってきて今に至る。本当はもっと細かい説明を聞いたんだけど、おおまかに言うとそんな感じである。たくましい人達がうまくやりあってここに町ができたとだけ覚えておけば十分だと思う。

「フレームは門の内側の駐機場へ置いてくれ。魔石獣が来た時は働いて貰うかもしれんからな。いいな？」

トーラウの町には特に入国審査とかは無かった。門番の人が流れる人を適当に誘導しているだけで、ロバスみたいに書類に記入する必要は無かった。もともとがそういう流れ者の人達を受け入れるような町だったので、そういう事はしないのだろう。うん、良い事だ。

「はい大丈夫ですよ。でも、結構な数のフレームが置いてますねぇ」
「まぁな。これがなけりゃこんな所に町なんてすぐに無くなっちまうからな」

僕の機体を入れて八機ほど佇んでいる。ここは反対側にも門はあるのでたぶんそっちにも同じぐらいの数があるんだろう。でも確かに門番の人が言うようにこれぐらいは無いと魔石獣にやられてしまうだろう。

「そうですよね、あ、これどうぞ」
「ん。おおすまんな」

そういって小額だけどチップを渡す。こうするとやっぱり話しやすくなるんだよね。

「所で、お腹が空いたんですけどオススメのお店とかあります？」
「がっつり食うなら「アラン亭」だな。でもそっちの嬢ちゃんにはきついと思うぞ。だから少々値ははるが「フィラツィーノ」ってとこにしとけ。どっちも大通りにあるからすぐに分かるはずだ」
「どうもありがとうございます。「アラン亭」に「フィラツィーノ」ですね」
「おお。食べ過ぎるなよー」
「はーい」

ブルーに輝く僕の機体はかなり目立つ。背中の巨大な砲塔もかなり

の威圧感がある為、盗もうとする奴が出るかもしれないけど、コアの白夜が傍にいる限り乗っ取る事はできないし、いざ運ぼうとするならドゥエーリンが僕に警告してくれるから安心だ。

「じゃあ「アラン亭」に行こ」

「うむ、どうせ食べるならがっつり食べたいしの。色々と頼むとしよう」

門番の人は細っこい白夜を見てきついと言ったんだろうけど、白夜は別に小食でも大食でも無い。だけど、出された物は綺麗にたいらげる事にしているようで、出された食事を残しているのを見た事が無い。多くても少なくても特に不満を漏らさず、ただ出された物をありがたく頂くというスタンスである。ただ、お店に行く場合は知らない料理などには興味が湧くようで結構な量を頼む事があった。

門番のお兄さんに言われたとおり大通りへと出て探してみると、すぐにお店は見つかった。結構年季が入ってるのかちょっと薄汚い感じのこじんまりとしたお店が「アラン亭」である。ちょっと汚い感じではあるけど、結構流行っているようで店員さんが忙しそうに働いているのが見て取れた。それにすごくおいしそうな匂いが漂っている。ちらっと白夜を見るとうんうんと頷いている。ここで問題ないようだ。

「いらっしゃいませ、二名様です？」

「うん、二人です」

「こちらにどうぞ」

ぱぱっと空いているカウンターへと案内される。メニューを手渡されたので白夜と一緒に見て、食べる物を選ぶ。基本的に値段はどれも安めなので、名前も知らない料理を選んでもあまりお財布に痛く

ないだろう。僕は適当に、白夜はなんか凄く店員さんに聞いて注文を済ました。忙しい時にそんなに質問攻めしたら迷惑だと思うんだけど、店員のおばちゃんはニコニコと嬉しそうに白夜に教えていた。

「楽しみじゃな主」

「おいしそうな匂いしてるからねぇ。とにかくもうお腹がぺこぺこだよ…」

カウンターなので隣で食べている人がいるんだけど、麺類とご飯物を食べてるんだよね。すでにしめに入っているので、ご飯と麺類のスープを一緒に食べてる所だ。あーうまそー。ていうか、炒め飯とは別にスープと食べる用に白いご飯を頼んでいる所がにくい。あーその向こうの人は揚げ物かぁ。うまそうだなぁ。さくっとか音が聞こえてくるので、なんというか食感が想像できる。うー、この待ってる時間が拷問だよ…

「随分お腹が空いてるみたいだね」

隣の白ごはんの人がそう話しかけてきた。う。そんなに物欲しそうな目で見ていたんだろうか。たっはっは。

「はい。もうぺこぺこなんです」

「ワシも早く食べたい」

白夜の口調に多少面食らったようだが、白ごはんの人はにかっと笑っていた。

「どっから来たの？　俺はハイローディスから来たんだけど」

「バルトスからです」

僕の言葉にびきりと動きが止まる白ごはんの人。そうだよね、バルトスって今うわさが色々流れているからびっくりするよねー。

「バルトスからかぁ。あれ？　て事は海を渡って？」
「はい、海から川を通ってここまでようやく来ました」

ハイローディスは今入国も出国もできない筈だもんね。だからそんな風に答える。だけど船に乗ってきたとは言わない。嘘じゃないよね、うん。

「まぁ、色々大変だそうだからねぇバルトスって。そっかそっか。君達はここに移住するつもりなのかい？」
「いえ、ここからエルディバへ行く予定なんです。入れるかどうかは分かんないですけど」
「入信すればすぐ入れるよ、エルディバは」
「あれっ？　そうなんですか？」
「ああ。その代わりなんか儀式みたいな物があるらしいけどね。まぁ別に金を取られる訳じゃないそうだから手軽に入りたい奴はそうしてるらしいけどね」

ふーん、なんかそんな簡単に入れるもんなんだ。でも、そんなにエルディバって良い所なのかなぁ？

「そんなに良い所なんですか？　エルディバって」
「そりゃあそうだろ。美形ばっかりでそりゃ俺たちみたいな人間にとっちゃ天国みたいなもんだ。あ、君にはあんまり関係ないかな、あはは。もげろ…」
「はぁ…？」

なんか最後のほうは白夜と僕を見比べながらぼそっと言ったからよ

く聞こえなかったんだけど、綺麗な人が一杯だからエルディバに移住したい人は多いみたいだ。そういえばエルディバのお姫様ってすごい美人で有名だったもんね。

「ココカッツェとパニエラ煮込みと彩りサラダです」
「あ、ワシのが来たっ」
「はい、前失礼します。お連れの方の分もすぐ持ってきます」
「あ、はーい」
「え、そっちの子が食べるのそれ？」
「ん？　食べるぞ？」

これぐらいなら白夜も食べれる。だけど、細身のちっちゃい女の子にしか見えないので白ごはんの人はびっくりしていた。

「おっと話こんじゃったね。じゃまたね」
「はい、どうもです」

食事の邪魔をしては行けないと思ったのか白ごはんの人はそういうとさっとお店を出て行った。その後すぐに僕の定食とかが来たのでさっそく食べる事にした。

「おいしかったのじゃ、また食べに来よう主よ」
「ここに居る間はね。そう気軽に来れる距離じゃないからなぁ」

食事はすっごく満足のいくもので、僕も白夜も追加で注文しちゃったぐらい美味しかった。値段も安めだったのが驚きだったので、ち

ょっと多めにチップを置いてきた。言葉は通じているんだけど、金髪碧眼の白人さんや褐色の肌の人が多いのでなんか海外旅行に来ている気分になるのでチップを出さなきゃ駄目だという気分にさせられるのだ。別にそういう風習は無いみたいなんだけどね。

「ここなら何かあっても大丈夫なんじゃろ？　今日ぐらいゆっくりしても良いよな？」

「あー、まぁね。こっからは街道沿いを移動しないと駄目だしね。体を休めて明日出発するって言うのも良いかもね。ここまで結構時間かかったしね」

「うんうん。という事で宿を探すぞ主よ」

「はいはい。はしゃがないの」

なんだかんだ理由を付けて一泊しようとする僕達。やらなきゃいけない事があるんだけど、やりたくなってる次第です。あー暴走しないように気をつけなきゃね。昨日も寝てない訳だし、今日も寝なかったら流石に駄目だろう。いや三日ぐらいなら徹夜できるかな？人間の三大欲求はやはり強いのです。いや、睡眠もそうだけど。

「あちらです」

「うむ、人相書きと相違ないようだ。こんな所に居るとはな、よくやった」

「いえ、当然の事をしたまでです」

んー？　なんだろ。なんか不穏な空気が流れてる気がするんだけど。と思っていたら目の前に女騎士が僕を目指して歩いてきた。

「お初にお目にかかる。私はシャム＝リーゼロッテ。エルディバの騎士を務める者です。貴公に問いただしたい件が在るゆえ、ご同道願えまいか。アーン殿」

「え？　はぁっ？」

盛大に勘違いされてるよねっ！？　周囲を見ればそれとなく取り囲まれているようだ。突破できない事もないけど、ここは情報を得る為にも勘違いを正す為にもついていくしかないか。騎士さんも凄い美人だし。

「むぅ」
「あいたっ。ちょっと白夜いたい！」
「ふんっ」
「で、宜しいですかな？」
「ええ、良いですよ。で、どちらに？」
「こちらです」

そういって躊躇無く背を向けるリーゼロッテさん。なんか良い匂いまですするんだけど香水なのかな？　セリナ達にも香水つけてもらおっかなぁ。いたっいたいよ白夜。鼻の下伸びてる？　え？　そうなの？　ごめん。

僕はぷりぷりしてる白夜を連れてエルディバの騎士についていった。

ラウラ＝アイ＝フォーリス

エルディバの騎士リーゼロッテさんに連れられて町の外へ出る。どこへ行くのかと思えば、外に騎士団が待機していた。その中に豪華な馬車みたいな物がありそこへ案内される。そこまでは大人しくしていたリーデロッテさんも、中に僕達を入れた途端に問い詰めてきた。

「かような場所にノコノコと二人だけで居るとはいい度胸ですね、アーン殿。我々が貴殿のおかげでどれほどの迷惑をこうむったかお分かりか？」

胸倉を掴まれこそされなかったが、掴んでもおかしくない勢いで詰め寄るリーゼロッテさん。魔石獣を操れるとかって噂を流されたら他の国から、非難が殺到するよねそりゃあ。どこの国でも魔石獣による被害は必ずあるんだから、エルディバが操れるって話になるとそりゃあ色々あるだろうなぁ。でも、なんでこんな所に居るんだろこの人達。

「む？」

「コージは関係ないぞ。むしろそなた達の評判を取り戻せるぐらいの人間じゃぞ？」

あまりの勢いに白夜が僕とリーゼロッテさんの間に割ってはいる。見た目華奢な女の子が間に入ってきたので、僕の方を情けない奴を見るような蔑んだ目で見てくるリーゼロッテさん。白夜の台詞の内容は頭に入っていないようだった。

「少し落ち着きませんかシャム。まずは話をしましょう。私達には

抗う力もあるのですからね。アーン殿、あなたの印の力は危険な物だとご存知です？」

「はっ、失礼しました。お見苦しい姿をお見せしてしまいました」

なんかすっごい美人が居た。

透き通るような声は聞く者全てを虜にせずには入られないほど魅力的で、一見澄ましたような表情もこの世の者とも思えないほど綺麗である為に、侵しがたい雰囲気を漂わせている。だが、少しでも笑みをもらせば途端に親しみやすくなり近しく感じられる。その仕草、声、表情。それら全てが周囲の人間を虜にする武器だった。髪の毛の一本一本が、極上の金糸のように輝き柔らかい雰囲気をかもしだしている。伏し目がちな碧眼は視線を合わせた途端に相手を虜にするほど、深い青で静謐な光を湛えていた。光を弾くかのような白い肌はしみ一つなく、神でさえ傷をつけるのを躊躇っているかのような肌は、触れるのは恐れ多いという感情を沸き起こさせる。ま、僕には関係ないから、どうでも良いんだけどね。

「自己紹介がまだでしたね。私はエルディバのラウラ＝アイ＝フォーリスと申します。三姉妹の末娘ですわ」

「どうも初めまして。コージ＝H＝アースです。正直、誤解されてる事が分かったので弁明の為にここに来た次第です、姫様」

確かこの人ってエルディバの三姉妹の人だよね。すっごい美人で三姉妹で騎士の人が忠誠を誓っている所を見ると間違いないと思う。ていうか、こんなカリスマがある人がごろごろしてるならエルディバは恐ろしいよ。でもちょっと得をした気分だ。エルディバに入るのにこの人の口添えがあれば簡単に入れるだろうし、アーンの襲来に備える事もできるだろう。運が良いね僕。

「黒髪に黒目。肌の色も背格好も間違いなくアーン殿で間違いございません姫。おまえ、偽名など使って我々を騙せるとでも思っているのか」

侮辱されたと感じたのか敵意をむき出しにするリーゼロッテさん。誤解するのも無理ないんだけど、お姫様のお付きの人なら相手の実力ぐらい計れるようになっとかないと危ないと思うんだけどなぁ。

「シャム、静かに。では、コージ殿ですか？　何をしにこの町へ来られたのですか？」

「守りにですよ。ここは狙われる可能性が高いので、敵を追い払う為にここに来ました」

「何を馬鹿な事を、おまえがその張本人だろうがっ！」

「シャム？　本当に静かにしててね？」

「はっ！」

僕が何かを言うたびにリーゼロッテさんがすぐ大声を出すもんだから、お姫様は静かにたしなめていた。良くこんなに怒りやすい人が側近になれたなぁ。演技なのかな？　そんな風に考えているとお姫様がじっと僕を見つめていた。いやん、恥ずかしい。って痛い、痛いよ白夜？！

「守りに来たとおっしゃられても、あなた一人で何ができるのでしょうか？　それにあなたが王の印を持っている事は分かっているのですよ？　そのような嘘はお止め下さい。本当の目的は何です？」

そういって少し低い調子で僕を問い詰めてくるお姫さまから、じんわりと何かの力が溢れてきている。何の力か分かんないけど、こういう力を持っているからこの姫様はわざわざ国を出てアーンを探しに来ているんだろうね。

「悪いけど僕の印は王の印じゃない」
「いいえ、間違いなく結界が反応しています。子供でも付かないような嘘はいけませんよ？」
「そういうの分かる結界なんてあるんだ？　あー、一応内包してる訳だから、反応してもおかしくない訳か。なるほどねぇ」
「はい、観念されましたら本当の事をおっしゃって下さい。私も力を使わなくて済みますから」

いま一つこのお姫様はアーンの怖さを理解していないみたいだね。そんな力一つであいつを抑え込める訳が無いのに。「止める」印を持ってるんだろうね、この姫様。ある程度使いこなしているみたいだけど、僕の敵にもならない。

「自信過剰は命取りですよ、姫様」
「あくまでしらを切るおつもりですか。良いでしょう、少し力をお見せします」

そういって、意識を集中して僕の動きを止める姫様。遅い。

「で？　僕を止めて次はどうするんです？」
「こうだっ！」

お姫様の動揺した表情を見て取りリーゼロッテさんが剣で斬りかかって来る。これは中々速い。だけど、その剣は僕に届く前に白夜につままれる。そう白夜は指先だけで剣をつまんで受け止めたのだ。

「あいつの力を侮らないで下さい。僕にできる事はあいつにもできます。この程度であいつをどうにかできると思ってたら大間違いですよ？」

「…どういう事ですか…」

結界で僕が王の印を持っていると思ってるから、僕をアーンだと勘違いしたままなせいで困惑した表情を隠せないお姫様。どんな表情をしても崩れないっていうのは凄いなぁ。どこから見ても美人は美人って事か。痛いっ、痛いって白夜！！！

「あなたは仮にも一国の姫でしょう？　そんな人間が軽々しく危険な事に首を突っ込んでは駄目でしょう！　あいつは本当に危険なんです、軽挙妄動は慎んで下さいっ！」

「はっはい…」

僕が言うな？　って感じの内容だけど、アーンの事を思い出し目の前のこの綺麗な姫様があいつにむざむざとやられるのを想像したら、ちょっとヒートアップしちゃった。お姫様はびっくりした目で僕を見てるし。あ、ちょっと涙目になってる…やばい、強く言い過ぎちゃったかな？　えっと話の流れを変えよう、うん。

「ええっと、いい加減説明させて貰って良いです？　じゃないとちっとも話が進みませんし。白夜、痛いからやめて下さいお願いします」

「ふんっ」

リーゼロッテさんの剣をつまんで止められる程の指の力なんだから、僕をつねるのに全力を出すのはお止めになって下さい白夜さん。

こうしてようやく僕は説明に入る事ができた。無駄に自分に自信がある人達を相手にするのは疲れるよ、ほんと。

僕が持ってる印が王の印じゃないというのを手っ取り早く見せる為

にシャツを脱いだら怒られた。印の形を知ってるって言うから脱いだのに、そういう事をするなら事前に言えとの事らしい。なんという理不尽。異性の裸なんて見慣れてないせいで赤い顔をして恥らうお姫様は、なかなかに愛らしい。なんというかもっといじめたくなるというか。痛いからね、白夜。いい加減僕もちぎれるからね？

「確かに王の印とは違いますね…見た事も聞いた事も無い印のようですが」

「王の印じゃないと分かって貰えればそれで良いですよね？　ちょっと僕変わってるんで」

「はい、確かに確認しましたコージ様」

「姫っ？」

にこっと笑いながら様付けされた僕。それを聞いて驚くリーゼロッテさん。理解して貰ったのなら態度を変えてくれるのは当然だとは思うんだけど、変えすぎだよ。

「あの様付けとかやめてくれません？　なんというか、むずがゆいです」

「ですが、あまりにも失礼な事をしてしまいましたし、こちらとしても国を助けに来てくださった方を無下にできません」

僕も良く考えたら王子な訳で、別にへりくだらなくてもいいやーって、砕けた調子で話しかけてたんだけど、向こうはそれに乗ってくれずに丁寧な口調で接してくる。リーゼロッテさんが何か言いたそうにしてるんだけど、さっき姫様に叱られたせいもあり今は大人しくしている。また何かあればきっと騒ぐと思うけど。それにちょっとお姫さまの視線が熱い。

“ね、白夜。お姫様に砕けた調子で話しかけたせいで「こんな風に

話してくれる殿方って初めてですわ、きゅん！」って感じで好かれたかな、僕？”

“　理由は知らんが、好かれとるじゃろこのうつけ主め！　やっとワシの番が回ってきたというのに、あんまりじゃ！”

“　いやいや、たっぷり可愛がる予定なんだからへそ曲げないでよ白夜”

白夜とはテレパシーで会話ができるので、そう伝えてから手を繋ぐ。いわゆる恋人繋ぎという奴である。それを見たお姫様の顔がむっとしたけど気にしない。

「コージ様。ところでそちらの方とはどういうご関係なのですか？　差し支えなければ教えて頂きたいのですが」

ごほんとセキをしてからそんな事を聞いてくるお姫様。名前とかを聞かずに関係を聞いてくるのはあれですか、白夜が恋人だったら排除するつもりですか？　なんかこれ印のせいでまたモテ期が来てるとかそんなんじゃないだろうね？

「白夜じゃ。コージの妻の一人じゃ」

「つ、妻？　いきなり障害が大きくなりましたわ」

「姫様ぁ…」

白夜の自己紹介に闘志を燃やす姫様、がっくりしているリーゼロッテさん。

「姫様？　とりあえずエルディバへ入国させて貰えれば僕も動きやすいと思うんですが、入国の際に口添えを頼めないでしょうか？」

「ええ、それは勿論…」

「待って下さい姫。コージ殿、貴殿がわが国の為に尽力を尽くして

下さる心積もりなのは理解できたのですが、その実力の程を我々は知りません。反面、あまりにも大きな力であった場合は、おいそれとそのような力を持った者を国内へ入れる訳には行きません。ご理解頂けますか？」

「リーゼロッテは意地悪です」

確かにリーゼロッテさんの言うとおりだ。ある意味エルディバの町一つぐらいすぐに消滅させてしまえる程の力を持っている。だけど、そんな力を見せ付けてしまっては警戒されて当然だろう。だけど、中途半端な力を見せるだけなら必要なしと断定されてやっぱりエルディバに入る事はできないだろう。

「リーゼロッテさんの言う通りですね。分かりましたエルディバの入国は諦めます」

「コージ殿、非常にわがままな願いだとは思うのだが、この場所にとどまり有事の際には駆けつけて貰うという事で承諾して貰えないだろうか」

「はいそうしましょう。僕は押しかけ助っ人な訳ですから、エルディバが狙われなければ不要の存在です。なるべく関わらないようにして置く事にします」

「あら、関わらないようにって言うのはもう無理ですよ、コージ様」

「えっと、と言いますと？」

「もうわたしに見つかってしまいましたからね。どこまでも追いかけて行きますから」

「国へ帰れっ！」

「はうっ」

しまった！　ついあんまりな台詞に突っ込みを入れちゃったんだけど、この姫様悦んでるよ?!　とりあえず、今後の方針は決まったことだしそろそろお暇して良いよね。悦んでる姫と落胆してる騎士

を置いて、そそくさと僕と白夜はお暇した。今日もやるぞっ！

「それでですね、お姉さまはいつも澄ました顔をされてるんですが、伴侶ができないといつもぼやいているんですよ。コージ様のお父様にもふられてますからね～」

べらべらと自分の事を話し出して止まらないお姫様。エルディバの三人の美姫は有名だけどあまりにも美人すぎて誰も嫁いでいないという状況らしい。その上、国民も見目麗しい姫達を他国にはやりたくないようで、先日末娘のラウラにバルトス国との縁談が持ち上がった際も歓迎よりも落胆するムードが漂っていた程だ。

だが、今はそんな事を知りたい訳じゃない。

「あの姫様？　何故にここにいらっしゃるんでしょうか？」

「あ、やっと話かけてくれましたね。そういうのも中々良いものだったんですけど、やっぱりお話して下さるのも嬉しいですね、はい」

きっぱりにっこり微笑むラウラ姫。放置プレイすら歓迎という事なのか。なにこの子怖い。

「どうされたんです？　わたしがここに居るのがそんなに不思議でしょうか？」

「僕と白夜の泊まってる宿にお姫様が泊まるのは別に良いんですが、なんで同じ部屋にいるのでしょうか？　というか、出てけ」

「…っはぁ」

うっとりしないでよっ？！　なまじ凄い美人が頬を染めて潤んだ瞳でうっとりすると、とんでもない色気をかもし出しますからっ！

あああああ、白夜がどんどん不機嫌になっていく。無視しても駄目だし、大声で強く言っても駄目だしなにこの無敵っぷりは。

「そなたが出て行かぬというならば、ワシが出て行く。行くぞ主よ！」

「コージ様、白夜さんが怒ってらっしゃいますよ？」

「いや、姫のせいですからね？　それじゃあ」

といって、部屋を出ようとするのだが僕も白夜も止まってしまう。

「仲間外れはやーですよ？　コージ様」

「ぬっく、無駄に力を使いおってからにこのメス犬が！」

「もう白夜さん、そんなはしたない言葉使いは駄目ですよ？　ね、コージ様」

「んー…いったい何が目的なんですか、姫？」

この人、目的を果たすまではテコでも動かなさそうだ。というか、リーゼロッテさんはどこに置いてきたのかな。こういう時はああいう人が連れ帰ってくれるのがセオリーなんだけど。

「それです」

「どれ？」

「コージ様はちっとも名前で呼んでくださりません。あ、ラウラじゃ駄目です。アイと呼んでください」

「アイ姫って呼べと？」

「姫は無しで。そう呼んでくれないなら帰りません」

力づくで動かそうとしても、自分を止めてしまうので動かせない。手荒な方法ならできなくも無いんだろうけど、そこまでは流石にためらわれる。僕たちが逃げようとすれば、扉を止めたり僕ら自身を

止めたりともう好き放題してくれる。その内、時間も止めそうでちょっと怖い。

「はぁ…分かりました。アイ」
「はいっコージ様！」
「帰れ！」
「はいっ！」

そう元気良く返事をしたかと思うと、すっくと立ち上がりまた大人しく座る。なにしてるの？

「はい、帰りました！」
「いやいや、ここは僕と白夜の部屋だからね？　姫様の部屋じゃないから」
「先程からわたしの部屋にもなりましたから、ここに帰ってきたのです。あと名前でちゃんと呼んで下さいね」

確かに国に帰れとは言わなかったけど、すんごい屁理屈をかましてくるなこの姫は。美人で性格も穏やかで末っ子なので甘やかされて育ち、そこそこにお転婆らしいという噂は聞いた事がある。そういう性格が下地なだけに、何を言っても聞かないというか自分の信念を押しとおすというか。

「ごめんね白夜。この子ちょっと凄い駄目な子だ」
「むぅ…空気として扱うより他無いのか？」

さすがの白夜もこの状況に同情してくれたのか、怒りの矛を収めてくれた。あれやこれや追い出そうとしても、まったく言う事を聞かないのを見てきたからねぇ。あぁ、そうだそういえばこの姫さま、気になる事を言っていたね。この際だ、そこら辺じっくり聞いてお

こうか。

「姫様、一つ伺いたいんですが宜しいでしょうか？」

「つーん」

そんな言葉を返し、ぷいっと僕から視線を外す姫様。美人って外見のせいで性格も凄く良さそうに見えるんだけども、実際はそんな事ないよね？　自分が可愛いとか綺麗って自覚してる人達ってそれを武器に周りを振り回すのが得意だよね？　ぬぬぬ！

「つーん」

僕が黙りこんだのを見て、そうやってこっちをちらっと見てからアピールしてくる姫様。このしつこさがこの人の性格の基本という事だろうか。どうして僕、こんな人に気にいられちゃったんだろう…？

「ねぇ白夜。僕、どうすれば良いかなぁ。空を飛んで自由になりたい気分だよ」

「あれは置物か何かかと思うのが一番かもしれぬな。勝手にしゃべりだすのは、あれだ、主の世界にあるというラジオかテレビと思えばいいじゃろ。うん」

ほっといたら好きに語りだすからねこの姫様。ラジオとかテレビって思うのは中々に良い案だとは思うんだけど、この姫様は存在感だけは無駄にあるからなぁ。輝きすぎだよ。今も存在感を無駄に放ちながらにこにことこちらを見ている。もとい、またそっぽを向いた。

「じゃあ、ちょっとお布団に潜ろう。そうしよう」

「そ、それは良い案じゃな。よし、潜るぞ」

そういってもぞもぞと布団の中に一緒に潜る。部屋の中に居るのはラジオラジオラジオ…

自分にそう言い聞かせながら、白夜といちゃいちゃを開始する。布団の中なので薄暗いどころの話じゃないんだけど、この薄暗い中で密着して白夜の吐息を聞きながらもぞもぞするというのは、なんか凄く興奮する。ラジオのせいもあるかもしれないけれども。

だけど、そうは問屋がおろさない。

さっきまで僕の事を無視していたお姫様は、僕の名前を連呼しだした。段々とヒートアップしてきて、次第にすすり泣きまで始めだしたので宿の人もびっくりして飛んできた。美人で噂の姫様が泣いているのである。事情も知らない宿の人は何故か僕をこっぴどく叱りだし、それを姫様がやんわりとたしなめる形で事態は収束した。後に残されたのは不満そうな顔をした僕と白夜と、すごく満足そうな笑顔で僕を見るお姫様だった。

「アイシャ殿より恐ろしいなこやつは」

「うん、僕もかつてない恐怖に慄いてるところ」

「また女性の名前が出てきましたね。一夫多妻が認められてるとはいえ、そんなに夫人を抱えて毎日大丈夫ですか？」

何の心配をしてる。というか視線を僕の下半身に固定しながら言わないで。

「で、結局どうすれば満足なんですか姫様は」

「また姫様って言いました。コージ様ひどいです…ひどいです」

ぽっと頬を染めながらそんな事を言われてもまったく説得力が無い。

だけど名前で呼んだら呼んだで、喜ぶだけだし呼ばないままだと悦ぶし。どっちに転んでもこの姫様に都合の良い方に転がるばかり。ここは一つはっきり言っておこう。

「僕はあなたと結婚しません。そもそも好きでもありませんし。そういう事を望んでここに留まっているのなら全く無駄ですよ」

「事実婚とかそういう形ですね。コージ様との子供さえできれば文句言いませんから」

「いやそもそもそういう事をしませんからねっ？！」

「大丈夫です。コージ様となら見つめ合うだけでも孕めますから！」

「それで満足なら、いくらでも見つめてあげるから国に帰って？」

「いやん、やっぱりわたしとの子供が欲しかったんですね！　わざとつれない事を言ってわたしの気を惹こうだなんてコージ様って照れ屋さんですよね、もうっ」

「あーーーーもうぉおおおおおっ！？　このポジティブな人をどうやれば止めれるんだぁあああ！」

僕はアーンと戦う為にわざわざここまでやってきた筈だよね？　こんなとんでも姫様を相手にコントをしに来た訳じゃないよね？　守るべき対象な姫様から、精神的に攻撃を食らうってなにこの仕打ち。イーサルークを出てまだ初日なのに、初っ端からこんな目に会うとかこれからどうなっちゃうんだろう、とほほ。

僕だって命が惜しい

傍若無人なお姫様を掣肘できる人間は居ない。

こういう時って、上の姉さんとかがたしなめに来るのがセオリーだと思うんだけど、あいにくとパニモアでエルディバまで往復するのにどれだけ急いでも二日はかかると思われる。今居ないリーゼロッテさんの迅速な行動に期待しつつも、その間はこのポジティブ姫、もとい残念ちゃんを預かってないと駄目なんだろう。

「一時間、いや二時間…やっぱり朝まで隣の部屋に行ってて」
「やーです。わたしが先にして貰えるなら考えますけど」
「それって考えるだけで結局、何もしないつもりでしょ」
「さぁどうでしょ？　試してみればはっきりしますよ、いかがです？」

何が楽しいのかさっきから笑顔を崩さないこの人。さっきから説得を試みてるんだけど、遠まわしに言っても駄目だったので分かりやすく言っても結局駄目。にこにことしたまま我を通すこの人は、何が理由でここまで僕に執着するのかさっぱり分からなかった。

「コージ様はバルトス国の王子様なんですよね。都合の良い事にわたしはエルディバ国の姫なんですよ。しかも末っ子ですから一番若くて国を継ぐ必要もありませんから、いつでもお嫁に行けますよ」
「あの、そんな事を言われてもバルトスとエルディバって陸続きじゃないですし、そもそもそんな話をしてませんでしたよね？」
「恥ずかしがらなくても良いんですよ？　わたしもこういう事って始めてですから、気にしないで下さい。二人で一緒においおいやっていけばきっとうまく行きます」

噛み合っているようないないような。いや、まったく噛み合っていないよね？　僕の話を聞いているようで、都合の悪い部分は脳内変換して聞いているような節がある。このＭっ気のあるお姫さまを叱ったが為に、目覚めちゃったのもあるだろうけど、上の姫達が婚期を逃したってぼやいているのを聞いて、チャンスを逃しては駄目だって事で暴走してる？だけど、僕ってそこまで優良物件って訳でも無いと思うんだけどなぁ。

「そういえば、コージ様はハイローディスの方とも婚約されてましたよね？　わたしまで狙うという事はお姫様が好きって事で良いのでしょうか」

「リリノアとは婚約解消してるはずだし、あなたを狙った覚えはありません」

「はい、そうですね。分かってますよ」

くあー、私は分かってますよって顔されて凄く突っ込みを入れたくなる。だけど我慢。突っ込めば突っ込む程、突っ込む事になりかねない。いやいや、好かれてしまいかねない。今でも十分な程邪魔なのにこれ以上は勘弁して欲しい。だけど、聞くなら今がチャンスだろうか。

「あのさ王の印に詳しいみたいだけど、なんで？　あれってバルトス国にしか出ないんじゃないの？」

「いえ、そんな事はありませんよ。ずっと前はこちらの方でも印を持った者が出たという話もありますし」

「そうですか。それで色々知っているという訳ですか」

「ええ。あれがどれだけ危険かも承知しております。なので私達も抗う術を考え出したのです。でなければいつまでもやられっぱなしになってしまいますからね」

そう言って伏目がちに静かに語る姫様。過去に何かあったのだろう。だけど抗う術という事は、イーサルークみたいに解呪する装置があるんだろうか？　それなら、アーンの力を削ぐのにだいぶ助かるんだけどなぁ。

「これ以上知りたいのなら、ちゃんとわたしを見て名前で呼んで下さいね、コージ様」

「ぬくっ」

話をしてくれる内に知りたい事を全部聞き出そうとしたんだけど、先手を打たれた。こうやって真面目な話もできるのに、なんで僕に関してはあんな風に駄目な人になるんだろうか。そういうおしとやかな雰囲気を前面に出して接してくれれば、危なかったかもしれないのに。いやいや、これ以上増やしたら駄目だろう僕。しっかり追い出さないと！

「あーもう…」

だけど、どうすれば追い払えるか考えてもいい案が浮かばず、疲れてきたのでベッドに寝そべる。今日は朝からフレームで長距離移動してきたからちょっと疲れてるんだよね。こうやってふかふかのベッドに横たわるとなんか眠くなってくる。あーでも、体拭いてないからお湯貰ってこないと気持ち悪いなぁ。

「白夜さん、邪魔しないで欲しいです」

「駄目じゃ。そこはワシの場所じゃ」

「反対側は空いてるじゃないですか、そちらへどうぞ」

「両方とも今はワシの場所じゃ。分かったらとっとと退くのじゃ」

白夜ありがとう。ここはそこの人をブロックする為にもちょっと抱っこしよう。

「よいしょ」
「ぬっ？！」
「ああっ！」

体の正面で白夜を抱きしめ、そのままベッドに寝っ転がる。背中から抱きしめていたので、くるくると向き合うように改めて抱きしめなおす。これなら、余計な邪魔は入らないね。

「主、これは良いものだな、うん」
「白夜はちっこいし軽いからこそできる技だね。体拭いてないけど、もうこのまま寝ちゃおうか」
「それは駄目です。わたしの順番までちゃんと起きてて下さい」

なにかきゃいきゃい言ってるけど、ぬくぬくで柔らかくていい匂いのする白夜を抱っこして寝てるとどうでも良くなってきた。疲れがたまっていたようなので結局そのまま眠りこけてしまった。

ガンッ！　キンッ！　カンッ！

リュートと別れてグレイトエースへと戻るラディアスの前に案の定、魔石獣が襲撃してきた。小型ながらも飛行が可能な魔石獣が飛行フレームを落とそうと、群れで襲ってきた。フレームより小さくそれほど強くもない固体ソードフライ。一対一であるならフレームの敵

でも無いのだが、百体以上の群れで十重二十重に囲まれるように襲われてはさすがの飛行フレームとて分が悪かった。

「密集隊形、私を中心に円錐陣形」

ラディアスの指示にすかさず陣形を組み替えるフレーム隊。三百六十度、どこからでも攻撃をしてくる相手を突破する為である。少々の被害は無視し、突撃力を持って正面の進路をクリアにし、そのまま離脱する考えである。

「撃てっ！　その後全速前進！」

指示は簡単かつ明瞭に。タイミングを測っていたラディアスの指示に従い放たれたマジックアローの一斉射撃がソードフライを駆逐する。そして、ぽっかりと空いた空間にねじこむように全機揃って突撃する。狙った獲物を逃がすまいとソードフライが襲い掛かるも包囲を突破する事だけを考えている飛行フレームにダメージを与えられはするものの、その勢いを止める事はできなかった。

「次は大型の魔石獣が来るはずだ、総員！　防御陣形！　落とされるなよ！」

追いすがってくるソードフライには目もくれずに、次の指示を出すラディアス。そしてラディアスの指示通り大型の魔石獣が正面から突っ込んできた。

「あれはベルゼログ!?　なんでこんな所に?!」
「ぼさっとするな、盾構え！　来るぞ！」

相手はこちらより大きな魔石獣だ。仲間を支えあうようにして、協

力をして魔石獣の突撃を受け止めた。翼竜と違い非常におおざっぱな体躯を持つ魔石獣ベルゼログ。飛ぶ為の羽は申し訳程度に背中についているのみで、四角い体に手がちょろちょろと生えており、時折手と手の間にベルゼログの顔が浮かび上がりこちらを伺っている。

弱点は顔にある目の部分なのだが、四角い体の中に埋もれて中々出てこないせいで非常に狙いにくい。時間を掛ければ倒す事もできなくはないが今はまずい。ここで時間をかけすぎていれば、ソードフライの群れがまた包囲してジリ貧に追い込まれるだろう。

「散開！　こいつは放って行くぞ！　ソードフライの追撃を振り切る事を考えろ！　盾は捨てて行け」

少しでも重量を軽くする為に盾を捨てる指示を出す。ベルゼログは動き出せば早いのだが、その体の大きさと常に頭を隠しているせいで直線的な動きしかできない。一旦動きを止めてしまえば、散開して逃げるだけで飛行フレームならば簡単に振り切れる相手である。

「各機油断するな、最後の障害だ。地表から攻撃があるはずだ、高度を取れ」

ソードフライとベルゼログの襲撃を切り抜けた所で普通は油断するだろう。だが、ラディアスならそこにこそ罠を張る。あのアーンならばきっと飛行フレームの死角になりがちな地表からの攻撃があると踏んでいた。

「まぁ無ければ無いで、楽なんだがね。おっと、読み通りか」

地表から無数の魔法が放たれる。ロックドリルやアイスランスなどの質量を伴った魔法が天地がひっくり返ったかのように錯覚するほ

ど、飛行フレームへと襲い掛かる。だがその攻撃も事前に高度を取れと指示していたおかげで、たいした被害は出なかった。

「さてさて。やはりアーンは魔石獣を自在に操れるという事だね。さらには魔族にまで渡りを付けているようですね。そして飛行フレームに関しても詳しく知り尽くしている。今回の襲撃はただの小手調べですね。一気に本気を出して倒してしまえば良いものを…その性格では足元をすくわれかねませんよ、アーン君」

ラディアスにはこの襲撃には真剣さを感じる事ができなかった。最初にソードフライを使って包囲したのは良かったが、ベルゼログを投入するタイミングがまるで駄目であった。さらに言えば、魔族の協力があるというならばもっと違う作戦ができたはずだ。それとも他に何か罠があるというのだろうか。

「考えすぎはハゲの元でしたか。警戒しつつグレイトエースへ戻るとしましょうかね」

軽く頭を振り一旦思考を止めるラディアス。そして護衛の機体と共にグレイトエースへと進路を取った。

ガールズトーク？

「コージ、また浮気してますよね」
「うん、きっと新しく女の子ひっかけてると思う」

ヒロコさんはともかく、白夜さんがついていったので白夜さんも今日は良い事して貰えるでしょうし。フレームだからしようが無いのは理解できるんですが、やっぱりずるいなぁとか羨ましいなぁとか考えてしまいます。

「でもコージはなんで変なの被せてしたんだろうね？　そのままで良かったのになぁコージの子供欲しいなぁ」
「仕方ないですよ。に、妊娠しちゃったら戦えませんし」
「え？　なんで？」
「なんでって言われましても。お腹は大きくなりますし、つわりもひどいと聞きますし。結構しんどくなるそうですよ？」

そこを突っ込まれるとは思わなかったのですが、ミミは時々普通知っていそうな事を知らない事があります。

「ポンと出てくる訳じゃないんだ。へえ～」
「ですです。子供も良いですけど、私はもっといちゃいちゃしたいと言いますか…」
「セリナのエッチィ」
「そ、そういうミミだって、凄かったじゃないですか！　私なんかよりよっぽどエッチでしたよっ！」

おぼろげな記憶しかありませんけど、上になったり四つんばいになったり抱きかかえられたり色々していたのは覚えています。

「セリナのおっぱいお化けには負けてるけどねー」
「そ、そんな事はありませんっ！　ミミみたいに自分から腰を振ったりしてませんもん！」
「み、みみみ見てたのぉ？！」
「あれだけ激しくしておいて見てたも何もありませんよ？　もっともっとってコージにせがんでたじゃありませんか」

ミミが動揺したので、ここぞとばかりに畳み込みます。いつもいつもやられてばかりじゃありませんよぉ！

「……」

なにやら指をもじもじしながら小さな声でなにやら呟いています。いつも大胆なミミですが恥ずかしい事もあるようです。あまり見れないミミの恥ずかしがる様子はちょっと可愛いです。

「でも、妊娠しちゃうとそういう事もできなくなっちゃいますもん。ミミだってもう少しコージといちゃいちゃしたいですよね？」
「…うん、もっとしたい」

恥ずかしそうにだけどはっきりとそう返事を返してくれるミミ。うん、素直でよろしい。

「おい、なんかヴァイスだっけか？　あいつが泣きながら走って行ったけど何かしたのか？」

あいも変わらずアナがノックと同時に部屋に入ってきて、そんな事を聞いてきました。コージのお師匠様が何かあったのでしょうか？

「別に私たちは何もしていませんが。ね、ミミ」
「うん。コージのお師匠様だよね？　部屋にも来てないよ？　近くには居たようだけど」
「ふーん。まぁいっか。で、思うんだけど光司は浮気してるよな？」
アナもやはり気になるようで、すぐそんな事を聞いてきました。思わずミミと顔をあわせて笑ってしまいました。

「おい、何笑ってんだよ？　これは由々しき事態なんだぞ？！　俺たちで満足できなかったって事かもしれないんだから、どうすれば光司を虜にできるか考える必要があるだろ？！」
「満足できなかった、ですか…」
「セリナ、黒い黒いよ。抑えて？」
「あら、すみません。つい」
「黒いのは怖いんだから、ほんと止めてくれよぉ…」
アナが半泣きでそう訴えてきました。そんなに怖がるような事をした覚えは無いんですけどね？

「光司を白夜と一緒とはいえ、俺たちから引き離したのは駄目だと思うんだ」
「大丈夫ですよ、アナ。コージが浮気したらコージを灰にして私も灰になりますから」
伊達に炎の王に好かれてる訳ではありません。私の想いの強さを教えてあげるのです。

「それ死んじゃうどころの話じゃないから、やめてねセリナ？」
「でも、浮気しちゃうんですよ？　しかも満足してないとかひどいじゃないですか」

「セリナ、全部それ仮定の話だからね？　それよりもね、技を磨いておいた方が良いと思うんだ。浮気してても私たちの技でメロメロにしちゃえばきっと私たちから離れられなくなるよっ！」

技を磨く…？　えっと、エ、エ、エエッチィ技を磨くって事ですか？！　そ、そんなのどうやってするんですか？！

「でも、どうやって技を磨くんだ？　セリナ、赤くなりすぎだろ。やることしっかりやってるのに初心だなセリナは」

「アナも最初は凄い恥ずかしがってたくせに、言うよねー」

「し、仕方ないだろ？！　仕事で疲れて帰ってきたらおまえらがおっぱじめてたんだから恥ずかしがっても仕方ないじゃないか！」

「まぁまぁアナ落ち着いて、落ち着いて。ごほん。さて、どうやって技を磨くか疑問をお持ちのお二人さん。ミミはお母さんから良い物を貰っているのです。じゃじゃーん」

そういって、ミミはうすっぺらい箱のような物を出してきました。次々に出してくるそれを見ると、なんか可愛い女の子が描かれてます。いえ、写真ですか？

「？！」

「えっへっへぇ。これでばっちり勉強すればコージもきっと虜になるよ！」

「こ、これは…俺とは全然違う…」

「これなんですか？　これなんですかっ？！　エッチィですっ！」

「コージの世界のエッチな物なんだって。あ、アナはこれなんか参考になるんじゃないかな？」

「どれどれ？」

「とりあえず一個ずつ選んでみてー、あとでまとめて再生して行こう」

「再生？」
「ふふふ、見たら驚くよぉ～」

既にこのエッチな写真で驚いているんですが、まだ何かあるんでしょうか。とりあえず、この胸の大きな人の奴を選びましょう。さて、驚く事ってなんなんでしょうね。凄くご機嫌な顔をしているミミを見て、ちょっぴり楽しみになっている私でした。

その後、私の顔が火が出るほど熱くなったのは言うまでもありません。はうっ。

リリノアにアナ。そしてこの姫様。僕の中ではお姫様って高貴でお淑やかではかなげで、さらわれやすいっていうイメージが強いんだけど、こっちの世界で知ったお姫様はどれも当てはまらない。

どこかに僕の理想のお姫さまって居ないのかなぁ。別にどうこうしたいって訳じゃないけど、遠くからで良いから見てみたい。そして、ガラガラと崩れきった僕のお姫様のイメージを修復して欲しい。エルディバのお姫様もこのＭっ気さえ無ければだいぶ近かったんだけどなぁ。

「んんっんふふふぅ」

なんで目をつぶって唇を突き出してくるの。うわぁ、まつげ多いし長いなぁ。だけど本当に何をやっても顔が崩れないなぁ、この姫様って。プロポーションも手足はすらりと長いし、胸も細身の割にあ

るもんだから大きく見えるし、お尻はきゅっとしてて綺麗な形をしてる。顔も小さめだから、身長が低いのに大きく見えるんだよねぇ。八頭身って初めてみたよ。色も白いよなー。

「主、おはようなのじゃ、ん」

「ん」

どうでも良い事を考えてたら白夜が起きだしてきたので、おはようのチューをする。僕の上で寝相良く寝てた白夜は、がっしりと僕を拘束したままだったからチューするのにちょっと苦労したけど。そして何かを感じ取ったのか、目をつぶっていたお姫様が薄目を開けてこちらを見て頬をふくらませている、と思ったらすぐににやけだす。どういう思考でそんな顔に至ったのか、聞いたら僕の負けだろう。

さてと。早くに目が覚めたんだけど、町が想像以上に騒がしい。この町の人は朝が早いんだなぁと思った。そして寝ている間に隣のお姫さまを狙ってか、変なやつが部屋に入ろうとしていたみたいで、義手が反応して倒しちゃったみたいだね。お姫様は宿の人間にしっかりと見られていたからねぇ。僕と白夜だけしか護衛についてないと勘違いした奴らが、簡単に誘拐できると思ったんだろうね。脳天気そうに見えるこの姫様も結構波乱万丈な境遇に居るんだなと理解できた。

「姫様、リーゼロッテさんは町の外で待機してるんですか？」

「え、追い返しましたよ？　コージ様との仲を邪魔しようとしますし。何かあってもコージ様が守ってくれますしね」

「このあほ姫様っ！　今までお世話になってきたリーゼロッテさんを追い返したぁ？！　わがままにも程があるでしょうがっ！」

「ひんっ」

あっ…リーゼロッテさんの扱いのひどさについ怒鳴ってしまった。なんだろ。今まで僕ってこんな風に怒鳴る事なんてほとんど無かったのに、この姫様を見てるとなんだかそういう風になりやすくなってる気がする。白夜も僕が怒鳴ってるのを聞いてすっごくびっくりしてるし。姫様は涙目になりながら悦んでるけどね。

コンコン

「はい、どなたです？」

やばい、大声を出しすぎて宿の人がまた怒りに来たか？　今は姫様が涙目になってるから余計に僕が怒られる可能性が高いっ！　宿屋のおかみさんって妙な迫力があって逆らいがたい雰囲気があるんだよね。

「そちらにラウラがお邪魔してると思うのですが、入っても宜しいでしょうか」

だが、予想に反して帰ってきた声は若い女性の物であった。そのずっと聞いていたくなるような涼やかな声を聞いたお姫様がびくっとする。これはどうやらセオリーな人が来てくれたようだ。

「はい、どうぞどうぞ大歓迎です」

部屋の扉を開けてそういって来訪してきた人を歓迎する。そこには思った通り凄い美人さんとリーゼロッテさんが立っていた。

それぞれの願望

非常に大きな三角形に近い形の物体が静かに空に浮かんでいる。

「あれは何ですか？　アーン」

「かっこいいでしょう。空中機動要塞「ハードラック」って言う物だよ。皆に内緒で作ってたんだ」

リリノアが尋ねると笑顔で得意気に答えるアーン。その笑顔に何か違和感を覚えたが、それが何かは分からなかった。

「あれ飛んでますよね？　どうしましょう。乗ってきたフレームは飛べないんです」

「大丈夫だよサラ。リリノアとサラは身一つで乗ってくれれば。フレームは運ぶし」

魔石獣と共に現れた盗賊達。頭目は大柄で暴れん坊のように見えるが、アーンを助けに来た所をみると義理堅い性格のようだ。でなければ、フレームが周りを固めている護送隊を襲ってまでアーンを助けに来ないだろう。バイアンというその男は時折、リリノアとサラに向けて嫌らしい視線を向けてくるが、アーンは特に気にしていないようだ。

“いつの間に盗賊達と知り合いになったのでしょうか？　それにこの盗賊達は魔石獣を従えてますわよね？”

優美ともいえる長い四肢を持ちじっと動かずに佇む魔石獣。盗賊達は慣れているのか、魔石獣がそばに居ても特に緊張した様子は見られずむしろ何かと世話を焼こうとしている者の方が多い。

アーンが逃げていったので思わず追いかけてきてしまったのだが、なんとなくこの集団の中では居心地の悪い思いで一杯であった。そうこうしている内に要塞から乗り物が迎えに来たので、アーンと共に乗り込み要塞へと向かう。

「この乗り物ってすごく騒々しいですね、アーンさんっ！」

「でも、便利なんだよ。サラはうるさいのは駄目かい？」

「いえっ大丈夫です！　できれば操縦したいぐらいですけど、今度教えて貰っていいですか？」

「また今度ね」

乗り物の音に負けじと大声でアーンに語りかけるサラ。サラはこの乗り物に興味津々のようです。空飛ぶ乗り物なんて珍しいですものね。外が見えるように窓がついているので外を覗きますと、ぐんぐん地上が遠ざかって行くのが分かります。乗ってきたフレームはどんどんと小さくなり要塞へと近づいて行きます。この速さならすぐに着くでしょうと思ったのですが予想外に時間がかかりました。どうもかなり高い所にあったようで、要塞に近づくにつれその大きさがどれほどの物か良く理解できました。

「こんな大きなものが空を飛ぶのですね…」

「びっくりでしょ？　でもこれぐらいの大きさが無いと僕のやろうとしてる事には足りないんだよね。本当はこれの倍ぐらいの大きさにしようと思ってたんだけど、流石にこれ以上大きくしちゃうと色々と問題があるから諦めたんだ」

「これの倍ですか…」

この大きさでもとんでもない物なのですが、もっと大きな物を作ろうとしていたと聞いてびっくりしました。いったいどれほどの費用

があればこのような物を作れるのでしょうか。バルトス国は商人の国とはいえこれだけの物を作れるだけの財力があるとは驚きです。我が国でも流石にこれだけの物をポンと作れるだけの費用を捻出するには、かなりの時間がかかると思います。

「リリノアは僕に付いて来て良かったの？　一応、これでも僕ってお尋ね者になるし」

そんな事を考えていると、ふと思い出したかのようにアーンが尋ねてきます。ここまで大人しく付いて来ているというのに、そんな的外れな事を聞いて来るアーン。サラと違って私が他国の姫という立場を慮ってくれたという事でしょうか。

「アーン、私はあなたの婚約者です。まぁこのような事態ともなれば解消される可能性も高いでしょうけどね。ですが、せっかくあなたのハーレムが居なくなっているのですからこのチャンスを逃すつもりはありません」

「ハーレムってやだなぁ、僕そんなの作ってないよ」

そうやって笑って否定するアーン。ちゃんと調べてあるのですから、誤魔化さなくても良いですのに。それに私がいればアーンをハイローディスへ亡命させるのも簡単でしょうし。それにこの要塞には飛行フレームが二百機も格納してあると言いますから、これ以上の手土産は無いでしょう。

「とにかく、私から簡単に逃げられると思ったら大間違いですよアーン」

「私も逃がしませんからっ」

私の積極的なアピールにサラも我慢できずに主張してきます。サラ

としても見た事も聞いた事も無い乗り物やフレームを持っているアーンは非常に興味がある存在なのでしょう。サラの家には色々ありましたしね。ですが、一番の座は譲りませんわよサラ。

そうやって決意を新たにしている私達を困った風に見つめるアーン。

「そういう分かりやすい打算は好意に値するけど、困ったなぁ」

「ふふっ、情の強い女に捕まったと諦めて下さいね、アーン」

「私もがんばりますから」

兎にも角にも既成事実を急いで作る必要がありますね。チャンスはきっとあるはずです。サラを出し抜いてなんとしても先にする必要があります。閨の事は知識でしか知りませんが、本能でなんとかなるでしょう。

「ミミちゃん成分が足りないわ」

「何言ってんだ、るり？」

首都グレイトエースの城内。アーンが張っていた罠はリュートが強引にとっぱらってくれたおかげで、現在は王宮の周辺まで人が入れ代わり立ち代わり忙しそうに動いている。勇司も宣言した以上、これまで滞っていた業務を片付けない訳にいかずるりに手伝って貰いながら、大急ぎで処理をしていた。

「だって、ミミちゃん可愛いんですもの。はやくミミちゃんの子供

を見たいし。光ちゃんはうまくやったかしらね」
「一体何を企んでるんだ、るり」

ごくごく何気ない様子で語るるりは非常に危ない。普段が非常にハイテンションな人間だけにろくでも無い事を考えている事がままあるのだ。

「恋する乙女を応援？」
「何をかわいらしい事を言ってるの。またきわどい下着やらコスプレやらを調達して渡したりしてるんじゃないだろうね？」
「うーん、それぐらいじゃ刺激が足りないと思うのよね」
「いや、るりの持ってるコスプレとかなら光ちゃんでも飛びつくでしょうに」

ナースやら制服やらエプロンとか。一見普通の服に見えて透け透けな素材なもんだから、下着を着けずに迫られた時は我を失ったしね。特に制服がまた…

「勇司さん、よだれよだれ。光ちゃんはまだ若いんですから、勇司さんと違って制服にそこまで興奮しませんよ？」
「え？　制服は男なら誰でも興奮するだろ」

るりの奴、分かってないなぁと言わんばかりにため息をつく勇司。その様子を見てるりもまたため息をつく。

「どっちが分かってないかはともかく、今回はそういうのじゃ無いんですよ？」
「なんか道具でも持ってきたの？　それはちょっと教育上良く無いんじゃない？」
「勇司さんの子供ですもの、きっと凄い変態な所ありますから平気

ですよ」

そう言われると反論できなくなる勇司。

「まぁ今回は道具じゃなくて分かりやすいＡＶをねミミちゃんに渡してきたの。あなたのコレクション」

「ぶほぉっ！！！　な、なんつーものを渡したんだるり！」

「え？　あなたの秘蔵ＡＶよ？」

「俺のリビドー丸分かりってか？！　将来娘になるかもしれない子に洗いざらいばれてしまうというのか…軽蔑されねーかな？　あ、でもミミちゃんならそれも有りだな」

「勇司さん？」

「うん、違うぞぉ。これは浮気じゃないぞぉ」

低いトーンで呼びかけるるりを恐れてしゃきっと背筋を伸ばして慌てて浮気を否定する勇司。非常に情けない姿である。

「でも勇司さんて、ロリから巨乳に熟女までなんでも良いんですね。顔だけで選んでます？」

「そうだなぁ好みの顔で選ぶかな。だから別にロリでもなんでもないぞぉ」

「あえてロリだけ否定する所があやしいですね。こっちに来てからは、勇司さん物凄かったですし」

こちらの世界に来た途端、若返ってしまったるりは勇司のロリ疑惑に対してジト目で追求する。思い返せばセリナやミミを結構嘗め回すように見ていた気がしないでもない。

「ご、誤解だっ！　こっちに来てから確かに激しくなったけど、それはるりが可愛いからだ、他意は無い！」

「まぁ、そういう事にしておきましょうか。はぁ、ミミちゃんに会いたい」
「結局、それが言いたいだけか。仕事するぞ仕事」
「はぁい」

うまく誤魔化せたとほっと胸を撫で下ろす勇司。だが、仕事が終わった後にじっくりとるりに尋問される事を彼はまだ知らない。

空を自由に、自由きままに

どこまでも広がる青い空。澄み切った空気はどこまでも広がり、世界の果てまで見渡せそうな気分にさせてくれる。そんな空を飛ぶ二機のフレーム。つかず離れずの距離を保ったまま、左旋回、横回転、急上昇、背面飛行とさまざまな機動を見せる。よく観察すれば青い機体がほんのわずかに遅れているのが分かるが、素人目には同時に動いているようにしか見えなかった。

青をベースとした機体と赤をベースとした機体。

光司のシャイニングブレスとエルディバのルーツであるストライクホークである。緩衝地帯であるトーラウの町の上空で二機のフレームは飽きる事無く空のダンスを続ける。その様子はトーラウの町からでも確認でき、気づいた町の人間が騒ぎ出し今では大勢の人間が二機のダンスを見ていた。

「そしたら、次は対面飛行から西に向かって揃って行くよ！　急上昇でもなんでもしてね、合わせるから」

「お手並み拝見です」

足並みを揃えて飛んでいた二機は急に反転し、遠く離れて互いに旋回する。そして向かい合ったかと思うと赤い機体は横旋回をしながら、急上昇し背面飛行を経て西へと機首を向ける。そして青い機体は赤い機体の下部すれすれを背面飛行にてかわし、地表すれすれを旋回しながら、赤い機体の真横へとぴったり合わせて西へ機首を向ける。

「じゃあ、次は…」

その後も光司は二機でできそうな見栄えのいい飛び方を色々と試して、気付けば日がだいぶ傾くまで飛んでいた。光司が驚いたのはストライクホークで、木の葉落としやハンマーヘッドなどの機動を楽々と行った事だ。飛行機というよりも鳥に近い形のストライクホークでも、そのような機動ができた事とそれを思いついたライダーの両方に驚いた光司であった。

互いに人型に変形させトーラウの駐機場へとフレームを収める。町の人は珍しい物を見せてくれた二人を一目見ようと押し寄せていたが、町の警備兵とエルディバの騎士達によって押し留められていた。これは駄目だと思った光司は一旦とめたシャイニングブレスをまた外へと向かわせ、適当な所で降りて白夜になって貰った。ちょっと燃費が悪くなるけど、騒がれるよりかは良いだろうと言う配慮だったが、もう一人の事を良く考えていなかった。

白夜と何食わぬ顔で町の門をくぐった光司を待っていたのは、エルディバの姫アルラ＝スイ＝フォーリス。ラウラ姫の姉である。

「コージ、勝手に外に行かれては困ります。あなたは大事な方なんですからね」
「お姉さま、それ私の台詞…コージ様はわたしの…」
「ラウラがそんな事を言うなんて珍しいですね。でも譲りませんよ？」
「うぅ」

よく見ればしょんぼりした様子でラウラ姫もアルラ姫に付き従っていた。町の人は美人で噂の姫をひと目見ようと必死な様子である。どうやら光司の勘違いだったらしく、町の人は空の競演をしたフレームに興味があったのではなく、それを操縦していた人に興味があ

ったのようだ。敢えて詳しく言うなら、ストライクホークのライダーであるアルラ姫を見たいだけだった。

「じゃあ、行きましょ？」

そう言って気さくな様子で光司に腕を差し出すアルラ姫。すでに白夜を左腕にひっつけている光司は、義手の右腕でアルラ姫の手を取る。その様子を見て町の人から、悲鳴とも歓声ともつかない声が上がる。それに対してにこやかに手を振るアルラ姫。その輝かんばかりの笑顔を見て町の人間は骨抜きにされてしまう。

そして、光司と腕を組む事もできず右往左往しているラウラ姫。何をしても優美な仕草になるのでまるで踊っているようにも見えるが、単純に慌てているだけである。

「後から来てコージ様をかっさらうなんて、行き遅れの姉さま流石汚いです」

「姫、口が過ぎますよ」

常日頃からエルディバのルーツであるストライクホークを乗り回してばかりいたアルラ姫。ライダーとして長い髪は邪魔だと言って、髪をばっさり切った経歴の持ち主である。それは流石に父王からたしなめられ、今は肩の辺りまで伸びてきているが当時はすごい騒ぎになったのをラウラはよく覚えていた。その時に切った長い髪は、好事家達に高い値段で売れたとか売れなかったとかいう話も出回っている程だ。

「恨みますよシャム」

「コージ殿に言いますよ？」

「う」

ラウラは自分の頭が上がらない姉を連れてきたリーゼロッテに文句を言うが、リーゼロッテは宿でのコージとラウラの会話を聞いていたので、コージは自分の味方であると良く理解しているのでそう切り返す。長く仕えてきてラウラ姫は大事な存在ではあるのだが、あまりにも無体な扱いを受ければさすがのリーゼロッテとて、傷つきもするのである。

「でも、よりによって何故アルラお姉さまなんですか。エニラお姉さまでも良かったじゃないですか」

「残念ながらそれは無理です。エニラ姫は暇があれば王の手伝いに行く方ですから」

「この間、それは母様から止められて無かったです？」

「あれから三日ばかり経ちましたので、我慢できなくなったのでは無いでしょうか。今朝は部屋にいらっしゃいませんでしたし」

「はぁ。それで行き遅れのお姉さまをひっぱってきたのね。ついてないです」

リーゼロッテから話を聞いて、しょんぼりするラウラ。やはり昨夜の内に勝負を決めておかなければならなかったと後悔している…ように見えるが、なぜか恍惚とした表情に変わって行くラウラ。

「このように次々と障害があるというのは、やはり私とコージ様は結ばれる運命という事です。初めて外に出て出会った愛しい殿方。最初は反目していた二人ですけど、やがて憎しみは愛に変わり深く結ばれるという結末が見えます」

「姫、正気に戻って来て下さい。そんな淫らな顔をするものではありません」

慌てて周りの人間に気付かれぬようにラウラを隠すリーゼロッテ。

今までラウラに仕えてきたのだがこのような表情をするのは初めてであった。今まで大事に大事に愛情を注がれて、なに不自由なく育てられてきたはずのラウラ。ラウラは特にあれが欲しいこれが欲しいと言う事はなく、いつも笑顔で過ごしてきたような姫である。その控えめでたおやかな様子は好ましくあったが、自己主張の無さが逆に周りから心配されていたほどである。それが珍しく今回は国の為にバルトス国へ行きたいと言ったので、使節団を組んだのである。あいにくとハイローディスへ入国できずに足止めを食らっていたのだが。

「何がきっかけでこうなったのでしょうね」

子が親を無条件で慕うかのように、コージに懐いている様子のラウラを見てため息をこぼすリーゼロッテ。そして恍惚とした表情を見せるラウラを誰にも見られないように、気をつけながらアウラ姫の後をついて行った。

シャイニングブレスに乗ってすっきりした僕達は、また宿屋へと戻ってきた。宿屋のおかみさんはなんか姫が居るのに相応しくない場所で申し訳ないという風に恐縮していたが、アルラ姫はそんな事はないとなだめて笑顔を振りまいていた。顔も良いのに性格も良いなんて、神様ずるいです。それにライダーとしてもかなりの腕前で、天は二物も三物もこの人に与えてるんだなぁと羨ましかった。

「まさか、このようにフレームで並んで空を駆ける事ができるとは夢にも思いませんでした」

「そうですね、僕も同じ気持ちです」

アルラ姫は上機嫌で僕に話しかけてくる。最初、ラウラ姫を連れ帰しに来ただけの筈だったらしいんだけど、見慣れないフレームがあったのを思い出して僕に何気なく聞いたのがきっかけだった。シャイニングブレスを見て変形すれば空を飛べるのではないか？　と見ていたらしい。そして僕が空を飛べますよと言った途端に雰囲気ががらりと変わり、じゃあ一緒に飛んで見せて欲しいという事になって、今に至る。

「バルトスで飛行フレームが開発されたと聞いて、これからは私のように空を飛ぶ人間が増えると期待していた所なんですよ。最近は飛べない人でも我慢しようかなって、諦めてた所だったんで凄く嬉しかったんです」

「飛べない人って？」

「あ、いえ！　こちらの話です。うふふ」

「お姉さま、狙いすぎです」

飛べない人はただの人だ！　って言う訳無いよね。姫様も何かぶつぶつ恨めしそうな目でアルラ姫を見てるんだけど…まさか僕狙われてる？　いや、まさかね。まさかとは思うけどここは爆弾を投下しよう。

「そういえばラウラ姫」

「つーん」

「アイさん」

「はい、なんでしょう？」

「え、名前を呼ばせてるの？」

アルラ姫がなにやらびっくりしているけど、やっぱり名前を呼ばせ

るのって何か意味があるんだ。気になるけど爆弾を落とすほうが先だ。

「アイさんの言っていた行き遅れのお姉さまって、どなたの事です？」

空気が凍った。

アップダウン　上げて落として

凍った空気は、アルラ姫によって打ち破られた。

常日頃ラウラ姫にぼやいていたのを覚えていたのだろう。自分の事だと分かった瞬間に勢いよく立ち上がったかと思うと、僕のほうを見て一瞬で顔を真っ赤にし、表情を見られないように手で顔を抑えて恥ずかしそうにうつむいてしゃがみ込んでしまった。行き遅れって言われて怒り出すのかと思っていたので、この反応にはちょっと罪悪感が沸いてくる。

女性の年齢って良く分かんないんだけど、セリナ曰く十七歳ぐらいでも行き遅れの仲間入りだそうだから、アルラ姫もそれ以上の年齢なんだろう。見た目じゃそういう風には見えないけど。

「コージ様…えーっとそのぉ…」

すんごく気まずそうな表情で指をくねくねさせながら僕のほうを見るラウラ姫。そのもじもじした様子を見て、さすがのだめ姫もこの状況を楽しめるほど大物ではなかったかとちょっと安心した。

「うふっ」

そう思ったのはほんの一瞬でやっぱりこの姫様は駄目だった。リーゼロッテさんは一生懸命ラウラ姫の正気を取り戻そうとしているが、どちらかというとアルラ姫をフォローしようが無いので、ラウラ姫を構っている節もあった。

「大丈夫ですよアルラ姫、まだまだ全然いけてますって！」

「ほんと？」

アルラ姫は恥ずかしさのあまり幼児退行しているのか、くりっとした目で見上げる表情が可愛らしい。うん、まだまだ全然かわいらしいよね。

「はい、三十ぐらいの人から見ればまだまだ全然若いんですから、元気出してっ！」

「うわぁあああああああああああんっ！　やっぱり駄目じゃないですかぁ」

「あれっ？」

「それは追い討ちをかけただけです、コージ殿。何気にひどいですな」

リーゼロッテさんの突っ込みを聞くにどこかで慰め方を間違えたらしい。ラウラ姫ならこういう言い方で凄く喜びそうな気がするんだけど。…だから駄目なのか。先程までは恥ずかしいだけだったのが、僕の台詞でショックを受けたようで号泣してからしくしくと泣き始めているアルラ姫。昨日に引き続き今日もエルディバの姫を泣かしてる僕ってどうよ…こうなったら一番上のお姉さんも明日泣かせてエルディバのお姫様をコンプリートしちゃうか！

「主、あほうな事を考えるでない。これをひとまずどうにかせい。でないとまた説教されるぞ。あのおばちゃんの説教はもう嫌じゃ」

「了解だよ白夜！」

うん、僕も宿屋のおかみさんの説教は嫌だ。といっても、どうやってアルラ姫を慰めれば良いだろうか？　とりあえず、静かにアルラ姫の傍に寄り様子を伺う。ちらっと僕を一瞥したアルラ姫は恥ずかしそうに更に身をちぢこませてしまう。こういう弱い所がある割に

フレームの操作技術はすごいんだから、人間って良く分からないものである。ラウラ姫に対しては結構強気な態度だったのにね。内弁慶って奴なのかな。

「僕の言い方が悪かったですアルラ姫。えっと、僕から見てもすごく綺麗ですよ。ちなみに僕は十八歳です」

「二つも下なんですか。殿方はまだまだこれからですものね、私みたいな年増に気を使って貰わなくても良いです」

「二つ上ですかぁ…」

そんな唇を尖らせながら言われると、拗ねてるだけにしか見えません。二人の姫の台詞から察するにアルラ姫が二十歳でラウラ姫が十六歳という事か。まったく分からなかった。ふと視線を感じて白夜を見ると僕に目でもっと褒めろとすすめてくる。そうだよねぇ、もっと褒めろって合図だよねこれ。

「僕の故郷ではこういう言葉があるんですよ、姫」

「なんでしょう？」

「年上の女房は金の草鞋を履いてでも探せって言って、男は自分より年上の女性と結婚したほうがうまく良くという昔の人の言葉なんです。僕も凄くいい言葉だと思います」

確かそういう意味だよね？　なんか年上の女性のほうが色々と気が利くから、そういう人が奥さんだとだらしなくなりがちな男性をうまく手綱を握ってくれるというか。

「年上の女性…結婚…コージはわたしより年下で…いい言葉だと思ってる…」

僕の言葉でようやく泣くのを止めて何事かをぶつぶつと呟きだして

いるアルラ姫。よし、これでなんとか無事に説教から逃げられそうだ。褒めて貰おうと白夜の方を見るとなにやらぷんすかしている。なんか駄目な事言っちゃった僕？

「そのコージは年上の女性が好みなのです？」

「いえ。僕は年齢はあまり気にしないです。それよりも気が合うかどうかが重要ですね」

「そうですか。先程はわたしとばっちり息があった操縦をしてましたよね」

「ええ、お蔭様で楽しかったですアルラ姫」

「わたしとコージ様もばっちり合ってますもんね。えへへ」

今日は二機だけだったんだけど、本当を言うともっと多いほうが良い。六機ぐらいで曲芸飛行とかしてみたいし。ビデオにとっておけば後で見れるから、楽しめるし。もちろん今日のもハンターにカメラを搭載して撮ってあるから後でにまにまできる。何か割り込んできた姫様はごくナチュラルにスルー。

「それはなによりでした。また是非ご一緒に空を飛びたいです」

「そうですね、今度は僕の奥さん達も一緒に飛べたらもっと楽しいかなと思います」

正確にはまだ奥さんじゃないけど、貰っちゃったしそう言っても差し支えないよね。

「奥さん…たち？　え？　えええっ？」

「ちなみに隣にいらっしゃる白夜さんもお嫁さんだそうですよ、アルラお姉さま」

「恥ずかしながら僕の可愛い奥さんです、はい。ね、白夜」

「うむ主の言う通りじゃ。もう席は無いのでそのつもりでな」

そういって牽制してくれる白夜。現状で五人も居るからこれ以上増えたりするのは、セリナが怖くてとんでもないのです。それに、セリナもミミもアナも白夜もヒロコも可愛いし、飽きるなんて無いだろうからセリナが怖くなくても増やそうとも思わないけど。

「そうなんです、昨日わたしが最後の席を貰ったんですよアルラお姉さま」

「え？　えっ！？」

「いや、そんな事実は無い」

さらりと大嘘をつく姫様に突っ込みを入れる。ちゃんと否定しとかないとなし崩し的にずっと居そうな気がするし。そして、まだ混乱しているアルラ姫。まだ若い僕が結婚してるのもそうだけど、それが複数となればまぁびっくりするよね。あははー。

「…ひどいです」

「え？」

「親子揃って期待させておいて、結局は振るなんてあんまりですーーーーー！　バカーーー！」

「え、ちょっと！？」

「あっ、アルラ姫っ！」

泣き叫びながら部屋を勢い良く飛び出してしまったアルラ姫。まさか飛び出す程、か弱い人だとは思わなかったので呆気に取られてしまい、飛び出すのを止められなかった。でもリーゼロッテさんが慌てて追いかけて行ったから、大丈夫かな。

「これで邪魔者は消えましたね、コージ様っ。わたしは白夜さんの後で良いですから、いちゃいちゃしましょうね？」

「いやいやいや!?　君のお姉さん一人で出て行っちゃったんだよ?!　ここは心配する所じゃないの?」

「え?　お姉さまだから大丈夫です、はい。フレームに乗る為に物凄く鍛えてるんですよ。ええっとトレースモードですか?　あれだと乗ってる人間の能力に左右されるんですよね?」

なるほど。結構しなやかな感じだったし今日もかなりGがかかってる機動も楽々とこなしていたから、普段から結構鍛えているのも頷ける。ってあれ?　今、トレースモードって言った?

「トレースモードは確かにそうだけど、あれ変形する機体なんだよ?　それなのにトレースモードなの?」

「いえ私は詳しくは知りませんがトレースモードで動かしているというのを聞いた覚えがあるので、たぶんそうだと思うんですが何かおかしいのですか?」

人と鳥では体の構造が違う。そもそも形が違うんだから、トレースモードで操るっていう事ができるのか疑問だ。現にアニマルタイプや人型から大きく逸脱している機体はどれも操縦桿とマクロの術式モードで動かすしかないし。一体どうなってるんだろ?

「その疑問はとりあえず置いておこう。白夜、アルラ姫を探しに行こう」

「そうじゃな、いつまたおばちゃんが説教しに来るやもしれんしな」

さすが白夜良く分かってる。泣きながら僕の部屋からアルラ姫が出て行ったなんて宿のおかみさんが知ったら、それこそ僕は半殺しの目にあうだろう。精神的な意味で。

「じゃあ、えっと駄目姫も一緒に来て。一人で残ってるのは危ない

からね」
「は、初めて愛称を付けて貰いましたっ！　うれしいですコージ様」
「君のそのポジティブさは賞賛に値するよ、うん」

あまりにもキラキラとした瞳でうれしそうに言うもんだから、すっごい罪悪感が襲ってくる。いや、姫様だから愛称で呼ばれるなんて機会は無いだろうってのは分かるんだけど、まさか駄目姫でここまで喜ぶとは思わなかった。

「褒められてしまいました。では、お姉さまを探しに行きましょう！」
「ほんに元気じゃな、こやつは」

ここら辺には詳しくないけど、アルラ姫が行きそうな場所はなんとなく分かる。おかみさんが来る前にとっとと宿を出る事にしよう。そのまま部屋を出ればこっちに向かって来てるであろうおかみさんと鉢合わせしそうなので、行儀が悪いが窓から町の中へと飛び出した。

天然は自覚が無い

人目を気にしながら町を駆け抜ける。僕や白夜は平気なのだが、駄目姫はなんといってもエルディバの美姫で有名なので、顔を隠すためにフード付きのマントを着せて上げた。買ったは良いけどあまり使う事の無かったマントである。さっきの大歓声を振り返れば、エルディバの姫を見た町の人がぐるぐるとした目で興奮したような状態が思い浮かぶ。なんというか中毒症状でもあるかのような、熱狂ぶりを思い出し、傍らの駄目姫を見る。

「？」

僕の視線を敏感に感じ取り、にっこりと微笑み返してくる駄目姫。確かに凄い美人ではあるんだけど、見た目だけで人はあそこまで熱狂的になれるものなのだろうか？　この姫様達には印の力があり、それのせいで周りの人を虜にしているとかは無いか？　いや、それだと別に美人である必要は無いし僕の印が何か反応があるはずだ。単純に美人ってだけでここまで人気って出るのか。出るか。アイドルなんかもあれだけ人気が出るんだし、それに負けない程の美貌を誇るこの駄目姫なら不思議じゃないのかな。

「でもわっかんないなぁ…」

「何がです？」

「うわっ、しーしー！」

僕の独り言に反応する駄目姫。今の駄目姫の声を聞いた通りすがりの人達が声の主を探そうときょろきょろとしている。声でまで人を虜にするとか、どういう人なのよ。こんな事になるならエルディバの王宮に勤める人って凄く大変だよね。姫の姿を見ればうっとりし、

声を聞いてもうっとりし、かといって身の回りの世話を怠る事はできず、なんか夢見心地で仕事する羽目になりそうだ。

「静かにしててね、何かあったら手を握り返してね。じゃないと危ないからね」

そう言って駄目姫に手を差し出すと嬉しそうにコクコクと頷き、僕の手をぎゅっと握ってくる。そして目をぎゅっとつむり、口もきゅっとさせて必死に何かに堪えている様子の駄目姫。しばらくして目を開けて、握った手を確認し上気した顔で微笑みかけてくる駄目姫。その様子を見て大丈夫だと判断した僕は、駄目姫の手を引いて駐機場へと向かう。

「本当にここにおるのか主よ」

「たぶんね。あの人ってほらフレームが好きだからさ、何かあったらそこに駆け込みそうじゃない？」

「そういうものかの？　じゃあわしなら何処にかけこむか分かるか？」

「ん？　白夜なら勿論僕の所に駆け込んでくれると信じてるけど？」

にやりと笑いながら白夜にそう答える。まさか僕がそう返すとは思わなかったのか、顔を赤くする白夜。

「ふん、正解じゃ。分かってるなら、それでいい」

そんな僕と白夜のやり取りを見てるだけしかない駄目姫は必死に自分もそうだといわんばかりに僕の手を握りながらアピールしてくる。具体的に言うと僕の視線に入ってきてじっと見つめながらぴょんこぴょんこ飛び跳ねている。オヤツをおねだりをするワンコみたいでちょっと可愛い。でもフードがまくれそうになるから止めなさい。

そんなやり取りをしていると駐機場へと到着する。ストライクホークはルーツだけあって厳重な警戒態勢で守られている。警備をしている人達を見れば、どこかにやけた表情をしていてやっぱりここにアルラ姫が来たという確信を持てた。でもリーゼロッテさんが居ない所を見ると、うまく護衛の人達をまいてきたようである。

駄目姫がいるからこの警備を突破するのも簡単だろうけど、事情をいちいち説明するのは面倒だ。それにひょっとしたら僕が来たら絶対に通さないように言い含めているかもしれないし。という事で、ここは駄目姫一人でちょっとがんばって貰おう。

フードを目深にかぶった怪しい人物がストライクホークを警備している人間達に近づく。

「そこの者、止まれ。この先は故あって行き止まりだ。他の道を行きなさい」

手に持った槍で道をふさぐように構えて、そう警告する。その声音から何者であろうとここを通すつもりは無いという気迫を感じられた。だが、その気迫もフードの人物には効かなかったようで、静かにかぶっていたフードを下ろして、静かに問いかける。

「こちらにアルラ姫が来たはずですね。道をあけて下さい」

「ラ、ラウラ姫…?！　しっしかし…」

「否とは言わせません。それとリーゼロッテがおいおいここに駆けつける筈です。その時にここで待つように言い含めておいて下さい。よろしいですか？」

「はっ！　かしこまりましたぁっ！」

「ふふっ、ご苦労様です」

笑顔でねぎらいの言葉をかけ素通りするラウラ姫。通り過ぎる姫からなんとも言えない柔らかい香りが漂い、警備をしていた人間達は蕩けきった表情をしてしまう。何名かは正気を取り戻し、自分の職務をまっとうすべく居住まいを正すが、ほとんどの人間が骨抜きにされてしまっている。

「あ、そうそう。姉妹で内緒話がありますので、近づいて来てはいけませんよ？」

思い出したかのようにそう発言したラウラ姫。笑顔で発せられたその言葉は、居住まいを正した人間をも蕩けさせ、骨抜きされていた人をさらに魅了してしまった。元に戻るには怪しい人物が通るか、時間が経つしか方法は無さそうである。

そんな中、しずしずといった調子でラウラ姫はストライクホークへと歩み寄って行った。

“なんか凄いねこれ。目がハートマークになりそうなぐらいだし。駄目姫なくせに凄い人気だよね”

“そんな姫に好かれとるのは満更でもないじゃろ？　ん？”

“いや好かれてるって言えるのかな、あれは…？　なんかペット的な雰囲気なんだけど…”

“いわゆるメス奴隷という奴か？　主の浮気は突き抜けておるのぉ…”

“いやっ違うからね?!　それにメス奴隷とかどこで覚えてきたのよさっ!?”

“わしならいつでもその準備はできておるぞ、ご主人様?”

僕は光学迷彩のマントを羽織り白夜を抱きかかえてラウラ姫の後を気付かれないように追いかけている。誘っているかのような目でそんな事を言われ、思わず鼻血を出してしまいそうになる僕。一応、今は隠密行動中だからそういうのは禁止です、禁止。それに勘の良い駄目姫が何かを勘付いてちらっと振り返ってるじゃない。ストライクホークの傍まで近付いて機体の警備をしている人間を駄目姫に人払いして貰って、僕達はようやくマントから出る事ができた。

「コージ様、どうでしたか?　私もやればできる子ですよね?」

「うん駄目姫がんばった、感動した」

「いやん、照れちゃいますぅ〜」

いやそんな真正直に受け止められると悲しいものがあるです。褒めても喜ぶし叱っても喜ぶし。Mな人って褒められても喜ぶの?　何しても喜ぶとかどうなのこの駄目姫。まぁくねくね喜んでいる間にストライクホークに乗り込むとしましょうか。

人型の状態のストライクホークをワイヤーを使わずに駆け上り、コックピットハッチの操作パネルを開けて、ハッチを操作しようとする。だけど、ハッチは予想通り開く事は無かった。まったくもう。

「アルラ姫。いるんでしょ?　出てきて下さいよ。話しましょう」

義手でガンガンとハッチを叩きながら中の人に語りかける。音が警備の人達に聞こえるかもしれないけど、下に駄目姫がいるからなんとかなるだろう。

「居るのは分かっているんですよ？　僕の言葉で気分を害したなら謝りますから、とりあえずハッチを開けて下さい」
「良いんです、ほっといてくだしゃ、さい！」
絞った音量で返事が返ってくる。最後かんでるけど。なんかガサガサとしてる音も聞こえるんだけど、慌てて操作してるみたいだ。
「だ…ラウラ姫もリーゼロッテさんも心配してますよ？　こんな所に居たら何かあったら危ないです。宿に戻りましょう」
「…じりません」
なんかちょっと鼻声だ。時折ぐずぐずという音が聞こえるという事は、まだ泣いてるのかもしれない。あの駄目姫の姉なのにこの打たれ弱さはどういう事なんだろう。何かトラウマを刺激するような事をしちゃった？
「もう私はフレームと添い遂げるしか無い女なんです。ほっといてください」
「いやぁ、そんな美人なのにそれは無い。うん、無い無い」
思わず突っ込みを入れてしまう。駄目姫の姉というだけあって凄い美人だし、プロポーションも抜群で性格も大人しくて守りたくなるような感じになる。ちょっと打たれ弱い所はあるけれど、駄目すぎるって程じゃない。妹である駄目姫には強気だったから、慣れて来るとそこら辺も大丈夫そうだもんね。何をしても喜んでしまうような駄目姫と違って、至って理想のお姫様っぽいというか。それにフレームの操縦が三度の飯より大好きという点は他の人はどうか知らないけど、僕にとっては美点でしかないし。あれ？　なんというかこの人ってかなり僕の好みに合致するんじゃないか？　勿体無い、

勿体無いよねぇ。

「駄目姫ってラウラの事？」

そんな事を考えていると中からそう問いかけてきた。

「え、そうです。なんか何しても喜んでしまう駄目な人なんで、そう呼んでます」

「わたしってコージの好みの顔？」

「え？　むしろアルラ姫の顔が好みじゃないって人を見たいぐらいですけども」

「わたしの胸って大きすぎないかな？　良く見られてる気がするんです」

「丁度良い大きさですよ、気にする事はありません。良い物だからよく見られてるだけですよ、自信持ってください」

「わたしに何かあったら守ってくれる？」

「だから今ここに来てるんじゃないですか。出て来て下さいよ」

「わたしってそんなに打たれ弱い？」

「いえ、それぐらいの方が可愛いと思います」

「でもラウラには強くでちゃうんですよ？」

「姉妹にはそういうものだと思えば、別に何もおかしくないです」

「ストライクホークに乗るのが凄く大好きなんだけど」

「僕もフレームに乗るのは大好きですよ。忙しくて中々時間を取れないんですけどね」

「あと、えっと、その…」

畳み込むように色々聞いてきたアルラ姫なんだけど、急に何かを聞きたそうな感じだけど、踏ん切りがつかずに言いよどんでいる。ていうか、今の問答はさっきの独り言をちゃんと拾ってたって事だよね？　やばい！　これって普通に口説いているとしか思われないよ

ねっ？！　やばい！　告白されるっ？！

「あ、アルラ姫！　僕ちょっとリーゼロッテさん呼んできますからここから出ないで下さいね！　良いですかリーゼロッテさんが来るまで絶対出ないで下さいよ！」

バシュッ！

「コージッ！　んっ！」
「わわっ！？　むぐっ」

必死の僕の懇願は届かず、コックピットハッチが凄い勢いで開き、飛び出してきたアルラ姫に唇を奪われてしまった。終わった。

駐機しているフレームのコックピット部分。しっかりした足場ではないそんな場所でしがみついている状態で、人に飛びつかれると当然落ちてしまう訳でして。

「！」

落下している感覚はあるはずなんだけど、アルラ姫はむちゅーとしたままで気にしていないようだ。なので、義手をワイヤーフックのように変え緩やかに着地する。口塞がれてたら魔法も唱えにくいっていうの。まったくもう。

「主よ。結局そうなったのぉ。セリナが怒るぞぉ」
「ぷはっ！　白夜も見てたから分かるでしょ？　不可抗力だよ、不可抗力！」
「姉さまに先越されましたぁ…悲しいです」

白夜は僕とアルラ姫の状態を見て、にやにやと笑っている。昨日からお預けを食らっているせいかちょっと拗ねてるみたいだ。駄目姫は相変わらず台詞と表情が合っていない。そんな風に桜色に頬を染めてたら説得力ないって。

「まず父上に報告しないと駄目ですね。事後報告ですが、今までそういうお話もたくさんあった事ですし、話もすぐにまとまると思いますわ。あとわたしの事はこれからはスイと呼んで下さいね」
「えっと何の話です？」
「わたしたちの結婚のお話です、コージ。ラウラもどうもそういう事になっているそうですし、まとめてしちゃえば良いんじゃないで

しょうか？」

ちょっと待って。僕はいつの間に二人のお姫様と結婚する事になっているんでしょうか。アルラ姫にはちゅーされちゃったけど、駄目姫には指一本…しまったさっき手を握っちゃったよ。でも、それ以上はしてないからセーフだよね、セーフ。

「嫌、ですか？」

黙り込んだ僕を、身を屈めて覗き込んでどこか頼りない瞳で尋ねてくるアルラ姫。僕より背がちょっと高いから、下から覗き込もうとすれば自然と身を屈めないと駄目になる。そうなると谷間も自然に目に入ってしまう。アルラ姫の顔と谷間を目が往復してしまったのは仕方のない事だと思う。

「嫌っていうか、僕はもう五人も奥さん居る身な訳だし無理」

「二人増えて七人ならきりが良いじゃないですか」

「いや、全然きり良くないから。それに、なんというかまだ若いのにハーレムなんて作っちゃってる僕なんかの所に嫁ぐなんて、エルディバの国の人達がなんと言うか…。僕エルディバを歩けなくなっちゃうよ」

主に夜道で刺される危険という意味で。

「好きな人がたまたまハーレムを持ってるというだけで、わたし自身は特に気にしません。それにコージはフレームが上手ですし一緒に居る機会は、たくさんありそうですもの。それにわたしはあまり人気無いですから、国民も怒らないと思いますよ？」

そういって髪を揺らしながら微笑むアルラ姫。いやいや、アルラ姫

が人気無いとか信じられないから。今日の町の人の様子を見ただけでどれだけ人気があるのかすっごく感じましたから。

「正直に言わせて貰いますと奥さんの一人、セリナがとっても怖いから駄目なんです！」

だから、奥さんは駄目だけど友達でお願いしたいんです。まだまだ試したい空中機動もあるし。正直、これでアルラ姫とお別れしちゃうというのはちょっと寂しい。駄目姫はともかく。

「ならセリナさんという方を説得すれば問題なしという事ですね。ラウラ聞きましたね？」

「はい、お姉さま。セリナさんが怖くなくなれば私たちと結婚できると聞きました。間違いないです」

「いや、そんな事は一言もいっ…」

「じゃあコージ、わたしは早速お父様に詳しく話をしてきますね。善は急げです！　ラウラ、後は頼みましたよ！」

「はい、わかりましたお姉さまっ」

こちらの話を聞かず、僕を駄目姫の方へととんと押して軽々とストライクホークへ乗り込むアルラ姫。水色だった。

「では、行ってきます！　待ってて下さいね！」

一瞬で鳥型に変形し、ふわりと浮かび上がったかと思うと一気に離脱していった。さすがアルラ姫。見惚れてしまうほど鮮やかなフレーム操作である。ストライクホークの真下にいたのに全く影響が無いんだもん。

「現実逃避している所悪いのだが主。してやられたな」

「うん。こっちに来て一日一人のペースでお姫様を口説いちゃった僕って、どうなのよ」
「下手すると監禁されるんじゃないかの？　明日は流石に誰も口説いてくれるなよ？」
「エニラお姉さまは大丈夫ですよ。お父様が大好きですから」
「それなら大丈夫か…って、それはそれで何か危険な香りがするなぁ」

ここで考えられるパターンは、お父様以外で初めてです、っていう奴か。大好きなお父様以外に言われたりされた事の無い行動を取ると、興味を持たれてそのまま恋におちるとか可能性としてはある。これは迂闊な事をしてエニラ姫に気に入られないようにしないとね。にしても、美姫で噂の三姉妹もその実情は結構とんでもないのではないだろうか。ファザコンらしい長女に、内弁慶でトップライダーの次女にＭっ気たっぷり末娘。見た目がずば抜けているだけにそのギャップが凄い。萌え要素は末娘だけかもしれないけど。

「じゃあコージ様。今日からはご主人様ってお呼びして宜しいですか？」
「全然よろしくない。町の人に聞かれたら死ぬ」
「二人きりの時だけって事ですね。コージ様ったら意外と独占欲が強いんですね。嬉しいです」
「や・め・ろ！」
「いたいいたいいたい…いたいぃ…んっ」

頬を染めながらとんでもない事を言うので、頭の両側をげんこつでぐりぐりしてあげた。お仕置きな筈なんだけど、ご褒美になってしまう所が駄目姫である。ちくしょう。

「でも、どうして僕は駄目姫の虜にならないんだろうね？」

「どうした？　そんなに虜になりたかったのか？」
「…あっ」
「いや、町の人見てるとさ駄目姫が笑いかけると腰砕けになってる人いたし、さっきも傍を通った時にすかさず鼻をくんかくんかしてたから、相当好かれてるっていうのが分かるんだよね。だけど、どうして僕はそこまで我を失わないのかがちょっと不思議だなって思って」
「あんっ」

リーゼロッテさんは一応大丈夫な感じはしたけど、それでも熱烈な何かを感じられる。ほかの騎士達は職務という事で見た目はしっかりしてるけど、それでも駄目姫を視線で追ってしまいがちな行動をしていた。ある意味、魅了の魔法というかそんな感じである。

「わしは主の方がそこの姫よりいい香りがするから平気だがな。それに主は常日頃からセリナやミミにも鍛えられてるせいで慣れてるのではないか？」
「僕って何か匂うの？」
「いや良い香りがするぞ？　じゃから、いつもくっつこうとしとるじゃろ？」
「えー…何？　なんか出てるのかなぁ？」

くんくんと自分の脇や腕を匂ってみるけど分からない。別に何も変な匂いはしないんだけどなぁ。白夜だからこそ感じられるかすかな匂いなんだろうか？

「ごしゅ…コージ様はぁ、良い香りしまっす、んっよねぇ～痛いのが幸せです～んぅっ」

駄目姫にも分かるのか。なんかフェロモンでも出してるんだろうか

僕は。でも、それなら駄目姫みたいにもっと人に好かれても良い様な気がするんだけどなぁ。学園じゃあんまり友達できなかったもんなぁ…

「良くわかんないけど、害は無いみたいだしいっか。そろそろ宿に戻ろうか。あぁ駄目姫リーゼロッテさんにアルラ姫が帰ったって言っておいて？　さっきストライクホークが飛んで行ったから分かってるとは思うけど、心配するだろうからさ」

「コージ様はどうするんです？」

「僕たちは目立たないように帰るとするよ。じゃあ頼んだよ」

駄目姫の返事を待たず、白夜を捕まえて光学迷彩のマントで姿を消してさっさと宿に戻る。

「今日こそ貪り尽くされるんじゃな？」

「うん、僕も我慢できないし。良いよね？」

「勿論じゃ、ご・主・人・様」

鍵をしっかりかけて邪魔されないようにしよう！

ドナドナな気分

ガタガタと街道を音を立てながらパニモアに曳かれた車は、神聖帝国エルディバを目指す。時折車体が揺れて、乗り心地はちょっと悪い。街道がもう少しこまめに整備されていればこういう振動も抑えられるんだろうけど、そこらへんは手が回っていないようだった。

駄目姫がトーラウまで乗ってきたパニモア車に乗って、一路エルディバを目指している。

昨日は結局駄目姫がまたしくしく泣きながら僕の名前を連呼していたらしく、宿にえらい剣幕でおかみさんとリーゼロッテさんが入ってきた。そうだよね、おかみさんはマスターキーを持ってるよね。鍵かけてても開けて入ってきちゃうよね。さぁこれからって時に邪魔された僕達は、事態を良く把握していないリーゼロッテさんから質問攻めされ、おかみさんからは迫力の篭った視線を投げかけられさんざんな目に遭った。

そんな状態の中、しゃなりしゃなりと優雅な仕草で宿に戻ってきた駄目姫。

ぎろっと僕が睨みつけるもどこふく風で、にっこり微笑んで僕を大事そうに抱きかかえてきた。そして、そこでようやく駄目姫は事情を説明しだし、リーゼロッテさんとおかみさんは静かになった。そして、僕と一緒に国へ急いで帰る必要があるとリーゼロッテさんに告げるや否や、あれよあれよと言ってる間にパニモア車に乗せられ、エルディバを目指して旅が始まった。

車の中は結構広くくつろげるようになっている。その車内では不機

嫌な様子の光司と白夜と対照的にご機嫌なラウラ姫。針のむしろに座っているかのようなリーゼロッテ。本来であればそこにもう二人女性の騎士が付き従う事になっているのだが、今は何故か居ない。

「で。なんでわざわざ車で帰るのかな？　アルラ姫が戻ってくるのを待って、フレームで帰るほうが断然早いじゃない」

「コージ殿。お言葉ですが、アルラ姫は王族です。そのような荷運びの真似事をさせるのは問題があります」

「じゃあ、だ…ラウラ姫ならどうなの？　ラウラ姫はフレームの操縦はできないのかな？」

「できません。ですが、できたとしてもやはり姫にそういう事はさせられません」

「ふーん…僕帰って良い？」

「それはご勘弁を。聞けば王に謁見せねばならないとの事。丁重にかつ早急に我が国へお招きせねばならないのです。一週間ほどで国境に着きますので、そこからさらに三日程で首都に到着致します。それまで、しばし我慢を願います」

四人掛けの椅子をあちらこちらへ移動しながら、リーゼロッテと会話している光司。ラウラ姫が光司の隣に来る度に立ち上がり白夜を挟んでラウラ姫から遠ざかろうとするのだが、その度にラウラ姫も負けじと笑顔で光司の隣に移動してくる。隙間なく壁際に座っても小柄なラウラ姫は強引に入り込んでくるので、余計に密着してくる。騒ぐでもなく無言でそんな行為を繰り返している二人を見て、驚きを隠せないリーゼロッテ。彼女の知る姫は物事にも人にも執着する人間では無いからだ。

その内、光司も諦めないラウラ姫に業を煮やしたのか白夜を抱え上げ膝の上に対面で乗せてどっかと椅子の真ん中に座り込む。ラウラ姫はそんな態度の悪い光司の横にちょこんと座りすり寄っていく。

だがある程度近づくと白夜が間に滑り込み、光司に近づけないようにする。中々しぶといラウラ姫は、椅子を立ったり座ったり近寄ったりして色々と試した結果、微妙に近い所に座る事で落ち着いたようだ。

「早く帰りたいです。お姉さまがきっと色々と難しい事は済ませてくれている筈ですから後は結婚式を挙げて順番に初夜を過ごせば良いだけです。うふふ楽しみです」

「姫っ！？」

そしてにわかにこのような発言をし、リーゼロッテを驚かせる。ラウラ姫から重大な件が発生したので光司を謁見させる必要があるとしか聞いていなかった為、どういう理由で謁見するのか聞かされていなかったのである。ぐいっと不満そうな顔で座る光司へと視線を送るリーゼロッテ。その視線を受けた光司は肩をすくめながら言う。

「いや僕は断るつもりなんですけどね。僕、五人の奥さん居ますし」

「は？　五、五人？　…でありますか？」

不承不承という感じで答える光司。そんな彼は別にたくましい訳でも顔がとんでもなく良い訳でもなく。右手は義手を着けておりどこか頼りない風情の光司を見て、五人の妻が居るというのは冗談としか思えないリーゼロッテであった。さらに言わせて貰えば姫の結婚相手というには釣り合っていないという感想しか出てこない。

「私とお姉さまを入れて七人の奥様持ちになるんですよね」

「はぁっ！？　お姉さまとはアルラ姫の事ですか？！」

「いえ駄目姫が勝手に言ってるだけですから。あ、ラウラ姫です、ラウラ姫」

駄目姫と呼ばれて喜び、ラウラ姫と呼ばれてむくれるラウラ姫。五人も奥さんを持つ女性にだらしない光司に駄目姫よばわりされ、かっとなったリーゼロッテであったが、そんなラウラ姫の様子を見て思いとどまる。

「でもコージ様。お姉さまはすでにやる気満々でしたよ？　あのお姉さまが諦めるとは思えません。嫌って言ってもバルトス国まで押し掛けるんじゃないでしょうか？」

「いや、あの打たれ弱いアルラ姫にそんな事できないと思うんだけど」

「普段は凛々しいんですよ？　あんな風にお姉さまを泣かせたのはコージ様ぐらいです」

「そうですね。私もアルラ姫が泣くとは思いもしませんでした。あれには驚きました」

「ふーん」

そう二人に言われて焦った様子の光司。白夜は疲れているのか、光司の膝の上で静かに目をつぶったままである。

「でも良いんですかリーゼロッテさん、僕が入国して。昨日も言ったとおり僕って、一人でも結構危険な武力があるんですけど」

「それに関してはコージ殿から口頭で伝え聞くのみなので鵜呑みにする訳にはいかない、という事にしておきます。本当を言うと姫との結婚云々を聞いて入国させたくは無いのですが」

「今からでも遅くないですよ、トーラウに引き返しましょうよ」

「駄目ですよリーゼロッテ。私の幸せの邪魔はさせませんからね」

「ならば、わしの邪魔をするおぬしを排除して構わぬか？」

ラウラ姫の台詞に反応して、ぎろりとにらみ付ける白夜。目をつぶってはいたが話は聞いていたようだ。静かにしていたので特に何も

思っていないように見えたが、その実かなり怒っているようであった。

「いえいえ、白夜さんの邪魔なんてしませんよ～、むしろ白夜さんは私の先達なんですから色々と教えて欲しいんです」
「わしはこちらに来てからというもの、邪魔をされた覚えしかないのじゃがな？」
「気のせいじゃないですか？　コージ様、白夜さん怒ってますよ？　ちゃんと平等に可愛がってくれないと駄目じゃないですか」

本気で言ってる顔で光司をたしなめるラウラ姫。その自覚の足りなさに思わず白夜をつれてフレームで飛んで逃げてしまおうかとも考えたが、アルラ姫が国許に帰って王に説明をしているだろう事を思い返し、せめて筋を通してからと思い直した。駄目姫は駄目なのだが、アルラ姫に対しては良い感情しか無い光司であった。

「ごめんね白夜。ここは移動する宿と思って諦めるしかないよ。何かあればすぐに出れるようにだけはしておかないと駄目だけどね」
「主は大丈夫か？　我慢はあまり身体に良くないって聞くぞ？」
「平気だよ。心配してくれてありがと」

本当は煩悩大爆発な光司であったが、平静な様子で答え白夜を安心させ、そのまま口付けをかわしそっとした手付きで白夜の身体をまさぐる。その人目をはばからないいちゃつきぶりに、目のやり所に困るリーゼロッテ。ラウラ姫は当然のようにがん見している。

「そのぉコージ殿。そのような事は二人きりの際に楽しんで貰いたいのだが…」
「二人きりになるのを邪魔されてばかりで、無理です。文句はそちらのお姫様にどうぞ」

「へ？　はえ？　私？」

最初は無意識のまま白夜をまさぐっていたのだが、ふと我に返り状況を認識したが今更止めることもできずにそのまま楽しんでいた所に、リーゼロッテの言葉である。流石にかちんと来た光司はヒートアップしてしまう。それに見られているとなんだか白夜の反応が可愛らしく感じられ、このままいじめたくなる衝動がむくむくと沸いてきたようだ。

「主っ！　そのぉ、最初ぐらい普通にしたいのじゃが」

「そう？　ラジオと置物があると思えば良いんじゃないかな？　それに白夜はさっき心配してくれたじゃない。そのおかげで僕も萌えちゃったんだよ？」

「んっ、でも見られるのはやっぱり恥ずかしいのじゃ…」

「セリナもミミもアナも最初はそんな事言ってたね。でも、最後はすっごく喜んでたよ？　白夜もきっと良くなるんじゃないかなぁ？　ね？」

「ごくっ…」

流石にこの状況では白夜も踏ん切りがつかないようである。だが、むしろその態度こそが光司を余計に萌えさせているとは気付かない。普段は冷静な態度で居る事が多い為、このように恥じらいを見せる事は非常に稀なのである。

「それにほら準備も整ってるよ？　見られるのが好きなんだよ、白夜は」

「嫌じゃ、そんな事ないのじゃぁ…」

くちゅりと水音をさせたかと思うと、白夜の耳元にささやくように問いかける光司。それを聞いてぶんぶんと頭を振りながら必死に否

定する白夜だが、すこし涙目ながらも頬を真っ赤に染めて光司に抵抗せずにされるがままになっていた。

「コージ殿、さすがにこれ以上は」

流石にこれ以上は見てられないので、語気を強めて光司をいさめるリーゼロッテ。そんなリーゼロッテをちらりと見やり、動きを止める光司。

「でもそっちのお姫様は、別に良いみたいだよ？　それに夫婦の事に口出しされるのもどうかと思うんだけど？」

「このような場所でそのような事をされては、口出しせざるを得ません。どうかご自重を願います」

「ふぅん、まぁ一理あるかな。ごめんね白夜、続きは今度ね？」

激昂しているリーゼロッテと違い、にやけた表情を崩さない光司。白夜は恥ずかしさのあまり光司の胸に顔を押し付けその表情は伺えない。

“白夜、ありがとね。恥ずかしかったよね”

“まったくじゃ。物凄く恥ずかしかった！”

“でも、可愛かったよ？　それに凄く濡れてたし”

“凄く濡れてないっ！“

“まぁまぁ。でも、おかげで僕がとんでもない人間って風に思ってくれたみたいだよ？”

“当たり前じゃ。そうでなければ骨折り損のくたびれ儲けじゃ”

“そう？　僕はすっごく可愛い白夜が見れたから満足なんだけど”

“知らん！”

にやにやとしている光司をラウラ姫はじっと見つめていた。何かに

耳を澄ましているかのごとくじっと見つめていた。

二人のライダー

「マリア＝デモン、またの名をピンクタイフーンだね？」
「あぁ？　あー…あんた確かロバスの英雄さんじゃねぇか？　あれっ？　そういやあんた賞金首じゃなかったっけ？」

ロバス南ブロックの酒場。昼間から酒を浴びるように飲みご機嫌な様子の女性に、声をかけるアーン。意外と手入れをしているのか艶やかな金髪を腰まで伸ばし、けだるそうな表情で垂れ目がちな青い瞳と厚めの唇が印象的な女性である。声をかけられた女性は先の魔石獣の襲来の後のパレードを見てアーンの顔を知っているようだ。さらに、アーンはバルトス国では賞金首という扱いになっており、そちらこちらでその人相書きが貼られている事態となっていた。

「うん、賞金首になってるアーンです。ちょっと話良いかな？」
「マスター、ボトルもう一本くれ」

自ら賞金首と名乗りを上げて、堂々とした様子でマリアと呼んだ女性の横へ腰掛ける。若干胡散臭げな様子でアーンを見ていたマリアだが、目の前の酒のほうが大事なのか、特になにも咎めることは無かった。酒場のマスターはアーンとは顔見知りなのか、それとなく周囲に目配せをし何かあれば動けるように油断なく仕事をこなしていた。

「しかし若いねあんた。でもギリルディアッカを倒したんだろ？　酒飲んで寝込んでなきゃ、戦えたってぇのに勿体無い事したよ、ったく…で、どうだった？　強かったかい？」
「まぁ苦戦しましたが、なんとか勝てたって所ですよ。で、あなたにお仕事の依頼をしたいんですが、どうでしょうか」

「あぁん、仕事ぉ？　ギリルディアッカぐらい強い奴なら、話に乗ってやってもいいぞぉ？」

んー？　とアーンを小馬鹿にしたように、グラスを掲げ顔を寄せるマリア。酒臭い息が口を閉じても漂う所を見るに、かなり飲んでいるようだ。

「ギリルディアッカより強いとい言えば強いでしょうか。僕も噂でしか知りませんけど」

「そんなあぶねー奴が居るかよ。今はあいにくと酒が飲みたい気分なんだ、見逃してやっからとっととかえんな」

なんと言っても伝説の魔石獣であるギリルディアッカである。おとぎ話に出てくるような魔石獣より強い奴がそうそう転がっている訳が無かった。そんな話があればとっくにマリアは出撃しているだろう。

「古代竜」

馬鹿な子供には興味が無いという風にグラスを煽るマリアの耳にその言葉が突き刺さる。

「へぇ…おもしろそうな話じゃねぇか。詳しく聞かせな坊主」

「ええ、ぜひとも」

マリアの剣呑な光を帯びた視線を受けほくそ笑むアーンであった。

「その話、僕にも一枚噛ませて貰えませんか」

そこへ突如として男が声を掛けてきた。黒い髪に濃い茶色の瞳をし

た青年である。綺麗に弧を描く眉の下には意思の強そうな瞳が輝いており、アーンの話に興味津々のようだ。

「ん、どなたです？」
「あんた酔いどれか？」

マリアは面識があるようで、声を掛けてきた男性をそう呼んだ。

「ええ、ディリン＝アルメイダ。酔いどれとも呼ばれております」
「へぇ、あなたがあの酔いどれですか。で、あなたも仕事を請けたいと？」

名前だけは知っていたのかアーンが感心したように、男を見やる。
ディリンは嬉しそうに大仰に身振りをしてアーンに頷き返す。

「ですが、古代竜ですよ？　まともに挑めばただじゃ済みません。あなたにその覚悟がお有りで？」
「僕、射撃が大好きなんですよね」

とびきりの笑顔で急にそんな事を言い出すディリン。

「ん？　それで？」
「でも、中々全力を出せないんですよ。全力を出す前に皆沈むんですよね」
「あなたが強いという証拠なのでしょうね」
「そんな事はどうでも良いんです。要はすっきり満足するまで僕の的になってくれる相手が欲しいんですよ。古代竜いいじゃないですか、さぞかしでかくて歯ごたえのある相手なんでしょう。くっふくふふふ」

今から、古代竜と戦う事を想像しているのか上気した顔でうわ言のように言葉を吐き出すディリン。目の前にアーンがいる事を忘れているようだ。

「失礼。で、覚悟ですね。勿論ありますとも、これ以上に無いってぐらいにね」

「…良く分かりました。ですが、お二人ともそんなに戦いたかった相手なのに、今まで何故手を出されなかったんですか？」

「噂だって馬鹿にしてたからな。それにそんなもん血眼になって探すぐらいなら酒飲んでるか、魔石獣でも狩ってる方がましだからな」

「僕も似たような物ですね。竜王というのは一度見には行ったんですが、姿を見る事もできなかったですからね。竜王ですら見れないなら、古代竜なんて昔話の中の生き物だと思いましたからねぇ」

納得の行くような行かない様な話しである。

「そうでしたか。でも、今回僕の話に乗ってくれるのはどうしてです？」

「もし古代竜の話がガセだったら…」

「心置きなくギリルディアッカを倒したあなたと戦えるじゃないですか」

「おい、こっちが先なんだぞ？　横取りすんな！」

「いいじゃないですか、あなたもまとめて的にして差し上げますよ」

「あぁん！？　やるのかごらぁ！」

「はいはい、ストップストップ。なるほど納得しましたよ。じゃあ古代竜が出なかった場合は僕と死合うという事で良いかな？」

元気な二人の間に割って入りそう提案するアーン。

「古代竜を倒した後はおまえとやっても良いってんなら、話に乗る

ぜ」

「うーん、僕はとりあえず古代竜次第ですね。満足できなかったらアーンさんにお相手を願う事になりそうですけど」

「ん、いいよそれで。じゃあ決まりだね。ついて来てくれる？」

そう言って二人を引き連れて酒場を出るアーン。自分をも獲物と考えている二人を引き連れながらも、その表情は非常に晴れやかであった。

トーラウとエルディバを結ぶ街道のおおよそ道半ば。立派なパニモア車に周囲を囲む騎士団。あきらかに貴族が乗っていると分かるこの集団に盗賊は見て見ぬふりをしていた。いかに数で上回るとはいえ、騎士団と比べれば武装の質も個人の質もかなり違うという自覚があるからだ。さらに言えば盗賊の中にも鼻が利く人間はいるもので、手を出せばほぼ確実に返り討ちにあうというのが目に見えていたのである。

だが、その理性を覆す出来事が起きる。

返り討ちにあうと分かっているがそれでも諦めきれずに、後をつかず離れずの距離でついている盗賊達。隙を見て誰か一人でもかっさらう事ができない物かと執念深く観察を続け、そして見てしまったのだ。エルディバの美姫ラウラを。これを見て俄然やる気をだした盗賊達。ラウラだけでなく白夜の姿を見てさらにヒートアップする。そして、よくよく観察して見れば騎士に結構な数の女性が混じって

いる事が分かる。

噂で聞くだけで、盗賊達は目にしたことの無かった美姫。どうせ噂だけで実際はたいした事は無いんだぜと言い合って、さらって来た女性で満足していた日々。それなりに満足していたのであるが、実際に姫を目にした今では違う。何があってもあの美姫を手に入れたくなってしまった。気が早い者達は姫とする順番を決めるために諍いを起していたり、誰を貰うかというくだらない揉め事を起していた。どうにかこうにか集団をまとめながら、ひっそりと追いかける盗賊達。そんな盗賊達にチャンスが到来した。

騎士団の中に一人、ろくに武装もしていない少年が一人で森の中へ入って来たのだ。ラウラ姫や美少女と同じパニモア車に乗って居る所を見ると、この少年も貴族か何かのようだが頭は弱いようで、のんきに一人で森の中へとやって来たのである。この少年を捕まえそれを餌に騎士団をおびき寄せて分断し、姫をかっさらえば後は好き放題できる。そう考えた盗賊達は、少年が叫び声を上げても聞こえないぐらい離れるまで、息を潜めて待ち続けていた。それが罠だと気づかずに。

「じゃあ、お片づけをしますかねー、ほいせっと」

義手から伸ばした髪の毛ように細い糸は、ドゥエーリンでできている。周囲の気配に向けてひっそりと伸ばしていたそれを一気に攻撃に使う。光司が意思を込めた途端、森のあちらこちらから呻き声が上がる。

「僕は優しくないから、このままほったらかしで行くよ。恨んでくれて良いけど、きっと森の魔物が掃除してくれるだろうね。じゃあ、後悔しながら死ぬまでの時間を過ごして下さい」

光司を襲撃しようと画策していた盗賊、その数七十二名。のどを潰し、手と足の腱を断ち麻痺毒を注いだ光司。瞬く間に七十名を超える人間を無力化した事を誇る様子でもなく、その顔には後悔も悲しみも無かった。むしろ、静かな怒りを湛えて今にも弾けそうな様子であった。

「腐れ外道め。あとはアジトに居る人達か。急ごう」

どういう仕掛けか光司は盗賊達の心を読み、これまでの行動を知り得ているようである。その後一行に多少人数が増えたのは言うまでも無い事であった。

飛行要塞「クロト」（前書き）

年末年始の更新予定を活動報告に書きました。のんべんだらり。

飛行要塞「クロト」

飛行要塞一番艦「クロト」内。格納庫内には整然と飛行フレームが立ち並び、空いているハンガーも目立つ物のかなりの数の飛行フレームが収められ、現在も新しい飛行フレームが運び込まれている。どうやら要塞内にて生産も行っているようだ。そこへ、アーンの駆る青い機体がピンクと黒の機体をひっぱって入って来た。

ハンガーに入るや否やハッチが開ききるより先に飛び出してくるマリア。二日酔いとは違う酔いが来たようだ。ディリンはそんなマリアを一瞥しただけで、ゆっくりと機体から降りる。わずかに体がふらつくのを見るとディリンもいささか酔っているのかもしれない。

「酔いが覚めちまったぜ、まったく…しかし空を飛ぶってぇのは、便利だな。これなら色々楽しめそうだ」

ぶちまけるだけぶちまけてすっきりした様子のマリアは、アーンに向けてそう言葉をかける。そこへディリンが鼻をハンカチで抑えながら近づいてきた。

「まったく汚いですね、あなたは。あれぐらいで吐いてどうします、戦闘できるんですか？」

「おまえもふらついてるじゃねぇか。それに素面で乗ればどってこたねぇよ、こんなもん」

「で、アーンさん。ここが飛行要塞というのは分かりましたが、とんでもない所ですねここは」

そういって周囲を見渡すディリン。窓外に見える景色が無ければ、空を飛んでいるとは思えない程静かで巨大な空間である。今までこ

のような要塞など見た事も無ければ聞いた事すらなかった。さらに言えば、艦内には遺跡で見かけるような機械人形がうろついておりなにやら忙しそうに作業をしている。さきほどマリアがぶちまけた物も、即座に片付けて入る所を見ると、メイドみたいな物なのだろうと納得するディリン。

「今まで無かった物ですからね。その分いろいろ苦労もあるんですけどね」

そういって苦笑するアーン。その苦労とやらは分からないが、若いアーンがここまでのものを造り上げ運用しているというのは驚くに値した。

「あ、そうそう。お二人の機体も飛べるようにしておきますんで、後で試して下さい。小一時間もあれば改修も済むと思います」
「変にいじってバランスを崩すなよ？　重くなるのは諦めるけどよ」
「僕の方も同様です。重くなるのは構いませんがバランスは変えないで下さいよ」
「分かりました。そこら辺を注意して作業させる事にしましょう」

そういって、機械人形に近づきなにやら操作をするアーン。手早く手を動かしあっという間に指示は終わったようだった。

「じゃあ、ついてきて下さい。お二人に会わせたい人がいますので」
「ん、分かった」
「はいはい、ついていきますよ」

適当な返事をかえす二人。だが、別に馬鹿にしている雰囲気ではなく真面目に返事をしているだけのようだった。そんな二人の口調に構う事無く先に立って、艦内を進むアーン。

「ちなみにお二人ならこの船をどうやって落としますか？」
「いきなり何だい？　まぁ、そうさねぇ…取り付いて中からぶっ壊すかな」
「僕なら表面から削って行きますね。粉々にしても構わないんでしょ？」
「まぁお一人でやるというなら、そういう方法でも良いんですが、僕の仕事を請けて貰った以上、仲間が居るという事をこれからは考慮して行動して下さいね」

二人の答えに対してそう釘を刺すアーン。

「仲間とかいるのかい…って、酔いどれだよな。はぁ面倒くさいねぇ、足手まといになるようならまとめて叩き落したくなるんだけど」
「さすがは敵味方関係なく吹き飛ばす「ピンクタイフーン」ですね。でも、そんな事を言ってこんな楽しい仕事をみすみす逃して良いんです？」

そういってマリアをたしなめるディリン。意外とディリンは協力して戦う事を厭わない様子であった。先程はまとめて的にすると言っていた男の台詞とは思えない程、柔らかい態度である。

「はぁ、そうだな。ちったぁやる気をだすかね」
「そうですよ、協力すればもっと楽しく戦えるんですからね。やる気出して下さい」

そんな様子を感心した様子で見ているアーン。噂を聞いては居たが、今回はマリアだけを仲間に引き込んで次に回そうと思っていた酔いどれは予想外に当たりだったようだ。トップライダーというのは、大体が一人でなんでもしてしまい他人と衝突しがちなのだが、例外

も居るという事なのだろう。

「あともう二人ほどライダーは居ますから、しっかり仲良くしておいて下さいね。なにせ古代竜が相手なんですから、つまらないいざこざのせいでさっさと退場してしまうのは嫌でしょう？」

「まだ二人も居るのかよ…わぁった、わぁったよ、仲良くやりゃぁ良いんだろ、仲良くよ！」

「残りの二人は女性ですから気をつけて下さいね、マリア」

「うっ、女かよ…あー、がんばるわ」

ライダーが女性と聞いて意気消沈するマリア。同性とはいえ、自分とはまったく違う生き物にしか思えないマリアとしては、男性を相手どるより苦手であった。

「さてこちらです。入りますよ、リリー、サラ」

声を掛けはしたものの、相手の返事を待たずに入室するアーン。軽く扉に触れただけでプシュッと軽い音を立てて扉がスライドしたのを見て、一瞬驚く二人。そして、開いた扉の向こうにはなにやら機械がいくつか設置してあり、その内の二つが実際に動いているようだった。アーンはおもむろに設置してある機械とは逆にある装置へと歩み寄り、なにやら操作をしてもう一度声を掛ける。

「リリー、サラ。新しいお仲間を連れてきたよ。トップライダーの二人だから、君達も知ってると思うけど「ピンクタイフーン」と「酔いどれ」の二人だよ」

そうアーンが告げるとしばらくして機械の音が静かになっていき、中から少女が出てきた。一人は凛々しい雰囲気があるのだが、もう一人は儚げな風情が印象的でフレームに乗れるのか怪しい所であっ

た。

「ど、どこですかぁ？！　え、あ、どうも初めましてっ！　サラ＝イシューと言います！　気軽にサラと呼んでください」

「初めまして、リリノア＝ロデリック＝ハイローディスと申します。名前でお分かりかと思いますが、ハイローディス縁の者です。ですが、お気兼ねなく普通に接して下さいませ」

儚げなサラは慌てて自己紹介し、凛としているリリノアは優雅に一礼をして自己紹介する。

「マリア＝デモンだよ。「ピンクタイフーン」なんて呼ばれてる」

「「酔いどれ」ことディリン＝アルメイダです。どうぞ宜しく」

ちょっと面倒くさそうにしているマリアと対照的に、にこやかな笑顔で自己紹介するディリン。その気さくな感じはトップライダーにしては珍しく、サラは多少舞い上がった表情を見せていた。

「デモンさんの機体は「ラバーズ」ですよね。四本の腕が特徴的で近接も遠距離もこなせるオールラウンドの機体で、魔石獣を千匹以上倒しているレコードホルダーですよね！　でも特に近接の間合いに入ると凄まじい手数で相手を圧倒するって聞いてます！　あと、トレースモードなのに四本の腕を自在に操る腕は後にも先にもデモンさんだけだって聞いてます、後で機体を見せて貰っても良いですか？」

「く、くわしいんだな…だけど、あんたそんな細腕でフレームに乗れるのかい？」

「サラとお呼び下さい！　大丈夫です、後で倒れてもフレームに乗ってる間は無敵ですから！」

「そうかい、なら良いが。それとマリアと呼びな。そっちの名前で

呼ばれるのは好きじゃねぇんだ」
「はい、わかりましたマリアさん！　ありがとうございます！」
勢い良くマリアに突っ込んでいくサラを横目に、リリノアはディリンへと向かう。サラほどではないにしても、リリノアもあちこちの戦場を渡り歩く「酔いどれ」の事は知っていた。
「すみません、あの子フレームが好きなんで後でアルメイダさんにも質問しに来ると思います」
「そうでしたか。ですが、あの子は本当にフレームに乗れるのです？」
「ご心配なく。フレームに関してはかなりの腕前ですよ。そうは見えませんけどね。まぁシュミレーターを使って模擬戦をすれば分かると思います」
そういって何かを思い出して小さく笑うリリノア。
「シュミレーター…ですか？」
「アーンが作った便利な機械です。実際に機体に乗らなくても、フレームに乗った時と同じように戦える機械なんです。口で説明するより乗った方が分かると思います」
「そこにあるそれ、ですかね？」
「そうです。お二人の機体はハンガーに置いてあるんですよね？それならデータもこちらに転送されるでしょうから後で戦いませんか？」
「ほぉ…」
目の前のリリノアという少女は、相手が「酔いどれ」と知ってなお戦闘を挑もうと言う。その自信ありげな表情を見て、多少は長持ちしそうだと推測するディリン。古代竜やアーンだけでなく色々と楽

しめそうで非常に満足であった。

うずまく思い

パニモアの重いながらも軽快な足音と、車が街道を進む音だけが車内に響いている。時折、大きな音を立てて車が揺れるが、それだけであった。備え付けてある椅子で、膝の上に白夜を乗せて座っている光司。抱きかかえた白夜の首元に顔をうずめたまま、じっとしている。吐息がくすぐったいのであろう。白夜は時折みじろぎをするものの、嫌という訳ではなく光司の膝の上からどこうとはしなかった。

「コージ様、お加減が優れませんか？」

「大丈夫」

目をつぶってはいるものの、眠ってはいないようでラウラが声を掛けると返事は帰ってくる。だが、それ以上会話は続く事が無く結局はまた静かな車内へと戻る。昨日、どこからか人を連れて戻ってきた光司。それからずっとこのような調子である。連れられて来た人は賊に拉致されていた人達のようなので保護はしているものの、ラウラとしてはどうでも良いと思えるものであった。

何かがあったのは間違いないのだが、それが何か分からない。白夜は何かを感じ取っているようで、ずっと光司の背中を落ち着かせるように撫でている。それがラウラにとって悔しい。意図的に無視されるのは良い。自分という人間を見て貰えているのだから。だが今は無視というより無関心。声を掛ければ返事はするものの、ほぼ反射的に返事をしているだけで、誰に声を掛けられているかなど気にもしていない。

姫として大事に育てられ、誰もがラウラを愛してくれていた。

だが、その愛され方はラウラに響く事は無かった。ラウラの意を汲み取り、何事も先回りして用意される品々。身の回りの世話をする者達はそういった勘の良い者ばかり選ばれたのであろう。なにげない仕草や視線、立ち居振る舞いから何を望み、何を必要としているか推測し、ほぼ間違いなく用意する。一度、暑い日に冷たい湖で泳ぎたいと考えた瞬間に周りが慌しく動き出し、近くの湖に連れられて泳いだ覚えがある。そして、城に戻ってくれば湖とは言えないが、かなり大きな池が作られており外に行かずとも、気軽に泳げるようになっていた。一事が万事そんな調子なのである。

そしてラウラは思った。

自分が何かを望んだだけで回りは忙しくなる。そんな自分は何も望まないようにひっそりとしていなければならないのでは無いか？常に自分を中心に動く世界。自分は何も動く事はなく全て人任せ。周りの人が喜んでくれるから笑顔を振りまきはするものの、心の底から笑っている訳ではない。ラウラにとっては笑うという事は、せめてもの労いの意味でしかない。自分が楽しいから笑うという事は正直良く分からなかった。今までは。

そんな折、国があらぬ疑いを掛けられ窮地に立っている話を聞く。

ラウラは自分が優れた容姿を持ち、他人を惹きつけて止まない力がある事を自覚していた。そして様々な物を止める印の力まで発現した。そのような自覚してからはその力を制御できるように心がけてきた。魅了の魔法とも言える力は特に気をつけ、シャムや幾人かの侍女達には自分の力が及びにくいように制御している。幼少から世話をしてきてくれた侍女達はいざ知らず、新しく入ってきた人間はそうでもしなければ、動けなくなるからだ。

だからこそ、バルトス国の王子アーンに直接会い自分の力でもってどうにか国を救う事ができないかと考え、王に無理を言って国を飛び出たのだ。今まで自分から何かを望むと言う事をしてこなかったせいか、かなり渋りはした物のなんとか国を出る事が出来た。

冷静に考えて今ならそれがどれほどの無茶だったかが、良く分かる。それにどうしてそんな突飛な事を思いついたのか今も不思議である。ラウラの上には頼れる姉が居るのである。自分ごときが動いた所で何もできないで帰るのがオチではないか。結局、何もする事がないままエルディバに対する疑念は否定され、糾弾していた王子アーンは国を追われた。

でも今はそんな事はどうでもいい。

バルトス国の本当の王子らしい光司。王の印に対抗する力を持ち、抗おうとしている人。そして真剣に自分という人間を見て叱り付けてくれた人。可愛らしい容姿なのに、冷たくあしらう人。自分の言葉を全く聞いてくれない人。して欲しい事を全く分かってくれない人。駄目な事はちゃんと駄目と言ってくれる人。そしてなにより自分の力が全く及ばない人。

姫という肩書きを全く気に留める事無く、ただの娘として扱う。嫌われても別に構わないという態度で、厳しい事を色々言ってくる。これが普通に扱って貰うという事なのだと納得したラウラ。厳しい事を言っていても、光司の言葉の裏には自分を心配してくれているのが良く分かる。だから光司に何を言われても嬉しく感じてしまう。シャムにだいぶ迷惑を掛けてしまう程に。

「コージ様、ちゃんとこっち見て下さい」
「少しほっといて」
「むぅ…」

駄目です。何か苦しんでいるのが分かるのに、それを軽くする方法が分かりません。怒ったり笑ったり、驚いたりするのは良いのですけど、苦しんでいるのは止めたい。できれば自分の手で。ちらりと抱きかかえられている白夜さんを見ると、コージ様を心配そうに見ている。今も背中を撫でてるのですが、コージ様はされるがままです。

ここは我慢です。本当ならわたしが膝の上に居たいのですが、まだまだコージ様の信頼を勝ち得ていません。ここで無理を通せば嫌われるだけでしょう。ここはひたすら健気に待ちの態勢です。振り向いて貰えるまでじっと我慢するのです。今までとは違うのです。自分の力で、自分の意思で、誰にも手を出させる事無く頑張るのです。そうです、えっとこんな時は何をして貰ってたでしょうか…うーん、良く覚えてません…。うん自分で考えましょう！　ちょっと暑くなってきたかもしれません、白夜さんとくっついているコージ様はきっと暑いはずです。涼しい風を送れば喜んでくれるかもしれません。あ、あったありました。うちわでコージ様を扇ぎましょう。喉は渇いてないですかね？　生憎冷たい飲み物はございませんが、果物の絞り汁が確かあったはずです。すぐ出せるように準備しておきましょう。

白夜さん良いなぁ、うらやましいなぁ。手を握って貰っただけであんなに嬉しくなれたんですから、抱っこされたりしたらどうなって

しまうのでしょうか…嬉しすぎて死んじゃうかもしれません。やっぱりいきなり抱っこは駄目ですね。まずは手を繋ぐ事に慣れてからじゃないと、身体が持ちそうにないです。あら、シャムが怒ってます。また、うっとりしすぎていたのでしょうか。別に見られても良いんですけど、どうしてあんなに怒るのでしょうか。

そよそよとした風が抜けていくのを感じる。ぐるぐるとした思いを抱えていた僕に何故かその風は強く心に訴えかけてきた。風の発生源を見れば駄目姫が、うちわを持って真剣な表情であおいでくれていた。今までそんな事をした事なんて無かったんだろう。うちわの持ち方は変だし、へにゃへにゃしてるし一生懸命なわりに風はあまり出てないし。必死にあおいでいた駄目姫だけど、僕が見ていると気づいた瞬間嬉しそうな顔をして、いそいそと僕に飲み物を差し出して来た。

「ありがとう」

ほっといてと言った僕の言葉を守りながら、少しでも僕が快適に過ごせるように考えてくれていたみたい。そんな気遣いが感じられて素直にお礼の言葉が出ていた。白夜に抱きついていたおかげで少し暑くなっていた僕は喉も渇いていた事もあり、駄目姫ことアイちゃんから受け取った飲み物を飲み干す。

「おかわりはいりませんか、コージ様」

「ううん、もう大丈夫、ありがとねアイちゃん」

「え、はえっ?!」

まさか名前を呼ばれると思っていなかったらしく、凄く顔を赤くして動揺している。その様子を見て、打算抜きで僕を気遣ってくれていた事が分かった。普段とは違う僕の様子が心配で、どうにかして元気になって貰おうとしてくれてたみたいだ。うん、これぐらいでへこたれていちゃ駄目だよね。白夜にも迷惑かけたし、そろそろ立ち直ろう。空元気でも良いから。

すーーーーはーーーーー…

うん。少し落ち着いた。相手の素性がどうあれ僕は人を殺した。とどめを刺して居ないなんていう誤魔化しはしない。父ちゃんや母さんにどう顔向けすれば良いか分からない。だけど、僕には必要な事だった。向こうは僕を殺しにかかってくるのに、こちらが躊躇っていたら犬死するだけだ。言葉は悪いけど試させて貰ったんだ、自分が生き残る為に。殺した事を忘れない、誤魔化さない、でも後悔もしない。

「もう大丈夫、おかげさまで落ち着きました。うん」
「そうか。覚悟のできた男らしい目なのじゃ。うむ」
「え、今まではどんな目だったの!?」
「夜は飢えた野獣の目じゃったな、うむ」
「わたしにもそういう目を向けてくれると嬉しいんですが」

顔は赤いが妄想から立ち直った駄目姫がそう突っ込んでくる。さっきの健気な様子はどこへやら、鼻息荒く詰め寄ってくる。うん、あれだねがっつく男はもてないって聞くけど女の子でも同じなんだね。この勢いは引くわぁ。と思っていたら、なにやらもじもじとしながら駄目姫が手をそぉっと伸ばしてきた。そのまま放っておいたら何をされるか分からないので、とりあえず握る。

「ひゃうっ！？」

握った途端駄目姫はまた顔を赤くする。そしてまた目をぎゅっとつむり口元をむにゅむにゅと動かしながら身をよじり嬉しそうにしている。えっと、何がしたかったんだろ？　とりあえず手を握っていると大人しくなるので、そのまま握っている事にする。

「主、お迎えが来たようじゃぞ」
「どっちの？」
「それの姉じゃ」

アルラ姫ね。て事は交渉が終わって待ちきれずに迎えに来たって事か。そんなすんなり話しってまとまる物なのかな？　疑問はあれど、どうやらストライクホークがこちらへと来て深く考える時間はないようだった。

国境を目指して

シャイニングブレスのコックピット内、何故か姫様二人が一緒に乗り込んでいる。さらに言えばシャイニングブレスの上にストライクホークがドッキングしてたりする。飛べない機体を載せるのは想定しているから別に良いと言えば良いんだけど、ストライクホークは飛べるんだから、ちょっと納得いかない。さらにパニモア車に騎士たちを乗せてワイヤーで吊るして運ぶ始末。荷運び用じゃなくて戦闘用のフレームなのになぁ…

「でも、一緒に乗ってストライクホークも持ち帰るにはこれしかないので仕方無いのです、コージ」

「心の中を読まないで下さい、アルラ姫」

にこにこと笑顔でプレッシャーを掛けてくるアルラ姫。名前で呼べと、その目が訴えかけてくるんだけど名前で呼ぶと絶対にややこしい事になるのは間違いない筈だ。駄目姫は名前を呼んだら大人しくなったんだけど、これはこれで何かを加速させてしまったみたいだし。というか駄目姫は大人しいと何を考えてるか分かんないので逆に怖い。今もなんか僕の腕をそっと掴んで俯いてるし。ほんと、何考えてるの…？

「わしを乗り物がわりにしおって。えらい迷惑なのじゃ」

ここは私の場所だと言わんばかりに、僕のひざの上に居る白夜。牽制してくれるのは嬉しいんだけど、すごく操縦しにくいです。

「まぁまぁ白夜さん、少し我慢してくださいね。後でぴかぴかに磨きますから」

なんというか白夜の扱いがフレームよりなアルラ姫。でも、白夜は満更でもなさそうだ。

「でねコージ、お姉さまに話をしたらすぐに式を挙げて結婚しなさいって言うの。お父様の説得もお姉さまが三秒で済ませてくれたのよ」

「ええっと、どういう事？　さっきも聞いたんだけどいきなり結婚とか冗談だよね？」

「式は盛大にする予定だから準備が掛かるんだけど、誓いの儀式だけ先に済ませておきなさいってお姉さまが言ってたの。それが終わればすぐに夫婦だよ？」

「というかなんでアルラ姫のお姉さまは、そんなに乗り気なんでしょうか？　会った事ないよね？」

「エニラお姉さまは、あれです。お父様を独り占めしたいので私達を結婚させたいんだと思いますよコージ様。お母様とも良く喧嘩してますし」

「だからって、どこの馬の骨とも知らない奴に嫁がせようっていうのはなんというか…」

「馬の骨？」

「あぁ、素性が知れない奴でまぁ簡単に言うと怪しい奴って事」

「え、コージはバルトス国の王子様なんだよね？　なら、怪しくないですもん」

アルラ姫がぷくっと膨れながらそんな事を言う。すこし幼い感じになってるんだけど、意外と可愛らしい。

「そんなの僕が言ってるだけで、本当かどうか確認してないよね？　それに王の印も持ってないんだよ？　まぁ別に嘘って訳でも無いんだけど、証明する手立てが無いんだよねぇ。父ちゃん、もといバルトス国の王様に問い合わせてくれたら分かるんだけど、そんなの

時間がかかるしね」
「別にコージが王子様でなくても良いです。むしろそうじゃない方が素敵じゃないかしら」
「いやいや、王族なんですからそんな普通の人と結婚したら大事になりますって」
「じゃあコージは王子様になりましょう。うん、そうしましょう」

うーん、とりあえずその気になってるのは分かるんだけど、僕としてはこんな大変な時期にそういう事はできない。いやこんな時期じゃなくてもする気は無いんだけどもね。あーセリナ、ミミ、アナ達といちゃいちゃしたい…

「主…」
「ごめんなさい」

思い出したら固くなっちゃって、膝の上に座ってる白夜が切なげな目で見詰めてきた。本当にすいません。

「改めて言いますけど、お二人と結婚する気は全くありません。というか、すでに五人も奥さんが居るのに更に増やすとか僕を殺す気ですか」
「五人も居るならちょっと増えたぐらい大丈夫ですよね？」
「そうですよ、それに私は少しぐらい放置されても平気ですから。目の前でいちゃいちゃされてるのに私だけほったらかしとかでも大丈夫ですからっ」
「いや、それは結婚してる意味無いでしょアイちゃん…」
「むぅ～またラウラだけ呼んだ…」

話が進まない。でも、エルディバの王様に会ってアーンの危険性を訴えるチャンスなんだよねぇ。なんかアイちゃんの様子からして何

かしら王の印の対抗手段があるみたいだし。備えがあるなら、被害が最小限に済むように準備できる筈。あーでも、話を聞く条件として結婚を迫られたらどうしよう。言うだけ言って帰るのは駄目かな。なんて考えていたらくいくいとアルラ姫に袖を引っ張られる。

「ね、コージ。どうして私は名前で呼んでくれないの？」

「なにかありそうだから！」

「でもラウラの事は名前で呼んでるじゃないですか！　ずるい！」

「うふふぅ～」

「意地悪な意味も含めて名前で呼んでますから」

「え、どういう事？」

「え、どういう事ですかぁ？」

はもる二人。声は似てないけれど、ぽかんとした表情はやっぱり姉妹だと思わせる。

「駄目姫ってあだ名を生まれて初めて付けてあげたんですけど、そんなあだ名を知っている人ってほとんど居ないですよね？　知ってもそう呼べる人も少ないと思いますけど」

「うん、だけどそれがどうしたの？」

「ある意味、知ってる人しか知らないあだ名な訳ですよ。それに比べてアイという名前は誰でも知ってる訳ですよね？　ある程度仲の良い人間であればその名前で呼ぶんですよね？」

「ううん、伴侶にしか名前を許しませんよ？」

「え？」

「だから、夫にしか呼ばせません。たとえ親や姉妹でもその名前で呼ぶ事はありませんから」

「えーっと、それ本当？」

「本当ですよ、コージ様っ、旦那さまっ」

ちょっと待って。初めてのあだ名を呼ばない事で、なんというか駄目姫を葛藤させてるつもりだったんだけど、自分から駄目な方向に足をつっこんじゃってるって事？　いろいろ考えてどうすれば駄目姫にダメージを与えられるか、考えに考えた結果がこれか！　策士策におぼれるとは正にこの事か！

「この駄目姫ぇえええええええええっ！！！」
「ええっ？！」

八つ当たりで駄目姫の頭をぐりぐりする。でも、悦んでるところが悔しい。ならば目標変更だ！

「そして駄目姉ぇえええええ！」
そう叫びながらアルラ姫をヘッドロックして、つむじのあたりをぐりぐりとする。

「ええっ？！　私ですかぁ？！　きゃっ」
「なんで、そんな！　大事な！　名前をっ！　簡単に！　呼ばせようと！　するんですかっ！」
「だって、あっ！　いたっ、こんな機会なんてっいたいっ、無いんですものっ！　だ、だから絶対にっ、みぎゃっ！　逃がしたくなかっ、あぐっ、んですっ！」
「いや、主よ。完璧に八つ当たりじゃろ。ちょっと考えれば分かる事ではないか」

呆れたように肩をすくめる白夜がそう言うんだけど、分かってたなら教えてよ？　おかげで僕、いらん厄介事をしょいこんだ気がするんだ。あーなんか暴走しちゃったなぁ。だけどアルラ姫って凄くいい匂いするなぁ。髪の毛もめっちゃサラサラだし、なんだこれ？うわー髪の毛すごく細いなぁ。そりゃサラサラしてる訳だよ。どん

な手入れをしたらこんな綺麗な髪の毛になるんだろ？

「あ、あのぉコージ？　恥ずかしいです…」

「ほほぉ。恥ずかしいとな？」

見れば耳まで真っ赤になっているアルラ姫。年上なんだけど、この初々しい反応はちょっとムラムラとします！　触り心地も良い事だし、このまましばらく髪の毛を堪能させて貰おう。

「お姉さまが羨ましい…」

そして、駄目姫がそんな事を呟きだす。ちらっと駄目姫を見るとなんか悔しそうな表情でアルラ姫を見つめていた。駄目姫に初めてダメージを与えられたんじゃない、これ？！　何しても喜んじゃうこの娘さんを悔しがらせる事ができるとか、ちょっと嬉しい誤算だ。それにアルラ姫の髪の毛って病みつきになるほど気持ち良いから、一石二鳥だね。

「主、今度は言っておく。そんなに密着してると余計に誤解されると思うぞ？」

「へ？」

気づけば余りの気持ちよさに僕はアルラ姫の髪の毛に頬ずりをしていた。うん、手で触るのに飽きたらず気づけば頬ずりしてた。今までヘッドロックしていたのに頬ずりするという事は、頭と頭が近いという訳でして。更に言うとぐいっとアルラ姫の身体を引っ張ってるせいで、上半身がすごく密着しています。そりゃ恥ずかしい筈だよねぇ。

「恥ずかしいけど変な気持ちです…それにいい匂い…」

ぶつぶつと何事か呟いたかと思うと、おもむろに鼻を鳴らして匂いを嗅ぎ出すアルラ姫。でも僕も負けてはいない。アルラ姫の髪の毛をおもいきり頬ずりして堪能する。

「あー…主よ、暴走しとるようじゃのぉ。この際じゃ、この暴れん棒を堪能したほうがいいのかのぉ…？」

「暴れん棒？　なんですかそれ？」

「おぬしには関係のないものじゃ。いいから端っこで黙って見とれ」

って、ちょっと待て。

「ん、正気に戻ったかの主」

「うん。その暴走スイッチを触るのはやめて白夜。我慢できなくなる。ここで我慢できなくなると危ないからね」

結婚するつもりも無いのに頂きましたとか、お姫様相手に洒落にならない。いや普通の人でも駄目なんだけども。名残惜しいけど、アルラ姫を解放する。といっても、髪の毛から手はどかさずに撫で続けている。そして髪の毛を撫でながらうっとりしている僕を見て、急にアルラ姫が僕の手を握り締めじっと見つめてきた。

「残念ですけど、名前で呼んでくれない方には髪の毛を触らせて上げません」

「え、なにそれ」

「名前で呼んでくれないなら、触らせて上げません」

そう言って、手をぎゅっと握って髪の毛を触らせまいとするアルラ姫。そんな僕たちの様子を見て駄目姫が騒ぎ出す。

「コージ様！　わたしなら髪の毛なんて触り放題ですよ、ほらっほらっ！　なんならもっと色々触ってくれて良いんですよ？」
「いや、いらない」
「はうっ」

ここで駄目姫の思惑にのってしまうのはしゃくなので、即答で断る。内容を考えずに返事をするのがコツだ。それよりも今は目の前のアルラ姫だ。ぐぬぬぬ、どうしてくれよう。

「名前で呼ぶんですか、呼ばないんですか？　はやく決めて下さい。ほらほら」

明らかに挑発する様子で握った僕の手に髪の毛を触れさせるアルラ姫。手の甲をはしる髪の毛の感触がすごく気持ちが良い。ちょっとうっとりしている僕に白夜がすり寄って来た。

「主、よく考えろ。ここで名前を呼べばあやつの思う壺じゃぞ？それに触りたい放題できる女ならここに居るではないか。の？」
「白夜さん、邪魔しないで下さいよ。後で磨いてあげませんよ？」
「それとこれとは話は別じゃ。しっかり綺麗に磨いてくれないと駄目じゃ！」

ふう、白夜のおかげで落ち着いてきた。そうだよね、ここで名前を呼んでしまうと相手の思う壺だよね。だけど、だけど、あの髪の毛は触りたい…って危ない危ない。ここはもっと落ち着く為に深呼吸しよう。

すーーーーーーーーーーー…

なんかアルラ姫の良い匂いのせいで、ぽーっとしてきたぞ。コック

ピットですし詰めになっているのに深呼吸なんてしたら、そりゃ匂いを嗅いじゃうよね。アルラ姫はさっきのやりとりのせいで、身体が火照ってるようだから余計に香りが強くなっちゃってるし！

「主？　大丈夫か？」
「我慢できるかぁーーーーーーーーー！」
「ひゃっ！？」
「ひんっ」

そう叫んでから僕は強引にアルラ姫を引き寄せ、髪の毛を撫で回し頬ずりしまくる。これこれ。これすっごく気持ち良いし良い匂いなんだよねぇ、はぁ幸せ。なんだろうこの中毒症状っぽくなるのは？
　なんか危ない物質でも出してるんだろうか？

「うぅ…ひどいです、名前呼んでくれないのに好き放題するなんて…うぅ…」
「お姉さまばかりずるいです。後から来たのにお姉さまばかり構うなんてずるい」
「主よ。すごく変態っぽいぞ。いや変態そのものじゃな、うん」

何か色々言われてるようだけど、気分が良いので気にならない。さてさて、そろそろエルディバの国境が見えてきたね。そこから急げば一時間ぐらいだから気合入れて行こう！

お嬢さんを僕にくださらなくて結構です

国境付近の町で騎士達を下ろし、ストライクホークに同乗して王城へ急ぐ。さっきとは逆でアルラ姫がストライクホークを操縦し、僕と駄目姫と白夜がコックピットの空いたスペースに押し込まれていた。白夜と駄目姫が僕を巡ってぎゃーぎゃー言ってるけど、僕としてはアルラ姫の操縦の方が気になってそれどころではなかった。

「トレースモードなんだよね？　なんで体を動かさないのに操縦できるの？」

「何故と申されましてもできるからとしか言えないです」

「むむむ、謎だ…」

アルラ姫は僕の質問の意味が分かってないみたいだ。普通の機体のトレースモードであれば、多かれ少なかれ体を動かしその動きに同調して機体が動く。走ったり歩いたりなどの連続動作に関して言えば、その限りではないのだけど基本的には体を動かす必要がある。なのでトレースモードは、人型のフレームにしか搭載されておらず人型でない機体には搭載されていない。なのに、アルラ姫は鳥型に変形するこの機体をまるで自分の手足のように操縦する事ができる。自身の身体は動かしていないにも関わらずだ。

「白夜には分かる？」

「ん？　そっちの操縦系統はわしにはわからん。じゃが、考えられるのはトレースというのはそもそも思考の方をトレースするものではないのかの？」

そういって、頭の横をつんつんとしながら答えてくれる。なるほど。身体の動きをトレースするのではなく、思考をトレースする事で機

体を動かすのか。でも、それができない人の為に体の動きをトレースする事ででも、機体を操縦できるようになっている？　だから今はその方法が一般的だという具合に普及してしまったせいで、思考トレースという操縦方法が広がらなかった。という事なのかな？

「人間は雑念が多い生き物じゃ。それが悪いとは言わんがあんまり好かんの」

「まぁ僕も自分の手で操縦する方が好きだから良いんだけどね。でもそうかぁ、思考トレースなのかぁ」

「見えてきました。ゆっくり降ろしますからあと少しだけ我慢して下さいねコージ」

「あ、もう着くんだ。了解です」

ストライクホークも中々に早い。空を飛ぶという事はやはり地形を無視して移動できるので時間の短縮を実感できる。機体がゆっくりと降下していき、ふわりとした感覚の後着地した。ゆるやかに降下し身体に負担をかけない見事な操縦技術だ。

「ご苦労様でした。それではまいりましょうか」

ハッチを開けて、僕に腕を出しながらエスコートを促してくるアルラ姫。駄目姫と違って基本的に駄目な所が無いお姫様らしいお姫様である。そんなアルラ姫の手をそっと取り、連れ立ってストライクホークから降り立つ。今は人型ではなく鳥型でうずくまるようになっているので、地面に降りる時にしっかりと脇を持ってアルラ姫を安全に降ろす。

「ありがとう、コージ」

「どういたしまして」

「コージ様っ」

すごい笑顔で手をこちらに向けて、同じようにして欲しがっている駄目姫。本来であれば無視した方がいいのだけど、この場所では何かと問題になりそうなので、せめて仏頂面で駄目姫を荷物を運ぶようにひょいと地面に降ろす。白夜？　白夜は、手を取ってふわりとした感じで降ろしたよ？

「コージ殿、こちらで王がお待ちです」
「え、あれ？　なんでリーゼロッテさんが居るの？　さっき降ろしたよね？」
「私の能力です。その話はまた後ほど。王がお待ちです」

確かに国境付近の町で降ろした筈のリーゼロッテさんが、なぜか城で待っていて案内役をかって出てくれている。瞬間移動でもできるの、この人？

「シャムは足が物凄く速いのです。割と有名なんですよ？」
「はやく行きましょうコージ。やっと私にも春が来たのです。うふふ」

あ、何人か鼻血出しながら倒れた。意識的に無視してるんだけど、周りには物凄い人だかりができている。城の衛兵に姫を警護する為の人員。それにメイドだろうか。そういった人達が姫達のお世話をしようと、付き従って来ている。そして僕には確実に怨念の篭った視線がぶすぶすと突き刺さってくる。そりゃそうだよね。お姫様二人が僕に大好き光線放ちながら、嬉しそうに歩いてるんだからよっぽどの相手でも無い限り、こういう視線が来るのは仕方が無いよね。

「付き従うのは最低限で良い。他は各自持ち場へ戻れ！　コージ殿、お見苦しい所をお見せして申し訳ない」

「いえいえ。気を使って貰ってありがとうございますリーゼロッテさん」

周囲の人間があまりにも不躾な視線を向けてくるのでリーゼロッテさんが一喝してくれた。短気だけど基本的には良い人みたいで良かった。でないと針のむしろな中で過ごさなきゃいけない所だったよ。

「コージ様、結婚したらお城を出ましょうね。私、外の世界ってほとんど見た事無いんです。できれば、あちこち旅をしてみたいです。それでそれで…ぐふ」

駄目姫。今君はしてはいけない笑い方をした。したんだけど、それでもとても愛くるしい笑顔ってどういう事だろう。美人というのは本当に崩れないんだなぁ。まぁ、それはともかく駄目姫って外の世界に憧れてるのね。意外だ。この子が外に出たいって言えば、すごい豪華な旅行とかさせて貰えそうな感じなのに、案外出歩いて無いみたい？

「お城を出るのは賛成だけど、結婚してからはどうすれば良いのかな？　掃除や料理は一応教えて貰ったけど、ほとんどさせて貰えなかったからちゃんとできるかなぁ？」

「コージ様と一緒にやれば良いんじゃないでしょうか。きっとその方が楽しいですよ」

「そう、だね。うん、頑張ろうねラウラ」

「はい、お姉さま」

二人して盛り上がってるようですが、そんな未来は僕以外の人と頑張ってほしいと願うのは駄目なんでしょうか。会ってまだ一週間と経っていないのに何故かここまで好かれるというのは不思議で仕方ないんだけど、二人は疑問に思わないんだろうか？

「コージ＝H＝アース殿をお連れした。開けてくれ」
「はっ」

いつの間にか大きな扉の前まで到着していてリーゼロッテさんが、衛兵さんに声を掛けていた。衛兵が何事か呟くと扉がゆっくりと開いていった。バルトス国の謁見の間とは違い、かなりの年月を感じさせる雰囲気がある。歴史ある風情というか。中々に重みを感じさせる造りが僕を圧倒していた。二人のお姫様はそんな場の雰囲気は慣れているので、気負いもなく玉座へと足を運ぶ。僕もそれに連れられるようにして、歩を進める。

「お初にお目にかかります。バルトス国のコージ＝ヒロセと申します」

アースはある意味偽名だからここでは省く。そして、別にエルディバの国に仕えている訳ではないので立ったままでの挨拶である。下手な態度をとると父ちゃんの国が侮られちゃうからね。ちょっとどきどきするけど、頑張る。

「シェイラム＝エイジ＝フォーリスだ」

そう自己紹介しただけで、僕を見極めようとじっと見つめてくる。この人威圧感すげえ。見た目もちょっと厳つい感じなので、余計にがくぶるしちゃう。でもびびってるだけじゃ話もできないので、こんな時は笑顔で乗り切ろう！

「っく…んっんん。して、コージ王子よ。わが国の宝を所望との事だが、それに相違ないか？」
「まぁ…ふふふ」

シェイラム王の横で微笑むご夫人が王妃なんだろう。綺麗というより可愛らしい感じの女性で、物凄く頼れる母親っぽい。うちの母さんもあんな感じだったらなぁ。いや見た目だけなら負けてないんだけどね。ていうか、王様？　僕がお姫様欲しいって話になってるのはどして？

「いえそのような大それた事は考えておりません。それにまだまだ若輩の身であり、姫様達の目に入るような者でもございませんので何かの間違いでしょう」

きっとこの人親馬鹿だ。姫達の結婚の話とかになったら、すげー爆発しそう。そんな話よりアーンの危険性を訴えて備えをして欲しい。早くさらっと流そうよこの話題。

「大それた…か。では、そなたは姫には興味が無いと申されるか？」
「決してそのような事は。ただ、高嶺の花。遠くから見つめるだけしかできない存在でありましょう。ましてや、手折るなどという無粋な真似はできかねます」

興味が無いとか言ったらぶっとばされそうだもんね。だけど、積極的には関わりたくありませーんって言えば、王様も見逃してくれるかもしれない。でも、この話し方はすごく疲れる。思考アクセル使いまくりだもん。

「アルラ、この者はこのように申しておるがまことか？」
「いえ。私はこの方、コージにしか名前を許すことはできません」

なんだか男前な表情で言い切るアルラ姫。聞くなよ！　そこで姫に聞くなよ王様ぁあああ！

「ラウラはどうだ？」
「私もお姉さまと同じです。既に名前で呼んで頂きましたので、もう私は身も心もコージ様のものです」
そういって上気した顔で僕をじっと見つめてくる駄目姫。この馬鹿ちんはやっぱりその話題を持ち出して来やがった。だけど、そんな風習は僕は知らん！
「ほぉ、ラウラがそこまでするとは珍しいのぉ。で、ラウラは当然、王子に名前を呼ぶ事の意味を伝えて呼んで貰ったのだろうな？」
「はい。夫婦になる為とちゃんと伝えております」
異議ありぃいいいいいいいいいいいっ！！！！　おまっ事後報告でしかも自分から言ってねーだろぉおおお？！　さらっと可愛い顔して捏造してんじゃねぇえええ！　しかも褒めて欲しそうな顔をしてこっちを見るな。アルラ姫はともかくこの駄目姫は本当に手に負えねぇ！
「で、コージ王子は何か申し開きはあるかね？　ん？」
「いえ、その…」
口は笑ってるけど目が笑ってない。この人絶対サドだよ。全部分かっててこんな茶番を仕掛けてきてるよ。でも流れ的にこれは僕が駄目な奴って分かれば結婚の話は流れるんじゃない？　頑張れ僕、ここが勝負どころだ！
「フォーリス王。姫達に誤解させてしまった事はお詫びします。それに既に僕には将来を誓った女性が五人も居ます。ここに居る白夜もその一人です。なので、僕には姫様達と結婚する資格などありま

せん」
「ふむ。これはバルトス国の先の誤解に対する意趣返しと捉えても良いのか？」
そう来るか。だけどこれは好都合だ。
「いえ。むしろその件についてフォーリス王にお話があるので、姫様達と接触したのです」
「ほぉ…」
ぎろりと威圧感たっぷりの目で僕をつらなく王様。もうちょっと遠慮して下さい。だけど、これでようやくアーンの事を説明できそうだ。

なんちゃって王子に交渉なんて難しい

光司の必死の説明によりアーンの作った飛行要塞がいかに脅威な存在かを聞いたフォーリス王は、静かに目をとじ王座に深く腰をかける。その様子を見て光司は、これでエルディバにアーンが来てもそれなりに対応できると喜んだ。

「コージ王子よ」

「はい」

「そのような嘘をついてまで、わが姫への無礼を無かった事にしたいというのか？」

「フォーリス王？」

おかしな話の流れに戸惑う光司。フォーリス王は光司の必死の説明にもかかわらず、まるで信用していない様子である。

「そのような物が空に浮かんで、こちらを攻めてくるかもしれない？　それを信じられる訳が無いではないか。それにそもそもが、バルトス国で作られた物なのであろう？　ならば、同じ物を作って相打ち覚悟で落としてしまえば良いだけの事。我が国には関係の無い話だ」

「そうは言ってもここが狙われている可能性は高いんですよ？　飛行要塞が信じられないならそれで構いません。ただ二百機の飛行フレームはアーンが握っている事は間違い無いんです。それでも、関係無いと黙って見てるおつもりですか？」

そう言ってフォーリス王をまっすぐ見つめる光司。

「それにアーンには王の印があります。だからこそこの国は狙われ

るんです」
「王の印はユージ王にあると聞いていたのだが？」
「色々な経緯の末、アーンに王の印の精霊に奪われたんです。この国にはあるのでしょう？　王の印に対抗できる力が」
「まぁ待て。王の印がアーンにあるというならば、バルトス国の正統な王はアーンになるという事であろう？　何故そのような大事な事を黙っている？」
「それは…」

それを宣言してしまえば、国を追われるのは光司達になるからである。そもそもアーンはバルトス国だけを治めるつもりはないであろう。それに王の印の力が世界に及んでいる事を知っている者は少ない。その影響が現在の王権の基盤になっていると知れば、混乱を招く事は間違いは無く、詳しく説明する事はできなかった。

「言えぬわな。言えば追われるのは王子達であるからな。今まではうまく国をまわしていたのだろうが、印が無くなればそうもいかぬ。今後は無茶はできぬであろうな」
「それだけが理由ではありません」
「なら、その理由とやらを聞かせてみよ。真っ当な理由であれば、躊躇う必要は無いではないか？」
「王の印の影響力に関わる事なので、むやみやたらと言えません。今言えるのは、王の印を持った精霊がここを狙っているという事だけです。そこだけは信じて欲しいのです」

なんとかしてアーンの脅威に備えて貰う為に必死に説得を試みる光司。だが、フォーリス王にはあまりピンと来ない話のようである。

「二百機の飛行フレームであったか？　元を正せばバルトス国の物。

先に触れを出してはいたが、何かあればバルトス国が責任を持って処理するのは当然の事であろう？　コージ王子がやるべきは、こんな所でうつつを抜かすのではなく、アーンとやらを探し出してひっ捕らえるべきでは無いのか？」

「それができれば苦労しませんよ！　あいつはそんな簡単にどうこうできる奴じゃないんですよ！　バルトス国が責任を持って処理をする？　そんなのは分かってるんです！　だけどそれじゃあ足りないからこうやって説明に来たんじゃないですか！」

「控えよっ！」

痛い所を突かれ、さらには話がうまく伝わらず激昂する光司を衛兵が押し留める。国としてまったく動く気が無い様子のフォーリス王。すべてバルトス国の内乱という考えのようで、エルディバにとって脅威ではないと考えているようである。

「言いたい事はそれだけかな？　王子の説明では、戦争を仕掛けに来たと思われても仕方が無いぞ？」

「その戦争を止める為に来たんですよ？　どうしてそうなるのですか？！」

「わざわざ二人の姫にちょっかいを掛け、荒唐無稽な話を持ち込みいらぬ軍備をすすめる。王子がしている事は火種を撒き散らしているだけとしか分からないのかね」

どうあってもまともに取り合おうとしないフォーリス王に歯噛みする光司。必死に考えを巡らすもうまく言葉にできないようである。そして、そんな光司の様子を見て図星をさされて黙り込んでいると確信するフォーリス王。

「では、そちらの話は終わりか？　ならば…」

「お待ちください、王よ」

「ん？　エニラか。何か問題があるのか？」
「ええ、少し確認したい事がございます。宜しいでしょうか？」
今までどこに控えていたのか、フォーリス王の前に静かに現れる一人の女性。王に了承を得て光司へと向かいあった。

こんなにも信じて貰うのが難しいとは思わなかった。確かに僕は王子と言っても生まれた時から王子って訳じゃないなんちゃって王子なんだけど、ここまで話が通じないとは思わなかった。駄目姫には一応、話をしておいたんだけど詳しい説明を省いていたせいで、援護しようにもできずにおろおろとしてたし、アルラ姫は何か悔しそうな顔をしていた。

「はじめまして、エニラ＝メイ＝フォーリスです。お義姉さんと呼んで貰って結構です」
「え？」
「エニラ！」
「まぁ、その話はおいおいするとしまして、いくつか確認したい事がございます」

気づけばいつの間にか目の前に美女が立っていた。あのアルラ姫や駄目姫の姉というだけあってまたとんでもない美人さんである。そんな人が何故か僕に質問をしてくる。

「なんでしょうか？」
「あなたには王の印は無いのでございますね？」

「はい、あれはアーンが持って行きました」
「コージ王子、あなたから王の印の気配があるのは何故でしょうか？」
「王の印の力も出せる印を持っているからでしょう。信じられないのであれば、見て頂いても構いません」
王の印にやけにこだわるけど、何かあるのかな？
「いえ、結構です。では聞きます。あなたの目的はなんでございましょうか？」
「無用な被害を防ぐ為に、ここまで…」
「もう一度聞きます。あなたの目的はなんでしょう？」
僕の答えに被せるようにして、同じ質問を繰り返してくるエニラ姫。なんだろ？　ほかに何かあるって分かってるような感じなんだけど、どういう事だろ？
「あなたにはどうにかしたい事があるんじゃないのですか？　その一環としてここへ来られたのではありませんか？」
「それは…」
王の印の力。血の呪いのせいで、意思を無理やり捻じ曲げられてしまうこの世界の在りようを変えたいと思っている。駄目姫から王の印に対抗できる何かがあると聞いてからは、それがなんなのかを知りたいとも思った。うまくいけば、アーンの力を削ぐ事になるからだ。
「印の強制力」
「エニラッ！」
「大丈夫でしょう。この方も詳しい事情をご存知のようですから。

本当はお父様も分かってらっしゃるのでしょう？　わが身可愛さに大局を見誤らないで下さい」

「そうは言うがな、二人が居なくなればおまえを誰が止めるんだ？」

「本能に従えばいいと思います。やはり若い方がお父様もお好みでしょう？」

「えーっと…？」

目の前のやりとりに付いていけない。ファザコンとは聞いていたけど、突き抜けているし隠す様子も全く無い。しかも王妃と火花散らしてるし。結局どゆこと？

「娘に襲われるのは嫌だそうです。禁忌だからこそ、萌えあがるというのに誰も彼も理解してくれないのです。なのでコージ殿は私とお父様の愛の障害になる二人を、さっさと引き取って貰って欲しいのです」

「待て待て待て！　聞けばその男はすでに五人の奥方を持ってるそうではないか！　そんな所に大事な娘を二人も嫁がせるなど許さんぞ！」

「大事なのはわが身でしょ？　そんなに娘に襲われるのが嫌ですか」

涙声でフォーリス王に詰め寄るエニラ姫。こっちからは後ろ頭しか見えないけれど、フォーリス王の様子から見るにかなり破壊力のある顔で迫っているようだった。

「その、だな。嫌という訳ではなくだな。世間体。そう世間体が悪いではないか、娘は他家へ嫁いでいくものだ」

「ならば、コージ殿に協力して貰いましょう。わたしもついでにコージ殿に嫁いだ事にさせて頂いて、ここに居れば何も問題はないですね？」

普通な顔をして話合っているようにも思えるが、この会話の最中も王妃が無言でエニラ姫をぐいぐいと押して王の前から退かせようと必死になっている。

「えっと、いちゃつくのは後にして貰っていいですか？」
「そんな事はしとらん！」
「やっぱり夫婦に見えます？　コージ殿はなかなか見所がありますね」

なんかいつまで経っても終わりそうに無かったし。僕のつっこみに周りの衛兵達もよく言った的な視線を僕に向けてくれた。誰も動揺していない所を見るとこれって結構、日常茶判事なのね。そして、さっきエニラ姫が言った印の強制力。間違いなく王の印について何かを知っているようであった。

「フォーリス王。王の印について詳しく話をしたいのですが、宜しいでしょうか」
「どこまで知っている？」
「身分による力関係でしょうか」
「そうか。では場を移そう。着いて参れ」

ごたごたしたけど、今度こそちゃんと話を聞いて貰えそうだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9138t/

深呼吸は平和の証

2012年1月8日11時05分発行